トルストイ

全譯

和平と爭[illegible]

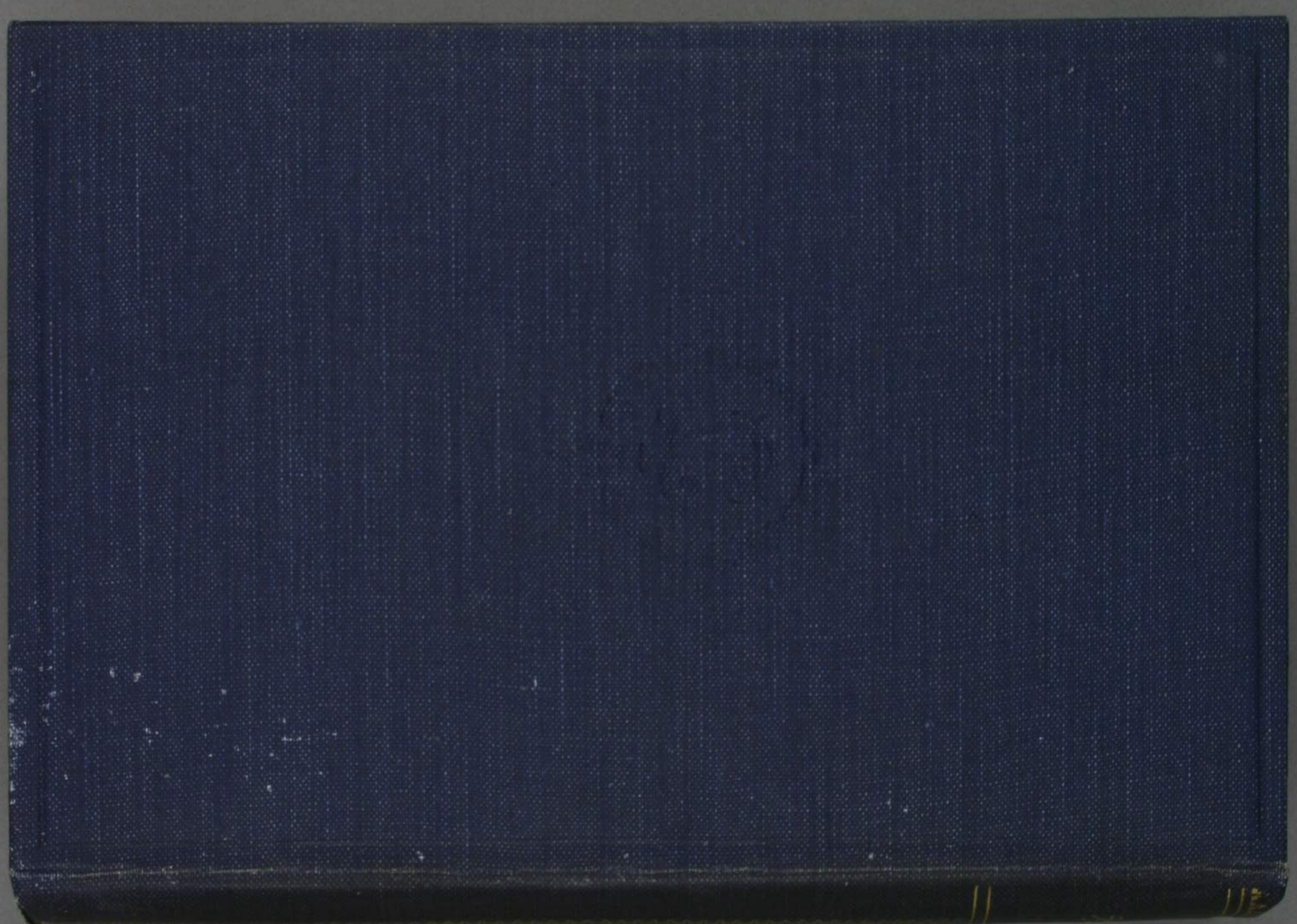
卷下

島鈴
村木
抱月
悅共譯

トルストイ
譯全
和平と爭戰
卷下

戰爭と平和
下卷

定價參圓五拾錢



トルストイ

全譯

戰爭と平和

卷下

島鈴
村木共
抱譯
月悅

トルストイ

全譯

戰爭と平和

卷下

島村抱月
鈴木悅
共譯

1927

戰爭と平和

下卷

第一編

一

一千八百十一年の終りに方り、西部ヨウロッパに於いて兵隊を募つたり、軍勢を集中したりする活動が次第に大きくなつてきた、そして一千八百十二年には、かれ等の軍勢——軍隊の輸送や糧食の供給に従事して居るものを數へると、數百萬人の人々——が西から東へ、ロシアの國境の方へと動いて行つた、そこでは又一千八百十一年以來、ロシアの軍勢が同じやうな方法で集中されて居たのである。

六月の十二日には、西部ヨウロッパの軍勢が國境を横切り、そこで戰爭が始まつた、言ひ換へれば、人間の道理及び總ゆる人間の性情に反した事件が起つたのである。數百萬人の人々は驚くべき數多の罪惡を互ひに犯し合つた——僞瞞や、掠奪や、僞造や、贋造貨幣の發行や、强奪や、放火や、

又は殺人や——それは世界のあらゆる法廷の記錄が幾世紀間かゝつても之れだけの惡德の數を集め得まいと思はれる程である、而も之れ等の行爲を犯した人々は、その時には夫れを罪惡だとは考へて居なかつたのだ。

この驚くべき出來事を導いたのは何であるか？　何がその原因であつたのか？　單純な心をもつて物を信じる歷史家たちは、この事件の原因はオルデンブルグ公に加へられた侮辱や、大陸主義の主張の失敗や、ナポーレオンの野心や、アレキサンドルの剛毅や、外交家たちの失策であつたと我々に告げてゐる。

彼等の云ふ通りだとすれば、若したゞメッテルニッチや、ルミヤアンツエフや、又はターレランが夜會とか舞踏會とかの間に、本當に骨を折つてもつと周到な外交的の書面を書きさへしたならば、又若したゞナポーレオンが、アレキサンドルに Monsieur, mon Frère, je consens á rendre le duc hê au Due d' Oldenburg（わが兄弟なる君よ、私はオルデンブルグ公にその公國を返すことを承認する）と書きさへしたならば、戰爭は起らなかつたのであらう。

我々はこれがその時代の人々に示されて居た戰爭といふものに就いての考へであつたことを容易に解し得るのである。我々は、ナポーレオンが（彼が實際、セント・ヘレナで言つた如く）戰爭の原因がイギリスの隱謀にあつたと想像したことも了解することが出來る。我々は、何うしてイギリスの下院

の議員たちにとつては、戰爭の原因がナポーレオンの野心にあつたと思はれたかといふことも、何うしてオルデンブルグ公には、戰爭が自分に加へられた暴行から起つたと思はれたかといふことも、何うして商人社會には、戰爭がかのヨウロッパを破壞しつゝあつた大陸主義から起つたと思はれたかといふことも、老兵及び老將軍たちには、その主なる理由は、自分たちの實戰の必用と云ふことである、と思はれ、當時の諸聯隊にとつては、les bons Principes（正しき軍紀）再造の爲めの必要と云ふことであると思はれたといふことも、又一方には、當時の外交家たちは、之れを一千八百九年の露墺同盟が充分注意をしてナポーレオンから隱されてゐなかつたことや、又覺書、第百七十八號の書き方が拙劣であつたことなどにして了つたといふことも、凡て了解することが出來るのである。我々は、又當時の人々が、これ等の原因と、及び無數の、殆んど數限りない原因とを信じて居たことをよく了解し得るのである。この多數といふのは、人々の見地の無限に多樣であるといふことに起因して居るのである。けれども後世の我々にとつては、既成の事實の非常な大きさを、その全體の大きさに於いて考へ、又その單純にして恐るべき意義に透徹せんことを求めるのであるから、これ等の原因は何うしても不充分に思へる筈なのである。數百萬の基督教徒等が互ひに殺し合ひ、苦しめ合つたのは、たゞナポーレオンが野心家で、アレキサンドルが剛毅で、イギリスの政策が狡猾で、そしてオルデンブルグ公が侮辱されたからとは我々には、考へ得られないのである。我々は、これ等の事情と殺人や暴行

の赤裸な事實との間の關係を攫むことが出來ない、又何故に公爵が虐待されたため、數十萬の人々がヨウロツパの一方から來て、スモオレンスクやモスクワの住民を掠奪し虐殺し、そして又彼等から殺戮されるやうなことに立至つたのか、我々には解らないのである。

後世の我々は探求の過程に於いて誤られるやうな歴史家ではない、從つて又曇りのない常識を以て事實を見究めることが出來るのであるから、我々に取つては、この戰爭の原因は、數限りなくあるやうに思はれる。我々が、その原因を深く探れば探る程、我々は益々多くそれを發見する。そして一つ一つの原因は、否多數の原因全體でさへも、我々には各々皆同樣に眞實であるやうに思はれ、又その事件の膨大なのと比較すると餘りに小さい爲めに、各々同樣に虛僞であるやうに思はれ、なほ實際から掛離れてゐる爲めに、即ち行はれた事件の動機となつてゐる總ゆる他の一致した原因に關聯してゐない爲めに各々同樣に虛僞であるやうに思はれる。ナポーレオンがウイスチユラ川の彼方に軍隊を撤回することや、オルデンブルグ公の公國を還附することなどを拒んだと云ふやうな原因は、我々に、誰か一人のフランス伍長が、第二回目の戰役に參加することを望んだか、それとも厭がつたかと云ふことを考へさせる。若し一人の伍長でも戰役に參加することを厭がつたとすれば、そして若し第二の者、第三の者と、遂には數萬の伍長や兵卒がそれに贊同して、爲めにナポーレオンの軍勢が非常に少なくなつたとすると戰爭は起らなかつたかも知れないのである。

若し、ナポーレオンがウイスチユラ川の彼方に兵を徹回してくれといふ要求を怒らずに受け、その軍隊に進軍を命じなかつたならば、戰爭は起らなかつたのだ。だが若し凡ての軍曹が、その次の戰爭に參加することを拒んだとすれば、矢張り又戰爭はあり得なかつたのであらう。

又イギリスの方に何の策略もなく、オルデンブルグ公といふ者もなく、アレキサンドルの方で怒ることもなかつたとすれば、戰爭は決して起らなかつたであらう、又ロシアに獨裁政治がなく、フランス革命がなく、從つて執政官も帝國もなく、又フランス革命を導いた一切のものもなく、凡てそんな風に遡つて、之れ等の原因の中のたゞ一つでもなかつたとすれば、何事も起らなかつたに違ひない。で、さういふ風にしてそれ等凡ての原因——數萬億の原因——が重なり合つて現に起つたやうな風に起らせたのである。だから何物も、特にこれが戰爭の原因だといふものはない、戰爭は、たゞ起らなければならなかつたが故に、起らなければならなかつたのだ。數百萬人の人々は、自分の常識を捨て、自分の人情を捨てゝ、西から東へと動き、自分の同胞を殺戮しなければならなかつたのである。恰かも數世紀以前に人間の大きい群が、東から西へと自分の同胞を殺戮しながら動いたのと同樣である。

ナポーレオンや、アレキサンドルの行動は、その言葉次第でこの事がなさるべきものか、又なさざるべきものかを定めるやうに思はれるが、實は闇引き又は徴集で、從軍することを强ひられる、各兵卒の行動と同じく、殆んど隨意なものではないのである。これは、さうあらざるを得なかつたのだ、何

故ならばナポーレオンやアレキサンドル（全體の事件がその人達の上にかゝつて居る様に思はれてゐるが）の意志が有効である爲めには、無數の事情の結合といふことが必要であつて、さういふ事情が何れか一つでもなかつたならばさういふ事件は起り得なかつたのである。眞の實力を握つて居る數百萬人の人々——鐵砲を擊つたり、糧食や大砲を輸送したりする兵卒たち——が、これ等の虚弱にして孤獨なる二人の人の意志を實行することを承諾し、且つ彼等が數限りない様々な、そして複籍した原因に依つてこの默從をさせられなくてはならぬといふことが必要なのである。

我々は不合理な事件（即ち我々がその理由を理解し得ない事件）を説明する爲めには、歴史上の運命説に引き返へさゞるを得ない。我々が歴史上の、さういふ色々の事件を合理的に説明しようと努めれば努める程、それ等は益々不合理に且つ不可解に見えて來るものである。如何なる人でも、各々自分自身の爲めに生活し、自分自身の目的を遂げる爲めに、それ〴〵の自由意志を使用し、そして自分の全存在の中に、色々の行動をなし得るとか、なし得ないとかと感ずるものである。所が、彼がその何事かをなすや否や、その、或る瞬間に於てなし遂げられたる行動は、直ちに、取り返しのつかないものとなり、そして歴史の所有物となつて、その中で、それは豫め運命づけられたる又自由撰擇のまゝにならない、一つの意義を持つことになるものである。

如何なる人々の生活にも二面がある、その一つは個人的生活で、これは、その利害が抽象的であれ

ばあるだけ自由なものである、それから、も一つは群集としての分子的生活で、こゝでは、人は自分に對して定められた法則に必然的に從はなければならないものである。

人は、意識して自己の爲めに、氣儘に生活して居る、けれども又彼は、人間の歴史的目的を成就する無意識的の道具となつて居る。彼が一度なしたる行爲は最早や取り返しのつかないものであり、その行爲は數百萬の他の人々の行爲と一所に重なり合つて、一つの歴史的の價値を持つのである。人の社會に於ける階級の位置が高ければ高い程、彼が他の人々と接して居る關係が廣ければ廣い程、そして彼がその人々を支配して居る力が强ければ强い程、彼の爲したる各々の行爲の避け難いこと、宿命的な事とは益々顯著になる。『王の心は神の手にある。』王は歴史の奴隷なのだ。

歴史——即ち、群集に於ける、又社會に於ける人間の無意識の生活——は、王の生活の各分時をば、自らのものとし、自らの目的を遂げる道具とする。

その年、一千八百十二年には、ナポーレオンは前よりは更に一層、彼の人民の血を流すか流さないかは全く彼自身の意志に依るものと信じて居たのだが（アレキサンドルが彼に與へた最後の手紙の中で言つて居るやうに、）併し、その時は、何れの時よりも多く、自分で何うすることも出來ない夫れ等の法則に束縛されて居たのである、彼自身には、彼は自由に行動して居るやうに思はれたかも知れないが、實は人間の共同の建造物、即ち歴史に於ける彼の分前と定められて居たものを彼はなしたに過

ぎないのである。

西の人民が、東に向つて、人々を互ひに殺し合ふ爲めに動いた。そして原因の複合の法則によつて數千の些細な原因が互ひに支へ合ひ、そして、その事件と符合して、この運動と、この戰爭とを起したのであつた。大陸主義の等閑に附せられたことに對する怒りや、オルデンブルグ公や、——ナポレオンの考へに依れば、武裝した平和を安固にする目的を以て企てられたプルシヤに於ける軍隊の集合や——又フランス皇帝の戰爭好きなことや、又彼がそれに馴れ切つて居たことや、その上彼の人民が、大規模の準備と、その準備の費用と、又その費用が取り返される程の利益を得度いと思つたことなどが、その原因であつた。それから又かのドレスデンに於てフランス皇帝に拂はれた敬意や、又當時の人々は、平和を得たいといふ切實な慾望から生じたものと思つて居たが、而かも實際はたゞ變方の amour propre（自愛の念）を傷つけたに過ぎなかつた外交談判や、その他數百萬數千萬の事件がその原因であつた、そして其等の原因は、その運命づけられた事件と一致し、又それと符合してゐたのである。

林檎が熟して落ちるとする——何故それが落ちるのか？　それは引力に依つて地に引きつけられるが爲めなのか、その柚が枯れたが爲めなのか、それが太陽に干からびさせられたが爲めなのか、それが重くなつたが爲めなのか、風がそれを搖すつたが爲めなのか、或ひは子供がその木の下に立つてゐて、それを食はうと思つたが爲めなのか？

これ等は、一つとしてその原因ではない、凡てそれは總ゆる生きた、有機的な、原素的な事件を起す條件の連結に過ぎないのである。そして、その細胞が解體した爲めとか、その他何々の爲めとかで林檎は落ちたのだと云ふ植物學者も、又自分がそれを食ひ度いと思つて、それに落ちてくれと祈つたので林檎は落ちたのだと云ふ、木の下に立つて居る子供と全じく、そ言ふところは全く正しいのである。ナポーレオンは、行き度いと思つたが故にモスクワへ行つたのだ、そして又アレキサンドルが彼の破滅を望んだが故に、ナポーレオンは滅びたのだといふ歷史家と、又數百萬噸の山が、搖めき、そして堀り覆されたのは、最後の工夫の鶴嘴の、最後の一擊に依るのだと云ふ人とは、その正しいことに於いても、間違つて居ることに於いても全く同樣なのである。歷史上の事件に於ては、大人物——と普通呼ばれて居る者——は、たゞ一つの事件に名前をつけるのに役立つ貼紙に過ぎないものであつて事實貼紙と同じく、彼等は事件そのものとは極めて纔かの關係しか持つて居ないのである。

彼等の行動の總ては、彼等にとつては、それが彼等の自由意志の行動と思へるものであるが、歷史的の意味に於ては、少しも自由ではなく、たゞ以前の歷史の全行程に束縛されて居り、從つて、凡ての永遠から豫じめ運命づけられたものなのである。

二

五月の二十九日にナポーレオンは、公爵たちや、侯爵たちや、王たちや、それに一人の皇帝までも含む宮廷に取り巻かれて、三週間を送つたドレスデンを去つた。その出發に先立つて、ナポーレオンは、彼の恩寵に値する公爵たちや、王たちや、帝王には懇ろな別れの挨拶をなし、彼の氣に入らない王たちや公爵たちを嚴しく叱り付けた。彼は、自分の數多の金剛石や眞珠——それは、勿論、彼が他の王たちから奪つたものだ——の贈物をアウストリアの女帝に呈した。彼は、優しく呈后マリイ・ルウイズ——彼はもう一人外にパリイに住んで居る妻を持つて居たのであるが、彼女は自ら彼の妻だと思つて居た、——を抱いた、そして彼女と別れた、歴史家の言ふ所に依れば、深く苦痛の面持で離別の情に堪へ難さうであつたと云ふことである。外交家たちは、未だ堅く平和の可能を信じ、そして熱心にその目的の爲に働いて居たけれども、又皇帝ナポーレオンも、手づから皇帝アレキサンドルに手紙を書き、彼を、Monsieurmon frère（わが兄弟なる君）と呼んで、眞面目に自分は決して戰爭を望まないこと、及び常にアレキサンドルを愛し且つ尊敬して居ることを誓つたけれども、而も彼は軍に赴く爲めに出發し、各驛地に於て新しい命令を與へ、そして彼の軍を西から東へと進行を急がせたので

あつた。彼は、旅行馬車に乘つて、六頭の馬に引かれ、扈從たちや、副官たちや、武裝した護衛兵に取り巻かれて、ポオゼンや、トルンや、ダンチツグや、ケニツヒスベルグの道を進んだ。これ等の都の何れに於いても、彼は數千の人々に歡喜と恐怖とをもつて歡迎された。

軍隊は、西から東へと動いて居た、そして彼は六頭の馬を絶えず取り換へつゝ、その後を走らせた。七月十日に彼は軍に追い付き、その夜はウルコウイツクの森なる、ボーランドの伯爵の領地内の、彼の爲めに用意せられた宿舍に泊つた。次の日ナポーレオンは馬車で、軍より先に進んで、ニイメン河に着いた、そして、渡場を視察する爲めにボーランドの軍服を着て、河岸へと乘り出した。

彼は、對岸に屯營して居るコザツクや、茫漠たる曠野——その中央の遙か彼方にマセドンのアレキサンダアの爲めに侵略されたシシアの帝國のやうな帝國の首府なる、聖都、モスクワがあつた、——を眺めた時、直ちに進軍を命じて外交家たちを驚かし、總ゆる兵法の規則を打ち破つたのである、そして彼の軍は、翌日ニイメン河を横切り始めた。

六月十二日の朝早く彼は、その日ニイメン河の險しい左岸に張られた自分の天幕を出た、そして望遠鏡をもつて、ウイルコウイツクの森から注ぐ樣に出てくる彼の軍を眺めて居た、軍は三流に分れて、三つの橋から河を渡つてゐた。軍隊の者は、皇帝の來て居ることを知り、そして彼を見付け出さうとしてゐた。大きな外套を着、帽子を冠り、その幕僚から離れて、對岸の天幕の前に立つてゐる彼の姿

を見付け出すと、彼等は皆帽子を空に投げて叫んだ、Vive l'Empereur!(皇帝陛下萬歳!)さうして聯隊と相續き、途切れなき流れとなつて、彼等を隠して居た巨大なる森から流れ出で、分れて三つの橋から河を渡つた。『我々も今度は何かになるぞ、さうだ、陛下が自ら手をお下しになると物事が烈しいことになつて來るんだ!……!……やあ!あそこにお見えになるぞ!……皇帝陛下萬歳! はゝあ、これがアジアの曠野といふんだな! だが穢い國ぢやないか、あばよ、ボオシエー、俺はお前のために モスクワ中での一番奇麗な御殿を取つといてやるよ。あばよ! うまくやれよ!……お前は皇帝を見たかい? 皇帝萬歳! 若し俺か印度の知事にして貰へたら、ね、ジエラアル、お前をカシユミイアの大臣にしてやると、定めとかう。皇帝萬歳! 萬歳! 萬歳! 萬歳! コザツクの悪黨めが、どうだあの走つてやがること。皇帝萬歳! や、あそこにお出でになるぞ! 見えるかい? 俺はお前を見る位ゐはつきりと二度見たことがあるぞ。小伍長……俺は陛下が一人の老兵に勳章を與へて居られる所を見たぞ。……皇帝陛下萬歳!』からいふのが老人や青年や、至極様々な性格や、祈會上の位置の非常に異つた人々の話であつた。これ等の人々の顔は凡て皆、長い間待ちもうけて居た戰爭の始まるといふことの喜びと、それから、かの對岸の丘に立つて居る灰色の上衣を着た人に對する熱誠と心服との、一つの共通した表情を湛へてゐた。

六月十三日にナポーレオンは、小さい純アラビア種の馬に乘り、ニイメンに架つて居る一つの橋の

方へと駈けて行つたが、その間始終熱誠の叫びに耳を聾せられた、彼は勿論たゞ彼等が彼に對する愛をさういふ叫びで、現はすのを制することが出來なかつたので、夫れを堪へて居たのである。けれどナ れ等の叫び聲は始終何處でゝも彼に附いて廻つて彼を疲らせ、そして彼が軍に合した時以來その心に迫つてゐた軍事上の問題に心を傾注する邪魔をしたのであつた。彼はゆら〳〵する舟橋を渡つて川の向ふ岸へ行きキリツと左に向きなほつた、そしてコウノの方へ疾驅した、近衛騎兵たちがその前を進んだ、彼等は、彼の先驅をして道を開きながら、喜悦と熱誠の餘り呼吸を喘ませてゐた。ウキスラの廣い川に達すると、彼は河岸に整列してゐるポーランドの槍騎兵の聯隊の傍で馬を止めた。『Vive l'Empereur!(皇帝陛下萬歳!)』と、ポーランド人たちは前のと同じ様な熱心を以て叫んだ、そして列を亂して互ひに押合ひながら彼を見やうとした。ナポーレオンは河を上から下へと見渡し、馬を下りて河岸に横たはつて居た丸太の上に腰を下ろした。彼が無言の合圖をすると彼等は彼に望遠鏡を渡した。彼は、喜んで傍に走り寄つてきた一人の扈從の背の上にそれをもたせかけた。彼は、對岸を眺め初めた、それから一心に、丸太の間に擴げられた地圖を調べた。彼は頭を下げたまゝで、何やら言つた、すると二人の副官が直ちにポーランドの槍騎兵の列の中で聞かれた。彼等は、徒渉する場所を見付けて對岸に渡るやうにと命ぜられたのであつた。ポーラン『何だ? 何といはれたんだ?』といふ聲が一人の

ド槍騎兵聯隊長の立派な老人は、興奮の餘り顏を赤くして吃りながら、かの副官に、自分の軍隊を率ゐて淺瀨を探す代りに河を泳ぎ渡ることが許されやうかと尋ねた。丁度馬に乘る許しを乞ふ少年のやうに、如何にも許されないのを恐れながら、彼は皇帝の眼の前で河を泳ぎ渡ることを許されたいと願つた。副官は、恐らくこの非常な熱心は皇帝のお氣に入らないことはないであらうと答へた。

副官が、かう言ふと直ぐに、この老いたる頰髯の將校は、喜ばしさうな顏をし、眼を輝かして、『Vive l'Empereur!（皇帝陛下萬歲！）』と叫びながら、空中にその劍を振り廻した、そして、自分の部下に續けと命じて、馬に拍車を當て、河の方へ急いで駈け下りて行つた。彼はその馬を烈しく蹴つた、馬は彼の下で搔蹶きながら、川の最も急流をなしてゐる、水の中へと飛び込んだ。數百人の槍騎兵が彼に續いて疾驅した。急流の中程あたりは冷たく且つ危險であつた。槍騎兵等は、馬から落ちて、互ひにすがり合つた。數頭の馬は溺れ、數人の、人も溺れた。或る者は泳ぎ渡らうとして悶き、或る者は鞍にすがりつき、又或る者は馬の鬣にしがみついた。彼等は、眞直に泳ぎ渡らうと試みた、河巾は半露里もあるのに、彼等は、たゞかの丸太に腰かけて、而も彼等のして居ることをば始んど見向きもして居ない男の眼の前で、河を泳ぎ渡り、河に溺れ死ぬのを誇りとして居たのである。かの副官は、歸つて行くと直ぐに、宜い機を見て、皇帝に對するボーランド人の心服に目をとめられんことを申し出た、と、灰色の上衣を着た小さな男は立ち上つて、ベルチエーを呼び寄せ、一緒に河岸を彼方此方と

歩き始めた、彼はベルチエーに色々と命令を傳へ、そして時々彼の考へ事の邪魔をする、溺れて居る槍騎兵の方に不快さうな一瞥を投げた。

地球上何處へ行つても、アフリカからモスクワの曠野までも、彼がその前にゐるといふことが人々に深い印象を與へ、彼等に無意味な自己犧牲の行動をさせるといふことは、彼にとつては最早や珍らしいことでもなかつた。彼は馬を取りにやり、それに乘つて自分の陣營へと歸つた。

四十人の槍騎兵等が、救助船が送られたにも拘らず、河の中で溺れ死んだ。大多數の者は、彼等が出發した元の岸へやつとのことで歸つて來た。聯隊長は、數人の部下と共に、川を泳ぎ渡り、辛苦して對岸に攀ぢ上つた。所が彼等はびしよ〳〵になつて水の滴る上衣のまゝで攀ぢ上るや否や恍惚として、その時はもう居なかつたけれど、かのナポーレオンの立つてゐた邊りを眺めながら、『Vive l'Empereur!（皇帝陛下萬歲！）』と、叫んだ、そしてその瞬間彼等は非常に幸福に感じた。

その晩二つの命令——一つはロシアで流通させる爲に用意してあつた擬造留紙幣の到着を急がせるものと、も一つはフランス軍の排置に就いての報告を認めた手紙を携へてゐたので捕へられたサクソン人を銃殺させること——を出す間に、ナポーレオンは全く何の必要もなかつたのに川へ飛び込んだあの聯隊長に、ナポーレオン自身其長であつた Légion d'Honneur の勳章を授く可き第三の命令を與へた。Quos vult perdere, demeuta.（神はその滅ぼさんと欲する者を、先づ氣狂ひにする。）

三

ロシアの皇帝は、その間ウイルナで一ケ月以上、觀兵式や演習に臨んで、暮してゐた。凡ての人々は戰爭を豫期して居たし、又皇帝がペテルブルグから出て來たのも、其準備の爲めであつたのだが、何一つ戰爭の用意はしてなかつた。それに戰の全般的方略といふものが少しもなかつた。獻言せられた一切の計略の撰澤に迷つて何れか一つに取り定めることの出來ないことが、皇帝が大本營に一ケ月滯在せられた後は、前よりも甚しくなつた。三つの軍のそれ〴〵の頭目として別々の總指揮官が一人づゝあつた、けれど彼等の凡てを引つくるめての權威をもつて居る指揮官といふものはなかつた、そして又皇帝は自らさういふ總司令官の役目を執らうとしなかつた。

皇帝がウイルナに滯在してゐることが長ければ長い程、益々ロシアの軍隊の戰爭をする氣はなくなり、終には、それを待ちまうけるのに疲れてきた。皇帝を取り卷いて居る人々のあらゆる努力は、ただ君主に愉快に時を送らせ、差し追つて居る戰爭を忘れさせることにあるやうに思はれた。

數多の舞踏會や祝賀會が、ボーランドの大貴族や、宮廷の諸役員や、又皇帝自身に依つて催された、そして六月には皇帝の幕下に屬するボーランド將軍の一人が、幕僚の將軍たち皆で皇帝の爲めに正餐

會と舞踏會を催したいものだと思ひ付いた。其發議は皆に歡迎された。皇帝も承諾を與へた。そこで幕僚の將軍たちは必要な基金を醵金した。皇帝の嗜好に最も適ひさうな貴婦人が、舞踏會の主婦役として撰定せられた。ウイルナ縣に地所を持つて居る、ベニグセン伯爵は、郊外にある自分の家をこの祝賀會の爲めに呈供した、で、六月の十三日が、伯爵ベニグゼンの郊外の家なる、ザクレタに於いて短艇競爭や花火などと共に、舞踏會及び正餐會の催される期日と定められた。

ナポーレオンがニイメン河を渡るべき命令を與へ、そしてその軍の先鋒がロシアの國境を越へて、コザック兵を追つ拂つた、丁度その日、アレキサンドルはベニグゼン伯爵の家で、自分の幕僚の將軍たちに依つて催された舞踏會にゐた。

それは華やかな、そして盛んな饗宴であつた。その道の通人たちが、之れ程多くの美人の一所に集まつたことは滅多にないと言つた程であつた。伯爵婦人ベズウホフも、ペテルブルグからウイルナまで皇帝に從つてきたロシアの婦人たちの中に這入つて居たので、その舞踏會に出席したが、彼女の重々しい、所謂ロシア流の美が、それよりも更に洗煉されてゐたボーランドの貴婦人たちを壓倒した。彼女は誰れよりも注目された、そして皇帝は特に思召しを以て彼女と踊ることを許された。

バリース・ドルベツコイは、その妻をモスクワに殘して來て居るので、ウイルナでは、彼の所謂、un garçon（アンガルソン）（獨り者）の生活（くらし）をして居たが、彼も亦その舞踏會の席にあつた。彼は幕僚の將軍ではな

かつたけれど、その舞踏會に多額の金を寄附したのであつた。バリースは、今は高い位に上つた富豪であつた。彼は最早や人の恩顧を願はなかつた、それ所か彼はその時代の最も著名な人々と同格にあつたのである。ウイルナで彼は、もう長い間會はなかつたエレンに會つた、エレンは實際すいぶん勢力のある人の親切を享けて居たのだし、又バリースもつい近頃結婚したのであつたから、彼等は過ぎ去つたことは悧にも出さないで、たゞ善良な、古い友達として會つた。

夜中になつても舞踏はまだ續いた。エレンは、丁度適當な相手が見付からなかつたので、自ら進んでバリースにマズルカを躍らうと申し込んだ。彼等は、第三番目の組であつた。バリースは冷やかにエレンの美しい裸體の肩を眺めた、それは彼女の黒い紗と金との着物の上に抜け出て居たのである。彼は、彼女に昔の知人たちのことを話してゐた。そして外の人も、それから自分も氣が付かなかつたのだが、彼は片時の間も、同じ室に居た皇帝の方を見守ることを止めなかつた。皇帝は躍つて居なかつた。彼は扉口の所に立つて、人々を一人一人止めて獨り彼ばかりがよく言ひ得る優渥な言葉を與へてゐた。

マズルカの初のころで、バリースは、幕僚の將軍で、バラショフといふ、皇帝に最も近づいて居る侍從の一人が、皇帝の傍に行き、宮廷の禮式を無視して、皇帝がポーランドの貴婦人と話をしてゐる間、その直ぐ傍に立つて居るのを見た、その貴婦人に二言三言話してから、皇帝はバラショフの方を訝しさうにチラと見た、そして彼が、さういふ風な態度をとつて居るのは、偏へにさういふ風にする重大な理由があるからだとハツキリ見てとつたので、彼はその貴婦人に輕く辭儀をして、バラショフの方へ振り向いた。皇帝の顏は、バラショフが何やら話し始めるや否や、忽ち驚愕を表はした。彼は、バラショフの腕をとつて、一緒に室を横切つた、人々が急いで後に引きさがるので、何時の間にか彼の兩側は三ヤードばかり空いてしまつた、バリースは皇帝がバラショフと一所に室を歩いて行つた時にアラクチエーフの興奮した顏を見た。アラクチエーフは、その眉の下から皇帝を眺め、赤い鼻をひこ〳〵させながら、皇帝が何か自分に云ひかけるのを待ち設けてゐるかのやうに群集の中から進み出た。(バリースは、アラクチエーフがバラショフを羨み、そして何事にしろ重要な報告が自分の手を過ぎないで皇帝の手に達したのは不滿に思つてゐることを見てとつた。)けれど皇帝とバラショフとは、扉口から灯のついた庭へと出て行つたが、アラクチエーフには氣が付かなかつた。アラクチエーフは、劍を摑んでぶり〳〵して四邊を見廻しながら、二人の二十步程後から從いて行つた。

バリースは、マズルカの型を躍りつゞけてゐた、が彼は、その間始終バラショフが持つて來たのは何んな報告であらうかと怪み、そして又何うすれば、他の人々より先にそれを知ることが出來るだらうかといら〳〵してゐた。所が舞踏の相手の一人の婦人を撰ばねばならぬ型になつたので、彼はエレンに囁いて、伯爵夫人ボトツキイを撰び度いと云ふことを話した、その人は露臺に出て居るらしかつ

たので彼は嵌木の床を靜かに滑つて、庭に面してゐる扉口の方へと馳けて行つた、そして皇帝とバラショフとが、廊下を歩いて來たのが目についたので、彼はぢつとその場に立ち止つた。皇帝とバラショフとは、扉口の方へ動いた。バリースは恰かも道を避ける暇がなかつたかのやうに、急いだ風をして、畏れ入つて門柱に體をぴつたり押つけて頭を下げた。皇帝は自分に親しく加へられた侮蔑を怒る人のやうな調子でから言つてゐた。『開戰の宣言もしないでロシアに侵入する！　自分は武裝した敵兵が我が國內に一人も居ないやうになるまでは、何んなことがあつても媾和の承知はしないぞ、』と、彼は言つた。

バリースには、皇帝はかういふ言葉を言ふのが好きであつたやうに思はれた。皇帝は、自分の思想を表白したその形式を嬉しく思つた。それを傍から聞いたバリースを不愉快に思つた。『誰にも知らしてはならないぞ！』と、皇帝は顏を顰めて言つた。

バリースは、これは自分に對して言はれたのだと氣が付いたので、眼を閉ぢて僅かばかり頭を下げた。皇帝は、舞踏室に歸つて行き、そこに尙ほ三十分程留つてゐた。

バリースは、フランス軍がニイメン河を渡つたと云ふ報告を知つた最初の人であつた、それで、その事實のお蔭で、他の人々には秘せられて居る多くの事が大低彼には知れて居るといふことを、樣樣の緊要な人々に證明することが出來、從つてそれ等の人々の思料に於ても、これ迄よりは更に一層

重んぜられ得るやうになつたのである。

フランス軍がニイメンを横切つたといふ驚くべき報知は、それを一ケ月の間も始終待ちまうけて居たのだが、何の音沙汰もなく突然舞踏會の最中に舞ひ込んだので、特に不意のことの樣に思はれた！その報知を受けた時の驚愕と憤怒の最初の刹那に、アレキサンドルは、ふと一つの宣言を思ひついた、これは後に有名になつた——彼にも大變氣に入つた、そして彼の感情を充分に現はした宣言であつた。舞踏會から家に歸つて、夜中の二時に、皇帝は秘書官シシュコフを呼び寄せ、軍隊への命令と、それから元帥サルチイコフ公爵に詔勅を書くやうにと命じた、それから、武裝したフランス人が一人でもロシアに殘つて居る間は講和はしないといふ文句を、何んでも入れろと言つた。

翌日次の手紙がナポーレオンに對して書かれたのである。

Monsieur mon frère（わが兄弟なる君よ、）——私は昨日、私が忠實に陛下との約束を守つて居たにも拘らず、あなたの軍隊はロシアの國境を横切つたことを知りました、私は唯今ペテルブルグから一書を受け取つた、その中で、ラウリストン伯爵は私に、この侵入の原因として、かのクラアギン公爵が旅行免狀を請求した時以來陛下は、我々を敵對關係にあるものと見做してゐられたことを報告し

てゐます。バツサノの侯爵が、それ等の旅行免狀を與へることを拒ばまれた諸原因を見るに、私の使節の行動が侵入の理由にならうとは私には想像も出來ませんでした。そして、事實、彼が彼の行動に於て私から何の許可をも受けて居なかつたことは、彼自身に依つて知らるゝ通りであります。で、私は、その事を聞くや否や直ちにクラアギン公爵に對して私の不興を示し、且つ彼に前の通り、委任せる役目を遂行することを命じました。若しも陛下が斯樣な誤解の爲めにあなたの臣民の血を流すおつもりでないならば、そしてロシアの國境からあなたの軍を撤回することを同意なさるならば、私は凡ての出來事を不問に附して看過しませう、從つて我々の間の和解は可能でありませう。それと反對の場合にあつては、私は、自分の方からは招かなかつたところの侵略を擊退するの止むを得ざるに至るでありませう。陛下は再び戰爭の災過から人類を救ふべき力を、その手の中に握つて居られるのであります。——敬白。（自署）アレキサンドル

四

六月の十三日の夜二時に、皇帝はバラショフを呼び寄せて、ナポーレオンに宛てたかの手紙を讀んで聞かせ、自らその手紙をフランス皇帝に齎すようにと命じた。彼は、バラショフを遣はす時、唯一

人でも武裝した敵兵がロシアに留つて居る間は決して和を講じないといふ、その宣言を繰り返した、そして、ナポーレオンにその言葉を必らず繰り返して言ふようにと云ひ付けた。皇帝はその言葉をナポーレオンへの手紙には入れて置かなかつた、それは、彼特有の才能で、この最後の努力が講和の爲めになされる時に當り之れ等の言葉は、不穩當であると感じたからである。けれど彼は、バラショフにはナポーレオンに口頭でその使命を繰り返すやうに確と命じたのであつた。

バラショフは、十三日と十四日との間の夜中に一人の喇叭手と二人のコザツクとを從へて乘り出した。そして夜明けにニイメン河のロシア領の側なるリコンチイの村のフランスの前衞に着いた。彼はフランスの騎兵の哨兵に止められた。

フランスの驃騎兵の尉官で、赤い軍服に毛皮の帽子を被つて居たのが、バラショフに止まれと叫んだのである。バラショフは、直ぐには止まらないで、並足で路を進んで行つた。

尉官は、厭な顏をしてぶつ〳〵と罵りながら、バラショフの方へ跳びかゝつて來て、劍を拔き、そして、このロシアの將軍に向つて粗暴に叫んだ。『曩者か、何うして物を言ひかけられても聞えないのか？』バラショフは自分の名を名乘つた。尉官は上官のところへ一人の兵卒を遣した。

もうバラショフには少しもかまはないで、尉官は驃隊のことに就いて、その同僚と話を始め、ロシアの將軍の方をば見向きもしなかつた。常に自分の地位の威嚴に馴れ、又始終最高の有力者や權威者と伍

して居り、而も唯の三時間前には皇帝と話を交はしたバラショフにとつては、このロシアの土地の中でかうした敵對的な、のみならず、こんな不禮な暴力の誇示に打突かるのは、よほど變な氣持ちのするものであつた。

太陽は黑雲の後から昇りかけたばかりの所で、大氣は新鮮で、露を帶びてゐた。家畜の群が、村の方から路の上を追はれてきた。雲雀は、野の中から、ぴよ〳〵と鳴きながら相續いて飛び上つてゐた、それが丁度水の面に沸き上る泡のやうであつた。

バラショフは、村から士官の來るのを待ちながら、四邊を見廻した。ロシアのコザック兵と喇叭手が、時々默つてフランスの驃騎兵たちと互に見交はしてゐた。

一人の驃騎兵の聯隊長が、明らかに、たつた今寢床から出て來たばかりといふ風で、美しい、細々とした、灰色の馬に跨り、二人の驃騎兵を從へて、村の方から進んできた。士官たちも、兵卒たちもそれから馬も凡て快活で且つ充分滿足をして居るやうに見えた。

戰役のかうした初期には、軍隊はまだ規律正しい狀態にあつて、立派な、殆んど觀兵式のやうな秩序を保つてゐた、そして、着物には、何所となし軍人らしい威張つた樣子を見せ、氣分には、何所となし快活な冒險的な氣象を含んで、平和の仕事に從事してゐるのであつた。

フランスの聯隊長は欠伸を抑へようとして、ひどく骨を折つてゐたが、その態度は頗る丁寧であつた、明らかにバラショフの位置の重要なことを充分了解して居たらしかつた。彼は前衞線を經て、彼を案內して行き、皇帝に目見えようといふ彼の望みは、皇帝の宿營は餘り遠くはないと思はれるから、多分間もなく達せられるであらうと告げた。

彼等は、リコンチイの村を通り、フランス人の馬の繫ぎ場や、番兵や、兵卒たちの間を過ぎた、兵卒等は聯隊長に敬禮し、それからロシアの軍服を物見高く眺めた。二人は、村の一方の端へ通り抜けた、そこで、聯隊長はバラショフに、もう師團長の居る所までは二キロメートル程しかないと、そして、その人が彼を迎へて目的地まで案內するであらうといふことを話した。

今はもう太陽はスツカリ昇つて、喜ばしげに、輝く綠の野を照してゐた。

彼等が丁度丘の上にある一軒の宿屋の前まで來た時、丘の麓の方から騎馬の一隊が彼等の方へやつてきた。眞先の人は背の高い男で、羽毛の附いた帽子を被り、黑い毛の馬に乘つてゐたが、その馬飾は太陽に輝いてゐた。彼は緋の外套を着てゐた、縮れた黑い髮の毛は、肩の上に流れてゐた。そして、その長い足を前の方に突き出し、フランス風に乘つてゐた。この人はバラショフの方へ駈けてきた。寶石や金の緣飾や羽毛や、凡てのものが、輝く六月の太陽にひら〳〵し、又きら〳〵と光つてゐた。

バラショフは、腕輪や、羽毛や、首飾や、金づくめの、綺羅びやかな、この芝居に出て來相な人から十ヤードばかりのところに來た、するとジュルネルといふ、かのフランスの聯隊長は『ネエプルス

の王』と、恭しくバラシヨフに耳うちした、それは實際今『ネエプルスの王』と呼ばれて居るミュラーであつた。彼がネエプルス王たるべきことは全く合點の行かぬことであつたが、彼はその稱號で呼びかけられ、自分でもその王たる位置を信じて了つた、その結果之れ迄よりはズツと嚴肅な勿體振つた態度で身を處した。眞に自らネエプルスの王だといふことを固く信じて了つてゐて、丁度ネエプルスを立たうとする前妻と共に町を歩いてゐた時、數名のイタリー人たちに『國王萬歲!』の叫びで挨拶されると、彼は、妻を振り返つて悲しさうな微笑を洩らし、『可愛さうな奴等だ、彼等は私が明日は彼等を見捨てゝ去ることを知らないのだよ。』と、言つた程である。

けれど彼は自分がネエプルスの王であるといふことを全く確信して、臣民の彼に離れる悲みに同情したのではあつたが、さて彼が服務に歸任するやうに命ぜられてからは、殊にナポーレオンとダンチツグで會見し、その時彼の尊嚴なる義兄弟が、"Je vous ai fait roi pour regner à ma manière, mais pas à la votre. (私は君が、君の流儀でなく、私の流儀で國を治めてくれるやうに國王にしたのだ)と、言つてからは、彼は大喜びで再び自分の爲馴れて來た勤務に就いた。そしてよく飼はれてゐるが併し決して食ひ過ぎをさせられては居ない種馬のやうに、自らは馬具で繫がれて居ることは感じてゐながら、而も轅棒の中で跳ね廻りながら、あらん限りの立派な美々しい飾りで堅められて、そして、何處へ行くのか又何故行くのかは少しも知らないで、彼は元氣よくポーランドの道を駈けて行くのであつた。

ロシアの將軍を見ると直ぐに彼は、その垂れた卷毛の頭を、王らしく、嚴めしく反らして、問ひかけるやうに、かのフランスの聯隊長を眺めた。聯隊長は恭々しくバラシヨフの使命を陛下に告げた、が、彼はその名前を發音することが出來なかつた。『ド・バルーマシエヴ!』と王は言つた、彼は聯隊長が困難してゐるのを自分の決斷力で打ち破つたのであつた。『Charmé de faire votre connaisance, général, (君とお近づきになることを喜びます、將軍よ、)』と、彼は王らしい懇ろな態度で、かう附け足した。高い聲で、早口に話し出すと、直ぐに、彼の王としての威嚴はなくなり、自分ではそれと氣が付かないでゐたが、彼はその持ち前の機嫌の好い心安だてな調子になつた。彼は、自分の手をバラショフの馬の額髮に置いた。『いや將軍何もかも戰爭のやうですなあ』と、彼は言つたが、一つの意見をも呈出することの出來ない事を殘念に思うてゐるかのやうな風であつた。『陛下、』と、バラショフは答へた、『皇帝は、吾が主君は戰爭を望まないのでございます、陛下も御覽の通り。』バラショフは凡ての場合に於てその『Votre majesté (陛下)』といふ言葉を云ふのに、さういふ稱號が未だ新寄であつた人に話しかける折りには免れ難い、わざとらしい調子になるのであつた。

ミュラーの顏は、『Monsieur de Balacheff (バラシエフ君)』の話を聞いてゐると、愚しい滿足を以て耀いた、併し王者はその義務を持てゐる。彼は王として同盟者として、アレキサンドルの使節と、

國事を談ずるのは自分の義務だと感じた。彼は、馬を下りてバラショフの腕をとり、そして、恭々しく侍して居た隨行員から少し離れた所へ行き、重々しく意味ありげに談さうと勗めながら、彼方此方歩き始めた。彼は、ナポーレオン皇帝がその軍隊をプルシアから徹回さすべき要求を受けて腹を立つたこと、特に、その要求が公けにされたので、その爲めにフランスの國威を甚く傷つけられたのを怒つて居ることを話した。バラショフは、その要求には少しも傷つける所はない、それは……と言つたがミュラーはそれを遮つた。

『ぢや、君はアレキサンドル皇帝は、この戰爭の始まることには責任がないと有仰るのですか?』と、彼は突然、薄鈍な機嫌の好い微笑を浮べて言つた。

バラショフは、何が故に自分は、ナポーレオンがその戰爭に對して責任があると考へたか、夫れを說明し始めた。

『いや、親愛なる將軍、』と、ミュラーは再び彼を遮つた、『心から私は、兩皇帝が御自身たちの間で事件を解決され、私なぞが少しも望んで居なかつたのに始まつて了つたこの戰爭が、出來るだけ早く終結されんことを望みます、』と、彼は、主人達は喧嘩をして居るが、自分たちは何うかして仲よくして居たいと語り合ふ召使共のやうな調子で言つた。そして、話頭を轉じて、大公の健康を尋ねたり、又彼がネエプルスで其人と一所に暮した頃の思出話をしたりした。それから、突然、自分の

王たる威嚴を思ひ出しでもしたやうに、ミュラーは、嚴しく體を眞直にして、丁度戴冠式の時に立つたのと同じ姿勢をとり、そして右の手を振りながら、言つた、『私はもうこの上君を引き止めはせん、私は君の使命を完うせられんことを祈りますぞ。』そして、その緋の外套と羽毛とをひら〳〵させながら、その數多の寶石をきらめかして、彼は、恭々しく彼に侍してゐた隨行員と一緒になつた。

バラショフは、ミュラーの言葉から間もなくナポーレオンの前に連れて行かれることであらうと豫想しながら、更に馬を進めた。所が次の村で彼は、丁度前衞で出會つたのと同じ調子でダヴウの步兵軍團の哨兵の爲めに道を止められた。そして呼び寄せられた軍團長の副官が、バラショフを、元帥ダヴウのゐる村へ案內した。

五

ダヴウがナポーレオン皇帝に對するのは、丁度アラクチエーフがアレキサンドルに對するのと同じであつた。ダヴウは、アラクチエーフのやうに臆病ではなかつたが、因業で殘忍で、そして、その殘忍の外には主人に對する尊崇の念を現はすことが出來ないといふ樣な人物であつた。

國家組織の機關の中では、かういふ人々は丁度自然界の組織に於ける狼のやうに必要なものである。

そして斯ういふ人々は、必らず何處の政府にもあるものだ。彼等の存在と、彼等が國家の元首に對する密接な關係とは、極めて不釣合に見えるものであるが、而も彼等は常にその頭角を現はし、その地位を保つて居る。唯この必要の原則に依つてのみ、此くの如く殘酷な——自分自身の手で撰拔兵の口髭を引き拔くことの出來るやうな——それで居て、その神經の弱い爲めに危險に面接することの出來ないといふ、アラクチエーフのやうに、あゝも無教育な、あゝも無作法な男が、武士らしい優しさのある高尙な氣質の、アレキサンドルのやうな君主のもとに、斯くの如き勢力を保ち得るといふ事實を人は說明することが出來るのである。

バラショフは農夫の小屋の直ぐ隣りの納屋の中の桶の上にダヴウの坐つて居るのを見た。彼は、會計の計算を檢査しながら、何か書き物をしてゐた。一人の副官が彼の傍に立つてゐた。もつと宜い宿舍を見付けやうとすれば見付けられたのだけれど、元帥ダヴウは、陰鬱な人間になりたい爲めに故意に人生の最も陰鬱な狀態に身を置くといふ種類の人であつた。それと同じ理由から斯ういふ人々は始終急々と忙しさうにしてゐるものである。

『どうして人生の光明的な方面などを考へ得られよう、御覽の如く、自分は穢い納屋の中の樽の上に坐つて、一心不亂に働いて居るのだもの、』から彼の顏に書いてあつた。

かういふ人々の大きな希望と喜とは、人生を樂んで居る他の人々に會つた時自分等の陰鬱な頑強な

活動をさういふ人達に見せつけることである。ダヴウは、バラショフが案內されて這入つて來た時自らこの滿足を感じた。彼は、ロシアの將軍が這入つてくると、尙一層仕事に打ち込んで居るやうにさへ見せかけた、そして朝の晴々した氣分と、ミュラーとの話との爲めに非常に愉快さうに見えたバラショフの顏を眼鏡越しにチラと見たが、立ちもしなければ、身動きさへもしないで、前よりも更に氣六ケ敷しい顏をして、意地惡さうにニヤリとした。

この應接ぶりで不愉快な印象をバラショフに與へたのを見屆けると、ダヴウは頭を上げて、不愛想に何用かと尋ねた。

此樣に應待するのは、自分が皇帝の幕僚の將軍であり、又ナポーレオンに對するアレキサンドルの代理者であるといふことをダヴウが知らないからに違ひないと思つたので、バラショフは自分の位階と使命とを急いで彼に告げた、けれど、その期待に反してダヴウは、バラショフの言葉を聞くと更に意地惡さうに、不禮になつた。

『君の書面は何處にあるのです?』と、彼は言つた。『それを私にお渡しなさい。私がそれを皇帝の所へ送るから。』

バラショフは、自分が直接皇帝にその書付けを手渡すべき命を受けて居ることを告げた。

『君の皇帝の命令は君の軍隊に於て服從されるべきものであるが、こゝでは』と、ダヴウは言つた、『君

はこつちで命じた通りにしなければならない。』

そして、このロシアの將軍に、獸的な力の下に支配せられて居ることを、もつと痛感させやうとするかのやうに、ダヴウは副官を遣つて當番士官を呼び寄せた。

バラショフは、皇帝の手紙の這入つて居る包みを取り出して、それをテーブルの上に置いた（そのテーブルといふのは、二つの樽の上に未だ蝶番の附いたまゝの扉を載せかけたものである。）ダヴウは、包をとつてその上の宛名を讀んだ。

『君が私に尊敬を示さうと又示すまいと、それは全く君の勝手ですが、』と、バラショフは言つた。『だが、どうぞ私が皇帝の幕僚の將軍たる光榮ある身分を持つて居るものであることを御承知下されたい……』

ダヴウは、一言もいはないで彼をジロリと見た、そしてバラショフの顏に興奮と困亂との色を見てとつて明らかに滿足を得た。

『それ相當の取扱はします』と、彼は言つた、そして手紙を衣嚢に入れて納屋を出て行つた。

一分間ばかりたつと、元帥の副官たる、Mousieur de Castre（カストル君）が這入つてきて、バラショフを彼に宛てられてゐた宿舍へと案內した。

彼はその日、元帥と一所に納屋の中で例の桶の上へ扉を渡したものの前へ座つて、食事をした。

翌日ダヴウは朝早く出かけて行つたが、その出發の前に、彼はバラショフを呼び寄せ、彼にそこに留つて居て、若し命令が出たら輜重車と一緒に行くやうに、そしてカストル君の外は誰とも談話をしないやうにと横柄に申し渡した。

これまで占めて居た勢力のある位地の後で、獨立を失ひ、碌々たる人間になつたといふ殊に苦しい感じを持ちながら、寂寥と退屈との中に四日を暮してから、元帥の輜重車や、その地方全體を占領して居た、フランス軍と一緒に數度の進軍を重ねてから、バラショフは、今は最うフランス軍に占領せられてゐた、ウイルナへ運び返され、そして四日前に出たその同じ門から、再び町に這入つた。

次の日、皇帝の侍從、伯爵チユランヌが、バラショフの所へ、ナポーレオン皇帝が喜んで彼に謁見を許さるゝといふ使命を帶びてやつて來た。

四日前にはブレオブラゼンスキイ聯隊の哨兵が、今バラショフが案內された丁度その家の前に番をして居たのである。今は二人のフランスの撰拔兵が、毛皮の帽子と胸の上の開いた青い軍服を着けてその前に服務して居るし、一方では驃騎兵や槍騎兵の護衛隊や、それから副官や、扈從や、將軍たちなどの華やかな隨行員等がナポーレオンの出て來るのを待ちながら、階段の傍の彼の乘馬や、彼の從僕リユスタンの周圍に群をなしてゐた。ナポーレオンは、アレキサンドルがバラショフを送り出したウイルナのその家で、彼に謁見を許したのであつた。

六

バラショフは多くの宮中の華麗に馴れて居たけれど、ナポーレオンの宮中の華やかさと贅澤とには驚かされた。

チユランヌ伯爵は、彼を宏大な應接室へ導いた、そこには多くの將軍たちや、侍從たちや、その多くを、バラショフが曾てロシア皇帝の宮廷に於て見た、ポーランドの大貴族たちが皇帝に目見えようとして待つてゐた。デュロックは、ナポーレオン皇帝が馬で出かける前にロシアの將軍を引見せられる旨を彼れに告げた。

少時經つと、一人の當番侍從が大應接間に這入つてきて、丁寧にバラショフにお辭儀をし、蹤て來るやうに彼を誘つた。

バラショフは小さな應接室に這入つた、そこからは、扉一つで書齋へ通じてゐた、その室は、彼が出發する前にロシア皇帝から最後の命令を受けた所である。バラショフは二分間程立つてゐた。急ぎ足の足音が、扉の外に聞えた。扉の兩方の半分が俄かに開いた、そして、それに續いて森然とした靜肅の中に又別のしつかりした、落着いた足音が書齋から聞えてきた、それはナポーレオンであつた。彼は、丁

度乘馬で外出する仕度が出來たばかりの所であつた。彼は、青い軍服を著てその開いた上衣の下に白い胴衣をつけてゐたが、それは彼の圓々した腹の上に蔽さつて居た、それから乘馬靴と、その肥つた短かい足にきつちりと合つた白い牝鹿の革のズボンを穿いてゐた。その短かい髮の毛は、明らかに今ブラッシをかけたばかりの所であつたが、一房の毛がその廣い額の中程に垂れ下つてゐた。その肥つた、白い頸は、軍服の黑い襟と鋭い對照をなしてゐた、彼は eau-de-cologne (香水)の匂をさしてゐた。未だ若々しい、圓々した顏は、その突き出た顎と共に、皇帝らしい淑やかさと殊更に丁寧な優遇の表情を負びてゐた。

彼は、その頭を少し反らし、一步毎に踏み締めるやうな足取りで這入つて來た。てつぷりとした、背の低い身體は、その廣い肥つた肩と、そのふくれた腹と胸と共に、一般に氣樂に暮して居る四十男に共通した、威嚴のある貫祿を持つてゐた。それに、又たま〳〵彼がその日は特に上機嫌であつたということも、明かであつた。

彼は、バラショフの低い恭しいお辭儀に對して輕くうなづいた、そして彼の傍へ行つて早速、その時間の一分一分を尊重して居る人のやうに話し始めた。それも丁寧に考へ考へ話すのではなく、常に巧みに語り、且つ適切なことを云ふと自信してゐる人のやうに話をした。

『今日は、將軍!』と、彼は言つた。『私は君が持つてきたアレキサンドル皇帝の手紙を受け取りまし

た、そして君に會ふことを大變喜んで居ります。』彼は、その大きな眼でチラとバラショフの顏を見たが、直ぐに視線を反らした。

彼がバラショフといふ人間に對して何の興味も抱いてゐないのは明らかであつた。そして唯自身の心の中を過ぎつゝあつたことだけが、彼にとつて多少の興味となつてゐたといふことも明らかであつた。世界中の一切のものは、彼の空想する所に依れば、彼の意志次第になるものであつたから、彼にとつては自分以外のことは凡て何等の意義をも持つてはゐなかつた。

『私は戰爭を好みもしないし、又望みもしなかつた、』と、彼は言つた、『たゞ君等が私に戰爭をさせたのだ。今だつて、』(彼は、その、今といふ言葉を強めて言つた)『私は、君等が私に爲てさへくれゝば何んな說明でも承りますよ。』そして彼は、簡單に且つハツキリと自分がロシアの政府に對して心よく思つて居ない理由を說明し始めた。

フランスの皇帝の、その念入に造り上げられた程のよい調子から判斷して、バラショフは彼が平和を望んで居り、和議を講じたがつて居るのだといふやうにスツカリ思ひ込ませられて了つた。

『Sire, l'Empereur, mon maitré (陛下、皇帝は、わが君は、)』と、バラショフは、ナポーレオンが話し終り、探るやうに自分を眺めると直ぐにズツと先から用意してゐた言葉を言はうと思つて、口を開いた、けれど、ナポーレオン皇帝が彼の上に向けた眼付きは彼を狼狽させた。『君はどぎまぎして居るよ、

少し落ちつき給へ、』ナポーレオンは、それと氣が付かないやうな微笑を浮べて、ぢろ〳〵とバラショフの劍や軍服を眺めながら、かう言つてゐるやうに思はれた。バラショフは、やつと氣をとりなほして、話し始めた。彼は、アレキサンドル皇帝はクラアギンが旅行免狀を求めたことを戰爭の十分な原因であるとは認めてゐないこと、又クラアギンは皇帝の許可を得ないで自分の一存でそんなことをしたのであつたと云ふこと、皇帝は戰爭を望んで居られないと云ふこと、それからイギリスとは何等の關係をも持つて居ないことなどを話した。

『未だ今のところでは無いのだ、』と、ナポーレオンは言葉を狹んだ、そして自分で自分の感情に身を委ねるのを恐れるかのやうに、顏を顰めて輕くうなづき、バラショフに話しつゞけて宜い、と云ふ合圖をした。

言ふやうに命ぜられたことを悉く言ひ終つてから、バラショフは、アレキサンドル皇帝は平和を望んで居るけれども、或る條件に依る外には和議を講じないといふことを述べて話を結ばうとしたが、その點でバラショフは口吶つた。彼は、アレキサンドル皇帝が其手紙の中には書かなかつたけれど、サルチイコフへ詔勅の中に是非入れろと言ひ附け、そしてナポーレオンに對つて繰り返せと自分に命じた、例の言葉を思ひ出した。バラショフは、それ等の言葉を思ひ出した、『武裝した敵兵が一人でもロシアの地に止まつて居る限りは、』けれども何かしら複雜した感情がそれを言ふことを遮つた。彼は、

言はうとしたが、それ等の言葉を口から出せなかつた。彼は口吃つた、そして、言つた、『フランスの軍隊がニイメン河の彼方に退くといふ條件で。』

ナポーレオンは、これ等の最後の言葉を言つた時のバラショフの狼狽した様子に目を付けた、彼の顔はピク〳〵と震へた、そして左足の腓が調子づいて痙攣し出した。立つて居る所から動かないで、彼は聲高く、且つ今迄よりは更に早口に喋り始めた。それからの話の間、バラショフは、ナポーレオンの聲が高くなるに連れて一層著しくなつて來るその左足の痙攣を見詰めないではゐられなかつた。

『私もアレキサンドル皇帝と同様に平和を望んで居る、』と、彼は始めた。『私はそれを得る爲めに過去十八ケ月間に總ゆる事をしたではないか？　十八ケ月の間私はその説明を待つてゐた。ところが和議を開くために、何を私に要求されるのか？』と、彼は言つて、顔を顰み、そしてその肥つた、小さな白い手で、聞き訊すやうに力強い手眞似をした。

『ニイメンの彼方に軍を徹回することです、陛下、』と、バラショフは言つた。

『ニイメンの彼方に？』と、ナポーレオンは繰り返した。『では今君は、私にニイメンの彼方に退いてくれといふのか——たゞニイメンの彼方に？、』と、ナポーレオンは繰り返し、バラショフを眞面に見詰めた。

バラショフは、恭々しく頭を下げた。

四ケ月前には彼は、ポメラニアから退くことを要求され、そして今はニイメンの彼方に退けといふのが、要求せられたことの凡てゞあつた。ナポーレオンは、不意に背を向けて室内を彼方此方と歩き始めた。

『君は和議を開始する前にニイメンの彼方に退くことを私に要求すると云ふんだね、だが二ケ月前に私はそれと同じやうにオーデルとヴイスチユラの彼方に退くやうにと要求せられたのだ、で、それにも拘らず、君は和議を始めやうと言ふんだね。』

彼は、室の一隅から他の一隅へ默つて大股に歩いたが、やがてバラショフに面と向つて立ち止つた。バラショフは、彼の左足が益々激しく痙攣し、そして、顔はその嚴めしい表情のまゝに化石でもしたかのやうになつたのに氣がついた。ナポーレオンは、この痙攣には氣がついてゐた。『私の左の腓の痙攣は、私にとつて大きな表象だ、』と、彼は晩年になつて言つた。

『オーデル河やヴイスチユラ河の彼方に退けといふそんな要求は、バアデンの公爵にするのはいゝだらうが、私にはいけない、』と、ナポーレオンは、自分でも驚いた位ゐに、殆んど叫び聲で言つた。『よしペテルブルグやモスクワを私にくれるとしても、私にはそんな條件は受けられない。君は、私が戰爭を始めたやうに言ふ。だが、最先に自分の軍に投じたのは誰れかね？　アレキサンドル皇帝だ、私ぢやない。それで、私が數百萬の金を費してから、又君等がイギリスと同盟してから、君等の位地が

弱くなつてから、君等は和議を申込むのだ——さうだ和議を申込むのだ！　君等がイギリスと同盟したのは何の目的なのだ？　一體それが何になるのだ？』と、彼は早口に尋ねた。彼の言葉の動機は、明らかに今は、平和の利益を大きく見せたり、又その可能を考へたりすることではなくて、たゞ彼自身の正しいことと、彼自身の力とを證明し、そしてアレキサンドルの不正や過失を指摘することであつた。

彼は無論この會話に於て自分の優勢なることを示し、そして、それにも拘らず彼が和議の申込みをも受け入れるといふことを示さうとしたのであつた。ところが彼は話しを始めると、益々口數多く話すにつれて、益々その言はうとする主意を取り逃がさないやうにすることが出來なくなつた。

彼の言葉の全體の眼目は、今は明らかに彼自身を偉いものとして、アレキサンドルに罪をきせ、調見の始めには少しもやる考へのなかつた、丁度そのことをやるにあつた。

『君等はトルコとも平和を結んだといふではないか？』

バラショフは首肯くやうにその頭を下げた。『平和が結ばれましたのは……』、と口を開いた。が、ナポーレオンは彼に口をきかせなかつた、彼は明らかに、自分自身の外は誰れにも口をきかせ度くなかつたのである、そして我儘な人々に有り勝ちな止め度のない多辯と、それから苛々した樣子とをもつて續けた。

『さうだ、私は君等がモルダヴイアやワアラキアをも取らないでトルコと平和を結んだのを知つて居る。私は君の皇帝に、丁度私が彼にフインランドを與へたやうに、それ等の國々をも與へるつもりだつたのだ。さうだ、』と彼は續けた、『私は約束したのだ、だからアレキサンドル皇帝にはモルダヴイアとワアラキアを與へる筈だつたのだ、だが、もう彼はさういふ美しい國々を手に入れるわけには行かない。彼はそれ等の國々を、自分の國に合せることが出來たのだ、そして彼はロシアの境域をボスニア灣からダニユウブ河の口まで廣げることが出來たのだ。カザリン大帝だつて、それ以上のことはとても出來なかつたらう、』と、ナポーレオンは言つた、そして次第に烈しく熱して來て、室内を彼方此方と歩き廻り、アレキサンドル其人に對してチイルシツトで言つたことのあるのと殆んど同じ言葉をバラショフに繰り返した。『それがみんな私の友情のおかげで得られるところだつたのだ。おゝ、何といふ美しい治世だつたらう！　何といふ美しい治世だつたらう！』と、彼は數回くり返した。彼は立ち止つて、衣嚢から金の嗅煙草箱を取り出し、貪ぼるやうに、それへ鼻をもつて行つた。

『アレキサンドル皇帝の治世は何んなに美しいものとなつたことであらう！』

彼は、憐れむやうにバラショフをチラと見て、そして彼が何か言はうとすると直ぐに、急いで又も遮つた。

『私の友情を待たないで、彼は何を望み、また求め得られやう？……』ナポーレオンは不滿さうに

肩を縮めながら言つた。『いや彼は私の敵どもを自分の周圍に集める方が得策だと思つたのだ。で、それは誰々だらう?』と、彼は話を進めた。『彼は自分の周圍にシュタインや、アルムフエルトや、ベニグゼンや、ウインツエンゲロオデの輩を集めたのだ。シュタインは自分の國から放逐された謀反人だ。アルムフエルトは奸計のある放蕩者だ。ウインツエンゲロオデは脫走したフランスの臣民だ。ベニグゼンは、實際、他の奴等よりは遙かに軍人らしいが、無能だ。彼は一千八百七年のときにも何一つ仕出かさなかつたではないか、私は彼が確かにアレキサンドル皇帝に苦しい記憶を呼び起させる種だらうと思ふね……よし彼等が有能の人々であるとして、アレキサンドルが彼等を使つたとしたところが、』と、ナポーレオンは續けたが、その言葉は、自分に對して自分の權利若しくは力（これは彼の心にとつては同じ意味なのだ）を示すところの思想の奔出に容易に伴ふことが出來なかつた。『だが彼等はそれほどにも行かないのだ！　彼等は平和にも戰爭にも何の役にも立たないのだ！　バアクレイは、私の聞く所では、彼等の誰よりも、ずつと役に立つ男だといふことだが、彼の初めての兵の操縱の手並から判斷すると、私にはさうは思へない。そして彼等は何をして居るのだ、凡て斯ういふ公卿どもは何をして居るのだ？　ブフウルは計畫ばかり立てゝ居るし、アルムフエルトは喧嘩ばかりしてゐるし、ベニグゼンは思案ばかりして居る、その中でバアクレイは、活動する爲めに生れて居ながら、決斷が出來ないで、無駄に時を費し、何一つ仕出かさない。バグラチオンが唯一人將軍らしい將軍だが、

薄鈍だ。併し經驗はあり、判斷力もある……所で君の若い皇帝は斯ういふ見つともない有象無象の中に這入つて何をなさらうといふのだ？　彼等は彼を累はしておいて、起つたことの責任となるとスツカリ彼にかぶせて了ふ。君主たるものは、その人が將たる器でない限り軍隊に身を投ずべきものではないのだ。』と、彼は明らかに之れ等の言葉を、ロシア皇帝に對する直接の挑戰として口に出して言つた。ナポーレオンは、何んなにアレキサンドルが自ら立派な將軍になり度がつて居るか知つてゐた。『この戰爭が始つてから、もう一週間になるのに、君等はウイルナさへも守り了せない。君等は二つに割られて、ポーランドの國々から追ひ出されたわけなのだ。君等の軍には不平があ……』

『その反對です、陛下、』と、バラショフは言つた、彼は自分に對して言はれたことを殆んど思ひ出す暇がなかつた、そして、かうしたナポーレオンの花火のやうな言葉について行くのに苦しんだ。『軍隊は熱血で燃え立つてゐます……』『私はそれを皆知つてゐる、』と、ナポーレオンは彼を遮つた、『私はそれを皆知つて居る、それに私は君等の大隊の數は、私が自分のを知つて居る程に確かに知つて居る。君等は二十萬の軍隊を持つて居ないが、私はその三倍を持つて居る。私はこの言葉を私の名譽にかけてといふ言葉か何の重みも持つてゐないことを忘れて言つた。『この言葉を名譽にかけて保證するが、私はウイステユラ河から此方に五十三萬の兵

を有して居るのだ。トルコ人は君等に何の役にも立つまい、彼等は何にもならん奴等だ、その證據に、彼等は君等と和議を結んだぢやないか。スウエーデン人の方はといへば、彼等は代々氣違ひの王に國を治められる運命をもつて居るのだ。彼等の王は氣違ひだつた。そこで彼等は、それを外の人に取り換へた、所が、その外の人なる、ベルナドツトが又直ぐに氣違ひになつて了つた、氣違ひでゞもなければ、スウエーデン人で、ロシアと和睦する者はなからうぢやないか。」

ナポーレオンは、意地惡さうに笑つた、そして再び嗅煙草箱をその鼻に持つて行つた。

ナポーレオンの言葉に對して一々バラショフは答へるだけのことを持つてゐた、で、それを言はうとした。彼は絶えず話し度いやうな身振りをして見せたが、ナポーレオンは其都度それを遮つた。彼のスウェーデン人は氣狂ひだといつたことに對しては、バラショフはスウエーデンはロシアの後援となる點に於いては島國のやうにいゝのだと答へ度かつたのだ。が、ナポーレオンは、彼の言葉を消す爲めに大聲を出して腹立たしげに怒鳴るのであつた、ナポーレオンは、人がたゞ自分の正しいことを自分に對して證明する爲めに、言つて〳〵、言ひまくらうとする時のやうなクソやけの狀態であつた。バラショフは居心地惡く感じはじめた。使者としては、彼は自分の威嚴を保ち度いと思つた。そして何事か返答しなければならないと感じた。併し一箇の人間としては、彼は痺れたやうに感じ、ナポーレオンの夢中な取り止めのない、激怒に惱まされた。彼は、ナポーレオンが今何を言はうとも、それ

には何の意味もないのを知り、又後で落着いてくれば自分の言葉に恥ぢ入るに違ひないことを信じた。バラショフは、ぢつと立つたまゝで、眼を落して、ナポーレオンの肥つた足が彼方此方と動くのを見てゐた。彼は、ナポーレオンの眼を避けるやうにした。『ところで君等の同盟が私にとつて何であらう？』と、ナポーレオンは言つた。『私にも亦同盟して居る者がある——それはポーランド人だ。こゝに彼等の八萬が居る、彼等は獅子のやうに奮戰する、それが今に二十萬人になる筈だ。』

彼はこの見え透いた嘘を言つたこと、それからバラショフが自己の運命をあきらめて居るといつた風に自分の前に默つて立つて居るとの爲めに、尙一層自暴くそになつたやうであつた。彼は、ぐるりと向き變つて、突とバラショフの傍へ行き、直ぐ鼻先きで、その白い手で忙がしい、力のこもつた手眞似をして、殆んど叫ぶばかりに言つた。

『宜しいか、君、若し君等が私に對してブルシアを動かしたらだね、宜しいか、君、私はヨウロッパの地圖からブルシアを消して了ふぞ、』と、彼は言つた、その顏は憎惡の爲めに靑くなり、且つ歪んだ、そして神經的な身振をして、一方の小さな手を片方の手に烈しく打ち當てゝゐた。『さうだ、私は君たちをドウイナの彼方に、ドニエープルの彼方に追ひ拂つて了ふぞ。そしてヨウロッパが罪深くも又盲目にも君等に踏み越えさした國境を昔に返して了ふぞ。さうだ、それが君等の將來なのだ、それが君等が私を疎略にした報いなのだ、』と、彼は言つた、そして厚みのある肩をピク〳〵させながら默つ

て部屋の中を數回彼方此方と歩き廻つた。彼は、嗅煙草箱を胴衣の衣嚢に藏ひ込んだり再び取り出したりして、幾度も夫れを鼻に持つて行つた、そしてバラショフに向つてヂッと立ち止つた。彼は立ち止つて、皮肉さうに眞面にバラショフの顏を眺め、そして低い聲で言つた、『Et Cependant quel beau règne aurait pu avoir votre maitre.（だが何んなにか美しい治世を君等の君主は持てたのだらうにね）』

バラショフは、何うしても答へなければならぬことのやうに思つたので、ロシアはそれ程事態を悲觀してはゐないと言つた。ナポーレオンは、矢張り彼を皮肉に見やりながら、默つてゐた、そして明らかに彼の言ふことを聞いては居ないらしかつた。バラショフはロシアではこの戰爭から最もよい結果を期待されて居ると言つた。ナポーレオンは『私はそれが君の義務だといふことを承知してゐる、だが、君は自分でそれを信じてはゐない、君は私の說に服して居るぢやないか。』といふやうに鷹揚にうなづいた。バラショフの話の終る頃に、ナポーレオンは又も嗅煙草箱を取り出して、それを嗅いだ、そして、その足で、合圖に、床を二度叩いた。扉が開いて、一人の侍從が恭しく、そろ〳〵と進んで來て、皇帝に帽子と手袋とを渡し、も一人がハンカチーフを渡した。ナポーレオンは、彼等に傍目もくれないで、バラショフの方へ向つた。

『アレキサンドル皇帝に私からだといつて吳れ給へ、』と彼は言つて、その帽子をとつた、『私は前と同じやうに彼を尊重して居る。私は彼を十分理解してゐる、私は彼の貴い性質を大變尊敬してゐる。もう、君を引きとめはしない、將軍。皇帝にやる私の手紙を渡してやらう。』そしてナポーレオンは急いで扉口へ歩いた。大廳接室から階段を下りて行くみんなの跫音が聞えた。

七

ナポーレオンがあんなことを彼に言つた後は、あんな腹立ちの爆發の後は、そして『"je ne vous retiens plus, general, vous recevrez ma lettre.（もう君を引き止めはしない、將軍、そして私の手紙を渡してやる。）』といふ最後の冷かな言葉の後は、バラショフは、確かにナポーレオンがもう二度と自分を見る氣はなく、彼の爲めに侮蔑を以て取り扱はれ、又彼の見苦しい立腹を目の邊りに見た此使節に、再び會ふことは必らず避けるだらうと思つた。所が意外にもバラショフは、デュロツクを通じてその日、皇帝の晩食の招待を受けた。

正餐には、ベツシエールや、コウレンクウルや、それからベルチエーが列席した。

ナポーレオンは上機嫌で親しげにバラショフを迎へた。朝からの立腹を恥かしがるとか、後悔するとかいふ樣子は少しもなかつた。それ所か、彼はバラショフを浮き立たせようと勗めるやうであつた。

自分は決して失策をし出かす氣遣はないといふのが、もう長い間ナポーレオンの確信になつてゐたことは明白であつた。彼の心の中では、凡て彼のしたことは善であつた、それは善とか、惡とか、前から定めてある考へと、それが調和するからと云ふのではなくて、單に夫れをしたのが『彼』だから善であると云ふのであつた。

皇帝はウイルナおうを馬で乘り廻し、住民の群集に歡呼をもつて迎へられ、且つ追隨された後なので、ひどく上機嫌であつた。彼が通つた町々の窓といふ窓には、彼の略名の這入つた窓掛の旗が懸つて居り、ポーランドの貴婦人たちはハンカチーフを振つて彼を歡迎したのであつた。

正餐には、彼はバラショフの傍に坐つて、愛想よく彼に話しかけた。彼は實に、恰かもバラショフが自分の廷臣の一人か、乃至は、彼の政策に同情し、必らず彼の成功を喜ぶ人々の一人でゞもあるかのやうに、彼に話しかけたのであつた。彼は、とりわけ、モスクワのことを話した。そしてバラショフにそのロシアの舊都に就いて、色々と尋ね始めた、それは單に、物を尋ねたがる旅人が、之れから見に行かうとする新しい土地のことを訊きたゞすと云ふやうなのではなく、見たところ、バラショフが、ロシア人として、ナポーレオンが夫れに興味を持つてゐるのを得意がるに相違ないと云ふ確信を抱いてのことであつたらしい。

『モスクワには住民が何れ程ありますか、馬は何れ程ゐますか、モスクワは聖都と呼ばれて居るさうですが實際ですか、モスクワには寺の數は何れ程ありますか?』と、彼は尋ねた。で、二百以上の寺があると話されると、彼は言つた。

『何故そこには、そんなに澤山の寺があるのですか?』

『ロシア人は非常に信心深いからです、』と、バラショフは答へた。

『だが、餘り修道院や寺の多いのは常に人民の後れてゐる印ですね、』と、ナポーレオンは言つて、この說に贊成させようとしてコウレンクウルの方を見た。

バラショフは恭しく、併し思ひ切つてこのフランス皇帝の意見に反對した。

『どこの國にもそれ〴〵習慣が御座います、』と、彼は辯じた。

『だが、そんなものはヨウロツパには何處にもありませんよ、』と、ナポーレオンは言つた。

『陛下に對して烏滸がましう御座いますが、』と、バラショフは言つた、『ロシアの外にも、スペインなどには、矢張り澤山な寺々や修道院が御座います。』

このバラショフの答へは、當時のフランス人のスペインに於ける失敗を、それとなく仄めかしてゐるので、後に彼がその話をアレキサンドル皇帝の宮廷で繰り返した時には大いにもてはやされたものだが、その時、ナポーレオンの正餐の卓上では殆んど誰にも認められず誰の注意をもひかないでしまつた。

列席してゐた元帥たちの何方つかずな、そして思ひ惑つた顏色から察すると、彼等には、バラショフのあてこすりの反駁の痛い所が何處にあるのか分らなかつたらしい。『若し何處かに痛い所があるとすれば、我々にはそれが分らないのか、でなければ、その急所が實際痛くも何ともないのだらう、』と、彼等の表情が言つて居るやうであつた。さういふわけで、この反駁は殆んど何の効果もなかつた、ナポーレオンも全くそれには何の氣も付かなかつた程であつた。そして彼はバラショフに、ウイルナからモスクワまで行く本街道は何ういふ町々を通つて居るのかと何氣なく尋ねた、バラショフは、始終正餐の間油斷なく氣を付けて居たので、諺にも總ゆる道は羅馬へ通ず、とある通り、總ゆる道がモスクワへ通ずる、で、隨分澤山の道があるが、その中にはかのチヤアルス十二世の選んだ、ポルタワを通る道もあると答へた。バラショフは、この答へが餘りすら〳〵と出たので嬉しくなつて思はず赤くなつた。バラショフが、この『ポルタワ』といふ最後の言葉を言ひ終らぬうちに、コウレンクウルがペテルブルグからモスクワに行く道の惡るさや、又自分のペテルブルグの思ひ出などを話し始めた。

食事の後で彼等はナポーレオンの書齋へと珈琲を飲みに行つた、これは四日前には、アレキサンドル皇帝の書齋だつたのである。ナポーレオンは坐つて、セエヴル茶碗の中の珈琲をかき混ぜながら、バラショフを手眞似で自分の傍の席に着かせた。

人をそれ〴〵滿足させ、誰れ彼れとなく自分の友達と考へることが、如何なる合理的な思想を以て

するよりも、もつと、有り勝ちな食後の氣分と云ふものは誰れも知つてゐる。ナポーレオンはその氣分に支配されてゐた。彼は自ら、彼を崇拜してゐる人々に取り巻かれて居るやうに想つた。彼はバラショフも亦この食後にあつては彼の友であり、崇拜者であることを疑はなかつた。ナポーレオンは愛想のよい、寧ろ少し皮肉な笑顏をして彼に話しかけた。

『これはアレキサンドル皇帝が始終住つて居た、その室だといふことだ。不思議ぢやないか、ね、將軍?』と、彼は言つた、この話は、彼、即ちナポーレオンが、アレキサンドルよりも豪いといふ證據になるのであるから、ロシア人にとつては氣持ちのよいものではない、といふことなどは、少しも氣に掛けないやうな風であつた。

バラショフは、これには何の返事も出來なかつた、彼は默つて頭を下げた。

『さうだ四日前にはウインツエンゲロオデとシュタインとが、丁度この部屋で相談したのだ、』と、ナポーレオンは、前と同じ自信のあるらしい、そして皮肉な笑顏をして、續けた。『何うしても私の解らないことは、』と、彼は言つた、『アレキサンドル皇帝が身のまはりに私の個人的の敵を集めて居ることだ。それが私には解らない。彼は、私もそれと同じ樣なことをするとでも思つて居はしないのかね?』と、彼はバラショフに尋ねた、と、その問ひは、未だ彼の心の中に新しかつた今朝の腹立ちのことを彼に思ひ出させたらしかつた。『ぢや私もそんなことをするといふことを彼に知らしてやらう、』と、ナ

ボーレオンは言つて、立ち上り、珈琲茶碗を突きやつた。『私は彼の親戚縁者を悉くドイツから追つ拂つてやらう——ウユルテムベルグや、バアデンや、ワイマルスから……さうだ、私は彼等を追つ拂つてやらう。アレキサンドルにロシアで彼等の爲めに避難所の用意をさせ給へ。』

バラショフは頭を下げた、その様子は、自分は引き退りたいのであるが、話しかけられて居ることを聞いて居ないわけには行かないので、それで聞いて居るに過ぎないのだといふことを見せるやうな風であつた。ナポーレオンは、この表情には氣がつかなかつた。彼はもうバラショフをば、自分の敵の使者としてゞはなく、今は全く自分に信服して了ひ、そして確かに、自分の前の主人の輕蔑せられたるのを嬉しがつて居る男として、話しかけて居るのであつた。

『それに何故アレキサンドル皇帝は自ら軍隊の指揮をして居るのだ？　あれは何の爲めなのだ？　戰爭は私の職業だが、彼の仕事は國を治めることであつて、軍隊を指揮することではない。何うした拍子で彼は自らさういふ責任を引受けるやうになつたのだ？』

ナポーレオンは又も嗅煙草箱を取り出し、默つて幾度か室の中を彼方此方と歩いた、そして不意にバラショフの傍へきて彼を驚かした。で、微かな笑みを浮べ、落着拂つて、非常に手早く、何かバラショフが名譽とも、快樂とも考へざるを得ないやうな事をしてでもゐるかのやうに彼は、この四十歳のロシアの將軍の顏に手を置いた、そして唇に微笑を湛へて、ちよいと其耳を撮んだ。

皇帝に耳を引かれることは、フランスの宮廷では最大の名譽でもあり、又君寵の印でもあるとせられてゐた。

『Eh bien, vous ne dites rien, admirateur et courtisan de l' Empereur Alexandre?（え、君は些とも何とも言はないぢやないかアレキサンドル皇帝の賞讃者、宮中官?）』と、彼は恰かも自分の眼の前に彼、卽ちナポーレオン以外の人の宮中官、賞讃者が居るといふことは非常に滑稽であるかのやうに言つた。『將軍の馬の支度は出來て居るのか?』と、彼は、バラショフのお辭儀に對して輕くなづくやうにしながら、附け足した。『私のをやれ、彼は遠路を行かなければならないんだから……』』

バラショフに依つて持ち歸られた手紙は、アレキサンドルに對する最後の手紙であつた。かの會話は逐一ロシア皇帝に傳へられた、そして戰爭が始まつた。

八

モスクワでピエールに會つてから後、アンドレー公爵は家の者にはそこに用事があると言つておいてペテルブルグへ行つた。實際は、彼の目的はそこでアナトール　クラアギンに會ふことであつた。彼は是非彼に會つておかなければならないと思つた、所がペテルブルグへ着くと彼を探したが、クラア

ギンは最早やそこには居なかつた。ピエールは自分の義兄弟にアンドレー公爵が彼の跡を追つて居ることを知らしたのであつた。アナトール・クラアギンは急に陸軍大臣からの命を受けて、モルダヴィアの軍に合する爲めに行つて了つたのである。ペテルブルグに居るうちにアンドレー公爵はクツウゾフに會つた、これは彼のもとの將軍で、いつも彼に親しくしてくれた人である。クツウゾフは彼にモルダヴィアへ是非一所に行かないかと勸めた、この老將軍は軍の指揮をする爲めに其所へ遣はされることになつて居たのであつた。アンドレー公爵は、指令官の幕僚を仰せ付かつて、トルコへ行つた。

アンドレー公爵はクラアギンに決闘を挑むのに手紙で云つてやるのは當を得たものではないと考へた。彼は、自分から發する決闘の申し込みは、決闘するだけの新らしい言草が少しもないので、若い伯爵令嬢ラストフにとつて迷惑なことであるに違ひないと思つた。そこで彼は、喧嘩を吹きかける爲めに直接クラアギンに會ひたいと思つてゐた、さうして決闘を挑む言草を作らうとしたのである。けれど、トルコの軍隊でもアンドレー公爵はクラアギンに會ひ損なつた。クラアギンはアンドレー公爵がトルコの軍に着くと間もなくロシアに歸つて了つた。新らしい國の、新らしい周圍の中でアンドレー公爵は、人生の稍や堪へ易いのを感じた。その許婚者に裏切られ、自分の上に及ぼすその影響を他人から骨折つて隱さうと努めれば努める程、尚一層強く感じられたが、それからは彼がこれまで幸福に暮して來た生活狀態は堪へ難く思はれ、又これまで非常に重んじてゐた自由と獨立とは、それより

も更らに煩さく感じられて來た。彼はもう初めてアウステルリツツの戰場に於て自分に生じた思想を考へることが出來なかつた、それは彼がピエールと一所に發達させようと念じ、又ボグチヤロウオに於て彼の孤獨を飾り、そして後には、スキツツルでも、ローマでも彼を慰めた所のものである。今は全く、當時は果てしなき光明の遠景を展げて見せた夫れ等の思想が恐ろしかつた。

今は彼はそれらの前の理想とは少しも關係のない、手近かに横たはつて居る最も實際的な興味にしか心を引かれなくなつた。彼がこの新らしい興味に熱心に摑まれば摑まる程、昔の理想は彼から隱されたのであつた。それは恰も嘗て彼の上に高く蔽ひかぶさつてゐた無限の底ひなき天の穹窿が、忽ちにして彼の上に押しかぶさる低い、限られた天井と化して了ひ、一切のものがその中にはつきりとしては居るが、永遠なもの、神秘なものは何一つなくなつたやうなものであつた。

目の前にある仕事の中では、軍務が最も單純で又彼には最も手馴れたものであつた。彼は、クツウゾフの幕下で週番將官の勤務を熱心と忍耐をもつて勤め、その仕事好きなことと、用意の周到なことでクツウゾフを驚かした。トルコでクラアギンに會ひはぐれてからは、アンドレー公爵はその上ロシアまで彼を探しに馳せ戻る必要も感じなくなつた。けれどクラアギンを輕蔑してゐるにも拘らず、クラアギンは自分と爭ふだけの價値のない奴だと、自分で自分を承知させやうとするまでにさう思ひ込んで居るにも拘らず、何れ程長い時が經つても、彼に會つた曉は、恰かも餓ゑたる人が食物に飛び

つかずにはゐられないやうに、彼はクラアギンと決闘せざるを得ないといふことを知つてゐた。そして、この侮辱が未だ報復されず、憤怒が癒されずに尚ほ心の中に鬱積して居るといふ意識は、アンドレー公爵がトルコに於て、つとめて繁忙な稍や野心的な風を裝つて達し得た所の、無理な平靜を傷ふのであつた。

一千八百十二年に、ナポーレオンとの戰爭の報知がブカレスト（そこにクツウゾフは、ワラキアの女と夜晝を送りながら、すでに十四ケ月も暮して居たのである）に達した時、アンドレー公爵は西方の軍に移して貰ひたいと願ひ出た。クツウゾフは、今ではアンドレーの活動を厭はしく思ひ、且つ、それを自分の怠惰に對する斷えざる叱責のやうに感じて居たので、何時でも喜んで手放したいと思つてゐた所であつたから、早速バアクレー・ド・トオリイの所へやる任命を彼に與へた。

五月にはドリツサに陣して居た西軍に合する前に、アンドレー公爵は、丁度その通る道筋にあたるスモオレンスク街道から僅か三露里（ウニルスト）の所にある、ルイシーヤ・ゴオルイへ行つた。アンドレー公爵の最近三年間の生活は、全く變化に富んだものであつた、彼は思想や感情の樣々の變化を經（又東に西に旅をして、）樣々の異つた生活を見て來たので、このルイシーヤ・ゴオルイの生活の何時もの如く少しも變らぬ軌道を整然と進んで居るのを見て、不思議と驚きに打たれた。彼は大路を通つて家の石門に馬を進めた、それは、魔法にかけられて、眠つて居る城でゞもあるかのやうに思はれた。前と同じ平

靜と、同じ淸潔と、同じ沈默とが、その家を領してゐた。そこには、たゞ少し許り古びたと云ふだけで、前と同じ家具、同じ壁、同じ物音、同じ臭ひ、同じ臆病な顏があつた。公爵令孃マリヤは、矢張り前の通り臆病な、繊細のよくない、最早青春の時代を過ぎ、その生涯の最もよい年頃を不斷の恐怖と苦しみとの爲めに費ひ果して、其生存からは何の利益をも幸福をも得ることの出來ない娘であつた。ブリアンヌ孃は前と全く同じやうに獨りよがりの、色氣たつぷりな、生活の刹那刹那を樂しみながら、未來の最も喜ばしい希望に滿たされた娘であつた。彼女はたゞ厚かましさを增したやうに見えた、さうアンドレー公爵は思つた。彼がスキツツルから連れて歸つた家庭教師の、デツサルは、ロシア仕立ての上着をきて、召使たちに片言のロシア語で話をするやうになつてゐた、が、矢張り全く昔通りに心の狹い、教育のある、勤勉で、そして衒學的な教師であつた。老公爵の體で目について變つたのは齒が一本なくなつたのが口の片隅から見えるやうになつたことであつた。性格に於いては、彼は昔と同じことであつた。唯世間の出來事に對して何につけ之れまでよりも一層短氣で疑ひ深くなつたゞけであつた。變つて了つたのは、ニコリユーシカたゞ一人であつた、彼は背が高くなり、薔薇色になり、そして縮れた黑い髮の毛をしてゐた。何か嬉しがつて笑ふ時彼は、丁度亡くなつた母親の、小さい公爵夫人がよくしたやうに、無意識にその可愛らしい小さな口の上唇を反らすのであつた。彼だけが、この呪符に封ぜられた、眠つてゐる城の中を領して居る、何も彼も昔と變らないといふ法則に拘束さ

れない唯一のものであつた。併し外觀的には凡てのものは全く昔の通りであつたけれど、係り合つて居る凡ての人々の内部的關係はアンドレー公爵が此前彼等を見た時以來大分變つてゐた。家の中の者は二つの敵對した陣に分れ、互ひに離れて居たのであつたが、今ばかりは、アンドレー公爵の手前お互に平素の習慣を捨てゝ一緒になつた。一方の陣には、老公爵、ブリアンヌ嬢、及び建築師が屬し、もう一つの陣には——公爵令嬢マリヤ、デツサル、ニコリユーシカ、それから乳母たち全體が屬してゐた。

彼のルイシーヤ・ゴオルイに滯在中は、家内の者が皆一緒に食事をした、が、誰も彼も不安な樣子であつた、で、アンドレー公爵は自分が除外例にされて客として取り扱はれ、又自分の居るといふことが彼等の凡てを窮屈にさせて居るやうに思つた。初めての日アンドレー公爵は食事の時この事に氣が付かないわけには行かなかつた、そして默つて坐つてゐた。老公爵は彼の不自然な沈默に氣が付いた、で、彼も亦、妙に默つてゐた、そして食事後直ぐに自分の部屋に退いて了つた。夜遲くアンドレー公爵が彼の所へ出かけて行つて、青年公爵カアメンスキイの戰場の物語を始め、彼の氣を激まさうとすると、驚いたことには、老公爵は公爵令嬢マリヤの話を始めて、彼女の迷信深いことや、彼女のブリアンヌ嬢を嫌つて居ることなどを不平した、ブリアンヌ嬢は、彼の言ふ所に依れば、彼の眞に他賴りになる唯一人の人であつた。

老公爵は自分が若し病氣だとすれば、それは盡く公爵令嬢マリヤの所爲である事、彼女が彼を故意と苦しめ且つ惱ますこと、彼女が小さい公爵ニコライを可愛がつたり、下らない話をして聞かせたりして甘やかしていけなくして了ふことなどを廣言した。老公爵は自分が彼女を苦しめて居ることや、彼女の生活が慘めなものであることを能く知つてゐた。けれど又彼は彼女を苦しめないで居られないことを知つてゐた、そして夫れが當然であると思つてゐた。『何うしてアンドレーは、これを知つてゐて妹のことを何とも言はないのだらう?』と老公爵は不思議に思つた。『はて、彼は私が惡黨とか馬鹿とかであつて、それで自分の娘を遠ざけて理由もなくこんなフランス女と親しくして居るとでも思つて居るのか知ら? この男には解らないのだ、だから私はそれをこの男に話して聞かせなければならぬ、この男に、是非その事に就いて私の言ふことを聞かせてやらなければならぬ、』と、老公爵は思つた、そこで彼は、何故自分が娘の法外な性質に我慢が出來ないか、その理由を說明し始めた。

『あなたのお尋ねですから、』とアンドレー公爵は、父の顏をば見ないで言つた（彼が父を責めたのは生れてから之れが初めてゞあつた）、『私はそれをお話することは好みませんが——ですが、あなたのお尋ねですから、私はあなたに此事に就いて何も彼も腹藏なく申し上げます。若しあなたとマーシヤとの間に何か誤解とか、仲違ひとかゞあつたところで、私はそれを以て彼女を責めるわけにはまゐりません——私は、何んなに彼女があなたを愛し且つ尊敬してゐるか知つて居るからです。若し

あなたが私にお尋ねなさるのなら、』と、アンドレー公爵は、腹を立て、續けた、この頃彼は直きにかうなり勝ちであつた。『私は唯一言いふことが出來ます、卽ち若し、そこに何か誤解があるとすれば、その原因は、あの妹の友達になるには適して居ない、やくざな女のお蔭だといふことです。』

老人は、ちよつとの間自分の息子を見つめてゐた、そして强ひて造り笑ひをして齒のなくなつた痕(あと)を顯(あら)はした、それはアンドレー公爵の見馴れないものであつた。

『どういふ友達なんだ、お前？　えゝ！　ぢヤお前たちはもうこの事に就いては話し合つたんだな！　えゝ？』

『お父さん、私は決して、あなたのことを兎や角と申し度くはありません、』と、アンドレー公爵は、烈しい憎らしげな調子で、言つた、『ですが、あなたの方から言ひ出したのです、それで私はマリイに罪はないといふことを今申し上げたのです、いや之れからも屹度かう申し上げるに違ひありません、そして責められるべき者は——責められるべき者は——あのフランス人の女です……』

『なに、私を責めるのだな！　私を責めるのだな！』と、老人は、低い聲で言つた、そしてアンドレー公爵には、その樣子が何だかまごゝろしてゐるやうに思はれた。が、忽ち彼は飛び上りさま叫んだ、『行つちまへ、行つちまへ！私に二度と會ひに來るな！……』

アンドレー公爵は直ぐにもたちたかつた、けれども公爵令嬢マリヤは彼にもう一日居てくれと頼んだ。その日一日アンドレー公爵は父に會はなかつた、父は決してその部屋を出なかつた、そしてブリアンヌ嬢とチホンとの外には誰も會ひに這入つて來るのを許さなかつた、そして彼等に幾度も最う息子はたつたか何うかと尋ねた。次の日たつ前に、アンドレー公爵は家の中の、自分の子供の居る筈の方へと行つた。母親のやうな縮れ毛をもつた、丈夫な、小さな子供は、彼の膝の上に腰かけた。アンドレー公爵は彼に『青鬚』の物語をし始めた、けれど、その話を終らないうちに彼は夢見るやうな默想の中に沈んで了つた。彼は、その可愛らしい子供、彼の子供を、膝の上に乘せてゐながらも、その子のことを考へて居るのではなかつた、彼は、自分自身のことを考へて居るのであつた。彼は、父の怒りを引き起したことに就いての後悔と、彼と仲違ひをして(そんなことは生れてから初めてなのだが)家を出て行くことの悲しさとを、自身の心の中に怖々(こわ〴〵)見出さうとしたが、見出せなかつた。それより も更に彼にとつて重大なことは、自分の子を可愛がつて膝の上に乘せてゐながらも、嘗ては感じたこともあり、又それを心の中に復活させ度いと思つた優しい愛情の痕跡を自分の中に見出すことの出來ないことであつた。

『ねえ、その後(あと)を話して、』と、子供は言つた。『から下ろし、そして部屋を出て行つた。

アンドレー公爵はそれには答へないで默つて子供を膝

アンドレー公爵は、特に幸福であつた昔の生活狀態に歸へるや否や、日常の仕事を捨てるや否や、

前と同様に激しい生の暗愁にとらはれた、そして、それ等の日の記憶から逃れて、出來るだけ早く何か仕事を見付けようとあせつた。

『あなた本當にいらつしやるの、アンドレー?』と、彼の妹は彼に言つた。

『有難いことに、私は行けるよ。』と、アンドレー公爵は言つた。『お前も行けたらばね、氣の毒なことだ。』

『何故そんなことを有仰いますの?』と、公爵令嬢マリヤは言つた。『この恐ろしい戰爭にお出かけなさるのに、あなたは何うして其樣なことが有仰られるのです、お父さんも、あんなにお年を召して居らつしやるのに? ブリアンヌさんのお話では、お父さんはあなたのことを始終たづねてゐらつしやるといふことですわ。……』此事を話すと直ぐ、彼女の唇は震へ、そして涙がこぼれ出した。アンドレー公爵は眷を向けて室の中を彼方此方と歩き始めた。『あゝ、實に!實に!』と、彼は言つた。『何が、又誰が——どんな渣が人々の不仕合せの原因になるのかと思ふと!』と、彼は毒々しく言つた。公爵令嬢マリヤは恐ろしかつた。

彼女は、この『渣』といふ言葉を使た時、彼は單に、彼女の不幸の原因である、ブリアンヌ嬢のことを考へて居るばかりでなく、又彼自身の幸福を破壞した男のことをも考へて居るのだと思つた。『アンドレー、私はたつた一つお願ひがあるの、後生なんですから、』と、彼女は言つて、彼の肘に縋りながら涙

に輝く眼で彼を見た。『私よく察して居ますわ。』(公爵令嬢マリヤは伏眼になつた。)『悲しみを人間の糧だとお思ひなすつてはいけません。人間はたゞ神樣の道具に過ぎないのですから。』彼女は、アンドレー公爵の頭の稍や上の方をチラと眺めた、それは人がよく見馴れた肖像の方を眺める時のやうなシツカリした、落ちついた風であつた。『悲しみは神樣から與へられるので、人間からではありません。人間は神樣の意志の道具なのです、だから人間を責めてはなりません。若し誰かがあなたに惡いことをしたやうに思はれたら——それをお忘れなさいまし、お宥しなさいまし。私たちは人間を罰する權利は少しもないのです。そしたら、あなたは人を宥すことの幸福をお知りなさいますわ。』

『私が女なら、私はさうするよ、マリイ。そこに女の德行があるのだ。併し男は忘れるとか、宥すとか、そんなことをしてはならない、又することは出來ない。』と、彼は言つた、そして、その瞬間までは彼はクラアギンのことを思つてはゐなかつたのだけれど、滿足を得ずにゐた復讐の念が再び心のうちに湧きたつてきた。『マリイが今頃自分に宥すやうにと、說き始めて居るとして見ると、自分はズツと前にもう彼を罰して居るべき筈だつたといふことになる、』と彼は思つた。

そして公爵令嬢マリヤに對しては、それ以上の答へはしないで、彼はもうクラアギンに會つた時の憎惡の念を晴らすべき喜ばしい刹那のことを夢見てゐた。彼は、クラアギンが軍隊に居ることを知つてゐた。

公爵令嬢マリヤは、若しアンドレーが父と仲直をしないで行つて了つたなら、何んなに父が惨めになるか、自分は知つてゐると話して、兄に最う一日止つてくれと頼んだ。アンドレー公爵は、自分は直きに軍隊から歸つて來ることになるだらうといふこと、屹度父には手紙を出すといふこと、夫れから今は自分の滯在が長くなればなる程二人の仲は惡くなるばかりだといふことを答へた。『災ひは神樣から來るのだから、決して人を責めてはならない、といふことを憶えてゐて下さい』、といふのが、別れを告げた時、彼が妹から聞いた最後の言葉であつた。

『さうしか他にしやうがない！』と、アンドレー公爵は、大路を馬車で出る時に、思つた。『彼女は、あの可愛さうな無邪氣な女は、あの老耄れた老人の犧牲になるやうに殘されたのだ。老人は自分の惡いことは分つてゐるのだが、自分で何うすることも出來ないのだ。私の子供も段々大きくなつて人生を樂しみつゝある、彼も亦この人生にあつて、他の色々の人々と同じやうに欺かれるか、欺くかするであらう。私は今軍隊に行くところだ——何の爲めに？それは自分でも知らない。自分は自分が侮蔑してゐるあの男に會ひ度い、自分を殺して自分を嘲笑する機會を彼に與へるやうな風にして會い度い！』人生の總ての狀態は前と同じであつたが、前には夫れ等に悉く連絡がとれてゐるやうに彼には思はれたのに、今は凡て離れ離れになつてゐる。人生はアンドレー公爵にとつて、何の聯絡もなしに互ひに相續く無意味な現象の連續のやうに見えるのであつた。

九

アンドレー公爵は、六月の終りに軍の總司令部に着いた。皇帝自身もその中にゐた、第一軍はドゥルツサの防禦工事を施した陣地に屯營して居たのである。第二軍は退却しながら、第一軍と行く行く聯絡しようとしてゐた、所が——噂に依れば——之れがフランスの夥しい大軍の爲めに切斷せられて了つたといふことであつた。誰も彼もロシア軍の軍事行動に對しては不滿を抱いてゐた。けれど誰一人ロシアの領土が侵略される危險があらうとは夢にも思つて居なかつた、又誰一人戰爭が西部ボーランド地方の國境を越えて擴がり得やうとは想像だにもしなかつた。

アンドレー公爵は、彼の派遣された先方の人なる、バアクレイ・ド・トオリイとは、ドリツサ川の岸で會つた、陣地の近傍には一つも、大きな村も、又人間の住む場所もなかつたので、軍に從つてゐた數多の將軍や宮中官の群は、その邊り十露里程の、川の兩岸の村々の最もよい家に配置された。バアクレイ・ド・トオリイは、皇帝から四露里離れて宿を取つた。彼は、バルコンスキイを無愛想に且つ冷やかに應待した、そして、そのドイツ語訛りで、アンドレー公爵に對して何か定つた任命を下すように奏上しやう、また、それ迄は、自分の幕僚になつてゐて貰ひたいと言つた。

アンドレー公爵が、その軍中で出會ふだらうと豫期して居たアナトール・クラアギンは、そこには居なかつた。彼はペテルブルグにゐた、で、バルコンスキイはそれを聞いて喜んだ。彼は、今將に始まらうとして居たこの大戰の中心に這入る興味に心をとられて居たので、結局一時の間でも、クラアギンのことを思ふと起つて來る苛々した氣分から逃れることが出來たのであつた。初めの四日の間は、別にこれといふ用事は云ひ付けられなかつたので、彼は毎日その防禦陣地の周圍に馬を乘り廻した、そして自分の經驗と、又もつと多くの經驗を積んだ人々と話をしたりしたことに依つて、彼はその防禦陣地に就いてハツキリした考へを造り上げることに努めた。けれど此樣な陣地が結局役に立つものかどうかといふ疑問は、彼の心の中ではいつまでも解決されないものであつた。彼は既に、自らの軍事上の經驗から押して、戰爭に於ては、如何程深くめぐらされた計略でも（彼がアウステルリツツで見た如く）何の功果もないといふこと、そして、一切の事は、思ひがけない敵の行動や、又何うしても前以て知ることの出來ない行動に何う處するかに依つて決ると云ふこと、又凡ては如何にして、誰に依つて、戰爭が導かれるかに懸つてゐると云ふことを確信して居た。この最後の問題を自ら滿足するやうに解決する爲めに、アンドレー公爵はその位置とその知己とを利用して、軍隊の組織にたづさはつて居る人々や黨派の性質を洞察しやうと試みた。そして彼は、その事件の位置に就いて、次のやうな一般的の觀念を得た。

皇帝が、ウイルナに居た時には、軍隊が三つに分れてゐた。第一軍は、バアクレイ・ド・トオリイの指揮の下に、第二軍はバグラチオンの指揮の下に、第三軍は、トルマーゾフの指揮の下にあつた。皇帝は、第一軍に屬して居たが、總指揮官の資格を持つて居るのではなかつた。布告にも、皇帝が軍隊と一緒にゐるとは報じられたが、彼が指揮をするとは報じられてなかつた。且つ、皇帝その人の直屬は總指揮官の幕僚ではなく、大本營の幕僚であつた。皇帝附きの幕僚の長官は軍營總監のワルコンスキイであつた、そして、その幕僚の中には、數人の將官と、數人の侍從武官と數人の外交官とそれから數多の外國人とがゐた。が、それとて一人も軍事的幕僚ではなかつた。皇帝はまたその隨行員として、別にこれといふ役目なしに、前陸軍大臣アラクチエーフ、年長者として將官の主位にあつた、ベニグゼン伯爵、皇太子コンスタンチン・パウロヰツチ、宰相ルミヤンツエフ伯爵、プルシヤの前國務卿スタイン、スウエーデンの將軍アルムフエルト、この戰役の主謀者プフウル、侍從武官長にせられた、サルディニアの亡命者パウルツチ、それからウオルツオーゲン、その他多勢の者を連れてゐた。これ等の人人は、軍隊に於て別にこれといふ位置を持つては居なかつたが、それでもそれ〴〵その位置に應じて、相當の勢力を持つてゐた、そして屢々一軍團の指揮官でさへも、如何なる資格あつてベニグゼンなり、皇太子なり、アラクチエーフなりワルコンスキイ公爵なりが、自分に對して何かしら忠告をしたり、質問をしたりするのか、合點が行かなかつた、それから又その忠告の形式をと

つて居る色々の命令が、夫れをした人から直接に來たのか、それとも其人を通じて皇帝から來たのか、又それに從つてよいものか、惡いものか、分らなかつた。けれど、凡てこれは單にその狀態の外面を形造つて居るに過ぎないものであつて、斯うして皇帝や凡てこれ等の大官たちが居たといふことの內面的の意義は、宮中官(君主の前では誰でも宮中官となるのだ)の見地からすれば、誰にでも明白であつた。つまり皇帝は、公然と總指揮官の位置をとつては居なかつたが、實際上に於てはその手の中に全軍の最高の統治權を持つて居り、そしてその周圍の人々は彼の參謀であると云ふ事實は誰も皆知つてゐた。アラクチエーフは信頼すべき行政者で、規律の保持者で、又皇帝の身の安全に注意する人であつた。ペニグゼンは、その近邊の地主で、皇帝をそこで款待するのを職分と心得て居るやうに見えた、それに彼は又事實、好個の將軍であつて、參謀としても有用な人物だし、何時でもバアクレイに代らせる豫備者として有用な人物であつた。皇太子は、又自らそこに居るのが適當だと思つたから居たのであつた。

プルシアの前國務卿スタインは、その助言が有益でもあらうし、又アレキサンドル皇帝がその人としての、色々の品質を非常に尊重して居たので、そこにゐた。アルムフエルトは、ナポーレオンの不俱戴天の敵で、非常な自信も持つてゐたが、夫れがアレキサンドルに對して常に勢力をもつてゐた。パウルツチは大膽で且つ思ひ切つたことをいふといふ理由で、そこにゐた。幕僚の將軍たちは、彼等

は常に皇帝の居る所には必ず居るといふ理由のもとに、そこにゐた、そして又最後の且つ重要なる人物のプフウルは、彼がナポーレオンに對する戰爭の策略を創造したのと、それにその策略の完備してゐることをアレキサンドルに信じさせたのと、從つて今は、彼が全戰役の策略の實行を監督して居たのとで、そこにゐた。プフウルには、ウオルツオーゲンが從いてゐた、ウオルツオーゲンは、融通のきかない理論家の、自家の意見を盲信してゐて、夫れ以外のものは何によらず蔑視するプフウルの考へを、プフウル自身がなし得るよりもズツと解り易い形に拵へあげた。

以上述べたのは皇帝の周圍の最も卓越した人々であつた、そして彼等の間では、外國人が最も勢力があつて、自分自身の世界でない場所に働く人々の特徴たる大膽を以て、每日新らしい驚くべき助言をした。所が又、その他にもつと多くの第二流の人々がゐた、それは彼等の親分株の人々が其所に居るので、その軍に從つて居たのである。

この大きい、花々しい、誇らかな、そして不安な世界にあつて、凡てかうした相爭ふ聲々の中に、アンドレー公爵は次のやうな恐ろしく反對した黨派や、意見の相違やを見出した。

第一の黨派は、プフウル及びその子分から成り立つて居る、軍事上の理論家たちで、その不變の法則——斜行進運動や、包圍、と云つたやうなもの丶法則——を持つ軍學を信じてゐる人々であつた。プフウル及びその子分は、軍隊は彼等の戰爭の理論によつて定められた正確な原則に從つて國の中心

に退却すべしと主張した、そして何事でも、この理論を離れたものは、野蠻か、無智か、又は惡意に過ぎないと思つてゐた。この黨派にはウオルツオーゲン、ウインツエンゲローデ及びその他——主としてドイツ人が屬して居た。

第二の黨派は、第一とは正反對であつた。一つの極端な說の出る場合の常であるが、代表者たちが反對の極端から出て來たのであつた。この黨派は凡て先の策略を無視してウイルナからポーランドへ進むことを極力主張した。この黨派は大膽なる行動を主張すると共に、一方國家主義の代表者たちから成り立つて居たので、その爲めに其意見は尙更ら一方に偏したものになつた。

彼等はロシア人であつた。バグラチオンや、當時漸く皆に注目され初めた、イエルモロフや、その他の人々であつた。イエルモロフの有名な戲言——位を上げて『獨逸人』にして貰ふ爲めに皇帝に呈出する假定の嘆願書——が當時大ひに人々に引用された。この黨派の連中はスウオロフを思ひ出して、目下必要なことは、理屈を言つたり、地圖に留針をさしたりすることではなくて、たゞ戰ひ、敵を擊ち、敵をロシアに侵入させることを防ぎ、そして軍の士氣を維持することにあるのだ、と主張した。

第三黨派は、皇帝が最も多大の信用を置いてゐたもので、これには前の二つの爭つて居る兩派の間を調停しようと心がけて居る宮中官たちが屬してゐた、この黨派——これにはアラクチエーフが屬してゐた——の人々は、大部分軍人ではなかつた、そして彼等は、常に何の確信をも持つて居ない癖に、

それを持つて居るやうに見せ度がる人々によくあるやうに、喋(しゃべ)つたり理屈を言つたりしてゐた彼等はボナパルト(彼等はナポーレオンのことを今又ボナパルトと呼んでゐた)のやうな、あゝいふ天才との戰爭には言ふ迄もなく深奥な戰術上の考案や、充分な科學的知識を要する、そしてその方面ではプフウルが天才であるといふことを認めてゐた。けれど、それと同時に、彼等は、理論家が往々一方に偏するのは止むを得ないことであるから、從つて彼等に絕對の信用を置いてはならないこと、又プフウルの反對側の論者の主張や經驗ある實際家等の意見をも聞いておいて、その中間の道をとる可きことを承認してゐた。彼等は、プフウルの策略の中の、ドリツサに陣をおくことには贊成をしたが、それと共に他の二軍の配置を變へることを主張した。かういふ方針の運動をとれば、どちらの目的も達せられ得なかつたのだが、これが又この妥協派の連中には取るべき最上の策だと思はれたのであつた。

第四の派の意見の中で、最も卓越した代表者は太公と、かのアウステルリツツの手痛い覺醒を今だに忘れ得なかつた皇太子とであつた。彼は、その時觀兵式にでも出る時のやうに、兜と鎧とを着け、勇しくフランス軍を打ち破ることを豫期して馬を近衞の先頭に乘り進めたが、圖らずも丁度敵の砲火の線內に出て了つたので、全軍壞亂の中に身を以て免れたのであつた。この黨派の連中は、その確信の中に、誠實の長所と缺點とを同時に備へてゐた。彼等は、ナポーレオンを恐れてゐた、彼等は、ナポーレオンの强さと、彼等自身の弱さとを知り、そして正直にそれを承認してゐた。彼等は言つた、『大

なる屈辱と破滅との他には何ものも、この戰爭からは生れないのだ！　我々はウイルナを捨てた、ウイテブスクを捨てた、そしてドリツサをも又捨てつゝあるのだ。我々がするように殘されて居る、たつた一つ氣の利いたことは、平和を結ぶことだ、それも出來るだけ早く、我々がモスクワを追はれないうちにすることだ！』

この意見は、高級の軍人階級の中に廣く行渡つて居り、ペテルブルグにも、熱心な贊成者があつた——その中の一人は、宰相ルミヤンツエフで、彼は別の政治上の考へから平和論を主張してゐた。

第五の黨派は、バアクレイ・ド・トオリイの一派で、それはド・トオリイの人格を慕つての上ではなく、彼が陸軍卿であり、總指揮官であるが故に、その下に集まつたのである。『たとひ彼は何であらうとも、』と、彼等は常に言ひ出した、『彼は正直者で、實行家だ、その點では誰も彼には及ばない。彼一人に全責任を持たせるが宜い、由來戰爭は、幾多の分れた權威者の下にあつては有功に行はれ得るものではない、彼は、彼がフインランドでなしたる如くに、その腕のあるところを見せてくれるであらう。我が軍が强く、且つ立派に組織せられてゐて、何の災ひもなしにドリツサに引き上げられたのは、一にバアクレイのお蔭なのだ。若しもバアクレイが今ベニグゼンと位置を代へられたら、萬事は無茶苦茶になつて了ふだらう、何故と云つて、ベニグゼンは既に一八〇七年にその無能を證明したではないか。』かういふのが第五派の論法であつた。

第六の黨派、卽ちベニグゼンの黨派は、その反對に、要するにベニグゼン以上に實力あり、經驗ある者は一人もない、で、何んな事がなされたとしても、結局は彼のところに歸つて來なければならないのだ、と主張した。彼等は、かのドリツサへのロシアの退却全部は恥づべき災ひと失策との連續であつたと主張した。『勝手に失策をやるが宜い、』と、彼等は言つた、『失策をすればする程宜いんだ。少くとも、それだけ早く我々が何うしても此儘ではやつて行けないといふことを彼等に敎へることになるだらうから。我々には、お前たちのバアクレイなどは要らない、一八〇七年にその腕前を示して、ナポーレオンでさへもそれを認めざるを得なかつたベニグゼンのやうな人が必要なのだ。ところで、今は凡ての人々が進んで權威を托し得るやうな人を要する時だ、そしてベニグゼンこそ唯一人のさういふ人なのである。』

第七の組は、常に宮中、殊に若い君主の宮中に見出されるといふやうな、さういふ種類の人々で、そして、取り別けアレキサンドルの隨員の中には數多くゐた——それは、情熱的に皇帝を崇拜し、單に帝王としてのみならず、かのラストフが一八〇五年に彼を崇拜したやうに、誠實に私心なく人として の彼に信服して了ひ、彼の中に人間のあらゆる美德や善い性質を認めてゐる、將軍や副官たちであつた。これ等の人々は、その軍隊の統率を辭した皇帝の謙讓の德を非常に嬉しがつてゐると共に、その過度の謙讓を遺憾としてゐた、そして、彼等の崇拜する皇帝が、その過度な遠慮に打ち勝つて、自ら

軍頭に立ち、周圍に總指揮官の幕僚を集め、必要に應じて經驗ある理論家や實行家と相談し、そして、この一歩に動かされて極度に熱心になるに定つて居る彼の軍隊を、自ら指揮する旨公然宣言して欲しいといふことのみを願ひ、且つ主張した。

第八の、そして他の凡てのものの一に對して九十九の割合を持つてゐる最大多數黨は、平和にも、戰爭にも、何れにも別に熱心でなく、攻勢的行動だらうが、防禦的陣地だらうが、ドリッサに居やうが何所に居やうが少しもかまはず、バアクレイの味方もしなければ、皇帝にも、プフウルにも、ベニグゼンにも附かないで、たゞ最も肝心な一事——卽ち彼等自身の最大利益と享樂のみを心がけて居る人々から成り立つてゐた。皇帝の大本營の周圍に渦卷いて居る樣々の陰謀の、矛盾した潮流の攪亂された水の中では、成功は、他の場合には思ひも寄らないやうな、色々雜多の方法で得られるのであつた。或る宮中官などは、單に利益のある地位に止つて居たいといふだけの單純な動機で、今日はプフウルに贊成し、明日はその反對者に贊成し、又その次の日には、唯單に責任を避け、且つ皇帝を滿足させる爲めに、現に問題になつて居る事には自分は何の意見もないなどゝ公言するのであつた。又或る者は、その地位をよくしようと思つて、その前日皇帝に依つてほのめかされた意見を仰々しく聲高に叫び立て、會議の席上で騷しく爭論し、胸を打つたり、公益の爲めには何時でもその身を犧牲にする覺悟でゐることを證明する爲めに、殊更らに反對者に決鬪を挑んだりした。又第三の者は、唯會議との

間敵の居ない時に附け込み、今は拒絶する暇のないのを知つて居て、自分の忠實なる勤勞に對し扶助基金からの給與を願ひ出た。第四の者は、皇帝が全く偶然に、彼が一心に自分の仕事に熱中して居る所をば見付けてくれるやうにと、努めてさういふ所へ廻らうといふやうなことばかりを心がけてゐた。第五の者は、長い間望んでゐたその一生の目的——卽ち皇帝の陪食の席に列すること——を、達しやうとして、何方か一方に強いて左袒して、その助けになるやうな多少眞理のある、有功な議論を集めた。

凡てこの黨派の連中は、金錢や、勳章や、昇進を狩り廻してゐた、そして、その狩に於いて、彼等は偏へに皇帝の寵愛の消長に依つて彼等に示される方向を辿るのであつた。皇帝の風信子が一方を指したのを見ると、直ぐにこれ等怠け蜂の全群は一度にその方向になびいて行き、皇帝が再び元の方向に歸へるのを一層困難にするのであつた。總ゆるものに特別な激しい性質を與へた恐ろしい危險の迫つてゐる此位置の不確な中で、この野心や、相衝突する虛榮心や、意見や、感情や、又違つた國々の人々の渦卷く中で、箇人的の利害の追及にのみ夢中になつてゐるこの第八の最大の黨派は、非常に事態の複雜と混亂とを增した。如何なる問題が起つても、この怠け蜂の群は、その時まで未だ直ぐ前の問題の上を呻り廻つて居たのが、忽ち新しい方へと飛んできて、そのガヤ〳〵といふ聲で眞面目な論者の聲を溺らしたり、亂したりしするのであつた。

アンドレー公爵が軍隊に達した時分には、又別の——第九の黨派——がその餘の者の中から出來上りかけて、丁度勢力を得つゝあつた。それは相當に年もとり、政治上の經驗もある、物の分つた人々から成り立つてゐた、彼等は、かの樣々の相爭つてゐる意見のどれにも加はらず、そして大本營で行はれる一切のことを概觀することが出來、且つ漠然としたものや、不確かなものや、混亂したものや、纖弱なものから逃れる手段を講ずることも出來た。

この黨派の連中は、何は兎もあれ最も惡いのは先づ皇帝が、その軍國の宮廷を率ゐて軍隊へ來て居るといふこと、それは關係の不定な、條件的な、且つ動搖する不確かなことを軍中に持ち込んで來る、之れは宮中では差し支へないが、軍隊にあつては有害であると云ふこと、皇帝の職分は國を治めるにある、軍を率ゐべきものではないといふこと、この位置を逃れる唯一の方法は、皇帝及びその宮廷が軍隊を去るにあること、たゞ皇帝が來て居るといふだけで、彼の身を護衞する爲めに留めて置かねばならぬ五萬人の兵を痲痺させて了ふこと、最も惡い總指揮官でも、獨立に行動するのであつたら、皇帝の親臨や權威にその手を束縛されてゐる最良の總指揮官よりもズツと好いといふこと、などを思ひもし、又言ひもした。

アンドレー公爵が別に何もしないで、ドリツサに止まつてゐた間に、この最後の集團の主要な代表者の一人である國務大臣シシュコフが皇帝に手紙を書いた、それにはバラショフとアラクチエーフと

が、署名をすることを承諾した。この手紙で、彼は一般の問題に關する自分の意見の呈出を皇帝が彼に許されたのを幸ひに、謹んで皇帝にその軍を去ることを建言した、さうするに就ての口實としては首府の一般人民の感情を鼓舞するために、皇帝の在都が絶對に必要であると說いた。

人民に訴へ、祖國防禦のために彼等を奮起させることが、皇帝の急務として建議された、そして軍隊を去るのに充分な理由として取り上げられた。その訴へに續いて起つた愛國心の勃發は（もつともそれは皇帝のモスクワ訪問があづかつて多大の力があつたと云はるべきものもあるが）其後のロシアの大勝利の主なる原因となつた。

十

この手紙が未だ皇帝に渡されなかつた時のことである、或日食事の折りに、バアクレイは、バルコンスキイに陛下は特に優渥なる思召しを以て親しくアンドレー公爵に會ひ、トルコのことで二三御下問がなさり度いといふこと、で、その夕方の六時にベニグゼンの宿舍に出頭するが宜いといふことを告げた。

その日ナポーレオン方（かた）が新たに進軍したとの報告が皇帝の宿舍に達した、これはロシア軍にとつては

由々しき危險と思はれたものであつたが、直き後から虚報だといふことが分つた。それから、その朝聯隊長ミショオは、皇帝のお供をしてドリツサの防禦工事の巡回視察をした、そして、この防禦工事を施した陣地は、プフウルの理論に依つて造營せられたもので、これ迄は戰術上の chef d'oeuvre（傑作）と見なされ、必らずナポーレオンを全滅し得るものとされて居たが、——この陣地は馬鹿々々しい無意味な、ロシア軍の全滅を招くものであるといふことを、皇帝に確信させやうとした。

アンドレー公爵は、ベニグゼンの宿舍なる、川の直ぐ岸の上にある小さな領主館に到着した。ベニグゼンも、皇帝もそこに居なかつた、けれど侍從武官チエルニシエフがバルコンスキイを迎へて、皇帝は、ベニグゼン將軍、パウルツチ侯爵と共にドリツサ陣營の、防禦工事の、その日二度目の視察をしに出かけたと告げた、果して夫れが役に立つか否かひどく彼等の氣になり出したのだと云ふのである。

チエルニシエフは、フランスの小說を手にして、外の室の窓に腰をかけて居た。この室は、多分前には大廣間に使はれて居たことがあつたらしく、そこには今でも、オルガンがあり、その上には何か毛氈の類が積んであつた、そして室の一隅には、ベニグゼンの副官の折り疊みの出來る寢臺があつた。その寢臺の持主も亦そこにゐた。仕事か、それとも宴會にでも疲れたらしく、その男はその疊み寢臺の上で假睡（うたゝね）をしてゐた。二つの扉が外の室に通じてゐた、一つの、正面の方のは客間へと開き、もう

一つの、右手の方のは書齋へと開いてゐた。始めの扉口からはドイツ語と、そして時々フランス語を話す聲が聞えてきた。客間では、皇帝の希望に依つて、軍事會議ではなく——皇帝は何に依らず漠然としたことが好きであつた——彼が、現在のこの難局に當つて、その意見を聞き度いと思ふ、數人の人々の會議が開かれる筈であつた。それは軍事會議ではなく、たゞ親しく皇帝の爲めに、或る數個の問題を說明する爲めの會議のやうなものであつた。この半會議のやうなものには、スウェーデンの將軍アルムフエルト、參謀の將軍ウオルツオーゲン、ウインツエンゲローデ（この人のことをナポーレオンは亡命したフランスの臣民と呼んだ）、ミショウ、トオル、スタイン伯爵——この人は全く武官ではなかつた——それから最後に、アンドレーの聞くところによると凡てのものゝ la cheville ouvrière（ラ、シュヴィユウヴリエール）（轅の根締）と呼ばれてゐる、プフウルが出席を命ぜられてゐた。アンドレー公爵は、プフウルが、彼が來ると間もなくやつて來て、客間の方へ這入る前にチエルニシエフに二言三言言はうとして一寸立止つた時、彼をよく見る機會を得た。

初めてチラと見た時に、その仕立の惡いロシアの將官の制服を着た所が、少しも身體（からだ）に似合はないで、丁度何か假裝會の裝束でも着けてゐるやうに見えるプフウルが、之れまで一度も見たことはなかつたけれど、アンドレー公爵には、何だか馴染のある人のやうに思はれた。彼は、アンドレー公爵が一八〇八年の戰爭の時に見たワイエロオテルとか、マックとかシュミツトとか、その他多くの、理論

家のドイツの將軍など丶同型の人であつた。併し彼は、彼等の誰よりも、その種類の中の最も完全な
る典型であつた。それ等の他のドイツ人の凡ての特徴を殘らず自分の身に結合してゐる此樣な典型的
なドイツの理論家を、アンドレー公爵は之れまで一度も見たことがなかつた。

プフウルは、背の低い、甚く痩せてはゐたが、骨太の、無骨な頑丈造りの、腰の大きな、肩胛骨の
突き出た男であつた。顏は、皺くちやであつた、眼は、深く凹んでゐた、髮は、前の方は急いで刷毛
をかけたらしかつたが、後は奇妙な房になつて附着いてゐた。神經質に苛々と四邊を見廻しながら、
彼は、自分の這入つた大きな室の中にあるものを一々恐れてゞもゐるやうに歩み入つた。不恰好な樣子
をして、劍を持ちながら、彼はチエルニシエフの方を向いて皇帝は何處に居るかと尋ねた。彼は確か
に、出來るだけ早くお辭儀や挨拶をすまし、部屋を通りぬけ、そして地圖の前に座つて——そこで彼
は初めて落ち着きを感じるのである——仕事に取りかゝりたいと思つてゐるらしかつた。

彼は、チエルニシエフの言葉に答へて急がしさうに頷いた、そして皇帝が、彼プフウルが、彼自身
の理論に從つて計畫した防禦工事を視察に行つたと聞くと、皮肉に微笑した。彼は、ぶり〳〵した低
音で何やら呟いた、さうした調子で高慢なドイツ人はよく、かう言ふのである、『Dummkopf-zum
Crunde die ganze Geschichte—'s wird was qescheites draus werden.（馬鹿奴が！——何も彼
も臺なしにしやがる——碌でもない事になるに定つてる。）』

アンドレー公爵には、彼の言葉は聞き取れなかつた、で、そのまゝに通り過ぎて了はうとした、所が
チエルニシエフは、戰爭が非常にうまく局を結んだトルコから歸つて來たばかりの人だと言つて、彼
をプフウルに紹介した、プフウルは、アンドレー公爵ではなく、その向ふをちよつと眺めた切りで、
笑ひながら、かう評した、『Da muss ein schöner tactischer krieg gewesen Sein（それは最も立派
な戰略的の戰爭だつたに違ひない）』さう言つて、侮蔑したやうに笑ひながら、彼は幾つもの聲の聞え
て來る室へと、這入つて行つた。

始終苛々してゐて、皮肉な口ばかり利きたがるプフウルは、この日人々が彼を伴はないで彼の陣地
を視察し、又それを批評するやうなことを敢へてしたので殊に中ツ腹になつてゐるらしかつた。アウ
ステルリツツの經驗のお蔭で、アンドレー公爵はこの一度の一寸とした會見から彼の性格に就いて明
確な觀念を造ることが出來た。プフウルは、始末にいけない、何所までも、無暗に自惚れの强い人間
の一人であつた、かうした自惚れの强い人間はドイツ人に限るものであるが、夫れは、要するに抽象
的な思想——科學、言ひ換へれば絶對眞理に關する誤つた智識——をもつてゐると思つてゐるのは、
獨りドイツ人ばかりであるからに他ならない。

フランス人は自分自身を、精神的にも肉體的にも、男でも女でも、やたらに魅することが出來るもの
と想像して自惚れてゐる。イギリス人は、世界中で最も宜い制度をもつた國の市民であると言ひ、又彼

は、一イギリス人として、如何なることをするのが最も正しいことであるかを常に知つて居り、そして一イギリス人として、彼のなすことは悉く、言ふ迄もなく、最も正しいことであることを知つて居るといふので、自惚れてゐる。イタリー人は、直ぐに興奮して了ひ、容易く自他を忘れて了ふことを自惚れてゐる。ロシア人は、何でも十分にそれを知り得るとは信じないから、何も知らないし、又知らうとも思はないといふ、正しく其點で自惚れてゐる。自惚れたドイツ人が、その中で一番惡い、その中で一番頑固だ、その中で一番いけ好かない、何故ならば彼は彼自身發明の科學の眞理——それは彼にとつて絶對の眞理なのだ——を持つて居るからである。

プフウル明らかに、さういふ人々の一人であつた。彼は、フレデリツク大王の戰爭から演繹した一つの科學——斜進攻撃の原理——を持つてゐた、そして彼が、夫れよりも、もつと近代の戰史に於て見たものは悉く、彼にとつては愚劣で、全然戰爭とは言へない程多くの失策が双方に行はれてゐる不態な爭鬪と思はれた。さういふ戰は彼の理論の中には一つも存在しなかつた、そして全然科學の主題となり得ないものであつた。

一八〇六年には、プフウルはイエナ及びアウエルスタツトで終つた戰爭の策略に對して責任のある人々の一人であつた。所が、その戰爭の失敗のうちに、彼は自分の理論の弱點の證據をば少しも認めなかつた。それどころか、彼の考へに依れば、その失敗の全部は、全く彼の理論に背いたことに歸せらるべきであつた、そして彼獨特の人を馬鹿にしたやうな、皮肉な調子で、かう言ひ言ひした。『Ich sagte ja dass die ganze Geschite zum Teufel gehen werde.(だから私は初めから萬事が無茶苦茶なことになつて了ふと言つてたのだ。)』

プフウルは、理論を愛する餘り、その理論の目的——それを實行に適用すること——をさへ見失つて了ふといふやうな、さういふ理論家の一人であつた。その理論に對する彼の愛は、彼をして凡ての實際的な考量を憎ましめるに至らせた、で、彼はさういふことを聞き入れなかつた。彼は絶對に失敗を喜んだ、といふのは失敗は、抽象的な理論の純正から離れて幾らか實際に踏み入つた結果であるから、愈々彼の理論の適確なことを確信させるからであつた。

彼は、現在の戰爭に就いてアンドレー公爵や、チエルニシエフに一言二言話した、その樣子は、如何にも一切の事がいけなくなつてしまふことを前もつて知つて居ながら、而もさうなることを餘り厭がつては居ない人のやうであつた。彼の頭の後部から眞直に突つ立つて居る梳きもしてない髮の塊や又前の方の急がしく刷毛をあてた髮の毛が、一種獨特の雄辯を以て、それとなくさう云ふことを語つてゐるやうに思はれた。

彼は次の室へと行つた、と、直ぐに彼の喧嘩のやうな低音の調子がそこから聞こえた。

十一

アンドレー公爵がプフウルの後影を見送り了るか了らないうちに、ベニグゼン伯爵が慌しく室内に這入つて來た、そしてバルコンスキイに輕く叩頭しながら、自分の副官に何やら命令をして、そのままズツと書齋へ通つて行つた、その後から皇帝が來ることになつてゐた、で、ベニグゼンは急いで何か用意をして、直ぐにも皇帝を迎へることが出來るやうにしてゐた。

チエルニシエフとアンドレー公爵とは、玄關の方へ出て行つた。皇帝は、疲れた樣子で、馬を下りる所であつた。パウルツチ侯爵が何やら彼に言つてゐた。頭を左へ向けて皇帝は、持前の熱した風で何か言つてゐるパウルツチの言葉を不機嫌さうな顏付きをして聞いてゐた、皇帝は、その話を終ひにしたいらしい樣子で、歩き出した、が、イタリー人は、顏をほてらせ、興奮して、禮儀も忘れて、尙ほ話しながら、皇帝に從いて行つた。

『ドリツサの陣營を勸めた男の如きは、』と、パウルツチは、丁度皇帝が、階段を上りながらアンドレー公爵に氣がついて、その見馴れない顏をぢつと見て居た時に言つた。『Quant á celui, Sire, (彼の如きは陛下、)』と、パウルツチは自分と自分を制し兼ねるやうに、自暴(やけ)に言ひ張つた、Je ne vois pas

d'autre alternative que la maison jaune ou le gibet. (私は顚狂院か絞首臺かの外には何處へもやる所がないと思ひます。)』

イタリー人には構ひなく、その言葉を聞いてもゐない樣子で、皇帝はバルコンスキイが誰れであるか分つたので、懇ろに彼に話しかけた。

『よく來てくれた。みんなの集つて居る所へ行つて、私を待つてゐてくれ給へ。』

皇帝は、書齋へと通つて行つた。その後から公爵ピオトル・ミハロヰツチ・ワルコンスキイと男爵スタインとが從いて行つた、そして彼等が這入ると書齋の扉か閉つた。アンドレー公爵は、さうしろといふ皇帝の許しにあまえて、パウルツチ——この人とは彼はトルコで會つたことがある——と一緒に應接室へ這入つて行つた、そこには既に會議に列する人々が集つてゐた。

公爵ピヨオトル・ミハロヰツチ・ワルコンスキイは、皇帝の幕僚の假の長といつたやうな役をしてゐた。ワルコンスキイは書齋から出てきた、そして幾枚かの地圖を持つて來て、それを卓の上に置いて、列席してゐる人々の意見を聞き度いと思ふ幾つかの問題をあげた。重大な事實は、ドリツサの陣營を包圍する目的を以てフランス軍が行軍してゐるとの報知が(それは後に嘘だと分つたのだが)前の夜受取られたといふことであつた。

眞先きに口を切つたのは、アルムフエルト將軍であつた、彼は思ひがけなく、當面の難局を脫する

手段として全く新しい一策を見出した、が、夫れは彼もまた彼自身の意見を持てゐると云ふことを示し度がつてゐる證據だ、と云ふ以外に何とも解釋の仕樣のないものであつた。彼の考へは、軍をペテルブルグとモスクワとの間の、街道を離れた地點へ移し、そこで合して、敵を待つが宜いと云ふのであつた。この提言は、アルムフエルトに依つてズツと前から考へられて居たと云ふことも、又何の解決法もない當面の問題に應ずるものとしてよりは寧ろ自分の意見の價値を說明する機會を捉へやうといふ目的で呈出したのであると云ふことも明白であつた。それは、この戰爭が如何なる形式を取るか、誰れにも分らない限り、幾ら呈出されても、何れもこれも同じ程に道理のある無數の意見の中の一つであつた。列席して居る人々の中には、彼の意見を攻擊する者もあり、又夫れを辯護する者もあつた。若い聯隊長のトオルは、誰よりも一番熱烈にこのスウエーデンの將軍の提言を批難した。そして夫れに對して意見を述べて居るうちに側衣嚢から原稿を取り出し、それを朗讀する許しを乞ふた。この幾らか冗長な覺え書きの中でトオルは、アルムフエルトのとも、又プフウルのとも、全く違つた、別の戰爭に關する策略を提出した。

パウルツチは、トオルの書策に反對を唱へ、直ちに進軍し、且つ攻擊するといふ策略を提出し、それが我々の現下の危うい位置から、又今我々が懸かつて居る『係蹄』（彼は、ドリツサの陣地のことを、さう叫んだ）から、我々を救ひ出す唯一の手段であると言ひ放つた。

凡てかういふ論爭の間、プフウルと彼の通譯者ウオルツオーゲン（彼は宮廷の世界ではプフウルの代表者であつた）とは默てゐた、プフウルは、唯嘲けるやうに鼻を鳴らし、背中を向けて、今聞いて居るやうな馬鹿々々しいことに答へるやうな自分の身を卑しめることは決してしないといふ樣子を見せてゐた、ところが、その論爭の議長をしてゐたワルコンスキイ公爵が、彼に意見を提出することを要求すると、彼は唯、かう言つたゞけであつた。

『何うして私にお尋ねになるのです？　アルムフエルト將軍は敵に背後を曝すといふ立派な策を獻じて居られる。それでいけないのなら、何故このイタリーの紳士の意見に從つて攻擊しないのです？ Sehr schön!（實に面白い考へだ！）それとも退却しますかな？ auch gut!（それも結構！）何故私などに尋ねるのです？』と、彼は言つた。『諸君は皆私よりはよく御存知のやうではありませんか？』

が、ワルコンスキイは、顏を顰めた、自分がプフウルの意見を訊いたのは皇帝の名に於てしたのだと言つた、するとプフウルは立ち上り、急に興奮して語り出した。

『諸君がそれを悉く混亂させ、又臺なしにして了つたのです。諸君は私よりは何も彼もよく了解んで居るやうな顏をして置きながら、今になつて私に何うしたら事態を正しくすることが出來るかと尋ねに來てゐる。正しくしなくてはならんことは一つもないのだ。たゞ私が立てた策略を極めて精確に實行して行けばいゝのです。』と、彼は言つて、その骨張つた指で卓を叩いた。『困難は何處にあるので

す？　馬鹿なことだ。Kinderspiel(子供の遊びだ！)』彼は地圖の傍へ行き、皺くちやの指で、地圖の上を指しながら、如何なる不慮のことが起つたところで、此總ゆる事態に應じ得るドウリツサの陣地の間然する所なき要害を何うともすることは出來ないこと、又あらゆる場合がもう見越しがついて居ること、それに若し敵が實際すでにドリツサを包圍して居るのだとすれば、敵は必らず全滅を免れ得ないことを非常に早口に證明し始めた。

パウルツチは、ドイツ語を知らなかつたので、フランス語で彼に質問を始めた。ウオルツオーゲンは、フランス語の至つて拙い自分の親分を助けて、その言葉を通譯し出したが、殆んどプフウルについて行くことが出來なかつた。プフウルは、既に起つた事のみならず、起り得るだらうと思はれる事まで、一切の事に對する防備が彼の策略の中に設けられて居ることや、若し何か今難局が生じたとすれば、それは單にその策略を飽くまで精確に實行することを過つたからだといふことを盛んに證明し續けてゐた。彼は、絶えず皮肉な笑ひ聲を出しながら、證明を進めてゐたが遂々侮蔑したやうに、自分の位置を表明しようとすることをスツカリ止して了つた、それは丁度數學家が、一度解說の正しいことを證明した問題を、色々の違つた方法で證明するのを厭がるのと同じであつた。ウオルツオーゲンは、彼に代つて、彼の意見をフランス語で說明しつゞけながら、時々 Nicht wahr, Excellenz？(ではありませんか、閣下？)』と、プフウルに話を持つて來た。けれどプフウルは、喧嘩に上氣せて了つた人

が自分の味方を毆ることがあるやうに、自分の子分——ウオルツオーゲン——に對しても腹立たしげに叫んだ。

『Nun ja！ was soll denn da noch explizieren werden!(當り前だ！分り切つたことぢやないか！)』

パウルツチと、ミショオとが同時にフランス語でウオルツオーゲンにかゝつて行つた。アルムフエルトは、ドイツ語でプフウルに話しかけた。トオルはロシア語でワルコンスキイ公爵へ通辨をしてゐた。アンドレー公爵は默つて、みんなの話を聞き、みんなの樣子を見てゐた。

凡てこれ等の人々の中で、唯一人アンドレー公爵が最も同情を覺えたのは、この激昂してゐる、斷乎とした氣狂ひ染みて高慢なプフウルであつた。彼だけが唯一人、この列席して居る總ての人々の中で、確に自己の爲めには何の求むる所もなく、他人に對しては何等箇人的の怨恨をも持つて居ないのであつた。彼は唯一つ、その幾年の努力の結晶なる理論から割り出した策略の、採用せられんことを望んでゐた。彼の樣子は滑稽であつた。彼の皮肉な所は不快であつたが、夫れでも、一つの考へに對する無限の信念あるが爲めに、人をして不知不識尊敬の念を起させた。

この他には、プフウルだけは例外であるが。列席してゐる皆の言葉に殘らず、アンドレー公爵が一八〇五年の戰略會議には見なかつたやうな、一つの共通した特色があつた——それは、ナポーレオンの天才に對する恐慌的な恐怖であつた。それを隱さうとして一生懸命に努力して居たけれど、その恐

怖は暗々のうちに誰の物の言ひ振りにも現はれるのであつた。どんな事でもナポーレオンには出來るものと假定されてゐた、彼は一度に四方八方から出て來兼ねないやうにさへ思はれてゐた、で、ナポーレオンといふ恐ろしい名を口にしてたゞけでも、彼等にとつては相互の提言を非難するに充分であつた、プフウルだけは獨りナポーレオンをさへも自分の理論に反する他の多くの人々と同じく野蠻人と見做して居るやうであつた、で、プフウルは、アンドレー公爵の心の中に、尊敬の念と共に、憐憫の情をも起させるのであつた。宮中官たちが彼に話しかけた調子から察しても、パウルツチが皇帝に思ひ切つて言つた事から見ても、又特に、プフウルその人の或る絶望的な様子から推しても、彼の沒落の近いことは人も知つてゐるし、彼自身も感じてゐたのは明らかであつた。で、凡ての彼の自惚や、ドイツ語の意地の悪い皮肉にも拘らず、額に平たく髪を撫でつけ、頭の後方に梳かない髪の房を突つ立たせたところは、如何にも憐れであつた。彼は、怒りと嘲りとの假面の下に隱さうとしては居たけれど、大規模に自分の理論を試し、そして、全世界に對してその間違ひなきことを證明する、之れつきりの唯一の機會が今自分の手から滑り抜けて行くのだと思つて、見るからに絶望してゐた。

論爭は長い間つゞいた、それが長く續けば續く程段々と熱してきて、果ては喧騒や個人攻撃となり、そして、その議論から、概括的結論など引き出すことは愈々出來なくなつた。アンドレー公爵は、その混亂した様々の國語や、提言や、策略や、叫び聲や、反對論などを聞いて居ると、みんなの言つて

居る事が偏へに不思議に思はれた。彼が軍務に服して居た間に、ずつと前からその心に起り、又その後も屢々起つた考へ——軍學などゝいふものは在るものでなく、又在り得ないものである、從つて軍事上の天才などといふものは有り得るものではないといふ考へ——が、今は絶對に明らかな眞理であるやうに思はれた。

『一體狀態や事情が不確かで、はつきりと知られて居もしなければ、それよりも更らに夫れに携はつて居る兵力が確と計られもしない事柄に、何の理論や科學が有り得やう?誰だつて、次の二十四時間內に於ける味方と敵との相互の位置を知り得るものでもなければ、又知らうと思つたつて恐らく知り得るものはないであらう、又誰だつて、この若しくは、あの分隊の力が計られるものではない。時には戰線に『遮斷された!』と叫んで、逃げ出すやうな臆病者は一人も居ないで、勇敢な、元氣な奴が『萬歳!』と叫びながら、眞先きに立つて進んで行くやうな場合には、シエーングラアベンに於けるが如く、五千の分隊が三萬にも匹敵するが、時とするとアウステルリツツに於けるが如く五萬が八千に追ひまくられることもある。あらゆる實際上の事件に於けるが如く、如何なるものも定義することは出來ず、又一切のものは無數の條件の上に立ち、その條件の影響は刹那に現はれ、而かも何時その刹那が來るかは誰も知り得ないのに、何うして兵學なるものがあり得やう?』アルムフエルトは、わが軍は遮斷されたと言ふかと思ふと、パウルツチは、我が軍こそフランス軍を二つの砲火の間に狹撃し

たと主張する。ミショオは、ドリツサの陣地の缺點はその背後に川があるからだと斷言してゐるのに、ペフウルは、それこそ强味を與へるものだと駁論する。トオルが一つの策を獻ずると、アルムフエルトが又別のものを提出する、何れも之れも皆善いと共に何れも之れも皆惡い。從つて何んな建築でも、その適不適は、それを試みる刹那にならなければ分らないのである。それだのに何故彼等は皆軍事上の天才などゝ云ふことを語るのか？何時乾麵麭を渡すべきか、とか、何時その軍を右へ、何時左へ進めすべきか、とか云ふことを知つて居るといふだけで、人は天才と呼ばれ得べきものか？彼はたゞ、軍人の身につけられる榮譽や、權威やがあるが故に、又阿諛者共の群が常に其權力に詔びたがつて、彼には何の關係もない資質をくつゝけるが故に、天才と呼ばれるに過ぎないのである。それに反して、自分がこれまでに知つてゐる最も立派な將軍は何れも馬鹿か、若しくは呆乎した男である。その中で一番立派なのはバグラチオンだ——ナポーレオンさへもそれを認めてゐる。なら、ボナパルトその人は何うか！　私は、アウステルリツツの戰場に於ける彼の魯鈍な心の狹さうな顏を覺えてゐる。立派な將軍には天才の必要もなければ、又何等偉大なる資質の必要もない、それどころか、人間の資質の中の最も美しいもの、長も高尙なもの——愛とか、詩とか、優しさとか、哲學的及び研究的疑惑などは——はない方がよいのである。彼は心が狹くて、自分のして居ることは最も重大なことであると固く信じてゐなければならない（さもないと終局まで辛抱しきれないのだ）、それで初めて彼は、勇敢な

將軍となり得るのである。人情深かつたり、愛や憐憫を感じたり、正、不正を考へて躊躇したりしてはいけないのだ。彼等は權力の代表者であると云ふ單純な理由だけで彼等の天才の理論か、長い、長い以前から念入りに造り上げられてゐたのは、充分了解し得られることである。戰爭に於ける成功の名譽は當然彼等のものではない、何故ならば勝敗は、實際最初『萬歲？』とか、『失敗つた！』とか叫ぶ列中の兵卒の雙肩にあるからである。そして自分は役に立つて居るのだと言ふ充分な確信を以て働き得るのは獨り隊列中にある者のみである。』

アンドレー公爵は、自分の周圍に起る議論を聞きながら、此樣なことを考へてゐた、パウルツチが彼を呼んだ時やつと其瞑想から覺めた。集會は散じるところであつた。

次の日閱兵の時皇帝は、何處に勤め度いかとアンドレー公爵に尋ねた、で、アンドレー公爵は皇帝の身邊に侍することをば乞はず、戰線に送られんことを願つたので、彼は、宮廷の世界に這入る機會を永久に失つて了つた。

十二

戰爭の始まる前にラストフは、兩親から手紙を受け取つた、それには簡單にナターシヤの病氣のこ

とや、彼女の婚約の破談になつたことなどが知らせてあり、彼には軍隊を退いて家へ歸るやうに、又も賴んであつた。兩親のいふ所に依れば、ナターシャはその婚約を自分の方から望んで破談したとのことであつた。この手紙を受け取つてもニコライは、軍隊を退かうとも又賜暇を願はうともしなかつた、が、兩親に對してはナターシャの病氣や、その許嫁者と別れたことやを、非常に悲んで居ること、兩親の望みに從ふ爲めには出來るだけのことをして見ると云ふことなどを書いて遣つた。ソーニヤへは別に手紙を書いた。

『吾が敬慕する心の友よ、』と、彼は書いた、『自分の面目を保つと云ふこと以外に私が歸宅するのを引き止め得るものは何にもありません。けれど今、この戰役の初めに當つて、若し私が國家に對する義務と愛とを後にして、私一箇の幸福を重しとするならば、戰友の眼にも亦僕自身の眼にも、私は不面目なものと感じないわけには行かぬでせう、ですが之れ限りで今後はもう決して僕等は別れないことにしませう。戰後、若し僕が生きて居り、そして、矢張りあなたが愛してゐて下さるやうだつたら、僕は一切のことを打ち捨てゝあなたの許へ馳せ歸へり、燃ゆる胸へ永久にあなたを掻き抱きます、私の言ふことを信じて下さい。』

實際、たゞこの戰爭が起つたばかりでラストフは引き止められ、約束通りに歸宅して、ソーニヤと

結婚することが出來なかつた。獵をしたオトラドノエの秋や、降誕祭（クリスマス）やソーニアと戀をした冬が、彼の想像の前へ之れ迄知らなかつた平和な、物靜かな田舍の喜ばしい光景を展開した、そして今はこの希望が彼を故鄕へ誘惑した。

『可愛らしい妻、子供、良い獵犬の群、敏捷なハリアア（兎獵に使ふ獵犬の一種）の十繋ぎか十二繋ぎ、管理すべき領地、隣人たち、それから、恐らく、地方の貴族たちに色々の役目に選擧されること、』などを彼は考へ込んだ。けれど今は戰爭が始まるところであつた、で、彼は聯隊に留つてゐなければならなかつた。そして然（さう）あるべきであつたからニコライ、ラストフは、彼の特性（もちまへ）として聯隊の生活にも滿足すれば、その生活を愉快なものにすることも出來た。

賜暇から歸ると、ニコライは戰友達に喜んで歡迎され、そして補充馬匹の徵發に遣られた。彼は首尾よく小ロシアから一等の馬を數頭連れて歸つたので、自分もそれを滿足に思ひ、又上官たちからも賞讚された。留守のうちに彼は大尉に進められてゐた。更らに前からの騎兵中隊の長を命ぜられた。

戰爭が始まつた、給料は平時の二倍になつた、聯隊は新將校、新兵、新馬に增援されて、ボーランドへと進んで行つた。一般に戰爭の初めにある、熱心な氣が軍中に充ち渡つてゐた、そしてラストフは、聯隊に於ける自分の昇進した地位を充分自覺してゐて、遲かれ早かれそこを去らなくてはならぬこと

は知つて居たけれども、軍隊の快樂や利害やに全心を打ち込んでゐた。

軍隊は國家、政策、軍略と云ふやうな色々複雑した理由からウイルナを退却しなければならなかつた。その退却の一歩毎に、大本營に於ける利害、論爭、感情など複雑な動きが伴つてゐた。けれどもパヴラグラード聯隊の驃騎兵にとつては夏の最好季節に於ける糧食の供給十分なる此進軍は至極造作のない、快い仕事であつた。元氣の沮喪や、不安や又陰謀など云ふことは、唯大本營にだけはあつたかも知れないが、軍隊の列伍の人々は何處へ、何の爲めに自分たちが進むのか怪しみさへもしなかつた。若し彼等が退却を殘念に思つたとすれば、それは唯彼等が住み馴れた營舍とか美しいポーランドの女主人(おかみさん)とかに別れなければならなかつたからであつた。形勢が面白くないといふ考へが誰れかに起つても、その人は善良な軍人がすべきやうに、わざと愉快さうな顏をし、一番手近な義務のことばかりを考へて、戰爭の全般的經過をば考へないやうにするのであつた。

最初は彼等は非常に愉快にウイルナの近くに駐屯してゐた、そこで彼等は近所のポーランドの紳士連と懇意にもなれば、閱兵式の準備をして、皇帝や、その他の高級の司令官たちの檢閱を受けた。それからスウエンツヤニイに退却し、そして持ち運びの出來ない軍需品は悉く破壞せよといふ命令がきた。スウエンツヤニイは、他ではないが、全軍からその陣營に與へられた名の「泥醉(よひどれ)陣營」として、又軍需品を徵發しろとの命令につけこみ、軍需品の名目の下にポーランドの地主たちから馬や、車や、

敷物などを奪掠した爲めに、軍隊に對する多くの不平の生じた場所として、驃騎兵にとつては忘れられない所であつた。

ラストフもスウエンチヤニイを記憶してゐた。と云ふのは、丁度そこへ着いた日に彼は給養係を罷めたので、自分の知らぬ間に五樽の強い古麥酒を奪つて來て、悉く食らひ醉つてゐた彼の中隊の兵を何うしていゝやら解らなかつたからである。

スウエンチヤニイから彼等は更に退却した、それから又先へ退いて、ドリツサまで來て了つた。そしてドリツサからも又退いて、ロシア本國の國境近くへ來て了つた。

七月の十三日にバヴラグラードの驃騎兵は初めての激しい戰鬪に參加した。

その前夜には、激しい雨と霰との嵐があつた。一千八百十二年の夏は、始終ひどい荒れつゞきであつた。

バヴラグラードの二個中隊がライ麥の畑の眞中で野營をしてゐた、それには、もう穗がついてゐたが、牛や馬の爲めに全く踏みにぢられてゐた。雨が瀑のやうに落ちてゐた、ラストフは自分の配下の、若い將校、イリインと一緒に彼等の爲めに急いでこしらへられた、假小屋の中に座つてゐた。頰から垂れ下る長い髭で飾られた彼等の聯隊の士官が司令部へ行つた歸り途に雨に逢つて、ラストフの假小屋へ雨宿りに這入つた。

『私は司令部からの歸りです、伯爵。あなたはラエフスキイの勳功のことをお聞きになりましたか?』

そして、その士官は彼等に、司令部で聞いてきた、サルタノフの戰爭の詳報を語り始めた。

ラストフは、パイプを燻らして、水の滴り落ちるその首を振つてゐた。彼はその傍に蹲んでゐた若い將校のイリインを始終見ながら、その話をば殆んど興味を持たずに聞いてゐた。十六歳の少年イリインは、近頃聯隊に這入つて來たばかりであつたが、丁度ニコライが七年前にヂェニソフに對して持つて居たのと同じ地位を、今ニコライに對して持つてゐた。イリインは何彼につけてラストフを眞似、娘でもしさうな風に彼を敬愛してゐた。

二重髭の將校ズドルヂンスキイは、サルタノフの堤防をロシアのサアモピリーとし、その堤防に於ける將軍ラエフスキイの勇敢な働きを古英雄に恥ぢざるものとして頗る大げさな樣子をして話した。ズドルヂンスキイは、それからラエフスキイが恐ろしい砲火の下にあるその堤の上に自分の二人の子を押し進め、自分もそれと並んで突擊した樣子を話した。

ラストフはその話を聞いてゐたが、ズドルヂンスキイの熱心に對して何一つ同情するやうなことは言はなかつた、誠に彼は話されて居る事柄を恥ぢてゐるかのやうな風であつた、が、それを否認しやうとはしなかつた。

アウステルリツツ及び一千八百七年の戰役後、ラストフは自分自身の經驗から、人は常に戰爭の勳功談をする時には、嘘を吐くものだと云ふことを知つてゐた、實際彼自身もさうであつた。彼は又戰爭中の事件は我々の想像や、その記錄などゝは全く違つたものだと云ふことを知るだけの充分の經驗を持つてゐた。そんなわけで彼はズドルヂンスキイの話を好まなかつたし、又實際見るからいやな髭ばかりか、話しかける對手の顏へのしかゝるやうにする癖のあるズドルヂンスキイを好まなかつた。彼は、彼等の狹い小さな假小屋の中では場所ふさげであつた。

ラストフは何も言はずに彼を眺めた。『第一、彼等が進擊した堤防の上は非常に混雜して居たに違ひない、よしラエフスキイがその子供たちを押し進めたとしても、それは彼の周圍に居合はせた十二人の人々に對しての他は、何の効果もなかつたらう。又それを見た者だつても大に感でラエフスキイの傍に誰がゐたのか、見ることさへ出來なかつたらう!』と、ラストフは思つた、『その餘の者共は堤防の上動させられたとは思へない。何故ならば彼は銘々自分等自身の生命を助けることを考へなければならない場合なのだから、ラエフスキイのやさしい、親らしい感情などを何とか思つて居る暇が何うしてあるものか?それに國の運命はその堤を取るか取らぬかで決るのではない。ギリシアの運命がサアモピリーにかゝつて居たといふのとは全く異ふ。それでは、さういふ犧牲の目的は何か?何故戰爭中は自分の子供が禍ひになるのか。私は自分の兄弟のペエチイヤを危險な場所に置かうとは思はない。否私にとつては唯善良な少年と云ふに過ぎない、此所にゐるこのイリインでさへも、出來るだけ安全にかばはう

と盡力する積りだ、』と、ラストフは、ズドルヂンスキイの話を聞きながら、默つて考へ込んでゐた。併し彼は、その考へを口へは出さなかつた、彼は、このことに就いても又經驗があつた。この話は我が軍の名譽になるのだ、從つて苟初にもそれの眞僞を疑ふやうな樣子をしてはならないと云ふことを知つてゐたのである、で、彼はその通りに振舞つた。

『もう、とても、辛抱が出來ない、』と、イリインは、ラストフがズドルヂンスキイの話を何とも思つて居ないのを見て言つた。『靴下も、襯衣も、何も彼も、ずぶ濡れだ。何所かもつと宜い雨宿りを見つけて來やう。雨もさうひどくはなささうですよ。』イリインは駈け出した。そしてズドルヂンスキイも馬に乘つて行つて了つた。

五分程經つとイリインは泥濘の中をぴちやぐ〳〵歩きながら假小屋へ歸つてきた。

『萬歲！　ラストフ、急いでお出でなさい、僕はこゝから二百歩程の所に宿屋を見付けました、もうみんなが大勢其所にゐます。兎に角身體が乾せますから、それにマリヤ・ヘンドリホウナも居ますよ。』

マリヤ・ヘンドリホウナは、聯隊附きの軍醫の妻であつた。小綺麗な、若いドイツ女で、良人とはポーランドで結婚したのであつた。金がなかつた爲めか、それとも結婚後間もないのに若い妻と別れるのが辛かつた爲めか、軍醫は彼女を連れて聯隊へ來た。そして彼の嫉妬ぶかいことは輕騎兵たちの揶揄ひの好い種になつてゐた。

ラストフは肩に外套を引つ掛け、後から彼等の所有品を持つて來いとラブリューシカに叫んで泥濘に滑り、ピショ〳〵降る雨と時々遠くの電光に裂かれる暗闇の中を、水溜をはねかへしながらイリインと一緒に出て行つた。

『ラストフ、何處に居るんです？』

『こゝだ。ひどい電光だな！』と、彼等は歩きながら互ひに聲を掛けた。

十三

旅舍の前には、軍醫の屋蓋のある馬車が立つてゐたが、內にはもう六人ばかりの士官がゐた。室內は、一番前の短上衣に夜帽を被つた、肥つた麻色の髮の、小さいドイツ女の、マリヤ・ヘンドリホウナは、一番前の隅にある廣い腰掛に座つてゐた良人の軍醫は、その後で眠つてゐた。ラストフとイリインとは、樂しさうな叫び聲や笑ひ聲に迎へられて室內へ這入つた。

『やあ、諸君仲々面白さうだね！』と、ラストフは笑ひながら言つた。

『君は何で大口を開いて居るんだ？』

『いゝ態だな！　まるで身體から灑を流してるやうだよ！　我々の客間を水にしてくれるなよ。』

『マリヤ・ヘンドリホウナの着物に水をはねかさないやうにしろよ。』と、多くの聲が調子を合はせて言つた。

ラストフとイリインとは、マリヤ・ヘンドリホウナの羞恥心を刺戟しないで濡れた着物を着更へることの出來相な物蔭を急いで探した。彼等は衝立の後へ行つたが その小さな隅にも三人の士官が居て、一ぱいにつまつてゐた。彼等は、座つて空箱の上の一本の蠟燭の光で骨牌をやつてゐた、そして何と言つてもその席を空けてくれさうもなかつた。マリヤ・ヘンドリホウナは掛幕の代りに掛けるやうにと言つて彼等に下袴を貸してくれた、その蔭で、ラストフとイリインとは、荷物を持つて來てくれたラヴリューシカに手傳はせて、濡れたものを脫ぎ、乾いた着物を着た。

彼等は破壞れた暖爐に火を起した。彼等は一枚の板を持つて來て、二つの鞍の上に渡し、それに馬衣をかぶせた、それから小さな湯沸と葡萄酒を一樽と、ラム酒を半壜持ち出した。みんなはマリヤ へンドリホウナの周圍に集つて、彼女に切り盛りをしてくれるやうに賴んだ。一人は、美しい手をお拭きなさいと、綺麗なハンカチーフを彼女にさし出し、最う一人は濡れた床の濕氣にさわらぬようにと言つて、その小さな足の下に外套を敷いた、第三の者は、彼女が風にあたらぬやうにと言つて、窓に肩掛けを掛けた、かと思ふと第四の者は、眼を覺まさぬやうにと言つて、彼女の良人の顏の蠅を拂つてやつた。

『うつちやつてお置きなさいましよ』、と、マリヤ・ヘンドリホウナは、おづ〳〵した嬉しさうな微笑を湛えて言つた、『徹夜をした後なんですから、何うして置いてもよく寢てゐるのですよ。』

『いや、そんなことはない。マリヤ・ヘンドリホウナ』、と、その士官が答へた、『ドクトルは大切にしなければなりませんよ！ 何んな事が起るかも分らんですからね、そこで私が先づ足なり腕なりを切つて貰はなければならない時には屹度深切にして下さいますからね。』

杯が三つしかなかつた、水はひどく濁つてゐた、茶が濃いか薄いかさへ分らない位るであつた、それに湯沸には六杯分の水しか這入らなかつた。が、マリヤ・ヘンドリホウナの肥つた、爪の短かい、餘り美しくもない指から、茶碗を古參順で受けることになつたので、それが又一層面白くなつてきた。士官は皆、實際、その晩はマリヤ・ヘンドリホウナに一樣に戀をして居るやうに見えた。衝立の後で骨牌をしてゐた士官たちまでが、直きに勝負を止めて湯沸の周圍に集まり、みんなと同じ氣分になつて、マリヤ・ヘンドリホウナの崇拜黨に加つて了つた。マリヤ・ヘンドリホウナ、は自分が斯ういふ立派な、そして自分に氣のある若い男たちに取り卷かれて居ることを思ふと、隱さうとしても隱し切れない喜びに輝いた、自分の後に眠つてゐる良人が身動きをする度に確にギヨツとしてはゐたけれど。匙がたつた一つしかなかつた。砂糖は澤山あつた、けれど皆ながそれ〳〵茶碗の中を掻き廻して了ふのには隨分長くかゝるのであつた、そこでマリヤ・ヘンドリホウナが順番に銘々の砂糖を掻き混ぜなけれ

ばならぬと定められた。ラストフは自分の茶碗をとつて、それにラム酒を入れ、マリヤ・ヘンドリホウナにそれを掻き混ぜてくれるやうに頼んだ。

『でも、あなたはそれをお砂糖なしに召し上るの?』と、彼女は自分のことも他のいふことも盡く、まるで違つた、ひどく面白い意味があるかのやうに、始終にこ〳〵しながら言つた。

『僕は砂糖なんか何うでも宜いんです、僕の望みと云ふのは、あなたの小さな手で掻き混ぜてもらふことなんです。』

マリヤ・ヘンドリホウナは、匙を探し始めた、それは誰かゞ何時の間にか取つて了つたのであつた。

『あなたの小さな指でやつて下さい、マリヤ・ヘンドリホウナ、』と、ラストフは言つた、『そしたら一層甘くなりませうから。』

『熱いわ、』と、マリヤ・ヘンドリホウナは、嬉しさに顏を赫らめて言つた。

イリインは、水の這入つた手桶を持つて來て、その中にラム酒を數滴たらしながら、マリヤ・ヘンドリホウナの所へ持つて行き、指でそれを掻き混ぜてくれと頼んだ。

『これが私の杯なんです、』と、彼は言つた。

『一寸この中にあなたの指を浸けて下さい、そしたら私はみんな飲んで了ひますから。』

湯沸が空になると、ラストフは骨牌を取りあげ、マリヤ・ヘンドリホウナとKoroli(王様)の勝負をしようと言ひ出した。彼等は骨牌を投げて、この婦人と組になる人を定めた。

ラストフは、『王様』になれた者はマリヤ・ヘンドリホウナの手に接吻する權利を得ることゝし、又Prokhvost(惡漢)として負け殘つた者は、軍醫が起きた時に、新しく茶を湯沸でこしらへなければならぬ、といふ勝負の規則にしやうと言ひ出した。

『うん、でも若しかマリヤ・ヘンドリホウナが王樣になつたらどうします?』と、イリインが尋ねた。

『彼女は最う我々の女王なんだ! 彼女の命令は法律だ。』

勝負が丁度始まりかけたばかりに、軍醫のモヂヤ〳〵頭がその妻の後へ現はれた。彼は少し前から眼を覺まして、その會話を聞いて居たのであつた。言はれたことも爲されたことも一つとして彼には、心持よくもなければ、可笑しくもなく、又面白くもなかつたらしい。その顏は如何にも元氣がなく疲れてゐるやうであつた、彼は、士官たちには挨拶もしなかつた、そして唯頭を掻いて通路を少し開けて通らしてくれと賴んだきりであつた。彼が室を出て行くと直ぐ、士官たちは一度にどつと高く笑ひくづれ、そしてマリヤ・ヘンドリホウナは涙が出る程顏を赤くした。それが彼女を士官たちの眼に一層美しく見せたのであつた。

庭の方から這入つて來て、軍醫はその妻に(妻はもう晴々した微笑みを失つて了ひ、後から來る文句を豫期してオヅ〳〵と良人の方を見た、)雨が止んだから自分等の蓋屋馬車の中で眠らう、でないと

自分たちの所有品をスツカリ盗まれるだらうから、と言つた。

『ぢや、私が従卒に番をさせませう……二人でも宜いですよ、ね……』と、ラストフは言つた。『それは馬鹿々々しいから、ね、ドクトル。』

『私が自分で番兵になりませう！』と、イリインが言つた。

『いや、皆さん、あなた方は充分お寢みになつたでせうが、私はこの二晩起きて居たんですから、』と、軍醫は言つた。そして妻の傍に陰氣な顏をして坐つて、勝負の終りを待つてゐた。

軍醫の陰氣な顏つきと、妻の方を見る斜視とを見て居ると、士官たちは益々陽氣になつて來て、彼等の多くは笑ひを抑へることが出來なくなり、その都度急いで何か尤もらしい口實を探した。軍醫が妻を連れて行つて二人で馬車の中に落付いて了ふと、士官たちも、めい〳〵の濡れた外套を引つ被つて、旅舍の中で横になつた。けれど長い間彼等は眼を覺ましてゐて、醫者の不安な樣子や、その妻の嬉しがつたことなどを思ひ出して、喋つたり、又はわざ〳〵階段の所まで駈けて行つてきて馬車の中の樣子を報告したりした。ラストフは幾度か頭をくるんで、眠て了はうとしたが、また何かの話がその眠を覺まし、また話が始まり、そして、また譯もない、賑やかな、子供らしい笑聲が響くのであつた。

十四

給養係が、オストロウナといふ小さな場所へ進むべき命令を齎らして、出て來たのは二時過ぎのことで、誰もまだ眠つてゐた。矢張り同じやうにお喋りをしたり、笑つたりしながら、士官たちは忙しく用意をし始めた、また湯沸が濁水で充たされた。が、ラストフは茶の出來るのも待たないで、自分の中隊へと出かけて行つた。

もう夜が明けてゐた、雨は止み、雲が切れるところであつた。着物が未だ濡れて居るので、殊に寒くもあり濕つぽくもあつた、宿屋を出ながら曉の薄明の中に、ラストフとイリインとは等しく未だ濡れたまゝで光つて居る、軍醫の馬車の柔皮の屋蓋に目をつけた。屋蓋の下からは軍醫の兩足が突き出て居り、そして馬車の中程にチラとその妻の夜帽が見え、寢息が聞えた。

『實際、あの女はずゐぶん綺麗だね、』と、ラストフはイリインに言つた。

『素敵な女ですね！』と、イリインは、十六の少年らしい生眞面目な樣子で、答へた。

半時間後には、中隊は路に整列した。『乘馬』の號令が聞えた、すると兵卒等は十字を切つて馬に飛び乘つた。ラストフは、彼等の先頭に馬を進めて、進めといふ號令をかけた、そして四列になつた、騎

騎兵は、ひそ〳〵した話聲や、水を潑ね返す蹄の音や、それからチヤラ〳〵と劍の音をさせながら出發した。彼等は先へ行つた歩兵や砲兵の後へついて、兩側に樺のある廣い公道を躍足で進んだ。

切れ切れの、紫がゝつた青い雲が、日の出とゝもに赤く輝き、風にのつて飛んでゐた。次第に明るくなつてきた。何時も路傍に生えて居る羽根のやうな草の、未だ雨できら〳〵光つて居るのが、はつきりと見えた。樺の木の枝垂れた枝々が風に搖れ、道を横切つて斜に、光る露を落した。兵卒共の顏がだん〳〵ハツキリと見えてきた。ラストフは、どうしても後に下ることを肯かない、イリインと共に、兩側に樺の木の並んで居る道の片側を、馬を進めた。

戰場では、ラストフは觀兵式の用にと馴らしてある、聯隊の馬の代りに、贅澤にコザック馬に乘つた。彼は、馬の鑑識家で又愛馬家であつた、そして近頃尾と鬣の白い、大きな栗毛を手に入れた、それに乘れば、彼は誰をも驅け拔けることが出來るのであつた。この馬に乘ることは、ラストフには一つの樂みであつた。彼は馬のこと、朝のこと、かの軍醫の妻のことなどを考へたが、自分を待つて居る危險のことは一度も考へずに乘つて行つた。

以前は、ラストフは戰爭に出る時には恐怖を感じたものであつた、が今は、恐怖の感じなどは少しも抱かなくなつた。それは彼が砲火の下にあることに馴れて恐怖を忘れたのではなく、(人は決して危險に馴れ得るものではない)危險に面して、その感情を制禦し得るやうになつたからである。彼は、

戰場に出る時には、何んなものよりも餘計に重大なものと誰にも思はれること——卽ち後から來可き危險——以外のことは、何にも氣にかけないやうに自分を教育したのであつた。如何程一生懸命に彼はさうしようと思つても、また如何程嚴しく自ら自分の臆病を責めても、初めの間は之れはうまくいかなかつた。が、年と共に自然とさうなつて了つた。彼は、今イリインと並んで樺の並木の間を馬を進めつゝ、手に觸る小枝から葉を捩ぎ取つたり、時々馬の横腹を足で觸つて見たり、振り向きもしないで喫ひ終つたパイプを後の驃騎兵に渡したり、まるで遠乘にでも出かけたやうな、落ち着いた、無關心な風であつた。

彼は、大變神經質に話しかけるイリインの、興奮した顏を見るのを氣の毒に感じた。彼は自分の經驗から、この旗手の陷つて居る、恐怖と死を豫期する苦しい心持ちを知つてゐた。そして『時』の他は如何なるものも夫れから彼を救ひ出し得ないことをも知つてゐた。

太陽が嵐雲の下の、すつきり透いた空へ現れると直ぐに、風は、恰も嵐の後の夏の朝の美しさを汚すのを恐れるかのやうに、止んで了つた。樹々は未だ滴を落してゐた、が、その滴は今は眞直ぐに落ちた、——そして凡てが深閑としてゐた。太陽は全く地平の上へ昇つた、そしてその上に垂れかゝつてゐた、長い、狹い雲の中へ消えて行つた。しばらく經つと、太陽は再びその雲の上側へ、その緣を破つて、前より更に赫々として現はれて來た。あたりは光と輝きとに充ち渡つた。そして、その晴れや

かな光と共に丁度それと相應ずるかのやうに、砲聲が彼等の前方で鳴り渡つた。

ラストフが、その考へを纏め、そして、それらの砲聲の距離がどの位あるであるか斷定する間も無いうちに、伯爵オステルマン、トルストイの副官がウイテブスクから駈けて來て、全速力でその道を進軍せよとの命令を傳へた。

この中隊は歩兵や砲兵に追ひ付いて、それを追ひ越したが、彼等も亦歩調を早めてゐた。それから驃騎兵は阪路を駈け下り、無人の、荒れ果てた村を過ぎて、再び阪路を駈け上つた。馬は汗をかき始め人々の顏は氣色ばんできた。『止れ！　横隊作れ！』と分隊長が言つた。『左向け！並足！』と、前の方で號令が聞えた。

そこで驃騎兵等は、他の隊の列に沿ふて、陣地の左翼に出た、そして先頭の戰線をなして居る、味方の槍騎兵の後方で止つた。右方には、味方の歩兵の密集團がゐた—彼等は遊軍となつてゐた。彼等の上の、丘の上には、清らかな透み渡つた大氣の中に、キラ〳〵と斜めに射す朝日の中に、味方の大砲が丁度地平の上に見られた。前面の、何もない谷の向ふには、敵の團隊と砲とが見えてゐた。谷の中では我が前哨隊が、すでに敵と活潑な砲火の交換をして居るのが聞かれた。

ラストフは、隨分長い間聞かなかつた、それ等の響を聞いて、それが極めて陽氣な音樂でゞもあるかのやうに、元氣が高まつて來るのを覺えた。トラップータータップ！と、數發の銃聲が、最初は一度に、やがて引き續いて急激に響いた。凡てがまた沈默した、そして再び爆竹のやうな音がした。

驃騎兵は、一時間程同じ地點に止つて居た。大砲が擊たれ出した。伯爵オステルマンが、幕僚を率ゐて、中隊の後方へ馬を走らせてきた、彼は馬を止め、聯隊長に一言話をして、それから丘の上の大砲の方へと馬を進めて行つた。

オステルマンが駈け去つた後で、『隊形造れ、進擊用意！』の號令が槍騎兵の間に鳴り渡つた。先頭の歩兵は二つに分れて、騎兵を通す路を開けた。槍騎兵は駈け出し、槍につけた旗を翻しつゝ、左の下方に現れたフランス騎兵に向つて早足で丘を下つた。

槍騎兵が丘の下へ行つてしまふや否や、驃騎兵は、砲兵を掩護する爲めに丘の上へ驅け上れと云ふ命令を受けた。驃騎兵が槍騎兵のゐた跡へと進んで居た丁度其時に、幾つかの砲彈が遠くの方からシュッ〳〵、ヒュッ〳〵と云ひながら飛んで來たが、何へもあたらなかつた。

彼が隨分長い間聞かなかつた、この音は、小銃の音よりも尙ほ一層ラストフの心を元氣にし快活にした。彼は體を眞直に延し、丘を上るに從つて自分の前に開けて來る戰場を見渡した、そして彼は、一心に槍騎兵の行動を眺めた。彼等は、フランスの龍騎兵の上から、近々と襲ひかゝつてゐた、彼方には烟の中に何か混亂があつた、それから五分たつと槍騎兵は、彼等が駐つて居た地點の方へではなく、もつと左の方へと、擊退せられた。栗毛の馬に乘つてゐた槍騎兵の列中にも、彼等の後方の大集

團の中にも、灰色の馬に乘り、青色の服を着たフランスの龍騎兵が見られた。

十五

ラストフは、その鋭い狩獵家の眼で、それ等の青色の服を着た龍騎兵が、味方の槍騎兵を追擊しつゝあるのだと云ふことを一番に見分けた一人であつた。次第に近く槍騎兵の潰亂した群集とそれを追擊するフランスの龍騎兵とが飛んできた。彼は今丘の麓に小さく見える、追ひつ追はれつ、その腕や劍を振つて戰つてゐる人々の形を一人々々見合けることが出來た。

ラストフは、自分の前に起りつゝあることを、まるで狩獵でも見るやうな氣で眺めた。彼は、若し自分が今輕騎兵を率ゐて、かのフランスの龍騎兵を進擊しやうものなら、彼等はとても踏み堪えることは出來まいと本能的に感じたけれど若し彼が進擊するとすれば、この瞬間でなければならぬ、さうでなければ間に合はないだらうと思つた。彼は周圍を見廻した。彼の傍に立つてゐた大尉も亦その眼を下なる騎兵の方にそゝいでゐた。

『アンドレー、セヴアスチヤニツチ、』と、ラストフは言つた、『我々は奴等を包圍することが出來るぞ、確かに……』

『そいつは面白い仕事だな、』と、大尉は言つた、『それに、全く……』

ラストフは、彼の答へを待たないで、馬に拍車を當てゝ、自分の中隊の先頭へ駈け出した。彼が號令をかける間のないうちに、全中隊の者は彼と思ひを共にして、彼の後から飛んだ。

ラストフ自身も、彼が何うして、又何故さうしたのかは分らなかつた。彼は、狼狩の時に色々のことをしたと同じやうに、何もかも考へず又分別せずに、やつたのであつた。彼は龍騎兵が近づいて居たことゝ、彼等が列を亂して駈けて居たことゝを見た、彼は、彼等が踏み堪えることが出來ないのを知つてゐた。そして又働くのは唯一刹那で、それを取り外せば最うその機會は戻つて來ないことを知つてゐた。砲彈が彼の周圍に如何にも元氣をつけるやうにヒユツ〳〵、シユツ〳〵と鳴つてゐた、彼の馬は、前に進まうといきり立つて、彼がそれを止め兼ねた程であつた。彼は馬に拍車を當てゝ大聲に號令をかけた、それと同じ瞬間に、後方に自分の中隊の蹄の音を聞きながら、彼は龍騎兵の方へと全速力で下り阪を飛び進んだ。彼等が下り阪を突進して居るうちにも、その早足が次第に飛ぶやうな驅足になり、そして味方の槍騎兵と、それを追擊するフランスの龍騎兵とに近づいて行くまゝに、益早くなつた。最も先頭の者は、輕騎兵を見て、後に引き返し出した、一番後の者は止つた。嘗て狼の逃げ道を塞ぐ爲めに駈けつけたのと同じ感じで、ラストフは、そのドン産の馬を全速力で走らせ、龍騎兵の崩れた列の逃げ道を塞ぎ止めやうと駈けた。一人の槍騎兵が踏

み止まつた。最う一人の徒立の者は蹴倒されるのを避けやうとして地面へ身を投げ伏せた、又乗手のない一頭の馬は輕騎兵と一緒に連れて行かれた。殆んど總ての龍騎兵が疾驅して退却しつゝあつた。ラストフは鼠色の馬に乗つて居る彼等の一人を覗つた、そしてその後を追つ駈けた。途中、彼は濃木の繁みの中へ眞直ぐに乗りかけた、彼の勇ましい馬はそれを跳び越した、すると彼は鞍の上に座りなほすか直さないうちに、もう數秒でその目指して追駈けて居た敵に追ひ付けることが分つた。そのフランス人は——軍服から推すと多分士官らしい——灰色の馬の上に低く身を伏せ、劍で馬をつゝいてゐた。この瞬間にラストフの馬は、灰色の馬の尻に打突かつて、殆んどそれを倒しさうにした、そしてそれと同じ刹那にラストフは、自分でも何故か無意識的に劍を上げて、フランス人に一撃を下した。

さうした瞬間に、ラストフの熱心は俄に盡く消え失せた。かの士官は地へ落ちた、それは劍で斬られた爲めではなかつた。何故ならば、その腕を肘の上のところを一寸かすつたばかりであつたからだ。むしろ恐怖と馬へ突き當てられたのとで、落ちたのであつた。ラストフは馬を引き止めて、何んな男に勝つたのかと相手の顏を見ようとした。フランスの士官は片足を鐙にからまれて、地上に跛をひいてゐた。眼をぎろ〳〵と見張りながら、今にも又一撃を受けるかと待ちまうけて居るらしくラストフの方を恐怖の面持ちで顏を顰めて見上げてゐた。その青白い、泥塗れの顏——括り顎の涼しい青い眼

の綺麗な、若い顏——は戰場などよりも靜かな爐邊の方が適はしさうな、極めて非戰爭的な、極めて人の好さゝうな顏であつた。ラストフが此男を何うしてやらうかとまだ決心のつかぬうちに、その士官は『Je me rends.（降參します）』と、叫んだ。彼は、急いで鐙から足を外さうとしたが駄目であつた、そして彼は恐れた青い眼でラストフを眺めた。數人の輕騎兵たちが、駈け付けて來て、彼の足を外し、鞍の上へ乘せてやつた。輕騎兵たちは、方々で忙しく龍騎兵たちの世話をしてゐた。一人の男は負傷してゐた、そして顏から血が流れ出て居るのに自分の馬を決して離さうとはしなかつた、最う一人は驃騎兵の馬の後に乘つて、その驃騎兵の胸の周圍に手をかけてゐた、又第三の者は驃騎兵に助けられて、自分の馬に這ひ上つた。前の方をばフランスの歩兵が、鐵砲を射ちながら逃げて行つた。驃騎兵たちは捕虜を連れて急いで馳せ歸つた。ラストフは、何とも知れぬ不愉快な氣持、一種心の痛みを覺えながら、他の者と一緒に駈け戻つた。何やら漠とした、くしや〳〵した思ひが、——はつきりとは分らなかつたが——かのフランスの士官を捕虜にしたことや、彼に一撃を浴びせたことなど〳〵共に彼の心に浮んだ。伯爵オステルマン、トルストイは歸つて來る驃騎兵たちを迎へ、ラストフを呼び出して、彼に感謝の辭を述べ、旦つ自分はその花々しい働きを皇帝に奏上して、聖ゲオルギ勳章の候補者に推さうと言つた。ラストフは、伯爵オステルマンの前へ呼び出された時には、何等進軍の命令をも受けて居なかつたことを思ひ出して、これは確かにこの軍律を破つたことに對して、上官が彼を

譴責する爲めに呼びによこしたのだと思つたのであつた。だからオステルマンの讃辭や褒美の約束は
ラストフにとつては、愉快な驚きであるべき筈であるのだが、彼は矢張り例の不愉快な漠とした精神
上の惱みを覺えてゐるのであつた。

『はて、何を一體自分はこんなに氣にして居るのだらう?』と、彼は將軍のところから馬に乘つて歸
る途々、訝つた『イリインかな? いゝや、彼は別段どうもして居ない。自分は何か恥づべきことでも
したのかな? いや、それでもない!』その他の何物かが後悔のやうに彼を苛立たせた。『さうだ、さ
うだ、あのくゝり顎の士官だ。そして自分が彼を擊たうとして自分の手を躊躇させたことを、はつき
りと覺えてゐる。』

ラストフは、捕虜たちが連れて去かれるのを見た、そしてその顎に膃のあるフランス人を見るため
に捕虜たちの後から駈けて行つた。その男は妙な軍服を着けて、豫備の馬の一つに跨り、不安さうに
四邊をぢろ〳〵と見てゐた。その腕の劍の傷は、殆んど傷と呼べない程のものであつた。彼は無理に
した微笑を浮べてラストフの方を見た、そして挨拶のつもりらしく、その手を振つた、ラストフは矢
張り同じやうな不快と漠とした後悔とを感じた。

その日の終日と、その次の日、ラストフの友達や同僚の者は、はつきりと沈んでも居なければ苛々
して居るといふのでもないが、彼が默つて、夢見てゐるやうに、考へ込んで居るのに氣が付いた。彼

は酒も飮まうとはせずに、獨りで居やうとし、そして物思ひに耽つて居るやうな風であつた。

ラストフは、やはり意外にも自分が聖ゲオルギ勳章を得るやうになり、そして何物をも恐れざる不
敵な行爲として實際名聲を博した自分の立派な勳功のことを考へてゐた。そこには何うしても測り知
ることの出來ない何かゞあつた『して見ると彼等は、我々が恐れて居るより以上に恐れて居るのかな、』
と、彼は思つた。『ぢや、所謂勇者的な行動といふのは、これだけのことなのか? で、俺はあんなこ
とを果して國の爲めにやつたらうか? それでは、あの男は靈と、青い眼を持つてゐたので、咎めら
れねばならなかつたのかな? 全くあの男は驚いて居たなあ! あの男は俺が殺さうと思つてゐるの
だと思つたんだ。何うして殺してなるものか? 俺の手は震へてゐた。それで奴等は俺に聖ゲオルギ
動章を與れたのだ、俺には何うも分らない、俺には何うも分らない!』

併し斯うしてニコライが、その心の中にあるかういふ疑問に苦しみ、彼を惱ます樣々の疑ひに對し
て少しもハツキリとした解決を見出すことの出來なかつた間に、軍務にある時には往々あるやうに、
幸運の輪が彼の都合のいゝやうにと廻つてゐた。彼は、オストロウナの戰役後昇進して、驃騎兵の大
隊長となり、勇敢な將校が要る時には彼が撰ばれるのであつた。

十六

ラストフ伯爵夫人がナターシヤの病氣の通知を受け取つた時には、夫人は未だその體力を回復してゐなかつた。未だ病弱の身であつたにも拘らず、彼女はペエチヤと家中の者を連れ、直ぐモスクワに向つて出發した、そしてラストフ家の人々は、マリヤ、ドミートリエウナの家から自分たちの持家へと移つて、そこで全家族が落着いた。

ナタ！シヤの病氣は、彼女や、彼女の兩親にとつて仕合せにも、何うして病氣になつたかとか、彼女の所業とか、彼女の婚約の破毀とかいふことに就ての考へが蔭に隱れてしまつたほどに重態であつた。彼女はひどく惡るかつたので、誰一人出來した事件に對して何れだけナターシヤに責任があるかといふやうなことを考へ得るものはなかつた。彼女は食べることも、眠ることも出來なかつた、見る見る痩せて行き、咳をした、醫者がみんなに注意したやうに、實際危險狀態にあつた。

もう一度彼女を癒すのには何うしたら宜いか、と云ふこと以外には何も考へられなかつた。醫者たちはナターシヤを診察する爲めに、別々に來たり又一緒にきて立ち合つたりした。彼等は大抵フランス語や、ドイツ語や、ラテン語で話をした。彼等は、互ひに論じ合つた、そして彼等が最も扱ひ馴けて居る色々の病氣に對する樣々の異つた治療法を試みた。けれど、その中の一人として、どんな些細な病氣でも生きて居る人間にスツカリ分り得るものではないのだから、ナターシヤの罹つてゐる病氣も分らない、といふ單純な考へを起すものがなかつた、凡そ生きて居る人間はそれ〳〵箇々の特質を

持つて居るもので、醫學には知られて居ない各自獨特の、新らしい、複雜な疾病を常に持つて居るものである——それは、肺臟とか、腎臟とか、皮膚とか、心臟とか、凡てさうした醫書に書かれてあるやうな病氣ではなくて、さういふ機關の疾病の無數に結び付いたもの〻一つから生じる病氣なのである。

この簡單な考へが醫者たちには何うしても思ひ付けなかつたのだ（それは丁度魔術使ひに自分は魔術を使ふことが出來ないのと同じ理由である）、といふのは、病氣の治療をするといふのが彼等の、この世に於ける仕事だからである、それが爲めに彼等は金を儲けるので、又その爲めに彼等は、その一生の最も好い時代を費したからである。

更に又、醫者たちがその考へを思ひ付かなかつたのは、自分等が疑ひもなく役に立つことを認めてゐたからである。そして彼等は、確かにラストフ家の者の役に立つた。彼等が役に立つたのは、病人に大抵害になる藥（事實その害は藥が極く小量しか與へられないから殆んど目立たないのである、）を飲ませたからではなかつた。彼等は實際役に立つた、必要であつた、缺くべからざるものであつた、（これと同じ理由で、有名な病氣治癒者とか、巫女とか、ホメオパス療者とか、アロパス療者とかゞ之れまで存在し、又これからも存在するであらう、）夫れは彼等が病人や、その病人を愛する人々の精神上の慾求を滿足させたからである。

彼等は、救はれ度いと云ふ人間の永遠の要求、苦痛のある時に感ぜられる同情的な行爲の要求、小

兒に於て、最も單純な形式(子供は傷をすると其所を撫でゝ貰はねば承知しないものである、)で現はれる要求、を滿足させた。子供が怪我をする、と、直ぐその痛み所を撫でるか接吻するかして貰つたお蔭で餘程よくなつたやうに思ふか乳母のとこへ走つてゆく、そして撫でるか接吻するかして貰ひに母親ものである。子供には、さういふ自分たちより強い、賢い人たちが自分の痛みを治す力を持つてゐないとは信じられないのだ。そして、この救はれるといふ希望と母親が痛み所を撫でゝ居る時の同情のある表情とが、子供を安心させるのである。

ナターシヤに對しては、醫者たちが、自分の「坊や」を撫でたり接吻したりする母親の役目を務めた。即ち醫者たちは、馭者がアルバスキイ街の、藥屋へ駈けつけて、奇麗な小箱に這入つた散藥や丸藥を——ルウブルと七十コペツクで——買つて來て、その散藥を二時間毎にきつかりと、それよりも早くもなく遲くもなく、白湯で病人に飮ませさへすれば、苦痛はすつかりなくなつて了ふと宣言した。

若しソーニヤや、伯爵や、伯爵夫人が何ういふ手段も執れなかつたとしたら、又彼等の凡てに與へられてゐる仕事でもあり、慰めでもあるところの、時間を定めて與へる丸藥や、溫い飮物や、チキンカツレツや、それから醫者が申し出た色々の細々した注意がなかつたとしたら、彼等は何うしたであらう、何う感じたであらう。

伯爵が、若し娘の病氣に千ルウブルの金がかゝり、少しでも快くなると云ふのなら更に何千ルウブルでも惜みはしないと思はなかつたならば、若しまた娘が快くならない場合には、更に數千ルウブル出して娘を外國へ連れて行き、外國の醫者たちに更に數千ルーブル出して見せやうと思はなかつたならば、それから又ムチヴイエーとフエーレルとが病氣を誤診したこと、フリイツがそれを見破つたことと、ムドフロが一層確かにそれを判定したことなどを皆なに話すことが出來なかつたならば、彼は何うして深く愛する娘の病氣に堪え得たであらう?

醫者の命令を忠實に守らないといふので、病氣のナターシヤを時に叱ることが出來なかつたならば伯爵夫人は何うしたであらう?

『お前、そんな風では決して快くなりませんよ』と、その悲みを怒りにまぎらすことを思ひついて、伯爵夫人は言ひ言ひした、『お醫者さん達の有仰ることをよく聞いて、藥をちやんちやんと飮まなければいけないぢやありませんか! 肺炎にでもなつたら、取り返へしが付かなくなりますよ!』と、伯爵夫人は言つた。そして、かういふ不思議な言葉を——ナターシヤにばかりではなく——發することの中に彼女は非常な慰めを見出すのであつた。

ソーニヤも亦、いつでも醫者の命令を實行することの出來るやうに、初め三晩つゞけて着物も脫がなかつたことや今はその無害無効の丸藥を金の小箱から取り出して、丁度の時間にそれを病人に飮ませはぐらないやうに、夜も寢ないと云ふ喜ばしい意識がなかつたならば、何うしたであらう?

ナターシヤその人にしても、どんな藥でも自分を少しもよくはしないと云ふことや、そんなことは皆馬鹿々々しいことだなどゝ口でこそ云つては居たが、自分の爲めにそれ程多くの犧牲のなされて居ることを見て喜び、又定つた時間に藥を飲むのをも喜んでゐた。それから彼女は、醫者たちの處方を輕んじて、自分が醫者たちを信じて居ないことを見せびらかすことの出來るのを實際喜んでさへゐた。

醫者は毎日來て、ナターシヤの脉膊をしらべ、舌を見、そして、彼女の悄然とした顏などにはお介意ひなしに、戲談を言つたりした。所が、それから彼が隣りの部屋に入つて行き、その後から伯爵夫人が大急ぎで從いて來ると、彼は急にしかつめらしい顏になり、頭を勿體らしく振りながら、勿論容體は危かしいには違ひないが、自分は最新の藥の功驗に望みを持つて居るといふことや、あなた方は唯待つて見て居さへすればいゝと云ふことや、それから病氣は肉體的の原因よりも精神的の原因からきてゐる、併し……などゝ言つた。

伯爵夫人は、成るべく自分自身にも醫者にも、さうするのを隱すやうにして、醫者の手に幾何かの金貨をそつと掴ませた、そして何時も幾らか心を輕くして病室へと歸つて行くのであつた。

ナターシヤの病氣の徵候は、食慾のなくなつたことゝ、不眠と、咳嗽と、それから斷えず氣が滅入ることゝであつた。醫者たちは、彼女が醫療を受けねばならぬと宣言し、その爲めに彼女を都會の息の詰まるやうな空氣の中に止めておいた。で、一千八百十二年の夏中ラストフ家は田舍へ行かなかつたのである。

ショツス夫人が殘らず集めた丸藥や、水藥や、散藥（この人はさうしたものが非常に好きであつた）などの澤山の小さな壜や箱にも拘らず、ナターシヤの馴れてゐた田舍の生活を止めて居たにも拘らず、青春が勝を制した、ナターシヤの悲嘆も日常生活の印象に蔽はれ始めた、悲嘆は彼女の心の上に痛いやうな負擔となつて橫たはることもなくなり過去の中へと消え失せ始めた、そしてナターシヤは再び肉體の健康を回復し始めた。

十七

ナターシヤはだん〳〵落ちついて來た、が、少しも幸福にはならなかつた。彼女は、嘗にあらゆる外形的な娛樂、——舞踏會とか、滑走遊戲とか、音樂會とか、劇場とか——を避けたばかりではなく、その笑ひの裏に淚の響を伴はずには笑はないといふほどであつた、彼女は歌ふことも出來なかつた。彼女が一人で笑ひ出したり、歌はうとしたりすると、必らず淚がそれを遮るのであつた、それは悔恨の淚であつた、二度とは歸つて來ないかの純な幸福の時に對する後悔の淚であつた、非常に幸福であ

るべき筈だつた彼女の青春をむざ〳〵と壊して了つた苛責の涙であつた。笑つたり歌つたりすることは特に彼女にとつては自分の悲みに對する嘲弄のやうに思はれたのである。

彼女は、人から賞められたいなどと云ふことは思ひもしなかつた。彼女はその頃、凡ての人々が自分にとつては道化程の虚榮心の衝動などは少しも持つてゐなかつた。心の中の番兵があらゆる種類者のナスターシヤ・イワノウナ同様であると言ひもすれば、感じもした。の快樂を防ぎ止めて居るやうに思はれた。そして、實際、彼女は、非常に希望に充ちて居た、自分の娘らしい、うか〳〵した昔日の生活の興味を悉く失つて了つたのであつた。至極度々、非常に懐しくかの秋の幾日かのことや、狩獵や、年老つた叔父や、それからニコライと一緒にオトラドノエで暮した聖誕祭の祝日の思ひ出に浸つた。その頃の唯の一日をでも、今に返へすことが出來るのなら、彼女は何んなものをでも與へないではゐないであらう！　けれど、それは凡て永劫に過ぎ去つてしまつたのだ。さういふ自由な、何をでも直ぐに樂しがるやうな時は何うしたつて二度とは來ないだらうといふその頃の彼女の豫感は彼女を欺かなかつた。が、それでも彼女は生きなければならなかつた。

嘗て思つて居たやうに、自分は善い人間ではなくて、非常に悪い人間だ、誰よりも、世界中の誰よりもずつと悪い人間だと考へることが彼女を慰めた。併し、これは彼女にとつて大して意味のあることではなかつた。彼女はそれを信じた、が、そこでかう自問した、『では、その次は何だらう？』そして、

その次には何にも來なかつた。人生には何の喜びもなかつた、けれども人生は過ぎて行つた。ナターシヤが爲やうと思つたことの全部は、明かにたゞ他人の厄介にならないようにし、他人の娯みの邪魔をしないようにすることであつた、が、自身に對しては何もしたくはなかつた。彼女は、家中の者からすつかり離れて了つた。慣れ〳〵しく感じるのは、たゞ弟の、ペエチヤだけであつた。彼女は、他の人たちとよりはペエチヤと一緒に居る方がすつと好きであつた、そして彼と二人きりの時には、時々笑ふことさへあつた。彼女は家を出て何處かへ行くやうなことは滅多になかつた、それから家に來る客の中で、彼女の喜んで會ふ人と云ふのは、唯一人——ピエールだけであつた。

一人として、ベズウホフ伯爵よりも優しく、深切に、同時に眞面目にナターシヤに振舞ひ得るものはなかつた。ナターシヤは何時となくこの優しさに氣が付いてゐた、で彼と一緒に居るのが誰と一緒にゐるよりも嬉しかつたのは、それだからなのであつた。けれど彼に對して、そのことを有難いとさへ思つて居なかつたのであつた。ピエールのその親切は、ナターシヤには、ピエールが努めてさうして居るのだとは思へなかつた。ピエールにとつては、親切にするといふことが全く自然のことであつた、その親切には價値がないやうにさへ思はれた。時々ナターシヤは、ピエールが自分の前で取り亂しておづ〳〵して居るのに氣がついた、それが殊に、彼女に何か氣に入ることをしようとする時とか、又は談話の中で何か彼女の苦しい記憶を思ひ出させはしないかと恐れて居る時とかに、よく現はれた。彼女は、

この事に氣が付いた、そして、それを彼の持ち前の親切と羞恥みであると解釋し、他の誰に對しても同じやうにするのだらうと想つた。

思ひがけない言葉——若しも彼が自由の身であつたならば、蹲いて彼女の手と、彼女の愛とを請ふであらうといふこと——を思ひ餘つた刹那に言つて以來、ピエールは自分の感情に就いては、ナターシヤには何にも言はなかつた、であんなに彼女を慰めたあの言葉は、丁度人が泣く子をなだめる爲めに宜い加減な出鱈目を言ふのと同じやうに、言はれたのに定つてると彼女には思はれたのであつた。それはピエールが既婚者だからと云ふのではなくて、ナターシヤが自分と彼との間に道德的な障壁の力——クラアギンとの間には、それがないことを自覺してゐた——を感じたからであり、又自分とピエールとの關係が、自分の方から發展して戀にならうとか、況して彼の方でさうならうとか、或は、彼女が二三の例を知つて居る男女間の、優しい、自意識的な花やかな友情にならうとか云ふことすら思ひも寄らぬことに感じられたからであつた。

聖ペテロの齋日の終りの頃に、アグラヒョーナ・イワノウナビエーロフといふ、ラストフ家の田舍の家の隣人が、諸聖徒に參詣る爲めに、モスクワへ、やつて來た。その女が、ナターシヤに聖禮を受けることにしたら何うかと勸めた、すると、ナターシヤに熱心にその勸めに從つた。醫者たちは、朝早く外出するのを禁じて居たのだが、ナターシヤは何でも聖禮を受けると主張つた、而もラストフ家の

流儀に從つて、たゞ家の中で三度の勤行をするといふだけではなく、アグラヒョーナ・イワノウナのする通りに、即ち全一週間、朝の勤行と、禮拜式と、夕の勤行とを一度も缺かさずにしなくては承知しなかつた。

伯爵夫人は、かういふ風にナターシヤの宗教に熱心になつてきた徴を見て喜んだ。醫療の効果が乏しかつた後なので、心の中で伯爵夫人は、祈禱がナターシヤに藥以上の効能を現はしてくれるやうにと念じた、そして、その事は醫者に隱し、且つ內心幾らか心配したけれども、ナターシヤの希望を入れて、彼女をビエーロフ夫人に托した。

アグラヒョーナ・イワノウナは、夜の三時にナターシヤを起しに這入つて行つたが、彼女は寢て居ないことが度々あつた。ナターシヤは早朝の勤行を寢過してはと恐れたのである。急いで身體を洗ひ、あらん限りの講遙をもつて、みすぼらしい着物と古い外套とを着て、ナターシヤは、冷たい空氣に震へながら、早朝の澄み切つた中を淋しい町へと出掛けて行つた。

アグラヒョーナ・イワノウナの忠告に從つて、ナターシヤは自分の敎區の寺の勤行には出ないで、非常に嚴格な模範的な生活を送つてゐるといふので信心深いビエーロフ夫人の尊信してゐる僧の居る或る寺へ行つた。その寺には僅かしか人は居なかつた。ナターシヤとビエーロフ夫人とはいつも、左の方の唱歌所の後方に彫られてある、聖母の像の前の、同じ席に着いた。さういふ朝の異常な時間に、

その前に燃えて居る蠟燭の光で、聖母の像の黒い輪郭を見たり窓越しに、その上に落ちて居る朝の光を見たりして居ると、大いなる神秘に對する言ひ知れぬ誘惑の、或る新しい惑じがナターシヤの心に起るのであつた。彼女は、勤行の言葉に耳を傾け、そして、それを追ひ、努めてそれを會得しようとした。

その言葉を會得した時には、彼女の箇人的な感情の陰影は悉くその祈禱と混り合つた、その言葉を會得しなかつた時には、凡てのことを會得しやうと思ふのは生意氣だ、凡てのことが解し得られるものではない、自分はたゞかうした時自分を導いてゐる(彼女はさう感じた)神を信じ、神に身を委ねさへすれば宜いのだ、と考へた、それが彼女には尚ほ一層快かつた。彼女は十字を切り、地に額づいた、そして勤行の言葉に隨い行けなかつた時には、たゞ自分自身の罪を怖れて、神に向ひ、自分の爲めに何も彼もを、一切のことを許してくれるやうに、慈悲を垂れ給ふやうにと祈つた。

彼女が身も心もあげた祈りは、悔悟の祈りであつた。朝早く家へと歸る途々、彼等の行き遭ふものと云へば、仕事に出て行く石工か、町を掃除する門番だけで、人々はみな家の中で眠つて居る時、ナターシヤは自分で自分の罪を改め、そして純潔と幸福との新生涯を送り得るといふことを新に感じたのであつた。

かういふ風にして送つた一週日の間に、その感じはだん〳〵強くなつて行つた。そして「交通(ソナブシュチッツア)」

——「聖餐禮(プリナブシュチッツア)」をとることをアグラヒョーナ・イワノウナはかう呼ぶのが好きであつた——の喜びが、彼女にとつて非常に大きなことのやうに思はれて、その幸福な日曜日までは生きては居られないやうな氣がした位るであつた。

けれど、その幸福な日がきた。そして、その記憶すべき日曜日に、白いモスリンの着物を着て聖禮から歸つて來た時、何ケ月ぶりかで始めて、ナターシヤは安らかさを覺え、自分の前に横たはつて居る人生の爲めに壓迫せられないやうに思つた。

醫者は、その日ナターシヤを見に來て、二週間以前から處方して居る散藥をつゞけて飲むようにと言つた。

『あれを朝と晩とにきつとお飲りにならなければいけません、』と、醫者は、明らかに、自分の手當の成功したことに無邪氣な滿足を感じて居るやうな樣子で、言つた、『どうか、それをお忘れなさらないように。もう御安心なすつてよろしうございます、伯爵夫人、』と、醫者は口輕るに言ひ、馴れ切つた樣子で、その掌に金貨を受け取つた。『直ぐに唄つたり、踊つたりするやうにおなりなさいますよ、最近の藥が非常に、非常によく利いたんですな、大變によくおなりです。』

伯爵夫人は、晴々しい顏をして客間へ歸つて行きながら、自分の爪を見て、さういふ言葉の、凶兆を避ける爲めに嘘を吐いた。

十八

七月の始めに、モスクワに流布された戰爭の經過に就いての風說は次第々々に不穩になつてきた、それに皇帝が人民に訴へるといふ話もあり、皇帝自ら戰地の方からモスクワに來やうとしてゐるといふ噂もあつた。そして、七月の十一日までは、宣言書も、人民への訴へも受取られなかつたので、さういふ事や、ロシア側の位地に關する大袈裟な報告が廣まつた。軍が危險に陷つてゐるので、皇帝が歸つて來るのだと言はれてゐるし、スモレンスクが降服したとか、ナポーレオンは數百萬の軍を率ゐて居るとか、何か奇蹟でも起らなければロシアは何うしても助からないとか言はれてゐた。

七月の十一日、土曜日に、宣言書は受取られたが、未だ印刷されてゐなかつた。ピエールは、折りからラストフ家に居合はしたが、その翌日の、日曜日の、晝餐に、その宣言書をラストプチン伯爵から貰へるから、持つて來ようと約束した。

その日曜日には、ラストフ家では、いつものやうに、ラズモウスキイ家の禮拜堂で勤行をした。それは暑い七月の日であつた。未だ十時頃であつたのに、ラストフ家の人々がその禮拜堂の前で馬車を下りた時には、蒸々（むしむし）する空氣や町の行商人の叫聲や、群集のけば〳〵した輕い夏衣や、廣小路の木々

の埃だらけの葉や、觀兵式へと行く軍隊の軍樂や白ズボンや、數石の鳴る音や、きら〳〵とした、暑い太陽の輝きや、凡てのものが皆——それは特に都會のぎら〳〵した、蒸し暑い日に銳く感じられる——現在に對する滿足と不滿とを語つてゐた。

モスクワの流行界全體、ラストフ家の知己の全體が、その禮拜堂に集つてゐた。多くの富祐階級の人々は、いつも田舍で夏を送るのが習慣であつたが、この年は、何か知ら漠然とした或る物を期待して居るとでもいふやうに、大多數はモスクワに殘つてゐた。

法被を着た從僕は、ナターシヤと母親のために道を開けやうとして群集を分けてゐたが、ナターシヤは、その後から母親と並んで歩いてゐるうちに、自分のことを高過ぎる囁聲（さゝやきごゑ）で話してゐる若い男の聲を聞いた。

『あれが若い伯爵令孃ラストフだよ、例のあの娘だよ！』

『隨分瘠せたな、だが矢張り奇麗だね！』

彼女は、ふとクラアギンとバルコンスキイとの名前が語られてゐるやうに思つた。だが、それは何時もさうなのであつた。彼女はいつも、自分の方を見るものは誰でも、屹度自分に起つたことだけを考へるに違ひないのだといふ氣がしてゐた。

この頃は群集の中ではいつもさうだつたが、心細さと氣の鬱（ふさ）ぎとを感じながら、ナターシヤは、黑

いレースで縁とつたライラック色の絹の着物を着て、女でなければ出來ないやうな、その心の中に羞恥と苦痛とを感ずれば感ずる程益々平然と、氣高い風をして歩いて行つた。ナターシヤは自分の奇麗なのは確かだといふことを知つて居た、けれどもそれが今は、以前のやうに心持よくはなかつた。却つて、それが近頃は、何よりも心細さの種となつた、市の、この晴れやかな暑い夏の日には、殊にさうであつた。

『また日曜が來た、また一週間經つた、』と、ナターシヤは自分に言つて、掌て、かの記憶すべき日曜日には自分が何うであつたかを思ひ出してゐた、『そして矢張り命のない生活で、以前の氣樂な生活とやはり同じ境遇なんだわ、若くて奇麗で、それに自分が今善人だと云ふことを知つてゐるわ、だけど、前には惡い女だつたわ！　だけど、今は善い人間だわ、』と、彼女は考へ込んだ、『けれど、私の一生の一番いゝ年、一番いゝ所がみんな無駄に過ぎて行くんだわ、誰の役にも立たないで過ぎて行くんだわ。』

ナターシヤは母の傍に立つて、近くに立つて居た知り合ひの人々に目禮した。習慣の力でナターシヤは、ともすると婦人たちの着物をぢろ〳〵見た、そして自分の近くに立つてゐる婦人の服裝や、その婦人が十字を切る不態な窮屈さうな風を批評したりした。それからナターシヤは自分も亦批評されて居るのだといふことや、自分が人を批評して居るといふことを考へて氣が焦々して來た、で、勤行

の最初の音を聞くと、彼女は愕然として自分の罪の深いことを怖れ、自分の心の潔さが、また失はれはしまいかと怖れた。

奇麗な、清らかな老僧が、祈つてゐる人々の心に、心を高め、慰める効果をもつてゐる穩かな、嚴かな調子で、勤行の言葉を讀んだ、聖堂の扉が閉まつた、垂帳が靜かに引かれると、不可思議な風に低められた聲がそこから何やら言つた。故知らぬ涙が、ナターシヤの眼に浮び、そして喜ばしく動搖する感情が彼女の心に起つた。

『敎へて下さい、何をしたらいゝのですか、何う自分の生活を送つたら宜いのですか、何うしたら永久に、永久に自分の罪に打ち勝つことが出來ませうか』……と、ナターシヤは祈つた。

補祭が神壇の垂帳の前の階段の上に現れた、拇指を一本ひろげて、その白法衣の下から長い髮毛を引き出して、それから胸に十字架を置き、高い聲で嚴かに祈りの言葉を讀み始めた。

『吾等をして一團となつて主に祈らしめよ。』

『全く階級の區別無しに、恨みを捨て、悉く兄弟の愛に結び付けられ、一團となつて、吾等をして祈らしめよ。』と、ナターシヤは思つた。

『上なる世界と吾等の靈の救濟の爲めに！』

『天使の世界と、吾等の上の世界に住むあらゆる精神的なる者の靈魂の爲めに！』と、ナターシヤは祈

つた。

みんなが軍隊の爲めに祈つた時、ナターシャは自分の兄と、ヂェニソフのことを思つた。

みんなが海や陸を旅する凡ての人々の爲めに祈つた時、彼女はアンドレー公爵のことを思つた、そして彼の爲めに祈り、自分の彼に犯した罪を神が許してくれるやうにと祈つた。

みんなが吾々を愛する凡てのもの〻爲めに祈つた時、ナターシャは自分の家内中の凡ての人々、父や母や、ソーニヤの爲めに祈つた、初めてナターシャは、その人たちに對する自分の行爲の凡ての缺點を感じ、そして彼等に對する自分の愛の全力を感じた。

みんなが吾々を憎むものたちの爲めに祈つた時、ナターシャはさま〴〵の敵のことを考へやうとし、彼等の爲めに祈らうとした。ナターシャは自分の敵として、父親の凡ての債權者たちと、父親と實務上の關係のあつたあらゆる人々とを數へた、それから自分を憎むだ敵のことを思ふ時には、彼女は、いつもあれ程殘酷に自分を傷けたアナトールのことを思つた、そして、ナターシャは彼を憎んでは居なかつたが、敵として、彼の爲めに喜んで祈つた。

ナターシャが、アンドレー公爵や、アナトールに對する自分の感情に比べれば何でもないのだと感じて、二人のことを靜かに、はつきりと考へられるやうに思つたのは、たゞ自分が祈りをしてる時だけであつた。

みんなが皇室や宗務局の爲めに祈つた時、ナターシャは、假令自分には解らなくとも、疑ふことは出來ないので、兎に角宗務局を愛し、そして、その爲めに祈るのだと自分に向つて言ひきかせながら、いつもより一層敬虔に頭を下げ、十字を切つた。

連禱が終ると、補祭は自分の聖帶を胸の上に十字に組んで、言つた。

『吾等の身をも又吾等の生命をも吾等は主基督に捧げん！』

『吾等の身を吾等は神に捧げん、』と、ナターシャは心の中で繰り返した。『神よ、私は私の身をあなたの御保護に委ねます！』と、彼女は思つた。『私は何も求めません、私は何にも望みません、唯私に教へて下さい、何ういふ風に行へば宜いのでせう、何ういふ風にあなたの御意を行へば宜いのでせう！さうです、どうぞ私を召して下さい、どうぞ私をあなたの許へ召して下さい！』と、ナターシャは堪え難い敬虔をもつて、心のうちで言つた。ナターシャは十字を切らないで、見えざる力が來て、自分を運び去り、自分自身から、自分の後悔から、願望から、悔恨から、希望から、罪から救つて呉れるのを、今か今かと待つて居るとでもいふやうに、痺せた腕を兩脇へだらりと下げて立つてゐた。

勤行の間幾度も、伯爵夫人は、自分の娘の敬虔な顏と、輝く眼ざしとを振り返つて見た、そして娘を助けてくれるやうにと神に祈つた。

みんなの驚いたことには、ナターシャがよく知つて居た勤行の中途で、補祭は、三位一體日に人々

が蹲いて祈りを繰り返へす小さな卓子を持ち出し、それを聖堂の扉の前に置いた。

僧はライラック色の天鵞絨の頭蓋帽を被つて進み出で、髪の毛を後に撫でながら、大儀さうにして蹲いた。

凡ての會衆は、驚いて互ひに顔を見合はせながら、同じ様にした。それから、丁度その時宗務局から受け取つた許りの祈禱、敵の手からロシアを救ひ出す爲めの祈禱が始まつた。

『吾等の力の主なる神よ、吾等の救ひの神よ、』と、僧は、スラヴの僧ばかりに用ひられる、そしてロシア人の心には非常に名狀し難い感動を與へるそのハツキリした、穩やかな、誇張しない聲で、始めた。

『万の主なる神よ、我等の救ひの神よ！　爾の卑しき民の上に恩寵と祝福とを以て臨ませ給へ、而して愛情深き深切を以て聞かせ給へ、我等を救ひ給へ、吾等の上に慈悲を垂れ給へ。敵は、爾の國土を亂し、而して好んで全地球に逆つて立ち、それを荒廢せしめやうとして居ます。斯くの如き無法なる輩が今や相集つて爾の王國を壓倒し、爾の聖なるエルサレム、爾の愛するロシアを破壞せんとし、汝の殿堂を汚さんとし、祭壇を覆へし、吾々の聖なる宮居を荒らさんとして居ります、何時まで、おゝ神よ、何時まで惡しき者どもが跋扈するのでありませう？　何時までも彼等はその罪深き意志を逞しうするのでありませう？』

『全能の神よ！　吾等が爾に祈る時吾等の願ひを聞き給へ、爾の力をもつて吾等の至仁至高なる君主、皇帝アレキサンドル・パウロヰツチを強め給へ。彼の誠實と慈愛とを記憶し給へ、彼の善行に從つて彼に報ひ給へ、而して、その善行をして爾の選ばれたるイスラエルの民を守らせしめ給へ。彼の考、彼の企劃、彼の所行を祝福し給へ。彼の王國を爾の全能の手に依つて堅め給へ。而して、嘗て汝がモオゼにアマレツクを、ギデイオンにミデイアンを、ダヴイツトにゴライアスを擊ち從へさせて勝利を與へたるが如くに、敵に對する勝利を彼に與へ給へ。彼の軍を守り給へ。爾の名に於て戰をなす者の手に黄銅の武器を與へ、戰鬪に對する力を以て彼等を纏ひ給へ。爾も亦楯と楯とを取り、吾等を助ける爲めに立ち、吾等に對して惡を企らむ者どもを恥辱と狼狽とに投じ、汝の忠實なる軍の前に、風前の塵の如く、彼等を散亂せしめ給へ、願くば、爾の力强き天使をして彼等を遁走と混亂とに陷れさせ給はんことを、又網をもつて彼等の知らぬ間に彼等を係蹄にし、彼等が密かに係けたる罠に却つて彼等を係らしめ給へ。彼等をして爾の僕の足下に慴伏せしめ、而して吾等の大軍のために敗れさせしめ給へ、主よ！　大なる者も小なる者も、それを救ふことは爾にとりて甚と容易きことであります。爾は神であります、人は爾に逆つては何ごとをもなし能はざるものであります！』『吾等の祖先の神よ！永久なる爾の慈悲と愛情ある親切とを忘れ給ふ勿れ。爾の顔を吾等より反けたまふこと勿れ。我等の價値なき所に慈悲を垂れ給へ。爾の慈悲の大なることゝ爾の無限とを以て、吾等の罪過と不正とを見

逃し給べ、吾等の心を清め、吾等の心の中に誠の靈を新たに生ぜしめ給へ、爾に對する信仰によつて、吾等を強め給へ。希望をもつて吾等を固め給へ。人々相互の愛を吾等に吹き込み給へ。爾が吾等と吾等の祖先に與へ給ひし遺産、正義の防禦なる精神の一致を以て吾等を武裝はせ給へ而して、正しからざる者の笏をして、爾の聖なる民の運命の上に勝誇らしめ給ふこと勿れ。』

『おゝ主なる我等の神よ、吾等は爾を信じ、爾を信用せり、吾等をして汝の慈悲に對する吾等の信仰に於て迷はしめ給ふこと勿れ、而して、吾等に吾等の祝福されたる印を與へ給へ、吾等と吾等の聖なる信仰とを、憎む輩に夫れを示し彼等を恥辱と狼狽とに陷らさせ給へ、あらゆる國々をして主は爾の御名であつて、吾等は爾の民なることを知らさしめ給へ。爾の慈悲を、今日、吾等に示し給へ、おゝ主よ、而して爾の救ひを吾等に下し給へ。爾の慈悲をもつて爾の僕等の心を喜ばさせ給へ、吾等の敵を擊ち倒し、速かに爾に忠實なる者の足下に蹂躙り給へ。爾は爾に信任を置く者どもの防禦であり、救ひであり、勝利であります。爾に榮光あれ、今も昔も居まし、且つ永遠に居ます父と、子と、聖靈とに榮光あれ、アーメン！』

ナターシヤの狀態は宗教的な印象を受け易くなつてゐたので、この祈りは強く彼女を感動させた。彼女は、モオゼのアマレックに對する勝利や、ギデオンのミデイアンに對する勝利や、ダヴイツトのゴリアスに對する勝利や、爾のエルサレムの破壞に就ての一語々々を殘らず聞いた、そして、自分の心に溢れた總ての優しさと熱心とをもつて神に祈つた、けれど、自分がその祈の中で何を願つて居たのか、自分にもハツキリ分らなかつた。全心をあげて彼女は、眞の靈に對する、信仰と希望とを以て心を強めることに對する、それから愛を心の中に吹き込むことに對する、願ひに加はつた。

併しナターシヤは、たつた數分間前に成るべく多くの敵を持ち、そして彼等を許し、彼等の爲めに祈り度いと望んで居たのだから、敵を脚下に蹂躙るやうにとは祈れなかつた。

けれどナターシヤは、僧が跪いて讀んだその祈りの正しいものであることを疑はなかつた。人間の罪、殊に自分の罪に對して、加へらるべき刑罰のあることを思つて、心に畏怖の戰慄を感じた、そして神に向ひ、彼等の凡てを、それから自分をも許されんことを祈り、彼等の凡てと自分とに平和と幸福とを與へられんことを祈つた。

で、神が自分の祈りを聞いてくれたやうにナターシヤには思はれたのであつた。

十九

ピエールがラストフ家から歸る途すがら、ナターシヤの感謝に充ちた目付きを思ひ出し、そして大空に彗星を仰いで、自分の爲めに何やら新しいものが發見されたやうに感じた日以來、地上のあらゆ

る物は空にして且つ無意味なものであるといふ、絶えず心を惱ました疑問が彼を苦しめなくなつた。

その時迄何事をする時でも彼の前に出で來た、『何故?』とか『何の爲め?』とかいふ恐ろしい疑問が、今他の問題や、または、その疑問に對する或る答へによつて置き代へられたのではなく、それは『彼女』の姿によつて掩はれたのであつた。

下らないことを聞いたり、話したりしても、又は人間の卑しさや愚かさの實例を讀んだり、聞かされたりしても、以前のやうに落膽はしなくなつた、一切のものが、かくも薄命であり、無常であるのに、何故人々は苦しんで居るのかなどゝ自ら反問するやうなこともなくなつた。が、彼は最後に見た時の彼女を思つた、すると一切の疑ひは消え去つた、それは彼女が不斷に彼を惱ました疑問に答へたからではなくて、彼女の姿が、彼を見る見るうちに別の晴やかな靈的活動の世界——そこには正不正の問題は無い——へ引き上げたからである、人生を生き甲斐のあるものにする美と愛との領土なる世界へ引き上げたからである。どんな邪惡なことを考へても彼は、かう自身に向つて言つた。——

『うん、勝手に政府や皇帝を掠奪さしておけ、だが政府や皇帝は盛んに彼の名譽を與へて居る。所で彼の女は昨日俺を見てにこ〳〵した、そして遊びに來いと言つた、俺は彼の女を愛して居る、が、誰一人それを知らない、』と、彼は思つた。

ピエールは依然として交際社會へと這入つて行つて、大酒を飲んだ、そして以前と同じやうに怠惰な、だらしのない生活をつゞけた、といふのは、ラストフ家で送る時間を別にして、彼はその餘の時間をどうにかして過ごさなければならなかつたからである。

所が近頃は、戰地からの報知は段々と不穩になつて來るし、それにナターシヤの身體が回復してきて、以前のやうな優しい憐みはいらなくなつて了つたので、彼は次第に、自分でも言ひやうのない苛々した氣持ちに捕はれ出したのであつた。彼は、自分の今ゐる位地はもう長く續くまいと思つた、自分の生活の全進路を變へるやうな一轉機が近づいて居ると思つた、で、彼はこの迫つて來てゐる轉機の徴を見出さうとして焦つてゐた。

共濟組合の仲間の或る一人が、聖約翰の默示錄から拔かれた、ナポーレオンに關する次ぎのやうな豫言をピエールに示した。

默示錄の、十三章、十八節に、から書いてある、『この獸の數目の義を知るものは智慧あり、才智ある者は、この獸の數を算よ。獸の數は人の數なり、その數は六百六十六なり。』

そして、同じ章の五節には、『この獸夸大なる言と瀆す言とを言ふ口を與へられ、又四十二ケ月の間働きをなすべき權を與へらる。』

フランスのアルファベットを、ヘブライの計算法に從つて、初めの十字を單位とし　その次ぎの

文字からは十づゝ進んで行くものとして、並べて見ると、各文字は次のやうな値をもつことになる——

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120	130	140	150	160

l' empereur napoleon（皇帝ナポーレオン）といふ言葉を、この方法の暗號に直して見ると、その文字の總計が六百六十六となる、そこでナポーレオンは默示錄で豫言せられて居る獸と云ふことになるのである。尙ほ又、同じ方法で Quarante deux（四十二）——これはその獸が働きをすることを許されて居る數である——といふ言葉を調べて見ると、その數の總計はまた六百六十六となる、そこでナポーレオンの權力の期間は一千八百十二年、卽ち、フランス皇帝が四十二の年に達する時までだと云ふことになる。

この豫言は、ピエールをひどく感心させた。彼はよく、どうすれば、この獸、卽ち、ナポーレオンの力を無くしてしまふ事が出來るかと云ふことを自問した、そして彼は、言葉を數字に變へるこの同じ方法を用ゐ、この疑問の答へを見出さうとして計算してみた。彼は答として、l'empereur alexandre（皇帝アレキサンドル）La nation rsseu（ロシア國民）を書いた。それを數字にして計算した、がその總計は六百六十六よりも遙かに多くなるか、小なくなるかであつた。

或る時彼は、自分の名の counte pierre Besuhof（伯爵ピエール・ベズウホフ）を書いたが、その數字の總計は途方もなく違つてゐた。彼は綴方を變へてZの代りにSを置き、'de' を加へ、冠詞の 'le' を加へたが、それでも思ふやうな結果が得られなかつた。

やがて、彼は、若し求めてゐる答へを自分の名前の中に發見しようといふのならば、是非とも自分の國籍をもその中に加へなければならない、といふことに氣が付いた。彼は le russe Bezuhof（ロシア人ベズウホフ）と、やつて見た、そして、その數を計算して見ると、六百七十一となつた。これならば五つ多いだけである、その五つは 'e' といふ文字に當るのだ、この文字は l' empereur napoleon といふ場合には、冠詞の中で省略されて居るのだ。そこで、それと同じ方法で、勿論文法的には誤であるが、'e' を省略すると、l' russe Besuhof となつて、ピエールは、自分の求めてゐた答へを得た、この方法で計算すると、この文字は六百六十六となるのである。

この發見はひどく彼を興奮させた。何うして、又如何なる關係で、自分が默示錄に於て豫言せられて居るこの大事件と關係して居るのか、彼には分らなかつた。が、彼は片時たりとも、その關係のあるといふことだけは疑はなかつた。彼のナターシヤに對する戀、非基督敎徒、ナポーレオンの侵略、彗星、六百六十六といふ數、l' Empereur napoleon それから l' Russe Besuhof ——凡てさういふものが發展し、そして諸共に或る極限に達して、縛られて居るやうに感じてゐた、モスクワの習慣

の魔法にかゝつた平凡な周圍から、自分を救ひ出し、或る大きな成功と大きな幸福とに導いて呉れるに違ひないと彼は思つた。

あの新らしい祈りが會堂で讀まれた日曜日の前の日、ピエールはラストフ家の人々に、親友ラストプチン伯爵を訪問して、彼から國民に對する皇帝の詔勅と、軍からの最近の報告とを取つて來ることを約束したのであつた。その朝ラストプチン伯爵の所へ行くと、ピエールは、丁度今軍から來たばかりの、使者に遭つた、この使者はピエールの知人で、よくモスクワの方々の舞踏會で會つた男である。『お願ひですが、手助けして下さるわけには參りますまいか、』と、その男は言つた、『私は親たちに宛てた手紙を袋一ぱい持つて居るんです。』

さういふ手紙の中に、ニコライ・ラストフからその父親に宛てたのがあつた。ピエールはそれを引き受けた、それからラストプチン伯爵は彼に、丁度今印刷が出來たばかりの、皇帝のモスクワに與へた詔勅と、軍隊に於ける最近の發表と、それからラストプチン伯爵自身の最近の告示とを與へた。軍隊の發表に眼を通すと、ピエールは、その戰死者や、負傷者や、行賞者の名前の目次の中の、その一つに、ニコライ・ラストフが、オストロウナの役で殊勳を立てた勇敢な行爲に對して四級の聖ゲオルギイ勳章を授けられたことと、それから同じ命令の中に、公爵アンドレー・バルコンスキイが驃騎兵の聯

隊長に任命せられたことを發見した。ピエールは、ラストフ家の人々にバルコンスキイのことを思ひ出させ度くはなかつたが、それでも彼は、彼等の息子の行賞の報を傳へて、その心を喜ばしてやり度いと思ふ念を禁じ得なかつた、で、食事の間の話の種にするために、皇帝の詔勅やラストプチンの告示や、その他の發表やは取つておいて、彼は直ぐ印刷された發表とニコライの手紙とをラストフ家の人たちへ送つてやつた。

ラストプチンとの談話や、彼の心配さうな、焦々した調子や、軍隊内の狀態の不幸なことを出鱈目に話した、かの使者と遭つたことや、モスクワで敵の間諜が捕へられたといふ風說や、ナポーレオンが秋までには屹度ロシアの兩都に入ると誓つたといふことを書いた紙片が町中に流布して居るといふことや明日皇帝が到着せられるといふ噂や——凡てかういふものが一緒になつて、彗星が現はれた以來——殊に戰爭が始まつて以來、始終ピエールの心を離れなかつた昂奮と期待の感情とを甦らせ、新しい力を與へた。

ピエールには、軍隊に入らうといふ考へが、ずつと前に起つたことがあつた。そして、第一に、若し彼が宇宙の平和と戰爭の廢止とを說いて居る共濟組合員たる誓ひをしてゐなかつたならば、第二に、彼は、軍服を着て、自ら愛國者たることを囑れて廻つて居るモスクワ市民の多數を見てゐると、どうしてか、それらと同じやうにするのを恥かしく感じたが、若しさうでなかつたら、それを實行したに

相違ない。更に、彼が軍隊に入らなかつた重大な原因は、彼、I. russe Besnhof は、何等かの點で、六百六十六といふ、獸の數の不思議な價値を具へて居るものであり、『夸大なる言と濟す言とを語る』獸の力を抑へる神から命ぜられた仕事がある、で、それ故彼は何事によらず自ら進んですべきものではなく、自分の當然行はなければならない事のやつて來るのを待つて居べきものであるといふ、漠然とした考へであつた。

二十

數人の親しい友人が、日曜日の例として、ラストフ家で會食をしてゐた。

ピエールは家の人々だけゐるところへ行き度かつたので、早くやつてきた。

ピエールはその年には、非常に肥えた、それ程背も高くはなく、四肢も岩疊でなく、自分の體を易々と運ぶことが出來るほどに强くなかつたならば、自由がきかなかつたであらう。

喘ぎながら、何やら獨り呟きながら、彼は階段を上つて行つた。彼の馭者は、待つて居るのか何うかと聞くこともしなかつた。彼は、伯爵がラストフ家に來ると、夜半になつて了ふといふことを知つてゐた。ラストフ家の從僕は彼の外套を脫がせに勢よく出迎へた、そして杖と帽子とを受け取つた。俱

樂部の癖がついて居るのでピエールは、いつも杖と帽子とを玄關に殘して置くのであつた。

ラストフ家で彼が最初に會つたのは、ナターシヤであつた。ナターシヤに會ふ前に、玄關で外套を脫いで居る間に彼は彼女の聲を聞いた。彼女は、廣間でソル・ファを唄つてゐた。彼は、ナターシヤが病氣以來唄ふことを止めて居たのを知つてゐた、それ故その聲の響を聞くと驚きもし、喜びもした。

彼は、靜かに扉を開いた、見るとナターシヤは勤行の時に着てゐた、ライラック色の着物を着て、室內を唄ひながら彼方此方と歩いてゐた。ナターシヤは彼が扉を開いた時には、彼の方へ背を向けてゐた、が、素早く振り向き、彼の大きな、驚いた顏を見ると、赤くなつて、大急ぎでその傍に駈け寄つた。

『私どうかしてまた唄はうと思つてますの、』と、彼女は言つた。『でもなか〳〵骨なんですの、』と、何か言ひわけでもするやうに言ひ添へた。

『結構ですよ！』

『ほんとによく被來して下さいましたわね！　私今日は大變嬉しいんですの、』と、彼女は、ピエールが長い間見たことのなかつた昔の熱のある調子で言つた。『ねえ、ニコレンカが聖ゲオルギイ勳章を貰つたの。私自慢が出來るわ。』

『さうでせうとも、私はあなたに發表書をお送りしました。や、どうもお邪魔しましたね、』と、彼は言ひ添へて、客間の方へ出て行かうとした。

ナターシヤは彼を止めた。

『伯爵、唄つちやいけないでせうか?』彼女は、顔を赤くして、言つた、が、その儘ぢつと伺ふやうにピエールを見つめてゐた。

『いゝえ……どうしてです? 却つて……併し何故そんなことを私に訊くんです?』

『私には分らないんですもの、』と、ナターシヤは早口に答へた、『それに私はあなたのお好きでないものは何でもし度くないんですもの。私は何事につけてもあなたを信じて居るんですのよ。あなたは、何れ程私にとつて大切な人だかまた何んなに私の爲めになつて下すつて居らしやるか、あなたには分つてゐらつしやらないのだわ!』……かう彼女は口早やに言つた、そして、その言葉をきいてピエールが赤くなつたことには氣が付かなかつた。『私はあの發表書の中で、あの人バルコンスキイのことを』(彼女はこの言葉を、大急ぎで口の中で言つた)『見ました。あの人はロシアに居てまた軍隊へ這入つたんですのね。あなたは何うお考へなさいますの?』と、彼女は、自分の力が抜けてしまふと大變だから、大急ぎで言ふといふやうな様子で、口早やに言つた、『あの人はいつか私を許してくれるでせうか? あの人はいつまでも私のことを悪く思てゐないでせうか? あなたは何うお思ひなすつて?』

『私は……』と、ピエールは言つた。『彼には何も許すことなんかないと思ひます……若し私が彼の

立場にゐるとしたらですね……』聯想によつて、ピエールは直ぐに想像の中で自分が若し自分自身ではなくて、世界中で一番善い人間で、自由な身であつたら、自分は跪づいて、あなたの手を求めるであらうと言つた時に連れ戻された、そして以前のやうな憐みと、優しさと、愛の感情が彼を捕へ、以前のやうな言葉が彼の唇に上つたけれど彼女は、それを口にするひまを彼に與へなかつた。

『さうよ、あなたは——あなたは、』と、彼女は言つた。そのあなたといふ言葉を熱心に言つた、『それは別ですわ。あなたよりも親切な、心の廣い方を、私見たことがありませんわ——あなたのやうな方はありませんわ。あの時にしても、又今だつても、あなたといふ方が居らつしやらなかつたら……私どうなつたか分りませんわ、だつて……』涙が俄に彼女の眼に浮んできた、彼女は、顔を反向け、眼の前に音符をもつて行つて、また唄ひ出した、そして室の中を彼方此方と歩き始めた。

一丁度その時ペエチヤが客間から駈け込んできた。

ペエチヤは、もうその時は、赤い唇をして、ナターシヤにそつくりで、奇麗な、薔薇色の頬をした十五の少年であつた。彼は大學にはいる準備をして居たのだが、近頃になつて密かに、友達のオポレンスキイと一緒に驃騎兵にならうと決心してゐた。

ペエチヤは、この考へを話す爲めに、自分と同名のピエールの所へと駈けて行つた。

彼は、ピエールに自分が驃騎兵にして貰へるか何うか、しらべてくれと頼んだのであつた。

ピエールはペエチヤには頓着しないで、客間へと歩いて行つた。

少年は、注意を引く爲めにピエールの腕を引つ張つた。

『あの、僕の計畫はどんな風ですか聞かして下さい、ピヨートル・キリーロヰツチ、お願ひですから！あなた一人が頼りなんですから。』と、ペエチヤは言つた。

『あゝ、さうさう、君の計畫、驃騎兵になるつて云ふんだね！　話すよ、今日すつかり尋いて上げるよ。』

『やあ、君、宣言書を持つて來て下さいましたかね？』と、老公爵は尋ねた。『娘がね、ラズモウスキイの禮拜堂へ勤行に行つたのですが、あそこで新らしい祈りを聞いて來たのです。大變立派なものだつて、言つてましたよ。』

『えゝ、持つて來ました。』と、ピエールは答へた。『陛下は明日當地へお着きになるさうです……それから貴族の臨時會がありました、そして募兵は千人に十人だといふ話です。あ、此度はお目出度う御座います。』

『いや、いや、神樣のお蔭です。所で、軍隊からの報知は何ですかね？』

『わが軍はまた退却しました。今はスモオレンスクの手前に居るといふ話です。』と、ピエールは答へた。』

『やア、　やア！』と、伯爵は言つた。『で、宣言書は何所ですかな？』

『皇帝の詔勅ですか？　えゝ、さやう？』と、言つて、ピエールは衣嚢の中の書類を探した、が見付からなかつた。で、衣嚢の中を探しながら、折りから這入つてきた公爵夫人の手に接吻した、そして、もう唄ふのを止めたが、まだ客間へ出て來なかつたナターシヤを待つらしく、落付かなさうに四邊を見廻はした。『おや、何處へ入れたか忘れて了ひました、』と、彼は言つた。

『まあ、あなたは始終物を失くする方ですね、』と、伯爵夫人は言つた。

ナターシヤが和らいではゐるが動搖した顏付をして這入つてきて、默つてピエールの方を見ながら座つた。彼女が部屋に這入つて來ると急に、それ迄は打ち沈んでゐたピエールの顏が晴々としてきた、そして矢張り書類を探してゐながらも、幾度か彼女の方を、ぢつと見た。

『いや、歸つて來ませう、家に置き忘れて來たに違ひありませんから。勿論……』

『でも、食事のお間に合ひませんよ。』

『や！　それに馭者も歸つて了つた。』

けれどソーニヤは、その書類を探しに玄關へ行つた、と、それはピエールの帽子の中にあつた、彼は叮嚀にそれを帽子の裏に入れて置いたのであつた。ピエールは、直ぐにそれを讀まうとした。

『いや、食事の後で、』と、老伯爵は、それを讀んできかせるのは大きな歡待になると思つてゐるらし

く、かう言つた。

食事の時、彼等は三鞭酒を飲んでかの新らしい聖ゲオルギイの騎士の健康を祝した、それからシンシンは、みんなに町の色々の噂や、ヂエオルヂアの老女公の病氣のことや、ムチイヴイエーがモスクワに居なくなつたことなどを話した、それから或るドイツ人が人民のためにラストプチンの前へ、この男は、Champignion（シャンピニョン）（茵——フラスン人のことを卑めてかう呼んだのである）だと云つて、連れて來られたが、（これはラストプチン伯爵がさう話した）彼はその Champignion をば、單にドイツの古い茵に過ぎないと言つて、逃がしてやつたといふ話を詳しくした。

『奴等は人を捉へてばかり居るんだね。』と、伯爵は言つた。『私は伯爵夫人に餘りフランス語を使つちやいけないと言つて居たんだが、今は丁度その時なんだよ。』

『それに、お聞きになりましたか、』と、シンシンは言つた、『ガリーツイン公爵は、ロシア人の教師を雇ひましたよ——公爵はロシア語を習つてゐるんです。町でフランス語を使ふのは危險になつて來ましたからね。』

『所で、伯爵ピヨートル・キリーロヰツチ、國民兵の動員があつたら、君も馬に乘らなければならないでせう、えゝ？』と、老公爵はピエールに向つて言つた。

ピエールは食事の間中ぼんやりして默つてゐた。彼は何だか解ならないといふやうに伯爵を見た。

『えゝ、えゝ、戰爭に、』と、彼は言つた、『いや！　私は素敵な軍人になれるでせうよ！　だが何も彼もが全く奇異ですね、全く奇異ですね！　實際、私には些とも解りませんよ、私は自分の趣味から云ふと國民兵などには、とてもなれません、でも、今日のやうな時には、誰だつて自分が何うしていゝのか分らないんです。』

食事が終ると、伯爵は心持よく低い椅子の上に身體を据え、そして眞面目な顏をして、上手な讀み手だといふ評判のあるソーニヤに、皇帝の詔勅を、讀んでくれるやうにと頼んだ。

『吾等の主都モスクワに。』

『敵は大軍を率ゐて我等の國境に入り、吾等の愛する祖國を滅さんとしてゐる、』と、ソーニヤは細い聲で正しく讀んだ。伯爵は時々或る條（くだり）に來ると不意に息嘆（ためいき）を吐きながら、眼を瞑（つぶ）つて聽いてゐた。

ナターシヤは眞直に座つて、時々伺ふやうに、うちつけに父からピエールの方をと眺めてゐた。

ピエールは、彼女の眼が自分に向けられて居るのを感じて、四邊（あたり）を見廻さないやうにした。伯爵夫人は、詔勅の中の諸々の嚴格な言葉の一つ〳〵に對して、不賛成らしく、腹立たしげに頭を振つた。

彼女は、凡てそれ等の言葉の中には、自分の息子の身に迫つてゐる危險がなか〳〵去らないといふことの外何ものも無いのを見たのであつた。

シンシンは、皮肉な微笑を湛えて、口を結んでゐた。そして見るから、明らかに何でもそこへ現は

れた最初の問題を——若し宜い言ひがゝりがなかつたら、ソーニヤの朗讀をでも、伯爵夫人の次に言ふことをでも、詔勅そのものをさへも——茶化さうと待ちかまへて居るやうであつた。

ロシアを脅嚇しつゝある危險や、皇帝がモスクワ、殊にその名高い貴族の上に掛けて居る希望などの條を讀んだ後で、ソーニヤは聲を震はせながら——それは主として、みんなが非常に注意して聽いてるためであつた——最後の言葉を讀んだ——

『予は遲滯なく、首都、其他吾が帝國の諸所に入りて熟議し、已に敵の進路を防ぎつゝある者と、敵の現はれるところ、何所なりとも、それと戰ふ準備をなせる者と、即ち凡ての吾が民兵を指揮するであらう。斯くて願ふらくは、敵が以て吾等を脅かさんとする破滅の、却つて敵そのものゝ頭上に跳ね反へり、而してヨウロツパが、束縛より救はれて、ロシアの名をば稱へんことを！』

『全くだ！』と、伯爵は叫んで、その濡ふた眼を開いた、そして強い臭のする鹽類の壜を鼻の所に當てがつたとでもいふやうに、幾度も鼻を鳴らして邪魔をした。彼は言葉をつゞけた、『陛下がさう仰せられさへすれば、吾々は何も彼も惜まず犧牲に供しまして、……』

シンシンが、伯爵の愛國心を茶化さうと用意してゐた戲談を言ふ暇のないうちに、ナターシヤが自分の席から飛び上つて父の傍に駈け寄つた。

『何といふ可愛い人だらう、このお父さんは！』と、彼女は父に接吻しながら叫んだ。そして、この

世の中に新らしい興味を感じ出すと共に復つて來た無意識な艶つぽい樣子をして、再びピエールをチラリと眺めた。

『まア、何といふ愛國家だらう、この女は！』と、シンシンは言つた。

『ちつとも愛國家ぢやないわ、たゞ……』と、ナターシヤは、むつとして言ひ始めた。『あなたは何でも戲談にしてしまふのね、これは全く笑ひ事ぢやありませんよ……』

『笑ひ事？』と、伯爵は繰り返した。『陛下がさう仰せられさへすれば、吾々は皆行くんだ……吾々はドイツ人や何かではないんだからな！』

『で、お氣附きでしたか、』と、ピエールは言つた、『熟議しといふ言葉に？』

『さうだ、確かに、何の爲めにお出でにならうとも……』

その時、誰もかまひ付けなかつたペエチヤが、父の傍に走り寄つた、そして眞赤になつて、或る時は粗暴な、又或時は銳い聲で唐突に言つた、『ねえ、もう、お父さん、僕は決心してゐるんです——それにお母さんも、ねえ、——何でもかんでも僕を軍隊に入れて下さい、それでなければ、駄目なんですから……話はそれだけなんです。』

伯爵夫人はびつくりして、上の方を見つめ、手を握りしめた、そして腹立たしさうに良人に向つて言つた。

『まあ、あなたがあんな事を仰言るもんだから、飛んだことになつたぢやありませんか！』

伯爵はその瞬間に昂奮から覚めた。

『これ、これ、』と、彼は言つた。『大變な軍人になれるだらう！　馬鹿なことを言ふもんぢやない、お前は勉強をしなきやアいかん、』

『馬鹿なことぢやありません、お父さん。フエデイア、オブレンスキイも、僕より年が下なのに、行かうとして居るんです。それは夫れとしても、僕はもう勉強なんか出來ないんです、この場合に……』

ペエチヤは言ひ淀んだ、顔に汗がにじむ程赤くなつて居たが、それでも尚頑固につゞけた……『この國家存亡の秋に。』

『これ、これ、馬鹿な！……』

『でも、お父さんは御自身で何も彼も犧牲にしやうと仰言つたぢやありませんか。』

『ペエチヤ！　お默りなさい、』と、伯爵は叫んで、妻を見た、彼女は眞青な顏をして末の息子を見つめてゐた。

『けれど……こゝに居らつしやるピヨートル・キリーロヰツチがその話をして下さることになつて居るんです……』

『おい、それは馬鹿なことだぞ。未だ乳が口から乾かない癖に、軍隊に這入り度いなんて！　まあ、

まあ、私の言ふことを聞けよ、』さう言つて伯爵は、書類を取り上げ、室を出て行かうとした、多分それをも一度寢る前に書齋で讀むつもりなのである。

『ピヨートル・キリーロヰツチ、煙草をのみませんか……』

ピエールはドギマギして躊躇してゐた。ナターシヤの異常に輝く熱心な眼が、絶えず優しいといふよりは以上に、彼を見詰めて居たのが、彼をそんな風にしたのであつた。

『いや、私はもう歸りませう。……』

『もう歸る？　今夜はずつと居て下さることと思つて居ましたのに。……それに、この頃は餘り來て下さらんぢやないか、なア、それでこの娘が、』と、伯爵は上機嫌で、ナターシヤを見ながら、言つた、『君がゐて下さる時だけ、氣が引き立つのだから……』

『ですが、少し忘れて來たことがありますので、是非とも家へ歸らなければならないのです。……用事です……』と、ピエールは早口に言つた。

『いや、それぢや、さようなら、』と、伯爵は言つて、室を出て行つた。

『何うしてお歸りになるの？　何うしてそんなに、そわ〳〵して居らつしやるの？　何うしてなんですの？』と、ナターシヤは、審しさうな眼付をしてピエールの顏を眺めながら、尋ねた。

『あなたを愛して居るからです！』と、彼は言ひ度かつた、けれど、さうは言はなかつた。彼は涙ぐ

むで來るまで赤くなつて、眼を落した。

『あなたとさう度々お會ひしない方が私にはいゝんですから……といふのは……いや、たゞ用事があるからです……』

『何うしてなんですの？　ね、仰有つて下さい』と、ナターシヤはきつぱりと口を切つた、が直ぐに止めて了つた。二人はギョッとして、互ひに眼を見かはした。ピエールは笑はうと思つたけれど夫れも出來なかつた、彼の微笑は苦痛を現はした、で、彼はナターシヤの手に接吻して一言もいはずに出て行つた。

ピエールはもう二度とラストフ家を訪ねまいと決心した。

二十一

手嚴しい拒絶を受けてから、ペエチヤは自分の部屋へ行き、そこで獨り閉ぢ籠つて、激しく泣いた。家ぢうの者は、彼が茶の間に這入つて來た時に、未だ默つて悄氣かへつて、眼のあたりを涙で汚して居るのに氣が付かないやうな振りをしてゐた。

翌日、皇帝がモスクワに着いた。數人のラストフ家の召使たちは皇帝を見に行く許しを乞ふた。そ

の朝ペエチヤは着物を着るのに長い間かゝつた。彼は大人のやうに頭の毛を梳き、カラアを整へた。鏡の前に立つて眼を据え、身振りをしたり、肩をすくめたりしてから、終ひには誰にも言葉をかけずに、帽子を被つて、人の目につかぬやうに、裏口から出て行つた。ペエチヤは眞直ぐに皇帝の居る所へ行つて、侍從に（ペエチヤは皇帝は常に侍從に取り卷かれて居るものだと想像してゐた）彼、卽ち伯爵ラストフは、若年ではあるけれども、故國の爲めに働き度いといふこと、年が若いからと云つて決して忠君愛國の妨げにはならないといふこと、彼はその用意がちやんと出來てゐるといふことなどを遠慮なく話さうと決心したのであつた……ペエチヤは、着物をきる間に、侍從に言はうと思ふ立派な言葉を十分に用意した。

ペエチヤは、たゞ自分が子供だからといふ理由で、皇帝に對する自分の申し出は成功するものと思ひ込んでゐた（ペエチヤは、實際、自分の年若いのを彼等がどんなに驚くだらうと思つた）が、それでゐて彼は、カラアの具合や、髮の毛の梳き樣や、落ち着いた、優長な歩き振りなどで、大人の風をしようと努めた。所が段々と行くうちに、クレムリンのあたりの次第に出盛つて來る群集を見ると、だん〳〵面白くなつて來た、そして大人の落ちついた優長な特徴を保持することを忘れて了つた。彼はクレムリンに近づくに從つて、壓し潰されないやうにと努め始めた、そして斷乎とした脅すやうな風をして、自分の身體の兩側に肘を突つ張つた。が、斷乎とした態度をしてゐるにも拘らず、トイツキ

イ門ではクレムリンに行くといふペエチヤの愛國的な目的なんか一向知る筈のない群集は、彼を壁へ壓しつけて了つたので、彼は止むを得ず、なさるゝがまゝにその場に立ち縮んで了ひ、馬車が弓形門の下をゴロ〳〵と響を立てゝ通つて行くのを待つて居なければならなかつた。

ペエチアの傍には一人の百性女と、二人の商人と、それから一人の退役の兵卒が立つてゐた。暫らくの間門で待つて居てから、ペエチヤは、馬車が悉く通り過ぎて了ふのを待たうともしないで、他の者の前に進み出ようとした、そして思ひ切つて例の肘を働かし始めたが、直ぐ傍に立つて居たので、最先に突いた百姓女は、腹を立てゝ彼を怒鳴りつけた。

『どうしてお前さんはさう小突くんだい、お坊ちやん？　誰だつて、ぢつと立つてるぢやないか。何故さう押すんだい？』

『どうだらう、みんなが押し合ひを始めたら！』と、下僕はかう言つて、彼も亦肘を働かし始め、ペエチヤをば變な臭のする門の隅つこへと突きやつた。

ペエチヤは兩手で顏の汗を拭ひ、そして濡れたカラア——家で非常に念入りに大人のやうにちやんとしておいた——を眞直にした。

ペエチヤは自分が見苦しくなつたと思つた、こんな風をして侍從の前へ出たら、皇帝に會はしてくれないだらうと心配になつた。けれど、この押し合ひの中では、とても眞直に立つて居ることも出來

なければ他の場所へ變ることも出來なかつた。そこへ馬に乘つて通りかゝつた將軍の一人はラストフ家の知り合ひであつた。ペエチヤはその人に助けて貰ひ度いと思つたが、そんな事をすると、きつと自分の男の價値を下げると考へた。

馬車がすつかり通ぎて了ふと、群集はドツと突貫した、そしてペエチヤは群集と一緒にもう人でいつぱいであつた廣場の中へ押し出されて了つた、廣場の中ばかりでなく、阪の上にも、屋根の上にも、到る所に人々の群がゐた。ペエチヤは廣場に出るや否や、クレムリンぢうに充ち渡る鈴の音と群集の歡呼の聲とを聞いた。

暫らくの間廣場の中の押し合ひが少くなつた、すると忽ち皆の者が一齊に脫帽した、そして再び前の方へ突進した。ペエチヤは呼吸も出來ない程に押し潰されて了つた、絶え間もない叫び聲が起つてゐた——『萬歲！萬歲！萬歲！』

ペエチヤは爪立ちしたり、押したり、捻つたりした、けれど彼は自分の周圍の群集の他何にも見ることが出來なかつた。

あらゆる顏が、同じ興奮と熱中の表情を帶びてゐた。ペエチヤの傍に立つてゐた、或る商人の細君は啜り泣きをした、そして涙がその顏を流れてゐた。

『父よ、天使よ！』と、彼女は指で涙を拭きながら言ひつゞけてゐた。

『萬歳！』と、群集が四方で叫んだ。

一寸の間群集はぢつとしてゐた、それから又も前の方へ突進した。

ペエチヤは、昂奮の餘り我を忘れて了ひ、齒を食ひしばり、眼玉を荒々しくぎよろつかせ、その刹那に自分は素より、誰でも他人を殺しかねない勢で、肘で道を押し開き、『萬歳！』と叫びながら、前の方へ突進した。それと共に同じやうな荒々しい幾つもの顏が『萬歳』といふ同じ叫び聲を揚げて彼の兩側を突進して行つた。

『では、これが皇帝だな！』と、ペエチヤは思つた。『いや、俺が自分で嘆願書を出さうたつて、とても駄目だ、餘り大膽過ぎる！』

それにも拘らず、彼は尙も自暴氣味で無理矢理にその道を進んだ、彼の前にゐる人々の背の向ふにまん中に赤い切れを布いた路のある廣場がちらと見えた。が、その瞬間に群集が波を打つて後戻りを始めた。その前面にゐた警察官が、行列の餘り傍まで押し寄せて來た群集を押し歸したのであつた。皇帝は宮殿からウスペンスキイ・ソボオルへと行く所であつた。ペエチヤは不意に横腹を打たれ、ひどく押し潰されたので、急に眼の前に霧がかゝり、氣を失つて了つた。

彼が我にかへつた時には、一人の、肩の上に灰色の毛の髭のある古ぼけた青い僧衣を着た僧侶が——多分補祭であつたらう——片手で彼を掴まへ、片手で群集を防いでゐた。

『この若い方を押し潰して了つたぞ！』と、補祭は言つてゐた、『何うしたことだ！……靜かに！……押し潰してしまつたぞ、押し潰してしまつたぞ！』

皇帝はウスペンスキイ・ソボオルへ這入つた。群集は又散らばつた、で、補祭は眞青になつて息も絶え絶えなペエチヤを大きな大砲の所へと連れて行つた。數人の人々はペエチヤを憐んだ、すると急に群集はペエチヤの有樣に眼をつけて、その周圍に押しかけて來た。彼の傍に立つて居た人々は、彼の世話をして、その上衣を脫がせ、大砲の一番高い所に彼を坐らせた、そして、その傍にあまり近寄る者を叱つて居た。

『そんな事をしちや壓し殺されるぢやないか。それから何うすると云ふんだ！　人殺しと云ふもんだ！　どうだ、可哀さうに敷布のやうに眞白になつてるぢやないか、』などと口々に言つた。

ペエチヤは直ぐ癒つた、顏色も元の通りになつてきた、痛みもなくなつてきた、そして一寸の間ひどい目に遭つたお蔭で、彼は大砲の上に坐ることが出來た、そこから彼は、歩いて歸ることになつて居る皇帝を見たいと思つた。ペエチヤはもう今では嘆願書を出すといふことなどは考へなかつた。ただ皇帝を見ることさへ出來たら、幸福だと思つたであらう！

ウスペンスキイ・ソボオルで、皇帝の御着を祝する儀式と、それにトルコとの平和を感謝する儀式のある間、群集は廣場に散らばつてゐた、そして行商人が現はれて、果醬や、薑餅や、罌粟種——ペエ

チヤの殊に好きなもの——を呼び寄りしてゐた、又それから人々の間に交はされる普通の話聲なども聞えた。或る商人の細君が、破れた肩掛を見せながら、それが何れほどしたなどと話して居るかと思ふと、一方では近頃は絹物が法外に高くなつたなどと言つて居た。ペエチヤを介抱してくれた補祭は、違つた宗派の僧侶と、誰が今日大僧正猊下と一緒に式に列して居るかなど云ふことを話し會つて居た。補祭は度々「ソボルヌ」(ソボオル所屬の僧)といふ言葉をくり返したが、ペエチヤには何の事やら解らなかつた。二人の若い職人が、胡桃をこり〳〵噛むでゐる何處かの女中たちにからかつてゐた。凡てかういふ會話、殊に女中たちに言ふ戯談などが——ペエチヤの年頃には殊に興味のあるものだが——今は彼の注意を少しもひかなかつた。彼はやはり前と同じく皇帝のことや、皇帝に對する愛で、昂奮してゐた。壓し潰された時の苦痛と驚愕の感じが、熱中して居る感じと混り合つて、この場合の重大であるといふ知覺を強めた。

不意に大砲の響きが城壁から聞えてきた——これはトルコ人との和合の祝砲であつた——で群集は、その發砲の様を見る爲めに城壁に向つて突進した。ペエチヤも、そこへ走つて行き度かつたのだが、この若い貴族を保護して居た補祭が、さうはさせなかつた。祝砲が未だ續いて居るうちに、官吏や、將軍や、侍從たちがウスペンスキイ・ソボオルから駈け出してきた。それから他の人たちが少し緩い足取りで出てきた、またみんなが脫帽し、大砲を見物に出かけた人たちも、走つて歸つてきた。お終ひ

に制服に勳章を着けた四人の人々がソボオルの入口から出てきた。『萬歳！萬歳！』と、群集は再び叫んだ。

『どれですか？　どの方ですか？』と、ペエチアは泣聲で周圍の人々に尋ねた、けれども誰もそれに答へなかつた、誰も彼も怖しく興奮してゐた、で、ペエチヤは四人の中の一人を選んで、眼に涙がにじんで能くは見られなかつたのだが、その人に自分の全注意を集中した、それは皇帝ではなかつたのだけれど、彼は狂氣のやうな聲で『萬歳！』と叫んだ、そして明日は、何うならうとも、必らず軍隊に入らうと決心した。群集は皇帝の後から走つて、宮殿まで從いて行つた、そして散亂し始めた。もう遲かつたが、ペエチヤは何にも食ふものがなかつた、汗は顔からボタ〳〵と落ちた。それでも彼は家へ歸らうとはしなかつた。彼は少數、といつてもまだ可成の多勢の群集と共に、皇帝の晝食の間ぢう宮殿の前に留つて居た。彼は宮殿の窓の方を見上げて、何かあるだらうと待ち望みながら、皇帝を陪食する爲めに入口の方へ馬車を走らせる高官たちも、卓子の傍に侍して居るのが窓にちら〳〵と見える從僕たちも、同じやうに美ましかつた。

皇帝の晝餐の時、ワルーエフが、窓の外を見ながら、斯う言つた。——

『人民たちが未だ陛下を拜し度がつて居ります。』

食事が殆んど終つた頃、皇帝は立ち上つて、未だ乾菓を頬張りながら、露臺の方へと出た。群集

は、——ペエチヤもその眞中にゐた——露臺の方へと突き進んだ。

『天使よ、父よ！　萬歳！』……と、群集は叫んだ。ペエチヤも同じやうに叫んだ。それから再び女たちや、少數の男たちは——ペエチヤもその一人であつた——嬉しさに涙を流した。

皇帝の手にあつた可成り大きな乾菓（ビスケット）の切れが碎けて露臺の欄干の上に落ち、欄干から地上へと落ちた。その一番傍に立つてゐた袖なし外套を着た一人の馭者が、乾菓の切れに飛びついて、それを摑んだ。數人の人たちが、その馭者の方へ突進した。これを見ると皇帝は乾菓の皿をもつて來させて、夫れを露臺から落し始めた。ペエチヤの眼は顏から飛び出すかとさへ思はれた。押し潰されると云ふ慮れが、前よりは更に激しく彼を昂奮させた、で、彼は乾菓を目がけて突進した。何故だか分らなかつたが、兎に角彼は皇帝の手から出る乾菓を取らなければならないと思つた、決して人に後れてはならぬと思つた。彼は突進して、丁度乾菓を取らうとして居た、老婆を突き倒した。が、老婆は、地上には轉んだが自分が敗けてしまつたとは考へなかつた、彼女は兩手に持ち切れないほど乾菓を摑んだ。ペエチヤは老婆の手を自分の膝で突いて、一つの乾菓を引つたくり、そして後れるのを恐れでもするかのやうに急いで再び、皺枯れた聲で『萬歳！』と、叫んだ。

皇帝は這入つて了つた、で、群集の大部分は散り〳〵になつた。

『どうだ、待つてやうと云つたらう——その甲斐があつたぢやないか、』と、群集の中で、諸方り喜ば

しさうな言葉が聞かれた。

ペエチヤも嬉しかつたので、家へ歸るのが悲しかつた、今日の幸福がすつかり濟んで了ふのだと思ふのが、悲しかつた。クレムリンから、ペエチヤは、家には歸らないで、友達のオボレンスキイの所へと行つた。オボレンスキイは十五であつたが、彼も軍隊へ行かうとして居た、家に歸ると直ぐに、ペエチヤは、若し家の者が未だ彼に軍隊行きを許してくれなければ、自分は家を飛び出して了ふつもりだと、斷乎として言つた。そこで、その翌日、伯爵イリヤ・アンドレーキツチは全然承知をして居たといふのではなかつたが、何處か危險の少ない地位が、ペエチヤの爲めに得られるか何うかを調べに出かけた。

二十二

それから、一日おいた次の日の、十五日の朝、數多の馬車がスロボードスキイ宮殿の外に列んだ。幾つかの大廣間はみんな一ぱいになつてゐた。第一の室には、制服を着た貴族たちがゐた、第二の室には、長い髭の、青い總緣（そうべり）を取つた上衣を着て徽章を着けてゐる商人たちがゐた。第一の室は、騷しい聲に充ち、人が歩き廻つてゐた。最も勢力のある高位の人々が皇帝の肖像の下の大きな卓子に向

つて、脊の高い椅子に腰掛けてゐた、が、大部分の貴族たちは廣間の中を歩き廻つてゐた。

ピエールが毎日倶樂部とか、或ひは、その自宅などで見馴れてゐる貴族たちが、すつかり制服を着けてゐた、或る者はカザリン朝の服を、或る者は皇帝パウエルの頃の服を、かと思ふと又アレキサンドル朝の新らしい制服を着けて居る者もあり、又貴族一般の制服を着て居るものもあつた、そして彼等の服裝の一般の性質が、これ等老若の、種々雜多な、見馴れた顏に一種不思議な奇異な樣子を與へた。殊に目立つたのは、鈍よりとした眼をした齒のない、禿頭の、瘠せこけた、皺が寄つたり、黃色くぶて〳〵になつて了つた顏の老人株の連中であつた。さういふ人々は大低坐つたきりで物も言はなかつた、また彼等が歩いたり、話したりするにしても屹度誰か自分たちよりは若い人の所へと行くのであつた。ペエチヤが群集の中で見た多くの顏と同じやうに、凡て此所にゐる人の樣々な顏は、漠然と何事か重大なことを待ちかまへて居るといふ風で、日常の、或は昨日の容貌、即ちボストンの勝負とか、料理人のペトリユウシカとか、ヂナイダ・ドミートリエウナの健康とか、その他さういふ類のことを話し合ふ時の容貌とは、著しい對照を示してゐた。

早朝から彼には餘り緊然し過ぎてゐる着心地の悪い制服を着てゐるピエールは、その部屋の中にゐた。彼の心は興奮してゐた。貴族ばかりではなくて、商人階級——各階級états généraux(一般階級)——を含んだこの異常な集會は彼の心に contrat social(民約篇)やフランス革命の思想全體を失れから

失れへと思ひ起させた。これ等の思想は長い間忘れられて居たのではあるが、しかし彼の魂の奥深く銘じて居たのであつた。皇帝がその人民と共に熟議する爲めに首都に向つて來るところであるといふ、かの詔勅中の陛下の言葉は、この思想を確信させた。そして長い間その來ることを待ちまうけて居た、さういふ方面の重大な或るものが、直ぐ傍に來て居ることを思つて、彼は油斷なく見廻したり、耳を傾けたりした、けれども彼は何處にも自分の考へてゐたやうな思想を發表してゐる者を見なかつた。

皇帝の詔勅が讀まれたので、熱狂を呼び起した、やがて凡ての人々は席を離れて、話をし出した。ピエールは、人々が日常の利害を離れて、皇帝が臨御の節は何處に式部官は立つて居なければならないかとか、いつ皇帝の爲めに舞踏會を開かうかとか、又各地方を別々にしやうか、それとも全縣を一つにしようかとか……いふやうな事ばかりを論議して居る、戰爭とか又は彼等の集會の全目的とかに觸れると、會話が不確かな曖昧なものになるのであつた。誰も彼も、話をするよりは人の話を聞く方に廻り度がる樣子であつた。

男らしい樣子をした、男振りのいゝ、中年の退職海軍將校の制服を着た男が、話をして居た、そして多くの部屋の一つで、少しばかりの群集がその男を取り卷いてゐた。ピエールは、その男を取り圍んで居る集團の中へ這入つて行つて、話を聞き始めた。イリヤ・アンドレーキツチ伯爵は、カザリン朝時代の制服を着け、快よい微笑を浮べて、群集——その凡ての人を彼は知つてゐた——の中を歩き廻

つてゐた。彼も亦この一團へ近づいて、人の話を聞く時にいつもするやうに、機嫌のよい笑みを浮べ、話して居る人の意見に同意して居ることを示す爲めに首肯いてゐた。

退職の海軍將校は非常に憶面なく話をしてゐた（それは聞いて居る人たちの顏の表情を見ても、又ピエールが特に從順で溫和であることを知つて居る人々が、不贊成で、不同意の色を浮べて、その男から遠ざかつて了つたといふ事實を見ても分つた）ピエールは、その集團の眞中へと押し進んで行つて話を聞いた、そして話者は確かに自由主義者ではあるが、ピエールが考へて居るのとは全く違つた意味のものだといふ自信を得た。海軍士官は、ロシアの貴族のよくやる殊更にRの音をかすらして子音を詰めてしまふ、殊更にだら〳〵した、單調な上低音で、よく人が『給仕パイプを！』などゝ呶鳴る時に使ふやうな聲で話してゐた。彼はその聲で放縱な生活の習慣や役人の習慣などに就いて話した。

『スモオレンスクの人民が皇帝に民兵の募集を申し出たとした所が、それがどれ程のことでせう。スモオレンスクの人民は吾々の先例になるでせうか？　よしモスクワの貴族諸君がそれを適當なことゝ考へられるにしても、もつと他の方法で幾らも吾々の君主たる皇帝陛下に對して忠心を示すことが出來るんです。吾々はかの一千八百七年の民兵のことを忘れたでせうか？　あの時にお蔭を蒙つたのは、たゞ乞食坊主の子供か盜賊共ばかりだつたじやありませんか……』

伯爵イリヤ・アンドレーキツチは柔和な微笑を浮べて、贊成するやうに首肯いた。

『且つ吾々の民兵が國家に對して少しでも役に立つたことがあるでせうか？　一寸も無いです！　彼等は唯吾々の農業を衰退させたに過ぎないんです。徵兵の方が餘程宜しい……御覽なさい、民兵といふものは、軍人でもなければ百姓でもない、何でもないんです、たゞ墮落して歸つて來るばかりです。貴族は生命を惜みません。吾々は自ら戰場に行きもし、又新募兵を連れて行もしましやう、皇帝のお言葉さへあるなら、吾々は陛下のために死にます。』と、演說者は、益々熱して來て、斯う言ひ添へた。

イリヤ・アンドレーキツチは、滿足して涎を垂らしてゐた、そしてピエールを輕く突いた、がピエールも何か話し度がつて居る所であつた。彼は、興奮して前の方に進み出た、けれど自分が何故、又何を言はうとして居るのか自分でも分らなかつた。丁度何事か言ひ出さうと口を開かうとすると、その時彼は、かの演說家の傍に立つてゐた、難かしい嚴めしさうな顏をした、齒のまるで無い元老院議官に遮られた。明らかに討論の主導をしたり、動議を持ち出すのに馴れて居るらしく、彼は低い、が、よく聞える聲で話し始めた。

『私が考へまするのに、貴下』と、元老院議官は言つた、齒の無い口をもぐ〳〵させた、『我々がこゝに召集されたのは現在の場合、徵兵をするか民兵を募るか、何れが國家にとつて適當であるかといふことを論ずる爲めではありません吾々が召集されたのは、吾々の君主たる皇帝陛下が畏れ多くも吾々に下し給はつた勅諭にお答へするが爲めであります。徵兵か民兵募集か——いづれが適當な方法かを判斷

するものは、陛下の最高權威にお任せすべきものであります……』

ピエールは、忽ち自分の興奮の正當なる出口を發見した。彼は、貴族の前に横へられて居る義務に對して斯ういふ俗な狹い意見をもつて居る元老院議官に對して憤怒を感じた。ピエールは前に進み出て、その言葉を遮つた。彼は何を自分が言はふとするのか自分にも分らなかつたが、熱心に話し出した、書物中で使ふロシア語を使つたり、時々フランス語になつたりした。

『失禮ですが閣下』と、彼は始めた（ピエールは、この元老議官をよく知つてゐた、けれど、この場合その人に對して儀式張つた言葉を使ふのが必要だと思つた）『私はこの方とは意見を異にするのですが……（ピエールは躊躇した、彼は mon très honorable préopinant（わが最も尊敬する先の演說家）と言ひたかつたのであつた）その方と……私はお名前を知るの光榮を有しませんが……意見を異にするのです、私は貴族の職分は、同情とか熱誠とかを表現するばかりに止らずして、吾々が、吾々の祖國を助け得べき方法を熟慮する爲めに、召集せられたのであると思ふのであります。私が思ひますのには』と、ピエールは、更らに熱心になつて、言つた、『もし皇帝が、吾々は、吾々が皇帝に獻ずる百姓の持主たるに過ぎず、又皇帝に獻ずる吾々自身が chair à canon（大砲の具へ物）たるに過ぎないことを發見せらるゝならば、そして我々に何の意……意……意見をも見出されなかつたならば、必らずやお喜びにはならないでせう……』

多くの人々は、元老院議官の輕蔑したやうな笑ひや、ピエールの言葉の自由さに氣がついて、その集團から少しばかり離れた。イリヤ・アンドレーキツチだけは、唯一人ピエールの言ふ所を喜んで聞いてゐた、丁度彼が海軍士官や元老院議官の演說を喜んで聞いて居たのと同じやうに、又彼がいつもその聞いて居た最後の演說に對してするやうに喜んで聞いて居たのであつた。

『私は、斯ういふ問題を論ずる前に』と、ピエールはつゞけた、『吾々は、吾々がどれ程軍隊を持つて居るのか、吾々の兵卒及び軍隊の狀態が何ういふ風であるのか、それを吾々に通告されんことを、謹んで皇帝に願ふべきである、と思ふのであります、そして……』

ピエールは、この言葉を終り切らないうちに、俄かに一度に三方から攻擊せられた。最も激しい攻擊を加へたのは彼とは常に最も親密な交際をしてゐた、昔からの知己で、ボストンでの仲間であつた、ステパン・ステパノヰツチ・アドラクシンといふ男であつた。ステパン・ステパノヰツチも、勿論、制服を着て居た、で、制服のためか、それとも又他の原因のためか、ピエールには自分の眼の前に居るその男が全く別人のやうに思はれた。ステパン・ステパノヰツチは、老人らしい怒りを顏に浮べて、ピエールを呶鳴り付けた。

『先づ第一にだ、君に言ひたいのは、吾々は皇帝にさういふ質問をする權利をもつてゐないといふことだ、それから第二には、よし貴族がさういふ權利を持つて居るとしても、皇帝がさういふ質問にお

答へなさることは出來ないのだ軍隊の行動は敵の行動に依るのだ、即ち軍隊は增しもすれば減りもするのだ……』

別の聲がアドラクシンを遮つた。言葉をかけた人といふのは、中脊の、ピエールが以前ジプシイの宴會で會つたことのある、骨牌の下手くそとして知つて居た四十男であつた。が、今はその男までも、ピエールの傍へ近寄つて來た時には、その制服の爲めに全く變つて居た。

『さうです、今はそんな議論をして居る場合ではありません、』と、この貴族は言つた。『必要なのは實行です、ロシアには今戰爭が始まつて居るのです。吾々の敵はロシアを滅ぼし、吾々の祖先の墳墓を荒らし、吾々の妻子を奪ひ攫はんとして、侵入して來たのであります。』紳士は自分の胸を一つ叩いた。『吾吾はみんな立たうではありませんか、みんなが一人殘らず戰場に出やうではありませんか、吾々は吾吾の父なる皇帝に從はうではありませんか！』と、彼はその血走つた眼をぎよろつかせながら叫んだ。

數人の贊成する聲が群集の中に聞かれた。『吾々はロシア人である、そして吾々は、信仰と、皇室とそれから祖國とを守る爲めには決して吾々の血を惜まないものであります。で、吾々が若し眞に祖國の子であるならば、無駄話は止さうではありませんか、吾々は如何にロシアを守ることが出來るか、といふことをヨウロツパに示さうではありませんか！』と、紳士は叫んだ。

ピエールは答へようとしたが、一言も口を利くことが出來なかつた。彼は自分の言葉の響が、その

言はうとする意味はさて措き、興奮して居る彼の反對者の聲の響よりも低いのを感じた。

集團の後の方では、イリヤ・アンドレーキツチが頻りに贊成らしく默頭いて居た、數人の聽衆は、その話が終ると演說者の方に快活に肩を向けて、言つた——

『その通りだ、その通りだ、全く！』

ピエールは、自分が少しも金錢や、百姓や、又自分自身を犧牲にすることを嫌ふのではないが、たゞ助力し得るが爲めには、事件の眞の狀態を知つて置かねばならぬのだと言ひたかつたのである。が、彼は言ふことが出來なかつた。

多勢の聲が一緒に物を言つたり、叫んだりするので、イリヤ・アンドレーキツチはみんなに贊成を表して默頭く暇がない位ゐであつた。そして、その集團は大きくなつたり、散々に壞れて了つたり、かと思ふと又一緒に群まつたりした、そして、みんなが一緒にわい〳〵と喋りながら大きな部屋の、大きな机の方へと動いた。

ピエールは、話をつゞけさせられなかつた、人々は亂暴に彼を遮つたり、それのみならず、まるで彼がみんなの共通の敵でゞもあるやうに、彼を突き飛ばしたり、彼に背中を向けたりした。これは何も彼の演說の主意に對して皆が不滿であつたからといふのではない、實際、人々は彼の演說に引續いて澤山の演說があつたのだから、彼の演說は忘れて了つてゐた。しかし群集はいつも愛とか憎みとか

に對して或る形のある目的を持ち度がるものである。ビエールは憎みの目的物となつてしまつたのだ。

多くの演説者が、かの熱心な貴族の後で話したが、みんな同じ調子で話した。雄辯に且つ誠意的な演説をした者もあつた。

『著述家、著述家』といふ叫聲で迎へられた、有名なルスキイ・ヴイエストニツクの主筆、グリンカは、地獄は地獄に依つて打ち拂はれなければならぬ、自分は電光の閃めきや、雷の轟きに對して微笑んでゐた子供を目撃したことがあるが、吾々はそんな子供のやうであつてはならぬ、と言つた。

『さうだ、さうだ、雷の轟きだ！』と、群集の後の方で贊成を表して繰り返す者があつた。

群集は、制服を着、肩章をつけた七十歳位の、半白や禿頭の老貴族たちが座つて居た大きな卓子に近づいた。彼等の殆んど凡てが、自分等の家では道化者と一緒に居たり、倶樂部ではポストンをして遊んで居るのをピエールは見かけてゐた。群集はやはり前と同じやうにガヤ〳〵話しながら、卓子に近づいた、演説者たちは、詰め掛けて來る群集の爲めに背の高い椅子の後に押し込められながら、代り代りに、又何うかすると一度に二人で話をした。ずつと後に立つて居た人たちは、演説者が言はずに殘しておいたことに氣を付けて居て、そして、その缺けた所を急いで補はうとした。別の人たちは、暑さと込合ひの中で、何か自分たちの頭の中から目新らしい考へを見付け出して、それを早く言はうと焦つた。老貴紳たちは互ひに顔を見合はせながら卓子に向つて座つてゐた、そして彼等の多數の表情はひどく暑いといふことの外には何事をも現はしては居なかつた。

けれどもピエールは、興奮してゐた、そしてそれ等の演説の主旨よりも、聲の調子や顏容に多く現はされて居る、何にでも直ぐに應じられると云ふことを見せびらかし度がる一般の感情に、彼も亦感染してゐた。彼は自分の考へを否認はしなかつた、が何だか自分が間違つて居るやうな氣がしたので、自分を辯護しようとした。

『私はたゞ、吾々が何ういふ事が必要であるかを知つてゐれば、更に善い目的の爲めに犧牲になることが出來ると言つただけなんだ、』と、彼は叫んで、他人の聲を呶鳴り鎭めやうと努めた。

唯一人彼の傍に居た老人が振り返つて見たが、直ぐ卓子の他の一端に起つた叫び聲にその注意を奪はれて了つた。

『さうだ、モスクワが降伏するんだ！モスクワが危急に頻するんだ！』と、一人の男が叫んでゐた。

『彼奴は人類の敵だ！』と、他の者が叫んだ。

『僕をして言はしむれば……』

『諸君、諸君は私を壓し潰して了ふ！……』

二十三

その途端に顎の突き出た、鋭い眼容きのラストプチン伯爵が、將官の軍服を着て、リボンを肩から掛け、通路を開いた群集の中を急いで大跨に歩いて來た。

『皇帝陛下が間もなく此所へお見えになりますつたのです。現在我々が置かれてゐるやうな狀態では、これ以上論議の必要はないと私は考へます。皇帝は、畏れ多くも吾々及び商人階級の人々を召集するのを適當とお認めになつたのです』と、ラストプチン伯爵は言つた。『彼等は數百萬金を投げ出すでありませう』(と、彼は商人たちの居る廣間を指さした)『民兵を募集し、又吾々自身の身を惜まないといふことは吾々の義務であります……それが吾々のなし得る最小なのであります。』

相談が卓子に向つて居る有力な貴族たちの間だけに持ち上つた。その相談は始めから終ひまで聲を押へてゐるといふよりより以上であつた。それは殊に、前に行はれた喧騒後を受けて、老耄れた聲が、時に、『贊成です』と、言つたり、かと思ふと、少し言葉を變へようとして、『私も同感です』と言つたりするのが聞えるので、寧ろ陰氣に思はれる位ゐであつた。

書記はモスクワの貴族の決議文を書くやうに命ぜられた、モスクワの貴族は、スモオレンスクのそれと同じく、各千人に對して充分に裝備させた十人の民兵を供給するといふのである。

座つて居た紳士たちは、助かつたと云つたやうな樣子で立ち上つた、椅子のがた〳〵といふ音がし

た、そして、その有力な貴族たちは足を延ばす爲めに歩き廻つて、友達の手を取つたり、互ひに雜談を交したりした。

『陛下！　陛下！』と、いふ聲が不意に室中に聞え渡つた、そして群集はみんな入口の方へと突き進んだ。

皇帝は、自分の爲めに開けられた、兩側に押し詰められた貴族たちの壁の間の、廣い通路を歩いた。誰の顏にも敬虔な、そして畏伏された好奇心が現はれてゐた。ピエールは少し離れて居たので、皇帝が言つたことをスツカリ充分に聞き取ることが出來なかつた。彼はたゞ自分で聞いたことだけから、皇帝は國に迫つてゐる危險や、彼がモスクワの貴族にかけて居る希望に就いて話して居るのだといふことを知つた。誰かの聲が、今しがた貴族たちの間に通過した決議を皇帝に報告した。

『紳士諸君！』と、皇帝の震へる聲が言つた。動搖が群集の中を通り過ぎた、そして、やがて再び靜肅がその上に落ちかゝつた、で、ピエールは、はつきりと溫かく慈悲深い、深く感動した皇帝の聲を聞くことが出來た。

『私は嘗てロシアの貴族の忠節を疑つたことはない。所が今日はそれが私の豫期以上であつたのである。私は祖國の名に於てそれを諸君に感謝します。紳士諸君、吾々をして活動せしめよ——時は何ものよりも一層貴いのである……』

皇帝は話を終つた、群集はその周圍に押し寄せ始めた、熱烈な叫びが四方に聞えた。

『さうだ、何ものよりも一層貴い……皇帝の御言葉だ』と、イリヤ・アンドレーキツチの聲が啜り泣きながら言つた。彼は何にも聞かなかつたが、あらゆるものに自分一流の解釋を下した。

貴族たちの室から、皇帝は商人たちの室へ行つた。彼はそこに十分間ほどゐた。ピエールは他の人人の中に混つて皇帝が眼に感涙を浮べて商人の室から歸つて來るのを見た。人々は後になつて、その時皇帝が商人たちに話を始めるか始めない間に涙が眼から溢れ出で、震へ聲で話しつゞけたといふことを聞いた。ピエールが皇帝の出て來るのを見た時には、皇帝は二人の商人を從へてゐた。その一人はピエールも知つてゐた、肥つた請負師で、今一人は痩せぎすの、黄色い顔をした、細い髯のある、市長であつた。二人とも泣いてゐた。痩せた方の男は眼に涙をためて居たゞけであつたが、太つた請負師の方は子供のやうに啜り泣きながら、絶えず斯う繰り返してゐた。

『命も財産もお取り上げ下さい、陛下！』

ピエールは、その瞬間自分にとつては、如何なる事も何程のことでもなく、又自分は一切のものを犧牲にするつもりで居るのだといふことを示めさうとする望みの外何事をも感じなかつた。そして自分の演説の立憲的な主張が彼にとつて罪の重荷のやうに思はれた。彼はそれを誤聞かす機會を求めた。マモノフ伯爵が一聯隊を組織したといふことを聞いて、ベズウホフも直ちに千人の人と、その武裝と

を差し出すといふことをラストプチン伯爵に傳へた。

老ラストフは涙を流さずには、その起つたことを妻に話すことが出來なかつた、そして彼は、直ちにペエチヤの願ひも許し、自分でペエチヤの名を軍籍に入れる爲めに出かけた。

次の日皇帝は出發て行つた。凡て集まつてゐた貴族たちは、各々その家なり、倶樂部なりに歸つて、制服を脱ぎ捨てた、そして呻りながら、各自の執事たちに民兵徴集の命令を與へ、自分たちのしたことを自ら訓つてゐた。

第二篇

一

ナポーレオンがロシアと戰爭を始めたのは、彼がドレスデンに行かずにはゐられなかつたが爲めであり、そこで彼に拂はれた名聲に眩惑せられたが爲めであり、ボーランドの制服を着たが爲めであり、六日の朝の刺撃の強い力にまゐらせられたが爲めであり、それから始めはクラアギンの前で、後にはバラショフの前で突然憤激したが爲めであつた。

アレキサンドルが凡ての講和を拒絶したのは、彼自身が箇人的に侮辱されたと感じたが爲めであつた。

バアクレイ・ド・トオリイは、自分の義務を盡し、且つは大將軍の名聲を得んが爲めに、能ふ限りの

最上の方法を以て軍隊を指揮した。

ラストフがフランス軍を攻撃したのは、彼が平原を横切つて馳驅したいといふ誘惑に抵抗することが出來なかつたからであつた。

で、この戰爭に參加した無數の人々は皆一樣に、各自個有の性格、習慣、境遇、及目的に從つて、活動したのである。彼等は悉く恐怖や、虛榮や、滿足や、憤怒や、理智的な考察によつて誘導せられて居ながら、各々自分たちのして居ることが分つて居、又自分たちは箇々獨立して行動して居る樣に想像してゐるのだが、實は彼等は悉く歷史の無意識的な道具であつて、彼等自身には分らないが吾々には了解の出來る結果を作つてゐるのだ。斯ういふのが凡ての實行家たちの不變の運命であり、そして彼等の社會上の地位が高ければ高いだけ、彼等は自由が少ないのである。

で、一千八百十二年の主要なる人々は、ずつと前に各自の地位を去つて了つて、その箇人的の利害は跡も殘さずに消えてしまつた、そして、たゞ吾々の前には、時代の歷史的結果の他には何一つ殘つて居ない。所が今、吾々は、ヨウロツパの人々がナポーレオンの主導の下にロシアの中心にまで入り込んで來て、そこで滅びて了はなければならなかつたのだといふことを認めて見るとしやう、すると、この戰爭に參加した人々の、自家撞着した、無意味な、慘酷な行爲が解つてくるのである。

神は、凡てかうした人々を、それ〴〵の目的を達するやうにしむけながら、同時に或る大きな結果

を成就する爲めに共力させてゐるのである。

アレキサンドルも、野戰に參加して居る者は尙更ら）極く微かな豫想だも持つて居ないのである。

今にして見れば一千八百十二年に於けるフランス軍の破滅の原因が何であつたかは吾々にとつて明らかなことである。ナポーレオンのフランス軍勢の破滅の原因は、一方に於ては、時季が遲過ぎたのに、何の準備もなく彼等がロシアの中心に向つて冬期の進軍をしたこと、又他方に於ては、その戰爭がロシアの町々を燒いたが爲めに帶びた性質と、それから敵が百姓たちの心に生ぜしめた憎惡とであつた、といふことに誰も異議を稱へる者はないのである。

けれど、今でも明らかに察せられるやうに、當時にあつては誰一人、八十萬の軍勢を以て、最上の將軍たちに率ゐられて居る、世界に於ける最上の軍が、無經驗な將軍たちに率ゐられて居る、無經驗なその半數のロシア軍と戰つて敗北するより他に仕方がないなどと、豫想する者はなかつた。たゞにこの事がまるで豫想せられなかつたばかりではなく、ロシア側に於て絕えず、あらゆる努力は、實にロシアを救濟し得る唯一の手段を妨げるやうに爲されたのであつた、そしてかのナポーレオンの經驗と、所謂軍事的天才にも拘らず、フランス側に於てなされた各種の努力は、その夏の終りにモスクワに押し寄せること、即ち彼等が破滅に陷ゐるやうになつてゐるその事を行ふやうに爲されたのであつた。

一千八百十二年を書いた各種の歴史的作物に於て、フランスの文士たちは非常に好んで、ナポーレオンがその戰線を延長することの危險に氣がついて居たことや、決戰を望んで居たことや、元帥たちが彼にスモオレンスクに止まるやうに勸告したことを言つてゐるし、又當時に於てすら、この戰爭の實際の危險が分つて居たことを示す爲めに同じやうな叙述を好んでして居る。ロシアの史家たちは更らにその戰爭の始めから、ロシアの中心までナポーレオンを誘き寄せようといふロシア人の戰略が、既に畫策されて居たと言ふのが好きである。そして、この戰略は或る記者に依ればプフウルに歸せられ、他の記者に依れば或るフランス人に歸せられ、尙他の者に依ればバアクレイ・ド・トオリイに歸せられて居る、かと思ふと又或る記者は、この想像せられた計畫を立てた人としてアレキサンドル皇帝その人を擧げ、さういふ行動の徑路が確かに暗示されてゐる日記や、演說や、手紙によつて、各自の意見を支へてゐるのである、併し、フランス人側に於ても實際に起つたことを前知して居たといふ凡てのさういふ暗示が今日さういふ風に顯著に見えるといふのは、たゞ事件が會々その暗示に符合したからと云ふだけに過ぎないのである、若し事件が起らなかつたならば、さういふ暗示も當時流布された數千數百萬の暗示や豫想が、時と共に的中しないものだといふことが分つて來たので、暗默の裡に葬られて了ひ今では忘れられて了つたのと同じやうに、忘れられて了つたに違ひない。由來あらゆる出來事の原因に關しては、實に多數の豫想が件ふもので、何んな風にその事件が終ら

うとも、常に『あの時私は斯うなるだらうと言つたんだ』と、言ふ人が出て來るものである、そして色々の人がなした數多の豫想の中には、その事件に對する全く反對の方向を暗示した數多の豫想があつたといふ事實は全く忘れられて了ふのである。

ナポーレオンが戰線を延長することの危險に氣がついて居たとか、ロシア人が敵をロシアの中心に誘き寄せようといふ計畫をして居たとかいふ考は、明らかに之れを同種類に屬するものである、で、非常な偏見をもつてゐる歷史家でなければ、ナポーレオンと、その元帥たちにさういふ洞察力を歸し、ロシアの將軍たちにさういふ計略を歸することが出來ないのである。

あらゆる事實は、明らかにさういふ見界に反對して居るのである。

フランス人をロシアの中心まで誘き寄せるどころか、ロシア人は全力を盡してフランス人がその國境を越えてより以來、その戰爭の間中絕えず彼等の進軍を防いで居たのである。それから戰線の聯絡を延長することを恐れたどころかナポーレオンは一步一步前進することを戰勝であると喜び、始めの頃の戰爭でしたやうに一生懸命に陣地を据えて戰爭をしやうとはしなかつたのである。

戰爭の極く始めの頃には、我軍は離れ〳〵になつて居た、そして吾々が力をそゝいだ唯一の目的は、それを統一することにあつた、が、若し吾々の目的が退却して敵を國の中心に誘き寄せることにあつたとすれば、軍を統一することから何の益も得られないわけである。皇帝は軍中にあつて寸土もロシ

アの地を譲らないやうに、又一歩も退却しないやうに軍を勵ました。廣大な陣地がプフウルの設計の下にドリツサに築かれた、そして、それ以上退かないつもりであつた。皇帝は退却の行はれる毎に總司令官を叱責してゐる。皇帝は決してモスクワの燒けることや、スモオレンスクに敵が這入つて來ることさへも豫想しなかつたのである、そして軍が再び合した時に、皇帝は、すでにスモオレンスクが占領され、燒かれて了つて、その城壁の前で全軍を合しての戰鬪が出來なかつたのを怒つてゐる。かういふのが皇帝の考であつたのだ、しかしロシアの諸將軍や、全ロシアの人民はそれどころか味方が退却すると思つただけでも大いに怒つたのであつた。

ナポーレオンは、我軍を分裂させておき、ひたすら國の中心へ向つて進軍し、會戰の機會を數回逸してゐる。八月には、彼はスモオレンスクで、もつと進まうといふことの外には何事をも考へてゐなかつた、けれど、吾々が今日見る通り、この進軍は彼の避け難い破滅を意味して居たのである。

種々の事實は、ナポーレオンがモスクワに進軍することの危險を少しも豫想せず、又アレキサンドルやロシアの將軍たちが、その時には夢にもナポーレオンを誘き寄せようなどとは思つて居ないで、却つてその全く反對を目指して居たことを充分明瞭に示して居る。

ナポーレオンがロシアに引き寄せられたのは、誰の計畫に依るものでなく——誰一人夢にもそんなことが出來ると思つたものはないのだ——たゞ單に、戰爭に參加した役者たちの樣々な隱謀や慾望や

活動の複雜した芝居から生じたものに過ぎないのである、その役者たちは、それが何うなるものだとか、それがロシアを救濟する唯一の方法になるとかいふことは一向考へなかつたのだ。

一切のことが偶然に起つて行つたのだ。我軍は戰爭の始めには離れ離れになつてゐた。吾々は明らかに戰つて敵の進軍を防がうとして、その離れ離れになつた軍を連結しやうと努めた、そしこの、遙かに強大なる敵と戰ふことを避けて、軍を連結させようと努めるうちに、吾々は銳角を造つて退却することを止むなくせられた、そしてフランス軍は我々を追つてスモオレンスクに引き寄せられたのである。所が、線になつて退却して居た我軍の兩部分が銳角になつたと言つたゞけでは未だ充分ではない、といふのはフランス軍が我が兩軍の間を進軍してゐたからである。角は尙ほ一層銳どくされるし、かの不人望なドイツ人の、バアクレイ・ド・トオリイが、バグラチオンに嫌はれて居た爲めに、我々は尙更ら退却しなければならなかつたのである、バグラチオンは、全軍の半ばの指揮をして居たのであるが、その指揮の下に立つのを避けるために、全力を盡してバアクレイ・ド・トオリイと合することを延ばしたのだ。

バグラオンは兩軍の合併を遲らせた——もつとも之れは一般の將官たちの主なる目的であつたのだが——彼は進軍するのは軍を危險に曝すことになるといふこと、それに、もつと左へ、南へ退いて、敵の側面及び後方を惱しながら、ウクラインでその軍を補充する方が、自分にとつては一層有利であるといふことを信じたからである。そして彼がこれを信じたといふわけは、軍役に於ても自分の後輩

で、且つ箇人的にも自分の極く嫌ひな、かのドイツ人バアクレイの指揮下に身を置くことを欲しなかつたからである。

皇帝は、軍の愛國的熱誠を鼓舞するが爲めに軍に從つてゐた、けれど或る行動をとる時に當り、彼が居たといふことゝ、又彼の決斷心のなかつたと云ふことゝ、それから彼の周圍にうよ〳〵して居た大勢の相談役と、多くの策略とが、先づ第一軍の方に於ける一切の行動を弛緩させた、で、その軍も退却しなければならなくなつたのである。

ドリツサの陣に於ては、固守することになつてゐた。所がバアクレイは充分の人望を得て居なかつたので、その力も亦限られてゐた。諸軍は散々になり、統一もなく、優れた指揮者もなかつた。バアクレイは人望がなかつた。けれども一方では斯ういふ混亂や分離や、さてはドイツ人の司令官の不人望が、不決斷や、戰爭の回避に——若し諸軍が統一して居て、バアクレイでない誰かゞ軍を指揮したとすれば、戰爭は必らず避け得なかつたであらう——導いたのである。そして又他方に於ては、それが凡て益々ドイツ人に對する反感と愛國熱とを助長したのである。

遂に皇帝は軍を去つた、彼を遠ざける唯一の適當な口實として、全國民擧つて戰爭をするやうに皇

帝は兩都府の人民を勵まさねばならぬといふ都合のいゝ勸告がなされたのである。そして皇帝がモスクワへ行つたことは、實にロシア軍の力を三倍した。皇帝は、總司令官は單獨に活動することが出來、從つて、もつと斷然たる處置が取れるであらうと思つて、軍を去つたのである。所が司令官の地位は益々弱くなり、更らに困難にさへもなつて來た。ベニグゼンや、大公や、その他幕僚の將軍たちの一群が、未だ軍に殘つて居て、總司令官の行動を見張りし、且つもつと大きな活動へと彼を强ひたのであつた。そこでバアクレイは、凡て斯ういふ「皇帝代りの眼」の監視の下に行動することはこれ迄よりも更に不自由に感じたので、一層扣へ目になり、決戰を避けるやうになり、そして用心深く、引つ込み思案になつたのである。大公は謀反だといふやうなことをほのめかして、大會戰を要求した。ルボミルスキイや、ブロンニツツキイや、ヴロニツツキイや、その他さういふ風の人たちは、さういふ混雜を大きくしたので、その結果終にバアクレイは、ペテルブルグの皇帝に宛て〻手紙を送ることに托して、ポーランドの將軍たちを遠ざけ、それからベニグセンや大公などとは公びらに論爭を始めることになつた。

スモオレンスクに於ては、バグラチオンがその反對を望んで居たにも拘らず、諸軍は終に聯合した。バグラチオンは、馬車をバアクレイの住んで居た家へと走らせた。バアクレイは官制の肩章をつけて出て來て、故參將校なるバグラチオンに挨拶をし、報告をした。バグラチオンはバアクレイの貓

の向ふを張つて、自分の方が故參であるにも拘らず、バアクレイを上官として取扱つた、併し彼は內心では、いつもよりも一層バアクレイとすれ〳〵になつて居た。皇帝の命令で、彼は自分で皇帝に報告した、そしてアラクチエーフに斯う書いた。

『わが君主の意志は法律である、けれども僕は何うしても大臣(かう彼はバアクレイのことを呼んだ)と一緒に働くことは出來ない。願はくば、僕をどこか他へ遣つていたゞきたい、假令ひ一聯隊の長としてゞも宜い、がこゝでは僕は何事も手につかない。總司令部にはドイツ人がうよ〳〵してゐる、こんな所ではロシア人は生きて居られない、それに何事につけても、ちつとも締りがないのだ。僕はわが君主とわが國の爲めに盡して居るつもりであつたのに、事實はバアクレイに仕へて居る事になつてゐるのだ。僕は何うしても默つては居られない。』

プロンニツツキイの徒や、ウインツエンゲローデの徒や、その他さういふ風な徒輩は、二人の指揮官の間の反目を一層激しくした、で、これ迄よりは尙更ら統一がなくなつた。スモオレンスクの前でフランス軍を攻撃すべき準備がなされた。一人の將官が陣地の視察に派遣された。所が、この將官は、バアクレイを憎んで居たので、自分の友達の或る軍團長を訪ね、一緒に終日を過した、そして歸つて來て、見もしない想像の戰場を色々の點から非難した。

戰爭の好適地に關して種々な議論や陰謀が續出して居るうちに、又吾々がフランス軍の在り所を探したり、その進軍の方向を取り違へたりして居るうちに、フランス軍はネヴイエロウスキイ枝隊を攻撃し、そしてスモオレンスクの城壁の下まで進んで來たのであつた。

吾々は意外にも、吾々の連絡を救ふ爲めにスモオレンスクで戰はねばならぬことゝなつた。戰鬪が始まつた。兩方で數千の人間が殺された。

スモオレンスクは、皇帝及び全人民の意志に反いて捨てられた。が、スモオレンスクは知事に欺かれた住民に燒かれた。そして、それ等の亡ぼされた住民たちは、ロシアの他の諸都市に先例を殘しておき、非常な損害で、敵に對する憎惡の心を燃やしつゝ、モスクワへと逃げて行つた。ナポーレオンは進軍する、わが軍は退却する、かくてナポーレオンを打ち破ることゝなる、その結果に達するのである。

二

息子が出發した翌日、公爵ニコライ・アンドレーイツチは、公爵令孃マリヤを呼びよせた。

『どうだ、これでお前は滿足したかい?』と、彼はマリヤに言つた。『お前は私と倅とを喧嘩させた!お前は滿足かい? それがお前の望みだつたのだな! 滿足したかい?……私には悲しいことだ、

悲しいことだ。私はもう年をとつて弱くもなつてゐる、それだのにお前はそんなことを望んで居たのだ。さア、さア、勝手に思ふさま喜べ……』」

で、その後、一週間といふものは公爵令嬢マリヤは二度と父に會はなかつた。彼は病氣をして居て自分の書齋を離れなかつたのである。

公爵令嬢マリヤは、意外にも、この病氣の間中老公爵はブリアンス嬢をも自分の部屋に入れなかつたことを知つたチホンだけが唯一人彼の世話をしてゐた。

一週間後に公爵は、再び姿を現はして、以前と同様な生活を始め、農場の建物や花園の設計に著しい精力を示した、そしてブリアンヌ嬢との關係はすつかり斷つて了つた。公爵令嬢マリヤに對する彼の冷淡な調子や樣子は、かう言つてゐるやうであつた。

『どうだい、お前は私を謀つて、私とあのフランス女との關係に就いてアンドレー公爵に嘘を吐いた、そして私と彼とを喧嘩させたが、どうだい、私はお前なぞが居なくても、それから又あのフランス女なぞが居なくても、不自由はしないのだよ。』

半日は、公爵令嬢マリヤはニコルーシュカと過して、彼にロシア語の學課を教へたり、他の學課の稽古をしてやつたり、それからデツサルと話をしたりして暮した。殘りの半日は讀書をしたり、乳母に會つたり、時々彼女を訪ねるために裏梯子からやつて來る「神の人々」に會つたりして暮した。

戰爭に關しては、公爵令嬢マリヤは一般の女たちが戰爭に對して考へて居るのと同じやうな考を持つてゐた。彼女は戰線に立つて居る自分の兄のことを心配した、それから又、よくは解らないが、互ひに殺戮し合ふといふやうなことになつて行く、人間の殘酷性に戰慄した。しかし彼女は別に今度の戰爭の意味に就いて、これといふ意見を持つては居なかつたが、以前の多くの戰爭などと同じやうに思つてゐた。

彼女は、今度の戰爭の意味に就いて、これといふ考へを持つて居なかつたが、彼女と始終一所に居るデツサルは、戰爭の經過に熱烈な興味をもつて居て、その問題に關する自分の意見を彼女に話して聞かせやうとした、それから『神の人々』は揃つて、恐れながら、非基督教徒がやつて來るといふ百姓仲間の噂を彼等獨特の話し振りで彼女に話して聞かせた、それから又、今は公爵夫人ドルベツカーヤとなつて居るジュリイは、近頃又文通を始めて、斷えずモスクワから愛國的な手紙を送つてよこした。

『私はロシヤ語で手紙をさし上げます、わが懷しき友よ』と、ジュリイは書いた、『それは凡てのフランス人や、その國語に對しても亦憎しみを感じて居るからなの。私はフランス語の話されて居るのは、聞くだけでも厭なんですの……モスクワでは、私たちはみんな、私たちの崇拜する皇帝陛下のために夢中になつて居ます。』

『私の氣の毒な良人は佗しいユデヤ人の宿屋で困難と饑餓とを忍んで居ますが、良人から私の受

け取ります報告は唯私の熱情を増させるばかりですわ。』

『あなたは屹度あのラーエウスキイが、二人の子を抱いて、一所に死なう、決して逡巡してはならぬぞ」と、言つた、勇ましい行ひのことをお聞きになつたでございませう。そして全く敵は味方の二倍の兵力だつたにも拘らず味方は實際逡巡などはしなかつたのです。』

『私たちは、家にあつて出來る限りのことをして時を過して居ます、戰時には、戰時らしくしなければなりませんわね。公爵夫人アリイナとソフイイとが終日私と一緒に居ます、そして私たち、生きた良人を持つて居る不幸な寡婦たちは、綿撒絲をほぐしながら面白い話をして居ます。たゞ私の好きなあなたが居らつしやらないのが、殘念ですわ。』云々

公爵令嬢マリヤが戰爭の意味を會得することが出來なかつた主な原因は、老公爵が決してその話をしたことがなく、のみならず戰爭があるといふことまでも否定して、食事の時にデツサルが戰爭の話などをしても、それを冷かして了ふといふことにあつた。公爵の調子が如何にも落ち付いて居て、自信がありさうなので、公爵令嬢マリヤは譯もなくそれを信じて了つたのであつた。

七月の月中は、老公爵はひどく元氣で、そして陽氣でさへあつた。彼は、更らにもう一つの新らしい花園と、召使たちの住む新らしい側部屋とを設計した。父のことで公爵令嬢マリヤが氣にかゝつた唯一つの事は、彼がよく眠れないで、書齋で眠るといふ昔からの習慣を止め、寢床を毎日新らしい場

所にこしらへさせたことであつた。或る晩は旅行用の寢臺を廊下に設けさせるかと思ふと、その次の晩は、ブリアンス嬢に代つて彼に侍するやうになつた、少年のペトルーシュカが、高い聲で本を讀んで聞かせるのを聞きながら、客間の長椅子か寢椅子かに、着物を着たまゝ居眠りをして過した、それから又食堂で一夜を過さうとすることもあつた。

八月の一日に、第二の手紙がアンドレー公爵から來た。家を出てから聞もなくよこした、第一の手紙には、アンドレー公爵は言葉を卑しうして、父に向つて云ひ過ぎたことの許しを乞ひ、自分を惡く思はないでくれと願つてきた。その手紙に對しては、老公爵は優しい返事を送り、その時以來かのフランス女を遠ざけたのである。

アンドレー公爵の第二の手紙は、ウイテブスクをフランス軍が占領した後、その近くで書かれたものである。それには、說明のために描いた圖面の附いてゐる全體の戰爭に就いての簡單な話や、それから今後起るだらうと思はれる徑路に就いての考などが記されてあつた。その手紙の中で、アンドレー公爵は戰爭の舞臺に接近した、敵の進んで來る直接の筋道にゐることは、都合が惡るからうと父に說いて、モスクワへ移るやうにと勸告した。

その日の晝餐の時、デツサルが既にフランス軍がウイテブスクに侵入したとのことだといふのを聞いて、老公爵はアンドレー公爵の手紙を思ひ出した。

『私は今日アンドレー公爵からの手紙で其事を知つたよ、』と、彼は公爵令嬢マリヤに言つた、『お前あの手紙を讀んだかい？』

『いゝえ、mon pere(お父様)』と、公爵令嬢はおづ〳〵と答へた。彼女は、つひその時まで手紙のことなどは聞かなかつたのだから、その手紙が讀める筈がなかつた。

『今度の戰爭のことを書いて來たよ、』と、公爵は、現在の戰爭のことを口にする時にはいつでも習慣になつて居る、侮蔑したやうな微笑を浮べながら言つた。

『それは、屹度面白いでせうね、』と、デツサルは言つた。『アンドレー公爵は、よく分る位置に居られますから……』

『まア、屹度面白いわ！』と、ブリアンス嬢が言つた。『あの小さい机の上の文鎭の下にあるから。』

『行つて取つて來て下さらんか、』と、老公爵はブリアンス嬢に言つた。『お前走つて行つて來てくれ、ミハイル・イワーニッチ！』

ブリアンス嬢は熱心になつて跳び上つた。

ミハイル・イワーニッチは立ち上つて、書齋の方へ行つた。が、彼が部屋を出るか出ないうちに、老公爵は『あゝ、いや』と、老公爵は眉をひそめながら叫んだ。『お前走つて行つて來てくれ、ミハイル・イワーニッチ！』

公爵は神經的に自分の周圍を見廻しながら、食事のナプキンを投げ捨てゝ、自分で出かけて行つた。

『彼奴等(あいつら)には何にも出來ない、いつも散らかすだけのことなんだから。』

彼が部屋を出て行くと、公爵令嬢マリヤもデツサルも、ブリアンス嬢も、それから小さいニコールシュカまでも一同互ひに物も言はないで顏を見合はせた。老公爵はミハイル・イワーニッチを連れて、手紙と見取圖とを持つて、急ぎ足に歸つて來たが、それを自分の傍に置いて、食事の間は誰にも讀ませなかつた。

みんなが客間に行つて了ふと、彼は手紙を公爵令嬢マリヤに渡し、そして自分の前には新らしい建物の見取圖を擴げて、それを見詰めながら、彼女に聲を上げて手紙を讀むやうにと命じた。

手紙を讀み終ると、公爵令嬢マリヤは、不審さうに父を眺めた。明らかに自分勝手な考へに耽つて居るらしく、見取圖を見詰めてゐた。

『それに就いてあなたは何を思召しになりますか、公爵？』と、デツサルは思ひ切つて斯う尋ねた。

『私(わし)かい？　え？……』と、老公爵は苦しい努力をして自分の心を引き立てるといふ風で、建物の見取圖から眼を離さずに言つた。

『戰場がこの邊に接近して來るのは確からしいんですが……』

『は、は、は！戰場かね！』と、老公爵は言つた。『戰場はポーランドに限られて居るのだ、敵は決して

ニイメン河を越て進んで來る氣遣ひはない、私はこれ迄何時もさう言つてゐたが、今もやはりさうだ。』

デツサルは、敵が既にドニイペル河までも來て居るのに、まだニイメン河のことを言つて居る公爵を、呆れ返つて見つめた。しかし公爵令嬢マリヤは、ニイメン河の地理上の位置も忘れて了つて、父の言つて居ることが眞實だと思つてゐた。

『雪が溶けるやうになつたら、奴等はボーランドの沼の中に溺れて了ふだらう。奴等がたゞそれに氣が付かぬだけのことだ。』と、老公爵は明らかに、自分には未だ非常に近いことのやうに思はれて居る、一千八百七年の戰役のことを考へながら、言つた。『ベニグゼンが、もつと早くプルシアに入るべき筈だつたのだ、さうすれば事態が全く變つたものになつて居たに違ひないのだ……』

『ですが、公爵！』と、デツサルはおづ〳〵と言つた、『手紙にはヴイテブスクのことが書いてありましたが……』

『あゝ、手紙？　さうだ……』と、公爵は不愉快さうに言つた、『さうだ……さうだ……』

彼の顏は急に陰鬱な表情を帶びた。間をおいて、『さうだ、あの手紙に、フランス軍が擊破されたと、書いてある。何とかいふ河でだつたな？』

デツサルは眼を落した。『公爵は、そんなことは少しも言つておられません、』と、彼は穩かに言つた、『何、言つてゐない？　ぢやア、私の空想だといふのかな。』

みんなが暫らくの間默つてゐた。

『さうだ……さうだ……なア、ミハイル・イワーニツチ』と、彼は急に頭を擧げて建物の見取圖を指しながら言つた、『お前はこれを何ういふ風に變へたらいゝと思ふか聞かしてくれ……』

ミハイル・イワーニツチは見取圖の傍へ行つた、と、老公爵は、その事に就いて彼に話しかけながら、やがて公爵令嬢マリヤとデツサルとに腹立たしさうな一瞥を投げて、自分の部屋へ行つて了つた。

公爵令嬢マリヤは父を見た時のデツサルの當惑した吃驚した表情を見た。彼女はデツサルの無言であるのに氣が付いた、それから父が息子の手紙を客間の卓子の上に置き忘れて行つたといふ事實に驚かされた。けれども彼女は、そのことに就いて話したり、デツサルにその當惑したやうな沈默の原因を尋ねたりするのを恐れた、それを考へるだけでも恐ろしかつた。

夜になると、卓子の上に置き忘れた手紙のことを聞きに、ミハイル・イワーニツチが公爵から公爵令嬢マリヤの所へよこされた。公爵令嬢マリヤは彼に手紙を渡した、そして、それは隨分彼女にとつて厭なことではあつたが、思ひ切つて、父は今何をして居るのかと訊いた。

『矢張り大變お忙しう御座います、』と、ミハイル・イワーニツチは皮肉の帶びた尊敬の調子で、言つた、それが彼女を眞青にさせた。『新らしい側部屋のことで非常に苦心してゐらつしやいます。少し讀書をなさいましたが、只今は』——ミハイル・イワーニツチは聲を低くして——『机に向つて遺言書を

書いてゐらつしやいます、多分さうだらうと思ひますが。』

近頃の老公爵の氣に入つた仕事の一つは、その死後に殘して置かうと思つて居る書類を整理することであつた、それを彼は『自分の遺言書』と呼んでゐた。

『それからアルパチイーチはスモレンスクに遣られることになつたの?』と、公爵令嬢マリヤは尋ねた。

『左樣です、アルパチイーチは先程から公爵の御命令を待つて居ります。』

三

ミハイル・イワーニッチが手紙を持つて書齋に歸つて行つた時には、老公爵は眼鏡をかけ、眼には光避(あかりよ)けをつけ蠟燭には蔽ひをして、書類に取り卷かれながら、抽出を開けた机の前の、ずつと離れた所に座つてゐた。彼は一種嚴肅な態度で、書類(それを彼は意見書と呼んでゐた)を讀んでゐた、それは彼の死後皇帝に差出す筈になつてゐた。

ミハイル・イワーニッチが這入つて行つた時には、公爵は今讀んで居るものを書いた頃の思ひ出を呼び起して、眼に淚を貯めてゐた。彼はミハイル・イワーニッチの手から手紙を受け取つて、それを衣嚢に入れ、書類を疊んだ、それから長い間彼に會はうとして待つて居たアルパチイーチを呼び入れた。

公爵は、一枚の紙片にスモオレンスクでして欲しいと思ふことを書き付けてから、室の中を彼方此方と歩き出した、そして扉口に立つて居るアルパチイーチに色々の指圖をした。

『第一に書簡用紙だ、いゝか、八帖だよ、この見本通りの、ね、緣金のだ……この通りのと間違はんやうに、見本を持つて行け、假漆(ラアニッシュ)に、封蠟——』と、ミハイル・イワーニッチの覺書を辿りながら言つた。

彼は室の中を彼方此方と歩きまわつて、覺書きに眼を通してゐた。

『それからこの登錄に關する手紙は知事に直接(ぢか)に渡すんだぞ。』

それから新築の建物の戸の閂をも命ぜられたが、それは老公爵が自身で工夫した、新型のものでなければならぬといふことであつた。それから自分の遺言書を入れる鐵製の箱を命ぜられた。

アルパチイーチに色々と指圖をするのに二時間かゝつた。公爵は、それでも未だ行かせようとはしなかつた。彼は座つて、考へに沈んで居たが、やがて眼を閉ぢて、居睡りをやり出したので、アルパチイーチは微かに身動きをした。『よし、行け、行け、』と、老公爵は言つた。『若し又何か用事がある場合には呼びに遣るから。』

アルパチイーチは出て行つた。公爵は再び机の所に歸つて、それを一瞥し、書類の上に手をやつた

が、再びそれを閉ぢて、今度は知事へ手紙を書くために卓子に向つて腰を下ろした。

彼がその手紙の封をして立ち上つた時は、遅かつた。何だか眠くなつて來たが、眠つて見れば眠れないで、寢床の中で最もみぢめな考へに襲はれるに定つて居るといふことを彼は知つてゐた。公爵はチホンを呼んだ、そして其夜寢床をとる場所を彼に言ふ爲めに一緒に室々をズツと歩いた。彼はまわり、隅々を悉く調べた。

彼の氣に入つた場所は一つもなかつた、殊に氣に入らなかつたのは、彼がいつも用ひ馴れて居た書齋の中の寢床であつた。その寢床は彼にとつて恐ろしいものとなつてゐた、それは多分その上に横になつて考へた樣々の苦しい妄想の爲めであつたらう。全くこゝが宜いと云ふ所はなかつたが、多くの中で一ばんいゝのは應接室のピアノの後の隅であつた、そこでは未だ一度も寢たことがなかつた。

チホンは從僕たちと寢臺を運んで來て、それをちやんと置きにかゝつた。

『それぢや不可ん、それぢや不可ん！』と、老公爵は叫んだ。自ら手をかけて、彼はその寢床を隅から一吋程離して見たが、直ぐに又元の通りにくつ付けた。

『うむ、やつと、何も彼もして了つた、さあ寢ようかな、』と、公爵は思つた、それから彼はチホンに自分の着物を脫がさせにかゝつた。

上衣や洋袴を脫ぐ爲めにしなければならなかつた骨折りの苦痛に顏を顰めながら、公爵は着物を脫いで、どしりと寢床の上に身體を落した、それから自分の黃色い、凋びた脛を蔑すむやうに見詰めながら、考へに沈む樣子であつたが、實際は、本當に考へて居るのではなく、唯その足を持ち上げて、それを寢床の中に横たへる努力をする前に、一寸休んで居るといふに過ぎなかつた。『あゝあ、何といふ苦しいことだ！　あゝあ、こんな骨折りが直きに終つて了へたら、お前が私を樂にさしてくれたら！』と、彼は思ひ耽つた。唇を固く結び、二萬度目の努力をやつて、横になつた。が、彼が未だ横になるかならないうちに、突然寢床が彼の下で規則正しく彼方此方に搖れ、上下左右に動くやうに思はれた。この感じを殆んど毎晩經驗するのである。彼は自然に閉ぢさうになつて來た兩眼をば見開いた。

『ちつとも安眠めん、糞！』と、彼は呻いて、誰とも知れない人間に對して心の中で怒つた。『さうだ、さうだ何か他に大切なことがあつたのだ——寢床の中で考へやうとして取つて置いた何か非常に重大なことがあつたのだ。門だつたかな？　いや、門のことはもう言つた。いや、何か、何か客間の中にあつたのだ。公爵令孃マリヤが何かくだらないことを言つて居たぞ。デツサルが——あいつは馬鹿だ——何か、何か私の衣囊の中にあるものゝことを言つたぞ——思ひ出せない。』

『チシュカ！　書發の時に何の話をしたつけかな？』

『公爵ミハイルのことを……』

『止せ、止せ』——と、公爵は卓子の上を手でドンと叩いた。『さうだ、分つた、アンドレー公爵の手紙のことだ。公爵令嬢マリヤがそれを讀んだつけな、デツサルがヴイテブスクのことで何か言つて居た。ひとつ之れを讀んで見やう。』

彼はチホンに命じて、自分の衣嚢から手紙を取り出させ、それからレモナアドと螺旋形の蠟燭とを載つて居る小さな卓子を傍に寄せさせ、眼鏡をかけて讀み出した。さうして夜の靜寂な中に、綠の傘の下の仄かな光の中に、その手紙を讀んで居るうちに、漸く彼は一寸の間その意味を會得した。

『フランス軍はヴイテブスクに居る、四日の進軍で彼等はスモオレンスクに達することが出來る、彼等はもう其所に達して居るかも知れん。チシュカ！』チホンは飛び上つた。『いや、何でもない、何でもない！』と、彼は叫んだ。

彼は蠟燭立ての下に手紙を置いて、眼を閉ぢた。すると心の前にダニユウブ河や、晴れた眞晝時や、鷹や、ロシアの陣營や、それから彼、卽ち額には皺がなく、勇敢で、樂しい、當年の赤ら顏の若い將校が、ポチョームキンの花やかな色の天幕の中に這入つて行く所や、それから今も尙ほ、その當時の如く激しく自分の心の中に動いて居る、所謂お氣に入りの男に對する燃えるやうな嫉妬の情などが起つてきた。それから彼はポチョームキンとの初めての會見の時に言はれた言葉を一つ一つ思ひ出した。それから次ぎに、青白い、太つた顏の、圓々とした背の低い婦人——それは國母陛下である——を思ひ浮べた、畏れ多くも初めて彼に拜謁を賜つた時の、陛下の微笑や、言葉やを思ひ浮べた。それから又棺車に横たへられた時の陛下の顏、それから陛下の手に接吻する權利に就いて、棺の上でズウホフと喧嘩をしたことなどを思ひ出した。

『おゝ、急げ、急いであの時代に歸れたなら、そして、おゝ、現在が瞬く間に過ぎ去つて、平和の中に安息めたなら！』

四

公爵ニコライ・アンドレー斗ツチ・バルコンスキイの領地なる、ルイシーヤ・ゴオルイは、スモオレンスクの稍や後方六十露里、モスクワ街道から三露里のところにあつた。

老公爵がアルパチイーチにいろ〳〵の指圖を與へたその晩、デツサルは公爵令嬢マリヤに少し話したいことがあると言つた、アンドレー公爵の手紙に依れば、ルイシーヤ・ゴオルイに留つて居ては何んな危險がないとも限らないといふことは明らかであるが、老公爻は餘り身體もよくないのに少しも身を安全にしようとする手段を取らない、といふことを彼女に言つて、デツサルは彼女が自分で手紙を書き、それをアルパチイーチにスモレンスクの知事の所へ持たして遣つて、事態の模樣と、ルイシーヤ・

ゴオルイがどの位の危険に迫つて居るかといふことを問合はせては何うかと鄭寧に彼女に忠告した。

デツサルは公爵令嬢マリヤのために知事宛ての手紙を書き、マリヤがそれに署名した、そして、その手紙をアルパチイーチに渡して、それを知事に與へるやう、且つ又若し危險だといふやうな場合には、出來るだけ急いで歸つて來るやうになどと指圖をした。

色々の命令をすつかり受けて了ふと、アルパチイーチは白い海狸の帽子——公爵からの下り物——を冠り、手に杖を持ち、丁度公爵のやうに家内中の者に送られて、家を出で、三頭のすべ〳〵した葦毛の馬の引いて居る皮張りの二輪馬車に乘り込んだ。

ベルが縛り付けられて、紙を詰め込まれた。公爵は何人にもルイシーヤ・ゴオルイでベルを付けて馬車を走らせることを許さなかつたのである。しかしアルパチイーチは長い旅に出かける時にはベルを鳴らすのが好きであつた。凡てのアルパチイーチの子分たちや、會計室の書記や、從僕たちの料理人や、料理人頭や、二人の老婆や、馬丁や、馭者やその他樣々の召使たちが彼を見送つた。

彼の娘は更紗を被せた、羽毛入りの枕を彼の尻の下と背の後とに置いた。彼の義妹に當る老婆は手早く色々なものを一ぱい入れたハンカチーフ包みを投げ入れた。馭者の一人が彼の乘るのを助けた。

『やれ〳〵、女どもの騷ぎやうと云つたら！　女どもと云ふものは、女どもと云ふものは！』と、アルパチイーチは老公爵がいつも言ふやうに、ハツハと息を切らして、早口に言つた。彼は二輪馬車の中

に座つて、會計室の書記に、畑でして置かなければならない仕事に就いて、最後の指圖を與へた。それから老公爵の眞似を止め、禿頭から帽子をとつて、三度十字を切つた。

『何かあつたらね……あなた歸つて入らつしやいよ、ヤコフ・アルパチイーチ、後生ですから、私たちのことを忘れないで下さいよ。』と、妻は彼を呼びかけて、戰爭のことや、敵が近づいて居るといふ噂を話した。

『おゝ、あの女どもの、女どもの騷ぎ！』と、アルパチイーチは馬車を走らせながら斯う自分に呟いて、周圍の畑中を見廻した。彼は、ライ麥が黃色く色づき、燕麥が未だ綠で、それから其所此所に未だ黑い地面が點在して、そこでは人々が漸く二回目の耕作にとりかゝつて居るのを見た、その年は非常な豐作であつた麥の收獲を賞めたり、所々ではもう牧穫の始つて居るライ麥の畑を眺めたり、本當の百姓のやうに、種蒔と收穫とを考へたり、かと思ふと、公爵から受けた指圖の中で、何か忘れて了つたものがありはしないかなどゝ疑つたりしながら、乘り進んで行つた。

彼は馬に飼料をやる爲めに途中で二度止つて、八月四日の夕方町に到着した。

途中でアルパチイーチは輜重馬車と軍隊とに會つて、それを追ひ越した。スモオレンスクに這入つて行くと、遠くに銃聲を聞いたが、その響には殆んど注意を拂はなかつた、何よりも彼を驚かしたものは、スモオレンスクの直ぐ近くで、馬糧にするために立派な燕麥の畑が數名の兵卒に依つ

て刈り取られて居ることであつた。そして、その畑の眞中にも天幕が張られてあつた。これはアルパチイーチの目をひいたが、彼は自分の用事を考へて居るうちに、直ぐそれを忘れて了つた。

アルパチイーチの生涯のすべての利害は、三十年以上も、公爵の意見に依つて縛られ居た、そして彼は、その制限を踏み越えたことはなかつた。公爵の命令を實行することに何の關係もないことは、アルパチイーチに取つても亦何の利害もなければ、實際存在しても居ないのであつた。

八月の四日の夕方スモオレンスクに着くと、アルパチイーチはこの三十年の間いつも泊ることになつて居た宿屋に泊つた。その宿屋はドニイペルの對岸のガツチエンスキイ郊外にあつて、昔の門番のフエラポントフがやつてゐた。十二年前フエラポントフはアルパチイーチの世話で老公爵から材木を買つて儲けて、商賣を始めたのだが、今では家を一軒と、宿屋を一軒と、穀物店一軒とを、この町に持つてゐた。フエラポントフは丈夫な、色の黑い、四十恰好の百姓で、厚ぼつたい唇と、厚ぼつた い段鼻と、黑くて迫つて居る眉の上の、同じやうに段のある瘤と、それから丸々した腹とを持つてゐた。

彼は往來を眺められる自分の店の前に、模様更紗の襯衣を着たまゝで立つてゐた。アルパチイーチを見て、其方へ近づいた。

『よくお出でなすつたヤコフ、アルパチイーチ。人は町から逃げ出すのに、あなたはお出でなすつた、』

と、彼は言つた。

『どうしたんだ、町から逃げ出すとは?』とアルパチイーチは言つた。

『そうですよ、私のいつも言ふ通りみんな馬鹿なんですよ、いつもフランス人を恐がつてばかり居るんでさア。』

『女の寢言さ、女の寢言さ!』と、アルパチイーチは答へた。

『私もさう思ふんですよ、ヤコフ、アルパチイーチ。奴等を入れるなといふ命令が出てゐるのだから、もう大丈夫だと言つて聞かせてるんですよ。所が百姓たちと來ると車一臺と馬一頭に三ルウブルもくれと言やがる——奴等は良心といふものを持つて居ないんだね!』

ヤコフ、アルパチイーチは別段氣も入れずに聞いてゐた。彼は湯沸器(サモワール)と、馬にやる乾草とを貰ひ、そしてお茶を飲むと、ごろりと横になつて寢て了つた。

夜通し軍隊が宿屋の前の往來を歩いてゐた。翌日アルパチイーチは、町で着るために持つてゐる外衣(チュニック)を着て、使ひの用向きを果しに出て行つた。それは夏の朝で、八時頃にはもう暑かつた。『收獲(とりいれ)には持つて來いの日だ、』と、アルパチイーチは思つた。朝早くから銃聲が町の彼方に聞えてゐた。

八時になると砲聲が銃聲にまじつて聞えた。往來は大急ぎで歩く人々だの、兵士だので騷然として ゐたが、併し何時ものやうに雇ひ馬車は急がしげに走り、商人どもは自分等の店に立ち、そして教會

では勤行が行はれてゐた。

アルパチイーチは店や、役所や、郵便局や、知事の家に行つた。彼の行つた所は何處でも、みんな戰爭の話や、又現にこの町を攻撃してゐる敵の話で持ち切つてゐた。みんな互ひに一體どうしたらいいだらうと聞き合つたり、互ひの恐怖を慰め合はうとしたりしてゐた。

知事の家では、アルパチイーチは非常に澤山の人民を見出した、コザツク兵もゐた、そして知事の旅行馬車が人目にとまつてゐた。昇降段の所でヤコフ、アルパチイーチは二人の紳士に會つた、その一人を彼は知つてゐた。その紳士は、前の警察署長で、ひどく熱して喋つてゐた。

『だが、これは戯談ごとぢやないぜ、』と、彼は言つた。『自分だけのことを考へて居られる人間は幸福さ。いくら悪くつても自分一人だけなんだからね。しかし十三人の家族と全財産を抱えて居たらどうだ……事態が、吾々はみな零落しなけりやアならないといふ危機になつて來たんだ、さうなつたら、吾々はどう言つて、當局の責任を問ふんだ?……えゝ、惡黨どもは縊り殺して了へ……』

『まあ〳〵、靜かに……』と、も一人が言つた。

『何をかまふものか! 聞かしてやれよ! なアに、我々は犬ぢやないぞ!』と、前警察署長は言つた、そして振り向いて、アルパチイーチの姿を認めた。

『やあ、ヤコフ・アルパチイーチ、何うして此所へやつて來たんだ?』

『閣下の御命令で知事さんの所へ、』と、アルパチイーチは、老公爵のことを言ふ時にはいつもするやうに、得意さうに頭を上げ、胸に手を當てながら言つた……『閣下が戰爭の樣子を尋ねて來いと有仰つたものですからな。』

『うん、ぢや尋ねるがいゝ、』と、紳士は叫んだ、『奴等が荷馬車一臺も得られない、何一つ得られないやうな窮境にして了つたんだ! おや又た、聞えるだらう?』と、彼は言つて、銃聲の聞えてきた方角を指さした。

『奴等が我々みんなを破滅に陷れたんだ……惡黨どもが!』と、彼は又かう言つて、階段を下りて行つた。

アルパチイーチは頭を振つて上つて行つた。控室には商人だの、女だの、書記だのが一ぱい居て、默つて互ひに顏を見合つてゐた。知事の部屋の扉が開いたので、彼等はみんな立ち上つて、前の方へ進んで行つた。書記が部屋の中から走り出て一人の商人に何か言ひ、頸に十字架をかけた役人に自分の後に從いて來いと命じた、そして明らかにみんなの視線や、訊ねかけられる質問を避けようとするらしく、再び姿を隱くした。

アルパチイーチは前へ進み出た、と又前の書記が現れたので、ボタンを嵌めた外套に手を入れて、その男に二通の手紙を渡しながら、話しかけた。

『アツシュ男爵閣下に元帥バルコンスキイ公爵から、』と、彼はうんと容態ぶつて、しかつめらしく言つたので、書記は思はず振り返つて、その手紙を受け取つた。

間もなくアルパチイーチは知事の前に案内された、知事は彼に向つて早口にかう言つた。

『お手紙のことに就いては吾輩は何にも知りませんと公爵と公爵令嬢に傳へて下さい。吾輩は上の命令通りにやつて居るのだから——これを……』

彼はアルパチイーチに一枚の書付を渡した。

『しかし公爵は身體がお悪いさうだから、モスクワに移られることをお勸めする、吾輩も今直ぐに出かける所なんだ、ぢや皆さんに……』

所が、知事は言ひ終へなかつた、埃と汗とに塗みれた將校が部屋の中へ駈け込んで來て、フランス語で何か言ひ始めた。恐怖の色が知事の顔に現はれた。

『行つてもよろしい、』と、彼は言つて、アルパチイーチの方へ頷いて見せ、それから將校に對して二三の質問をした。熱心な、おど〳〵した、頼りなげな様々な、眼付が、アルパチイーチが知事の部屋を出て行くと、彼に向けられた。アルパチイーチは今は銃聲に耳を傾けずにはゐられなかつた。銃聲は彼が急いで宿屋へ歸つて行く時に、益々近く、益々猛烈になつて行くやうに思はれた。

知事がアルパチイーチに與へた書付は次のやうなものであつた。

『予はスモオレンスクの町に少しの危險もないこと、又何んなことがあつてもスモオレンスクが脅かされるやうなことは決してあり得ないことを保證する。予自身は一方から、バグラチオン公爵は他方から本月二十二日にスモオレンスクの前面に於て合同し、兩軍協力して、努力奮闘以て祖國の敵を擊退するか、若くは勇敢なる隊伍に最後の一兵だに殘すことなく討死するまでは、貴下の統治の下にある我が同胞を守護するであらう。貴下はこの通牒によつて、貴下がスモオレンスクの住民を安堵せしむる充分の權利をもつて居らるゝことが、お分りであらう、何故ならば彼等は斯ういふ勇敢なる二軍に守護せられて、そして、その勝利を信ずることが出來るから。

(『バアクレイ・ド・トオリイより、スモオレンスク知事、アツシュ男爵への通牒。一千八百十二年。』)

人々の群は不安さうに往來を歩き廻つてゐた。荷車が、家々の土器や椅子や、戸棚などを積んで、絶えず家々の門から出ては往來を進んで行つた。車が幾臺もフエラポントフの隣りの家の入口に並んでゐた、そして女どもが泣きながら別れの挨拶を交してゐた、飼犬が馬の周圍に戯れ廻つては、吠えてゐた。

アルパチイーチの歩調は常よりも、もつと急いでゐた、彼は庭に入り、物置の下を通つて、眞直ぐに自分の馬と車の所へ行つた。馭者は眠つてゐた。彼はそれを起して、馬車に馬を附けるやうにと命じ、家の外側の室の中へ、這入つて行つた。家族の居間で、彼は子供の泣き聲と、胸を裂くやうな女

の啜り泣きと、そしてフエラポントフの怒つた皺嗄れた呶鳴り聲とを聞いた。アルパチイーチが外側の室へ這入つた時に丁度、料理人がまるで物に驚ろいた牝雞のやうに狼狽てゝ室の中へ飛び込んできた。

『旦那がお神さんを殺すやうに打つてるんですよ——お神さんを打つてるんですよ！……旦那がお神さんを打ちのめして、毆りつけてるんですよ！……』

『何うしたといふんだ？』と、アルパチイーチは尋ねた。

『お神さんが立ち退かう立ち退かう、と言ふんです。女ですからね！連れて逃げてくれろと、言ふんでさア、小さい子供たちと一緒にひどい目に遭つちや堪らない、もう他の人たちは、みんな逃げて了つたのに、私たちは一體どうするんです？　斯うお神さんは言ふんです。それで旦那があんなに毆るんです……打つたり、叩いたりするんです！』

アルパチイーチは默頭づいて、如何にも尤もだといふ風をした、そして、もう其上は聞かうともしないで、反對の側の自分の買物の品々の置いてある室に通じて居る扉口の方へと行つた。

『惡黨め！　惡者め！』と、その途端に、疼せた、眞青な女が、叫んで、腕に子供を抱え、頭にぼろのハンカチイフを巻いて、飛び出してきた。女は梯子を駈け下りて庭の中へ逃げて行つた。その後からフエラポントフが現はれて來たが、アルパチイーチを見ると、胴衣を引き下げたり、髪を撫でつけたりして、アルパチイーチの後から部屋に這入つてきた。

『もうお立ちになるのですか？』と、彼は訊いた。

その間ひには答へもせず、又其方に見向きもしないで、アルパチイーチは買物の品々を集め、それからフエラポントフに幾何拂つたらいゝかと尋ねた。

『調べて參りませう！　知事の所にゐらしたんですか、えゝ？』と、フエラポントフは尋ねた。『どんなお話でした？』

アルパチイーチは、知事はハツキリしたことを何も言はなかつたと答へた。

『どうして荷物をこしらへて立ち退けるもんですか？』と、フエラポントフは言つた。『ドロゴブズへ行くのに七ルウブルも車賃がかゝるんですからね、全く、奴等は良心を持つて居ないんですよ！』と、彼は言つた。『セリワーノフの奴、金曜日にうまいことをしましたよ、小麥粉を一袋九ルウブルで軍隊に賣り込んだのです。あの、お茶を上りますかね？』と、彼は言ひ添えた。

馬が付られる間を、アルパチイーチとフエラポントフとはお茶を飲んで、小麥の値段だとか、作物のことだとか、それから收獲には持つて來いの日和だとか云ふことを話し合つた。

『だが少し靜まつて來たやうだな、』と、言つて、フエラポントフは、茶を三杯飲んで立ち上つた。『此方側が優勢になつて來たらしいね。何うしたつて敵の奴を入れないと云ふ話ですよ。全く此方の軍は

強いやうですよ……いつかマトウエイ・イワーニツチ・ブラトフは敵をマリナ河に追ひつめて、一日のうちに八萬人を溺らして了つたといふ話ですよ。』

アルパチイーチは買物の品を集め、それを馭者に渡し、フエラポントフに勘定を拂つた。車輪や蹄の響や、ベルの音がして二輪馬車が門の外を通つて行つた。

もう晝を餘程過ぎてゐた、町の片側は蔭になつて居たが、片側に明るい日があたつてゐた。アルパチイーチは窓の外をちらツと見て扉口へ行つた。と、突然遠くからシユーツ、ズドンといふ妙な音がして來て、つゞいて砲聲が聞えそれが鈍い轟きに混り、窓々をがた〳〵と震はせた。

アルパチイーチは往來へ出て行つた。二人の男が往來に沿ふて橋の方へ走つて行つた。方々から砲彈のシユツ〳〵といふ音や、墜落する音だの、榴彈が町の中に落ちる時に、爆發する音などが聞えたけれど之れ等の響は殆んど聞えない位ゐであつた、住民は、町の外で聞える大砲の音に比較して、それを殆んど氣にかけなかつた。これは四時を合圖に町を目掛けて百三十門の砲の火蓋を切れとナポレオンが命じた砲撃なのであつた。人々は初めのうちはこの砲撃が分らなかつた。

落下する榴彈や砲彈の響は、初めのうちは唯人々の好奇心を刺撃するだけであつた。その時まで未だ物置で泣いてゐたフエラポントフの妻は、泣き止んで、兩腕に赤ん坊を抱いたまゝ默つて人々を見つめたり、砲彈の響きに聞き入つたりしながら門から出て行つた。

料理人と番頭とが門に出て來た。人々は一樣に熱心な好奇心をもつて、自分等の頭の上を飛んで行く砲彈を一目でも見ようとしてゐた。五六人の人々が熱心に話をしながら、町角を曲つてきた。

『ひどい力だなア！』と、一人が言つてゐた。『家根も天井も粉微塵になつて了つたぜ。』

『まるで地面を堀る豚のやうに這入つちまやがる、』と、今一人が言つた。

『すてきぢやないか？　眼が覺めるぜ！』と、その男は笑ひながら言つた。

『君は逃げ出して來てよかつた、さもなけれや、ぴしやんこに叩き潰されるところだつたよ。』

他の人々がこの連中に加はつた。彼等は立ち止つて、自分等の直ぐ傍の家に砲彈が落下した樣子を語つた。その間にも又數發の彈丸が——或時は砲彈が、迅い、氣味の惡いシユーツといふ音を立てゝ、或る時は榴彈が愉快なヒユーツと云ふ音を立てゝ——絶えず人々の頭の上を飛んで行つた。が、一つも近くに落ちたのはなく、みんな頭の上を越して飛んで行つた。アルパチイーチは二輪馬車に乘り込んだ。フエラポントフは門に立つてゐた。

『あつけらかんとしてゐちやいけないぞ！』と、彼は、赤い下袴を着け、袖をたくし上げて裸出（むきだし）の肘を振りながら話を聞かうと町角の方に歩いて行つた料理女を呶鳴りつけた。

『大變だわねえ！』と、その女は言つて居たが、主人の聲をきくと、たくし上げた下衣（スカート）を引き下ろしながら歸つてきた。

再び何ものかゞ、今度は直ぐ傍で、まるで鳥が舞ひ下つてゞも來たやうに、シューッと鳴つた、と、往來の眞中にパッと火がひかつて、彈丸の音がしたかと思ふと、街は煙で一ぱいになつた。

『畜生、何をぐづ〳〵してやがるんだ?』と、フエラポントフは料理女の傍へ駈け寄つて怒鳴つた。

その途端に、女どもの方から哀れつぽい泣聲が起り、赤ん坊は憎えた喚き聲を立てた、そして、人々は眞青な顏をして、その料理女のまはりに群つた。凡てのさういふ音響よりも高く料理人の呻き聲とき聲とが群集の間に起つた。

『おゝ——おゝ——おい、皆さん、いゝ方々! 私が死なないやうにして下さい! 皆さん!……』

五分後には誰も往來に殘つて居なかつた。かの料理女は爆裂した榴彈のために脛を折られて、臺所に搬ばれた。アルパチイーチと、その馭者と、フエラポントフの妻や子供達と、門番とは穴藏の中に座つて耳を欹てゝゐた。大砲の響や彈丸のシューツといふ音や、それから凡ての物音よりも一段と高く聞える料理人の憐れな泣聲やが、一瞬間も止まなかつた。フエラポントフの妻は赤ん坊をあやしたりすかしたりしながら憎えたやうな呼き聲で、穴藏に這入つて來る人に一々往來に殘つて居た自分の亭主は何處にゐるかと訊いてゐた。

番頭が、主人は人々と一緒にお寺へ、靈驗あらたかなスモオレンスクの聖像を擔ぎ出しに行つたと彼女に語つた。

黄昏頃に、砲聲は靜まりかけた。アルパチイーチは穴藏を出て扉口に立つた。

晴れた夕の空は煙で一ぱいに蔽はれてゐた。そして新月がその煙の間から、空高く輝いてゐるのが異樣に見えてゐた。恐ろしい大砲の轟きが止んだ後に、靜寂が町全體を蔽ふたやうに思はれた、それを破るものと云つては、唯町中に鳴り渡るやうに思はれる人々の足音と、呻き聲と、遠方の叫び聲と、それから火のパチ〳〵といふ音とばかりであつた。かの料理女の呻き聲も今は止んで了つた。二つの方角で火事の眞黒な煙の雲が立ちのぼつて、棚引いてゐた。いろ〳〵な軍服を着た兵卒たちが、列を作らずに掻き亂された蟻塚から出て來る蟻のやうに、別々の方向に町の中を歩いたり、駈け廻つたりしてゐた。その中の數名はアルパチイーチが見て居る前で、フエラポントフの庭に駈け込んできた。アルパチイーチは門の外に出た。一個聯隊が歸つて來て、押し合ひへし合ひして、町をふさいだ。

『町は降伏した、逃げろ、逃げろ、』と一人の將校が、アルパチイーチの姿を見て言つた。それから直ぐに兵卒たちの方を振り返つて斯う叫んだ、『さあ、この庭を通り抜けて逃げるんだ!』

アルパチイーチは家に引返して、馭者を呼び、出發を命じた。アルパチイーチと馭者とに續いてフエラポントフの一家全體が出てきた。煙や、今は黄昏の中に見え出した燃える家々の焰をさへ見ると、その時まで默つてゐた女どもは火を眺めて急に泣き出した。それに加勢するとでもいふやうに、同じやうな泣き聲が街の他の部分で起つた。アルパチイーチと馭者とは、震へる手で、小屋の下にゐた馬の、

縋れた手綱や、鞆革を引いた。

アルパチイーチは、門から馬車が駈け出す時に、十二三人の兵卒が、フエラポントフの開いた店で、大きな聲で話してゐるのを見た。彼等は、自分の袋や背嚢に、小麥粉や日向葵の種を詰め込んでゐるのであつた。その途端にフエラポントフが歸つて來て、店に這入つて行つた。兵卒たちを見ると、彼は怒鳴りつけやうとしたが、急に止して、自分の髮の毛を摑みながら、泣き笑ひをやり出した。

『みんな持つて行き給へ、若者たち！　惡魔どもに殘して置くんぢやねえ！』と、彼は叫んで、自分で嚢を引つ摑んで、往來に投げ出した。兵卒の中には吃驚して逃げ出したものも幾らかあつたが、殘つた連中は自分たちの袋の中にそれを詰め込んでゐた。アルパチイーチを見ると、フエラポントフは共方へ振り向いた。

『もうロシアはお終ひだ！』と、彼は叫んだ。『アルパチイーチ！　もうお終ひですよ！　私は自分で火を放けるつもりです！　もうお終ひだ……』フエラポントフは家の中に駈け込んで行つた。

兵卒どもの途切れない流れが町中を塞いでゐるので、アルパイチーチは通ることが出來ず、仕方なしに待つてゐた。フエラポントフの妻や子供たちも亦荷馬車の中に座つて出發の出來るのを待つてゐた。

もう全く暗かつた。空には星があつた、時々新月が煙の面紗の間から輝いた。アルパチイーチの馬

車と宿屋のお神さんの荷馬車とは、兵隊やその他の運搬車の列に沿ふて、そろ〳〵と進んで行つたが、ドニイペル河に下る坂の上で全く止まらなければならなくなつた。交通の全く杜絶して了つた十字街から餘り離れて居ない横町で、幾つかの店と一軒の建物とが燒けてゐた。火はもう下火になつてゐた。焰は衰へて黒烟の中に消えて了つたかと思ふと、再び急にぱつと燃え上り、十字街に居る群集の顏を妙にはつきりと照らした。黒い人の姿が幾つも火の前を飛び廻り、話聲や叫聲が絶え間なくパチ〳〵云つて居る焰の音より高く聞えた。アルパチイーチは暫らく馬車を進めるわけには行くまいと思つたので、下りて、火事を見る爲めに横町の方へ歸つて行つた。兵卒たちが火事の前を右往左往してゐた、そして、アルパチイーチは二人の兵卒が、毛皮の外套を着た一人の男と共に、火事場から燃えてゐる棟木を引き出して、往來を横切つて傍の家の方へ持つて行つてゐる、一方では、他の人たちが枯草を兩手一ぱいに持ち運んで居るのを見た。

アルパチイーチは燃え盛つてゐる高い穀物倉の前に立つて居る大群集の中に加はつた。壁は全部焰の中にあつた。裏手の壁はもう落ちてゐた。板屋根が壞れて落ちてゐた、棟木は眞赤になつてゐた。群集は明らかに屋根の落ちる時を待つて居たのである。アルパチーチもそれを見やうとして待つてゐた。

『アルパチイチ！』と、老人は不意に自分を呼びかけて居る聞き馴れた聲を聞いた。

『これは〳〵閣下、』と、アルパチイーチは直ぐ若主人の聲と知つて答へた。

アンドレー公爵が、肩外套(ケープ)を着け、黒い馬に跨つて群集の中にゐた、そしてアルパチイーチを見てゐた。

『何うしてお前はこゝへ來たんだ?』と、アンドレー公爵は尋ねた。

『閣……閣下……』と、アルパチイーチは吃つた、そして啜り泣きを始めた『閣、閣……ほんたうにもう駄目なんで御座いますか? 旦那様は……』

『どうしてお前はこゝに來たのだ?』と、アンドレー公爵は繰り返した。焔がその瞬間にパツと燃え上つた、と、アルパチイーチはその明るい光の中に若主人の青白い疲れ果てた顔を見た。アルパチイーチは、自分は町まで使ひによこされたのであるが、こゝを抜け出ることが出來ないのだと言つた。

『如何でございますか、閣下、もう駄目なんでございますか?』と、彼は再び尋ねた。

アンドレー公爵は、それには答へないで、手帳を取り出し、膝を持ち上げて、裂き取つた一枚に、鉛筆で字を書いた。彼は妹に宛てゝ書いたのである。

『スモオレンスクは陷落した、』と、彼は書いた、『ルイシーヤ・ゴオルイも一週間のうちに敵軍の占領する所となるであらう、直ちにモスクワに出發せよ。出發する時には直ぐ私に知らしてくれ、使者はウスヴイアースへよこしておくれ。』

以上の言葉を書いて、その手紙をアルパチイーチに與へてから、彼は更に老公爵や、公爵令嬢や、それから家庭教師のついて居る自分の息子などを避難させるには何んな風にせよとか、そして出かけたら、早速どうして、何處に宛てゝ自分に知らせればいゝかなどと色々な指圖をした。それ等の指圖を未だ終らないうちに、一人の參謀將校が部下を連れて、彼の所に馬を飛ばしてきた。

『あなたは聯隊長殿で、』と、その參謀將校はドイツ語訛りの、アンドレー公爵が聞き覺えのある聲で叫んだ。『家屋があなたの面前で火を放たれて居るのに、あなたは平氣で立つて居られる! 何ういふわけですか? あなたは夫れに責任があるのですぞ!』と、ベルグは叫んだ、この男は、今は第一軍の歩兵の左翼の、司令官の幕僚の、參謀長の副官であつた、極めて愉快な高い位置だとベルグはさう自分で言つてゐた。

アンドレー公爵は彼を見詰めたが、それには答へないで、アルパチイーチに話しつゞけた。

『ぢや、皆に言つといてくれ、私は十日まで返辭を待つて居るが、十日になつても、みんなが未だ出掛けたといふ報知がなかつたら、萬事を打棄つて、私がルイシーヤ・ゴオルイに行かなければならないことになるからね。』

『公爵、』と、ベルグはアンドレー公爵であることが解つたので斯う言つた、『たゞ命令を實行するのが私の職務だものですから、さう申したに過ぎないのです、私はいつでも正確に實行するものですから

……何うか失禮はお許し下さい、』と、ベルグは辯解し出した。

火の中でガタ〳〵と何か壞れる音がした。焰は一寸の間靜まつた、煙の黑い雲が屋根の下で渦卷いた。と又も恐ろしいガタ〳〵いふ物の壞れる音がし、何か大きな重い物の落ちる音がした。

『わア、わアー!』と、群集は叫んだ、穀倉の天井が落ちて、燒いた餅の匂ひが燃えてゐる小麥から立ち上つた。焰は再び燃え上つて、そのまはりに居る群集の、或ひは喜ばしさうな、或ひは心配にやつれた樣々の顏を照らした。

毛皮外套を着た男は、空中に兩腕を振りまはしながら、叫んでゐた。

『素敵だな! さあ、此奴はやつつけて了つたぞ! 素敵だな! 諸君!……』

『あれが、この持主なんだぜ、』と、多くの聲が呟いた。

『それでは私の言つたことをすつかり皆に傳へてくれ、』と、アンドレー公爵はアルパチイーチに向つて言つた。そして自分の傍に默つて立つてゐたベルグには一言も言葉をかけないで、馬に拍車を當てたかと思ふと、横町を一散に走らせて行つた。

五

スモオレンスクから、軍は退却しつゞけた。敵はそれを追擊した。八月の十日には、アンドレー公爵の指揮してゐた聯隊は、ルイシーヤ・ゴオルイに通ずる並木路を横切つて居る街道を進んでゐた。

暑氣と旱魃とが三週間以上もつゞいた。每日々々渦卷く雲が空を通り、たまには太陽を隱すこともあつたが、夕方になると空は再び晴れて、太陽は輝く赤い霧の中に沈んだ。けれど夜は重い露が地面を水々しくした。畑に殘された小麥は燒けてしまつて、穗が落ちかゝつてゐた。沼は涸れてゐた。太陽に燒かれた牧場には食べるものが何にもないので、家畜は飢えに鳴いてゐた。たゞ夜と森の中とだけは露が降りてゐる間は涼しかつた。

けれども軍が進んで行く道や、大通りは、夜になつても、道が森の中を通つてゐても、一向涼しくなかつた。露も一呎以上も深さのある道の砂塵の中では、見分けがつかぬほどであつた。

日が出ると、兵士たちは進み出した。輜重車や大砲は車軸まで埋まつて、音もなく動いた。步兵は夜になつても冷たくならない柔らかな、息が窒まるやうな、燒けた埃の中に踝まで踏み込んだ。砂塵は彼等の脛や車の輪にくつ付いたり、雲となつて頭の上に立ち上つたり、道を進む人や動物の、眼、髮、鼻の孔、肺などに這入つたりした。太陽が上るに從つて、埃の雲が立ち上つた。そして美しい燃えるやうな埃の間から、雲のない空の太陽が、紫の玉のやうに見え、肉眼で見ても眩しくなかつた。風は少しもなかつた。人々は、ぢつと壓し鎭まつて居る大氣の中で、喘ぎ〳〵息をした。彼等は口

や、鼻にハンカチーフを巻きつけて行進した。村に着く度びに、みんなは井戸のところへ飛んで行つた。水を争ひ合ひ、底の泥のところまでも飲みつくすのであつた。

アンドレー公爵は聯隊長であつた、で、聯隊の管理や、部下の兵士の安寧や、命令を受けたり、與へたりすることなどが、彼の心を占めてゐた。スモオレンスクを焼拂つて、放棄したといふことが、アンドレー公爵の生涯に一時期を劃した。敵に對する烈しい憎悪といふ新らしい感情が、彼をして自分の悲みを忘れさせて了つた。彼は、心も靈も聯隊の利害のために捧げた、部下の將卒の安寧に非常に注意した、將卒に對する彼の態度は誠に深切であつた。聯隊では彼のことを「吾々の公爵」と呼んで、そして彼を誇り、彼を愛した。

けれども、彼が深切で寛大であつたのは、たゞ自分の部下や、チモーヒンや、その他さう云ふやうな人々、彼に取つては全く新らしい、異つた世界に屬して居る人々、彼の過去に就いては何事をも知らない人々に對してだけであつた。昔の知人の誰それとか、參謀將校の誰それとかにぶつかるや否や、彼は忽ち荊棘を出して、腹を立て、皮肉になり、侮蔑的になるのであつた。記憶によつて過去と連關する事は何事でも、彼には厭やでならなかつた、で、さういふ昔の世界との關係に於ては、彼はたゞ自分の義務を盡して、蔭日向のないやうにするといふだけに、自分を限つてゐた。

アンドレー公爵は、實際、すべての事を最も暗い、最も陰氣な光の中で見た、殊に八月の六日に自

分が守ることが出來ると考へ、又守らなければならないと思つてゐたスモオレンスクが放棄されて、自分が想像して居た通り、病氣の父が餘儀なくルイシーヤ・ゴオルイや、非常に愛してゐた百姓たちと一緒に設計して建てた家やを、敵の掠奪に任せて、モスクワへ逃げなければならないやうになつてからといふものは、それが一層甚しくなつた。

が、それにも拘らず、その地位のお蔭で、アンドレー公爵は、すべての一般的な問題とは全く離れて更に自分の聯隊といふ、もう一つの考へねばならぬ問題をもつて居たのである。

八月の十日に、彼の聯隊がその一部をなして居た縱隊は、ルイシーヤ・ゴオルイの方へ行く曲り角に達した。二日前にアンドレー公爵は、父も、子供も、妹も皆モスクワに行つたといふ報知を受け取つてゐた。ルイシーヤ・ゴオルイに何の用事もなかつたのだが、彼は自分の苦痛を烈しくしやうといふ特質の慾望から、そこへ馬を走らせて行つて見なければならないと決心した。

彼は馬に鞍を置かせるやうに命じて、進軍の本線から、彼が生れて子供の時代を過した父の家の方へ曲つて行つた、いつも十二三人の女が、べちや〳〵喋りながら、リンネルを洗つたり、洗濯棒でそれを叩いたりしてゐた池の傍を通つた時、アンドレー公爵はその池の傍には誰も居ないで、彼等がよく立つて居た洗濯臺は壞れ、半ば水に沈んで池の眞中に横になつて浮いてゐるのを見た。アンドレー公爵は門番小屋に馬を乘りつけた。石の門のところにも誰の姿も見えず、扉が開いたまゝになつてゐ

た。庭の小徑には、もう雜草が茂つてゐた、家畜や馬がイギリス公園の中をさまよつてゐた。アンドレー公爵は溫室に這入つてみた。硝子板は破碎され、鉢植の木の幾らかは折れ、幾らかはすつかり枯れてゐた。

彼は、園丁のタラスを呼んだ。誰も答へなかつた。溫室の上の溫室をまはつて見ると、垣根がみんな壞れて、梅の木の枝が實の生つたまゝに引き折られてゐた。アンドレー公爵が未だ子供の頃によく門のあたりで見かけた百姓の爺さんが、綠色の庭の腰掛の上に座つてシナの樹皮で木靴を編んでゐた。その爺さんは聾なので、アンドレー公爵の近づいて來たのが聞えなかつた。彼は老公爵が愛用してゐた腰掛に座つてゐた。そして、その傍にはシナの木が、折れて枯れた木蓮の枝に垂れかゝつてゐた。

アンドレー公爵は家の方へと馬を進めた。古い庭の、數本の菩提樹が切り倒されてゐた。斑の牝馬と、仔馬とが、家の眞前の薔薇の木の間にゐた。家中の鎧戸は、階下の一つの開いた窓を除いては、悉く閉ざされてゐた。一人の召使がアンドレー公爵の姿を見つけて、家の中に駈け込んで行つた。

アルパチイーチは、家族の者を送り出して、自分一人でルイシーヤ・ゴオルイに留つてゐた。彼は家丙に座つて、「使徒傳」を讀んでゐた。アンドレー公爵が來たと聞くと、鼻に眼鏡を乘せたまゝで駈け出して、ボタンをはめはめ公爵の前に急いでやつてきた、そして一言も言はずにアンドレー公爵の膝に接吻しながら、泣き出した。

やがて彼は自分の弱いのを怒つて顏を反向けた、そして色々の事柄の現狀について說明を始めた。貴重な高價なものは、何も彼もボグチヤロウオに移された。百チエトウエルワ（一チエトウエルワは大凡我一石二斗餘）の額に達する穀物は運ばれたが、乾草と小麥とは——その年の小麥は非常な豐作であつたとアルパチイーチは言つた——未だ靑いうちに刈られて、軍隊に持つて行かれてしまつた。百姓たちは零落した、その中の幾分は矢張りボグチヤロウオに出かけて少數の者が殘つて居た。

アンドレー公爵は、アルパチイーチの言ふことは碌に聞かないで『お父さんと妹はいつ出かけたんだ?』と、いつ彼等がモスクワに出かけたのかといふ意味を尋ねた。アルパチイーチはボグチヤロウオに移つたことを聞かれてゐるのだと取つて、みんなは七月に出發したと答へた、それから又も農作物のことを細かに語り出して、公爵の指圖を仰いだ。

『將校方から受領書を取りまして、燕麥を渡しても宜しう御座いませうか?』と、アルパチイーチは尋ねた。『未だ六百チエトウエルワも殘つて居りますよ。』

『この男には何を言つたらいゝだらう?』と、アンドレー公爵は太陽に輝いてゐる老人の禿頭を眺めながら、思ひ迷つた、が、その顏を見ると、さうした間ひの此場合に相應しいものでないことは承知してゐるのだが、唯自分の悲しみを仰へたさに言つてゐるのだと云ふことが分つた。

『うん、渡すがいゝ。』と、彼は言つた。

『庭が目茶苦茶になつて居りますのを閣下はお氣附きになつてゐませうが、』と、アルパチイーチは言つた。『どうも致し方がなかつたので御座います。三個聯隊がこゝへまるりまして野營したものですから、龍騎兵が一番惡るう御座いました。後で訴へるために、私は司令將校の名と位とを書きつけて置きました。』

『よし〳〵、で、お前はこれから何うするつもりかね、敵が占領しても此所に居るのかね?』と、アンドレー公爵は訊いた。

アルパチイーチはアンドレー公爵の方へ顏を向けて、彼を見た、それから、いきなり嚴肅な身振りをして、兩手を上に擧げた。『神樣がお護り下さいます、神樣の御意のまゝにお委せいたします!』と、彼は言つた。

百姓や家附きの農奴の一團が牧場を橫切つてやつて來て、アンドレー公爵に近づくと、みんな脫帽した。

『ぢや、左樣なら!』と、アンドレー公爵は、アルパチイーチの方へ身體を屈めながら言つた。『お前も逃げるが宜い、持つて行けるだけのものは持つて行け。それから百姓どもに、リヤザンの領地かモスクワの傍の領地へ行くやうに言つてやれ。』

アルパチイーチは公爵の脚を抱いて泣き出した。アンドレー公爵は靜かに動き出したが、やがて馬

に拍車を當てゝ、庭の道を駈け下りて行つた。

臺地の上には、かの老人がやはり前と同じやうに座つてゐた、丁度誰か愛する死んだ人の顏に止つてゐる蠅のやうに、無心にシナの木皮靴の底を叩いてゐた。そして小さな娘が二人、下衣に梅の實を一ぱい入れて溫室の梅の木立の中から駈け出して來た。二人は殆んどアンドレー公爵の方へ向つて驅けて來たのだが、若主人を見ると、年上の方が狼狽した顏付をして、若い方の手を摑んだ、そして足を止めて、自分等の落した青梅を拾ひ上げやうともせず、一緒に赤楊樹の後ろに隱れて了つた。

アンドレー公爵は、神經的に急いで顏を反向けて、自分がその二人を見たことを先方に知らせまいとした。彼は可愛らしい子供を驚かしたのを氣の毒に思つた。其方を見るのが怖かつたが、それでも、さうせずにはゐられないやうな心持がした。小さい娘たちを見てゐるうちに、新らたな心を和げられ慰められるやうな感情が胸に浮んで來て、彼は自分とは全くかけ離れてはゐるが、自分のと同樣に正當な、他の人間的興味の存在に氣がついた。それ等の小さい娘たちは、明らかにその青梅を捕まらないように取つて行つて、貪り食はうといふ一つの熱烈な慾望に魅せられてゐたのらしかつた、で、アンドレー公爵は娘たちの企ての成功を望んだ。彼は今一度娘たちを一瞥せずにはゐられなかつた。

もう安全だと思つたので、娘たちは隱れ場所から飛び出して、甲走つた、小さな聲で何やら叫びながら、下衣をからげ、露出の日に燒けた小さな足で、草の中を愉快さうに、素早く走つて行つた。

アンドレー公爵は、軍隊が進軍しつゝある街道の、埃の領分の外に馬を進めたので、多少心持がよくなつた。が、彼はルイシーヤ・ゴオルイから然程遠くない、その街道に戻つて、小さな池の堤の傍の休憩地點で自分の聯隊に追ひついた。

午後の二時頃であつた。埃を通して赤い球のやうに見える太陽は、眞黒な上衣を着てゐる彼の背中を、堪えられないほど焼き焦した、埃は、がや〳〵言つて休んで居る軍隊の上に、前のやうに動かずに立つてゐた。一戰ぎの風もなかつた。堤の左の方へ馬を進めると、池の生々しい泥臭い臭がしてゐた。彼はそれが何んな泥水であつても宜い、水の中に這入りたいと思つた。彼は池の面を見まわした、そこからは叫び聲や笑ひ聲が聞えてきた。綠色の水垢で厚く蔽はれた小さな池は、煉瓦のやうに赤い手や頭や頸を持つた白い裸體の人間の身體が一杯飛び込んでゐたので、水嵩が明かに半ヤードも高まつて、堤を溢れやうとしてゐた。さういふ裸體の眞白な人間の肉は、叫び聲や笑ひ聲を立てて、丁度網の中で跳てゐる鯉のやうに、泥池の中でばちや〳〵水を潑ねかへしてゐた。水の潑ねる音には愉快な響があつたが、それが又その水音を變に悲しくさせた。

足の脛に革紐を結んで居る、第三中隊の、髪の美しい一人の兵卒——アンドレー公爵はその男を知つてゐた——が、うんと走らうと思つて、十字を切りながら、後にすさつて、水の中に飛び込んだ。もう一人の色の淺黒い、ひどく髪の亂れた軍曹が、その立派な、丈夫な姿を屈め、腰まで水につかつ

て、黒くなつた手で自分の頭に水をかけながら、嬉しさに鼻息を吐いてゐた。互ひに、ぴしや〳〵叩き合ふ音や、喚き聲や叫び聲やが聞えた。

岸の上、堤の上、池の中、到る所に白い丈夫さうな、筋肉の發達した肉があつた。赤い鼻の將校、チモーヒンは堤の上で手拭で身體をこすつてゐたが、アンドレー公爵を見ると顔を赤くした、が、言葉をかけようと決心した。

『愉快ですよ、まつたく、閣下。あなたも是非おやりなさい！』と、彼は言つた。

『汚いよ、』と、アンドレー公爵は顔をしかめながら言つた。

『直ぐ開けさせますよ。』から言つて、着物を脱いだまゝで、チモーヒンは兵卒たちに、場所を開けさせに駈け出して行つた。『公爵が這入りたいとおつしやるんだ。』

『何の公爵だい？、吾々の公爵かい？』と、聲々が叫んだ、そして、みんなの者はアンドレー公爵が殆んど止める暇もない程急いで、彼の爲めに道を開いた。アンドレー公爵は納屋で行水をする方が餘程ましだと思つた。

『肉、食肉、Chair à canon（大砲の餌食）だ、』と、彼も自分の裸かの肉體を見ながら、さう思つて、ぞつとした。それは寒さからといふよりも、泥水の中で潑ねてゐるその非常に多勢の裸體の身體を見て感じた、自分にも解らないやうな、一種の厭惡と恐怖の爲めであつた。

八月の七日に、バグラチオン公爵は、スモオレンスク街道のミハロウカの休息地點で、アラクチエーフに宛てて手紙を書いた。アラクチエーフに宛てはしたものゝ、それは皇帝に讀んで聞かせられるに違ひないといふことを知つてゐたので、出來るだけ一語一語に注意して書いた。

『親愛なる伯爵アレクセイ・アンドレーキツチ——スモオレンスクを敵に渡したことに就ては大臣が既に報告せられたことと思ふ。それは悲しいことであり、又憫れなことである、そして全軍は、この最も重要なる地點を徒らに放棄したことについては、絶望に沈んでゐる。私一箇としては、個人として最も熱心に大臣に懇願し、終には手紙をも出して見たが、何しても彼を說得することが出來なかつた。私は私の名譽にかけて、ナポーレオンが曾て一度も遭つたことのないやうな大窮境に陷り、その軍の半數を失ひ、而も其上にスモオレンスクを奪ひ取ることが出來なかつた苦であることを誓言する。吾が軍隊は未曾有の奮戰をし、今も尙ほ奮戰をつゞけて居る。一萬五千の兵を以て、私は三十五時間の間敵を食ひ止め、且つそれを擊破した、けれども大臣は十四時間も踏み耐えることが出來なかつた、これは吾が軍の恥辱であり、又汚點である、そして大臣の身としては、彼は生き存らへて居られる苦のものではない、と私は思ふ。若し彼が吾が軍の損害が大きいと報告すれば、それは嘘である。多分四千位るのものであらう、それ以上は越えない、が、そんなことは何でもないことだ、たとへ一萬人

であつたとしても、それが何だ、それが戰爭なのだ。所が、これに反して敵の損害は莫大であつた。『二日間その位置に踏み止まることが彼にとつて何程のことであつたらう？　何の道敵は自然に退却しなければ、ならなかつたのだ、といふのは、彼等は兵卒や馬に與ふべき水がなかつたからなのだ。彼は、私に斷じて退却しないと言つておきながら、突然夜になつて退却しつゝありといふ報告を送つて來たのである。私たちは、こんな風では戰ふことが出來ない、所詮間もなくモスクワまでも敵を入れることになるであらう……

『あなたに講和の考へがあるとの風評がある。講和、以ての外のことだ！かういふ總ゆる犧牲を拂つた後で、そして、かういふ犯人じみた退却をした後で——和を講ずれば、あなたは全ロシアを敵とするやうになり、又私たち一同も軍服をつけるのを不名譽と感ずるに至るであらう。若しさういふ事になれば、吾々はロシアのつゞく限り、立ち得べき人間のあらん限りは、戰はなければならぬ……

『司令官は一人でなければならない、二人ではいけない。あなたの大臣は、恐らく內閣では頗る立派な人であらうがしかし將軍としては、彼は單に無益であるばかりではなく、侮辱すべき人である、而も、この人の手に吾が祖國の運命が握られて居るのだ……

『私は、實に、憤怒のために狂せんばかりである。亂暴な辭句はお許し下さい。平和を締結することを忠告し、大臣を軍隊の司令官にしやうなどゝ忠告する人は、君主を愛さず、吾々凡ての廢滅を欲す

る人であることは明らかである。で、私はあなたに對して明言する、國民兵を募集せよと。何故ならば、大臣は最も巧妙なる方法をもつて、我々の客人を首都に導かうとしてゐるからである。

『全軍にとつて主な疑惑の的は、副官ウオルツオーゲンである。噂に依れば、彼は吾々の味方といふよりも寧ろナポーレオンの味方だといふことだ、大臣のすることは萬事彼の忠告によるのである。

『私は彼に對して禮儀正しく振舞つて居るのみならず、尚ほ私の方が故參であるにも拘らず、而も伍長の如く彼に服從してゐる。それは苦痛ではあるけれども、吾が皇帝であり恩人である陛下を愛するが故に、私は服從して居るのである、そして私は斯ういふ一人物の手にその勇敢なる軍隊を委ねて居られることを、皇帝のために悲しむのである。吾が軍が退却の時、疲勞に依つて、或ひは諸病院に病兵を殘すことに依つて、一萬五千以上の兵を失つたことを思ひ給へ。若し吾々が攻撃したならば、斯うはならなかつたであらう。ロシア——吾々の母なる——が、吾々が斯くの如き卑怯を示したことを何といふであらうか、どうか私に知らしてくれ給へ、何故に烏合の衆に向つて吾が善良にして勇敢なる國を放棄し、全ロシアの憎しみと恥辱とを引起さしめたかを、どうか私に知らしてくれたまへ。何故に吾々は狼狽したか？　何を吾々は恐れてゐるのか？　大臣が逡巡し、臆病で、沒理的で、緩慢で、而もあらゆる惡德を持つて居るのは、私の罪ではない。全軍はそれを悲しみ、言葉を極めて彼を罵倒してゐる……

六

人生の諸現象を分類し得る無數の部類の中で、人はさういふ總ての現象を、物質に依つて支配されるものと、形式に依つて支配されるものとに分類することが出來る。後者の種類に屬するものとしては、ペテルブルグの生活、特にその客間に於ける生活がある、それは田舍、地方、縣などの生活、若くはモスクワの生活とさへ違つてゐる。

一千八百五年と、一千八百十二年との間に、吾々はボナパルトと講和して、それから又彼と喧嘩した、吾々は新らしい憲法を作り、そして又それを廢した、所がアンナ・パアウロウナの家の客間とエレンの客間とは全く以前——前者は七年前、後者は五年前——の通りであつた。アンナ・パアウロウナの連中は、やはりボナパルトの成功を不審さうな驚きをもつて語つて居た、そして彼等は、ボナパルトの成功と、ヨウロツパ諸君主の服從的な態度とを見て、それはアンナ・パアウロウナが代表して居る宮廷の一團の者に苦痛と心配とを與へることを唯一の目的とする、質の惡い陰謀であると思つた。

エレンの周圍に集まつた連中——そこにはルミヤンツエフのやうな人物がよくやつて來ては、彼女

を非常に聰明な婦人と思ひ込んでゐた——は一千八百十二年になつても尙ほ、一千八百八年時分と同じ熱情を以て「大國民」とか、「大人物」とか、いふことを語つてゐて、フランスと不和になつたことを後悔し、やがて間もなく平和になるに違ひないと信じてゐた。

近頃、皇帝が軍から歸つて來てからは、この二つの相反する客間の中に、何だか一種の興奮が增して來たのが感じられた、彼等は互ひに敵對の示威運動のやうなことをやり出したが、兩團の特質には何の影響も及ぼされなかつた。

アンナ・パアウロウナの連中は、非難のない王黨の人々を除いては、如何なるフランス人でも入ることを拒絕し、その客間では、フランス劇場を最負にしてはならないとか、又フランスの一個中隊を維持するには吾が全軍團を維持するだけの金がかゝるのだとか、いふやうな愛國的な意見が表はれた。

戰爭の經過は熱心に注目され、大抵非常に吾が軍の利益になるやうな風評が云ひ傳へられた。

エレンやルミヤンツエフの連中、卽ちフランス派の連中の中では、敵軍の殘酷なことゝ、その野蠻な戰鬪方法についての報告は信用されないで、ナポーレオン側のあらゆる種類の和睦的な努力に就いて論ぜられた。この連中は、宮中と、それから皇太后の保護の下にあつた女學校とのカザンへの移轉に對する準備を建言した人々の早計を斥けた。全戰爭は、事實エレンの客間では、もう間もなく平和に終るべき單に形式的な示威運動の連續と考へられてゐた。そして今ペテルブルグに來てゐて、(才人

は誰でもきつとさうであつたやうに) エレンの所でいつも見られたビリビンに依つて述べられた、『戰爭は火藥に依つて終了せらるべきものではなく、それを發明した人間に依つて終了せらるべきものだ』といふ、意見が流行つてゐた。

皇帝と一緒に、モスクワの愛國的熱情の報導がペテルブルグに達して、それがエレンの客間では皮肉な、非常に氣の利いた——但し、用意周到な——揶揄の的となつた。

アンナ・パアウロウナの連中の中ではこれに反して、これ等の愛國的示威運動が非常な熱情を惹起させて、恰かもプルタアクが昔のローマ人に話したやうな調子で話した。

やはり前と同じ重要な地位にゐたワシーリイ公爵は、この二つの連中の間の連鎖となつてゐた。

彼は、いつも「わが善き友アンナ・パアウロウナ」を訪れたが、又よく「我が娘の外交的客室」にも現れた。そして一方から他方へと度々移るために大間違ひをやつて、一方に行つて喋らうと取つて置いたことを、片一方の客間へ行つて口を滑らしたりした。

皇帝が到着してから間もなくのこと、ワシーリイ公爵はアンナ・パアウロウナの所で戰爭の經過を語り合つて居るうちに、ふとバアクレイ・ド・トオリイを手ひどく批評し、自分は誰を總司令官に任命して宜いかは決定し兼ねると言つた。

すつも「l'homme de beaucoup de mérite(非常に才能のある人)」と言はれて居る客の一人が、そ

の日、ペテルブルグ民軍の新任司令官クツウゾフが、官廳で民兵の兵籍加入を監督して居るのを見たといふことを話して、そのクツウゾフこそ凡ての要求を滿足させ得る人に違ひないといふことを、愼重な態度で仄めかさうとしてゐた。

アンナ・パアウロウナは悲しげに微笑して、クツウゾフは皇帝を苦しめる外には何一つし出かさなかつた人だと言つた。

『私は貴族の集會で繰り返し〳〵さう言つたのですよ、』と、ワシーリイ公爵が口を入れた。『けれども彼等は私のいふことを聞いてくれません。あの人を民兵司令官に撰むことは、陛下の御意に適ふまいと私は言つたのです。彼等は私のいふことを聽かないんです。これはみんな反對したいといふ偏狂から來るのです。』そして彼等が如何なる公衆を相手にして其樣なことをして居るのか知りたいものです。これはみんな吾々が馬鹿らしいモスクワの愛國熱の眞似をしやうとするからなんですよ、』ワシーリイ公爵はモスクワの愛國熱が冷笑されるのはエレンのところであつて、アンナ・パアウロウナの所では、それが讃美せられて居るのだといふことを一寸の間忘れてゐたのである。けれども彼は急いで自分の間違ひを正した。

『クツウゾフ伯爵などと云ふ、ロシアの最も古い將軍が、官廳で監督してゐるのが、適當したことでせうか？ Etilen restera pour sa peine！（苦しむだけのものでせう！）馬にも乘れず、會議では眠

つて了ふやうな——そして又道德の急も最も低い人間を、總司令官に任命するといふやうな馬鹿なことがありませうか！ あの男は結構な評判をブカレストで取つたではありませんか！ 將軍としてのあの男の資格を云々しないまでも、こんな場合に老ぼれの盲目を——さうです、純粹の盲目です——、任命することが出來ませうか？ 宜い考へだ——盲目の將軍とは！ あの男には何も見えませんよ。目隱しの鬼事——そんなことが丁度あの男に相當して居るんです！』

誰も、その意見に反對する者はなかつた。

七月の二十四日には、その說は全く正しいものとして、受け取られた。けれども二十九日にクツウゾフは公爵の稱號を受けた。この稱號の授與は彼を祀り上げてしまはふといふ希望を示すものだと取れば取られるので、それ故ワシーリイ公爵の斷定は、尙ほ正しいものとせられてゐた、尤も、彼は今そんなに狼狽てゝその說を主張しやうとは思はなかつたのだが。けれども八月の八日に、元帥サルチイコフと、アラクチエーフと、ウイアズミチイノフと、ロプヒンとコツチユベーとから成立つてゐる委員會が、戰爭の經過を考究するために開かれた。この委員會は、いろ〳〵の不幸は權力が分れてゐる所から生ずるのだと云ふことを決定した。そして委員連中は皇帝がクツウゾフを好いては居ないと云ふことに氣はついてはゐたのだが、熟議の末に、クツウゾフを總司令官に任命することを建議した。そして即日クツウゾフは軍總司令官に任ぜられ、各軍が占領して居る全地域に對して無限の權能を委

ねられた。

八月の九日に、ワシーリイ公爵は、アンナ・パアウロウナの所でもう一度、かの『非常に才能のある人』に出會つた。この紳士は・アンナ・パアウロウナの引立てに依つて、女子教育機關の方面で何か一つ位置を任命して貰ひ度いといふ野心を抱いて居るので、彼女の家へ行くことを怠らなかつたのであつた。ワシーリイ公爵は、勝利を得た將軍のやうな、自分の慾望の目的を達することに成功した人のやうな態度で、大股で部屋へ這入つて來た。

『さて、非常な大事件がありますよ！　クツウゾフ公爵が元帥になりました。これで異論もすつかりお終ひだ。私は非常に嬉しい、非常に喜ばしいです！』と、ワシーリイ公爵は言つた。『到頭人物が現はれました！』と、彼は一座を嚴かに意味ありげに見て言つた。

自分の熱望してゐる位置を得たいと云ふ希望を持つてゐるにも拘らず、この『非常に才能ある人』はワシーリイ公爵の、つひ此間發表した意見を思ひ出させてやらないではゐられなくなつた。(これはアンナ・パアウロウナの客室では、ワシーリイ公爵に對して無禮であるし、又公爵同樣の熱心をもつてこの報知を受けたアンナ・パアウロウナに對しても無禮であつたが、彼は我慢することが出來なかつたのであつた。)

『ですが、噂に依りますと、あの人は盲目ださうぢやありませんか、公爵、』と、彼は言つて、ワシーリイ公爵に彼れ自身の言つた言葉を思ひ出させようとした。

『alley done, il y voit assez, (いや、何うして、よく見えますとも、)』と、ワシーリイ公爵は早口の濁聲をして、咳拂ひをしながら言つた。これは、いつでも事面倒となると彼のやる手段なのである。

『全くよく見えますとも、』とから彼は繰り返した、『そして殊に、私の喜ばしいと思ふことは、』と、つゞけて、『皇帝がクツウゾフに全軍を指揮し、地方全體を支配する無限の權力、即ち今まで如何なる總司令官も持つたことのない權力をお與へになつたことです。つまり今一人獨裁君主が出來たわけです、』と、彼は得意な微笑をうかべて、言葉を結んだ。

『何うかそれが神漾の御意にかなひますように、』と、アンナ・パアウロウナが言つた。

宮廷の交際社會の新參者であるこの『非常に才能ある人』は、事態に對するこの新たな說に反對し、彼女の以前の說を主張することによつて、アンナ・パアウロウナに媚びやうと思つた。彼は斯う言つた——

『陛下はクツウゾフにそのやうな權力をお與へになることは、お喜びにならないと云ふ話ではありませんか。』君主及び國家が爾にこの名譽を授く、』と、クツウゾフに仰せられた時に、陛下はジョンドを讀んで聞かされた若い娘のやうに、眞赤におなりになつたと云ふではありませんか。』

『多分お心はさうではなかつたのでせうよ、』と、アンナ・パアウロウナは言つた。

『え、、え、、なかつたですとも、』と、ワシーリイ公爵は熱心に主張した。今彼はクツウゾフ公爵を何人の下にも置き度くはなかつた。ワシーリイ公爵に言はせると、クツウゾフは彼れ自身だけが善良な人だと云ふばかりではなく誰からも尊敬されねたのである。『いゝや、そんなことのある筈がありません、といふのは、陛下はいつでもあの人の長所を御存知だつたのですから、』と、彼は言ひ添へた。『たゞ神様の御意で、クツウゾフ公爵が萬事を自分の手一つに握つて支配することが出來るのです、』と、アンナ・パアウロウナは言つた。『そして誰にも邪魔されないやうにして上げたいものですね。』

ワシーリイ公爵は直ぐにそれが誰のことを指して居るのか氣がついた。で、彼はかう呼いた。『私は、クツウゾフは皇太子が軍務には關係しないといふことを特に條件としたと云ふ話を確かな筋から知りました。vous savez ce qu'il a dit a l'Empereur (あの人が陛下に申し上げたことを御存知でせう)』で、ワシーリイ公爵はクツウゾフが皇帝に言つたといふ言葉を繰り返した。『若し殿下が失策をなすつても、私は罰することが出來ませんし、又手柄のありました時にも、私から賞をさし上げるわけには參りませんから) と斯う言つたのですよ。全く、あの人は抜け目のない人ですね、クツウゾフ公爵は。私はあの人とは昔からの知り合ひです。』

『噂に依りますと、』と、この未だ宮中官の駈引きを心得てゐない『非常に才能のある人』は言つた。『クツウゾフ閣下は陛下御自身までも軍には關係なさらないことを、特別の條件としたさうですよ。』

その言葉を言ひ終るか終らないうちに、アンナ・パアウロウナとワシーリイ公爵とは、同時にこの『非常に才能のある人』の方へ悲しげに背を向け、その幼なのを嘆息しながら互に顔を見合せた。

七

かういふことがペテルブルグに起つて居るうちに、フランス軍はスモオレンスクを通過して、だんだんモスクワへ近づいて來るのであつた。

ナポーレオンの傳記者、チエールは、その他のナポーレオンの傳記者等と同じく、ナポーレオンはモスクワの城壁に心ならずも引き付けられたのだと主張して、その主人公を辯護しやうとしてゐる。彼が正しいとすれば、凡ての歴史上の事件の解釋を一人の人の意志に求める、多くの歴史家も亦正しいのである、彼が正しいとすれば、ナポーレオンはロシアの將軍たちの巧妙なる戰略に依つてモスクワに誘き寄せられたのだと主張する、多くのロシアの歴史家も亦正しいのである。この場合には、總ての過去をば、その後に起つた事實に對する準備として見せる因果の法則以外に尚ほ、事件全體を紛糾させる相互法があるのである。上手な將棊さしが、勝負に負けるとその失敗は必らず自分の失策に基づくのだと信じて了ひ、その失策は勝負の初めから終りまにあつたのだからと思つて、勝負の初めにあ

での一手毎に同じやうな失策があり、駒も出來るだけ完全に動かされたのはないといふことを忘れてゐる。彼が之れだと思ひ込んで了ふ失策が彼の注意をひきつけたといふのは、その失策に會々敵手が付け込んで來たからと云ふに過ぎないのである。所が、戰爭といふ勝負事になると、これは或る一定の限られた時間の間にやらなければならないものでもあり、又そこでは一つの意志が生命の無い玩具を取り扱ふのではなくて、その全體が種々の箇人の意志の無數の軌轢の集合運動であるのだから、更らに何んなに複雜なものだか知れないのだ！

スモオレンスクの後、ナポーレオンはドロゴブウズの近くでも、ヴイアズマも、又ツアレウオーザイミシユツチエでも戰を挑んだ。けれどもロシア人は、無數のこんがらがつた事情の爲めに、モスクワから百十二露里の、ボロヂイノまでは戰爭をすることが出來なかつた。ヴイアズマからナポーレオンは眞直ぐにモスクワへ進軍する命令を發した。

『モスクワ、この大帝國のアジア風の都府、アレキサンドルの臣民たちの聖なる都、支那の塔の形をした無數の寺院のある、モスクワ！』

このモスクワが常々からナポーレオンの空想を安らかならしめなかつた。ヴイアズマからツアレウオーザイミシユツチエへの進軍中、ナポーレオンは護衞兵や、哨兵や、扈從や、副官などを從へ、クリーム色のイギリス馬に乘つてゐた。幕僚長のベルチエーは、騎兵が捕へた一人のロシア人の捕虜を

訊問する爲めに一足後におくれた。通譯官のレロルム・デイドヴイーユを從へて、彼はナポーレオンの後から駈けつけ、愉快さうな顏付きをして馬を引き止めた。

『何うした？』と、ナポーレオンは言つた。

『プラトフ枝隊のコザツクの申しますのに、プラトフは本隊と連絡しやうとして居ります、それからクツウゾフが總司令官に任命されたさうで御座います。そのコザツクは仲々拔目のない、口の達者な奴でございます。』

ナポーレオンは微笑した、そして、そのコザツクに馬を與へて自分の前に連れて來るやうにと命じた。彼は、自分でそのコザツクと話して見たいと思つたのである。數人の副官が駈け去つた。そして一時間と經たないうちにヂエニソフの奴僕で、後にその主人がラストフ家に置いて行つた、ラヴリューシカが、フランス騎兵の鞍に跨り、傳令兵の短かいジヤケツを着て狡猾さうな、醉拂つた、陽氣さうな顏をして、ナポーレオンの傍へやつてきた。ナポーレオンは彼に自分と並んで馬を進ませさした、そして訊問を始めた。

『お前はコザツクか？』

『えゝ、コザツクで御座います、旦那。』

『ナポーレオンの質素な樣子が東洋人の頭には一向君主の前だといふことを思はせなかつたので、そ

のコザックは自分と一緒にゐるのは誰だといふやうなことを少しも知らずに、戦争の出來事を如何にもわけのない調子で話した。』とチエールは、この挿話に就いて言つてゐる。實際ラヴリューシカは、その前の晩醉つぱらつて了つて、食事の仕度もせずに主人をほつたらかしておいたので、其爲めに答で打たれ、家禽の徴發に村へ遣られたのであるが、そこで、ふと掠奪がしたくなつて、それをやつて居るうちにフランス人に捕へられたのである。ラヴリューシカは、何をするにでも狡猾や、詐略やを用ひるのを義務と心得、常に主人の爲めに何んなことでもしやうと心がけて居る、そして上官たちの卑劣な衝動や、別けても虚榮心や卑劣な點を嗅ぎ付けるのが特に鋭いと云つたやうな、世の中のことを充分に見てきた、野卑な厚顔しい従僕の一人であつた。

ナポーレオンの前にやつて來ると直ぐに、それが誰であるかラヴリューシカはビクともしないで、唯その新らしい主人の氣に入らうと一生懸命に努めただけであつた。

彼は、これがナポーレオンであることは能く承知してゐた、がナポーレオンの前にゐると云ふことは、彼にはラストフや、乃至は手に笞を持つた給養係の前にゐるのと別段變りはなかつた、何故ならば彼は給養係からも又ナポーレオンからも取り去られるやうなものは何一つ持つて居なかつたからである。

彼は、將校たちの従僕の間に話されたあらゆる噂話を繰り返した。そのうちの大抵は本當であつた

が、ナポーレオンがロシヤ人はボナパルトを征服するつもりで居るか何うかと訊いた時には、ラヴリューシカは眼を見張つて一寸思案した。

彼は、その問ひのうちに（彼のやうな老獪な奴の常として何事につけても然うであるが）巧妙な詭計のあるのを見て取つた。彼は顔を頻めて、一寸の間默つてゐた。

『えゝ、若し戦争するといふことになると、』と、彼は考へ込んで言つた、『それが直ぐだとすると、そりやア あなたの方が勝ちますよ。そりやア定つてます。だがこゝで、三日經つて、そして戦争がそれより遅れることになると、さうすると、さうですね、同じ戦争が長い仕事になりませうよ。』

これがナポーレオンにばかり通譯された。si la bataille est bonnée avant trois jours, les Français gagneraient, mais que si elle serait donnée plus tard, Dieu sait ce qui en arriverait （若し戦争が三日のうちに起れば、フランス軍は勝つだらう、だがそれよりも延びると、何うなるか分らない、』レロルム・デイドヴイーユはさう譯して微笑んだ。ナポーレオンは確かに上機嫌ではあつたのだが、微笑まなかつた、そしてその言葉を繰り返へさせた。

ラヴリューシカは、それに氣が付いた、で、彼をもつと喜ばせやうとして、彼が誰であるかを知らないやうな顔をして、かう言つた。

『何しろ、あなたの方にはボナパルトが居るんですからな、あの人は世界中のものを誰彼れとなしに

やつけると云ふぢやありませんか、ね、だが私共はさうは行きませんよ……』何うして又何故こんな大袈裟な愛國心が口から辷り出たのか自分にも分らなかつた。通譯官は、終りの方は略してその言葉を通譯した、するとボナパルトは微笑した。

『La Jeune cosaque fi rouire son puissant interlocuteur（若いコザックはその偉大なる話相手を微笑させた、）』と、チエールは言つてゐる。

無言で五六歩行つてから、ナポーレオンはベルチエーを振り返つて、この『enfant du Don（ドンの兒）』に、今話して居る人が皇帝その人である、即ちピラミツドの面にその不朽の勝利の名を刻んだ皇帝その人であることを知らしたら何うするか、やつて見度いと言つた。

そのことが直ぐに傳へられた。

ラヴリユーシカは——これは自分を試す爲めにするのだといふことと、それからナポーレオンが自分の吃驚仰天するのを豫期して居るといふことが分つたので——早速吃驚して、口が利けなくなつたやうな風をしてその新主人を滿足させやうとした、彼は眼を圓くし、いつも笞で打たれに引き立てられて行く時にするやうな顏をした。

『ナポーレオンの通譯官が斯ういひ終らないうちにコザツクは、驚きに打たれて、物が言へなかつた、彼はそれからは一言も言はなかつた、そして、この東洋の曠野を越えてその名聲が彼の耳にも達してゐる、偉大なる勝利者を絕えず見詰めてゐた。彼の饒舌は忽ちにして消え去つて了ひ、たゞ心からの沈默した畏怖に變つて了つた。ナポーレオンはコザツクに贈物をした、そしてun oiseau qu'on rend aux champs qui l'ont vu naître（生れた野に歸へされた鳥）のやうに自由にしてやつた、』と、チエールは言つてゐる。

ナポーレオンは、頭に一杯になつてゐるモスクワを夢みながら、馬を進めた、そして、生れた野に歸へされた小鳥は、その友達に話さうとする話を拵へ上げながら、前哨へと馳せ歸つて行つた。實際にあつたことを彼は話さうとは思はなかつた、それは話す價値がないやうに許り思へたからである。彼はコザツク隊に馳せ歸つて、當時プラトフ枝隊の一部を成して居た、自分の聯隊の在所を探した、そして晩方になつて、ヤンコウオに陣して居た主人、ニコライ・ラストフを見出した。ラストフは折りから馬に乘つてイリインと一緒に附近の村々を乘り廻つて居る所であつた。彼はラヴリユーシキカに別に馬を與へて、一緒に連れて行つた。

八

公爵令孃マリヤは、アンドレー公爵が想像したやうにモスクワへ行つて避難して居るのではなかつ

た。

アルパチイーチがスモオレンスクから歸つて來ると、老公爵はまるで急に眠りから覺めたとでもいふやうに見えた。彼は、民兵に村々から集まつて、武裝する命を出した、そして總司令官に手紙を書いて、自分は最後までルイシーヤ・ゴオルイに止まり、飽くまで防戰するつもりであるが、總司令官がルイシーヤ・ゴオルイの防禦の爲めに勞を取るか取らないかは御意にまかせる、兎に角そこでロシアの最古參の將軍の一人が捕虜となるか、或ひは死ぬるか何方かの覺悟である、と言つてやつた。そして彼は、家族の者には、自分はいつまでもルイシーヤ・ゴオルイに留まつて居るといふことを告げた。

しかし自分は殘つて居る決心をしたが、公爵は、公爵令嬢はデツサルと小さい公爵とをつけてボグチヤロウオにやり、そこからモスクワへ行かせる手筈をした。以前の無關心に引き變へ、父の熱中した夜の眼も寢ない精力に驚いて、公爵令嬢マリヤは何うしても父一人を殘して行く氣にはなれなかつた、で、彼女は生れて初めて、心ならずも父の命令に從はなかつた。彼女は行くことを拒んだ、と、恐ろしい憤怒の嵐が彼女の上に爆發した。公爵は、彼女に對する之れ迄の無情な實例を悉く彼女に思ひ出させるやうなことをした。彼女を詈る口實を見付けようとして、彼女は自分を苦しめる爲めに凡ゆることをしたとか、自分と息子との間を離反させたとか、自分に對して最も卑しむべき疑ひを抱いたとか、自分の生涯を嫌なものにするのを生涯の目的にしてゐたのだとか、言つた。行かなくつても

少しも構はないと言つて、彼は、書齋から彼女を追ひ出して了つた。

公爵は、彼女にもう以後お前なぞのことは聞きたくもないと言つた、そして、之れからは顏も見せてもらふまいとキツパリ言ひ渡した。公爵令嬢マリヤは、自分が怖れて居たやうに無理やりに、ルイシーヤ・ゴオルイから立ち退けとは命じられないで、唯單に顏を見せないようにと言ひ渡されたゞけで濟んだので、ほつとした。彼女は、父が心の奥底では、自分の家に止まつて居るのを喜んで居るのだと云ふことを會得した。

ニコリユーシカがたつた次の日、老公爵は午前のうちに將軍の正裝をして、總司令官を訪問する仕度をした。馬車も用意をして待つてゐた。公爵令嬢マリヤは軍服姿の父がありたけの勳章を胸につけて、家を出て、武裝をした百姓たちの家附きの隷僕たちを點檢に行く所を見た、彼女は、庭から響いて來る父の聲を聞きながら窓のところに座つてゐた。突然五六人の者が狼狽てた顏をして、並木路を駈けてきた。

公爵令嬢マリヤは、階段に走り出て、花壇の道に沿ふて並木道に出た。數多の民兵や家僕だちの群集が、その路を彼女の方へとやつてきた、そして、その群集の眞中には數人の者が軍服を着て勳章をつけた小さな老人を抱き上げて引ずつてゐた。

公爵令嬢マリヤは、その老人の方へ駈けつけたが、菩提樹の並木の蔭を通してくる踊つてゐる小さ

い光線の環の中では、老人の顔の變化がハッキリとは分らなかつた。分つたのは、その顔の嚴めしい毅然たる表情が臆病な屈從的な容子に變つて居たことだけであつた。自分の娘を見ると、彼はその力のない唇を動かさうとした、そして皺枯れた聲を出した。けれど何を言つて居るのか分らなかつた。彼は擡ぎ上げられて、自分の書齋へ運ばれた、そして、近頃彼にとつては非常に恐ろしいものとなつて居た寢臺の上に寢かされた。

その晩に喚ばれた醫者は、彼の血をとつた、そして公爵は、右側不隨の卒中にかゝつたのだと診斷した。

ルイシーヤ・ゴオルイに留つて居ることが益々危險になつてきた、で、その翌日一同は公爵をポグチヤロウオに移した。醫者も病人と一緒に族をした。

一同がポグチヤロウオへ着いた時には、デッサルはすでに小さい公爵と共にモスクワへたつた後であつた。

三週間の間、老公爵は半身不隨のまゝで快くもならねば惡くもならずに、アンドレー公爵がポグチヤロウオに設計して建てて置いた新らしい家に、寢てゐた。老公爵は人事不省で、丁度不具になつた屍のやうに横たはつてゐた。眉や唇を震はせながら、絶えず呟いてゐた、そして自分の周圍のものが解つて居るのだか何うだか、分らなかつた。たゞ一つ確かに斷言の出來るのは、彼が苦しんでゐて、そ

して何事かを言ひ度がつて居たことであつた。けれども夫れが何であつたか誰にも分らなかつた、それが何か病的な半狂氣の氣紛れなのか、又は公事なのか、それとも家族に關する事なのか、少しも分らなかつた。

醫者は、この不安の狀態は何でもない、たゞ身體の加減からだと言つた。しかし公爵令孃マリヤは、(實際自分が傍へ行くとその苦みが强くなるやうに思へるので、その想像が確かな氣がした)父親は自分に何事か話し度がつてゐるのだと信じてゐた。

彼は、明らかに肉體的にも、精神的にも苦悶してゐるらしかつた。回復の望みは全くなかつた。他所へ移すことも不可能であつた。途中で死ぬやうなことがあつたら何としよう?

『亡くなつて了つた方が、いつそ亡くなつて了つた方が、よくはないだらうか?』と、公爵令孃マリヤは時々さう思つた。

晝も夜も、殆んど眠らないで、マリヤは公爵を看護した、そして、言ふも恐ろしい話だが、彼女は、快方に向つて行く徴候を見出し度いといふよりは、寧ろ最後の近づいて來る徴候を見たいと思つて、公爵を看護した。

公爵令孃にとつては、こんな感じを自分がもつてゐると云ふことが不思議でならなかつたのだが、しかし彼女はその感じを持つて居たのである。それよりも更に公爵令孃マリヤにとつて恐ろしかつた

ことは、父の病氣以來（何ものかに對する漠然とした期待をもつて、彼女が父と一所に住はうと決心した時からではないにしても）あらゆる忘れてゐた希望が彼女の心のうちに眼覺めて來たことであつた。長年の間彼女の頭に這入つて來なかつた考へ——父を恐れることのなくなつた生活、それ所か、戀愛や幸福な結婚生活が出來ると云ふことなどの樣々な夢想が、惡魔の誘惑のやうに彼女の頭を惱ました。

彼女は努めてこの考を拂ひ退けようとしたけれども駄目であつた、この後で、自分の生活をどういふ風にやつて行かうかといふの問題が絶えず彼女の心の中にあつた。それは惡魔の誘惑であつた、公爵令嬢マリヤはそれを知つて居た。彼女はそれを防ぐのに効力のある唯一の武器は祈りであるといふことを知つてゐた、で、彼女は努めて祈らうとした。祈りの姿勢をとり、聖書を眺めて、祈りの言葉を繰り返した、が、それでも祈ることは出來なかつた。彼女は自分が、これまで束縛されて居た、それには祈りだけが唯一の慰籍であつた所の、精神的な世界とは全く反對した、勞働と自由活動といふ眞の人生の新らしい世界に運ばれて居ることを感じた。彼女は祈ることが出來なかつた、泣くことがその心を引いた。

ボグチヤロウオに留つて居ることが、次第に危險になつてきた。フランス人が近くにきて居るといふ噂が方々から傳つてきた、そして、ボグチヤロウオから十五露里の或る村の一軒の家は、フランス

の掠奪者の爲めに掠奪されたといふことであつた。

醫者は老公爵を何處かへ移す必要があると主張した、縣の都督は役人をよこして公爵令嬢マリヤに出來るだけ早く避難するやうにと勸めた。警察の署長もボグチヤロウオにやつて來て同じやうなことを勸め、フランス軍は僅か四十露里の所まで來て居ること、フランスの布告が村々に廻つて居ること、そして若し公爵令嬢が十五日以前に父を移さなかつたならば、その結果に就て責任を負ふことが出來ないこと、などを彼女に話した。

公爵令嬢は、十五日にたつことにきめた。いろ〳〵の準備や、必要な指圖をみんなが彼女に仰ぎに來るので、その前日はまる一日彼女は忙殺された。十四日の夜はいつものやうに、着物も脫がずに、老公爵の寢て居る次の部屋で、過した。父の呻き聲や咳き聲や、寢臺のギイ〳〵いふ音や、それから父を動かすチホンと醫者の足音を聞いて、幾度も眼を覺した。彼女は扉口の所で幾度も聞耳を立てた、彼女には、父が常よりも大きな聲で咳き、そしてズツと苦しさうに身體を動かして居るやうに思はれた。彼女は眠られなかつたので、幾度も扉口の所へ行つては、聽耳を立て、內に這入らうとした、が思ひ切つてさうすることが出來なかつた。物を言ふことは出來ないけれども、公爵が自分に對して人々が心配さうな顏容をするのを厭つてゐるといふことを、彼女は見もし知りもしてゐた。彼女は、自分が時々我れにもなくヂツと見つめると、公爵は不愉快さうに自分の眼から顏を反向けるのに氣が

付いてゐた。彼女は夜、いつもと違つた時間に、自分が這入つて行くと、父の氣に觸るだらうといふことを知つてゐた。

しかし、これ迄彼女は、父をこんなに氣の毒に思つた事はなかつた、父を失ふことをこんなに恐れた事はなかつた。彼女はこれ迄の生涯に於ける父との關係をすつかり思ひ出して見た、そして言葉といふ言葉、行ひといふ行ひの中に、彼女は自分に對する父の愛が現はれてゐるのを見た。時々さういふ思ひ出が惡魔の誘惑に妨げられて、父が死んでからは何うなるだらう、そして何うして自分の新らしい獨立の生活をやつて行かうなどゝいふさま〴〵の夢想が心の中に歸つて來るのであつた。けれども彼女はぞつとして、さう云ふ考へを追ひ拂つた。朝方に父はずつと靜かになつた、で、彼女は眠入つて了つた。

彼女は遲く眼を覺した。よく眠りから覺めた刹那に起る全く眞面目な心持が、父の病氣に就いて一番彼女の心を惹くのは何であるかといふことをハツキリと彼女に示した。彼女は、眼を覺して、扉越しに內の樣子に耳を傾けた、そして、父の呟きの聲を聞いて、何の異狀もなかつたのだと思つて、溜息を吐いた。

『だが何うなるんだらう？　何を私は望んで居たのだらう？　私はお父樣が亡くなることを望んで居たのだ、』と、彼女は叫んで、內心で自分を蔑すんだ。

彼女は、手水をつかひ、着物を着換へ、祈りをした、そして階段へ出て行つた。入口にはみんなの荷物を積み込んだ馬車が幾臺か未だ馬を附けずに立つてゐた。

朝は溫かで、薄く曇つてゐた。公爵令嬢マリヤは未だ自分の心の陋劣さに慄然としてゐた、そして父に會ひに行く前に、自分のさま〴〵の考を纏めやうと試みながら、階段の上でぐず〴〵してゐた。

醫者が階段を下りて彼女の所へと出てきた。

『今日は少しお宜しいやうで御座います、』と、醫者は言つた。『私はあなたをお探してゐたのです。有仰ることが少しは分るやうになりました。お頭がだん〴〵明瞭して來るやうです。入らつしやい。あなたに會ひたいと言つておいでゞす……』

公爵令嬢マリヤの心臟は、この知らせを聞いてひどく動悸がしてきた、彼女は靑くなつて、倒れないように扉へ凭れかけたほどであつた。父に會ふこと、父と話をすること、父の眼の前に出ることは、全心がかういふ恐ろしい、罪深い想像に充たされて居る今の場合、彼女にとつては苦しい喜びと恐怖とに充ちたことであつた。

『さあ參りませう、』と、醫者は言つた。

公爵令嬢マリヤは、父の所へ這入つて行つた、そしてその寢床の傍に近寄つた。父は背の方を高く擧げて臥てゐた、節くれ立つた紫色の血管に蔽はれたその小さな骨張つた手は、蒲團の上に置かれて

あつた、左の眼は前方を眞直に見詰めて居たが、右の眼の方は變に歪んでゐた、そして唇と眉とは少しも動かなかつた。非常に痩せて非常に小さく慥然に見えた。顏は萎び切つて溶けて了つたかと思はれるやうで、その顏付は何も彼もズツと小さくなつて了つたやうに思はれた。公爵令嬢マリヤは傍へ寄つて、その手に接吻した。父の左の手が長い間會ひたがつてゐたといふやうな樣子で、彼女の手を握つた。彼は、娘の手をぐいと引いた、と、その眉と唇とが腹立たしげに震へた。

彼女は、父が自分にして貰ひたがつてゐることを察したいと思つて、ビク〳〵と彼を眺めた。で、彼女が父の左の眼が自分を見られるように位置を變へると、彼は滿足した樣子で、數秒の間娘をぢつと見据えてゐた。やがて唇と舌とがびく〳〵と動いて、聲が出た、すると彼は、自分のいふことが解り兼ねはしないかと明らかに心配してゐるらしく、懇願するやうなおど〳〵した風で娘の方を見ながら何か言はうとした。

公爵令嬢マリヤは父を見詰めながら、あらん限りの注意力を緊張さした。彼が、自分の舌を懸命に働かさうと努める滑稽染みた骨折が、公爵令嬢マリヤの眼を落させた、彼女は自分の喉元に込み上げて來る啜り泣きを抑えるのにひどく骨を折つた、彼は何か言つてゐた、幾度も言葉をくり返した。公爵令嬢マリヤはそれが何だか分らなかつたが、父の言つてゐることを察しやうとしてかう言つて、居るのだらうと想はれる言葉を尋ねるやうに繰り返した。

『お……お……え……え……！』と、彼は數度繰り返した。さういふ聲を解釋することは、とても出來なかつた。醫者はそれが分つたと思つた、で、尋ねた。

『お嬢さんが恐々してゐらつしやるんですか？』

彼は頭を振つて、再び同じ聲をくり返した。

『お心が、お心が苦しいんですね！』と、公爵令嬢マリヤは察した。彼は然うだと云ふやうに鼻を鳴らして、娘の手を取つた、そして丁度それを置くべき適當な場所を探して居るとでもいふやうに、それを自分の胸のいろ〳〵の部分に押し當て始めた。

『いつも思つて居たよ！——お前のことを……思つて居た』……と、彼は、自分の言ふことが確に通じると思つたので、前よりはズツと解りよく、はつきりと言つた。公爵令嬢マリヤは、努めてその啜り泣きと涙とを隱さうとして、父の腕に自分の頭を押し付けた。

彼は自分の手で娘の髮を撫でた。

『私は夜通しお前を呼んで居たのだ』……と、彼ははつきり言つた。

『それを私が知つて居ましたらばねえ……』と、彼女は涙ながらに言つた。『私は這入つては惡いと思つたものですから。』

彼は娘の手を握りしめた。

『寢て居たんぢやなかつたのか?』

『いゝえ、眠られませんでしたの、』と、公爵令嬢マリヤは頭を振つて言つた。

知らず〳〵父を眞似て彼女は、自分も亦うまく言葉が出せなかつたかのやうに、父が話すのと同じやうに、大抵は手眞似で話さうとした。

『可愛い娘よ!』……と、言つたのか、それとも『可愛い奴よ!』と言つたのか公爵令嬢マリヤには聞き分けられなかつた、が、父の眼の表情で、彼女は言はれたのが、父が之れ迄一度も自分に向つて使つたことのない、情愛こもつた優しい言葉であつたのを疑はなかつた。『何故お前は來なかつたのだ?』

『だのに私は願つてゐたのだ、お父さんの死を願つて居たのだ!』と、公爵令嬢マリヤは思つた。

彼は言葉を吐切らせた。

『有難う……お前……娘、可愛い奴! 何事も、何事も……許してくれ!……有難う!……』彼の眼からは涙が流れた。『アンドリユーシヤを呼んでくれ、』と彼は出し抜けに斯う言つた、そして子供のやうな不安な様子が、この願ひと共にその顔に現れた。彼は自分でも、この願ひが途方もないものだと云ふことに氣がついて居る様子であつた。少なくとも公爵令嬢マリヤにはさう思へたのである。

『お兄様から手紙を貰ひました、』と、公爵令嬢マリヤは答へた。

彼は、おづ〳〵と審しげに彼女を眺めた。

『何處に居るんだ?』

『軍隊と一緒に、お父様、スモオレンスクに居るんですの。』

彼は、稍や暫らくの間、眼を閉ぢて默つてゐた。やがて、自分の疑問に答へるかのやうに、もうスツカリ解りもし覺えてもゐると言ひでもするものゝやうに點頭いて、眼を見開いた。

『さうぢや、』と、彼は、靜かにはつきりと言つた。『ロシアは滅ぼされたのだ! 敵が吾が國を滅ぼしたのだ!』

して再び彼は、啜り泣きを始めた、涙がその眼から流れた。公爵令嬢マリヤは、もう堪え切れなくなつた、父の顏を見ながら彼女も泣いた。

彼は、再びその眼を閉ぢた。啜り泣きは止んだ。彼は自分の眼を指さした、と、チホンは、心得て、その涙を拭き取つた。

それから彼は眼を開いて、何やら言つた、が、暫らくの間は、誰にも解らなかつた、そして、到頭チホンがそれを了解して說明した。

公爵令嬢マリヤは、その言葉の意味を彼が今先き言つたことに結びつけやうとした。彼女は、父が

ロシアのことを言つてゐるのだと想像した、それからアンドレー公爵のこと、それから娘なる彼女自身のこと、孫のこと、それから自分の死のことを言つてゐるのだと想像した。それだから、その言葉が彼女には分らなかつたのであつた。

『白い着物を着ろよ。私はあれが好きだ、』と、彼は言つて居たのだ。

それが解ると公爵令嬢マリヤは、前よりも高い聲で啜り泣いた、で、醫者は、彼女を引つ張つて、室から地壇の方へ連れて行き、落着くやうになだめ、出發の用意に掛かりきるやうに說き勸めた。公爵令嬢マリヤが、その傍を去つた後で、公爵は又しても息子のことや、戰爭のことや、皇帝のことを言ひ出し、腹立たしさうに眉をひく〳〵させて皺枯れた聲を張り上げ始めた、そして二度目の最後の發作に襲はれた。

公爵令嬢マリヤは地壇の上に留つてゐた。日はきら〳〵と麗かに晴れて、溫かであつた。彼女はつたことを思ふことが出來なかつた、何にも考へられなかつた。そして今の今まで氣が附かないでゐたやうに思はれる父に對する熱情的な愛の他何一つ感じなかつた、彼女は庭の方へ駈け出した、そしてアンドレー公爵が若い菩提樹を植えて置いた小徑に沿ふて、啜り泣きながら駈けて行つた。

『さうだ……私は……私はお父樣の亡くなるのを望んでゐたんだわ！さうだ、私は直ぐお終ひになることを望んでゐたんだわ……私は平和になりたいと望んでゐたんだわ……で、私は何うなるんだらう！　お父樣がお亡くなりになつて平和になつたつて、それが私に何になるだらう？』と、公爵令嬢マリヤは聲高く呟いて、急ぎ足に庭を步きながら、痙攣るやうな啜り泣きに波打つ胸を兩手で押へた。

庭園を一周したので、ひとりでに彼女は家の方へ歸つてきた、と、彼女はブリアンヌ嬢（逃げないと言つて、ボグチヤロウオに留まつて居たのだ、）が見知らぬ男と一緒に自分の方へやつて來るのを見た。これは地方の都督で、公爵令嬢に即刻出發しなければならないと勸める爲めに訪ねて來たのであつた。

公爵令嬢マリヤは彼の言ふことを聞いてはゐたが、何を言つてゐるのだか分らなかつた。公爵令嬢は彼を家へ案內し、晝食を勸め、自分も一緒に坐つた。それから失禮すると斷りを言つて、彼女は老公爵の部屋の扉口へ行つた。醫者は吃驚した顏をして出てきた、そして內に這入つてはいけないと言つた。

『彼方へいらつしやい、お嬢さん、彼方へいらつしやい！』

公爵令嬢マリヤはまた庭へ出て行つた、そして丘の麓の池のほとりの、誰からも見られないやうな草原の中に坐した。そこに何の位ゐの間ゐたか彼女には分らなかつた。小徑を駈けて來る女の足音に、ふと彼女はあたりを振り返つた。彼女は立ち上つた、そして女中のドニヤーシヤが、明らかに走つて

彼女を探しに來たらしく、女主人を見付けると、吃驚したかのやうに、ひたと立ち止つたのを見た。

『いらつして下さいまし、どうぞ、お嬢さま……公爵が……』と、ドニヤーシヤは聲を切らして言つた。

『直ぐ行くわ、直ぐ行くわ！』と、公爵令嬢はドニヤーシヤが言はうと思つて居たことを言ふ暇を與へずに、急いで叫んだ、そして努めて彼女を見ないようにして、家の中へ駈け込んだ。

『お嬢さん、神様の御心です！　あなたは一番不幸なことに出會ふお覺悟をなさらなくてはなりませんん、』と、家の入口の所で會つた都督が言つた。

『構はないで下さい、嘘ですよ！』と、公爵令嬢は彼に向つて腹立たしげに叫んだ。

醫者が彼女を止めようとした。彼女は醫者を押しのけて、扉口に駈け込んだ。『何だつてこの人たちは、むつかしい顏をして私を止めるんだらう？　私はあんな人たちにちつとも居て貰ひ度くないわ！あの人たちは此所で何をしてゐるんだらう？』と、彼女は思つた。

彼女は扉を開けた、と、之れ迄は始終暗くしてあつた部屋の中に、明るい日光が射し込んで居るのに、ぎよつとした。彼女の年とつた乳母やその他の女たちが部屋の中にゐた。みんなは寢床の傍から引き退つて、彼女の通り路を開けた。公爵は未だ以前と同じやうに寢床の上に横たはつてゐた、が、その穩やかな顏の嚴とした樣子は、公爵令嬢マリヤをば閾の所に止まらせた。

『いゝえ、お父樣はお亡くなりになつたのぢやない、そんな筈があるものか！』と、公爵令嬢マリヤは心の中で言つた、彼女は父の傍に行つた、そして押し寄せて來る恐怖と戰ひながら、自分の唇を父の頰に押し當てた。が、はつとして彼女は身を退いた。父に對して感じてゐた總ゆる優しい情は忽ちにして消え失せ、續いて自分の前に横たはつて居る者に對する恐怖の情に襲はれた。

『いゝえ、いゝえ、お父樣はもう居らつしやらないんだ！お父樣はもう居らつしやらないんだ、お父樣の居らつした所には何だか見馴れない、不吉な恐しい、慄つとするやうな忌はしい秘密が居るんだ！』

兩手で顏を隱しながら、公爵令嬢マリヤは、彼女を支へた醫者の腕に凭れた。

チホンと醫者との前で、女たちは嘗ては公爵であつたその亡骸を洗ひ、口が硬張つて開き切りにならないやうに、ハンカチーフで顏を結へ、そして、も一つので手足を縛つた。それから勳章の附いた軍服が着せられて、その小さい干乾しになつた身體はテーブルの上に乘せられた。何時、誰が凡てさういふことをしやうと思ひついたのか分らなかつた。それはみんな自然にさうなつたやうに思はれた。夜になると蠟燭が棺の周圍に點され、葬布がその上に置かれた、そして杜松が床の上に撒かれ、印刷した祈禱文が死者の凋びた頭の下に置かれた、補祭は隅の方に座つて詩篇を高らかに讀んでゐた。

一疋の死んだ馬の周圍に、多くの馬が集まつて、鼻を鳴らし、そして跳ねまはるやうには知ると知らざると多くの人々が集まつた——都督や、村の長老や、百姓の女たちや、凡ての人々は一樣にむつかしい、考へ深さうな眼をして、各自に十字を切り、禮拜し、そして、老公爵の冷たい硬張つた手に接吻した。

九

アンドレー公爵がボグチヤロウオに住まふやうになるまでは、その領地は住居として一度も使はれた事がなかつたそれにボグチヤロウオの百姓はルイシーヤ・ゴオルイの百姓とは、全く氣質も違つてゐた。彼等は言葉も、着物や風俗も違つてゐた。ボグチヤロウオの百姓は贏野から來たのだと言つてゐた。老公爵は、彼等が牧獲のためとか、池や堀を堀る爲めとかに、ルイルシーヤ・ゴオルイに來た時には、その勤勉を賞めたけれども、その野蠻な風俗が氣に入らなかつた。

アンドレー公爵の、ボグチヤロウオに住んだこと、、彼のさま〴〵の改良——病院とか、學校とか、小作料を下げることとか——とは、彼等の風習を、少しも和げなかつた、それ所か、反つて、老公爵が野蠻と呼んだ彼等の性質の特徴を更らに强めた。それ許りか、曖昧な風說が始終彼等の間に傳はつ

てゐた、或る時は、彼等はみんなコザツク兵にされる爲めに連れて行かれるのだとか、或ひは何か新らしい宗教に改宗させられるのだとかいふことを信じたり、さては何か皇帝の布告があるとか、一千七百九十七年に皇帝パウエル・ペトローキツチに對してなした誓約(その時分はまだ農夫に自由が與へられてゐたのだが、後になつて貴族達がその自由を奪つたのだと言はれてゐた)に就ての噂や、七年毎に死から蘇み返つて完全な自由を與へ、現在の諸制度を廢すると云ふことになつて居る、皇帝ピヨートル・フヨオドロキツチが豫期の如く復活して來るといふ噂などが行はれて居たのである。戰爭や、ボナパルトや、ボナパルトの侵略に就ての噂が、彼等の心の中では、キリストの敵とか、世界の終焉とか、完全な自由とかいふ漠然とした觀念と結び付けられて居たのであつた。

ボグチヤロウオの附近には大きな村々があつて、皇室附きの農奴や、又は土地に居ない地主に小作料を拂つてゐる百姓が住んでゐた。その邊りには自分の所有地に居を定めて居る地主といふ者は殆んど居なかつた、その結果家附きの農奴や百姓で文字を讀むことの出來る者は極く稀であつた。で、ロシアのこの地方の百姓の間では、他の者の間でよりも更にはつきりと强く著しく、同時代の人々には滅多に分らない、ロシアの農夫の生活の不思議な暗流を見ることが出來るのであつた。

二十年以前に、この地方の百姓たちの間に或る想像された溫かい川へと移住する運動が起つたことがあつた。數百人の百姓たちが——その中にボグチヤロウオの百姓たちも混つてゐた——突然各自の

家畜を賣り家族を引き連れて、東南の方へと移り始めた。大洋を越えて未知の國へと飛んで行く鳥のやうに、これ等の人々は妻子と一緒に、その中の誰一人も行つたことのない東南の方へと向つた。彼等は隊商となつて出發し、一人〳〵その自由を買ひ戻し、その溫い泉の未知の地に向つて走るもあれば、馬を驅るもあり、歩くもあつた。多くは罰せられた、シベリアに流されたものもあつた、途中寒さと餓の爲めに死んだものも多かつた、ひとりでに歸つて來たものも多かつた、そして、その運動はそれが始まつた時のやうに、これと云ふ原因もなしに消えて了つた。けれども、その暗流はやはり人民の間に流れてゐた、そして或る新らしい表現を見出す爲めに力を集めてゐた、それは不思議に、不意に、また同時に單純に、自然に、そして力強く現はれて來る運命を持つてゐたのだ。一千八百十二年には、百姓たちと密接な關係をもつて生活してゐる人々は、誰も彼も、激動が密かに醱酵してゐて、何等かの爆發が近づいて居ることに氣がついてゐた。

老公爵の亡くなる少し前にボグチヤロウオに來たアルパチイーチは、百姓たちの間に何やら激昂があることを見てとつた、それから、ルイシーヤ・ゴオルイ邊では、六十露里四方内に於ける總ての百姓は、各自の村々をコザツクの荒らすまゝに打棄てゝ、逃げて行つたのに反して、ボグチヤロウオあたりの曠野の百姓たちは、噂に依ると、フランス軍に通じて、各自の家に止まつて居り、その間には奇怪な文書さへ廻されて居るといふことに氣が付いた。

彼は、自分に馴付いて居る農奴たちの口から、百姓のカアブといふ、この村で非常に勢力のある男が、數日前政府の輸送隊につい行つて、コザツク兵は無人の村々を荒して行くけれども、フランス軍はそれには手も觸れようとはしないと云ふ話をもつて歸つて來たといふことを知つた。

彼は、もう一人の百姓が先日、フランス軍の屯營して居るウイスラウホヴオの小村から、フランス軍は決して住民には害を與へない、若し住民がその儘に居るならば、取り立てたものは何でもその代價を拂ふといふ布告を持つて來たといふことをさへ知つた。實際嘘でないと云ふ證據に、かの百姓はウイスラウホヴオから、乾草に對して前金として受け取つた百ルーブルの紙幣、(しかし彼はそれが贋造だといふことを知らなかつた)を持つて來た。

それから最後に、何よりも最も大切なことは、アルパチイーチは、彼が丁度村の長老たちに、ボグチヤロウオから、公爵令嬢マリヤの荷物を運ぶ荷車を徵集する命令を出した日、村には會議が開かれ、此儘にしてゐて逃げないことに決議されたのを知つたことである。その間にも時間は經つて行つた。

公爵の亡くなつた日の、八月十五日には、都督は公爵令嬢マリヤに、だん〳〵危險になつて來たから、その日のうちに是非避難するやうに勸めた。

彼は、十六日以後には何が起らうとも責任を持つことは出來ないと言つた。彼はその晩、明朝葬式に來ると約して馬車で歸つて行つた。が、その次の日にフランス軍が多分進んで來るといふ豫報に接

したので來ることが出來なかつた、そして、家族と目星しいものとを自分の領地から移すのに辛と間に合つた位るであつた。

殆んど三十年の間ボグチヤロウオは村長ドロンといふ、老公爵がドロニユーシカと呼んで居た男の、支配の下にあつた。

ドロンは、成長すると直ぐに濃い髭が生えて、それから六十七十になるまで、髪の毛も白くならねば齒も抜けず、六十になつても三十の時のやうに腰も曲らずに元氣で、殆んど變らずに居るといふ、肉體的にも精神的にも強い百姓の一人であつた。

溫かい河へと移住する企てには、彼もまた他の者と一緒に仲間に加はつたが、その後間もなくボグチヤロウオの村長兼監督者に選ばれ、その位置を二十三年の間落度なく勤めてきた。百姓たちは、自分たちの主人よりも、ドロンの方をずつと恐れてゐた。老公爵も、若公爵も、執事も彼を尊敬して、戯談に彼を大臣と呼んでゐた。ドロンは村長を命ぜられて以來一度も醉つたこともなければ、病氣になつたこともなかつた。彼は夜眠らなくても、又激しい勞働をしても、少しも疲れた樣子を見せたことがなかつた、彼は讀み書きが出來なかつたけれども、自分の賣つた大きな馬車積の粉の斤數の勘定や、夫れに支拂はれた金の勘定を忘れたこともなければ、ボグチヤロウオの畑の一エーカアに就て小麥の一束をも間違へはしなかつた。

アルパチイーチがルイシーヤ・ゴオルイの劫奪された領地からやつて來て、早速呼び寄せたのは、この百姓ドロンであつた。彼は、ドロンに公爵令嬢の馬車用として十二頭の馬と、それからボグチヤロウオから移住をしなければならぬので、その爲めに十八臺の馬車を仕度することを命じた。百姓たちは、農奴として働く代りに小作料を拂つて居たのだが、アルパチイーチはこの命令を實行するに何等困難に遭はうとは豫期しなかつた、何故ならばボグチヤロウオには二百三十軒の相當な家があり、百姓たちは工面よく暮して居たからだ。

所が、ドロンは、その命令を受けとると、眼を落して、何とも答へなかつた。アルパチイーチは百姓たちの名を指して、その者たちから馬車を徵發するようにと命じた。

ドロンは、それ等の百姓たちの所有の馬は雇はれて行つて了つたと答へた。アルパチイーチは別の百姓たちの名を指した。ドロンの言ふ所に依るとその百姓たちも、役に立つ馬は持つてゐない、或るものは政府の輸送に雇はれ、或るものは跛になり、或るものは飼料が少ないので死んで了つたといふのであつた。ドロンの意見では、荷物の運搬は愚か公爵令嬢の馬車に用ふるだけの馬を得る望もないと云ふのであつた。

アルパチイーチは、ドロンをヂツと見詰めて顏を顰めた。ドロンは模範的の村長であつた、しかし、アルパチイーチも公爵領の地を二十年の間無爲に管理してゐたのではなかつた。彼も亦模範的の執事

であつた。彼は、自分の管理して居る、百姓たちの、必要と、したいと思ふこととを見分ける能力を最高度に持つゐた、從つて非常に勝れた執事であつた。ドロンをヂツと見つめて居るうちに、彼は忽ちドロンの答へは、彼自身の考へを發表したものではなくて、ボグチヤロウオ村の一般の意見の傾向を發表したものである、そして村長も既にその中に引込まれて居るのだといふことを見てとつた。それと同時に、彼は、ドロンは金を貯め込んでゐて村で憎まれて居るので、兩陣——即ち主人方と百姓方——の間に立つてぐすぐすして居るに違ひないと云ふことを知つた。彼は、ドロンの眼の中に躊躇してゐる樣子を見抜いた、で、顏を顰めてドロンの傍に近づいた。

『だが、ドロニユーシカ』と、彼は言つた、『よく私の言ふことを聞け！　そんな馬鹿々々しい事をつちやいけない。旦那樣が、公爵アンドレー・ニコラエヰツチが、みんなの者を避難さして、敵の手に殘さぬやうに私にお命じになつたんだよ、皇帝もさうしなければならぬといふ布告をお出しになつたんだ。此所に殘つて居る者は、卽ち皇帝に叛く奴なんだ、解つてゐるか？』

『解つております、』と、ドロンは眼を上げずに答へた。

アルパチイーチは、その答へに滿足しなかつた。

『おい、ドロン、面倒なことになるぞ！』と、アルパチイーチは、頭を振りながら、言つた。

『それはあなた次第で御座います、』と、ドロンは鬱々として言つた。

『おい、ドロン、止せよ！』と、アルパチイーチは上衣の衣匣から手を出して、嚴肅な身振りでドロンの足下の地上を指しながら繰り返した。『私はお前をちやんと見抜くことが出來るんだぞ、それ所か、私はお前の足の下の地下三ヤードの底まで見通すことが出來るんだぞ、』と、彼はドロンの足下の地上を眺めて言つた。

ドロンはもぢ〳〵した、彼はアルパチイーチの方を竊むやうに眺めて、そしてまた眼を落した。

『馬鹿げたことは止せ、そしてみんなに、家をたつてモスクワへ行くやうに荷物をこしらへろツて、それから明日の朝公爵令嬢の荷物を積む馬車を用意するやうに、さう言へ、そしてお前は村の集會なぞに行つちやいけないぞ。解つたか？』

と突然、ドロンはアルパチイーチの足下に自分の身體を投げ伏した。

『ヤコフ・アルパチイーチ、私を免職して下さい！　私から鍵を取り上げて、私を免職して下さい、お願ひです！』

『何を言ふんだ！』と、アルパチイーチは嚴然として言つた。『私はお前の身體を通して地の下の三ヤードまで見抜くことが出來るんだぞ、』と、彼は繰り返した、それは彼が、自分で養蜂の上手なことや、燕麥を播く日をよく知つて居ることや、それから二十年の間老公爵の機嫌をうまく取つたことやで、魔法使ひと評判されてゐることを知つて居り、そして、魔法使ひといふ者には人の足の下三ヤードを

見通す力があると云ふことを知つて居たからであつた。

ドロンは立ち上つて、何か言はうとした、がアルパチイーチがそれを遮つた。

『一體お前が頭の中で考へたことゝいふのは何だ？　えゝ！……何を考へたのだ？　えゝ？』

『私が村の人たちを何うすることが出來るものですか？』と、ドロンは言つた。『みんなは煮えくり返つて居るんです。私がみんなに言ひますと……』

『さうだ、是非さうしてくれ、』と、アルパチイーチは言つた。『みんな酒でも飲んで居るのか？』と、彼は簡單に訊いた。

『みんなは煮えくり返つて居るんです、ヤコフ・アルパチイーチ、みんなは又一樽手に入れたんでね。』

『ぢやア私の言ふことを聞け。私は警察署長の所へ行つて來るから、お前はみんなにさうを言へ、もう其樣なことはみんな止めて馬車の用意をしろツて、みんなに言へ。』

『畏まりました、』と、ドロンは答へた。

ヤコフ・アルパチイーチはそれ以上強く言はなかつた。彼は百姓たちを扱ふのに多くの經驗を持つてゐた、で、服從させる主な手段は、彼等が何事にも從ふものだといふことに少しも疑ひを抱かないやうに見せることだといふことを知つてゐた。で、ドロンから柔順な『畏まりました』と云ふ言葉を絞り出すとヤコフ・アルパチイーチはそれに滿足した、尤も、內心、馬車は軍事當局者の手を借りないでは得ることは覺付かないと言ふ、疑ひ——といふよりは寧ろ確信——を持つて居たのだが。

で事實晩になつても、馬車は持つて來られなかつた。酒場では村の人の集會がまた開かれて、その集會では、馬を森の中に追ひ込んでおいて、荷車も貸さないことを決議した。凡て斯ういふことに就いては公爵令孃には一言も言はずに、アルパチイーチはルイシーヤ・ゴオルイから來た荷車から自分の荷物を下ろし、それから取り離した馬を公爵令孃の馬車に附けるやうに命じ、そして自分は馬に乘つて警察の役人の所へ出かけて行つた。

十

父の葬式が濟むと、公爵令孃マリヤは自分の室に閉ぢ籠つて、誰をも近づけなかつた。女中が扉口の所に來て、アルパチイーチが旅行に就いてのお指圖を仰ぎに來たと傳へた。(これはアルパチイーチがドロンと談判をするより前のことであつた。)公爵令孃マリヤは橫になつて居た長椅子から立ち上つて、閉め切つて扉越しに、自分は何處へも行かないつもりだから、チツと靜かにさして置いてくれと答へた。

公爵令孃マリヤが橫になつて居た室の窓は西向きであつた。彼女は壁の方を向いて長椅子の上に橫

になつてゐた、そして革枕に附いて居るボタンを弄りながら、その枕の他には何も見なかつた、彼女のさま〴〵の考は莫然と一つの問題に集中せられてゐた。彼女は、死の必然なことゝ、自分の精神の陋劣なことゝを考へた、自分の精神の陋劣といふことに就いては、彼女は、それが父の病氣の時に現はれて來る迄は、思ひも及ばなかつたのであつた。彼女は祈らうと思つた、けれども祈れなかつた、その時のやうな精神狀態では、神に向ふ勇氣はなかつた。暫くの間彼女はそのまゝ横になつてゐた。

日が沈みかゝつてゐた、斜めに射し込む光線が開いた窓を通して室内を明るくした、そして公爵令嬢マリヤが見詰めてゐたモロツコ皮のクツションの一部を赤々と照した。彼女の思想の流れが不意に止つた。彼女は無意識に起きあがり髪を撫で付けて、立ち上つた、そして窓の所へ歩いて行つて、晴れた風のある夕暮の、さわやかな冷い空氣を深く呼吸した。

『さうだ、今お前は樂々と入日を賞でることが出來るのだ！　あの人はもう此所には居ない、誰もお前を邪魔するものはない。』と、彼女は自分に向つて言つた、そして椅子の中に沈み込み、頭を窓欄の上に凭せかけた。

誰かゞ庭から柔かな優しい聲で彼女の名前を呼んで、そしてその頭に接吻した。彼女は振り返つた。それは黒い着物に裏章をつけたブリアンヌ嬢であつた。彼女は靜かに公爵令嬢マリヤに近づき、嘆息をして彼女に接吻した、そして直ぐにワツと泣き出した。公爵令嬢マリヤはブリアンヌ嬢の方を振

り返つて見た。以前ブリアンヌ嬢とした色々の喧嘩や、ブリアンヌ嬢に對する自分の嫉妬が、公爵令嬢マリヤの心の中に思ひ出された。公爵令嬢は又「彼」が最近にはブリアンヌ嬢に對する態度を變へ、彼女を見て居るのさへ耐へられなくなつて居たことを思ひ出した、それで、自分までが心の中で彼女を嫌つて居たのは濟まないことだつたらうと思つた。『さうだ、それにお父樣のお亡くなりになることを願つたりなどした私が、そんな私が、何うして無暗に人を責められやう！』と、彼女は思つた。

公爵令嬢マリヤは、近頃自分に遠ざけられて居るけれども、矢張り自分を手頼りにしてゐて、他人の中にもまれて居るブリアンヌ嬢の身の上を、あり〳〵と心に描いた。そしてブリアンヌ嬢を氣の毒に思つた。彼女はやさしく、尋ねるやうにブリアンヌ嬢を見て、其方に自分の手を差し出した。ブリアンヌ嬢は直ぐ涙ながらに其手に接吻して、公爵令嬢の悲みを、自分もその悲みの分前を受ける者として、それに就いて話し出した。ブリアンヌ嬢は、自分の悲みに對する唯一の慰藉は、公爵令嬢が自分と共にその悲みを分ち合ふことを許してくれることであると言つた。それから又二人の間のこれ迄の樣々な誤解も、二人の大きな悲みの前には消えてなくなつて了はねばならぬといふことや、自分は誰の前に出ても疾ましくないつもりだといふことや、それから彼も天上から自分の愛と感謝とを見て居るといふことなどを話した。

公爵令嬢は、その言葉には殆んど注意しないで聞いゐてた、が、時々ブリアンヌ嬢の顏を眺め、そし

て、その聲の響きに聽き入つた。

『あなたの御境遇は二重の恐ろしい破目にあるのですよ、お嬢さん、』と、ブリアンヌ嬢は言つた。『私はあなたが御自身のことを考へて居らつしやれなかつたことも、今でもさういふ譯には行かないことも、よく存じて居りますわ。ですけれど、私は、私のあなたに對する愛でもつて、あなたのことをお介意しないでは居られないんですの……アルパチイーチはあなたの所に參りましたの？　あの人はあなたにお移りになることを何か言ひましたの？』と、彼女は尋ねた。

公爵令嬢マリヤは答へなかつた。彼女は誰が移るのか又何處へ移るのか分らなかつた。『今何かするとか、何か考へるとかいふことが出來ようか？もう何したつて同じことぢやあないか？』と、思ひ惑つた。で、彼女は何とも答へなかつた。

『ねえ、chère marie（マリイさん）』と、ブリアンヌ嬢は言つた、『私たちは危險なんですよ、私たちはフランス軍に包圍されて居るんですもの。今動くのも危ないんです。動くと、私たちは屹度捕虜にされて了ふんですよ、そして、どんな事になるんですか……』

公爵令嬢マリヤは、友達を見詰めて居たが、彼女が何を言つてるのか、まるで解らなかつた。

『まあ、何んなことが起つたつて私にはもう何でもないんですのよ、』と、彼女は言つた、『勿論私は何んなことがあつてもお父樣の所から離れようとは思ひませんの——アルパチイーチは何だか避難するやうなことを言つて居ましたが……あなたから言つといて頂戴な……もう私は何にも出來ません し、又仕度いとも思ひませんの……』

『私はあの人と今まで話をしてゐましたの。あの人は私たちが明日たてるやうになることを望んで居るんですけれど、私はもう此所に居る方が宜いと思ひますわ、』と、ブリアンヌ嬢は言つた。『だつて、ねえ、chère marie,（マリイさん）さうぢやありませんか若し途中で敵の兵隊や、亂暴な百姓なんかに捕まつたら、それこそ大變ですものね。』

ブリアンヌ嬢は提鞄の中から、普通のロシアの紙ではない、一枚の書付を取り出した。それは、各自の家を棄てない人民にはみんな保護を與へるといふことを知らせた將軍ラモオの布告であつた。彼女はそれを公爵令嬢に渡した。

『この將軍に申し出たら一等いゝだらうと私思ひますわ、』とブリアンヌ嬢は言つた。『屹度相當にあなたを尊敬するだらうと思ひますわ。』

公爵令嬢マリヤはその書付を讀んだ、そしてその顏は涙なき啜り泣きに震へた。

『誰から、あなたは之れを手にお入れになつたの？』と、彼女は尋ねた。

『多分私の名前で私がフランス人だといふことを知つたのでせう、』と、ブリアンヌ嬢は、顏を染めて言つた。

その布告書を手に持つて、公爵令嬢マリヤは窓際から立ち上つた、そして青い顔をして部屋を出てアンドレー公爵の以前の書齋に這入つて行つた。

『ドニヤーシヤ！　アルパチイーチを喚んでおくれ、ドロニユーシカでも、誰でも宜いから！』と、公爵令嬢マリヤは言つた。『それからアマリヤ・カルロウナに私の所に來ないやうに言つておくれ、』と、彼女は、ブリアンヌ嬢の聲を聞いて、斯う附け足した。『直ぐ立つんだよ！出來るだけ急いで！』と、公爵令嬢マリヤは、フランス人の手に落ちるかも知れないと思つて恐れながら言つた。

『アンドレー公爵が、自分がフランス人の手に落ちたと知つたら、何うだらう！　自分が、ニコライ・アンドレーキツチ・バルコンスキイ公爵の娘が、身を低うして將軍ラモオに保護を願ひ出たり、その厚意にすがるやうなことがあつたら何うだらう。』

かういふ考が彼女を怖れさせ、彼女を震はせ、そして眞赤にさせた。彼女は、これ迄殆んど思ひも及ばなかつたやうな復讐的な怒りと誇りとの逆り出るのを感じた。自分の境遇の色々の苦しさに加へて、更らに屈辱の有樣がまざ〳〵と相像に浮び上つた。

『彼等フランス人は、この家に宿舍を取るに違ひない、將軍ラモオはアンドレー公爵の書齋を占領するに違ひない、そして兄の手紙や書類を見ちらしたり讀んだりして樂しむに違ひない、mademoiselle Bourienne lui fera les honneurs de Bogucharovo.（ブリアンヌ嬢はボグチヤロウオの主人面を

することだらう！）私はお慈悲に一部屋與へられる位ゐのことなんだらう、兵卒どもはお父樣の新らしく堀つた墓を發いて十字章や勳章を盜むに違ひない。彼等はロシア人に對する自分たちの勝利の話を私に色々と聞かせるに違ひない、私の悲みに偽善的な同情を寄せるに違ひない……』と公爵令嬢マリヤは思つた、彼女は、彼女らしいことを考へやうとはしないで、父や兄が考へたらうと思はれるやうなことを考へるのを義務だと感じて居たのであつた。

彼女一個人としては、自分が何處に居やうと、自分に何んなことが起らうと、かまはなかつたのである、が、それと同時に、自分を亡き父やアンドレー公爵の代表者と考へたのであつた。で、無意識に彼等の考を考へ、彼等の感じを感じたのであつた。彼等が屹度言つたらうと思はれることや、彼等がこの場合するに違ひないと思はれることやを、するのが、自分の務めだと思つた。彼女はアンドレー公爵の書齋に行つて、すつかり兄の考に入り込んで了はうと努めながら、自分の位置についても考へた。

父の死以來何程のことでもないと見込んで居た人生の急變が、之れまで少しも知らなかつたやうな力をもつて公爵令嬢マリヤの周圍に起きあがり、彼女を一緒に浚つて行くのであつた。

赤くなつたり、興奮したりして彼女は部屋の中を步き廻りながら、先づアルパチイーチを喚びにやり、次にミハイル・イワーニツチを、それからチホンを、それからドロンをと、次々に迎へにやつた。

ドニヤーシヤや、年とつた乳母や、それから女中たちは、彼女に何れ程ブリアンヌ嬢の話の方が正しかつたかと云ふことを話し衆ねて居た。アルパチイーチは家には居なかつた、彼は警察官の所へと出かけて行つたのである。建築家の、ミハイル・イワーニツチは召しに應じて、睡むさうな眼をしてやつて來た、が、公爵令嬢マリヤに何も言ふことが出來なかつた。彼は十五年の間自分の考を言はずにたゞニコ〳〵して老公爵の言葉に答へ馴れて來たのだが、今もそれと同じ從順な笑みをもつて、公爵令嬢の問ひに答へた、で、その答からは何一つはきりした意味を得ることが出來なかつた。

年とつた從僕の、チホンは、青ざめて沈んだ顏に、慰めることの出來ない悲しみの印を帶び、公爵令嬢マリヤの問ひに對しては何事によらず、唯『左樣でございます、お嬢さん、』と、答へた、それに彼は彼女を見て居ると定つて啜り泣きを制することが出來なかつた。

最後に、村長ドロンが、部屋に這入つて來て、丁寧に公爵令嬢に頭を下げ、扉口の近くに立つた。

公爵令嬢マリヤは部屋の中を彼方此方と歩き、そしてドロンに面と向つて立ち止つた。

『ドロニユーシカ、』と、彼女は言つて、彼をばいつも變らない友達、毎年ヴイアズマの市場から歸る時に、彼女には、いつもドロンと聯想の繋がつてゐる同じ生姜餅を持つて歸つて來て、同じ微笑を湛えて彼女に贈つた、そのドロニユーシカのつもりで眺めた、『ドロニユーシカ、今度、私たちはこんな不幸に會つて、』……と彼女は言ひ始めた、が、言葉を續けることが出來なかつたので止めた。

『私たちはみんな神樣のお手の中にあるのです、』と、彼は、溜息を吐いて、言つた。

二人とも默つた。

『ドロニユーシカ、アルパチイーチが何處かへ行つて了つたので、相談相手が一人もないんだよ。全く、みんなの話のやうに、もう避難することも出來ないのだらうかね?』

『何うしてあなたが避難なさることが出來ないことがありますものか、あなた樣が?たてますとも、』と、ドロンは言つた。

『噂ではもう敵のために危險だと云ふんだよ。ねえ、お前、私では何一つすることが出來ないわ、何うしたら宜いんだか分らないわ、誰も居ないんだもの。私は今夜か明日の朝早くに屹度たちたいんだよ。』

ドロンは物を言はなかつた。彼は自分の眉の下から公爵令嬢マリヤを見上げた。

『馬がございません、』と、彼は言つた。『私はヤコフ・アルパチイーチにもうその話をいたしましたが。』

『何うしたんだらう?』と、公爵令嬢は言つた。

『何事も神樣の配劑でございます、』と、ドロンは言つた。『軍隊に持つて行かれたのもありますし、それに死んだのもあります、惡い年でございましたよ、兎に角。たゞもう自分たちが餓え死にするのに、何うして馬を養ふどころぢやアございません! もう三日の間といふもの麵麭一片もなしに暮して居

るのでございますよ。何一つないんです、何から何までスツカリ掠奪されて了つたのでございます。』

公爵令嬢マリヤは彼の言ふ事を一心に聞いてゐた。

『百姓たちが掠奪されたツて？　麵麭もないツて？　』と、彼女は訊いた。

『餓えて死にかゝつております、』と、ドロンは言つた『馬や荷馬車のことを言つたつて、とても駄目で御座います。』

『だが、何うしてお前は早くさう言はなかつたの、ドロニユーシカ？　みんなは何うしても助けてやることが出來ないのかい？　私は自分の出來るだけのことは何んなことでもするよ……』

公爵令嬢マリヤにとつては、斯ういふ場合、卽ち自分の心がこんな悲みに溢れて居るやうな時にも、金持と貧乏人とを助けることが出來ないと云ふことを考へると不思議であつた。彼女は「地主の穀物」といふものが貯へてあつて、それが時に依ると百姓たちに與へられたことがあるのを薄ら覺えに知つて居た。彼女は又自分の兄にしても、自分の父にしても、困つて居る百姓を助けることに反對しないだらうといふことを知つてゐた、たゞ夫れを分配する命令の言葉に何か間違ひをしはしないかと、それだけが心配であつた。彼女は、わけもなく自分の悲みを忘れることの出來るやうな事をする口實の出來たのを喜んだ。彼女はドロニユーシカに百姓たちの窮乏の有樣を訊き、そしてボグチヤロウオに「地主の貯へ」があるか何うかを尋ね始めた。

『たしか兄さんの小麥の貯へがあつたと思つたがね？』と、彼女は訊いた。

『小麥はそつくり其儘にしてございます、』と、ドロンは得意さうに言ひ放つた。『公爵樣が賞れといふ御命令をお出しになりませんでしたから。』

『百姓たちに夫れを遣つておしまひ、要ると云ふだけスツカリ遣つておしまひ、私は兄さんに代つてお前に委すからね、』と、公爵令嬢マリヤは言つた。

ドロンは深い溜息を吐いて、何とも答へなかつた。

『あれだけで足りるならば、お前あの穀物を百姓たちに分けてお遣り、すつかり分けてお遣り、私は兄さんに代つてお前に言ひ付けるのだよ、そして私たちのものは又百姓たちのものだといふ事をみんなに言つておくれ。私たちはみんなの爲めには何にも惜みはしないんだからね。さう言つておくれ。』

ドロンは公爵令嬢が喋つて居る間、始終ぢつと公爵令嬢を見詰めてゐた。

『私を免職なすつて下さいまし、お嬢樣、お願ひでございます、私から鍵を取り上げるやうに、みんなに言ひつけて下さいまし、』と、彼は言つた。『私は二十三年の間勤めて居りました、これといふ失策も致しませんでした、私を免職なすつて下さいまし、お願ひでございますから。』

公爵令嬢マリヤは、彼が自分に何を望んでゐるかと言ふことも、何故免職して呉れと願ふのかといふことも、少しも考へなかつた。彼女は自分が彼の忠實を疑つた事が一度もないことを自分はいつで

も彼のためや、百姓たちのためには何んなことでもするつもりでゐると言ふことを答へた。

十一

一時間後にドニヤーシヤが、ドロンが來たと云ふ報知と、公爵令嬢の命令に依つて、百姓たちがみんな穀倉に集つて、お嬢さんに話をしたがつて居ると云ふ報知とを公爵令嬢の處へ持つて來た。

『だけど私はみんなを呼びにやつた譯ではなかつたんだよ、』と、公爵令嬢マリヤは言つた。『たゞみんなに穀物をやつてくれるようにとドロニユーシカに云ひつけたんだよ。』

『ね、どうぞ、お嬢さま、みんなに歸へるようにとさうお言ひ付けなさいまし。みんなの所にお出でなすつてはいけません。あれはみんな策略でございますから、』と、ドニヤーシヤが言つた、『そのうちヤコフ・アルパチイーチが來ますから、そしたら出發いたしませう……ですから、どうぞ……』

『策略とはどんな?』と、公爵令嬢は驚いて尋ねた。

『それでございます、私は何も彼もよく存じて居りますから、たゞ何うぞ私のいふことをお聞き下さいまし。乳母さんにもお訊きなすつて下さい。百姓達は、あなたの御命令通りに立ち退くわけに行かないと言つて居るさうでございますよ。』

『お前は何か考へ違ひをして居るんだよ。私は決してみんなに立ち退けなどゝ言ふ命令をしたんぢやないんだよ……』と、公爵令嬢マリヤは言つた。『ドロニユーシカを呼んでおくれ。』

ドロンが這入つて來て、百姓たちが公爵令嬢の指圖に依つて來たと云ふドニヤーシヤの言葉を證據立てた。

『けれども私はみんなを呼びなどはしなかつたぢやないの、』と、公爵令嬢は言つた。『お前は私の命令を間違へて傳へたんだね。私はたゞお前に、みんなに穀物をやつてくれと言つたゞけなんだよ。』

ドロンは答へないで嘆息した。

『若し、さうあなたが御命令なさいますれば、彼等は歸ります、』と、彼は言つた。

『いえ、いえ、私はみんなに會ひに行かう、』と、公爵令嬢マリヤは言つた。

ドニヤーシヤや、年寄つた乳母が止めやうとしたにも拘らず、公爵令嬢マリヤは階段に出て行つた。ドロニユーシカと、ドニヤーシヤと、年寄つた乳母と、ミハイル・イワーニツチとがその後から從いて行つた。

『あの者たちは多分私が自分だけ立ち退いて、みんなをフランス人のお慈悲にまかして殘して置く爲めに、穀物をやるのだと思ひ込んだのだらう、』と、公爵令嬢マリヤは考へた。『私はモスクワの領地で月々食料もやれば宿も貸してやると云ふ約束をみんなにしてやりませう。アンドレーが私の場合にな

つたら、もつと好い事をしてやるに違ひないわ』から思ひながら、黄昏の中を穀倉の近くの牧場に待つて居る群集の方へと出て行つた。

群集はどよめいて、ごた〳〵と一つに塊つて、急いで帽子を脫つた。公爵令嬢マリヤは眼を落して、足で外衣を踏みながら人々の傍に近づいて行つた。種々様々な澤山の老若の眼が彼女に据ゑられた。そこには公爵令嬢マリヤがその中のたつた一つをもよく見ることが出來なかつた程種々様々な澤山の顏が並んでゐた。そして凡ての人々に向つて一遍に話をしかけなければならないやうな氣がしたので、どう口を切つてよいか見當が付かなかつた。だが自分が父や兄の代表者だといふ考へが、再び彼女に力を與へたので、彼女は大膽に演說を始めた。

『私は皆さんが來て下さいましたのを大變嬉しく思ひます、』と、彼女は眼を上げないで、疾く激しく心臟の打つのを感じながら言つた。『戰爭のために皆さんがひどい目に遭つてゐらつしやる事を、ドロニユーシカが私に話しました。それは私たちお互ひの困難ですから、私は皆さんをお助けするためなら何も惜みません。私は、もうこの邊も危險になつて來ましたから、自分では立ち退くことにしました……敵軍はもう近くに來て居ります……と言ふのは……私はあなた方に總てのものをさし上げます、皆さん、私は皆さんにお願ひします、皆さんが缺亡にお苦しみにならないやうに、總てのものをお取り下さい。私の家の穀物をすつかりお取り下さい。けれども、若し皆さんが、私が皆さんを此所にほつたらかして置く爲に穀物を上げるのだといふ風にお聞きになりましたとすれば、それは嘘です。それ所か、私は皆さんが持物全部をお持ちになつて、私のモスクワの領地にお引き移り下さる事をお願ひいたします、私は決して皆さんの不自由のないやうに取計ひます、それをお約束して置きます。家も麵麭もさし上げるつもりで居ります。』公爵令嬢は言葉を切つた。群集から聞えて來るものは唯嘆息ばかりであつた。

『私はこの事を自分の一存でするのではありません、』と、公爵令嬢はつゞけた、『私はこれを嘗て皆さんの善良な主人であつた、亡くなつた私の父に代つて、又兄や兄の子に代つてするのであります。』

彼女は再び言葉を切つた。誰れ一人沈默を破る者はなかつた。

『私たちは誰しも共通した困難を持つてゐます、そして平等にそれを分ち合ひたいと思ひます。ですから私のものは又みんな皆さんのものであります、』と、自分の前に並んで居る數多の顏を、見上げながら言つた。凡ての眼が一樣に同じ表情をもつて自分の方を眺めてゐたが、彼女には、その表情の意味が測り兼ねた。それは好奇心か、尊敬か、感謝か、それとも危虞か、又疑念なのか、何れにしても凡ての顏に現はれてゐる表情は悉く同じであつた。

『あなた樣の御深切には誠にもつて感謝いたします、ですけれども御主人樣の穀物を持つて歸へるなどといふことは私たちには、とても出來ません、』と後の方から斯ういふ聲が聞えた。

『併し何故出來ないのです?』と、公爵令嬢は言つた。誰れ一人答へるものはなかつた、公爵令嬢マリヤ

は眼を上げて群集を眺めまはしたが、今は凡ての事が自分の眼に會ふと忽ち下がるのに氣が付いた。

『何故皆さんはさうしようと思はないのです?』と、彼女は再び訊いた。

誰れ一人答へるものはなかつた

公爵令嬢マリヤは沈默に壓迫された、彼女は何人かの眼を捉へようとした。

『何故何とも言はないのです?』と、彼女は言つて、自分の直ぐ傍に立つて腕を杖に凭せかけて居る』一人の非常に年取つた爺さんに話しかけた。『もつと何か要ると思ふ事があるなら言つて下さい。何事でもして上げるから、』と、彼女は、その老人の眼を見詰めながら言つた。所が、まるで彼女がさういふことをするのが腹が立つとでも言つたやうに、老人は頭を下げて、斯う言つた。

『何うしてそんなことに承知が出來るものですか? 私共はあなたの穀物を頂戴いたしたくございません。』

『だうして我々は總てのものを捨てゝ了はなければならないんだ? 厭な事だ……厭な事だ。』——『何も初めから我々の納得してることぢやないんだ。』——『お氣の毒ですが——どうも我々は厭ですよ。』——『御自分だけ勝手にお立ち退きなさい……』と群集の方々からからう云ふ反對が起つた。そして再び群集の總ての顏が同じ情を負びた、今度は確かに好奇心とか、感謝とかの表情ではなく、憤慨した決心の表情であつた。

『併し皆さんは私を誤解してゐるのです、』と、公爵令嬢マリヤは、陰氣な笑顏をして言つた。『何うして皆さんは立ち退かうと思はないのです? 私は皆さんの住居を定めて、暮して行けるやうして上げると云ふお約束をするのですよ。それにこんな所に居ると敵軍が皆さんを掠奪します……』併し彼女の聲は群集の聲に消された。

『我々は厭です、敵に掠奪されてもかまはないんです! 我々は、あなたの穀物を頂戴し度くはありません、贊成が出來ません!』

公爵令嬢マリヤは再び群集の中の誰かの眼を捉へようと努めた、けれど誰れ一人彼女の方を見て居るものはなかつた、人々の眼は疑ひもなく彼女の眼を避けてゐた。彼女は變に氣まづくなつて來た。

『さうだよ、あの女は俺達を手玉に取らうとしてるんだ……ずるいもんだよ、……奴隷になりに來いてえんだ! お前たちの家を叩き壞して、此方の檻の中に這入れてえんだ! お前たちに穀物をやるから、とかうお出でなすつた!』と群集の中で樣々の聲が言つて居た。

公爵令嬢マリヤは群集の圈から離れて、悄然とした顏つきで、家の方へ行つた。翌日出發するから馬の用意をして置くようにといふ命令をドロンに繰り返してから、彼女は自分の部屋に歸つて來て、ひとり思案に暮れてゐた。

十二

長い間公爵令嬢マリヤは自分の部屋の開いた窓の傍に坐つて、村の方から漂うて來る百姓共の樣々な聲の響に耳を傾けて居たが、しかし別段百姓共のことを考へて居るのではなかつた。彼女は自分が何れ程かゝつて考へても百姓共の事を理解し得まいといふ氣がした。彼女は始終たつた一つのこと——自分の悲しみと云ふ事を考へてゐた。その悲しみは現在の心配の爲めに途切れが出來たので、今はもう過去に屬するものゝやうに思はれて來た。今や彼女は昔を思ひ浮べることが出來た、泣くことが出來た、そして祈ることが出來た。日が暮れると共に風が止んだ。夜は靜かで爽かであつた。夜が更けると村の人聲は靜まり出した、鷄が鳴いた、滿月が菩提樹の後方から昇つた、爽やかな、白い、濕つぽい霧が立ち上つて、靜寂が村と、この家とを領した。

極く近い過去——父の病氣や臨終の時——の面影がそれからそれと彼女の心像の前に浮んで來た。そして悲しい喜びをもつて、彼女は自分の心を、今やさういふ幻像の上に休ませたが、併し唯最後の一つの光景だけは、かうした夜の靜かな神秘な時に、それを想像の中でさへ思つて見る勇氣が出ないやうな氣がしたので、避けてゐた。そして、さういふ幻像は極めて鮮やかに、極めて精細に彼女の前に現はれて來るので、それが彼女には、時には現在の事のやうにも、又過去の事のやうにも、かと思ふと又未來のことのやうにも思はれるのであつた。

彼女は父が始めて仆れて、ルイシーヤ・ゴオルイの庭園から擔ぎ込まれて來て、その灰色の眉を顰め

たり、おづ〳〵と不安さうに自分を眺めたりしながら何やら呟いた時の光景をまざ〳〵と思ひ浮べた。『あの時既にお父樣は、お亡くなりになる日に私に仰つたことを、言はうとして居らつしたんだわ、』と彼女は思つた、『お父樣はあの時私に有仰つたことを始終思つて居らつしたんだわ。』

それから彼女は未だ父が病氣にならない前に、ルイシーヤ・ゴオルイで或る晩、或る凶い豫覺を感じながら、父の意思に反して父の傍に坐つて居た時のことを細々と思ひ出した。彼女は眠らなかつた、そして夜が更けてから忍び足に爪立ちをして、父がその夜を過して居た溫室の扉口へ行つて、父の聲に聞耳を立てた。父は疲れた惱ましい聲でチホンに話をして居た。クリミヤのことや、溫かい夜のことや、皇后陛下のことなどを話してゐた。明らかに父は誰かと話をし度かつたのである。『それなら何故にお父樣は私をお呼びに寄越しにならなかつたのだらう？　何故お父樣はチホンの代りに私にお話しをなさらなかつたのだらう？』公爵令嬢マリヤはその時さう思つたのであつたが、今も又さう思つた。『今はもうお父樣は御自分のお心にあることを誰にもお話しにならない。言ひたいと思つてゐらつした事を私に向つて仰有るやうな瞬間は、そしてチホンではなく、此の私がそれを聞いて理解して上げるやうな瞬間は、今はもう決して歸つて來ないだらう。何故私はあの時お父樣の部屋に這入つて行かなかつたのだらう？』と、彼女は思つた。『ひよつとするとお父樣は、あのお亡くなりになる日に私に有仰つたことを、あの時有仰つたかも知れなかつたのに。あの時でさへお父樣はチホンに

話してゐらつしやる間に、私のことを一度もお訊きになつた。お父様は私に會ひたがつてゐらつしやつたのだけれど、お父様は御自分の心持を解さないチホンにお悲しさうに、お疲れになつたやうに話してゐらしつた。お父様がチホンにリザのことを、まるで生きて居る人のやうに話してゐらしつたのを私は覺えてゐる——お父様はリザが死んだことをお忘れになつておしまひになつたのだ、そしてチホンが、リザはもうこの世に居りませんよと申し上げると、『馬鹿』とお怒鳴りになつたつけ。お可哀さうだつたこと。私が扉口から聞いて居ると、お父様は呻きながら寢床の上に横になつて、大きな聲で、『あゝあ!』と有仰つたつけ。何うしてあの時私は這入つて行かなかつたのだらう? 這入つて行つたつてお父様は私に何うもなさりはしなかつたらうに。私は何程の損もしなかつたらうに。そして屹度、御安心なすつて、あの言葉を私に有仰つたことだらうに。』そして公爵令嬢マリヤは、父が臨終の日に自分に言つたあの愛撫の言葉を高く叫んだ。『かあーあーいゝ娘よ!』と公爵令嬢マリヤはその言葉を繰り返して忽ち歔欷り上げた、がそれで反つて心が安まつた。彼女は父の顏を今眼の前に見る事が出來た。そして夫れは記憶以來知つてゐる、いつも遠くに見て居たあの顏ではなく、あの臨終の日に父が言つた言葉をよく聞かうとして、その唇の所へ耳を持つて行つた時、彼女が、生れて初めて、くつ附く程に近寄つて見た、皺だらけの、弱々しい、おづ〳〵としたあの顏であつた。

『可愛い娘よ、』と、彼女は繰り返した。

『あの言葉を有仰つた時何を考へて居らしつたのだらう? 又今は何を考へて居らしつたのだらう?』これが不意に彼女の心に起つて來た疑問であつた。そして、それに對する答へとして、彼女はあの棺の中で白いハンカチーフにくるまつた顏に表はれてゐた表情をして居る父を見た。そして彼女が父に觸れて、それが父ではなく、何か神秘な恐ろしいものだと感じた刹那に襲つて來たあの恐怖が今又彼女に襲つてきた。彼女は何か他のことを考へようとした、祈らうとした、けれども何もする事が出來なかつた。今にも父の死顏が見えるかと絶えず思ひながら、家の內外を領して居る靜寂の中に魅し去られて了ふやうな氣がしながら、眼を見開いて彼女は、月光や物の影を眺めた。

『ドニヤーシャ!』と、彼女は呼いた。『ドニヤーシャ?』と、彼女は荒々しく叫んだ、そして靜寂の中から自分を引き裂くようにして、女中部屋の方へ駈けて行つたが、自分に會ひに走つて來た年とつた乳母と女中たちとに、ぱつたり出會つた。

十三

八月の十七日にラストフとイリインとは、フランス軍の捕虜から歸つて來たばかりのラブリユーシ

カと、従卒勤務の驃騎兵一人とを連れて、ボグチヤロウオを去る十五露里のヤンコウオから馬で乗り出した。彼等はイリインが買つた新らしい馬を試し方々、役に立つ乾草が村にあるか何うかを調べるつもりであつたのだ。

ボグチヤロウオはその日まで三日の間、二つの敵對して居る軍の間に狹まつて居たので、ロシアの後衛軍は、フランスの前衛軍と同じ位ゐの容易さを以て村に達することが出來るのであつた、それ故ラストフは、油斷なき士官の常として、若しそこに糧食が殘つてゐるとすれば、それをフランス軍の先を越して取つて了はうと苦心したのであつた。

ラストフとイリインとは元氣が充ち〳〵てゐた。

ボグチヤロウオは或る公爵の領地で、領主の家敷があることを知つて居たから、二人は其所で多勢の家族や奇麗な女中たちに會ひ度いものだと思つてゐた、で、そこへ行く途すがら二人はラブリューシカにナポーレオンのことを尋ねては、その話を聞いて笑つた、それからイリインが新しく買つた奴を試す爲めに馬を競走させたりした。

ラストフは今自分が行かうとして居る村が、自分の妹の約婚者のバルコンスキイ公爵その人の領地であらうなどとは、夢にも思はなかつた。

ラストフとイリインとは、馬が、とうとうボグチヤロウオの手前で疲れて了つたまで競走をした、

そしてイリインを追ひ拔けたラストフは眞先きに村の大通りに駈け込んで行つた。

『あなたは先きに出たんだから、』と、イリインは赤くなつて言つた。

『さうさ、いつも先きだつたよ、牧場でも此所でもね、』と、ラストフは泡を吹いてゐるドン産の馬を叩きながら答へた。

『でも此のフランス馬に乘りましたつても、閣下、』と、ラブリューシカは、自分の乘つて居る慘めな馬車馬を指しながら、後から言つた、『あなたを追ひ越せたんですが、たゞあなたに恥をかゝせ度くなかつたから止めにしました。』

彼等は大勢の百姓たちの群が立つて居る穀倉の方へ、並足で進んで行つた。その中の數人かは帽子をとつたが、他の者は帽子もとらないで彼等をぢろ〳〵と見て居た。二人の年とつた、皺だらけな顏をした、疎らな髯の生へてゐる百姓が、居酒屋から出て來て、蹌踉々々して調子の調はない歌をうたひながら笑顏を作つて將校達の方へやつて來た。

『面白い奴等だな！』と、ラストフは笑ひながら言つた。『何うだい、乾草があるかね？』

『そして二人とも似て居ますな何所か……』と、イリインが言つた。

『わ……が夏……を……喜び……しみ……』と、百姓は嬉しさうに微笑みながら歌つてゐた。

一人の百姓が群集の中から出て來て、ラストフの傍へ進み寄つた。

『あんた方は何方側なんですかね?』と、其百姓は尋ねた。

『我々はフランス軍だ、』と、イリインは笑ひながら答へた。『そして、この方がナポーレオンだよ、』と
ラブリューシカを指して言つた。

『それぢやああんた方はロシア軍だね?』と、百姓が訊いた。

『あんた方は澤山隊を引き連れて居なさるのかね?』と、又別の背の低い百姓が、近づいて來て尋ね
た。

『澤山だよ、』と、ラストフは答へた。『だが何故お前たちは此様なに集つてゐるのだ?』と、彼は言ひ
添へた。『お祭日か何かなのかな?』

『年寄たちが村の事で集會してるんですよ、』と、百姓はラストフの傍を離れながら答へた。
その途端に二人の女と、一人の白い帽子を被つた男とが、公爵の家から士官たちの方へ駈けて來る
のが目に這入つた。

『桃色の着物の方は俺だぜ、誰も手を付けちやいけないよ、いゝか?』と、イリインは自分たちの方
へ一生懸命に走つて來るドニヤーシヤに目をとめて斯う言つた。

『あの女は物になりますぜ!』と、ラブリューシカは、イリインに目くばせしながら言つた。

『何の用かね、別嬪さん?』と、イリインは微笑しながら言つた。

『公爵令嬢があなた方が、何聯隊の方だか、何といふお名前だか伺つて來いと仰いましたから。』

『この方は騎兵中隊長ラストフ伯爵で、私はあなたの卑しい從僕です。』

『メル……メル……メル……アルブウル!』と醉つ拂つた百姓が歌ひながら、嬉しさうに微笑
んで、娘と話をして居るイリインの方を見て居た。アルパチイーチはドニヤーシヤの後からやつて來
たが、ラストフの傍に近づくと帽子を脫つた。

『あなた樣にお手數をお掛け致しまして甚だ失禮でございますが、』と、彼は胸に手を當てながら、士
官の若年に對して輕蔑の色を含んだ馬鹿丁寧な物の言ひ方をした。『私の御主人が、今月十五日に亡く
なられました元帥公爵ニコライ・アンドレーキツチ・バルコンスキイのお孃さまでございますが——こ
ゝに居りますこの百姓たちを指して——『無教育の爲めにお苦しめられになりま
して、何うかあなた方にお出でを願ひたいと申されるのでございます……如何なものでございませ
うか、』と、アルパチイーチは悲しげな微笑を洩らして言つた。『少し傍へお寄り下さいますまいか、こ
の者等の前では少々不味うございますが……分のまはりにうろついてゐる二人の百姓を指した。

『やあい! ヤコフ・アルパチイーチ……第一等の狡猾さん

！え？　何うぞ、御勘辨下さいましだ。第一等！』と、百姓たちは彼に向つて嬉しさうに笑ひながら叫んだ。

ラストフは醉つぱらつた百姓共を見て微笑んだ。

『それとも之れが閣下に面白く思し召されるのかも知れませんが？』と、ヤコフ・アルパチイーチは、生眞面目な顏をして、片手で老百姓たちを指しながら言つた。

『いや、それが面白いなんていふことは決してないが、』と、ラストフは言つて、傍へ寄つた。『一體何うしたと云ふんかね？』と、訊いた。

『謹んで閣下に申し上げますが、實は此所に居ります土百姓共が、お嬢さまを領地からお立ち退きにならせまいとして、馬車の馬を取り放して了ふと言つて嚇すものでございますから、今朝程から荷作りは全部出來て居りますのに未だにお立ちになることが出來ない始末でございます。』

『そんな事がある筈がない！』と、ラストフは叫んだ。

『私はもう唯眞實の事を申し上げて居るのでございます、』と、アルパチイーチは言つた。

ラストフは、馬を乘り捨てゝ從卒に渡し、事情を詳しく訊ねながら、アルパチイーチと一緒に家の方へ歩いて行つた。

公爵令嬢が穀物を與へようとしたことや、ドロンとの會見や、百姓たちとの會見は、事實、事態を一層惡くした、それが爲めドロンは、役目の鍵を捨てゝ百姓たちの味方になつて了つて、アルパチイーチが迎ひに來ても出て來やうとしなかつた。朝、公爵令嬢が出發するので馬の仕度を命じた時に、百姓たちは大群をなして穀倉に現はれて來て、自分たちは公爵令嬢を村から外へ出さないつもりだといふことや、各々自分の家を離れてはならぬといふ布告が出て居るといふことや、馬具を脫さしてしまふぞと云ふことなどを、使ひを以て言ひ送つて來た。アルパチイーチは、彼等を諭すために出かけて行つたが、それに答へて彼等は、（カアルプといふ男が主なる辯者となつて、ドロンは、群集の後方に引つ込んでゐた）公爵令嬢を出發させるわけには行かない、それを禁ずる布告が出てゐる、併し公爵令嬢が止つて居てさへ下されば、自分たちは、これ迄通り奉公もすれば、萬事に服從もすると云ふ事を語つた。

丁度ラストフとイリインとが村の大通りに馬を駈けさせて居た時、公爵令嬢マリヤは、自分を止めようとするアルパチイーチや、年とつた乳母や、女中などの努力を無視して、馬を附けるやうに命じ將に出發しようとして居たのであつた。所が、騎馬の人々の駈けて來るのが、見えたので、馭者共はそれをフランス兵と思ひ込んで、逃げ去つて了つた、そして激しい號泣が家の女共の間から起つた。

『御深切な方！』『命の親！』——『神樣があなたをお遣し下すつたのです、』ラストフが玄關を通り過ぎた時、強い感激に充ちた聲々が斯う叫んだ。

ラストフが案内されて這入つて行つた時、公爵令嬢マリヤは廣間の中で力なく心を亂して坐つて居た。彼女はそれが、誰なのか何うして此所へやつて來たのか、何事が自分に起りかゝつて居るのか知らなかつた。だがラストフのロシア人式の顏を見て、彼の最初の一言一動で自分と同じ階級の人だといふことを知ると、奥深い、涼しい眼付きで、彼を見詰めながら感動の爲めに切れ〳〵に震へる聲で話し始めた。ラストフは直ぐにこの會見に一個のローマンスを想像した。『悲みに責め苛なまれて、唯ひとり亂暴な謀反人の百姓共の中に投げ捨てられた、いたいけな娘！　そして何といふ不思議な運命が俺をこゝに連れて來たのだらう！』ラストフは彼女の話を聞き、彼女を眺めながら考へた。『そして又この娘の姿や言葉の何と云ふ優しさ、何と云ふ品の好さ！』と、彼女のおど〳〵した話に耳を傾けながら考へた。

抑も此の事件は自分の父の葬式の翌日に起つたのだと話し初めた時、彼女の聲は震へた。彼女は顏を側向けた、そして恰もラストフが自分の言葉を彼の感情を動かす爲めだと取りはしないかと恐れるものゝやうに、心配さうな、さぐるような眼付をしてチラりと彼を見た。ラストフの眼には涙があつた。公爵令嬢マリヤはそれを認めた、そしてその顏の不器量を人に忘れさせるやうな、涼しい眼で彼を見詰めた。

『私は何んなに嬉しく思つて居るか、とても口には言ひ表はせませんよ、お嬢さん、ふとしたことで

此方へ來て、兎に角あなたのお役に立つようになりましたことを』と、ラストフは立ち上りながら言つた。『私はあなたが直ぐお立ちになれるように致しませう、屹度責任をもつて致しませう、若しあなたが私に護衛の役をおさせ下されば、何者にだつて、あなたのお邪魔は致させません。』そして、まるで皇室の姫君にでもするやうに、丁寧なお辭儀をして扉戸口の方へ振り向いた。

恭々しい調子によつて、ラストフは、自分が彼女と近づきになるのを幸福だと考へては居るが、併し決して彼女の不幸に附け込んで、近づきになることを强ひようと思つてゐるのではないと云ふことを示さうと努めた。

公爵令嬢マリヤはその調子を感じて、それを理解した。

『深く〳〵感謝致します。』と、彼女は彼に向つてフランス語で言つた、『ですけれども、私はこれが唯の誤解で、誰にも罪のない事を望んで居ります。』彼女は不意に泣き出した。

『御免下さいまし。』と、彼女は言つた。

ラストフは顏を背めて、もう一度丁寧にお辭儀をして、そして部屋から出て行つた。

十四

『何うです、別嬪ですか？　併し僕の方の桃色の娘も可愛らしいですよ、ドニヤーシヤと云ふ名だ
うです。』……併しラストフの顔を見ると、イリインは黙つて了つた。自分の崇拝して居る人でもあ
り、自分の上官でもあるラストフが、全く違つた考へに沈んで居るのを見たからである。
ラストフは腹立たしさうにイリインを見て、返事もしないで、急ぎ足に村の方へ歩いて行つた。
『俺が彼奴等に言つて聞かてしやる、彼奴等に思ひ知らしてやる、悪黨共が、』と、獨語した。
アルパチイーチは、やつと何うにか斯うにか駈け出さずに濟む位ゐの早足でラストフに從つて行つ
た。
『何ういふ御決心をなさいましたんですか？』と、ラストフに追ひ付きながら言つた。ラストフは一
寸立ち止つて、拳骨を握つて、不意に恐ろしい權幕でアルパチイーチの方へ進んだ。
『決心だと？　何の決心だ？　老耄の碌でなし奴が？』と、呶鳴りつけた。『貴様こそ何を考へてゐる
んだ？　えゝ？　百姓たちが暴れ廻つて居るのに、貴様はそれを取締ることが出來ないぢやないか？
貴様自身も謀叛人だぞ。俺には分つて居る。俺は貴様たちの皮を鞭で打ちめくつてやるぞ……』そ
して自分の怒氣を空費するのを恐れるかのやうに、アルパチイーチを捨てゝ急いで前へ進んで行つた。
アルパチイーチは、自分の傷つけられた感情を呑みこんで泳ぐやうな足取りでラストフの後を急ぎな
がら、この問題でラストフの考への足しになることを依然として話しかけた、百姓たちが非常に頑固

になつて居る事や、この場合、武力がなければ敵對するのは無謀だと云ふ事や、だから先づ以て武力
を呼び寄せた方が宜くはなからうかと云ふ事などを話した。
『俺ひとりで彼奴等に武力を加へてやる……俺ひとりで彼奴等を相手にして見せる……』無茶苦
茶な動物的な怒りと何人かに向つてその怒りを打ちまけてやりたい慾望とに喉をつまらせながら、ニ
コライは意味もなくかう呟いた。自分が何をしようとして居るかも考へないで、たゞ無意識に、大急
ぎな斷乎とした足取りで、彼は群集の方へ進んで行つた。
そしてラストフが近寄つて行くに從つて、益々アルパチイーチはラストフの無謀な行動が最も幸福
な結果を齎らせば宜いがと思つた。群集の中の百姓たちも亦、ラストフの確かりした急ぎ足と、斷乎
として眉をひそめてゐる顔とを見ると、矢張りこれと同じやうなことを思つてゐた。
驃騎兵達が村にやつて來て、そしてラストフが公爵令嬢に會ひに這入つて行つてからと云ふもの、
或る躊躇と意見の分離とが群集の中に顯著になつて來た。百姓たちの或る者はかう言ひ出した、あの
騎馬の人たちはロシア軍だから、ひよつとすると自分たちがお嬢さんに出發させないのを、悪く思は
ないとも限らないと。ドロンはその意見であつた、けれども彼が夫れを述べるや否や、カアプやその
他の連中が彼に食つてかゝつた。
『長え間手前は村を食物にして肥りやあがつたぢやねえか？』と、カアプは呶鳴つた。『何方にしたつ

て手前には同じだ！　銭壺でも堀り出して、それを持つてうせやがれ。俺たちの家が打ちこはされようがされめえが、手前には何の關係もあるめえやな？』

『俺たちは布告通りにしろと言はれてるんだ、一人だつて自分の家を捨てるんぢやねえ、物一つだつて動かすんぢやねえと言はれてるんだ——それだけの事を守りやいゝんだ！』と、今一人の者が叫んだ。

『ありや手前の悴の番だつたのだぞ、それを手前が自分の肥つた小悴を匿ひやがつたもんで、』と、一人の小男の老人が不意に怒鳴り出して、ドロンに飛びかゝつた、『お蔭で、俺の所のワンカが髪を剃られて兵隊に取られちまやつがたぢやねえか。あゝ、だが俺たちは皆死なゝきやならねえんだ！』

『違えねえ、俺たちは皆死なゝきやならねえんだ！』

『俺だつて何もみんなに反對する人間ぢやねえやな。』と、ドロンが言つた。

『みんなに反對する人間ぢやないと、手前はみんなのお蔭で身代を肥しやがつたぢやねえか……』

二人の痩せこけた百姓が言ふだけのことを言つて了つた。ラストフがイリインとラブリユーシカとアルパチイーチを引き連れて群集に近づいて來ると、早速カアプが腰帶に指を突つ込んで、微かな笑みを浮べながら進み出た。ドロンは、それに引き換へ後方へ退いた。そして群集はごた〳〵と一所に塊つた。

『おい！　誰が一體村長なのだ？』と、ラストフはつか〳〵と群集に歩み寄つて叫んだ。

『村長だつてね？　お前さんは一體村長に何の用があるんです？……』と、カアプが尋ねた。所が、彼がその言葉を言ひ終るか終らない中に、彼の帽子は頭から跳ね飛ばされた、頭を厭やと云ふ程撲られたもので、彼はよろ〳〵とよろめいた。

『帽子を脫れ、謀反人共！』と、ラストフは元氣な大聲で呶鳴り付けた。『村長は何處に居るのだ？』と、荒々しく叫んだ。

『村長、村長に御用なんだ。ドロン・ザハリツチ、お前を呼んで居なさるんだぞ、』と口々に云ふのが聞えた、急に從順になつて、帽子を脫つた。

『私共は亂暴をして居るわけではございません、御命令通りにやつて居るんです、』とカアプは言ひ放つた。それと共に後の方で數人の聲が一時に口を開いた。

『長老たちが定めた通りなんです、命令を出す人が餘り多過ぎるんです……』

『何をほざくんだ？……亂暴者奴！　惡黨共！　謀反人！』と、ラストフはカアプの首つ玉をふん摑まへながら、何の考へもなく、自分の聲ではないやうな聲を出して怒鳴り立てた。『此奴を縛り上げろ！』と、彼はラブリユーシカとアルパチイーチの他にはこの男を縛り上げる者はなかつたけれど、から叫んだ。

だがラブリューシカは、カアプの傍へ駈け寄つて、後方からその兩腕を引つ摑んだ。

『丘の下から兵を呼びませうか？　閣下？』と、彼は叫んだ。

アルパチイーチは百姓たちの方へ振り向いて、その中の二人の男の名を呼んで、カアプを縛らせた。二人の百姓は從順に群集の中から歩み出て、銘々に自分の帶を解き出した。

『村長は何處に居るんだ？』と、ラストフは叫んだ。

ドロンは眞青な、顰め面をして、群集の中から歩み出た。

『お前が村長か？　此奴も縛れ、ラブリューシカ、』と、ラストフは、まるで命令が何の反對にも會ふ筈がないと云ふやうに斯う叫んだ。そして事實又かの二人の百姓は、ドロンをも縛り始めた、と、ドロンは自分の帶を解いて、その仕事を助けでもするやうに、それを二人に渡した。

『それから皆の者、俺の言ふ事をよく聞け、』と、ラストフは百姓たちの方へ向いた。『今直ぐに自分達の家へ歸れ、そして二度とぐづ〳〵言はないやうにしろ。』

『でも、俺たちは何にも惡いことをした覺えはないんだ。』——『それ見ろ、餘り馬鹿なことをするからだ。』——『つまらない事をするからだ……』——『だから俺は初めから宜くない事だと言つてたんだ、』と、口々に互ひに罪を被せ合ひながら言つてゐた。

『だから俺の言はない事つちやないんだよ、』と、アルパチイーチは、今は正當な自分の位置を回復し

て言つた。『お前たちが間違つて居たんだよ、なア。』

『全く私共が馬鹿だつたからです、ヤコフ・アルパチイーチ、と』、聲々が答へた、そして群集は直ぐに解散して、村の方々へ散つて行つた。

縛られた二人の百姓たちを、彼等は屋敷に連れて行つた。二人の醉つぱらひの百姓が後に從いて來た。

『おい、ざまあ見ろ！』その中の一人が、カアプに向つて言つた。

『手前は旦那方にあんな事が言へると思つたのか？　何を考へてゐやがつたんだい？馬鹿だな、』と、も一人の方が口を入れた、『馬鹿の標本だア。』

二時間と經たない中に、命ぜられた馬と馬車とがボグチャロウオ家の中庭に立つてゐた。數人の百姓たちが一生懸命に立ち働いて、馬車の中に主人の荷物を積み込んでゐた、公爵令嬢マリヤの望みで、その閉ぢ込められてゐた材木部屋から釋放されたドロンは、庭の中に立つて、男共に指圖をしてゐた、

『こんなお粗末な荷造りがあるもんか、』と、一人の背の高い、丸顏の、にこ〳〵した百姓が、女中の手から小箱を取りながら言つた。『こいつは價値物だよ、氣を付けろよ。そんなに放り出したり、無暗に綱をかけたりすると、キヅがつくぜ。俺はそんな粗末なことは見てゐられねえ。もつと何でも正直にしなよ、きち〳〵とな。それ、こんな風に、蓆でくるんで、乾草で包んで了ふんだ。何うだい、こ

いつが一等だ。』

『やあ、本だ、本だ、』と、今一人の百姓は、アンドレー公爵の書棚を持ち出しながら言つた。『轉ばないように氣を付けな！　うむ、だが之れや重いや、なア、本の奴がつしりと固く出來てやがるもんだから！』

『さうよ、こんなものを書き上げるには隨分骨を折るんだからな！』と、背の高い、丸顏の百姓が、意味ありげな眼配せをして、一番上に横たはつてゐた辭書を指しながら云つた。

ラストフは公爵令嬢に強いて近づきにならうとは思はなかつたので、屋敷へは歸へらず、村に止まつて、彼女が馬車で出發するのを待つてゐた。公爵令嬢マリヤの馬車が家から出て來ると、ラストフは馬に乘つて、ボグチヤロウオから十二ヴエルスト離れた味方の占領して居る街道まで、護衞して行つた。

ヤンコウオの宿屋で、彼は丁寧に彼女に別れたが、その時始めて彼女の手に接吻することを自分に許したのであつた。

『どう致しまして！』と、彼は公爵令嬢マリヤが自分を助けてくれた——さう彼女は言つたのだ——禮を言つたのに對して、赤くなりながら答へた。『警察官だつて之れ位ゐのことは致しますからな。我

我もたゞ百姓を相手に戰爭して居るだけなら、こんなに敵に攻め入られることもなかつたでせうがね、』と、彼は照れ隱しに話頭を變へようとして言つた。『私はたゞあなたのお近づきになる機會に接したことを幸福に存じます。では左樣なら、公爵令嬢。私はあなたが幸福と慰めとをお受けになるだらうと云ふ事を信じます、そして今よりもつと幸福な折りに又お目にかゝる事を希望いたします。私に赤面させまいと思し召すなら、何うぞお禮など仰有らないで下さい。』

しかし公爵令嬢は、言葉ではそれ以上禮を言はなかつたが、感謝と溫情とに燃えてゐる顏の表情全體で彼に禮を言つた。彼女は、自分が彼に感謝する理由がないなどとは信じられなかつた。それ所か若し彼が居なかつたならば、自分は屹度あの謀反人の百姓たちかフランス人かの犧牲になつたに違ひないと云ふことや、彼が自分を助ける爲めに、目に見えて居る恐ろしい危險に身を曝したのだと云ふことは、彼女の心に取つて爭ふことの出來ない事實であつた、夫れのみならず彼が自分の境遇や自分の悲みに同情することの出來る、上品な氣高い人だと云ふことは更らに一層確かな事實であつた。自分が泣きながら父の亡くなつた事を話した時に、涙を湛えてゐた彼の深切な正直な眼は、彼女の想像に屢々現はれて來た。彼に別れの挨拶をして、獨りになつた時、公爵令嬢マリヤは急に自分の眼に涙の湧き出るのを感じた、そして——この時始めてゞはなかつたが——ふと斯ういふ疑問が起つた、『自分はあの方に戀したのではなからうか？』モスクワに行くそれからの途すがら、公爵令嬢の位置は決し

て喜ばしいものではなかつたけれども、彼女と一緒に馬車に乘つてゐたドニヤーシヤは、お嬢さまの顏が窓の外を眺める時など、何となしに幸福な、物思はしげな微笑を浮べて居るのに氣が付いた。

『でも、若しあの方に戀したとしたら何うだらう?』彼女は自分のことなどは恐らく、もう氣にも止めて居ないと思はれる男に戀をしたといふ事を、自分で認めるのが恥かしかつたけれども、誰もその ことは知らないのだし、よし又自分が今始めて、そして之れを最後に、そして自分の一生の間、心密かに戀をしたとしても、別に責められることもないと思つて、自分で自分を慰めた。

時々彼女は彼の樣子や、彼の同情や、彼の言葉を思ひ出した、そして幸福といふものが全く不可能ではないやうな氣がした。丁度その時ドニヤーシヤは、公爵令嬢が窓の外を眺めて微笑んで居るのに氣がついたのであつた。

『あの方がボグチヤロウオへ、而もあんな場合にお出でにならうとは!』と、公爵令嬢マリヤは思つた。『それに又あの方の妹御がアンドレーをお斷りになつたのだとは!』そんなことを色々思ふと、神の御手を見る樣な氣がするのであつた。

ラストフが、公爵令嬢マリヤから受けた印象は極めて氣持のよいものであつた。彼女のことを思ふと、彼は嬉しくなつた。そして友達共がボグチヤロウオでの出來事を聞いて、乾草を探しに出かけてロシアの最も大きな家の後繼娘を拾ひ上げたなどと言つて戲弄ふと、彼は腹を立てた。彼は、あの優

しい、そして又彼の心にとつては可愛らしい、それに莫大な財産のある公爵令嬢マリヤと結婚するといふ考へが、一再ならず、自分の意思に反いて心に起つて來たので腹を立てたのであつた。自分の一身上の事として考へると、ニコライは公爵令嬢マリヤを自分の妻とすると云ふより以上に好い事は、一寸思ひ當らなかつた。彼女と結婚すれば、自分の母の伯爵夫人を幸福にもすれば、父の破產した財產を償ひもするであらう。そして、それは又——ニコライはさう感じた——公爵令嬢その人をも幸福にするに違ひない。

併しソーニヤは? そして自分の約束は? 卽ち之れが公爵令嬢バルコンスキイのことを戲弄はれて、ラストフが怒る理由なのであつた。

十五

軍の總指揮權を受けると直ぐに、クツウゾフはアンドレー公爵を思ひ出して、本營へ宛てゝ召喚狀を出した。

アンドレー公爵は、クツウゾフが軍隊に對して最初の檢閱を行つて居た丁度その日のその時刻に、ツアレウオーザイミシュツチエに到着した。

アンドレー公爵は、總司令官の馬車が止つてゐる村の坊さんの家で止つて、門の腰掛に腰を下し、殿下を待つてゐた——總ての人が今はクツウゾフを殿下と呼んでゐた。村の彼方の平原からは聯隊の音樂の響や、新任總司令官に對して『萬歳！』を叫ぶ大勢の群集のわあ／＼いふ聲が聞えて來た。門の傍の、アンドレー公爵から十歩ばかり離れた所には、二人の從卒と、一人の朝臣と、一人の給仕長とが御主人の留守の間を好い事にして、好天氣を樂んで居た。色の淺黒い顏中濃い口髭や頰髯に蔽はれて居る、小柄の、驃騎兵中佐が、門の所に馬を駈けつけて來て、アンドレー公爵を見ながら、殿下は此所に止つて居られるのか、それから直ぐに歸つて來られるのか何うかと尋ねた。

アンドレー公爵は自分の幕僚ではなくて、丁度今此處にやつて來たばかりなのだと語つた。驃騎兵中佐は敏捷さうな從卒の方に振り向くと、從卒はよく總指揮官の從卒が將校等に物を云ふ時にするやうな、特別な嘲弄を含んでかう話した。

『殿下ですかね？直ぐにお歸りでせうよ。あなたの御用は何ですな？』

士官は、從卒の調子を聞くと髭の中で齒を剝き出した、それから馬を下りて、それを從僕に渡すと、輕いお辭儀をしながらバルコンスキイの傍に行つた。

バルコンスキイは腰掛の上に彼の爲めに席を開けてやつた。驃騎兵は彼の傍に腰を下ろした。

『あなたも、總司令官を待つてゐらつしやるんですか？』と、彼は口を切つた。『殿下は誰にでも喜んでお會ひになるといふことですな、有難い話です！　腸詰製造人などとは別者ですからね！　イエルモロフがドイツ人に昇進させて貰ひ度いと言つたのは尤もですよ。ねえ、今度は屹度、ロシア人も少しは口がきけるようになりませうよ。彼等のやつて居たことは何が何だかわけが分らないぢやありませんか。何でも彼でも退却又退却ですからな。あなたは戰場におでになりましたか？』と、彼は訊いた。

『出るの出ないのどころですか、』と、アンドレー公爵は言つた、『私はその退却の仲間入りをしたばかりではなく、その退却で自分の大切にして居たものをすつかり失くしてしまひました——財産とか自分の生れた家とかは別としても……父までが悲みの爲めに死んで了ひました。私はスモオレンスクの者です。』

『おや！……あなたはバルコンスキイ公爵ですか？　お近づきになつて非常に嬉しく存じます。チェニソフ中佐です、と云ふよりはワスカといふ名の方がよく通つてゐますが、』と、チェニソフは、アンドレー公爵の手を握つて、特に優しい表情をして、その顏を見詰めながら言つた。『成程、そのお話は承りました、』と、彼は深い思ひやりをこめて言つたが、一寸間を置いて斯う言ひ足した、『さうです、之れは全くロシア風の戰爭ですよ。何でも結構ですが、自分の脇腹に穴をあけられる者にだけは迷惑ですな。それでは、あなたがアンドレー・バルコンスキイ公爵なんですか？』彼は頭を振つた。『私

は非常に嬉しく存じます、公爵、あなたとお近づきになつて非常に嬉しく存じます、』と、彼は陰氣な笑みを浮べて、再び手を握りしめながら言つた。

アンドレー公爵はピエニソフがナターシャの最初の求婚者だと云ふ事を、ナターシャの話で聞いてゐた。甘くもあれば、苦くもあるナターシャの話の思ひ出は、彼の心の奥深くに、今も尙ほ埋められては居るが、近頃は頓と思ひ出さなかつたあの心の痛みに、彼を連れ戻した。近頃は隨分多くの樣々の重大な事件が、例へばスモオレンスクの放棄とか、ルイシーヤ・ゴオルイ訪問とか、最近の父の死の知らせとか——さういふ多くの感動が彼の心に充ち滿ちて居たので、あの昔の思ひ出は、長い間忘られて居たのである、そして、それが思ひ返へされて來る事があつても、最早や殆んど激しく彼を動かさなかつたのである。そして又ピエニソフにとつては、バルコンスキイの名前に依つて呼び覺まされた聯想は、晩餐が濟んでナターシャが歌を唄つた後で、殆んど自分が何をするのか無我無中で、十五の娘に結婚を申し込んだ、あの遠い遠い、ロマンティツクな過去に屬してゐた。彼は、その頃の事やナターシャに對する戀などを思ひ出して微笑した、けれど又直ぐに自分が今深く特別に心を傾けて居る問題に移つて行つた。それは彼が退却の最中前哨勤務をしてゐた時に思ひ付いた、或る戰略であつた。彼は夫れをバアクレイ・ド・トオリイの前に提出したが、今又クツウゾフの前に提出しやうと思つて居るのであつた。その計略といふのは、フランス軍の戰線が餘り廣がり過ぎて居ると云ふ事實に基礎

を置いて、だからそのフランス軍の進入を阻止する正面攻撃の代りに、若しくは夫れに加へて、その聯絡線をば攻撃しなければならないと云ふ事を提議したものであつた。彼は、その計略をアンドレー公爵に說明し始めた。

『奴等は全戰線を防禦することは出來ません、それは不可能なことです。私はそれを突破することを引き受けます。五百人の兵を貸せば、私は屹度彼等の聯絡線を突破して見せます、それは慥かです！取るべき唯一の策は遊擊戰です。』

ピエニソフは立ち上つて、身振りをして、その計略をバルコンスキイに說明し出した。その說明の最中に、音樂と歌聲の混つた軍隊の叫び聲が聞えて來た、それは明らかに遠くの方に散布された各團隊から起つて來るのであつた。村からは歡聲と馬の蹄の音とが聞えて來た。

『殿下が來られたぞ、』と門に立つて居たコザツクが叫んだ、『歸つて來られたぞ！』

バルコンスキイとピエニソフとは門の方へ進んで行つた、そこには一隊の兵卒(儀仗兵)が立つて居た、そして彼等はクツウゾフが背の低い栗毛の馬に乘つて町をやつて來るのを見た。數多の幕僚の將官たちがその後につゞいて來た。バアクレイは殆んど彼と並んで馬を進めてゐた、一群の士官たちがその後や周圍を駈けながら『萬歲！』を叫んでゐた。

副官たちが、彼に先立つて庭の中に駈け込んで來た。クツウゾフは、自分の重みの爲めにのろ〳〵

と進んで行く馬をばもどかしさうに蹴りながら、絶えず頭をうなづかせては、赤い紐を巻いた眉庇のない白い近衛騎兵の帽子に手を擧げてゐた。自分に敬禮してゐる儀仗兵——それは大部分は騎兵から成り立つて居る勇敢な長身兵の一隊である——の前にさしかゝると、彼は暫しの間默つて、指揮に馴れた人の熱心な、眼瞬きもしない眼付で彼等をヂツと見詰めた、それから自分のまわりに立つて居る將軍や士官の群の方へ振り返つた。その顏は忽ち複雜な表情を負びて來た、彼は當惑したやうな樣子で肩を搖つた。『あれだけの者が居ながら退却に退却を重ねるとは！』と、彼は言つた。『では、さようなら、將軍、』と、かう附け足した、そしてアンドレー公爵とヂェニソフの傍を過ぎて、門の中に馬を走らせた。

『萬歲！　萬歲！　萬歲！』と、彼の後に澤山の叫び聲が起つた。

アンドレー公爵がこの前に會つた時から見ると、クツウゾフはずつと丈夫にもなれば肥りもした、まるで脂肪の中に泳いで居るやうに見えた。けれどその見馴れた傷痕や、白眼や、又顏や樣子に見える疲れたやうな表情は少しも變らなかつた。彼は白い近衛騎兵の帽子を被つて軍服の外套を着て居た、そして幅の狹い革紐に付けた鞭が肩から懸つて居た。彼は丈夫さうな馬の上に、重さうにゆら〳〵として跨がつてゐた。

『フュ！……フュ！……フュ！……』と、彼は聞き取れない程に、口笛を吹きながら、中庭の

方へ馬を進めた。彼の顏は芝居を終つて休み度いと思つて居る人の、ぼつとした樣子を表はしてゐた。彼は鐙から左の足を外して全身中を傾け、一生懸命になつて顏を顰めながら、其足を鞍の上に持ち上げ、膝を突いた、そして、うんと一つ呻いて、自分を支へようとして立つて居るコザツク兵や副官共の腕に身を落した。

彼はちやんと立ち直つて、半ば閉つた眼であたりを見廻して、アンドレー公爵の方にチラリと眼を呉れたが氣がつかなかつたものか、よろ〳〵した歩きつきで、そのまゝ階段の方へ歩いて行つた。

『フュ！……フュ！……フュ！』と彼は口笛を吹いて、再びアンドレー公爵の方を振り返つた。年寄りには能くあることだが、アンドレー公爵の顏の印象が、直ちにその人としての記憶を呼び起させなかつたのである。『やア、御機嫌よう、御機嫌よう、君、こつちへ來給へ……』彼はもの憂げにかう言つて、自分の重みでぎし〳〵鳴る階段を大儀さうに昇つて行つた。外套のボタンを外して入口の椅子に腰を下した。

『やア、お父さんは何うして居られますな？』

『亡くなつた知らせを昨日受取りました、』と、公爵アンドレーは簡單に言つた。

クツウゾフは屹驚して、眼を大きく開いて彼を見た、それから帽子を脫つて、十字を切つた。『天の平和が彼の上にあらんことを！　そして神樣の意志が、我等凡ての者の上にあらんことを！』彼は深い

嘆息を吐き、そして言葉を切つた。『私はあの人を深く〳〵愛して尊敬して居りましたよ。心の底から君に同情します。』彼はアンドレー公爵を抱擁して、自分の肥つた胸に壓しつけたまゝ暫らくの間放さなかつた。やがて放した時、アンドレー公爵はクツウゾフの厚い唇がうち震へ、眼には涙がたまつて居るのを見た。クツウゾフは嘆息して、そして椅子に手を突つ張つて、自分の身體を立ち上らせようとした。『來給へ、來給へ、少し話をしよう、』と、彼は言つた、所が、その途端に、敵を恐れないと同じく上官をも恐れないで立つてゐたヂェニソフが、自分を止めようとする副官共のぶつ〳〵云ふ怒聲には何のお構ひもなく、階段に拍車を鳴らしながら大膽に歩いて來た。クツウゾフは、矢張り身體を起さうとして椅子に手を突つ張つたまゝ、情けなさうにヂェニソフを見た。

ヂェニソフは、自分の名を言つて、ロシアの安危に關る或る重大事を殿下に申し上げなければならないと言つた。クツウゾフはその物憂げな眼をヂェニソフにそゝいで、煩るささうな樣子で兩手を上げながら、それを腰の上で重ねて、『ロシアの安危に關るつて？　えゝ、何事だ？　話し給へ、』と、繰り返した。ヂェニソフは小娘のやうに赤くなつて、(この毛むくぢやらな、古びた、大酒飲みの顏が赤くなるなぞといふのは不思議であつた、)スモオレンスクとヴイアズマとの間で敵の連絡線を斷ち切ると云ふ自分の計略を大膽に說明し出した。ヂェニソフの故鄕はその邊であつたので、彼はその地方をよく知つてゐた。彼の計略は確かによささうに思へた、殊にその言葉の中に含まれて居た力強い確信を

見ると更らにさう思へた。クツウゾフは自分の足下を眺めたり、時々何か隣りの小屋の庭から不愉快なものが起つて來るのを待つてゞもゐるやうに、其方へ振り向いたりしてゐた。所がその小屋から、果して、ヂェニソフの話の間に、一人の將官が腕に紙挾を抱へて現はれて來た。

『やあ！』と、クツウゾフはヂェニソフの說明半ばに斯う訊ねた、『もう用意は出來たのかね？』

『はい、殿下、』と、將官は答へた。クツウゾフは『よく一人で何も彼も一ぺんに出來るものだな？』と、でも云ふやうな樣子で、頭を振つた、そして再びヂェニソフに注意を向けた。

『私はロシアの士官として名譽にかけて殿下に申し上げてゐるのであります、』と、ヂェニソフは言つて居た、『私は屹度ナポーレオンの聯絡線を切つて見せます。』

『キリル・アンドレーキツチ・ヂェニソフといふ經理部長官は君の親類か何かゝね？』と、クツウゾフは口を入れた。

『叔父です、殿下。』

『おゝ！　私は友達だつたよ、』クツウゾフは、ひどく快活になつて斯う言つた。『よし、よし、ねえ君、司令部に居給へ、又明日話さうよ。』ヂェニソフに會釋をすると、彼はコノヴニッチンが持つて來た書類の方に振り向いて手をさし延べた。

『殿下は家内へお這入り下さいませんでせうか？』と、當番の將官が不滿さうな聲で言つた。『計略を

御覽下さいまして、書類に御記名下さらなければならないのですが。』一人の副官が扉口に現はれて家内はすつかり仕度が出來ましたと報告した。所が、明らかにクツウゾフは家内に這入らない先に用事を片附けて仕舞ひ度い樣子であつた。彼は踏み留つてゐた……

『いや、卓子をこゝへ持つて來てくれ、君、私はこゝですつかり見て了ふから、』と、彼は言つた。『君は行くんぢやないよ、』と、アンドレー公爵に向つて言ひ足した。アンドレー公爵は入口に留つて、當番の將官の話を聞いてゐた。

その將官が報告をして居る最中に、アンドレー公爵は扉口に當つて女の囁き聲と女の絹の着物の衣擦れの音とを聞いた。幾度も幾度も其方に眼をやつて見て、彼は扉の後方にまる〳〵した、薔薇色の顏をしてゐる容貌のよい女が桃色の着物を着て、頭に挑色の絹のカアチイフを被つて居るのを見付けた。その女は手に皿を持つて居た、確かに總司令官の這入つて來るのを待つて居る樣子であつた。クツウゾフの副官が、これはこの家の細君で、坊さんの妻であつて、殿下に麵麭と鹽とをさゝげて、彼が這入つて來た時、歡迎の意を表しようとしてゐるのだと小聲でアンドレー公爵に說明した。夫は既に會堂で十字架をもつて殿下を迎へたから、彼女は家に於て彼を歡迎しやうとして居るのだ……『仲仲別嬪ですよ、』と副官はほゝ笑みながら附け足した。クツウゾフはその言葉に振り返つた。彼はかの將官の報告を——その要領は主にツアレウオーザイミシュツチエの前面の軍隊の位置に關する批評で

あつた——丁度ヂェニソフの言葉を聞いた時とも又七年前に、アウステルリツツ前面の軍事會議の討論を聞いて居た時とも全く同じ調子で聞いてゐた。彼は明らかに自分が唯耳を持つて居るから、そして假令ひその一つに綿が塡められてゐてもやはり聞かないわけには行かないから、聞いて居るといふ風であつた。併し又、將官がどんな事を言つたとて何一つ彼を驚かしもしなければ喜ばしもしないといふことや、彼が自分に語られる事はみな前以て知つて居るのだが、丁度誰でも祈禱の歌はれるのを聞かなければならないやうに、それを聞かなければならないからして聞いてゐるのだといふことも明らかであつた。ヂェニソフの言つたことは實際的でもあり聰明でもあつた。將官の言つてゐることは更らに實際的で聰明であつた、けれども明らかにクツウゾフは、智力をも智識をも輕蔑して、事物を整理する他の何事をか、智力や智識から全く離れた或る別の何事をか知つてゐるらしかつた。アンドレー公爵は熱心に總司令官の顏を見詰めた、そしてその顏に探し得た唯一つの表情は退屈と、戸口に囁いて居る女の話を知り度いといふ好奇と、それから儀容をくづすまいとする願ひとの表情に過ぎなかつた。クツウゾフが智力や學問のみならず、ヂェニソフの示した愛國心さへも輕蔑してゐるのは明かであつたが、しかし、それは智力から輕蔑するのでも、感情から輕蔑するのでも、學問から輕蔑するのでもなく、(その證據には彼はさういふ種類のものを曾て表はさうと努力した事がなかつた)たゞ何か他のもの——即ちその年の功と、その人生の經驗とから輕蔑してゐるのであつた。

その報告に口を入れたクツウゾフ自身の唯一の指圖といふのは、ロシア軍がした掠奪のことに關してだけであつた。報告の終りに將官は、書類を殿下にさし出して、或る士官たちの爲めに燕麥を刈り取られたといふので、地主から出された損害賠償の請願に署名を乞うた。

クツウゾフは、その次第を聞きながら、唇をちう〳〵云はして頭を振つた。

『暖爐の中へ……燃して了ひ給へ！　私は、今度だけ云つて置くがね、君、』と、彼は言つた、『さういふものは皆火の中にくべて了ひ給へ。思ふまゝに穀物も刈り取らせるがいゝし、焚木も燃させるが好いよ。と云つて、私がそんな命令を出すのではない、又私が許すのでもないが、兎に角そんなことにかゝはつて居るわけには行かないのだ。とても辛抱が出來ない。葉を飛ばさないで木を伐り仆すわけには行かないからな。』彼はもう一度その書類に眼をやつた、『おゝ、このドイツ人の綿密なことつたら、』とさう言つて、頭を振つた。

十六

『うむ、さあ、これでお終ひだ、』と、クツウゾフは言つて、最後の書類に署名した、そして不恰格に立ち上りながら、その肥つた、白い頸を伸し、前より愉快な顏をして扉口に行つた。

坊さんの細君は顏を眞赤にして皿をとり上げたが、隨分長い間用意して居たのにも拘らず、それをうまい機にさし出すことが出來なかつた。丁寧にお辭儀をして、彼女はそれをクツウゾフにさゝげた。クツウゾフは眼を見張つた。微笑して、彼女の下頤の下を戲れに拍ちながら言つた。

『可愛い顏をして居るなア！　いや、有難う！』

彼は幾らかの金貨をズボンのポケツトから取り出して、それを皿の上に乘せた。『では、何處で落ち付くんですな？』と自分に當てがはれた部屋の方へ行きながら言つた。坊さんの細君は、その薔薇色の顏に笑靨を浮べながら、彼を部屋に案内する爲めに後からついて行つた。副官が入口に居たアンドレー公爵の所へやつて來て、午餐に招いた。半時間後にクツウゾフはアンドレー公爵を呼びによこした。クツウゾフは低い椅子に凭れかゝつて、矢張り同じボタンを外した軍服を着て居た。彼は手にフランスの小說を持つて居たが、アンドレー公爵が這入つて來ると、それに紙切小刀を挾んで傍に置いた。アンドレー公爵がその表紙を見ると、それはマダム・ド・ジヤンリイの作『Les chevaliers du cygne（シイニュの騎士等）』であつた。

『やア、掛け給へ、さ、此所へ掛け給へ。少し話さうぢやないか、』と、クツウゾフは言つた、『それは悲しい、全く悲しい。だがよく覺えて置き給へ。君、私のことを君の父だと、今一人の父だと思つてくれるんだよ……』

アンドレー公爵は父の最後に就いて自分の知つて居るだけのこと、それから自分がルイシーヤ・ゴオルイで見た有様をクツウゾフに話した。

『我々は何う云ふ有様になつたものだらう！』と、クツウゾフはアンドレー公爵の物語によつて、ロシアの現狀をまざ〳〵と眼前に見せつけられたものらしく、突然感情に充ちた聲で叫んだ。

『今に見ろ、今に見ろ！』と、その顏に復讐に燃ゆる色を現はしながら附け加へた、そして餘り深く自分を刺撃する會話をつゞけて行くのを好まぬらしく、斯う言つた。

『私が君を呼んだのは、君に私の傍に居てもらひ度いからだ。』

『有難くお禮を申し上げます！』と、アンドレー公爵は答へた、『ですが私は司令部の仕事は自分にはむづかしくはないかと危ぶみますが、』と、彼は言つて、微笑を浮べた、クツウゾフはその微笑に氣が付いた。彼はいぶかしさうにアンドレー公爵を眺めた。『そしてその主なる理由は、』とアンドレー公爵は附け足した、『私は聯隊に馴れたといふことです。私は自分でも將校たちが好きですし、それに又部下の者も私を愛するやうになつて來たと思ふのです。そんなわけで私は聯隊を去るのが殘り惜しいのです。しかし私があなたの幕僚となる光榮を辭退いたしましても、私は屹度……』

クツウゾフのぶて〳〵した顏が、悧好さうな、人のいゝ、その癖又妙に皮肉な表情に輝いた。彼はバルコンスキイの言葉を遮つた。

『君が私の役に立つに違ひないと云ふことを、私は確信して居るのだ。が君のいふ所はもつともだ、もつともだ。人物の要るのはこんな處ぢやない。忠告者といふものは澤山あるものだが、しかし人物は滅多にないからな。所謂忠告者といふ連中が君のやうに各聯隊に勤めてゐたら、如何なる聯隊も今のやうではなからうよ。私はアウステルリツツに於ける君を覺えている。旗を持つて居た君を覺えてゐる、覺えて居るよ！』と、クツウゾフは言つた、と喜びの血汐がこの昔話を聞くとアンドレー公爵の顏にさつと上つた。クツウゾフは手をさし延べ、此處に接吻しろ、と自分の頰を突き出した、その時再びアンドレー公爵はこの老人の眼に涙を見た。アンドレー公爵はクツウゾフの涙がわけもなく直ぐ出るのだといふことも、自分の不幸に對してクツウゾフが同情を示し度い爲めに、特に自分に親しく且つ優しくするのだといふことも知つて居たが、それでも尙ほこのアウステルリツツを思ひ出させて呉れた人を、氣持ちよく嬉しく感じた。

『君自身の道を行き給へ、君の幸福を祈るよ……私は知つて居る、君の行く道は名譽の道だ！』そこで彼は言葉を切つたが、『私は君にブカレストで別れたんだつけね。私は君を呼びに遣らうと思つてゐたんだよ……』そして話題を變へて、クツウゾフはトルコ戰爭の話や、その締結された講和の話などをした。『さうだ、私は手ひどく罵られたよ、』と、彼は言つた、『戰爭のことでも講和のことでもね……しかし夫れは何も彼もみな丁度いゝ時に起つたのだ。Tout vient à point à celui qui sait at-

tendre（何事も時期を持つことを知つて居る者には丁度いゝ時に來るものだ）そこでもこゝと同じ事で、多くの忠告者が居たよ……』と、助言者が有り餘るといふ話に立ち戻つて話を進めた。これは明かに彼の心を占めてゐた題目なのである。『あゝ忠告者に加ふるに又忠告者だ！』と、彼は言つた。『そんな事を一々聞いて居たら、我々は今頃トルコにゐたかも知れんよ。平和は締結されないで、戰爭はいつ迄經つても終る時がないだらう。始終急いでばつかりゐるが、急げば急ぐ程、事は惡くなるんだ。若しカアメンスキイが死ななかつたら、隨分みぢめなことになつたらうよ。あの男は三萬人の兵を引き連れて城塞に襲撃して行つた。城塞を取るくらゐのことは容易いが、さて戰爭をうまく收めるとなると、中々難かしいものだ。必要なのは、襲撃や攻撃じやない、時と忍耐とだ。カアメンスキイは兵を送つてルスチツクを攻撃したが、私はこの二ケ條——時と忍耐——にばかり信頼して、而もカアメンスキイより以上に數多の城塞を陷れたよ、そしてトルコ人を馬の肉まで食ふやうな目に合はしてやつたつけ！』彼は頭を振つた。『そこでフランス人も亦然りさ。私の言葉をよく覺えて置き給へ、』クツウゾフは次第に熱して來て、自分の腕を叩きながらかう叫んだ、『奴等にも馬の肉を食はしてやるさ！』そして再び、彼の眼は淚に曇つた。

『ですが、戰爭はしない譯には行かないでせうな？』と、アンドレイ公爵は言つた。

『總ての人間がそれを欲するなら、やらなければならないよ、そいつは何うも仕方がない……』が、

私の言葉を覺えておき給へ、ねえ君！　あらゆる武士の中で最も强いものは、この二つ——時と忍耐だよ。それさへあれば何事でも出來るのだ、所が、我が賢明なる忠告者達は n'entendent pas de cette oreille, voilà le mal（一向このことが解らない、それが抑もいけないのだ）或る者は然りと言ひ、或る者は否と言ふ。それでは一體どうすれば宜いのだ？』と、明らかに答へを求めるものゝやうに尋ねた。『さあ、君ならどうしろと云ふね？』彼はかうくり返した、その眼は奥深い利好さうな表情をして瞬いた。『では何うすればいゝか私が話さう、』と、アンドレー公爵が依然として答へないので斯う言つた。『何うすればいゝか私なら何うするか、それを君に話さう。Dans le doute, mon cher（疑ひのある時は、だね、）——彼は一寸言葉を切つた——abstiens-toi（待ち給へ）だ。』彼はそのフランスの諺をゆる〳〵とはつきり言つた。

『では、さやうなら、君。覺えて居給へよ、心から私は君を氣の毒に思つて居るのだからね、そして君の爲めには私は殿下でもなければ、公爵でもなく、又總司令官でもない、たゞ君の父なのだ。何か用があつたら、早速私の所へ來給へ。では、さやうなら！』から言つて再びアンドレー公爵を擁して接吻した。

そしてアンドレー公爵が扉を閉め終らないうちに、クツウゾフはホツと溜息をしながら身體を樂にして、讀みさしのマダム・ジヤンリイの小說「シイニユの騎士等（レ・シュヴァリエル・デュ・シイニュ）」を取り上げた。

何うしてだか、又何故だか、アンドレー公爵には説明が出來なかつた。が、このクツウゾフとの會見後、彼は戰爭の未來に對しても、又戰爭の指導を任されてある人に對しても、更らに心配のない氣になつて、自分の聯隊に歸つて行つた。情慾の習慣の外何一つ自分の物が殘されてゐないやうな、そして又理智的に事件を會得したり畫策したりする代りに、たゞ〳〵その事件の成行きを靜かに考へるだけの能力しか持つて居ないやうに見えるこの老司令者には、情慾的な處が少しもないといふ事が分れば分る程、アンドレー公爵は凡てのことが當然さうあるべきやうに成るだらうといふ確信を益々抱くようになつたのであつた。

『彼は何一つ自分といふものを挿入しない。彼は何一つ企てもしなければ、何一つ行なはうともしない。』と、アンドレー公爵は考へた、『けれども又彼はあらゆるものを聞き、あらゆるものを考へ、あらゆるものをその適所に置き、役に立つものは何でも阻げず、害をするものは何でも許さないだらう。彼は自分の意志よりも更らに強い更らに重大な何物かがあることを知つて居る——それは事件の避け難い進行といふことだ、彼はそれを見ることが出來る、その意味を掴むことが出來る、そして、その意味が分ればこそ、餘計なおせつかいすることをも、自分の意志に從ふ事をも、的がはづれて了ふ事をも制し得るのだが、』と、アンドレー公爵は考へた、『人が彼を信ずる主なる理由は、マダム・ジヤソリイの小說を讀んだり、フランスの諺を言つたりしてゐるにも拘らず、彼がロシア人だと云ふ事にある。「我々は何といふ有樣になつたものだらう！」と言つた時、彼の聲が震へたにある。「彼奴等にも馬の肉を食はしてやるさ！」と云つた時、彼の咽喉がつまつたにある。』

この感情が多少とも意識的に凡ての人々に行き亙つてゐるからこそ、國民的感情に從ひ、宮廷內の陰謀に反對してクツウゾフを總司令官に任命することに、異議なく讃同が與へられたのである。

十七

皇帝がモスクワを去つてからは、その都會の生活は昔の水道を流れて、その生活の流れが全く平常通りになつて了つたので、あの愛國的な熱誠と熱情との時代を思ひ出す事は困難になつた、そしてロシアが現に危險に陷つて居ると云ふことも、又イギリス倶樂部の人々が祖國の忠義な子であつて國のためには如何なる犧牲を拂ふも厭はないといふことも、なか〳〵信じられなくなつた。たゞ一つ、皇帝がモスクワ滯在時代の一般の愛國熱を思ひ出させることは、人と金との寄附募集であつたが、その要求は直ちに法律的な公務的な形となつて現はれたので、避け難いもののやうに思はれた。敵が次第にモスクワに近づいて來るにつれて、住民たちが自分等の位置に對して取つた態度は益々眞劍でなくなつて來たばかりか、大危險が近づいて來るのを見る場合には人はよくさうなるものだが、益々浮薄

になつて來た。危險が近づいて來る時、人の心の中には常に相均しい力を持つて話しかける二の聲が起つて來る。一つは非常に理智的に、その危險の性質とそれを避ける手段とを攻究することを勸め、今一つは尙ほ一層理智的に、危險を考へるといふことは餘りに苦しく餘りに惱ましい、何故かといふと萬事に對して準備したり事件の一般的の進行から逃れたりすることは、人の力に及ばぬ處だからである、だから愈よやつて來るまではさういふ苦しい問題は避けて、愉快なことばかり考へるようにした方がよい、とかう勸めるである。單獨の時には人は大抵第一の聲に從ふが、大勢居る時には第二の方に從ふものである。今のモスクワの住民が矢張りそれであつた。その年ほどモスクワの陽氣になつた事は、長い間ないことであつた。

上部にジン酒屋や、酌酒人や、それからモスクワの職工の、カルプシュカ・チギリンなどが畫いた、ラストプチンの告示が、まるでワシーリイ・ルウオヰツチ・プウシュキン（有名なアレキサンドル・プウシュキンの伯父である）の最後の bouts rimés（同韻詩）にでも對するやうに盛んに讀まれたり論じられたりした。そのカルプシュカ、チギリンといふのは『民兵になつて居たので、ボナパルトがモスクワに進擊して來やうといふことを聞き、酒を呻つて景氣をつけ、フランスのことと云へば何でも彼でも散々に惡態を吐いて、ジン酒屋から飛び出して來ては、鷲の旗章の下に集まつて居る人々に演說をしかけた。』と云ふ男である。

倶樂部の隅の部屋には部員共が、その告示を讀むために集つた、或る者には『彼奴等はロシアのキヤベツで吹き消されて了ふだらう、ロシアの粥が彼奴等の胃袋を引き裂いて了ふだらう、そしてキヤベツ・スープが彼奴等をやつつけて了ふだらう、彼奴等はみんな一寸法師ばかりだから、村の小娘一人でも彼奴等の三人位ゐは熊手で以て投げ飛ばせる！』と云つて、フランス人を罵倒したカルプシュカの遣り方が氣に入つた。

又或る人たちはその調子に贊成しないで、それは亂暴で間が拔けて居ると言つた。人々の言ふ所では、ラストプチンはモスクワから、凡てのフランス人は愚か他國人さへも放逐して了つたが、その中にはナポーレオンの間諜や探偵も混つてゐたといふ話であつた。併し人々がこの話をしたといふのは、主としてその時にラストプチンが言つた警句を繰り返すためであつた。その他國人たちはニジニイ行きの帆船に乘せられた、そしてラストプチンは彼等に向つて斯う言つた。

『Rentrez en vous-mêmes, entrez dans la barque, et n'en faites pas une barque de Charon（みんな銘々勝手に、船に乘り込み給へ、そしてシヤロンの船とならさないようにし給へ）』人々は又、凡ての官廳がモスクワから移されて行くといふ話をしては、それだけのことならば、モスクワはナポーレオンに感謝しなければならない、といふシンシンの笑談を附け加へた。人々はマモノフの聯隊は八十萬ルーヴルもかゝて居るし、ベズウーホフは又自分の聯隊に對してそれ以上かけて居るといふことだ

が、殊にそのベズーウホフの愛國心の最も尊い證據は、彼が自ら軍服を着て、聯隊の先頭に立ち、見物人に一文も席料を出させないで馬に乘つて進んで行くと云ふ事だ、などと言つた。

『あなたは誰に向つても容赦なしですのね、』と、ジュリイ・ドルベツカーヤは、指輪に蔽はれてゐる細そりした指で、引裂いた撒綿絲を一撮み撮みあげながら言つた。

ジュリイはその翌日モスクワを立つつもりだつたので、別れの夜會を催したのである。

『ベズウホフは口の悪い人ね、けれどもあの人は全くいゝ人ですよ、立派な人ですよ。どうして又あなたはそんなに caustique（皮肉）なことに興味を覺えるんですか？』

『罰金だ！』と、義勇兵の制服を着た一人の青年が言つた、この青年のことをジュリイは Monchevalier（私の騎士）と呼んで居て、自分と一緒にニジニイへ連れて行くことにして居た。

他の多くのモスクワの交際社會と同じく、ジュリイの周圍でも、近頃はロシア語以外の言葉を使はない主義になつて居たので、誤つてフランス語を使つた者は、自由寄金會の委員に渡すべき罰金を出さなければならなかつた。

『もう一つガリシズム（フランス特殊の語法）の罰金がありますよ、』と、偶然その場に居合はせたロシアの作家が言つた。

『「興味を覺える！」といふのはロシア語ぢやありませんからね。』

『あなたは誰に向つても容赦なしですのね、』とジュリイは、著述家の言葉には注意を向けないで、かの義勇兵に向つて言葉をつゞけた。

『Caustique（皮肉）と言つたのは私も認めますわ、』と、彼女は言つた、『そして眞實をお話しする喜ばしさの爲めなら私お拂ひしますとも。もつとでもお拂ひしますよ、ですけれどガリシズム（フランス特殊の語法）などといふことには責任がございませんよ。』と、著述者に向つて言つた。『私はガリツィン公爵のやうに、教師を雇つてロシア語を稽古するやうな時も金もございませんでしたからね、おや、あの人も、』と、ジュリイは言つた。『Quand on（いつ……）——いえ、いえ』と、義勇兵に話しかけた、『さう揚足取るもんぢやありませんよ。まあ噂をすると影とやら。今丁度あなたのお噂をしてゐた所なんですよ、』と、愛想よくピエールにほゝ笑みながら言ひ、交際社會の婦人獨特の容易なく嘘を言つてのける調子で、『あなたの聯隊がマモノフの聯隊よりもズツとよくなるだらうと云ふお話を致して居りましたの。』と、附加へた。

『おゝ、私の聯隊のことはもう私にお話し下さらないやうに願ひます、』と、ピエールは女主人の手に接吻しながら答へて、その傍に坐つた。『私は實際心底から自分の聯隊には弱り切つて居るんですから。』

『あなたは、勿論、御自分で指揮を遊ばすんでございませうね？』ジュリイは狡猾な皮肉な眼を義勇兵と見交してから言つた。

所が、義勇兵はピエールの面前では何うしても早速 Caustique（皮肉）になると云ふ譯に行かなかつた、で、その顏にはジュリイの微笑が含んでゐる意味に對する當惑が現れてゐた。ピエールはポカンとした好人物であるにも抱らず、顏さへ出して居れば、嘲弄しやうとするやうな企ては何でも止めさして了ふ事が出來たのであつた。

『いゝや、』と、ピエールは自分の大きな、ぶく〳〵した身體を笑つて眺めながら答へた、『私はフランス軍から見ると餘りよい的になり過ぎますからな、それに全くの所馬の背に這ひ上れるか何うかとそれを心配してゐるのです。』

いろ〳〵の人の事が噂の種に上されたが、その中にジュリイの友達たちはふとラストフ家の話を始めた。『あそこの財政狀態も隨分危くなつて居るんですつてね、』と、ジュリイが言つた。『それに伯爵がひどく沒暁漢なんですつて。郊外の家と領地とをラズモフスキイ家で買はうと云つて居るんですが、話が未だに纏まらないんださうですよ。伯爵が法外に高いことを有仰るんでせうよ。』

『いや、あの賣買は二三日中に片が附く筈ですよ、』と誰かゞ言つた。『尤も今モスクワで何か買はうといふのは無茶な話ですがね。』

『何うしてゞすの？』と、ジュリイが言つた。『まさかモスクワが危いなどゝ思つて居らつしやるんぢやありますまいね。』

『では、あなたは何故おたちになるんです？』

『私？妙なことをお尋ねなさいますわね。私が行きますわけはね……あの、さうです、みんなが行くからですの、私は何もジャン・ダルクでもなければ、アマゾンでもありませんからね。』

『あゝ、さう、さう、布片をもう一枚下さいませんか。』

『ちやんと整理すれば、負債はすつかり拂つて了へるでせうがね、』と、義勇兵がラストフ伯爵の話を持ち出した。

『あの人は人のいゝお爺さんですが、しかし大分お馬鹿さんですからね。』

『だが何故あの人たちは此所にこんなに長く止まつて居るのでせう？ずつと前に田舍に出かけるつもりでゐらしつたんですのにね。ナタリイも今ではもうスツカリ快くおなりだらうと思ひますが？』と、ジュリイは狡猾な笑を浮べてピエールにたづねた。

『一番末の息子を待つて居るんです、』とピエールは言つた。『その息子はオボレンスキイのコザックに這入つて、ビエラツエルコフへ遣られたんです。聯隊がそこで造られたものですからね。ですが今度は私の聯隊に移される事になつて毎日もう着くか着くかと待たれて居るんですよ。伯爵はずつと前から立ち退き度がつて居られますが、何うしても伯爵夫人が息子の歸つて來る迄はモスクワを離れようとされないのです。』

『私は一昨日アルハーロフ家であの人たちに會ひましたよ。ナタリイは、もうすつかり樣子も元氣も回復してゐました、そして歌をうたひましたわ。何てまあ世間には物事をけろりと忘れて了へる人があるんでせうね！』、

『何を忘れるのです？』と、ピエールが不快な顏をして尋ねた。

ジュリイは微笑した。

『まあ、伯爵、ねえ、あなたのやうな勇ましい騎士は、マダム・スウザの小說の中にしか見られませんわ。』

『騎士！　それはどういふ意味です？』とピエールはサツと赤くなつて尋ねた。

『まあ、お聞きなさいまし、伯爵！　c'est la fable de tout Moscou. je vous admire ma parole d'honneur.(あのことはモスクワ中の評判でございますよ。私は、つく〴〵、あなたには感服してしまひましたわ。)』

『罰金！　罰金！』と、義勇兵が言つた。

『まあ、好ござんすとも。碌に話も出來やしないわ、あゝ面倒臭いこと！』

『モスクワ中の評判たあ何の事です？』と、ピエールは突つ立ち上つて、腹立しげに言つた。

『まア白ばつくれてゐらつしやる、伯爵、御存じの癖に！』

『私はそんなことは少しも知りません、』とピエールは言つた。

『あなたが昔からナタリイと何んなにいゝお友達だつたか、私存じて居りますよ、それで……ですけれど、私は昔からヴェーラの方が餘つ程仲好しでした。cette chère vera！（あの可愛いヴェーラ！）』

『いや、奥さん、』と、ピエールは迷惑さうな調子で言ひ張つた。『私は決して伯爵令嬢ラストフの騎士たる役割を自分で勤めたことはありませんよ、それに、私は始んどもう一ケ月もあの人たちに近づいたことがない位ゐです。しかし私には何うしても解りません、その殘酷な……』

『Qui s'excuse s'accuse,（自分で辯解けするのは自分の罪を知らすやうなものですよ、）』ジュリイは微笑して、勝ち誇つたやうに綿撒糸を振りながらから叫んだが、自分の今の言葉でその會話を打切らうと思つて、急いで話題を變へた『それはさうと、お氣の毒なマリイ・バルコンスキイが昨日モスクワにお着きになつたさうですね。あなたは、あの方のお父さんのお亡くなり遊ばしたことをお聞にきなりまして？』

『實際ですか？　何處に居られるでせう？　私は會ひたいのですが、』と、ピエールは言つた。

『私は昨夜あの方と會つて來ました。今日か明朝、甥御を連れて田舍の領地の方へいらつしやるさうです。』

『それで、何んな御様子でした？　お話して下さい、』と、ピエールは言つた。

『おゝ、お身體はお達者さうでしたが、ひどく御愁傷のやうでしたよ。けれど、あの方を誰方が救ひましたか、あなた御存知ですか？　全く一篇のローマンスですよ。ニコライ・ラストフなんですからね。あの方が百姓たちに取り巻かれてね、その百姓たちがあの方を殺さうとして、女中を二三人負傷させました。そこへニコライ・ラストフが駈けつけて、あの方を救つたんですつて……』

『又小説ですかね、』と義男兵が言つた。『この世間一般の逃走は何うも方々の老嬢たちをすつかり結婚させて了ひさうですね。カテイシュもさうだし、公爵令嬢バルコンスキイも亦さうだし。』

『ねえ、あなた、私は實際あの女は un petit pen amoureuse du jeune homme(どうやら少しあの青年に戀してる)と思ふんですよ。』

『罰金！　罰金！　罰金！』

『だつてこんなことが何うしてロシア語で言へるもんですか？』

十八

ピエールは家に歸ると、今發表されたばかりのラストプチンの新らしい告示を二通渡された。

第一のは、モスクワ立退きがラストプチン伯爵の命令に依つて禁じられたといふ噂は嘘であつて、それ所か却つて貴婦人及び商人の細君連が此の都會を立ち退かうとしてゐるのは、伯爵の喜ぶ所であると云ふことを宣言したものであつた。『何も狼狽することもなければ、虚報を出すこともない、』とその文面には言つてあつた、『兎に角私は命に賭けて暴行者がモスクワには侵入して來ないといふことを保證するのである。』

これ等の言葉は先づピエールに、フランス軍が確かにモスクワに侵入し來るだらうと云ふことを明かに示した。第二の告示には、我軍の本營はヴイアズマにあるといふこと、それからウイツトゲンスタイン伯爵がフランス軍を擊破したと云ふこと、しかしモスクワの市民の多くは各自に武裝し度がつてゐるから、その望みに應ずる爲めに兵器廠ではそれ〳〵武器を用意してあつて、劍や、短銃や、鐵砲などは凡て其所で安價に得られることなどが書かれてあつた。

この文面の調子は前のチギリンの假定演説のやうな、あんな呑氣なものではなかつた。この二通の告示はピエールを考へに沈ませた。彼に取つては恐ろしい嵐の雪が——その來ることを彼は心から望んで居たのではあるが、同時に又それは彼の心にわけもなく恐怖の戰慄を起しもしたのである——その雪が次第に近づいて來たことが明らかであつた。『軍務について軍隊に加はることにしやうか、それとも此所で待つてゐようか？』とピエールは既に百度も自問したこの問題を考へた。彼は卓子の上に

乘つて居た一組の骨牌を取り上げて、それでペイシエンスの勝負に成功したら、』と、彼は手に持つて居た骨牌を切りながら腹の中で思つて、上を見上げた、

『若し成功したら、それはかう云ふ事になる……何う云ふ事にだ？』……彼がこの問題を決し兼ねて居た處へ、ふと自分の書齋の扉口で、這入つてもいゝかと訊ねてゐる一番年上の公爵令嬢の聲が聞えた。『そしたら、俺は軍隊に加はる爲めに出發しなければならないと云ふことなんだぞ、』と、ピエールは自分に向つて斯う言つて、それから『お這入り、お這入りなさい、』と公爵令嬢に向つて言つた。

彼の從姉妹の中で一番年上の、この胴の長い、石の様な顏の女だけが、たゞ一人未だピエールの家に殘つて居るのであつた、他の二人の妹たちは兩方とも結婚して了つたのである。

『お邪魔に上つて濟みませんでした』と彼女は責めるやうな激したやうな調子で言つた。『何とかもう決心致さなければなりませんでせう。一體どうなるんでせう？　誰も彼もモスクワを立ち退いてしまひました、それに平民はだん〳〵亂暴を始め出しましたし、何うして私たちは此處に留まつてゐるんですの？』

『それどころか、何も彼も申分なく行つて居る様子ですよ、Ma cousine(從姉妹よ)』と、ピエールは、自分が彼女に對して恩人の位置にあるので始終感じてゐる當然の心持を拂ひ退けるために、いつもこの從姉妹に向つて取つて居る笑談らしい調子で、斯う言つた。

『えゝ、さうよ、申分なく……全く申分なくね、さうですよ。ワルワラ・イワアノウナが今日も私に話しましたのにはね、我軍は素晴らしい働きをしたさうですよ。確かに夫れは我軍の名譽ですわ。でも平民達は全く謀反を始めて、今ではもう誰の云ひつけをも聞かないんですつてね、私の女中でさへ無禮を働き出したんですもの。若しこのまゝで進んで行つたら、やがて私たちまでも殺されるでせう。うつかり町など歩けませんね。それに一番悪い事には、二三日したらフランス軍がこゝへやつて來るんですつてね。何うして私達はそんなものを待つてゐるんですの？　何うぞお願ひですから、ねえ、』と公爵令嬢は言つた、『何うぞ私をペテルブルグにやつて下さるやうに命令を出して下さいましな、何んな事があつても、私はボナパルトの支配を受けて生きてゐることは出來ません。』

『だが何といふ下らないことを！　何處からあなたは、そんな話を聞いて來たんです？　それどころか……』

『でも私は、あなたのナポーレオンに從ふわけには參りませんよ。他の人たちは自分々々の好きなやうにするがいゝでせう……でも、あなたがこのお願ひを聞いて下さらないなら……』

『いや、聞きますよ、早速その命令を出しませう。』

公爵令嬢は明らかに怒る對手がないので、まごついて居る様子であつた。何か呟きながら椅子の端に腰を下した。

『だがあなたは間違つた話を聞いて來たんです、』と、ピエールは言つた。『町の中は至る所靜かで、危險などといふことはちつともありませんよ。御覽なさい、今讀んだばかしなんですが……』ピエールは公爵令嬢に先の告示を見せた『伯爵が命に賭けて敵がモスクワに入らないことを保證すると書いて居ますよ。』

『あゝ、あなたの伯爵なんか、』と公爵令嬢は意地惡さうに言つた、『あの人は僞善者ですよ、自分から暴徒を煽動したやうな惡人ぢやありませんか。あの人はあの馬鹿らしい告示の中に、暴徒どもは見當り次第片つ端から取つ捉まへて、髮の毛を摑んで牢屋へ引きづつて來いと書いた人ぢやありませんか、(何といふ馬鹿々々しいことでせう!)それをした者には、名譽と光榮があるなんて言つてるんです。そして到頭私たちをこんなハメに陷れて了つたんです。ワルワラ・イワアノウナはフランス語を使つた爲めに、殆んど暴徒に殺されさうになつたと私に話しましたよ。』

『あゝ、あゝ、分りました……あなたは餘り苦勞性過ぎる、』と、ピエールは言つて、それからペイシエンスをやり出した。

その勝負には成功したけれども、ピエールは軍隊に加はる爲めに出發はしないで、今やどん〳〵と人が減つて行くモスクワに矢張り止まつて居た、依然として同じ煩悶と動搖と不安と、そして又、同時に、何か知ら或る恐しいものを待ちまうける歡喜との中に浸つて居た。

次の日の夕方公爵令嬢は出發した、そしてピエールの執事長が、ピエールの聯隊の武裝の爲めに要する金の調達は、何處か一つ領地を賣らなければ、到底むづかしいと云ふ事を知らして來た。執事長は彼の聯隊狂は必らず彼を破產させるに至るだらうといふことを大摑みに彼に言つて聞かした。ピエールは執事長の話を聞きながら微笑を隱すことが出來なかつた。

『よし、ぢやあ、それを賣つてくれ、』と彼は言つた。『止むを得ないよ、今になつては手を引くわけに行かないからな!』

事物の狀態が、特に自分に關した事物の狀態が惡くなれば惡くなる程、それだけピエールは嬉しくなつて來て、自分が待ち望んで居た危機が近づいて來たといふことが益々明瞭になつて來るのであつた。ピエールの知つて居る人は殆んど一人も都に殘つて居なかつた。ジユリイも行つてしまつた、公爵令嬢マリヤも行つて了つた。もつと親しい知合ひの中では唯一つラストフ家の人々だけが殘つて居たが、ピエールは彼等を訪ねて行かなかつた。

その日氣晴らしの爲めに、ピエールは馬車に乘つてワロンツオウオの村へと、敵に對して使ふ爲めにレピツチが造りつゝある大輕氣球と、夫れから翌日揚げる筈の試驗的の輕氣球とを見物に出かけた。輕氣球は未だ用意が出來てゐなかつたが、しかし夫れは皇帝の望みに依つて造られて居るのだと云ふことをピエールは知つた。皇帝は次のやうな言葉で、そのことに就いてラストプチン伯爵に手紙

を書いたのであつた。

『レピツチの用意の出來次第、彼が兵車の乘組員として充分信用し得る才智ある人々を集め、而してクツウゾフ將軍に使ひを馳せ、それに對する準備をとゝのへしむべし。余はそのことを彼に云ひ置きたり。願はくばレピツチに斯く傳へよ、迷ひて敵手に落ちざるよう、最初に降りるべき場所の十分なる視察を怠るべからずと。總司令官の行動に應じて彼が行動を整ふるが肝要である』

ワロンツオウオからの歸りに、ピエールはバロウニイ廣小路を通つたが、ラブノイエ刑場に入群りがして居るのを見たので、馬車を止めて下りて行つた。群集は間牒の罪を被つた、フランス人の料理人の笞刑を見て居るのであつた笞刑は丁度終つたばかりの所で、刑を執行した男が、笞刑柱から一人の丈夫な、赤髭の、青い靴下を穿き、綠の長い下衣を着た男の縛を解いて居た、男は哀れつぽい聲で呻つて居た。もう一人痞せた、青蒼めた犧牲者が傍に立つて居た。二人とも、その顏から判斷すると、フランス人であつた。痞せたフランス人のそれのやうな恐ろしい恐怖の顏をしてピエールは群集の中を押し分けて行つた。

『どうしたんだ？　あれは何者なんだ？　何のためなんだ？』と、彼はつゞけさまに尋ねた。けれども群集——小役人や、職工や、小商人や、百姓や、それから外套だの短上衣だのを着た女たちや——の注意は、その刑場に起つて居ることの方へ熱心に向けられて居るので、誰一人答へるものがなかつた。

丈夫な男は立ち上つて、顏を顰めながら肩を搖つた、そして明らかに自分の勇敢なところを見せるつもりで、あたりを見向きもせずに、短上衣を着始めた、所が突然その唇が震へた、かと思ふと、よく短氣な大人が泣くやうに、自分では泣くのが腹立たしいと思ひつゝも泣き出した。群集は聲高に話を始めたが、それは憐みの情を押し消すために始めたのであるやうに、ピエールには思はれた。

『或る公爵家の料理人で……』

『ロシアの醬油はフランス人の胃には些と強過ぎると見えますね……そんなに強かつたのですか？』と、ピエールの傍に立つて居た皺の寄つた小役人が、丁度そのフランス人が泣き出した時言つた。小役人は自分の洒落がどんな受け方をするかと思つた周圍を見廻した。四五人笑つた者があつた、けれども外の者は第二のフランス人を裸かにして夫れをば笞打たうとして居る男の方をびく〳〵しながら眺めて居た。

ピエールは呼吸が塞り、顏が顰んだ、そして急いで振り向いて、歩きながら矢張り何事やら口の中で呟きつゝ、馬車の方へ歸つて行つて、席に就いた。それから後の歸る途で彼は幾度もはつとして立ち上つては、遂に馭者がどういふつもりだと云つて尋ねた程、ひどく大聲に叫んだ。

『お前は何處へ行くつもりなんだい？』

と、ピエールはルビアンカへと馬車を走らせて居る時に馭者にかう呶鳴りつけた。

『總督の所へと有仰いましたので、』と、馭者は答へた。

『馬鹿！　薄鈍奴が！』と、ピエールは馭者を叱りつけて、斯う叫んだ、そんなことは滅多にないことであつた。『家へ歸れと云つたではないか、急げ、馬鹿野郎！　之れは今日立たなければならないぞ、』とピエールは自分に向つて言つた。

ひどい目にあはされて居るフランス人と、ラブノイエ刑場の周圍の群集とを見て、ピエールは最早や自分はモスクワに留つて居るべきではない、今日早速軍隊に加はる爲めに出發しなければならない、と一刻の猶豫もなく決心した、その決心が餘り早かつたので、彼は自分が馭者にさう云ひ付けたかのやうにも、或は馭者が當然自分でそれを知つて居なければならない筈なのだと云ふやうにも、思ひ込んでしまつたのであつた。

家へ歸るとピエールは、モスクワ中で誰知らぬ者もない、彼の全智全能の馭者頭ヱヴスタフイツチに、自分はその晩馬車でモザイスクに行つて軍隊に加はることになつたと云ひ渡して、自分の乘馬を數頭そのモザイスクまで送つて置くようにとの命を傳へた。これだけの事が、とても一日中に用意の出來るものではなかつた、それ故ヱヴスタフイツチの陳述に依つて、ピエールは先に馬を送つて置く準備の時間を與へるために、翌日まで出發を延ばすようにと說きつけられた。

二十四日は悪い天氣の後をうけて麗らかな日であつた、その日の晝餐後、ピエールはモスクワを出

發した。その夜ベルクシュコウオで馬を替へる時、ピエールはその夕方一大戰鬪があつたことを知つた。ベルクシュコウオでは大砲の響の爲めに大地が震動したといふ話を聞いた。だが戰爭が勝つたか負けたかといふピエールの問ひに對しては、誰も答へる事が出來なかつた。これは二十四日のシェヴアルデイノの戰鬪であつた。明け方になつてピエールはモザイスクに近づいた。

軍隊がモザイスク中の家といふ家に宿舍して居て、ピエールが自分の馭者と馬丁とに迎へられた旅屋には、明間が一つもなく、場所は悉く將校達にふさがれて居た。

モザイスクから前方は、至る所に軍隊が止つたり、進んだりしてゐた。コザツク兵や、歩兵や、騎兵や、輜重車や、銃砲車や、大砲などが至る所にあつた。

ピエールは出來るだけ大急ぎで突き進んで、益々遠く益々深く此の兵隊の大洋の中に入り込めば入り込む程、不安と新らしい快感との戰慄が一層強くなつて來た。それは彼が皇帝の行幸の時にスロボドスキイの宮殿で感じたのに等しい感じ、卽ち是非とも何等かの方法を取つて、何等かの犧牲を拂はなければならないといふ感じであつた。彼は今や人生の幸福を組成して居る一切のもの、愉快とか、富貴とか、又は人生そのものさへが、すべて塵であり灰であつて他の或るものに比較すれば、そんなものは投げ捨てゝ了ふこそ喜びであるといふやうな喜悅の情を意識した……その他の或るものとは何であるかと云ふ事はピエールには解らなかつたし、又實際、誰の爲めに、何の目的で自分は一切のも

のを犠牲にする事に斯かる特殊の喜びを發見したのかといふことに就いて、彼ははつきりした考へを得ようとはしなかつた。彼は犠牲の目的を知ることには興味を覺えなかつた、けれども犠牲といふ事その事が彼に或る新らし喜悦の感じを與へたのであつた。

十九

二十四日にはシエヴアルデイノの砲壘の前で戰爭があつた、二十五日には兩軍ともに一發の砲火も交へなかつた、二十六日にはボロデイノの戰鬪があつた。

何うして、又如何なる目的で、シエヴアルデイノ及びボロデイノの戰鬪が開かれたか？　何故にボロデイノの戰鬪が開かれたか？　それには、フランス方にとつてもロシア方にとつても、何の意味もないのであつた。その直接の結果は斯うであつた、即ちロシア軍にとつては、モスクワの破滅に一層近づいて來たし（これは我々が世界の何事よりも恐れてゐたその事なのである）、又フランス軍にとつては、その軍隊の破滅に一層近づいて來た。（これは又彼等が世界の何事よりも恐れて居た所である）その結果は當然既に全く明白であつたものを、しかもナポーレオンは戰ひを挑み、クツウゾフはそれに應じたのである。

若し軍の指揮官がひたすら理論的の考察ばかりに導かれたとすれば、敵國の奥深く二千ウエルストも進んで、戰爭をして行く中には、恐らくその軍勢の四分の一を失ふだらうから、從つて必然に破滅に這入つて行かなければならないといふ事は、ナポーレオンに取つて明瞭であつたに違ひないやうに思はれる、と同樣に又クツウゾフにとつても、その戰爭に應じて自分の軍勢の四分の一を賭するの危險を冒せば、必然にモスクワを失ふに至るといふことが明瞭であつたに違ひないやうに思はれる。クツウゾフに取つて之れは數學的に明瞭であつた、即ち將棊をさす場合、自分が敵より駒を一個少なく持つて居るのに、駒を交換すれば、自分は慥かに夫れがために敗北者とならなければならない、だから駒を交換する事を避けるのが必要である、丁度そんなやうに明瞭であつた。對手が駒を十六持つて自分が十四持つて居る場合には、自分の八分の一だけ弱いばかりであるが、十三の駒を交換すると云ふと、對手は自分より三倍も強くなるのである。

ボロデイノの戰鬪までは、我軍は略々フランス軍の六分の五あつた、所が戰鬪後には僅かに二分の一になつて了つた——即ち、戰鬪前十二萬に對する十萬であつたものが、戰鬪後には十萬に對する五萬になつて了つた。而も尚拔け目のない、老練なクツウゾフは此の戰爭を行つたのである。又軍の天才と呼ばれてゐるナポーレオンは、戰ひを挑んでその軍隊の四分の一を失ひ、その連絡線を益々延長してしまつたのである。若し彼がモスクワの占領を以て、恰かもヴイエンナの占領の結果と同樣に、

この戰役に結末をつけるものと豫期して居たと云ふ事が云はれるとすれば、我々はその反對の證據が澤山ある事を主張し得る。ナポーレオンの傳記者たちは我々にかう云ふ事を語る、彼はスモオレンスクに達すると共に早速戰爭を切り上げようと思つて居たのだ、彼は戰線延長の危險を知つて居たのだ、それから又スモオレンスクの經驗からして、如何なる狀態でその町が自分の手に殘されるかといふことが分つて居たし、それに幾度講和の談判を開き度いといふ希望を示しても、それに對して唯一度の返事をも受け取らなかつたしたから、彼はモスクワの占領が戰爭の終結にはならないといふことを知つて居たのだと。

ボロデイノの戰ひを挑んだり、應じたりしたクツウゾフとナポーレオンとは、何の企畫もなく、何の合理的な計略もなく行動したのであつた。その事件が起つた後になつて、歷史家たちはその時の將軍たちの先見的な智謀や、天才の證據を巧みにこしらへ上げて持ち出して居るが、實はその將軍たちは凡て世界の歷史上の無意識の道具になつて居る者の中でも、最も奴隸的な、少しも獨立性を持たない代表者なのである。

古人は、歷史の全興味が或る少數のヒロイツクな人物に集中されて居る事を歌つた數種の敘事詩を、我々に傳へて居るが、その影響のお蔭で、今になつても未だ我々は、さういふ種類の歷史が、この人間性の發展した現代に於ては無意味なものであるといふ思想に、心を馴らして了ふことが出來ないで

居る。

何うしてボロデイノ及びシエヴアルデイノへに於いても、又非常に定り切つた、誰にも知られて居る、その辭全く出鱈目の說を聞かされる。總ての歷史家は事件を斯ういふ風に說明して居る。

彼等に言はせると、ロシア軍はスモオレンスクからの退路に於いて、一大會戰に對する最もよき位置を求めた揚句斯かる位置をボロデイノに見出した。ロシア軍は、と彼等は云ふ、街道（モスクワからスモオレンスクに至る）の左手に、それと直角をなして、ボロデイノからウテイツアに至る間（全く丁度その位置で戰鬪が行はれたのだ）に前以て防禦工事を施して置いた。

この位置の前面に、と彼等は我等に告げて居る、敵の行動を監視する爲めの前壘として、シエヴアルイデノの丘の上に防禦砲壘が築かれた。

二十四日に、と我等は告げられてゐる、ナポーレオンはこの砲壘を攻擊して、それを占領した。二十六日には、彼はボロデイノの平原に陣取つてゐる全ロシア軍を攻擊した。

これが歷史に於て語られてゐる所であるが、併し全然間違つて居るといふことは、事件を調べて見ようと思ふ人には、誰にでも容易に見拔くことが出來る。

ロシア軍は最良の陣地を撰擇したのではなかつた、それどころか、その退路に於いてボロデイノ以

上の陣を澤山に通り越して了つたのである。彼等はさういふ陣地の唯一つにも止まらなかつた、と云ふのは、クツウゾフが自分の氣に向かない陣地を取らうとは思はなかつたにも依るし、戰爭に對する一般的の熱心が未だそれ程強く表はれてゐなかつたにも依るし、又ミロラドヰツチが未だ國民兵の援軍を率ゐて到着しなかつたにも依るし、その他數限りない理由が澤山あるのであつた。

兎に角ロシア軍が通り過ぎた路には、より以上堅固な陣地が幾つもあつたと云ふ事と、戰爭の開かれたボロデイノの平原は、ロシア帝國の中の、他の如何なる場所、地圖の上を盲目滅法に指さした如何なる場所よりも、便利な陣地とは云はれないと云ふ事とは、依然事實として殘つてゐる。

街道に直角に左手の方の位置——それがその戰爭の行はれた場所である——に防禦工事を施すどころか、ロシア軍は、一千八百十二年八月二十五日まで、戰爭がそんな所で起らうなどとは夢にも思つてゐなかつた。その證據には、先づ第一に、二十五日以前には其所には何一つ防禦工事がなく、その日著手された防禦砲壘は、二十六日になつても完成しなかつたし、第二には、シエヴアルデイノの砲壘は、その位置が戰爭の實際に行はれた場所の前方にあるので、實際上何の役にも立たなかつたのである。何の目的があつてその砲壘が、他のいづこの場所の夫れよりも堅固に築かれてゐたのか？そして又何の目的があつて、夫れを守る爲めに二十四日の夜遲くまで、あらゆる努力が盡されたり、六千人の人間が犧牲にされたりしたのか？　敵の行動の監視なら數人のコザツクの哨兵だけで充分だ

つたゞらう。そして戰場の位置が豫め分つて居なかつたことと、シエヴアルデイノの砲壘が、その戰場の最初の地點ではなかつたといふことゝの第三の證據は、バアクレイ・ドウ・トオリイと、バグラチオンとが、二十五日まで、シエヴアルデイノ砲壘を戰場の左翼であると思ひ込んで居たり、クツウゾフ自身でさへ戰爭後大狼狽に書いた報告の中に、シエヴアルデイノを戰場の左翼として語つて居たりする事實の中に見られるのである。それが唯餘程後になつて、戰爭の報告がゆる〳〵と書かれるようになつた時に、實際は單に左翼の防禦地點に過ぎなかつたシエルヴアルデイノの砲壘を、前衞地として役に立つたとか、ボロデイノの戰ひは、實際は全く豫想もしなかつたし、殆んど防禦工事も施してなかつた位置で行はれた癖に、それを我々が豫じめ選んでおいた防禦工事を施した所で戰つたのだとか云ふやうな、(總司令官といふものは、云ふまでもなく、失策があつたなどゝ思はせてはならないので多分その失策を蔽ふつもりであらうが)さういふ間違つた、奇怪な記述が發明されたのであつた。

事實は明らかに斯ういふ風に起つたのである。陣地は、街道を横切つて居るコロツチヤ河に沿うて、直角ではなく鋭角をなして据ゑられた、だから左翼はシエヴアルデイノに、右翼はノヴオエ村の近くに、そして中央はコロツチヤ河とブオイナ河との合流點に近いボロデイノにあつたのである。誰でも、ボロデイノの平原を見渡しさへすれば、實際どんな風に戰爭が行はれたのかと云ふ事などは考へなくとも、コロツチヤ河に掩護されてゐるこの陣地を、モスクワに向つてスモオレンスク街道を進んで來

る敵の進軍を防ぎ止める目的を持つた軍隊には常然の陣地として、選ぶであらう。

二十四日にヴアリユエフまで馬を進めたナポーレオンは、(我々が歴史で教へられて居る處によれば)、ウテイツアからボロデイノに至るロシア軍の陣地を見なかつたし、(存在してゐない陣地などは見る事が出來なかつたのだ、)又ロシア軍の前衛をも見なかつたのであるが、ロシアの殿軍を追撃して行く中に、偶然にもシエウアウデイノ砲壘に陣取つたロシア軍の左翼に打つかつたのである、そこで彼の軍隊はコロツチヤ河を渡渉したが、それがロシア軍の驚かした。所でロシア軍は、一大決戰をするには既に時が遲れて居たので、占領して居ようと思つてゐた位置から左翼を退けて、今まで思ひもしなかつたし、又防禦工事もしてゐなかつた全然新らしい陣地を取つた。コロツチヤ河の左岸に渡つて、街道の左手側で、ナポーレオンは全戰局を右から左(ロシア側から見て)へと變じて、それをウテイツアと、セミヨノヴスコエとボロデイノとの間の平原に移した——その平原はロシアの他の如何なる平原と比べても少しも有利な位置ではなかつたのだ——そしてその平原で二十六日の全戰爭が戰かはれた。その時の戰爭の想像のと、實際のとの簡單な略圖を與へて置く。

若しナポーレオンが二十四日の夕方にコロツチヤ河に着かなかつたならば、そして、その夕方直ちにその砲壘を攻撃することを命じずに、翌朝攻撃を開始したならば、何人もシエヴアルデイノ砲壘がロシアの陣地の左翼であつたことを疑はなかつたであらう、そして又戰爭が、我々が豫期して居た如くに行はれたであらう。その場合には我軍は恐らく左翼に依つてシエヴアルデイノ砲壘を尙一層堅固に守つたであらう、我軍はナポーレオンの中央か或ひは右翼を攻撃したであらう、そして總戰闘は二十四日に、準備の出來た防禦工事の施された位置に於て戰はれたであらう。所が敵の攻撃が、我が殿軍の退却した夕方、卽ち、グリドウネウオの戰ひ後直ちに我左翼に對して加へられたので、そしてロシアの將官たちが、二十四日の夕刻に總戰爭を始めることをしなかつた、と云ふよりも出來なかつたので、ボロデイノの戰爭の最初の、且つ最も重要な行動がその二十四日に失敗に歸した、その失敗が、必然的に二十六日に戰はれた戰爭の失敗を導いたのである。

シエヴアルデイノ砲壘の陷落後、我軍は二十五日の朝になつて、我左翼がその位置から非常に擊退されて居ることを知つた、そこで止むなく味方の位置を左翼に準じて引つ込め、そして大急ぎで出來るだけの所に防禦工事を施した。

さういふ次第で八月の二十六日にはロシアは唯弱い、未完成の防禦砲壘に依つて防戰したばかりでなく、加ふるにその位置の不利は更に、ロシアの將官たちが、充分にその陣地の事實(左翼に於ける

陣地を失つたことと、右から左へと、その後の全戰場が移つたこと）を認めないで、ノヴオエからウテイツアに至る延長した陣形にそのまゝ止まつてゐたので、從つて軍を戰爭中に右から左へ移さなければならなかつたと云ふ事實に依つて、益々甚しくなつた。その結果、我々はその全戰中の間、我が左翼を攻擊して來るフランスの全軍に、半數の兵力をもつて對抗しなければならなかつたのである。（ウテイツアに對するポニヤトウスキイの行動や、フランス軍の右翼に對するウヴアロフの行動は、戰爭の全局から見て全く關係のないものであつた。）

斯くの如くボロデイノの戰爭は戰はれたのであつて、かの我が軍の指揮官たちの失錯を蔽はんが爲に、我が歷史家たちに依つて記述されて居るが如きものでは少しもなかつたのである、歷史家達の云ふ所はロシア軍及びロシア人民の負ふて居る功蹟を寧ろ消して居るのである。ボロデイノの戰ひは、注意して選び且つ防禦工事を施した陣地に於て、ロシア側が敵よりも極く僅かばかり弱い軍勢をもつて、戰つたのではないのだ。シエヴアルデイノの砲壘の陷落後、ロシア軍は賴りない、殆んど防禦工事のしてない陣地に於て、フランス軍の兵力の半分の軍勢をもつて、卽ち、單に十時間の間戰ひつゞけて、尙ほ勝敗を決しない狀態を保たうと云ふことは愚か、たゞ三時間の間全滅と潰亂とを免れて居ようといふことさへ信ずべからざる程困難であると云ふやうな、さういふ色々の條件の下に、戰つたのであつた。

二十

二十五日の朝、ピエールはモザイスクをたつた。町の外へ導いて行く大きな、嶮しい、つゞら折りの丘の傾斜の上でピエールは馬車を下りて、丘の右手の、丁度禮拜式が始まつて居る大きな寺院の傍を歩いて行つた。一隊の騎兵聯隊が、聯隊附の歌唱者（シンガー）等を先に立てゝ、彼の後から丘を下り來た。馬車が一列をなして、彼等の方に向つて丘を上つて來たが、それには前日の戰爭の負傷者が一ぱいであつた。土百姓の馭者共は始終右から左へと走り廻つては、馬を呶鳴りつけたり、韃打つたりしてゐた。一輛毎に三四人の負傷兵が寢轉んだり座つたりしてゐる車は、道路修築の爲めに其嶮しい阪の上に撒かれてゐる砂利の上で、ガタゴトと上下に搖れた。青い顏をして繃帶をされて、きつと口を結んで顏を顰めてゐる負傷兵共は、馬車の中で搖られたり跳ね上つたりするので、車の兩側に獅噛み付いて居た。それが殆んど皆、無邪氣な子供らしい好奇心をもつて、ピエールの白い帽子と青い上衣に眼を見張つた。

ピエールの馭者は、その負傷兵の車の列に向つて、路の片側を通れと立腹したやうに呶鳴り付けた。騎兵の聯隊が、折しも軍歌を唄ひながら丘を下りて來て、ピエールの馬車に追ひつき、そして道を塞

いだ。ピエールは丘の中に堀れ込んで居る道の端の方に止つた。太陽が丘の側を越えてその道までは射し込まないので、そこは冷たくて濕々して居た。けれども頭の上は麗らかな八月の朝で、鐘の音が樂しさうに鳴り渡つて居た。負傷者に充ちた一臺の車が、ピエールに直ぐ近い道の端に止つた。木皮靴を穿いた馭者が、息を切らしながらその車に駈けつけて來て、輪鐵のなくなつて居る後輪の下に石を支つた、そして馬の尻帶を直し始めた。

腕を吊腕帶に吊して、車の後から歩いて來た一人の年とつた負傷兵が、傷のない方の腕で馬車を摑まへて、ピエールの方を振り返つた。

『もし、あなた、私たちは此所に置いとかれるのでせうか、それともモスクワへ連れて行かれるのでせうか?』と、彼は言つた。

ピエールは、その問が聞えなかつた程思ひに沈んでゐた。彼は、負傷者たちの一行と出會した許りの騎兵聯隊の方から自分の直ぐ傍の、內に二人の負傷者が座つて、一人が寢轉んで居る馬車の方へと眼を轉じた。馬車の中に坐つて居る兵卒の一人は、多分頰に負傷をしたのであらう。頭全體が繃帶に包まれてゐて、片頰がまるで赤ん坊の頭位ゐにふくれてゐた。口も鼻もすつかり片方に寄つてゐた。この兵卒は寺院の方を眺めながら、十字を切つてゐた。も一人の方は、年の若い、明るい髮の毛をした新兵で、その痞せた顏は、一滴の血の氣もないやうに眞白であつたが、ぢつと沈着いた、人の好さ

さうな笑ひを漏らして、ピエールを見てゐた。第三の男は、寢轉んで居るので、顏は見えなかつた。騎兵聯隊の歌唱者等が馬車の直ぐ傍を通つて行つた。

"Akh: Zapropala——da yeghova golova. Da na chuzhor storonė zhivutchi."
(あゝ遂々頭がなくなつた、それでも「頭は」他國で生きてゐる、と云ふほどの意味)

彼等は軍隊の舞踏歌をうたつて居た。丁度それに合はせるやうに、と云つても全く違つた晴々した調子であつたが、丘の頂では金屬性の鐘の音が鳴り響いた。そして暑い太陽の光線が、又別の晴々しさを思はせるやうな、きら〳〵した光を彼方側の坂の頂に浴びせかけてゐる。併し、ピエールが立つて居た丘腹の蔭の、負傷兵を一ぱい乘せた馬車と、呼吸を切らしてゐる、小さな馬との傍は、濕々として、日が蔭つてゐて、物寂しかつた。

頰に負傷して居る兵卒は、歌を唄つて居る騎馬兵たちを腹立たしげに眺めた。

『ふゝん、呑氣な奴等めが!』と彼は叱るやうに呟いた。

『兵隊ばかりぢやないんですよ、百姓までもゐるんですよ、私は今日見ました! 百姓まで狩り立てられてゐる有樣です、』と、馬車の傍に立つて居た兵卒が、悲しげな笑みを浮べ、ピエールに向つて、

話しかけた。『もう選り好みがしてゐられなくなつたのです……矢鱈に人間ばかり寄せ集めようとしてゐるのです——それがたゞモスクワの大事といふことだけに掛つて居るんですよ、さうなんですよ、今はもうたゞ一つしかする事がありません。』兵卒の言葉が漠然として居たにも拘らず、ピエールは充分その意味が解つたので、同意するやうに顔をうなづかせた。

道が又元通りに開いたので、ピエールは丘を下つて、尚ほも馬車を進めた。

ピエールは、誰か知つて居る顔に會はないかと思つて道の兩側を見渡しながら、馬車を進めたが、誰にも會はなくて、たゞ見る者は諸種の聯隊に屬してゐる、見も知らぬ、軍人の顔ばかりであつた、それが皆ひとしく驚きに打たれて彼の白い帽子と綠色の上衣に眼を見張つてゐた。

四ウェルスト進んでから、始めて一人の知人に會つたので、嬉しさうに挨拶した。これは醫者で、軍醫部の主腦の一人であつた。彼は蓋のある二輪馬車の中に、傍に若い醫者を同乘させながら、ピエールの來る方へと馬車を走らせた、そしてピエールを認めると、馭者臺に坐つて居たコザツクに聲をかけて、馬車を止めさせた。

『伯爵、閣下、何うしてあなたは此方(こちら)へお出でになりました?』と、醫者が尋ねた。

『あゝその、些と見物したいと思つたので……』

『やア成程、見るものは色々ございますね……』ピエールは馬車を出て、醫者と話をしようと思つ

て立ち止り、そして戰爭に加はり度いといふ自分の計畫を說明した。

醫者は、彼に、直接閣下の所へ行くがいゝと助言した。

『ねえ、戰爭の時には何所へやられるか分りませんよ』と、彼は言つて、自分の若い連れと目を見交した、『しかし閣下は兎に角あなたを御存知ですから、優遇なさるでせう。勿論さうあるべき筈ですね、あなた、』と、醫者は言つた。

醫者は疲れてゐる上に、急いで居る樣子であつた。

『成程さうですか……所でもう一つお尋ねし度いのですが、一體陣地が正確にある處は何處なのです?』と、ピエールは言つた。

『陣地?』と、醫者は言つた、『さうですね、それや私の方ぢやありませんが。タタリノウオへ行つて御覽なさい、あそこぢや頻りに方々で地を掘つてるますよ。あそこには小高い所がありますから、そこならよく見えますよ、』と、醫者は言つた。

『そこならよく見える?……で、あなたが……』

併し醫者はその言葉を遮つて、そして自分の二輪馬車の方へ行つた。

『私が御案內したいのですが、全く、御覽の通り、』(醫者は意味深い身振りをして)、『私はこれから軍團長の所へ駈けつける所なのです。御覽の通り斯ういふ苦しい位地にありますので……御存じでも

ございませうが、伯爵、明日戰爭がある筈でございますよ。すると十萬の兵に對して、我々は少なくとも二萬人の負傷者は見込んで置かなければなりません、しかも今の所は六千人分の擔架も、寢臺も、看護者もないのです。馬車は一萬臺ありますが、その外に色々のものが要るのです、まあ出來るだけやつて見るより仕方がありません。』

自分の帽子を見てゐたあの幾千萬と云ふ壯健な、老若の人々の中で二萬人が(恐らく今し方自分が見たあの人達が)必然的に負傷したり戰死したりする運命を持つて居るのだといふ不思議な思想が、ピエールに非常な印象を與へた。

『彼等は恐らく明日死ぬのだ、それなのに何うして死以外のことが考へ得られるだらう?』すると忽ち、觀念の潛在連鎖と云ふやうなものに依つて、彼はモザイスクの丘腹や、負傷者の馬車や、鐘の音や、斜の日光や、騎兵聯隊の歌や、さういふはつきりした一幅の繪畫を見た。

『彼等は戰爭に行くのだ、一瞬間たりとも立止つて、自分たちを何が待つて居るだらうと云ふことなど考へもしないで、たゞ負傷した仲間の傍を通り過ぎながら、チラリと其方を見たゞけなのだ。そしてあの中で、二萬人が死ぬべき運命を負ふて居ながら、而も俺の帽子を不思議がつて居られるとは!不思議だ!』タタリノウオの方へと進んで行きながら、ピエールはさう思つた。

馬車、荷馬車、從卒や哨兵の群が、道の左側のとある紳士の家のあたりに立つてゐた。總司令官が

そこに宿舍して居たのだ。しかしピエールが着いた時には、殿下も又殆んど總ての幕僚達も出拂つて居た所であつた。彼等は悉く教會の禮拜式に行つてゐたのだ。ピエールは進んでゴルキイへ向つた、そして阪を駈け上つて、とある小さな村に這入つた所で、始めて、白い襯衣を着て、帽子に十字の印をつけた民兵の百姓たちを見た。高い聲で話したり笑つたり、熱心に汗になつて、彼等は道の右の方の、草の生ひ繁つた、可成り大きな高地で働いてゐた。

或る者は地を堀り、他の者は土車で土を運んでゐた、かと思ふと第三の連中は何もしないで突つ立つてゐた。

二人の士官が一段高い所に上つて指圖をしてゐた。斯ういふ百姓たちが確かに、軍人となつた自分たちの地位の珍らしさを喜んで居る樣を見ると、ピエールは再びかのモザイスクの負傷兵たちのことを思つた、そしてかの一兵卒が『矢鱈に人間ばかり寄せ集めようとして居るんです。』といふ言葉で表はさうと努めてゐた意味を悟つた。斯ういふ髭武者の百姓たちが、變挺な、不樣な靴を穿いて、汗だらけの首をして、彼方でも此方でも襯衣のボタンを外して、日に燒けた鎖骨を曝しながら、戰場で働いて居る光景は、ピエールに、これ迄に見たり聞いたりした如何なるものよりも、更らに强く、この危急なる秋の眞面目と嚴肅とを印象した。

二十一

ピエールは馬車を下りて、働いてゐる百姓たちの傍を通りながら、其所からなら戰場が見渡されると醫者の言つたあの一段高い處に昇つた。

それは午前十一時であつた。太陽は稍や左手の方、ピエールの後にあつた、そしてスツキリと澄み渡つた空氣の中に、高地から圓形劇場の樣に擴がつて居る巨大なパノラマが、麗らかな日光を浴びながら、彼の前に擴たはつて居た。

スモオレンスク街道が、その圓形劇場の中を蛭り、頂上の左寄りの所で夫れを切つて、そして、その高地の前面の下の方、凡そ五百歩ばかりの白い會堂のある村を通つてゐた。これがボロディノであつた。道は村の下を過ぎ、橋を渡り、蜒々として或ひは上り阪となり、或ひは下り阪となり、更らに又上り上つて、六露里彼方に見える、ヴアリユエフの小村へと走つて居た、その小村こそ、現にナポーレオンのゐる處であつた。ヴアリユエフの彼方で、道は地平線上に黄色くなつて居る一叢の森の中へ消えてしまつた。街道の右手の、この欅と松の森の中に、遙かにコロツキイ修道院のきら〳〵と輝いて居る十字架と鐘樓とが見られた。青く見える遠方の彼方此方に、森や道の右手や左手に、煙立つ

野營の火や、彼我の軍勢のぼんやりした集團が見られた。右手の方、コロツチヤ、モスクワ兩河の流れに沿うた地には、丘陵が起伏してゐた。丘と丘との斷え間からベツズホウオ及びザハリノの二村が見られた。左の方は、土地がずつと平らかであつた、そこには穀物畑と火を放たれて煙を上げて居る村——セミヨノヴスコエ村——とがあつた。

ピーエルが見た物は、何も彼も非常に漠然としてゐたので、眼前の光景の如何なる邊にも、豫想に充分恰當するやうなものは何一つ見出すことが出來なかつた。彼が見ようと待ちまうけて居たやうな戰場は何處にもなかつた、唯野と溪と、軍隊と、林と、野營の火と、村と、小丘と流との外何もなかつた。全力を盡しても、ピエールはその生々とした景色の中に、一つの軍事的の陣形をも見出すことが出來なかつた。彼は、味方と敵軍との區別さへ見別けることが出來なかつた。

『誰か解つて居る人に尋ねて見なければならない、』彼はかう思つて、自分の大きな、軍人ならざる姿を不思議さうに眺めて居た士官に聲をかけた。

『一寸お尋ねしますが、』と、ピエールは言つた、『彼方に見えるのは、あれは何といふ村ですか?』

『ボロデイノだよ、』と、同僚が訂正した。

『ブルデイノ、さういふ名だつけね、』と、士官は訊ねるやうに同僚の方を振り返つて言つた。

會話をする機會を得たのが喜ばしいらしく、士官はピエールの傍へ近寄つて來た。

『あの此方に居るのは味方ですか?』と、ピエールはたづねた。

『さうです、それからずつと向ふの、あれがフランス軍です、』と、士官が言つた。『あそこに居るでせう、ほら、お見えになりますか。』

『何處です! 何處です!』と、ピエールは訊いた。

『肉眼でも見えますよ。それ!』士官は川の彼方の、左手の煙の立ち上つて居る所を指さしたが、その顔には、ピエールが會つて來た多くの人々の顔に見たと同じやうな嚴肅な、眞面目な表情が浮んできた。

『あゝ、あれがフランス軍ですか! それから彼處は?……』と、ピエールは左の方の、あたりに軍隊の見られる、とある小高い所を指さした。

『あれは味方です。』

『ははあ、成程! それから彼處は?……』と、ピエールは、丘と丘との斷え間に見られる、とある村の近くの、頂に一本の大きな木の立つて居る、今一つの遠くの高地を指さした、そこには黒い塊があつて野營の火の烟が上つてゐた。

『あゝ! あれは矢張り奴のなんです!』と、士官は言つた。(それはシエヴアルディノ砲壘であつた。)

『昨日までは我が軍のものでしたが、今はもう奴のものになつてしまひました。』

『さうすると一體我が軍の陣地は何ういふ風になるのです?』

『我が軍の陣地?』と士官は、滿足の微笑を浮べて言つた。『私はそれを極く明瞭に說明することが出來ます、といふのは私は殆んど總ての我が軍の砲壘の建設には關係したようなわけですから。あそこに、我が軍の中央が、見えるでせう、あのボロディノにあるのです。』彼は前方の白い會堂のある村を指さした。『あそこがコロツチヤ河を涉るべき淺瀨です。こつちの、それ、刈つた草の列がまだ低地に並べられてゐる所がありますね、あすこに橋があるのです。あれが我が軍の中央です。我が軍の右翼はずつと向ふの方にあります』(彼は右の方の、ずつと向ふの丘と丘との間の谷間を指した、『あそこにモスクワ川があるのです、そして、あそこに我々は素敵に堅固な砲壘を三つ造り上げました。左翼は……』こゝで士官は言葉を切つた。『說明に困りますね、ねえ……昨日は我が軍の左翼はズツとあの邊に、シエヴアルディノにあつたのです、見えるでせう、あの襤の木のある所です。所が今は、我々は左翼を引つ込めて了ひました、で今ではあの邊にあるのです、あの村と煙が見えるでせう——あれがセミョノヴスコエです、それに此所は——御覽なさい、』と彼はラエヴスキイ砲壘を指さした。『多分戰爭はあすこではありますまい、屹度ありませんよ。彼奴は自分の軍をこゝへ動かしては來ましたが、そいつは掛引です。多分右の方へ廻つて來るつもりなんでせう。まあ、そんなことは兎も角、明日の點呼には隨分大勢の者が居なくなるでせうよ!』と、士官は言つた。

年とつた軍曹が、士官の話の最中にやつて來たが、上官の話し終るのを默つて待つて居た。所がこの時になつてその男は、士官のこの最後の言葉に確かに不滿らしい樣子で、かう口を挾んだ。

『土籠(堡壘を建てる時に土を運搬するに用ふる籠)をとりに遣らなければなりませんが、』と、眞面目に言つた。

士官は、たとひ明日は何れだけの多くの人が失はれるだらうと思ふのは差支へないとしても、それを口に出して言ふ法はないといふ事を十分氣がついたといふ風で、恥ぢ入つた樣子であつた。

『あ、さうか、ぢや又第三小隊を遣れ、』と、彼は急いで言つた、『そして、あなたは何方です。醫者ではありませんか?』

『いや、私は別に何でもないんです、』と、ピエールは答へた。そして百姓の民兵たちの傍を通りながら、再び丘を下りて行つた。

『えゝ、畜生!』と士官は言つて、自分の鼻を摘みながら、ピエールと一所に民兵の傍を急いで通り過ぎた。

『やあ來るぞ!』……『持つて來るぞ、やつて來るぞ……』『來たぞ……』『間もなくこゝへ來るぞ、』と、突然人々の聲が叫んだ、そして士官も、兵卒も、百姓も道を一散に走つて行つた。

敎會の行列がボロヂイノから丘を上つて來るのであつた。その先頭には一個聯隊の歩兵が埃だらけ

の道を、帽子を脫り、銃を下げて、勇ましく進んで來た。歩兵の後から會堂の歌の聲が聞えて來た。兵卒も百姓も、それを迎へる爲めに脫帽して駈け下りて來て、ピエールに追ひ付いた。

『聖母を持つて來るのだ! 我々の守護神樣だ……イヴエルスキイの聖母だ!……』

『スモオレンスクの聖母さ……』と、他の者が訂正した。

村の中に居た民兵や、砲壘で働いて居た人たちは、鍬を放り出して、行列を迎へにと駈けつけて來た。埃だらけの道を進んで來る大隊の後からは、法衣を着た僧侶たちや、隨員の次僧や歌唱者たちを連れた頭巾を被つた小さな老人がつゞいて來た。その後から兵卒や士官の一行が、銀の框の中に這入つた、媒けた顏の、大きな聖像を擔ひながら來た、これがスモオレンスクから持ち出されて、爾來常に軍隊と一所に運ばれてゐる聖像であつた。後にも、前にも、周圍にも、脫帽した數多の兵卒の群が、地に頭を下げながら、歩いたり走つたりしてゐた。

丘の頂上で行列は止つた。麻の布片に載せてその聖像をかついで出る人々は、他の者と交替した。次僧たちが再び香を燃いた、そして勸行が始まつた。太陽の燃えるやうな光が群集を直射した、ほのかな、快よい微風が人々の帽子を脫いだ頭の髮の毛を弄んだり、聖像を飾つて居るリボンを飜へしたりした、歌ふ聲は、からつとした大空の下に壓しつけられたやうに響いた。夥しい群集——士官や、兵卒や、民兵や——が、悉く帽子を脫つて、その周圍に立つた。少し離れて、僧侶たちや次僧たちの

後に身分の高い人々が立つた。頸に聖ゲオルギイの勳章を下げてゐる一人の禿頭の將官が、僧侶の直ぐ後に立つて居た。それは確かにドイツ人であつた、といふのは、自分は十字を切らずに、辛抱して勤行の終りを待ちながら、さうして聞いて居ることが、恐らくロシアの百姓の愛國心を奮起する手段として、最良だと考へて立つてゐるらしいからだ。今一人の將官は軍隊式の姿勢をして立つてゐて、十字を切つて、四邊を見廻しながら、胸の前で腕を振つた。百姓たちの間に立つてゐたピエールは、その身分の高い人たちの群の中に、自分の知つてゐる數人を認めた。しかし、彼は其方を見なかつた、彼の全注意は、軍人といはず百姓といはず、總て一樣の熱心をもつて聖像を眺めた居る群集の顏の眞面目な表情に占められてゐた。疲れ切つた唱歌者たち（それはもう二十度目の勤行であつた）が、その定りの、『おゝ神の母よ、爾の僕等を災ひより救ひ給へ、』といふ歌を鈍い調子でうたひ始め、そして僧侶や次僧が『爾の許に、我等すべては我等の堅固なる城塞防壁として逃るべければなり、』と合唱すると、忽ちにして人々の面に、來るべき瞬間に對するあの嚴肅な感じの閃めきが表はれた、その閃きはピエールがモザイスクの丘の上で見たものであり、又今朝から會つた數多の人々の顏にチラリ〳〵と見たものであつた。そして人々の頭は低く下げられた、と同時に髮の毛は微風にそよぎ、兵卒達が十字を切つた時、溜息と胸を打つ音とが聞えた。

群集が急に分れてピエールの方へ押し寄せて來た。群集がその爲めに道を開いた樣子の慌しさから

察すると、誰か確かに非常に豪い人が、聖像に近づいて來たのに違ひなかつた。

それは陣地の巡視をしてゐるクツウゾフであつた。タタリノウオへ歸る途中で、この勤行に加はつたのである。ピエールは特徴のある姿から直ぐにそれと認めた、その姿で直ぐにそれと見別けられるのである。

長い軍服の上衣を着て、驚くほど肥つた身體と曲つた腰をして、白い頭に帽子をかぶらず、白い片目がその圓い顏の中で殊に眼に付くクツウゾフは、よろ〳〵と搖れるやうに歩きながら、群集の環の中へ這入つて來て、僧侶の後に立つた。彼は馴れた樣子で十字を切つて、身體を屈め、片手を地面に觸れて、そして、深い嘆息を吐きながら、白髮頭を下げた。クツウゾフはベニグゼンと幕僚とを從へてゐた。總司令官が來た事は、位の高い人々の注意を引きこそしたが、民兵や兵卒たちは彼の方は見向きもしないで、祈りをつゞけて居た。

勤行が終ると、クツウゾヴは聖像の傍に寄つて、大儀さうな風に膝を屈めて、地面に頭を下げた、そして暫らくの間かゝつて起き上らうと努めて居たが、身體が弱つて居るのと目方が重いのとで、急にさうは出來なかつた。白髮頭はその骨折りの爲めびく〳〵震へてゐた。遂に彼は起き上つて、無邪氣な、子供らしい風で唇をつき出しながら、聖像に接吻した、そして、片手を地面につけて、も一度頭を下げた。他の將官たちも彼の例に倣つた、それから士官たちそれに續いて兵卒や民兵たちまでが、

みんな興奮した顔つきをして、互ひに突き合つたり、呼吸を切らして前へ押したりしながら、走り寄つた。

二十二

自分をも一所に連れて行つて了ひさうな群集の押し合ひの爲めによろ〳〵しながら、ピエールはあたりを見廻した『伯爵！　ピョートル・キリーロヰッチ！どうしてあなたは此所へお出でになつたのです？』と誰かゞ聲をかけた。ピエールは振り返つた。

バリース・ドルベツコイが、手で膝を拂ひながら(多分聖像の前で恭々しく膝を屈めたので汚したのだらう)、にこ〳〵してピエールの傍へやつて來た。バリースは洒落た風をして居た、と云つてもその着付けは勿論戰場の勤務に適ふやうなものではあつた。彼は長い軍服の上衣を着て、そしてクツウゾフのして居たやうに、乘馬鞭を肩から吊して居た。

さうかうする中にクツウゾフは村に著いて、一番近くの家の蔭に、一人のコザツクが走つて持つて來て、そして別の一人が急いで毛氈を敷いて呉れた腰掛の上に腰を下ろした。數多の隨行員の立派な士官たちが彼を取り卷いた。

行列は群集に從はれながら、更らに進んで行つた。ピエールはクツウゾフから三十歩ばかり離れた所に靜に立つてバリースと話をした。

彼は、戰爭に加はつて陣地の樣子を視察したいといふ自分の希望をバリースに說明した。

『それでは斯うなすつたらいゝでせう、』と、バリースは言つた。『Je vous ferai les honneurs du camp（あなたを陣屋のお客樣に御招待しませう。）ベニグゼン伯爵の居られる所からだと何も彼も非常によく見られますよ。私はあの人に從いて居るんです。私があの人にそのことを話しませう。そして陣地をすつかり御覽なさり度いのでしたら、私たちと一緒にいらつしやいまし、私たちは丁度これから左翼へ行く所なんです。それで歸つてからは、今晩は私と一緒にお泊り下さい、骨牌の勝負でもいたしませう。あなたは勿論ドミトリイ・セルゲヰッチを御存じでしたな。あの男は彼處に泊つて居るんですよ。』彼はゴルキイの三番目の家を指さした。

『しかし私は右翼を見たいと思つてゐるんですが。右翼は非常に强いといふ話ですね、』と、ピエールは言つた。『モスクワ川の方から陣地全體を廻り度いと思つて居るんです。』

『では、それは後になすつたがいゝでせう、併し大切なのは左翼なんですよ。』

『成程、成程、そしてバルコンスキイ公爵の聯隊は何處ですか？　私に指示して下さる事が出來ますか？』と、ピエールは訊ねた。

『アンドレー・ニコラエヰツチなんですね？　今通りますよ。あの人の處へ御案内しませう。』

『左翼は何うなつて居るんです？』と、ピエールは尋ねた。

『實を云ふと、こゝだけの話ですがね、左翼はどうなつて居るか一向解らないんですよ。』と、バリースは、聲を低めて内所らしく言つた。『ベニグゼン伯爵が、今迄とは全然違つた説を持ち出したのです。あすこの、あの小高い所に砲壘を築かうと言ひ出したのです、今迄あすこには築いてなかつたものですからね……だが……』と、バリースは肩を怒らした『殿下がさうすることを望まれないんですよ、それとも誰かに説き付けられたのかも知れませんがね。それで……』その途端にクツウゾフの副官のカイザロフがピエールの傍へやつて來たので、バリースは話し切らなかつた。『やあ、パイジイ・セルゲヰツチ』、と、バリースは平氣な顔をして笑ひかけながら、その男に聲をかけた、『今ね、伯爵に陣地の説明をして居る所なんですよ。殿下が敵の計略を推察される確かさと云つたら、全く驚くべきものですね！』

『左翼のことですか？』と、カイザロフが言つた。

『さうです、さうです、正しくその通りです。我軍の左翼は今や極端に強いですからな。』

クツウゾフは幕僚の中の餘計な人間を淘汰して了つたけれども、バリースだけは、そのクツウゾフの行つた改革後にも、うまく本營で位置を保つて居た。バリースはベニグゼン伯爵に從いて居た。ベ

ニグゼン伯爵は、今迄バリースが仕へて居た如何なる人とも變りなく、若いドルベツコイを非常に價値のある人物と思つて居た。軍の主なる士官の中には明らかに區別された二派があつた、クツウゾフ派と、幕僚長ベニグゼン派とである。バリースはその後派に屬して居たが、彼の如くクツウゾフに對して卑屈な程の阿諛を呈してゐながら、一方には又そんな老耄者は何の役にも立たないので、一切の事は實はベニグゼンの發意に基くのだといふことを夫れとなく示して行くことに成功したものは一人としてなかつた。所で此度決戰の時が來た、それは取りもなほさずクツウゾフの沒落と司令權がベニグゼンに移るといふ事を意味するものであるが、よし又クツウゾフが戰ひに勝つたとしても、その功勞はうまくベニグゼンに爲てやられなければならないのである。どの道明日を過ぎれば、多くの昇進が行はれることは定つて居たし、又多くの新らしい顔觸れが先頭に出されることは確かであつた。それが爲めバリースはその日は終日神經的に喜ばしさうな狀態にあつた。

他のピエールの知人たちも其所へやつて來た、彼は自分の上に雨のやうに降りかゝるモスクワに關する質問に一々答へる暇もなければ、又彼等が彼に話しかけたことを一々聞いて居る暇もなかつた。總ての顔が興奮と激越との色を負びてゐた。しかしピエールには、さういふ顔の中の或るものに表はされて居る昂奮の原因は、自分等一箇の成功如何の問題にあるやうに思はれた、そして彼は他の顔で見た、自分等一箇の成功如何の問題ではなく、一般的な生死の問題を示して居た、あの別な昂奮の色を

忘れることが出來なかつた。

クツウゾフはピエールの姿と、その周圍に集まつて居る群とに氣が付いた。

『あの男をこゝへ呼べ。』と、クツウゾフは言つた。

一人の副官が殿下の意を通じたので、ピエールは腰掛の方へ行つた。所が一人の民兵が、ピエールの先を越してクツウゾフに近づいた。それはダラホフであつた。

『何うしてあの男がこゝに來て居るんです?』と、ピエールは尋ねた。

『あゝ、彼奴は全く狡猾な犬ですよ、彼奴は何處へでも顔を出す奴です!』これが彼が受けた答であつた。『彼奴は役を落されたんですよ。所が又飛び上らうとして居るんです。彼奴は何だか策を立てゝ夜敵の戰線内に間諜に這入るんです……兎に角勇氣のある奴ですがね……』

ピエールは帽子を脱いで、恭々しくクツウゾフにお辭儀をした。

『私はこの事を殿下に呈出しますに就いては、殿下は、私をお斥けになるか、或ひはその點にはとつくにお氣付きになつて居たと有仰るか、何にしても私には損にはならないと決心したのです、』と、ダラホフは話してゐた。

『成る程。』

『で若し私が正しいとしましたら、私は祖國の爲めに一働きすることになるのです、私は祖國の爲めには一命を捨てる覺悟でゐます。』

『成る程……成る程……』

『で若し殿下が、身命を惜まない男を御入用でしたら、どうぞ私のあることを御記憶下さい……恐らく私は殿下のお役に立つでございませう……』

『成る程……成る程……』と、クツウゾフは、笑ひを湛へた、半ば閉ぢた眼でもつて、ピエールを見ながら繰り返した。

その中に、バリースはその宮中官らしい技巧をもつて、ピエールと共に總司令官の傍へ近づいて行つた、そして最も自然な態度で、靜かな聲をして、丁度前からの會話をつゞけてゐるやうな調子で、ピエールに斯う言つた。

『百姓の民兵たちは唯奇麗な、白い襯衣を着たゞけで、死ぬ覺悟をしてゐるのですよ。何といふ勇敢でせう、伯爵!』

バリースは明らかにこの言葉を殿下に聞かせるつもりでピエールに話したのであつた。彼はクツウゾフの注意がかうした言葉によつて引かれるのを知つて居た、すると、殿下は果して彼に斯う言葉をかけた。

『民兵が何うしたと云ふのかね?』と、クツウゾフはバリースに言つた。

『彼等は白い襯衣を着ました、殿下、それは決死の覺悟で明日の用意をしたのです。』

『あゝ！……驚くべき、奇特な、人民だ、』と、クツウゾフは言つた、そして、眼を閉ぢて頭を振つた。『奇特な人民だ！』嘆息しながら繰り返した。

『あなたも烟硝の臭を嗅ぎたいのかね！』と、彼はピエールに言つた。『成る程ね、愉快な臭ですよ。私はあなたの奥さんの崇拜者の一人たる光榮を有してゐる、奥さんはお達者かね！　私の宿舍は何時でもお使ひなさい。』そしてクツウゾフは、よく老人連がするやうに、言ふべき事も、なすべき事もすつかり忘れて了つたといふ風で、ぼんやりと四邊を見廻し始めた。所が明らかに何かその探してゐた目的物を思ひ出したものらしく、かの副官の兄弟にあたるアンドレー・セルゲヰツチ・カイザロフを手招きした。

『どうだ、どうだつたな、マリインのあの詩は？　どうだつたな？　マリインがゲラコフに書いて遣つたのは、(君は軍團の教師とならん……)だつたかな、聞かして呉れ、聞かして呉れ、』と、クツウゾフは言つて、今にも笑ひ出さんばかりの顔つきをした。カイザロフはその詩句を繰り返した……クツウゾフは、微笑みながら、その詩の律に合はして頭を首背かせた。

ピエールがクツウゾフの傍を離れると、ダラホフが近づいて來て、彼の手をとつた。

『こゝでお目にかゝるとは實に嬉しいです、伯爵』と彼は、他の人の前をもかまはず、大きな聲で言つたが、ひどくはき／＼した嚴肅な話し振りであつた。『斯うして大勢の中で誰か生き殘ることになるか分らないといふやうな日の前日に、私は過去に私たちの中にわだかまつてゐた誤解を悲しんで居るといふことを、あなたにお話しする機會を得たのが嬉しいです、そして私は、あなたが私に對して何の惡感をも持つて居られないと思つて喜び度いのです。私は切にあなたの御寬恕を乞ひます。』

ピエールは何と言つていゝか分らないで、微笑をうかべながらダラホフを見た。眼に涙を浮べながらダラホフはピエールを抱いて接吻した。

バリースは自分の將軍に向つて二三言話をした、すると、ベニグゼン伯爵が、ピエールに言葉をかけて、戰線に行くのに一緒について來ないかと言つた。

『面白いもんですよ、』と、彼は言つた。

『さうでせうね、全く面白いでせう、』と、ピエールは言つた。

半時間後にはクツウゾフはタタリノウオへの歸途に着いて居た、そしてベニグゼンとその幕僚の人々は、ピエールを仲間に入れながら、陣地の視察をしてゐた。

二十三

ゴルキイから、ベニグゼンは街道を下りて橋の方へ出て行つた、その橋は、先に士官が小丘の上から指さして陣地の中央だと教へた所である、その川ぶちには香のよい、新らしく刈られた枯草が幾列も並んで居た。彼等は、ボロディノの村に通ずる橋を渡り、それから左へ曲つて、夥しい數の人々や大砲の傍を過ぎ、民兵等が地を堀る仕事に從事してゐた高い丘の上にと出た。これはその時は未だ名がついてゐなかつたが、後に至つて、ラエヴスキイ砲壘、或ひは丘上砲臺と呼ばれた砲臺であつた。

ピエールは、この砲壘には特別の注意を拂はなかつたのである。やがて彼等は溪を越えて、兵何處よりも記憶すべきものにならうとは夢にも思はなかつたのである。やがて彼等は溪を越えて、兵卒たちが小屋や納屋の材木を一つも殘さずに引き去つて居るセミョノヴスコエに行つた。それから又彼等は馬を進めて丘を上り、又丘を上つて、ライ麥の野を過ぎた、ライ麥の野はまるで霰にでも遭つたやうに踏み躙られ、打ち仆されて居た、それから新らしく砲兵に依つてつけられた道に沿ひ、耕地の畝を越えて、土壘に出た、そこでは未だ人々が働いてゐた。

ベニグゼンはその土壘の所で止つて、昨日までは未だ我がものであつた前面のシェヴアルデイノの砲壘を見渡した。數人の騎馬の人々がその上に見別けられた。士官たちはナポーレオンやミュラーがあそこに居ると言つた。そして總ての人々は熱心にヂッとその少數の騎馬の人たちの群に眼を止めた。ピエールも亦其方をぢつと見て、その殆んど見別け難い人々の姿の中で、どれがナポーレオンである

かを推測しようとした。たうとう騎馬の人々の一群は丘を下つて、見えなくなつて了つた。

ベニグゼンは自分の傍に馬を進めて來た一人の將官に向つて、我軍の全陣地に就いて說明を始めた。ピエールはその言葉に耳を聳てゝ一心に氣を引き詰めて來るべき戰爭に關する重要なる諸點を摑まうとしたが、殘念ながら自分の能力が何うしても然うすることに適しないことに氣がついた。ベニグゼンは話し終つて、ピエールの耳を聳てゝ居る顏に氣がつくと、急に其方を返振りつて、斯う言つた。

『こんなことは、あなたには大して面白くないでせうな。』

『いや、どう致しまして、非常に面白いです。』と、ピエールは繰り返したが、全くの心からではなかつた。

土壘の所から彼等は、こんもりとした、樺の木の森を拔けて居る道の左の方へと、更らに曲つて行つた。森のまん中で、白い足をした蒼色の兎が、彼等の行手の道に飛び出して來たが、多くの馬の足音に吃驚して了つたので、恐怖の餘り稍々暫らくの間、みんなの笑ひを引き起しながら、彼等の行く道の方へと一散に跳ねて行つた、そして幾人もの聲に怒鳴られたので、やつと道を反れて繁みの中に隱れて了つた。森の中を二ウエルスト程行くと、彼等はとある空地に出た、そこには左翼を守る運命を擔つてゐるツチコフ軍團の兵が居た。

この左翼の末端に來ると、ベニグゼンはひどく熱心に色んなことを喋つた、そして軍事上の見地か

らすると非常に重要なものであるやうにビエールに思はれた色々の命令を與へた。ツチコフの兵が配置されてゐる地點の丁度前方に、一つの丘が立つて居たが、そこは軍隊に占められてゐなかつた。

ベニグゼンは、その周圍の地域を見渡せるやうな高地を占領せずに放つておいて、その足下に軍を置くなどといふことは狂氣の沙汰だと云つて、この手拔りを大聲揚げて批評した。數人の將官たちも同じ意見を吐いた。殊にその中の一人などは、武人的な熱情をもつて、こんな所に居ればきつと全滅に落ちるばかりだと揚言した。ベニグゼンは、己れ一箇の責任を背負つて、軍を街道に進めるように命じた。

この左翼に於ける陣地の變換は、ビエールをして益々軍事を理解する自分の能力に疑ひを抱かせた。ベニグゼン及びその他の將官たちが、丘の麓に於ける軍の陣地を批難するのを聞いた時、ビエールには、その丘の麓に兵を配置した人十分に彼等の意見を摑み得て同感した。併し夫れがためビエールには、その丘の麓に兵を配置した人が何うして其樣なひどい、明らかな過失をしたのかといふことが、合點が行かなかつた。

その兵はベニグゼンの想像したやうに陣地を守る爲めに其所に置かれて居たのではなくて、敵の不意を襲撃する爲めに目につかぬやうな、さういふ叢の中に隱れた場所に止めてあつたのだといふことを、ビエールは知らなかつた。この計畫に氣がつかないベニグゼンは、この變換を總司令官に何の相談もしないで、高見の位置にと兵を動かしたのであつた。

二十四

アンドレー公爵は、その晴れやかな八月の夕方を、自分の聯隊の陣地の最端に當る、クニヤズコウオ村の荒れ果てた納屋の中で、肘枕をしながら横になつて居た。破れた壁の破れ目越しに、彼は生垣の中の二十年程もたつ、枝を落した樺の木の列なりや、燕麥の束の散らかつて居る野面や、兵卒等が食物のこしらへをして居る陣營の煙の見える木立の繁みなどを眺めて居た。

自分の生活はやくざな、取るに足らない、重荷であるやうに、今のアンドレー公爵には思はれたので、彼はこの戰爭の前夜に當つて、丁度七年前にアウステルリツツの戰爭の前に感じたのと同じやうな、神經的ないら〳〵した興奮を感じた。

彼は翌日の戰爭に關する總ての命令を受けたり、與へたりした。最早やなす事は何もなかつた。しかし色々の思ひが——最も單純な、最も分り切つた、從つて最も恐るべき思ひが——彼を安らかにさせなかつた。彼はその翌日の戰爭が、今迄自分の加はつた中で最も恐るべきものであることを知つてゐた、そして死が、始めて（彼の現實の生活樣式とか、或ひはそれが他に及ぼす影響とかに關係してではなく、）單に直接彼自身に、彼の靈魂に關係して現はれて來て、それが明瞭に、恐ろしく、一箇の

具體的な現實のやうに思はせる程あり〳〵と彼の前に立ち上つたのである。そして、この幻想の高さから見下ろせば、曾て彼の心を占めた一切のものは、蔭も遠近も輪廓もない、一條の冷たい白い光りに、不意に照らし出されたやうに思はれた。自分の全生涯は幻燈のやうなもので、それをば自分は鏡面越しに人工的な光線に依つて窺いて居たに過ぎなかつたやうな氣がした。所が今彼は不意に、鏡面なしに、而も眞晝の明らかな光の中で、それ等の拙劣な、塗りたくつた畫を見たのである。『さうだ、さうだ、あれが夫れなんだあれが自分の心に苦しみや喜びを吹き起した僞りの影象なのだ、』彼は想像の中に自分の生涯の幻燈の主なる畫を思ひ浮べて、それを今冷たい、白い眞晝の光の中に、死といふ明瞭な考へ方で眺めながら、かう考へた。『これが夫れなんだ、この粗雜に描かれた形が何か美しい神秘なものに見えてゐたのだ。名譽、社會の幸福、女に對する愛、祖國——そんなものが自分には何と云ふ立派な畫のやうに思へて來たことだ、何といふ深い意味に充たされて居るやうに思へて來たことだ！　しかも其樣なものは悉く、今この俺に明け放れて來るやうに感ずる眞晝の冷たい光の中に出せば、まるで單純な、色彩のない、粗雜なものに過ぎないのだ。』彼は生涯の三つの主なる悲みが特に彼の注意を引いた。一人の女に對する戀と、父の死と、そして既にロシヤの半ばを占領して了つたフランス人の侵畧。『戀！……俺にとつては神秘な力に溢れて居るやうに思つた、あの小さな娘。どんなに俺はあの娘を愛したことか！　俺はあの娘との浪曼的な戀と、幸福の計畫とを立てたものだつ

た！　あゝ若き日の單純な心よ！』と彼は聲高く、苦しげに言つた。『何といふことだ、俺は或る理想の戀といふやうなものを信じて、俺の全一年の留守の間、あの女が俺に貞操を立てゝ居てくれるものと思ひ込んで居たのだ！　丁度物語の中の信實な鳩のやうに、あの女が自分の居ない間は焦れて居るやうに思つて居たのだ！　そんなことが、みんな寶に單純極まつたものだつた……みんな恐ろしく單純な厭ふべきことだつたのだ！』『父も亦父で、ルイシーヤ・ゴオルイを整理して、それを自分の場所、自分の土地、自分の空氣、自分の百姓たちと思ひ込んでゐた。所が、ナポーレオンがやつて來て、父が居ると云ふことなどは知りさへしないで、まるで木片のやうに彼奴の通る道から掃き飛ばして了つた、そして父のルイシーヤ、ゴオルイは塵の中に捨てられ、それと共に父の全生涯は無に歸して了つたのだ。公爵令孃マリヤはそのことを天から下された試みだと言つて居る。父はこの世に居ないもう永久に歸つて來ないものであつて見れば、何のための試みなのだ？　父はもう二度と再び歸つては來ないだらう！　父は居ないのだ！　そんなら誰に對する試みなのだ？　祖國、モスクワの破滅！　明日は俺は殺されるだらう、しかも恐らくフランス人の手にかゝらないで、味方の、丁度昨日俺の耳の直ぐ傍で鐵砲を射つたあの兵卒のやうな男に殺されるのだ、そしてフランス人がやつて來て、俺の頭と踵とを持ち上げて、彼奴等の直ぐ鼻の下で腐つて臭はないように、穴の中に擲り込んで了ふだらう、そこで又新らしい狀態の生活が起るのだ、だが俺はそんな狀態を少しも知らない、つまり俺と云

ふものは結局居なくなつてしまふのだ。』

彼は、靜まりかへつた綠と黃との、そして白い皮の日光に輝いて居る樺の木の列なりを眺め入つた。

『そこで、死ぬのだ、明日殺されて了はう、もうこの世に居ない方がいゝ……一切のものはそのまま進ませろ、そして俺にはもう結末をつけて呉れ。』彼は、ありくとその人生から自分が居なくなつた樣子を描いて見た。すると明暗のあるそれ等の樺の木々も、卷雲も、火の煙も、四邊の總ゆるものが、急に何か氣味の惡い、物凄いものに變つてしまつたやうに思はれた。身震ひが背中を走り下つた。慌しく立ち上つて、彼は納屋を出て、あたりを步き始めた。

彼は納屋の後手に人聲を聞いた。

『誰だ、そこに居るのは?』と、アンドレー公爵は呼んだ。

赤鼻大尉のチモーヒンといふ、曾てはダラホフ中隊の指揮官をして居たのが、今は士官の缺乏のために大隊長に昇進した男が、恐る恐る納屋の中に這入つて來た。彼につゞいて一人の副官と、それから聯隊の主計が這入つて來た。

アンドレー公爵は急いで起き上つて、その士官たちが彼の所へやつて來た用向の事柄を聞き、二三の指圖をした、そして士官たちを歸さうとする途端に、ふと納屋の後方に聞き馴れた、舌縺れのする聲を聞いた。

『Que diable!(コン畜生)』と何かに躓づいた樣子で、誰かの聲がした。

アンドレー公爵は、納屋の中から窺いて見ると、ピエールが、今しも地上に轉がつて居た一本の棒に躓いて、危く倒れさうになつて居るのが眼に這入つた。アンドレー公爵は平常から自分の仲間の人に會ふのを好まなかつた、殊にピエールには、自分が最後にモスクワに滯在して居た頃の苦しい時のことを思ひ出させるので、一層會ひ度くなかつたのだ。

『やあ!』と、彼は叫んだ。『何うしてこんな所へやつて來たのだね? 君に遭はうとは思ひがけなかつた。』

かう言ふ中にも、彼の眼や顏中には、冷淡と云ふ以上に、全く一種の敵意が含まれてゐた、ピエールは早速それに氣がついた。ピエールは非常な熱心をもつてこの納屋に近づいて來たのであつたが、アンドレー公爵の顏を見ると、壓しつけられるやうな不安な氣持がして來た。

『僕が來たのは……ねえ……たゞやつて來たんだ……面白いですね、』と、ピエールは言つた、彼はその日幾度となしに、何の意味もなくその『面白い』といふ言葉を繰り返へしてゐた。『戰爭を見たいと思つたんです!』

『成程、成程、だが、君の共濟會の連中は戰爭について何と言つてるね? あの連中はどういふ風にして戰爭を避けるつもりだらう?』アンドレー公爵は皮肉に言つた。『まア、モスクワの事でも話

してくれ給へ。そして僕の家の者たちは？　たうとうモスクワへ着いたか知ら？』と、眞面目に尋ねた。

『えゝ。ジユリイ・ドルベツコイがさう僕に言つてました。僕もお訪ねしたが、お目にかゝれなかつた。皆さんはモスクワの領地の方へ立たれて了つた後だつたのです。』

二十五

士官たちは歸らうとしたが、アンドレー公爵は、明らかにその友達と二人つきりで差し向ひになるのを好まないらしく、みんなに此所にゐて茶を飲むようにと勸めた。腰掛が置かれて茶が運ばれた。吃驚して士官たちは、ピエールの大きなぶく〳〵と肥つた身體を見つめて、モスクワの話や、それから彼が見まはつて來た味方の陣地の話などを聞いて居た。アンドレー公爵は、物を言はなかつた、その顏が餘り無愛想なので、ピエールは寧ろバルコンスキイよりは單純なチモーヒンの方に多く話しかけた程であつた。

『ぢやあ君は軍の全陣形が解つたのだね？』と、アンドレー公爵は言葉を挾んだ。

『さうです。多少はね、だが、あなたの言ふのはどう云ふ意味なんです？』と、ピエールは言つた。『僕は軍人ぢやないから、十分とは云へません、しかし全體の配置は分りました。』

『成程、ぢや、君は大低の他の者よりはよく知つて居るわけだな、』と、アンドレー公爵は言つた。

『おゝ！』と、ピエールは眼鏡越しにアンドレー公爵を見ながら、疑はしさうに言つた。『そこで、あなたはクツウゾフの任命に就いては何う思ひます？』と、訊いた。

『僕は彼の任命を非常に喜んでゐるよ、たゞ夫れだけだ』と、アンドレー公爵は言つた。

『それでは、バアクレイ・ド・トオリイに就いての意見を聞かせて下さい。モスクワでは彼の事をいろいろ取沙汰してゐます。あなたはどう思ひます？』

『この人たちに聞いて見給へ、』アンドレー公爵は士官たちを指さしながら、斯う言つた。

誰でもチモーヒンに話しかける時には定つてさうするのであるが、へり下つたやうな、疑はしさうな微笑をたゝえて、ピエールはチモーヒンを見た。

『殿下が任にお就きになられたのは、閣下、まるで暗中に一道の光明が射したやうなものでありますす、』と、チモーヒンは、始終聯隊長の方をおづ〳〵した眼つきで盜み見しながら言つた。

『それは何ういふわけです？』と、ピエールは訊いた。

『それでは、先づ焚木と食物とに就いて申します。實際、我々がスウエンチヤンから退却して來る途中、小枝一本、藁一束も、その他何一つ手に觸れませんでした。我々は退却して行くのです、ね、で

すから結局彼奴の手に這入つて了ふのです、さうぢや御座いますまいか、閣下?』と、彼は自分の公爵の方へ振り向きながら言つた、『併し我々は手を觸れてはならなかつたのです。我々の聯隊では二人の將校がそんな事をした爲めに軍法會議に廻されました。所が、殿下が指揮なさるやうになつてからと云ふものは、さういふ事に就いては全くさつくばらんになつたのです。我々は日光を見たやうな氣がするので……』

『ぢや何うしてそれを禁じたのです?』

チモーヒンは、斯ういふ問ひには何う答へたら宜いものかと狼狽ついて、度を失つた樣子で、四邊を見廻した。ピエールはアンドレー公爵の方を向いて、同じ質問をした。

『なあに、さうして我々が敵の手に殘して行く土地を荒らさないやうにして置くと云ふのだよ、』と、アンドレー公爵は腹立たしさうに皮肉な調子で言つた。『みだりに掠奪させないやうに、兵隊に物を奪ふことに馴れさせないやうにと云ふのが、第一の主義なんだ。で、スモオレンスクでも彼は、次の樣な實に理屈に合つたことを考へ出したよ、といふのはフランス軍の方が我軍より強いから、彼方が勝つに定つて居るといふんだ。所が彼には斯ういふことが解らなかつたのだ、』とアンドレー公爵は急に甲走つた聲で叫んだ、『我々は初めてロシアの土地で戰つて居るのだと云ふ事や、人々の心に今迄決して見たことのなかつたやうな一つの精神が働いて居ると云ふことや、我々が二度つゞけてフランス軍を擊

退したと云ふことや、その成功が我々の力を十層倍にしたといふことや、かうした事が彼には解らなかつたのだ。彼は退却を命じたものだ、そこで我々の努力も敵慨心も總てが無駄になつたのさ。彼は謀反をしようなどといふ氣は毛頭持つて居なかつた。何事をも最善を盡して行はうとし、何事をも考へた上にも考へてやつてゐた。併し夫れがために却つてよくなかつたのだ。ドイツ人と云ふものが一體みんなさうだが、何事をも大事をとつて健全に正確にと考へ過ぎた揚句失敗してしまつたんだよ。何と云つて說明したらいゝかな……さうだ、假令へば君のお父さんが一人ドイツの人の侍僕を使つて居られたとし給へ、そしてその男が非常によい侍僕で、君がするよりは何事につけてもズツとよくお父さんの御用を辨ずる、で總ての點で都合もよく間にも合ふとするのだよ、所が一旦君のお父さんが頻死の病氣に罹られたとするね、その時は君はその侍僕を退けて、君自身で、君の不手際な、不馴れな手でお父さんを介抱するやうになるだらう、而もその方が熟練した外國人よりはお父さんに取つて餘程心丈夫なのだ。つまりこれが、我々がバアクレイに對するのと一般だ。ロシヤが太平の場合には、それは外國人を使つて居てもいゝし、又彼などは立派な大臣だつたのさ、が一旦緩急ある場合には、自分の骨肉の者が必要となつて來るのだよ。ぢや君の倶樂部では彼を謀反人だとして居るんだな!

今は謀反人として罵つて居るだらうが、やがては、その間違つた非難が恥しくなつて、急に又彼を英雄だとか、天才だとかと祭り上げるだらう、そんな風にして更らに一層彼に對して判斷を誤つてしま

ふのだ。彼は一箇の正直な緻密なドイツ人さ……』

『しかし又、みんなは彼を豪い将軍だとは言つて居ます、』と、ピエールは言つた。

『豪い将軍といふのが何ういふ意味か僕には解らないな。』と、アンドレー公爵は皮肉に言つた。

『豪い将軍さ、』とピエールが言つた、『さうですね、總ての起りさうな事を先見する人さ……さうだ、敵の計略を洞察する人さ。』

『だが、そんな事が出來るものか、』とアンドレー公爵は、恰かもズツと前から定つて居ることのやうに、斯う言つた。

ピエールは黙いて彼の方を見た。

『だがねえ、』と、言つた、『戰爭は將棊のやうなものだと云ふぢやあないか。』

『それはさうだよ、』と、アンドレー公爵は言つた、『たゞ小さな違ひは、將棊だと動き方に一々好きな程考へて居られて、時の制限がない、それから、もつと大きく違ふことは騎(將棊の駒の名)はいつでも歩(前と同じ)よりも強いに定つて居るし、歩二つはいつでも歩一つより強いに定つて居るが、戰爭となると、一大隊が時に一師團より強いことがあるし、かと思ふと一中隊よりも弱いことがある。誰だつて軍隊の相對的の強さを確かめることは出來ないよ、實際、』かう言つて、『色々の事が總司令部で造る計略の如何に依るものなら、僕は早速そこへ行つて、その仕事に加はるよ、所がさうはしない

で喜んで此所に聯隊に止まつて、この人たちと共に勤務してゐるのは、明日の勝敗が事實我々の如何に依るので、司令部の如何には一向關係がないと思つて居るからだ……勝利は、陣地や武器や、或は人數にだつて依つたことはないのだ、之れからだつて決してそんなものに依る事はないよ、殊に、陣地なんかにだ。』

『それでは何に依るのだね?』

『僕やこの人や、』と、言つて彼はチモーヒンを指さした、『それから各兵卒の中にある精神に依るのだ。』

アンドレー公爵は、ちらとチモーヒンに眼を呉れた、とチモーヒンは吃驚して面喰つたやうに聯隊長を見守つてゐた。いつもの扣え目な寡言とは打つて變つて、アンドレー公爵は今はひどく興奮してゐる樣子であつた。明らかに彼は突然自分の心に起つて來た考へを現はさないでは居られなかつたのである。『戰爭は確かり勝たうと決した方が勝だよ。何故我々はアウステルリツツの戰ひに負けたか? 我軍の損害もフランス軍の損害も殆んど同じだつたのだ、所が我々は、その日は始めから戰爭に負けると負けると獨言を言つて居た、だから負けたんだ。それと云ふのも、我々は、あの時は別に何の爲めに戰ふのか解らなかつたので、出來るだけ早く戰爭を止めたいとばかり思つて居たからだ。』負けた、さあ逃げろ!』といつた風で逃げたんだ。若し我々が切めて夕方まであんなことを言はなかつたとす

れば、あゝはならなかつたかも知れない。が、明日は決してそんなことを言つてはならない。君は、我が陣地は左翼が弱くて、右翼が廣がり過ぎてると言ふが、』と、彼は話しつゞけた、『そんなことは下らぬ事だ、何でもないことだよ。だが、如何なるものが明日我々を待つて居るだらう？　何千何百萬といふ無數の不慮の出來事が起つて、それが一瞬間のうちに敵が逃げるか、味方が逃げるか、或ひは又あの男が殺されるか、他の男が殺されるかと云ふ事を決定するのだ、しかし今やつて居ることなどは悉く兒戲に過ぎない。實際君が一緒に陣地を見て廻つた連中は、事の進行には何の役にも立たないよ、返つて非常な邪魔になるばかりだ。彼等は、全く自分たちの下らない利害に汲々としてゐるからね。』

『こん危急の場合にか？』と、ピエールは苦々しさうに言つた。

『こんな危急な場合にさ』、と、アンドレー公爵は繰り返した。『彼等に取つては、之れは唯單にその競爭者を排斥して一つでも多く勳章や綬章を取らうといふ機會に過ぎないのだ。僕が思ふのに明日起るべきことは斯うだ。十萬のロシヤ軍と十萬のフランス軍とが合戰するから、つまり合計二十萬の人々が戰ふ譯になるのだが、要するに最も勇敢に、少しも命を惜まずに戰つた方が勝利を占めるのだ。で、何なら君に話さうか、兎に角どんな事が起らうとも、どんな混雜があらうとも明日の戰ひには我軍が勝つよ、どんな事が起らうとも、我軍は屹度勝利を得るよ。』

『閣下、それは全く眞實であります、神聖なる眞實であります、』と、チモーヒンが口を挾んだ、『誰が今となつて身命を惜みませう！　私の大隊の兵は、どうです、ヴオドカも飲みませんよ、彼等は言ひます、今回は普通の日とは譯が違ふと。』

一同沈默した。

士官たちは立ち上つた。アンドレー公爵は、みんなと一所に納屋の外に出て、副官に最後の命令を與へた。士官たちが行つて了ふと、ピエールはアンドレー公爵の傍に寄つて、何か話しかけようとした途端に、ふと程遠からぬ路の邊に馬の足音がした、で、其方を眺めると、アンドレー公爵は、ウオルツオゲンとクラウゼキツツとが、一人のコザツクを連れて通るのを認めた。彼等は二人の直ぐ傍を、話をつゞけながら馬を進めて行つた、そこでピエールとアンドレー公爵とはドイツ語で次のやうなことを云ふのを、自然と傍聽しないわけに行かなかつた。

『Der krieg muss im Raum verlegt werden. Der ausicht kann ich geung preis geben,（戰爭は田舍の廣々した所でやらなければ駄目だよ。僕は十分にこの意見を說明することは出來ないがね）』と、一人が斯うドイツ語で言つた。

『O ja,（全くその通りだよ）』と今一人の聲が言つた。『Der Zweck ist nur den eind zu schwächen, so kann mann gewiss nicht den verlurt der privat-personen in Achtung nehmen.（目的

が敵を打ちくじくにあるのだから、一私人の損失など斟酌してはいけない。)』

『O'ai!(全くその通りだ!)』と、初めの聲が賛成した。

『さうだ、「田舎の廣々とした所で、」だ』と、アンドレー公爵は彼等が過ぎ去つて了ふと、腹立たしさうに鼻息をして、斯う繰り返した。『その廣い田舎のルイシーヤ・ゴオルイに、僕は父と子供と妹を持つて居たのだ。彼奴(あいつ)はそんなことなどには何の容赦もしないのだ。これは丁度僕がさつき君に言つてゐた事なんだよ、所であの立派なドイツ人共は明日の戰爭に勝ちはしないよ、出來るだけ唯混亂させる位のものなんだ、何故と云へば、彼等はそのドイツ人流の頭の中に、腐つた卵程の價値もないやうな計算といふもの〻外何一つ持つて居ないからね、そして明日最も必要な唯一つのもの、卽ちチモーヒンが持つてゐるやうなものを、彼等はその中に持つて居ないからね。彼等は全歐洲を彼奴に與へて了つて今度は我々を教へにやつて來たのだ——結構な教師共さ!』再びその聲を甲高くしながら、彼はかう言つた。

『それで、あなたは明日の戰爭を勝利だと思ふんですね、』と、ピエールが言つた。

『さうだ、さうだ、』と、アンドレー公爵はぼんやりして答へた。『若し僕が權力のある地位に居るとすると、是非やり度いことが唯一つあるんだ、』と彼は又も口を開いた。『卽ち僕は捕虜を決してこしらへない。捕虜をこしらへるのに一體どういふ意味があるのだ? それは武士道といふものかも知れない。

しかしフランスの奴は僕の家を破壞し、又モスクワをも破壞しようとかゝつて居る、彼奴等は僕を虐待した、今でも一刻々々僕を虐待して行く。彼奴等は僕の敵だ、僕の考へ方から云ふと彼奴等は凡て罪人だ。チモーヒンもさう思つてゐる、チモーヒンの軍隊もさう思つて居る。彼奴等は殺して了はなければならない。彼奴等は僕の敵だ、だから彼奴等がチルシツトでどんなことを云はうとも、僕の友達にはなれないよ。』

『さうだ、さうだ』と、ピエールは輝く眼でアンドレー公爵を眺めながら言つた。『僕も全く同感です!』

モザイスクの丘以來、終日中(いちにちぢう)ピエールを惱ましてゐた問題が、今は全く明白に、充分に氷解されて、彼を感動させた。彼はこの度の戰役と、さし迫つて居る戰鬪との總ての意味や重要さを、今や知つたのである。彼がその日見た總てのもの、彼が瞥見した總ての眞面目な、しかつめらしい顏が、今や新らしい光に照らされて現はれて來た。物理學の言葉を借りていへば、彼は自分の會つた總て夫れ等の人々の中に愛國心の潛熱を見た、そして、その人々が皆死する覺悟をして居ながら落ち着いて居て、表面無關心でゐると云ふ事の說明をその潛熱に見出したのである。『我々は捕虜をこしらへては不可ない、』と、アンドレー公爵が云つた。『それは戰爭の全局面を變へて、それの殘酷さを少なくするだらう。だが戰爭を玩ぶといふことは、それは實に惡德だよ。寬大とか、總てさういつたやうなものを弄

ぶのは悪徳だよ。さういふ寛大とか、感じ易さとかは、丁度犢の殺されるのを見て病氣になる女の、寛大とか感じ易さとかと同じ事だよ。女はそれ程やさしい心で、血を見るのも堪らながつてゐながら——而もその肉の油煎煮などゝ來ると、大喜びで食べるんだからね。彼等は戰爭の法規だとか、武士道だとか、休戰旗だとか、負傷者に對する人道だとか、さういふ類のことをよく云々する。そんなことは皆やくざなことだ。僕は千八百五年にうんざりする程武士道や、休戰旗を見たよ、それで敵は我我を欺き、我々も亦敵を欺いたんだ。彼等は他人の家を掠奪し、贋造貨幣を流布し、それのみならず、言語同斷なのは、僕の子供を殺し、僕の父を殺し、それで平氣な顏をして戰爭の法規だとか、扑れた敵に對して慈悲をかけるとか言つて居るんだ。捕虜などこしらへてはいけない、たゞ殺しに行け、殺されに行け、同じ苦痛を經て、僕が考へたと同樣に斯ういふ風に考へるやうになつたものは、誰でも……』

嘗て敵がスモオレンスクを取つたやうに、モスクワを取らうが介意はないと考へてゐたアンドレー公爵は、咽喉が神經的に塞えて來て、話半ばに突然口を噤んで了つた。彼は默つたなりで幾度も彼方此方と歩いてゐたが、やがて再び話し始めた時には、眼は熱情的に輝き、唇は震へてゐた。

『戰爭に、この寛大を弄ぶやうなことがなかつたら、我々は、今日のやうに、必然の死に面するに値する或る何物かに對する時の外には、決して戰爭などには出ないに違ひないのだ。パウエル・イワニツチが、ミハイル・イワニツチを侮辱したくらゐのことでは、決して戰爭など起らないに違ひない。併し今のやうに戰爭のある場合には、思ひ切り戰爭らしい戰爭をするがいゝのだ。さうなると戰爭の激しさも全く違つたものになるだらう。そしてナポーレオンが今我等を攻める爲めに連れて來て居るウエストフアリア人やヘツス人などは、總てこのロシヤまで我々と戰爭しには來なかつたに違ひない、又我々も何の爲めだとも知らないでアウストリヤやプルシアまで戰爭に出かけて行かなかつたに違ひない。戰爭といふものは決して上品な遊びごとではなくて、實に人生に於ける最も浅ましい事件なのだ。だから我々はそのことを理解して、決して戰爭を弄ぶといふやうなことがあつてはならない。我々は夫れを恐ろしくも止むを得ないこととして眞面目に且つ嚴肅に取り扱はなければならない。つまり今まで言つたことを約めると斯うだ、嘘僞はよせそして若し戰爭のある場合には、その時は戰爭だ、遊戲ではないのだ、さうでないと戰爭が單に、怠け者や粗忽者の好きな遊びごとになつて了ふだらう……軍人といふ者は、あらゆるものの中で最も名譽ある稱號なのだらう。所で戰爭とは何か、戰爭に成功する爲めには何が必要か、軍人社會の道義とは何か？　戰爭の目的は殺人だ。又戰爭に用ひる手段は——間牒だ、譎詐だ、それからその奬勵だ、一國の擾亂だ、軍隊を維持する爲めに住民を掠奪し、その他色々の盜掠をすることだ、それから軍略といふ名の下に欺策を廻らし、嘘言を吐くことだ。軍人社會の道義といふのは——總ての獨立心を失ふことだ、卽ち、主義とか、怠惰とか、無智とか、

慘忍とか、放埒とか、飲酒とかいふことだ。所が、それにも拘らず、最高の階段だと言つて、總ての人々から尊敬せられて居る。總ての國王は、支那を除いては、軍服を着て居る、そして最も多く人を殺すことに成功したものに最も大きな褒美を與へて居る……丁度我々が明日やるやうに、彼等は互ひに殺し合ふために會戰する、彼等は十數萬の人を屠り、殺して、そして、その自分たちが殺した人間の數に應じて感謝の祈を神に捧げるのだ(それ所か話す時にはその數を掛値して話す)、そして數多く人を殺せば殺す程成功の度が大きいと考へて、勝利を祝ふのだ。どんな風に神樣は上からそれを見下ろして、彼等の言ふ事をお聞きになるだらう!』アンドレー公爵は鋭い、甲走つた聲で叫んだ。『あゝ、君、人生は僕にとつて近頃隨分辛いものだつたよ。それと云ふのも僕は餘り多く知り過ぎたからなんだ。善惡の知識の木を味ふといふことは、人間にとつてはよくないことだよ……いや、それももう餘り長いことぢやない!』と、彼は言ひ足した。『だが君はもう眠くなつたらう、僕ももう床へ這入る時なんだ。ゴルキイへ歸り給へ、』と、アンドレー公爵は不意にかう言つた。

『いや、いや!』と、アンドレー公爵を吃驚したやうな同情に充ちた眼付で眺めながら、ピエールは答へた。

『歸らなくちや不可ないよ、戰爭の前には是非ぐつすりと眠込んでおくものだ、』と、アンドレー公爵は繰り返した、彼はツとピエールの傍へ寄つて、彼を抱擁し、接吻した。『さようなら、ぢや行き給へ、』

と叫んだ、『又會へるか會へないか解らんが、』そして急いで振り向いて、納屋の中に這入つて行つてしまつた。

すでに暗くなつてゐた、ピエールはアンドレー公爵の顏が怒つて居るのか、又親しみをもつてゐるのか判斷がつかなかつた。

ピエールは、アンドレー公爵の後に從いて行つたものか、それともゴルキイへ歸つて行つたものかと躊躇しながら、暫くの間默つて立つてゐた。『いや、彼は俺を欲しないのだ!』ピエールは決心した、『これが我々の最後の會見となる事を俺は知つてゐる!』彼は深い嘆息を吐いて、馬を走らせてゴルキイに歸つて行つた。

アンドレー公爵は納屋の中の粗毛氈の上に横になつたが、眠られなかつた。

彼は眼をつぶつた。樣々の映像が次から次と心の中に浮んで來た。一つの心の畵の上に、彼は長い間快よく止つてゐた。まざ〳〵とペテルブルグの或る晩のことを思ひ出したのである。ナターシャが熱心な、興奮した顏つきをして、その前年の夏に菌を取りに行つて、大きな森林の中で途を失つた時のことを彼に話して居たのであつた。彼女は斷片的に森の奥の暗い所や、その時の自分の思ひや、それから途で會つた養蜂者との會話などをして聞かせた、そしてよく話を中途で切つては、斯う言ひ言ひした、『駄目だわ、よく出來ないの、うまく話せないんですもの。ねえ、お解りにならないでせう。』

尤もアンドレー公爵は、自分にはよく解つて居ると言つて、ナタシヤーに安心させようと試したし、又實際彼女が云はうとして居ることは解つて居たのではあつたけれど、ナターシヤは自分の言葉に不滿であつた彼女はその日經驗した、そして今話さうとして居る、情熱的な、詩的な感想を自分の言葉が傳へ得ないのを感じて、それを言ひ表さうと努めた。『それはそれは何も彼もが素敵だつたのよ、そのお爺さんもね、それから森の中は本當に暗かつたの……所が、そのお爺さんの親切さうな樣子つたら……駄目だわ、うまく話せないんですもの、』と、彼女は言つて、赤くなつて、もぢ〳〵してゐた。

アンドレー公爵は今、彼女の眼を見つめながら、その時浮べたのと、全く同じ幸福な微笑を浮べた。『俺はあの女を理解した、』と、アンドレー公爵は思つた、『いや、理解して居た以上だつた。あの精神的な力を、あの誠實を、あの公明な心を、あの女の肉體と不離の關係のあるやうに見える、あの女の靈魂そのものを、さうだ、あの女の中で俺が愛して居たのは、その靈魂そのものなのだ……あれ程激しく、あれ程熱烈に愛してゐたのは……』そして急に彼は、その戀の終りを思ひ出した。『彼奴はそんなものには少しも介意はなかつたのだ。彼奴はそんなことは少しも分らなかつたのだそんなことには少しも氣が付かなかつたのだ。彼奴は、たゞあの女の中に美しい肉感的な若い娘を見たゞけなのだ、しかも又それと共に彼奴は、自分の生涯をいつ迄も結び付けて行かうともしなかつたのだ。所が俺は

どうだ?……所が彼奴は今も尙ほ息災で幸福に生きてる。』アンドレー公爵は突然まるで火傷でもしたやうに飛び起きて、そして再び納屋の前を彼方此方と歩き始めた。

二十六

八月二十五日、卽ちボロヂイノの戰の前夜に、フランス宮廷長官ムシユ・ド・ボオツセーと、フアブヴイエー大佐とが、前者はパリから、後者はマドリツドから、ヴルユーエフのナポーレオンの陣營に到着した。

宮廷の制服に著更へてから、ムシユ・ド・ボオツセーは皇帝のために持つて來た荷物を、自分の前に持つて來るやうに命じて、ナポーレオンの天幕の第一の部屋に這入つて行き、そこで副官と話をしながら、忙しさうに箱の紐を解き出した。

フアブヴイエーは天幕の入口で、知り合ひの將官たちと話してゐた。

ナポーレオン皇帝は未だ寢室を出ずに、丁度身粧を終らうとしてゐるところであつた。滿足の鼻息と唸り聲とを洩らしながら、皇帝は自分の身體をこすつてゐる一人の從僕が手にした肉ブラシの方へ、先づその丈夫さうな背中を、それから圓々と肥えてむしや〳〵毛の生へてゐる胸を振り向けてゐた。

もう一人の従僕が指一本をかけて罎を持ち、皇帝の美食に飽いた肉體にオー・ド・コローニュ(香水)をふりかけながら、唯自分のみが何處に、どんな風に、オード、コローニュをふりかけるべきかを知つてゐるのだ、とでもいふやうな表情をしてゐた。ナポーレオンの短い髪の毛は、濡れて、額の上に編まれてゐた。けれどもその顔は、膨れて黄ろくなつてはゐたが、肉體の滿足を表はしてゐた。

『もつと、確(しっか)り、もつと……』肩を縮めて咳拂ひをしながら、彼はブラシをかけてゐる従僕に向つて言つた。

最近の戰闘で捉まへた捕虜の數を皇帝に報告するために、寢室に這入つて來た一人の副官が、使命を果してから、扉口に立つて、去つてもいゝといふ許しの出るを待つてゐた。ナポーレオンは顔を暨めながら、眉の下から副官をじろりと見上げだ。『捕虜は無い、』と、副官の言葉を繰り返して、『彼等は自分から滅亡しようとして居るのだ。ロシア軍に取つては益々悪い事だ、』から言つた。『もつと確り、もつとこすれ、』と、従僕の前に肥つた肩を衝き出すやうにした。『好し。ボオツセーを通せ、それからフアブヴィエーも、』と首肯きながら副官に言つた。

『畏りました、陛下、』そして副官の姿は去つた。

二人の従僕は、手早く陛下に着物を着せた、近衛の青い軍服を着て、皇帝は斷乎とした素早い步調(あしどり)で、謁見室に這入つて行つた。

ボオツセーはその時、皇后のところから持つて來た贈り物を、皇帝が這入つて來れば直ぐ眞正面にあたる二脚の椅子の上に、大急ぎで飾り立てゝゐた。だが、皇帝が着物を着て這入つて來るのが思ひも寄らぬ程早かつたので、彼は皇帝を驚かすやうに十分にしておく暇がなかつた。

ナポーレオンはボオツセー等のしてゐる事に直ぐ氣が附いて、未だ準備が出來てゐないものと察した。彼は、自分のために心持の好い驚きを準備しやうとしてゐる愉快を、彼等から奪つてしまひたくなかつた。彼は、ムシュ・ド・ボオツセーには氣が付かないやうな風をして、フアブヴィエーを自分の傍に招いた。ナポーレオンは嚴かに顔を顰めながら、ヨウロッパの彼方端(なんのはし)のサラマンカの手前で戰つてゐる我軍の、勇敢にして忠義なる事をフアブヴィエーが喋つてゐるのを、默つて聞いてゐた。彼等は唯一つの考——皇帝の名を辱しめないやうな働きをしたいといふこと——と、そして唯一つの恐怖——皇帝を不快にしてはならないといふこと——とを持つてゐると、フアブヴィエーは言つた。戰ひの結果は慘めなものであつた。ナポーレオンは、フアブヴィエーがそれを喋つてゐる間、自分がゐなければ、さうなるより仕方があるまいと豫期してゞもゐたやうに、皮肉な短評を試みた。

『私はモスクワでその埋め合せをせねばならぬ、』と、ナポーレオンは言つた。『A tantot (では左樣なら)』それからボオツセーを呼んだ、ボオツセーは、此時にはもう飾り付けを濟まして、椅子の上に何やら立てゝその上に蔽布(カバー)をかけ終つてゐた。

ボオツセー、はブウルボン家の古い家臣のみがその方法を知つてゐるやうな、宮廷官の低いお叩頭をして、ナポーレオンの方へ近づき、一通の手紙を渡した。

ナポーレオンは、快活に彼に話しかけて、彼の耳を撮んだ。

『早かつたな、好く来た。處で、パリイでは何んな評判をして居るかね！』嚴かな顔付を急に最も親しげな表情に變へながら、ナポーレオンは言つた。

『陛下、パリイ中が陛下の御不在を殘念がつて居ります、』と、ボオツセーはさう言はなければならない義務に縛られてゞもゐるやうに言つた。併しナポーレオンは、ボオツセーがそんな事、或はそれに似通つた事を云ふのは義務のためだといふ事を知つてゐたけれども、そして又本氣な時には、それが總て僞りだといふ事を知つてゐたけれども、それでも此男から、こんな事を聞くのが嬉しかつた。彼は、再び親しげにボオツセーの耳を撮んだ。

『遙々旅をさせて實に氣の毒だつたな、』と、彼は言つた。

『陛下、私は尠くともモスクワの城門で陛下にお眼にかゝれる事とばかり存じて居りました、』とボオツセーは言つた。

ナポーレオンは微笑して、頭を持上げながら、ぼんやり右の方を向いた。一人の副官が金の嗅煙草函を持つて、恭々しく近づいてナポーレオンに渡した。ナポーレオンはそれを取つた。

『さうだ、お前には好い機會だよ、』と、ナポーレオンは、開いた嗅煙草函を鼻に當てながら、『お前は旅行が好きだね、三日のうちにはモスクワが見られるぞ、お前はアジア風の首都を見られるなどゝは思ひも掛けなかつたらうな。面白い旅行をさせてやるよ。』

ボオツセーは、自分の旅行の趣味に對してから旨いことを言はれたので、感謝して叩頭をした。(尤もその瞬間まで自分が旅行好きだといふ事に氣がついてはゐなかつたのだけれど。)

『やア、何だね？』宮臣等がみんな蔽布の下に隱されてゐる何物かを眺めてゐるのを見て、ナポーレオンは言つた。ボオツセーは如何にも宮臣らしい敏活さを以て、背中を見せないやうに、半ば横を向いて二歩引き退り、それと同時に『皇后陛下から陛下へのお土産でございます、』と、言ひながら、ぐいと蔽布を引いた。

それはナポーレオンとアウストリア皇帝の娘との間に生れた子供——總ての人々が、何だか分らない理由からローマ王と呼んでゐる小さな男兒を、ゼーラルが極彩色で描いた肖像畫であつた。

システインのマドンナの中のキリストのやうな眼をして、非常に美しく、髪を捲毛にしてゐる子供が、カツブ、エンド、ボールを戲つてゐる處が寫されてゐた。ボールは地球儀を表はし、片一方の手に持つてゐるカツブは笏であつた。

所謂ローマ王が、笏の上に地球儀を投げてゐる圖を描く事によつて、畫家が何を表はすつもりであ

つたかは、餘り明瞭ではないが、この寓意はバリイで夫れを見たものが誰でもさうであつたやうに、ナポーレオンに取つては全く明瞭で此上なく愉快な事のやうに思はれたらしかつた。

『Roi de Rome !（ローマ王！）』とナポーレオンは、形の好い身振りをして肖像畫を指しながら、言つた。『美事だ！』意のまゝに表情を變へ得るイタリイ人獨特の器用さで、肖像畫の傍に近づき、沈んだ優しさを粧うた。彼は、その瞬間自分が言つたり、したりする事は、歴史に殘るだらうといふ事を感じた。その瞬間に於て、自分の壯大の絶頂に於て——自分の子供が地球を相手にカップ、エンド、ボールを戲つてゐる程偉大なのだ——自分のなし得る最良の事は、その偉大といふ事と反對な最も單純な、父親らしい優しさを表はすにあるといふことを、彼は思ひ附いた。彼の眼は感情で曇つた、彼は前へ進んで、椅子がないかと見まはした。（椅子は彼の下へ飛び出て來たやうに思はれた。）そして肖像畫に向つて腰を下した。彼が手をひとつ振つて合圖をすると、みなの者は爪先立てゝ退き、この偉人をたつた一人で思ひのまゝの感情に耽らせるやうにした。そこに暫らく坐つてゐた後で、自分でも何故といふ事はなく、ざら〳〵した畫面を指で撫でゝ見て、ナポーレオンは立上り、再びボオツセーと當番の將校とを呼びにやつた。彼は肖像畫を天幕の前に搬び出すやうに命令を下した。それは天幕のまはりに立つてゐる舊近衛兵に、彼等の崇拜する皇帝の子息であり、後繼者であるローマ王を見る幸福を與へ度い爲めであつた。

ナポーレオンは、ムシュ・ド・ボオツセーと共に朝飯の食卓についてゐる間——彼はボオツセーに陪食を仰せつけたのであつた、——豫期した通りに、肖像畫を見ようと詰せ集まつて來た舊近衛兵の兵卒や將校どもの熱心な叫び聲を聞いた。

『Vive l' Empereur ! Vive le roi de Rome ! Vive l' Empereur !（皇帝萬歳！ローマ王萬歳！皇帝萬歳！）』と熱心な聲々は叫んだ。

朝飯が濟んでから、ボオツセーの面前で、ナポーレオンは軍隊に與へる勅諭を讀み上げた。

『Courte et energique !（簡潔で、强い！）』とナポーレオンは勅諭を、書き記されてゐる通りに一語も變へずに讀み終つてから、叫んだ。勅諭は次のやうなものであつた。

『兵士等よ。これは爾等が非常に待ち望んでゐた戰ひである。勝利は爾等が手中に在る。勝利は、我等にとつて最も重要なもので、それは、我等の欲するものを悉く與へるのである——居心地の良い營舍も、故國への速かなる凱旋も。アウステルリツツや、フリードランドや、ウイテブスクや、スモオレンスクに於て働いたやうに働け。後世をして、爾等の今日の功績を、誇りを以て回想せしめよ——而して彼等をして爾等の一人々々に就いて斯く言はしめよ、彼はモスクワ前面の大戰闘に參加したのだと！』

『モスクワの前面、』と、ナポーレオンは繰り返して、そして非常に旅行好きのムシュ・ド・ボオツセー

を馬に乗つて蹤いて來るやうにと招きながら、天幕を出て、外で二人を待つてゐる鞍の置かれた馬の方へ行つた。

『陛下、難有うございます、』と、ボオツセーは皇帝と一緒に來いといふ招きに答へて言つた。彼は非常に眠かつた。それに乘馬は下手で、馬が恐かつた。

だが、ナポーレオンはこの旅行者に向つて頭で合圖をした、で、ボオツセーは乘らない譯に行かなかつた。ナポーレオンが天幕から出て行くと、自分の息子の肖像の前の、近衛兵たちの萬歳の叫び聲が、幾回となく繰り返された。ナポーレオンは眉を顰めた。

『この子をあつちへ連れて行け、』と、彼は形の好い威嚴のある手付をして、肖像を指しながら、かう言つた。『戰場を見せるにはまだ早過ぎる。』

ボオツセーは眼瞼を落し、頭を下げながら、自分が何んなによく皇帝の言葉を理解して、味はつてゐるかといふ事を、證明するために深い溜息を吐いた。

二十七

その日、卽ち八月二十五日は終日、ナポーレオンは、歷史家等の傳へるところによると、その地方

を視察したり、元帥たちから提出したいろ〳〵の策戰計劃を批評したり、將官たちに親しく命令を與へたりしながら、馬上で過したのであつた。

コロツチヤ河に沿うてゐたロシア軍の、陣形の本線は、破られてしまつた。そして、その前日シエヴアルデイノ砲壘を占領された結果として、本線の一部分——卽ち左翼——は遠く退却した。本線のその部分は固められてゐなかつたし、もう河では掩護されないで、そして前より一層廣濶とした平らな地面が、その前面に橫たはつてゐた。フランス軍の攻擊すべき處は、戰線のその部分だといふ事は、軍人であると無いとを問はず、何人の眼にも明瞭であつた。この結論に達するには大した熟考を要しないといふ事、皇帝や元帥等の總ての心配懸念は不必要だつたといふ事、そして人々が、ナポーレオンにつけたがる、天才といふ、あの特別に高級の才能などは、この場合絕對に必要でなかつたといふ事は、誰しも考へたところだつたらう。處が後に至つて、此戰爭を記述した歷史家たちや、當時ナポーレオンを取卷いてゐた部下の者共や、それからナポーレオン自身は、そんな風には考へなかつたのであつた。

ナポーレオンは戰場を乘りまはして、考へ深い樣子をして地勢を見詰めたり、ひとりで合點したやうに、又疑はしいと云つたやうに、頭を振つてゐた、そして自分のまはりにゐる將官達には、彼をしてその結論に導いた推理の深い聯鎖は少しも打明けないで、唯最後の結論だけを命令の形式を取つて彼等に傳へた。今はエクミール公爵と稱せられてゐるダヴウが、ロシア軍の左翼を包圍しやうと云ふ

意見に對しては、ナポーレオンは、そんな事をする必要はないと言つたが、何うして必要がないかといふ事は、別段說明しなかつた。が、コンパン將軍(先頭の掩堡を攻撃する事になつてゐた)が、自分の師團を森の中を通つて進軍させると申し出た時には、所謂エルチンゲン公爵、卽ちネエーが、森林中の通過は隊に取つて危險で、師團の隊形を崩す事になりはしまいかと、敢て異議を唱へたにも拘らず、ナポーレオンは、コンパン將軍の說に認可の意を示した。

シエヴアルデイノ砲壘前面の地形を視察してから、ナポーレオンは少しの間無言で考へ込んでゐた、そしてロシア軍の堡壘を砲撃するために、明日二つの砲兵陣地を敷くべき地點と、それと一線をなして野戰砲兵の配置されるべき地點を指し示した。

そんな事やその他のいろ〳〵の命令を下した後で、彼は營舍に歸つて行つた、そして彼の口寫しのまゝ軍の配置が書き止められた。

この配置は——それに就いてフランス人は熱心を以て語り、他の歷史家は尊敬を以て語つてゐるが——次のやうな訓令から成立つてゐた。

「エクムール公爵によつて占領せられたる平原に、夜のうちに敷かるべき二個の新砲兵陣地は、曉明に、前面にある敵の二個の砲兵陣地に向つて砲撃を開始すべし。

「同時に第一軍團の砲兵司令官ベルネツチイ將軍は、コンパン師團の砲三十門と、ドゼエス及びフリアン師團の榴彈砲全部と共に前進して、砲火を開き、敵の砲兵陣地の頭上に破裂彈を雨下せしむべし、その敵陣地に對しては、直ちに左の諸砲の攻撃を開始すべし。

近衞砲兵の砲二十四門、コンパン師團の砲三十門、フリアン及びドゼエス師團の砲八門——合計六十二門。

「第三軍團の砲兵司令官フウシエー將軍は、左方の掩堡を砲撃すべき砲兵陣地の兩翼に、第三及び第八軍團の榴彈砲十六門を置き、總計四十門の砲を以て同掩堡を攻撃すべし。

「ソルビイエ將軍は、近衞砲兵の榴彈砲全部を指揮し、命令一揮何時なりとも敵の掩堡の孰れかに向つて突進すべき準備を整ふべし。

「右の砲撃中、ポニアトウスキイ公爵は森林中の村落に進軍し、敵の陣地を包圍すべし。

「コンパン將軍は森林を通過し、第一掩堡を占領すべし。

「以上諸線に攻撃開始されたる後、敵の行動に從つて、更らに命令を下すべし。

「右翼の砲撃聞えるや否や、左翼も砲撃を開始すべし。モラン師團及び總督の師團の狙撃兵等は、右翼の攻撃開始と共に、猛烈なる砲火を開くべし。

「總督はボロデイノ村を占領し、その三橋梁を渡りて、モラン及びゼラール兩師團と同一高地に進み、而して、モラン及びゼラール兩師團は總督の指揮の下に砲壘に進み、他の諸隊と同一線上に出づべし。

「以上一切の行動は秩序整然と行ひ、且つ出來得る限り豫備隊を備ふべし。

「モザイスク附近の大本營に於て、一千八百十二年九月六日」

以上の訓令は——若しナポーレオンが軍の配置といふ點に天才を有してゐるといふ迷信的畏怖の念を捨てゝしまへば誰でも夫れが非常に混亂して、曖昧なものであるのに氣が附くであらう——四つの點、卽ち四つの命令に縮められるその命令の一つだつて實行されなかつたし、又實行する事などは出來なかつたのだ。

先づ第一に次の訓令が與へられてゐる、卽ち、ナポーレオンの撰んだ砲兵陣地は、それに合同すべきベルネツチイ及びフウシエー兩師團の砲を合して、總計百二門の砲を以て砲撃を開始し、ロシア軍の掩堡及び砲壘を破壞せよといふのである。これは實行が出來なかつた、何となればナポーレオンが定めた場所から、ロシア軍の掩堡までは爆發彈が達しなかつた、で、その百二門の砲は空中に發砲されてゐるので、とう〳〵最も近くにゐた司令官が、ナポーレオンの命令に反いて、前進の命令を下すに至つたのであつた。

第二の命令は、ポニアトウスキイは森林中の村落に進軍して、ロシア軍の左翼を包圍せよといふのである。これも實行されなかつたし、又實行する事も出來なかつた、といふのは、ポニアトウスキイが森林中の村落に進むと、進路をツチコフが遮つてゐたので、ロシアの陣地を包圍しなかつた、又包

圍する事が出來なかつたのである。

第三の命令は、コンパン將軍は敵の第一堡壘を占領するために森林に進み入るべしといふのである。コンパン師團は第一の堡壘を占領しなかつたどころか、却つて擊退されてしまつた、何故かといふと、森を出て行つて見ると、敵の葡萄彈を浴びながら隊形を整へなければならなかつたからである、ナポーレオンは、此葡萄彈のことなどは一向御存知がなかつた。

第四の命令は、總督は村落（ボロデイノ）を占領し、その三橋梁を渡つて、モラン及びフリアン兩師團と同一の高地に達し、（何處から、何時、進むべきかといふ事に就いては何も言はれてゐない）而してモラン及びフリアン兩師團は、總督の指揮の下に、砲壘に進んで、他の諸隊と同一線上に出づべしといふのである。この混亂した句節（パラグラフ）からよりも、寧ろ總督が自分に與へられた命令を實行しようとして爲した企てから判斷して見ると、總督は左方からボロデイノを通過して砲壘に進まうとし、それと同時にモラン及びフリアン兩師團は前線から進まうといふのであつたやうである。總てこんな事は他の命令同樣に、到底實行出來るものではなかつた。ボロデイノ通過後、總督はコロツチヤ河で擊退されて、先へ進む事が出來なかつた。モラン及びフリアン兩師團は、砲壘の占領どころか擊退されてしまつた。そして、その日の終りにその砲壘は騎兵が占領した。（これは多分ナポーレオンが豫想もしなければ、耳にもしなかつた戰鬪によつてゞある。）

で、かういふ風に出された命令の一つも、實行されなかつたし、又實行することが出來なかつたのである。だが、此の配置の中には、戰鬪開始後、敵の行動に從つて更らに又訓令を發するといふ文句があつた。それ故總ての必要な命令は戰爭中ナポーレオンに依つて與へられたものと想像する人があるかも知れない。だが、これは事實ではなかつた、又事實ではあり得なかつた、何故かといふと、戰爭中初めから終ひまで、ナポーレオンは戰場からはズツと遠く離れてゐたから、(これは後になつて知れた事だが)戰爭の進行に就いては何も知らなかつた、そして戰爭中彼の與へた訓令は、恐らく唯の一つも實行され得なかつたからである。

二十八

多くの歷史家は、フランスがボロデイノで失敗したのは、ナポーレオンが風邪を引いて頭を惡くしてゐた爲めだ、若し彼が風邪を引かなかつたならば、戰爭の前及び間に彼が下した命令は、もつと著しく彼の天才を發揮したものであつたに違ひない、そしてロシアは滅亡して、世界の有樣が變つてしまつたゞらうと主張してゐる。ロシアが一人の人——ペエトル大帝——の意思によつて變へられたか、フランスが一人の人——ナポーレオン——の意志で、共和國から帝國になり、フランス軍が、ロ

シアに侵入したとかいふ事を、主張し得る歷史家に取つては、八月の二十六日にナポーレオンがひどい風邪に罹されたがために、ロシアは今尙ほ一強國として存在してゐるのだといふ結論が、爭ひ難い確定したものゝやうに思はれるかも知れない。若しボロデイノで戰ふ戰はないがナポーレオンの意志一つによるものとすれば、或は又、若しこの命令、あの命令を與へるといふ事が、ナポーレオンの意志一つに依るものとすれば、彼の意志の發表に影響を與へた風邪が、ロシアを救つたものであるといふ事が明かであつて、その結果として二十四日にナポーレオンに防水靴を穿かせる事を忘れた從僕が、ロシアの救ひ主といふことになるであらう。さういふ推理の方法で行けば、かういふ推定は避け難いことである、それは丁度ヴオルテールが、聖バルソロミユーの虐殺はチヤールス九世が罹つた胃弱の發作の爲めだと冗談に主張した(尤も彼は何を嘲弄してゐるのかは自分では知らなかつたのだが)議論と同樣に避け難いものである。然し乍ら、ロシアが一個人——ペエトル大帝——の意志によつて變へられたとか一個人——ナポーレオンの意志によつて、フランス帝國が建設され、ロシアとの戰爭が始つたとかいふやうな事を承認出來ない人々に取つては、かういふ議論は、それが單に不健全で、不合理であると思はれるばかりではなく、人道の自然に悖つてゐるものだと思はれるだらう。歷史的事件の原因は何から成立つてゐるか、といふ問題は、彼等には他の答を暗示するであらう、そして、その答は、地上の事件の方向は天上から前以て運命づけられてゐるのであり、且つそれ等の事件にたづさは

る人間の總ての意志の結合に因るものである、そして夫れ等の事件に於いてナポーレオンの影響が最も卓越してゐるといふのは、全く外形的な架空的なものである、といふ觀念に基いてゐるのである。

聖バルソロミユーの虐殺は、その命令を下したのはチヤールス九世だが、それが彼の意思の結果ではなく、自分の下した命令が夫れの原因だと想つてゐるのは唯彼の空想に過ぎないとか、又ボロデイノで八萬の人間が殺されたのはナポーレオンの意思によるのではなく、(尤も戰鬪開始の命令はナポーレオンが下したのだが)それを自分がした事だと思つてゐるのは、それは唯彼の空想に過ぎないとか、いふ說は、一見不思議に見えるかも知れないが、併し我々は誰しもナポーレオンより以上でも又より以下でもない、といふ事を我々に語る人間の威嚴が、以上のやうな問題の解決法を我々に許してゐるのだ、そして史的研究は、充分に以上の說を確めてゐる。

ボロデイノの戰ひに於いて、ナポーレオンは何人に向つても發砲しなかつたし、又何人をも殺さなかつた。さういふ事はみんな彼の兵卒達がした。それ故、それ等の人間を殺したのは彼ではなかつた。フランス軍の兵卒共は、ナポーレオンの命令によつてばかりではなく、さうしたいと思ふ自分等の慾望から、ボロデイノで人間仲間を殺すために出かけて行つたのであつた。行軍のために腹が空つて、着物が襤褸になつて、疲れ果てゝゐた全軍は——フランス人も、イタリイ人も、ドイツ人も、ポーランド人も——モスクワに行く路を敵軍が遮つてゐるのを見ると、『酒が抜かれた、飮まざるを得ぬ』と感じたのであつた。若しナポーレオンが、その時ロシア軍と戰ふ事を禁じたならば、彼等はナポーレオンを殺してロシアと戰つたであらう、何故かといふと、それは彼等に取つて避け難いことであつたから。

彼等は、地球を相手にカツプ・エンド・ボールを戲つてゐる小さな子供の繪を見た時に、『皇帝萬歲！』と叫んだ、又どんな不合理な事が言はれようと一々それに對して『皇帝萬歲！』と叫んだ、が丁度それと同樣に、彼等はモスクワ前面の戰爭に參加したと後世の人々が言ふだらうといふ事を、人を傷けたり殺したりする事に對する慰めとして述べ立てたナポーレオンの宣告を聞いた時に、やつぱり『皇帝萬歲！』と叫んだ。たゞ『皇帝萬歲！』と叫ぶ事のほか、彼等には何にもする事がなかつた。で、彼等が人間仲間を殺したのは、ナポーレオンの命令によつてゞはなかつたのである。

それから戰ひの進行を定めたのは、ナポーレオンではなかつた、何となれば、彼の命令は一つも實行されなかつたし、又彼は自分の前に過ぎつゝある事を少しも知らなかつたからである。故に、これ等の人々が互ひに殺し合つた方法は、ナポーレオンの意志に基くものではなく、この事件にたづさはつた數十萬の人々の意思によつてナポーレオンとは何の關係もなく進行したのである。唯萬事が自分の意思から生じてゐると、ナポーレオンには思はれるだけのことなのだ。だから、ナポーレオンが風邪を引いて頭を惡くしてゐたとか、ゐなかつたとかいふ問題は、歷史上では何の重要な事ではなく、

寧ろ兵站部の最下級の兵卒が風を引いたのと何等選ぶ所はないのである。

ナポーレオンの風邪は、戰爭前の命令及び戰爭中の命令が、いつもより薄弱なものであつた事の理由であるといふ或記者たちの議論は、全く根柢のないものである、

此處に再錄した命令は、彼が夫れによつて過去に勝利を得た同じやうな多くの手筈より、決して劣つてゐるどころではなく、寧ろ優れてゐる方なのである。戰鬪中に彼が下したと想像されてゐる諸命令も亦、決して彼が以前の諸戰鬪に於て下した命令に劣つてゐるものではなく、いつもと全く同じなのである。處が、唯ボロデイノはナポーレオンが勝利を得なかつた最初の戰だつたといふだけで、これ等の命令がいつものより劣つてゞもゐるやうに想像されてゐるのだ。どんな立派な、どんな徹底した策戰でも、それによつて戰爭に勝てなかつた場合には、非常に貧弱なものゝやうに思はれる。そして、どんな軍學者でも道理らしい態度で夫れを批評する事が出來る、どんな愚かな策戰でも、それに續いて來る戰爭が偶然勝利になつた場合には、非常に巧妙なものであるやうに思はれて、眞面目な著者たちはその優秀なものである事を證明するのに、幾卷かの書物を埋めるのだ。

アウステルリツツで、ワイエロオテルによつて作られた策戰は、それ自身だけのものとしては完全なもの、標本であつたが、而もそれが完全過ぎるといふので、餘り精密過ぎるといふので、非難された。

ボロデイノに於いて、ナポーレオンは前の諸戰鬪の時にしたのと同じやうに、或はそれ以上にさへ、最高權力の代表者として彼の役目を演じたのであつた。彼は戰の進行を妨げるやうな事は何もしなかつた。彼は最も聰明な忠告に從つた。彼は當惑かなかつた、矛盾した行動を取らなかつた、心の沈着を失はなかつた、或は又戰場から逃げ出さうともしなかつた、で、大手腕と軍事上の經驗とを以て、自分が萬事最高の統御をやつてゐるやうに見える役目をば平靜に、威嚴を以て勤めたのであつた。

二十九

二度目の注意深い戰線の視察から歸つて來ると、ナポーレオンは言つた——

『駒が將棋盤に列んだから、勝負は明日始める。』

彼はポンスを命じて、それからボオツセーを呼びにやつて、彼とパリイの話をし出した、自分が皇后の宮中に施さうと思つてゐた、いろ〳〵の改革を論じたり、宮中の細々した事をよく覺えてゐて、宮廷長官を吃驚させたりした。

彼は、些末な事に興味を持つてゐることを見せたり、ボオツセーの旅行好きをからかつたりして、暢気に喋つてゐた、それは丁度、或る名高い、上手な、自信のある外科醫が、袖をたくし上げたり、

エプロンを着けたりしながら、手術臺に患者が結びつけられてゐる間、暢氣な饒舌をやつてゐるのに似てゐた。『俺は萬事心得てゐる。俺の頭の中では總てが明瞭で、決つてゐるんだ。一度び仕事に取りかゝれば、誰にだつて出來ないやうにやつて見せるが、併し今は冗談を言つてゐられるのだ、そして俺が沈著いて冗談を言へば言ふ程、益々お前達は安心して、信頼して、俺の天才に對する喝美を感ずべき筈である。』

二杯目のポンスを飲み干してから、ナポーレオンは明日自分の前にやつて來ると想像してゐる大事の前に、一休みして置く事にした。

彼は、自分の前に横はつてゐる事件に心を占領されて、眠る事が出來ず、風邪が夜の濕氣で益々惡くなつたにも拘らず、三時になると飛び起きて、烈しく嚔をしながら、天幕の中の主な室に這入つて行つた。彼はロシア軍が退却しはしなかつたかと訊いた。彼は、敵軍の燎火は依然として同じ場所に在ると云ふ答を得た。彼は如何にもと云つたやうに點頭づいた。

當番の副官が天幕のうちへ這入つて來た。

『おい、ラツプ、今日はうまく行くと思ふかな?』ナポーレオンは副官に言つた。

『無論でございます、陛下!』と、ラツプは答へた。

ナポーレオンは彼をじつと見た。

『陛下はスモオレンスクで私に仰せられましたお言葉を覺えてゐらつしやいますか?』と、ラツプが言つた。『酒が拔かれた、飲まざるを得ぬ。』

ナポーレオンは顏を顰めた、そして頭を手に埋めながら、長い間默つて座つてゐた。

『この哀れな軍隊、スモオレンスク以來非常に減つた。La fortune est une franche courtisane,(幸運の神は浮氣女郎だぞ)、ラツプ。私はいつもさう言つてゐたが、今それを感じ出した、だが近衛は、ラツプ、近衛はそのまゝでゐるかな?』と、訊ねるやうに云つた。

『左樣にございます、陛下、』とラツプは答へた。

ナポーレオンは錠劑を取つて、口に入れた、そして懷中時計を見た。彼は眠くなかつた、そして朝までは未だ中々であつた、もう時をつぶす爲めに下すべき訓令もなかつた、訓令は總て與へられてしまつて、今では夫れが實行されつゝあつたからである。

『ビスケツトと米を近衛の各聯隊に分配したか?』と、ナポーレオンは嚴かに尋ねた。

『はい、陛下。』

『米もか?』

ラツプは、皇帝の米に關する命令はすつかり傳へて置いた旨を答へた。けれどもナポーレオンは、自分の命令が實行されたか何うかを疑ふとでもいふやうに、不滿な風をして頭を振つた。從僕がポン

スを持つて這入つて来た。ナポーレオンは、ラツプの分を今一杯命じて、無言で自分のグラスから一口二口啜つた。『私には香も味も解らない。』とグラスを嗅ぎながら言つた。『この風邪には閉口だ。みんなは薬を勧める。だが何が薬だ、こんな風邪ぐらゐ癒す事も出來んのに？　コルヴイザールが、私に此錠剤を呉れたのだが、これも何もならない。彼奴等に何が癒せるだらう？　何だつて癒せるものか、我々の身體は生きるための機械なのだ。それが爲めに組織されてゐるのだ。それが天性なのだ。邪魔せずに命を、その天性のまゝに委せろ、その天性に從つて命に自分で自分を護らせろ。治療法で麻痺させたり妨げたりするよりか、その方が餘程好い。我々の肉體は或時間のあひだ動くやうにしてある完全な懐中時計だ。時計屋は夫れを開ける力は持つてゐない、唯無暗に、盲滅法にそれを取扱ふ事が出來るだけなんだ。我々の肉體は生きる爲めの機械だ夫れだけなんだ。』そしてナポーレオンは動もすると、さうなり易い、何時もの定議を下す癖に落ちて來たがためであらうが、急に新しい問題にも一つ定義を持ち出した。『お前は知つて居るかね、ラツプ、兵術は何で成立つて居るか？』から訊いた。『それは、或る與へられた瞬間に於て、敵よりも強くなる術だ。夫れだけなんだ。』

ラツプは答へなかつた。

『明日はクツウゾフと戰ふんだ。』と、ナポーレオンは言つた。『今に見ろ！　お前は覺えて居るかね、あの男はブラウナウで司令官をやつて居つたが、三週間に唯の一度だつて自分の軍の防禦工事の視察に、

馬に乘つて出かけた事はなかつたのだ。今に見ろ！』

彼は懐中時計を眺めた。未だやつと四時であつた。彼は眠くなかつた。ボンスはもう飲み終つたし、するべき事は何もなかつた。彼は立上つて彼方此方歩いてゐたが、やがて暖かい外套と帽子とを冠つて、天幕から出て行つた。夜は暗く、濕潤かつた。かすかな細雨が殆んど音も立てずに降つてゐた。直ぐ近くのフランス近衛隊には、燎火がぼんやり燃えてゐた、そして遙か遠い彼方には、ロシア兵の戰線に沿うて、燎火が煙を透して明るく燃えてゐた。空氣は靜かであつた、陣地を占めようと動き出したフランス軍の、かすかな動く氣配と、足音とが、はつきり聞えた。

ナポーレオンは天幕の前をあちこち歩いたり、燎火をながめたり、足音に聞き入つたりしてゐた、と、毛皮帽を冠つた身長の高い番兵、天幕の前の歩哨の前を通りかゝつた番兵は、皇帝を見ると黒い柱のやうに直立の姿勢をした。皇帝は番兵に向ひ合つて立ち止つた。

『お前は何年から隊に入つた！』と、皇帝はいつも兵卒共に話しかける時にする、軍隊式の無骨と親しげな調子を粧ひながら訊いた。兵卒はそれに答へた。

『あゝ、古兵の一人だな！　お前等はみんな聯隊で米を受取つたかい？』

『はい、陛下。』

ナポーレオンは點頭いて歩み去つた。

五時半にナポーレオンは、シエヴアルデイノ村に馬を走らせて行つた。

もう明るくなりかけてゐた。空は霽れて、唯一つ暴風雲が東の地平線に横たはつてゐるだけであつた。捨てられた燎火は朝の青白い光の中に燃え落ちてしまつた。

たつた一つ大きな砲聲が、右手の方で濺いて、空中にさまよひ、靜寂のうちに消えてしまつた。五六分過ぎた。第二、第三と砲聲が聞えた、空氣は震動に充ちた、第四第五の砲聲が右の方の直ぐ近くで、莊嚴な唸りを立てた。初めの砲聲が未だ消えないうちに、次の砲聲が直ぐ鳴り出し、それに次の次のと加はつて、それ等の響きが互ひに混り合つたり、追ひついたりするのであつた。

ナポーレオンは、隨行員を從へてシエヴアルデイノ砲壘に乘りつけ、そこで馬を下りた。勝負は始まつてゐた。

三十

ピエールは、アンドレー公爵に會つてから、ゴルキイに歸つて來ると、馬丁に馬の仕度をして明朝早く起して吳れと指圖をしてから、部屋の隅つこにバリースが工夫して置いた屏風の蔭の隅で、直ぐグツスリと寢込んでしまつた。

ピエールが翌朝すつかり眼の覺めた時分には、小舍の中には誰もゐなかつた。硝子板が小さな窓々でガタ〳〵鳴つてゐた。馬丁は彼の傍で、彼を揺り起してゐた。『閣下、閣下、閣下……』馬丁は執拗く言ひつゞけては、明かに彼を起すべき希望が全く失はれたとでも云ふやうに、彼の顏をばかう見もしないで、彼の肩を揺すつてゐた。

『え、始まつたのか！　もうそんな時か？』ピエールは眼を覺すと言つた。

『砲聲をお聞きなさい、閣下、』と、老兵士の馬丁は言つた。『みなさんは、もうお出かけになりました。殿下ももう餘程前にお出かけになりました。』

ピエールは急いで服を著て、玄關に飛び出して行つた。それは晴れた、すが〳〵しい、露の多い、愉快な朝であつた。太陽は今丁度それを遮つてゐた雲を破つて現れ出た、そして、その光線は、破れた雲を通して、街の向側の屋根の上から、露に濡れた往來の埃や、垣根や、家々の窓や、それから小舍の側に立つてゐるピエールの馬の上に注がれた。大砲の唸り聲は、戸外では一層はつきりと聞えた。

副官が一人のコザツク兵を後に從へて街を馬を走らせて來た。

『始まりました、伯爵、始まりました！』と、副官が叫んだ。ピエールは馬を連れて跼いて來いと命令して、彼が前日戰場を見渡した丘の上へと、往來を步いて行つた。その丘の上には一團の將校が群つてゐた。彼は、參謀がフランス語でぺちや〳〵喋つてゐるのを聞いた、肩の間へ沈み込んでゐるク

ツウゾフの白髪頭と、赤い紐飾りのついてゐるその白い帽子とを見た。クツウゾフは望遠鏡で眼の前の國道を見渡してゐた。

丘の頂邊に近づいて行く階段を登りながら、ピエールは前面を眺めた、そして其光景の美しさにゾッとするやうな喜びを感じた。それは前日、彼がその丘の上から賞讃したのと同じ景色であつた。だが今は、パノラマ全體は軍隊と砲煙とに充されてゐた、清らかな朝の空氣のうちに、ピエールの左手の後方にあつた太陽の斜めの光線は、金色と桃色との色調に溢れ、處々長い黑い影に破られてゐるパッと明るい光を、そのパノラマの上に流してゐた。景色を區切つてゐる遠い森が、地平線上に新月形に横たはり、それがまるで何か黃綠色の寶石から彫られてでもゐるやうに見えた、そして、その中央のヴアリユエフの後に、軍隊ですつかり蔽はれてゐる大きなスモオレンスク街道が走つてゐた。前景には太陽に輝やいてゐる金色の畑や、小さな森が横たはつてゐた。右にも左にも前にも、到るところに兵士達がゐた。光景全體が活氣づいて、印象的で、豫想外であつた。けれども、何にも增してピエールを感じさせたのは、戰場の光景そのもの、即ちボロデイノとコロツチヤ河兩岸の低地の光景であつた。

コロツチヤ河のあたりや、ボロデイノや、ボロデイノの兩側や、殊に左の方の、ヴオイナ河が沼地を流れてコロツチヤ河に注ぎ込んでゐるあたりには、まだ霧がその邊全體の上にかゝつてゐて、それ

が明るい日光の中で、溶けたり分れたり、キラ〳〵光つたりしながら、それを透して見える物象にこの世ならぬ美しさを與へてゐた。砲煙はこの霧と混り合つてゐた。そして到るところで日光が、水や露や、それから又ボロデイノ及び河の兩岸に群つてゐる兵卒共の銃劍や、さういふものに映えて、露の中で、キラ〳〵光つてゐた。この霧を透して白い教會堂が見えた、かなたこなたにボロデイノの田舍家の屋根が見えた、時々兵士の密集部隊、綠色の彈藥函、大砲などがチラリ〳〵見えた。そして霧や煙が、廣い平原の上に棚引く時には、景色全體が動いた、動くやうに思はれた。霧の中のボロデイノ附近の、この低地にも、その上にも、殊に左側の全線に沿うた小さな森だの、下の方の牧場だの、高地の頂邊だのには、間斷なく煙の雲が、何もないところから湧き上つてゐた、或時は唯ひとすぢ、或時は一度に幾條も。又長い合間を置いて湧き上るかと思ふと、やがて早く連續的に湧き上るのであつた。かふ煙のいふ雲はパツ〳〵と吹き上げたり、捲き返したり、互ひに溶け合つたり、又分れたりしながら、廣い平原の上を横切つて棚引いた。かういふパツ〳〵と吹き上る煙とそれに續いて起る砲聲とは、不思議にも、景色に主な魅力を與へてゐた。

『パツ！』と不意に、紫と灰色と乳白色の蔭を負びた、丸く塊つた煙の球が、飛び上つた。そして『ブーン、ブーン！』とその眼に『パツ、パツ！』と二つの煙が湧き上つて、一つに合して交り合つた。『ブーン、ブーン！』とその眼に

見えたところのものを、響きが繰り返した。

ピエールは、一秒前に丸く塊つた球を見た最初の煙の方を振返つて見ると、其所にはもうその代りに、煙の輪が幾つとなく一方へ向つて棚引いてゐた、そしてパツ……（やがて間を置いて）パツ、パツ——更らに三つ飛び出た、それから一どきに又四つ出た、そして各々の後から同じ合間を置いて、ブーン……ブーン、ブーンと響きの高い、しつかりした、強い音が鳴り渡つた。或る瞬間には、それ等の煙の雲が平原の上を疾走してゐるやうに見えるかと思へば、次の瞬間には、それに止つてゐて、森や野や、キラ〳〵する銃剣などが、その傍を飛んで行くやうに見えた。さういふ大きな煙の雲は、左の方から絶えず野や籔の上を飛んでゐて、一々その後に荘厳な轟きが鳴り渡るのであつた。それよりも更らに近い低い牧場や森の中では、小銃の發射で小さな煙が飛び出してゐたが、それは煙の球にはならなかつた、そして、その煙もやはり、その後で一々小さな音を立てゝゐるのであつた。トラータータと小銃の爆音が、頻繁に響いてはゐたが、併し大砲の音律的な轟きに比べれば、微弱で不規則であつた。

ピエールは砲煙や、キラ〳〵する銃剣や、進軍や騒擾の眞中にゐたいと思つた。彼は、自分の印象と他の人々の印象とを比較しようと思つて、クツウゾフと、その幕僚との方を振向いた。總ての人も彼のやうに前方の野を眺めてゐた。自分と同じ事を感じてゐるのだらうと彼は想像した。誰の顔も今

は悉く、ピエールが前日認めて、そしてアンドレー公爵と話をした後でスツカリ分つた例の感情の『潜熱』に輝いてゐた。

『行け、君、行け、幸運を祈ります！』と、クツウゾフは、戰場から眼を放さずに、自分の傍に立つてゐる將官に向つて言つた。この命令を受けた將官は、丘の頂邊からピエールの側を通つて坂を駈け下つた。

『乘つて行くんだ！……』と、その將官は一人の幕僚の問に答へて言つた。

『では、俺も行かう、俺も行かう、』ピエールはさう思つて、同じ方向に進んで行つた。

將官は、コザツク兵が引いて來た一頭の馬に跨つた。ピエールは、自分の馬を引いてゐる馬丁の傍へ行つた。で、どの馬が一番溫和しいかと尋ねて、それに乘り、馬の鬣を引つ摑んで、馬の腹へ踵を壓し附けた、そして眼鏡が辷り落ちさうになつたが、辷も鬣と手綱とを放す事は出來ぬと思ひながら、高地から自分を眺めてゐる參謀將校たちの微笑に送られて、將官の後から馬を飛ばした。

三十一

ピエールが後を追つて行つた將官は、早足で丘を下りて、急にさツと左へ曲つてしまつた。ピエー

ルは、その後姿を見失つたので、自分の前方を進んで行く歩兵大隊の眞中に駈け込んだ。彼は、その中から脫け出ようとして、左へ向いたり、右へ向いたりした。併し到るところに兵卒共がゐて、それが皆眼に見えぬが、明かに重大な事柄に屈托した、同じやうに氣遣はしげな顏をしてゐた。彼等はすべて、何だか譯の解らぬ理由のために、自分たちを馬の蹄で蹈み躙つてゐる此白い帽子をかぶつた大男を同じやうな迷惑さうな、不審の表情をうかべて眺めた。

『何だつて彼奴は、大隊の眞中に乘り込まうていんだ?』と、一人の男がピエールに向つて怒鳴つた。今一人は銃の臺尻で、彼の馬を突いた。そしてピエールは鞍の前輪の上に屈んで、棒立ちにならうとする馬を、殆んど押へることも出來ずに、兵卒共の前方の、空地の方へ駈け出して行つた。

ピエールの前方には橋があつた、橋の上には兵卒共が立つて射撃してゐた。ピエールは、其方へ進んだ。彼はさうとは知らずに、第一の戰鬪でフランス軍の攻撃を受けた、ゴルキイとボロデイノとの間を渡してゐる、コロツチヤ河上の橋にと行つたのであつた。ピエールは行手に橋を見た、そして橋の兩側の煙の中や、前日彼が認めた牧場の新しく刈られた枯草の中で、兵卒共が何かやつてゐるのを見た。併し、そこで間斷なく銃火が發せられてゐるにも拘らず、彼は其所が戰鬪の中心地であるとは思ひも寄らなかつた。彼は、四方八方で唸つてゐる銃丸や、頭上を飛んで行く爆裂彈には氣が付かなかつた。彼は、河の彼岸に敵を見なかつた。自分の直ぐ傍で倒れた者が多かつたのに、隨分長い間戰死

者負傷者が眼に附かなかつた。彼は、その顏に尙ほ微笑をうかべながら、周圍を眺めてゐた。

『彼奴は戰線の前面で何をしてやがるんだらう?』再び誰やらが彼に向つて怒鳴つた。

『左へ行け、』『右へ行け、』と、人々が彼に向つて叫んだ。ピエールは右へ曲つた、と思ひ掛けなく自分の惡意なラーエフスキイ將軍の副官の傍へ乘りつけた。副官は、ピエールを怒つたやうにチラと見て、之れも亦まさしく彼に向つて怒鳴らうとしたらしかつたが、ピエールを夫れと認めたので、會釋した。

『何うしてこんな處へお出でになつた?』と副官は言つて、駈けて行つた。ピエールは自分のゐる場所ではない、自分など何の役にも立たないと思ひながら、再び人の邪魔になるやうな事があつてはならぬと案じて、副官の後から走つて行つた。

『何です、此處は? あなたと一緒に行つてもいゝんですか?』と、ピエールは訊いた。

『一寸待つて、一寸待つて、』と、副官は答へて、牧場にゐる丈夫さうな聯隊長の處へ駈けて行つて、何やら命令を傳へた、そして、それからピエールに向つて話しかけた。『何だつて此樣な處に被來しつたのです、伯爵?』と、微笑を浮べながら、『相變らず好奇心がお強いですな?』

『さうです、さうです、』と、ピエールは言つた。が、副官は馬首をめぐらして、もつと先きへ進んで行つた。

『此處は大丈夫ですが、』と、副官は言つて、『左翼のバグラチイオン師團の方は非常な激戰ですよ。』
『實際ですか?』と、ピエールは言つた。『それは何處です?』
『まア、私と一緒にあの丘にいらつしやい。あそこから見渡せますよ。併し我々の砲臺は未だ大した事はありません、』と、副官は言つた。『では行きますか?』
『えゝ、えゝ、一緒に行きませう、』と、ピエールは自分のまはりを見まはして、馬丁を探しながら言つた。ピエールが負傷兵に眼が觸れたのは辛つとその時が初めてゞあつた。或者は跟めきながら歩いてゐた、或者は擔架で運ばれてゐた。彼が前日通り抜けた好い香の枯草の塚のある牧場には、一人の兵士が帽子を冠らない頭を不恰好に仰向けざまにして、枯草の塚の上に横たはつてゐた。『何だつて、あの男を連れて行かないんです?』と、ピエールは言はうとしたが、やはり同じ方角を見てゐる副官のキツとした顏を見たので、默つてしまつた。
ピエールは馬丁を見つけ得なかつた。そして副官と共に、ラーエフスキイの砲臺の方へ谷合に沿うて馬を進めて行つた。彼の馬は副官の馬より遲れ、規則的な合間を置いて彼をヒョコリ〳〵躍らせた。
『あなたは餘り馬には馴れておられない樣ですな、伯爵、』と、副官が訊いた。
『いや〳〵、大丈夫です、併し何だかピョン〳〵跳ねるやうなんです、』と、ピエールは困つたやうな顏付をして言つた。

『あゝ!……ですが、あなたの馬は負傷してゐますよ、』と、副官が言つた。『右の前脚の膝の上のところが。銃丸に違ひありません。お目出度う、伯爵、』かう言つて、『あなたは、もう砲火の洗禮をお受けになつたんですよ。』
前進して、耳を聾するばかりの砲撃を續けてゐる砲兵の背後の、第六軍團の中を通つて砲煙中を進んだ後で、彼等は小さな森に這入つて行つた。そこは涼しくて、靜かで、秋の香に充ちてゐた。ピエールと副官とは馬を下りて、徒歩で丘を登つて行つた。
『將軍は此處に居られるかね?』と、砲壘に達すると副官は訊いた。
『今し方まで此處に居られましたが、こちらへ行かれました、』と、誰かゞ右を指しながら答へた。
副官は、この男を何うしたものかと思ひ惑つたやうな風で、ピエールを顧みた。
『僕の事はどうか御心配なく、』と、ピエールは言つた。『僕は丘へ登つて行きます、差支へないでせうな?』
『えゝ、さうなさい。あすこからなら、すつかり見えます、大して危險な事もありません、そのうち私が又連れに來て上げますから。』
ピエールは砲兵陣地に登つて行き、副官は馬を走らせて去つてしまつた。二人はそれつきり會はなかつた。唯餘程經つてから、ピエールはその副官が、その日片腕を失つたといふ事を知つた。

その丘——後になつてロシア軍の間には砲臺丘若しくはラーエフスキイの砲臺として知られ、又フランス軍の間には『大砲壘』、『致命砲壘』、又は『中央砲壘』として知られた丘だが——は、そこで幾萬といふ人間が殺された、又フランス軍がそれを陣地の鍵と認めてゐた、有名な場所であつた。

砲壘は、その三面に塹壕が堀つてある一つの丘から成立つてゐた、掩蓋の中には、十門の砲が並んでゐて、土壘に殘された隙間から射撃してゐた。

砲壘と一線に並んで兩側に幾門かの砲が据ゑられ、それ等も亦絶えず射撃をしてゐた。大砲の列の少し後方には歩兵隊がゐた。ピエールが、この丘に登つて行つた時には、少さな塹壕に取り卷かれ、僅かな大砲に護られてゐる此の場所が、この戰場で最も重要な地點だらうとは、思ひも寄らなかつた。

彼は實際(自分が唯ヒョッと此處にやつて來たからといふだけの事で)此處はどうせ重要な場所ではないのだと想像した。

ピエールは、砲臺を取り卷いてゐる掩堡の端に腰を下して、思はず愉快な微笑をうかべながら、自分の周圍に起つてゐる事を眺めた。ピエールは、折々立上つては、同じ微笑を顏に浮べながら、砲に裝彈したり、擊つたり、嚢や彈藥を持つて絶えず自分の傍を駈けて通つたりする、兵卒共の邪魔にならないやうに氣を付けて、砲兵陣地を歩きまはつてゐた。大砲は絶えず後から〳〵と擊ち出されて、耳を聾するばかりの轟音を揚げ、その地方全體を煙の雲の中に包んでゐた。

砲臺を掩護してゐる歩兵が、苦しさうな恐怖の顏付をしてゐるのに引き代へ、限られた人數で忙がしさうにその仕事をしてゐる、塹壕の他の部分とはまるで立ち切られてゐる砲臺そのものゝ中では、一般に熱心な昂奮の感情、卽ち、みんなが共通に持つてゐる一種の家族的な感情があつた。

軍人らしくない姿をして、白い帽子を冠つたピエールの樣子は、最初この小さな集團に面白からぬ印象を與へた。兵卒共は彼の側を走りながら、驚きと、そればかりでなく、恐怖の横眼をさへ彼に注ぐのであつた。古參の砲兵將校の、身長の高い、痘痕面の男が、一番端れの大砲の働きを檢べるとでも云ふやうな風をして、ピエールに近づき、不審さうに彼を見詰めた。

まだほんの子供の、明かに士官學校を出たばかりらしい、そして生眞面目に自分の指揮してゐる砲の監督をしてゐた子供らしい、丸顏の小さい將校が、ピエールに向つて嚴しく呼びかけた。

『失敬ですが、脇へ寄つて下さい、あなた、』と、言つた。『あなたは此處にゐてはいけません。』

兵卒共はピエールを眺めた時、不可ないと云ふやうに頭を振つた。けれども白い帽子の男が何も惡い事をせずに掩堡の傾斜に溫和しく腰を下したり、恥しさうな丁寧な微笑を浮べて、通る兵卒共に道を開けてやつたりしながら、まるで並木路を散步でもするやうに落着いて、砲火の下の砲臺を步きまはつてゐるのだといふことが、兵卒共の間に確く信じられて來ると、彼等の疑ひ深い惡意の感情は、聯隊と運命を共にする犬とが、牡鷄とか、山羊とか、その他種々の動物に對して常に兵卒共が抱く感

情に近い、遊び半分の親切な親しさに變り初めた。

兵卒共は早速腹の中で、ピエールを自分たちの小さなサークルの一人と認め、彼を自分たちの仲間とした、そして彼に名前を附けた。『我等の紳士』と彼等は彼を呼んだ、そして仲間うちで彼のことを機嫌よく笑つた。

一個の砲彈が、ピエールから二歩のところで、土を跳ね飛ばした。眼にかゝつた土を掃ひながら、彼はにつこりして四邊を見まはした。

『何うして、あなたは恐くないんです、あなた、ほんとに?』と、幅の廣い赧ら顏の兵卒が、ニヤリと笑つてその丈夫な白い齒を見せながら言つた。

『おや、それぢや君は恐いかね?』と、ピエールは訊いた。

『えゝ、無論恐いですとも!』と、兵卒は答へた。『彼奴(あいつ)は何の容赦もありませんよ。あなたを粉微塵にしてしまつて、腹を打つ飛ばしちまひますよ。誰だつて恐がらねえぢやゐられませんやね、』と、兵卒は笑ひながら言つた。

幾人かの兵卒共が面白さうな、親切げな顏をしてピエールの傍に立ち止つた。彼等は、ピエールが他の人と同じやうに話をしやうとは思ひ掛けなかつたといふ風で、彼の行爲が大變彼等を喜ばせた。

『それは我々の仕事ですよ——我々は兵卒なんですからね。だが、紳士には——驚くべき事です。紳

士ぢや變挺ですよ!』

『位置につけ!』と、小さな少年將校が、ピエールの周圍に集まつた兵卒共に向つて叫んだ。この若者が將校として任務についたのは今度が初めてか、せい〳〵二度目である事は明かであつた、それで、兵卒に對しても上官に對しても彼は極力几帳面、儀式張つて振舞つてゐた。

砲の轟きと小銃の音とは、戰場一面に擴がつて益々高くなつて行つた、バグラチオンの掩堡のある左翼方面が殊に烈しかつた。けれどもピエールのゐる場所からは、煙のために殆んど何も見えなかつた。その上、全世界からかけ離れて砲兵陣地に閉ぢ籠められてゐるやうな人々の、小さな集りを見守つてゐる事が、ピエールの注意の全部を占めてゐた。戰場の光景や音響によつて最初に感じた我知らぬ歡喜の情は、枯草の野に橫たはつてゐた唯一人の死んだ兵卒を見て以來、別の感情に道を讓つてしまつた。今掩堡の傾斜に腰を下しながら、彼は四邊に動きつゝある人々の姿を眺めてゐた。

十時頃までには、約二十名ばかりの人々が砲臺から擔ぎ出されてゐた、二門の砲が役に立たなくなつた。そして、益々盛んに爆裂彈が砲臺の上に落ちた。砲彈はヒュッ〳〵ビュー〳〵と、遠くから飛んで來た。併し砲臺の人々は、こんな事には注意を拂ふ樣子はなかつた。賑かな饒舌と冗談とが四方八方に聞たえ。

『此方(こつち)ぢやねえや、別嬪、』と、彼等の方に響きを立てゝ飛んで來た榴彈に向つて、一人の兵卒が叫んだ。

『歩兵の方にも行つてやれ——』と今一人が、榴弾が頭上を飛び越して、歩兵の列の間に落ちた時、くす〳〵笑ひながら言ひ添へた。

『何だ、友達の來るのでも見てゐるのか、え、おい？』と今一人の兵卒が、飛んで來る砲弾を見て首をすくめた農夫に揶揄つた。

五六人の兵卒は掩堡に集つて、前方で爲されてゐることを眺めてゐた。

『彼奴等は前哨を占領したぞ、見ろ、退却してる、』と掩堡の上から指しながら、彼等は言つた。

『自分の仕事に氣をつけろ、』と、老軍曹が彼等に怒鳴つた。『彼奴等が退却するのは、ずつと後方ですることがあるからだぞ。』そして軍曹は一人の兵卒の肩を引つ摑んで、自分の膝で小突いた、笑聲がどつと起つた。

『第五砲、進め！』と、一方で彼等は叫んでゐた。

『さア、うんと引つ張れ、みんな一緒に！』と、弾丸を填める人々の快活な聲が叫んだ。

『やア、彼女はもう少しで（我々の紳士の）帽子をかつ飛ばすところだつたぞ、』と赤ら顏のとぼけた兵卒が、齒を見せて笑つた。『やい、不恰好な醜婦め！』と一つの車輪と、一人の兵卒の足とを撃つた砲弾に向つて、叱言を言ふやうに言ひ添へた。『やい、そこにゐる狐共！』今一人は、砲の間を這つて出たり入つたりしては負傷者を收容してゐる農夫の國民兵に向ひ、から呼びかけながら笑つた。『貴様は

俺たちの粥を何とも思はねえのか、やい？　あゝ、烏共、凍りついたか！』彼等は足を打切られた兵卒の有樣に尻込みしてゐる國民兵達に向つてから怒鳴つた。『うゝ……うゝ……若者』と、農夫共の口眞似をして叫んだ。『俺は何うしても好かねえだ、好かねえだ！』

ピエールは、弾丸が兵卒どもの眞中に落下する度毎に、兵卒どもが失はれる毎に、一般の意氣軒昂が益々著しくなつて行くのに氣が付いた。

暴風雲が彼等の上に低く蔽ひかぶさつて來れば來る程、それ等の人々の顏に電光のやうに輝くあの潛熱——恰も彼等の危險に應じて、それに抵抗する爲めに呼び出されたやうな——の閃きが、益々輝やきて、益々頻繁になつて來るのであつた。

ピエールは前方の戰場は見なかつた、そこに行はれてゐる事柄には、少しも興味が起らなかつた。彼は自分の魂の中でも亦燃えてゐるやうに思はれる、あの輝く火の觀照で全く夢中になつてゐた。

十時に、砲臺の前方の、鍬やカメンカ川のほとりにゐた歩兵が退却した。負傷兵を銃で撞ひながら、直ぐ傍を駈足で退却して行くのが、砲臺から見えた。幕僚を從へた一人の將官が砲壘に登つて來た、聯隊長と何やら話をして腹立たしげにピエールを睨みつけた後で、砲臺掩護のために後方に立つてゐる歩兵に向ひ、砲火に身を曝さないやうに身を伏せてゐろと命令して置いて、また行つてしまた。それから太鼓の音が砲臺より更らに右手の歩兵隊の中で聞えた、そして、叫び聲が號令を與へてゐたか

と思ふと、歩兵の列が前進して行くのが砲臺から見えた。

ピエールは掩堡の上から眺めて見た。一人の姿が特に彼の眼を惹いた。それは將校で、眞青な子供らしい顏をしながら、後方へ向つて歩いてゐた。彼は劍を下に向けて持ち、不安さうに四邊を見まはしてゐた。

歩兵隊列は煙の中に消えた、が尙ほその長く尾を引く叫び聲と急速な小銃發射とは聞くことが出來た。二三分經つと負傷兵の群と一隊の擔架とが、その方向から歸つて來た。爆裂彈は、益々頻繁に砲臺に落下した。五六人の者は收容されもせずに、地面に横たはつてゐた。兵卒共は前より一層忙しげに敏活に砲のまはりに立働いてゐた。今はもう誰もピエールに構ふものはなかつた。彼は邪魔になるといふので二度怒鳴られた。上級將校は顰めツ面をしながら、一つの砲から他の砲へと大跨で速く歩いて行つた。少年將校は頰つぺたを一層眞赤にしながら、前より更らに几帳面に兵卒共に命令を與へてゐた。兵卒共は彈藥を持つて來たり、くるりと廻つたり、裝藥したりして、非常な敏活さで彼等の任務を果した。彼等はまるで發條仕掛のやうに動いた。

暴風雲は益々濃く垂れ下つて來た、そしてピエールの見詰めてゐる例の火は、前より一層明るく誰の顏にも輝いた彼は上級將校の近くに立つてゐた。小さな少年將校が駈けて來て、帽子に手を上げながら、上級將校に敬禮した。

『報告いたします、聯隊長殿、彈藥はもう八發しか殘つて居りません。砲擊を續けませうか?』と、彼は訊いた。

『葡萄彈!』から叫んで、上級將校は掩堡越しに彼方を見た。

不意に何事かゞ起つた、少年將校が呻き聲を立てゝ、片羽を打たれた小鳥のやうに、ぐる〳〵まはつて地面に坐つた。すべてがピエールの眼の前では、不思議に、ぼんやりと、暗くなつたやうに思はれた。

後から〳〵と砲彈が飛んで來て、掩堡や、兵卒共や、砲などを擊つた。それ迄さういふ響きが、一向耳に入らなかつたピエールは、今はそれ以外の音は何も聞えなくなつた。砲臺の右側では、兵卒共が『萬歲!』と叫びながら走つてゐた、それが前進してゐるのでなくて、退却してゐるやうにピエールには見えた。

一個の砲彈が、それを前にしてピエールが腰を下してゐる掩堡の極く緣にあたつて、土を跳ね飛ばした、眞黒な丸い塊が彼の直ぐ眼の前に閃いて、同時に何ものかへドサリと飛んだ。砲臺に來ようとしてゐた國民兵共は、逃げ歸つた。

『みんな葡萄彈でやれ!』と、將校が叫んだ。

軍曹が將校の處へ走つて行つて、憎えたやうな呼き聲で、(それは丁度晩餐會の席上で、膳夫が命ぜら

れた酒がもうない事を、主人に向つて言ふやうに)弾薬がもうない事を話した。

『悪黨共奴、何をして居やがるんだ?』と、將校はピエールの方へ向きながら叫んだ、上級將校の顔は赤くなつて汗をかいてゐた、その射るやうな眼はギラリ〳〵輝いた。『豫備隊に行つて、弾薬函を持つて來い!』と、ピエールの眼を避けながら、兵卒に向つて、腹立たしさうに叫んだ。

『私が行きませう、』とピエールが言つた。將校は夫れには何とも答へないで、大跨に向ふ側に歩いて行つた。

『撃方止め……待て!』と將校は叫んだ。

弾薬を取りに行けと命ぜられた兵卒は、ピエールに突き當つた。

『あゝ、あなた、此處はあなたなどのゐる處ぢやありません、』兵卒はかう言つて、走つて行つてしまつた。

ピエールは、少年將校が坐つてゐる場所を避けて、その兵卒の後から走つて行つた。

一弾、二弾、三弾、と駈け下りて行くピエールの頭を越して、砲弾が前や、横や、後の地上を打つた。

『俺は何處に行くんだらう?』と彼は綠色の弾薬函の處に駈けつけた時に不意に怪しんだ。引き返さうか、進まうかと、決しかねて立止つた。突然恐ろしい激動が彼を後方の地上へ刎ね飛ばした。その途端に焔の閃きが眼を眩ました、そして轟きとシュッシュいふ音と、物の碎ける音とで彼の耳はガーンと鳴つた。

我に返ると、ピエールは自分が地面へ手を突いて坐つてゐるのを見出した。自分の傍にあつた弾薬函は無くなつてゐた。二つ三つの焦げた綠色の板と櫃襤褸とが、焦げた草の上に散らばつてゐた。一頭の馬が轅の折れた斷片を後にがら〳〵引摺りながら駈け出して行つた、と、今一頭の馬はピエールのやうに地上に横になつて、尾を長く引いて耳を劈くやうな叫聲を立てゝゐた。

三十二

ピエールは恐怖のため我にもあらず跳り上つて、自分を取巻いてゐる恐ろしさから逃れる唯一の避難所として、砲臺に走り歸つた。

砲壘に駈けつけると同時に、ピエールは砲臺からは、發砲の音が少しも聞えないで、人々が其所で何やらしてゐるのに氣が付いた。彼は夫れが何ういふ人々であるかを見極める暇がなかつた。上級將校が此方に背中を向けて、まるで下の方の何ものかにチツと見入つてゞもゐるやうに、土壁の上に横たはつてゐるのを見た、そして一人の兵卒が、自分を摑まへてゐる人々の手から拂ひ逃れやうとしながら、「仲間!」と叫んでゐるのに氣が附いた、それから彼は又その他に不思議な事を見た。

だが、彼が聯隊長が殺されてゐる事や、『仲間！』と叫んでゐる兵卒は捕虜であつた事を了解する間の無いうちに、もう一人の兵卒が彼の面前で、鉄剣で背中を刺し貫かれた。彼が砲壘に駈け着いたか着かないに、黄ろい汗ばんだ顔をして、青い軍服を著てゐる痩せた男が、手に剣を持つて、何事かを叫びながら彼へ走り寄つた。互ひに衝つかり合つた時に、ピエールは本能的に自分を守りながら、両手を伸ばしてその男(それはフランス将校であつた)の肩と喉とを引つ摑んだ。将校は剣を落して、ピエールの領子を摑んだ。

二三秒の間は、お互ひに憎えた眼をして、相手の餘り親しみのない顔を睨み合つてゐた、二人は、自分たちが何をしてゐるのか、何をしたらいゝのか解らないで、まご〳〵してゐた。『俺が捕虜にされたのか、それとも俺が此奴を捕虜にしようとしてゐるのか？』二人ともこんな事を思ひ惑つた。が、フランス将校の方が、疑ひもなく自分の方が捕虜になつたのだと餘計に信ずるやうになつてゐた、夫れは、本能的な恐怖に動かされたピエールの力強い手が、将校の喉をだん〳〵強く緊めつけてゐたからである。フランス人は何か言はうとした、その途端に突然二人の頭の直ぐ上を、砲弾が恐ろしい唸りを立てゝ飛び過ぎた、するとピエールには、フランス人の頭が持つて行かれてしまつたやうに思はれた、それ程素早く彼は首を縮めたのである。

ピエールも亦首を縮めて手を離した。自分が捕虜になつたのだといふ問題などは、もう少しも考へ

ないで、フランス人は砲壘に逃げ歸つた。と同時にピエールは、自分の足を摑むやうに思はれる戰死者負傷者に躓きながら、丘を駈け下つた。

けれども彼が麓に達しないうちに、ピエールは、ロシア兵の密集團が、互ひに打つかり合つたり、躓き合つたりしながら、非常に威勢よく、砲壘眼蒐けて駈けて行くのに出會つた。(これはイエルモロフが、このやうな軍功を爲し遂げ得たのは、唯自分の勇氣と幸運とによるのだと言つて、自分の名譽だと稱した襲撃であつた、彼が自分のポケットにあつた聖ゲオルギイ十字章を砲壘に撒き散らしたと想像されてゐる襲撃であつた。)

砲壘を占領したフランス軍は逃走した。我が兵は夫れを止めるのが困難だつた程勢ひ込んで、砲壘のずつと先まで追撃した。彼等は、砲壘から捕虜を連て下してゐたが、その中には、将校たちに取巻かれたフランスの将官が一人ゐた。兩軍の負傷者の群——その間にはピエールが顔を知つてゐる人達もゐた——は苦痛のために顔を歪めながら、砲壘から歩いたり、這つたり、擔架で運ばれたりしてゐた。

ピエールは先程一時間以上を過した砲壘に這入つて行つた、が、先刻彼を仲間の一人として容れた、あの小さな兄弟のやうな群の中で殘つてゐる者は一人もなかつた。そこには彼が先程は見なかつた、澤山の戰死者がゐた。だがその幾人かは彼の見覺えのある人々だつた。少年将校は土壘の縁の血の池

の中に、縮こまつて、やはり坐つてゐた。赤ら顔の愉快な兵卒は、まだ痙攣的に身體をヒク〳〵させてゐたが、人々は此の男を連れては行かなかつた。

ピエールは坂を駈け下りた。

『おゝ！今こそ彼等は止めるだらう、今こそ自分たちのした事に戰慄するだらう！』と、ピエールは戰場から動き去る擔架の群に的もなく蹤いて行きながら思つた。

けれども太陽はまば煙のヴェールの後に高く昇つてゐた、そして前面、殊に左の方、それからセミヨノヴスコエの附近では尙ほ擾亂が煙の中で湧き立つてゐた、そして大砲や小銃の聲きは、未だなか〳〵衰へるどころではなく、丁度最後の絶望的な努力として、耳を聾するばかりの叫喊にその全力を籠める人のやうに、益々高く、益々絶望的になつて來た。

三十三

ボロヂイノの戰の主な戰闘は、ボロヂイノとバグラチオンの掩堡との間の、廣さ七千フィートの廣場で行はれた。その地以外では、一方にはその日の正午頃ウワーロフ騎兵隊の一部で戰闘が行はれ、他方ではウヲイツアの背後に於て、ポニヤトウスキイとツチコフとの間に小衝突（こぜりあひ）があつた。が、これ等二つ

の戰闘は、戰場の中心で起つた戰に較べれば、部分的なもので、決して重要ではないものであつた。その日の主なる戰闘は、ボロヂイノと森の傍の掩堡との間の、兩軍から見える廣々とした場所で、最も單純な、最も無技巧な仕方で戰はれたのであつた。

戰闘は、兩軍合せて數百門の大砲の砲撃を以て開始された。やがて平原全體が煙に蔽はれると、フランス側では、右手からドゼエス及びコンパン兩師團が掩堡に向つて進み、左手から總督の諸聯隊がボロヂイノ目蒐けて進んだ。掩堡はナポーレオンの立つてゐるシェヴアルデイノ砲壘からは一ウエルストあつたが、ボロヂイノは直線で二ウエルスト以上も離れてゐたから、ナポーレオンはそこに起つてゐる事を見る事は出來なかつた、殊に霧と混り合つた砲煙が、平原のその部分全體をすつかり隱してしまつたので、尙ほ見る事が出來なかつた。砲壘に向つて進んだドゼエス師團の兵卒共は、彼等と掩堡との間に横たはる谷に姿を沒したまでは見えてゐた。彼等が谷にその姿を沒するや否や、大砲と小銃との煙は、谷のその側の傾斜全體を隱してしまつた程濃くなつて來た。煙を透して人影らしい何か黑い物がチラリ〳〵見えた、時によると銃劍のキラ〳〵するのが見えたりした。併し彼等が止つてゐるのか、動いてゐるのか、それがフランス兵なのか、ロシア兵なのかは、シエヴアルデイノからは見られなかつた。

太陽は輝かしく昇つてゐた、そして、その斜めの光線は、手を翳（かざ）して掩堡の方をながめてゐるナポ

ーレオンの顔を眞直ぐに照らした。煙が掩堡の上に垂れかぶさつてゐた、そして或る瞬間には、動いてゐるのは煙のやうにも思はれたけれども、次の瞬間には軍隊が煙の中に動いてゐるやうにも思はれた。時々射撃の間に叫び聲が聞えた、併し其所で何が爲されつゝあるのかは到底解らなかつた。

砲壘に立つてゐるナポーレオンは、望遠鏡をもつて眺めてゐた、そしてガラスの小さな圏の中に、煙や兵卒や——或時には自分の兵隊、或時はロシア兵——が見えた。けれども自分の見たのが何處だつたのか、肉眼で見直した時には解らなかつた。

彼は砲壘から下りて、その前をあちこち歩き出した。

時々彼はじつと佇んで、砲聲に聞き入つたり、戰場を見つめたりした。

彼の立つてゐる下の方からも、上の方の數名の將官共の立つてゐる砲壘からも、掩堡で起つてゐる事を見分ける事が出來なかつたばかりではなく、生きたり死んだり、負傷したりする彼我兩軍によつて、或時は同時に、或時は交互に占領されてゐる掩堡そのものに於ても、慴えて狂氣のやうになつた兵卒共は、自分達が何をしてゐるかといふ考へはてんで持つてゐなかつた。絶えず砲火銃火の發せられてゐる眞ん中で、何時間といふもの引續いて、ロシアとフランスの歩兵騎兵は、代る〳〵にそこを占領した。彼等はそこに突貫し、倒れたり、射撃したり、衝突したりして、互ひに何うしていゝか解らず、叫び聲を立て、そして再び退却して行つた。

戰場からは絶えず副官等が、戰鬪の經過に關する元帥たちの報告をもつて、ナポーレオンの所へ駈けつけた。併しそれ等の報告はすべて僞りであつた、何故かといふと、戰鬪の猛烈な最中に或る一定の瞬間に起つてゐる事を述べるのは不可能だから、そして副官の多くは實戰場に臨んだ事はなく、他人から聞いた事をそのまゝ繰返してゐるに過ぎないから、そして又、副官等が二ウエルストも三ウエルストも馬を走らせてナポーレオンの處にやつて來る間には戰況は一變し、從つて折角もたらした報告が既に眞實ではないからである。かういふ風に、一人の副官が、ボロデイノを占領し、コロツチヤ河の橋はフランス軍の手中に在りといふ報告を持つて、總督のところから駈けつけて來た。副官は、軍隊を橋を渡つて進ませていゝかとナポーレオンに訊ねた。ナポーレオンの命令は、彼岸で陣形を整へて待てといふのであつた、けれども彼が此の命令を與へたより餘程前に、副官がやつとボロデイノを出發したばかりの時分にその橋は、ビエールがその戰ひの始めに加はつてゐた例の小衝突で、ロシア軍のために打ち壞されて燒き拂はれてしまつたのであつた。

一人の副官が、眞青な慴えた顏をして、掩堡から駈けつけて來て攻撃は撃退され、コンパンは負傷し、ダヴウは戰死したといふ報告をナポーレオンの所へもたらした、所が、その間の掩堡は他の師團によつて占領されてゐた、そしてダヴウは微かな傷を負うた許りで、實際生きてゐて元氣が好かつたのであつた。かういふやうな何うしても人を誤解に導かずには置かないやうな報告の上に、ナポーレ

オンは彼の命令の基礎を置いてゐたのだ、その命令は、彼がそんな命令を出さない前に大概實行されてゐるか、それでなければ決して實行されなかつたか、實行する事が出來なかつたかであつた。

もつと戰鬪舞臺に近いところにはゐたが、それでもナポーレンと同樣に、實際に戰鬪には加はらず、時々小銃の着彈距離の中へ馬で乘り込むに過ぎない元帥や將官たちは、ナポーレオンには訊かずに策戰をして、何處から如何なる方向に向つて射擊せよとか、騎兵は何處へ突進せよとか、歩兵は何處へ駈足をせよとか、いふやうないろ〳〵の命令を下した。けれども彼等の命令さへも、ナポーレオンの命令とひとしく、極く稀に、僅かな範圍に於て、實行されるだけであつた。

實際に起つた事柄は、大部分は、彼等が爲せと命令した事とは反對なものであつた。進めと命ぜられた兵卒共は、葡萄彈の砲火の下に自分たちがゐるのに氣が附いたので退却した。一地點に止まつてゐろと命ぜられた兵卒共は、突然眼の前にロシア兵が現はれたのを見たので、逃げ出したり、或はそれに向つて突貫したりした、そして命令を受けもしない騎兵隊が逃げて行くロシア兵の後を追つかけた。こんな風にして騎兵二個聯隊が、駈足でセミョノヴスコエ谷を渡つたが、丘の頂上に達するや否や、ぐるりと廻つて、再び遽てゝ逃げ歸つて來た。それと同樣に歩兵も、時々動けと命ぜられたのとは、反對の方向に動いた。

何時、何處に向つて砲を動かすとか、何時歩兵を射擊に出すとか、何時騎兵を、ロシヤの歩兵を蹂

躙させにやるとか——いふやうな決定はすべて、ナポーレオンはおろか、ネエーやグヴウやミユラーにさへ何の照會もなく、隊伍の中にゐる一番近い將校によつて爲されるのであつた。その將校達は命令を實行しなかつたり、自分が責任を背負ひ込んだりして、困難な立場に陷る事も少しも恐れなかつた、何故かといふと、戰爭に於いて賭けられてゐるものは、何人にとつても最も貴重なもの——即ち自分の生命だからである、で、或時は逃げる事が安全であるやうに思はれ、或時は又進む事が安全であるやうに思はれる、そして爭鬪の最中に置かれたそれ等の人々は、その刹那の氣分に從つて行動したのである。

實際かういふ進んだり、後へ戻つたりする總ての行動は、軍の位置を革めもしなければ、影響も及ぼさなかつた。互ひに仕合ふ一切の突擊は、殆んど何の害をも與へなかつた、害とか死とか、負傷とかいふやうなものは、それ等の人々が彼方此方へ駈けまはる展けた廣場の中を飛び交ふ、砲彈や銃丸の仕業であつた。人々が、砲彈銃丸の飛び交ふその曝された廣場の外に出るや否や、上級將校は早速隊形を整へた、規律を取り直した、そして、その規律の力によつて彼等を再び砲火の下に歸らせた。そこで又死の恐怖のために、彼等は凡ゆる規律を失ひ、群集のその時〳〵の衝動のまゝに彼方此方と突進するのであつた。

三十四

ナポーレオンの將軍等、卽ち砲火の巷の近くにゐて、時々その中へ馬を乘り入るゝダヴウやネエーやミユラー等は、幾度も規律立つた軍隊の大集團を、その砲火の巷に導いた。けれども、以前の凡ての戰に於ていつも起つてゐた事とは違つて、敵が逃走したといふ事を聞くどころか、規律正しい軍隊の集團が、規律のない狼狽した群集となつて歸つて來た。彼等は又その群集を整然たる隊形に整へて見たが、その人數は益々減少するばかりであつた。その日の晝中にミユラー副官をナポーレオンに送つて、援軍を求めた。

ナポーレオンは砲壘の下に坐つてポンスを飮んでゐた、と、ミユラーの副官が駈けつけて來て、若し陛下がもう一個師團を出して下されば、ロシア軍は潰走するに違ひないといふ使命を傳へた。

『援軍だと?』と、ナポーレオンは、恰もその言葉を了解する事が出來ないかのやうに、ミユラーそつくりの黒い髮毛を風に漂ふやうに捲毛にしてゐる奇麗な、少年のやうな副官を見詰めながら、驚いて吃として言つた。『援軍!』とナポーレオンは考へた。『弱くて後援のないロシア軍の一翼に向つて、既に我軍の半分を集中してゐるのに、何うして援軍などが要るのだらう!』

『ネープルス王に言へ、』と、ナポーレオンは嚴かに言つた。『まだ正午にならん、俺は、俺の將棊板を未だハツキリは見ないと。行つて宜しい。』

長い捲毛をした奇麗な少年らしい副官は、深い溜息を一つして、そして手を帽子に擧げたまゝ、戰場へ馬を走らせて歸つて行つた。

ナポーレオンは立上つて、コーランクウルとベルチエーを呼び寄せて、戰爭とは何の關係もない事柄を話し初めた。ナポーレオンが興味を覺え出したその話の最中に、幕僚を從へて、蒸氣の立つてゐる馬に乘つて、砲壘へ來る一人の將官の方へ、ベルチエーの眼が向つた。それはブリアールであつた。

馬を下りるとブリアールは、皇帝のところに急いで歩いて來て、大きな聲で、援軍が絶對に必要である事を大膽に說明し出した。彼は若し皇帝等にもう一個師團持たせてくれれば、ロシア軍は全滅するといふことを自分の名譽にかけて誓つた。

ナポーレオンは肩をゆすつて、何とも答へずに、あちこち歩きつゞけてゐた。ブリアールは聲高に且つ熱心に、自分のまはりに立つてゐる御附武官の將官たちと話を初めた。

『お前はたいへん遠くてゐるぞ、ブリアール、』と、ナポーレオンは再びブリアールの傍へ歸つて來て言つた。『戰爭の眞最中にはよく間違ひをし易いものだ。もう一度行つて見て來て、それから私のところへ來るが宜い。』ブリアールの姿が未だ見えなくならないうちに、今一人の使者が戰場の他の部分から

駈けて來た。

『やア、一體何用だ?』と、ナポーレオンは幾度も邪魔をされて癇癪を起した人のやうな調子で言つた。

『陛下、公爵が……』と副官が言ひかけた。

『援軍を乞のだらう?』と、ナポーレオンは憤然とした身振りで言つた。副官は肯定的に頭を下げて、引續き報告をしようとしたけれども、皇帝は側を向いて二歩歩いたかと思ふと立止つて振り返り、ベルチエーを招いた。『豫備軍を送らなければならんが、』と、微かな身振りをして言つた。『誰をやつたら宜からう? どう思ふ?』と、彼が『俺が驚にしてやつた鷲鳥の雛』と後になつて呼んだベルチエーに訊ねた。

『クラパレード師團、陛下、』と、師團、聯隊、大隊をすつかり暗んじてゐるベルチエーは答へた。

ナポーレオンはそれに同意して點頭いた。

副官は、クラパレード師團へ駈けて行つた。そして少し經つと、砲壘の後に止つてゐた新近衛兵が、動き出した。ナポーレオンは默つて、その方向を見詰めてゐた。

『いや、』と、彼は不意にベルチエーに向つて言つた、『クラパレードをやる譯には行かん。フリアン師團をやれ。』

クラパレード師團よりも、フリアン師團をやる方が別段利益がある譯でもないし、今さらクラパレードを後へ戻してフリアンをやるのは、不便で時間が空費になるといふことが明かであつたけれども、その命令は實行された。ナポーレオンは、秘藥で以て自然の進路を妨げる醫者の行爲を、あんなに見破つて非難して置きながら自分の軍の事には丁度その醫者と同じ事をやつてゐるのだとは氣が付かなかつた。

フリアン師團は、他のと同じに戰場の煙のうちに消えてしまつた。副官等が絶えず四方八方から駈けつけて來た、そして、みんな言ひ合はしたやうに、同じ事を言つた。みんなが援兵を乞ふた、みんなはロシア軍がしつかり踏み止まつてゐて、地獄のやうな砲火を注ぎつけてゐるものだから、その砲火の下でフランス軍はだん〳〵溶けて失くなつて行くのだと語つた。

ナポーレオンは、陣用椅子に腰を下して考へ込んでゐた。評判では旅行好きのムシュ・ド・ボオツセーは、早朝來飯を食はなかつた、で、皇帝に近づいて、恭々しく陛下に朝飯を勸めて見た。

『もう陛下には御勝利のお祝ひを申し上げてよからうと存じます、』と、彼は言つた。

ナポーレオンは頭を振つた。その否定は、唯勝利だけに關するもので、朝飯に關するものではないと想像したムシュ・ド・ボオツセーは、朝飯が食べられる場合に、朝飯を食べることを妨げる理由は世界ぢゆうにない、と恭々しく冗談口をきいて見た。

『馬鹿……』ナポーレオンは突然陰氣に叫んで、彼の方へ背を向けた。ゆらりゆらりとした歩きつきで、他の將軍たちのところへ歸つて行く時、ムシュ・ド・ボオツセーの顏には、同情と後悔と歡喜との、聖者のやうな微笑が輝いた。

ナポーレオンは運の好い博徒が、無暗に金を賭けて、いつも勝つてゐた後で、よく注意して不慮の事故をすつかり數へ擧げた上でやつて見たその時に、自分の進路を考へれば考へる程、益々自分の負ける事の確かであるのが解つた場合に感ずる、あの苦い感情を經驗してゐた。

兵卒共も同じであつた、將官たちも同じであつた、そこには同じ準備、同じ配置、同じ『Comte et énergique（簡潔で强い）』な宣言があつた。ナポーレオン自身も同じであつた——それを彼は知つてゐた。彼は自分が昔よりは今の方が、實際ずつと經驗が增して來て、老練になつたことを知つてゐた。敵さへアウステルリツツやフリードランドの時と同じであつた。けれど彼の手の抵抗し難き打撃は、魔術のためにその力を奪はれてしまつたやうに思はれた。

何時も變らずに成功の冠を頂いてゐた總ての昔の兵の操縱法、例へば砲を一點に集中するとか、戰線を破るために豫備軍を進ませるとか、「鐵の人」たる騎兵の襲撃だとか、總てのかうした手段は用ひられた、而も夫れで勝利が得られるどころではなく、各方面から將官が負傷したとか、戰死したとか、援軍が必要だとか、軍が亂れたとか、ロシア軍は到底退却しないとか、いふやうな同じ報告が絕へず

降るやうに來るのであつた。

これまでは命令を二つ三つ與へ、二言か三言云へば、それで元帥や副官等がニコ〳〵顏で、祝辭を述べに駈けつけて來て、分捕ものとしては全軍團を捕虜とし、旗や鷲印の旗を幾束も得、砲や軍需品を得たと報告し、そしてミュラーが輜重を鹵獲するために騎兵をやる許可を乞ふたものであつた。ロデイでも、マレンゴーでも、アルコールでも、ユナでも、アウステルリツツでも、ツグラムでも、その他何處でも、彼處でもみなさうであつた。ところが今は何だか變なものが、ナポーレオンの部下の上に襲ひかゝつてゐるのであつた。

掩堡を占領したといふ報告があるにも拘らず、ナポーレオンは今度は物事が同じではない、前の諸戰爭とは少しも同じではないのを見た。彼は、自分の感じてゐる事を、自分のまはりにゐる軍事に經驗のある人々も、亦感じてゐるのを見た。彼等の顏はみんな陰鬱であつた。すべて互ひの眼を避けてゐた。今起つてゐる事の意味を摑み得なかつたのは、ボオツセー唯一人であつた。ナポーレオンは長い間の戰爭の經驗に依つて、有らゆる手段を盡して八時間の間あらゆる努力をしても、尙ほ成功しない攻擊が、一體何を意味してゐるかといふ事をよく知つてゐた。彼は、これが敗北に等しいものであつて、今この戰爭の危機一髮の際には、ほんの一寸した偶然の機會が、自分及び自分の軍の滅亡になるといふ事を知つてゐた。僅か一回の勝利も得られなければ、二ケ月もかゝつて旗一本、砲一門、軍團

ひとつ獲られなかつた此の不思議なロシア戰役の全體を心の中で繰り返して見た時、自分の周圍の人々の顏に陰鬱が隱されてゐるのを見、ロシア兵が尙ほその陣地を守つてゐるといふ報告を耳にした時——丁度夢魔のうちで經驗するやうな恐ろしい感じが彼を襲つた、自分の破滅になるかも知れぬやうな、さま〴〵の運の惡い偶發事變が心に浮んで來た。ロシア軍が我軍の左翼を襲ふかも知れない、我軍の中央を突破するかも知れない、流彈にあたつて此の自分が死ぬやうな事があるかも知れない、こんな事はみんな有り得べき事だ。今までの戰では、彼は唯勝利の可能のみを考へてばかりゐたが、今は數限りない運の惡い偶然な機會があらはれて來た、そして彼は、それを總て待ち設けてゐた。さうだ、それは丁度夢魔のやうなものだ、誰かゞ自分に打ち掛つて來る夢を見る、で、夢の中で腕を上げて、敵手を撲り倒すに違ひないと思ふやうな力で一擊を加へようとすると、腕が繰綿のやうにへな〳〵になり、力がなくなつて、そして避け難い死の恐怖が意氣地のなくなつた身を襲つて來るのである。

ロシア軍が、フランス軍の左翼を攻擊してゐるといふ報告は、ナポーレオンにさういふ恐怖を起させた。彼は默つて砲壘の下の陣用の椅子に腰を下して、肘を膝につき、頭を兩手に埋めてゐた。ベルチエーがやつて來て、戰況を確かめる爲めに戰線の視察をしなければならないと言つた。

『何だ！　何と云ふのか？』と、ナポーレオンは言つた。『さうだ、馬を持つて來るやうに言つてくれ。』彼は馬に乘つてセミヨノヴスコエに出かけて行つた。

ナポーレオンが馬を進めて行く平野全體に亙つて、そろ〳〵と消えて行く煙の中に、人間や馬が或はひとつ、或は重り合つて、血の池の中に倒れてゐた。斯くの如き恐ろしい光景、こんなに狹い場所に、このやうに戰死者が澤山ゐた事は、ナポーレオンにしても、將官たちの誰にしても、未だ曾て見たことのないものであつた。十時間も止まない大砲の轟きは耳を疲れさして、この光景に一種特別な性質を與へた（さながら生きた繪に伴なふ音樂のやうに）。ナポーレオンは、セミヨノヴスコエの高地に上つて行くと、見馴れぬ色の軍服を著た兵卒の隊列を煙を透して見た。彼等はロシア兵であつた。

ロシア軍は、セミヨノヴスコエと砲壘との後に密集部隊を作つて立つてゐた、そして彼等の砲はその全線に沿うて絶えざる轟きと砲煙とをつゞけてゐた。それは戰爭ではなかつた。それはフランス軍に取つても、ロシア軍に取つても共に何等の益もない、長びかされた殺戮であつた。ナポーレオンは馬を控へて、先刻ベルチエーに呼び起されたあの物思ひの夢幻のうちに再び沈んだ。彼は、自分の眼の前や周圍に演じられてゐる事件、自分によつて導かれ、自分の上に基を置いてゐると考へられてゐた事件、即ち不成功になつて初めて、餘計な恐ろしいものとして彼を驚かした此事件を、もう止める事は出來なかつた。ナポーレオンのところへ馬を駈けさせて來た一人の將官は、舊近衞兵を戰鬪に參加されるやうにといふ勸告をした。傍らに立つてゐたネエーとベルチエーとは、この將官の亂暴な勸告に對して、視線を交はして輕蔑むやうに微笑んだ。

ナポーレオンは、首を垂れて、暫らくの間默つて座つてゐた。

『フランスから八百リーグも離れて、私は態々私の近衛兵を亡ぼさうとは思はない、』と、言つて、彼は馬の向きを變へ、シエヴアルデイノに歸つて行つた。

三十五

白髪頭を垂れて、重い肥た身體をぐつたり沈めてゐるクツウゾフは、ピエールがその朝見たと同じ位置に、毛氈の敷かれた腰掛の上に腰を下してゐた。彼は何の命令も與へないで、唯自分に申し出された事に對して同意を與へたり、或はそれを控へたりしてゐた。

『さう〳〵、さうするが宜い、』と、彼はいろ〳〵の勸告に對して答へるのであつた。『さう〳〵、行つて、一つ見て來給へ、君、』と彼は自分の近くにゐる副官の一人にから叫び、それから次ぎのものにも呼ぶのであつた。それでなければ又、『いや、さうしない方が宜いよ。暫時待つたが宜からう、』と彼は言ふのであつた。彼は自分のところに持つて來られた報告を聞いて、命令を請はれると、命令を與へた。だが彼が報告を聞いてゐる時には、語られてゐる言葉の意味には殆んど興味がなさゝうで、語り手の顏の表情、その聲の調子の中の別の何ものかが、より多く興味を惹いたやうであつた。長年の

軍事上の經驗から、彼は一人の人が、命を賭して戰つてゐる數十萬の人間を導くなどゝいふ事は出來ないといふ事や、戰の運といふものは、總司令官の與へた命令によつて決定されるものでもなければ、軍の止まつてゐる位置によつて決定されるものでもなく、又砲の數とか、戰死者の多少とかによつて決定されるものでもなく、軍隊の精神と呼ばれる、あの眼に見えぬ力で決定されるのであるといふ事を知つてゐた、そして老功を以て、さういふ事實を認めてゐた、で、彼はその力の動くまゝに、自分の力の及ぶ限りは、その力を導いて行つた。

クツウゾフの顏の大體の表情は、集中された靜かな注意と熱心と夫れであつて、その弱い老體に、辛つとの事で打勝つてゐるといふ風であつた。

十一時に人々は、一度占領された掩堡から再びフランス軍を擊退したが、併し、バグラチオンが負傷したといふ報告を、クツウゾフのところに持つて來た。クツウゾフは呻いて、頭を振つた。

『ピヨートル・イワノヰツチ公爵のとこへ行つて、確かなことを見屆けて來てくれ、』と、彼は副官の一人に向つてかう言つた、それから後に立つてゐたウルテンブルグ公の方へ振り向いた。

『殿下は第一軍を指揮して下さいますまいか?』

公が出發してから間もなく——未だセミョノヴスコエに達すまいと思はれるほど早く——公の副官が、クツウゾフに兵をもつと呉れといふ、公からの使命を齎らした。

クツウゾフは眉を顰めて、ダフツウロフに第一軍を指揮せよといふ命令を送り、公には、こんな大切な場合に公が傍にゐてくれないと何うにもやつて行けない事が分つたからと云つて、歸つて來てくれるやうにと乞うた。ミュラーを捕虜にしたといふ報告が來て、幕僚の者共がクツウゾフに祝辭を云つた時には、彼は微笑した。

『まア待つて吳れ給へ、諸君、』と彼は言つた。『戰爭は勝つてゐる。ミュラーを捕虜にした位ゐの事は、何も大した事ではない。兎に角喜ぶのは少し待つた方が宜い、』それでも、彼は各軍にその報告を知らせるために一人の副官を派遣した。

シュチエルビニンが、フランス軍のために掩堡もセミョノヴスコエも占領されたといふ報告を以て、左翼から馬を走らせてやつて來た時には、クツウゾフは、戰場の響きやシュチエルビニンの顏から、その報告の惡い事を前以て推測して、まるで足を伸ばさうとでもするやうに立上り、シュチエルビニンの腕を取つて、脇へ連れて行つた。

『行つて來て吳れ、君、』イエルモーロフに向つてから言つた。『何うにかならんか見て來て吳れ。』

クツウゾフは、ロシア軍の陣地の中心なるコルキイにゐた。味方の左翼に對する攻撃は、幾度も擊退された。中央に於ては、フランス軍はボロヂイノ以上には進まなかつた。ウワーロフの騎兵隊は、左翼からフランス軍を迫つ拂つた。

三時にフランス軍の攻擊は止んだ。戰場から來た人々や、自分の周圍に立つてゐる人々の顏から、クツウゾフは最高に緊張した努力の表情を讀んだ。戰の豫期以上の成功には、自分でも滿足であつた。けれども老人の體力は、彼を次第に弱らせて行つた。まるで倒れやうとでもするやうに、幾度も彼の頭は沈んで、彼は眠りに落ちた。晝飯が彼のところに運ばれた。

高級副官のウオルツオーゲン——この男が戰爭は im Raum verlegen（國中に擴まらねばならぬ）と云つてゐるのをアンドレー公爵は聞いた事があつた、そしてバグラチオンは此の男を殊のほか嫌つてゐた——が、クツウゾフの晝飯を食つてゐるところへ馬を乘りつけて來た。ウオルツオーゲンは、左翼の戰鬪經過を報告する爲めにバアクレイのところから來たのであつた。聰明なるバアクレイ・ド・トオリイは、負傷兵の群が逃げ歸つて來たり、隊の整頓が崩れたりするのを見、その場合のさま〴〵の情況を考へた上で、戰は敗北したのだと決定した、さう報告するために、自分の氣に入りの副官を總司令官のところへやつたのである。

クツウゾフは、一生懸命にロース・チキンを噛んでゐたが、ウオルツオーゲンを見ると、稍々愉快さうな表情をして眼を見張つた。

半ば輕蔑んだやうな微笑をうかべながら、ウオルツオーゲンは殆んど帽子の庇に手を擧げようともせずに、無雜作にクツウゾフに近づいて行つた。

彼は殿下に對して、一種態とらしい無頓著な樣子で振舞つたが、それは自分は、高い教育を受けた軍人である、この無用な老爺を偉い人間だと思はうと、それはロシア人の勝手に委せて置くけれども、自分は、今自分が相手にする老爺がどんな種類の人間であるかを、ちやんと心得てゐるのだ、といふ事を見せやうとする爲めであつた。『老爺さん』——かうクツウゾフはウオルツオーゲンのドイツ人の連中の間で呼ばれてゐた——『一人で氣樂さうにして居るな、』ウオルツオーゲンはかう思つた、そして嚴い眼付をしてクツウゾフの前にある皿をチラリと見て、バアクレイの使命や自分の印象や意見などを、この老爺さんに報告し初めた。『我陣地の有らゆる重要地點は、敵の占領するところとなりました、敵を擊退することは出來ません、さうするだけの軍勢がないからです、兵卒共は逃げ出して行つてしまふのですが、それを止めることは到底不可能です、』と、彼は報告した。

クツウゾフは、むし〳〵噛んでゐるのを止めて、自分に向つて言はれてゐる事が了解されないとでも云ふやうに、呆れてウオルツオーゲンを見詰めた。ウオルツオーゲンは老爺さんの昂奮を認めると、徴笑をうかべて言つた。

『私は自分の見た事實を殿下にお隱しする權利はないと思ふのです……軍は全く擊破されたのであります……。』

『君が見たと？　君が見たと？』クツウゾフは、かう叫んで、素早く立上り、ウオルツオーゲンの方へ

進み寄つて、『何うして……何うして君はそんなことを！』と、打ち戰く手で脅かすやうな身振りをしながら、息を詰まらせて彼は叫んだ。『君、何うしてそんな事が私に言へる？　君は少しも知らんのだよ。バアクレイ將軍の報告は間違つて居る、總司令官たる私は、彼より以上に戰爭の經過を知つてゐると私が言つたつて、將軍に言つてくれ。』

ウオルツオーゲンは何か反對しやうとしたが、クツウゾフはそれを遮つた。

『敵は左翼に於ては擊退され、右翼に於ては擊破されて居る。君、君が間違ひだつたと解つたなら、これからは自分の解らん事は口に出さんやうに氣をつけるがよい。どうかバアクレイ將軍のところに歸つて、私が明日フランス軍を攻擊する、斷乎たる意志を持つてゐる事を報告してくれ、』と、クツウゾフは嚴しく言つた。

みんな默つてゐた、喘いでゐる老將軍の重苦しい息のほか何も聞えなつた。『有らゆる地點で擊退した、それを私は、神と我勇敢なる兵卒とに感謝して居る。敵は擊破された、明日我々は、彼奴を神聖なロシアの國土から追ひ出してやる、』と、クツウゾフは十字を切りながら言つた、そして突然、涙が湧き出て來て、啜り泣いた。

ウオルツオーゲンは肩を搾め、唇を歪めて、über diese Eingenommenheit des alten Herrn'（老爺さんのこの自惚れ）に呆れながら、無言のまゝ歩み去つた。

『あゝ、やつて來たな、勇士！』がつしりと肥えて、奇麗な、黑い髮をした將軍が丘腹を登つて來た時、クツウゾフは言つた。それは戰場の最も重要地點で終日過して來たラーエウスキイであつた。

ラーエウスキイは、兵が頑强に陣地に踏み止まつてゐて、フランス軍はこれ以上の攻擊を爲し得ないでゐるといふ事を報告した。

それを聞いた時、クツウゾフはフランス語でかう言つた——『君は、他の者のやうに我々が退却しなければならんとは思はないんだね？』

『いや、何ういたしまして、閣下、勝敗の決しない戰鬪では、いつでも一ばん頑强な者が、最後の勝利者なのであります、』と、ラーエウスキイは答へた。『そして私の意見では……』

『カイザロフ』と、クツウゾフは副官を呼んだ、『坐つて、明日の命令を書いてくれ。それから君は、』と、彼は一人の副官の方に振向いた、『君は戰線を乘り廻はして、明日我軍は敵を攻擊すると布告してくれ給へ。』

彼がラーエウスキイと話をし、命令を口授してゐるうちに、ウオルツオーゲンがバアクレイの處から歸つて來た、そしてバアクレイ・ド・トオリイは元帥によつて與へられた命令を覺書にして欲しい、と云つてゐる旨を述べた。

クツウゾフは、ウオルツオーゲンの方は見向きもしないで、文書にした命令——前總司令官が實に用心深くも、それによつて自分の全責任を脫れるために取つて置き度いと云つた——を、書くやうに副官に命じた。そして軍の精神と呼ばれ、戰爭の主なる筋力をなしてゐる、あの同じ氣分を全軍に保たせる、何とも言ひやうのない不思議な連鎖によつて、クツウゾフの言葉や、翌日の戰鬪に對する彼の命令が軍の端から端まで瞬く間に傳へられた。その命令の言葉や文句は、それが連鎖の末端に達した時には、決して元の通りのものではなかつた。實際、人々が、隊の端から端まで次ぎ〳〵に繰り返へして行く話の中には、ほんたうにクツウゾフが言つたものに似てゐる言葉は一つもなかつた、けれどもクツウゾフの言葉の趣意は到るところに擴がつた、何故かといふと、クツウゾフの言つた事は怜悧なる考慮の結果ではなくして、總司令官の心の奥深く、そして又有らゆるロシア人の心の奥深く横たはつてゐる感情の溢れ出たものだつたからである。

で、明日我軍が敵を攻擊するといふ事を知り、隊の上官から、自分等が信じようとしてゐた事の確證を得たので、疲れ果てゝ心の動搖してゐた兵卒共は、再び慰藉と勇氣とを恢復した。

三十六

アンドレー公爵の聯隊は豫備軍になつてゐて、二時までは、猛烈な砲火の下に、全く戰鬪に加はら

すに、セミヨノヴスコエの背後に止まつてゐた。二時前になつて、その時までに最早二百人以上の兵を失つてゐた聯隊は、セミヨノヴスコエと砲臺との間の空地——そこでは、その日數百人の人々が殺され、二時頃には、數百門の敵の砲火が此の砲臺に集中されてゐた——の踏み躙られた燕麥の畑へ前進させられた。

未だその場所を去りもしなければ、一發の彈丸を報ゐもしないうちに、聯隊は又その兵數の三分の一を失つた。前面、殊に右手の方には、決して霽れたことのない煙の中で、絶えず砲彈が唸りつゞけてゐた、そして前面の土地全體を隱してゐる不可思議な煙の領域から、速くヒツヒツといふ砲彈と、靜かにヒユー〳〵いふ破裂彈とが飛んで來た。時には、さながら人々に息を吐く暇を與へようとでもするやうに、全十五分のあひだ、すべての砲彈、破裂彈がみんな彼等の頭上を飛び越してしまつたが、又時には、たつた一分のあひだに、數名の人が聯隊から拂ひ去られ、彼等は死者を引き摺り除けたり、負傷者を擔ひ去つたりするので始終忙しかつた。

新しい打擊が來る度毎に、未だ殺されない人々に取つて、益々生存の機會が尠くなつてゆくのであつた。聯隊は三百歩の間隔を置いてゐる大隊に分たれてゐた。けれども、それにも拘らず、聯隊全體は同じ氣分に支配されてゐた。聯隊ぢゆうの人々はみんな等しく陰鬱で、默つてゐた。ほんの時々、隊伍の間に話聲が聞えたが、その聲はズシンと何ものか落ちる音と、『擔架を！』といふ叫び聲とが聞

える度毎にうち消された。大概の間、將校たちの命令によつて、兵卒どもは地上に坐つてゐた。或る者は帽子を脫いで、丁寧に襞をゆるめて、それを伸ばした、或る者は手の中で乾いた粘土を崩しながら、それで以て銃劍を擦つた、或る者は肩章の扣鉤の位置を換へて、それを締めた、又或る者は丁寧に卷脚絆を解いて締め直し、それから靴を取り代へた。或る者は畑の土塊で小さな家を建てたり、刈株の藁を編んだりした。彼等はみんなかういふ仕事に全く專心になつてゐるやうに見えた。人々が殺されても負傷しても、擔架が傍をそろ〳〵通つても、味方が退却しても、敵の大集團が煙のあひだから見えて來ても、誰一人さういふ狀態には何の注意も拂はなかつた。味方の砲兵か騎兵が進んだ時や、歩兵の進むのが見えた時には、これを賞讃する言葉が四方八方で聞こえた。けれども、戰爭とは何の關係もない全く異つた事件が、最も注意を惹きつけた、それは、これ等の精神の緊張した人々の注意は、日常生活の平凡な事件に休息を見つけるとでも云ふやうであつた。何個中隊かの砲兵が彼等の列の前を通つた。彈藥車の一つでは、馬が轅革に脚を搦ませてゐた。

『やアい！　引き馬を見ろやい！……脚を拔いてやれよ！　打つ倒れるぞ！……おい！　奴等には見えないんだな！……』かういふ叫び聲が、聯隊中の隊列の中から起つた。

又或る時には、凡ての注意は、空中に尾を上げてゐる一匹の小さな鳶色の犬に惹きつけられた、犬は何處から來たのか誰も知らなかつたが、隊伍の前を忙がしげに駈けまはつてゐた。突然砲彈がその

死者や負傷者で堆高くなつてゐる戰場の怖ろしい光景が、自分自身の頭の重いといふことや、自分の好く知つてゐる二十人ばかりの將官が死者や負傷者の中に入つてゐるといふ報知や、かつては强大であつた自分の軍の無能力であるといふ意識などと結び付いて、何時もは夫れが自分の不敵な精神を證明するものだと想像して、死者や負傷者を見渡すことが好きであつたナポーレオンに全く意外な印象を與へたのであつた。その日、戰場の怖ろしい光景は、彼が偉大といふことの眞價であり、證據であると見做してゐたこの不敵な精神を壓倒して仕舞つた。彼は慌たゞしく戰場を去つて、シエヴアルディノへ歸つた。黃色い、膨んだ、重さうな顏をし、鈍よりした眼で、赤い鼻で、皺嗄れた聲で彼は床几に腰かけて、下の方を見下しながら、我知らず砲火の響きに聞き入つてゐた。彼は痛ましい不安をもつて、自分には、それを止めることは出來なかつたけれども、自分をその主動者であると考へてゐたこの戰鬪の終るのを待つてゐた。個人的な、人間らしい情緒が、暫らくの間、彼が長いこと奉仕して來た、人生の人爲的な幻影に打勝つた。彼は戰場で見た苦痛や死を自分の場合にして想像してみた。頭や胸の重いといふことが、やはり自分にも苦痛や死が有り得るといふことを彼に思ひ起こさせた。その瞬間には、モスクワに對しても、勝利に對しても、乃至、榮譽に對しても、何等の憧憬を感じなかつた。(それ以上の榮譽が彼にとつて何の必要があつたらう?)、彼が今欲した所の唯一の物は、靜息と、安靜と自由であつた。併し彼がセミョノヴスコエの高地にゐた時、砲兵の司令を掌つてゐる一人の將校が、クニヤスコウオの前面のロシヤ軍に對する砲火を增す爲めに、その高地へ數箇の砲兵中隊を引張つて來ては何うかと申し出た。ナポーレオンは承諾して、その砲兵陣地が與へたる効果を、自分に報告して來るやうにと命じた。

一人の副官が來て、皇帝の命令通り二百門の大砲をロシア軍の方へ向けたが、彼等は矢張りその陣地を守つてゐると告げた。

『我が軍の砲火は、彼等を將棋倒しにして居ります。けれども彼等は頑として守つております。』と、副官は言つた。

『奴等はもつと浴びたいと言ふのだな!』と、ナポレオンは皺嗄れ聲で言つた。

『陛下?』とその言葉を聞き取り得なかつた副官は繰り返した。

『彼等はもつと浴びたいといふのだな!』と、ナポレオンは顏を顰めながら、皺嗄れ聲を出して怒鳴つた。『よし、それなら浴びせかけてやれ。』

自分の命令も待たずに、實際自分の欲してゐなかつた事が既に爲されつゝあつたので、ナポーレオンはたゞ、自分の命令を待ち設けてゐるだらうといふやうな考へから、さうしろといふ命令を與へたのであつた。で、彼は再び、或る眞ならぬ偉大の幻影が棲つてゐる、もとの人爲的の世界へ戻つて行き、再び、(ぐるぐる)と廻つてゐる輪につれて走つてゐる馬が、自分自身の爲めに何かしてゐると想像する

『氣を付けなさい！』と、一人の兵卒の慴えた聲が鳴り渡つたかと思ふと、素早く、ヒュー〳〵と、翼を鳴らして地上に下りて來る鳥のやうに、破裂彈がアンドレー公爵から二歩はなれた少佐の馬の近くにドサリと重い音を立てゝ落つこちた。恐怖を表はしていゝか、悪いかなどゝいふ事を問題にしない馬は、ヒ、ンと嘶いて、後に躍り上つて、殆んど少佐を投げ飛ばすばかりの勢で、一散に駈け出した。馬の恐怖は、兵卒共に傳染した。

『伏せ！』と副官は自分の身體を地面に投げ倒しながら叫んだ。アンドレー公爵は何れとも心を決め兼ねて立つてゐた。破裂彈は牧場と畑の間の、溝の中のニガヨモギの叢の近くの、アンドレー公爵と伏してゐる副官との間に、煙を立てながら獨樂のやうにクル〳〵まはつてゐた。

『これが死だらうか？』と、アンドレー公爵は全く新らしい、思ひ惱んだ感じを以て、怪みながら、草や、ニガヨモギや、まはつてゐる獨樂から巻き上る煙の絲を眺めた。『俺は死ねない、死にたくない、俺は生命を愛してゐる、この草や地面や空氣を愛してゐる……』

彼はかう思つた、が併しそれと同時に、人々が自分を見てゐることを忘れなかつた。

『見つともないぞ、副官！』彼は副官に向つて言つた。『何といふ……』彼は言ひ終らなかつた。途端に瀬戸物の碎けるやうな、物の裂けて紛微塵になつた音が聞え、息のつまるやうな煙がパツト出た、そしてアンドレー公爵はくる〳〵まはつて、片腕を上にあげながら、俯伏せに倒れた。五六人の將校

が彼の傍に駈け寄つた。血の大きな汚點が彼の腹の右側から草の上に擴がつてゐた。民兵等が、その將校等の後に擔架を持つて立つてゐた。アンドレー公爵は、顏を草の中へ埋めて、俯伏せに倒れてゐた。彼は未だ苦しさうな、皺嗄れた息をついてゐた。

『何うした、何故お前等は愚圖々々して居るんだ、來い！』

百姓共は近づいて、彼の肩と足とを捉まへたが、彼が慴れげに呻いたので、互ひに顏を見合はせ、再び彼を下した。

『擔ぎ上げろ、擔架に入れろ、何方だつて同じ事だ！』誰やらがかう叫んだ。彼等は再び彼の肩を摑んで持ち上げて、擔架に入れた。

『あゝ、おや、おや！　何うしたのだ？……腹か！　それぢやもう駄目だ！　あゝ、おや〳〵！』と、いふ言葉が將校たちのあひだで聞えた。『僕の耳を殆んど擦すつて行つたよ、』と、副官が言つてゐた。百姓共は擔架を肩に昇いで、自分等が今やつて來た小徑を救護所へ急いだ。

『足を揃へろ！……やい！……この百姓共！』と、百姓達がよろ〳〵歩いて、擔架を搖ぶるのを見て、一人の將校が彼等の肩を摑んで怒鳴つた。

『足を揃へろつてえ事よ、フョードル、おい？』と、眞先の百姓が言つた。

『さうだ、素敵だ』と、足を揃へながら一ばん後の百姓が言つた。

『閣下ですか？　え、公爵ですか？』と、チモーヒンが駈けて來て、擔架を覗き込みながら震へ聲で言つた。

アンドレー公爵は眼を開いて、自分の頭の落ち込んでゐる擔架から、その話し手を眺めて、再び瞼を閉ぢた。

國民兵たちが運搬車と救護所のある森へアンドレー公爵を昇いで行つた。救護所は赤楊の森の端れに張られた三つの天幕から成つてゐた。森には救護馬車と馬とが立つてゐた。馬は糧食嚢から燕麥をムシヤ〳〵食つてゐたが、雀がその傍へ飛んで來て馬の落す穀粒を啄んでゐた。何羽かの烏が血の臭ひを嗅ぎつけて、赤楊樹の間を彼方此方と飛びまはりながら、やかましく啼き立てゝゐた。天幕の周圍五エーカー以上の間に、様々の服裝をした、血に塗れた人々が坐つたり、轉がつたりしてゐた。彼等は擔架を擔いで來た、意氣沮喪したやうな顔付の、ヂツと眼を見張つてゐる兵卒共の群に取り卷かれてゐた。將校たちは秩序を保たうとして、その場所から彼等を追ひ拂ひつゞけてゐた。併しそれは何の役にも立たなかつた。兵卒共は將校たちには何のお構ひもなく、擔架に倚りかゝつて、まるで此の光景のうちに含まれた或る難しい問題を解決しようと試みてゞもゐるやうに、眼前の有様をヂツと眺めてゐた。天幕からは聲高い怒つたやうな泣き聲と、悶れな呻き聲とがきこえて來た。時々醫者の助手が

水を取りに、或は次に手當てをする患者を指したりする爲めに駈け出て來た。天幕で自分の順番のまはつて來るのを待つてゐる負傷者等は皺嗄れた唸り聲や呻き聲を立てたり、泣いたり、叫んだり、罵つたり、或はウオツカを求めたりしてゐた。五六人の者は人事不省に陷つて譫言を云つてゐた。アンドレー公爵は、聯隊長として未だ治療を受けない負傷者の群の間を通り抜けて、天幕の一つの直ぐ近くに行かれた、そこで擔架を擔いで來た者共は立止つて指圖を待つた。アンドレー公爵は眼を開いて見ても、暫らくの間は自分の周圍の光景が了解出來なかつた。牧場やニガヨモギや眞黒な渦巻いて飛んで來る彈丸や、そして生命を愛するといふ熱烈な衝動や、さういふものが心に歸つて來た。自分から二歩ばかり隔つたところに、一人の身長が高くて、立派で、髪の毛の黒い軍曹が、木の枝に倚りかゝりながら、頭を繃帶して立つてゐた。彼は頭と足とに負傷してゐたが、大きな聲で話をしながら、みんなの注意を惹きつけてゐた。負傷者と擔架卒の群とがその周圍に集まつて、貪るやうにその言葉を聞いてゐた。

『俺たちは、ほんとに彼奴を叩きつけたんだ、だから彼奴は何から何まで放り出してしまやがつた。俺たちは王までもふん捕まへたんだ。』と、その下士は熱のあるやうにギョロ〳〵光る黒い眼で、周圍を見まはしながら怒鳴つてゐた。『もし豫備軍の來るのさへ間に合つたら、なア、彼奴を跡方もなくやつつけてやれたのだ、何故つてその、全く……』

アンドレー公爵は、此語り手のまはりに立つてゐる總ての人々と同様に、輝いた眼をして、此男を見てゐるうちに、何だか愉快なやうな氣持になつて來た。『だが待てよ、今となつては何うだつて同じぢやないか？』と、彼は考へた。『あの世には何んな事があるだらう、この世には何んな事があつたらう？　何うして俺は生命に別れる事がこんなに悲しいんだらう？　この世には俺の解らなかつた、今でも解らない事柄があつたのだ。』

三十七

醫者の一人が、血塗れのエプロンを着け、小さな血塗れの手をしながら、天幕から出て來た。その片手には葉巻を持つて、これまでも血で汚してしまはないやうにと云ふやうに、拇指と小指との間に大切さうに挟んでゐた。この醫者は頭を擧げて、周圍を見まはしたが、それは負傷者の列の向ふを見たのであつた。彼は明かに少しの休息を欲してゐるらしかつた。少しの間頭を右から左に振り向けてゐたが、溜息をして、そして再び眼を落した。

『よし〳〵、今直ぐ、』アンドレー公爵を指し示した助手に答へて言つた、そして公爵を天幕のうちに運ぶやうにと擔架夫に命じた。

耳語が待つてゐる負傷者の群れの中に起つた。

『あの世に行つたつても、うめえ事をやるのは矢つ張り身分のある人達ばつかりだぜ、』と、一人が言つた。

アンドレー公爵は内に運ばれ、丁度今洗ひ清められたテーブルの上に置かれて、助手に身體を洗はれてゐた。彼は天幕の中にあるものを、はつきり見分ける事は出來なかつた。四方八方の哀れな唸り聲と、自分の腿や腹や脊中の烈しい痛みが、その注意力をかき亂したのである。彼が自分の周圍に見た有らゆるものは、彼には、裸體の、血塗れな、人間の肉といふ、たつた一つの大ざつぱな印象の中に溶け込んでしまつてゐた、その人間の肉が低く張られた天幕全體に充ちてゐる有樣は、さながら今から二三週間前、あの暑い八月の日に、裸體の人間の肉がスモオレンスク街道に沿ふた汚い池に充ちてゐたのと同じであつた。さうだ、それは同じ肉、同じ大砲の餌食であつた、あの時それを見るとと恐怖の念を心の中に起したが、その恐怖の念は今感ずる氣持を豫告してゐたやうに思はれる。

天幕の中には三個のテーブルがあつた。二つは既にふさがつてゐたので、三番目のテーブルへ、人々はアンドレー公爵を置いた。暫くの間アンドレー公爵はひとりでに、他のテーブルで爲されてゐる事の目擊者として置かれた。最も近いテーブルには韃靼人がゐたが、傍に脫ぎ捨てられてある軍服から判斷すれば、多分コザツク聯隊のものであらう。四人の兵卒がその男を摑まへてゐた。眼鏡をかけ

た醫者が、その男の蒼色の筋力逞しい脊中の何物をか切つてゐた。

『うゝ！　うゝ！　うゝ！……』韃靼人は、まるでかう唸つてゐたが、急にその廣い、淺黑い、日に燒けた顏を振り上げて、白い齒を剝き出しながら、もがいたり、ピクリ〳〵したり、耳を裂くやうな金切聲の長い叫聲を出し初めた。數名の人々がその周圍に立つてゐる他のテーブルには、大きな肥つた男が、頭を後に反らせながら、仰向けに橫たはつてゐた。その髮の色や、縮れ具合や、それから姿などが、妙にアンドレー公爵には親しく思はれた。五六人の助手がその男を摑まへて、胸を壓してゐた。一本の白い丸々と肥えた足が、絕えず早く痙攣的にピクリ〳〵動いてゐた。この男は痙攣るやうに泣いたり、息をつまらせたりしてゐた。二人の醫者——その中の一人は眞靑な顏をして震へてゐた——が、その男の片一方の眞赤な血だらけの足を無言で何うかしてゐた。韃靼人を終つて、その上に外套をかぶせると、眼鏡をかけた醫者は、手を拭き〳〵アンドレー公爵のところへやつて來た。

醫者は、アンドレー公爵の顏をじろりと見て、急いで向ふを向いて、

『服を脫がせろ！　何を愚圖々々してゐるのだ？』と、助手に腹立たしさうに言つた。

袖をたくし上げた助手が、ボタンを外して彼の服を脫がせた時、最も幼い、最も遠い子供時分のことがアンドレー公爵の心へ歸つて來た。醫者は傷の上にずつと屈んで、それに觸つて見て深い溜息を吐いた。そして誰かに向つて合圖をした。それから腹の中の烈しい痛みがアンドレー公爵の知覺を失

はしめた。再び意識を回復した時には、大腿骨の折れた破片は取り去られ、ぼろ〳〵になつた肉は切り去られて、傷は繃帶されてゐた。水が彼の顏に注けられた。アンドレー公爵が眼を開くや否や、醫者は物をも言はず彼の唇に接吻して、そして急いで行つてしまつた。

苦痛が無くなつてしまふと、アンドレー公爵は非常に長い間覺えなかつた、幸福な平和を感じた。彼の生涯の最も良い、最も幸福な瞬間が、殊に幼い子供の頃の、自分が衣服を脫がされて寢床に入れられた時や、乳母が、自分の上で子守唄をうたつて呉れた時や、そして枕に頭をうづめながら、生きてゐるといふ事を唯意識したばかりで幸福を感じた時などのことが、過ぎ去つた昔の事ではなく、現在の事でゞもあるやうに、彼の空想の前に現はれて來た。

醫者は、その頭が何となくアンドレー公爵に見馴れたものゝやうに思はれた、かの負傷者を忙しげに治療してゐた。彼等はその男を抱き上げて、慰めやうとしてゐた。

『私に見せて下さい……うゝ！　う！　うゝ！』と、いふその男の愼えたやうな、啜泣きに亂れる見苦しい呻き聲が、アンドレー公爵に聞えた。その呻き聲を聞くとアンドレー公爵は泣きたくなつて來た。自分が何の名譽もなく、かうして死なうとしてゐる爲めか、生命に別れるのが悲しい爲めか、それとも、もう二度と歸つて來る事などは有り得ない少年時代の記憶からか、自分が苦しい思ひをしてゐるからか、或は他の人々が苦しんでゐて、そこにゐる男などはあのやうに愼れ氣に呻いてゐるから

なのか、その孰れからかは知らないが、彼は子供のやうな、善良な、殆んど幸福な涙を流して泣きたかつたのである。

未だ靴を穿いたまゝになつてゐて、乾いた血のこびりついてゐる、切斷された足を、人々はその負傷者に見せた。

『おゝ！　おゝゝゝ！』負傷者は女のやうに啜り泣いた。その傍に立つてゐた醫者は、彼の顏を蔽ふて置いて、行つてしまつた。

『やア！　これは何うしたといふ事だ？　何うしてあの男が此處にゐるのだらう？』と、アンドレー公爵は怪んだ。

今足を切斷されたばかりの、その憫れな、啜り泣いてゐる、見苦しい人間に於て、アンドレー公爵はアナトール・クラアギンを認めたのである。人々が抱き上げて、水のグラスを差し出してゐるけれど唇がぶる〳〵震へ、膨れ上つてゐるので、そのグラスの緣へ口をつけることの出來ない其男が、アナトールだつたのである。アナトールは啜泣いて戰きつけるやうな息使ひをしてゐた。『さうだ、彼だ。さうだ、あの男は何ういふ譯か、俺とは密接に、苦しく、結びつけられてゐる。』と、アンドレー公爵は自分の眼前にある事柄の意味は未だ明瞭には了解出來ずに考へた。『あの男と俺の子供時代や一生涯との間にどんな關係があるんだらう？』彼は自分自身にから訊いたが、手掛りは見つからなかつた。す

ると突然純潔と愛との、あの子供らしい世界の、新しい、思ひがけない記憶がアンドレー公爵の前に湧き上つて來た。千八百十年の舞踏會で初めてナターシャに會つた時、彼女がほつそりした頸と、ほつそりした腕と、何時でも歡喜の絶頂を現はしさうな、憫えた、幸福さうな顏をしてゐた事を思ひ出した。そして愛と優しみとが、彼女に對して曾てよりも一層強く一層懷しく、彼の心に眼覺めて來た。彼は自分と、膨れた眼に溢れてゐる涙を通して自分をぼんやり眺めてゐるこの男との間に存在する羈絆を思ひ起した。アンドレー公爵は有らゆる事を思ひ出した、と、その苦んでゐる男に對する熱烈な憫憐と愛とが彼の幸福な心を充した。

三十八

アンドレー公爵はもう自分を抑へる事が出來ず、人間や、自分自身や、人間仲間たちの失錯や、自分の失錯やの爲めに涙を流した。『我々の同胞に對する、我々を愛して呉れる人々に對する同情と愛、我々を憎む者に對する愛、我々の敵に對する愛。さうだ、神が地上で說き給うた愛だ、マリイが俺に教へて呉れたが、俺には解らなかつた愛だ、これこそ俺がこの世に別れたくない理由なのだ、これこそ若し俺が生きてゐたら俺に殘されたものなのだ。だが今はもう餘りに遲い。俺はそれを知つてゐる！』

死者や負傷者で堆高くなつてゐる戰場の怖ろしい光景が、自分自身の頭の重いといふことや、自分の好く知つてゐる二十人ばかりの將官が死者や負傷者の中に入つてゐるといふ報知や、かつては强大であつた自分の軍の無能力であるといふ意識などと結び付いて、何時もは夫れが自分の不敵な精神を證明するものだと想像して、死者や負傷者を見渡すことが好きであつたナポーレオンに全く意外な印象を與へたのであつた。その日、戰場の怖ろしい光景は、彼が偉大といふことの眞價であり、證據であると見做してゐたこの不敵な精神を壓倒して仕舞つた。彼は慌たゞしく戰場を去つて、シェヴアルディノへ歸つた。黃色い、膨んだ、重さうな顏をし、鈍よりした眼で、赤い鼻で、皺嗄れた聲で彼は床几に腰かけて、下の方を見下しながら、我知らず砲火の響きに聞き入つてゐた。彼は痛ましい不安をもつて、自分には、それを止めることは出來なかつたけれども、自分をその主動者であると考へてゐたこの戰鬪の終るのを待つてゐた。個人的な、人間らしい情緒が、暫らくの間、彼が長いこと奉仕して來た、人生の人爲的な幻影に打勝つた。彼は戰場で見た苦痛や死を自分の場合にして想像してみた。頭や胸の重いといふことが、やはり自分にも苦痛や死が有り得るといふことを彼に思ひ起こさせた。その瞬間には、モスクワに對しても、勝利に對しても、乃至、榮譽に對しても、何等の憧憬を感じなかつた。(それ以上の榮譽が彼にとつて何の必要があつたらう?)、彼が今欲した所の唯一の物は、靜息と、安靜と自由であつた。併し彼がセミョノヴスコエの高地にゐた時、砲兵の司令を掌つてゐる一人

の將校が、クニヤスコウオの前面のロシヤ軍に對する砲火を增す爲めに、その高地へ數箇の砲兵中隊を引張つて來ては何うかと申し出た。ナポーレオンは承諾して、その砲兵陣地が與へたる効果を、自分に報告して來るやうにと命じた。

一人の副官が來て、皇帝の命令通り二百門の大砲をロシア軍の方へ向けたが、彼等は矢張りその陣地を守つてゐると告げた。

『我が軍の砲火は、彼等を將棋倒しにして居ります。けれども彼等は頑として守つております。』と、副官は言つた。

『奴等はもつと浴びたいと言ふのだな!』と、ナポレオンは皺嗄れ聲で言つた。

『陛下?』とその言葉を聞き取り得なかつた副官は繰り返した。

『彼等はもつと浴びたいといふのだな!』と、ナポレオンは顏を顰めながら、皺嗄れ聲を出して怒鳴つた。『よし、それなら浴びせかけてやれ。』

自分の命令も待たずに、實際自分の欲してゐなかつた事が既に爲されつゝあつたので、ナポーレオンはたゞ、自分の命令を待ち設けてゐるだらうといふやうな考へから、さうしろといふ命令を與へたのであつた。で、彼は再び、或る眞ならぬ偉大の幻影が棲つてゐる、もとの人爲的の世界へ戻つて行き、再び、(ぐるぐる)と廻つてゐる輪につれて走つてゐる馬が、自分自身の爲めに何かしてゐると想像する

ことがあるやうに。彼のために運命づけられてゐた殘酷な、憂欝な、面倒臭い、人道に悖つた役割を、おとなしく勤めることに歸つて行つたのであつた。

で、今爲されつゝある總ての事柄の重荷が、その事件に携はつてゐた他のあらゆる人々よりも、一層重くその上に掛つてゐたこの人の心と良心とが暗まされたのは、單にこの時とこの日だけではなかつた。その生涯の終りに至るまで、彼は善と、美と、眞理と、自分自身の行爲の意義を少しも了解しなかつた、その行爲は、その意義を摑むには餘りに眞理と善とに反し過ぎて居り、人間的なあらゆる事柄から餘りに遠く離れ過ぎてゐた。彼は世界の半分から稱讃された自分の行爲を否認することは出來なかつた、そこで彼は、眞理や、善や、人間的なあらゆる事を止むを得ず否認したのであつた。

屍と慘害されたる人々で堆高くなつてゐる戰場(彼はそれを自分の意志の仕業だと思つてゐた)に馬を騎り廻しながら、それ等の人々を眺めて、一人のフランス人に對して幾人のロシヤ人が其處に倒れてゐるかを數へ、そして一人のフランス人に對してロシア人五六人の割であることを信じて喜ばんが爲めに、自分自身を欺いてさういふ材料を見出さうとしたのは、單にその日ばかりではなかつた。戰場に五萬の屍があつたので、『Le champ de bataille a été superbe, (戰場は壯麗であつた。)』とパリイへ書いてやつたのは、單にその日ばかりではなかつた。自分のした大偉業を記述する爲めに、自分の暇を悉くそれに當てるつもりだと言つたセントヘレナに於てすら、平和な閑居に於いてすら、彼

は尙ほかう書いてゐる。

『ロシア戰爭は、近代に於いて最も人氣のある戰爭であるべき筈であつた。それは善い考慮と、利害關係の明瞭なる戰爭であつた、あらゆる人の安靜と安全との爲めの戰爭であつた、それは全く平和的な保守的な戰爭であつた。

『それは、大なる目的、卽ち不安の終結と、安泰の始まりとの爲めの戰爭であつた。總ての人々に對する安寧と繁榮とに滿ちた新しい地平線と、新しい勞働とが開展しつゝあつたのである。ヨウロツパの組織は確立された、たゞ殘されてゐることは、それを有機的にすることであつた。

『是等の大なる諸點及び到る處平穩無事なのに滿足して、予もまた、予の國際會議及び予の神聖同盟を持つ可き筈であつた。さういふものは私の考案を盜んだ考案であつた。偉大なる君主達のさういふ集まりに於いて、我々はさながら一家族のやうに我々の利益を處分し、番頭と主人とに於けるが如く、各國の人民達とその利益を計算することが出來る筈であつたのである。

かくしてヨウロツパは、事實に於いて直ちに唯だ一つの人民となり、ヨウロツパを旅する者は、誰でも常に共通の祖國のうちに自分自身を見出すやうになるべき筈であつた。予はあらゆる河川を總ての人々の航行の爲めに開き、すべての海をあらゆる人々の共有にし、大なる常備軍を今後はたゞ諸帝

の護衛兵だけに減じさせなければならないといふことを要求すべき筈であつた。

『フランスへ、卽ち、偉大なる、強き、壯麗な、平和な、光榮ある祖國の胸へ歸つて、予はその國境は決して變へるべからざるものであることを宣言し、あらゆる將來の戰は明かに防禦的であるべく、あらゆる新しい擴張は、非國民的であるといふことを宣言すべき筈であつた。予は、予の息子をして帝國に加入せしめる筈であつた。予の執政官たることはそれで終つて、彼の立憲的統治が始まるべき筈であつた……』

『パリイは世界の首府たるべく、フランス國民は、諸國民の羨望たるべき筈であつた！……』

『その時の予の閑暇と予の老年とは、皇后と共に、予の息子の帝王としての修行中、全くの田舍者の夫婦のやうに、予等自らの馬にのつて、帝國のありとあらゆる隅々をゆる〳〵訪問し、上訴を受取り、惡しきを正し、四方八方へ記念物と恩惠とを撒き散らすことに充てらるべき筈であつた。』

天帝に依つて、憂鬱な、奴隸的な諸國民の刑手たる役割を勤めるやうに運命づけられてゐた彼は、自分の行爲の動機は諸國民の安寧秩序の爲めであるといふことや、自分は何百萬といふ人々の運命を支配することが出來るといふこと、それから自分の權力を運用することに依つて、彼等の繁榮を來たすことが出來るといふやうなことを、自分自身に向かつて強いて說き聞かせてゐた。

『ウイスチュラ河を越えた四十萬の兵のうちで、』と、彼は後になつてロシア戰爭のことを書いてゐる。『その半分は、アウストリヤ人、プルシア人、サクソン人、ポオランド人、バヴリア人、ウルテンベルヒ人、メクレンベルヒ人、スペイン人、イタリイ人、ナポリ人であつた。ほんとうに帝王の軍と呼ぶべきものは、その三分の一が、オランダ人、ベルギイ人、フインランド人、ピエモンド人、スウイツル人、ゼネヴ人、タスカニイ人、ローマ人、第三十二軍管區の住民、ブレエメンや、ハンブルヒの住民たちから成り立つてゐた。それはフランス語を話す殆ど十四萬の人數に上つてゐた。ロシアの遠征に於いては、フランスそれ自身の犧牲は五萬人には上らなかつた。ロシア軍はウイルナからモスクワまでの退却中、さま〴〵の戰で、フランス軍が失つた人類の四倍だけを失つた。モスクワの火災の爲めに、森の中で凍えたり、飢ゑたりして死んだロシア側の損害は十萬人であつた。最後にモスクワからオデル河までの行軍に於いて、ロシア軍はまた季節の險惡な爲めに苦しめられた、ロシア軍がウイルナへ到着した時には、その兵數は僅かに五萬と算せられ、カリシツへ來た時には一萬八千に達しなかつた。』

ナポーレオンは、ロシアとの戰爭は全く自分の意志に依るものだと想像してゐたが、爲されたこと

の怖ろしさは、彼の心に何等の印象をも與へなかつた。彼は大膽にも、その全責任を自分で負つた。そしてその曇つた智力は、死んだ何百萬といふ人々の間で、フランス人はヘツス人やバヴリア人よりも少かつたといふ事實の中に、辯解の理由を見出したのであつた。

三十九

何萬といふ人々が、樣々な姿勢や、樣々な軍服のまゝで、ダウイドフ家や、御料地係りの農奴の持物である畑や牧場に斃れてゐた、それ等の畑や牧場では、數百年の間、ボロヂイノや、シエヴアルヂノや、セミヨノヴスコエの百姓達が、彼等の牧獲を取り納れ、彼等の家畜を飼つて來たのであつた。救護所では、その周圍二エーカアの間の草や地が血潮に染まつてゐた。樣々な武器をもつた、狼狽へた顏容をしてゐる、傷いた人、傷かない人の群が、一方はモザイスクへ、一方はヴアリユエフへ、體を引摺つて行つた。戰れ切つて腹の減つてゐる他の群集は、將校達によつて前方へ引率されて行つた。その他の人々はまだ彼等の陣地を支へて、發砲を續けてゐた。

最初は朝の日光の中に、皷やく銃劍とぱつ〳〵と立つ烟とで、あれ程うら〳〵かで花やかだつた平原全體の上に、今は濕つぽい霧や烟の黑雲が垂れて、硝石や血潮の變に酸ぱい臭ひがたゞよつてゐた。

暴風雲が集まつて、細雨が、死者や、負傷兵や、狼狽へて、戰れ切つて、躊躇してゐる兵卒共の上に降り始めた。その雨は、『もう澤山だ、もう澤山だ、止めろ……考へろ。お前たちは何をしてゐるんだ?』と言つてゐるやうに思はれた。

食物と休息の缺乏から、同じやうに戰れ切つてゐる兩軍の人々には、この上尙ほお互に、屠殺を續けて行かなければならないか何うかといふ疑が生じて來た。そして誰の顏にも躊躇の色を見ることが出來、誰の心にも一樣にかういふ疑問が起つて來た。『何の爲めに、俺は殺したり、殺されたりしなければならないのか? お前たちは殺したければ誰でも殺すがいゝ、爲たければ何でもするがいゝ、だが俺はもう澤山だ!』この考へは夕方になると、誰の心にも同じやうに形を成して來た。それ等の總ての人々は、何時自分のしてゐることが恐ろしくなつて、萬事を投げうつて何處と云ふことなしに逃げて仕舞ふかも知れなかつた。

併しながら、戰ひの終り頃には、人々は自分等の所業の恐ろしいことを十分感じて、止めろと云へば喜んで止めるのであつたが、或る測り難い不思議な力が、やはり彼等を導いてゐたのであつた。で、三分の一だけ生き殘つてゐた砲兵は汗にまみれ、火藥と血とにまみれ、疲れて喘ぎながらも、尙ほ彈藥を持つて來て、裝塡し、狙ひ定め、そして火繩を點けた、で、砲彈はやはり兩方から速やかに殘酷に飛んで來て、人間の肉を紛碎し、人々の意志ではなく、人間と世界を支配する神の意志に依つて爲

される恐ろしい仕事を續けてゐた。

ロシア軍の後衛の不秩序を見たものは、誰でも、フランス軍がも少しの努力さへしたら、ロシア軍が全滅したに違ひないと言つたであらう、また、フランス軍の後衛を見たものは、誰でも、ロシア軍が少し努力さへしたら、フランス軍は覆へされたであらうと云つたであらう。けれど、ロシア軍もフランス軍もその努力はしなかつた、そして戰の焰は靜かに燃え盡きて仕舞つたのであつた。

ロシア軍はこの努力はしなかつた、といふのは、ロシア軍はフランス軍を攻撃してゐるのではなかつたからであつた。戰の初めには彼等はたゞモスクワへの路に立つて、フランス軍の進路を塞いでゐたのに過ぎなかつた、で、彼等は戰の終りに於いても、やはりその始めと同じやうに立つてゐた。併しフランス軍を擊退することが、よしロシア軍の目的であつたとしても、ロシア軍はこの最後の努力をすることは出來なかつた、何故といふにロシア軍の諸隊は悉く破られてゐたからであつた、その戰に於いて損害を蒙らなかつた隊は一つもなかつた。そしてロシア軍は、その陣地から逐ひ拂はれずして、軍の半ばを失つたのであつた。

十五年間の勝利の記憶を有するフランス人、ナポーレオンの何ものにも打勝つ天才を信賴してゐるフランス人、戰場の一部分を占領して、僅かに軍の四分の一を失つたゞけであり、二萬人の一團——

近衞兵はそのまゝそつくりしてゐる——を持つてゐるといふ自覺のあるフランス人に取つては、この努力をすることは、容易い事に違ひなかつた。ロシア軍をその陣地から擊退する目的で攻擊したフランス軍は、この努力をしなければならない筈であつた、何故といふに、ロシア軍がやはり戰の前のやうに、モスクワへの道を塞いでゐる限り、フランス軍の目的は達せられずに、總ての損失と努力とが全く無効に歸するからであつた。併しフランス軍はその努力をしなかつた。或る歷史家たちは、若しナポーレオンが、たゞその舊近衞兵をして進軍させたら、戰は勝ちになつて居たらうと主張してゐる。若しナポーレオンが、その近衞兵をして進軍させたら、何んな事が起つたらうといふやうな事を云ふのは、丁度春が秋に來たら、何んな事が起るだらうと云ふのと全く同じ事である。そんな事は有り得やう筈がないのである。ナポーレオンはさうしなかつた、といふのは、さうしたくなかつたからではなくて、さうする事は不可能であつたからである。フランス軍の將官たちも、士官たちも、兵卒たちも、悉く銷沈した士氣がさうすることを許さなかつたので、この最後の努力は到底不可能であることを知つてゐた。

強大なる腕が、力を失ふまでに打たれて仕舞つたといふ惡夢のやうな感情を懷いた者は、獨りナポーレオンばかりではなかつた。フランス軍の總ての將官たちも、總ての兵卒たちも、戰つた人々も戰はなかつた人々も、何れもこれまでの戰（その戰に於いては、十分の一の努力で、敵は何時でも潰

走したのであつた。)の經驗があるので、この敵、即ち軍の半分を失ひながらも、尙ほ戰の初めと同じく戰の終りに於いても勇敢にその陣地に踏み留まつてゐたこの敵の前には、恐怖の感情を表はしたのであつた。攻撃軍たるフランス軍の精神力は、全く盡きて仕舞つたのである。軍旗と稱する、竿の端へ附着けた襤褸とか、軍隊が立つてゐる地面とかを奪ふことに依つて表はされるやうな勝利ではなく、精神的の勝利、即ち、敵をして、その對手の精神上の優越と、我と我が無能力とを認めさせるやうな、さうした勝利を、ロシア軍はボロヂイノに於いて得たのであつた。フランスの侵入軍は、突進の際に致命傷を受けた猛獸のやうに、その最後の近いことを感じた。併しながらロシア軍——その力が半分に減じてゐた——が退却しないでゐたと同じ理由で、フランス軍は留まつてゐられなかつた。その妨碍を受けてから、フランス軍は、それでもモスクワへ辿り着くことは出來たが、ロシア軍の方では何等の新らしい努力をしないでも、其處に於けるフランス軍の敗滅は全く避け難かつたのである。それはボロヂイノで受けた致命傷から、生命の血が流れ去つて仕舞つたからであつた。ボロヂイノの戰の直接の結果は、ナポーレオンの所謂なきモスクワからの遁走と、馴染のあるスモオレンスク街道に依つての歸國と、五十萬人の侵入軍の滅亡と、ナポーレオンの統治の瓦解とであつた、そのナポーレオンの統治の上にはボロヂイノに於いて、初めて、より強い精神を持つてゐる敵の手が置かれたのであつた。

第三編

一

人間の心にとつては、運動の絶對的連續といふことは、想ひ及ばないことである。如何なる種類の運動の法則も、たゞ人が、任意に選んだその運動の單位を經驗する場合に初めて理解し得らるゝものとなるのである。が、同時に、人間の多くの錯誤が生ずるのも、この連續的の運動を非連續的の單位に勝手に分割する事から生ずるのである。

我々は總て、アキレスは龜の十倍の速さで歩くが、龜には到底追ひ付けないと云ふ事を證明した古人の所謂詭辯なるものを知つてゐる。アキレスが、龜と自分とを隔てゝゐる空間を通過するや否や、龜はその空間の十分の一を進む、アレキスがその十分の一を通過すると、龜は百分の一を進んでゐる、

そしてそれが無限に續く。この問題は、古代の人々にとつては解明し難いものゝやうに見えた。この結論(アキレスは決して龜に追ひ付けないといふ)の不合理は、アキレスの運動も龜の運動も双方ともに連續的な運動であるのに、勝手に運動の非連續的な單位を假定する事から生ずるのである。

運動の單位を益々小さく取つて行くことに依つて、我々はこの問題の解說に近付くことだけは出來るが、決してそれに達することは出來ない。たゞ、無限に小さい大きさと、それから十分の一にまで上つて行く級數を假定し、その幾何級數の總計を計ることに依つてのみ、我々は此の問題の解說に達することが出來るのである。今では、無限に小さい量を取扱ふ數學の新らしい分科が、もつと複雜な他の力學上の諸問題に、解き難いものに思はれてゐた問題の解說を與へてゐる。

古代の人々の知らなかつた數學の、この新らしい分科は無限に小さい量を、即ち運動の主要條件(絶對的の連續)を確かなものとするやうな量を假定することに依つて、人間の智力が、連續的な運動の代りに、非連續的な運動の單位を考へる場合、何うしても陷らざるを得ない所の避け難い錯誤を正すのである。

史的運動の法則の研究に於いても、明かにそれと同一な誤りが生ずる。

個人意志の無數の集合から生ずる人類の進歩は、その運動に於いては連續的である。

この運動の法則を發見することが、卽ち歷史の目的である。併しながら、是等總ての個人意志の總

計に基く連續的運動の法則に達せんが爲めに、人間の心は、勝手な聯絡のない單位を假定する。歷史家の第一の遣り方は、實際に於いては、如何なる事件にも始まりといふものはなく、また有るべき筈もなくて、一事件は他の事件から何等の斷絶なく續いて流れるものであるのに、任意に一列の連續した事件を採つて、それを他のものから引離して考査することにある。第二の遣り方は、個人意志の總計は決して一人の歷史的人物の行爲の中には現はれてゐないのに、多くの個人意志の總計と等しいものであるかのやうに、一人の人、一人の君主、一人の將校の行爲を考査することである。

史學は、それが進歩するに從つて、分析する爲めに、絶えず益々小さな單位を取つて行く、そして、その方法に依つて、眞理に近付かうと努める。けれども、歷史が如何に小さな單位を認めやうとも、我々は、他の單位と聯絡のない單位の假定や、如何なる現象にも「始まり」があるといふ假定や、あらゆる人々の個人意志が、たゞ一人の歷史的人物の行爲の中に現はれるといふ假定は、それ自身に於いて、誤りであると感ずる。

歷史のあらゆる結論は、たゞ批評が、分析の對照として、より大きいか或は、より少さいかの切れ切れな單位を選ぶことに依つて、批評家側の少しの努力もなしに、何等の痕跡もなく、さながら塵埃のやうに消散される。歷史の單位は當に勝手に選ばれるものであるから、批評もさうする完全な權利を持つてゐる。

觀察の爲めに、無理に小さい單位——歴史の微分——卽ち、多數の人々の同一な諸傾向を取つて、積分學(卽ち、それ等の無限に小さい量の總計を取ること。)に達することに依つてのみ、我々は歴史の法則に達し得るといふ望みを持つことが出來るのである。

十九世紀の最初の十五年は、何百萬といふ人々の目覺ましい運動の光景を示してゐる。人々は日常の仕事を捨てゝ、ヨウロツパの一の端から他の端へと突進し、掠奪し合ひ、屠り合ひ、凱歌を奏し、又、絶望した、そして人生の全潮流が變つて、初めは漸次に速度を增して行き、やがてまた、そろ〳〵と緩やかになつて行く活動を現はしてゐる。その活動の原因は何であつたか、また、如何なる法則からこの活動は起つたのか？　と、人間の智力は問ふ。

歴史家達はその問に對する答へとして、パリイの市の一つの建物の中に於ける數十人の人達の言語動作を我々の前に置いて、それ等の言語動作を一つの言葉——革命——に依つて總括する。そこで、彼等は我々に、ナポーレオンの詳傳、及び彼に對して好意乃至敵意を以てのぞんでゐた或る人々の詳傳を與へ、是等の人々の中の或る者が、他の人々に與へた所の影響に就いて語り、それから、その活動の依つて來るところの物は是れであると言ひ、是れがその活動の法則であると言ふ。

けれども、人間の智力は、さういふ說明を信ずることを拒むのみならず、その說明の方法が正確なものでないといふ事をきつぱりと宣言する。何故といふに此の說明に於ては、より小さい現象が、より大なる現象の原因とされてゐるからである。人々の個々の意志の總計が、革命をもナポーレオンをも生んだのであつて、それ等の意志の總計のみが、彼等を持續させ、やがて又彼等を滅したのである。

『併しながら、戰爭があつた時には、何時も偉大なる軍の統率者があり、國に革命が起つた時には、何時も偉大なる人物があつた、』と、歴史は言ふ。『偉大なる軍の統率者があつた時には、成程何時も戰爭があつた、』と、人間の理性は答へる、『併しながら夫れは、將軍達が戰爭の原因であり、戰爭を導いた諸要素が、一人の人の個人的活動の中に見出され得るといふ證據にはならない。』

私が自分の時計を出して見て、針がXの數字の所へ行つてゐる時には、何時も近くの敎會の鐘が鳴り始める。併し、鐘が鳴り出す時には、何時も時計の針が十時の所を指してゐるといふ事實から、私の時計の針の位置が、鐘の震動の原因であると推論する權利は、私にはない。

蒸汽機關が動き出すのを見てゐると、私は何時も汽笛の聲をきゝ、安全辯が開き車輪が廻轉するのを見る。併し、その事から、汽笛や車輪の廻轉が蒸汽機關の動く原因だと結論する權利は、私にはない。

農夫達は、櫸の芽が開きかけてゐるから、晩春には寒い風が吹くと言ふ、そして、事實として、毎春、櫸が芽を吹き出す頃には、何時でも寒い風が吹く。併し、丁度櫸が芽を出しかける頃に、寒い風が吹くその原因は私には解らないけれども、寒い風の吹く原因は、櫸が芽を開くことだと云ふ農夫達には、

私は同意することが出來ない、何故といふに風の方は全く櫛の芽とは關係がないからである。私はただこの中に人生のどんな現象にも有り勝ちな、事件のさういふ暗合を見るだけである、そして私がどれ程長く、またどれ程細密に、時計の針や、安全辯や、蒸汽機關の車輪や、櫛の芽を調べたところで、おそらく私は、鐘の鳴る原因も、蒸汽機關の動く原因も、春風の原因も發見しないだらうといふことを知る。それを發見するには、私は全然私の觀察點を變へて仕舞つて、蒸汽の運動や、鐘の運動や、風の運動の諸法則を研究しなければならない。歷史もそれと同じ事をしなければならない。ところが、この方面に向つては、既に多くの努力がなされてゐる。

歷史の法則の探究に於ては、我々は全然觀察の對象を變へて仕舞はなければならない、王達や、大臣達や、將軍達はそのまゝに捨て置き、そして群集が導かるゝ所の、同種類の無限少の諸要素を研究しなければならない。歷史の法則を理解する事に於いて、この方面に人間が何の位ゐまで進めるものであるか、それは誰にも言ふ事が出來ない。けれども、この方面にのみ、史的法則の發見の望みが、多少なりとも横たはつてゐること、及び、人間の智力が、これまでその考究の方法に對して、歷史家達がさまざまの王達や、大臣達や、將軍達の行爲の記述に用ゐた精力、及びその行爲に對する彼等自身の見解の表白に用ゐた精力の、その百萬分の一をも捧げてゐなかつたことは明かである。

二

ヨウロツパの十二の異つた國々の軍勢がロシアへ侵入した。ロシアの軍隊及び人民は、戰を避けてスモオレンスクへ退却し、スモオレンスクからボロヂイノへと退却した。フランス軍は、絶えず增して行く勢をもつて、その目的地たるモスクワへと動いて行つた。その進軍の勢は、丁度落ちて來る物體の速度が、地面に近づくに從つて增すやうに、その目的地に近付くに從つて增して來た。彼等の後ろには、饑餓に襲はれ、敵意を持つた地方の數千露里（クヱルスト）があり、彼等の前には、彼等と彼等の目的地の間の數十露里（クヱルスト）があつた。ナポーレオン軍のあらゆる兵卒はそれを感じ、遠征軍はそれ自らの推動力に依つて、ひとりでに進んで行くのであつた。

ロシアの軍隊では、憤怒の精神と、敵を憎む精神とが、退却の間にだん〳〵激しく燃え立つて、それが退却するに從つて、力を增して集中した。ボロヂイノで兩軍は出會つた。兩軍とも全滅はしなかつたが、ロシア軍は戰鬪の後、恰度一つの球が、それに出會はうとして一層大きい動力をもつて飛んで來る他の球に衝突した後では、何うしても撥ね返らさるを得ないと同じやうに退いて行つた。そして夫れと同じやうに避け難く、（衝突の際その力を失ひはしたけれども）侵入軍の球は、未だ全く弱り果

てない精力に依つて、少し前へ運ばれて行つた。

ロシア軍はモスクワを超えて百二十露里退き、フランス軍はモスクワへ着いて、其處に駐まつた。フランス軍は動かなかつた。致命傷を受けて、それから後の五週間といふものは一ツの戰もなかつた。フランス軍は五週間の間、何事もせずにモスクワに駐出血して、その傷を舐めてゐる野獸のやうに、フランス軍は遁げかへつた。カルウガ街道の方まつてゐた。そして突然何等の新しい理由もなしに、フランス軍は遁げかへつた。カルウガ街道の方へ突進した(而かもそれは、彼等がマレー・ヤロスラウエツツでは戰場を領有してゐたから、勝利の後なのであつた)。それから彼等は、これと云つて大した戰鬪は一ツもせずに、益々速にスモオレンスクへ、ウイルナへ、ベルジイナ河へ、更らにベルジイナ河を越えて逃げて行つた。

八月二十六日の晩には、クツウゾフも、全ロシア軍も、ボロデイノの戰は勝利であつた、と確信してゐた。クツウゾフはそういふ風に皇帝に上奏した。クツウゾフは全軍に向つて、敵の敗北を完全にする爲めに、もう一戰爭する用意をせよと命令した、それは、彼が決して人を欺かうと思つたからではなく、その戰爭に參加した者の誰でもが知つてゐたやうに、彼もやはり敵が敗北したことを知つてゐたからであつた。

而かもその晩から翌日へかけて、未曾有の敗北を得たといふ報告や、軍の半ばが損害を蒙つたといふ報告が來た、でもう一戰爭するといふ事は全く不可能であることが分かつた。

未だ情報が來ず、負傷者も收容されず、彈藥庫は補充されず、死者の數も算へられず、新しい將校が戰死した將校の代りに任命されず、兵卒達が食事も眠りも取らないでゐる時に戰を開くといふことは不可能であつた。而かもそれと同時に、フランス軍は、戰のあつたその翌朝、今ではその目的地からの距離の自乘に反比例して速度の加はつた、それ自らの動力に動かされて、自然にロシア軍へ襲ひかゝつて來た。クツウゾフの願望では、翌日攻擊する筈になつてゐた、そして全軍もこの願望を共にしてゐた。併し攻擊を開始するには、たゞさう望んだだけでは十分でない、それには矢張り、さうするだけの可能がなければ駄目である、ところが、その可能が無かつたのである。何うしても一日の行程だけ退かないわけには行かなかつた。すると矢張り、第二日、第三日の行程も退かないわけには行かなかつた、で、とう〳〵九月一日に、軍隊がモスクワへ到著した時、軍の氣力は益々盛になつてゐたに拘らず、事情といふものゝ力に餘儀なくされて、その軍隊は何うしてもモスクワの彼方へ退かなければならなかつた。で、軍隊は、もう一日の最後の行程だけ退却して、モスクワを敵に委ねて仕舞つたのであつた。

戰役及び戰鬪の計畫が將官達に依つて立てられるには、我々が書齋の中で地圖を前にして坐つてゐて、斯々の陣地では我々は何う活動するであらうといふやうな計畫を立てるのと同じ方法だと考へ慣れてゐる人々は、クツウゾフが、よし退却しなければならなかつたとしても、何故斯々の方針を取ら

なかつたらうとか、何故フイリの前面に陣地を占めなかつたらうとか、何故モスクワを棄てゝ直ちにカルウ街へ退かなかつたらうとか、いふやうないろ〳〵の問題に惱まされるであらう。かういふ風に考へ慣れて來た人々は、如何なる總司令官の行動をも常に制限する避け難い條件といふものを忘れてゐるか、さもなければ知らないのである。戰場に於ける總司令官の行動は、我々が呑氣に書齋の中に坐つて、與へられたる兩軍の或る兵數をもつて、知れ切つてゐる或る一定の地域で、或る刹那から我々の方略を實行し始めて、地圖の上で或る戰役を研究してゐる時に獨り考へるやうな行動とは似てもつかぬものである。將官は如何なる事件に於ても、その事件の始まりの位置——我々は何時でもその位置から事件を考へるのだが——にゐることは決してない。將官は、何時でも連續して移り行くいろ〳〵の事件の丁度眞中央にゐる、だから彼は如何なる瞬間に於いても、現在起りつゝある、その事件の、あらゆる意義を熟考するやうな位置には決してゐない。事件は、知らず〳〵、刻々にあらゆる意義を具へて形を成して行くのである、で、いろ〳〵の事件が、かうして不斷に、連續して形を成して行く各瞬間に於いて、總司令官はいろ〳〵の陰謀や、注意や、信賴や、權力や、計畫や、商議や、脅迫や、考案や、互に相鬪聯してゐる最も複雜な遊戲の中心にゐて、而かも自分に向かつて問ひかけられる矛盾した無數の質問に、絶えず答へなければならない必要に迫られてゐるのである。

我々は、軍事に明るい人々から、非常な眞面目さをもつて、クツウゾフはその軍隊を、フイリに着

くズツと前に、カルウガ街道の方へ進軍さすべきであつたといふことや、さういふ計畫を暗示した人が實際にあつたといふ樣な事を聞かされる。併しながら、軍の司令官たる者は、分けても難局に當つては、目前に一ツの方略ではなく、數十の方略を、持つてゐるものである。而かも戰略や用兵學の諸法則に基いてゐるそれ等の方略の各々は、他の總ての方略とは互に相矛盾してゐるのである。おそらく人はから考へるであらう、司令官の任務はたゞそれ等の計畫の中から一ツの計畫を選びさへすれば宜いのであると。併しながら、それさへも司令官には出來ないのだ。時や事件は待つてゐては呉れないのである。例へば彼に向つて、二十八日にカルウガ街道の方へ動くやうにと提議した者があるとする、所で、丁度その時、ミロラドキツチの所から一人の副官が駈け付けて來る、直ちにフランス軍との戰に加はらうか、それとも退却しやうかと訊ねる。彼は直ちに、卽刻、訓令を與へなければならない。而かも退却せよといふ命令は、我軍がカルウガ街道の方へ廻らうとするのを妨げることになるのである。やがて副官の後へ、兵站部長が糧食は何處へ持つて行つたらいゝかと訊きに來る、野戰病院長が、負傷兵は何處へ運んだらいゝかと訊きに來る、ペテルブルグからの使者が、モスクワ放棄の可能を認めない皇帝からの手紙を待つて來る、それから司令官の足下から、その地盤を切り離して仕舞はうとしてゐる司令官の競爭者が、(さういふ連中は、何時も一人や二人ではない)カルウガ街道へ進軍する計畫とは正反對の新しい計畫を提出する。司令官自身の精力と雖も、やはり睡眠も要すれば、補助も必要で

あるのだ。それから勳章授與の際に見落された相當な將官が不平を訴へに來る、地方の住民達が、保護を切願する、その地方の視察にやられた將校が、直ぐ同じ任務で送られた將校の報告とは、全く異つた報告を齎して歸つて來る。それから間諜や、捕虜や、偵察をした將官等が、すべて、全く異つた敵軍の位置を述べる。司令官がその下に行動しなければならない、かうしたいろ〳〵の條件を忘れてゐるか、或はそれを了解し得ない人達は、例へばフイリに於ける軍隊の位置を我々の前に呈出して、司令官は九月一日には、モスクワを守る可きか、はた棄つ可きかといふ問題を決定するには、全く自由であつたといふことを專斷するが、モスクワから僅に五露里しか距たつてゐなかつたロシア軍の位置では、最早この問題に何等の疑問を挾むことは出來なかつたのである。この問題は何時決せられたか？　ドリツサでスモオレンスクで、八月二十四日には最も明瞭にシエヴアルデイノで、二十六日にはボロヂイノで、ボロヂイノからフイリへ迄の退却の每日、每時、每分の中に決せられたのであつた。

三

ボロヂイノから退却して來たロシア軍は、フイリで止まつた。その位置を視察してゐたイエルモロフは總司令官の所へ馬を驅つた。

『この陣地では、とても戰へる見込がありません。』と、彼は言つた。

クツウゾフは彼を不思議さうに見て、今言つたばかりの言葉を繰り返へさせた。彼がさうすると、クツウゾフは彼の方へ手を出した。

『君の手を貸し給へ。』と、彼は言つた、そしてその脈搏でも見るやうに手の掌をかへしてから言つた。

『病氣だね、君は。自分の言つてゐる事を考へて見給へ。』

クツウゾウは、一戰も交へずにモスクワを棄てゝ退却するやうな事が有り得るといふ考を、未だ理解することが出來なかつたのである。

ドロゴミロフスキー門から六露里ばかり距だつてゐるポクランナヤの丘で、クツウゾフは馬車から降りて、路傍の腰掛の上に腰を下した。大勢の將官達が彼のまはりに集まつた。モスクワから來たラストプチン伯爵も、その中へ加はつた。この花やかな一群は、幾つもの小團に分かれて、仲間同士でその位置の利益不利益や、軍隊の狀態や、呈出されたいろ〳〵の計畫や、モスクワの情況など——實際、軍事上の全般の問題に就いて話してゐた。彼等はその目的の爲めに招集されたのではなかつたけれども、實際は、よし表向きではないにしても、それが軍略會議であるといふことはみんな感じてゐた。談話は總て公の問題に限られてゐた。よし誰かゞ何か個人的の報知を繰り返すとか、又は尋ねたりするやうな事があつたとしても、それはたゞ囁かれるだけで、話は直ちに一般的の話題に戻つて行つた。總

て是等の人々の間には、戯談も、笑も、微笑さへも見られなかつた。彼等は悉くその場の水平線へ上らうとして明かに努力しつゝあつた。そして總ての集團は、その仲間同志で話しながらも、總司令官——その腰掛は群集全體の中心を形作つてゐた——の直ぐ近くに居やうと力めたり、自分達の話を、總司令官が聞いて呉れるやうに話さうと力めたりした。總司令官は耳を傾けてゐた。そして時々、自分の近くで何んな事が話されてゐるか、それを訊ねるやうなこともあつたが、自分から進んでその談話に加はるとか、又は意見を發表するとかいふやうなことは決してなかつた。大抵は、或る集團の話に耳を傾けてゐた後で、恰も彼等が、自分の聞かうと思つてゐたやうな事は、少しも話してゐなかつたとでもいふやうに、失望の樣子で脇を向いて仕舞ふのであつた。或る集團は、陣地の事を論じてゐたが、陣地そのものに就ては、それを選んだ人々の智識上の器量ほど批評されなかつた。他の集團は間違ひはもう以前に釀されてゐたのだといふことや、もう二日前に戰はなければならなかつたのだといふやうな事を論じてゐた。他の集團は、スペインの軍服を着たクロザアルといふフランス人が、彼等に物語つてゐたサラマンカの戰のことを話してゐた。(丁度着いたばかりの此のフランス人は、ロシア軍に加はつてゐるドイツの公爵達の一人と共に、サラゴツサの包圍を批評して、モスクワにも夫れと同一の防禦を施すことが出來るといふ事を見越して言つてゐた。)第四の集團では、ラストプチン伯爵が、自分はモスクワの市衞兵と共に、市の城壁の下で死ぬ覺悟ではあるが、併しかういふ不確かな

狀態の中に殘されては何うも不平を鳴らさゞるを得ない、若し自分がもつと早くかうなる事を知つてゐたら、事情は違つてゐたらうなどゝ言つてゐた。……第五の集團は、軍隊が今確かに取られなければならない方向を論ずることに依つて、自分等の戰術上の洞察力が非常に深いことを見せてゐた。第六の集團は、全く愚にも付かぬ事を話してゐた。

クツウゾフの顏は益々心配さうに、陰鬱になつて來た。是等總ての話から、クツウゾフはたゞ一つの事、卽ち、モスクワの防禦は、物理的不可能事——さういふ語の最も充分な意味に於ての——であるといふ事を知つたゞけであつた。氣の狂つた司令官が、戰鬪の命令を下したとしても、それに次いで來る所のものは一切滅茶苦茶な事であつて、戰爭は決して出來まいと思れる迄に、それは全く不可能なことであつた。司令官たる總ての將校達が、その陣地の全く不可(いけな)いことを認めてゐたばかりでなく、今ではたゞその陣地を止むを得ず放棄した後で、何うすべきであるかといふ事を論じてゐたゞけであるから、戰爭の開かれる筈はなかつたのである。將校達と雖も、自分等が何うしても支へることが出來ないと考へた戰場へ、何うしてその部下を率ゐて行くことが出來やう? 下級の將校達や兵卒達自身でさへ、(彼等もやはり彼等の結論を下してゐた。)その陣地は到底支へられないことを認めてゐた、從つて彼等も、屹度敗北するだらうといふ確信を懷いて、戰に臨むことは到底出來なかつたのである。ベニグゼンが陣地の防守を主張し、他の人々が未だそれを論議してゐたといふことは、それ自身に於

いては何等の意義もない事實であつて、たゞ軋轢と陰謀を行ふための口實に過ぎなかつたのである。クツウゾフはそれを知つてゐた。

ペニグゼンは、モスクワの防禦を主張することによつて、熱心に自分のロシア的愛國心を示してゐた。(クツウゾフは、たじろがずにそれを聞いてゐることは出來なかつた。)クツウゾフには、ベニグゼンの目的が火を見るよりも明かであつた——若しその防禦が不成功に終つた場合には、一戰もせずに、軍を雀が丘(スパロース、ヒル)まで持つて來たクツウゾフに、その罪を着せやうとし、若しそれが成功した場合には、その功を要求しやうとし、若しそれが全然企てられなかつた場合には、モスクワ放棄の罪から身を潔くしやうといふのであつた。

併し、かういう陰謀の問題も、今はこの老人の心を領してはゐなかつた。一ツの怖ろしい疑問が彼の心を引き付けてゐた。そして、彼はその疑問に對して誰からも答へを聞かなかつた。今彼にとつての疑問といふのは、かういふことであつた——

『俺がナポーレオンをしてモスクワへ來させたら? 何時俺はそんな事をしたらう? 昨日俺がプラトフに退却しろと命令したあの時かしら? それとも、ベニグゼンに命令を出させたあの時かしら? それとも、もつと前かしら?……何時、何時そんな怖ろしい事が起つたのだらう? モスクワを棄てなければならぬ。軍は退却しなければならぬ。そして俺はその命令を與へなければならないのだ。』

その怖ろしい命令を與へるといふ事は、彼に取つて、明かに、軍の司令を辭するのと同じことのやうに思はれた。彼が權力を愛し、且つ權力に慣れてゐたといふ事實は別として、(彼はトルコに於て、プロザロウスキイ公爵の部下として仕へてゐたが、公爵の尊敬される事が、ひどく彼を苦しめた。)彼は自分がロシアを救ふやうに定められてゐて、自分はたゞ夫れが爲めに皇帝の意に反し、人民の意志に從つて、總司令官に選ばれたのだと確信してゐた。彼はかうした難局に當つて、軍の統率としてその位置を保ち得る者は一人自分だけであり、狼狽せずに、敵手としてナポーレオンに當り得べき者は世界に於いて一人自分だけであると信じてゐた。で、司令權を棄てなければならぬといふ事を考へて彼は慄然としたのであつた。が、彼は何等かの處置を執らなければならなかつた。あまり不謹愼になりかけてゐた周圍のこの饒舌を止めて仕舞はなければならなかつた。

彼は古參の將官達を自分の所へ招き寄せた。『Ma tête. fût-elle bonne ou mauvaise, n'a qu'à s'aider d'elle même.(私の判斷は善いにしろ惡いにしろ、やはり夫れに便らなければならぬ。)』彼は腰掛から起ち上りながらかう言つて、自分の馬車が待つてゐるフイリへ向けて馬を驅つて行つた。

四

農夫のアンドレー・サヴオスチヤノフの家の、大きい、一番上等の部屋で、二時に會議が開かれた。この農夫の大家族の男や女や子供達は、悉く廊下の向側の部屋に集まつてゐた。たゞ、殿下が可愛いがつて、茶を飲む時によく砂糖をやつたりなどしてゐた、アンドレーの孫娘の今年六ツになつたマラーシヤだけは、一番上等の部屋の大きな煖爐の蔭に留まつてゐた、マラーシヤは羞かしさうに煖爐の上から覗いて、次々に部屋へ這入つて來ては聖像の下の一番上座の隅にある廣い腰掛に一列に腰を掛けた將官達の、顏や、軍服や、勳章などを嬉しさうに見てゐた。『お祖父さん』自身——マラーシヤは心中で私かにクツウゾフをさう呼んでゐた——は、煖爐の蔭の暗い隅に、みんなから離れて座つてゐた。彼は折り疊みの出來る安樂椅子に積み重ねたやうに、どつかりと腰をかけて、絕えず咳拂ひをしたり、上衣の襟を直してゐた。その襟の扣鈕は外してあつたが、それでも尙ほ首を痛めるらしかつた。將官達は次々に部屋へ這入つて來た時、總司令官の傍へ歩み寄つた。彼は或る者とは握手をし、他の者には唯頷くだけであつた。

副官のカイザロフは、クツウゾフの正面の窓へ窓掛けを引かうとしたが、クツウゾフが腹立たしさうに手を振つたので、彼は、殿下が人々に顏を見られるのを何とも思つてゐないといふ事を知つた。

地圖や、設計圖や、鉛筆や、紙の載せてある農夫の縱板の卓の周圍には、非常に大勢集まつてゐて、從卒達が腰掛をも一つ運んで來て、それを卓の近くに置いた程であつた。イエルモロフ、カイザロフ、

トオルがその腰掛の上に腰を掛けた。聖像の下の一番上席には、青い、病身らしい顏をした、禿頭に續いてゐる高い額のバアクレイ・ド・トオリイがセント・ゲオルギイ勳章を頸にかけて座つてゐた。彼はこの二日の間、熱病の爲めに非常に苦しめられてゐるので、今でも震へたり戰いたりしてゐた。彼の傍にはウワーロフが座つてゐて、みんなと同じやうな低い聲で、急がしく手眞似をしながら彼に何か話してゐた。小さい、圓々と肥つたダフツウロフは、眉をあげ、手を腹の上で組んで、注意深く耳を傾けてゐた。向側には、勢のいゝ顏容をした、眼の輝やいてゐるオステルマン・トルストイ伯が、大きな頭を抱へて、ぢつと考へ込んでゐるやうな風で座つてゐた。ラーエウスキイは何時もするやうに、頸顱の上の黒い捲髮を捻りながら、クツウゾフから扉口の方へ、焦れつたさうに眼を移した。コノウニツチンのしつかりした、綺麗な、機嫌の宜さゝうな顏は、微かな、親切さうな微笑をもつて輝やいてゐた。彼はマラーシヤと眼を見合せて、眼でマラーシヤに合圖をした、それがこの小娘を微笑ませた。

彼等はみんなベニグゼンを待つてゐた、ベニグゼンは、も一度新たに陣地を視察して來るといふ口實の下に、贅澤な食事を濟まさうと掛かつてゐたのであつた。彼等はベニグゼンを四時から六時まで待つた。その間は討議に入らないで、低い調子で餘談ばかりやつてゐた。

ベニグゼンが小屋へ這入つて來た時、クツウゾフは初めて部屋の隅から出て來て卓の所へ行つた、が、蠟燭の光りが自分の顏へ屆かないやうな所に座つた。

ベニグゼンは、ロシアの神聖な古い都を棄てるか、それとも守るか？　といふ問題で會議を開いた。長い沈默が續いた。誰の顏でも顰んゐた。そしてその靜けさの中で、クツウゾフが腹立たしさうに咳拂ひするのが聞えた。みんなの眼が彼の上に注がれてゐた。マラーシヤも『お祖父さん』を見詰めてゐた。

マラーシヤは、誰より一番クツウゾフの近くにゐた。そしてその顏色の動いてゐるのを見た。彼は殆んど泣き出しさうに見えた。が、それは長くは續かなかつた。

「ロシアの神聖な古い都」と彼は突然、腹立たしげな聲で、ベニグゼンの言葉を繰り返しながら叫んだ、それに依つて彼は、その言葉の中に含まれてゐた虛僞の調子を指摘した。『失禮ながら閣下、その問題はロシア人にとつては、何等の意味も持つてはゐない。』と、彼は重い體を前へ傾けた、)『さういふ問題は提出さる可きではない、そんな問題には何等の意味もないのだ。我輩が諸君に集まつて議して貰はふと思つたのは、戰爭の問題なのである。その問題はかういふのだ。ロシアの安否は一にその軍隊にある。戰を開いて、軍隊及びモスクワを失ふ危險を冒す方が好いか、それとも戰はずしてモスクワを棄てた方が好いか？　これが我輩の諸君の意見を知りたいと思ふ問題である。』彼は再び低い椅子にどつかりと腰を下ろした。

討論が始まつた。ベニグゼンは未だ勝負が負けになつたとは考へなかつた。バアクレイやその他の

人々の意見に壓倒されて、フイリに於ける防禦陣地を支へることの不可能を承認した彼は、夜間に、軍を陣地の右翼から左翼へ動かし、翌日フランス軍の右翼を突かうといふことを提議して、それに依つて自分のロシア的愛國心と、モスクワに對する自分の愛着心とを證明しやうとした。意見は區々に分れ、樣々な議論が、この計畫に贊同したり反對したりして唱えられた。イエルモロフ、ダフツウロフ、ラーエウスキイはベニグゼンに味方した。都を棄てる前に或る犧牲が何うしても必要であるといふ感情や、他のさま〴〵な個人的の考慮に導かれて、是等の將官達は、その時開かれたこの會議が、事件の避け難い進行を動かすことが出來ないといふことや、モスクワは事實に於て、既に棄てられてゐるといふことを會得出來ないらしかつた。他の將官達はこの事を理解してゐた、そしてモスクワの問題は放擲つて置いて、軍隊が退却する時に執るべき方向に就いて話してゐた。

自分の前に起りつゝあつた事柄を、絕えず見詰めてゐたマラーシヤは、その會議を全く違つた光で見た。彼女にはこの目前の事件が『お祖父さん』と『長外套』――彼女はベニグゼンを自らさう呼んでゐた――の間の個人的の爭であるやうに見えた。彼女は、お互に話し合ふ時には二人とも怒つてゐるのを見た、そして心の中では、彼女は『お祖父さん』の方に味方した。會話の最中に、彼女は『お祖父さん』がベニグゼンに與へた早い狡猾さうな眼付を見た、そして直ぐその後で『お祖父さん』の言葉が『長外套』を凹ませたのを認めて喜んだ。ベニグゼンはさつと顏を赤めて、腹立たしさうに部屋を横切つ

た大股に歩いた。斯くベニグゼンを動かした言葉は、フランス軍の右翼を突く爲めに、夜に乘じて、兵を右翼から左翼へ動かさうといふ彼の提言に對して、クツウゾフが靜かに穩やかに加へた批評の言葉であつた。

『諸君、我輩は伯爵の計畫に贊成出來ない。』と、クツウゾフは言つた。『敵軍にあまり近く接近して軍を動かすのは、何時でも危險である。で、戰史はさういふ行動から生じた失敗の例を澤山に與へてゐる。例へば……』(と、クツウゾフは、その例を捜がさうとして考へてゐるらしかつたが、やがて、率直な天眞爛漫な表情をしてベニグゼンを見た。)……『うん、例のフリードランドの戰、あれは伯爵も確かに覺えて居るだらうが、あれなどは敵軍にあまり近く接近して軍の位置を變へた爲めに、十分な成功を收め得なかつたのだ……』

一瞬間の沈默が來た、それがみんなには可成り長いやうに思はれた。

討論がまた新たに始まつたが、屢々途切れ勝ちであつた。そして別に話すべき事もなかつたやうに感じられた。

或る途切れ目へ來ると、クツウゾフは、何か言はうとするかのやうに、重い溜息を吐いた。みんなが、其方を振り向いた。

『いや、諸君、毀れた壺の償ひをすべき者は我輩であるといふことが分つた。』と、彼は言つた。そして靜かに自席から立ち上つて、卓(テーブル)の方へ歩いて行つた。『諸君、我輩は諸君の意見を伺つた。諸君の中の或る人々は、我輩には贊同せられないだらう。併しながら我輩は、』(と、彼は言葉を切つて、)『皇帝及び國家より我輩に托された職權に依つて退却を命ずる。』

そこで將官達は、人々が葬式が濟んで分れる時のやうな嚴肅さと、愼み深い沈默をもつて解散し始めた。五六人の將官達は、會議の時話してゐたのとは全く違つた音階の、低い聲で、何か總司令官に陳述してゐた。

他の部屋で晩餐に來るのを長い間待たされてゐたマラーシャは、煖爐(ストーブ)の凸出部(でつぱり)に裸足(はだし)のまゝの爪先をかけて、後向に煖爐から跳び下り、將官達の脚の間をすり抜けて扉口から飛び出して行つた。

將官達を歸らして仕舞つた後で、クツウゾフは卓(テーブル)に肱を突いて、『何時、何時モスクワを何うしても棄てなければならないやうな事になつたのであらう？　何時それを避け難い事にしたやうな事柄がなされたのであらう、そしてその咎を負ふべき者は誰であらう？』といふ例の怖ろしい問題を考へ込みながら、長い間坐つてゐた。

『かうならうとは全く豫期しなかつた！』と、彼は夜遲く自分の所へ這入つて來た副官のシュナイデルに向かつて言つた。『かうならうとは全く豫期しなかつた！』

『殿下、おやすみなさらなければ不可ません。』と、シュナイデルは言つた。

『ふむ、だがトルコ人のやうに、彼奴等には馬肉を喰らはしてやる！』とクツウゾフは、副官を氣にも留めずに、むつくりと肥つた拳固を卓の上に打ち下しながら叫んだ。『彼奴等にもそれを喰らはしてやる。唯だ若しも……！』

五

その間に戰はずして軍を退却させる事よりも、尙ほ一層重大な出來事、卽ちモスクワの放棄とその燒失とに於いて、その事件の主動者であると我々が信じてゐるラストプチン伯爵は、クツウゾフとは非常に異つた態度で活動してゐた。

この事件――モスクワの放棄とその燒失――は、ボロデイノ戰爭後、戰はずして軍を退却させたことゝ同じく、やはり避け難い事件であつた。

あらゆるロシア人は、連續した智識的推論の結果としてではなく、我々の心の底に横たはつてゐる感情から、我々の祖先の心の底に横たはつてゐた感情から、この事件の起ることを豫言することが出來たのであつた。

スモオレンスクから此方への、ロシアの國土に於けるあらゆる都市、あらゆる村落に於ても、ラストプチン伯爵の助けや、その揭示がなくとも、やはりモスクワに於いて起つたと同一の事が起つたであつた。人々は少しも騷がずに敵の來るのを待つてゐて、興奮を見せなかつた、何人をも粉々に引裂くやうなことはしなかつた、たゞこの困難な場合に於て爲さねばならぬ事を見出す力を自分等の中に感じて、靜かにその運命を待つてゐたのであつた。

やがて敵軍が近づいて來るや否や、人民の中の金持の部分が、財產を後に殘して去つて仕舞つた、貧乏人は踏み留まつて、殘された總ての物を燒いたり破壞したりした。

之れはさうあるべきである、而も何時でもさうあるといふ觀念は、あらゆるロシア人の心の底に横たはつてゐるのである、この觀念に揭てゝ加へて、モスクワが敵に占領されるだらうといふ豫想が、千八百十二年のモスクワのロシア人の社會に横たはつてゐたのである。七月から八月の初めにかけてモスクワを立退き始めた人々は、彼等がそれを豫期してゐたといふことを示したのであつた。家や、財產の半分を棄てゝ持ち運べる物だけを持つてこの都を去つた人々は、潛在的愛國心は言葉や、それから祖國の爲めに自分の子供を死なせにやるといふやうな不自然な所業の中には現はれるものではなくて、知らず〳〵の間に、最も單純な、實質的な姿でそれ自らを現はすのである、從つてそれは、何時でも

最も力強い結果を生ずるのである。

『危險から遁れるのは恥辱である、たゞ臆病者だけがモスクワから逃げるのだ、』と彼等は言ひ聞かされてゐた。ラストプンチはその揭示で、モスクワを立退くことは卑怯であると彼等に說いた。彼等は、臆病者と呼ばれるのを恥ぢた。而かも尙ほ彼等は、さうしなければならない事を知つて逃げ去つたのであつた。彼等は何故逃げ去つたのであらう？　ナポーレオンが、その征服した國々に於いていろ〳〵殘忍な所業を行つたといふ話をして、ラストプチンが、彼等を脅かしたものとは想像することが出來ない。第一に立退いた人々は、金持で教育のある人々であつて、ウヰンナやベルリンが、何等の損害も受けずにゐるといふことや、それ等の都市の市民達は、ナポーレオンがそれ等の都市を占領した時、總てのロシア人が、別けても貴婦人達が、その當時非常に好いてゐた魅力あるフランス人と、面白く時を過したといふことを知つてゐた。

フランス人の支配のもとにモスクワにゐるといふ事が、愉快であるか何うかといふ問題は、ロシア人にとつては思ひ浮べられない問題であつたが故に、彼等は去つたのであつた。フランス人の支配の下に立つといふことは、實際問題にならなかつた、それは何ものよりも惡いことであつた。彼等はボロヂイノ以前に於いてさへ去つてゐた、そしてボロヂイノ以後にはそれが益々手速くなつた。彼等は市を防禦する爲めの召集や、モスクワ總督の布告や、イヴエルスキイ聖母像を持つて戰に出やうといふ彼の意志や、フランス軍を潰亂させやうといふ輕氣球の計畫や、ラストプチンがその揭示を滿たしたあらゆる馬鹿らしい事などには、少しも注意しなかつた。彼等は戰ふのは軍隊の義務であつて、若し軍隊が戰ふことが出來ないとすれば、若い婦人達や家僕達がツリー・ゴオルイでナポーレオンと戰はんが爲めに、飛び出して行つたところで、何の役にも立たないであらうといふ事を知つてゐた。そこで彼等は、自分達の所有物を破壞の手に委ねなければならないといふ事を悲しみながらも、急いで去らなければならなかつたのである。彼等は、この限りなく富裕な都市が、その住民に棄てられ、それが爲めに、何うしても燒拂らはれなければならぬといふ、その重大なる結果を考へずに去つたのであつた。空家を壞したり燒拂つたりすることを愼むといふやうな考へは、ロシヤの農夫達の心には、決して浮んでは來ないのである。彼等はめい〳〵勝手な理由で逃げ出したのだが、而かもロシア國民の最高の榮光たるこの大事件が實現されるやうになつたのは、一に彼等のこの行爲の結果に他ならなかつたのである。ボナパルトの召使には何うしてもなりたくないといふ漠然たる感情と、ラストプチンの命令に依つて去ることを妨げられはしないかといふ漠然たる恐怖とを懷いて、六月に自分の黑人（ニグロ）達や道化者達を一緒に伴れて、モスクワからサラトオフの自分の領地へ向けて出發した貴婦人達は、單純に、正實に、ロシアを救つた大偉業をなしつゝあつたのである。

ラストプチン伯爵は、或る時は、去つて行く人々に侮辱の言葉を浴びせかけ、次ぎには總ての官衙

を移し、次ぎには役に立たない武器を醉どれの暴民に分配し、次ぎには聖像を擔ぎ出して、師父アウギユスチンが聖物及び聖像を他へ移さうとするのを妨げ、次ぎにはモスクワにある有らゆる私有の馬車を差し押へ、次ぎには百三十六輛の荷馬車をもつて、レピツチが造つた輕氣球を引き出し、或る時はモスクワに火を付けなければならないといふことを仄めかし、或時は自分の家を燒き拂つた有樣を述べ、それからフランス人に與へる宣言書を書いて、その中で、彼等が自分の子供時代の故郷を破壞することを嚴肅に非難した。彼はモスクワに火を付けたことに對して、その功を要求するかと思へば、やがて夫れを取消したり、人々に、總ての間諜を捕へて、自分の所へ連れて來るやうにと命令して置きながら、人々がさうするのを非難したり、あらゆるフランス人の住民をモスクワから追ひ出してをたオーベル・シヤルミイ夫人だけを殘して置いたりした。彼は別にこれと云ふ理由もないのに、尊敬すべき老郵便局長クルーチヤロフを引捕へて、それを流刑に處せよと命じた。彼は、フランス軍と戰はせる爲めに人々をツリー・ゴオルイの上に集めて置いて、やがてその人達を棄く爲めに、彼等に一人の男を渡して之れを虐殺させ、自分は裏口から遁げて仕舞つた。彼は、モスクワの不幸を決して殘存させては置かないと誓つて置きながら、後になつては、その事柄に自分が携はつてゐたことに對して、アルバムの中に次のやうなフランス語の歌を書き付けた。

Je suis né Tartare.
Je voreius être Romain.
Les Français m'appelérent barbare,
Les Russes—Ceorge Daudin.

「私はダツタン人に生れた。
私はローマ人になりたい。
フランス人は私を野蠻人と呼び、
ロシヤ人は——ジョルジュ・ダンダンと呼ぶ。」

（註に曰く、ジョルジュ・ダンダンはモリエールの或る戲曲の中に現れて來る人物であつて、農夫から貴族にまで出世して、不貞な金持の細君と結婚した農夫の典型である。）

この男（ラストプチン伯爵）は、起りつゝあつた事件の意義を少しも覺り得なかつた。彼が欲したのは、たゞ何事かをしたいといふことゝ、人民を驚かしたいといふことだけであつた。で、彼は恰度子供のやうに、モスクワの放棄及び燒拂ひとを成し遂げたいといふことであつた。で、彼は恰度子供のやうに、モスクワの放棄及び燒拂ひといふこの偉大な避け難い事件の周圍を戲れ廻はつて、その可弱い手で、彼をも一緒に押し流して行く大なる民衆的潮流の流れをば、最初は促進しやうとし、次ぎには堰き止めやうとしたのであつた。

六

エレンは、宮庭がウイルナからペテルブルグへ歸つたので、自分もそれに隨いて歸つて來た、そして非常に六つかしい位置に自分自身を見出した。

ペテルブルグでは、エレンは、政府で最高の位置の一つを占めてゐる或る大人物の特別の最負を受けてゐた。ウイルナでは、或る若い外國の皇族と通じてゐた。

彼女がペテルブルグへ歸つて來た時には、その皇族も、その大官も、二人ともペテルブルグにゐて、兩方がその權利を要求した、そこでエレンは、自分の經歷に於いては未だ曾て起つたことのない問題——即ち、何方も怒らせずに、何方とも極く密接な關係を維持して行かうといふ問題に打つかつて仕舞つたのであつた。

他の婦人には、六つかしい仕事乃至不可能な仕事と思はれさうな事柄でも、明かに最も悧巧な女であるといふ評判を取つてゐたベズウホフ伯爵夫人にとつては、ほんの瞬間の考慮にも値ひしなかつた。彼女が若し隱さうとしたら、彼女が若し瞞着手段に依つて、この氣拙い位置から遁れやうとしたら、彼女は自分を罪ある者と認めることになつてその立場がまづいことになつてしまつたに違ひないのだ。併しながらエレンは、何時でも自分のしやうと思つた事は、何でも出來る眞に偉大なる人のやうに、直ちに自分の位置は正しいのであつて、(彼女は實際心からさう信じてゐたのであつた)罪の責任は總て他の關係者にあるといふ態度をとつたのであつた。

最初、若い外國の皇族が彼女を非難しやうとした時、彼女はその美しい頭を擧げて、嚴然たる調子で、彼に向つてきつぱりとかう言つた——

『それが男の利己主義と殘酷といふものです。私はそれ以外は何にも期待してはゐませんでした。女は、あなた方の爲めにその身を犧牲にするんです、そして苦しむんです。これが女の報酬なのです、殿下、あなたは何ういふ權利がおありになつて、私の友情や、私の情愛に對して兎や角うおつしやるのです? あの人は、私にとつては父よりも大切な人なんですからね!』

皇族は何か言はうとした。エレンはそれを遮切つた。

『えゝ、さうですとも、おそらくあの人は私に對して、父親の感情よりは、もつと異つた感情を持つて居りませう。だからと云つて夫れがあの人を寄せつけぬやうにしなければならないと云ふ理由にはなりません。私は恩知らずの人間ではないんですよ。宜う御座んすか、殿下、私は自分の胸の中の、感情に關係のある事は何でも、たゞ神と良心とだけに打明けるのです。』と、彼女は、美しい波立つ胸に手を置いて、天を見上げながら言葉を結んだ。

『だが、私の言ふことを何卒聞いて下さい！……』

『私と結婚なさいまし、さうすれば、私はあなたの奴隷になります！』

『けれども夫れは不可能です。』

『では、あなたは、私と一緒になつては下さらないんですね、あなたは……』と、エレンは突然泣き出した。

皇族は彼女を慰めやうとした。エレンは全く氣が狂つたやうになつて、自分の結婚を妨げる物は何にもないといふことや、それには幾つも先例があるといふことや、(さういふ例は、その當時にあつて極く少なかつたのであるが、エレンはナポーレオンや、その他二三の高い階級に屬する人々の例を引いた)自分は自分の夫に對して本當の妻ではないといふことや、自分は厭々ながら犧牲者となつて、結婚へ引つ張り込まれたのだといふやうな事を、涙ながらに言つた。

『でも、法律や、宗教は……』と、皇族は將に讓歩しさうになつて呟いた。

『法律や宗教ですつて……そんな物が支配出來ない位ゐなら、何故そんな物を發明したんでせう？』と、エレンが言つた。

皇族は、そんな極く單純な考へが、一度も自分の心には浮かんで來なかつたことを思つて喫驚した、そして自分と密接な關係のあるヂエスイツト教派の會議にそれを訴へた。

二三日經つて、エレンがよくカメンニイ・オストロフの夏別莊で催した氣持のいゝ宴の一つで、氣持のいゝムシュ・ジョーベルと云ふ男がエレンに紹介された。その男はもう可成の年で、雪のやうに白い髪の、輝いた黒い眼の、un jésuite à robe courte (短衣服のジェスイツト)であつた。彼は、音樂の調子に合せて、庭のイルミネーションの間をエレンと共に長いこと歩きながら、神の愛や、クリストのことや、聖母の心のことや、唯一眞正のカソリック教の信仰に依つて、現世及び來世に於いて與へられる慰藉のことに就いて話した。エレンは動かされた、そしてエレンの相手が、彼女を舞踏に伴れて行つて仕舞つたのも幾度も涙が溢れた。彼等の聲は震へてゐた。エレンの眼にも、ジョーベルの眼にも、で、彼女と『彼女の將來の良心の指導者』との會話はそのまゝ中斷されて仕舞つたのであつた、が、その翌晩ムシュ・ショーベルは、一人でエレンを訪ねて來た。そして、その日から、彼はよく來る訪問客となつたのであつた。

或る日彼は、伯爵夫人をカソリツク教會へ伴れて行つた。そこで彼女は、自分が導かれた祭壇の前に跪いた。すると、氣持のいゝ、中年のフランス人が彼女の頭に手を置いた。彼女が後でその時の有樣を話したところに依ると、彼女は何かしら自分の靈魂に泌み込むやうに思はれた新鮮な空氣の息吹きのやうな物を感じたのであつた。それが『神の恵み』であると彼女に說明されたのであつた。

やがて、a robe longue (長衣服の)長老がエレンの所へ伴れて來られた、彼はエレンに懺悔をさ

せて、彼女の罪を赦した。翌日、聖體の這入つてゐる箱が持つて來られて、彼女が家にゐても信心の出來るやうに置いて行かれた。數日の後エレンは、今はもう本當のカソリック教會へ這入ることを許されたといふことや、二三日のうちに、法皇自身がエレンの事情を聞いて、書類を送つて呉れるだらうといふことを知つたので非常に滿足した。

その頃、彼女及び彼女の周圍に起つた一切の事——非常に多くの賢い人々から、彼女に向つて拂はれた、そして非常に氣持の好い微妙な形式の中に現はされた親切、改宗の間の鳩のやうな彼女の純潔、(エレンは始終白の衣服と白のリボンの外には何にも着けてゐなかつた。)——さういふ總ての物が彼女に滿足を與へたのであつた。併しこの滿足は決して彼女をして、一瞬間もその目的を見失はせるやうなことはしなかつた。で、狡猾の戰に於いては、何時も間の拔けた人間の方が、悧巧な人間よりも勝を占めるのと同じで、エレンは、是等總ての言葉及び是等總ての策略の動機は、自らをカソリック教に改宗させて、それに依つてジエスイツト派の利益を計る爲めに、自分から纏まつた金を取らうといふのであること(事實それは仄めかされもした。)を十分覺つてゐたので、彼女は金はなか〳〵出さずに置いて、夫婦間の覊絆から自分を自由にして呉れるやうな樣々な作戰を飽くまで續けたのであつた。彼女の意見では、有らゆる宗教の眞の目的は、人間の欲望を滿足させる爲めに、世間一般に認められる合宜の形式を供給することであつた。この目的を眼の前に置きながら、彼女は自分の精神上の

助言者との會話の一ッに於いて、自分の結婚は何の位ゐの程度にまで結び付けられてゐるものであるか、といふ問題に對する答を飽くまで要求した。

二人は客間の窓の傍に坐つてゐた。それは黄昏時であつた。窓からは、花の香りが漂つて來た。エレンは、胸や肩が透いて見えるやうな白い衣服を纏つてゐた。つや〳〵した、血色の好い長老は、圓圓とした綺麗に剃つた腮と、愛嬌深い、強さうな口とを持つてゐて、白い手は膝の上におとなしやかに組み合せたまゝ、エレンの傍に坐つてゐた。唇には微妙な微笑を浮べ、眼には愼み深い嘆美の色を見せて、彼は時々エレンの顏を見詰めながら、その問題に對する自分の意見を說明した。エレンは落着かない笑顏をして、彼の捲髪や、綺麗に剃つた黒みがゝつた頰を眺めて、談話が新らしい方向を取るのは、今か今かと待つてゐるやうに見えた。併し長老は、この相手の美しさには確かに氣が付いてゐたけれども、また自分がその問題を巧妙に取扱ふ技倆にも興味を持つてゐたのであつた。この精神上の助言者は次のやうに論步を進めた——

『あなたは、御自分の約束の意義を御存知なしに、或る男に對して妻としての貞操をお誓ひなさつたのだが、その男の方はといふと、結婚の宗教的意義には何等の信仰も持たずに、結婚といふ聖禮に這入つて行つたが爲め、瀆神の罪を犯したのです。その結婚は當然持つ可き筈の雙方の結合力を持つてゐなかつた。だが、それに拘はらず、あなたの誓は、あなたに取つては破ることの出來ないものなの

です。ところが、あなたはそれを破つた。あなたは一體何んな罪を犯したのでせう！　肉の罪でせうか、それとも靈魂の罪でせうか？　肉の罪です、何故といふに、あなたは惡いことをしやうといふ意志は少しもなくつて、それを犯したからなのです。若し今あなたがお子さんをお持ちになりたいといふ目的で新たに結婚なさるとすれば、あなたの罪は赦されるかも知れません。だが問題はまた二つに分れます。第一……』

『ですけれど、私の想像しますところでは、』と、だん〳〵焦れ出して來たエレンは、例の恍惚するやうな笑顏をして突然言つた。『本當の宗教に改宗した後、今更ら虛僞の宗教が私に强いる義務に束縛されるわけには參りません。』

彼女の精神上の助言者は、この解釋の單純さが、さながらコロンバスの卵の解釋のやうに單純なので喫驚した。彼は自分の弟子の進歩が案外早いのを非常に悅んだが、自分にとつて精神上の努力を要したこの巧妙なる議論の建物を彼は何うしても棄てることが出來なかつた。

『我々はお互に理解し合はうぢやありませんか。』と、彼は微笑しながら言つて、自分の精神上の娘の辯論を反駁する議論を搜し初めた。

七

エレンは、その事件は宗教上の見地から見る時には至極單純で且つ容易であるが、自分の精神上の助言者たちがさま〴〵な異論を唱へるのは、偏に俗世間の有力者たちの、その問題の見方を氣にしてゐたからであることを知つた。

そこでエレンは、本當の光の中に於いてその事件を見得るやうに、社會の爲めに道を開かなければならぬと心秘かに決心した。彼女は例の年老いた高官の嫉妬心を煽り立てゝ彼に對しても、も一人の戀人に言つたと同じ事を言つた——卽ち自分に對して獨占的の權利を得る唯一の方法は、自分と結婚することであるといふ事を理解させやうとしたのであつた。この年老いた高官も、やはり若い外國の皇族のやうに、最初は、現にその夫が生きてゐる人妻からの結婚の申込みに瞠若した。けれども、それは未だ嫁いだ事のない娘の結婚と同じく單純で、そして自然な事柄であると主張するエレンの躊躇のない確信が、やはり彼にも効果を與へたのであつた。若しエレンに、一寸でも躊躇とか、羞恥とか、遠慮とかの跡が見えたならば、彼女の計畫は確かにおぢやんになつたのに違ひなかつた。併し事實は夫れとは大に異つてゐて、全く眞率な、眞心からの天眞爛漫をもつて、彼女は自分の親しい友達（その言葉はペテルブルグ全體を含んでゐた。）に向つて、皇族と高官とが二人とも、自分に對して結婚の申込みをしたといふことや、自分は二人とも愛してゐるが、何方をも悲しませたくない、といふやうなことを話した。

風説は忽ちペテルブルグ中へ廣がつたが——その風説は、エレンが夫から離縁したがつてゐるといふ風説ではなく、(若しさういふ風説が論議されるとすれば、非常に多くの人々が、かゝる不法な處置には反對したであらう。)——不幸な、面白いエレンが、二人の戀人の中の何方と結婚しやうかと迷つてゐるといふ風説であつた。問題は最早や結婚が如何なる程度にまで可能であるかといふ事ではなくて、たゞ何方が彼女にとつて一層適した配偶者であるか、といふ問題たるに過ぎなかつた。尤も、この問題の高い水平線まで達することの出來ないやうな、またその計畫を結婚の神聖を瀆すものと見た或る頑な人間も有るには有つたが、さういふ人間は極く少數で、おまけに口を噤んでゐた、ところが、大多數の人間はエレンの幸福の問題や、何方の男がエレンに取つて、より優れた配偶者であるかといふやうな問題に興味を寄せてゐた。まだ夫が生きてゐるのに妻が結婚するといふことは、正しいことであるか、それとも不正なことであるかといふ問題に就いては、少しも論ぜられなかつた。何故といふに、さういふ問題は、(所謂)『あなたや私よりも一層悧巧な』人々にとつては明かに疑ふべき問題ではなく、また、さういふ人々の決定の是非を疑ふといふことは、自分の無學や、savoir faire (才能)のないといふことを暴露することになるかも知れないからであつた。

その夏、息子の一人に會ふ爲めに、ペテルブルグへ遣つて來たマリヤ・ドミツトリエウナ・アフラシモフが全く反對の意見を遠慮なく公言した唯一人の人であつた。或る舞踏會でエレンに出會したので、

マリヤ・ドミトリエウナは部屋の中央で彼女を引き留めて、みんな沈默してゐるその眞中で、突慳貪な聲で彼女にかう言つた——

『あなたは次から次へ御亭主を換へやうとして被居るんですね！　御自分の工夫して被居ることは、屹度新流行だと思つて被居るんでせう、けど、あなたが最初では御座いませんよ、奥様。それはもう極く古い考へですよ。世間の彼等もみんな同じ事をやつてゐますよ、みんな……』かう言ひながら、マリヤ・ドミトリエウナは、何時もの人を脅かすやう身振をしながら、その廣袖をたくし上げて、四邊をねめ廻しながら舞踏室を横切つて行つた。

人々は、マリヤ・ドミトリエウナを恐れてゐたが、それでもペテルブルグでは、彼女を一種の道化者扱ひにしてゐた。で、彼女の言葉の中で人々が心に留めたのは、たゞ最後の野卑な言葉だけであつた。そして彼女の饒舌の全要點はその最後の一言に在るのだと想像して、彼等は互にその言葉を囁くやうに繰り返へしたのであつた。

ワシイリー公爵は、近頃では自分の言つたことを度々忘れて仕舞つて、同じ文句を百遍も繰り返すやうになつてゐた、で、娘に逢う度に彼は何時もかう言つた——

『エレン、私はお前に一度言ひたいことがある。』と、彼は娘を傍へ伴れて行つて、娘の腕を下の方へ引張りながら何時も言つた。『私は、な、あれ……あれに關する或る企圖の噂を聞いたよ。ねえ、お

前、お前があれ……だといふ事を聞くのは、この父も何んなにか嬉しいよね。……お前も大分苦労したからね。だが、お前、たゞ自分の心にだけ相談するがいゝ。私がお前に話したいといふのは、つまり夫れだけなんだ。』で、彼は、何時も同じであつた感情を隠して、娘に自分の頬を押し付けて、それから娘の所を去つた。

頓智家としての名譽を失はないでゐたビリビンは、エレンの無私の友達であつた、華々しい女たちの附随者の中には何時も見られるやうな友達の一人、決して戀人の位置には上ることの出來ない男友達の一人であつた。或る日『小さい、昵懇者の集り』に於いて、ビリビンは自分の友達のエレンに向かつて、例の問題に對する自分の意見を話した。

『ねえ、ビリビン。』(エレンは、何時もビリビンが屬してゐるやうな種類の友達を、その苗字で呼ぶのであつた。)そして、彼女はその白い、指輪を箝めた指で、ビリビンの上衣の袖に觸つた。『何うぞ私を妹と思つて、私に教へて下さらないこと、私は何うしたら宜いでせう?』

ビリビンは眉の上の皮膚に皺を寄せ、唇に微笑を浮かべながら考へ込んだ。

『あなたの有仰ることは意外でも何でもありません、ねえ。』と、彼は言つた。『私は眞實の友達として、あなたの事件に就いて幾度も考へましたよ。若しあなたがです、あの若い皇族(若い方の結婚申込者)と結婚すれば、』——と彼は指を曲げて——『あなたは永久に、も一人の方と結婚する機會を失つて仕舞ふのです、さうすると宮中の御機嫌を損ねます。(そこには或る一種の關係がありますからね。)併し、若しあの年取つた伯爵と結婚なされば、あなたはあの人の晩年を幸福にしてお遣りなさる譯です。それから、偉い人の未亡人となられた時には……あの皇族だつて、あなたと結婚して、決して損はなさらないでせう……』から言つてビリビンは、顔から皺を消して了つた。

『それこそ、ほんとの友達ですわ!』と、エレンは晴々しい顔をして、も一度ビリビンの袖に觸つた。『けど、事實を言へば、私は二人とも愛してゐますの、そして何方の方も不仕合せにしたくはないんです。二人の幸福の爲めには、私は自分の生命を棄てゝもかまひませんわ。』と、彼女はきつぱり言つた。

ビリビンは肩をゆすつて、そうした面倒臭い事に對しては、自分は何等の救濟法を暗示することさへも出來ないといふ心を見せた。

『Une maitresse-femme!(やり手!)公平に言へばそれなんだ。この女は一時に三人と結婚したがつてゐる。』と、ビリビンは思つた。

『けれども、この問題に對するあなたの御良人の意見は何うなんです?』と、彼は言つた、彼の名聲が安固であるからかういふ卒直な質問をしても、それに依つて自分を辱かしめるやうな惧はなかつた。

『御良人は承諾なさいますか?』

『えゝ、夫はそれや私が好きなんですの！』と、エレンは言つた。彼女は何かしら分らない理由から、ピエールもやはり自分を崇拝してゐるのと思つてゐた。『Il fera tout pour moi.(夫は私の爲めなら何でもして呉れます。)』

ビリビンは警句を吐く前觸れに顏を顰めた。

『meme le divorce?(離婚でも?)』

エレンは笑つた。

この企圖まれた結婚が果して法に適つてゐるか何うかといふことに敢て疑を挟んだ人々の間に、エレンの母親、卽ちクラアギン公爵夫人がゐた。彼女は始終自分の娘に對する嫉妬を感じてゐた、そして今、さういふ嫉妬の原因が、自分自身の心に最も密接なものであつたので、彼女は何うしてもさういふ考を堪へることが出來なかつた。

彼女は或るロシア人の僧に相談して、夫の生きてゐる中に女が離婚するとか再婚するとかいふことが、何の位ゐまで可能であるかといふことを確かめた。僧はそれは全く不可能であると夫人に確說して、福音書の中の、夫の存生中に妻の再婚を明かに禁じてある本文(僧にはさう思はれたのであつた)を說き聞かせたので、彼女は大喜びであつた。

何うしても論破し難いやうに思はれた是等の議論で身を固めて、クラアギン公爵夫人は、娘一人居

るところへ行く爲めに、或る朝早く、娘の家へ馬車を驅つて行つた。

エレンは、母親の抗議を終ひまで聞いて、おとなしい皮肉な笑顏を見せた。

『そら、(離婚されたる婦を娶る者は……)といふ事がちやんと言つてあるぢやありませんか。』

『あら、お母樣、そんな下らない事を有仰つて。あなたには解らないんです。私の位置では、いろいろの義務があります……』とエレンは始めた。そしてロシア語をやめてフランス語を使つた、何故といふと、ロシア語では、何時も自分の事情をはつきり言ひ現はせないと感じてゐたからであつた。

『でも、お前……』

『あら、お母樣、あなたは何うして解らないのでせう、罪の怨しを與へる權利をお持ちになつてゐる神聖な父が……』

その途端に、エレンの家に住んでゐた話し相手の女が、殿下が客間に來てゐて、エレンに逢ひたがつてゐるといふことを取次ぎに入つて來た。

『いゝえ、私はお目にかゝりたくないと言つて下さい、約束を守つて下さらないのでひどく腹を立ててゐますつて。』

『奥樣、何んな罪に對しても慈悲といふものは有るものですよ。』と、美しい髮の毛の、面長な、長い鼻の若い男が言つた。

老公爵夫人はその男が這入つて來ると、丁寧に立ち上がつて會釋をした。その若い男は公爵夫人には目も呉れなかつた。クラアギン公爵夫人は、娘に向つて頷づいて、扉口の方へ泳いで行つた。

『さうだ、あの子の言ふことは眞實だ。』と老公爵夫人は思つた。老公爵夫人のすべての確信は、その場へ殿下が現はれて來たので、總て消え去つて了つたのであつた。『あの子の言ふことは眞實だ。だが、私達の若い時分——もう永遠に去つて仕舞つた——に私達がこんな事を少しも知らなかつたといふのは何うした事であらう？　それもほんとに單純な事だのに。』と、クラアギン公爵夫人は、馬車の中に、その身を落着けながら思つた。

八月の初めに、エレンの事件は片が附いた。で、彼女は自分の夫（夫は彼女が想像してゐた通り、深く彼女に引き付けられてゐた。）に手紙を書いた。その手紙の中で、彼女はN・Nと結婚したいといふ自分の意志を知らせてやつた。彼女はまた或る眞（まこと）の信仰に改宗したといふことも知らせてやつた。そして離婚をするのに必要な一切の手續きを踏んで呉れと賴んで、それに就いては、この手紙の持參者が一層詳しいことを話すからと書いてやつた。『私は神樣がその神聖な力强い保護のもとに、何卒あなたをお守り下さるやう祈ります。あなたの友、エレン。』

この手紙は、ピエールがボロヂイノの戰場にゐた時、ピエールの家の方へ持つて行かれたのであつた。

八

ボロヂイノの戰の終り頃に、ピエールは、二度目にラーエウスキイの砲臺から逃げ出して、兵卒共と一緒にクニヤズコウオの方へ行く途中の溪谷を横切つた。其處で彼は救護斑の天幕に到着し、血を見たり、叫び聲を聞いたり、唸り聲を聞いたりして、前へ急いだので、兵卒共の群集の中へ捲き込まれて仕舞つた。

今やピエールが、その全精神を傾けて望んでゐた唯一の事は、彼がその日感じた恐ろしい感覺から遁れることゝ、日常の生活狀態に歸ることゝ、屋內で自分自身の寢床に靜かに眠ることであつた。彼は、自分自身及び自分の見たり感じたりしたことの總てを理解するのに適當した時はたゞ日常の生活狀態の時だけであると感じてゐた。併し日常の生活狀態などは、何處へ行つても見出だされさうでなかつた。

彼が馬に跨がつて行く道のあたりには、銃丸も砲彈も唸つてはゐなかつたが、それでも尙ほ彼はそのあたり一面に、戰場に於けると同じ光景を見た。到る處に、同じやうに苦んでゐる、憔れ切つた、時とすると妙に無頓着な顏が幾つもあつた。到る處に、同じ血と、兵卒共の外套と、遠く距たつては

ゐるが、而かも尚ほ同じ恐怖心を起こさせる同じ砲聲があつた。おまけに暑さと塵埃とがあつた。

モザイスク街道に沿うて三露里ばかり歩いてから、ピエールは道傍に坐つた。

夜の影がだん〳〵地上に下り初めて、大砲の聲きも止んで仕舞つた。ピエールは肱枕をして横になつた。そして夕暗の中に自分の傍を過ぎて行く影を見詰めながら、可成長い間横になつてゐた。彼は絶えず、砲彈が恐ろしい呻きと共に、自分の上に落ちかゝつて來るやうな氣がしてゐた。彼は、喫驚して起き上つた。何の位ゐ長く其處にゐたのか、彼には一向分らなかつた。眞夜中頃三人の兵卒が、樹の枝を引摺つて來た、彼の近くに坐を占めて火を焚き始めた。

ピエールを横眼でぢろ〳〵見ながら、兵卒達は火を附けてその上に鍋をかけ、その中へビスケットを碎き込んで、それから少しばかり豚脂を入れた。旨さうな脂ぎつた食物の心持のいゝ香が煙の嗅ひと混り合つた。ピエールは身を起して溜息を吐いた。兵卒達(其處には三人ゐた。)は、ピエールには眼も呉れずに互に、食つたり話したりしてゐた。

『お前さんは何の隊の者なんだい?』と兵卒の中の一人が、突然ピエールに訊ねた。その問の中には明かにピエールの思つてゐた事が正確に暗示されてあつた。『若し腹が空いてるやうなら少しやらう。だがちよつくら聞かして貰ひたいね、お前さんは眞正な人間だか何うだか。』

『私かね?……』とピエールは、兵卒達にも接近する爲めに、兵卒達ともつと心やすくする爲めに、

出來るだけ自分の社會上の位置を低める必要があると感じてから言つた。『私は實は民兵の將校なんだが、自分の隊が何處にゐるか分らないんだ。戰爭に來て、同僚たちにはぐれて仕舞つたんだ。』

『やれ〳〵! それは何うも!』と兵卒のうちの一人が言つた。

『どうだね、よろしかつたら少し雜炊をやりませんかい。』と第一の兵卒が言つた、そして木の匙を舐めて夫れをピエールに渡した。

ピエールは火の傍に蹲踞んで、鍋の中の食物を喰ひ始めたが、それは彼が之れまで喰べたうちで、一番美味い料理のやうに思はれた。彼が鍋の上におつ被さつて、大きな匙に一ぱいよそつて、幾杯も幾杯も貪るやうに食つてゐる間、兵卒は默つて彼を見詰めてゐた。

『何處へ行かうといふんだね? えゝ。』と、再び第一の兵卒が訊いた。

『モザイスクへ。』

『ぢや、あなたは紳士ですか?』

『さうだ。』

『お名前は?』

『ピヨートル・キリーロヰツチ。』

『ぢや、ピヨートル・キリローヰツチ、一緒にお出でなさい。我々が連れて行つてあげませう。』

濃青のやうな闇の中を、兵卒達とピエールとは、モザイスクに向つて歩いて行つた。

彼等がモザイスクへ着いて、険しい小山を町の方へ登りつめた頃には鶏が鳴いてゐた。

ピエールは兵卒達と一緒に歩いて行きながら、自分の宿は小山の麓にあつたといふことをスッカリ忘れて、その宿を通り過ぎて仕舞つた。若し小山の中腹で、自分の馬丁にばつたり出會すやうな機會がなかつたら、彼は氣付かなかつたかも知れなかつた——それ程彼は他のことを考へ込んでゐた——馬丁は町へピエールを探しに行つて、今宿へ歸る途中であつた。馬丁は暗の中に白く輝いてゐた帽子で、ピエールであるといふことを見分けたのであつた。

『閣下!』と彼は叫んで、『私どもは、もうすつかり斷念めて居りました。徒歩でなぞお出になつて何うしたといふんです! それにまあ、一體何處へ被來るおつもりなんです?』

『あゝ成程……』と、ピエールは言つた。

兵卒達は立ち止まつた。

『ぢや、知人が見付かつたんですね?』と、兵卒のうちの一人が言つた。

『では左樣なら——ピヨートル・キリーロヰツチ、ぢやなかつたかな?』

『左樣なら——ピヨートル・キリーロヰツチ!』と他の聲々が言つた。

『左樣なら。』と、ピエールも答へて、馬丁と共に宿屋の方向へ振り向いた。

『彼奴等に何か遺らなくちや不可いかな!』と、ピエールはポツケツトを探がしながら考へた。『いや、遺らない方がいゝ。』と或る內心の聲が彼に教へた。

宿屋には部屋が一つも空いてゐなかつた。みんなふさがつてゐた。ピエールは庭へ出てゝ頭をすつかり包んで、自分の馬車の中に横になつた。

九

枕に頭を載せるや否やピエールは直ぐ眠りに落ちて行くのを感じた。が、全く不意に、殆ど現實のやうにまざ〳〵と大砲のぶうん、ぶうん、ぶうん、どさつといふ音などを聞き、血潮や火藥の臭ひを嗅いだ、そして恐怖の情と、死を怖れる情とが彼を襲つた。彼は周章てゝ眼を開けて、外套から頭を出した。庭の中は全く靜かであつた。聞えて來る物音と云へば、たゞ門の所で門番と話をしながら、泥濘をはねかしてゐる誰かの下僕の聲だけであつた。ピーエルの頭の上の、暗い木造の庇の下に、彼が起き上がらうとして身動きした爲めに驚いた幾羽かの鳩の羽叩く音が聞えた。庭中が宿屋の强烈な臭ひ——ピエールには、平和な暗示と、やすらかな慰

藉とに滿ちた——乾草や、肥料や、タールの臭ひに滿ち亘つてゐた。二ツの暗い小屋の間に、彼は澄み渡つた星明りの空をちらと覗いた。

『有難い。あんな事はもうスツカリ濟んで仕舞つたのだ！』とピエールは再び頭を包みながら思つた。『あゝ恐怖といふものは何といふひどいものだらう、それに負るなんて何といふ恥辱だらう！　だが彼等は……彼等はおしまひまで始終確かりして落着いてゐた……』と彼は思つた。ピエールの心では、彼等といふのは兵卒達といふ意味であつた。砲臺にゐた兵卒達や、彼に食物を與へた兵卒達や、聖像に向つて祈禱を捧げてゐた兵卒達といふ意味であつた。彼等——さういふ不思議な人々に就ては、彼は今迄少しも知らなかつた——彼等は、彼の心の中では他の總ての人間とは、はつきりと、稜立つて區別されてゐた。

『兵卒になれたら、たゞの一兵卒になれたら！』と、ピエールは眠りに落ちんとして考へた。『全身をもつてあの共同生活に這入つて行けたら、彼等の現在を形造つてゐるもので滿たされたらう。併しながら、何うすれば、自分のうちにある餘分な、厭ふべき一切の物を、外面的人性のあらゆる重荷を、棄てることが出來るのか？　一時は俺もさうなることが出來たかも知れなかつたのだ。逃げやうとさへ思へば、父親の所から逃げ出せたかも知れなかつたのだ。ダラホフとの決鬪後にも、一兵卒にされたかも知れなかつたのだ。

すると、ピエールの想像の中には、倶樂部に於ける宴會の光景が閃めいた。その宴會の席上で、彼はダラホフに決鬪を申込んだのであつた。それからトルヂヨオクに於ける恩人の姿が閃めいた。それから彼の心の前には、共濟組合（フリーメースン）の密會の壯嚴な集會の模樣が浮んで來た。それはイギリス倶樂部で催されてゐた。彼の知つてゐる人や、彼の近しい、親しい人が、卓（テーブル）の端に坐つてゐた。『おや、あの人だ！　あれは私の恩人だ。だが、あの人は確かに死んだ筈だつたが？』とピエールは思つた。『さうだ死んだのだ、だが生きてゐるとは知らなかつた。死んだ時には實に悲しかつたが、また生きてゐるのを見ると實に嬉しい！』卓（テーブル）の一方にはアナトールや、ダラホフや、ネスヴーツキイや、ヂエニソフや、その他彼等に似た人が坐つてゐた。（ピエールの夢の中では、是等の人々は、彼が、自分自身に向つて彼等と呼んだ所の他の人々と同じく、判然と離れた階級を形作つてゐた）そして夫れ等の人々、アナトールやダラホフは、聲高に怒鳴つたり唄つたりしてゐた。併しながらその人たちの騒ぎを通して、恩人の聲が始終喋つてゐるのが聞えた。そしてその喋の響きは、戰場に於ける聲音のやうに重々しくて、おまけに連續的であつたが、それは愉快な心持のいゝ響きであつた。ピエールには恩人が何を言つてゐるのか解らなかつたが、彼は、（觀念の種類もやはり夢の中ではつきりしてゐた）恩人が善事や彼等のやうに成り得る可能に就いて喋つてゐるのを知つてゐた。そして彼等は單純な善良な勇敢な顏容をして、恩人の四方八方を取圍んでゐた。彼等は親切さうではあつたが、ピエールを見なかつた。彼等はピエールを

知らなかつたのである。ピエールは彼等の注意を引きたかつた。そして彼等に話しかけたかつた。彼は立ち上がつたが、それと同時に、自分の脚が素脚で、おまけに冷たいのに氣が付いた。

彼は耻かしく思つたので、手を脚の上に置いた。すると脚から、實際外套が滑り落ちてゐたのであつた。ピエールは外套を引張り上げながら、暫らくの間眼を開けてゐた。見ると同じ屋根、柱、庭が見えた。併しそれは、今では青味がゝつた光に滿たされて、露か霜かでキラ〳〵と光つてゐた。

『だん〳〵明るくなるな、』とピエールは思つた。『だが、そんな事は要點ぢやない。俺は恩人の言葉を聞いてそれを理解したいんだ。』

彼は、再び外套で體を包んだが、共濟組合の宴會も、彼の恩人ももう歸つては來なかつた。殘つたものは、たゞ言葉ではつきり言ひ表はされた思想、觀念のみであつた。それも誰かの聲が話してゐたのか、それともピエールが考へてゐたのか、何方だか分らなかつた。

後になつて失れ等の思想を思ひ起して見ると、それはその日の印象に依つて喚び起されたものではあつたが、ピエールには誰か、自分以外の人に依つて說かれたものゝやうに思はれた。覺めてゐる瞬間には、さういふ思想を考へることも出來なければ、その思想をあゝいふ形式で表現することも出來ないやうに思はれた。

『一番難かしい事は、人間の意志を神の旨に從はせる事だ。』と、誰かの聲が言つた。單純は神に對する服從である。神から遁れる道はない。ところで彼等は單純である。彼等は喋らないでたゞ實行する。言ひ出された言葉は銀であるが、言ひ出されない言葉は黃金である。死を怖れてゐる間は人は何物の主人にもなれない。死を怖れない者には有らゆる物が從屬する。若し死が苦痛でなかつたならば、人は自分の極限を知らず、自分自身が分らないであらう。最も難かしい事は、』(ピエールは夢の中で、さう考へたか、聞いたかしたのであつた)『全體と言ふものゝ意義を自分の靈魂の中で如何に合一すべきかといふ事を知ることなんだ。全體を合一するとは?』とピエールは自分自身に向かつて言つた。

『いや、合一するのではない。人間には自分の思想を合一することは出來ないんだ。たゞそれ等のあらゆる觀念を繫ぎ合はすことが出來るだけだ、それが必要なことなんだ。さうだ繫ぎ合はさなければならない。一つに繫ぎ合はさなければならない。』と、ピエールはそれ等の言葉、そして、たゞそれ等の言葉だけが、自分の言ひ現はしたいと思つてゐた所のものを言ひ現はし、自分を惱ましてゐた問題全體を解決するものと感じたので、自分自身に向つて有頂天の戰慄をもつて繰り返した。

『さうだ一つに繫ぎ合はさなければならないんだ。今こそ繫ぎ合はすべき時が來たのだ……』

『ぢや馬を繫けませう。もう馬を繫ける時刻ですよ、閣下! 閣下、』と、或る聲が繰り返してゐた。

『馬に馬具を繫けませう。もう……』

ピエールを起してゐたのは馬丁であつた。太陽はもうピエールの顏を一ぱいに照らしてゐた。彼は

汚い宿屋の庭をちらりと見た、その眞中にある井戸の所で、兵卒達が、自分等の疲馬に水を遣つてゐた。幾臺かの荷馬車は門から出て行く所であつた。

彼は厭な氣がして顏を背向けた。そして兩眼を閉ぢて、再び急いで馬車の座席へ圓くなつて寢た。

『いや、あんな物はいらない。あんな物は見たくもなければ、理解したくもない。俺は眠てゐるうちに、俺に向つて現はされた、あの事柄を理解したいんだ。もう一秒で、それが一切解かるところだつたんだ。だが俺は一體何うしたらいゝだらう？　繋ぎ合はすか、併し何ういふ風にして、繋ぎ合はしたらいゝんだ？』そこでピエールは、夢の中で見且つ考へた事柄の全體の意味が、何處かへ消え去つたことを感じて慄然とした。

馬丁も馭者も門番も、フランス軍がモザイスクへ進軍中であり、我軍が退却し出してゐるといふ報知を持つて、一人の將校がやつて來たとピエールに告げた。

ピエールは起き上がつた、そして馬車の仕度をして、後から持つて來いと命じて置いて、自分は徒歩で町を横切つて行つた。

軍隊は數萬の負傷者を遺して行軍を始めてゐた。負傷者達は、家々の窓にも、また庭や街にも群がつてゐた。叫び聲や、罵り合ふ聲や、毆り合ふ音が、街中の、負傷者を運ぶ爲めの荷馬車の周圍で聞えてゐた。

ピエールは自分の知り合ひの負傷した將官を自分の馬車に載せて、その人と一緒にモスクワへ向かつた。その途中で彼は、義弟のアナトールが死んだといふことや、アンドレー公爵が死んだといふことを聞いた。

十

三十日に、ピエールは、モスクワに歸つた。が、丁度市門の近所で、ラストプチン伯爵の副官に出會した。

『やア、私共は方々貴下を探してゐたんですよ、』と、副官が言つた。『伯爵が、是非共、貴下にお目にかゝりたいんださうです。非常に重大な事件が起つたから、直ぐ貴下に來て頂きたいと言つて居られます。』

ピエールは、家へ歸らずに、辻馬車を雇つて、總督のところへ駈け附けた。

ラストプチン伯爵は、その朝、ソコリニキの郊外別莊から街に着いたばかりであつた。伯爵家では控室も、應接室も、彼に呼び寄せられた官吏や、或は命令を受けに遣つて來た官吏たちで、一ぱいになつてゐた。ワシーリチコフや、プラトフはもう伯爵に會つて、モスクワを守ることは出來ない、市

は降伏するやうになるだらうと伯爵に言つた。その報知は、市民に隠されてゐたが、諸署の長官や、官吏たちは、ラストオプチン伯爵が知つてゐたやうに、モスクワが間も無く、敵の手に陥ると云ふことを知つてゐた。で、彼等は皆な自分等の責任を遁れるために、各自の擔當の官務をどう處分していゝかを尋ねに、總督のところへ來たのであつた。

ピエールが、應接室に入ると、恰度軍からの使者が、伯爵のところから出て來た。

使者は、自分に問ひかける種々な質問に對し、絶望的に手を振りながら客間を通り貫けて行つた。

ピエールは、應接間で待つてゐる間、部屋に集まつてゐる若手や、老人や、武官や、文官など、種々な官吏達を、懶さうな眼付で見廻してゐた。誰も彼も、不滿と、不安とを感じてゐるやうに思はれた。ピエールは、官吏の一團の中に一人の知人がゐるのを見付けたので、そこに近づいた。官吏達はピエールに挨拶をして、再た自分達の話を續けた。

『送り出しといて、また持つて歸るのは、構はないだらうよ、だが、現在のやうな事態では、一切責任を持てないからねえ。』

『でも、この文面を見給へ……』と、他のが、手に持つてゐる印刷物を指しながら、言つた。

『それは、別問題だ。それは、國民にとつて必要なんだ、』と、最初の男が言つた。

『それは、何ですか?』と、ピエールが尋ねた。

『新らしい布告です。』

ピエールは、それを手に取つて、讀み初めた。

(公爵殿下は、殿下に合せんとしつゝある軍隊に一時も速く合せんがため、モザイスクを通過せられ、敵の急撃し得ざる要害の地に駐屯せられた。當地よりは四十八門の大砲と、砲彈とを殿下に送つた。殿下は、最後の一滴まで血を濺いで、モスクワを防禦し、市街戰も辭せずと宣言せられた。同胞諸君よ、裁判所の閉鎖を憂ふる勿れ、吾々は、吾々の方法を採り、吾々の裁判を以て、惡漢共を處分しやう。その時こそ予は、勇敢なる人々と、市民、村民の奮起を望む。予は二日以内に警告する。が、今はその必要がないから沈默してゐる。斧を取るもよし、矛を取るも惡しからず、が最も良き武器は、三叉熊手である。フランス人は、裸麥の一束よりも輕い。明日、午餐後、予は、イヴエルスキイ聖母像を持つて、負傷者を、聖カテリイヌ病院に見舞ふ積りだ。吾々は、そこで聖水式を行はう、彼等は、直ぐ癒くなつてしまふ。予も、今では癒くなつた、予の片方の眼は、惡るかつたのだが、今では兩方ともよく見える。)

『でも、軍人から聞いたのだが、』と、ピエールが言つた、『市街の中では、何うしても戰闘へないといふことです、そして陣地は……』

『さうですよ、私どもゝそ、ゝ、それを言つてゐるのです、』と、最初の官吏が言つた。

『だが、(予の片方の眼は、悪るかつたのだが、今では兩方ともよく見える)といふのは、どういふ意味です?』

『伯爵は、麥粒腫を病らつたんです。』と、副官が、微笑みながら、言つた。『そして伯爵は、私が、人民が事態が何うかと尋ねに來たと言つたので、ひどく、周章てられたのです。だが、何うです、伯爵?』と彼は、突然、微笑みながら、ピエールの方に向つて言つた。『貴下には、家庭の御心配がおありなさるといふことを聞きましたが、伯爵夫人が、あなたの奥樣が……』

『私は、何も聞きませんよ、』と、ピエールは、無頓着に言つた。『貴下がお聞きになつたといふのは、どんな事ですか?』

『いや、ねえ、人の噂は大抵作りごとなんですよ。で、私は、聞いた通りを申上げるだけです。』

『どういふことをお聞きでしたね?』

『いや、噂ではね、』と、副官は、また前と同じやうに微笑みながら言つた、『伯爵夫人が、あなたの奥さんが、外國へ行かうとしてお出でだといふんです、多分虚說だらうと思ひますが……』

『さうかも知れません、』と、ピエールはぼんやりと、四邊を見廻はしながら言つた。『が、あれは、誰ですか?』と、彼は瀟洒した青い上衣を着た、顯髯と眉毛とが雪のやうに白い、赤ら顏のあまり背の高くない老人を指して尋いた。

『あれ? あれは商人です。彼は料理屋の亭主のヴェレシチヤーギンといふ男です。貴下は、多分、布告の話をお聞きでしたでせう、』

『お、では、あれがヴェレシチヤーギンですか!』と、ピエールは、老商人の嚴とした、落付のある顏を精く見、その中に反逆心の現はれを探しながら言つた。

『彼はその男ではないのです。彼は、布告を書いた奴の父親です。』と、副官は言つた。『若者の方は、檻禁中です、奴は困苦い目に會ふでせうよ。』

星章を着けた、小柄の、老紳士と、頸に十字章を着けた獨逸人の官吏とが、話をしてゐる連中の方へ近づいて來た。

『これは混雜つた話ですよ、』と、副官は話してゐた。『布告は、二月前に出たんですが、それを伯爵のところへ持つて來たんです。伯爵は、調査しろといふ命令を下されたんです。で、ガヴリイロ・イヴアヌイチが調査をしました、布告は六十三人の手を經てゐたんです。吾々が、その一人のとこへ行つて、誰から、これを受取つたのか? と尋きますと、誰某からだと言ふんです。それで其の者のとこへ行つて誰から受け取つたか? と云ふ塩梅にしてとう〳〵ヴェレシチヤーギンを探り出したんです……奴はあまり教育の無い、商人です、ちよいと奇麗な商人でさア。』と、副官が微笑みながら言つた。『彼奴も(誰から受取つたのか?)と、尋かれたんです。吾々の方では、誰が持つた來たか分つてゐた

んですがね。彼奴は、郵便局長より他の者から、それを受取つた筈はないんです。それに、彼等二人の間には、相談が出來てゐたことが明白なんですよ。彼奴は、（誰からも貰つたんぢやない、自分で作つたんだ。）と、言ふのですよ。脅かしても、詰問しても、自分が書いたんだと強情を張るんです。その通り伯爵に報告されました、伯爵は、彼を呼び出させたんです。（お前は誰からこの布告を貰つたのか？）（自分で書きました。）ところが、御承知の伯爵のことですからね！』と、副官は自慢さうな、そして嬉しさうな微笑を湛えながら言つた。『伯爵は非常な立腹でした、だが、彼奴の無禮と、虚言と、頑固と言つたら、實に驚くべきものですよ……』

『あゝ！　伯爵はクルウチヤレフから、貰つたと彼に言はしたかつたでせう、さうに違ひない！』と、ピエールは言つた。

『決してさうぢやありません。』と、副官は、吃驚して、言つた。『クルチヤレフには、そんな事がなくとも、罪が澤山ありました、それで、彼は追放されてゐるのですよ、が、それは兎に角、伯爵は、非常な立腹でした。（どうしてお前にこれが書けたか？）と、伯爵は言つて、卓子の上にあつた「ハムブルグ公報」を取り上げられました。『見ろ、これだ。お前が作つたんぢやない、これを翻譯したんだ、しかも極悪い翻譯だ。お前はフランス語さへ知らないんだから。馬鹿奴、）ところが、どうでせう。（いゝえ。）と、彼奴は言ふんです。（私は公報なんか讀みません、私が、それを作つたんです。）——（しかし、

若しさうだとすれば、お前は逆徒だ、俺は、お前を裁判所へ送る、お前は絞罪に處せられるんだぞ。誰から、それを貰つたか白狀してしまえ！。）（私は、公報なんか見ません、私が作つたんです。）事件は、それツ限りになつてゐます。伯爵は、父親を呼びに遣つたんですが、彼も強情を張つてるんです。で、裁判に廻され重懲役に處せられた筈です。今、父親は、息子のために哀訴しに來てゐるんです。が、無價値な惡黨息子ですよ！　商人の嬌たれ息子で、色男で、女たらしですよ、何處かで少しばかり講演を聽いて、誰よりも偉くなつたと思つてゐる奴なんです。そりやひどい無賴漢なんです。彼の父親は、カメンニイ橋の傍で、飲食店を開いてゐるんですが、その店は、御存じの通り、片手に笏を持ち、片手に帝國を持つてゐる、宇宙の支持者たる神の大聖像がありませう、彼は、その聖像を四五日自宅へ持つて行つたんです、彼がそれをどうしたかと言ふとね、何處かのやくざ畫家を雇つて來て……』

十一

この新らしい話の最中に、ピエールは總督に召ばれた。

彼は、ラストプチン伯爵の書齋に入つた。ピエールが入つて行つた時に、ラストプチンは、顏を顰

めて、片手で額と眼とを拭いてゐた。丈のあまり高くない男が、何か言つてゐたが、ピエールが入つて行くと、話を止めて出て去つた。

『やア、善うこそ、勇敢なる戰士、』と、ラストプチンは、先の男が出て行くと直ぐに言つた。『君の勇敢なる行爲(prou esses)のことを聞いたよ。だが、要件は、それではないんだ。君とだけの話だがね(Mon cher, entre nous.) 君は、共濟組合員かね！』と、ラストプチン伯爵は、共濟組合員たることとは、犯罪であるが、自分はそれを有すつもりだとでも云ふやうに、嚴格な調子で言つた。ピエールは口を利かなかつた。『君、俺の手許には、すつかり報告が來てゐるんだ (Mon cher, je suis bien informé)私は、到る處に共濟組合員があるのを知つてゐる。君は、人類を救濟すると云ふ目的の下に、ロシアを滅亡させやうとしてゐる、あんな奴等の仲間ぢやなからうね、』

『えゝ、私は、共濟組合員です。』と、ピエールは答へた。

『さうか、では、聞き給へ、君。君は、スペラアンスキイや、マグニツスキイなどが、當然行くべき所へ送られ、クルチヤレフや、その他の諸君も同じやうなことになつたことを知らないと見えるね。彼奴等は、ソロモンの殿堂を建てるといふ口實の下に、祖國の殿堂を破壞しやうとしてゐるんだ。無論さういふ處分をするのは、十分な理由があるんだ。若し此處の郵便局長が危險な人物でなかつたら、俺が彼を追放する譯はないぢやないか。俺が聞き込んだ所によると君は、あの男を君の馬車で退去させたのみならず、君はあの男の書類を預つてゐるといふことだ。俺は、君が好きだから、君が酷い目に會ふのを望まない。それに君は俺の年齡の半分にしきやならないんだから、俺は、父親のやうに君に勸めるがね、あんな奴等と一切關係を斷つてしまつて、出來るだけ早く、市を退去したまへ。』

『ですが、伯爵、クルチヤレフは何んな罪を犯したのですか？』ピエールは尋いた。

『それは、俺さへ知つて居ればいゝことだ、君が尋ぬ可きことぢやない。』と、ラストプチンは叫んだ。

『若し彼が、ナポーレオンの布告を廻はしたといふので、罪になつたのでしたら、その罪には、まだ證據が擧つてゐません、』と、ピエールは、(ラストプチンを見ずに、)言つた。『それから、ヴェレシチヤーギンは……』

『それだて、』(Nous y voilà)と、ラストプチンは、突然顏を顰めてピエールの言葉を遮り尙一層聲高に怒鳴つた『ヴェレシチヤーギンは逆徒だ、賣國奴だ、、罰を受けるのは、當然だ、』と、彼は、人々が侮辱を受けたことを憶ひ出す時のやうに、如何にも忌々しさうに言つた。『いや、俺が、君を喚んだのは俺の行爲を批評して貰ふためぢやない、君に忠告するためだつたのだ、いや、實は命令をする爲だつた。君、クルチヤレフのやうな連中と關係を斷つて、此處を退去してくれたまへ。俺は誰でも馬鹿な考を有つてゐる者ならどし〳〵責めてやる。』と、ラストプチンは言つたものの、まだ何の罪をも犯してゐないペズウホフに對して、激しく怒鳴つたのに氣が附いたらしく、馴々しげにピエールの手を取

つて、附言へた。『吾々は、國難を眼前に控えてゐるので、俺に用があつて來る人々に鄭寧に話をする暇がない。俺の頭は、時々、ぐる〳〵廻るんだ、さア、君はどうする積りなんだね、君自身のこと?』

『いや、どうもしません、』と、ピエールは、やはり眼を上げもしなければ、沈んだ表情を換へもせずに答へた。

伯爵は顔を顰めた。

『俺は友人として忠告するのだよ、君。(Un conseil d'ami, mon cher.) 出來るだけ早く逃げ給へ、それが俺の忠告だ。他人の言ふことを善く聽く人には、好運が來る!(a bon entendeur, salut!)さやうなら、君。あゝ、それから、』とラストプチンは、入口からピエールに呼びかけた。『伯爵夫人が、ゼスイツトの師父等 (saints pères de la Société de Jésus) に捉まつてしまつたといふのは、眞實かね?』

ピエールは何とも、答へず、顔を顰め、今までになかつたほど腹を立てゝ、ラストプチンの部屋を出た。

彼が家に歸り着いた時には、最う暗くなりかけてゐた。その晩、それ〴〵異つた種類の人が八人彼のところに來た。それは、委員會の書記と、ピエールの大隊の大佐と、執事と、書記と、その他の請願人とであつた。彼等はいづれも、ピエールに用件があつて來たのであつた、そしてピエールはそれ

を決しなければならなかつた。が、ピエールには其の用件が少しも分らないし、又興味もなかつた。で、彼はたゞ之等の人々から逃れたいばかりで、彼等の間に答へた。とう〳〵彼は獨りになつたので妻の手紙の封を破つて、讀んだ。

『あの人達——砲兵隊の兵卒達、アンドレー公爵は殺された……老人……眞率は、神の意志に服從することだ……苦まねばならぬ……一切といふものゝ意味……一ツに繋ぎ合はせなければならない……俺の妻が結婚する……忘却と了解とが必要だ……』彼は、寢臺に近づき、着物も脫がずに、寢床の上に横はり、直ぐ睡りに就いた。

翌る朝、彼が眼を覺ました時に、執事が部屋へ入つて來て、ベヅウホフ伯爵が去つたか、或は去らうとしてゐるかを視察するために、ラストプチン伯爵から差遣された警官が來たことを報じた。

ピエールに用事のある各種の人々が、十人ばかり應接室で彼を待つてゐた。ピエールは急いで着物を着、自分を待つてゐる人々には會はずに、裏口の方に行き、其處から門の外に出て行つてしまつた。

その時から、モスクワの破壞が終るまで、彼の行衛を骨を折つて探したにも拘はらず、ベヅウホフ家の何人も、彼に會はなかつたし、彼の居處さへも知らなかつた。

十二

ラストフ家の人々は九月一日まで、即ち敵軍がモスクワに侵入する前日まで、街に留まつてゐた。

ペエチヤが、コザツク兵のオボレンスキイ聯隊に入り、その聯隊が編成されたベールイ、ツエルコウイへ行つてしまつた後で、伯爵夫人は恐怖に襲はれた。自分の悴が二人とも戦争に出てゐることや、二人が自分の翼の下から出て行つたことや、二人の中の何れかが、或は、自分の知人の三人の悴のやうに、二人とも同時に今日明日とも知れず戦死するかも知れないと云ふことなどの考慮が、その夏始めて、奇酷く躍如と、彼女の頭に浮んだのであつた。彼女は、ニコライを連れ戻さうと焦つたり、ペエチヤのところへは自分で行つて、ペテルブルグの何處かに勤めさせるやうにしやうと思つたりしたが、いづれも不可能なことだと云ふことが分つた。ペエチヤは、聯隊と一緒か、或は他の現役聯隊に移されるかしなければ、歸ることは出來なかつた。ニコライは戦地の何處かにゐるのだが、公爵令嬢マリヤに遭つた一仔一什を書いた手紙をよこしたきりで、其の後何の消息もしなかつた。伯爵夫人は、毎晩睡られなかつた、睡ると、悴たちが殺されてゐる夢を見た。伯爵は、いろ〳〵注意をしたり、言つて聞かせたりした揚句、とう〳〵伯爵夫人を安心させる方法を考へ出した。彼は、ペエチヤをオボレンスキイ聯隊から、モスクワ附近で編成されたベヅウホフの聯隊に移した。ペエチヤは、軍務に就いてゐたが、伯爵夫人は、この移動によつて、自分の翼の下に一人の悴を見るといふ慰安を得た、そして、ペエチヤを再び自分の手許から逃がさないやうにし、決して戦争に出ることの無い地位にいつも任命せられてゐるやうにしたいと思つた。ニコライの方だけが危險な地位にゐる間、伯爵夫人は、他の子供達よりも長男の方を愛してゐるやうに思つた(彼女はこの事を悔いてゐた。)が、小さい、惡戯な、祿に勉強もせず、家にばかりごろ〳〵してゐて、何事にも倦き易いペエチヤが、獅子鼻の、快活な黒い眼の、血色の好い、柔かい柔毛が漸くその頬に見え出したばかりの、彼のペエチヤが、何事かのために戦ひ、且つそれを一種の快樂と心得てゐる、かの大きな、怖ろしい殘酷な男達の仲間に入つてゐる今、母親にとつて、ペエチヤが、他の子供よりも可愛いやうに、遙かに可愛いやうに思はれた。彼女の待ち焦れてゐるペエチヤが、モスクワに歸る時が近づけば近づくほど、伯爵夫人の不安は大きくなつた。彼女は、自分がかゝる幸福に會ふことまでも生きてゐないやうに思つた。ソーニヤのみならず、彼女の寵愛してゐるナターシヤや、良人が傍にゐることさへも、伯爵夫人には腹立たしかつた。(あんな人たちが私には何になるものか、ペエチヤの他は誰も要らない!)と伯爵夫人は思つた。

八月の終りに近い或る日、ラストフ家の人達は、ニコライから二度目の手紙を受取つた。彼は、補充馬を得るために、ヴオロネヂ縣へ遣られてゐて、そこから手紙をよこしたのであつた。この手紙は、伯爵夫人を安心させなかつた。一人の子供に、危險が無くなつたことを知ると、伯爵夫人は、ペエチヤのために、尚一層心配を始めた。

八月の二十日までには、ラストフ家の知合の人々はみんなモスクワを去つたけれども、誰も彼も、

成る可く速かに退去するやうにと伯爵夫人に勸めたけれども、伯爵夫人は自分の寶である、大事の、ペエチヤが歸つて來るまでは退去することを諾かうとしなかつた。八月の二十八日に、ペエチヤが歸つて來た。十六歳の將校は、母親の病的に熱烈な優しい歡迎を有難いと思はなかつた。母親は、自分の翼の下から再び彼を逃がすまいとする自分の意向を隱くしてゐたが、ペエチヤは、母親の計畫を見拔いてゐた、で、母親が、彼を柔かにし過ぎること、彼を「愚人」にしてしまふ（彼は自分の心の中でさう思つてゐた）のを本能的に怖れて、彼は稍冷淡な態度で母親に接し、母親の傍にゐることを避けて、モスクワにゐる間中、ナターシヤとばかりゐた、ナターシヤに對して、彼はいつも特別な愛情、殆んど戀に近いやうな愛情をもつてゐた。

伯爵は、例の投げ遣りで、八月二十八日まで退去の準備を少しもしなかつた、そして、家から凡ゆる財產を運び出すために、モスクワ及びリヤザンの領地から來る筈の荷馬車は、三十日に漸く到着した。

八月二十八日から三十一日まで、モスクワ中は、上を下への大騷動であつた。每日、ボロデイノの戰場から來る數千の負傷者が、ドロゴミロフスキイ門から運び込まれ、モスクワ中に運び分けられる、かと思ふと住民やその所有品を滿載した數千の荷車は他の諸門から繰り出された。

ラストプチンの諸掲示に拘らず——それとは關係無しに起るのか、それとも、それがために起るのか——極めて矛盾した不思議な風說が、市中に流布された。皆市を去ることを禁ぜられたといふ者があるかと思ふと、その反對に、聖像が悉く會堂から取去られたとか、何人も、强制的に追ひ出されるのだとかと語る者があつた。或る者は、ボロデイノの後で、もう一度戰鬪があつて、その戰鬪で、フランス人は、破られてしまつたと言ひ、或る者は、その反對にロシア軍は全滅してしまつたと言つた。或る者は、モスクワ民軍が、僧侶どもを先頭に立てゝ、三丘へ進軍する筈だと語り、或る者は、師父アウグスチンが、市を去ることを禁ぜられたとか、逆徒が捕へられたとか、農夫どもが暴動を起し市を去る者を掠奪してゐるといふやうなことを、囁き合つた。が、さういふことは、たゞの話に過ぎないので、實際は、（モスクワを放棄することに決定したフイリイの會議が、まだ開かれない先から、この市を去つた人々も、居殘つてゐた人々も、皆な大きな聲では言はなかつたが、屹度モスクワは降伏するに相違ないから出來るだけ早く逃げ出してゐた。凡てが俄かに亂調子になつて變化するに違ひないといふやうな感じもしてゐた、が、九月の一日までは、まだ何の變化もなかつた。刑場に曳かれて行く罪人が、今直ぐに死なねばならぬことを知つてゐながら、尙四邊を見廻はしたり、歪んで被つてゐる帽子を直ほしたりするやうに、モスクワは、生活の習慣的條件的狀態が悉く破られてしまふ破滅の時が近づきつゝあることを知つてゐながら、本能的にその日常生活を續けてゐた。

モスクワ占領の三日間、ラストフの家族はみんな、種々の實際的な仕事に忙がしかつた。家長の伯爵イリヤ・アンドレーイッチは、斷えず市中を乘り廻はし、流布されてゐるさま〴〵の風評を聞き集め、家にゐる時には、出發準備に就いて表面的な、無分別な指圖をしてゐた。

伯爵夫人は、荷造りをすべき物品を擇り分けるのを監督してゐた、が、誰に對しても不機嫌で斷えずペエチヤの後を追ふてゐた、ペエチヤは、それを逃げて、始終ナターシヤと一緒にゐるので、母親はナターシヤを嫉妬してゐた。で、ソーニヤ一人荷造を實際に指圖してゐた。が、そのソーニヤも、この頃は、殊に默り込んで、鬱ぎ勝ちであつた。公爵令嬢マリヤのことを書いたニコライの手紙が來ると、伯爵夫人は、ニコライと公爵令嬢マリヤの邂逅、神の御旨であると見做し、非常にそれを悦んだが、その時ソーニヤはそこに居合せたのであつた。

『私は眞實に嬉しくなかつたのだよ、』と、伯爵夫人は言つた。『バルコンスキイがナターシヤと婚約した時にはね、私はいつもニコライが公爵令嬢と結婚すればいゝと思つてゐたし、又、さうなるといふ氣がしてゐたのだもの。さうなれば、いゝんだがねえ。』

ソーニヤは、それが眞實であることや、ラストフ家の狀態を回復する唯一の手段は、ニコライが相續娘と結婚することであると云ふことや、公爵令嬢がニコライにとつて好配偶だと云ふことなど感じてゐた。が、之は彼女にとつて非常に悲しいことであつた。この悲哀があるに抱はらず、いや或は

この悲哀の故かも知れないが、彼女は物品を擇り分けたり、荷造りしたりする困難な指圖を皆な自分に引き受け終日それに掛つてゐた。伯爵も伯爵夫人も、何か命令けなければならぬことが出來ると、彼女に頼むのであつた。ペエチヤとナターシヤとは、ソーニヤとは反對で、兩親の手助けをしないばかりか、いつも皆なの邪魔になり、妨害をするばかりであつた。そして、終日、二人の走り廻る足音や、叫聲や、亂暴な笑聲などが家中に響き渡つてゐた。二人は、笑ふ理由も無いのに、いつも笑つたり、はしやいだりしてゐた。が、二人の心は嬉しく、樂しかつた。で、何が起つても皆な二人の爲には、笑つたり騷いだりする原因になつた。

ペエチヤが上機嫌だつたのは、自分が子供で家を出たのに、今、立派な若者となつて（みんなが彼にさう言つた。）歸つて來た爲であつた、自分が自宅にゐると云ふ、其のためであつた。急に戰爭する望の無いベールイ・ツエルコウイを去つて近日中に戰鬪の始まるモスクワに歸つて來たためであつた、殊に彼が上機嫌であつたのは、いつも自分の氣持を支配するナターシヤが上機嫌であつたためであつた。

ナターシヤが陽氣だつたのは、自分が、あまり永い間悲哀に捕へられてゐたのに、今その悲哀の原因を憶ひ出させるやうなものが一つも無くなり、再び壯健になつたためであつた。なほ、彼女が陽氣であつたのは自分に誰かゞ魅せられてゐるからであつた。（他人を魅惑することは、車輪の油のやうな

もので、それが無くては、ナターシヤの機嫌は、十分滑かに廻轉しなかつた。)ペエチヤが、彼女に賦せられてゐたからであつた。何よりも、彼等が陽氣だつたのは、モスクワの近くで戰爭が行はれたことと、城門の傍で戰爭が始まると云ふことと、武器が配附されたことゝ、皆なが何處かに馬車や、徒歩で逃げて行くことやと、特にきつと若い人々の心を刺激るやうな、極めて異常な何事かが起らうとしてゐたこととのためであつた。

十三

八月の三十一日の土曜日には、ラストフ家は、上を下への大混雜をした。戸口はみんな開け放され、家具はみんな持ち出されり、運び移されたりし、鏡や額は取り外づされてゐた。部屋々々には、澤山の箱があるし、枯草や、包紙や、繩なども取散らされてゐた。農夫や家僕達は、行李を擔いで、寄木細工の床の上をドシ〳〵歩いてゐた。屋敷は農夫の荷車で、一ぱいになつてゐた。荷車を高く積んで繩で捆げたのや、まだ空虚の儘になつてゐるのがあつた。

大勢の下男や、荷馬車に附いて來た農夫たちの聲や足音が、屋敷や家の中に響き渡つてゐた。伯爵は、朝から何處かへ出かけた。伯爵夫人は、音響や混雜などのために、頭痛を感じ、酢に浸した愚定巾

を頭に附けて、新らしい喫煙室で　横になつてゐた。ペエチヤは、家にゐなかつた。(彼は、或る同僚と、民軍から、戰地にゐる聯隊へ移して貰はうといふ計畫を立てゝゐたのであつた。)ソーニヤは、大廣間で、陶器や硝子の荷造りを監督してゐた。ナターシヤは、亂雜になつた自分の部屋で、投げ散らされてゐる着物や、リボンや、襟飾などの間で床の上に座つてゐた。彼女は、凝うと床を見詰めながら、兩手に古い舞踏服をもつてゐた。それは、(もう流行遲れだが)彼女が、初めてペテルブルグの舞踏會に行つた時に着た舞踏服であつた。

ナターシヤは、家中の者が皆な忙がしくしてゐるのに、自分だけ何にもしないのを濟まないことゝ思つた。で、朝から幾度か、仕事をしやうとしたが、彼女の心はそれに注がれてゐなかつた、一體、ナターシヤは、自分の全心全力が注がれてゐなければ、何事もすることが出來なかつた。

ナターシヤは、ソーニヤが、陶器を纏めてゐる時、ソーニヤの上へ覆さるやうにして、手傳はうとした、が、直ぐそれを止めて自分の物品を纏める爲に、自分の部屋に歸つた。初めのうちは、彼女は面白さうに女中どもに、着物やリボンを配けて與つてゐたのだが、後で、まだ殘つてゐる物品を纏める時になると、面倒くさくなつた。

『ヴニヤーシヤ、これをみんな纏めておくれ、ね？　宜いこと？　宜いこと？』ヴニヤーシヤが、ナターシヤのために纏めることを快く引受けてくれると、ナターシヤは、床の上に座り、古い舞踏服を手

に持つて、その時自分の心に生ずべきこととは、全然別な問題を考へ始めた。ナターシャは、隣りの女中部屋から聞える女中どもの話聲や、その部屋から裏口へ急ぐ女中どもの足音などで、自分が陷つてゐた瞑想から醒された。ナターシャは起ち上つて、窓から外を見た。街には負傷者を載せた澤山な荷馬車が停まつてゐた。

女中等や、下男等や、女中頭や、乳母や、料理人等や、馭者等や、馬丁等や、厨丁等は、みんな門の傍に立つて負傷者を眺めてゐた。

ナターシャは、白い手巾を髪の上へ投げ覆けて、兩手で兩隅を持つて、街へ出て行つた。それまで女中頭であつた婆さんのマヴラ・クジミニーチナは、門の傍に立つてゐる群集の中から出て、シナの皮の蓙の蔽蓋を掛けた荷馬車に近つき、その荷馬車の中に臥てゐる若い、蒼白めた將校と話をしてゐた。ナターシャは數歩前へ進み出て、手巾に手を掛けたまゝでおづ〳〵立停まり、女中頭の言ふてゐることを聽いた。

『ぢや、モスクワには、何誰もお知合の方が無いんですか?』と、マヴラ・クジミニーチナが言つた。

『何處かの部屋へお出でになつた方が、お樂でせう……私どもの家へでも。御主人樣がたは、今日お出發ちなんです。』

『許して貰へるかどうか分らないんだよ。』と、將校は、弱々しい聲で言つた。『あすこにゐるのが上官

なんだ……あの人に尋いて下さい。』と、彼は、今恰度振り返つて、荷馬車の列に沿ふて、街を歩いて來る肥つた少佐を指した。

ナターシャは、おず〳〵した眼眸で、負傷將校の顏を視て直ぐ少佐の方へ近づいた。

『負傷者の方たちを、私どもの家に御止めしても宜いでせうか?』と、ナターシャは尋いた。

少佐は、微笑みながら、擧手の禮をした。

『どうなさらうといふんですか? お嬢さん!』と、彼は、横眼をして、微笑みながら言つた。

ナターシャは、落着いて、疑問を繰返した、彼女は矢張り手巾の隅を持つてゐたけれども、その顏と全體の動作とが非常に眞面目であつたので、少佐は微笑ふのを止め、どれほどまでがさうしても可いかと自問してゞもゐるやうに最初一寸考へ込んで、やがて彼女に肯定的な返答をした。

『えゝ、宜うございますとも、』と、彼は言つた。

ナターシャは、輕く頭を下げて、若い將校の傍に立ち、すつかり同情して、話し込んでゐたマヴラ・クジミニーチナの方へ足早やに戻つて來た。

『宜いのよ、あの人が宜いつて言つたの!』と、ナターシャは囁やいた。

蔽蓋の中に入つてゐた將校は、ラストフ家の庭へ入つた、そして市民たちが招いたので、負傷車の荷馬車が十輛ほど、ボヴアルスカヤ街の家々の庭や車寄へ乘りつけられた。ナターシャは、狀況が日

常生活とはすつかり違つて、新たな人々に接するのを如何にも喜んでゐるやうに思はれた。ナターシヤは、マヴラ・クジミニーチナと力を合せて、自家の庭へ、出來るだけ多勢の負傷者を入らせやうとした。

『ですが、お父様に申上げなくちやなりません、』と、マヴラ・クジミニーチナが言つた。

『いゝわ、いゝわ、構ふものかね！　一日位ゐ私たちは客間へ行つてゐれば宜いわ。私たちは、あの人たちに家の半分だけすつかり貸してやるわ。』

『まあ、お令嬢さま何といふことを被言るんでせう！　襲屋の方や、下男等の部屋や、乳母の部屋なら宜うございませう、でも、お許を受けなければ宜けませんよ。』

『あゝ、私寻いて來るわ。』

ナターシヤは、家の中へ駈け込み、扉が半ば開いてゐる喫煙室へ、足を爪立て入つた。室の中には酢とホフマン液の臭ひが漂つてゐた。

『お睡つてらつしやるの、母上様？』

『どうして睡られるもんかね？』と、伯爵夫人は目を醒して言つたが、其の實、丁度睡んでゐたのであつた。

『母上様、ねえ！』ナターシヤは母親の前に跪き、自分の顔を母親の顔の傍近くに寄せながら言つた。

『とんだ事をしましたわねえ。御免なさい、私もう二度としませんからね、私が母上様を起したのよ。マヴラ・クジミニーチナが行けつて言つたから來たのですがね、負傷者たちを連れ込んだの、將校たちよ、許して下さるでせう？　でも、あの人たちは、何處へも行くところが無いのよ、母上様、きつと許して下さるわねえ……』と、ナターシヤは、呼吸をもつかずに、早口に喋つた。

『將校？　誰を連れ込んだのですね？　私には少しも分らない、』と、伯爵夫人は言つた。

ナターシヤは笑ひ出した、伯爵夫人も微かに微笑んだ。

『許して下さるわねえ……ぢや、さう言つて來るわ。』

で、ナターシヤは、母親に接吻して、立上つて、戸口の方へ行つた。

廣間で、ナターシヤは、悪い報知を持つて歸つて來た父親に出會つた。

『吾々は、あんまり悠然してゐたんだ！』と、伯爵は、思はず悲しさうな聲で言つた。『倶樂部も閉鎖られたし、警官も市を去るところだ。』

『父上様、負傷者たちを家へ入れてやつても構はないでせう？』と、ナターシヤは父親に言つた。

『無論宜いとも、』と、伯爵は、ぼんやりして言つた。『が、今そんな事は問題ぢやない、どうか下らない事に抱泥はず、荷造の手傳をして出發つやうに、出發つやうに、明日出發つやうにしてくれ……』

それから、伯爵は、執事にも、下男等にも同じ命令を與へた。ペエチヤは晝飯時に歸つて、來てさまざまな出來事を話した。

彼は、今日市民がクレムリンで武器を選んでゐたこと、ラストプチンの揭示には、もう二日すると命令すると書いてあつたにも拘らず、最う明日市民は皆な武装して三丘へ行くことに成つてゐるらしいこと、三丘で大戰爭が行はれるのだといふことなどを話した。

伯爵夫人はさういふ事を人々に話してゐる悴の愉快さうな、昂奮した顔をおづ〳〵と怖さうに見てゐた。伯爵夫人は若し自分がペエチヤにこの戰に出ないやうに願ひでもしやうものなら、(彼女はペエチヤが、この戰に出るのを喜こんでゐることを知つてゐた)彼は、男とか、名譽とか、祖國とかいふやうな事……無分別な、男性的な、頑固な事を言ふであらうし、さうなれば、それに反對することは全く無益で、彼を戰に出さないやうにする希望は、全然無くなつてしまふことを知つてゐた。で、この戰が始まる前に出發ち自分たちの守護者として、ペエチヤを一緒に連れて行つてしまふやうにしたいと思つて、彼女は、ペエチヤに何も言はなかつた。が、午餐が濟むと良人を傍へ呼び、涙を流して成る可く早く、若し成らう事なら今夜にでも、自分を市から連れ出して呉れと言つた。伯爵夫人は、女らしい愛の爲に知らず識らず狡猾になり、その時まで少しも恐怖を見せなかつたのに、その時になると、みんなが今晩出發つてくれなければ、自分は恐怖のために死んでしまふかも知れぬと云ひ出した。彼女は、實際、今は、虚僞ではなくその事を怖がつてゐたのであつた。

十四

自分の娘に會ひに行つて來たマダム・ショツスが、ミヤスニツキイ街の酒屋の前で見て來たといふ光景の話が、伯爵夫人の恐怖を益々強めた。マダム・ショツスは、歸途その街を通つてゐると、酒屋の周圍で猛り狂ふてゐる醉漢の群のために、街を通ることが出來なかつた、で、彼女は、辻馬車を雇ひ、小路を迂り道して歸つて來たのであつた。毆者の話では市民は命令によつて、酒桶を叩き開けたのだといふことであつた。

午餐後にラストフ家のものは、總がゝりで、一生懸命に急いで、荷造りをし、出發の準備をしだした。老伯爵は、不意に仕事に取り掛り、晝餐後斷へず、庭から家の中へ往つたり來たりして、急いでゐる召使どもを滅茶苦茶に怒鳴りつけ、尙一層彼等を急がせた。ペエチヤは、庭で指圖をしてゐた。ソーニヤは、伯爵の矛盾した言ひ附けのために、どうして宜いか分らないので、茫然としてゐた。召使たちは、怒鳴つたり、喧嘩をしたり、騒いだりしながら、室や庭を駈け廻つてゐた。ナターシヤもまたいつも仕事をする時のやうに特質の熱心を現はして、不意に仕事にかゝり出した。初めのうちは、最初、ナターシヤの荷造りの手傳は、疑問いものだと思はれてゐた。誰も、ナターシヤが眞劍で

やると思はないので彼女の指圖に從はうとしなかつた。が、ナターシヤは、執拗く熱心に、自分の意見に從はせやうとした。そして人々が自分を相手にせぬのに腹を立て、殆んど泣きさうになつた。で、とう〳〵人々は彼女の意見に從がふやうになつた。

ナタシヤが非常な力を盡し、且つナターシヤに權威を與へた彼女の功績は、毛氈（ラッグ）の荷造りであつた。ラストフ家には高價なゴブランの壁掛と、ペルシヤ毛氈（ラッグ）とがあつた。ナターシヤが仕事に取り掛つた時には、廣間に蓋の開いた二つの箱があつた。その一つには、陶器が殆んど一杯詰まつてゐた。もう一つの方には、毛氈（ラッグ）が詰まつてゐた。卓子（テーブル）の上には、まだ澤山陶器が置いてあつた。そして猶ほも物置部屋から運ばれてゐた。それは、も一つ別な箱に入れなければならなかつたので、人々はそれを取りに行つた。

『ソーニヤ、一寸お待ちなさい、斯うすればみんな詰まるわ。』と、ナターシヤは言つた。

『駄目でございます。お嬢様、もうやつて見たんですから、』と、下男が言つた。

『いえ、一寸お待ち、何うか待つて頂戴、』

ナターヤは、紙に包（くる）んだ鉢や皿を急いで箱の中から出し始めた。

『鉢はこつちの毛氈の中に、』と、ナターシヤは言つた。

『でも、三つの箱には詰め切れない程、まだ毛氈が殘つてゐります。』と、下男が言つた。

『でもね、一寸待つておくれ、』そしてナターシヤは、手早やに、巧妙（たくみ）く、物品（しなもの）を選り分け始めた。『これはよんなものは要（い）らないわ、』と、彼女は、キエフ製の皿のことを云つた。『これは——そうね、毛氈の中へ。』と、彼女は、サキソニイ製の鉢のことを言つた。

『さあ、それで宜（い）いことよ、ナターシヤ、さあ、もう澤山、私たちが詰めるから、』と、ソーニヤが、叱るやうに言つた。

『何うもお嬢様……』と、執事が言つた。

が、ナターシヤは、聞き入れなかつた。彼女は物品（しなもの）をみんな引出し、悪くなつた毛氈や、餘分な器物は全く要らないものと決めて、物品（しなもの）をまた手早く詰め始めた。みんな引出して置いて、再び詰め始めたのである。何んでも安つぽい物や、持つて行くだけの價値のない物を棄てゝしまつて、價値のあるものだけをみんな、二つの箱に入れた。たゞ毛氈の入つてゐる方の箱の蓋が、閉（し）まらなかつた。僅少（わづか）の物品を取り出せば、宜いのだが、ナターシヤは、自分の思ふ通りに遣つつけてしまはうとした。ナターシヤは中の物を入れたり、置き換へたり、押しつけたり、この荷造を手傳はせるために連れて來た下男やペェチヤに箱の蓋を押し附けさせたり、自分も思ひ切り力を入れて押し附けたりした。

『もうお止しなさいよ、ナターシヤ、』と、ソーニヤは、ナターシヤに言つた。『それで宜（い）いんですよ、だけど、上の方の物だけお出しなさいよ。』

『嫌よ、』と、ナターシャは、片手で汗ばんだ顔に落ちかゝつた亂れ髪を撫で除け、片手で、毛氈を思ひ切り押しながら叫んだ。押してよ、ペーチャ、押してよ！　ヴシリイチ一生懸命に押しとくれよ！』と、彼女は叫んだ。

毛氈が壓し附けられて、蓋が閉つた。ナターシャは、手を叩いて、喜ばしさうに叫んだ、彼女の兩眼には涙が湧き出てゐた。が、そんなことはほんの一瞬間であつた。ナターシャは、直ぐ他の仕事に取り掛つた。もう皆なすつかりナターシャを信用してしまつた。伯爵も、ナタリヤ・イリニシナが、自分の指圖を變へたと誰からか聞いても怒らなかつた。下男等も、荷物に繩を掛けても宜いかどうかとか、馬車に積む物はもうないかなど、ナターシャに尋きに來た。荷造りは、ナターシャの指圖のお蔭で、捗取つた、不必要なものは殘されて、一ばん大切な物品だけが、堅密と荷造された。

しかし、家中の者が總がゝりで何んなに忙しくしても、夜遲くまで、まだ全部の荷造りは出來なかつた。伯爵夫人は寢てしまつた。伯爵も、朝まで出發を延ばして、寢床へ入つた。

ソーニヤや、ナターシャも、着物を脫がずに、喫煙室で寢た。

その晩、また負傷將校が、ボヴアルスカヤ街を運ばれてゐた。門の傍に立つてゐたマヴラ・クジミニーチナは、その將校をラストフ家に伴れて來させた。マヴラ・クジミニーチナは、その負傷將校を、身分の高い人だと思つた。彼は、車蓋を下ろして、膝掛ですつかり蔽はれた四輪馬車に乘せられてゐた。

非常に品の良い老僕が、馭者と一緒に馭者台に坐つてゐた。後の荷馬車には醫者と、二人の兵卒とが乘つてゐた。

『私どもの家へお出で下さい、お入りなさい、主人たちはお出發ちになりますから家ぢうが空いてゐるんです。』と老女は、老僕の方に向いて、言つた。

『あ、さうですか、』と、從僕は溜息を吐きながら答へた。『どうも、家まで連れて行く望がありませんのでな？　私どもの邸宅はモスクワにあるんですが、こゝからはまだ遠いし、それに、そこには誰も居りませんので。』

『どうぞ、お入りなさい。私どもの主人たちのとこには、まだ大勢の負傷者がゐらつしやいます。さ、何うぞ。』と、マヴラ・クジミニーチナは言つた。『ぢや、此のお方は甚くお惡いんですか？』と、彼女は附け加へた。

老僕は片手を振つた。

『どうも、家まで連れて行く望がないのです。お醫師にお尋ねして見なければなりません。』

從僕は、馬車台から降りて、荷馬車に近づいた。

『宜いね、』と、醫師は言つた。

從僕は、また四輪車に近づき、其の中を覗き、頭を搖つて、馭者に庭の中に入れるやうに言ひ附け

て、そのまゝマヴラ・クジミニーチナの傍に立つた。

『主(しゅ)、耶蘇基督(エス・クリスト)様(さま)！』と、老女は、囁いた。

マヴラ・クジミニーチナは、負傷者を家の中へ入れるやうに言つた。

『主人たちは、何も申しませんから……』と、彼女は言つた。

が、階段の上へ昇き上げることは出來ないので、負傷者を翼屋(はたれ)に運び、マダム・ショツスの部屋に入れた。この負傷將校は、アンドレー・バルコンスキイ公爵であつた。

十五

モスクワの最後の日が來た。晴々した麗かな秋の日で、日曜日であつた。いつも日曜日と同じやうに何の會堂でも祈禱の鐘を鳴らした。誰もまだ、モスクワに近づきつゝある事柄を了解してゐなかつたらしい。

社會狀態に就いてのたゞ二つの示指者だけがモスクワの現狀を表はしてゐた。それは民衆、卽ち貧民の階級と、物品の値段とであつた。職工や、家僕や、農夫などは、その日の朝早く、大群集となつて、三丘(プリイ・ゴールイ)へ出て行つた、その群集の中には官吏や、神學生や貴族なども加はつてゐた。其處でこの

群衆は暫らくの間ラストプチンを待つてゐたが遣つて來ないで、モスクワが降伏するだらうといふことを信じ、モスクワ中の旅亭や、酒場などが散々になつた。此の日の價格から見ても、其の時の狀態が分つた。武器、金貨、荷馬車、馬等の値段はだん〳〵高くなる一方で、紙幣や、市中の物品の價格は益々下落した、それがために、正午頃には、辻馬車が、羅紗のやうな高價な物品を、平常の運貨の半格で運ぶのに、農夫の馬一頭が五百留(ルーブル)にも買れ、家具、鏡、青銅什器などは、無代(ただ)で與つて了ふと云ふやうな事があつた。

ラストフ家の古風な、裝飾の多い家では、以前の生活狀態の崩壞(くづれ)は極めて微かにしか目立たなかつた。人間の方の出來事では大勢の召使の中で、たゞ三人だけが夜の間に居なくなつただけで、而かも何も盜まれたものは無かつた、物品の價段の方では、田舍から來た三十臺の荷馬車が、非常な價格になり、多くの人々がそれを羨み、巨額の金を出してそれを譲り受けたと言つた。荷馬車の爲に大金を拂はうと申込まれたばかりではない、晩から九月一日の早朝にかけて、負傷將校の從卒や從僕等が、ラストフ家の庭に來たり、ラストフ家や近所の家に收容されてゐる負傷者達が自分で歩き廻つて、ラストフ家の人達にモスクワを出るのだから荷馬車を心配して呉れと頼んだりした。之に頼まれた執事は負傷者を氣の毒とは思つたが、自分は、そんな事を伯爵に申し出る勇氣さへ有たないと斷然辭つた。後に殘つてゐる負傷者は氣の毒であつたが 一人に、一輛の荷馬車を貸すと、他の者に貸さない

譯にゆかなくなり、やがて全部の荷馬車を——乘用馬車さへも貸さなければならなくなることは明かであつた。三十輛の荷馬車では、負傷者全部を救ふことは出來ない、それに一般の人が危急に陷つた場合に、自分のことや、自分の家族のことを考へない譯にいかなかつた。執事は、自分の主人の爲めに、斯う考へたのであつた。

一日の朝、イリヤ・アンドレーキッチ伯爵は、目を醒すと、明方になつて辛つと眠つた妻の目を醒まさないやうに、靜かに寢臺を出て、薄紫色の絹の寢衣を着たまゝ、上り段へ出て來た。庭には荷を積んだ荷馬車が幾臺も置かれてあつた。馬車も幾臺か上り段の傍へ着けられてゐた。執事は、車寄の傍に立つて、年老つた從卒や、手を繃帶してゐる、蒼白めた若い將校などと話をしてゐた。執事は伯爵を見ると、將校と從卒とに彼方に行けといふ意味を表はす、斷乎して手眞似をした。

『おい、すつかり用意は出來たか、ワシリイッチ?』と、伯爵は、禿頭を撫でながら、言つて、將校と從卒を親切さうに見て、二人に會釋した。(伯爵は新らしい人が好きであつた。)

『もう直ぐ馬を附けるばかりになつております、閣下。』

『うん、そりやあ宜かつた、もう伯爵夫人も起きるだらう。手落なくやつて呉れ! 貴下達は何か御用ですか?』と、彼は將校に對つて言つた。『貴下達は、私の家に御逗留ですか?』

將校は、近寄つて來た。その蒼白い顏が急に眞赤になつた。

『伯爵、實に大變なお願ひですが、どうぞ……後生ですから……貴下の荷馬車の一つへ乘せて頂きたいんです。私は何も持つてゐませんのですから荷物と一緒で結構です……』

將校がまだ言ひ終らぬうちに、從卒も自分の主人のために伯爵に同じ懇請をした。

『おゝ、宜しい、宜しい、宜しい、』と、伯爵は、急いで言つた。『お安い御用です。ワシリイッチ、お前、此の仕度をしてくれ、それ、彼處にある荷馬車を一臺か二臺空けてね彼處に……さうだ……入用なものは……』と、伯爵は、曖昧な言葉で何事かを言ひ附けた。

が、其の瞬間に、將校の顏に現はれた熱心な感謝の色は、伯爵の命令を決定させた。伯爵は自分の周圍を見廻はした。庭にも、門にも、翼家の窓にも、負傷者や、從卒等が見えてゐた。彼等はみんな、伯爵を見て、上り段に近寄つて來た。

『どうぞ、美術室の方へ入らして頂きたいのですが、閣下、あすこの繪はどう致せば宜しうございませう?』と、執事は言つた。

伯爵は一緒に連れて行つてくれと賴んでゐる負傷者の願を斷つてはいけないといふ指圖を繰り返へしながら、執事は一緒に家の中へ入つて行つた。

『荷物は幾らか下ろせる、なあ、』と、伯爵は、誰かに自分の言ふことを聞かれるのを怖れてゞもゐるやうに、靜かに神秘的な聲で附言へた。

九時に、伯爵夫人は目を醒ました、と、以前、伯爵夫人附の女中で、伯爵夫人のために憲兵隊長の役目をやつてゐたマトリョーナ・チモフェエヴナが來て、マダム・ショツスが非常に怒つてゐること、それから令嬢の夏着を置いて行く譯に行かぬといふことを、伯爵夫人に報告しに入つて來た。

伯爵夫人が、マダム・ショツスの怒つてゐる理由を尋ねて見ると、マダム・ショツスの鞄が荷馬車から下ろされてしまつたし、荷馬車がみんな荷を下ろされてゐるし、いつも直ぐ瞞され易い伯爵が、自分たちと一緒に連れて行つてやると約束した負傷者等に、荷馬車を開けてやるために、荷物が取り下ろされてゐるといふことであるらしかつた。

伯爵夫人は、夫を呼びに遣つた。

『どうしたといふんですね、良人、荷物を再た下ろしてゐるといふぢやありませんか?』

『いや、實はお前、俺はお前に話さうと思つてゐたのだ……愛する、小さい伯爵夫人……一人の將校が俺のところへ來てね、彼等は、負傷者のために荷馬車を二三臺與へてくれと懇願してゐるんだ。之は無論、金錢の問題だが、殘されるといふことは、彼等にとつてどんな事になるんだか、まア考へて御覽……彼等は、吾々のこの庭にゐるのだ、吾々の方から入れと言つたのだ、將校たちがゐるのだよ……ねえ、俺は眞實に思ふのだからね、お前……まア、彼等に荷馬車を與へやうぢやないか。吾々はさう急がんでもいゝのだからね。』

伯爵は、おづ〳〵と斯う言つた、彼は、問題が少しでも金錢の關係があるといつもさうだつた。伯爵夫人は、その調子に馴れてゐた。それは、家の中へ新たに美術室とか、植物室とか、家庭劇場を造るとか、奏樂團の養成をするとかいふやうな、子供等の利益にならぬ何事かを持ち出さうとする時に、いつも出る調子であつた、で、伯爵夫人は此のおづ〳〵した調子で言ひ表はされることに反對することを自分の習慣にし、また義務だと見做してゐたのであつた。

伯爵夫人は、從順な、泣き出しさうな樣子をして良人に言つた——

『ねえ、伯爵、良人、家の財産を悉皆無くしてしまつたんですわ、それに、今度は私どもの——あの、子供たちの——財産までもみんな失くしてしまはうとなさるんです、ねえ、良人は御自身に家には十萬留もするだけの物品があると被言つたぢやありませんの。良人、私は反對です、反對です、良人のお勝手になさいまし! 負傷者の爲には、政府があります。あの人たちもそれを知つてゐるんですよ。まあ、御覽なさい、お向側のロープヒンス家では、もう三日にちり一つ殘さず家から持ち出したのですよ。他の人達の仕方は、みんなさうなんですわ。私たちばかり馬鹿なんです。私のことは何うでもいゝにしても、せめて子供たちを可哀想だと思つてやつて下さいませね。』

伯爵は手を搖つて、何も云はずに部屋を出て行つた。

『父上樣、何故そんなことをなさるのよ?』と、母親の部屋まで、父親の後を追つて來たナターシヤ

が言つた。

『何でもないよ！　お前の口を出すべきことぢやないよ！』と、伯爵は、腹立たしげに言つた。

『だつて、私聞いたわ、』と、ナターシャは言つた。『何故母上様はそれが嫌なんでせう？』

『お前の口を出すべきことぢやないといふのに！』伯爵は叫んだ。

ナターシャは、窓へ行つて考へ込んでゐた。

『父上様、ベルグが訪ねて見えましたわ。』と、ナターシャは、窓の外を見ながら言つた。

十六

ラストフ家の婿のベルグは、今ではもう大佐で、頸にウラヂミイルとアンナの勲章を掛けてゐた。やはり第二軍團の左翼隊の司令部の幕僚次長のその又幕僚次長といふ、前と同じ楽な心持の良い職に就てゐたのであつた。

九月一日に、彼は軍隊からモスクワへ歸つて来た。

彼は、モスクワには全く何の用事も無かつたのだが、みんなが軍隊から賜暇を得てモスクワへ行き其處で何事かしてゐるのを知つたので、自分も延引ならぬ一家の用事があるからと云つて、賜暇を得るのが宜いと思つたのであつた。

ブルグは、ある公爵の持つてゐるのと少しも違はない肥えた一對の葦毛馬を附けた、瀟洒たる二輪馬車で、舅の家へ乘附けた。彼は、庭の荷馬車を凝つて見て、それから上り段を上りながら、清潔いな手巾を取り出して、その中へ結び目を拵らへた。

ベルグは、玄關から客間へ、泳ぐやうな急き込んだ歩調で駈け込んで、伯爵を抱き、ナターシャとソーニヤの手に接吻し、それからあわてゝ姑の健康を尋ねた。

『身體のことどころぢや無いよ、こんな時に。さあ、聞かせてくれたまへ、』と、伯爵は言つた。『軍隊は何うして居る？　退却してゐるかね、それとも戰があるのかね？』

『お父様、たゞ全知なる神様だけが、』と、ベルグは言つた。『祖國の運命を決める力を有つてゐらつしやるのです、軍は英雄的精神に燃えております、で、只今は、所謂統帥たちが、會議を開いておるのです。どうなるのだか——分りません。しかし、お父様、ロシア軍の英雄的精神、昔ながらの勇氣、それは、彼等が、いや、軍隊が、（と彼は、言ひ訂正した。）あの二十六日の戰鬪で現はした昔ながらの勇氣は、どんな語を以てしても、充分に表白はすことは出來ません……』（彼は、自分の或る將官が自分の胸を打つた通りに、自分の胸を叩いた。が、それは少し遲かつた、何故なれば『ロシア軍』と言ふ時に胸を叩かなければならなかつたからである）眞實に、舅上様、吾々司令官は、兵卒を激勵した

り、或は何かの手段を採つたりする必要がないばかりではなく、この、……さうだ、昔ながらの勇敢な行動を抑制するのに、非常に骨が折れた位ゐでした。』と、彼は、口早に述べ立てた。『將官パアクレー・ド・トオリイは、何處でも軍隊の先頭に立つて、危險を冒したのです、實際ですよ。吾軍團は、丘腹に配置されてゐました。ところが、どうでせう！』ベルグは、自分がその戰鬪に就て聞いてゐた種種な物語を殘らず話し出した。

ナターシヤは、ベルグの顏から何かの問題の解決を探してゐるとでもいふやうに、ベルグを凝視めてゐた。その眼付はベルグを狼狽かせた。

『畢竟、ロシア兵の現はした英雄的精神は、賞讃の辭を絶し、筆紙の盡すところではないのでありますす。』と、ベルグは、ナターシヤを眺めながら、言つた。で、ナターシヤの心を柔げやうと、彼は、ナターシヤの凝視に答へて、微笑んだ……『（ロシアはモスクワの中に在るものではない、ロシアは、その國の小兒等の心の中に生きてゐる！）さうでせう、父上樣。』と、ベルグは言つた。

恰度その時、伯爵夫人が、疲れた、困惑た顏をして、喫煙室から入つて來た。ベルグは跳び上つて伯爵夫人の手に接吻し、その健康を尋ね、そして頭を同情するやうに振つて彼女の傍に立つてゐた。

『えゝ、母上樣、實際、今はどんなロシア人にとつても、辛らい、悲しい時ですよ。でも、何故そんなに御心配なさるんですか？　お出發ちになるには、また充分間はあるんですよ……』

『召使たちが、何をしてゐるのか、私にはちつとも分りませんよ、』と、伯爵夫人は、良人に對つて言つた。『今になつても彼等は、何にも準備が出來てゐないつて言ふんです、どうしても、誰かゞ行つて監督をしてゐなければ、駄目ですよ。こんな時になると、ミチエンカが居てくれたらと思ひますわねえ。いつ迄待つてゐても限はありませんよ。』

伯爵は、何か返答をしやうとした、が、それを強ひて壓へたらしく、椅子から離れて扉口の方へ行つた。

ベルグは、その間に、鼻を拭まうとするやうに、手巾を取出してその結目を見たが、一寸考へ込んで、悲しさうにそして意味あり氣に頭を搖つた。

『それで、えゝ、父上樣、折入つてお願があるんですが……』と、ベルグは、言ひ始めた。

『うむ？』と、伯爵は言つて、立止まつた。

『つい先刻ユスポフ家の前を通りますとね、』と、ベルグは笑ひながら言つた。『私の知つてゐる執事が、走り出て來て私に（何か買つてくれないか）と言ふんです。私は入りました、勿論、ほんの好奇心からなんですが、すると、小簞笥と化粧卓子があるんです。ねえ、それが、いつかヴエルウシカが欲しがつて、そのことで二人が喧嘩した物とそつくり同じ物なんじやありませんか。（ベルグは、小簞笥と化粧卓子とのことを話し始めると思はず、自分の家の非常に良い設備を嬉しがつてゐるのを

表はすやうな聲調になつてしまつた。）それに、素敵に綺麗な物なんです——動くやうになつてゐるし、それに英國製の錠が附いてゐるんですよ、ねえ。で、ヴエルウシカの欲しがつてゐた物とそつくりなんです。ですから、私は彼女を驚かしてやらうと思ふんです。お宅の庭には、農夫が隨分澤山ゐるやうですがねえ。どうぞ、一人私に貸して下さいませんか。賃銀は充分に與りますよ、それから……』

伯爵は、顔を顰めて、鼻を鳴らした。

『伯爵夫人に頼みなさい、俺は指圖をしないんだから、』

『もし御迷惑なんでしたら、私の方は何うでもいゝんですから、』と、ベルグは言つた。『私はたゞヴエーラのために、さうしてやらうと思つたに過ぎないんですから、』

『あゝ、誰も彼も、畜生、畜生、畜生！』と、老伯爵は怒鳴つた。『俺の頭は、ぐる〳〵廻るやうだ。』

そして、彼は部屋から出て行つた。伯爵夫人は泣き始めた。

『いや、眞實に怖ろしい時節ですなあ、母上様！』と、ベルグは言つた。

ナターシヤは、父親と一緒に出て行つた、そして、何事か思ひなやんでゞもゐるやうに、最初は父親の後から隨いて行つたがやがて階下へ駈け降りた。

ペエチヤは、入口に立つてモスクワを去らうとしてゐる農夫に、武器を渡してゐた。荷物を積んだ

荷馬車が、幾つもまだ前庭に置かれてあつた。そのうちの三臺は、荷を降されてゐた、そして、その『あれは、何うした人です！』と、ペエチヤは、ナターシヤに尋いた。

ナターシヤは、ペエチヤが兩親の喧嘩を指して云つたのだと思つた。ナターシヤは返答をしなかつた。

『父上様が、負傷者たちに、荷馬車をみんな渡してやらうとお思ひなすつたからだよ、』と、ペエチヤが言つた。『ワシリイツチがさう言つたよ。それで、僕の考想ではね……』

『私の考想ではね、』と、ナターシヤは、不意に殆んど叫ぶやうに言つて、險しい顏をペエチヤに向けた。『私の考想ではね、實に卑劣しい、ほんとに厭なことだわ……どうしたと云ふんでせうねえ？……私たちは、下等なドイツ人の集合なのかねえ？……』

ナターシヤの喉が、歔欷で震へた、が、弱くなつて、憤怒の勢を失つてはならぬと思つたのか、彼女は、振向いて、驀地に階段を飛び上つて行つた。

ベルグは、伯爵夫人の傍に座つて、子としての敬意を拂つて、伯爵夫人を安心させやうと努めてゐた。伯爵は、手に烟管を持つて、部屋の中を歩き廻つてゐた、その時、ナターシヤは醜い程顏に憤怒を表はして暴風のやうに部屋へ飛び込んで來て、足早に母親の傍へ駈け寄つた。

『卑劣しいことだわ、眞實に厭なことだわ！』と、ナターシヤは叫んだ。『貴女がそれを命令なさる筈はありませんわ。』ベルグと伯爵夫人とは、吃驚して、不思議さうにナターシヤを凝視めた。伯爵はそのところで、立止まつて、耳を傾けた。

『母上様、そんなことは出來ませんわ、前庭の光景を見て御覽なさいよ！』と、彼女は叫んだ。『あの人たちが置いて行かれる……』

『どうしたと云ふんだね？　あの人たちツて誰のこと？　どうしろとお言ひなの？』

『負傷者たちのことよ。そんなことは出來ないわ、母上様、それは亂暴だわ。……いゝえ、母上様、ねえ、それは全然間違つてゐるわ、御免なさい、何卒、ねえ……母上様、私たちが持つて行くものなんか私たちにとつては、何でもないぢやありませんか、貴女、まア、庭を見て御覽なさいよ……母上様！……さういふ筈はないわ……』

伯爵は、窓に立つて、頭を振り向けずにナターシヤの語に耳に傾けてゐたが、不意に、鼻を鳴らして窓へ顏を接近けた。

伯爵夫人は、ナターシヤをちらつと見た、母親のために恥ぢてゐるナターシヤの顏を見た、ナターシヤの波立つた感情を見た、何故良人が今ナターシヤを見なかつたのかと云ふ理由をも知つた、そして、狂ほしさうに四邊を見廻はした。

『あゝ、どうでも宜いやうになさいよ。私は、誰かの邪魔をしてゐるんぢやあるまいし！』と、伯爵夫人は、まだ直ぐには讓歩せずに言つた。

『母上様、ねえ、御覽なさい。』

が、伯爵夫人は、娘を押し退けて、伯爵の傍へ行つた。

『良人、宜しいやうに指圖をなすつて下さい……私にはかういふ事は分らないんですから、ねえ、』と、彼女は、濟まないことをしたやうな態度で、眼を下しながら言つた。

『鷄卵が……鷄卵が牝鷄を教へたんだ……』と、伯爵は嬉し涙の中から囁やいて妻を抱いた。妻は喜んで、良人の胸へ、自分の恥ぢた顏を隱した。

『父上様、母上様、私が命令けても宜くつて？　えゝ？……』と、ナターシヤが尋いた。『さうしたつて、やつぱり、何うでも斯うでも要用な物だけはみんな持つて行けてよ、』と、ナターシヤは附言へた。

伯爵は點頭いた、で、ナターシヤは、鬼遊戲の時いつも駈けるのと同じ速力で、廣間から玄關へ突切つて出て、それから上り段を降りて、庭へ飛んで行つた。

召使等は、ナターシヤの周圍に集まつたが、ナターシヤの與へた變な命令を信じ得なかつた、それで、伯爵は自から、妻がさう言つたのだと言つて、荷馬車全部を負傷車の用に供し、物品の箱は、みんな物置部屋へ入れるのだといふ命令の眞實なことを保證した。召使等はそれが分明ると、その新た

な仕事に、威勢よく、忙がしげに取り掛つた、その命令は、もう少しも不思議だとは思はれなかつた、それどころか、彼等は、それより外の方法はあり得ないやうに思つたのであつた、それは恰度、十五分程前には、負傷者等を置き去りにして、家財道具を持つて行くのが不思議に思はれず、そしてそれが唯一の方法だと思はれてゐたのと、同じやうに。

家中のものが、もつと早く負傷者等を保護しなかつた塡補せをするとでもいふやうに、一生懸命に負傷者等を荷馬車へ載せる仕事を遣りだした。負傷兵等は、各自の部屋から這ひ出て來て、蒼白いが、嬉しさうな顏をして、荷馬車の周圍に集まつた。荷馬車があると云ふ噂が、近所の家へも擴がつたので、負傷者等は、他の家々からもラストフ家の庭へ來だした。負傷兵の中には、箱を下さないでくれ、箱の上へ乘せてくれさいすればいゝと賴むものが尠くなかつた。が、一度、荷を下ろす仕事が始まつた以上は、それを止めることは出來なかつた。みんな置いて行かうが、半分置いて行かうが、大差は無かつた。陶器や、靑銅什器や、繪や、鏡などを入れた、前晩中に非常に念入りに荷造りされた幾つもの箱が、庭に横はつてゐた。それでも尙、人々はます〳〵多く作らうとするのであつた。

け多くの乘場所をます〳〵荷を下ろして、負傷者等のために出來るだ

『まだ四人乘せられます、』と、執事が言つた。『私の荷馬車を遣りませう、そうでないと、あの人たちは、どうなるか知れんのですからねえ、』

『あゝ、私の箪笥の載つてゐる荷馬車をお遣り、』と、伯爵夫人が云つた。『ツニヤーシャーは、私の馬車に一緒に載せて遣るから、』

それで箪笥の積んであつた荷馬車を渡すことになり、その馬車は、二軒隔いて隣家にゐる負傷者達のところに遣られた。家族ぢうも、召使たちも、活氣づいて、嬉しさうであつた。ナターシャは、隨分永い間味はなかつた、活々した幸福な喜悅を感じてゐた。

『どこへこれを縛り附けませう?』と、下男達は、馬車の後部の狹い踏段へ鞄を置かうとして、言つた。『もう一馬車取つて置かなきやアならんのですが、』

『それは何に?』と、ナターシャが尋いた。

『伯爵の御書籍です。』

『置いとおきよ。ワシリイツチが片附けるだらうよ。そんなものは要らないわ。』

『置いとおきよ。ワシリイツチが片附けるだらうよ。そんなものは要らないわ。』

車蓋を掛けた二輪馬車は、乘者で一ぱいであつた、ピョートル・イリキツチは、何處へ乘せていゝか分らなかつた。

『箱の上へ乘つてければいゝわ、箱の上でもいゝでせう、ねえ、ペエチヤ?』と、ナターシャが叫んだ。

ソーニヤも、矢張り絕えず世話を燒いてゐた、が、ソーニヤが世話を燒く目的は、ナターアシャの

目的とは反對であつた。ソーニヤは、置いて行くべき物品を藏ひ、伯爵夫人の望によつて、さういふ物品の目錄を作つた、そして、出來るだけ多くの物品を持つて行けるやうに、骨を折つたのであつた。

十七

二時には、ラストフ家の四輛の馬車が、荷を積み込んで、出發の準備がすつかり出來て車寄の前にあつた。負傷者等の乘つてゐる荷馬車は、續々と庭から列をなして出て行きつゝあつた。

公爵アンドレーを乘せて行く四輪馬車は、玄關の傍を通る時にソーニヤの注意を惹いた。ソーニヤは一人の女中に手傳はせて、車寄の前にある伯爵夫人の大きな、高い馬車の中で、夫人の席を坐り心地の好いやうに設てゐたのであつた。

『あれは、誰の馬車?』と、ソーニヤが、馬車の窓から頭を出して、尋ねた。

『おや、まだお聞きにならなかつたんですか、お孃樣?』と、女中が答へた。『負傷した公爵でございます、昨夜は此家へお泊りになつたのですが、私どもと一緒にお出發ちになるのです。』

『まア、何方なの? 何といふお方?』

『吾家の約婚者だつた方……バルコンスキイ公爵でございます!』と、女中は答へて、吐息をついた。『もうお危篤しいんだそうでございます。』

ソーニヤは、馬車から跳び降りて、伯爵夫人の傍へと駈け込んで行つた。伯爵夫人は、旅仕度をして帽子を冠り、肩掛を掛けて、客間の中を退屈さうに歩きながら、家の者がみんな出發つ前の祈禱に來るのを待つてゐた。ナターシヤは、その部屋にはゐなかつた。

『母上樣、』と、ソーニヤは云つた、『公爵アンドレーがこの家にゐますよ、負傷して、危篤しいんです。私たちと一緒に行くんですよ。』

伯爵夫人は、吃驚して眼を開いた、そしてソーニヤの腕を摑んで、四邊を見廻した。

『ナターシヤは、』と、彼女は言つた。

ソーニヤと伯爵夫人の兩人にとつて、この報知は最初の瞬間には、たゞ一つの意味しかもたなかつた。二人はナターシヤの性質を知つてゐた、で、この報知を聞いたらナターシヤが何うするだらうと云ふ恐怖の方が、二人が愛してゐる公爵に對する凡ての同情よりも勝つてゐた。

『ナターシヤは、まだ知りません、でも、あの方は私たちと一緒に行らつしやるんですよ、』と、ソーニヤは言つた。

『もう危篤しいとお言ひだつたねえ?』

ソーニヤは、默頭いた。

伯爵夫人は、ソーニヤを抱擁して、涙に咽んだ。

『主の路は、量り知ることが出來ないのだわ！』と、伯爵夫人は思つて、今起つて來てゐる凡ての事柄の中に、これまでは人々に見えなかつた全能の御手が、現はれだしたのを感じた。

『さあ、母上樣もうすつかり支度は出來てゐてよ。どうなすつたの？』と、ナターシヤは活々した顏をして、部屋の中へ駈け込んで來ながら言つた。

『何でもないのよ、』と、伯爵夫人は言つた。『支度が出來たのなら出發ちませう。』

伯爵夫人は、自分の動搖した顏を隱すために、手提袋の上へ顏を曲げた。ソーニヤは、ナターシヤを抱擁し、接吻した。

ナターシヤは、不審さうに、ソーニヤを見た。

『どうしたの？　何事か起つたの？』

『いゝえ、……何でもないのよ……』

『私に關係したことで何か非常に惡いことなの？……何なの？』と、推察の早いナターシヤが尋いた。

ソーニヤは、吐息をついて、そして、何の返答もなかつた。伯爵と、ペエチヤと、マダム・ショツスと、マヴラ・クズミニーチナと、ワシリイツチとが、客間へ入つて來た、そして、戸を閉めて、みんな

坐り、數秒の間互に見合はずに默つて坐つてゐた。

伯爵が、先づ起上つた。彼は、音高く溜息して、聖畫像の前で十字を切つた。他の者もみんな、同じことをした。次ぎに伯爵は、モスクワに殘ることになつてゐたクズミニーチナとワシリイツチを抱擁しやうとした。で、彼等が伯爵の手を握り肩に接吻した時に伯爵は、曖昧した情愛のある、安心させるやうな語を言つて、彼等の脊を輕く叩いた。伯爵夫人は、小さい禮拜堂へ去つてしまつた。ソーニヤは、伯爵夫人が、まだ壁に殘つてゐる聖畫像の前に跪いてゐるのを見た。（この家の傳說と關係のある最も貴重な聖畫像はみんな、持つて行かれたのであつた。）

玄關や、庭では、出發する從僕等がペエチヤに渡された劍や短劍を持ち、下袴を長靴の中へ押し込み、肩帶や革帶をしつかり締めて、後へ殘される者どもに別れを告げてゐた。

出發間際に屹度あるやうに、いろ〳〵の物を忘れたり、間違つた所へ詰めたりしたことが分つた、で、二人の馬丁が、伯爵夫人を馬車の踏段へ助け上げやうとして、開いた馬車の戸の兩側に永い間立ち續けてゐるのに、女中等が枕や袋をもつて、家から、馬車、四輪馬車、二輪馬車へと、飛ぶやうに行つたり來たりした。

『あの人たちは、一生涯、いつでも何物でも忘れるんだねえ、』と、伯爵夫人が言つた。

『私は、そんなぢや坐れないことをお前は知つてゐるぢやないか。』

ヅニヤーシヤは、それには答へず歯を喰ひしばり、叱るやう顔容をして、坐褥を整すために、馬車の中へ跳び込んだ。

『あゝ、あんな召使どもは、』と、伯爵は頭を揺りながら言つた。

伯爵夫人が安心して自分の馬車を駆させるのは老駆者のエフイム限りであつたが、彼は、高い駆者台に腰掛けたまゝ自分の後で何が起つてゐるかを振り向いて見やうともしなかつた。彼は三十年間の経験によつて『さあ、よし』といふまでにはまだ大分間があるし、また、それを言つてからも、二度くらゐは止めて何か忘れたものを取りに帰らせるし、それから、その後でも、一度は止めさせて、伯爵夫人が自ら窓から頭を出して、どうぞ下り坂は用心して降りてくれと頼むことを知つてゐた。彼は、それを知つてゐたので、彼の馬、(殊に隼鷹といふ栗毛馬で、断へず前足で地を掻き、轡を頻りに噛んでゐた左方の馬)よりも、もつと忍耐して、來るべきことを待つてゐた。とう〳〵みんな座席に就いた。馬車の踏段が引上げられた、戸がドンと閉まつた、それから、忘れてゐた旅行箱が取に遣られた、そして伯爵夫人が頭を突き出していつもの命令を下した。そこで、エフイムは、悠然帽子を脱いで、十字を切り始めた。馬丁や、みんなの下男がそれに習つた。『さア、おさらばですよ!』とエフイムは言つて、帽子を冠つた。『出せ!』馬丁が、手綱を引いた。右方の轅の馬が挽き始めた。高發條がギイ鳴つた、馬車がゆら〳〵と動き出した。従僕が、馬車が動し出してから、駆者臺の上へ飛び乗つ

た。馬車は、ガタン〳〵と動いて、庭から凹凸な敷石路へ出た。他の馬車も同じやうにガタ〳〵と揺れてゐた。一列の馬車は街を上つて行つた。馬車や、四輪馬車や、二輪馬車の中にゐる人々はみんな、向側の寺院を見ると、十字を切つた。モスクワに居殘る筈の従僕等は、一同を見送るために、馬車の両側を歩いてゐた。

ナターシヤが、馬車の中で伯爵夫人の傍に坐つて自分の脇をゆる〳〵動いてゐる、棄てられた、動揺した、モスクワの城壁を凝視めてゐるその刹那に、経験したやうなさういふ愉快な感覚を、ナターシヤは従來滅多に感じたことはなかつた。ナターシヤは時々、馬車の窓から頭を出して、後方を見返り、それから自分たちより先きへ進んで行く、前方の、負傷兵を満載した荷馬車の長い列を見た。ナターシヤは、その荷馬車の先頭に、アンドレー公爵の扉を閉た馬車を見た、ナターシヤは、その馬車の中に、どういふ人がゐるかを知らなかつた。そして、荷馬車の行列を見渡す毎に、ナターシヤは、その四輪馬車が何處へ行つたかを探すのであつた。ナターシヤは、その馬車がいつも先頭であるのを知つてゐた。

ニキツスカヤ街のクヅリノではプレスニイからも、ボヅノギンスキイからも、ラストフ家のと同じやうな、幾列かの馬車が出て來た、で、彼等がサドヴオイ街に達した頃には、馬車や荷馬車は道路を二列になつて進んでゐた。

スハアレフ塔を廻つた時に、馬車で通つたり、歩いて通つたりしてゐる群集を、キヨロ〳〵と、珍

らしさうに眺めてゐたナターシヤが、喜悦と驚愕の叫聲を出した。

『おや！　母上様、ソーニヤ、一寸御覽！　あの方よ！』

『誰なの？　誰よ？』

『あれ、御覽なさい！　ベズウホフよ、』と、ナターシヤは云つて、馬車の窓から頭を出して、馭者の長外套を着た、その氣取つた様子や歩容から見ると、一見して變裝した紳士なることが分る、丈の高い、肥つた男を凝視めた。その男は、粗羅紗の外套を着た、顏色の黄ろい、無髯の、小柄の老人と並んで、スハアレフ塔の穹窿の下へ歩いて行つた。

『まあ、どうしたんでせう！　ベズウホフが馭者の外套を着て、何處かの小さい老爺さんと一緒に、』と、ナターシヤは言つた、『御覽なさいよ、御覽なさいよ！』

『いゝえ、あの人ぢやアありませんよ。可い加減なことを云ふのねえ、お前は！』

『母上様』と、ナターシヤは叫んだ。『屹度さうよ、確實よ、あの方ですよ、止めてお呉れ、止めてお呉れ、』と、彼女は、馭者に對つて叫んだ。

が、馭者は止めることが出來なかつた、それは、更に多くの荷馬車や馬車が、メシチヤンスキイ街から來かゝつてゐて、人々がラストフ家の馬車に對つて、ドン〳〵進んでくれ、止まつて往來の邪魔をしないやうにしてくれと叫んでゐたからであつた。

益々遠ざかつて了つたが、しかし實際、ラストフ家の者はみんな、ピエール、或は、馭者の外套を着て、小柄の、無髯の老人の、下男らしい男と並んで、頭を垂れて、眞面目な頭をして、街を歩いてゐる、ピエールに非常によく似た男を見た。その老人は、馬車の窓から出して自分等を凝視めてゐる、顏に氣が附いたので鄭重にピエールの肱に觸り、馬車の方を指しながら、彼に何か言つた。直ぐには老人の言つてゐることが、ピエールに分らなかつた、彼は、何か深い考に耽つてゐるらしかつた、と、最初の印象を信じて急いで馬車の方へ近寄つて來た。が、十歩ばかり進むと彼は何か憶ひ出したことがあるやうに、ふと立停つた。

ナターシヤの顏が、馬車の窓から親しげに、揶揄ふやうに、晴々と覗き出てゐた。

『ピヨートル・キリーロヰツチ、こゝへゐらつしやいな！。貴下つてことが分つたのよ、ね、ほんとに不思議だわねえ！』ナターシヤは、ピエールへ手を差伸べながら叫んだ。『どうなすつたの？　何故貴下はそんな風をしてらつしやるの？』

ピエールは、ナターシヤの差伸べた手を取つた、そして、（やはり馬車が動いてゐたから）歩きながら辛つと、その手に接吻した。

『何事かあつたのですか、伯爵！』と、伯爵夫人は、驚いた、憐むやうな調子で、ピエールに尋いた。

『えゝ？　何故？　尋かないで下さい、』と、ピエールは言つて、ナターシヤを見上げた、彼は、ナターシヤの晴々した嫵しさうな眼の美しさに、（ナターシヤを見ないでも感じた）魅せられてゐた。

『どうしてゐらつしやるの、モスクワにお残りになるの？』

ピエールは黙つてゐた。

『モスクワに？』と、彼は尋ねるやうな語調で言つた。『えゝ、モスクワにゐます。左様なら。』

『あゝ、私、男だつたら貴下と一緒に、屹度残つてゐるのにねえ。あゝ、ほんとに立派なことですわ！』と、ナターシヤは言つた。『母上様、私を残らして下さいな。』

ピエールは、放心とナターシヤを見た、そして、何か言はうとした、が、伯爵夫人が彼を遮つた。

『戦争にお出なすつたんですつてねえ、人から聞きましたんですが、』

『えゝ、行つてゐました、』と、ピエールは答へた。『明日、また戦がありませう……』と、彼は言ひ始めてゐた、が、ナターシヤが口を挟んだ——

『でも、どうなすつたの、伯爵？　貴下はどうかしてらつしやるやうね……』

『私に尋かないで下さい、尋かないで下さい、自分で自分が分らないんです。明日……いゝえ！　左様なら、左様なら、』と、ピエールは言つた、『怖ろしい時ですなあ！』

彼は馬車を離れて、舗石道へ歩み去つた。

ナターシヤは、長い間、馬車の窓から覗いてゐた、そして、親切げな、が、稍揶揄ふやうな、愉快さうな笑顔をして、晴々とピエールを見てゐた。

十八

二日前の失踪の時から、ピエールは、死んだオシツプ・バズヂエフの空間で暮らしてゐた。どういふ譯でさうなつたかといふと、それは次のやうな次第であつたのだ。

モスクワに歸つて来て、伯爵ラストプチンに面會した翌朝、眼が覺めると、ピエールには、暫時の間は、何處に自分がゐるのか、皆が自分に何を要求したのか、少しも分らなかつた。ピエールは、自分を應接間で待つてゐる人々の名が取次がれる間に、伯爵夫人エレナ・ワシーリイエウナから手紙を持つて来てゐた佛蘭西人も待つてゐると言はれた時、彼がともすれば陷りやすい混亂と、絶望との感覺に、不意に襲はれた。彼は、もう萬事が結果を告げ、萬事が混亂し萬事が破壊されたことや、正不正の區別もないことや、自分の未來には何もないことや、自分の現狀から逃れる可能が無いことなどを俄かに感じた。不自然に微笑み、何か獨言を言ひながら、彼は全く絶望したといふやうな態度で、長椅子へ掛けたり、やがて立上つて、扉口に近寄り、隙間から應接間を覗いたり、手をふりながら後

へ戻り、書籍を取り上げたりした。給仕長は、再び入つて來て、伯爵夫人からの手紙を持つて來た佛蘭西人が、一分間でもいゝから是非彼に面會したいと言つてゐるといふことゝ、オシツプ・アレキセーキツチ・バズヂェフの未亡人から、未亡人が田舍へ行くのだから、書籍を預つてくれといふ使が來たといふことゝを、報せた。

『うん、宜し、今直ぐ、待つて……いや、いや、行つて、直ぐ行くと言つてくれ、』と、ピエールは給仕長に言つた。

が、給仕長が、部屋を出てしまふと、急ぐ、ピエールは、卓子の上にあつた帽子を手に取つて、書齋の後背の扉口から脫け出した。廊下には誰もゐなかつた。ピエールは長い廊下を通つて階段へ出た、そして、顏を顰めて、兩手で額を擦りながら、二階の降り口まで降りた。門番が表入口に立つてゐた。他の階段が、ピエールが降りて來た二階から、裏入口へ通じてゐた。ピエールは、その階段を降りて庭へ出た。誰も彼を見た者はなかつた。が、門から街へ出ると直ぐ、馬車の傍に立つてゐた馭者と屋敷番とが、彼を見て、彼の方を向いて、帽子を脫つた。その二人の眼が自分に注がれてゐるのだといふ感じがしたので、彼は、駝鳥が、人に見られないやうに、草叢の間に頭を隱くすのと同じやうに、頭を垂れ、步調を速めて、街を急いだ。

その朝、ピエールが爲なければならなかつた凡ての用向の中で、オシツプ・アレキセーキツチの書籍と書類とを整理するといふ仕事が、ピエールには、一ばん緊要なことだと思はれた。

彼は、最初に出會つた辻馬車を雇つて、バズヂェフ未亡人の家がある家長池まで乘せて行くやうに命じた。

ピエールはさま〴〵の方向から、モスクワを出て行かうとして遣つて來る馬車の列を斷へず見廻し、壞れさうな音を發て古い二輪馬車から辷り落ちないやうに、自分の大きな身體の平衡を取り、學校から逃げ出した子供が感ずるやうな愉快な感じを覺えながら馭者と話をしてゐた。

馭者は、この日、クレムリンで武器が渡され、翌日みんなは三丘門の向ふへ遣られて、そこで大きい戰がある筈なのだとピエールに話した。

家長池に達すると、ピエールは、長い間行かなかつたバズヂェフの家を探した。彼は小さい門へ近づいた。五年前オシツプ・アレキセーウキツチがトルジョクにゐる時分に見た顏の黃色い、無髯の老人ゲラシムが、ピエールの叩するのを聞いて、出て來た。

『お在宅かね？』と、ピエールは、尋いた。

『唯今のやうな時勢でございますから、ソフイヤ・ダニロヴナは、子供衆を連れて、トルジョク村へお出掛けになりましたです、閣下。』

『しかし、私は入るよ、書籍を整理したいんでから、』と、ピエールは言つた。

『え、、何卒、お入りなすつて下さいまし、亡なりました主人——天國に居られますやうに祈りますが——その弟マカアル・アレキセーキツチが居殘つておられます、ですが、貴下はあの方が病身なことは御存じでございませうねえ、』と、老僕は言つた。

マカアル・アレキセーキツチは、ピエールの知つてゐたところでは、オシツプ・アレキセーキツチの兄弟で、酒のために白痴になつた半狂人であつた。

『うん、うん、知つてゐるよ、さあ入らう、』と、ピエールは言つて家の中へ入つた。跣足に上靴を穿いた、鼻の赤い禿げた、背の高い老人が、寢衣を着て、玄關部屋に立つてゐたが、ピエールを見ると腹立しげに何か口の中で言つて、廊下の方へ歩んで行つた。

『あの方は、たいさう學者でしたが、今では、御覽の通り、あんなに弱くなられました、』と、ゲラシムが言つた。『書齋へお出でになりますか?(ピエールは點頭いた。)封をしたまゝになつております。貴下が書籍を取りにお遣しでしたらお渡し申せといふ、ソフイヤ・ダニロヴナの命令でございました。』

ピエールは、陰氣な書齋へ入つた、彼は恩人の生きてゐる頃は、そこへビク〳〵しながら入つたものであつた。今は、その部屋は、オシツプ・アレキセーキツチが死んで以來、塵埃で蔽はれ、誰も手を觸れぬので、前よりも一層陰氣であつた。

ゲラシムは、窓扉の一つを開けて、足を爪立てゝ出て行つた。ピエールは、書齋の中を歩き廻り、

寫本の入れてある本箱へ近づいて、嘗つては、組合の神聖な遺物であつた、最も重要なもの〻一つを手に取つた。これは組合のスコツトランドの確實な規約で、バズヂエフの說明や、註解が附いてゐた。ピエールは、塵埃だらけの机へ坐つて、前に寫本を置きそれを開けたり閉ぢたりしてゐた、が、とうとうそれを突き遣つて、机に肱を突き、頭を手で支へて、考想に沈んだ。

五六度、ゲラシムが、靜かに書齋を覗いた、すると、ピエールが、いつも同じ態度で坐つてゐるのを見た。二時間餘り經つた。ゲラシムは、ピエールが氣が附くやうに、思ひ切つて、入口で微かな音をさせた。ピエールにはそれが聞えなかつた。

『馭者を歸しても宜しうございませうか?』

『あ、宜いよ、』と、ピエールは、瞑想から覺めて、急いで起ち上りながら言つた。『おい、』と、彼は言つて、ゲラシムの上衣の釦を摑み、潤ふた、輝いてゐる、熱心な眼で、この老人を上から下まで見廻はした。『おい、明日、戰があるのをお前は知つてゐるか?……』

『さういふ噂でございますが……』と、ゲラシムは答へた。

『どうか、私が何者だか誰にも言つてくれるなよ。それから、私が賴むやうにしてくれ……』

『承知いたしました、』と、ゲラシムは言つた。『何か召し食りますか?』

『いや、他に欲しいものがあるんだ。農夫の着物と拳銃が要るんだ。』と、ピエールは言つて、急に眞

赤になつた。

『承知いたしました。』と、ゲラシムは一寸考へてから言つた。

その日終日、ピエールは、たゞ一人、恩人の書齋で過した。彼が、焦燥して部屋の隅から隅へと歩きながら、何か獨言を言つてゐるのが、ゲラシムに聞えた。ピエールは、その部屋に自分のために設けられた寢床の中で、夜を過した。

ゲラシムは、如何にもその生涯にさま〴〵の不思議なことを見て來た從僕らしく平氣で、ピエールがその家に住ふのを、承諾した、そして、彼は自分の仕へる人の出來たのを喜んでゐるやうであつた。彼は、その晩、何のために要るのかと訊きもせずに、ピエールのために、馭者の上衣と帽子とを持つて來た、そして、翌日は、ピエールが欲しいといふ拳銃を手に入れやうと約束した。マカアル・アレキセーキツチは、その晩上靴の音をさせながら二度扉口へ近づき、其處に立つたまゝ探るやうな眼付をして、ピエールを凝視めた。が、ピエールが、彼の方を振り向くと、恥しげな顏をし、怒つたやうな風をして、自分の寢衣を振り、急いで退いた。

ピエールは、ゲラシムが、彼のために調べた、念入りに燻した馭者の上衣を着て、スハアレフ塔で、拳銃を買はうと、ゲラシムと一緒に外へ出た。彼は、そこでラストフ家の人々に遭つたのだ。

十九

九月一日の晩、クツウゾフは、モスクワを通過して、リヤザン街道へ退却せよといふ命令を露軍の諸隊に與へた。

第一の諸軍隊は、その晩、徐々に、整然たる秩序を保つて、行進した。が、未明頃、退却してゐる諸軍隊は、ドロゴミロフスキイ橋に達すると、他の軍隊の集團が、自分等の前なる河向ふで、押し合つたり、橋を急いで渡つたりしてゐるのや、街や横町を塞いでゐたりするのやを見た。かと思ふと又、自分等の背後から押しかけて來るのもあつた。皆な橋の方へ、橋の上へ、淺瀨へ、船へと、一齊に突進した。クツウゾフ自身は、馭者に裏街を通つて、モスクワの向側へ出るやうに言ひ附けた。

九月二日の朝十時頃、ドロゴミロフスキイ郊外にゐるのは後衛の諸聯隊だけで、混雜は止んでしまつた。軍は、もうモスクワの外側にゐて、全く市から出てしまつた。

それと同時に、九月二日の朝十時に、ナポーレオンは、ボクロンナヤ丘で、佛軍の眞中に立つて、自分の前に横はつてゐる光景を眺めてゐた。八月二十六日から九月二日まで、卽ち、ボロデイノの戰から

らモスクワ入城に至るまでの、動揺した、記憶すべき一週間は、いつも人に意外を感ぜしめる、かの非常に麗かな秋日和であつた。かゝる天氣の時には、太陽は低い空にあるのに、春よりも温かに照らし、萬物が、清い、澄んだ空氣の中でキラ〳〵輝やいて、眼は眩しくなるが、香ばしい秋の空氣を吸ひ込むので、胸は緊張し、新鮮くなるのである、で、また夜も暖かで、その暗い、暖かな夜には、金色の星が、斷へず空から墜ちて、それを見てゐる人々を悦ばせ、或は恐怖せしめるのである。

九月二日の朝十時にはさう云ふ日和であつた。

朝の光は、仙鄕の美しさに充ちてゐた。ボクロンナヤ丘から見るとモスクワは、その川や、庭園や、寺院と共に、眼下に廣々と横はつてゐて、それ自らの生命に生きてゐるやうに見え、その幾つかの圓頂閣は、日光を受けて、星のやうに慄えてゐるやうに思はれた。

見馴れない建築の並んでゐる珍らしい市の異樣な姿を見ると、ナポーレオンは、人間が、自分の知らない、變つた生活の外貌を見る時に感ずる、幾らか嫉しい不安な好奇心を感じた。その市が、力强い生活をしてゐることは明かであつた。生きたものと、死んだものとは、遠方から見ても、必らず識別し得べき、名狀し難い一種の表徴があるものだが、ナポーレオンは、さういふ表徴によつて、ボクロンナヤ丘から、その市に於ける生命の脈搏を知り、その美しい、大きな生物と呼吸とでも云ふやうなものを感じ得たのであつた。

凡ゆるロシア人は、モスクワを見ると、それを母親のやうに感ずる、母の市としての意義を知らずに、モスクワを凝視する凡ゆる外國人でさへこの市の女性的性質を感知せざるを得ない。ナポーレオンも、それを感じたのである。

『Cette ville asiatique aux innombrables églises, Moscou la Sainte. La voilà enfin, cette fameuse ville! Il était temps. (無數の寺院のある、このアジアの都、聖なるモスクワ。とう〳〵此處に、この名高い都がある！ もうその時であつたのだ。)と、ナポーレオンは言つて、馬から降り、自分の前へ、モスクワの地圖を擴げさせて、通譯官のルロルム・デイドキイルを呼びに遣つた。

『"Une ville occupée par l'ennemi ressemble à une fille qui a perdu son honneur," (敵に占領された都は、操を破られた處女と同じだ』と、ナポーレオンは思つた。(これは、彼が、スモオレンスクで、ツウチコフに言つた話であつた)で、彼は、斯う云ふ見地から、始めて眼の前に横はつた東洋の美人を見た。彼は、隨分長い間胸中にあつた、そして、どうしても叶へられまいと思つてゐた願望が、達せられたのを不思議に感じた。晴々しい朝の光を浴びながら彼は市を眺めたり、地圖を眺めたりして、その細かな點に眼を留め、それを確實に占有するといふことが、彼を動搖させ、畏怖させた。

『が、どうして、からならずに居られやうか？』と、彼は思つた。『こゝにこの都がある、俺の脚下

に横はつて、自分の運命を持つてゐる。アレキサンドルは、今何處にゐるか、何を彼は考へてゐるか？　不思議な、美しい、壯大な市だ！　そして、不思議にして壯大な刹那だ！　俺は、どういふ風に彼等に見えるだらうか？』と、彼は、自分の軍隊のことを思つた。『こゝに、この市がある——信じなかつたあゝいふ奴等に對する褒美なんだ、』（と彼は彼の幕僚と、隊伍を整へつゝ近づいて來る軍隊とを見廻しながら思つた。）

『俺の一言、俺の腕一振りで、露帝の古い都は、無くなつてしまつたのだ。Mais ma clémence est toujours prompte à descendre sur les vaincus.（しかし、俺の慈悲は、いつでも直ぐ敗北者に示される。）俺は、豪俠で、眞に偉大でなくちやならん——が、いや、俺は、まだ眞實に、モスクワにゐるのではない、（といふ考が、不意に彼を襲つた。）だが、市は俺の脚下に横はつてゐる、その黄金の圓頂屋と十字架は、太陽の光に輝やき慄えてゐる。けれども、俺は、この市を怒してやらう。野蠻と壓制の古い紀念物の上に、俺は、公平と慈悲の大なる辭を銘してやらう……アレキサンドルは、それを何よりも苦く感ずるだらう、俺は、彼を知つてゐる。（ナポーレオンは、これまで起つた事の重な意義は、彼とアレキサンドルとの間の個人的爭闘にあるのだと思つてゐたのだ）クレムリンの高所から——うん、あれがクレムリンだ、うん——俺は、彼等に公平の法律を與へやう。俺は、文明の眞意義を彼等に敎へてやらう、俺は、貴族共の子孫が、彼等の征服者の名を、愛を以て理解することが出來るや

うにしてやる。俺は、市の代表者に、俺が、戰爭を望まなかつたこと、そして、今も望んでゐないこと、それから彼等の宮中に於ける虚僞に充ちた政署に對してのみ戰つたことを告げてやらう、俺がアレキサンドルを愛し、尊敬してゐることや、モスクワに於て、俺の人民にとつて恥しくない平和の條件を受け納れることを告げやう、俺は戰爭の幸運に乘じて、彼等の名譽ある皇帝に侮辱を與へたくはないのだ。『貴族たちよ、』と、俺は彼等に言つてやらう、『予は、戰爭を望んではゐない、予は予の全臣民の平和と幸福を望むのだ、』殊に、彼等の面前では、氣が引き立つに違ひない、俺は、いつものやうに、瞭然と、莊重に、彼等に言はう、だが、俺は、眞個にモスクワにゐるのだらうか！　確かに、さうだ、あすこに市がある！』

『Qu'on m'amène les boyards（貴族たちを連れて來て呉れ、）』と、彼は、その隨員に言つた。

華々しい隨員を連れた一人の將官が、直ぐに貴族を連れて來るために、駈けて去つた。

二時間經つた。ナポーレオンは、朝食をして、またボクロンナヤ丘の上に立つて、市の代表者を待つてゐた。貴族に對する彼の演說が、今はもう彼の想像の中で、判然と形造られてゐた。その演說が威嚴と偉大とに充ちてゐることはナポーレオンにも分つてゐた。

ナポーレオンは、彼がモスクワで行はうと思つてゐた、寛容な行爲のことを考へて夢中になつてゐた。彼は、想像の中で、もう『réunion dans le palais des Cyrrs（露帝の宮殿に於ける會合日、）』——ロ

シアの大官等が、フランス皇帝の大官等と會合する日——の日取を定めてゐた。彼は、心の中で、民心を收攬することの出來るやうな知事を任命してゐた。彼は、モスクワには、宗教上の團體が澤山あるといふことを聞いてゐたので、さふいふ團體に彼の恩惠を着せてやらうと、心の中で定めてゐた。彼はアフリカで、兜襄附外套を着て、回數寺院の中で座らなければならなかつたやうに、モスクワでは、露帝のやうに、慈悲深くなければならぬと思つた。で、凡てのフランス人と同じ樣に、親愛なる(ma chre)、優しい(ma tendère,)、哀れな母(ma pauvre mère,)などいふ辭なくしては、どんな情緒をも想像し得ないナポレーオンは、さういふ慈善團體の家に、『TABLISSEMENT DÉDIÉ A MA CHÈRE』(吾が愛する母に獻げられたる館)とかたゞ單に『MAISON DE MA MÈRE』(吾が母の家)とかいふ字を大きく記させて、ロシア人の心を動かさうと、お終ひに定めこんだのであつた。『だが、俺は、眞實にモスクワにゐるのだらうか?確かに、さうだ、あすこにその市が橫はつてゐる、だが、市の代表者は、何故こんな遲いんだらう?』と、彼は思つた。

そのうちに、皇帝の隨員の後方にゐる將官や元帥などが、低聲で心配さうに何事かを相談しだした。代表者を連れて來るために遣られた副官達は、モスクワは空虛で、住民は、既に市を去つてしまつたといふ報知を持つて、歸つて來た。相談をしてゐる連中の顏は、青くなつて狼狽しだした。彼等が不安の念を抱いたのは、モスクワが住民に見棄てられた(それは重大な事件のやうに思はれたが)爲ではなかつた。彼等は、何うして皇帝にその事實を知らせやうかと心配したのであつた。彼等は、陛下を、フランス人の所謂『嘲笑すべき』恐ろしい位地に置かずに、彼がこんなに長い間貴族たちを待ちぼけしてゐたことや、モスクワには、醉拂つた暴民のほか誰もゐないといふことを、何うして彼に知らせやうかと心配したのであつた。或る者は、後はどうならうとも、兎に角、何等かの代表者を集めねばなるまいと主張した、が、他の者はこの意見に反對して、皇帝には、前以て氣を附けて、巧みに驚かぬやうに準備をさせておいて、それから、事實を話すことにしなければならぬと說いた。

『Il faudra le lui dire tout de méme, (どうしても、吾々は、陛下に申上げなければなるまいよ、)』と、隨員達が言つた……『Mais, messieurs (だが、諸君……)』

皇帝が、豪俠たらんとする計畫を考へながら、地圖の前を根氣よく往つたり來たりして、誇りかな、嬉しさうな微笑を湛へ、時々小手を翳して、モスクワに通ずる道路を眺めてゐたので、その事態は、尙一層面倒であつた。

『Mais c'est impossible ! (だが、不可能だ!)』と、職員たちは、肩を搾め、『Le ridicule (嘲笑すべきこと……)』といふ怖ろしい辭を、言ひ出し得ないで、言つた。

その間に、皇帝は、待ちぼけに疲れ、俳優のやうな本能で、大切な刹那が、餘り長く延ばされると、その壯大を失ふことを感じて、手で合圖をした。一發の砲聲が信號を與へた、するとモスクワを取り

圍んでゐた軍は、モスクワへ——ツヴェルスカヤ、カルヅスカヤ、ドロゴミロフスキイ等の諸門に向つて——進撃した。軍隊は、だん〳〵速く、互に競ひ合つて、駈足や速足で市内に進入し、自分等が揚げた塵埃の雲で隠され、耳を聾する喊聲で、空氣を鳴り響かした。

ナポーレオンも、軍の前進に誘はれて、ドロゴミロフスキイ門まで馬を進めた、が、彼はまた、そこで停まつて、馬を降り、カメル・コルレジスキイ城壁の邊りを歩きながら、市の代表者を待つてゐた。

二十

けれども、モスクワは空虚であつた。市にはまだ人民がゐた、前の住民の五十分の一がまだそこに殘つてゐた、が、市は空虚であつた。それは、女王に見棄てられた蜂巣のやうに空虚であつた。女王のゐない蜂巣には、生命がないが、外面から一寸見たのでは、他の蜂巣と同じやうに、生きてゐるやうに見える。

眞晝の熱い日光の中で、女王のゐない蜂巣の周圍にも、他の生きてゐる蜂巣の周圍と同じやうに、蜜蜂が快活に飛んでゐる、少し離れた所からは、女王のゐない蜂巣でも、蜜の香がし、蜜蜂がその中

から飛び出て來る。しかし、一寸氣を附けて見れば、その蜂巣には、生命が無いことが分る、蜜蜂の飛び方が生きてゐる蜂巣の時とは違つてゐるし、又其の香や、羽音なども養蜂家から見れば異つてゐる。養蜂家が勢の衰へた巣箱の壁を叩くと、直ぐにする一齊の應答——嚇すやうに背を圓くしたり、その羽翼を振はして、ヒユウ〳〵いふ生きた音をさせたりする、幾萬といふ蜜蜂の唸聲の代りに、空虚の巣の四方にブン〳〵と斷滅するやうな唸聲が起るだけである。出入り口からは、もう以前のやうに、むせるやうな、香ばしい蜜の香氣は漂つて來ないし、中にゐる群から來るムツとする熱も、來ない。そして空虚と腐敗の香が、蜜の香と交り合つてゐる。出入口には、背を持上げ、威嚇的に唸聲を揚げて死を以て巣を守らうとする番蜂の群は、もう一つもゐない。又低い、調子の整つた羽音も、沸騰する音のやうなあの勞作の唸聲も、もう聞えない、が、混亂した斷滅的な破調が聞えるばかりである。黒い、形の長い、蜜に塗びれた勞働蜂が、臆病さうに、こそ〳〵と、巣から飛び出たり入つたりしてゐる、彼等は、危險があると見ても螫さないで、逃げて行く、以前には、彼等は、たゞ荷物を持つて飛び込み、身輕になつて飛び出るだけであつたが、今では、重荷をもつて、飛び出て來る。

養蜂家は、下の隔板を開けて、巣箱の下半分を覗いて見る。互に脚で繋がり合ひ、下房の底まで房のやうに垂れ下つて、不斷に呟きながら、蠟を積上げてゐる、黒い、勞働に熱中した水々しい、蜜蜂の代りに、眠むさうな、凋びた蜜蜂が、巣箱の屋根や壁をぼんやりして彼方此方へ逍つてゐる。蜜蜂の羽

翼で掃かれた、清潔に膠附けになつた床の代りに、今では、その床に蠟の片や、糞や、弱さうに脚を蹴つてゐる、死にかゝつた蜜蜂や、掃き去られずにゐる死んだ蜂が横はつてゐるのだ。

養蜂家は、上の戸を開けて、巣箱の上層を調べて見る。すると凡ゆる隙間を塞いでゐる蠟や、子を育てゝゐる蜜蜂の密接いた列などの代りに、養蜂家はたゞ蜂巣の巧妙な複雑つた建物を見るが、それはもう以前の處女のやうな姿をしてゐない。凡てが古びて、汚れてゐる、黒い労働蜂が、コソ〳〵と急いで、獲物を探してゐる、が、今迄その巣箱にゐた、凋びた小さい懶氣な、年寄つたやうな蜜蜂は、防ぎもしなければ慾望も持たず、生の意識を失つてしまつて、たゞのろ〳〵と徘徊き廻つてゐる、蚯蚓や、熊蜂や、蝶が、何の目的もなく飛んで來て、巣箱の壁に衝突つてゐる。彼方此方の死んだ蜂の子や、蜜などで一ぱいになつてゐる巣窩の間から時々怒つた唸聲が聞える、何處かで、二匹の蜜蜂が、何故するのか自分たちには分ならいが、たゞ以前からの習慣と記念とで、蜜蜂や熊蜂の死骸を、如何にも苦痛さうに、引き摺つて、巣箱の掃除をしてゐるが、それは彼等の力以上の仕事である。

他の隅では、二匹の他の年老つた蜜蜂が、懶氣に喧嘩をしたり、身體を潔めたり、互に物を食はせ合つたりしてゐるが、それが、親みをもつてしてゐるのか、敵意を以てしゐるのか、彼等自身にも分らないのである。また、他の所では、一群の蜜蜂が、互に推し合ひながら、ある犠牲に飛びかゝつたり、それを撃つたり、推潰したりしてゐる、で、殺されたか、弱つたかした蜜蜂は、死骸の堆積の

上へ、羽毛のやうに輕く、靜かに落ちかゝる。養蜂家は、中央の二つの隔障を開けて、子を養つてゐる場所を見る、背中合せになつて、生殖の高尚な神秘を行ないながら黒い輪のやうに密集してゐる幾千かの蜜蜂の代りに、たゞ勢の無い生命の無い、眠つてゐる、幾百かの蜂の廢者を見るのである。彼等は殆んど全部自分達が守つてゐたが、今では最う失なつた聖所に座つたまゝ死んでゐる。が、その ことを彼等は知らなかつたのだ。彼等からは、死と腐敗との臭氣がする。が、彼等のうちの數匹は、それでもまだ動いて、翔ち上り、懶氣に飛んで、敵の手に棲まるのだが、その敵を螫し殺す元氣は無い、その他のものは、みんな死んでしまつて、魚の鱗のやうに、輕く下に落ちるのだ。養蜂家は、隔障を閉め、巣箱の上へ白墨で印を附け、都合の好い時を見て、それを壊して、焼いてしまふのだ。

これと同じやうに、ナポーレオンが、退屈して、不安さうに、顔を顰めて、カメル・コレジスキイ城壁の邊をぶら〳〵歩きながら、單に外形的なことだが、それでも彼の心には大切なものだと思はれてゐた儀式を守ることを——即ち、代表者を待つてゐた時、モスクワは空虚であつた。

僅かの、幾人かの人々が、自分等の爲てゐることも知らず、その昔から習慣に從つて、何の目的も無く、モスクワの彼方此方で動いてゐるだけであつた。

具合よく用心して、ナポーレオンに、モスクワが棄てられてゐることを告げると、彼は憤然として、その報告者を見、その男に背を向けて、默つて、彼方此方と歩き續けた。

『馬車を持つて來い』と彼は言つた。

彼は、當番副官と一緒に馬車に乘つて、郊外へ行つた。『Moscou déserte ! Quel événement invraisemblable ! (モスクワが空虚になつた！　何といふ信じ難いことであらう！)』と、彼は、獨言(ひとりごと)を言つた。

彼は、直ぐ町へは行かずにドロゴミロフスキイ郊外の旅舍で、一夜を過した。

彼の演劇的な大團圓は、とう〳〵起らなかつた。

二十一

軍隊は、夜の二時から、晝の二時までの間に、モスクワを通過し、最後に退去する住民等や、負傷兵等を一緒に連れて行つた。

軍隊が移動する時、一ばん激しい混雜が、カメンニイ橋と、モスクヴオリエツキイ橋と、ヤウズスキイ橋とで、起つた。

クレムリンの邊りで、二手に分れた軍隊が、モスクヴオリエツキイ橋と、カメンニイ橋とへ群り進んでゐる時に、非常に多數の兵卒が、隊が停止(とま)つて、行手が塞つてゐるのに乘じて、後へ戻り、ワシ

リイ・ブラゼンニイ寺の側を、密かに通りボロヴーツキイ門をそつと拔けて、クラスナ・ヤプロシチヤアドに向つて、坂道を上つて行つた、彼等は、そこへ行けば、容易(たや)すく他人の財產を掠奪することが出來るやうに、何かの本能で思つたのだ。ゴスチンヌイ市場の、凡ゆる通り、凡ゆる橫町が、いつも安價物を賣つてゐる時のやうに、群集で充ちてゐた。だが、もう、そこには、店番の愛嬌のある、客を引寄せる作り聲も、呼賣人も、買手の女の班らな群集もゐなかつた。そしてたゞ、無言で掠奪物を車に載せて持ち去つたり、空手で市場に入つて來たりする、銃を持つてゐない兵卒の制服や外套ばかりであつた。店商(みせあきんど)人や、店番（それも僅少であつた）は、氣の狂(ふ)れた人のやうに、兵卒たちの間を步き廻つた、自分の店を開けたてしたり、若者に手傳はせて、自分等の商品を運び去つたりしてゐた。市場の傍にある廣辻では、皷手が人員點呼の號音を鳴らしてゐたが、太皷の音は、掠奪してゐる兵卒等を、以前のやうに召集された方へ駈け附けさせずに、却つて太皷と反對の方に走らした。店や通りにゐる兵卒等の間に、鼠色の外套を着た、坊主頭の者どもが見えた。二人の將校、その一人は襟卷の附いた制服を着け、痩せた濃鼠色の馬に乘つたのと、今一人は外套を着て步いてゐるのとが、イリインカの角に立つて、何事か話をしてゐた。また一人の將校が、彼等二人の傍へ、馬で駈け附けた。

『何んなことがあつても、皆なを直ぐ追拂へといふ將軍の命令ですが、いや、實に亂暴だ。兵卒は半

數逃げてしまつたのです。』

『こら、貴様は何處へ行くのだ?……』と、その將校は、彼の傍を、銃を持たずに、外套の裾をからげて、市場へ駈けて行く三人の歩兵に向つて叫んだ。『止まれ、惡黨奴!』

『でも、奴等を止められるものか?』と、もう一人の將校が答へた。『奴等を集めることは出來ないよ、吾々は、殘つてゐる奴等が逃げないやうに急いで行くより他に道はないよ、』

『どうして行けるものか? 橋が塞つてゐて、みんな立つてゐるんだ、動いちやゐないんだよ。だから他の奴等が逃げないやうに非常線を張つてはどうだね?』

『いや、彼方へ行つてくれ! 奴等を追つ拂つて呉れ!』と、故參將校が呶鳴つた。

襟卷を着けてゐる將校は、馬を下り、鼓手を呼んで、それと一緒に仲店道へ入つた。一團になつてゐた數名の兵卒が、飛んで逃げた。冷淡にどこまでも利を追ふといふやうな表情を如才の無ささうな顏に湛へた、頰の上の鼻の邊りに赤い痣のある店商人が、手眞似をしながら、その將校の傍へ、急いで活潑と遣つて來た。

『旦那、』と、彼は言つた、『お仁慈で御保護をお願ひ申します、些細な物なら私どもは吝みは致しません。宜しうございます、何卒旦那お入り下さい、直ぐ反物を持つて參ります——お一人に、二反でも

喜んで差上げます! 今の狀態は、分つておりますから、ですが、これでは全く强奪といふものです! 何卒、旦那! 番兵か何かお置き下さいまして、せめて、私どもが、店を閉められるやうにして下さいまし……』

數人の店商人が、將校の周圍に集まつて來た。

『えゝ、吠へたつて、何の役にも立たんぞ。』と、その一人の、痩せた男が險惡しい顏をして言つた。『首が飛ぶ時に、頭髮のために泣く奴はないさ、誰でも、欲しいだけ持つて行け!』で、腕を力强く振つて、その男は、將校に脇を向けた。

『口でなら、何とでも言へるよ、イワン・シドリッチ、』と、最初の店商人が腹立たしく言ひ始めた。『何卒、旦那。』

『そんなことを言つたつて、何の役に立つものか。』と、痩せた男が、呶鳴つた、『こゝの俺の三軒の店には、十萬の商品があるんだ。軍隊が去つてしまやあ、どうしてその商品の番が出來るものか、あゝ、仲間、神樣の御意は、人間の手の中には無いんだぜ!』

『何卒、旦那、』と、最初の店商人が、お辭儀をしながら言つた。

將校は、何とも決せずに立つてゐた、彼の顏は不決定を表はしてゐた。

『いや、そんな事は、俺の關係することぢやない、』と、彼は不意に叫んで、仲店通を脚早やに進んで

行つた。

或る開いた店の中で、彼は、毆ぐる音と、罵り聲とを聞いたので、中へ入つて行からとすると、その途端に、鼠色の外套を着た、頭を剃つた男が、戸外へ激しく突き出された。

その男は身體を折曲げて、商人等や將校の傍をかすめて跳んで行つてしまつた。將校は、店の中にゐる兵卒等へ跳び掛つた。が、その時、大群集の恐ろしい叫聲が、モスクヴオリエツキイ橋から聞えた、で、將校は廣辻へ駈け出た。

『何だ？　何だ？』と、彼は尋いた、が、彼の同僚は、もうその呼聲のする方へワシリイ・ブラゼンスキイ寺の傍を駈けてゐた。

將校は、馬に乘つて、その後を追つた。橋の近くになると、彼は、砲車から下ろされた二門の砲と、橋を渡つてゐる歩兵と、數臺の壞れた荷馬車と、屹驚した顏や笑つた顏の兵卒どもを見た。砲に近く、二頭の馬を附けた一臺の荷馬車があつた。車輪の後には、頸輪をはめた四匹の獵犬が、蹲まつてゐた。荷馬車には荷物が山のやうに積まれてゐて、その一ばん頂上に脚を上向けて置いてある小兒椅子の傍に、一人の老婆が坐つてゐて、絶望的な金切聲で、叫んでゐた。その將校が、その仲間から聞いたところによると、群集の叫聲や、老婆の金切聲は、將官イエルモロフが、群集の中へ馬を進めて來て、兵卒等が商店へ遁ひ行き市民の群集が橋を塞いでゐるといふことを知つて、砲車から砲を下ろして、

橋にゐる人々を砲撃するやうな態をせよ、と命令したからであつたのだ。群集は、大混亂をなし、荷馬車を顚倒へし、互に踏み合つて、聲を限りに叫んだ、そして、橋の上は空いて、軍隊が行進を始めた。

二十二

その間に、市そのものも、空いてしまつた。街々には、殆んど一人も人がゐなかつた。門も、店も、みんな閉まつてゐた、彼方此方の居酒屋の附近で、同じやうな叫聲や、醉漢の唄などが聞えるばかりであつた。街を馬車で行くものは誰も無く、足音もほんの稀に聞える位ゐであつた。ポワルスキイ街は、全く靜かで、空虚んとしてゐた。ラストフ家の大きい庭には、枯草の喰ひ殘しや、荷馬車が殘して去つた屑が散らかつてゐるばかりで、人は一人も見えなかつた。種々な財寶の入つてゐるまゝで棄てられたラストフ家の大客間に人が二人ゐた。それは、門番のイグナトと小さい給仕のミシカであつた、ミシカはワシリイツチの孫で、祖父と一緒に、モスクワに殘つてゐるのであつた。ミシカは、さうな微笑を浮べて、大きい鏡の前に立つてゐた。翼琴を開けて、一本の指でそれをポツン〳〵鳴らしてゐた。門番は、兩手を腰に當て、顏には嬉し

『好いねえ、イグナト伯父さん?』と、少年は一度に両手で、鍵をトン〳〵敲き始めながら言つた。

『うん、うん!』と、イグナトは答へて、鏡に映る自分の顔に廣がつて行く微笑に見惚れてゐた。

『呆れ返つた人たちだねえ! 呆れ返るよ、眞當に!』と、二人の背後から密と入つて來たマヴラ・クジミニーチナが言つた。『そんな平べつたい顔をしてゐるのに! ああ、彼方はまだ全然片附いてゐないんだよ、ワシリイツチは、もう疲れてしまつてるんだよ。一寸お待ち!』

イグナトは、帶を直し、微笑を收めて、溫順しく伏目になつて、部屋を歩み出た。

『伯母さん、私、たゞ一寸觸つてゐただけなんだよ……』と、少年に言つた。

『一寸でも觸つて御覽、嚴酷いからこの惡戲子奴!』と、マヴラ・クジミニーチナは、彼に向つて手を振りながら、叫んだ。『行つて、祖父さんの沸茶器の用意をおし!』

クジミニーチナは、塵埃を拂ひ落し、翼琴を閉めて、深い溜息をしながら、客間を出て、入口の戸を閉めた。

庭へ出ると、マヴラ・クジミニーチナは、何處へ行かうか、翼屋でワシリイツチと茶を飮まうか、それともまだ片附け切らなかつた物を、片附けに物置部屋に行かうかと考へ込んだ。

靜かな街に、速い足音がした。足音は小門で停まつた、誰か開けやうとする鍬の音が鳴つた。

マヴラ・クジミニーチナは、小門へ行つた。

『誰に御用ですか?』

『伯爵、伯爵イリヤ・アンドレーキツチ・ラストフに、』

『でも、貴下は何誰樣ですな?』

『私は將校だよ、伯爵にお目にかゝりたいんだがねえ、』と、物柔かな聲、ロシア紳士の聲が聞えた。

マヴラ・クジミニーチナは、門を開けた。と、庭へ、十八才位ゐな青年で、その顏の型がラストフ家のものによく似てゐる、圓顏の將校が入つて來た。

『みな樣は、お出發ちになつてしまつたんです、貴下。昨日、晩方お發ちでございました、』と、マヴラ・クジミニーチナは、親しげに言つた。

入らうか、入るまいかと躊躇してゐるやうに、若い將校は、小門の傍に立つてゐたが、やがて舌打をした。

『あゝ、困つたなア!』と、彼は言つた。『昨日來れば……あゝ、殘念なことをした……』

その間、マヴラ・クジミニーチナは、この青年の顏に表はれたラストフ家の見馴れた目鼻立ちや、樞樓の外套や、摩耗つた靴を、瞳を凝らして、同情的に見てゐた。

『伯爵にお會ひになるのは、どういふ用向でございますか?』クジミニーチナは尋いた。

『いや……もうどう仕様もない！』と、將校は、悲しさうに言つて、行かうとするやうに、門を捉へた。

彼は、また決まらぬやうな様子で、立ち止まつた。

『ねえ、』と、彼は唐突に言つた。『私は、伯爵の親族なんだ、伯爵は、いつも私に非常に親しくして下すつたんだよ、それで、ねえ、（彼は娟しさうな、上機嫌の微笑を浮べて、自分の外套や靴を見た。）私は襤褸を着てゐるんだ、そして一文無しなんだ、だから、伯爵に御願しやうと思つて……』

マヴラ・クジミニーチナは、青年に皆まで言はせなかつた。

『一寸お待ち下さいませ、貴下。ほんの一寸の間、』と、彼女は言つた。

で、將校が門を放すや否や、マヴラ・クジミニーチナは向を換へ、老人の歩調で足早やに、裏庭の自分の翼屋へ行つた。

クジミニーチナが、自分の部屋へ走つて行つた間に、將校は頭を垂れ、微かな笑みを浮べ、自分のボロ〳〵の長靴を凝視めながら、庭を彼方此方歩いてゐた。『伯父様に會へなかつたのは、實に殘念だ！だが、何といふ善い婆さんだらう！　何處へ駈けて行つたんだらう？　聯隊は、もう今頃はロゴズスカヤへ近づいてるに違ひないが、聯隊に追ひ着く一ばん近い路が見附かるだらうか？』と、若い將校は、その間、考へてゐた。マヴラ・クジミニーチナは、吃驚したやうな、同時に斷乎たる顏容で、手に市松

模様の手巾の包を持つて、角を廻つて來た。そして將校から二三歩のところで、手巾を開け、その中から白い二十五留紙幣を出して、それを急いで將校に渡した。

『閣下がお宅でしたら、屹度お親族だけのことはなさいましたでせうが、かういふ始末ですから……ねえ、どうか……』

マヴラ・クジミニーチナは、きまりの惡るさうに狼狽しながら言つた。が、將校は少しも急がず、遠慮もせずに、紙幣を受けて、マヴラ・クジミニーチナに禮を言つた。『伯爵さへお在宅でしたら、』と、マヴラ・クジミニーチナは、辨疎でもするやうに、囁やいた。『御機嫌よう。どうぞお大切に、』と、云つて、お辭儀をして、彼を送り出した。

將校は、自分を笑つてでもゐるやうに頭を搖つて、ヤウズスキイ橋にゐる、自分の聯隊に追ひ着かうとして、人のゐない街を殆んど飛ぶやうに駈けて行つた。

が、マヴラ、クジミニーチナは、物思はしさうに頭を搖り、誰か知らない若い將校に對する母のやうな愛しさと、憫みとが急に込みあげて來るのを感じながら、閉された小門の前に眼を潤ませて長い間立つてゐた。

二十三

下層が居酒屋になつてゐるヴルヴルカの建てかけの家では、醉漢の呶鳴り聲や、唄聲が聞えてゐた。

十人ばかりの職工が、小さな穢い部屋で、卓子に向つて、腰掛に掛けてゐた。彼等は、醉拂つて、汗をかき、とろんこの眼で、口を廣く開けたり、頰を脹らしたりして、何か唄を謠つてゐた。彼等は、調子外づれの聲で、無理に骨を折つて謠つてゐた、それは謠ひたかつたからではなくて、たゞ自分等が醉つて愉快であることを見せたいのであつた。そのうちの一人の丈の高い、亞麻色の頭をした、清潔な、淺黄の長外套を着た若者が、他の者より一段高い處に立つてゐた。細そりして、鼻筋の通つた彼の顏は、薄つ偏な堅く閉ぢた、斷へず痙攣つてゐる唇と、光澤の無い、凝つと一處を視詰める皺の寄つた眼さへなかつたら、美しかつたらう。彼は、謠つてゐる奴等より一段高く立つてゐた、そして、明かに頭の中に何か思ふ所あるらしく、謠つてゐる奴等の頭の上で肘から先を露した白い腕を物々しく、角度を描いて振り廻はし、そして、汚れた指の間を不自然く擴げやうとしてゐた。彼の外套の袖は、斷へず滑り落ちてゐた、で、若者は、その白い、筋張つて振つてゐる腕を、裸にするのは、何か特別の意味があるとでもいふやうに、左の手で袖を再た鄭寧に捲くり上げた。唄の最中に、叫喚と、毆ぐる音が玄關の間から聞えた。丈の高い若者は、その片腕を振つた。

『止めろ！』と、彼は横柄に、呶鳴つた。『喧嘩だ、青年等！』と、云つて、やはり袖を捲り上げながら、入口へ出て行つた。

職工等も、彼の後を追つた。彼等は、その朝、工場から丈の高い若者の指圖で幾枚かの皮を持つて來て、居酒屋の亭主に與へて、それで酒を飲んでゐたのであつた。直ぐ傍の鍛冶屋で仕事をしてゐた鍛冶等が、居酒屋の飲み騷ぎを聞きつけ、その家に誰かゞ闖入したものと思つて自分たちも暴れ込まうとしたのであつた。爭鬪は、入口で行はれてゐた。

居酒屋の亭主は、戸口で、一人の鍛冶屋と喧嘩をしてゐた。そして、職工等が出て來た途端に、その鍛冶は亭主から突き飛ばされて、鋪石の上へ俯向に倒れた。

もう一人の鍛冶が、亭主に胸を衝突けながら、戸口へ飛び込んで來た。

袖を捲り上げてゐた若者は、出て行きざまに、戸口へ飛び込んで來た鍛冶の顏を一つ毆つて、暴々しく叫んだ——

『青年等、奴等は、俺たちの仲間を毆つてるぞ！』

その間に、最初の鍛冶は、地面から起き上り、傷ついた顏の血を拭ひながら、泣聲で叫んだ——

『助けてくれ！　奴等は俺を殺した……奴等は人を殺したんだぞ！　仲間たち！……』

『あら、大變だ、全然殺されちやつた、人が殺された！』と、隣の門から出て來た老婆が、金切聲を出した。

人々が、血塗れの鍛冶の周圍に群がつた。

『貴様は、もう幾人も人を裸にして、襯衣まで剝いだのだ。』と、或る聲が、居酒屋の亭主を呼び掛けて、言つた。『それに、今度は又、貴様は、人を殺したんだな？　盜賊奴！』

丈の高い、若者は、踏段の上に立つて、何奴と喧嘩しやうかと考へてゐるとでもいふやうに、その、とろんこ眼で、居酒屋の亭主と鍛冶たちとを見比べてゐた。

『兇殺者奴！』と、彼は、不意に居酒屋の亭主に向つて叫んだ。『青年等、此奴を縛り上げろ！』

『なにい、俺ほどの者を、縛れるなら、縛つて見ろ！』と、居酒屋の亭主は呶鳴つて、彼に飛び掛つて來た者を、振りもぎつて、帽子を脫いで、それを地面へ叩き附けた。

その動作が、何か不思議な、威嚇の意味をもつてゐたかのやうに、亭主を圍繞んでゐた職工等は態度が決まらずに、凝つと立つてゐた。

『俺は、法律を知つてゐるんだ。俺は、警官のところへ行くぞ。貴様たちは、俺が行けねえと思ふのか？　强盜は、今日は、誰にだつて、禁ぜられてゐるんだ！』と、居酒屋の亭主は、呶鳴つて、帽子を拾ひ上げた。

『行くとも、さア！……行くとも……さア！』居酒屋の亭主と丈の高い若者とが、互に同じことを言つて、二人は一緒に街を歩いて行つた。

血塗れの鍛冶も、二人とも列んで歩いた。職工等や、その他の野次馬が、話したり叫んだりしながら、彼等に隨いて行つた。

マロセイカの角、窓扉の閉つた、靴師の看板のある大きな家の向側に、二十人ばかりの靴師の一團——だぶ〳〵した戸外上衣と破れた上衣を着た、痩せて、疲れ切つたやうに見える人々が立つてゐた。

『彼奴は、人に正當と拂ひをすべき筈ぢやないか！』と、髭の薄い、眉を顰めた、痩せた靴職人が言つた。『彼奴は、俺たちの生血を吸ひ取つときやがつて、それで俺たちに借りが無いと思つてやがるんだ。』彼奴は、この週ぢう、約束ばかししてやがつたんだぜ。で、今、最終點まで俺たちを押し込めておいて、逃げちまやがつたんだ。』

群集と、血塗れの鍛冶を見ると、饒舌つてゐた職人は語を止めた、そして、靴師等はみんな、物珍らしさ一ぱいで動き行く群集に加はつた。

『この連中は、何處へ行くんだ？』

『何處へ行くか分つてらあ、警官のところへよ。』

『我軍が、敗けたつて、眞實かい？』

『おい、とんだことを思つたもんだな、この連中の言つてることを聞け！』

さま〴〵の問や、答がよく聞えた。居酒屋の亭主は、賤民の數が增したのを利用して、野次馬の後から拔け出して、自分の店へ歸つて行つた。

丈の高い若者は、その敵なる居酒屋の亭主がゐなくなつたのに氣が附かずに、やはりその膚の露はな腕を振り廻はして、斷えず話しながら、みなの連中の注意を惹きつけてゐた。野次馬連は、主に彼の身體の周圍に押し寄せて、彼等みんなを惹き附けてゐた疑問の何かの解決が彼から得られるだらうと思つてゐた。

『秩序を見せろ、法律を見せろ、それが政府の役目なんだ、俺の言つてゐることは、眞當だらう、正教の信者たち?』と、丈の高い若者が、微かに微笑んで言つた。

『奴は、政府が無いと思つてやがるのかなあ? 政府が無くつて、どうして行けるものかい? 强奪くる奴が澤山ゐるじやあねえか?』

『下らないことを言つてるなあ?』と、群集の中で、誰かゞ呟やいた。『おい、こんな風にしてモスクワが打棄らかされるのだらうか! お前達は、散々戯弄はれたんだのに、それを眞實にしてるんだ。軍隊が充分にあるじやあねえか? だから奴を入らせたんだ! それが、政府の役目だ。おい、みんなが喋つてることを聽けよ!』と、群集は丈の高い男を指して言つた。

支那街の城壁の傍に、人々の他の一つの集團が、手に紙を持つてゐる、粗羅紗の上衣を着た男の周圍に集まつてゐた。

『布告だ。布告を讀んでゐるんだ。布告を讀んでゐるんだ。』と、いふ聲が、群集の中で聞えた。で、

野次馬連は、讀手の周圍に押し寄せた。

粗羅紗の上衣を着てゐる男は、三十一日のラストプチンの『揭示』を讀んでゐるのであつた。野次馬連が、周圍に寄り集ると彼は周章てたが、彼の傍まで割り込んで行つた丈の高い男の要求で、彼は、聲を微かに震はせて、布告をまた始めから讀み始めた。

『明日早朝、予が、公爵殿下の所へ行くのは、』と、彼は讀んだ。(『殿下』と丈の高い男は微笑を浮べ、眉を蹙めながら嚴そかに繰返へした)『殿下と合議をし、惡黨どもを絶滅しやうとする軍隊を援助するが爲である。吾々は彼等を絶滅し……』と、讀手に續けて、止めた。(『それ見ろ、』と、丈の高い男は、勝ち誇つたやうに呟鳴つた。)『あの人は、手前のために、災害をみんな無くしてくれるんだ……』)此の客人を惡魔の手に渡さなければ止まない、予は午餐に歸り、仕事に取り掛らう、吾々は其の思ふ所を爲し遂げ、惡漢どもを絶滅しなければならない。』

この最後の話は、靜肅の最中に讀手によつて發せられた。丈の高い若者は、消氣たやうに頸垂れた。誰もこの最後の語を理解しなかつたことは明らかであつた。殊に、『予は明日午餐には行かう、』と、云ふ一句は讀手と聽衆を悲しませたやうであつた。群集の理解力は、極度に緊張してゐた、それに、この布告は、あまりに平易で馬鹿々々しく簡單であつた。それは、群集の中の誰でもが、言へるやうなことであつた。であるから、高官が布告を發してまで、言はなければならないやうなことではなかつた。

群集はみな、銷沈り込んで、默つて、立てゐた。丈の高い若者は唇を動かして、踉跟いた。

『彼奴に尋いて見ろ！……あれが、あの人自身ぢやないか？……彼奴に尋いて見たらどうだ！さうで無くても、彼奴が說明してくれるよ……』と、いふ聲が不意に群集の後の方の列から聞えた、すると、全體の注意が二人の乘馬の龍騎兵に護衛されて廣小路へ乘り込んで來た警務長の二輪馬車へ移つた。

その朝、伯爵の命令で、河舟を燒くために、馬車で出掛けた警務長は、その任務に對する巨額の金を受け取り、その時その金を衣囊に入れてゐたが、自分の方へ押し寄せる群集を見ると、馭者に馬車を止めるやうに命じた。

『この群集は何だ？』と、彼は、幾つもの群に分れて、怖々と二輪馬車に近づいて來る群集に向つて、叫んだ。

『この群集は、何だ、おい？』と、警務長は答へを聞かなかつたので繰り返した。

『貴下樣、』と、粗羅紗の上衣を着てゐる男が言つた、『この者どもの願望は貴下樣、自分たちの身命を惜まずに、伯爵閣下の御布告に從ひ力を盡さうといふのでございます、決して全く騷動などを起さうと申すのではございません、閣下の仰せられまする通り……』

『伯爵は市を去られたのでは無い、此處にゐられるのだ、そしてお前たちに命令をお出しになるのだ、』と、警務長は言つた。『行け……』と、彼は、馭者に言つた。

群集は、警務長の言つたことを聞いた人々の周圍に押し寄せて來て立ち留り、去り行く二輪馬車を眺めた。

その時、警務長は、驚ろいて周圍を見廻はした、そして、馭者に何か言つた、馬は一層速く駈り出した。

『瞞まされたんだ、仲間たち！　俺たちを彼奴の所へ連れて行け！』と、丈の高い若者の聲が叫んだ。

『逃がすな、青年等！　答辯をさせろ！　彼奴を捉へろ！』と、幾つもの聲が咆哮つた、そして、群集は、全速力で二輪馬車の後を追つた。

群集は、ガヤ〳〵と話しながら、ルビヤンカの方へ、警務長の二輪馬車を追ひ掛けた。

『おい、身分のある奴や商人たちは、みんな去つてしまつて、俺たちばかり捨てとかれて死ぬんだ。俺たちは、犬なのかい、えゝ？』と、いふ聲が、群集の中で、だん〳〵聞え出した。

二十四

九月一日の夕方、クツウゾフと會見した後で、ラストプチン伯爵は、戰略會議に招かれなかつたこ

とや、クツウゾフが、市の防衛に加はらうと云ふ自分の申し出を少しも顧みなかつたことで、氣を腐らし、腹を立て、それから、陣營で自分に示された新らしい見解、卽ち、市の安寧とか、愛國的熱情などゝいふものを第二位の問題とするのみならず全然不必要な詰らぬ問題であると見做す見解で取扱はれてゐることに驚ろいて、凡てかういふことで、氣を腐らし、腹を立て、驚ろいて、ラストプチン伯爵はモスクワに歸つて來た。晩飯を濟ますと、彼は、着物を着換へないまゝで、長椅子の上に横はつた、そして、一時に、クツウゾフからの手紙を持つて來た使者に起された。その手紙には、軍隊は、モスクワ外のリヤザン街道へ退却してゐるから、軍隊が市を通過する爲に警官を遣して貰へまいかと、書いてあつた。斯んなことを言つて來るのは、ラストプチンにとつて、少しも珍らしいことではなかつた。彼はモスクワが放棄されることを、前日ボクランナヤ丘でクツウゾフと會見して以來のみならず、ボロヂイノの戰以來、知つてゐたのであつた。ボロヂイノの戰は不可能であると斷言し、そして、ラストプチンの裁可の下に、每晩政府の財産を他に移し、市民の半分は市を去つたのであつた。が、さうであつたに拘はらず、その事實が、いづれも皆、その上の戰は不可能であると斷言し、そして、ラストプチンの裁可の下に、每晩政府の財産を他に移し、市民の半分は市を去つたのであつた。が、さうであつたに拘はらず、その事實が、クツウゾフの命令として簡單な通牒の形で送られ、そしてそれを夜中睡りついたばかりの時に受取つたので總督は吃驚して、非常に焦燥したのであつた。

後になつて、ラストプチン伯爵は、この時の自分の行動を說明しやうとして、この時自分には二大目

的があつた、それは de maintenir la tranquillité à Moscou et d'en fartir les habitants（モスクワの安寧を維持することゝ、住民を其所から出て行かすこと）であつたのだと、自分の覺書の中に、度々書いた。若し、この二つの目的を、吾々が承認するならば、ラストプチンの凡ゆる行爲は、批難すべきものではないのだ。何うして聖遺物や、武器や、彈丸や、彈藥や、麵包の貯蓄などを運び去れなかつたのか？　何うして幾千といふ住民は、モスクワは放棄せられないと欺かれ、そして破滅に陷つたのか？。『市の安寧を保持するため、』と、ラストプチン伯爵の說明は答へるのだ。何故、諸官署の山のやうな不用書類や、レピツチの輕氣球や、その他の物が運び去られたのか？『市を空虛にするため、』と、伯爵ラストプチンの說明は答へるのだ。人が、たゞ公衆の安寧を脅かすものがあつたことを承認しさへするならば、どんな行爲でも正當なことになるのだ。

恐怖主義の怖ろしいのは、たゞ公衆の安寧といふことにのみ基づいてゐるのだ。

ラストプチン伯爵が、一八一二年に、モスクワで民衆の動亂を恐れたその根據はどこにあつたのか？　市中に暴動が起るやうな傾向があると考へたのには何う云ふ理由があつたのか？　住民は市を去り、退却する軍隊がモスクワに充ちてゐた。どうして、群衆が、そのために暴動を起しさうだといふことになつたか？

モスクワのみならず、ロシアのいづれの地に於ても、敵の侵入した時に、暴動らしいものは何にも

起らなかつた。九月の一日と二日には、一萬人以上の人民が、モスクワに殘されてゐた、が、總督の廣庭に、彼自身に引き附けられて人民が集まつた他には、何事も起らなかつた。若し、ボロヂイノの戰役後、モスクワの降伏が確實となり、或は少なくとも降伏しそうに思はれたならば、そして若しその時、ラストプチンが、武器を分配したり、揭示したりして人民を騷がせずに、凡ての聖遺物、彈藥、彈丸、國庫等の運送に着手して、市を放棄すると云ふことを人民に率直に告げたならば、民衆の中に動亂が起りはしないかと云ふやうな懸念が尙一層少かつたことは、明白である。

性急で多血性のラストプチンは、從來高級官吏の社會のみを動いてゐたので、感情に於ては、愛國者であつたが、自分の治めやうとする人民に就いては少しも理解を有つてゐなかつた。敵が始めてスモレンスクに侵入した時から、ラストプチンは、民衆の感情——ロシアの眞情の指導者の役目を取らうと想像してゐた。彼は、自分がモスクワ市民の外面的行動を支配してゐると想つてゐたのみならず(官吏が皆さう想つてゐるやうに)卑俗な、訛で書いた檄文や揭示で、民衆の心の態度をも指導してゐるのだと想像してゐた、然るに、人民は自分たちの仲間でもかゝる訛を、卑んでゐるので、身分の高い人からそれを聞く時には、その譯が解らぬのであつた。民衆の感情の指導者といふ美しい役目は、ひどくラストプチンの氣に入つてゐた。そして其の役目をしつかり握つてゐた。で、その役目を棄て、何等の勇敢な行動をも示めさずにモスクワを開城しなければならぬと云ふやうなことは彼にとつて全

く思ひ設けぬことであつた、彼は自分の立つてゐる地面が、自分の足下から辷り出したやうに思ひ、全く爲す所を知らなかつた。たとへ彼はさうなることを知つてゐても、最後の刹那に至るまで、モスクワの放棄を、心から信じてゐなかつた、そして、それに對して、何事もしなかつた。

住民は、彼の意に反いて、市を去つたのであつた。諸官署が移されたのも、官吏どもの主張に因るのであつた、ラストプチンは、それに嫌々ながら承諾を與へたのであつた。彼は、自分が取つた役目のために、全く心を吸收られてゐた。熱烈な想像力をもつてる人によくある樣に、彼は、モスクワが放棄されることももう迅くから知つてゐた。が、たゞ自然の判斷力ばかりで知つてゐたので、心底から信じてゐたのではなかつた。そして、新らしい事態を想像することが出來なかつた。

努力と精力とに滿ちた彼の活動の全方向は(それが如何なる程度まで　人民を利益し、如何なる程度まで、人民に影響したかといふことは、別問題であるが)彼自身を占領してゐた感情——フランス人に對する愛國的憎惡と自分に對する信任——を人民の中に起させるためのみに向けられてゐた。

が、この大事件が、眞實の歷史的運命に服し、ロシア人がフランス人に對する憎惡を言葉で表はすだけでは足りないことを知り、その憎惡を戰で表はすことさへ出來ず、モスクワに迫まつてゐるたゞ一つの問題に關して、自信が何の役にも立たなくなつたことを知り、全住民が、一人の人のやうになつて、その財產を棄てゝ、モスクワを流れ出し、かういふ消極的な行動で自分等の愛國心の力を證據立てや

うとすると、ラストプチンが選んだ役割は、不意に無意味なものになつてしまつた。彼は、不意に、立つべき地面がなく、棄てられた、弱々しい、馬鹿者になつたやうな氣がした。

クツウゾフの冷淡な、命令的な通牒を受け取り、睡眠から起されると、ラストプチンは、自分が益々焦燥して來たやうに感じ、同時に自分が惡かつたことを一層深く感じた。モスクワは、まだ彼の管理の下にあるさま〴〵の物、職務上彼が安全な所に移さねばならぬ一切の政府の財産が殘つてゐた。それをみんな移してしまふことは、どうしても出來なかつた。

『誰がこれに對して責任を負ふのだ？　誰がこんなことになる樣にしたのだ？』と、彼は考へた。『勿論、俺ぢやない。俺は、用意周到だつたのだ、俺はモスクワをあの通り支へてゐたんだ！　それに、見ろ、奴等は事件をとんでもないことにして了つたぢやないか！　惡黨奴！　謀叛人奴！』と、彼は思つた、誰がその惡黨であるか、確とは分らなかつたが、自分の位地を斯んな虛僞の、馬鹿々々しい狀態に陷れた罪を有つてゐる或る謀叛人を憎む必要を感じたのであつた。

その晩ぢう、ラストプチンは、さま〴〵の命令を出してゐた、それがために、斷えず人々が、モスクワの諸部分から、彼のところへ遣つて來た。彼のつたことを見たことが無かつた。屬官たちは、この晩ほど、伯爵が陰氣で、氣難かしかつたことを見たことが無かつた。

『閣下。分限者の長官から御命令を聞きに參りました』『宗教法院から』——『元老院から』——『大學から』——『司教からお使ひでございます』『伺ひに參りました』——『消防隊には、どういふ命令をお出しでございますか？』——『典獄でございます』——『癲狂院長』——と、終夜、斷間なく、伯爵の所へ報告した。

かういふ一切の質問に對して、彼は簡單な、腹立たしい答を與へた、その要點は、自分の命令はもう必要がないといふこと、自分の一切の用意周到なる準備が、誰かのために全然破壞されてしまつたといふこと、それから、その誰かゞ今起る何事に對しても責任を負ふ可きであるといふことなどであつた。

『やあ、あの愚人にさう言へ、』と、彼は分限者からの質問に答へた、『止まつて、自分の書類の番をしておれつて、おい、消防隊のことで、何といふ愚なことをお前は尋くのか？　彼所には馬が幾匹もゐる、それをウラヂミイルに遣つちまふがいゝ。フランス人のためにそれを遺しておくやうなことをしちや駄目だぞ。』

『閣下、癲狂院長がお見えになりました、どう御命令になりますか？』

『俺の命令？　みんな放しちまへ、それだけだ……いや、それより狂人共を市街へ放すがいゝ。狂人どもが、軍隊を指揮してゐる時節だから、狂人どもを放すのは、神の意志だらうよ、』

監獄の囚人に對する質問に對して、伯爵は、腹立たしげに、典獄を呶鳴りつけた——

『何、囚人どもを護衛するのに二個大隊出して呉れ？　そんなものはありやしない。奴等をみんな放しちまへ、それで解決が附くぢやないか！』

『閣下、國事犯人がをります……ミェシコフに、ヴェレシチャーギンに……』

『ヴェレシチャーギン！　まだ絞罪に處せられんのか？』と、ラストプチンは叫んだ。『俺の所へ連れて來い。』

二十五

軍隊がモスクワを通り出した、朝の九時には、命令を聞きにラストプチンの所へ來る者は無くなつた。市を去り得られる者はみんな、許可を得ずに去りつゝあつた。市に止まる者は、宜い方法を各自で決めてゐた。

ラストプチン伯爵は、ソコルニキイに行くために、馬を命じた、そして、黄色い顰め顔をして、腕を組み、無言でその書齋に坐つてゐた。

平穏な時には、官吏は誰も、自分の治めてゐる全人民は、自分の努力によつてのみ動かされてゐるのだと感ずるものである、で、凡ての官吏が、自分等の努力や配慮に對する重なる報償は、自分がどうしても必要な人間であるといふその感覺なのである。歴史の大洋が靜穏かである間は、一本の竿で、自分の動搖する小舟から、人民といふ大舟へ縋り附いて、それと共に動いてゐる官吏が、自分の力で、自分のしがみ附いてゐる大舟を動かしてゐるのだと、想像したがることは、容易に會得さるゝことである。が、一度暴風雨が起つて、海波を高め、船を動搖させると、このやうな謬想が直ぐ不可能となつてしまふのだ。大舟は、その快速力で自由に進み、竿は動いて行く大舟に屆かなくなつて支配者は、俄かに主權者、主動者の位置から放れて便のない、弱い、無用の人間になるのである。

ラストプチンは、それを感じた、そして、それが彼をして狂亂せしめた。

群集中から去つた警務長は、馬の用意が出來たことを知らせに行つた副官と一緒に、ラストプチンの室に入つて行つた。二人とも青くなつてゐた、警務長は、與へられた任務を果したことを報告した後で、ラストプチン伯爵に、人民の非常な群集が、伯爵に會ひたいと言つて、廣庭に居たと告げた。

一語も返答をせずに、ラストプチンは起ち上り、足早に、明るい立派な自分の客間へ入り、それから露臺の戸へ近づいて、戸の把手に手を掛けたが、それを放して、窓に行つた、その窓からは、全體の群集が、よく見えた。丈の高い、若者が眞先に立つてゐた、小嚴しい顏をしてゐる彼は片手を振りながら何事か言つてゐた。血塗れになつた鍛冶は、陰氣な風をして、彼の傍に立つてゐた。閉ざした窓を通して、呻るやうな大勢の聲が聞えてゐた。

『馬車の用意は出來たのか?』と、ラストプチンは、窓から放れながら、言つた。

『はい、閣下、』と、副官は、言つた。

ラストプチンは、再び露臺の戸口へ近づいた。

『おい、奴等は、一體どうしてくれといふんだい?』と、彼は、警務長に尋いた。

『閣下、彼等は、閣下の御命令によつて、フランス人と戰ふために、集まつたのださうにございます、奴等は、欺罔かられたとか何とか呶鳴つてをります。けれども、怒つてゐる群集でございますよ、閣下。私はやつと逃げ出して來たのです。遠慮なく申し上げますと、閣下……』

『どうぞ、俺を放つといて下さい、君の力を借りなくとも、俺のすべきことは知つてゐる。』と、ラストプチンは、腹立たしく叫んだ。

彼は、露臺の戸口に立つて、群集を見てゐた。『奴等は、ロシアをこんなにしてしまつたんだ! 私は、こんなにされてしまつたんだ!』と、ラストプチンは思ふと、今起つてゐる事の責任を歸すべき誰とも定められぬ人に對して壓へられぬ憤怒が込み上げて來るのを感じた。激し易い人に有り勝ちなやうに、彼は憤怒に心を奪はれてしまつてゐるので、その憤怒を浴せかける相手を求めてゐた。『こゝに民衆、人民の滓がゐる、』と、彼は、群集を見ながら、思つた。

『奴等は、自分たちが愚劣なために、昂奮してゐるんだ。奴等は、犧牲を要求してゐるんだ、』と、彼

は、手を振つてゐる丈の高い若者を見ながら考へた。この考想は明かに彼自身が自分の憤怒の相手、即ち犧牲の必要を感じた爲に彼の心に浮んで來たのであつた。

『馬車の用意はいゝかね?』と、彼は、また尋ねた。

『はい、閣下。ヴェレシチャーギンへは、どう御命令でございますか? 奴は、上り段に待つてをります、』と、副官が、答へた。

『あゝ!』と、ラストプチンは不意に何か憶ひ出したやうに、叫んだ。

そして、手早やに戸を開けて、斷乎として露臺の外に歩み出た。私語の聲が、ぱつたり止んで、さまざまの帽子が脫がれ、みんなの眼が、出て來た伯爵に向けられた。

『今日は、若者たち!』と、伯爵は、高い聲で、口早やに、言つた。『よく來たな。俺は、今直ぐそこへ行くぞ、だが、先づ吾々は、惡黨を一人處分しなければならぬ、其奴の行爲で、モスクワは破滅に陷つたのだ。吾々はその惡漢を罰しなければならんのだ。一寸待つてくれ!』

伯爵は矢張り急足で、部屋に歸り、戸をパタンと閉めた。

滿足した賞讃の囁きが群集の中を馳せ通つた。『あの人は、謀叛人をすつかり遣つゝけてしまふんだぜ、お前は、フランス人のことを話してゐるがね……あの人は、お前に順序をすつかり教へて呉れるんだ!』と、人民は、お互の信じないのを批難してゐるやうに、言つた。

數分間經つてから、一人の將校が、正面入口から急いで出て來て、何か命令を與へた、すると、龍騎兵が、ツンと眞直ぐになつた。群集は、露臺から、正面入口へ、ヒシ〳〵と詰め掛けた。ラストプチンは、腹立たしげな歩容で急ぎ足に、玄關に出て來て、誰かを探してゐるとでもいふやうに、忙がしさうに四邊を見廻はした。

『奴は何處にゐる?』と、彼は言つた。

彼がさう言つた刹那に、彼は、二人の龍騎兵の間に挟まつて、家の角を廻つて出て來た、長い痩せた頸の、頭の半分が剃られて、半分が毛の生へてゐる、一人の若者を見つけた。この青年は、嘗つては洒落れたものであつたが今はみすぼらしくなつてゐる狐皮裏の青布の上衣を着て、汚れた綾織綿布の囚人下袴の端を、穢ない耗り切れた長靴の中へ突込んでゐた。その歩容の覺束なげであつたのは、その痩せた弱い足の周圍にぶら下つてゐる重い足枷が邪魔をしたからであつた。

『あゝ!』と、ラストプチンは言つて、急いで眼を狐皮裏の上着を着てゐる青年から反けて、上り段の下を指示した。

『此處へ立たせい!』

足枷をガチヤ〳〵させて、青年は、指示された上り段へやつと歩み上つた、彼は、上衣の緊い襟へ指を掛け、その長い頸を二度横へ向けて、吐息をつき、從順なやうな身振をして、痩せた、勞働者らし

くない手を、腹の前で組み合せた。

青年が上り段の上で、自分の位置を占めやうとしてゐた數秒の間、四邊は、全く沈靜してゐた。ただ、一處へ壓し寄せた來た群集の後方で、吐息や、呻き聲や、押す音や、足をバタ〳〵と踏み鳴す音が聞えるばかりであつた。

ラストプチンは、彼が指示した場所へ青年が來るのを待ちながら、その顰めた顏を手で撫でた。

『青年たち!』と、彼は、金屬のやうな響のある聲で、言つた。『ヴェレシチヤーギンといふこの男は、モスクワを破滅した惡漢だ。』

狐皮裏の上着を着たこの青年は、從順な姿勢をし、腹の前で、兩手を組み合せて、少し前屈みに立つてゐた。絶望の容子を現はした、半分剃られた頭のために非常に醜く見える彼の窶れた若い顏は、下の方を向いてゐた。伯爵の最初の辭で、彼は靜かに頭を擧げ、伯爵に何か言はうとするのか、或は、せめて眼でも見合はさうとするかのやうに下方から伯爵を見上げた。が、ラストプチンは、彼を見なかつた。青年の耳の後の血管が、彼の長い痩せた頸の上に紐のやうに、現はれて青くなつた。そして彼の顏は、忽ち眞赤になつた。

衆目が、彼を凝視した。彼は、群集を見据ゑた、そして、彼が其所にゐる人々の顏の上に讀んだ表情によつて、希望を得たとでもいふやうに、怖々した、悲しげな微笑を漏らし、再びその頭を垂れて、

段の上で足を踏み更へた。

『此奴は、自分の皇帝と祖國とに對して謀叛をしたんだ、此奴は、ボナパルトに密通したんだ、ロシア人全體の中で、此奴がたゞ獨り、ロシア人の名を汚したんだ、此奴の咎で、モスクワが滅びたんだ。』と、ラストプチンが、鋭どい單調な聲で言つた。が、唐突に、下を向いて、やはり同じ從順な態度で立つてゐたヴェレシチャーギンをチラッと見た。その一瞥が、彼を狂氣させたとでもいふやうに、ラストプチンは、片手を擧げ、群集に對つて、殆んど喚くやうに叫んだ——

『此奴をお前たちの思ふ存分に處分せい！　俺は、此奴をお前たちに渡すから……』

人々は默つて、たゞ互にだん〳〵密集して押し合ふばかりであつた。彼等にはお互に壓し合つたり、汚い臭氣を嗅いだり、動く力を失なつたり、何かしら漠然した、解らない、怖ろしいことを待ち受けたりすることが、堪へ難くなりだした。自分等の面前で行はれてゐた凡てのことを見たり聞いたりしてゐた前の方の群集は、みんな、恐怖に撃たれて大きく眼を見張り、口を開けて、彼等の背を後方から押し付ける壓力を支へやうと力一ぱいに踏張つてゐた。

『此奴を毆れ……謀叛人を殺して、ロシア人の名を汚さないやうにしろ！』と、ラストプチンが叫んだ。『此奴を斬り倒せ、俺が命令する！』

群集はかういふ言葉を聞きとれなかつたが、ラストプチンの怒を帶びた聲を聞きつけたので、呻き

聲を出しながら、前方に喘ぎ出た、が、再び止まつた。

『伯爵！』……と、いふヴェレシチャーギンの怖々した、しかし、演劇めいた聲が、ラストプチンの言葉の後に續いた瞬間の沈默を破つた。『伯爵、一つの神が吾々の上に居給ふのです……』と、ヴェレシチャーギンは、その頭を擧げて言つた。すると再、彼の痩せた頸にある太い血管は血に滿され、彼の顏は急に赤くなつたが、次には蒼くなつた。

彼は、自分の言はうとしたことを、言ひ終はらなかつた。

『此奴を斬り倒せ！　俺が命令する……』と、ラストプチンは、急に、ヴェレシチャーギンのやうに眞蒼になつて、叫んだ。

『劍を拔け！』と、將校が龍騎兵に向つて叫んで、自分も劍を拔いた。

又、前よりも尙一層烈しい波が、群集を洗つたが、前列に達すると、其所にゐる者どもを前方に押し、彼等を上り段へ蹌踉かした。背の高い青年は、化石したやうな表情で、振り上げた手を動かさずに、ヴェレシチャーギンと並んで立つてゐた。

『奴を斬れ！』と、將校は、殆んど囁くやうに、龍騎兵に言つた。

すると、兵卒の一人が、怖ろしい醜い顏容をして、その劍の平身で、ヴェレシチャーギンの頭を擊つた。

ヴェレシチヤーギンは、『あゝ！』と、いふ短かい、驚きの叫聲を出し、何のためにそんな事が自分にされたかゞ解らないかのやうに、吃驚して四邊を見廻した。同じ驚きと怖れと呻き聲が、群集の間を走つた。『おゝ、主よ！』と、誰かの、悲しさうな叫び聲が聞えた。

ヴェレシチヤーギンは驚愕の叫聲を發した後で、苦痛の爲に憐れな叫聲を出した、そして、その叫聲が、彼を破滅させた。まだ群集を抑へてゐた緊張し切つた人情の障壁が忽ち斷れた。罪惡が始まつた以上、それが成就するまで行くことは、避けられないことであつた。批難の憫れな呻き聲は、群集の怒つた、威嚇的な咆哮に鳴り消されてしまつた。船を粉碎する大きな七番の波浪のやうに、その最後の、抵抗し難い波浪は、群集の後方で湧き立ち、最前列へ行き、彼等の足を浚らつて、皆なを一緒に呑み込んでしまつた。犧牲者を擊つた龍騎兵は、もう一度擊たうとした。ヴェレシチヤーギンは、恐怖の叫聲を擧げ、兩手を前に突き出して、群集の中へ飛び込んだ。彼が衝突つた丈の高い青年は、ヴェレシチヤーギンの細頸を兩手で摑み、獰猛な叫聲を擧げて、彼と一緒に、咆哮しながら壓し寄せて來る群集の足の下へ倒れた。

或る者は、ヴェレシチヤーギンを擊ち、傷つけた、他の者は、丈の高い青年をさうした。推し潰ぶされた人々や、丈の高い青年を救はうとする人々の叫聲は、たゞ群集の狂亂を增すばかりであつた。龍騎兵は、長い間、血塗れの、半殺しにされた職工を救ひ出すことが出來なかつた。で、群集は一旦

始められた事を終局までやつてしまうと一生懸命になつて、熱狂的に急いだけれども、ヴェレシチヤーギンを擊ち、踏み附け、滅茶々々に傷つけた人々も、彼を殺してはしまへなかつた。群集は四方八方から、その人々を壓し、その人々を中央にして、全體が一人のやうになつて、左右に搖れ、そして、その人々に、直ぐ彼を殺させもしなければ、彼を放させもしなかつた。

『斧で其奴を擊て、何うだ！……彼奴を壓し潰しちまつたか？……謀叛人だ、彼奴は基督を賣つたんだ！……生きてる……まだ生きてる……盜賊と同樣にしてやれ。斧でやれ！……まだ生きてゐるのか？……』

犧牲が跪かなくなり、彼の叫聲が、後長い調子の落付いた呻り聲に變ると、始めて、群集は、血塗れになつて倒れてゐる屍骸の周圍で、急がしげに入れ代り始めた。みんなその傍へ行き、爲されたことを凝視め、恐怖に打たれ、心の苛責を感じ、吃驚して、壓し合ひながら後へ戻るのであつた。

『おゝ、主よ、人民は猛獸のやうだ、どうしてあの男が生きてゐられるものか？』と、いふ聲が群集の中で聞えた。『それに、まだ若い男だ……商人の倅に違ひないんだ……慥かに人民……眞實は

あの男ぢやないといふ噂だよ……何うしてあの男ぢやないのだ……おゝ、主よ！……奴等はもう他の男を殺さうとしたのだ、その男は死にかゝつてゐるさうだよ……あゝ、人民は……罪を怖れないものがあらうか……』と、同じ人民が今はかういふ風に言つて、塵埃と血とにまみれてゐる、

蒼い顔の、長い、痩せた、折れた頸の死骸を、悲しげた憐憫をもつて見てゐた。

正確な警官が、閣下の庭に死骸のあるのは、見苦しいことだと思つて、死骸を街へ引き摺つて行くやうに龍騎兵に命じた。二人の龍騎兵が、折れた足を掴んで、死骸を引き摺つて行つた。血で汚れ、塵埃まみれになつた、死んだ、坊主頭は、長い頸の上で、左右に轉がりながら、地上を引かれて行つた。群集は死體から後退つた。

ヴエレシチヤーギンが倒れ、群集が獰猛な叫聲を擧げて密集し、彼の周圍で上下に混亂すると、ラストプチンは、急に眞青になつた、そして、馬が待つてゐた裏口へは行かずに、彼は、階下の部屋へ通ふ廊下を、床を見ながら、何處へ自分が行かうとしてゐるのか、また何故自分が行くのかも解らず、足早やに歩いてゐた。伯爵の顔は蒼白めてゐた、彼は、熱病の時のやうに下顎の慄えるのを抑へることが出來なかつた。

『閣下、此方へ……何方へお出でゞすか！……此方へお出で下さい、』と、彼の後で、驚いたやうな顫へ聲が言つた。

ラストプチン伯爵は、返答をすることが出來なかつた。從順に向きを變へて、彼は指示された方向へ行つた。裏口には、馬車がゐた。咆哮する群集の遠い叫聲は、其所でも聞かれた。ラストプチン伯爵は、急いで馬車に乘り、郊外のソコリニキイにある自分の家へ馬車を驅るやうに命じた。

彼がミヤスニツキイ街まで乘り出して、群集の叫聲が聞えなくなると、彼は後悔をしだした。彼は、屬官たちの前で現はした激昂と恐怖を、今は不滿足に思つた。『La populace est terrible, elle est hideuse, ils sont comme les loups quen ne peut apaiser qu'avec de la chair. (民衆は怖ろしいものだ、實に惡むべきものだ。彼等は、肉で慰撫めるより他に仕樣の無い狼のやうなものだ)、』と、彼はフランス語で思つた。『伯爵！　一つの神が吾々の上に居給ふのです！』ヴエレシチヤーギンの言葉が、不意に彼の心の中に憶ひ出された、そして厭やな寒氣が背を馳せ通つた。が、その寒氣は、ほんの一瞬間であつた。そしてラストプチン伯爵は、自分を嘲けるやうに、微笑んだ。『俺には、他に任務があつたんだ、人民を慰撫めなければならなかつたんだ。多くの他の犧牲が、公益のために死んだのだ、そして今も死につゝあるのだ。』と、彼は思つた。で、彼は自分の家族や自分に委ねられた市などに對する社會的義務のことや自分自身のことなどに就いて——彼は自分を一のフヨードル・ワシリエヰツチ・ラストプチンとしてで無く(彼は、フヨードル・ワシリエヰツチ・ラストプチンは、le bien publique (公益)のために自分を犧牲にしてゐると思つてゐた)總督として、權利の代表者として皇帝から全權を委任された者として考へ始めた。『若し、俺が、たゞのフヨードル・ワシリエヰツチであつたのなら、ma ligne de conduite autrait été tout autrement tracé (俺の行動は全く別のものであつたらう)——が、俺は、生命と、總督としての威嚴とを保有しなければならなかつたの

だ。

馬車の和かい彈機で、輕く搖られ、群集の怖ろしい響がもう聞えなかつたので、ラストプチンは、肉體的には落着いた、そして、肉體上の落付と同時にいつも起るやうに、彼の智力が、精神上の慰安を提供した。ラストプチンを安心させた考は、ちつとも新らしいものではなかつた。世界が存在し、人間がお互ひに殺し合ひをしだして以來、これと同じ考で自分を慰撫めずに、その同胞に對して、罪を犯すことは一度も無かつたのだ、その思想といふのは、le bien publique(公益)、卽ち、假定された他人の幸福である。

情熱によつて動かされない人には、この公益なるものが確かに解らないのだが、かういふ罪を犯す人は、屹度、その公益が何物であるのかを確實に知つてゐる。ラストプチンも今、それを知つたのである。

彼は、自分が今しがた行つた行爲を熟考して、自分を責めるどころか、却つて、罪人を處刑して、群集を滿足させる好機會を巧みに利用したと云ふ點に、自己滿足の根據を見出したのであつた。

『ヴエレシチヤーギンは裁判されて、死刑に處せられたのだ、』と、ラストプチンは思つた(けれども、ヴエレシチヤーギンは、元老院によつて、重懲役に宣告されただけであつた)。『彼奴は間諜で、逆徒なんだ、俺は、彼奴を罰せずに置く譯に行かなかつたのだ、だから、俺は、一つの石で、二羽の鳥を

打つたんだ。俺は、人民に犧牲を與へて、彼等を鎭靜め、それと同時に、惡人を罰したんだ。』

伯爵は郊外の家に着いて、自分の家事を整理してゐるうちに、全くその沈着な態度に復つた。半時間も經たぬうちに、伯爵は、速い馬を驅つて、ソコルニキイ原を橫切つてゐた、その時彼はもう過去の事は何にも考へずに、これから起るべき事に對する考慮や計畫に心を奪はれてゐた。彼は、今、クツウゾフがゐるといふヤウズスキイ橋に行くのであつた。

自分の心の中で、彼は、欺されたことに就いて、クツウゾフを責める憎惡な、怒つた語を準備してゐた。彼は、モスクワの放棄とロシアの滅亡とから起つて來るべき凡ての災害の責任が(ラストプチンは、考へてゐたのだ)彼の年老つた、耄けた頭の上に係つてゐることを、かの宮中の古狐に感じさせたいと思つてゐた。自分がクツウゾフに言はうと思ふことを、豫め一通り考へながら、ラストプチンは、憤然として、馬車の中で、左右に振り向き、腹立たしげに、周圍を見廻はした。

ソコルニキイの原は、空虛であつた。たゞその一端の、慈善院や癲狂院の傍に、白い着物を着た人々が幾團にもなつてゐた、そして、同じやうな人々が、原の中を、何事か呶鳴つたり、手を振り廻したりして、徘徊いてゐた。

そのうちの一人は、駈けながらラストプチン伯爵の馬車の前を橫切つた。伯爵自身も、馭者も、騎兵等もみんなそれ等の放された狂人を、殊に彼等の方に向つて走つて來たその狂人を、恐怖と好奇

心の漠然とした感じをもつて、凝視めてゐた。

その長い、痩せた足で蹌踉き、その寝衣を風に飜へしながら、この狂人は、驀地に駈けて來て、ラストプチンを見据え、嗄れた聲で何か呶鳴り、彼に向つて止まれといふ合圖をした。疎らな房のやうな鬚を生やした狂人の陰氣な、勝誇つたやうな顔は、痙せて、黄ろかつた。彼の眼の、黒い、瑪瑙のやうな瞳は、番紅花色の黄色がゝつた白みの上を低く怪々と動いてゐた。

『止まれ！　止まれ、こらツ！』と、彼は鋭い聲で叫んで、そして、また、力強い身振と聲調で、喘ぎながら、何事かを呶鳴りだした。

狂人は、馬車に近づき、馬車と並んで駈けた。

『彼等は、三度我を殺せり、我は三度死より甦れり。彼等は石にて我を撃ち、我を十字架に磔けたり……我は再び甦らん……我は再び甦らん。彼等は、我が身體を寸斷せり。天國は破壊さるべし……我は三度そを破壊し、而して、三度そを建つべし！』と、彼は益々聲を高めながら叫んだ。

ラストプチン伯爵は、群集がヴェレシチャーギンを襲ふた時に眞蒼になつたやうに、再た急に眞蒼になつた。彼は顔を背けた。『は……はやく遣れ！』と、彼は、馭者に對つて、顫へ聲で叫んだ。馬は全速力で駈つた。が、それでも、長い間、ラストプチン伯爵は、自分の後方でだん〳〵遠ざかつて行く、狂亂した絶望の叫聲を聞いた、そして、それと同時に、眼の前には、毛皮裏の上着を着た逆徒の驚ろき、怖れた、血塗れの顔の他何にも見えなかつた。

その心象は、新らしいものであつたけれども、ラストプチンは、今、それが深く彼の心に刻みつけられたことを感じた。彼は、今、その怖ろしい記憶の血の印は、決して彼を離れずに、年が經てば經つほど、益々殘酷に、益々復讐的に、彼の生涯の終局まで、彼の心の中に生々してゐることを瞭然と感じた。『彼奴を切れ、でなければ、お前たちはその申開きを俺にしなければならぬぞ！』と、彼が自分で言つた語の響を今も聞いてゐるやうに思つた。『何故、俺はあんなことを言つたのだらう？　何うかした間違で言つたのだ……あんなことを言はないでも宜かつたのだ。』と、彼は思つた、『さうだつたら、何も起りはしなかつただらうに、』彼は、ヴェレシチャーギンを毆つた龍騎兵の、恐怖に打たれ、それから急に慘酷を表はした顔と、狐皮裏の外套を着たかの青年が、彼に投げた怖々した、無言の譴責を表はした眼付とを見た。けれども、俺は、自分のために、それをしたのではない。俺は、さういふ風にしなければならなかつたのだ。La plèbe (民衆)……le traître (逆徒)……le bien publique (公益)……』と、彼は考へた。

ヤウザ川の橋は、まだ軍隊で充滿であつた。暑い日であつた。沈んだ顰め顔をしたクツウゾフは、橋の傍の腰掛に掛けて、鞭で砂の上を戲つてゐた、と、馬車が音高くガラ〳〵と彼の傍へ近づいて來

た。將官（ジェネラル）の制服を着て、羽根の附いた帽子を冠つた男が、彼の傍へ近づいた。その男は、不安げに眼をギョロつかし、その眼の中に、憤怒とも附かず恐怖とも附かぬ色を湛へて、フランス語で、クツウゾフに話しかけた。それはラストプチン伯爵であつた。彼は、モスクワ首都も、もう無くなり、軍隊だけが殘つてゐるので、こゝへ遣つて來たのだとクツウゾフに言つた。『閣下が、一戰爭せずにはモスクワを棄てはしないと私に被仰らなければ、斯んなことにはならなかつたでせう！』と、彼は言つた。

クツウゾフは、ラストプチンを凝視めた。そして、自分に對して言はれた言葉の意味が解（げ）せぬとでもいふやうに、自分に話しかけた人の顏にその時表はれた特種の意味を見分けやうと、熱心に努めてゐた。ラストプチンは、周章（あわ）てゝ口を噤んでしまつた。クツウゾフは、微かに頭を振つて、やはり探るやうな眼で、ラストプチンの顏を凝視めながら、低く呟やいた——

『さうだ、俺（わし）は戰はずにモスクワを棄てはしない。』

から言つた時に、クツウゾフが、何か他のことを考へてゐたか、それとも、そういふ語（ことば）の無意味なのを知つてゐるのに、態とさう言つたのであつたかは分らなかつたが、ラストプチン伯爵は、クツウゾフには答へないで、急いで彼の傍を去つた。不思議なことである！　モスクワ總督の高慢なラストプチン伯爵は、鞭を拾ひ上げて、橋の傍へ行き、群がつてゐる荷馬車を怒鳴りつけて、それを追ひ始めた。

二十六

午後の四時に、ミュラーの軍隊は、モスクワに入つた。先頭には、ウルテンベルグ驃騎兵の一枝隊が馬を進め、それに續いて、大勢の隨員を從へたネェプルス王が馬を進めた。

アルバトの眞中に近い、ニコライ・ヤヴレンニイの傍で、ミュラーは止まつて、衛城、卽ち『ル・クレムラン』の狀態に關する報告を前進隊から待つてゐた。

モスクワに殘つてゐた住民の小さい群が、ミュラーの周圍に集まつた。みんな、黃金と羽毛（はね）で飾られた、頭髮の長い司令官の珍らしい姿を、不思議さうに、怖々（おづおづ）と凝視めてゐた。

『やあ、これが奴等の皇帝なのかえ？　何んでもありやしない！』と、低聲で言つてゐるのが聞えた。

通譯官が、見物人の群へ近づいた。

『帽子だ……帽子を脫れ、』と、群集は、お互ひに呟やき合つた。

通譯官は、一人の年老つた門番に聲をかけて、クレムリンまでどの位る道程があるかと尋（き）いた。門番は、聞き馴れないポーランド訛を呆れて聞いてゐたが、通譯官の話（ことば）をロシア語と思はなかつたので、話しかけられたことがどういふことなのか少しも分らずに、他の者の後へ隱れてしまつた。

ミュラーは、通譯官に近寄つて、何處にロシアの軍隊がゐるのか尋けと言つた。ロシア人の一人がその問を解したので、數人の聲が、同時に通譯官に答へだした。前進隊からフランスの將校が、ミュラー！の傍へ乘りつけて、衞城の門はみんな閉ざされてゐて、そこには伏兵がゐるらしいと報告した。『宜し、』と、ミュラーは言つて、隨員の一人に向い四門の輕砲を持つて行つて、諸門を砲撃せよと命じた。

砲兵は、ミュラーの後に續いてゐた隊列から駈け出て、アルバトを進んだ。ヴオスヅキゼンカの端に達すると、砲兵は立止まつて、廣小路に砲列を布いた。數名のフランス將校が、砲の配列を監視し、望遠鏡でクレムリンを見た。

クレムリンの中では晩の祈禱の鐘が鳴つてゐた。その音が、フランス人を心配させた。彼等は、それを戰闘準備の合圖だと思つた。數名の歩兵が、クタフイエフ門口へ駈けて行つた。丸太と板の防寨が、門口に横はつてゐた。恰度一人の將校が、幾人かの兵を率いて門に駈け寄らうとした時に、門から二發の銃聲が鳴り響いた。砲の傍に立つてゐた將官（ゼネラル）がその將校に向つて、何か號令すると、將校と兵卒は馳せ歸つた。

更に三發の銃聲が、門から聞えた。

一發は、一人のフランス兵の足を掠（かす）めた、と、五六人の異樣な叫聲が、防寨の後方で起つた。忽ち、

號令を掛けられたやうに、フランス將官（ゼネラル）や、將校たちや、兵卒等の、上機嫌の、落着いた以前（まへ）の表情が、爭鬪と苦痛とを豫期した頑強な、注意深い表情に變つてしまつた。元帥から最下級の兵卒に至るまで、即ち彼等の全部にとつて、此の場所は、ヴオスヅキゼンカでも無く、モホオヴアヤでも無く、クタフイエフでも無く、ツロイツキ門でも無かつた、彼等にとつてそこは、血を流す新らしい戰場であるらしかつた。で、みんなその戰鬪の覺悟をした。門からの叫聲は止んでしまつた。砲は前へ進められた　砲兵たちは、燃えてゐる火繩桿（くわんばう）を吹いた。一人の將校が、『Feu！』（撃て！）と、號令した、すると、ブリキを敲いたやうな銳どい音が、二度續けざまに響き渡つた。葡萄彈が　門口の石や、丸太や、障壁などに衝突つて鳴り響き、雲のやうな二塊りの煙が廣小路の上を轉がつた。

クレムリンの石壁に反響した砲聲が消えると程なく、異樣な響が、フランス人の頭の上に聞えた。小鴉の大きな群が、城壁の上へあがつて、高い鳴聲と何千といふ羽翼（つばさ）の唸りを立てゝ、空を翔け廻はつた。この音と一緒に、門内にたゞ一人の叫聲が鳴り響いた、そして、帽子も冠らずに農夫の外套を着た、人間の姿が、硝煙の中から現はれた。その男は、銃を擧げて、フランス人を狙つた『Feu！』（撃て！）と、砲兵將校が繰返して叫んだ。それと同時に、一つの旋條銃（ライフル）の音と、二發の砲聲とが聞えた。門は、また硝煙で隱くされた。

それからはもう、何にも防寨の後方で動かなかつた、で、フランスの歩兵が、將校等と一緒に、門

の方へ行つた。門口には、三人の負傷者と、四人の死骸が横はつてゐた。長い農夫の外套を着た二人は、城壁に沿ふて、ズナアメンカの方へ逃げ去つた。

"Enlevez-moi ça" (これを片附けろ、)と、將校は、丸太と死骸とを指示して言つた、で、フランスの兵卒等は、負傷者に止めを刺し、死骸を塀の外へ投げ込んだ。

その人々はどういふ人だつたのだか、誰も知らなかつた。その人々に就いては "Enlevez-moi ça" (これを片附けろ、)と、言はれただけであつた、そして、その人々は、投げ棄てられ、後で、臭はないやうに取り片附けられた。たゞ一人ピエールは、その人々を記念する爲に、數行の美しい辭を彼等に献げてゐる、『これ等の不幸なる者は、神聖なるクレムリンに侵入し、兵器庫の銃を持ち出して、フランス人に發砲した。彼等のうちの數人は、斬られた、そして、クレムリンは、彼等の存在から潔められた。」

ミユラーは、道が開かれたといふ報告を得た。フランス人は諸門へ入つた、そして、元老院の廣場で、野營を張り始めた。兵卒等は、元老院の窓から、椅子を廣場へ投げ出して、焚火をこしらへ始めた。

他の諸枝隊は、クレムリンを横切つて、マロセイカ、及びボクロヴカに野營した。その他のものは、ヴオヅキゼンカ、ズナアメンカ、ニコルスカヤ、及びツヴエルスカヤに野營してゐた。

自分たちを接待してくれる市民がゐないので、フランス人は、何處でも、家の中には宿泊せずに、市に露營したのであつた。

フランス兵は襤褸を纏ひ、饑え、疲れて、その元の人數の三分の一に減じてゐたけれども、紀律整然として、モスクワに入つた。苦められ、疲れてはゐたが、まだ勇敢な、怖るべき軍隊であつた。しかし、それは、軍の兵卒等が各宿舍へ散々になる時まで、軍であつたといふに過ぎなかつた、兵卒等が、人のゐない、金持の家を探し歩くやうになつてしまふや否や、軍は永久に無くなつてしまつた、そして、その中間の何とも言ひ樣の無い、掠奪者といふ人間の群集が出來たのであつた。それから五週間經つて、これ等の人々がモスクワから出て來た時には、彼等はもう軍を成してはゐなかつた。彼等は、掠奪者の群集であつて、各自が貴いとか、役に立つとか思つた物品を一抱づゝ持つてゐた。これ等の人々が、モスクワを去る時に各自に有つてゐた目的は、從來のやうに、戰はうといふのでは無くて、たゞ單に、各自が獲た掠奪物を保つてゐやうといふのに過ぎなかつた。猿が瓶子の狹い頸の中へ手を挿し入れて、その中にある胡桃を一握り摑み、その掠奪物をどうしても失ふまいとして、自分の身の破滅になるまでも、その拳を開けないのと同じやうに、フランス人は、モスクワを去る時に、どうしても破滅に陷るべき筈であつた、何故なれば、彼等は、各自の掠奪物を引き摑つて、猿には胡桃を放すことがどうしても出來ないやうに、彼等にもその掠奪

物を投げ棄てることはどうして出來なかつたからである。フランスの聯隊が、それ〴〵モスクワの彼方此方に散じてから十分ほど經つと、一人の兵卒も、一人の將校もそこには殘つてゐなかつた。家々の窓には、軍服を着て、ヘツス長靴を穿いた人々が、笑ひながら、部屋を徘徊いてゐるのが見えた。穴藏や貯藏庫では、同じやうな人々が、忙しさうに飮食物を探してゐた、庭では、彼等は、小舍や、廐の戸を開けたり、壞したりしてゐた。臺所では、彼等は火を焚き、腕を捲つて、涅ねたり、燒いたり、煮たり、女や子供等を嚇したり、機嫌を取つたり、面白がらせたりしてゐた。斯う云ふ人々は、到る處に、どの店にもどの家にも、大勢ゐたが、軍はもうゐなかつた。

その日、フランスの司令官から、命令が相繼いで出て、軍隊が町に散ずることや、住民に對する暴行掠奪を嚴重に禁じ、そして、その夕方一般點呼のあることを布告した。が、それにも拘らず、以前軍を成してゐた人々は、便利な物や貯藏品などの澤山ある、人のゐない富んだ市へ流れ散つてしまつた。飢えた獸の群が、荒野を通る時は一緒になつてゐるが、豐富な牧場に出會すとどうしても散々區々になつてしまふのと同じやうに、軍はどうしても富んだ市中へ散々にならなければならなかつたのであつた。

モスクワには、住民が居無かつた。で、兵卒等は、水が砂の中へ吸ひ込まれるやうに、モスクワの中へ吸ひ込まれ、止めることの出來ない流れ星のやうに、彼等が最初入つたクレムリンから四方八方

に散つて了つた。その全財産と共に棄てられてゐる商人の家へ騎兵等は、彼等の馬を容れてもまだ餘る程の室を見附けたのであるが、それでも尙一層良いやうに見えた他の家に隣から隣へと出掛けて行つた。多くのものは、數軒の家を取つて、それに自分等の名を白墨で書いて置いて、その所有權に就て他の隊と爭論し、或は殿り合ひをした。兵卒等は、宿舍を取るや否や、街を駈けて市中を見廻り凡ての物品が棄てゝあると聞き次第、貴重な物品を無代で持つて來ることの出來る所へ急いだ。將校たちは、兵卒等を制するために、巡視してゐたが、思はず兵卒等と同じことをするやうに誘惑された。馬車屋町では、馬車が詰まつたまゝで、店が棄てられてゐた、で、將官たちは四輪馬車や二輪馬車を選り取らうとしてそこへ集まつて來た。居殘つてゐた住民は、將校たちを自分等の家へ招いて、掠奪から免かれやうと思つた。富は豐富であつた、無盡藏のやうに思はれた。フランス人に占領されてゐた部分を取卷いて四方八方到る處に、占領されてゐない探檢されてゐない地區があつて、フランス人は、そこには尙一層多くの富があるやうに思つてゐた。モスクワは、益々深く自分の中へ、フランス人を吸ひ込んだ。水が、乾いた地面に注がれると、水も乾いた土地もなくなつてしまふのと同じやうに、饑えた軍が、人の放棄した、富んだ市へ入ると、軍もなくなれば、富んだ市も亡くなつてしまつて、泥と火事と掠奪者の團隊とが生ずるのである。

フランス人は、モスクワの燒けたことを、au patriotisme féroce de Rastoptchine,(ラストプチン

の野蠻なる愛國心）に歸したし、ロシア人は、それをフランス人の蠻行に歸した。實際に於ては、モスクワの大火に、それが誰か一人又は幾人かの人々の行爲だとするやうな、さう云ふ意味の原因は無かつたし、また有り得るもので無いのである。

モスクワの燒けたのは、この市が、木材で建てられたどの市でも燒けねばならぬといふやうな狀態のもとに在つたためであつて、市に百三十臺の不完全な消防機關があつたか、無かつたかといふやうな問題とは、全然無關係であつたのだ。モスクワは、その住民が去つた爲に何うしても燒けなければならなかつたのだ。そしてその燒けると云ふことは藁の堆積の上へ、數日の間絶間なく火花を落せば、それがどうしても燒けるのと同じやうに、不可避な事であつたのだ。木造家屋の市では、警察官や、家を所有する住民等がゐる時でさへ、殆んど毎日のやうに火事が起るのだから、住民が去つてしまつて、煙管（パイプ）を燻らしたり、元老院の廣場で元老院の椅子を焚いたり、日に二度も炊事をしたりする兵卒等が住つてゐる場合、火事を免れ得やう筈が無いのである。平時に於て、軍隊がどの地方かの村で宿營する場合でも、いつもその地方に於ける火事の數が增すものである。であるから、木造家屋の市が、棄てられて、外國兵に占領された場合には、火事の可能が如何に增加せねばならぬかは、自明の理である。ラストプチンの野蠻な愛國心も、フランス人の蠻行も、此の場合問題にはならぬのだ。モスクワは、煙管（パイプ）や、臺所の爐（ストーブ）や、篝火や、家主のゐない家に住んでゐる敵の兵卒の怠慢などのために、

燒けたのである。若し、放火されたのだとしても、（誰も放火をすべき理由はなし、どんな場合でも、）放火は面倒で、危險であるから、放火があつたといふことは、甚だ疑はしいが）放火がモスクワが燒けた原因であると云ふことは出來ない。何故といふに、モスクワの火災は、放火が無くとも、どうしても避け難いものであつたから。

フランス人にとつては、罪をラストプチンの獰猛に歸してしまへば氣が安まり、又、ロシア人にとつては、その罪を惡黨のボナパルトに歸するか、若しくは後年になつてのやうに、その愛國者なる農夫の手に英雄的な炬火（たいまつ）を置いて、氣を安めたけれども、吾々は、火事には、さういふ直接の原因が少しも無かつたといふ事實を、認めないわけには行かない。それは、モスクワは、どんな村や、工場や家などでも、その持主に棄てられ、他人がそこに入つて炊事をした場合に、必らず燒けるに定まつてゐるやうに燒けなければならなかつたからである。モスクワは、確かに、その住民によつて燒かれたのだ、が、其處に殘つてゐた住民によつてではなく、市を棄てた住民によつて燒かれたのだ。敵に占領されたモスクワは、ベルリンや、ウインや、その他の市のやうにその損害を免れ得なかつた、それは、たゞ單に、その住民が、鍵や、歡迎の麵麭や鹽などをもつて、フランス人を迎へずに、市を棄て去つた爲めであつた。

二十七

モスクワ中へ、星のやうに擴がつて吸ひ込まれたフランス人は、九月二日の夕方までは、まだピエールのゐた部分へ侵入し無かつた。

孤獨と、特種な狀態で過した最後の二日間が經つと、ピエールは、狂氣に近いやうな狀態になつてゐた。一つの觀念が、彼の心を捉へて放さなかつた。彼自身は、どうして、又何時さうなつたかを知らなかつたが、その觀念が今は、彼が過去に於ける何物をも記憶せず、又現在に於ける何物をも了解し得ないまでに、全く彼の心を虜にしてしまつてゐた、そして、彼が見たり聞いたりする凡ての事は、夢の中で起つてゐるやうに思はれた。

ピエールは、自分を捉へてゐる複雜に縺れ合つた生活の要求から逃れるために、自分家を出たのであつた。さういふ縺れた要求は、その時のやうな狀態にゐた彼にとつては、どうしても解くことの出來ないものであつたのだ。彼は、故人の書籍や書類を整理するといふのに托言けて、オシツプ・アレキセーキツチの家へ行つたのであつた。彼は、たゞ生活の恐怖を逃れて、靜かな隱家を求めたに過ぎなかつた、彼はオシツプ・アレキセーキツチのことを憶ひ出すと、之れに續いて、自分を引き込んでゐる

やうに思はれる紛糾した動亂と全く反對な、靜穩な、崇嚴な、永遠の觀念の世界が自分の心の中に表はれて來るのを感ずるのであつた。彼は、靜かな隱家を探してゐた。そして、それをオシツプ・アレキセーキツチの書齋のうちに確實に見出した。彼が、死んだやうな靜かな書齋の中で腰掛け、故人の塵埃だらけになつた寫字卓子に肱を突いてゐると、この數日間の印象、殊にボルヂイノの戰の印象や、それから、彼が心の中に『あの人々』として印されてゐるかの階級の人々の、眞實と、眞率と、力とに比較すると、自分が詰らない虛僞に充ちた者であると云ふ力強い感覺の印象などが、それからそれと靜かに、意味ありげに、彼の想像の中に表はれて來るのであつた。ゲラシムが、瞑想からピエールを呼び醒ました時に、ピエールは、行はれる筈であることを彼が知つてゐた、人民のモスクワ防守に加はらうと不圖思ひついた。で、その目的をもつて、ゲラシムに、農夫の外套と拳銃とを手に入れてくれと頼み、自分は、名を隱くして、オシツプ・アレキセーキツチの家に留まつてゐる積りだといふことを、彼に話したのであつた。さて、斯うして淋しい日や、樂しい日を送つてゐる間に、(ピエールは、共濟組合の寫本に注意を集中しやうとしたが駄目であつた)ボナパルトの名と、自分の名との關係に神秘哲學的な意味があると云ふ、嘗つて考へたことのある考想が、幾度もぼんやり彼の心に起つて來た。が、彼、卽ち L'Russe Bezuhof (ロシア人ベズウホフ)が、「獸」の力を剿滅する運命をもつてゐるのだといふ考慮は、まだ腦の中をフラ〳〵と飛んで、後に何の跡も殘さないやうな想像の一つとして、彼の

心に起るに過ぎなかつた。

ピエールが、人民のモスクワ防守に加はる目的だけで、農夫の外套を買つてから、ラストフ家の人々に出會し、そしてナターシヤから、『貴下は殘つてゐるんですか？　あゝ、それは、ほんとに立派なことだわ！』と、云はれた時に、彼の頭にたとへフランス人がモスクワを占領しても、自分はそこに居殘つてゐて、自分の使命を果すのが、實際に立派なことではあるまいかといふ考慮（かんがへ）が、閃めいた。翌日、身を惜まずに、『あの人々』に劣らぬやうにするといふたゞ一つの目的で、彼は三丘（ツヴイ・ゴルイ）の城壁へ出掛けて行つた。が、誰もモスクワを守る者はないといふことを信じて、歸つて來ると、彼は今までに出來ることとしてのみ思はれてゐたことが、今はどうしてもしなければならぬ、又避け難いことになつてゐるのを、不意に感じた。彼は、自分の名を隱くして、モスクワに居殘り、ナポーレオンに會つて、彼を殺し、たゞ一人のナポーレオンの爲めに起つた（ピエールの說によると、）全歐洲の不幸を絶滅するか中絶させるかしなければならなかつた。

ピエールは、一八〇九年にウインナでドイツの大學生がナポーレオンを暗殺しやうとした企圖（くわだて）を詳しく知つてゐた。そして、その大學生が銃殺されたことを知つてゐた。で、彼が自分の計畫を實行する場合に、自分の生命を賭する危險を冒さなければならぬといふことが、彼を尙一層激しく昂奮させた。

同じ位ゐに强い二つの感じが、ピエールを無理矢理に彼の計畫へ引き附けた。第一の感じは萬民共

通の災厄を意識する時に起る、犧牲となり、苦痛を忍ばうといふ慾求であつた。彼は此の感じを有つてゐた爲に二十五日にモザイスクに行き、激戰の眞たゞ中に飛び込み、そして、今は、自分の慣れた贅澤や便利を棄て、自分の家を逃げ出して、固い寢床の上に、着物を着換へずに眠り、ゲラシムと同じ食物を喰べてゐたのである。もう一つの感じは、習俗的な、人工的な、人間的な凡ゆる物、卽ち、人間の大多數が、世界に於ける最大幸福と見做す凡ゆる物に對するぼんやりした、ロシア人でなければもたない侮蔑の念であつた。ピエールは、始めて、スロボドスキイ宮で、その奇妙な、魅力の强い感じを覺えた。その時、彼は、不意に、富や、權勢や、生命や、人間が努力をもつて造り上げて護つてゐる凡ての物は、その一切を放棄する時の歡喜によつてのみ、何等かの價値があるのだといふことを感じた。

補充義勇兵をして、最後の一錢まで飮ませたり、そんな事をすれば自分の持つてゐる少しばかりの金をみんな失ふことになるのを知つてゐる醉漢をして、鏡や窓硝子を粉微塵にさせたりするのは、これと同じ感情なのである。かういふ感情によつて、人間的制限以外にある、人生に對する最高の判斷があることを承認しつゝ、俗に言ふ無智なことをして、個人の權利と力とを超えるのである。

ピエールは、始めてスロボドスキイ宮で、この感情を經驗してから以來、斷えずこの感情に影響されてゐたのだがこの感情が充分に滿足したのは、今が最初であつた。その上、今となつては、ピエー

ルは、自分の計畫に尻押しされると同時に、さういふ方向に向つて今まで、さま〴〵の手段を取つて來たのだから、その計畫を今更棄てることは出來なくなつた。自分の家からの逃亡、變裝、拳銃、及び、モスクワに居殘るのだとラストフ家の人々に言つたこと——凡てさういふことは、彼が若し、さうした後で、他の人々と同じやうにモスクワを去るならば、全く無意味なことになるのみならず、實に馬鹿らしい、笑ふべきことゝなるのである。(ピエールは、人の物笑ひになるといふことを甚く氣にしてゐた)

ピエールの肉體狀態は、それが何時もさうであるやうな、彼の精神狀態と一致してゐた。食べ慣れない粗食や、彼がその頃中飮んだ火酒や、葡萄酒や葉卷の無いこと、彼の汚れた着換へのない襯衣や、夜具のない短かい長椅子の上で過した眠られない二晩などが、終にピエールを狂氣に近いやうな、神經過敏の狀態に陷れてしまつたのであつた。

午後の二時であつた。フランス人はもうモスクワへ入つてゐた。ピエールは、それを知つてゐた、が、行動には取り掛らずにたゞ自らの計畫に就て考へながら、その巨細の點をすつかり心の中で繰返へしてゐた。自分の空想の中で、ピエールは、打擊を與へる行爲そのものや、ナポーレオンの死を生々と描きはしなかつた、が、自分の最期や、自分の英雄的態度を非常に明瞭と考へて甘い悲哀に打たれてゐた。

『さうだ、萬人に代つて、殺つけるか殺ツけられるかしなければならんのだ!』と、彼は考へた、『さうだ、俺は近寄つて、……それから、矢庭に……拳銃にしやうか、それとも短劍にしやうか?』と、ピエールは考へた。『が、それはどつちでも宜い、お前を罰するのは、俺ではないんだ、神の御手なんだ。……俺はさう言つてやる。』(ピエールは、自分がナポーレオンを殺す時に言ふ言葉を思ひ廻らしてゐた)。『さア、俺を捕へて處刑しろ!』と、ピエールは、その顏に悲しげだが、斷乎した表情を浮べ、その頭を下げて、獨言を呟やいた。

ピエールが、部屋の中央に立つて、かういふ風に考へ耽つてゐる時に、書齋の戸が開いた。そしてこれまではいつも臆病だつたマカール・アレキセーキツチの全く變つた姿が、戸口に現はれた。

彼の寢衣は、前がはだかつてゐた。彼の顏は眞赤で、痙攣つてゐた。彼は確かに醉拂つてゐるのであつた。ピエールを見ると、彼は一寸周章てたが、ピエールの顏にも狼狽したところのあるのを見て、忽ち大膽になつた、そして、痩せた、蹌踉く足で、部屋の中央へ歩み入つた。

『奴等は、びく〳〵してやがる、』と、彼は嗄れ聲で勿體らしく言つた。『俺はどうしても降伏はしませんぞ、どうしても……さうでせう、貴下?』

彼は一寸と考へ込んだ、が、突然、卓子の上の拳銃を見附けると、非常に迅速くそれを摑んで、廊下へ駈出た。

マカール・アレキセーキツチの後から隨いて來てゐたゲラシムと門番とは、玄關の間で彼を止めた
そして拳銃を彼から取上げやうとした。書齋から出て來たピエールは、半狂人のこの老人を、厭惡と
憐憫とで見てゐた。マカール・アレキセーキツチは、顏を顰めて、一生懸命で拳銃を握り、確かに何
かしら華々しい光景を想像してゐるらしい樣子で、嗄れた聲で怒鳴つてゐた。
『武器を持て！　奴等を圍め！　馬鹿、取れるものか、』と、彼は怒鳴つた。
『お渡し下さい、何卒、お渡し下さい。お願ひですから、何卒、お放しなすつて。さあ、何卒、貴下、
……』と、ゲラシムは言ひながら、マカール・アレキセーキツチの肱を捉へて、彼を戸の方へ、用心
して連れて行かうと努めてゐた。
『貴樣は誰だ？　ボナパルトだ！……』と、マカール・アレキセーキツチは叫んだ。
『さうぢやありませんよ、貴下。お部屋へお出でになつて、少しお憩みなさい。さあ、拳銃をお渡し
下さい。』
『退がれ、下劣な奴隸奴！　俺に觸るな！　こら？』と、マカール・アレキセーキツチは、拳銃を振り
ながら、叫んだ。
『奴等を圍め、』
『取れよ！』と、ゲラシムは門番に囁やいた。

二人はマカール・アレキセーキツチの兩腕を捉へて、戸の方へ引き摺つた。
玄關の間には、見苦しい摑み合ひと、醉拂つた嗄れ聲や喘ぎ聲などが滿ちてゐた。
突然、新らしい音、銳い女の叫び聲が、玄關の方から聞えた、そして、料理女が玄關の間へ馳け込
んで來た。
『彼奴等が！　大變ですよ！……どうしませう、彼奴等がやつて來たんですよ！　四人、騎兵が！』
と、彼女は叫んだ。
ゲラシムと門番とは、マカール・アレキセーキツチを放した。すると、靜かになつた廊下の中で、
彼等は、數人で正面の入口を叩く音を明瞭と聞くことが出來た。

二十八

自分の計畫を實行するまでは、自分の地位やフランス語の智識を隱くしてゐなければならぬと、心
の中で決心してゐたピエールは、半ば開いてゐる廊下の扉口に立つて、フランス人が入つて來ると直
ぐに隱れてしまはうと思つてゐた。が、フランス人は入つて來たが、ピエールは戸の傍を離れなかつ
た、抵抗し難い好奇心が、彼をそこに止めたのであつた。

フランス人は、二人入つて來たのであつた。一人は——丈の高い、品のある奇麗な將校で、もう一人の方は、確かに兵卒か、從僕かと思はれる、頰の窪んだ、鈍い表情の、屈んだ、痩せた、日に燒けた男であつた。將校は、跛を引き、杖に縋りながら、先きに入つて來た。數歩進むと、將校は、良い宿舍だと心を決したらしく、立ち止まつた。そして後を振り返つて戸口に立つてゐた兵卒等に、馬を入れるやうにと、高い、命令的な聲で叫んだ。さうしてから、將校は、氣取つた樣子で、片肱を高く上げて、その口髭を捻り、帽子に手を掛けた。

『Bonjour, la compagnie!（今日は、皆樣！）』と、彼は、快活に言つて、微笑みながら四邊を見廻はした。

誰も返答をする者はなかつた。

『Vous êtes bourgeois?（貴下が、主人かね？）』と將校は、ゲラシムに尋いた。

ゲラシムは、驚ろいて、不審さうに、將校を見返した。

『Quarteer, quartire—logement"!（宿舍、宿舍、宿だ、）』と將校は、卑下つた、上機嫌の微笑を滿へ、その小男を頭から足先まで見廻しながら言つた。『フランスは、人の好い青年だよ。お互に仲良くしやうぢやないか、お老爺さん。』と、彼は面喰つて、默つてゐるゲラシムの肩を叩きながら附け足した。『A! Dites donc, on ne parledonc français dans cette boutique?（おい、この家には、誰かフランス語が話せるものはゐないのかね？）』と、彼は附け足して周圍を見廻し、ピエールと眼を見合はせた。ピエールは戸口から引込んだ。

將校は、またゲラシムの方を向いた。彼は、家の中の室々を見せてくれとゲラシムに求めた。

『主人はゐない——解りません……私の、貴下の……』と、ゲラシムは、自分の言葉を解り易くしやうと思つて、それを逆の順で言つた。

將校は、微笑みながら、ゲラシムの鼻の前で手を振り、自分の方でもゲラシムの言ふことが解らないことを知らせて、跛を引きながら、ピエールが立つてゐた戸口の方へ歩いて行つた。ピエールは、引込んで、將校から隱れやうとしたが、その刹那に、彼は、マカール・アレキセーキツチが手に拳銃を持つて開いてゐる臺所の戸口から覗いてゐるのを見附けた。彼は狡猾な馬鹿者のやうにフランス人を見、拳銃を擧げて狙つた。

『打つ倒せ!!』と、醉漢は喚いて、引金を引こうとした。フランスの將校は、その喚聲の方へ振り返つた、と、同時に、ピエールは、醉漢の方へ飛んで行つた。ピエールが、拳銃を摑んで、それを取り上げやうとする途端に、マカール・アレキセーキツチの指は、とう〳〵引金を引いた、と、耳を聾する銃聲が鳴り響いて、火藥の煙がみんな包んだ。フランス人は眞蒼になつて、戸口へ駈け戻つた。

フランス語を知つてゐることを隱さうと思つてゐたことは忘れてしまつて、ピエールは、拳銃を擡

き奪り、それを投げ捨て、將校の傍へ駈け寄つて、フランス語で話しかけた。

『負傷はありませんでしたか?』と、ピエールは言つた。

『無いやうです、』と、將校は、身體に觸つて見て、答へた。『けれども、危くやられるところでしたよ、』と、彼は壁の土が落ちてゐるのを指差しながら言ひ添へた。『この男は、何者です?』と、彼は尋いて、ピエールを嚴かしい顏で見た。

『いや、とんでも無いことをし出來かしたものです、』と、ピエールは、全く自分の役目を忘れてしまつて、早口に言つた。『これは狂人で、不幸な人間で、自分のする事が解らないんです。』

將校は、マカール・アレキセーヰツチに近づいて、其の襟首を捉へた。

マカール・アレキセーヰツチは、唇を突き出して、眠つてしまつたやうに、壁に倚りかゝつて、點頭いた。

『强盜奴、この儘に棄てゝは置けんぞ、』と、フランス人は、彼を放して、言つた。『吾々は、勝利の後で、情深くしてゐるんだが、謀叛人は宥さんぞ、』と、彼は、顏に陰鬱な威嚴をもち、氣取つた、力强い身振りをして附言へた。

ピエールは、フランス語で、この醉拂つた白痴を嚴しくしないでくれと、將校に說かうと努めた。フランス人は、前と同じ陰鬱な樣子で、默つて耳を傾けてゐたが、そのうちに、突然、微笑みながら、

ピエールの方を振り向いた。數秒の間、將校は默つてピエールを凝視めてゐた。彼の奇麗な顏には、准樂劇的な優しい表情が浮んだ、そして、彼奴片手を差し伸べた。

『Vous m'avez sauvé la vie! Vous êtes français!(貴下は、私の生命を救つて下すつた、貴下はフランス人ですね、)』と彼は言つた。

フランス人は、かういふ推斷を疑はなかつた。偉大な行動は、フランス人によつてのみなさるゝのであつて、彼、卽ち第十三輕旅團の大尉モシユ・ラムバルの生命を救ふのは、疑もなく最も偉大な行動なのであつた。

が、この推斷と、その推斷の上に成し立てた將校の確信とが如何に確實なものであるにせよ、ピエールは、この問題に就ては、將校の迷妄を醒ますのが宜いと思つた。

『Je suis russe(私は、ロシア人です。)』と、彼は早口に言つた。

『そんな事は、他の者に言ひ給へ、』と、フランス人は、微笑んで、その鼻の前で指を振りながら、言つた。後で、すつかり話を聞かして下さい、Charmé de rencontrer un compatriote.(同國人に遭つたのは、嬉しいです)で、この男をどうしたものでせうねえ?』と、彼は附言して、もう同胞でゞもあるやうに、ピエールに相談した。

ピエールが實際フランス人で無いにしても、世界で最も名譽あるフランス人だといふ名を受けた上

では、それを拒絶しやうとは思ふまいといふのが、フランス将校の表情や聲の調子に現はれてゐた。

彼の最後の問に對して、ピエールはもう一度、マーカル・アレキセーキツチがどういふ人間であるかと云ふことや、将校の來る少し前に、此の醉拂つた白痴が、彈を裝塡めた拳銃を持ち出さうとしたことや、みんなが、それを取り上げることが出來なかつたことなどを説明した、そして、ピエールは、彼の行爲を罰しないで、宥してやつてくれとフランス人に賴んだ。

フランス人は、胸を張つた、そして、崇嚴ぶつた手眞似をした。

『貴下は、私の生命を助けて下すつたんだ！　貴下は、フランス人なんだ。その貴下が、あの男を宥してくれと私に賴むんだ。あの男を宥しませう、あの男を釋放してやりませう、』と、フランス将校は、口早に、力强く言ひ、彼の生命を救つたので、フランス人といふ位に昇進させられたピエールの腕を執つて、彼と一緒に家の中へ這つて行つた。

庭にゐた兵卒等は、銃聲を聞きつけ玄關の間にやつて來て、何事が起つたのかを聞き、犯罪人達を罰しやうと言つた、が、将校は嚴つく彼等を止めた。

『用がある時は、呼ぶ、』と、彼は言つた。

兵卒達は出て行つた。その時臺所にゐた從卒が、将校の傍へ近づいた。

『大尉、臺所に奴等の肉汁と山羊の燒肉があります、』と、彼は言つた。『持つて參りませうか、』

『うん、それから、葡萄酒を、』と、大尉は言つた。

二十九

フランスの将校が、部屋へピエールを引張り込んだ時に、ピエールは自分がフランス人でないといふことを、今一度大尉に確めて置くのが自分の義務だと思つた、そして退らうと思つた、が、フランス将校は、それを聞かなかつた。将校が、餘りに禮儀正しく、鄭重で、上機嫌で、そして、生命を救はれたことに對して、心から感謝してゐたので、ピエールは辭ることが出來ずに、二人が入つた最初の部屋なる大廣間でフランス人と一緒に坐つてゐた。自分はフランス人で無いと云ふピエールの主張に對して、大尉は、どうしてそんな名譽ある名を拒絶するのかが分らないといふやうに肩を揺つた、そしてピエールが何處までもロシア人で通さうといふのなら、それはさうして置かう、が、それには拘らず、自分は自分の生命を救つてくれたことに對する感謝の情で、永久にピエールと繋がれてゐると言つた。

若しこの男が、他人の感情を理解する能力をホンの少しでも持つてゐて、ピエールの感じを洞察したなら、ピエールは、多分この男の傍を去つたであらう。けれども、この男の、自分に關係の無い事

には、何事にも餘りに無頓着なことが、ピエールを征服してしまつた。

"Français ou prince russe incognito. (フランス人でも、變裝してゐるロシアの公爵でも、) とフランス人は、ピエールの汚れてはゐるが立派な襯衣と、その指にはめてゐる指輪とを見ながら、言つた。『私の生命があるのは、貴下のお蔭なんですから、私は、貴下と友達になりたいんです。フランス人は、侮辱を決して忘れませんが、それと同時に恩も忘れません。私と友達になりませんか。私の言ふのは、これだけです。』

將校の聲や、顏の表情や、身振などに、非常に人の好い、氣品のあるところ(フランスの意味での)が見えたので、ピエールは、思はず彼の微笑に微笑をもつて答へ、彼の差し伸べた手を握つた。

『九月七日の戰鬪で動章を授けられた、十三輕騎隊の大尉ラムバルです、』と、彼は、滿足さうな抑へ難い微笑で口髭の下の唇に皺を寄せながら自分を紹介した。『あの狂人に撃たれて、野戰病院に收容されてゐるもしないで、私がこんなに愉快にお話をしてゐる貴下のお名前を聞かして下さいませんか。』

ピエールは、名を言ふことは出來ないと答へ、變名を考へながら名乘ることの出來ない理由を、顏を赤めて話し始めた。が、フランス人は、急いで、彼を遮つた。

『もう澤山です！』と、彼は言つた。『貴下の理由は、分りました。貴下は、將校ですね……參謀將校でせう、貴下は、吾々に對して、武器を執つたんですね。そんなことは、私の構ふこつちやないんです。貴下は私の生命の恩人です。貴下は私はそれでもう澤山なんです。貴族ですね？』と、彼は、尋ねるやうな聲調で、附言した。ピエールは頭を下げた。『貴下の洗禮名を、何卒、それ以上はもう聞きません。ムシュ・ピエールですか？ それで充分、私の知りたいのは、たゞそれだけなんです。』

山羊肉、オムレツト、湯沸器、火酒、それから、フランス人等が、ロシア人の穴藏から持ち出して來てゐた葡萄酒などが運ばれると、ラムバルは、ピエールに午餐を一緒に喰べてくれと、頼んだ。そして、直ぐ、健康な、餓えた人のやうに貪ぼるやうに急いで喰べ始め、丈夫な齒で、急がしく嚙み、斷えずその唇をパク〳〵言はせて、'Excellent! exquis!'(上等だ！美味い！)と、言つた。彼の顏は、赤くなつて汗が出てゐた。ピエールも、空腹だつたので、喜んで食事を一緒にした。從卒のモオレルが、燒鍋に湯を入れて來て、その中へ赤葡萄酒を一罎入れた。彼は、又味はつて見るために、臺所から麹酒を一罎持つて來た。その飲料は、もうフランス人には知られてゐて、名を附けられてゐた。彼等は、それを "limonade de cochon" と呼んでゐた。そして、モオレルは、彼が臺所で見附けたその『豚のレモン水』を賞めた。が、大尉には、モスクワを通過してゐるうちに手に入れた葡萄酒があつたから、彼は麹酒をモオレルに任せて置いて、ボルドオの壜を攻撃した。大尉は、壜の口を口拭布で纏んで、自分にも、ピエールにも葡萄酒を注いだ。酒と飢の滿足とが、大尉を尙一層陽氣にした、

で、彼は午餐の間ぢう、絶間無しに喋り立てた。

『左様、親愛なるムシュ・ピエール、あの狂人から私を救つて下すつたから、貴下のために、良い感謝の蠟燭を上げなければならんのです。私の身體には、もう幾つも彈丸を受けてゐますよ。この一發は、ワグラムの奴です、』(彼は自分の横腹を指した)、『この二發目は、スモオレンスクの奴です、』(彼は、頬の疵痕を指した)『お覽の通りこの脚は動かないんですがね。之は七日のモスクワの大戰で、からなつたんです。やあ、實に壯んだつたですよ！　貴下見れば宜かつたねえ、まるで銃砲火の大洪水だつたですよ。貴下がたは、吾々に隨分手強い戰をやらせましたね。貴下がたはあれを誇つても宜いですよ。實際。で、私は今風邪に罹つてゐるのだが、あれなら、何時でももう一遍やるね。あれを見なかつた人は、氣の毒だ。』

『私は、あすこにゐましたよ、』

『眞實に！』と、フランス人は、言つた。『いや、それは結構です。だが、貴下がたは、立派な敵でしたよ。大堡壘は、善く守られましたね、實に。で、それがために、貴下がたは、吾々に非常な損害を拂はさせましたよ。私は其處へ三度行きましたから、それはあなたが私を見てゐるやうに確かです、吾々は、三度大砲に近づいて、三度板紙の兵隊のやうに追ひまくられたんです。いや、實に壯んでしたなあ、ムシュ・ピエール。貴下の方の選拔兵は立派でした、實に。私は、彼等が六度續けて密集して、觀

兵式のやうに行進するのを見ました。立派な奴等だ、それをよく知つてゐる吾々のネエプルス王は、偉哉！　と叫びましたよ。あゝ、あゝ、吾々どもと同じやうな兵、』と、彼は一寸默つてゐてから微笑しながら言つた。『ぢやあ、結構です、結構です、ムシュ・ピエール、戰には獰猛で……女には優しい、(彼は微笑して瞬をした)それが、フランス人です、ムシュ・ピエール、そうぢやありませんか？』

大尉が、あんまり朴直で、機嫌よく快活で、人が好く、自分で滿足してゐるので、ピエールは、彼を面白さうに見ながら、殆んど瞬もしなかつた。『優しい』といふ語が、モスクワの現狀を大尉に考へさせたらしかつた。

『時に、どうです、女はみんなモスクワを去つてしまつたといふのは、眞實ですか？　何といふ奇怪な考でせう！　何が怖ろしんだらう？』

『ロシア人が、パリイへ入るとしたら、フランスの女は、パリイを去らないでゐるでせうか？』と、ピエールは言つた。

『は——は——は！』と、フランス人は、陽氣に、心から噴笑して、ピエールの肩を叩いて。『それは面白い、それは、』と彼は、續けた。"paris ?—Mais paris, paris" (パリイ？——だが、パリイは、パリイは、)

『paris la capitale du monde ! (パリイは、世界の都だ！)』と、ピエールは言つた、大尉の言ひ切

らなかつた話を補つた。

大尉は、ピエールを見た。彼は談話の最中に話を切つて、笑をたゝへた愛嬌のある眼で凝と見る癖があつた。

『いや、若し貴下がロシア人だと云はなかつたら、私は、貴下がパリイ人だと言つて賭をするのでした。貴下の様子には何とも言へぬ或るものがある……』と、彼はかういふお愛想を言ひ、また黙り込んで、ピエールを凝視めた。

『私は、パリイにゐました。何年も彼地で暮らしましたよ、』と、ピエールは言つた。

『誰にでも、さう見えますよ！　パリイ！　パリイを見たことの無い者は、野蠻人だ……。パリイ人は、二哩離れて見ても、直ぐ分ります。パリイ——それは、タルマです、ラ・デュシェノアです、ボチェーです、ラ・ソルボンヌです、廣小路です。』彼は、自分の語句の結句が、少し漸降であると感附いたので、急いで附言した、『世界にパリイはたゞ一つあるのみだ……貴下は、パリイにゐたことがある、それで、やはり貴下はロシア人だ、いや、それがために、貴下を安く見るわけではありませんがね。』

ピエールは、幾日も陰氣なことを考へてたゞ獨り過した後なのと、飲んだ酒の故とで、この機嫌の好い、朴直な男と話をするのを愉快に思はざるを得なかつた。

『お國の婦人の話に戻りますが、みんな美しいさうですね。フランス軍が、モスクワへ來たのに、曠野へ行ついて、曠野の中へ自分等を埋めてしまふなんて、何といふ愚な考なんでせう。彼等は、實に好い機會を失つたものですね、貴下がたの農夫は別です、が、貴下がた文明人は、もつとよく吾々を分らなきやあならん筈ぢやありませんか。吾々はウインナ、ベルリン、マドリツド、ネヱプルス、ローマ、ワルソウ——といふやうな世界の凡ゆる都を取りました。吾々を知る價値がありますで、それから、皇帝は……』と、彼は始めた、が、愛されてゐます。ピエールが彼を遮つた。

「皇帝、」と、ピエールが、繰り返した、と、彼の顔は、急に悲しさうな、當惑した表情を帶びた。『皇帝がどうなんです？』

『皇帝ですか？　陛下は、大膽で、慈悲で、公正で、秩序で、天才——それが皇帝なんです。かう言ふのは、私、このラムバルですよ。私は八年前は陛下の敵でした。私の父は、他國へ移住した伯爵でした。が、陛下は私を征服してしまつたのです。あの人は。陛下は私を捉まへてしまつたんです。私は、陛下が、偉大と光榮を以てフランスを蔽ふてゐるその光景に抵抗することが出來ないのでした。私が、陛下の希望を了解すると、陛下が、吾々のために桂の寢床を用意してゐることが分ると、私は自分に言ひました、「これが王者だ。」それで、私は自分を陛下に任してしまつたのです。實に陛下は、過去の世紀と、來らんとする世紀の偉人ですよ。』

『で、皇帝は、モスクワに居られるんですか?』と、ピエールは口訥りながら、ビク〳〵した顏容で、尋いた。

フランス人は、ピエールのビク〳〵した顏を凝視めて、にやりと笑つた。

『いや、陛下は、明日入城されるんです。』と彼は言つて、話を續けた。

二人の話は、門で叫んでゐる五六人の聲で遮られた。と、モオレルが入つて來て、幾人かのウルテムブルグ驃騎兵が來て、大尉の馬が繫いである屋敷へ、馬を繫がうとしてゐることを、大尉に話した。驃騎兵には彼等の言ふことが解らないので、重にそれがために面倒なのであつた。

大尉は、驃騎兵の指揮者の曹長を自分の前へ呼び出さして、威かめしい聲で、何聯隊の者か、指揮官の將校は何といふ人であるか、どういふ理由で、既に他人が占領してゐる宿舍を占領しやうとするのかといふやうなことを尋いた。フランス語をよく知つてゐない、そのドイツ人は、最初の二つの問に答へて、自分の聯隊と指揮官の名を言つたが、どういふことだか解らなかつた最後の問に對して、滅茶々々のフランス語とドイツ語とで、自分は聯隊の給養係であるが、長官からこの街路の家をみんな占領しろといふ命令を受けたのだと、答辯した。ドイツ語を知つてゐるピエールは、ドイツ人の語を大尉に通譯し、大尉の返答を又ドイツ人に通譯した。自分に言はれたことが解ると、ドイツ人は、服從して、部下を連れて去つてしまつた。

大尉は、入口へ出て行つて、大きな聲で何か命令を與へた。

彼が部屋に歸つて來た時には、ピエールは、兩手で頭を押へて、前に坐つてゐた所に坐つてゐた。彼の顏は、苦悶を現はしてゐた。彼は、實際その時、苦悶してゐたのである。大尉が出て行つて、ピエールだけになると、彼は突然我に返り、自分の立場に氣が附いた。その時、彼を苦悶させたのは、モスクワの取られたことでなく、又これ等の幸運なる勝利者等が、モスクワで勝手に擧動ひ、彼を保護してゐるやうな顏をしてゐることでもなかつた。彼は、之を如何にも慘めなことだと感じてゐたが、然しその時彼を苦しめたのは、これではなかつた。彼を苦しめたのは、自分の意氣地が無いことの意識であつた。彼が飮んだ幾杯かの酒と、この人の好い男と喋つたことゝが、彼がこの數日間感じてゐた心持、即ち彼の計畫を實行するに緊要な思ひ詰めた憂鬱な氣分を消散させてしまつた。拳銃や、短劍や、農夫の外套は用意されてゐた、ナポーレオンは、明日入城しやうとしてゐるのだ。ピエールは、前のやうに、惡漢を殺すことは、有益なことであり、又當然なことであると思つてゐた。が、今彼は、もうそんなことが出來さうにないことを感じた。何故だらう? 彼には分らなかつた。が、彼はもう自分の計畫を實行することが出來ないかのやうに感じた。彼は、自分が意氣地の無いといふ意識に打ち勝たうとして腕いた、が、それに打ち勝つことの出來ないこと、復讐、虐殺、自己犧牲といふやうな、彼がこれまで持つてゐたさま〴〵の觀念の陰鬱な連續が、その後、最初の人間に接すると、塵のやう

に吹き飛ばされてしまつたことを漠然と感じた。

大尉は、少し跛脚を引き、何かの歌を口笛で吹きながら、部屋へ入つて来た。

ピエールは、それまで面白かつたお饒舌が、今は嫌になりだした。それから、歌を口笛で吹くのや、彼の歩容や、口髭を捻る彼の手振などが、ピエールには今は悉く自分を侮辱してゐるやうに思はれた。『直ぐ去つてしまはう、此奴にはもう一言だつて口を利くものか、』と、ピエールは思つた。彼は、かう思つたが、やはり同じ場所に坐つてゐた。意気地の無いやうな或る奇異な感情が、彼をその場所へ釘附けにしてしまつた。彼は、立ち上つて行からうと思つたが、さうすることも出來なかつた。

大尉は、それとは反對に、非常に好い元氣であつた。彼は、二三度部屋の中を行つたり來たりした。彼の眼は輝やき、そして、彼の口髭は、彼が何か面白いことでも考へ出して獨りで笑つてゐるかのやうに、微かにピク〳〵動いた。

『Charmant! le colonel de ces Wurtembourgeois! c'est un allemand: mais brave garçon, s'il en fut. Mais allemand! (あのウルテムブルグ兵の大佐は、實に面白い、彼奴はドイツ人だ、しかし、偉くつて愛らしい男だ、だが、ドイツ人だ!)』と、彼は急に言つて、ピエールの眞向ひに坐つた。

『Apropos, vous savez donc l'allemand, vous? (時に、君はドイツ語を知つてゐますか、ねえ?)』

ピエールは、默つて、大尉を見た。

『Comment dites-vous asile en allemand? (ドイツ語では、避難所を何と云ひますか?)』

『避難所?』と、ピエールは繰返へした。

『Asile en allemand?—Unterkunft! (避難所はドイツ語では——「ウンテルクンフト」です!)』

『Comment dites-vous?-(何ですつて?)』と、大尉は、早口に、疑はしさうに尋ねた。

『ウンテルクンフト、』と、ピエールは繰返へした。

『オンテルコフ、』と、大尉は言つた、そして、眼に微笑を湛へて暫くピエールを見てゐた。『les allemands sont de frères bêtes, n'est ce pas, M. pierre?"(ドイツ人は、大變な愚物だ、さうぢやありませんかね、ムシュ・ピエール?)』と、彼は、語を結んだ。

『Eh bien, encore une bouteille de ce Bordeau Mosco-vite, n'est ce pas? Morel! va nous chauffer encore une petite bouteille, Morel! (おい、このモスクワ赤葡萄酒をもう一壜持つて來てくれ、いゝか? モオレル! もう一壜温めてくれ、モオレル!)』と、大尉は、快活に呶鳴つた。

モオレルは、蠟燭と一壜の葡萄酒とを持つて來た。大尉は、蠟燭の光で、ピエールを見た、そして、その話相手の苦悶してゐる顏を見て驚いたやうであつた。ラムバルはその顏に心からの氣の毒さと同情とを表はして、ピエールに近づいた、そして、彼の上へ身體を曲げた。

『Eh bien nous sommes tristes.（ねえ、何か悲しいことがあるのですか、）』と、彼は、ピエールの腕に觸つて、言つた。『何か僕が君のお氣に障つたかね？　いや、實際、君は僕に對して氣に障つたことがあるんぢやないかね？』と、彼は、尋いた。『貴下の悲しみは、時勢のためなんだらうね？』

ピエールは、答へなかつた、が、フランス人の眼を親しげに見た。この同情の表情が、フランス人には心持が好かつた。

『實際、僕が君のお蔭になつたことを別としても、僕は君が好きだ。君のためになら何でもしますよ。僕に何でも云つてくれたまへ。僕は、生死にかけて云ふんだ。僕は赤心で、かう云ふんだ。』と、彼は言つて、自分の胸を叩いた。

『有難う、』と、ピエールは言つた。

大尉は、彼が「避難所」と云ふドイツ語を教はつた時にピエールを凝視めたと同じやうに、ピエールを凝視めてゐたが、突然、彼の顏が晴々として來た。

『いや、さういふ譯なら、吾々の友情に對して、盃を擧げませう、』と、彼は快活に叫んで、二ツの杯に酒を注いだ。

ピエールは、なみ〳〵と注がれた杯を取り上げて、それを飲み乾した。ラムバルも、自分の杯を乾し、もう一度ピエールの手を握つた。そして、沈んだ物悲しさうな樣子をして、卓子に肱を突いた。

『左樣、君、運命の氣紛れといふのは、こんなものだよ、』と、彼は、始めた。『僕がいつもボナパルトと呼び馴れてゐるその人に仕へる軍人となり、龍騎兵の大尉にならうとは誰も思はなかつたらう。けれども、僕は彼と共に、このモスクワにゐるのぢやアないか。ねえ、君、』と、彼は、長い物語をしやうと思ふやうな悲しげな、調子の整つた聲で、續けた。『僕の家の姓は、フランスでは一番舊家の中の一つなんだよ。』

で、フランス人の、氣輕るな、卒直な、無遠慮をもつて、大尉は、その祖先の歷史や、彼の幼時や、少年時や、壯年時や、彼の凡ての親戚や、彼の財產や、家庭の事情などを、ピエールに話した。"Ma pauvre mère,"（僕の哀れな母親）のことが、勿論この話の主要な部分をなしてゐた。

『だが、こんなことは皆、人生の嵌込物に過ぎないんだ、眞實のものは、戀だよ。戀だよ！　さうぢやありませんか、ムシュ・ピエール？』と、彼は、熱して來て、云つた。『もう一杯。』

ピエールは、また自分の杯を乾し、自分で三杯目を注いだ。

『Oh' les femmes' les femmes！（あゝ、女！　女！）』で、大尉は、潤ふた眼でピエールを見ながら、戀や、女性に對する彼の冒險の話を始めた。

さういふ話は、非常に多かつた。さうであらうとはこの將校の氣取つた奇麗な顏や、彼が女のことを話す一生懸命な熱心から判斷すれば、誰にでも直ぐ信じられることであつた。ラムバルの戀物語は

みんな、フランス人が、その中に獨特の妙味と戀愛の詩とを見出す、かの特種の汚ない性質のものではなかつたが、大尉は、その幾つもの物語を、自分は、戀の凡ゆる旨味を味ひ且つ知つてゐる唯一の男であるといふ心からの確信をもつて話したし、彼が關係した女のことを聽者を釣り込むやうな風に物語つたので、ピエールは好奇心をもつて、耳を傾けたのであつた。

フランス人が、これほど好いてゐた『戀』なるものは、ピエールが、嘗つて自分の妻に對して感じたかの低い單純な種類の戀でもなければ、彼がナターシヤに對して感じてゐた、ロオマンチツクな戀でもなかつたことは明かであつた。さういふ二種の戀をラムバルはいづれも卑しんでゐた——その一つは、"l'amour des charretiers" (車夫の戀)であると言つた。フランス人が心を引かれる『戀』といふのは、主として、女に對する不自然な關係と、感情に重な快味を與へる奇怪な事情の結合とから、成立つてゐるのであつた。

で、大尉は、三十五になる非常に美しい侯爵夫人と、その非常に美しい侯爵夫人の娘の十七になる可愛らしい無邪氣なのとへ、同時に戀をした面白い物語をした。母親と娘との間の讓り合ひは、母親が、自分を犧牲にして、自分の戀人にその娘を結婚させやうと云ひ出すのに終つたのだが、それは餘程以前の記憶であつたにも拘はらず、今も尙、大尉を深く感動させたのであつた。それから、彼は、夫が戀人の役割を勤め、彼——戀人——が、夫の役割を勤めたといふ挿話や、ウンテルクンフトがア

ジイルの意味であり、夫が甘籃肉汁を喰べ、若い娘たちがあまりに亞麻色の毛であり過ぎるドイツの憶出の中から、幾つかの滑稽な挿話を物語つた。

最後の挿話は、ポーランドでのことであつて、大尉の記憶にまだ新らしいので、彼は速い手眞似と、輝やいた顏で、それを話した。その話は、彼は或るポーランド人の生命を救つたといふ挿話が、大尉の物語の中には、いつも出て來るのであつたが、——そして、そのポーランド人が、彼の美しい妻、(情の深いパリイ女)を、彼の保護に托して置いて、自分はフランス軍に加はつた。大尉は幸福であつた、その美しいポーランド女は、彼と駈落をしやうとした、が、大尉は寬大の衝動に動かされて、『僕は君の生命を救つた、そして、今又君の名譽を救ふ。』と、言つて、夫にその妻を返へした、といふのであつた。

この語を繰り返へすと、大尉は、眼を拭いて、この興味ある追憶によつて彼を襲ふて來た弱い心を振り落さうとするかのやうに、身體を振つた。

夜遲く、酒に醉つてゐる時に、よく人の經驗するやうに、ピエールは、大尉の話を聽きながら、大尉が彼に話すことを全部聞いて、それを理解してゐながら、それと同時に、何かの拍子で、彼の想像の中へひよつくり現はれて來た自分一個のさま〴〵の記憶の連續を追ふてゐた。大尉のさういふ戀物語を聽いてゐるうちに、ナターシヤに對する自分の戀が、突然心の中へ出て來た、そして自分の想像

の中で、その戀のさま〴〵の繪を繰り擴げてゐながら、彼は、心中で、その繪をラムバルの物語と比較してゐた。戀と義理との葛藤の話を聞いた時に、ピエールは、自分の戀の相手と、サハアレフ塔で最後に遭つた時のことを詳しく自分の前に見た。その邂逅は、あの時には、そんなに深い印象を彼に與へなかつた、彼は、一度もそれを思ひ出しさへしなかつた。が、今は、あの邂逅に、非常に意味のある、ロオマンチツクな何物かゞあるやうに、彼に思はれた。

『ピヨートル・キリーロヰツチ、こゝへゐらつしやい、私が貴下を見つけたのよ。』——彼は、今、彼女の語を聞き、彼女の眼や、彼女の微笑や、彼女の旅行帽や、その下から覗いてゐる捲髪などを自分の前に見た……そして、彼は、さういふものゝうちに、人を感動させる何物かゞあるのを、感じた。

美しいポーランド婦人の物語を終ると、大尉はピエールの方を振り向いて、戀に對する犧牲や、正當な夫に對する羨みの、同じ經驗をもつてゐるかと尋ねた。

ピエールは、この問に喚び覺まされて、その頭を擧げ、自分の心の中にある考想を表白しなければならぬことを感じた。彼は、女に對する戀を、少し異つた風に見てゐることを說明し始めた。彼は、自分の全生涯を通じて、たゞ一人の女を愛し、今もやはりその女を愛してゐるのだが、その女は、決して自分のものになることは無いのだと、言つた。

『妙ですね！』と、大尉が言つた。

そこで、ピエールは、自分は始めて青年と云はれる頃からその女を愛してゐたのだが、女があまりに若過ぎるし、自分は私生兒で籍もなかつたので、彼女のことを考へやうとさへし得なかつた。所が、自分に籍と財産とが出來ると、自分は彼女をあまりに愛し過ぎ、世界中の何物よりも、自分自身よりもずつと以上に、彼女を尊敬したので、その女を思ふことさへし得なかつたと說明した。

こゝまで話すと、ピエールは、大尉に、それが解るかと、尋ねた。

大尉は、自分に解らうが、解るまいが、構はずに先きを話してくれといふやうな手振をした。

『L'amour platonique, nuages, (プラツトニツクな戀愛だ、雲だ……)』と、大尉は呟やいた。

彼が飮んだ酒か、率直にならうとする衝動か、この男は自分の物語に關係のある人を誰も知らない、今後も知りはしないだらうといふ考慮か、若くは、さういふことの全體かゞ、ピエールの舌を弛めたのであつた。口籠つたり、潤ふた眼で何處か遠くの方を見たりしながら、彼は自分の結婚や、自分の極く親しい友に對するナターシヤの戀物語や、ナターシヤの彼に對する裏切りや、彼女と彼の單純な關係などをみんな話してしまつた。彼は、又ラムバルの間に乘つて、初めに匿くしてゐたこと——彼の社會上の地位を大尉に話し、自分の名までも明かにしてしまつた。

ピエールの話の中で、何よりも一番大尉を驚かせたことは、ピエールが、非常に金持で、モスクワに宮殿のやうな邸宅を二軒も持つてゐながら、そんなものを悉く棄てゝしまつて、やはりモスクワを去

らずに、名と地位とを隠して市に止まつてゐるといふ事實であつた。

夜更けて、二人は一緒に街へ出て行つた。晴々した暖かい夜であつた。左の方は、モスクワで初めて起つたペトロヴカの火事で明るくなつてゐた。右の方には、鎌のやうな新月が、高く懸つてゐた。そして、月と反對の空には、ピエールが自分の戀と關係があると思つてゐる光の強い彗星が輝やいてゐた。門の傍には、ゲラシムと、料理女と、二人のフランス人とが立つてゐた。彼等の笑聲や、お互に解らずにゐる話聲などが聞えてゐた。彼等は、市中で見える火事の火光を見てゐたのであつた。

廣大な市の、遠方の小さな火事には、何も驚くべきことはなかつた。

高い星の多い空や、月や、彗星や、火事の火光を眺めてゐると、ピエールは、嬉しい感動を覺えるのであつた。『何もかもみんな美しい！　人間は、これ以上、何が慾しいのか？』と、彼は考へた。が、彼が自分の計畫を憶ひ出すと、突然、彼は、彼の頭はぐる〳〵廻つて、氣分が惡くなつた。で、倒れないやうに、籬に倚れた。

三十

新らしい友人に別れを告げずに、ピエールは、ひよろ〳〵した歩調で門を去つた、そして、自分の部屋に歸り、長椅子の上に横になつて、直ぐ眠りに落ちてしまつた。

モスクワから逃げ出しつゝあつた住民と、退却してゐた軍隊とは、九月二日に起つた市での最初の火事の火光を、さま〴〵な道路から、さま〴〵な感じをもつて、凝視めた。

ラストフ家の一行は、その晩、モスクワから二十露里を距てたミュイチシチイで、宿まつた。九月の一日には、出發が遲かつたし、道路が荷馬車や軍隊のために塞つてゐたし、いろ〳〵な遺れ物をしたし、從僕にそれを取らせたりしたので一行は、その晩、モスクワから五露里の所で止まることに決めたのであつた。その翌朝、彼等は遲く起きて、そこでも又いろ〳〵と隙取つて、漸くボルシヤ・ミユイチシチイに達したのであつた。十時になつて、ラストフ家の者や、彼等と一緒に旅してゐた負傷兵等は、一層大きな村の庭や、小舍にそれ〴〵その夜を過す場所を得た。從僕等や、ラストフ家の馭者や、負傷將校の從卒等は、各自の主人に宿泊の用意を整へてから、晩飯を喰べ、馬に秣を與へて、小舍の入口へ出て來た。

隣りの小舍には、手首を碎かれたラーエウスキイの副官が臥てゐた。激しい痛みで、彼は斷えず呻いてゐた。で、その呻きが、秋の夜の闇の中で、物凄く響いてゐた。最初の晩には、この副官は、ラストフ家の人々が宿つた同じ庭で、夜を過した。伯爵夫人は、その呻き聲のために、終夜眠らなかつたと言つた。で、ミユイチシチイでは、その負傷者から遠ざかりたい計りに、汚ない小舍へ移つた。

從僕等の一人が、車寄の傍にある馬車の高い蓋の彼方の暗い夜の空に、もう一つ小さな火光を見附

けた。その一つの火光は、餘程前から見えてゐた、で、みんなは、マモノフのコサック兵が火を放けてマルイヤ・ミュイチシチイを燒いてゐるのだと云ふことを知つてゐた。

『おい、仲間、また火事だぜ、』と、從卒が言つた。

みんな、火光の方を見た。

『いや、マモノフのコサック兵が、マルイヤ・ミュイチシチイに火を放けたといふ噂だぜ。』

『マルイヤ・ミュイチシチイだつて？　いゝや、あれは、ミュイチシチイぢや無いよ、もつと遠方だ。』

『見ろ、どうもモスクワらしいぜ。』

この連中のうちの二人が、入口を離れた、馬車の中へ入り、その踏段に蹲んだ。

『もつと左だ！　おい、ミュイチシチイは、彼方、だから全然方角違ひだ。』

五六人の者がまた最初の群に加はつた。

『やア、燃えついてゐるねえ、』と、一人が言つた。『モスクワが火事だよ、友人、スシチョウスキイ町かロゴジスキイ町なんだ。』

誰も、この話に答へなかつた。そして、暫らくの間、人々はみんな、遠くで燃え熾つてゐる、この新たな火事の炎を默つて凝視めてゐた。

伯爵の侍僕（カムメルヂエネルと呼ばれてゐた）のダニロ・テレンチキツチといふ老人が、群の傍に來て、ミシカを呼んだ。

『何をお喋りしてゐるんだ？……伯爵がお呼びになつてゐるのに、誰もゐないでどうするんだ、行つて着物を片附けろ。』

『あ、水を取りに一寸出て來たばかりなんですよ。』と、ミシカが言つた。

『貴下はどう思ひます、ダニロ・テレンチキツチ？　あの火事は、モスクワだらうか、ねえ？』と、從僕の一人が言つた。

ダニロ・テレンチキツチは、何とも答へなかつた、で、少時、またみんなが默つてゐた。火光はだん〳〵廣がつた、そして、だん〳〵遠くへ燃えて行つた。

『大變だねえ！……この風と旱魃ちや……』と、また一つの聲が言つた。

『見ろよ、あの廣がることを。やあ？　おい、小鴉が見えるよ！　主よ、吾等哀れな罪人に惠みを垂れたまへ！』

『奴等が、消すだらうよ。心配するなよ。』

『誰が消すんだ？』と、その時まで默つてゐたダニロ・テレンチキツチの聲が聞えた。彼の聲は、靜かで、落着いてゐた。『あれは、モスクワだ、仲間、』と、彼は言つた。『あれは、モスクワだ、吾々の母の、白い市の……』彼の聲は、途切れた、そして、彼は、突然、老年らしく嗄聲に咽んだ。

で、彼等はいづれも、彼等が見てゐたその火光の意味を解せんとして、たゞそれだけを待つてゐたとでも云ふやうであつた。溜息や、祈禱の言葉や、老侍僕の欷歔などが聞えた。

三十一

侍僕は、家の中へ入つて、伯爵に、モスクワが焼けてゐることを告げた。伯爵は、寝衣を着て、見に出て行つた。まだ着物を脱がなかつたソーニヤと、マダム・ショツスとは、伯爵と一緒に出て行つた。ナターシヤと伯爵夫人とだけが、室の中に殘つた。ペエチヤは、もう家族と一緒にゐなかつた、彼は、トロイツツアに前進してゐる彼の聯隊に加はつて、先きへ行つてしまつた。

伯爵夫人は、モスクワが焼けてゐると聞いて、泣き出した。蒼白めて、一所を凝視めてゐた、ナターシヤは、聖畫像の下の腰掛に腰掛けたまゝ、(その部屋へ入るなり身體をドツカと下ろした其の場所に)父親の語には少しも耳を傾むけなかつた。ナターシヤは、小舍を三つ隔てゝゐるのに斷えず聞えて來る、副官の呻き聲に耳を傾けてゐた。

『まあ! 直實に大變だわ!』と、冷たくなつて、怖えて、庭から部屋へ入つて來たソーニヤが言つた。『きつとモスクワぢうが焼けてゐるんですよ、大變な火事よ! ナターシヤ、御覽なさいよ、もう

此處の窓から見えるわ。』とソーニヤは、その友達の心を引かうとするやうに、言つた。

が、ナターシヤは、自分に云はれたことが解らないかのやうに、ソーニヤを凝視め、またその眼を凝つと暖爐の隅に注いだ。ナターシヤは、その朝から、こんなに化石したやうな様子をしてゐるのであつた、といふのは、その朝、ソーニヤがどういふ理由だつたか、アンドレー公爵が負傷して、一行と一緒にゐるといふことを、不圖ナターシヤに言つたからで、伯爵夫人は、それを驚き且つ怒つた。伯爵夫人は、それまで、そんなに怒つたことが無かつたほどに、ソーニヤに對して怒つた。ソーニヤは泣いて、宥恕を請ふた、そして、今も、自分の過失を償はうとしてゐるかのやうに、始終ナターシヤの機嫌をとつて、ゐるのであつた。

『御覽んよ、ナターシヤ、眞實に怖しいやうに燃えてゐるわ、』と、ソーニヤは言つた。

『何が燃えてゐるの?』と、ナターシヤが尋いた。『あ、左樣、モスクワ。』

で、ソーニヤを遣れるためと、無下に退けて、ソーニヤの氣を惡くしないやうにするためとで、ナターシヤは、窓の方へ頭を向けはしたが、何にも見えはしない程に一寸と戸外を眺めてまた前と同じ姿勢で坐つた。

『でも、見えなかつたでせう?』

『いゝえ、眞實に見えてよ、』と、ナターシヤは、構はないで、密つとしておいてくれと嘆願するやう

な聲で言つた。

伯爵夫人とソーニヤには、モスクワの火事も、それが何うならうと、ナターシヤには、何の興味もなかつたことが、直ぐ解つたのであつた。

伯爵は、再び隔壁の後へ入つて、横になつた。伯爵夫人は、ナターシヤの傍へ寄つて、娘が病氣の時いつもするやうに、ナターシヤの頭に手の背を當てて、それから、熱があるかどうかを見やうとするやうに、唇を娘の額に觸れて、そして接吻した。

『寒いの？　ひどく震へてゐるぢやないかね？　お寢みなさいよ、』と、伯爵夫人は言つた。

『寢るの？　えゝ、宜いわ、寢ますよ。直ぐ寢ることよ、』と、ナターシヤが、言つた。

ナターシヤは、その朝、アンドレー公爵が重傷を負ふて、一行と一緒に旅をしてゐるといふ事を聞いたその最初の瞬間には、どうして、何故、何處へ、彼は行きつゝあるか、生命が危いほど重傷なのか、自分が會つてもいゝかなどさま〴〵の問を發した。が、會つてはいけない、傷は重傷ではあるが、生命には別狀は無いと、聞くとナターシヤは聞いた通りに信じはしなかつたが、自分が何を言つても、同じことしきやア答へられないといふことを見て取つたので、尋ねるのを止めて、何にも言はなくなつてしまつた。途中では始終、ナターシヤは、眼を見張つて、伯爵夫人が非常によく知つてゐて、非常にそれを怖がつたその容貌で、馬車の隅に、凝つと坐つてゐたのだ、そして、今もそれと同じ樣子

をして、腰掛に坐つてゐたのである。ナターシヤは、何か企んでゐた。彼女は、何か決心をしやうとしてゐるのか、もう今は、その決心をしてしまつたのか、であつた——伯爵夫人は、それを知つてゐた。が、その決心が何であつたかは、知らなかつた。で、それが、伯爵夫人を怖がらせ、心配させたのであつた。

『ナターシヤ、着物をお脫ぎ、ねえ、私の寢床へお入り、』

(伯爵夫人にだけ、寢臺の上に寢床がこしらへてあつた。マダム・ショツスと二人の娘たちとは、床の上の枯草の上に寢るのであつた。)

『いゝえ、母上樣、私はこゝの床の上で寢ますわ、』と、ナターシヤは、苛々して言つた。彼女は窓のところへ行つてそれを開けた。

その開いた窓から、副官の呻き聲が、尙一層明瞭と聞えた。ナターシヤは、濕めつた夜の空氣の中へ頭を出した、伯爵夫人は、ナターシヤの細そりした頸が、歎獻で震へ、窓框に突衝つてゐるのを見た。ナターシヤは、アンドレー公爵が、自分たちのゐる小舍と玄關の間で連がつてゐる他の小舍に横はつてゐることを知つてゐた、が、かの怖ろしい、絕間の無い呻き聲は、彼女を歎獻かせた。伯爵夫人は、ソーニヤと眼を見合せた。

『お寢みなさいと云つたら、ねえ、寢床へお入り、好い兒だから、』と、伯爵夫人は、輕くナターシヤ

の肩に觸つて、言つた。『さア、お寢み。』

『え、……直ぐ寢みますわ、直ぐ、』と、ナターシヤは、急いで着物を脫ぎ、下袴の紐を引き切りながら言つた。

着物を下へ落し、短上衣を着、足を折り曲げて、床の上へ造られた寢床の上に坐つた。そして肩の上へ、その短かく細い髮を投げ掛けて、それを編み始めた。彼女の細長い、慣れた指が、手早やに、巧妙に、髮を分けたり、編んだりして、編髮を結つた。ナターシヤの頭は、彼女がいつもさうする時のやうに、右左に向ひたが、彼女の熱をもつたやうに見張つた眼は、前方を眞直ぐに凝視めてゐた。夜の化粧を終ふと、ナターシヤは、入口に一番近い枯草の上に敷いた敷布の上へ、靜かに沈み込んだ。

『ナターシヤ、眞中へお寢みなさいよ、』と、ソーニヤは言つた。

『私こゝにするわ、』と、ナターシヤは言つた。『ぢやア、お寢みなさい、』と、彼女は、五月蠅ささうに言つた。そして、彼女は、顏を枕に埋めた。

伯爵夫人も、マダム・ショツスも、ソーニヤも、急いで着物を脫いで、寢た。たゞ燈明だけが、部屋に殘つてゐた。が戶外には、マルイヤ・ミユイチシチイの火事が、二露里四方を照らし、マモノフのコサツク兵が闖入した、居酒屋や、街路や、曲角などにゐる人民の叫聲が、夜蔭を破つて鳴り渡つてゐた。そして、副官の呻き聲も矢張り絕間なく聞えて來た。

長い間、ナターシヤは、家の內や戶外から聞えて來る響に耳を澄まして身動きもしなかつた。彼女は、最初、母親の祈禱や、溜息や、その身體の下で寢床の軋む音や、マダム・ショツスの聞き馴れた、嘯くやうな鼾や、ソーニヤの靜かな呼吸などを聞いてゐた。と、伯爵夫人が、ナターシヤを呼んだ。ナターシヤは返答をしなかつた。

『睡つたやうですよ、母上樣、』と、ソーニヤが靜かに答へた。

伯爵夫人は、一寸默つてゐてから、また何か言つた。が、今度は誰も返答をしなかつた。

その後で直ぐ、ナターシヤは、母親の調子の整つた呼吸の音を聞いた。ナターシヤは、蒲團の下から出てゐる小さな素足が、敷物の無い床に當つて、凍えるやうに感じたけれども、身動きもしなかつた。

蟋蟀が、凡てのものに勝つたことを喜びでもいふやうに、隙間で鳴いてゐた。雄鷄が、遠方で鳴きもう一つの雄鷄が近くで答へた。居酒屋での叫聲は、止んでしまつて、たゞ、副官の呻き聲だけが聞えてゐた。ナターシヤは起き上つた。

『ソーニヤ！　睡たの？　母上樣！』と、彼女は囁やいた。

誰も返答をしなかつた。ナターシヤは徐々と、氣を附けて立上り、十字を切つて、細そりした撓や

かな跣足で、塵埃だらけの、冷めたい床の上へ、密と歩み出た。床板が、ギイ〳〵鳴つた。彼女は、足早やに、子猫のやうに、二三歩走つた、扉の冷たい把手を摑んだ。

何か重たいものが調子よく、小舎の壁じゆうを叩いてゐるやうな氣がした、それは、戰慄と、戀と、恐怖とで波立つてゐる、彼女の心臟の皷動であつた。

ナターシヤは、扉を開け、閾を越えて、濕々した、冷めたい玄關の地面へ歩み出た。四邊の冷氣が、彼女を鮮やかにした。彼女は、跣足が睡つてゐる男に觸つたので、その男を跨いで、アンドレー公爵が臥てゐる小舎の戸を開けた。その小舎の中は、眞暗であつた。大きい、心が燻づてゐる獸脂蠟燭が、彼方の隅の、何物かゞ横はつてゐる寢臺の傍の、腰掛の上に立つてゐた。

ナターシヤはアンドレー公爵の負傷のことゝ、彼がそこにゐることゝを聞いてその朝から、アンドレーにどうしても會はうと決心してゐた。彼女には何故さうしなければならぬかと云ふことは解らなかつたが、その面會が、彼女に苦痛を與へることは分つてゐた、で、一層彼女は、是非共會はなければならないと思ひ込んだのであつた。

ナターシヤは、晩になれば、アンドレーに會へるといふ希望をもつて、終日を過したが、今、その刹那が來て見ると、どんな物を見るだらうといふ恐怖が、彼女に起つた。どんなに彼は變つてるだらう？　どれだけ以前の面影が殘つてゐるだらう？　彼は、あの副官の絕間の無い呻き聲のやうだらうか？　左樣だ、彼は全然あれと同じなのだ。彼女の想像の中では、彼は、あの怖ろしい呻き聲を人間化したものなのだ。ナターシヤは隅にある何とも知れぬ塊を見附け、蒲團の下で立てた膝を彼の肩と見違へた時、或る怖ろしい身體を想像して、やはり恐怖に慄へて立ち止つた。が、彼女を前方へ引き附けた。彼女は、一歩々々用心深く歩いた、そして、荷物の散らかつてゐる、小さな小舎の眞中まで來た。小舎の中の聖像の下にある腰掛の上に、もう一人の男（これはチモーヒンであつた）が臥てゐた、そして、床の上にもう二人（醫師と侍僕）の人が横はつてた。

侍僕は起き上つて、何か呟いた。チモーヒンは、足の傷が痛むので、眠られなかつた、で、白い寢衣と、短上衣とを着、寢帽を冠つた娘の不思議な姿を、眼を開かれるだけ見開いて、凝視めた。侍僕の眠むさうな、怖々した『え？　何のご用ですか』といふ語は、ナターシヤをして、隅に臥てゐる人の方へ急がせるに過ぎなかつた。今、その姿がどれほど人間らしくない怖ろしいものにしても、彼女はその人を見なければならなかつた。彼女は、侍僕の傍を通つた、燻つてゐる蠟燭が、燃え上つた。そして、彼女が今迄見たのと同じアンドレー公爵が、蒲團の上にその腕を伸ばして、臥てゐるのを瞭然と見た。

彼は、以前と少しも變つてゐなかつた、が、顏の燃えるやうな赤味と、彼女を熱烈に凝視むる輝やかしい眼と、殊に、襯衣の折襟から拔け出てゐる、優しい、子供のやうな頸とが、彼女が以前には見

たことがなかつた、特に無邪氣な、子供らしい容貌を彼に添へてゐた。彼女は、彼の傍へ近寄つた、
そして、撓かな、若々しい身振りをして、素速やく跪づいた。
彼は微笑んで、ナターシヤに手を差し伸べた。

三十二

アンドレー公爵が、ボロヂイノ戰場の野戰病院に自分がゐるのに氣が附いた時から、七日經つた。
その間ぢう、彼は、殆んど斷えず昏睡狀態にあつた。熱と、傷められた內臟の炎症とが、この負傷者
に隨いてゐた醫師の言葉によれば、どうしても彼を死なせるのであつた。が、七日目に、彼は、麵麭
の一片と、茶とを少し、旨がつて喰べた、醫師も、熱が下つて行くのを認めた。アンドレー公爵は、
朝になると意識を回復した。モスクワを出てから最初の晩は、可成り暖かであつた、で、アンドレー
公爵は、馬車の中で、その晩を過した。が、ミュイチシチイで、彼は小舍の中へ移つて、茶をくれと
自分で頼んだ。小舍へ連れて行くために痛みが、アンドレー公爵をして大聲で唸らせ、また意識を失
はせた。彼は、陣用寢臺に臥かされると、長い間、眼を閉ぢて、動かずに、橫になつてゐた。やがて、
彼は眼を開けて、『茶はどうした?』と、靜かに囁やいた。醫師は、かういふ風に、日常生活の小さい

ことを記憶してゐるのに驚いた。彼は脈を見た、と、脈が前よりも確かになつてゐるのに驚き、同時
に、不滿を感じた。醫師が不滿を感じたのは、その經驗によつて、アンドレー公爵の生命はどうして
も助からぬし、若し今彼が死な無いとすれば、少し後になつてもつと苦しんで死ななければならぬと
云ふことを確信してゐたからであつた。モスクワからアンドレー公爵と一緒に、彼の聯隊の少佐なる、
鼻の赤い、チモーヒンが運ばれてゐた。彼は、同じボロヂイノの戰で足に傷を受けたのであつた。醫
師と、公爵の侍僕と、馭者と、二人の從卒とが、彼等に附き添ふてゐた。
アンドレー公爵は茶を貰つた、彼は、何事かを理解し、憶ひ出さうとしてゐるやうに、自分の前の
戶を神經的な眼付で見ながら、貪るやうに茶を飮んだ。
『もう澤山、チモーヒンもそこにゐるのか?』と、彼は尋いた。
チモーヒンはベンチの上を匐つてアンドレーに近寄つた。
『こゝに居ります、閣下。』
『君の傷はどうだね?』
『私のですか? 大丈夫です、ですが、閣下は如何ですか?』
アンドレー公爵は、何事かを想ひ出さうとでもするやうに、また考へ込んだ。
『こゝでは書物は手に入るまいか?』と、彼は言つた。

『何の書物ですか?』

『聖書だ! 僕は持つてゐないんだ。』

醫者は、それを持つて來てやると約束した、そして、容體を公爵に尋き始めた。アンドレー公爵は、嫌ではあつたが、醫者の種々な問には正確と答へた、それから、彼は、今のまゝでは非常に苦しいし、心持が悪いから、身體の下へ物を入れて支へるやうにして貰ひたいと言つた。醫者と、侍僕とは、彼の上に被さつてゐた外套を剝いで、傷から來る腐つた肉の堇々しい臭氣に顏を顰めながら、恐ろしい傷所を見始めた。醫師は、何か非常に心配してゐた、彼が少し位置を變へるために、寢返りをさせたので、アンドレーはまた唸り、寢返りの時の疼痛のために、また意識を失つて譫言を言ひ始めた。彼は、矢張り聖書を持つて來て自分の下に置いて呉れと云ふことばかり言つた。

『それがどれ程面倒なんだらうなあ?』と、彼は、言ひ續けた。『僕は持つてゐないんだよ、手に入れてくれたまへ、何卒——寸時、それを身體の下へ入れてくれ、』と、彼は、哀れな聲で言つた。

醫師は、手を洗ひに玄關へ行つた。

『あゝ、良心といふものを少しも持つてゐないなあ、貴樣たちは、眞實に、』と、醫師は、彼の手に水を注いでゐた侍僕に言つてゐた。『一分間看視してゐないと、いや、あの痛みをよく耐へてゐられるものだ。』

『ちやんと身體の下へ入れたと思ふんですが、實際でございます、』と、侍僕が言つた。

アンドレー公爵が、初めて、自分が何處にゐるのか、自分の身にどういふことが起つてゐるのかを瞭然と知り、自分が負傷してゐることを想ひ出したのは、馬車がミュイチシチイで止まつた時で、その時彼は小舍の中へ入れてくれと頼んだのであつた。痛みのために再び知覺を失つて、次には小舍の中で繰り返へすと、彼は自分が野戰病院で、自分の好かない男の苦むのを見た時、幸福の希望を伴つた或る新しい考慮が彼の心に起つて來たその刹那を最も生々と想ひ出した。で、それ等の考慮は、漠然として、形の無いものであるが、今また彼の心を占領した。彼は自分が今新らしい幸福をもつてゐることを憶ひ出し、その幸福が聖書と何かの關係があるやうに思つた。それで、彼は、聖書が欲しいと云つたのであつた。が、彼の位置が悪かつた爲に彼が感じた傷所の疼痛と、新たにその位置を更えたことが、彼の考慮を再び混亂させた、で、彼が三度目に、自分に返つたのは、夜が全く靜かになつてからであつた。彼の周圍の者は、皆眠つてゐた。油虫が、卓子や、聖像や壁の上を、ガサ〳〵歩いてゐた。一匹の蜉蝣が、玄關の外で鳴いてゐた。何者かが、街で、叫んだり歌つたりしてゐた。油虫が、卓子や、聖像や壁の上を、ガサ〳〵歩いてゐた。大きい蠅が、彼の枕の上や、彼の傍に、大きな心で燃えてゐる獸脂蠟燭の周圍を飛んでゐた。

アンドレー公爵の心は、常態ではなかつた。健康な人は、普通、數限りもない多くの物を同時に考

たり、感じたり憶ひ出したりするが、その中から一つの思想若くは現象を撰んで、それに自分の注意を集中させる力と心的能力とをもつてゐるものである。健康な人は、深い冥想に耽つてゐる時でも、人が入つて來れば、その考慮を中止して、その人に挨拶をし、それから、又考慮に戻るのである。アンドレー公爵の心はこの點から見て、常態ではなかつた。彼の心の全能力が、平常よりも、餘程明瞭で、敏活であつた、が、それ等の能力は、彼の意志とは全然離れて働らいてゐた。又全然別種の觀念や心象が同時に彼を占領してゐた。何うかすると、彼の腦は、俄かに、健康な時に働くことが出來なかつた程力强く、明瞭と、深刻に働き出すのであつた。が、その考慮は活動の最中に突然中斷されて、或る意外な心象に代り、最う後へ戻ることが出來なかつた。

『左樣だ、人間から取り去ることの出來ない新らしい幸福が、俺に啓示されたんだ、』と、彼は、靜かな薄暗い小舍の中に横はり、神經的に眼を見開き、凝つと一處を凝視めながら考へた。『物質の力が達せられないところにある幸福だ、人間に與へられる物質的な、外的な勢力以外の幸福だ、靈魂だけの幸福だ、愛の幸福だ！　それを理解することは、誰にも出來るんだ、だが、それを知り、それを與へることの出來る者は、たゞ神だけなんだ。けれども、神はどうしてこの法則を與へたまふたのだらう？　何故「神の子」なのだらう？……』

と、唐突に、その考慮の續きは斷れてしまつた、そして、アンドレー公爵は、（人事不省の中でか、

現實でか分らなかつたが）『ピチ——ピチ——ピチ、』それから、『イ——チ——チ、』再た『イピチ——ピチ——』再た『イチ——チ』と、絶えず間拍子をとつてゐる、靜かな、囁くやうな音樂と共に、アンドレー公爵は、非常に細い針か、割り木で造つたやうな、不思議な、ふは〳〵した建物が、彼の顏の上へ、その眞中央へ起ち上つて來るやうな氣がした。彼は、（さうするのは、彼にとつては困難であつたのだが）、この起ち上つて來る建物が、倒れないやうに、一生懸命に均衡をとつてゐなければならないやうな氣がした、が、それでも、その建物は、倒れた、そして、又それが、囁く音樂の調子の整つた間拍子で徐々起ち上つて來るのであつた。『延びて行く、延びて行く、擴がつて行く、だん〳〵擴がつて行く！』と、アンドレー公爵は、獨言を言つた。吃聲に聞き惚れ、針の建物が起ち上つて來るのを感じてゐると同時に、アンドレー公爵は、蠟燭の周圍の赤い圈をチラチラと見、油蟲がゴソ〳〵と匂ふ音や、蠅が彼の枕と顏とに衝突りながらブン〳〵いふのを聞いた。蠅が彼の顏に觸る毎に、それが彼に螫すやうな感覺を與へたが、同時に、彼の顏の上に起ち上つてゐる建物の眞中央に蠅が衝突つても、建物が崩れてしまはなかつたのに彼は驚いた。が、それよりも、もつと不思議なものが一つあつた。それは、戸口にある白い物であつた、それはスフインクスの塑像で、それも矢張り莖く彼の心を壓し付けたのであつた。

『だが、あれは、卓子の上にある俺の襯衣かも知れない、』と、アンドレー公爵は思つた、『が、あれは

俺の足だ、あれは戸だ、だが何故、延びたり、立つたりして、ピチ——ピチ——ピチ、チ——チと鳴つたり、又、ピチ——ピチ——ピチと云つたりするんだらう……澤山だ、止めろ、靜かにしてくれ、何卒』と、アンドレー公爵は、誰かに、懶げに頼んだ。すると、突然、思考と感情とが、再び、非常に明瞭と力強く浮んで來た。

『左樣だ、愛だ（彼は又非常に明瞭と考へた）、が、それは、何物かに就いてとか、何物かを得やうとか、何物かのためとかいふやうな愛ではなくて、俺が死にかゝつてゐる時に、俺の敵を見ても矢張りその男を愛した時、初めて感じた其の愛だ。俺は、目的の要らない、靈の本體なる愛の感情を味はつたんだ。俺は、今もその幸福な感情を味はつてゐるんだ。隣人を愛し、その敵を愛せよだ。凡ゆる物を愛することは、神の凡ゆる現はれを愛することだ。自分の大切な人を愛することは、人間的な愛で誰にでも出來ることだ。が、敵を愛することは、たゞ神的な愛を有つた者にだけ出來ることなんだ。で、あの男を愛してゐると俺が感じた時にあんな非常な歡喜を覺えたのは、それがためなんだ。あの男は、どうしたゞらう？　あの男は、生きてゐるだらうか？……』

『人間的な愛で愛する時には、人は愛から憎惡に變ることがある、しかし、神的の愛は決して變らないものだ。如何な物でも、死でさへも、如何な物でも、さういふ愛を破壞することは出來ないんだ。それは、靈の實體なのだ。ところで、俺は、これ迄、どれほど多くの人を憎んだらう、そして總ての

人々の中で、あの女より以上に俺が愛したり、憎んだりしたものは一人も無い。』で、彼は、ナターシヤの姿を生々と自分の心の中に描いたが、以前のやうに、彼にとつて悅びを與へる魅力だけを添へて描きはしなかつた、彼は、始めて、ナターシヤの靈魂を想像した。と、彼はナターシヤの感情や、苦惱や、恥辱や、後悔が分つた。今、始めて、彼は、自分が彼女を棄てたことの殘酷であつたことを充分に感じた、彼女と離別したことの殘酷であつたことを充分に認めた。『もう一度、彼女に逢ふことが出來たら……一度、あの眼を見て、物云ふことが……』

『ピチ——ピチ——ピチ、イチ——チ、ピチ——ブーン、』蠅が突き衝つた……で、彼の注意が、何か奇異なことが起つてゐる現實と昏睡狀態との他の世界へ移つた。そこでは建物がやはり起ち上つてゐて、破壞れずに、何物かゞやはり延び廣がり、蠟燭も矢張り、赤い圈を描いて燃え、同じ襯衣のスフインクスがやはり戸の傍に橫はつてゐた。が、さういふ凡ての物の外に、何物かゞギイと鳴つた、新らしい空氣が、一吹き吹き込まれた、そして、新たな白いスフインクスが、戸口の前に立ち現はれた。で、そのスフインクスは、彼がほんの今夢みてゐたナターシヤのやうに、白い顏と輝かしい眼とをもつてゐた。

『あゝ、この中絕なしの譫妄には、實に疲れてしまふ！』と、アンドレー公爵は思つて、その想像から、その顏を追ひ拂はうと努めた。が、その顏は、力ある現實として、彼の前に立つてゐた、そして、

だん〳〵近づいて来た。アンドレー公爵は、以前のやうに純粋の思考の世界へ戻らうと思つた、が。それは出来なくて、益々人事不省の世界へ引き込まれた。静かな呟聲が、かの調子の整つた囁きを續け、何物かゞ彼を壓へつけるやうに圍繞み、そして、不思議な顏が、彼の面前に立つてゐた。アンドレー公爵は、一生懸命に意識狀態に歸らうと努めた。彼は少し身動きをした、すると、突然、耳が鳴り眼が朦朧として、水の底へ沈む人のやうに、彼は知覺を失つた。彼が我に歸ると、ナターシヤ、卽ち彼が、今、彼に啓示された、かの新たな、純潔な、神的な愛で世界中の誰よりも一番愛したいと望んでゐた、眞實の生きたナターシヤその人が、彼の前に跪いてゐた。彼は、それが、眞實の生きたナターシヤであるのを知つた、が、驚かずに、靜かに悅んだ。ナターシヤは、跪づき、驚ろいてはゐるが、釘付けにされたやうに(彼女は動き得なかつたのである)アンドレー公爵を凝視た、歎獻を耐へてゐた。蒼白めたナターシヤの顏は、動かなかつた。たゞ、その下の部分に一種の震慄があつたばかりであつた。

アンドレー公爵は、安堵の吐息をつき、微笑んで、手を差し伸べた。

『貴女でしたか？』と、彼は言つた、『あゝ、よいあんばいでした！』

ナターシヤは、やはり跪いたまゝ、素速く、然し用心深く彼の傍にいざり寄り、注意深くアンドレー公爵の手を執りその上へ顏を持つて行つて、それへ私かに唇を觸れながら、接吻し始めた。

『私を宥して下さい！』と、ナターシヤは、頭を擧げて、アンドレー公爵を眺めながら、『私を宥して下さい！』

『私は、貴女を愛してゐます、』とアンドレー公爵は言つた。

『宥して下さい……』

『何を宥すんです！』と、アンドレー公爵が尋いた。

『宥して下さい、私が……したことを、』と、ナターシヤは、斷々に殆んど聞えないくらゐに、囁いて、何遍も、彼の手へ自分の唇を私かに觸れた。

『私は、前よりも、もつと多くもつと良く貴女を愛してゐるんです、』と、アンドレー公爵は、言つて、ナターシヤの眼を見得るやうに、片手でナターシヤの顏を持ち上げた。

幸福の涙をたゝへてゐる彼女の眼は、恐怖と、同情と、嬉しい戀とで、彼を凝視てゐた。唇の膨れ上つた、ナターシヤの窶れて、青ざめた顏は、醜いといふより寧ろ怖ろしく見えた。が、アンドレー公爵は、彼女の顏を見ずに、美しかつた、輝やいてゐる眼を見た。二人の後で人の話聲が聞えた。

侍僕のピョートルは、今はすつかり眼を覺ましたので、醫者を起した。足の痛みのために、徹夜眠らなかつたチモーヒンは、最う迅くから、起つてゐることをみんなよく見てゐたが、やがて、腰掛の上で縮こまつてその裸體を敷布で注意深く包んでゐた。

『や、どうしたんです?』と、寝床から起ち上つて醫師は言つた、『どうぞお歸り下さい、御婦人。」その刹那に、戸を叩く音がした、女中が、娘を探しに、伯爵夫人に遣されたのであつた。

夢の最中に起された夢遊病者のやうに、ナターシヤは、その部屋から出て、自分の小舍に歸り、寢床の上へ慙愧きながら倒れてしまつた。

その日から、ラストフ家の者が旅行してゐる間中どの宿泊所でも、どの休み場所でも、ナターシヤは、決してバルコンスキイの傍を離れなかつた、で、醫師は、負傷者を看護する之れほどの忍耐と、熟練とが若い娘にあらうとは思ひ掛けなかつたと自白せざるを得なかつた。

アンドレー公爵が、途中で、娘の腕に抱かれて死ぬかも知れない（醫師の言によつて見ても、多分さうなるらしかつた。）といふことを考へるのは、伯爵夫人にとつて、怖ろしいことであつたが、伯爵夫人は、ナターシヤのすることに反抗することは出來なかつた。負傷してゐるアンドレー公爵とナターシヤとの關係が復活することで、彼の健康が回復すれば、二人の以前の約婚も復活するであらうと考へてはゐながら、誰も——殊にナターシヤとアンドレー公爵とは、一寸も——そのことを云はなかつた。生か死かと云ふ未決の問題は、啻にアンドレー公爵の上のみならず、全ロシアの上にも懸つてゐたので、それが、凡ゆる他の思考を閉止してしまつたのであつた。

三十三

九月三日に、ピエールは、遲く目を醒した。頭が痛んで、着たまゝで寢た着物の皮膚觸りが惡るかつた、そして、彼の心の中には、前の晩に何か恥しいことゝいふのは、昨日、大尉ラムバルと話をしたことであつた。

何か恥しいことをしたといふ漠然した意識があつた。その時計は、十一時を指してゐた、が、戸外は、特に陰氣なやうに思はれた。ピエールは、立ち上つて、眼を擦つた、そして、彫刻した握柄の着いた拳銃——それは、ゲラシムが、書字卓子の上へ戻しておいたのだ——を見て、ピエールは、自分が何處にゐるのか、その日自分が何を爲すべきかを憶ひ出した。

『もう遲れたかしら?』と、ピエールは思つた。いや、『彼』は多分、十二時前には、モスクワへ入城しやしないだらう。』

ピエールは、自分の前に横はつてゐた事柄を考へる餘裕を自分に與へずに、急いで實行に取り掛らうとした。

ピエールは、着物を着直し、拳銃を取り上げて出掛けやうとした。が、その時、始めて、どうして

武器を手に持たずに、街中を携つて歩けるだらうかといふことを思ひ始めた。大外套の下でさへも、大きな短銃を匿せさうに思はれなかつた。腰帶の中でも、腕の下でも、人の眼に附かぬやうに置くことは出來なかつた。その上に、拳銃は、その時彈丸が入つてゐなかつた、そして、ピエールには、それに彈丸を裝める暇が無かつた。『短劍だつて、同じことだ、』と、ピエールは獨言を云つた、彼は、自分の計畫を實行することを考へる毎に、一八〇九年の學生の大失策が短劍でナポーレオンを殺さうとしたのにあるのだと斷定した。が、ピエールの主な目的は、自分の計畫を實行するといふことよりも、寧ろ彼が、自分の計畫を棄てずに、それを實行しやうとして力を盡してゐることを、自分に向つて證明するのにあるやうであつた。ピエールは、スハアレフ塔で、拳銃と一緒に買つた、綠色の鞘に收めた、鈍い、刃のかけた短劍を急いで取り上げた、それを胸衣の下へ匿くした。

ピエールは、農夫の外套の上に腰帶を締め、帽子を眼深かにし、音がしないやうに、そして、大尉に會はないやうに注意して、廊下を通り貫けて街へ出た。

彼が、前の晩に平氣で見てゐた火事は、一夜のうちに非常に廣がつてゐた。モスクワの方が燒けてゐた、馬車屋町や、河向地や、市場町や、ボワルスキイ町や、ドロゴミロフスキイ橋附近の材木市場や、モスクワ河の荷船などが、燃えてゐた。

ピエールの道程は、ボワルスキイ町まで、横町を抜け、そこから、アルバトのニコラ・ヤウレンニイの會堂に行くので、彼は、そこをすツと以前から、自分の想像の中で、自分の仕事を行ふべき場所と定めてゐたのであつた。家々は大抵門も窓扉も閉めてゐた、街路にも横町にも、人はゐなかつた、大氣には、燒ける臭氣と烟とが漂つてゐた。時々、彼は不安さうに怖々した顏のロシア人や、陣營にゐるらしい風で、道の眞中を歩いてゐるフランス人などに出會つた。ロシア人も、フランス人も共に、ピエールを不思議さうに高く、岩疊なことや、彼の顏及身體ぢうに、陰欝な思ひ詰めたところと、苦惱の樣子とがあることなどは別としても、ロシア人が彼を凝視めたのは、彼がどういふ階級の人間であるか分らなかつたからであつた。フランス人がピエールを不思議さうに見返つたのは他のロシア人は誰でも、フランス人等を怖々と不審さうに凝視めるのに、ピエールは、フランス人に少しも注意を拂はなかつたからであつた。或る家の門の前で、三人のフランス人が、幾人かのロシア人と何かで口論をしてゐたが、ロシア人には云ふことが分らなかつたので、ピエールを止めてフランス語を知つてゐるかと尋いた。

ピエールは、頭を振つて、歩みを續けた。又或る横町では、綠色の彈藥函の傍に立つてゐた哨兵が、彼を怒鳴りつけた、が、その哨兵が、再び威嚇的な叫聲を繰返へし、その銃を取上げる音を聞いて、始めてピエールは、他の街を廻り路しなければならぬのだと氣が附いた。彼は、自分の周圍にある何物をも聞かず、何物をも見なかつた。彼は何か怖ろしい、自分に關係のないものでも持つてゐるやう

に急がしさうに、そして悸々と自分の計畫を持ち運び、——前の晩の經驗から——それを失ふのを怖れてゐた。が、ピエールは、自分が向つて行くその場所まで、その氣分を完全に持つて行くことが出來ないやうになつてゐた。その上、たとへ彼が途中で止められなかつたにせよ、彼の計畫は實行され得なかつたのである、何故なれば、ナポーレオンは四時間も前にドロゴミロフスキイ郊外を出て、アルバトを通り、クレムリンに達し、もうその頃には、最も陰鬱な氣分で、クレムリン宮殿の、皇室の書齋に坐り、直ちに火事を消すこと、掠奪を制遏すること、住民を安堵させることなどの、細々な命令を與へてゐたのであつた。が、ピエールは、そんなことを知らなかつた、彼は自分の前にある事柄に全く心を奪はれて、自分には不可能な仕事——仕事そのものの困難からではなく、その仕事が自分の本性と一致しないがために——を頑固に遣り遂げやうとする人達が苦むやうな苦惱を嘗めてゐた。彼は、自分が、肝緊の場合になつて、心が弱くなり、それがために、自尊心を失ひはしないかといふ怖れで苦められてゐた。

彼は、自分の周圍に何物をも見ず、何物をも聞かなかつたが、本能的に道を想像し、ボワルスキイ町に行く道を間違へずに、曲つた。

ピエールが、ボワルスキイ町に近づくに從つて、烟がだん〳〵濃くなり、空氣が、火事の熱で大分熱くなつてゐた。時々炎の舌が、屋根の下から吐き出されてゐた。彼は、街で前よりも多くの人に遭つたが、それ等の人々は、非常に昂奮してゐた。が、ピエールは、自分の周圍に何か變つた事が起りつゝあるのだといふことを感じてゐながら、自分が火事に近寄つてゐるといふ事實には氣が附かなかつた。一方は、ボワルスキイ町へ、他方は、グルヂンスキイ公爵の庭園に續いてゐる廣い空地に沿ふた道を歩いてゐる時に、ピエールは、突然、自分の傍に、絶望的に泣き叫んでゐる女の聲を聞いた。彼は、夢から覺めたやうに立止まつて、頭を擧げた。

道の一方の、乾き切つた、塵埃塗れの草の上に、家財道具の堆積が、幾つも横はつてゐた——羽毛臥褥、沸湯器、聖像、及び箱などが。箱の傍の地上には、黒い外套を着、黒い帽子を冠つた、長く前齒の突き出た、もう若くはない醜い女が坐つてゐた。この女は、身體を搖ぶつたり、何か口の中で云つたりしながら激しく泣いてゐた。汚くて、短かい上衣と外套を着た十歳から十二歳位ゐまでの二人の娘が、蒼い怖ぢた顏に、呆れたやうな表情を浮べて、母親を凝視めてゐた。外套を着、確かに自分のではないらしい大きな帽子を冠つた七歳位ゐの男の兒が、年老つた子守に抱かれて、泣いてゐた。跣足の、汚ない、下女が、箱の上に坐つてゐた、その下女は、亞麻色の髮を垂らし、燒けた毛を拔いて、それを喚いでゐた。夫は、丈の低い、身體の屈んで、小さい輪のやうになつた頰鬚のある、制服を着た男で、素直に冠つてゐる帽子の下から、滑かな毛の房が覗き出てゐた、物に動ぜぬ顏付をした此の男は、幾つも積み重ねてある箱を一つ〳〵動かして、その下から着物のやうなものを引擦り出してゐた。

女はピエールを見るや否や、始んど飛び附くやうにピエールの脚下にひれ伏した。

『旦那様、正教徒の方、私を救つて下さい、助けて下さい、貴方！……誰か私を助けて下さい、』と、彼女は、歎獻しながら潮々言つた。『私の小さな娘です！……私の娘です……私の小さな娘が置いてき放りにされたんです……燒かれてゐるんです。おゝ……！　何といふ惡い運にお前を育て上げたんだらうねえ……おゝ！』

『もういゝよ、マリヤ・ニコラエヴナ、』と、夫は、たゞ、他人の前を取り繕ひたいばかりに、その妻に、靜かな聲で言つた。『姉が連れて行つたに違ひないよ、それより他に何もありやう筈が無いんだ！』と、彼は、附言へた、

『鬼奴、惡黨奴！』と、女は、急に泣き止あて、暴々しく叫んだ、『お前さんには、情といふものが無いんです、お前さんは、自分の子供が可愛く無いのだよ。他の人なら火の中から助け出すのに。だけど、此奴は鬼だ、人間ぢや無い、父親ぢや無い。貴下は貴族でゐらつしやるわ、』と、女は、ピエールの方を向いて、歎獻しながら、口早やに言つた。『町が火事になりました……人がそれを私たちに知らせに駈けて來たんです。娘が『火事だ！』と叫びました。私どもは、自分たちの物を出すために飛んで行きました。私どもは、御覽の通りの風で、逃げました……取り出せたのはこゝにあるこれツ限りなんです……有難い聖像とそれから私の嫁入道具の寢床、その他のものは、みんな失くして

しまひました。子供たちに氣を附けて見りや、カチイチカがゐなくなつてゐるのです。おゝ！あゝ、主よ……』で、女は又歎獻し始めた。『私の可愛い幼兒、燒け死んだ！　燒け死んだ！』

『だが、何處、何處にその兒は殘されてゐるんですか？』と、ピエールは云つた。

彼の活氣づいた顏の表情で、女は、この人が自分を助けてくれるのだと思つた。

『善良い、親切な、お方？』と、彼女は、彼の足にかぢり着いて、叫んだ。『恩人、どうにかして、私を安心させて下さい……アニスカ、さあ、怠惰者、御案內申しな、』と、女は、怒つて口を廣く開き、長い齒を前よりもよく見せて下女に對つて叫んだ。

『道を教へてくれ、案內してくれ、私は……私は何かしてあげるよ、』と、ピエールは、急いで喘ぎながら云つた。

汚い下女は、箱の後から出て來て、髮毛を結び、溜息をしながら、皮膚の粗い裸の足で、小道を歩いて行つた。ピエールは、烈しい悶絕の後で、突然正氣附いたやうな氣がした。彼は、頭を擧げた、彼の眼は生命の光で輝き始めた、彼は早い步調で、少女の後に從ひ、少女に迫ひ附いて、ボワルスキイ街へ行つた。街には一面に黑雲のやうな煙が充ちてゐた。炎の舌が、かういふ黑雲の此處彼處から吐き出されてゐた。大勢の人が、火事の前へ群がつてゐた。街の眞中に、一人のフランスの將官が立つて、四邊の人々に何か云つてゐた。下女を連れたピエールは、フランスの將官が立つてゐる所へ近づ

いたが、フランスの兵卒等が、彼を止めた。

『通つてはいけない、』誰かの聲が、彼に對つて怒鳴つた。

『此方へ、旦那、』と、少女が呼んだ、『横町を通つて、ニコリニイを抜けませう。』

ピエールは、後返りをして、少女に追いつくために、時々走つた。少女は、走りながら街を横切り、左の横町へ曲り、家を三軒行つて、右の門へ入つて行つた。

『こゝです、』と、彼女は云つた。

そして、彼女は庭を駈け抜けて、柵の中の小門を開け、ぴつたり立ち止まつて、眞赤に燃え上つてゐる小さい木造の翼屋をピエールに指し示した。それの一方の側は落ちて、他の側が燃えてゐた、そして、赤い炎が窓孔や、屋根の下から覗き出してゐるのを覺えた、で、思はず立ち止まつた。

ピエールは小門を入つて行くと、火氣が一度に迫るのを覺えた。

『どれが、どれがお前の家だ?』と、彼が尋いた。

『おゝ!』と、下女は泣き出して、その家を指示した。『あれが、さうです、あれが私たちの家なんです。きつと、貴嬢は焼け死んだのねえ、私たちの寶のカチイチカ、私の大切な小ちやいお嬢さんや、おゝ!』と、アニスカは、火事を見て、自分の感情を現はさなければならぬやうに感じて、泣き出した。

ピエールは、家に向つて突進したが、火氣が甚しかつたので、彼は翼屋の周圍を一廻り廻つた。す

ると彼はいつの間にか、まだ片側だけ屋根が焼けてゐる大きい家の傍へ出てしまつた。フランス兵卒の一團が、その周圍に群つてゐた。ピエールは、始めの間は、何かを引き擦り出してゐるフランス兵どもが、何をしてゐるのかを知ることが出來なかつた、が、彼の前にゐたフランスの兵卒が、鈍刀の劍で、一人の農夫を殴つて、彼から狐皮の外套を奪つてゐるのを見ると、ピエールは、そこで掠奪が行はれてゐることに漠然氣が附いた——が、彼は、そんなことを考へてゐる暇がなかつた。

キイ〳〵と云つて壁や天井などが落ちる音、炎のゴウ〳〵いふ嘯音、それから群集の昂奮した叫聲、煙の徘徊する雲——此方では、黒い幾つもの塊に重なり、彼方では、棚引いて、輝く火花で赤くなつてゐる——の光景、此方では、太く赤い束のやうに見え、彼方では、壁の面を這入つてゐる黄金の鱗のやうに見える焔や、熱や、煙や、物の動き方の迅速さ、さういふ凡てのものが、大火に通例の刺激的効果を、ピエールの心に與へた。その効果は、ピエールにとつては、殊に強かつた、何故といふに、火事を見ると、急に、彼は、自分を強く壓へ附けてゐたさま〴〵の思考から自由になつたやうな氣がしたからであつた。彼は、若く、快活に、氣輕に、それから氣丈になつたやうな氣がした。彼は家の方から翼屋の周圍を走り廻はつた、そして、まだ立つてゐる部分へ駈け込まうとした、その時、彼は、彼の頭の直ぐ上で、五六人の聲を聞いた、それに續いて、直ぐ傍で、何か重い物の落ちる、ガラ〳〵バタンといふ音がした。

ピエールは、見廻はした、と、家の窓の所に、何か金屬製の物が一杯入つてゐる箱の抽斗を今引落したばかりの幾人かのフランス兵を見た。下に立つてゐた他のフランスの兵卒達は、その抽斗に近づいた。

『おい、其奴は何をしやうといふんだい?』と、フランスの一人が、ピエールに怒鳴つた。

『小兒が、家の中にゐるんだ。その兒を見かけなかつたかい?』と、ピエールは言つた。

『この野郎、何を歌つてやがるんだ? 去せやがれ、やい!』と、幾つかの聲が聞えた。そして、兵卒等の一人は、確かに、ピエールが、抽斗の中にある銀や青銅を彼等から奪らうと思ひ附くのを怖れたらしく、威嚇的な權幕で、彼の方に近寄つて來た。

『小兒?』と、一人のフランス人が、上から怒鳴つた。『庭園で何か泣いてゐたのを俺は聞いたよ、幼兒が親を探してゐたのかも知れない。人間らしくなつてやらうぢやないか、なあ。』

『それは、何處かね?』と、ピエールが尋いた。

『此方だ!』と、フランス兵が、窓から彼に怒鳴つて、家の後の庭園を指示した。

『待つてろ、今降りて行くから。』

で、直ぐ、襯衣だけを着た、頬に疵のある、黑い眼の、小柄なフランス人が、言葉通りに、一階の窓から地面へ跳び降り、ピエールの肩を叩いて、彼と一緒に、庭園へ駈け出した。『速くやれ、仲間たち、』と、彼は、その仲間の者どもに對つて叫んだ、『熱くなり出したぞ。』

家の後の、砂の敷いてある小徑へ駈け出して、フランス人は、ピエールの腕を引き、圓形の空地を指示した。腰掛の下に、淡紅色の上衣を着た、三歳位ゐの女の兒が臥てゐた。

『こゝに、お前の兒がゐる。やあ、小さい女の兒だな。尙結構だ、』と、フランス人は云つた。『左樣なら、情深くしやうぜ、俺たちは、みんな人間なんだから、なあ、』で、頬に疵痕のあるフランス人は、その仲間の者どもの所へ走り歸つた。

ピエールは、喜ばしさに息も吐けず、小兒に駈け近づいて、小兒を抱き上げやうとした。が、見馴れぬ男を見て、瘰癧らしい、人好きのしない、母親に非常によく似た女の兒は、泣き叫んで、逃げ出した。けれども、ピエールは、女の兒を捕へて、抱き上げた、女の兒は、ひどく暴れてキイ〳〵泣き、その小さな手で自分からピエールの腕を捲ぎ離さうとしそして、その汚い、涎の出てゐる口で、ピエールに噛み附かうとした。ピエールは、何か小さな獸に觸れた時に感ずるやうな怖れと厭惡とを感じた。が、彼は努めて、その感じに打ち勝ち、小兒を捨てないやうにして、それを抱いたまゝ、大きい家へ駈け戻らうとした、が、もう同じ道を歸ることは何うしても出來なかつた、下女のアニイシカはもう見えなかつた。で、ピエールは、出來るだけ優しく、憐れつぽく泣いてゐる、憐憫と厭惡の感情をもつて、びしよ濡れになつた幼兒を、しつかり抱き締めて、何處か他の出路を探すために、庭園を駈け抜けた。

三十四

ピエールは、幾つかの庭や、横町を駈け抜けた後で、その重荷をもつて、ボヴルスカヤ街の角にあるグルジンスキイの庭園へ戻つた時に、初めのうちは、自分が幼兒を探しにとたつた場所を見附けることが出來なかつた、そこは、人々や、家から引き出された荷物で、埋まつてゐた。火事から救つた、家庭道具をもつてゐるロシア人の家族の外に、そこには、幾人かのさま〴〵の服を着た、フランスの兵卒達もゐた。ピエールは、彼等に注意を向けなかつた。彼は、かの役人の家族を見附けて、母親に小兒を渡し、そして又他の誰かを救はうとして、急いでゐた。ピエールには、しなければならぬことがまだ澤山あつて、而もそれは、急いでしなければならないやうに思はれたのであつた。火氣と奔走とのために身體が熱くなつたので、ピエールは、その時、前に小兒を救はうとして走つてゐた時に、自分の心に起つた若さ、活氣、氣丈さの感じを一層強く感じた。小兒は、もう溫順しくなり、その小さい手でピエールの外套にかぢり附き、彼の腕の上に坐つて、小さい野獸のやうに四邊を見廻はしてゐた。ピエールは、時々小兒を見て、微かに微笑んだ。彼は、その怖ぢた、弱さうな、小さい顏の中に、非常に純潔な何物かを見たやうに思つたのであつた。

官吏もその妻も、以前の場所にゐなかつた。急ぎ足に、ピエールは、群集の中を歩き廻つて、出會ふ人々のさまざまな顏を見た。彼は新らしい、たつぷりした毛皮の外套を着、新らしい長靴を穿いた、顏の奇麗な東洋型の非常に年とつた男と、同じ顏型の老婆と、若い女とで成り立つてゐたジョルジア人かアルメニア人の一家族に眼を止めざるを得なかつた。この非常に若い女が、東洋美の極致だとピエールには思はれた。その女は、劃然した、弓形の黑い眉と、非常に優しく美しい表情の無い、面長な顏とをもつてゐた。廣場の群集の中へ投げ出された道具の中で、彼女が立派な繻子の外套を着、派手な薄紫色の頭巾を冠つてゐる樣子は、雪の中へ投げ出された熱帶植物を思はせた。女は、老婆の少し後方の荷物の上に坐つて、大きな、黑い、楕圓形の、睫毛の長い眼で、地面を見詰めてゐた。明かに、彼女は、自分の美しいことを知つてゐて、それが爲めに怖れてゐたらしかつた。彼女の顏が、ピエールを驚かした、で、彼は、急いで塀の傍を通る時に、五六度女の方を振り返つた。塀まで行つても、まだ彼が探してゐる人々を見附けることが出來ないので、ピエールは、立ち止つて、四邊を見廻はした。

ピエールの姿は、小兒を抱いてゐるので、今は尙ほ一層目立つた。で、男女五六人のロシア人が、彼の周圍に集まつた。

『誰かにはぐれたのかね、旦那?』『お前さんは旦那かね、でなければ、何だね?』『誰の幼兒だね?』と

彼等は、彼に尋いた。

ピエールは、この幼兒は、此所に小兒等と一緒に坐つてゐた、黒い外套を着た女のだと答へて、誰かその女を知らないか、何處へその女は行つたのか、と尋いた。

『や、それはアンフエロフ家の者に違いない。』と年老つた補祭が、痘痕のある老婆に向つて言つた。『主よ、我等を憐み給へ！』と、彼は例の低音で、附言へた。

『アンフエロフ家の者は何處にゐるんだらう？』と老婆は言つた。『あら、アンフエロフ家の者は、今朝早く何處かへ行つてしまつたのに。マリヤ・ニコラエウナのか、イワアノワのかだよ。』

『この人は、女だと言つたぜ、マリヤ・ニコラエウナは貴婦人ぢやないか、』と、一人の家僕が言つた。

『お前は知つてるね、では、痩せた女で——長い歯の、』と、ピエールは言つた。

『さうですよ、マリヤ・ニコラエウナは居りますよ。あの人たちは、この狼どもが私たちの方へ押し寄せて來ると、直ぐ庭園へ去つてしまひましたよ、』と老婆は、フランスの兵卒等を指示しながら、言つた。

『おゝ、主よ、我等を憐み給へ！』と補祭がまた附言へた。

『彼方に行つて御覽なさい、あの人たちは、彼方にゐますよ。あの女です、まだ氣が狂つたやうに泣いてゐる、』と老婆がまた言つた。『あの女ですよ。あれ、此方へ來た。』

が、ピエールは、老婆の言ふことを聞いてゐなかつた。五六秒前から、彼は、自分の前數歩の所に起つてゐる事を凝つと見てゐたのであつた。彼は、アルメニア人の一家と、それに近寄つた二人のフランス兵とを見てゐた。それ等の兵卒の一人なる、敏捷い小男は、青色の上衣を着て、帶の代りに綱を捲き着けてゐた。その男は、頭に夜帽を冠つて、足は跣足であつた。特にピエールを驚かしたもう一人の男は、動作の重々しい白痴のやうな顏容で、丈の高い、圓肩の、金髪の痩せた男であつた。彼は、粗羅紗のチュニックを着、青色の衣袴、大きい、破れた長靴を穿いてゐた。青色の上衣を着た、小男の、跣足のフランス人は、アルメニア人たちの傍へ行くと、直ぐに何か言つて、老人の足を捉へた。すると、老人は、直ぐ急いで、その長靴を脫ぎ始めた。チュニックを着た、もう一人の兵卒は、美しいアルメニヤの少女の前に立ち止まり、衣嚢に手を入れたまゝ、物も言はず、動きもせずに、少女を見詰めてゐた。

『取つてくれ、小兒を取つてくれ、』とピエールは、小兒を老婆に差し出して命令的に口早やに言つた。『あの人たちにこの兒を渡してくれ、連れて行つてくれ、』と彼は殆んど怒鳴りつけるやうに老婆に言つて、泣き叫ぶ小兒を地面の上へ置いて、またフランス人どもと、アルメニヤ人の家族との方へ振り返つた。

老人は、もう跣足で坐つてゐた。小男のフランス人は、今老人から二つ目の靴を奪つて、その兩方

の靴を叩き合せてゐた、老人は、歎欷きしながら、何か言つてゐた、が、ピエールは、それを、たゞ一目チラツと見たばかりであつた。彼の凡ての注意は、チュニツクを着てゐるフランス人に向けられてゐた、その男は、この時、悠然と身體を揺りながら、若い女に近づき、衣嚢から両手を出して、女の頭を捉へた。

美しいアルメニアの女は、同じ不動の姿勢で、長い睫毛を垂れて坐つてゐた。そして、兵卒が自分にしたことを見もせず、感じもしなかつたやうであつた。

ピエールが、フランス人等と自分との間の數歩を走つてゐる間に、チュニツクを着た丈の高い兵卒が、もうアルメニヤ美人の頸から頸飾をもぎ奪つた、で、若い女は、兩手で自分の頸を摑んで、鋭い聲で叫んだ。

"Laissez cette femme!"(『その女に觸はるな!』)と、ピエールは、嗄れた聲で咆哮つて、丈の高い、屈んでゐる兵卒の肩を捉んで、突き飛ばした。

その兵卒は、倒れて、起上り、そして、逃げ去つた。が、彼の仲間は、靴を落し劍を抜いて、威嚇的な態度で、ピエールに近づいた。

"Voyons, pas de bêtises!"(こら愚劣なことをするな、)と、彼は怒鳴つた。

ピエールは、何にも覺えてゐず、自分の力が十倍にも増すほどな、熱狂の境地にゐた。彼は、跳足

のフランス人に跳びかゝつて、その男が彎劍を抜く間のないうちに、彼を殴り倒して、空拳で滅茶滅茶に殴り付けた。

賞賛の叫聲が、周圍の群集から起つた、すると、その刹那に、フランスの槍騎兵の巡察隊が町角から顯はれた。槍騎兵は、ピエールとフランス兵との方へ駈けつけて、二人を取り圍んだ。ピエールは、それから後のことを一寸も覺えてゐなかつた。彼は、誰かを殴り、自分も殴られたことゝ、それから、遂々自分が兩手を縛られ、一群のフランスの兵卒等に取り圍まれて、自分の着物を掻き探されるのを感じたことゝを覺えてゐた。

『中尉、此奴は短劍を持つてゐます、』と云ふのが、ピエールがその意味を捉へた最初の言葉であつた。『あゝ、武器だね、』と將校は言つて、ピエールと一緒に捕へられた跣足の兵卒の方を向いた。『宜しい、宜しい、お前は、軍法會議で斯んなことをみんな言ふが宜い、』と將校は言つた。それから、彼はピエールの方を向いた。『parlez-vous français, voyons?』(お前はフランス語を話せるか、えゝ?)

ピエールは、血走つた眼で、四邊を見廻はし、何とも返答をしなかつた。多分、彼の顔が非常に怖ろしく見えたのだらう、何故といふに、將校が何か囁聲で云ふと、もう四人の槍騎兵が列から離れて、ピエールの兩脇に立つたから

『Parlez-vous français?』(お前はフランス語が話せるか?)と將校は、離れたまゝで、前の質問を

繰り返した。『通譯を呼べ。』

隊列から、ロシアの平服を着た小男が前へ出て來た。ピエールは、その着物と言葉とで、直ぐ、この男が、モスクワの或る商店にゐたフランス人であることに氣が附いた。

『この男は、普通の人民では無いやうです、』と通譯は、ピエールを見廻して言つた。

『うん、うん、此奴はどうも、放火者らしいな、』と將校は言つた。『何ういふ奴か尋いて見ろ、』と、彼は附言へた。

『お前は何といふ者だ?』と、通譯は訊いた。『お前の長官は誰だ?』

『俺が何者であるかと云ふことは言はん。俺はお前達の捕虜だ。俺を連れて行け、』とピエールは、唐突にフランス語で言つた。

『あゝ! あゝ!』と將校は、眉を顰めて、口を挟んだ。『では、行かう!』

群集が、槍騎兵の周圍に集まつた。ピエールに最も近く、痘痕の老婆が、小兒を抱いて立つてゐた。

巡察隊が動き出すと老婆は、前へ進み出た。

『おや、何處へお前さんは連れて行かれるんだねえ、親切な方?』と、彼女は言つた。『この幼兒! この小兒が若しあの人たちので無かつたら、何うすればいゝんだね?』と、老婆は言つた。

『何の用があるんだ、この女は?』と、將校が訊いた。

ピエールは、醉つた人のやうであつた。彼の昂奮は、彼が救つた小さい女の兒を見ると、增した。

『何の用があるかつて?』と彼は言つた。『この女は、俺がたつた今火の中から救つた、俺の娘を連れて來たんだ、』と彼は言ひ放つた。『左樣なら!』そして、何故さういふ目的の無い嘘言を口走つたのか、自分にも少しも分らずに、ピエールは、フランス人に圍繞まれて、斷呼とした、嚴肅な歩調で、歩いて行つた。

このフランス兵の巡察隊は、デュロスネルの命令で、モスクワの種々の街を通つて、掠奪を禁じ、その上に、その日フランスの高級將校の輿論となつてゐる放火者を捕へるために、遣はされた巡察隊の一部であつた。五ツ六ツの街を巡察して、巡察隊は、更らに五名の嫌疑者、一人の商人、二人の神學生、農夫及び家僕——みんなロシア人であつた——と、その他に數名の掠奪者とを捕へた。が、かういふ嫌疑者の中で、彼等には、ピエールが、一番疑はしく見えた。皆の者が、牢獄に定められてゐたズボウスキイ城壁の大きな家に、夜を過させるために連れて行かれた時に、ピエールは、他の連中から離されて、嚴重な番兵を附けられてゐた。

第三編

一

この時、ペテルブルグの上流社會には、ルミヤンツエフ黨、フランス黨、マリヤ・ヒヨードロウナ黨、皇子黨及び、その他さま〴〵の黨派の間の錯綜つた爭鬪が、例の如く、宮中の遊惰な徒に煽動されて、以前よりも一層激烈に行はれてゐた。が、幻影と人生の回想とにのみ僅がれてゐる、安逸奢侈なペテルブルグの生活は、舊のまゝに續けられてゐた。そして、かゝる生活の潮流の中に在るロシア國民が、危險と困難とに瀕してゐる自分等の現狀を識ると云ふことは、非常な努力を要する業であつた。そこでは、以前と同じ夜會や舞踏會などが行はれた、同じフランスの演劇が演ぜられた、宮中に於ける趣味も同じものであつた、政府の仕事に於ける趣味も術策もまた同じものであつた。ロシア國民の困難な、現

狀を反省せしめやうと努めてゐたのは、實にこの上流社會だけであつた。二人の皇后は、かゝる困難なる時局の中に於て、互に反對の態度を執つてゐたといふ噂があつた。マリヤ・ヒヨードロウナ皇后はその保護の下にある、教育慈善事業の安全のために、心を煩はして、生徒を皆なカザンに移す用意もし、既にこの事業に屬する凡ての所有物を移したのであつた。これに反して、エリザヴェタ・アレキシエウナ皇后は、自分が容喙するのを喜んでゐたこの問題が起つた時に、社稷の事に關しては、その凡てが懸つて皇帝の手にある以上、自分は如何なる命令をも與へ得ないと答へ、自分一個人としては、最後にペテルブルグを去るつもりだと、皇后の特性たる、ロシア的愛國心を以つて健氣にも言つたのであつた。

ボロヂイノの戰の當日なる、八月二十六日に、アンナ・パアウロウナの家に夜會があつたが、その夜會の興味の中心は、大司教がサン・セルギイ僧正の聖像を皇帝に贈る時に添へた書翰の朗讀であつた。この書翰は、愛國的にして且つ精神的なる雄辯の模範であると考へられてゐた。この書翰は巧みな朗讀で名高い、ワシーリイ公爵が、朗讀することになつてゐた。(公爵は皇后陛下の傍で朗讀したことも度度あつた。)朗讀の手際は、或る時は絶望的に咆哮し、或る時は物優しく訴へて、その言葉を意味から放して、大聲に歌ふやうに讀むところにあつた。それで、咆哮や訴へが何れかの語に落ちても、それは、全く偶然なのである。この朗讀には、アンナ・パアウロウナのところで開かれる、いつもの夜會と同

樣に、政治上の意味があつた。彼女は、この夜會で、その愛國的熱情を喚起させる必要のある數名の重立つた人々を待受けてゐたのであつた。かなり多勢の人々がもう集まつてゐたが、アンナ・パアウロウナは、客間に入來を待つてゐるかの人々がまだ見えないので、朗讀を始める前に、先づ世間話をし出した。

ペテルブルグのその日の話題は、伯爵夫人ベヅウホフの病氣であつた、伯爵夫人は、數日前から突然病氣になつたので、彼女を裝飾とする幾つかの夜會にも出なかつた。そして誰にも會はず、平素彼女を診つけてゐるペテルブルグの有名な醫師の代りに、或る新らしい、風變りの療治をするイタリイ人の醫師に信賴してゐるといふ評判であつた。

列席のものは皆、美しい伯爵夫人の病氣は、二人の夫と同時に結婚しかねる爲めであること、またイタリイ醫者の療治といふのは、その困難を取除くことであるのをよく知つてゐたのであるが、アンナ・パアウロウナの面前では、誰れもそのことを考へやうとしないばかりか、誰れもそのことを知らないやうな顏をしてゐた。

『お氣の毒な伯爵夫人は、大層御病氣がお惡いといふことですねえ。醫師は狹心症だと言ふさうです。』

『狹心？　やあ、それは怖ろしい病氣です。』

『その狹心症のお蔭で、敵同志は皆仲が好くなつたといふ評判ですぜ……。』

『狹心症』といふ語は非常に滿足さうに何遍も繰り返へされた。

『老伯爵は、非常に悲しんで居られるさうです。何でも醫師が危いと云つた時には、子供のやうに泣かれたさうです。』

『やあ、それは惜しいことですねえ。何しろ美しい婦人ですから。』

『皆さんは、お氣の毒な伯爵夫人の事を話してゐらつしやるのですね。』と、アンナ・パアウロウナが出て來て言つた。

『私は人を見舞に遣りました。だん〳〵お宜しいさうです。ほんたうにあの方は、世界中で一ばん美しい御婦人ですもの、』とアンナ・パアウロウナは、ひどく感激した上に微笑みながら言つた。『私どもは、あの方とは違ひますわ。でも、あの方のお價値はお價値なんですから、それは御尊敬いたしますわ。あの方はほんとうに不幸でいらつしやるんです。』と、アンナ・パアウロウナは附け加へた。

この語で、アンナ・パアウロウナが、伯爵夫人の病氣を蔽ふてゐる秘密の幕を微かに揚げたものと考へて、一人の嗜の無い青年は、伯爵夫人が、有名な醫師を招かないで、危險な療治をする醫師の診察を受けてゐると云ふことに就いての自分の驚きを四邊かまはず言つてのけた。

『あなたは、私よりも詳しく聞いてゐらつしやるかも知れません。』と、この世間馴れぬ青年に對つて、アンナ・パアウロウナは突然皮肉な調子で言つた、『ですけれど、私が、そのお醫者が非常に學問のある熟練家だといふことを聞いたのには、ちやんとした根據があるのです。あの人は、スペイン皇后の侍醫です。』

かう青年をやりこめておいて、アンナ・パアウロウナは、他の一團に交り、諧謔を弄しやうとして、その額に皺を寄せながら、アウストリア國民に就いて話をしてゐるビリビンの方へ振り向いた。

『實に痛快だと思ひます！』と、彼はペテルブルグで、(ペトロポールの英雄)と呼ばれてゐるウイツトゲンスタインの占領したアウストリアの國旗と共に、ウィンナに送られた外交上の公書に就て語つた。

『何でございますか？　何でございましたつけねえ！』と、アンナ・パアウロウナは、實際はビリビンのこの諧謔を一度以前に聞いたことがあるのだが、それを一座の人々に聞かせやうとして、一座を靜かにする爲めにかう尋ねた。

ビリビンは、自分で筆を執つたその外交上の通牒の文句をそのまゝ言つた。

『皇帝は、アウストリア國旗を還附す。』とビリビンは言つた。『皇帝が之を發見せる際には、道に踏み迷ひ居りし親愛なる國旗を還附す。』

『愉快、愉快！』と、ワシーリイ公爵が言つた。

『それは多分ワルソウに行く道だらう。』とイツポーリイト公爵が、突然大きな聲を出して言つた。

人々は公爵が言つた語の意味を察しかねて、その顏を見た。イツポーリイト公爵もまた輕い怪みの心

を以て四邊を見廻はした。公爵は、自分の言つた語の意味に就いては、他の人々と同様に何の理解もなかつたのである。公爵は、その外交家としての經歴中に、度々、かういふ風に突然發した語は、人から小氣味よく受取られるのである、といふことを知つてゐた。そして、さま〴〵の場合に、公爵は、偶然舌に上る最初の語を、かういふ風に喋つたのである。『これが一番好いやうだ。』と公爵は考へた。『たとへそれが成功しなかつたにしても、人はその言葉を何かにすることが出來るだらう。』

一座を支配してゐる氣まづい沈默は、アンナ・パアウロウナが善心に改悛せしめんとする、愛國心を缺ける人が入つて來たので破れた。彼女は、微笑しながらイツポーリイト公爵に對つて指を振つて見せ、ワシーリイ公爵を卓子に麾き、彼の前に二本の蠟燭と書翰とを置いて、始めるやうに乞ふた。一座は押し靜まつた。

『至慈至仁なる、皇帝陛下よ!』とワシーリイ公爵は、嚴かに讀み上げ、この語に對して誰れか反對の意見をもつてゐないかと尋ねるやうに、一寸聽衆を見廻はした。しかし、皆默つてゐた。『新らしきエルサレムなる主都モスクワは、その救世主を待つ。』——公爵は『その』語勢を急に强めた。——『熱愛せるその兒を抱く母親の如く、群り集まる暗黑を透して、陛下の領土の輝く榮光を認め、歡喜の中に』『ホザンナよ來らんとする者に祝福あれ』と、歌ふ。

ワシーリイ公爵は泣くやうな聲でこの最後の言葉を讀み上げた。

ピリピンは、その指の爪を熱心に見てゐた。そして聽衆の多くは、何か惡いことでもしたといふかと訊くやうに、悸々してゐるやうに見えた。アンナ・パアウロウナは、婆さんが聖餐拜領の祈禱文を囁くやうに、その先の語を囁いた。『野卑暴慢なるゴリアフをして……』

と、彼女は囁いた。

ワシーリイ公爵は續けた。

『野卑暴慢なるゴリアフをして、フランスの國境より、ロシアの國土に死の恐怖を齎らさしめよ。讒遜なる信仰、ロシアのダギデの投石具は、血に渴ける、彼が高慢なる頭を忽にして打ち碎くべし。臣は昔、我國家の繁榮を熱烈に慮ばかりたる、いとも尊きサン・セルギイの、この聖像を、陛下の御前に捧呈せんとす。臣は、臣の衰へたる力が、天顏に咫尺し奉る喜悅を味はしめざるを悲む。臣は今、神に對つて熱烈なる祈禱を捧げつゝあり、全能なる神は、有ゆる正義を熾んにし、陛下の希望を幸福に充し給ふべし。』

『何といふ力だらう! 何といふ文體だらう!』と朗讀者と執筆者とを稱讃する聲が囁かれた。この朗讀に感激させられた、アンナ・パアウロウナの客は、なほ長時間、國家の現狀に就いて語つた。そして、この數日中に行はる可き戰爭の結果に就いて、さま〴〵な揣摩憶測をした。

『きつと、御覽なさい。』とアンナ・パアウロウナが言つた。『明日の陛下の御誕生日には、報知があり

ますから、私は何か好いことがあるやうな氣がしますよ。』

二

アンナ・パアウロウナの豫想は、實際に證據立てられた。翌日、皇帝の誕生節を祝さんがために宮中に催された感謝祈禱の最中に、ワルコンスキイ公爵は、教會から呼び出されて、クツウゾフ公爵からの報告を受取つた。この報告は、クツウゾフ公爵が、タタリノウオの戰の日に送つたものであつた。クツウゾフの報告には、ロシア軍は、一歩も退却しなかつた、フランス軍の損害は、ロシア軍以上であつた、この飛書は詳細の諸報告を受取る前に、戰場で大急ぎで書いたものである、とあつた。戰爭は味方の勝利であつたやうに思はれた。で、折柄集り合せた諸官は、直ちにそのまゝで、神の援助と勝利の感謝を神に捧げた。

アンナ・パアウロウナの豫感は、事實となつた。午前中、酒莚のやうな樂しい氣分が全市に漲つた。何人も皆、最後の勝利が定まつたものゝ如く考へた。或る者は、氣早やにも、ナポーレオンが捕虜となつたとか、帝位から退ぞけられたとか、フランスには新皇帝が選ばれたとかいふやうなことを語つた。

戰場から遠く離れて、宮廷生活の中にゐると、戰場の出來事の眞相を考へることは極めて困難である。公(おほやけ)の事件がいつの間にか、私(わたくし)の事件の周圍に集まつて了ふ。で、この時にも、朝臣の悦びは、戰爭に勝つたといふ事實よりも、寧ろ皇帝の誕生日にうまく勝利の報知が到着したといふ事に基いてゐるのであつた。

クツウゾフの報告には、ロシア側の死傷者も載つてゐた。その中には、ツチコフ、バグラチオン、クタイソツフ等の名があつた。この事件の暗い方の側(がは)も、このペテルブルグの社交界では、知らず識らずの間に、たゞ一つの事件——クタイツソフの死の周圍に集中された。何人も彼を知つてゐた。皇帝は彼を寵愛した、彼は若くて、面白い男であつた。この日人々は顏を合はせると、かういふ語(ことば)を交へた。

『何といふ不思議なことだつたでせう！　恰度感謝祈禱の最中だつたとは。ですが、クタイツソフは非常な損害ですねえ！　あゝ、ほんとうに氣の毒なことです！』

『クツウゾフのことを私が何う言つたと思ひます？』と、ワシーリイ公爵は、その時、豫言者の誇りをもつて言つた。『私はいつも、ナポーレオンを擊破し得るのは彼だゞ一人だと言ひ言ひしたぢやありませんか。』

しかし、その翌日は、軍から何の報告も無かつた。民衆の聲は、動搖し始めた。朝臣は、皇帝の嘗

めてゐる不安の苦痛のために苦んだ。

『陛下の地位になつて考へて御覧なさい！』と朝臣は言ひ合つた。そして彼等はもう、二日前ほどクツウゾフを稱讃せず、今では皇帝の不安の原因であるとして非難した。斯うなるとワシーリイ公爵も、御贔負のクツウゾフに就いてはもう少しも自慢をしなくなり、總司令官のことが話題に上ると、沈默を守つてゐた。猶また、その晩には、總ゆるものがペテルブルグの人々を動搖と不安とに陷れる爲めに仕組まれてゞもゐるやうに、更らに一つの驚く可き報告が齎らされたのである。伯爵夫人エレン・ベズウホフが、興味ある話題となつてゐた怖る可き病氣のために、急に死んだのであつた。大きな會合では、伯爵夫人ベヅウホフは、急性肺炎で死んだのだと、人々は表向きの話をしてゐるが、親しい仲間が寄ると、立入つたことまでが話題に上る、如何にしてスペイン皇后の侍醫が、ある結果を得るために、ある藥の少量をエレンに盛つたか、老伯の疑ひのためと、自分の夫（かの不幸な、放蕩者のピエール）が、彼女の手紙に返事を與へなかつた爲めとで苦んでゐたエレンが、如何にして侍醫の盛つた藥を多量に服んで、手當をする暇もなく、苦痛の中に死んだかと、いふことを話し合つた。ワシーリイ公爵と老伯はかのイタリイ人に對して訴訟を提起したが、イタリイ人は不幸なる死者から、公爵と老伯とが彼を直ぐに遁がさなくてはならぬやうな性質の手紙を獲てゐるのだと云ふやうな噂があつた。

人々の噂は、三つの悲しむべき事件に集まつた——それは皇帝の不安と、クタイツソフの戰死と、エレンの死とであつた。

クツウゾフの報告が來てから三日目にモスクワから一富豪がペテルブルグに着いた、そして、モスクワがフランス軍に降服したといふ報知が全市に廣がつた。それは怖るべきことであつた！　皇帝の地位を考へたら何うであらう！

クツウゾフは謀反人であつた、そして、ワシーリイ公爵は、その娘が死んだので訪ねて來る弔慰の客に、嘗つては褒め稱やしたクツウゾフのことを、盲目で放埒な老人が、何の當てになるものか、などと語つた——彼が嘗つて言つたことを忘れたのは、悲哀に浸つてゐる彼には、許さるべきであつた。

『私はたゞ、あんな男にロシアの運命を委したといふのを奇怪に思ふ。』

この報知は、公報ではなかつたから、まだ疑ふ餘地はあつた、が、その翌日、ラストプチンから次ぎの如な報告が屆いた。

『公爵クツウゾフの副官は、予に書を齎らして、リヤザン街道まで軍隊を護衛すべき憲兵を要求し來れり。彼は、遺憾ながら、モスクワを見棄てつゝありと言ふ。陛下よ！　クツウゾフの行動は、首都と陛下の帝國との運命を決するものなり。ロシアは、ロシアの偉大の中心にして、陛下の祖宗の遺骨を存する主都の抛棄を聞かば戰慄すべし。予は之れより軍隊に隨はむとす。予は今凡てのものを送還せり。

予と共に遺れるは、たゞ祖國の運命のために悲歎に暮るゝ涙のみ。』

この報告を受け取つたので、皇帝は、ワルコンスキイ公爵を勅使として、次ぎの如き上諭をクツウゾフに送つた。

『公爵ミハイル・イラリオーノキツチよ！　予は八月二十九日以來、卿よりの音信を見ず。然るに予は、九月一日附にて、ヤロスラウルを經て來れる、モスクワ知事よりの、卿が軍隊と共にモスクワを拋棄せりとの悲しむ可き報告を受取れり。予は玆に軍隊の現狀と、卿をしてかゝる悲む可き決斷を敢てせしめたる原因を確めむために、參謀總長公爵ワオルコンスキイを卿の許に送る。』

三

モスクワの退却から九日目に、モスクワ拋棄の公報を齎らしたクツウゾフの急使が、ペテルブルグに到着した。この使者はロシア語を知らないフランス人ミショウであつたが、『外國人でも、感情と精神とはロシア人だ』と、自ら人に語つてゐた。

皇帝は直ぐに使者を、カメンニイ島にある宮殿の書齋に於て引見した。ミショウは、戰爭前には一度もモスクワを見たことがなかつたし、ロシア語をも知らなかつたのだが、その焔で自分の旅路を照し

たモスクワの火災の報知を齎らして『甚く仁慈に富ませ給ふ皇帝』（彼はかう手紙に書いた）に謁見した時には、深く感動した。

ミショウの悲みの原因は、ロシア人の悲みの夫れとは異つてゐたに違ひないのであるが、皇帝の書齋に導かれた時には、ミショウは非常に悲しさうな容貌をしてゐた。で、皇帝は直ぐに彼に訊ねた。

『卿は如何なる報告を予に齎らしたのであるか？　悲しむべき報告であるか、大佐よ！』

『甚だ悲しむべき報告でございます、陛下。モスクワの拋棄を御報告に參つたのでございます。』とミショウは、目を落し、嘆息を吐きながら答へた。

『我軍は、一度も戰はずして、吾が古都を敵手に渡したのであるか？』と皇帝は、顏に紅を漲らして、口早に言つた。

ミショウは、クツウゾフから命令されたことを恭々しく上申した。それは、モスクワで戰ふことの不可能なることと、軍隊とモスクワとを失ふか、又はモスクワだけを失ふかといふ場合だつたので、總司令官は後の場合を選んだことなどであつた。

皇帝はミショウを見ず、たゞ默つて耳を傾けてゐた。

『敵は市に侵入したのか？』と、彼は尋ねた。

『はい。陛下。今頃は全市は、もう灰になつておるで御座いませう。私がたちます時には、火炎に包

まれておりました。』とミショウは、思ひきつて言つた。けれども、皇帝を見ると、彼は惡いことを言つたと思つた。

皇帝の、呼吸は重苦しさうになつた。その下唇は痙攣を起し、その美しい、青い、兩眼は、忽ち涙で濡ふた。

しかし、それはほんの瞬間であつた。皇帝は急に、自分の意氣地のないのを責めるやうに眉をひそめた。而してその頭を上げ、力のある聲でミショウに言つた。

『大佐、予は此度の種々な事件によつて察するに、神は吾々に大いなる犧牲を求めておられるのだ。神の意志とあらば、予は喜んで何事にも服從する。しかし、ミショウ、卿は、一度の戰もせずに吾が古い都を見棄てた軍隊と何うして分れて來たか、それを予に語つて呉れ。卿は、軍隊が意氣沮喪してゐるとは思はなかつたか?』

ミショウの所謂仁慈に富ませ給ふ皇帝の落付いた態度を見て、ミショウも亦落付いた。けれども彼は、皇帝の率直な答を求める、率直な質問に對して、直樣答辯が出來なかつた。

『陛下、陛下の忠臣として、私が率直に申上げるのをお許し下さいますでせうか?』彼は答への時を永引かせる爲めにかう言つた。

『大佐、予はいつも夫れを望んでゐるのだ。』と皇帝は言つた。『何事も隱してくれるな。予は、必らず

有りの儘が知りたいのだ。』

『陛下!』とミショウは漸く、輕い、恭謙な語で自分の答辯を準備したので、有るか無きかの幽かな微笑をその唇に浮べて言つた。『陛下! 私がたちます時には、全軍は、上司令官から下一兵卒に至るまで一人も殘らず、極度に絶望的な恐怖に打たれておりました。』

『どうしたことだ?』と皇帝は、險しく顏を顰めて、その言葉を遮つた。『吾がロシア人は、不運のために意氣沮喪していゝのか!……いや、斷じてならない……』

ミショウが、語を弄せんとして待ち構へてゐた時が來た。

『陛下!』と彼は、さも恭謙らしい言ひ廻しで言つた。『彼等はたゞ、御仁德なる陛下が平和を御結びになりはしないかといふことを怖れております。彼等は奮戰し、』とロシア國民の代表者に言つた。『その生命を犧牲にして彼等が如何に忠烈なるかを、陛下に御覽に入れたいと熱望しております……』

『おゝ!』と皇帝はその兩眼に親しげな光を見せ、ミショウの肩を叩きながら、安心したやうに言つた。『卿は朕を安心させてくれた。大佐……』

皇帝は、伏眼になつて、暫らく默つてゐた。

『では、軍隊に歸つて、』と皇帝はぐつと身體を伸し、威あつて猛からざる風貌を以て、ミショウに言つた。『吾が勇敢なる諸士と、到る處で卿が出遇ふ、吾が善良なる臣民とに、若し予の兵卒にして一人

も生存者なき場合には、予は馬を吾が愛する貴族と、吾が善良なる農夫の先登に進めて、吾が帝國の最後の財産を費消せんと欲する由を語つてくれ。彼等は、予の敵が想像するよりも以上のものである。』と皇帝は漸次感激して言つた。『しかし、若し吾等の皇統が、吾が皇祖の王位に君臨するのを止めなければならぬといふことが、上帝の聖旨であるとすれば、』と皇帝は、感情とで輝いた、美しい、温和な兩眼を天に向けて言つた。『予は、予の權力内にある全財産を使ひ盡して、予の髯をこの邊まで延びるに任せ、』(と皇帝は片手で胸の中ほどを示した)『そして、吾が故國と、高價な犧牲を拂つて呉れる吾が國民との恥辱に調印するよりも、寧ろ農夫の間に下り、彼等の最も卑賤なる者と共に馬鈴薯を噛るであらう。』

感情に充ちた聲で、かう言つて、その兩眼にさしぐんだ涙をミショウに隱さうとでもするやうに、急に脇を向いて、書齋の奥へ歩いて行つた。そこで暫らく立つてゐたが、やがて大股でミショウの傍へ引返へし、彼の片腕の肘から下を勇ましく摑んだ、皇帝の立派な、温和な顏は朱を漲らし、その兩眼は決心と憤怒とで輝やいた。『ミショオ大佐、こゝで卿に語つたことを忘れてくれるな。多分いつか愉快にこれを憶ひ出すことがあるだらう……ナポーレオンか予か、』と皇帝はその胸を打つて言つた。『最早二人が同時に君主となることは出來ない。今予は彼を知つた。もう二度と彼に欺かれはせぬ……』

皇帝は顏を顰めて、默つた。この言葉を聽き、その眼に斷乎たる決心の色を見て、外國人で、感情と精神とはロシア人であるミショウは、この壯嚴なる瞬間に、自分が聞いたことの爲めに感激させられた。(後で彼が語つたやうに)そして、彼は、自分の感情と、自らその代表者なりと考へてゐるロシア國民の感情とを次ぎのやうな言葉で言ひ現はした。

『陛下!』と彼は言つた。『陛下は今、國民の光榮と、ヨウロツパの救ひとに御調印をなすつたのでござります!』

皇帝は會釋をして、ミショウを退席らせた。

四

この時ロシアは半ばまで征服され、モスクワの住民は、遠く地方に避難した、そして、國家の防衛のために、徴兵が頻々として行はれた。この時代に生きてゐなかつた吾々は、當時ロシアの全國民が、その大と小とを問はず、國家を救ふ爲めに自分を犧牲にし、或はその滅亡を慨くことにのみ熱中してゐた有樣を想像せざるを得ない。この時代の物語や、記錄には、一つとしてロシア國民の献身、愛國心、失望、悲哀、英雄的行動を語つてゐないものはない。しかし、實際に於ては、全然さうではなかつた

のだ。それは、吾々が過去から、その時代の一般的な歴史的利害を見て、人々の個人的利害を見ないが爲めであるやうに思はれる。そして又、實際に於ては、かゝる當面の個人的利害は、公衆的利害よりも、より重大なものであつて、個人的利害の爲めに公衆的利害は何うしても感じられなかつた。全然認められさへしなかつた。その時代の人間の大多數は、公共的事業の成り行には注意しないで、當面の個人的利害のみに支配されてゐた。そして、かゝる人々こそ、その時代の最も有用な人物であつたのだ。

事變の趨勢を知らうと努め、獻身的行動と英雄的精神とを以て、その趨勢に參與しやうとする人々は、社會に於て最も無用の人物であつた。彼等は、凡ゆる事をあべこべに解釋してゐた。そして彼等が公益の爲めにしたことは皆なロシアの村落を掠奪して歩いたピエールやマモノフの聯隊や、貴婦人連が引き裂き、而かも何うかすると負傷者の手許に達しなかつた繃帶などのやうに、無益な馬鹿げたことになつたしまつたのである。智識上の問題を論じたり、その感情を表白したりする事を好み、ロシアの現狀に就て論議する人々でも、無意識にその話の中に僞善や虚僞の陰影を投げ入れ、又は誰れの過失でも無いのに人々を非難し、その人々に對して無益の瑕瑾探しや、苛酷なことを言ふのであつた。歴史上の事件に於て、吾々は、他の事件に於てよりも一層明かに、吾々が智慧の樹の實を味ふのを禁ずる法則を見る。實を結ぶのは、たゞ無自覺なる活動力ばかりである、そして、歴史上の事件に於て或る役割を演ずる人は、決してその事件の意味を知らない。若し彼がその意味を知らうとするならば、彼

は果實のないことに驚かされるのである。

この時代に、ロシアに起つた事件の意味は、それに密接な關係をもつてゐる人ほど、了解するのが容易でなかつた。ペテルブルグや、モスクワから遠く離れた田舍では、義勇兵の制服を着た男女が、ロシアや、舊都の運命を悲んだり、獻身的犧牲に就て語つたりしてゐた。けれど、モスクワを後に退却した軍隊では、全くモスクワのことを考へたり話したりする者は無く、燃えてゐる市街を見ても、フランス人に復讐しやうと誓ふ者は一人も無かつた。そして、いづれも皆、自分に支給さるべき次の週間の給料のことや、次ぎの宿所のことや、酒保の女のマトリオーシカのことなどを考へてゐるのであつた。

ニコライ・ラストフは獻身的犧牲などといふ目的がある爲ではなく、たゞ戰爭が彼を服役させたので、偶然に長い間の國家的防衛に直接參加したのであつた。故に、失望もせず、陰氣な取越苦勞もせずに、その時、ロシアで行はれてゐることを見てゐた。若し彼にロシアの現狀をどう考へるかと尋ぐ者があつたならば、彼は、そんなことを考へるのは自分の役目ではなくて、クツウゾフやその他の人々の役目であること、聯隊はその全補充兵を以て充されむとしてゐること、故に彼等はまだ可成永い間戰爭をしなければならぬこと、現狀のまゝで行けば、二年の間に、彼が聯隊長になるのは容易であるといふこと、を答へるであらう。

彼は、事件に對して斯う云ふ見解をもつてゐたので、次ぎの戰鬪に參加せずに、所屬師團の補充馬購入の係長としてウオロネーヂに行くやうになつたと云ふことを聞いた時に、悔しがるどころか、寧ろ大喜びをしたのであつた。そして彼はこれを人に隱さなかつた、で、彼の戰友もよく彼の喜びを了解してゐた。

ボロヂイノの戰の數日前、ニコライは、金と書類とを受取つた、そして、一人の驃騎兵を前衞として先驅せしめ、ヴオロネーヂに向つて驛馬を走らせた。

これを經驗した者——卽ち數ケ月間續けざまに、戰場に於ける軍隊生活の空氣の中に日を送つた者——だけが、徽發隊と、糧食列車と、野戰病院とで一ぱいになつてゐる戰場を拔け出た時、ニコライの感じた悅びを理解することが出來る。彼は、兵卒や、軍用荷車や、陣營地のあつた不潔な跡などの代りに、農夫と百姓女のゐる村落や、地主の家や家畜の牧はれてゐる野や、居眠つてゐる驛長達のゐる驛などを見た時、恰度それを始めて見た時のやうな喜びを感じた、殊に永い間驚きと喜びとを彼の心に留めたものは、大勢の將校に後を追ひ廻はされるやうなことのない若々しい、健康な女達であつた、通りすがりの將校が戲談を云ふのを珍らしがつて媚を呈する女達であつた。

非常に樂しい心持になつて、ニコライは、その晩ヴオロネーヂの旅館に着き、永い間軍中で不自由してゐたさま〴〵のものを注文した、そして翌日は、特別に注意して顏を剃り、永い間着なかつた禮服を着けて土地の官廳に馬を驅つた。

民軍司令官は、非戰鬪員の將官で、その軍務と位階とを得意にしてゐるらしい老人であつた。彼はニコライに、腹立たしさうに應待し、(それが軍隊式であると思つて)恰も彼にさうする權利があるやうに、橫柄な態度で、ニコライに種々の訊問を試み、恰も戰爭の戰略を講評するために召喚したやうに、褒めたり非難したりした。ニコライは、それをたゞ面白いと感じたほど快活になつてゐた。

ニコライは、民軍司令官のところを出て、知事の家を訪ねた。知事は、極めて愛想のいゝ、さつぱりした、快活な小男であつた。彼は、ニコライに、種馬農場に行けば馬を得られるかも知れぬと告げ、町の博勞や、良い馬を持つてゐる、町から二十露里のところに住んでゐる地主達を紹介し、出來るだけ彼に盡力しやうと約束した。

『あなたが、イリヤ・アンドレーキツチ伯の御子息ですかい？　私の妻は、あなたのお母さんとは極の仲良しでした。私どもは、毎木曜日にお客をする例になつてゐますが、今日が恰度木曜日ですから、どうぞゐらして下さい、儀式は拔きにして、』と別れを告げる時に、知事はニコライに言つた。

ニコライは驛遞馬車を雇ひ、給養係を連れて、知事の家から、二十露里離れた、立派な種馬を持つてゐる地主の種馬農場へ眞直に馬を驅けさした。ヴオロネーヂに滯在中のことは、ニコライには萬事が容易に愉快に思はれた。人が愉快な心持でゐる時には、萬時が都合よく運び、萬時が成功するものである。

彼の訪ねた一地主は、年老つた、獨身の騎兵將校で、馬に就いての物知りで、多趣味な人で、且つ喫煙室と、百年を經た火酒と、古いハンガリ葡萄酒と、素晴しく立派な馬との所有者であつた。

相談は直ぐ纏まつて、ニコライは、その徴馬の見本として完全なる(彼はさう言つた)十七頭の種馬を六千留で買つた。午餐の馳走になり、ハンガリ葡萄酒を一二杯飲み過した後で、ラストフは、もう馴れ馴れしく話し掛けるやうになつてゐた地主と接吻を交はし、愉快な氣分で、ひどく惡い道を馬車を走らして歸途に就いた。彼は、知事の家の夜會に間に合ふやうに、斷えず御者を急き立てた。

着物を着換へたり、香水を匂はせたり、冷水で頭を濡らしたりして、ニコライは少し時間に遲れて、『遲くなつても來ないよりはましだ。』といふ言葉を用意して、知事の家に出掛けた。

それは舞踏會ではなかつたのであるが、來客は皆、カテリイナ・ペトロウナが翼琴の伴奏で、ワルツとエコツセイズを演ずるといふことを知つてゐた、そして舞踏があるかも知れぬといふので、それを期待して、舞踏服を着て來てゐた。

一八一二年の田舍の生活は、平素と少しも異はなかつた。たゞ異つてゐるのは、モスクワから多くの富豪の家族が流れ込んでゐるので、田舍の町が活氣を呈してゐたことと、當時ロシアに於ては何事でもさうであつたやうに、陽氣な中に自暴自棄的な調子であつたことと、人々が顏を合はせても、天氣のことだとかつまらぬ噂話などはせずに、直ぐモスクワや、軍隊や、ナポーレオンが話題に上ると

いふことであつた。

知事の家に集まつた人々は、ヴオロネーヂに於ける上流社會であつた。

大勢の貴婦人のうちには、ニコライがモスクワで知合ひになつた婦人もゐたが、男子のうちには、聖ゲオルギイ勳章の所持者たる騎兵で、派手な驃騎兵で、人の好い、育ちの良い、ラストフ伯と比べられる男は一人もゐなかつた。男子のうちに、捕虜のイタリイ人——フランス軍の將校——がゐた。ニコライは、この捕虜がゐることが、彼の價値を——ロシアの英雄を一層高めてゐるやうに感じた。捕虜は恰度戰勝記念碑のやうであつた。ニコライはさう感じ、衆人もそれと同じ眼でイタリイ人を見てゐると思つた。彼はこの外國將校に慇懃な態度で、併し幾分の威嚴と隔意とを以て、接した。

ニコライは、驃騎兵の禮服を着け、香水と酒の香とを四邊に香はせながら、入つて來た時、自ら『遲くなつても、來ないよりはましだ。』といふ言葉を囁き、又、人々から度々その言葉を聽いた。彼は集りの中心となつた。人々の眼は彼に向けられた。彼は直ぐ、田舍で自分に相應する、愉快で、永い間不自由をして來た身體には、心を醉はさんばかりに面白い、公衆の寵人と云ふ位置に踏み込んだことを感じた。彼は、驛や、旗亭や、地主の喫煙室などで、自分が言葉をかけると愛嬌を振り撒く女中共を見た。しかし、いまこの知事の家の夜會では、大勢の若い令夫人や、美しい令孃等が、彼が心を惹くのをもどかしさうに待つてゐるのである。(ニコライには、さう思はれた。)令夫人や令孃達は彼に媚

を呈した、そして、老人達は、最初からこの若い驃騎兵將校に嫁を世話して、その身を固めさせるのが、自分達の役目だと心得てゐた。後者のうちに、ラストフを近親のやうに考へ、彼を『ニコラス』と か『お前』など呼んでゐた知事夫人がゐた。

カテリイナ・ペトロウナは本當にワルツとエコセイズとを彈き初めた。舞踏が始まると、ニコライの優美な動作は、更らに地方の人達の心を奪つた、人々は、彼の特に自由な、樂な踊り方に驚いた。彼自身も幾らか此の夜の自分の踊り振りに驚いた、彼は、モスクワではかういふ踊り方をしなかつたし、かういふ自由な、樂な踊り方を見苦しいことと思つてゐたのであるが、こゝでは、何か珍らしいこと、人々が田舎では珍らしいけれど、都會ではこれが普通なのだと考へるやうなことをして、彼等を驚かしてやりたいと感じたのである。

一晩中、ニコライは、地方官の一人の細君で、眼の青い、肥つた、美しい、小柄のブロンドの女に一ばん心を惹かれた。人の細君は自分等のために存在するものであるといふ、享樂的な青年の生な考想を以て、ラストフは、その女の傍を離れなかつた。そして女の夫には、殆んど二人の間に、即ちニコライと此男の妻との間に內密の了解があることを、口に出しては言はないが、お互ひに知つてゐるかのやうに、馴々しく、幾らか針を有つた態度で接した。尤も、夫はニコライの考想のお接伴をするやうには見えなかつた、彼はラストフに極めて暗い心持で接した。が、

ニコライは人の好い無邪氣な態度を見せるので、時々夫はニコライの快活な氣分に引入れられざるを得なかつた。けれども夜會の果てやうとする頃には、丁度、一つの活氣を夫婦二人で有つてゐた、その活氣が、細君の方で增せば夫の方で減するかのやうに、細君の顏がだん〳〵赤味を帶び、活氣づいて來たのに引き換へ、夫の顏はだん〳〵陰氣になつて來た。

五

その顏に斷えず微笑を浮べてゐたニコライは、低い椅子に少し前屈みに腰掛け、ブロンドの女に出來るだけ近く覆ひ被さるやうにして、彼女に出鱈目の挨拶をしてゐた。

ニコライは、その緊着した乘馬用ズボンを着けた足の位置を快活に變へたり、香水を四邊に匂はせたり、この夫人や、自分や、緊着した乘馬用ズボンを着けてゐる自分の足の美しい形などに見惚れたりしながら、ブロンドの女にこのヴオロネーヂにゐる間に、誰れか一人の夫人を自由にして見たいなどゝ語つた。

『どういふ夫人を?』

『美しくて、崇高い夫人をです。彼女の眼は、(ニコライは相手の女を見た)蒼くつて唇瑚は珊のやう

で、白い……（彼は女の肩を眺めた、）姿はヂアナのやうな……』

夫が二人の傍に來て、詰らなさうな顏をして、妻に何を話してゐたかと尋ねた。

『おゝ！　ニキタ・イワニツチ君。』と、鄭寧に立上つて、ニコライは言つた。そして、ニキタ・イワニツチが自分の戲談の仲間入りをするのを望むものゝやうに、彼に、一人のブロンドの女を自由にして見やうと云ふ自分の計畫を語り始めた。

夫は陰氣に、妻は嬉しさうに微笑んだ。

人の好い知事夫人が、何事かを咎めるやうな樣子で、彼等の傍へ遣つて來た。

『ニコライさん。アンナ・イグナチエウナさんがあなたにお目にかゝりたいんですつて。』と彼女は言つた。彼女がアンナ・イグナチエウナといふ名前を發音した調子で、ニコライは直ちに、その人物が高い地位にある女だといふことを知つた。『ゐらつしやい。ニコラス。ニコラスと呼んでもいゝでせう、ねえ。』

『宜うございますとも、おば樣、その方はどういふ女ですか？』

『アンナ・イグナチエウナ・マルヴインツエワさんですよ。あの方の姪御をあなたがお助けなすつたつてことを聞いてゐらつしやるんですつて……あなた、思ひ當ることがおありなさるでせう？』

『さあ、私は隨分澤山の人を助けましたからなあ！』と、ニコライは言つた。

『あの方の姪御は、公爵令嬢バルコンスキイですよ。公爵令嬢は、伯母樣とこのヴオロネーヂにゐらつしやるのです。あら！　あんなに赤くおなりになつて！　何うなすつたの？』

『ちつとも、そんなことはありませんがね、そんな馬鹿げたことは。おば樣。』

『まあ、宜うございますわ、宜うございますわ、まあ！　あなたは、なんて、坊ちやんなんでせうねえ。』

知事夫人は、この町の貴顯紳士と骨牌を終つたばかりの、青い帽子を冠つた、丈の高い、でつぷりとした老婦人の傍へ彼を連れて行つた。それが、公爵令嬢マリヤの母方の伯母に當る、金持の、子供の無い寡婦で、始終ヴオロネーヂに住んでゐるマルヴインツエワ夫人であつた。ラストフがその傍へ行つた時には、彼女は立つて自分の敗けを勘定してゐた。

彼女は、嚴格な威嚴のある態度で、眼を瞬きながら、ニコライに一瞥を與へた、そして矢張り彼女を負かした、一人の將官を罵しつてゐた。

『お目にかゝることが出來て大變うれしうございます？』と、彼女は彼に手を差し伸べて言つた。『どうぞ、私どもへもゐらして下さいまし。』

公爵令嬢マリヤのことゝ、マルヴインツエワ夫人が嫌つてゐたらしい亡くなつたマリヤの父親のことに就いて少し話しマルヴインツエワ夫人がこれも愛されなかつたらしいアンドレー公爵のことをニ

コライから尋いた後、威厳ある老夫人は、自分の家の夜會には是非來るやうにと何遍も繰返へしながら、彼を退座らせた。

ニコライは、必らず訪ねるといふ約束をし、マルヴインツエワの傍を退座する時に、また頬を赤らめた、公爵令嬢マリヤの話が出た時、ニコライは自ら說明することの出來ぬ羞耻と、恐怖をさへ感じた。

マルヴインツエワの傍を退座ると、ラストフは、舞踊の方へ歸らうとしたが、小柄の知事夫人が、その丸く肥つた小さな手で、彼の袖を引いて、一寸話したいことがあるからと言つて、彼を喫煙室に連れて行つた。その部屋にゐた人達は、彼女の邪魔になると思つたので、皆直ぐに出て行つてしまつた。

『あのねえ、』と知事夫人が、人の好い小さな顔に、眞面目さうな表情を浮べて言つた。『これは、あなたには實に良い御緣なんですから、私が纏めませうか?』

『それは誰れですか、おば樣?』と、ニコライが尋ねた。

『私は公爵令嬢をお世話するんです。カテリイナ・ペトロウナさんは、リリイさんをといふお話でしたが、私は、それよりも公爵嬢の方がいゝと思ひます。あなたは心がおありですか? あなたのお母さんもきつとお喜びですよ。ほんたうにあの方は、立派な、美しいお嬢さんですものー 何うして、そ

んなに不器量ぢやありませんよ。』

『えゝ、何うして。』と、ニコライは、氣嫌を惡くしたやうに、言つた。『私としては、おば樣、軍人は誰れでもさうなければならぬのですが、誰れでなければならぬといふことはありませんし、何んなのでも敢へて辭しません。』とラストフは、自分の言ふべきことを考へる暇もなく、かう言つてしまつた。

『じやア、よく覺えてゐて下さいよ、これは戲談ぢやないんですから。』

『勿論です。』

『さう、さう、』と知事夫人は獨言のやうに言つた。『それから、あなたはあの人に——あのブロンドの婦人にあんまり御熱心が過ぎますよ。みんな御亭主が氣の毒だと思つてゐますよ、實際……』

『いや、何うしまして。吾々は極めて親しい友人なんです。』とニコライは、單純な心で言つた。彼は未だ嘗つて、かやうに自分にとつて愉快な慰みが、他人には愉快ではないものだなど考へたことは無かつた。

『だが俺は何といふ馬鹿氣たことを知事夫人に言つたんだらう?』とニコライは、晩餐の時急に考へ出した。『夫人は屹度話を纏めやうとするに違ひない。しかし、ソーニヤは何うするのだ?……』

知事夫人と別れを告げる時、夫人がまた微笑を含んで『では、覺えてゐて下さいよ。』と彼に言つた

ので、彼は夫人を脇の方に引張つて行つた。

『ですが、實は斯ういふ事情なんです、おば様……』

『何です、何です、？　こちらへいらつしやい。こゝへ腰掛けませう。』

ニコライは、自分の秘密な思想（母親にも、妹にも、親友にも打明けられないやうな）を、殆んど見ず識らずの他人なる、この婦人に語らんとする慾望と必要とを俄かに感じた。ニコライは後で、何の理由もなく起つた、譯の分らぬ——けれども彼に最も重大な結果を齎す——率直に就いて考へて見ると、それは、その場の機みでさうなつたので實に馬鹿氣たことをしたものだと思ふのであつた。（人は誰れでも皆さう思ふものであるが、そして、それと同時に、この率直の突發が、他の小さな事件と結び附いて、彼と彼の家族とに重大な結果をもたらすのであつた。

『それは、かうなんです。おば様。ずツと以前から、私の母は私を相續娘と結婚させやうとしてゐるんです。しかし、たゞ金の爲めに結婚すると云ふ考が、私は嫌なんです。』

『さうですとも、よく解りましたわ。』と、知事夫人は言つた。

『けれども、公爵令嬢バルコンスキイは、事柄が違ひます。正直にお話しすると、先づ第一に、私はあの娘を好いてゐますし、引きつけられるやうな氣がします。それから、私があんな場所で、不思議にもあの娘と遭つてからといふものはそれが運命だつたと、私は時々つく〴〵思ひました。まあ、考へて御覽なさい。私の母はずツと以前からそのことばかりを夢見てゐたのですが、以前には一度も遭はなかつたのです。しかし、私の妹のナターシャが、あの娘の兄と約婚をすることになつたので、私ども二人が結婚することは出來なくなつたのです。最初ナターシャとの約婚が破れた時に、私があの娘に會つてゐれば宜かつたと思ひますが、もうみんな過ぎ去つた後のことです……これでお解りになつたことゝ思ひます。私は今まで誰れにもこの事を話したことがありませんし、これからも話しません。私はたゞ、あなただけにお話するのです。』

知事夫人は、感謝の意を表して、彼の肘を壓へた。

『あなたは、私の從妹のソフイーを御存じですか？　私は彼女を愛してゐます、私は彼女と結婚の約束をしました、そして、これから結婚しやうと思つてゐます……で、こんなことをお話しするのが無益なことがお解りになるでせう。』とニコライは、恥しさうに顏を赤めながら言つた。

『まあ！　まあ！　あなたは、何うしてそんな氣になつたんでせうねえ？　ようございますか、ソフイーは一錢だつて持つてゐませんよ。そして、あなたのお父さんの財政は大へん窮迫を告げてゐるとおつしやつたぢやありませんか？　それに、あなたのお母さんは何うでせう？　そんなことをなすつたら、直ぐに死んでおしまひなさるわ。それから、ソフイーにしても、もし情のある女だつたら、何んな生涯を送ると思ひます！　あなたのお母さんは、絶望なさるし、あなたは、零落なさる……いや、ソ

フイーもあなたも此處のところをお考へなさらなけりやなりませんわ。』

ニコライは默つてゐた。彼は、この結論を聽くのが嬉しかつた。

『やつぱりそれも駄目ですねえ。おば樣。』と、彼は一寸默つてゐた後で、吐息をつきながら言つた。

『そんなら、あなたは、公爵令嬢が私と結婚すると思ひますか？　彼女はいま喪中ですよ、そんなことがどうして考へられるでせう？』

『おや、あなたは私が今直ぐにあなたを結婚させやうとしてゐると思つてるんですか？　それには、幾らもいゝ方法がありますよ。』と、知事夫人は言つた。

『あなたは、何といふ媒介者でせう、おば樣……』とニコライは言つて、彼女の肥つた手に接吻した。

六

公爵令嬢マリヤは、ラストフに遭つてから、モスクヮに着いて、家庭教師と一緒にゐる甥に會ひ、ヴオロネーヂの伯母マルヴインツエヲの許へ行く道筋を書いたアンドレー公爵の手紙を受取つた。旅の用意、兄に關する心配、新らしい家で送らんとする新生活の仕組、新らしい人々、甥の教育——かういふさま〴〵のことが、彼女の父親の病氣中や、死んでから、殊にラストフに遭つてから、彼女を苦めてゐた誘惑的な感情を、彼女の心から打ち消した。彼女は憂鬱であつた。やがて、一ヶ月の間、平靜な生活を送ると、彼女は、父親の死を、心の中でロシアの滅亡と結び附けて、だん〳〵深く感ずるやうになつた。彼女は不安であつた。彼女の兄——それはたゞ一人の彼女の近身である——が出遭つてゐる危險が、斷へず彼女を苦しめた。彼女はまた、甥の教育を始終氣にして、自分はそれに不適當であるといふ感情を抑へることが出來なかつた。しかし、心の底には、ラストフとの關係から起つて來る、自分の空想や希望を、心の中で押し潰して了つたと云ふ意識から生ずる、內心の滿足があつた。

知事夫人は、夜會のあつた翌日、マルヴインツエフ夫人を訪ねて、自分の計畫を話し（現在の事情では、形式的の婚約は勿論六ケ敷しいから、二人を一緒に置いて、お互の氣心を知り合はしたいと語り）そして、伯母の許可を得て、マリヤの面前で、ラストフのことを言ひ、彼を褒めちぎつて、彼は公爵令嬢の名を聞いて顏を赤らめたなど〳〵語つた。公爵令嬢は、嬉しさよりも寧ろ苦痛を味はつた。彼女の內心の靜けさは破れ、慾望や、疑惑や、自己批難や、希望が再び踊り上つて來た。

この話を聞いてからラストフが訪問するまでの二日間、公爵令嬢マリヤは、ラストフに對して何ういふ態度を執らなければならぬだらうかと斷えず考へてゐた。彼が伯母のとこに來ても、客間には出まい、裏中に訪問客に接するのは失禮なことであると決めて見たり、或は、それでは、彼が自分のため

に盡してくれたことに對して、餘りに無禮であると考へたり、或は、伯母と知事夫人とは、自分とラストフとに就て、何か企圖んでゐるのだ、(彼等の言葉や眼眸が何うかするとその豫想を確めることがあつたやうに思へた。)と思つて見たり、或は自分があの女達のことを斯う考へるのは、たゞ自分が墮落してゐるからで、あの女達も、自分がまだ重い喪服を脫がないのに、こんな結婚話をするのは、自分と自分の亡き父とを侮辱するものだといふことに氣が附かない筈はない、と獨語つたりした、マリヤは、假りにラストフに會ひに行くものとして、彼が、自分に話しかける言葉と、自分が彼に言ふべき言葉とを想像して見た。と、その言葉が、或は彼女の柄に無いほど冷淡なものであつたり、或は余り多くの意味を含んでゐるやうに思はれたりした。彼女は、自分がラストフに會つた時に、どぎまぎすることを何より怖れてゐた。彼女はどぎまぎの爲めに自分が負けてしまひ、自分が裏切られるに違ひないと感じてゐた。

しかし、日曜日の朝禱が濟んでから、下男が、ラストフ伯爵が訪ねて來たと、客間へ知らせに來た時には、公爵令孃は少しも當惑したやうな樣子を見せなかつた。たゞ微かな赤みがその頰に上つただけで、その兩眼は、新らしい光で輝やいた。

『伯母樣、あの方にお會ひでしたの?』と公爵令孃マリヤは、見掛けがこんなに穩かで、自然なのを自ら驚ろきながら落着いた聲で言つた。

ラストフが客間に入つて來た時に、公爵令孃は、伯母と挨拶する時を彼に與へるとでもいふやうに、一寸頭を俛れた。そしてニコライが、彼女の方を向いたその瞬間に、マリヤは、頭を上げたので、その輝やく兩眼が、彼の視線と遭つた。彼女は品位と優美のある動作で、微笑みながら立上り、細そりした優しい手を、彼の方に差し伸べ、今迄になかつた女らしい、情の籠つた聲で、彼に話しかけた。同じ室にゐたブリアンヌ孃は、不思議さうに吃驚して、公爵令孃マリヤを見た。最も巧みな妖婦のブリアンヌ孃でさへ、自分が心を惹かうと思ふ男に會つた時マリヤほどうまく取込むことは出來なかつた。

『喪服が彼女に似合ふのか、それとも私の知らないうちに、彼女が美しくなつたのか、いづれにせよ、あの手練と優雅は素敵なものだ!』と、ブリアンヌ孃は思つた。

公爵令孃マリヤが、若しこの時自分を振り返つて見ることが出來たならば、彼女はブウリアンヌ孃よりも、もつと自分の中に起つた變化に驚いたであらう。彼女が、かのいとしい、親切な顏を見たその瞬間から、或る新らしい生命の力が、彼女を虜にし、彼女の顏は俄かに變つた。彫刻と彩色を施した提灯は、かしたりした。ラストフが入つて來た時から、彼女の意志を無視して彼女を喋らしたり、動その前には醜くて、暗くて無意味なものゝやうに見えるが、それに火を點すと、思ひがけなく、驚くべく美しい混入つた、巧みに美術的模樣をみせるものである。恰度それと同じやうに、公爵令孃マリヤの

顔は俄に變つたのである。最初に、彼女が永年味はつて來た、凡ての純粋な、精神的な、內心の勞苦が、その顔に現はれた。いつも不滿な彼女の有ゆる內心の勞苦、苦痛、美を爲さんとする努力服從、愛、獻身——凡て之れ等のものが、今彼女の涼しい眼と、幽かな微笑と、優しいさま〴〵の相好とに光り輝いてゐたのである。

ラストフは、彼女の全生涯を知つてゐるかのやうに、凡て之れ等のことを明に見拔いた。彼は、今自分の眼の前にゐる人は、今までに遭つた人々と全く異つた、また、その人々よりもつと良い人で、彼自身よりももつと良い偉大な人であると思つた。

會話は至極簡單で、無意味なものであつた。彼等は戰爭の話をし、誰でもするやうに、無意識に夫れに就いての自分達の悲みを誇張した。彼等は過ぐる日の夜會のことを語つた。その時ニコライは話題を轉じやうと試みた。彼等は、親切な知事夫人、ニコライの親戚、公爵令嬢マリヤの親戚などに就て語つた。

公爵令嬢マリヤは、彼女がアンドレーのことを言ひ出すと、兄のことを話さずに、話題を轉じた。彼女は、ロシアの不幸に就ては、人前で巧みに語ることが出來たが、兄は自分の心に餘りに、近い問題なので、彼に就いては容易に語ることが出來なかつたし、また夫れを望まなかつた。ニコライは、これに氣が附いた。自分に似合はぬ洞察力で公爵令嬢マリヤの性格の凡ゆる影に氣が附いた。そしてその

影は皆、彼女が、全く特別な、非凡な女性であると云ふ彼の確信を證明するものであつた。公爵令嬢マリヤと同じく、ニコライは、人がマリヤのことを話しかけられた時、或は彼がマリヤのことを考へる時でさへ、顔を赤らめて、どぎまぎするのだが、彼女の眼の前では、全く安靜な心持で、前以て彼女に言はうとして準備したことを少しも語らず、その場合に應じて思ひ附いたまゝを話した。

子供のある家を訪問した客が誰れでもするやうに、ニコライは、その短時間の訪問の間に、時々話が途切れると、アンドレー公爵の男の兒に揶揄つたり、愛想をしたり、驃騎兵になりたくないかと尋ねたりした。彼は小兒の手を執り、快活に小兒を振り廻はして、マリヤの方をちらツと見た。彼女の優しい、幸福さうな、おど〳〵した眼は、愛する男の手に抱かれてゐる愛する小兒を見守つてゐた。ニコライは、彼女の斯うした眼付をも知つた。彼は恰も、その視線の意味を理解したかのやうに、滿足のために顏を赤らめ、人の好い快活な樣子で、小兒に接吻した。

公爵令嬢マリヤは、裏中なので、全く社交界に出なかつた。ニコライは、重ねて二人を訪問するのを宜くないことだと思つた。けれど、知事夫人は、相變らず媒介を續け、ニコライには、マリヤが彼のことをかう言つたと嬉しがらせを言ひ、マリヤが彼の前で心中を打明けろと勸めた。それを實現させる爲めに、朝禱の前に、長司祭の前で、二人が會ふやうに事を取り定めた。

ラストフは、知事夫人に、公爵令嬢マリヤに意中を打明けることは出來ないと言つたが、兎に角行くことだけは約束した。

ラストフは、チルシットで、萬人が正しいと思つてゐる事が實際正しいか何うかと疑ふのを自ら許さなかつたやうに、この時も、自分が正しいと思ふ考に從つて生活しやうとする努力と、周圍に對する謙遜な服從との間の、短かいが、併し眞面目な煩悶の後で、彼は後者を選び、無理矢理に彼を引きまたマリヤに自分の意中を打明けるのは、彼の所謂卑しい事であることを知つてゐた。彼は、亦、自分がかゝる卑しい事を今後決してしないことも知つてゐた。しかし、彼はまた、今、自分を支配してゐる境遇と、人々との力に身を任せるのは、少しも不正なことでないばかりか、極めて眞面目なこと、彼が今まで一度もしたことのないほど、眞面目なことをするのであるといふことを知つてゐた。(いや知つてゐたのではない、その心の底に感じてゐたのである。)

彼が、公爵令嬢マリヤに會つてから、外面の生活は變らなかつたが、今までの有ゆる快樂は、彼に對してその魅力を失つた、彼は絶えず公爵令嬢マリヤのことを思つてゐた。が、今まで彼が社交界で遭つたさま〴〵の若い娘を思つたと同じやうに、また、永い間、時としては熱情を以て、ソーニヤのこと思つたと同じやうに、マリヤ思つたのではなかつた。正直な青年に有り勝ちなやうに、彼は今ま

で、さま〴〵の少女を、未來の妻として考へてゐた、彼等を家庭生活の有ゆる事情と——朝の白い外衣姿、湯沸器の後ろにゐる妻、妻の馬車、可愛い子供たち、父ちやんに母ちやん、若夫婦お互ひの態度などと結び附けて想像してゐた。そして、かういふ未來の空想が彼に愉快を與へた。けれど、今媒介者が彼と約婚させやうとしてゐる公爵令嬢マリヤのことを考へると、彼は何うしても彼女との未來の家庭生活を空想することが出來なかつた。強いて空想しやうと試みても、何うも夫れが虚僞で辻妻が合はぬやうな氣がした。そして、たゞ何となく悲しくなるだけであつた。

七

ボロヂイノ戰役に於ける吾が死傷損害の怖るべき報告と、それよりももつと怖ろしいモスクワ滅落の報告とは、九月の中頃ウオロネーヂに到着した。公爵令嬢マリヤは、新聞だけで兄の負傷を知つたが、それに就いて確かな報告がないので、彼女はアンドレー公爵の許に行かうとして、出發の準備をした。ニコライは、マリヤには會はなかつたけれども、只さういふ噂を聞いたのであつた。

ボロヂイノ戰役と、モスクワ退却との報知を受けると、ラストフは、失望や、憤怒や、敵愾心や、これに似寄つた感じは抱かなかつたが、急にウオロネーヂの凡ゆるものが退屈で嫌になり、何故か凡

ゆるものが彼の良心を責め、彼の安靜を破つた。そして彼の耳に入る會話が皆な、不眞面目なやうに思はれた。彼は夫れをどう判斷していゝか分らなかつたが、聯隊に行きさへすれば、凡てがまた明白になるやうな氣がした。彼は急いで軍馬購求を終らうとした。そして、時々理由もないのに、下男や給養係に當り散らした。

ラストフがたつ數日前、露軍戰勝感謝祈禱が、寺院で行はれたので、彼は祈禱に出席した。彼は知事の後ろに立ち、さま〴〵な儀式が行はれるにつれ、さま〴〵の問題を考へながら祈禱が終るまで立ち通した。式が終つた時に、知事夫人は彼を麾いだ。

『公爵令嬢を見ましたか?』と彼女は、唱歌隊の後ろに立つてる喪服の婦人を頭で指して言つた。

ニコライは直ちに夫れが公爵令嬢マリヤであることを知つたが、それは、彼女の帽子の下に見た彼女の横顏で知つたといふよりも、寧ろ直さま彼の心を促へた羞恥と、憐憫との情で知つたのであつた。深い物思ひに沈んでゐたらしい公爵令嬢マリヤは、寺院を去る前に、最後の十字を切つた。

ニコライは、驚ろいて彼女の顏を見つめた。それは、彼が前に見たと同じ顏で、やはり、微かな、內心の勞苦を表はしてゐた。けれど、今は、全く異つた光をもつてゐた。感激したその顏は悲哀と、祈りと、希望とを表はしてゐた。ニコライは、嘗つて彼が彼女の前で感じたと同じ無遠慮を以て、知事夫人から彼女に近づくやうにと勸められるのも待たず、このお寺で彼女に話しかけて宜いものか

何うかを省みもせずに、彼女に近づき、彼女の心配を人から聞き、自分も赤心から悲しんでゐたと言つた。彼女が彼の聲を聽くや否や、生々した光が急にその顏に燃えて、彼女の悅びと悲みとを同時に照らした。

『あなたにお話したいと思つてゐたんですが、』と、ラストフは言つた。『公爵アンドレー・ニコラエヰツチが、もし存命でないとすれば、公爵は大佐ですから、直ぐ各新聞紙上に公表される筈です。』

公爵令嬢は、その言葉が飮込めなかつたが、彼の顏に讀める同情の表はれを嬉しく思つて、ぢつと彼を見た。

『それから、今までの例に依りますと、砲彈の裂片で負傷したのは、(新聞紙は榴彈の負傷であると報じた)卽死か、極輕傷かどちらかなのです。』と、ニコライは言つた、『御心配なさることはありません。私は確かに……』

公爵令嬢マリヤは、彼の言葉を遮つた。

『まあ、怖ろし……』と彼女は言ひかけたが、感情が昂ぶつて、全然言つてしまふことが出來ないので、優雅に(彼の前では何事でもさうするのだが)頭を垂れ、感謝するやうに彼の方をちらりと見て伯母の後を追ふた。

その晩、ニコライは何處へも出掛けずに、家で馬の賣手との取引を終つた。その仕事が濟んだ時に

は、もう出掛けるには遅かつたが、まだ寝るには早かつたので、ニコライは、部屋の中を永い間ブラ〳〵歩きながら、滅多に考へたことの無い、自分の生涯に就いて物思ひに耽つた。

公爵令嬢マリヤは、スモオレンスクで、彼に快い印象を與へた。彼があゝいふ非常の場合に彼女に廻り合つたといふ事實と、嘗つて母が、マリヤを彼に似合つた金持の相續娘と彼に言つた事實とは、彼をして特別の注意を彼女に拂はせたのであつた。ウオロネーヂに滯在中、彼が訪ねて行つた時、かの印象が、快いものであつたばかりではなく、極めて力強いものとなつた。ニコライは、初めて彼女に珍らしい道德的な美のあるのを知つて、それに打たれた。けれども彼は出發の準備をしてゐた。そして彼はウオロネーヂを去ると、彼女に會ふ機會がなくなつてしまふことを悲しまなかつた。ところが、その日寺院で彼女に會つたことは、豫想以上に彼の心に深く喰ひ入つた、彼が自分の平靜のためを望んでゐた以上に彼の心に深く喰ひ入つた。(ニコライは之を感じてゐた。)かの蒼白めた優しい悲しげな顏、涼しい眼、靜かで雅やかな科、つまり、彼女の身體全體に現れた、深い、優しい憂鬱は、彼の心を動かし、彼の同情を惹いた。ラストフにとつて、男子の中に、高尙な精神生活の表はれを見ることは堪へられない程厭なことであつた。(彼がアンドレー公爵を好かなかつたわけはそれである)彼はそれを哲學だ、空想だ、と嘲弄した、しかし、公爵令嬢マリヤに於ては、殊にニコライの知り得なかつた深い精神生活を示めす彼女の憂鬱に於ては、ラストフは、退ぞけがたい魅力を感じたのであつた。

『彼女は、不思議な女だ! 眞實に天使だ!』と、彼は獨語つた。『何故俺は自由でないのだらう?何故俺はソーニヤとの關係を急いだのだらう?』彼は知らず識らず二人の女を比較してゐた。——自分が持つてゐないから、高く買つてゐる精神的天禀が、その一人には豊富で、その一人には貧弱である。彼は、もし自分が巧くやつたら、事は如何に成り行くだらうかと想像して見た。彼は何ういふ風に結婚を申込むだらう、そして彼女は彼の妻になるだらうか? 否、彼はそれを想像することが出來なかつた。一種の恐怖が彼を襲つた、その想像は、判然した定まつた形にならなかつた。よほど以前に、彼はソーニヤに就て、未來の空想を描いたことがあつたが、その時の空想は單純で判然してゐた、と云ふのは、その空想は皆な考へ出したものであつたし、又彼はソーニヤのもつてゐるものを凡て知つてゐたからであつた。しかし、公爵令嬢マリヤの場合には、彼はマリヤを了解してゐないで、たゞ單に愛してゐるに過ぎなかつたから、自分の未來の生活を想像することが出來なかつた。

ソーニヤに關する空想には、何かしら氣樂な、遊戲的なものがあつたが、公爵令嬢マリヤのことを想ふと、いつも困難を感じ、何かしら怖ろしさを感じた。

『彼女はあんなに祈つてゐた!』と彼は考へた。誰の目にも、彼女の全心が祈禱に注がれてゐるやうに見えた。さうだ山を動かす祈禱といふのはあれなのだ、彼女の祈禱が答かれるといふことを俺は信ずる。何故、俺は自分に必要なことを祈らないのだ?』と、彼は思ひ出した。『俺には何が必要なのだ

らう？　自由だ。ソーニヤと絶縁することだ、あの女が言つた通り、』と彼は知事夫人の言つたことを思ひ出した。『ソーニヤと結婚したところで、不幸の外、何ものも得られやしない。困亂、母の悲み……俺の立場……困亂だ、恐しい困亂だ！　それから、俺はソーニヤを愛してさへゐない。否。俺が愛してゐると云つたつて良心が許さない。神様！　この怖ろしい、絶望の立場から私を救つて下さい！』と彼は急に祈禱を始めた。『さうだ、祈禱は山をも動かすものだ。しかし、信仰が無くちやいけない。子供の頃俺とナターシヤとが、雪を砂糖に變へたまへと祈つて、砂糖になつたか何うかを見るために庭に走り出たやうな、あんな祈禱じやいけない。否、俺は今、小さなことを祈つてゐるんじやない。』と彼は煙管を部屋の隅に置き、掌を組合せて、聖像の前に立つて言つた。公爵令嬢マリヤのことを考へると心が柔いだので、彼は、永い間しなかつた祈禱を始めた。ラヴリューシカが何かの書類を持つて入つて來た時に、彼は涙を流し、喉を詰らせてゐた。

『馬鹿！呼びもしないのに何故來た！』とニコライは、忽ちその態度を變へて言つた。

『知事さんから、』とラヴリューシカは、眠むさうな聲で言つた。『お使が手紙を持つて參りました。』

『あゝ、さうか、有難う、あつちへ行つてゐてくれ！』

ニコライは、手紙を二本受取つた。一本は母からで、一本はソーニヤからであつた。彼は筆蹟で直ぐ分つたから、先づソーニヤの手紙の封を切つた。漸くのことで、數行讀み下すと、彼の顏色が眞蒼

になり驚きと喜びとで、眼を大きく見開いた。

『否、そんな事はある筈がない。』と、彼は聲高に言つた。

凝つと座つてゐることが出來ないので、手紙を兩手で持ち、讀みながら部屋の中を歩き始めた。彼は、ずつと手紙に眼を通し、一二度讀み返へした。そして肩をすぼめ、兩手を投出し、口を開け、眼を据えたまゝ部屋の中央に立ち止つた。つい今、彼が、神はきつと、自分の祈禱に答へるといふ信仰を以て、祈つた其事は、實現されたのであつた。しかし、ニコライは、何か異常なことのやうに、彼が全然豫期しなかつたことのやうに、また、今こんなに早く　願が叶へられたのは、彼が願つた神の意志ではなくて、偶然にさうなつたのであるかのやうに、驚いた。

彼の自由を束縛してゐた、一見解くことの不可能やうに思はれた結節は、この豫期しない（ニコライはさう思つた）そして少しも要求しないソーニヤの手紙によつて解決されたのであつた。ソーニヤの手紙には、二人の最近の不幸な事情や、モスクワに於けるラストフ家の財産が殆んど全部失はれたことや、ニコライを公爵令嬢バルコンスキイと結婚させるといふ伯爵夫人ラストフの度々の言明や、近頃のニコライの無音と冷淡——凡てかういふことを思ひ合せて、彼女はニコライをその約束から自由にさせ、全き自由を彼に返へすことを決心した、と書いてあつた。

『私は、自分が深い御恩を受けてゐる御家族の、悲哀と不和の原因となるのかと思ふと、とても苦痛

で堪りません。』と彼女は書いてゐた。『私の愛のたゞ一つの目的は、私が愛する人の幸福です。ニコライ、どうぞあなたの御自由になすつて下さいまし、そして、どんな事があつても、あなたのソーニヤほど、強くあなたを愛してゐるものは無いといふことを覺えてゐて下さいまし。』

手紙は二本ともトロイツツアから出てゐた。もう一本の手紙は、伯爵夫人ラストフからであつた。それには、モスクワに於ける最後の數日間のことや　モスクワを出發したことや、財産全部を失つたことなどが書いてあつた。伯爵夫人は又、夫人等と一緒に旅行してゐた負傷者の中に　アンドレー公爵がゐたこと、彼は甚だ危險な狀態であつたが　現在では軍醫が　よほど希望があると言つてゐることなどを報じた。

翌日、この手紙を持つて、ニコライは公爵令嬢マリヤを訪問した。ニコライも公爵令嬢マリヤも『ナターシヤが看護してゐる』といふ言葉の意味に關しては、一言も語り合はなかつた。けれども　この手紙のお蔭で、ニコライは、公爵令嬢と急に身内のものゝやうに親しくなつた。

その翌日、ラストフはヤロスラウルまでマリヤを護衞した。そして、それから數日して、彼は聯隊に歸つた。

八

ニコライの祈禱の實現になつたソーニヤの手紙は、トロイツツアで書いたものであつた。彼女がこの手紙を出したのには、かういふ由來がある。ニコライを金持の相續娘と結婚させやうといふ伯爵夫人ラストフの考は、だん〳〵動かし難いものとなつた。夫人は、それを果すには、ソーニヤが非常な邪魔物であるといふことを知つてゐた。で、ソーニヤに苛酷な諷言を言ふ機會を外づさなかつた。

ところが、モスクワを出發する數日前、種々な出來事のために悲しみに昂奮してゐた伯爵夫人は、ソーニヤを呼んで、無理强いをしたり、叱責したりするやうな態度を見せずに、自分を犧牲にして、今までの恩報じをしてくれ、ニコライとの緣を切つてくれと涙を流して懇願した。

『あなたがその約束をしてくれるまでは、私は夜の目も眠られない。』

ソーニヤは、神經的に、欷歔つた。泣きながら、どんな事でもする何んな事でもしたいと思つてゐる、と、彼女は答へた。しかし、直ぐに約束はしなかつた。心の中では、賴まれたことを、とても果すことが出來ないやうな氣がしてゐた。彼女は、自分を育て上げ、敎育してくれた家庭の幸福のために自分を犧牲にしなければならなかつた。他人の幸福のために犧牲になるのは彼女の習慣であつた。ラストフ家では、彼女は、犧牲によつてのみ彼女の價値を見せることが出來るといふ立場にゐた。彼女は自

分を犠牲にするのに馴れ、それを好んでゐた。しかし、従來彼女はさま〴〵の犠牲的行爲をする場合に、その犠牲によつて、自分や他人の前に自分の價値を高めると同時に、自分がこの世に於て何物にも換へ難く愛してゐるニコライと益々應はしい者になるのだといふことを知つてゐた。ところが今度の彼女の犠牲は、その犠牲に對する凡ての報酬と、彼女の人生の凡ての意味とを棄てゝしまふ事となるのである。彼女は生れてから初めて彼女をよりひどく苦しめるがために彼女に恩を着せてくれた人人に嫌惡を感じた。彼女は、斯うした經驗を少しももたない一度も犠牲を強いられたことのない、そうして自分のために人を犠牲にして、猶ほ凡ゆる人から愛されてゐるナターシヤに嫉妬を感じた。ソーニヤは、初めて、ニコライに對する自分の靜かな、純な愛が、俄かに凡ゆる法則や、道德や、宗教を超越してゐる熱情に成つて來たことを感じた。この熱情のお蔭で、今まで人の厄介になつてゐた爲めに知らず識らず控目勝ちになつてゐたソーニヤは、伯爵夫人にぼんやりした曖昧な返答をしたまゝで、それ以上を語るのを避け、ニコライを自由にする爲めではなくて、その反對に彼と自分とを永久に結び付けるために、彼に會ふ日を待たうと決心したのであつた。

ラストフ家がモスクワで過した最後の數日間の混雜と恐怖とは、ソーニヤを苦しめてゐた陰氣な物思をうち消した。彼女は實際上の種々な働きによつて此物思から救はれやうとしてゐたのであつた。けれど、アンドレー公爵がラストフ家に來たと聞いた時に、彼女は、公爵やナターシヤに對しては眞か

ら氣の毒だとは思ひながら、ニコライと別れるのは神の意志でないといふ悦ばしい迷信的な感情に捕はれた。彼女は、ナターシヤがアンドレー公爵一人を思つてゐてまだ思ひ切つてゐないことを知つてゐた。彼女は、かうした非常の場合に、二人が出會したのだから、彼等の愛は再び燃え出すと云ふことも、さうなれば、二人の間の血緣のために、ニコライは、公爵令嬢マリヤと添ふことは出來ないことも知つてゐた。モスクワに於ける最後の一二日と、旅に出た始めの間は、隨分怖ろしい目に遭つたにも關はらず、ソーニヤはこの事を思ひ、神が彼女の私事を調停し給ふことを知つて、いそ〳〵としてゐた。

トロイツア修道院で、ラストフ家の家族は、その旅行中の始めての朝を迎へた。

修道院の旅舍では、三つの大きな部屋が、ラストフ家に割り當てられ、その一つをアンドレー公爵が占領した。公爵の傷は、この時には非常に良い方であつた。ナターシヤはその傍に附添つてゐた、次ぎの部屋では、伯爵夫妻が、その古い知合で、施主なる彼等を訪ねて來てゐた修道院長と恭しく話してゐた。ソーニヤは彼等の傍に坐つて、アンドレー公爵とナターシヤとの會話を氣にしてゐた。彼女は、部屋の入口から漏れる二人の聲を聞いた。アンドレー公爵の部屋の扉は開け放たれてあつた。ナターシヤが昂奮した顏をしてその扉口から出て來た。そして彼女に挨拶をしやうとして立上り、右手の巾廣い袖を捲いた修道院長に氣が附かずにソーニヤに近づき、その腕をとつた。

『ナターシヤ、どうしたんです？　こゝへねらつしやい。』と、伯爵夫人が言つた。

ナターシヤが、祝福を受けるために近づいたので、修道院長は彼女に神とその聖書とに加護を願ふやうに勸めた。

修道院長が出て行くと直ぐ、ナターシヤは友達の腕をとつて、人のゐない部屋へ連れて行つた。

『ソーニヤ！　あの人は、助かると思つて？』と、ナターシヤは言つた。『ソーニヤ、私は何て幸福なんでせう、でも、何て不幸なんでせう！　ソーニヤ、何事も以前の通りなのよ。たゞ助かつてさへ呉れれば好いんだけれど。どうしても助からないわ……そのわけはね……そのわけはね……』と、ナターシヤは涙に咽んだ。

『きつと助かりますわ！　おゝ、神様！』と、ソーニヤは言つた。『きつと助かるわ。』

ソーニヤは、友達の歎きと恐怖と、彼女が誰にも打ち明けない自分の胸の思ひとで、ナターシヤよりも昂奮してゐた。彼女は歔欷きながらナターシヤに接吻し、彼女を慰めた。『たゞ助かつてさへ呉れゝばいゝんだけれど！』と、彼女は思つた。泣いて、少し話して、涙を拭いてから、二人は、アンドレー公爵の部屋の入口に近づいた。ナターシヤは密ツと扉を開けて、部屋の中を覗いた。ソーニヤは、半ば開いた扉のところで、ナターシヤに寄り添つて立つてゐた。

アンドレー公爵は、三個の枕で高くして、臥かされてゐた。その蒼白い顔は安らかに、その眼は閉ぢてゐた。彼は穏かに呼吸をしてゐるらしかつた。

『あ、ナターシヤ！』とソーニヤは、突然従妹の手を握り締めて扉口から離れながら、叫ぶやうに言つた。

『何に！　どうしたの？』と、ナターシヤは尋ねた。

『すつかり同じだわ、同じだわ、ねえ……』と、ソーニヤは、青白い顔で、唇を震はしながら言つた。

ナターシヤは、密と扉を閉めて、ソーニヤと共に窓の傍へ行つたが、彼女はまだソーニヤの言つた事が分らなかつた。

『覚えてゐるでせう、』と、ソーニヤは厳粛な顔に驚きを浮べて言つた。『あなたに鏡で占つてあげた時のことを覚えてるでせう……降誕前祭の晩にオトラドノエで……私が見たもの覚えてるでせう？……』

『さう〳〵。』とナターシヤは、眼をぱつちり開けて、ソーニヤがアンドレー公爵の臥てゐるところを見たとか何とか言つたことをぼんやり思ひ出して言つた。

『覚えてゐて？』とソーニヤは言葉を續けた。『あの時、私は公爵を見たのよ、そして、それを皆なに——あなたにもヴニヤーシヤにもお話ししたわ。私は公爵が寝床に臥てゐらしやるところを見たの。』

とソーニヤは言つて、手眞似をして細々としたことを話した。『公爵は眼を瞑つて、淡紅色の蒲團を掛けて、腕を組んでゐらつしたんです。』とソーニヤは、つい今見た光景が、以前『見た』光景と寸分違はないことを信じて言つた。

あの時ソーニヤは何ものをも見たわけではなかつたが、自分の頭に浮んだ光景を見たと言つて話したのであつた。しかし、あの時頭に浮んだことは、他の凡ての記憶と同じやうに、眞實の記憶のやうに彼女には思はれた。あの時彼女は公爵が彼女を見て微笑み、何か赤いものを掛けてゐたと言つたことを想ひ出したばかりか淡紅色の、確かに淡紅色の蒲團を掛けて、目を瞑つてゐたと言ひ、又さう見たと確信してゐた。

『さう〳〵本當に、淡紅色だつたわねえ。』とナターシャも、ソーニヤが淡紅色の蒲團と言つたのだと憶ひ出したらしく言つた。そして夫れは不思議で神秘な豫言だと思つた。

『でも、それに何か意味があるの?』とナターシャは、物思はしげに言つた。

『それは私にも分らないわ、あんまり不思議なんだもの。』とソーニヤは、頭を押へて言つた。

數分間經つてから、アンドレー公爵がベルを鳴らしたので、ナターシャはその傍へ行つた。ソーニヤは今まで余り經驗したことのない昂奮を覺え、今の不思議な出來事を考へながら窓の傍に立つてゐた。

その日、軍隊に手紙を送る便があつたので、伯爵夫人は息子に手紙を書いた。

『ソーニヤ、』と伯爵夫人は、姪が傍を通つたので、手紙から眼を離して言つた。『ソーニヤ、お前ニコレンカに手紙を書かないの?』と伯爵夫人は、柔しい、慄え聲で言つた。ソーニヤは、伯爵夫人の眼鏡越に見る勞れた眼の中にその言葉の意味をすつかり讀んだ。その眼は、懇願と、拒絶を怖るゝ念と、懇願を恥づる心と、拒絶すれば苛酷せずに憎むぞといふ用意とを現はしてゐた。

ソーニヤは、夫人に近づき、跪いて、その手に接吻した。

『書きますわ、お母さん。』と、彼女は言つた。

ソーニヤは、その日のさま〴〵の出來事、殊に自分の占が不思議にも當つたのを今見たことで、和らいだり、昂奮したり感動したりした。彼女は、ナターシャとアンドレー公爵との婚約が新たに成立すると、ニコライは公爵令嬢マリヤと結婚することが出來ないのを知つてゐるので、自分の好きな馴れつこになつてゐる犧牲の精神がまた起つて來たのをうれしく思つた。彼女は眼に涙をため、自分が寛容な仕向をしたことを悦んだ。そして幾度も、天鵞絨のやうな黒い兩眼を曇らす涙に避られながら、ニコライがそれを見て驚いた、かの強い感動を與へる手紙を書いた。

九

ピエールが入れられた牢獄に勤めてゐる士官と兵卒達とは、敵意と同時に敬意を以て彼に接した。ピエールに對する彼等の態度には互に裏切つてゐる二つのものがあつた。それは、彼が身分の高い人物ではないかといふ疑ひと、先刻のピエールとの爭鬪から生じた敵意とであつた。

が、翌朝番兵が交代した時に、ピエールは、新來の番兵——將校や兵卒ども——には、もう彼を虜にした將校や兵卒どものやうに自分が興味の對照とはなつてゐないことを感じた。そして、翌日任務に就いた新らしい番兵どもゝ、農夫の外套を着てゐる、この大きな、頑丈な男が、掠奪者や、巡察兵とあのやうに死物狂ひに闘ひ、小兒を救はうとして、あのやうな嚴肅した言葉を吐いた勇ましい人であるとは思ひ及ばなかつた。彼等はたゞ彼を、或る理由の下に、上官の命令によつて禁錮せらるべき十七號のロシア人の捕虜とばかり思つてゐた。

若し、ピエールに特種な何ものかゞあるとすれば、それは、彼の思ひ詰めたところのある大膽不敵な風貌と、フランス人でさへ驚くほどの、その立派なフランス語とであつた。けれども、その日ピエールが收容されてゐた別室が、將校のために入用となつたので、彼は他の嫌疑ある捕虜達と一緒に遣かれることとなつた。

ピエールと一緒に禁錮されたロシア人どもは、地位の低い手合であつた。彼等は皆、ピエールを身分ある人と思ひ殊に彼がフランス語を話すので、餘計に彼を除け者にした。ピエールは、彼等が自分

を嘲笑するのを物悲しく聽いてゐた。

その翌晩、ピエールは此所の捕虜が全部（彼もその中に含まれてゐるらしかつた）、放火に就て取調べられる由を聞いた。翌日になるとピエールは、他の者と一緒に、白い髭のあるフランスの將官一人、佐官二人、その他腕に臂章を着けてゐるフランス人どもの控へてゐる一室に連れて行かれた。彼等はお定まりの、また、凡ゆる人間の弱點を超越してゐると思はれてゐる特種の精密と明確とを以て、ピエールやその他の者に姓名、住所、目的等を審問した。

この審問は、裁判所で行はれる凡ての質問と同樣に、生きたる事實の眞相を其方除けにし、その眞相を發見することは不可能だと決めて、たゞ嫌疑者が所要の點に到達するやうに、卽ち有罪となるやうに、裁判官が嫌疑者の答辯を導き入れる一つの溝を作るのを目的としてゐるに過ぎなかつた。嫌疑者が犯罪を構成しないやうな答辯する時には、裁判官はそこにも溝を作つて、水が所要の方向に流れるやうにするのである。

また、ピエールは、凡ゆる裁判所で被告が感ずるやうに、何故斯んな質問をするのだらうといふ不審を感じた、彼は、かゝる質問の溝を設ける方法を用ひるのは、たゞ親切なためか、或は鄭重な取扱をするためであるとばかり思つてゐた。彼は其所にゐる人達の權力內にあることも、この權力が彼をこゝに連れて來たのであると云ふことも、この權力が彼に審問に對する答辯を要求する權利を裁判官

に與へたものであると云ふことも、この訊問の唯一の目的が彼を罪に陷れることであるといふことも知つてゐた。だから、この權力があり、また、罪に陷れやうとする願望がある以上、混入つた審問や、裁判の必要はないのである。凡ゆる答辯が、彼を有罪にしなければ止まないことは明白であつた。捕虜になつた時、何をしてゐたかといふ訊問に對して、ピエールは、一種の悲劇的な威信をもつて、自分が『炎の中から救つた』小兒を、その兩親の手許に連れて來たのだと答へた。何故に彼は兵卒どもと鬪つたか？　この問に對して、ピエールは、自分が婦人を保護したこと、辱しめられてゐる婦人を保護するのは、人の義務であることなどを答辯した。と、裁判官はその答を遮ぎつて、それは分限を外づれたことだと言つた。彼が燃えてゐる家の庭園に居つたことに就いては、既に數名の證人が申立てゝゐるが、彼は何の目的をもつて、そんな所にゐたのであるか？　この問に對して、彼は、『モスクワの樣子を見るために、出掛けたのである。』と答へた。すると、彼は再び答辯を遮ぎられた。彼等は何處に行かうとしたかとは問はないで、何の目的をもつて、火事の傍に居つたかと尋ねた。そして、彼が答へたくないと言つた初めの訊問を繰り返へして、彼にその姓名を尋ねた、彼はまた、それをうち明けるのを好まないと答へた。

姓名を書け、隱すと云ふことは宜しくない。甚だ宜しくない。』と髭の白い、奇麗な赧顏の將官が、彼に對つて嚴かに言つた。

四日目に、ズボウスキイ城壁に火事が起つた。

ピエールは、他の十三名の捕虜と共に、クリミアの徒渉場の、とある商家の馬車小舍に移された。

街路を通る時、ピエールは、全市を蔽ふてゐるやうに見ゆる煙のために呼吸が出來ない位ゐであつた。方々で火事が起つてゐた。その時ピエールは、モスクワの火災の意味を知らなかつた。そして、たゞ恐怖をもつて、それを見詰めてゐた。

クリミアの徒涉場の或る家の後ろの馬車小舍で、ピエールは更らに四日を過した。そして、その四日のうちに彼は、フランス兵どもの會話によつて、こゝに抑留されてゐる捕虜全部は、元帥に運命を決せられるのを毎日待つてゐるのだといふことを知つた。ピエールは、それが、何の元帥であるかを兵卒どもから確めることは出來なかつた。

兵卒どもにとつては、明かに、この元帥といふ言葉は、最高の、稍々不可思議の意味を含むでゐる權力の象徵であつた。

この當時から、捕虜の第二回訊問が行はれた。九月八日まで、ピエールは非常に苦しい日を送つた。

十

九月八日に、捕虜の馬車少舎へ、番兵どものその人に拂ふ敬意で察すると、よほど地位の高い一將校が遣つて來た、多分參謀本部附だらうと思はれるこの將校は、手に名簿を持つて、全部のロシア人の名を讀みあげ、ピエールをば『姓名を名乘らない男』と呼んだ。

そして、將校は、凡ての捕虜に、物憂げな、無關心な一瞥を與へて、元帥の前に連れて行く前に、その服裝を正し、秩序を保たしむるやうに警護の士官に命じた。一時間經つと、一中隊の歩兵が來て、ピエールは、他の十三名のものと一緒にデイエヴツチエ野へ連れて行かれた。

それは、雨上りの美しく晴れた日で、大氣は殊に透き明つてゐた。ピエールが、ズボウスキイ城壁の牢獄から連れ出された日のやうに、煙が低く市街を蔽ふてはゐなくて、透明な空に、煙は、柱のやうに立上つてゐた。火災の焔は何處にも見られなかつたが、煙の柱が諸方に立上つて、モスクワ一帶、ピエールの見る限りのものが、一つの燒け跡であつた。到る處に、暖爐と煙突の殘つてゐる廢墟が見え、ところ〴〵に石造家屋の黒く燻つた壁が見えた。

ピエールは火災を見詰めた。そして、彼がよく知つてゐる市街の街區を見分けることが出來なかつた。ところどころに火災に侵されなかつた教會堂が見えた。災害を免がれたクレムリンも、その幾つかの圓頂閣やイワン大帝塔とゝもに、遠方に白く立つてゐた。附近の新聖母修道院の圓頂塔はキラキラと輝き、其處から勤行の鐘が樂しげに鳴り響いてゐた。ピエールは、その鐘の音を聞くと、恰度そ

の日は日曜日で、聖母降誕祭の日であることを憶ひ出した。けれど、この祭日は、誰れをも祝福しないやうに思はれた。どちらを見ても火事で荒された廢屋ばかりで、たま〳〵道で出遭ふロシア人は、いづれも、ボロ〳〵の着物を着て、おど〳〵して、フランス人を見かけると身を隱した。

ロシア人の巢が、破壞され、荒廢に歸したことは明かであつた。が、かやうに古いロシアの生活組織が破壞されたので、この荒廢せる巢の上に、フランス人は、彼等自身の全く異つた、強固な組織を建てるであらうと、ピエールは無意識に感じた。彼は、彼と他の捕虜を警護してゐる、大膽に、活潑に行進する兵士の整頓した列を見て、かう思つた。彼は、途中で出遭ふ、兵卒が御してゐる二頭の馬車に乘つてゐる高級の士官を見てはかう思つた。彼は、野の左手から野を過ぎつて漂ひ來る聯隊奏樂の愉快な響を聞いては、かう思つた。そして、彼は、その朝、かの將校が捕虜の名を呼んだ手帖を見て、殊に强くこのことを感じたのであつた。

ピエールは、他の十名の者と一緒に、兵卒ばかりによつて、一つの場所に連れて行かれ、そこから又他の場所に移された。ピエールは、彼等が既に彼のことを忘れ、他の人々と混交にしてゐるやうに思つた。が、實際はさうでなかつた。前の訊問で彼が與へた答辯が今、『姓名を名乘らぬ男』といふ名稱をもつて、彼に戻つて來た。ピエールが怖れてゐる、この名稱の下に、彼は今、殘餘の凡ての捕虜と共に必要な囚人に相違がないから、適當の場所に連れて行くのだといふやうな斷乎たる信念を

その顔に漂はせてゐる兵卒どもによつて、何處か別の場所に連れて行かれてゐた。ピエールは、何故かは知らぬが、自分を、順當に廻轉してゐる機械の車輪の下に落ちた詰らない木片でもあるやうに感じた。

ピエールは他の捕虜と一緒に、修道院から程遠からぬ、デイエヴツチエ野の右側に連れて行かれた。そして、廣い庭園のある、大きな、白い家の方へ指して行つた。それはシユチエルバトフ公爵の家で、ピエールは、この家を訪ねたことがあつた。兵卒どもの話によると、今では、そこを元帥エクムール公に占領せられてゐた。

一同は車寄に連れて行かれた。そして、一人づゝ家の中へ連れられた。ピエールは六番目に入つた。いづれも之れまで見馴れてゐる硝子屋根の廊下、玄關、廣間などを通つて彼は、入口に副官の立つてゐる、長い、天井の低い書齋に連れて行かれた。

部屋の向ふの端に眼鏡を掛けたダヴウが、机に對つて坐つてゐた。ピエールは彼に近づいた。ダヴウは眼を擧げずに、自分の前に置いた文書の中から何か探してゐるやうに見えた。彼は、なほ眼を擧げずに、輕く尋ねた。『名は何と云ふか?』

ピエールは、一語をも發することが出來なかつたので、默つてゐた。ピエールには、このダヴウはたゞ單にフランスの將官としてゞはなく、苛酷なので有名な人なのであつた。嚴格な教師のやうに、

答辯する迄、辛棒よく凝つと待つてゐると云ふやうなダヴウの冷めたい顏を見ると、ピエールは一秒遲れても、生命が縮むやうに感じた。が、彼は何と言つていゝか分らなかつた。第一回の訊問の時に言つたのと同じことを言ふことは彼には出來なかつた。と云つて、自分の姓名と身分を明かすのは、危險であり、且つ恥辱であつた。ピエールは默つてゐた。彼がまだ何んとも決心をしない前に、ダヴウは頭を擧げた、そして、その額に眼鏡を押し上げ、目を瞠めてピエールを凝視した。

『俺はこの男を知つてゐる。』と彼は、明かにピエールの驚くのを豫期してゐるかのやうに落ち付いた、冷淡な調子で言つた。ピエールの背中を流るゝ寒氣は、彼の頭を萬力で締め附けるやうであつた。

『將軍、あなたは、私を御存知やありません、私は未だ貴方にお目にかゝつた事はありません……』

『これはロシアの間牒だよ。』と、ダヴウは、ピエールの言葉を遮つて、部屋の中にゐる、ピエールの氣が附かなかつた他の將官に言つた。そして、ダヴウは他方を向いた。ピエールは、思はず其の聲を尖らして、急き込んで言ひ出した。

『否、閣下。』と彼は、ダヴウが公爵であることを不意に思ひ出して言つた。『あなたは私を御存じの筈はありません。私は國民軍の士官です。そして、モスクワを去らなかつたのです。』

『姓名は何と言ふか?』と、ダヴウは繰り返へした。

『ベヅウホフと申します。』

『お前が嘘言を吐いてゐないといふ證據があるか?』

『閣下。』とピエールは、怒らないで、嘆願するやうな聲で言つた。

ダヴウは、その眼を擧げて、ピエールを凝視した。數秒間二人はお互に顏を見合つた。そして、かくお互に見合つたことが、ピエールを救つた。かくお互に見合つたので、戰爭や裁判といふ現狀を離れて、二人の間に人間としての關係が生じた。二人は、その刹那に、ぼんやりと、物の限りなく種々なものを意識した。そして、彼等がお互に人道の小兒であること、お互に同胞であることに氣が附いた。ダヴウが、捕虜の生活狀態や、行爲を順番に記してある名簿から頭を擧げての、最初一目見た時には、ダヴウにとつては、ピエールはほんの一事件に過ぎないものであつた。そして、ダヴウは、その心に惡事を働らいた者といふ考を離さずに、ピエールを睨んでゐたのである。然るに今や彼は、既に、ピエールを人間と見做すに至つたのであつた。彼は一寸躊躇つた。

『お前の申立が眞實であるといふことを、どうして證明するか?』と、ダヴウは、冷かに言つた。

ピエールは、ランバルのことを思ひ出したので、彼の名と、彼の聯隊と、彼の住つてゐる町名とを言つた。

『お前の言てゐるのは、お前のことじやない。』と、ダヴウは再び言つた。

止切れ〳〵な、慄へ聲で、ピエールは、自分の申立の眞實なることを證明しやうとし始めた。

ところが、その時、副官が入つて來て、ダヴウに何やら言つた。

副官が齎らした報告を聞くと、ダヴウは急に、晴れやかな顏になつて『上衣の釦を掛け始めた。彼は、ピエールのことは全く忘れてしまつたやうであつた。副官が、この捕虜のことに就て注意を促すと彼は顏を顰めて、ピエールの方へ、一寸點頭いた。そして彼を連れて行けと命じた。しかし、何處へ彼を連れて行くのだらうか? 馬車小舍へ歸るのか、それとも、先刻ディエヴィツチエ野を通る時、彼の仲間が指示してゐた死刑執行のために設けられた場所に連れて行かれるのか、ピエールには分らなかつた。

彼が後を振り返つて見ると、副官が何か頻りに質問してゐるのが見えた。

『うむ、無論だ!』とダヴウは言つた。が、その『うむ』が何を意味するかは、ピエールには分らなかつた。

ピエールは何うして、何處へ歩いて行くのか、どの位ゐ歩いたのかを覺えてゐなかつた。自分の周圍を少しも見ないで、全く無意識な癱瘓れたやうな狀態で、他の仲間と一緒に、全體が止まるまで足を運んでゐた。やがて、彼は止まつた。

この間に、始終ピエールの頭に往來してゐた一つの考があつた。それは、實際誰れが、何者が彼に死刑の宣告を下したのであらうか、といふ疑問であつた。それは第一回の審問の際、彼を訊問した人

人ではない。あの人々の中には、一人としてさう爲やうと欲つてゐた者は無かつたし、又そんなことの能る人達でなかつた事は明かだ。ダヴウでも無い、ダヴウはあんなに人間らしい樣子で彼を見てゐたから。もう一分經てば、ダヴウには、彼等が皆惡事を仕てゐた事が分かつたが、併しその時遣つて來た副官が、それを障げたのではないかとも考へられた。それで、この副官は、明かに惡い意志をもつてゐなかつたのだから、それに左擔しさうな筈はない。それでは、實際、誰が彼を罰して、彼を殺さうとしてゐるのか？　彼の生命を奪はうとしてゐるのか、彼の凡ゆる記憶と、努力と、希望とを、その生命と合せ奪ばはうとしてゐる者は誰であらうか？　かく爲した者は誰れだ？　かう考へて來て、ピエールは、これは何者でもなかつたと感じた。これは秩序と、幾多の事情の連結がさうするのだ。謂はば一種の秩序なるものが、彼――ピエールを殺し、彼の生命と、凡ゆるものを奪ひ、彼を破滅させやうとするのだ。

十一

捕虜一同は、シュチエルバトフ公爵の家から、ディエヴイ野に沿ふて、眞直ぐに聖母修道院の左側を下つて行つて、一本の柱が立つてゐる菜園に連れて行かれた。柱の彼處には、大きな坑が堀つてあつて、新らしく堀り返へされて土がその傍に堆高く積まれてゐた。大勢の人が、柱と坑の周圍に半圓形を形造つてゐた、その人々は、少數のロシア人と、大勢の、勤務に就いてゐない、ナポーレオン軍の兵卒で、さまざまの制服を着たドイツ人、イタリー人、フランス人などであつた。柱の左右には、赤い肩章のある、緣色の軍服を着たシヤコオ型の軍帽を冠り、長靴を穿いた數列のフランス兵が立つてゐた。捕虜は、名薄にある順（ピエールは第六番目であつた）に整列させられ、柱の傍へ連れて行かれた。突然、太鼓が彼等の兩側で鳴り始めた。そして、ピエールは、自分の魂の一部が、宛然、その響でちぎれて飛んでしまつたやうな氣がした。彼は考へたり、想像したりする能力を失つて、たゞ見聞いたりするだけであつた。そして、彼の心のうちにはたゞ、一つの願望が殘つてゐるばかりとなつた。それは、怖ろしい事がどうせ行はれるなら、一時も早く行はれる方がいゝといふ願望であつた。ピエールは、その仲間を見廻はして、一々よく視た。

端にゐる二人は、頭を剃つてゐる囚徒であつた。その一人は丈が高くて痩せてゐたが、もう一人は、色黑の、毛の濃い、筋肉の發達した、鼻の平たい男であつた。三番目は年の頃四十五位ゐの下男體の男で、髮の灰色な、太つた、立派な體格をしてゐた。四番目は、髯が亞麻色で、眼の黑い、非常に奇麗な農夫であつた。五番目は、痩せて、色の蒼白い、十八歲位ゐの青年で、寢衣を着てゐる職工であつた。

ピエールは、フランス兵が、捕虜を一人づゝ射撃するか、二人一緒に射撃するかに就いて尋ねてゐるのを聴いた。

『二人一緒に。』と、主任將校が、冷やかに答へた。

兵卒の列が移動し出した。そして、兵卒どもは皆忙がしさうに見えた。が、その狼狽かたが明かに、自分のよく知つてゐる仕事をしやうとするのではなくて、不愉快で、理由の分らぬ仕事であるが、何うしてもしなければならぬので急いでやつて了ふと云つた調子である。

襟飾のある服を着た一人のフランス士官が、捕虜の列の右側に來て、ロシア語とフランス語で宣告文を讀み上げた。

次いで、士官の指圖で、二列二組のフランス兵が捕虜に近づいて、先頭にゐる二人の囚徒を連れて行つた。二人の囚徒は柱の傍まで行つて、止まつた。そして、彼等は、死帽を持つて來るまで、手負ひの野獸が、近づいて來る獵師を見た時のやうに、默つて、四邊を見廻はしてゐた。彼等のうちの一人は、頻りに、十字を切つてゐたが、他の一人は、背中を引掻いてゐた。そして唇が微笑でもするやうに動いてゐた。兵卒は、忙しく指を動かして、彼等に目隱しをし、死帽を冠せ、柱に縛りつけた。

十二名の狙撃兵が、銃を手に持つて、規則正しい嚴格な步調をもつて、隊列から進み出で、柱から八步のところで立止まつた。ピエールは、それから先きを見ないやうに横を向いた。その刹那。ズド

ンといふ音と、ガラ〳〵といふ響がした。その音響は、彼には雷の轟聲よりも更らに怖ろしい高い響のやうに思はれた。彼は四邊を見廻はした。煙が立罩めて、蒼白い顏をしたフランス兵が、手を慄はして、坑のまはりで何かしてゐた。

次ぎの二人が、連れ出された。この二人も、やはり前と同じやうな眼つきで、たゞ空しくその眼だけで援助を乞ふやうに、默つて、人々を見遣つた、そして之れから何うなることか分らぬ、信ぜられもせぬといふやうな顏をしてゐた。彼等は、自分等のみの知つたことであると思つてゐたから、それを信ずることが出來なかつたのだ。それであるから、自分等の生命を奪ひ去ることが出來やうなどゝは思へないし、又、信ずることも出來なかつたのだ。

ピエールは、見たくなかつたので、また脇を向いた。が、再び、怖ろしい爆音が、その耳を襲ふた。そして、その響と同時に、彼は、煙と、誰れかの血と、慄へる手で互に押合ひながら、また柱の傍で何かしてゐるフランス人の、蒼白い、恐怖に打たれた顏を見た。

ピエールは、息苦しくなつた。『これは何んといふ事だ。』と尋ねるかのやうに四邊を見廻はした。ピエールと見合はす、人々の眼には、これと同じな疑問が讀まれた。凡てのロシア人の顏にも、フランスの士官と云はず兵卒と云はず、一人殘らずの顏にも、彼は、彼の心に感じたと同じ驚きと、恐怖と、鬪ひとを讀むことが出來た。『うむ、全體、誰れが、こんなことをしだしたのか？　衆皆俺と同じやう

に苦んでゐるぢやないか！　それは誰だ？　誰だ？』といふ考が、その刹那に、ピエールの心に閃めいた。

『第八十六分隊、前へ！』と、誰かゞ叫んだ。

ピエールの脇にゐる五番目の捕虜が、前へ連れ出された——たゞ一人で！

ピエールは、自分が助かつてゐたことを知らなかつた。彼と殘りの者とは、たゞ死刑を見るために此所へ連れて來られてゐたといふことを知らなかつた。彼は喜びとか落着きとかいふやうな感覺はなく、だん〳〵恐怖が募つて來てたゞ人々のすることを見てゐた。

五番目のは、寢衣を着てゐる、職工であつた。兵卒どもが、彼に手を掛やうとすると、彼は恐怖のあまり、跳び退いて、ピエールに縋附いた。（ピエールは、慄へて、身を離した。）職工は、歩くことが出來なかつた、彼は腕の下へ抱へられて、引摺られて行つた。そして、その時彼は何か叫んでゐた。柱のところまで連れて行かれると、彼は默つて了つた。彼は突然、何かを悟つたかのやうであつた。叫んでも駄目だと思つたのか、それとも、兵卒どもには、彼を殺すことは出來ないと思つたのか、彼は、もう一人の者を一緒に縛られるのを待ちながら、柱のところに突立つて、鐵砲で狙はれた獸のやうに、ギロ〳〵する眼で、四邊を見廻はした。

ピエールは、もう脇を向くことも、眼を閉ぢることも出來なかつた。その場に居合はす群集と共に、

この五番目の殺人に對する彼の好奇心と恐怖とは、最高調に達した。前の連中と同じやうに、この五番目の男も、平氣なやうであつた。彼は寢衣を捲つて、一方の裸の足で、片方の足を掻いた。

兩眼を縛られた時に、縛り方が緊かつたので、彼は自分で後頭にある結目を直した。それから、血で汚れた柱に彼の背を押附けやうとする時、彼は逡巡いで、その位置では拙づいといふやうに、その姿勢を變へた。そして、足を均合よく地上に着けて、靜かに、倚り掛かつた。ピエールは、決して彼から眼を離さなかつた。そして、彼のどんな小さな行動でも見逃すまいとした。

號令の聲が聞へる筈であつた。その後で、八挺の銃を發射する響が聞へる筈であつた。しかし、ピエールは、後で一生懸命にそれを憶ひ出さうとしても、發砲の微かな音をも聞かなかつたやうであつた、彼はたゞ、若い職工が、何うしたものか、突然、繩の上に倒れかゝつて、血が二個所に流れて居り、そして、倒れかゝつた身體の重みで繩が弛んで、若い職工が、不自然にその頭を垂れ、曲げた片方の足を身體の下に敷いて、坐つてゐるのを見たばかりであつた。ピエールは柱の傍へ走り寄つた。誰も彼を遮る者はなかつた。蒼白い恐怖に打たれた顏をした人々が職工の周圍で何かしてゐた。年をとつた、鬚のあるフランス人が、繩を解いてゐる間始終、下顎を震はしてゐた。死體は、解かれた。兵卒どもは、不器用な手つきで、急ぎながら、死體を柱の後へ引擦つて行つて、坑の中へ衝き入れた。

人々は皆、かゝる人間どもは、罪人なのだから、その罪惡の痕跡を、一刻も早く隱してしまはなけ

ればならぬといふことを、明かに承知してゐた。

ピエールは、坑の中を覗き込んだ。と、若い職工が、その頭を膝に密着けて、片方の肩を片方の上にして、横はつてゐるのが見えた。そして、その肩が震へながら、おなじ顰梅に、上つたり下つたりしてゐた。が、その時既に、鋤で落された土が、死體全部を蔽ふた。兵卒の一人が、激怒して、憎しげな、いら〳〵した、調子で、ピエールに退いておれと叫んだ。しかし、ピエールは夫れに氣が附かずに、柱の傍に立つてゐた。誰も彼を逐ひ退ける者は無かつた。

坑が、すつかり埋まつてしまつた時に、號令が聞えた。ピエールは、前の位置に連れ戻された。そして、柱の兩側に列を作つてゐたフランス兵隊は、回り向けをして、柱の傍を歩調をとつて通つて行つた。藥莢を抜いた銃をもつて、廣場の中央に立つてゐた二十四人の狙撃兵は、各自の中隊が傍を通る時に、駈足でその位置に就いた。

ピエールは、今二人づゝその場所を走り去るこの狙撃兵を、どんよりした眼で眺めてゐた。彼等は、たゞ一人を除く外は、みんなその中隊に加はつた。死人のやうな蒼白い顔をした、一人の若い兵卒が、その時なほ、そのシャコオ型の軍帽を阿彌陀に冠り、銃を地上に下したまゝ、坑の方を向いて、自分の射撃した場所に立つてゐた。彼は、醉漢のやうに蹣跚いて、倒れさうになる體を支へて數歩前へ出たり、後へ戻つたりした。年を老つた下士が、、列から走り出て、彼の肩を摑まへて、その中隊へ引擦つて行つた。ロシア人と、フランス人との群衆は散じ始めた。みんな默つて頭を垂れて、歩いてゐた。

『これは、狙撃の練習になるだらう。』と、フランス人の中の一人が言つた。ピエールは、かう言つた男の方を視た。そしてこれは一人の兵卒がかう言つて何うかして、自分等のやつた事を幾分か慰めやうとしたのであるが、それが出來なかつたのであるといふことが分つた。言ひかけた事を言つて了はずに、彼はその手を振り動かして、脇へ去つた。

十二

死刑執行後、ピエールは、他の四人と離されて、たゞ一人、小さな、掠奪された、汚い教會に置かれた。

晩方、巡察兵の軍曹が、兵卒二名を連れて教會へ這入つて來て、ピエールにお前は許されたので、これから捕虜收容所に連れて行くのだと告げた。自分に言はれた言葉がどんな意味か分らぬながらも、ピエールは、起き上つて、兵士と一緒に行つた。彼は、野原の高所へ、燒けた板や、梁や、小割材で建てた小舍へ連れて行かれて、その一つに入れられた。閾の中にピエールを圍んで二十名ばかりのさま〴〵の種類の人がゐた。彼は、この人々が何ういふ人たちであるか、何故こゝにゐるのか、何を

彼に求めてゐるのかといふやうなことは少しも分らぬながら、彼等を見詰めた、彼は、その人々が彼に言ふ言葉を聞いた。が、その言葉は何んの歸結も文句もなさなかつた。詮りその言葉の意味が分らなかつた。彼は、また尋ねかけられたことには、自分で返答したが相手が誰であるか、自分の答が分るか何うかといふことを想像もして見なかつた。彼は、いろ〳〵の顏と形とを見た。そして、彼には凡てのものが一樣に無意味なものと思はれた。

ピエールは、實際は欲してゐなかつた人々によつて行はれたあの恐ろしい殺人を見た刹那から、その靈魂には宛然生物として、なくてはかなわぬその發條がブツと切れたやうに思はれた。そして、凡ゆるものが、無意味な塵埃の堆積になつてしまつた。何うしてさうなのかを明白に了解はし得ないが、これが爲に、宇宙間の調和や人間の理想、靈魂、神などに於ける凡ゆる彼の信仰は破壞されて了つた。

ピエールは、以前にもかゝる精神狀態を經驗したことがあつたが、かほどまで強くはなかつた。それ故に、その時、心前ピエールがこの種の疑惑を抱いた時、その疑惑の原因は自分の罪にあつた。それ故に、その時、心の底では、ピエールは、かゝる疑惑からの救濟は、自分の手にあることを知つてゐた。が、今、彼は、自分の罪の爲ではなく、而も自分の眼前で世界が崩壞しだして、唯無意味な廢物のほか、何物も殘らないといふことを感じたのである。彼は、生命の信仰を取り戻すのは、自分の力では及ばないといふことを感じたのである。

闇黑のうちに、彼の周圍に、幾人かの人が立つてゐた。多分彼等は、彼に何か深い興味を見出したらしい。彼等は彼に何事かを喋り、何事かを尋ねて、それから、彼を何處かへ連れて行つた。そして終ひに、彼は、小舍の隅に自分がゐて、隅々で喋つたり、笑つたりしてゐる知りもせぬ人々の傍にゐることが分つた。

『それから、兄弟……その同じ公爵その人がだ、』『その人が』といふ語に特別なアクセントを附けて小舍の向側の隅で、誰かゞ言つてゐる。

ピエールは、壁の傍の藁の上に坐つて、默つて、凝つと動かずに、兩眼を開いたり、閉ぢたりしてゐた。彼が眼を閉ぢるや否や、若い職工の怖ろしい顏が、その表情の單純さが殊に怖ろしく見えた。そして、無理な處刑者等の不安な表情の、一層怖ろしい顏が見えた。彼は、再び眼を開いた。そして茫然と、自分の周圍の闇黑を見詰めた。

彼と並んで、一人の小さな男が、身體を屈めて、坐つてゐた。ピエールは、最初からこの男が動く度毎にする强い汗の臭で、その男の居ることを知つてゐた。この男は、闇黑の中で、足で何やらしてゐた。そして、ピエールは、彼の顏を見ることは出來なかつたが、この男が斷へず彼の顏を見てゐるらしく、感じてゐた。闇黑の中を見詰めてゐる中にピエールはこの男が足に着けたものを外づしてゐるのだといふことが分つた。そして、その外づし方がピエールには面白かつた。

彼は、片方の足に巻き附けてゐる帶を解いて、それを鄭寧に卷いて、直ぐさま、もう一方の足に取り掛つてゐるのだが、その間始終ピエールを見てゐるのであつた。片手で一方の捲脚胖を吊り上げてゐながら、片々の手で別の足の方を解いてゐるのである。かやうに、巧みに、圓滑なうまい方法で、次ぎ〳〵と少しも時間の損をせずに、この男は、捲脚胖を解いて、頭の上の釘に掛け、小刀を取出して何やら切り、それを閉めて、枕の下に入れた。そして身體を前よりも樂にして、兩手で膝を抱へ、ピエールを正面に凝視めた。ピーエル、は彼の巧みな遣り方や、彼の部屋の隅の樂な設備を見たり、その臭ひを嗅いでさへ、何となく面白い、慰められるやうな、滿足するやうな、氣がした。そして、ピエールは、この男から眼を離さなかつた。

『もし、お前さんは隨分辛い目を見たんでせう？　ええ、且那？』と、突然小さな男が言つた。と、如何にも歌をうたふやうなその聲には愛嬌のある率直な表情があつたので、ピエールは、それに答へやうと思つたが、顎が震へて、涙が出さうになつた。その刹那に小さな男は、ピエールに、當惑つく暇も與れないで、例の愉快げな聲で言ひ出した。

『ねえ、あなた悲みなさるな。』と彼は、ロシアの農家のお婆さんが言ふやうな優しい、愛撫むやうな、歌聲で言つた。『悲みなさるな、お前さん、苦しみは一時だし、生は永久です？　ねえ、ねえお前さん。そして、私たちは、幸ひにも此所へやつて來たんでせう、何にも恥づる事つてありやしません。

同じ人の中にも惡人も、善人もゐますさア、』と彼は言つた。そして、かう言ひ終らぬうちに輕快に立上つて、咳拂ひをしながら、歩いていつた。

『こら、こん畜生、來たな！』ピエールは、同じ優しい聲を、小舍の片端の方で聞いた。『來たな。こん畜生、俺を覺えてゐるな！　さア、さア、其處に居れ！』この兵士は、自分に飛びかゝる犬を押し除けて、自分の場所へ歸つて、坐つた。彼は、何か風呂敷で包んだものを持つてゐた。

『さあ、旦那、これをお食りなさい。』と、彼は最初の鄭重な調子に返つて、風呂敷を解き、燒馬鈴薯を五つ六つ取出して、言つた。『私どもは、晝食に肉汁を喰りました。しかし、馬鈴薯はまた格別ですよ！』

ピエールは、終日何も喰べなかつたので、馬鈴薯の香が、特別に旨さうであつた。彼は、兵士に禮を言つて、喰べ始めた。

『如何です、さうでせう？』と、兵士は微笑みながら言つて、自分もまた一つ摘んだ。『旨いですかな。』彼は、また懷中小刀を出して、馬鈴薯を手の上へ載せて、眞半分に切り、風呂敷から出した鹽を振り掛けて、ピエールに勸めた。

『馬鈴薯は一等ですな。』と、彼は繰返した、『かうして喰つて御覽なさい。』

ピエールは之れまで一度もこんなに旨く物を喰べたことが無かつたやうに思つた。

『否、私は何うでもよろしい。』とピエールは言つた。『が、彼等は、何故あの可哀相な連中を殺したんですか。最後に殺られたのは二十歳位ゐな青年でしたよ。』

『そツ……そツ……』と小男は言つた。『罪です、眞實に……罪です』と彼は、いつもこの言葉を用意してゐて、今不意に口から出たとでもいふやうに、急いで附け加へた。そして言葉を續けた。『且那は、また何うしてこんなにモスクワなぞに踏み止つてゐらしたんですか?』

『私は、こんなに早く彼等が遣つて來やうとは思はなかつたんです。私は、たゞ偶然に止つてゐたんです。』と、ピエールは言つた。

『ですが、何うしてあなたのお家から、あなたを連れて行つたんですか? ねえ。』

『いや、私は火事を見に出掛けたんです。ところが、彼等は私を捕へて、放火犯人として裁判したのです。』

『裁判の在るところには、虚僞もある。』と、小男が口を挟れた。

『で、君は永くこゝにゐるんですか?』と、ピエールが最後の馬鈴薯を喰べながら言つた。

『私ですか? この日曜日にモスクワの病院から連れて來られたのです。』

『では、君はなんです、兵士ですか?』

『アプシェロン聯隊の兵士です、私は、熱病で死にかけました。私どもは、何んにも聞かせられなか

つたんです。私どもの仲間が二十人、そこに病氣で臥てゐました。そして、私どもは、此様なことにならうとは少しも思ひませんでした、想像さへもしなかつたんです。』

『では、何うです、こゝで君は怠屈したでせうね?』と、ピエールは訊いた。

『何うして怠屈でないことがありませう、お前さん。私は名をプラトンと言ひまして、カラターエフといふ綽名が付いてゐました。』と彼は、前よりも心安く話しかけやうとして、かう附け加へた。『聯隊では、彼等は私のことを『小さな鷹』と呼つてゐました。何うして、人間が、この悲みを耐へることが出來ませう? なア。モスクワは、吾が市々の母親です! 誰でもそれを見ちやあ、悲しくなりまさ、蛆は玉菜を食ふが、それを喰ひ盡さないうちに死んでしまふツて、よく老人が言ひ言ひするじやありませんか、』と、彼は早口に言つた。

『何、今君は一體何と言つたんでしたかね?』と、ピエールは訊いた。

『私ですか?』と、カラターエフが言つた。『私は「自分等の智慧を働かせないで、神樣の御旨に委托せろ、」と言つたんです。』と彼は、前の格言を繰り返へした積りで、かう言つた。そして、直ぐと言葉を續けた。『且那、如何です、あなたには財産がお有りですか? それから、お邸は? きつと、あなたの酒杯は、いつも一杯でせうねえ? それから、御兩親はまだ御存命でせう!』と彼は訊いた。暗いので、彼を見ることは出來なかつたが、ピエールは、兵士がこん

な事を問ふてゐる際のその唇が、厚情のある微笑で曲つてゐるのを感じてゐた。

彼は、ピエールに両親が無く、殊に母親の無いといふことを聞いて、ひどく悼んでゐるらしかつた。

『妻がどんなに好い相談相手になつてくれても、養母がどんなに親切にしてくれても、生みの母親ほど良いものはありません！』と、彼は言つた。『では、お兒さんはお有りでせう？』と、續いて尋ねた。

ピエールが、無い、と答へると、彼はまた悼む様子であつた。そして、かう言ひ添へた。『まア宜うございまさアね、お若いんだから。また神様がお授けになるでせう。まア、仲好く、お二人がお暮らしになるのが肝腎でございます……』

『でも、かうなつては、仕様がない。』と、ピエールは言はざるを得なかつた。

『あゝ、でもお前さん。』とプラトンが壓へた。『人間は乞食の袋と、牢屋とには、始終緣がありますよ。』と、彼は前よりも身體を樂にして、長い物語を始めるらしく、咳拂ひをした。『そうですね、あなた、私がまだ家に居る時分でした。』と彼は話し始めた。『私どもでは、お蔭様で多分の遺産と、澤山な土地と、生活の良い小作人と、それに自分の屋敷までも持つておりました。——親父は、自分でも收獲に出掛けました。私どもは可なり良く生活してゐました。そして眞實のクリスチヤンの生活をしてゐました。すると……』

そこで、プラトン、カラターエフは、彼が薪を採りに他人の林に入つて、番人に發見かつた爲めに、

笞打たれ、訊問されて、兵營に送られたといふ一件一什の話をした。『夫れがなんです、』と顏の微笑でその聲まで變へて、『私どもは、それを不幸だと思つてゐたのですが、却つて、それが良かつたのですよ！　若し私が過失をしなかつたら、私の弟が兵士に出なければならんのです。ところが、私の弟には五人の小兒がありますが、私はたゞ妻一人を家に殘してゐるツ限なんです。以前私には小さな娘があつたのです、が、神樣は私が兵士に出る前に、その兒をお取り上げになつたのです。私は、一度暇乞ひに家へ歸りました。その時のことをお話しいたしませう。私は、一家が以前よりも都合宜く生活してゐるのを知りました。庭には家畜が一杯居りますし、婦女どもは家にゐて、二人の弟は働きに外へ出掛けてゐました。一ばん末の弟のミカイロだけが家にゐました。親父は、何の子供も自分には同じだ。何の指を抓つても同じに痛いやうに、若しプラトンが兵隊に取られなければ、ミカイロが行かなけりやならんのだ、と言ひました。親父は私ども兄弟をみんな呼びまして——實際ですよ——聖畫像の前に立たせました。親父は、ミカイロ此所へ來て、足のところまで頭を下げろ、婦女どもも、頭を下げろ、孫どもみんな頭を下げろ、お前たちはよくこの理由が分るだらう、と申しました。さうです、あなたにもお分りでせう。ねえ、運命と云ふ奴は、人間の頭を求めるのです。それだのに私どもは、いつも、これは正しくない、あれは宜しくない、なんて勝手なことを言ひます。吾々の幸福なんてへものは、ねえ恰度曳網の中の水のやうなものですよ。それを曳いてゐるうちは水が入つてゐますが、引

き上げてしまふと何にも殘りません、さうです、恰度それです。』聽てプラトンは、藁の上へ行つて坐つた。

暫らく默つてゐて、プラトンは立ち上つた。そして、急いで十字を切りながら、かう唱へ出した。

『さあ、睡くなつたでせう?』と彼は言つた。『主なる耶蘇基督樣、聖者ニコラ樣、フロオラ樣にラウラ樣よ、主なる耶蘇基督樣、聖者ニコラ樣。フロオラ樣とラウラ樣。主なる耶蘇基督樣よ——吾等を憐みて、救ひ給へ!』と言ひ終つて、地上まで頭を下げて、吐息をついた。そして藁の上に坐つて、『おツとさうだつた。おゝ、神樣。石のやうに眠らしめ給へ。そして新らしい麵麭のやうに早起上らしめ給へ!』と言ひ終つて、横になつて、軍用の外套を引き蔽つた。

『今、君が誦つたのは、何の祈禱ですか?』とピエールが尋ねた。

『えゝ?』と、プラトンが言つた。(彼はもう眠りかけてゐた。)『誦つた? 私は神樣にお祈禱をしたんです。あなたはお祈禱をなさいませんか?』

『私も祈ります。』と、ピエールは言つた。『が、今君が言つた——フロオラ樣とラウラ樣つてのは、何ですか?』

『おヤ、なぜです。』と、プラトンは早口に答へた。『あれは、馬の祭り日なんです。人間は畜生のことも考へなくちやなりませんよ。』と、カラターエフは言つた。『おヤ、この畜生奴、歸つて來たな。溫かいだらう。この小牝犬め!』と、彼は足で犬に觸つて言つた。そして、また寢返へりを打つて、直ぐ眠り就いた。

戸外の何處か遠方から、叫喚と號泣の聲が聞えて來た。そして、壁の裂目から、明るい火が見えた。が、小舍の中は、闇黑で水を打つたやうに靜かであつた。ピエールは長い間眠り就くことが出來なかつたので、闇黑の中で眼を開いて、傍に寢てゐるプラトンの調子のある鼾聲を聽いてゐた。彼は、先に破壞された世界が、再び、今、新らしい美しさと、何んだか新しい、動かすことの出來ぬ基礎をもつて、自分の靈魂の中に甦りつゝあるのを感じた。

十三

ピエールが投ぜられて、既に四週間を送つたこの小舍には、兵卒が二十三人、將校が三人、文官が二人ゐて、みんな捕虜であつた。

ピエールが後になつて彼等の事を考へて見ると、他の連中に對する記憶は朦朧としてゐるが、プラトン・カラターエフだけは、永久に、彼の心に、最も強く、最も明かな記憶となつて、殘つてゐた、また、

親切で圓滿な眞のロシア人の典型として、その心に殘つてゐた。

翌日、拂曉に、ピエールは、その隣人を見て、彼が圓いと思つた最初の印象が確かになつた。フランスの軍服を着て、繩で腰に帶をして、軍帽を冠り、木皮製の靴を穿いた彼の身體全體が圓味を帶びてゐた、その頭も眞圓であつた、その背や、その肩や、何ものかを抱かうとしてゐるやうなその腕までが、圓味を帶びてゐた。その氣持好げな微笑と、大きな、優しい、鳶色の眼も、圓かつた。

プラトン・カラターエフは、彼が參加した戰役の話で察すると、五十歲以上に違ひなかつた。彼自身も知らなかつた。そして何うしても自分が幾歲だと定める事が出來なかつた。が、彼の笑つたりする場合に（彼の始終やることだが）、その兩半圓にヴラリと並んでゐる、眞ッ白く、固さうな齒を見ると、どの齒もみんな、良くて丈夫であつた。彼の髮にも、一本の白髮も見えなかつた。そして、その身體全體が、輕快に見え、異常の堅固さと、耐力とを示してゐた。

彼の顏には、皺の波が寄つてゐるにも關はらず、若い、無邪氣な表情があつた。彼の聲には、愉快な歌をうたふやうな調子があつた。が、彼の談話の著しき特徵は、自發的で、輕忽なところにあつた。彼は、自分が何を言つたか、又何を言はうとするかを決して考へても見なかつたらしい。そんな所から、その早口で、眞實なる聲調には殊に敵し難い確信が籠つてゐた。

彼の身體の精力と活動力は、捕虜になつた初めの頃には、疲勞や病氣がどんなものだか知らないといふほどであつた。毎日彼は、朝晩欠かさず、橫倒りながら、かう言つた。『主よ、私をして石のやうに橫たはらしめ給へ。新らしい麵包のやうに私を起し給へ。』と。毎朝起きる時に、いつも同じ樣子で肩を搖つて言ふ。『臥て、寢返りを打て、そして早く起きて身搖ひをしろ』。實際、彼はたゞ、直ぐ石のやうに眠るために橫になるのである。そして、一秒時と雖も無駄にせずに早起きると、直ぐ何か仕事に取り掛らうと燥せる、恰度小兒が目が醒めると、直ぐに玩具を持つて遊び始めるやうに。彼は器用な男であつた。特別に良くも出來ないが、特別に下手でも無かつた。彼は麵包を燒き、料理をし、縫物をし、髮を刈り、靴の修繕をした。彼はいつも忙しかつたが、夜だけは、彼の好きな四方山の話に耽つたり、歌を唄つたりした。彼は歌を唄つた。それも、聽手のゐるのを知つてゐる歌唱者のやうではなく、鳥が唄ふやうに、唄つた。彼には、時に呑延びをしたり、散步したりするのと同じやうに、聲を出すことが必要だつたのである。その聲は、輕い、優しい始んど女のやうな憂鬱な聲で、歌を唄つてゐる間は、顏は極めて嚴肅であつた。

捕虜になつてから、彼は鬚を生やして、彼にとつては餘儀なかつた不自然な、凡ての軍人風を棄てしまつて、知らず識らず昔の農民風に後戻りした。

『除隊になつた兵士は——箪笥から取り出された襯衣だ。』と彼は言ひ言ひした。彼は、その軍人生活

に就て、不平は言はなかつたが、それに就て、語らうとはしなかつた。それでも、彼は、軍籍に入つてから一度も鞭打たれなかつたといふことを度々語つた。彼が話をする多くの場合は、殊に自分の昔の、彼には尊く見えた基督教徒生活——彼はこれを『クレスチヤン』(農夫)と言つてゐた——の追憶を物語つた。

彼はその話の中に、澤山諺を入れるが、それは普通に兵士の間に用ひられるやうな、野卑で、俗悪な諺ではなくて個々に離して見ると、少しも意味が無いやうに見えるが、適當に用ひられると、忽ち、深い智恵の意味を示すやうな純粋の、俚言であつた。

彼は屢、自分が前に言つたことゝ正反對のことを言つたりするが、併しその二つの言葉は、同じやうに眞實なのであつた。彼は話を好んだ。そして、ピエールが時々彼が自分で慥へたのだと思ふやうな、愛嬌のある文句や、格言で、その話を彩りながら、彼はよく話した。が、その話の重な魅力は、ピエールの知れる極めて單純な事件でも——時としては始んど注意もしなかつたやうな些細な事件でも——それが彼の口に上ると結構な上に嚴肅な意味を帶びてくると云ふ點にあつた。

彼は、或る兵士がよく話すお伽話を毎晩(いつも同じの)——聽くのが好きであつたが、就中彼の好きであつたのは、實生活に就ての話であつた。かゝる話を聽く時には、彼は嬉々として、その話の凡ての結構を覗うとするやうに、言葉を挾れたり、時に質問をしたりする。

ピエールが理解してゐるやうな愛着心や、友情や、愛といふものをカラターエフは持つてはゐなかつた。が、彼は自分と生活を共にする人であれば、何人とも仲宜く暮すのである。殊に彼はさういふ男と——詮り或る特種の人といふのではなく、自分の眼前にある人であれば、何人とも仲宜く暮すのである。彼はその犬を愛し、その仲間を愛し、フランス人を愛し、その隣人であるピエールを愛した。が、ピエールには、カラータエフが優しい心を以て自分に接するにも關はらず、(カラターエフの、その心持ちは、不知不識ピエールの精神生活に何物かを與へざるを得なかつた)カラターエフは、たとへ一瞬間たりとも、ピエールとの離別を悲しむなどゝ云ふことはないだらうと思はれた。そして、ピエールも、カラターエフに對して、同じ感情を持つやうになつた。

他の俘虜兵卒どもの目には、プラトン・カラターエフは、極めて普通の兵士であつた。彼等はプラトンを『小さな鷹』又はプラトーシヤと呼んで、諧謔けて揶揄つたり、物を取りに使つたりした。けれども、ピエールには、最初の晩に受けた印象に依つて、彼は、——率直と正實の測り難い、圓滿な、永遠の權化として永久に殘つたのであつた。

プラトン・カラターエフは、祈禱を除いては、彼が諳誦してゐたものは、何ものもなかつた。彼が話をする時などは、その話を始めながら、何んで話を結ぶかと云ふことを知らなかつたやうである。ピエールが、時々彼の話の意味に感動して彼の言つたことを、もう一度繰り返へしてくれと頼むや

うな時に、それが一寸前に言つた事でも憶ひ出すことが出來なかつた。兎に角彼は自分の好きな歌でも、それを文句にしてピエールに喋ることは出來ないと云ふ鹽梅であつた。

『母よ。小さな樺の樹よ。』とか、『吾が心は病めり。』とか咏ふ筒所があつた、がこの言葉には何の意味も現はれてはゐない。彼は文句から離れては、言葉の意味を了解してゐなかつたし、それを會得することも出來なかつた。彼の凡ゆる言葉や、凡ゆる動作は、他の識らないある活力——即ち彼の生命の表現——であつた。だが彼の生命といふのは、彼が自らさう思つてゐるやうに、個々に離した生命としては、何の意味もなかつた。その生命は彼が始終感知してゐる全的生命の一部分としてのみ意味があるのであつた。彼の言葉や行動は、香氣が花から出るやうに、滑らかに、必然的に自發的に、彼から流れ出るのであつた。彼は、別々に離した、或る行動や言葉には、如何なる價値も、意味も知ることが出來なかつた。

十四

公爵令嬢マリヤは、兄がラストフ家の家族と一緒に、ヤロスラウルにゐるといふことをニコライから聞いて、彼女の伯母が諫め止めるのをも省みず、直ちに一人でなく、甥を連れて、兄の許に行く準備

をした。

それが困難であるか何うか、また、出來るか何うかを彼女は省みなかつた。そして、夫れを知らうとも思はなかつた彼女の——多分死にかけてゐる——兄の傍に行くことが、彼女の義務であるばかりではなく、萬難を排して兄の許へその子供を連れて行くことが、彼女は出掛ける準備をしたのである。公爵令嬢マリヤは、アンドレー公爵が今まで彼女に消息を遣さなかつたのは、彼の身體が手紙を書くに耐へぬほど衰弱してゐた故か、或は、彼女と彼の子供にとつて餘りに困難で危險な長旅行を思慮つた故であると思つた。

數日の間に、公爵令嬢マリヤは、旅行の準備をした、彼女の一行は、彼女がウオロネーヂに乘つて來た大きな公爵用の四輪馬車と、輕便車と、荷馬車とであつた。彼女は、ブウリアンヌ嬢と、家庭敎師を附添はせたニコリユーシカと、老乳母と、三人の女中と、若い側使のチホンと、伯母が遣した下男とを連れて行つた。

モスクワへの本道を行くことは、思ひもよらなかつた。それで、リペツク、リヤザン、ウラヂミイル、シユウヤ等を經て、公爵令嬢が旅せねばならなかつた迂回路は、非常に永かつた。驛馬が乏しいので、非常に困難であつた。そして、リヤザン附近では、フランス兵が現はれ始めたといふ噂があつて危險であつた。

この困難な旅行中、ブウリアンヌ嬢と、デツサルと、公爵令嬢マリヤの婢僕どもは、彼女の堅固な意志と精力とに驚ろかされた。彼女は、皆の者より遥く寝み、誰れよりも早く起き出でた。そして、彼女は、如何なる困難にも挫けなかつた。

彼女の活動力と、その精力とはその伴侶の者を鼓舞した、其お蔭で彼等一行は、二週間目の終りには、ヤロスラウルに近づいた。

ウオロネーヂ滞在中の終り頃は、公爵令嬢マリヤにとつては、その生涯の中での最も幸福な時代であつた。ラストフに對する彼女の戀も、その頃は、彼女にとつては、最早苦痛でもなく、不安でもなかつた。

その戀は、彼女の全心を充たし、彼女自身の一部として離れ難きものとなつてゐた。そして、彼女は、最早それについて煩悶しなかつた。近頃、公爵令嬢マリヤは彼女が戀し、戀されてゐることを——彼女は明瞭と言葉に出すまでには夫れを定めてはゐなかつたが——確信してゐた。彼女は兄がラストフ家の家族と一緒にゐるといふことを告げに來たニコライと最後に逢つた時に、から信じたのであつた。ニコライは、(アンドレー公爵が快癒する場合)今、彼自分ナターシヤとの以前の關係が復活するだらうといふことに就いては、一語も言はなかつたが、公爵令嬢マリヤはニコライが、さうなるに違ひないといふことを知つてゐたし、又さう思つてゐると云ふ事を、彼の顔色で見てとつた。

それだのに、彼女に對する彼の親切な、優しい、愛情の籠つた態度は、一向變らなかつた。それどころか、却つて彼と公爵令嬢マリヤとの間に出來上らんとしてゐる一種の親戚關係のために、マリヤも時に考へたやうに、彼の友人としての愛を示すのが自由になるのを喜んでゐるやうに見えた。公爵令嬢マリヤは、彼女の生涯に於て、これが最初で最後の戀であるといふことを知つてゐた。彼女は戀されてゐると感じてゐた。そして彼女は、かゝる關係でゐることが、幸福で平和であつた。

ところが、この幸福は、彼女が兄のために非常な悲みを感ずる邪魔にはならなかつた。却つて、この精神的平和が、一面から見ると、彼女を、一層多く兄に對する悲みに全身を打ち込むことの出來るやうにさせたのである。

この感情は、彼女がウオロネーヂを出發する間際に最も強く、彼女の從者は、その苦しさうな、絶望的な顏を見て、彼女は途中で屹度病氣に罹るだらうと思つた位であつた。が、公爵令嬢マリヤが精力を使つた、旅行中の困難と心配とは一時、その悲みから彼女を救ひ、彼女に力を與へたのであつた。

旅行中によくあるやうに、公爵令嬢マリヤは、只旅行のことばかりに思をとられてゐて、旅行の目的などは忘れてしまつてゐた。が、ヤロスラウルに近づくに從つて、彼女の目的地に現るゝ事が——今や幾日かの先きではなくて、その晩に迫つてゐるといふことが更らに彼女に明かになつた時に、彼女の心の動搖は、その頂點に達した。

彼女が、ヤロスラウルで、ラストフ家の滞在してゐる場所を探し、アンドレー公爵の病状を知るために、先に出した下男は、市門に駈け入つて來るかの大きな旅行馬車に出遭つたが、その時馬車の窓から出してゐる公爵令嬢マリヤの怖ろしい蒼白い、顔を見て彼は恐くなつた。

『すつかり分りました。お嬢様、ラストフ様は辻廣場の、ブロンニコフといふ商人の家に御滯在でござります。此處からそんなに遠くはございません。ウオルガ河の直ぐ岸の方でございます。』と、下男は言つた。

公爵令嬢マリヤは、何故下男が、彼女の肝腎な、兄は何うしてゐるか、といふ疑問に答へないかが分らないので、心配氣に、もどかしさうに、彼の顔を見た。ブウリアンヌ嬢が、公爵令嬢の代りにかう尋ねた。

『公爵の御容體は、何うなの？』と、彼女は尋ねた。

『閣下は、ラストフ様の御家族様と御一緒に御滯在でございます。』

『では、生きてゐるんだ。』と公爵令嬢は考へた、そして、彼女は柔かに、『容體は何うなの？』と、尋ねた。

『女中さん方は、「お變りが無い」と言つておられましたから、何うもないのでございませう。』

公爵令嬢は、『お變りが無い』といふのが、どういふ意味であるかを尋ねやうとはしなかつた。そして、

彼女の前に座つて、町を見て喜んでゐる、七歳の小さなニコリユーシカを、始んど人には氣が付かないほどに、ちらッと見て、その頭を垂れた。そして、その重い馬車——ゴロ〳〵と軋り、ゴタ〳〵と震動し、右左に搖れる——が止まるまで、その頭を上げなかつた。馬車の階段が、ガタツといふ音と共に下ろされた。

馬車の扉が開かれた。左手には水の流——大きな河があつた。右手には、門口の階段があつた。門口には召使の者と下婢と大きな黑い濃い卷髪の、顏が薔薇色してゐる小女がゐた。公爵令嬢マリヤにその小女が氣の進まぬ無理な微笑を洩してゐるのが何うもソーニヤではなかつたらうかと思はれた。

公爵令嬢は、階段に走せよつた。少女は、表面ばかりの微笑を湛へて、『こちらへ！　こちらへ！』と言つた。そして、公爵令嬢は、玄關で彼女を迎へやうと昂奮した樣子で飛び出して來た、東洋風の顏をした、年とつた婦人に出會した。

それは、伯爵老婦人であつた。彼女は、公爵令嬢マリヤを抱き、彼女を接吻し始めた。

『嬢ちやん』と彼女は言つた。『私は、あなたを愛してゐるんです。それから、私は、永い間あなたのことを存じておつたのですよ。』

公爵令嬢マリヤは、すつかり昂奮してゐたけれども、それが伯爵夫人で、自分は何か言はなければならぬといふことを知つてゐた。彼女は、自分が、何んなことをしたのか、よく覺えなかつたが、彼

女に話しかけられるまゝ、それと同じやうな調子の、鄭寧なフランス語で、何か言つた。そして、『兄はどんな様子でございますか。』と、尋ねた。

「醫師は、危險なことは無いつて言つておりますのよ。』と、彼女は言つた。が、かう言つてゐる際にも彼女は吐息をついて眼を上の方に向けた。

その身振が丁度彼女の言つてゐる言葉の反對を現してゐた。

『何處にゐるのでせう？　會ふことが出來ますでせうか？　會ひますことが。』と、公爵令嬢は尋ねた。

『直ぐにね、直ぐにね、あなた。これが坊様ですの。』と彼女は、デツサルと一緒に入つて來たニコリユーシカの方を向いて言つた。『こゝには、皆さんにお部屋がありますよ。家が大きいんですから。まア、なんて可愛い、坊ちやんでせう！』

伯爵夫人は、公爵令嬢を客間に導いた。ソーニヤは、ブウリアンヌ嬢と話し始めた。老伯爵が、公爵令嬢を迎へるために客間へ入つて來た時とは、すつかり變つてゐた。あの時は、彼は快活な　面白い、自信の强い老紳士であつたが、今、彼は、哀れな困迷した人間となつてゐた。公爵令嬢と話をしてゐる間も、彼は始終、自分が間違つたことをしないか何うかを人々に訊くやうに、身の周圍を見廻はしてゐた。モスクワと彼の財産の破滅以後、今迄馴れ來つた道から追出された彼は、自己に價値があると云ふ考を失つて了つたらしく、最早や自分は社會に役に

立たないものであると思つてゐた。

公爵令嬢は、たゞ一刻も早く兄に會ひたいといふ一つの願ひをもつてゐた、また、その願を叶へたいとのみ思つてゐる時に一家の人々が彼女の甥に表面のお愛想を言ふのに相手になつてゐなければならぬといふのは、迷惑であつたにも拘はらず、彼女は、自分の周圍に起ることを凝つと見てゐた。そして、自分は今、新らしい境遇に入つたのだから、これは一時止むを得ないことだと思つた。それは、彼女にとつては、苦痛なことであつたが、皆これは止むを得ないことで夫れがために、一家の人々を恨むといふやうなことはしなかつた。

『これは私の姪でございます。』と伯爵夫人は、ソーニヤを紹介して、言つた。『あなたは、御存じぢやなかつたですかねえ？』

公爵令嬢マリヤは、ソーニヤの方を向いた。そして、彼女を接吻した。けれども、これ等の人々の考と、彼女の胸の中にあつたものとの間に、非常な隔離があつたので、それが彼女にとつては苦痛であつた。

『兄は何處におりますの？』と彼女は、また、その場に居合せたみんなに向つて尋ねた。

『お兄様は階下にゐらつしやいます。ナターシヤさんが御一緒にゐらつしやいますわ。』とソーニヤが顔を赧らめて答へた。『今、さう申しに遣りましたの。あなた、きつとお疲れでございませう？

公爵令嬢（プリンセス）。』

困惑の涙が、公爵令嬢マリヤの眼に浮んだ。彼女は脇を向いた。そして、何處に兄がゐるかをもう一度伯爵夫人に尋ねやうとしてゐる時に、彼女は、次ぎの間に、輕い、急（せは）しい愉快らしい足音を聞いた。彼女は振り返つて、殆んど飛び込むやうに入つて來たナターシヤを見た。——ずツと以前モスクワで會つた時には、あんなに嫌ひであつたそのナターシヤを見た。

しかし、公爵令嬢マリヤが、そのナターシヤの顏を見るか見ないうちに、彼女はナターシヤの顏から、悲みの眞の同情者であり、從つて自分の親しい者であるといふことを覺つた。

彼女は直ぐナターシヤに近づいて、彼女を抱き、彼女の肩に倚りかゝつて涙に咽んだ。

アンドレー公爵の枕もとに附添つてゐたナターシヤは、公爵令嬢マリヤの到着を聽きつけるや否や、密つと病室を拔け出て、公爵令嬢マリヤには快活（きびき）に聞えた位の、步調（あしなみ）で、此所へ走り付けたのであつた。

彼女が客間に飛び込んだ時の、その昂奮した顏には、たゞ一つの表情があつた。——戀人と、戀人の妹と、戀人に近い凡ての人々とに對する限り無き愛の表情であつた。他人に對する哀憐と犧牲の表情——戀人が助かるならば、自分の全身を委ねやうといふ情熱的な願望の表情であつた。その時、ナターシヤの心の中には、自分自身のことや、戀人との自分の關係に對するさま〴〵の思慮（かんがへ）を容れる餘

地のなかつたことは、明かであつた。

神經の銳敏な公爵令嬢マリヤは、ナターシヤの顏を一目見るや、これら凡ての事を察してしまつた。そして悲しい慰めの心を以て、彼女の肩に泣き伏したのであつた。

『さア、あの方のところへ參りませう。マリヤ。』とナターシヤは、次ぎの間へ彼女を導きながら、かう言つた。

公爵令嬢マリヤは、顏を上げ、涙を拭いて、ナターシヤに向き會つた。彼女は、自分が知りたいと思つてゐた凡てのことを、ナターシヤから聞かうと思つたのである。『如何（どう）して……。』と彼女は言ひかけて、直ぐ止めた。彼女は、言葉で、質問（たづね）たり、答へたりすることは出來ないと思つた。ナターシヤの顏と眼とは、言葉よりも明かに、より深酷に凡てを物語つてゐるのであつた。

ナターシヤは、彼女を見た。が、ナターシヤは、自分の知つてゐる凡てのことを言ふ方がいゝか、言はない方がいいか、といふことを惑（まど）ひ、怖れてゐるやうであつた。ナターシヤは、彼女の心の底まで透視（みすか）すやうな、その涼しい兩眼の前では、自分の見た凡ての事實を言はない譯（わけ）にはいかないと思つた。ナターシヤの唇が、俄かに震へてその口の周邊（まはり）に醜い皺が寄つた。そして、彼女は、兩手で顏を藏ふて、突然欷歔（すゝりあ）上げだした。

公爵令嬢マリヤは、萬事を悟り得た。併し、彼の女は兎に角その希望を棄てないで、自分が餘り當

にしてゐない言葉で尋ねかけた。

『あの、兄の負傷は如何でせう？　全體の容體は如何でせう？』

『あなた……あなたがお會ひになれば、分りますわ。』ナターシヤは、辛つとかう言ひ得ただけであつた。

二人は、涙を收めて、何氣ない顏で彼に會ふために、彼の部屋に隣れる、階段の下で少時、憩ふてゐた。

『病氣の經過は如何なんでせう。惡くなつたのは、近頃なんですか？　何時頃そんなになつたんでせうねえ？』と公爵令嬢マリヤは尋ねた。

ナターシヤは、發熱と痛みの爲めに初期は危險だつたが、それはトロイツツアにゐる間に、經過してしまつて、醫師は、たゞ丹毒を怖れてゐたといふことを語つた。が、その危險も、殆んど過ぎ去つてしまつた。一同が、ヤロスラウルに着いた時には、傷は化膿し始めた、（ナターシヤは、化膿のことや、その他の醫術語には詳しかつた）そして、醫師は、化膿の後の經過は順當に行くだらうと言つてゐた。其後熱が出た。醫師は、この熱は怖るゝに足らんと言つてゐた。『ですのに、二日前に、』とナターシヤは始めた。『俄かに、こんなことに成つてしまつたのです……（彼女はやつと歔欷を抑へてゐた）

『私には何うしてこんなになつたか分りませんの。でも、あなたが御覽になつたら、變つたことが分りになりますわ。』

『身體が衰弱したんですか？　痩せたんですか……』と、公爵令嬢は尋ねた。

『否、そんなことぢやないんですの。でも、大へん惡いんです。あなた、御覽になると分りますわ。まア、マリイさん。あの方はあんまり穩かなんですもの、あの方は助かりませんわ、助かりませんわ、だつて……』

十五

ナターシヤが、馴れた手つきで扉を開けて、公爵令嬢マリヤを先きに通した時に、マリヤは、歔欷が咽喉に込み上げて來るのを覺えた。如何に用意をしてゐても、如何に氣を靜めやうとしても、涙を見せずに兄に會ふことの出來ないことを彼女は知つた。

マリヤは、ナターシヤが『二日前に、こんなに變つてしまつたんです。』と言つた言葉の意味が了解つて來た。それは兄が急に溫順しくなつたといふことで、その溫順しく優しくなつたことは、彼の死

ぬ前兆であるといふ意味なのだと彼女は解釋したのであつた。部屋の入口に近づいた時に、彼女は既に、小兒の時分の、小さなアンドリユーシヤの優しい、温順しい顏を想像してゐた、兄が、後年、そんな顏をしたことは稀にしか見なかつたので、彼女の心の中には、幼少の頃の顏があり〳〵と殘つてゐるのであつた。兄はきつと、彼女の父が、その死の床で言つたやうな、柔かな、優しい言葉を彼女にかけるであらう、そして、彼女は、それに耐へることが出來ずして、それを聽くと、歎上げて泣くだらう、と彼女は思つた。が、遲かれ、早かれ、その時が來るのであつた。彼女は部屋の中へ這入つた。彼女が近眼で、だん〳〵瞭然と兄の形貌を識別けるに從つて、彼女の歎泣も、だん〳〵咽喉に込み上げてくるやうに思はれた。と、終ひに彼女は、兄の顏を見、兄の眼と出會した。

兄は、栗鼠皮裏の寢衣を着て枕を高くして、寢臺の上に横たはつてゐた。彼は、痩せて、蒼白かつた。透き通るほど白い一方の手に、手巾を持ち、も一方の手で、長く生びた、薄い鬚に輕く觸つてゐた。彼の兩眼は今、入つて來た人達を視てゐた。

兄の顏を見、兄の眼に出遭ふと、彼女の步調は緩くなつた。そして、涙が乾き、歎泣が止まつたやうに思つた。兄の顏と眼の表情を捕へた時に、彼女は急に、耻かしく、罪なことをしたやうに思つた。『でも、私がどんな過失をしたと云ふんだらう?』と、彼女は自ら問ふた。『お前が生きてゐて、生きることを考へてゐるからだ、俺はこんなだのに!』……と兄の冷たい、鋭い眼が答へてゐるやうに思はれた。

ツク〳〵と自分の妹とナターシヤを眺めてゐる時の、兄の、深い、外部ではなく自己の內部を見詰めてゐるやうなその視線の中には殆んど敵意のやうな或るものがあつた。彼は、いつもの樣に、妹と、手と手の接吻をした。

『變りは無かつたかい、マリイ。如何して此所へ遣つて來たか?』と彼は、その眼容と同じ、平然たる、冷やかな聲で言つた。假令彼が絶望の叫び聲を發したとしても、公爵令孃マリヤにとつては、この音聲ほどに恐ろしくはなかつたであらう。『ニコリユーシカも伴れて來たのか?』と、彼は依然、落着いて憶出し難くさうに徐ろ〳〵と言つた。

『今は如何ですの?』と公爵令孃マリヤは、自分の言つてゐることを、自分で怪みながら言つた。

『それは、お前、醫師に訊かなくちや分らないさ。』と彼は言つた。そして、愛想をよくしやうとするらしくも一度唇でだけ物を言つた。(自分の言つてることを全く考へてはゐないのは明かであつた。)

『お前、よく來てくれたねえ。』

公爵令孃マリヤは、兄の手を握り締めた、兄は、彼女の手で握り締められたので、一寸と、顏を顰めた。彼は默つてゐた。で、彼女は何と言つていゝか分らなかつた。彼女は、二日前に兄を襲ふたといふ變化を了解した。その言葉でその言葉の調子で、就中その瞳が——冷たい、殆んどその反抗的な視

線が、生ある人間にとつて最も怖るべき現世界からの隔絶を語つてゐた。

彼には凡ゆる生なるものを理解するのは、困難であつたらしかつた。で、それと共に彼は生けるものを理解する丈の力を失つたと云ふのではなくて何か他の、詮り、生物なる間は解らない、否解る事が出來ない、そのやうなものを彼は知り、それに全く自己を吸付けられてゐた、その爲に彼は生物を理解することが出來なかつたのであつた。

『さうだ、何といふ不思議な運命が、また自分等を一緒にしたのだらうねえ。』

と彼は沈默を破つて、ナターシヤを指しながら言つた。『この友が、何に哭れとなく僕を看護してゐてくれるのだからね。』

公爵令嬢マリヤは、兄の言ふことを聽いてゐたが、何んのことか分らなかつた、この感じの敏い、物優しいアンドレー公爵が、彼と相愛のこの少女の前で、何うしてこんなことが言へるのだらう？彼が若し生き延びると思つてゐたらあんな冷淡な——輕侮な調子で、よもや言はなかつたらう、若しも彼が、死すると云ふことを知らないでゐるとしたならば、何うして、彼にはナターシヤを可哀想と思はないで、あの女の居る所であんなことが言へるのだらう。

これは、何か他のものが、もつとずツと重要な何ものかが彼に判明つてゐたから、彼にとつては凡てのものが皆同一で、全く無關係な事柄であつたのだらうと解釋するより他はない。

會話は冷やかで、連絡がなく、ちよい〳〵途切れた。

『マリイは、リヤザンを通つてゐらしたんですつて。』

と、ナターシヤが言つた。

アンドレー公爵は、彼女が妹をマリイと呼んだのに氣が附かなかつた。が、ナターシヤは、公爵の前で、初めて、マリヤをさう呼んだことに氣が附いた。

『それで、どうした』と、彼は言つた。

『それから、モスクワが、地面まで、悉皆、すつかり燒けてしまつたことをお聞きなすつたんですつて。それが、恰度……』

ナターシヤは止めた。話すことが出來なかつた。彼が、聽かうと務めてはゐるけれども、話が耳に入らぬらしかつた。

『うん。燒けたということだね。』と、彼は言つた。『そりや、悲慘なことだ。』彼は茫然と指で鬚の邊を撫でながら、前方を眞直に見詰めた。

『ぢやア、マリイ、お前、ニコライ伯爵に會つたんだね。』とアンドレー公爵は、何か、二人を喜ばすやうなことを言はうとする樣子で、突然かう言つた。『ニコライは、お前を大へん好いてゐるッて、こゝへ手紙を遣したよ。』と彼は自分の言葉が、生きてゐる人間にとつては夫れが複雜な意味を持つてゐる

ことに氣が附かないものゝ如く、平氣で、穏やかに、言つた。『お前も、ニコライを好いてゐるとすれば、非常に良いことだね……お前が結婚するとすればだね。』と彼は、永らく求めてゐた言葉を、終ひに見つけ出したのを、滿足してゐるかのやうに、前より早口に、附け加へた。

公爵令嬢マリヤは、兄の言葉を聽いた。が、その言葉は、彼女にとつては、兄が今、生きてゐる凡ゆるものから、如何にひどく遠ざかつてゐるかといふことを示す他は、何等の意味をもつてゐなかつた。

『何故、私のことを有仰るの?』と彼女は、穏やかに言つた。そして、ナターシヤをちらツと見た。ナターシヤは彼女の視線が自分に來てゐるのを知つて彼女を見なかつた。また、三人は默り込んでしまつた。

『アンドレー、あなた、ねえ……』と公爵令嬢マリヤは、唐突に、慄へ聲で言つた。『ニコリユーシカに會つてやつて下さる? あの兒は、始終、あなたのことを言つてゐますよ。』

初めて、アンドレー公爵は、微かに見える微笑を湛へた。が、兄の顔をよく知つてゐる公爵令嬢マリヤは、それが、彼の子に對する悦びや、優し味の微笑ではなくして、自分の妹が、彼を人間的な感情に呼び戻す最後の方法であると思つてしたことに對する、靜かな、穏かな皮肉の微笑であると思つたので、怖ろしく感じた。

『うん。ニコリユーシカには會ひたいねえ。あの兒は壯健かね?』

小さなニコリユーシカは連れて來られると、恐しさうに自分の父を見てゐたが、みんなが泣かないので、泣きはしなかつた。アンドレー公爵は彼を接吻した。けれど、彼に何と言つていゝか、分らないやうであつた。

皆の者がニコリユーシカを連れて去ると、公爵令嬢マリヤは、もう一度兄の傍に近づいて、彼を接吻した。そして、もう自分を制し切れなくなつて、泣き出した。

兄は、絶えず マリヤを見詰めてゐた。

『お前は、ニコリユーシカのために泣くんだね?』と、彼は訊いた。

公爵令嬢マリヤは、涙ながらに、點頭いた。

『マリヤ、お前は知つてるだらう、新約……』と、彼は言ひかけて不圖止めた。

『何ですの?』

『否。何でもない。お前はこゝで泣いちやア宜けないよ。』と彼は、その冷やかな眼で妹を見ながら

言つた。

公爵令嬢マリヤが涙に咽んだ時に、アンドレー公爵は、ニコリユーシカが無父兒になるといふので、泣いてゐるんだといふことが分つた。

彼は非常な努力を自己に加へて、生存に返へらうと試みた。そして、彼等の立脚地へ移らうと努めた。『さうだ。それは、彼等にとつては、悲しく見えるに違ひない。』と、彼は考へた。『が、これは實に單純なことなんだ！』

『空の鳥は播くことをせず、苅ることをせざれど、天に在す父は、彼等を養ひ給ふ。』と彼は自分に言つた。そして、彼が、公爵令嬢に言はうとしたのもこれであつたのだ。『だが、否。彼女等は、この格言を自分等の見解で、解釋してゐるんだ。彼女等はかゝる種々な感情をば尊重して、吾々には非常に重要と思はるゝ種々の思想をば不必要なものと思つてゐる、彼女等にはかゝる事は了解出來ないであらう。吾々は、お互に了解し合ふことは出來ないのだ。』そこで、彼は沈默つて了つた。

アンドレー公爵の小さな子息は、七歳であつた。彼は、辛つと讀み初める頃で、何にも分らなかつた。彼は、その後多くの月日を經て、智識や觀察力や、經驗を得たのであつた。が、若し、彼がその後に得た種々の智識を、今持つてゐたとしても、彼の父や、公爵令嬢マリヤや、ナターシヤの間に生じたこの場の光景の意味を、今よりももつと深く了解することは出來なかつたであらう。彼は全くその意味を了解んでゐた。そして、泣かずに部屋を出て、默つて、自分に附隨いて出て來たナターシヤに近づき、その美しい、夢みるやうな眼で、怯づ〳〵彼女を見た。その少し開いた桃色の上唇は、震へてゐた。彼はその頭を彼女に擡せかけて、涙に咽んだ。

その日から、ニコリユーシカは、デツサルを避け、彼を寵愛がつた伯爵夫人を避けて、獨りで坐つてゐるか、公爵令嬢マリヤの傍か、彼の叔母よりも彼が好いてゐるやうに見えるナターシヤの傍に、怕る〳〵寄るかした。そして恥かしさうに靜かに、彼女等に甘えてゐた。

公爵令嬢マリヤは、兄の傍を退いて、全然、先にナターシヤの顏が言つてゐた事を了解した。マリヤは、最早や、兄の生命の救はるゝ希望に就いては、ナターシヤと語り合はなかつた。マリヤは、ナ

ターシヤと代つて、兄の病床に附添つた。が、もう彼女は泣かなかつた。そして、その心を、今や死に就かんとする者の上にまざ〳〵と臨在し給ふ永劫の測り知る可からざる神に向けて、絶えず祈つた。

十六

公爵アンドレーは、自分が死ぬのだといふことを知つてゐたばかりでなく、將に自分が死に瀕しつつある事を感じてゐた、否や既に自分は半分死んでゐることを感じてゐた。彼は、自分が地上の萬物から隔絶したといふ意識と、存在といふ物の、不思議な、悦溢るゝ輕さを經驗した。焦燥も、煩悶も無く、彼は自分の前に來るものを待つてゐた。

彼は、その生涯を通じて、不可知で、遠く隔絶れてゐる、嚴格なる永久的存在を心に思ひ浮べるのを止めたことはなかつたが、今や、彼の手近にあつた。そして、彼が味はつてゐる、自分の存在の不思議な輕さによつて、殆んど夫れが了解され、觸れ得られるものとなつた。

★

★

★

★

過去に於ては、アンドレー公爵は、死を怖れた。彼は、二度、この恐怖すべき、苦しい死の、斷末魔の感じを味はつたことがあつた。けれど、今は夫れが解らなくなつてゐた。

彼が最初に、この感じを味はつたのは、彼の面前で、榴彈が獨樂のやうに廻轉した時であつた。彼は切株を見、草叢を見、空を仰いで、自分が死に面してゐることを知つた。負傷後、正氣に返つた時、直ちに、人生の窮屈な羈絆から釋放されたかの様に感じて、自分の靈魂に、この人生とは無關係な、愛と、永久と、自由の花が發生したやうに思つた、そして、彼は、もう、死を怖れなかつたし、死に就いて考へもしなかつた。

その後、彼の憂苦な孤獨と半ば人事不省の時間を過した時にも、彼に顯示された、この新しい永久的な愛の根原に入り込めば入り込むほど、不知不識、地上の生活からだん〳〵遠く離れるやうになつた、萬物を愛し、萬人を愛し、常に愛のために自己を犧牲にすることは、詮り何人をも特別に愛してはならないと云ふ意味で、この地上の生活をしてはならないといふ意味になる。そして、彼は、この新らしい永久的な愛の根原を徹底せんとすればするほど、生存を否認し、生存と死との間に無殘にも存する恐るべき障壁を、全く破壞するやうになつた。始めの間、彼が死なねばならぬといふことを心に覺へる時は、何時でも、自分にかう言つた。『宜し、その方が餘程いゝのだ。』

けれど、ミユイチシチイで、彼が半ば人事不省に陷つた時、憧れてゐた女が、自分の面前に現はれ

たので、彼はその唇を彼女の手に壓し着けて、軟かな、幸福な涙を流したあの晩から、一人の婦人に對する愛が、彼の胸に忍び込み、彼を、再び、人生に縛りつけた。そして喜ばしい、不安な考想が、彼に立ち歸り始めた。彼が、クラアギンに遭つた、野戰病院に於けるあの瞬間を追想しても、彼は今、その時の感情に立ち歸ることは出來なかつた。彼は、自分が生きてゐるか何うかといふ疑問に苦しめられてゐたのだ。そして、彼は今そんなことを尋ねやうとし得なかつた。

彼の病氣は、その順當な生理的徑路を進んだ。が、ナターシヤが『あんなに變つた』と言つたことが、公爵令嬢マリヤの到着する二日前に、彼に生じたのであつた。それは、生と死との間の最後の內部的爭鬪の時で、死は終に勝を占めたのである。それは、ナターシヤに對する愛に依つて示して居る、尙ほ生存を重ずるといふ彼の唐突な意識であつた。そして又不可知に對する恐怖の、最後の、征服さるべき攻撃であつた。

それは、夜であつた。食後にはいつもさうであつたが、彼は、少し發熱の容態であつたが、その考想は非常に明瞭であつた。ソーニヤは、卓子に對つて座つてゐた。彼は、微睡してゐると、突然ある幸福な感覺を身に覺えたのである。

『あゝ之れは彼女が這入つて來たのだ！』

と、彼は考へた。ナターシヤは、事實、今、音のしないやうな步調で這入つて來て、ソーニヤのゐた場所に座つたのであつた。

彼女が、彼を看護するやうになつてから、彼は常に、彼女がゐると、かゝる肉體的な感じを覺えた。彼女は、彼の傍の低い椅子に、靴下を編みながら、蠟燭の光を彼から遮るやうに腰掛けてゐた。（彼女が靴下を編むやうになつたのは、或る時アンドレー公爵が靴下を編むでゐた老乳母のやうに良い、看護の仕方を誰も能うしないだらう、その靴下を編む動作には、人を慰むる何ものかがあると、彼女に語つてから以來であつた。）彼女の纖柔な指は、時々微かな音をさせて、急がしく針を動かした。そして、頭を下げてゐる彼女の、夢のやうな橫顏を、彼は明瞭と見ることが出來た。彼女は微かに動いた——絲球が膝から轉がつた。彼女は立ち上り、アンドレーをちらツと見て、その手で光を遮りながら、注意深い、柔和かな、正確した動作で、身を屈め、絲球を拾つた、そして、前と同じ位置に戻つて、坐つた。

アンドレーは、微動もせずに、彼女を見詰めてゐた。そして、彼女が、動いた後で胸一杯の深い呼吸をつきたいと思ふのを、さうは得せずに、注意深く、呼吸をついたのを彼は見た。

トロイツツア修道院で二人は、過去に就いて語り、彼は、若し自分が生存らへるならば、二人を導いて、再び一緒にした自分の負傷に對して永久に神に感謝しなければならぬ、と言つた、が、その時以來、二人は、未來に就いて語らなかつた。

『そんなことがあり得やうか、あり得ないだらうか?』と、彼は今、彼女を注目つて、その鋼鐵の編針のカチ合ふ微かな響に耳を傾けながら思ひ惑つた。『俺が死ぬ爲めにのみ、運命が、二人を不思議にも一緒にしたといふのであらうか?……俺が虚僞の生活を送つてしまふ爲めにのみ、人生の眞理が、俺に、啓示されたといふのであらうか? 俺は世界に於ける何物よりも彼女を愛してゐる! けれど、俺が彼女を愛してゐるとすれば、俺は何う爲たらいゝのだらうか?』と彼は言つて、そして、彼は急に、痛みに苦しんでゐる最中にするやうになつてゐた習慣で、無意識に呻いた。

この聲を聞きつけて、ナターシヤは靴下を下に置き、彼の方へ身を屈めた、そして、直ぐ彼の蹶やく眼を見つけたので、輕い步調で彼に近づいて、身を屈めた。

『お睡つてゐらつしやるんじやなかつたの?』

『否。僕は、永い間、お前を見てゐたんだ。お前でなければ、僕にこんな柔かな平和を……こんな光を與へてくれる者は無い。僕は眞實うに、嬉しくて泣きたい位ゐだ!』

ナターシヤは、ぴつたり彼に寄り添つた。彼女の顏は、喜びに充ちて、蹶やいた。

『ナターシヤ、僕は、お前を愛し過ぎる位に愛してゐる。世界中の何物よりも愛してゐる!』

『それで、私は愛してゐるかツておつしやるの?』彼女は言つた。

『何故愛し過ぎると言ふかツて?……ぢやア、お前はどう思ふ、お前の心の中で、お前の心の底でどう感じてゐる、僕は快癒くなるだらうか? お前はどう思ふ?』

『きつと、快癒くなると思ふわ、きつと!』とナターシヤは、情熱の籠つた態度で、彼の兩手を握つて、殆んど叫ぶやうに言つた。

彼は、少時、默つてゐた。

『そうだつたら、何んなにか宜からう。』彼は、彼女の手をとつて、それに接吻した。

ナターシヤは、幸福で、深く感動してゐた。そして、彼女は直ちに、これでは宜けない、彼は靜かにしてゐなくちやいけないといふことに氣が附いた。

『では、お睡らなかつたのね。』と彼女は、喜びを抑へて言つた。『お睡みになるやうになさいな……後生ですから。』

彼は、彼女の手を握つて、離した。そして、彼女は、蠟燭の傍に歸つて、前と同じ位置に腰を下ろした。彼女は、二度彼を見た、彼の兩眼は輝き迎へてゐた。彼女は、靴下を編むのを限つて、それまで編むまでは、彼を見まいと決心した。

彼は、事實、直ぐ眼を閉ぢて、眠つた。彼は、長くは眠らなかつた。そして、急に驚ろいて、冷汗を流して、目が醒めた。

彼は眠り就く時、なほ彼が今まで考へてゐたこと——生命と死とに就いて考へてゐた。殊に、死に就て多く考へた。彼は、死に近づいてゐると思つた。

『愛？　愛とは何だ。』と、彼は思つた。

『愛は、死を妨げるもの。愛は生命である。有りと、有ゆるものが俺には分る、俺は愛するから、凡てのものを了解し得るのだ。俺が愛するから、凡てのものが在り、凡てのものが存在するのだ。凡てのものは、愛に於てのみ總括される。愛は神である。そして、死するといふ事も愛の一分子で、普遍な永遠の源泉に立ち歸へる事なのだ。』この思想は彼を慰めるやうに思はれた。けれども、それは、たゞ思想なるに過ぎなかつた。それには、一面的で、個人的な、そして理想的な或るものがあつた——、それは明瞭ではなかつた——が、そこには何か足らぬものがあつた。そして、そこには、尚ほ不安と朦朧とがあつた。彼は眠に落ちた。

彼は夢をみた。自分は、彼が今臥てゐる部屋に臥てゐた。彼は病氣ではなくて、極めて壯健であつた。さま〴〵の人、詰らない人が、大勢アンドレー公爵の前に現はれた。彼は、その人々と話してゐた、そして何か詰らないことで議論してゐた彼等は、何處かへ出掛ける準備をしてゐるやうに思はれた。アンドレー公爵は、こんなことは重要なことではない、彼は他にもつと考ふ可き問題があると、ぼんやり感じた、だが、彼はなほ彼等を驚かしつゝ、何やら空虚な諧謔を言ひつゞけてゐた。暫時すると

みんなの者が、だん〴〵居なくなり始めた。そして、殘された一つのことは、扉を閉めるといふ問題であつた。彼は起き上つて、それを閉めて鍵を掛けるために、扉の方へ行つた。萬事は彼が扉を閉め得るか、閉め得ないかで定るのであつた。

彼は歩いた、急いだ、が、足が動かない、で、彼は、扉を閉める事は出來ないだらうと思つたが、夫れでも尚ほ扉を閉めるために兎に角あらゆる努力を費した。彼は苦痛に充ちた恐怖を覺々た。その恐怖は死の恐怖であつた、扉の後ろに、その恐怖が立つてゐた。ところが、彼が、よろ〴〵と、不様に、扉の方へ匐ひ倚らうとするうちに、何か怖ろしいものが、既に外側から扉を押して、侵入しやうとしてゐた。何か人間的ではないもの——死——が。扉を押し開かうとしてゐる、で、彼は、それを押へなければならぬ。最後の力を振つて、彼は扉を扼むだ——戸を閉めることは不可能だから、尠くともそれを押へやうとした——が、その努力は、弱くて、敏捷でなかつたので、かの怖ろしいものゝ壓力で、扉は開いたが、また閉つた。

もう一度、その者は、外から扉を押してゐた。彼の最後の、超人間的の努力も空であつた。そして、扉の兩方の袖は、音も無く開いた。それは、這入つて來た。それは、死であつた。そして、アンドレー公爵は死んだ。

しかし、夢の中で、彼が死んだ刹那に、アンドレー公爵は、自分が眠つてゐたことを想ひ出した。

そして、自分が死んだ刹那に、無理やりに彼は目を醒ました。

『さうだ。これが死だ。俺は死んで、目を醒ました。さうだ、死は覺醒だ。』と、突然、彼の靈魂に、光が閃いた。そして、その時まで不可知なるものを隱くしてゐた覆紗（ヴエール）は、彼の精神の視覺の前で揭（あ）げられた。彼は、自分を束縛した或る力から解放されたやうに思つた。そして、この時から彼を離れなかつた、かの不思議な輕さを感じた。

彼が、冷汗を流して、寢臺の上で動いた時に、ナターシヤは近づいて、何うしたのかと彼に尋ねた。彼は答へなかつた。そして、腑に落ちぬやうに、不思議さうな眼で彼女を見た。

これが、公爵令嬢マリヤの到着前二日に起つた變化であつた。醫師は、衰へてゐた熱が、その日から、惡い傾向を示して來たと言つた。が、ナターシヤは、醫師の言ふことには左程注意しなかつた。彼女は、その生理上の徵候よりはもつと〳〵確かな、怖るべき道德上の徵候を見たのであつた。

その日、眠（ねむり）から醒めると同時にアンドレー公爵は、生から覺（さ）め始めた。そして、生の存續に於けるその覺醒は、夢の存續に於ける、眠からの覺醒よりも緩（のろ）くはないやうに思はれた。この比較的緩（のろ）い覺めには、何んの怖ろしい事も、激しいところも無かつた。

彼の最後の時日は、單調に、平凡に過ごされた。アンドレーの傍に附き切つてゐた公爵令嬢マリヤとナターシヤはいづれも、さう思つた。二人は泣きもしなければ慄へもしなかつた。二人とも末期に

近くなると、もう彼に侍してゐるのではなくて、（彼はもうゐない、彼は既に二人から遠く去つて了つた）たゞ、彼に最も近い記念——彼の骸（むくろ）——に侍してゐるのだと云ふやうな氣がした。二人の感情は死の外面的な、怖ろしい方面が、二人に影響を與へなかつたほど强かつた。そして二人には、悲みを高調させる必要がなかつた。二人は、彼の前でも、彼を離れてからも、泣かなかつた、そして、お互に彼のことをすら話さなかつた。二人は、自分たちが了解してゐることを、言葉に表白（いひあらは）すことが出來ないと思つた。

二人は、彼が徐々に靜かに、だん〳〵、彼女等から遠ざかりつゝあるのを見た、そして、二人は、これは、さうなくてはならぬ事で、それでいゝのだといふことを知つた。彼に、臨終の痛悔と聖體を授けた、そしてみんなが、彼に訣別するために來た。彼の息子が連れて來られた時に、彼は接吻して、脇を向いた、が、それは彼にとつて夫れが苦痛であり、悲しかつたからではなくて、（公爵令嬢マリヤとナターシヤとはさうとつてゐた。）たゞ單に、彼が、求められたものをみんなしたと思つたからであつた。ところが、彼は、息子を祝福するやうにと言はれたので、その通りした、そして、まだ何か外にしなければならぬことがあるかとでも云ふやうに、四邊（あたり）を見廻はした。

靈魂の去つた、彼の肉體が、最後の痙攣で震へた時に、公爵令嬢マリヤとナターシヤは其處にゐた。

『お亡くなりなすつた！』と、公爵令嬢マリヤは彼の身體が數分間も凝つと動かずに、冷めたくなつて彼等の面前に横たへられた時に、かう言つた。ナターシヤは、近づいて、死者の眼を見た、そして急いでそれを閉ぢやうとした。彼女は眼を閉ぢてやつた、そして、それには接吻せずに、彼に就ての最も近い記念であつたその身體に接吻した。

『あの方は何處へいらしたのだらう？　今何處におられるのだらう？……』

壽衣（きやうかたびら）を着せ、湯灌（ゆかん）をした身體が、卓子（テエブル）の上の棺の中に横へられた時に、みなの者が、訣別に來た、そしてみなの者が泣いた。伯爵夫人とソーニヤはアンドレーが最早や此世に居ないと云ふことを思つて、ナターシヤに對する哀憐のために泣いた。老伯爵は彼もまた遠からず、これと同じ、怖ろしい道を歩まねばならぬと思つたので、泣いた。

ナターシヤと公爵令嬢マリヤも、この時は泣いた。しかし、二人は、自分等の個人的な悲哀のために泣いたのではなく二人は、自分等の面前で成就げられた死の、單純な、嚴肅な秘密の意識の内に、彼等の靈魂を充した崇高な感激に打たれて、泣いたのであつた。

第五編

一

種々なる現象の原因の總合は、人智の克く達し得るところではない。しかし、原因を求めむとする衝動は、人間の精神に本然なものである。そこで人智は、種々なる現象には無數の複雜なる條件があつて、その條件が各個々に一つの現因たり得ると云ふ事を穿鑿もしないで、その最初の、最も解り易い接近物を摑んで、それが原因であるといふのである。

歴史上の事件に於て、（こゝでは人民の行動が觀察の目的となるべきである）その事件に元始的に密接なる關係を有するものとして擧げらるゝのは神の意志である、次ぎは、歴史上の重立つた位置を占めてゐる人々——歴史上の英雄の意志である。

しかし、人は、各歴史的事件の本質を探求する必要がある、即ち、その事件に關係のある全民衆の行動を觀るべきである、歴史上の英雄の意志は、衆人の行動を支配するどころか却つて、斷へず衆人の行動によつて支配されてゐるといふことを認めなければならぬ。

歴史上の事件に意義を甲とか乙とかいふ風に説明する事はどちらでも宜かりさうに思ふであらう。けれども、或人達は西歐の人が、東歐に向つて行進したのは、ナポーレオンが、さうしようと意志たからであると言ひ、或人は、その運動は生ぜねばならなかつたから生じたのであると言ふ、この兩者の差異は恰度、地球は停止してゐるので、その周圍を遊星が回轉してゐるのである、と主張する人と、地球がその場所で何をして居るのかは知らないが、地球の運動と他の遊星の運動を支配する法則がある、といふことを知つてゐる人との間の相異と、同じ相異である。

歴史的事件の諸原因は、凡ゆる原因中の、唯一の原因を置いて他に無く又有り得ない。が、かゝる事件を支配する諸種の法則はある、その法則の一部分は不可知であるが、一部分は、吾々の模索し得るものである。かゝる諸法則は吾々が、原因は、一人の人間の意志によるものであるといふ見解を全く棄ててしまふ時のみに、發見し得るのである。それは恰度、遊星の運動の法則が、人が地球は靜止してゐるものであるといふ概念を棄てた時のみに、發見し得るのと同理である。

歴史家は、ボロヂイノ戰役、及びモスクワの奪取と燃棄以後、一八一二年の戰爭の、最も重要なる

附隨事件は、リヤザンから、カルウガ街道、及びタルチイノ陣營に至る露軍の運動、即ち、カラスナヤ・パアラの背後までの所謂迂回運動であると考へてゐる。歴史家は、この天才的勳功の光榮を種々の人に歸した、それが爲めに、果して誰れにその光榮が歸するが最も正當なるかに就いて、諸説紛々としてゐる。外國の歴史家でさへも、フランスの歴史家でさへも彼等が、この迂廻運動を論ずる時には、ロシアの諸將の天才を認めてゐる。が、何故、戰記作者や、戰記作者の説に追從するその他の人が、この迂廻運動を以つて、誰れか一人の人物があつて、ロシアを救ひ、ナポーレオンを轉覆せんとして深く考へた計畫であるかの如くに、假定するかは、甚だ了解に苦しむところである。

第一、この運動に於て、何處に深い智慧や天才が潜んでゐるかを知るのは、困難である。何故(なぜ)ならば、敵の攻撃を受けてゐない時に、軍隊の最も良い位置は、糧食の最も豊富な所であるといふことを想像するには、左程多くの知識を要しないからである。そして、誰れでも、たとへ十二三才の愚かな小兒でも、一八一二年に於て、モスクワ退却後の露軍の最も都合の良い位置は、カルウガ街道であるといふことを判斷するのは容易である。故に、第一、歴史家が如何なる理論を以て、この運動に、或る深い智慧を發見したかを了解することが出來ない。

第二に、歴史家が、何が故にロシアの救脫と、フランス軍の滅亡を、この運動に歸するかは、更らに不可解である。何故(なぜ)ならば、若し、この迂廻運動がそれに先立つか、或はそれに伴ふか、或はそれ

に續く他の事情の下に行はれたとすると、それは、ロシアが滅亡しフランス軍が救はれたかも知れないからである。從て露軍の地位が、この運動が行はれた時から良好に成つて來たとするも、その良好の原因が、この運動であると云ふことにはならない。

若し、萬一他の事情が、落ち合はさなかつたとしたら、この迂廻運動は、何等の利益が無かつたかも知れぬばかりではなく、寧ろ露軍を破滅に導いたかも知れないのである。

若し、モスクワが燒けなかつたとしたならば、何うであつたらう？　若し、ミユラーが露軍を見失はなかつたならば、何うであらう？　若し、ナポーレオンが活動を止めてゐなかつたならば、何うであらう？　若し、ベニングゼンやバアクレイが勸めたやうに、露軍が、クラスナアヤ・パアラ附近で、戰爭をしたら、何うであらう？　若し露軍がパアラに出掛けた時に、佛軍が逆襲したとしたら、何うであつたらう？　若し、ナポーレオンが、タルチイノに着いた時に、彼がスモオレンスクを攻撃した時の精力の十分の一を以て、露軍を攻撃したら、何うであらう？　若し、佛軍が、ペテルブルグまで進んだら、何うであらう？　凡てのかゝる假定說を置いて見る場合、かの迂廻運動の救濟力なるものは寧ろ破滅力と變化するのであろう。

第三に、就中最も了解に苦むのは、歷史の研究者が、この迂廻運動を、或る一人に歸する能はざること、何人もそれを豫知しなかつたこと、又この運動は、フイリへの退却と同じく、事實何人もそれ

を全體のものとして考へてゐたのではなくして、一步は一步と相次ぎ、事件は事件と重なり、瞬間に次ぐに瞬間を以てして數限り無き、さま〴〵の事情から、次第に生じたものであること、そして、既にそれが成遂げられた事實となり、過去のものとなつた今日に於てのみ、それを全體のものとして考へ得ることなど、凡そ、これ等の事を承認することを故意に拒むやうに見えることである。

フイリに開かれた參謀會議に於て、ロシア軍の司令部では、直路の退却即ちニジニイ・ノヴエゴロド街道の最も解り易い退却が最も有力な說であつた。

それは、この會議に於て、大多數の投票が、この行路に對して投ぜられたのを見ても明かである、そして、この會議が果てゝ後、總司令官と、兵站部長ランスコイとの間の會話は、もつと明白にそれを證明してゐる。ランスコイは總司令官に、軍の糧食は、主としてオカ河に沿へるチューラ、及びカサン兩縣に貯へられてゐること、若し、軍がニヂニイ街道を退却するならば、初冬には既に、糧食運搬のために渡河が不可能になる大河オカ河のために、軍はその糧食を絕たるゝであらうといふことを告げた。

これが、最初最も自然であると考へられた進路、即ちニヂニイ街道の退却を棄てる必要が出來た、第一の證據である。

軍は、その糧食に接近するやうに、リヤザン街道を取つて、更らに南に行進した。その後、露軍を見失

つた佛軍の活動停止と、チューラ兵器廠の防衛に對する憂慮とのために、就中その糧食に近づく利益のために、露軍はチューラ街道に沿ふて更らに南方に向つたのである。

それより露軍は、チューラ街道に沿ふて、强行行軍によつて、パアラを越へたが、露軍の諸將は、ボドルスクに停まらうと考へてゐた、タルチイノに陣する考は無かつたのだ。が、先に露軍を見失つた佛軍が再び現はれたことや、會戰の計畫や、就中カルウガに於ける豊富なる糧食等の如き數限りなき、さま〴〵の事情により、露軍は、更らに南下して、チューラ街道から、カルウガ街道に至り、糧食聯絡線の中央に位置するタルチイノに移動するに至つた。

モスクワを露軍が棄てたのは何日であつたかといふ疑問に答へることが不可能であると同樣に、何時、誰れによつて露軍がタルチイノに行進することを決せられたかを、明白に言ふことも亦不可能である。

人々が、この行路は彼等の望んでゐたものであり、永く正しいものとして豫知してゐたものであると、主張し始めたのは、唯だ露軍が、數限りなき小さな力によつてタルチイノに連れて來られてからのことであつた。

二

有名なる迂回運動は、たゞ單に、かういふことに過ぎない。佛軍が追擊してゐた時には、眞直に退却した露軍は、佛軍の追擊が止むや否や、その方向を轉じた、そして、追擊されてゐないのを知つたので、露軍は、豊富なる、糧食によつて引きつけられた方面に、自然に動いたのである。

若し、露軍の頭に天才ある諸將軍が居らず、殆んど露軍が指揮者をも有せずして單獨に行動したとしても、かゝる露軍は、必要品の整へる、糧食の最も豊富なる地方を通つて、半圓を描きながら、再びモスクワに歸るより他仕方がなかつたであらう。

ニヂニイ・ノヴゴロドから、リヤザン、チューラ、カルウガ街道を經た、この迂回行軍は、この行路が露軍の掠奪隊が取つた行路であり、又クツウゾフが、その軍隊を導くやうに、ペテルブルグから命令されたのもこの行路であるといふのを觀ても如何にその行路が自然なものであつたかが分るのである。クツウゾフは、タルチイノに於て、軍をリヤザン街道に導いたといふ故を以て、皇帝から殆んど譴責された、そして、カルウガに面する地に陣營するやうに命ぜられたが、皇帝の手紙を受取つた時には、彼は既にその地に陣營してゐたのであつた。

露軍といふ一個の球は、全戰役の間に受けた、殊にボロヂイノの戰に於て受けた打擊によつて、その方向へ轉々と廻轉してゐた。が、その打擊の力が止んで、新たな打擊が加へられなかつたので、その球にとつて自然な位置を取るに至つたのである。

クツウゾフの功蹟は世の所謂戰術の天才といふ種類のものではない、たゞ、彼一人がその行れつゝある事件の價値を了解したといふ點にあるのである。當時、彼のみが、佛軍の活動停止の意味を了解してゐたのである、で彼のみが、ボロヂイノの戰は勝利であると主張し通したのである。彼のみが——總司令官としての彼の位置から見て、戰ふに熱心な第一人者と思はれる筈の彼只一人が、露軍をして無益に戰闘を避けしむることに、その全力を擧げたのであつた。

ボロヂイノに於て傷づいた野獸は、獵師が彼を遺して、逃げ去つたその場所に、横たはつてゐた、が獵師は、その野獸が、生きてゐるのか、手強いのか、或は、そんな風に見せかけてゐるのかを知らなかつた。俄に、その野獸の呻聲が聞えた、この傷づいた野獸なる佛軍の、その絶望的な狀態を訴へた呻聲は、媾和の要求を齎らして、クツウゾフの陣營に送られた使者ローリストンとなつて現れた。

ナポーレオンは、たとへ正しきにもせよ、正しからざるにもせよ、自分の思ひついたことは正しい、といふその信念を以て、彼の思ひついた最初の言葉、全く無意味の言葉をクツウゾフに向つて書いた。『ムシュ・ル・プランス・クツウゾフ。』と彼は書いた。『予は、種々の重要なる問題につき、足下と會談せしむるために、予の副官の一人を派遣する。殿下が、彼の申述ぶること、殊に、彼が、予が永らく足下に對して抱き居りし尊敬と特別の敬意を表白する時に、彼の申述ぶることを信ぜられんことを希望する。この手紙は、何等他の目的を有せず、予は、神がその神聖にして力強き保護を足下に

加へ給はむことを祈る。

一八一二年十月三十日

モスクワに於て

ナポーレオン（署名）

『若し、予が或る種の約定を爲す第一の首唱者と認められるゝならば、予は子孫のために咀はるゝであらう。これは吾が國民の精神である。』とクツウゾフは答へた、そして、その全力を盡して、軍の前進を保留したのであつた。

佛軍が、モスクワを掠奪し、露軍が、靜かにタルチイノに陣營した一ケ月間に、兩軍の實力（精神と兵數と）に變化が起つた、その結果は露軍の方に有利であつた。

佛軍の位置と、その兵數は、露軍には知られてはゐなかつたに關らず、その實力の變化が起るや否や、攻撃に轉ぜしめねば止まない無數の兆候が現れて來た。

その種々の兆候といふのは、ローリストンの使命、タルチイノに於ける糧食の豐富、諸方面から斷えず來る佛軍の不活動と無秩序の報告、露軍の諸聯隊が補充兵を以て充されたこと、天候の良好なること、ロシア兵が取つた永い間の休息、それに、永い間の休息の結果、自然、軍隊に生ずる準備した仕事を一時も早く完成せんとする焦燥心、永い間見なかつた佛軍が何んなになつたかといふ好奇心、露軍の前哨が、タルチイノに野營してゐた佛軍に突撃した勇敢な行動、農夫隊や義勇兵隊が佛軍を攻

擊して、容易く勝利を得たといふ報告、かゝる報告によつて喚起された嫉妬心、フランス人がモスクワにゐる間は、何人もその心に抱いてゐる復讐心等であつた、就中各兵卒の心に生じた、今や兩軍の實力が變化して、露軍の方が優勢であるといふ、朦朧した感じがその主なるものであつた。

兩軍の實力は、實際に變化したので、前進は避け難いものとなつた。そして、時計の針が一回轉すると、鈴が鳴り出すやうに、そのやうに正確にこの實力の實際の變化に應じて、上流社會の間にも馬車の活躍と騷音と報時の音が反響するやうになつた。

三

ロシア軍は、クツウゾフ及びその幕僚と、ペテルブルグにある皇帝とによつて指揮されてゐた。モスクワ棄却の報が、ペテルブルグに達する以前に、全軍の詳細な方策が、ペテルブルグに於て起草せられ、夫れに從つて行動するやうにとクツウゾフに送られた。夫れはモスクワが、まだ露軍の手にあるものと假定して立てられた方策であるのに、參謀部はそれに贊成し、實行さるべき方策として、それを承認した。クツウゾフは、單に、遠方からの指揮は、常に實行が困難であると書き送つた。それで、何か困難が生ずる場合には、それを解決するために、新らしい訓令が送られ、更らにクツウゾフの行

動を監視し、その行動を報告すべき任務を帶びた人々が新らしく任命された。

かゝる新任の當局者を別にしても、露軍に於ける參謀部の諸將には、當時非常に變化があつた。戰死したバグラチオンと、憤怒の餘り、辭職したバアクレイの地位が、充されねばならなかつた。

Bの地位にAを置くがいゝか、Dの地位にBを置くがいゝか、それとも、その反對に、Aの地位にDを置くがいゝか、などゝいふ疑問が、恰も、それが、AやBやDの滿足といふもの以外にこの事が影響でもするやうに、大眞面目で考へられるのであつた。

クツウゾフが、その參謀長ベニグゼンと衝突でもしてゐる場合に、露軍の司令部には、皇帝の新任ある勸告者がゐたり、又かゝる新らしい任命があつたりする爲めに、司令部に於ける諸黨派の爭鬪が益々平素より複雜になつて行つた。例へば出來得る限りの計畫と團結とによつて、AはBの地位を轉覆せんとし、DはCの地位を轉覆せんとする有樣であつた。かゝるさま〴〵の爭鬪の中にあつて、その陰謀の目的物は主として、かゝる人々が支配しつゝあると考へてゐるその軍事策であつた、が、その軍事策は彼等に關係せられずに、その進むべき所に進んで行つた。卽ちいつも彼等の計畫と一致するといふことがなく、種々なる事情そのものから流出するのであつた。お互ひに妨害したり、愚視したりしてゐる、かゝるさま〴〵の計畫は、高級者の間では、たゞ成遂げねばならぬ事柄に對する忠實の反映であると認められてゐた。

クツウゾフが、タルチイノの戰役が濟んでから受取つた、十月二日附の手紙に皇帝は次ぎのやうに書いた。

公爵ミハイル・イラリオーノヰツチ！

九月二日から、モスクワは敵の手に委ねられてゐた。卿の最後の報告の日附は、二十日であつた、而して、爾來敵に對して古い都を救はんとする、何等の計畫も企てられてゐない、卿の最後の報告によれば、卿までが遙かに退却してゐる。今や、セルプホフは敵の枝隊によつて占領せられ、名聲高き兵器廠を有し、吾軍にとつて重要なるチューラは、危機に頻してゐる。

ウインツエンケローデ將軍よりの報告によつて、予は一萬の敵軍が、ペテルブルグ街道を行進しつつあることを知る。次ぎに、數千の敵軍がドミトロフに迫つてゐる。敵の第三軍は、ウラヂミイル街道を前進してゐる。餘程の軍勢より成る、敵の第四軍は、ルウザとモザイスクとの中間に駐屯してゐる。ナポーレオン自身は、去る二十五日には、モスクワにゐた。

敵軍はかく數個の枝隊に分裂し、ナポーレオン自身は、その親兵と共に、モスクワにゐるといふ事實を前にして卿が攻勢を執らんとするには、卿の相對する敵の軍勢が餘りに強いと言ひ得るであらうか？　卿は、恐らく枝隊によつて逐はれつゝあると認められる、更に極言せば卿の指揮する軍隊よりも遙かに劣弱なる一軍團に逐はれつゝあることは、確かである。

故に、かゝる情勢を利用するならば、卿は卿の軍隊よりも劣弱なる敵軍を攻撃して、有利な地位に立ちて、敵を壞滅せしめ得るであらう、少くとも敵をして退却せしめ、現今敵の占領せる多大の國土を吾軍の手に歸せしめ、更らに、チューラ及び內地の他の諸市の危險を防ぐことが出來るやうに思はれる。

精力と決斷を以て動く、卿の指揮の下にある軍隊を以て、卿は、この災厄を除く多くの手段を手に握つてゐるのであるから、若し、敵軍が、ペテルブルグに多大の軍勢を送り、多數の軍隊を得る事の不可能なるこの首府を威嚇するならば、そは卿の責任であるであらう。

卿は、猶モスクワの損失に依つて侮辱されたる國家に答へねばならぬことを記憶せよ。

卿は、予が卿に報ゆるに吝かならざりしことを知つてゐる。予の善意は、今も變りはない、が、ロシアと予とは卿の智識と、卿の軍事的才能と、卿の指揮の下にある軍隊の勇氣とが、吾々に保證する、凡ゆる精力と、決斷と、成功とを卿に對して期待する權利を有する。

然るに、兩軍の比較實力の變化が、ペテルブルグに於ける輿論に、反映した事を證してゐるこの手紙が、まだ途中にあつた時に、クツウゾフは、軍隊を引留めることが出來なかつた、そして戰鬪が既に始められてゐたのである。

十月二日に、偵察に出てゐたコザツク兵シヤボワアロフは、一匹の兎を射殺して、二匹目を傷つけ

た。シャボワアロフは傷つけた獲物の跡を追ふて遠く森に分け入り、何等の歩哨を置かずに、野營してゐた、ミュラー軍の、左翼側面に出會したこのコザック兵は、笑つてその仲間に、彼が危ふく佛軍に捕はれんとしたことを語つた。

この話を聞いた旗手が、その上官にこれを傳へた。コザック兵は召喚されて、質問された。コザック兵の士官等はこの機會を利用して、佛軍から馬を奪はんとした、が、軍の幹部の或る者と親しかつた、彼等のうちの一人は、參謀部の一將官にこの出來事を語つた。參謀部に於ける當時の狀態は、極點まで緊張してゐた、その數日前、イエルモロフは、ベニグゼンを訪ねて、總司令官をして攻擊をなさしむるやうに、その全勢力を用ゐんことを切願した。

『若し、予が足下と會しなかつたならば、予は足下がかゝる願ひを持つて居らるゝとは思はなかつたであらう、予は、總司令官閣下が確に反對に採らるゝやうに此の一事を勸告すれば滿足である。』と、ベニグゼンは答へた。

コザック兵によつて齎らされ、偵察隊によつて確められた報告は、時が熟してゐることを明確に證明してゐる。

緊張せる絲は切れ、時計の齒車は廻轉し、鈴は鳴り始めた。假想してゐた自己の凡ゆる權威、その智力、その經驗、その人を知る明などに拘はらずクツウゾフは、皇帝に、この問題に關する私の報告を送りつゝあつたベニグゼンからの手紙や、諸將が同樣に表白した希望や、彼等によつて、皇帝の希望であると假定せられた希望や、コザック兵の持ち歸へれる報告などを考へて、最早この避け難き運動を留めることが出來なかつた、そして、彼が不利益で、且つ有害であると見做してゐたことに對して命令を與へた——。事實に於ては、彼は既に成し終へてゐる事實に、許諾を與へたのである。

四

ベニグゼンの提出した手紙や、コザック兵が齎らした、敵の左翼が防禦を欠いてゐるといふ報告は、たゞ前進命令を與ふるの避け難きを示す最後の徵候であつた、そして、十月五日には、攻擊前進をする手筈となつた。四日の朝、クツウゾフは兵力の配置書に署名した。トオルはそれをイエルモロフに讀んで聽かせて、尙その前途の兵力配置は彼に屬する事を告げた。

『宜しい、宜しい。私は今一寸その暇が無いから。』とイエルモロフは言つて、急いで小舍から出て行つた。トオルが引いた軍隊の配置書は、非常に立派なものであつた。配置書は、ドイツ語ではなかつたが、アウステルリツツに於けると同じ樣に、書き下された。

『第一縱隊は、何處其處に行進せよ、第二縱隊は、この場所を占領せよ、』などゝ書かれた。

紙上では、凡てこれ等の縦隊は、一定の時に、一定の場所に到着して、敵を全滅する事になつてゐた。一體凡ゆる策戰計畫書なるものに於て、萬事が立派に策戰せられてはゐるが、その策戰書に依つてたゞの一縦隊も、實際に一定の時間に一定の場所に到着したものはない。策戰書の謄寫が、充分な部數だけ出來上つた時に、一士官が呼び出されて、イエルモロフが、この策戰書に從つて活動するやうにイエルモロフにその謄寫を渡すために遣られた。クツウゾフに近侍してゐる近衛騎兵の一青年士官は、彼が任命せられた使命の重要なことを悦んで、イエルモロフの宿營に出掛けた。

『お留守でございます。』とイエルモロフの從僕が言つた。近衛騎兵の士官は、イエルモロフがよく行つてゐる事のある將官の宿營に出掛けて行つた。

『こゝにはお見えになりません。將官もお在でになりません。』

士官は再び馬に乘つて、今一人の將官の宿營へ駈けて行つた。

『否、お在でではございません。』

『事が遲れて、面倒なことにならなければ宜いが！　實に困る！』と、士官は思つた。

彼は陣營中を乘り歩いた。或る者は、イエルモロフが誰か他の將官と一緒に馬に乘つて行くのを見たと言つた、又或る者は、今頃は再確かに宿營に歸つてゐるに違ひないと言つた。晝飯も喰べずに晩の六時まで、士官は彼を探し廻つた。イエルモロフは、何處にもゐなかつた、誰も彼の居場所を知

らなかつた。士官は戰友のところで大急ぎで食事を濟して、ミロラドキツチに會ふために前衛へ駈け戻つた。ミロラドキツチもゐなかつた。が、そこで士官は、ミロラドキツチは將官キキンの宿營の舞踏會に行つてゐる、そして、イエルモロフもきつとそこにゐるだらうといふことを聞いた。

『併しそれは何處にあるのですか？』

『それは、彼のエツチキイノの所です、』と、コザツクの一士官が、遙か離れた田舍家を指して言つた。

『あゝ、どうして、彼處へ、歩哨線の彼方でせう！』

『吾々の連中が二個聯隊、歩哨線に遣られたんです、で、今あすこで酒宴の最中ですよ、旨くやつてゐまさあね！　樂隊が二つと、合唱隊が三つとで、』

士官は、歩哨線を越えて、エツチキイノへ乘つて行つた、まだ遠く離れてゐるのに、合唱で吟はれてゐる、兵士の舞踏歌の樂しげな聲を聞いた。

『牧場では……牧場では、』といふ歌が時々騒々しい人聲でうち消されながら、口笛と絃樂器の響に混り合つて聞えた。この聲を聞くと、士官の心も浮き立つたが、それと同時に、自分の命ぜられた使命をこんなに遲くらしたので、自分の負はねばならぬ責任に對して、恐れを感じた、もう彼是九時頃であつた。彼は馬から降りて、佛露兩軍の歩哨の間に挾まつて損害を受けずにゐる大きな邸宅の入口に近づいた。從僕等が食堂や次ぎの間で、酒や食物をもつて騒ぎまはつてゐた。合唱隊は窓の下に立つ

てゐた。士官は兎ある戸口に導かれて行くと、そこで彼は突然軍の最も重立つた將官連を見た、その
うちにはイエルモロフの大きな、目立つた體軀も見えた。將官連はみんな軍服の釦を外づして、顏を
赤くし、活氣づいて、聲高に笑ひながら、半圓形を描いて立つてゐた。部屋の中央には、綺麗な、丈
の低い將官が赤い顏をして、巧みに、勇ましく、「トリイパカ」を踊つてゐた。
『は、は、は！　萬歲、ニコライ・イワアノヰツチ！　は、は！……』
士官は、かゝる場合に、重要な用件をもつて闖入するのは、二重に罪であるやうな氣がしたので、
待たうと思つた、が、一人の將官が、彼を見つけ、彼の用向を聞いて、それをイエルモロフに語つ
た。イエルモロフは澁面作つて士官の方へ出て來たが、彼の言ふことを聽くと、一語も言はずに書類
を受取つた。
『彼が宿營にゐなかつたのを偶然だと、君は思ふかね？』と、參謀部にゐる士官の友人が、その晩、
イエルモロフの事を云ひ出してから言つた。『あれは、詭計なのさ、あれは、みんな手管なのだ。コノ
ウニツツインを擔がうといふのさ。見て居給へ、明日はきつと何か變事が持ち上るぜ。』

五

老耄せるクツウゾフは、翌日早く起して呉れるやうに命令して置いた、そして朝早くから、祈禱を
濟し、軍服を着ると、自分が贊成しなかつた戰鬪を指揮しなければならぬのを不愉快に感じながら、
馬車に乘つた、タルチイノの背後五露里なる、レタシエウカから、攻擊隊の集合地へ出かけて行つた、
クツウゾフは乘行きながらも、居睡つたり、目を醒したり、若しや右の方の音は射擊ではなかつたら
か、戰鬪が始められたのではなからうかなどゝ聽き耳を立てながら馬車を進めて行つた。が未だ、萬
象は寂としてゐた。今やじめ〳〵した、欝陶しい、秋の日が明けるところであつた。タルチイノに近
づいた時に、クツウゾフは、自分の馬車の通る道を横切つて馬を水槽に導いてゐる數名の騎兵を認め
た。クツウゾフは彼等を注視て、馬車を停めた、そして彼等が何聯隊に屬してゐるかを尋いた。その
騎兵等は遙か前方に伏兵をしてゐるべき筈の縱隊に屬してゐるものであつた。
『多分、間違ひだらう。』と、老總司令官は思つた。で、更に馬車を驅り進めて行くと、クツウゾフは
步兵聯隊が叉銃して、兵卒が下股引のまゝ、粥を煮たり薪を運んだりしてゐるのを見た。彼は將校を
呼びに遣つた。將校は前進命令などは受けてないと云ふ事を謹んで申し述べた。
『命令が無いと……』と、クツウゾフは言ひかけたが、直ちに思ひ止まつて、主任將校を喚びに遣
つた。彼は馬車から降り、頭を垂れて、重苦しく呼吸をしながら、默つて彼方此方步きながら待つて
ゐた。呼びに遣つた參謀本部附將校エイツチエンが到着した時、クツウゾフは顏色を眞靑にして憤怒

つた。それはこの將校に失錯の責任があるからではなくて、この將校がクツウゾフの憤怒を漏らす相手となるに足る重要な人物であつたからである。そして蹣跚き喘ぎながら老人は、怒りに任せて地上に打倒れる程の狂亂の狀態になつて、手を握つたり、下司言葉で罵り喚いたりしながら、エイツチエンに飛びかゝつた。偶然、こゝに來合せた、今一人の將校、ブローヂン大尉は何の咎もないに關らず同じ破目に陷つた。

『こりや、なんだ、惡黨奴は、次ぎには何を仕出來かすか分つたもんぢやない？　射殺してしまへ！馬鹿奴が！』と、拳骨を振り、蹣跚きながら、皺涸れ聲で喚き叫んだ。彼は實際身體の苦痛を感じてゐた。ロシア中で何人も曾て彼の如き權力を持つた者がないと、萬人によつて信じられてゐる此の總司令官殿下が、此の有樣になつた——これが全軍の笑柄となつたのである。『あの樣に此の日の爲に祈念、願慮したのも、終夜眠らずに畫策し盡したことも皆無駄になつたのか！』と、彼は自らかう思つた。『俺がまだ一少年士官であつた時分には、誰れもこんなに俺を愚弄する者は無かつたが……それに今はどうだ！』彼は、體刑を受けてゐる時のやうな、身體の苦痛を感じた、そして憤怒と苦悶の叫び聲で、その苦痛を表白さないではゐられなかつた。が、やがて彼の力は衰へた、そして、彼は四邊を見まはして、自分が無理なことを澤山言つたやうな氣になりながら、馬車に乘つて默つて引返して行つた。一度發した彼の怒は、もう二度と起つて來なかつた、で、クツウゾフは、力なく眼を瞬きながら、人々の說明や自己辯解を聞いたり、ベニグソンや、コノウニツツインや、トオル（イエルモロフは、翌日まで姿を見せなかつた）等の今日やらなかつた戰爭は翌日必ずやると云ふ熱心なる建議を聞いたりした。で、クツウゾフは、再び、承認せねばならなかつた。

六

翌日の晩方、軍隊は所定の場所に集合し、夜中に前進した。それは暗紫色の雲が空に漲つてゐる秋の夜であつたが、雨は落ちてゐなかつた。地面は濕つてゐたが、泥濘つてはゐなかつた、で、軍は靜かに音もなく行進した。たゞ時々砲兵隊が、殆んど聞えぬ位ゐのガタン〳〵いふ微かな音を立てるばかりであつた。兵卒は高い聲で話をする事や、喫煙や、火を磨ることを禁ぜられ、馬は又嘶く事を阻められてゐた。この企圖の秘密なことが、一層その魅力を偉大にした。兵卒どもは勇んで行つた。或る數個の縱隊は、その定められた場所に到着したと思つて、停止して、又銃の列を作り、冷めたい地上へ身體を横へた。が或る縱隊（大部分の）は終夜行軍して、正しくその目的の場所ではない、方面に入込むだ。

コザツク兵を引率したオルローフ・デエニイソフ伯爵が（全體の中で一ばん重要でない枝隊）一定の

時間に、一定の場所に到着した唯一人であつた。この枝隊は兎ある森の一番端れの、ストロミロウオ村から、ドミトロウスコエ村に通ずる小徑に停まつた。

未明前に、睡眠つてゐたオルローフ伯爵は眠から起された。佛軍陣營からの脫走者が、彼の許に連れて來られた。それはポニヤトウスキイ兵團の、ポーランド人の下士官であつた。この下士官は、ポーランド語で、自分が脫走したのは勤務中侮辱されたからだ、自分はもつとずつと以前に士官になる筈だつたのだ、自分は誰よりも勇敢だつたのだ、だからフランス人を見棄てゝ、彼奴等を罰してやらうと思ふのだなどゝ語つた。彼はミュラーがそこから、一露里の所に野營してゐるから、若し、百人の護衛兵を附けてくれるならば、自分が行つて生擒にして來ると言つた。オルローフ・デエニソフ伯爵は、その幕僚と會議した。此の申出は辭るには餘りに惜しかつた。みなの者が、行かうと強請んだ、みなの者が、この企圖を遣つて見やうと勸めた。さま〴〵の論爭と、協議との後で、グラコフ少將が、コザツク兵二個聯隊を引率して、脫走者のポーランド人と一緒に行くことに一決した。

『こら、記憶えて居れ、』と、脫走者のポーランド人を退座らせる時に、オルローフ・デエニイソフ伯爵は言つた、『若し、貴樣が嘘言を吐いてゐたのなら、犬のやうに射殺すぞ、若し眞實だつたら、百クラウンだ。』

脫走者は、この言葉には答へずに、決斷の色を現はして、馬に乘り、急に集合させられたグラコフ

の兵隊と一緒に出かけて行つた。彼等は森の中に消えた。未明の寒さに慄へながら、自分が責任を背負つて行つた企圖に昂奮してゐるオルローフ伯爵は、グラコフを送り出して置いて、森から出て來た。そして未明近き朦朧した光と、燻ぶる篝火との中に微かに見ゆる敵陣を偵察し始めた。オルローフ・デエニソフ伯爵の右手に當る展けた矮林に、味方の各隊が見える筈であつた。オルローフ・デエニソフ伯爵はその方向を見た、が、どんな遠方にゐても見える筈なのに、それ等の隊は眼に入らなかつた。オルローフ・デエニソフ伯爵は、敵陣では既に活動を始めてゐるやうに見えた、それに非常に遠視の利く副官の言葉は一層その考を確かめた。

『あゝ、無論、もう遲い。』と、オルローフ伯爵は、敵陣を凝視めながら言つた。伯爵は、吾々にもよくあるやうに、今まで信用してゐた人が、もう眼の前にゐなくなると急に疑ひたくなるやうに、彼は急に、かの脫走下士といふものが自分達を一ぱい欺した嘘言者で、それが爲に二個聯隊といふものが行衞不明となつて、全軍の進擊行動に支障を來たすに至ると云ふ事が全く明白になつたやうに思つた。一體、こんな大軍の中から總司令官を生擒にするといふことが出來得る事であらうか！

『正しく、彼奴は嘘を吐き居つたのだ、あの惡黨奴！』と、伯爵は云つた。

『呼び戻すことは出來ませう。』と、敵陣を見て、伯爵と同じ不安を感じてゐた副官の一人が言つた。

『おゝ、確かに……君はどう思ふ？　このまゝに打棄つておかうか、それとも呼戻さうか？』

『歸るやうに御命令でございますか?』

『呼び戻せ、さうだ、呼び戻せ!』と、オルローフ伯爵は、時計を見ながら、矢庭に決心して言つた、『もう、遲いだらうすつかり明るいから。』

で、副官は、グラコフの後を追つて森の中へ馬を駈けらした。グラコフが歸つて來た時に、この企圖の放棄やら、まだ全く影も見せない歩兵縱隊を空しく待つてゐる事やら、敵が非常に近かく見える事などのために、(彼の枝隊に屬する者はみんな、同じやうに感じてゐた)昂奮せるオルローフ・ヂエニソフ伯爵は攻擊開始に決心した。

彼は小聲で、『乘馬!』と、命令を與へた。

兵卒は、各自の位置に就いて、十字を切つた……『進め!』

『ウラアー!』と、いふ叫聲が、森の中に鳴り響いた。そして、コザツク兵隊は、槍を下げて、百名づゝ前後して、恰も嚢の中から射出されるやうに、小河を越え、敵陣に向つて、壯快に、飛び出した。

コザツク兵隊を見た最初のフランス軍の絶望的な、驚愕の一聲が聞えた、と、陣中の諸兵は、着物も着ず、睡ぼけ眼で大砲を捨て、銃を捨て、馬を捨てゝ逃げ出した。

若しコザツク兵が、フランス軍がその周圍や背後に遺棄して行つた物に目をくれずに、彼等を追擊したならば、ミユラーを初め其處にゐた全部を捕虜にすることが出來たのだ。指揮官たちはさうさせ

ようと試みた。併し戰利品や捕虜を獲た時に、コザツク兵を動かすのは不可能であつた。誰も命令の語に注意するものはなかつた。彼等は、千五百の捕虜と、砲三十八門と、旗などを獲た、尙コザツク兵にとつては、最も重要なる、馬匹、鞍、毛布、その他種々の物を獲た。彼等は、かゝる戰利品を管理しやうとしたり、捕虜や大砲を得やうとしたり、戰利品を分配しやうとしたりして、叫聲を揚げ、中には喧嘩をするものさへあつた、で、かゝる一切のことに、コザツク兵の注意が吸ひ取られた。この上追擊されないと感づいたフランス軍は、その勢を盛返へして、隊伍を整へて、射擊を始めた。オルローフ・ヂエニソフは全縱隊を待ち合せて、それ以上の襲擊をやらなかつた。

一方、配置書——『第一縱隊は行進せよ。』云々といふ——に從つて、トオルの配下にあつて、ベニグゼンの指揮せる遲延の歩兵數個縱隊は、正しく出發した、が、例によつて、彼等は思ひも附かない、指定地以外の或る地點に到着した。愉快に出發した兵卒どもは、例の如くに停まり始めた。ぶつ〳〵不平を言ふ聲と混亂の氣配があつた、そして、彼等は、或る地點まで、後戻りした。右往左往と駈け廻つてゐる副官や、將官たちは、腹立たしげに怒鳴つたり喧嘩をしたり、全く間違つた地點だ、もう時が遲れてゐるなどゝ話し合つたり、誰かを罵つたりなどした、で、終ひには、絶望して、みんなは手を振り舞はして、たゞ何處へなりとも行き着かうとした。『何處かへ、まあ着くだらう!』と、こんな具合で、實際何處かに到着したことはしたが、それは豫定の所では勿論ない。併し中には指定の場

所に到着したものもあつたが、時が既に遅く、彼等の遣つて來たことが何の役にも立たず、たゞ空しく鐵砲彈丸の的になつたに過ぎないといふ結果になつた。この戰鬪に於て、アウステルリツツ役に於けるワイエローテルの役目を演じたトオルは、熱心に、一地點から一地點へと駈け廻つたが、到る處で、萬事の齟齬せる事を發見した。たとへば、ずツと早く來て、オルローフ・デエニソフを援助す可き筈のバゴブウ軍團が、すつかり明るくなつてから、森の中にゐるのを見出した如きそれである。この失敗に失望し、昂奮したるトオルは、この失敗の責任は誰に歸さねばならぬかと考へながらこの軍團の指揮將官の處に駈けつけた、そして手嚴しく彼を叱責し、銃殺に處せらるゝ價値があると言ひ放つた。性質の沈着な、岩疊な老將官のバゴブウは、遲着と困惑と矛盾した命令とで、すつかり氣を腐らしてしまつて、平常の態度を全く失つて、殆んど狂亂のやうになつた、そしてトオルに亂暴な事を言つて、人々を驚かした。

『俺は何人からも俺の任務に干渉されることを欲しない、俺は俺の部下と一緒に他人に後れをとるやうな死方はしない心積りだ。俺は、』さう言つて、彼は一師團の兵を率ゐて前進した。昂奮の餘り佛軍砲火下の戰場に現れた、勇敢なるバゴブウは今僅かに一師團の兵をもつて戰はうとするその前進が、役に立つかどうかを考へもしないで、部下を敵の砲火の中にまつしぐらに前進させた。危險と榴彈と銃彈とは、憤怒の餘り丁度彼が求めてゐたものであつた。最初の銃彈の一つが彼を殺した、そして、

續く銃彈は彼の多くの部下を殺した。そして彼の師團は暫らくの間、空しく砲火の下に立つてゐた。

七

斯くて、他の縱隊の一隊が佛軍を攻擊すべき番となつた。で、此の縱隊はクツウゾフが指揮してゐた。彼は自分の意志に反して初められたこの戰は、混亂のほか何ものをも齎し得ないと云ふ事をよく知つてゐたので、力の能ふ限り、その軍勢を引き留めてゐた。彼は動かなかつた。クツウゾフは攻擊に關する勸告に、懶げな答をしながら、灰色の馬に跨つて無言のまゝ歩きまはつてゐた。

『君たちはみんな攻擊の事ばかり言ふが、この複雜つた操縱をどうすればいゝか我々が途方に暮れてゐる事が解らないのか。』と、前進の許可を得んと希つてゐるミロラドヰツチに向つて言つた。

『吾々は今朝ミユラーを生擒にすることが出來なかつたし、又時間に間に合ふやうに吾々の地點に到達することも出來なかつた、だから、今となつてはもう何うしやうも無い。』他の者に向つてはかうも言つた。

コザツク兵の報告によれば、以前何者もゐなかつた筈の佛軍の後陣に、今やポーランド兵二個大隊がゐるといふ報告が齎らされた時に、クツウゾフは自分の後にゐた、前日からちつとも口を利かなかつ

たイエルモロフを横目で見た。

『みんな前進させて呉れと願つたり、いろ〳〵な計畫を持ち込んだりしてゐるが、愈々君たちが働く曉になると、何の用意も出來てゐない、然るに敵は前から警戒してゐるから、直ぐ彼等の手段を取るんだ。』

この言葉を聞いて、イエルモロフは目を瞬めて、微かに微笑んだ。彼は自分に向つた暴風がもう過ぎ去つたこと、クツウゾフがこの暗示以上にはもう何事も言ふまいと云ふことを知つた。

『あんなことを言つて、僕に揶揄つてゐるんだよ。』と、イエルモロフは傍にゐたラーエウスキイを、膝で密つと突衝いて言つた。

直ぐその後で、イエルモロフは、クツウゾフの傍へ進み寄つて、鄭重に言つた。

『時はまだ過去つては居りません、殿下、敵はまだ退却しては居りません。若し前進を御命令になつては如何でございますか？　さうでないと、近衛兵は、硝煙さへ見ないことになりますから。』

クツウゾフは何も云はなかつたが、ミュラーの軍が退却しつゝあると云ふ報告を得ると、前進の命令を下した、けれども彼は百歩毎に、四十五分間も立停まると云つた風に躊躇した。

全戰闘は結局オルローフ・デエニソフのコザツク隊の活動に止まつて、他の軍隊に至つては唯譯もなく二三百の兵を失つたに過ぎなかつた。

この戰闘の結果、クツウゾフは金剛石動章を授けられた、ベニグゼンも亦金剛石動章と一萬留とを與へられた、その他の將官達もその階級に應じて、多くの報償を得た、そして參謀部にはこの戰局後更に變革が行はれた。

『俺達のする事は何時でもこんなものだ、萬事が背逆だ！』露軍の將校や將官はタルチイノ戰役の後でかう云つた、が、それは丁度今日彼等が、吾々ならば全く別な方法で事を處置するだらうに、誰か馬鹿な奴が何から何までこんな風に齟齬させたのだと考へるのと同じ事である。が、こんな事を言ふ連中は、自分たちの云つてゐる事を了解してゐないか、それとも故意に自分を欺いてゐるのか何れかである。一切の戰役は——タルチイノにしろ、ボロヂイノにしろ、アウステルリツツにしろ——凡て、計畫した人々の期待通りに運こんでゐないのだ。これは實際の事である。

自由に行動する無數の力（人間が生きるか死ぬかといふ戰場ほど人間の自由を發揮する場所は無い）は、戰役の方向に、影響を與へる、そして、その方向は、決して豫め知ることが出來ないし、又或る一個の力と、その方向を一つにすることはない。

若し或る物體に、多くの力が同時に別々の方向から働きかける時には、その物體の運動方向は、或る一方面の力と一致することは出來ないで、これ等の力の結合なる、中間の方向を取るのが常則である、機械學に於ては、示力平行四邊形の對角線によつてこれを表はしてゐる。

歴史家、殊にフランスの歴史家の記錄から、若し吾々が彼等の戰爭や戰役は豫め設けられた定まつた計畫に從つてゐるものだと云ふことを發見するならば、吾人のその記錄に對する唯一の斷案はその記錄が眞でないといふ事である。

タルチイノの戰役は明かに、トオルが心に描いた目的を達することに失敗した、彼が軍の配置書に從つて軍を組織的に動かさうとしたこと、オルローフ伯爵がミユラーを捕虜にしやうと企てたこと、又ベニグゼン及びその他の者が全軍を一擊の下に破碎しやうとしたこと、或はコサツク兵が、彼等が事實獲たより以上の戰利品を獲やうとして柄をしやうとした將校達の目的、或はコサツク兵が、彼等が事實獲たより以上の戰利品を獲やうとしたことなど、すべてその目的を達し得たものは一つもなかつた。しかし、若しこの戰役の目的が實際の結果に現れてきたものであるとすれば、要りその目的が當時全ロシア人の一般の希望であつたところのもの（ロシアからフランス人を放逐し、佛軍を全滅せんとすること）であると見做すならば、タルチイノの戰役は、それが正しく順當に運ばれなかつた御蔭であの當時の戰局では必要と見做さるゝことは全く見易き道理であらう。この戰役の出發點なるものが、その實際の結果よりも一層その目的に叶ふたものであると考ふるのは、困難であり、不可能である。多大の混亂と最も無意味な犧牲を出したに關らず極めて最少の努力を以て、全戰役に渡つて最も重要なる結果が得られたのである、かくて退却は攻擊に轉ぜられ、フランス人の弱點は暴露され、ナポーレオン軍敗走の第一步として期待せられたる、その一擊が與へられた。

八

ナポーレオンはモスクワの赫々たる勝利の後、モスクワに入つた、で兎に角フランス軍が戰場を占領したのであつて見れば、勝利は疑ふべくもない。ロシア軍は退却して、首都を放棄した。糧食、武器、彈藥、その他無限の富に滿ちたるモスクワはナポーレオンの手に入つた。フランス軍に比して約半數に當る微弱なるロシア軍は、全一ケ月間一回の攻擊だも試みなかつた。ナポーレオンの地位は最も花々しいものであつた。二倍の力ある軍隊を以て、露の殘軍を追擊して、これを全滅するか、割の良い媾和を申込むか、媾和を拒絕された場合には、スモオレンスクかウイルナまで歸るか、モスクワに止まつて持續戰をなすか、一言にして言へば佛軍は、非常に良い地位にゐたので、この場合、この好地位を支持する爲に必ずしも大天才の要が無いことは誰にも分るのである。これをなすには、たゞ最も簡單で、最も容易な方法を取ればいゝのであつた、卽ち、兵士の掠奪を禁じ、冬服（モスクワには、全佛軍が用ひて有り餘る位ゐの供給があつた）の準備をなし、組織的に糧食を蒐集すればいゝので、此の糧食もフランス

の歴史家の説によれば、六個月間全軍を支ふに足るほど十分モスクワにあつたのである。軍事上の天才中の最大天才なる、ナポーレオンは、歴史家の稱して軍の上に絶對權力を有してゐたに關らずこれ等のことを一つもしなかつた。

彼は實にかういふことを何一つ爲ない許りでなく、その反對に自分の前に樣々ある方法の中から、一ばん馬鹿な、一ばん有害な方法を撰び出すことに力を注いでゐた。ナポーレオンがすれば爲し得たさま〴〵のこと——モスクワに冬籠りするか、ペテルブルグに行くか、ニヂニイ・ノヴゴロドに行くか、後にクツウゾフの取つた道に沿ふて、少し北方又は南方に歸るかさういふ事の中で如何なる方法も、ナポーレオンが實際に取つた方法以上に、彼の軍隊に取つて破滅的なものは（その結果が示してゐるやうに）何人にも想像し得ない。卽ち、彼の執つた方法は十月までモスクワに止まり、軍隊をして市街を掠奪せしめ、次ぎに背後に守備兵を置く可きか否かに就て躊躇した後で、モスクワより前進し、クツウゾフに近づいたが、戰鬪はせずに、右に曲つて、マレイ・ヤロスラーウエツまで行き、再び戰鬪の危險を冒すを拒んで、最後にクツウゾフの取つた道ではなく、荒らされたスモオレンスク街道を經て、モザイスクに退却したのである。ナポーレオンの目的が自分の軍隊を破滅せしむるにあつたと假定し、極めて熟練せる戰術家をして露軍の行動を除外して、ナポーレオンの執つたやうな全佛軍の完全なる破滅を來らしむる適確なるある他の行動を案出せしめて見よ。

天才ナポーレオンの行つたのは此くの如きものであつた。併し彼がさうしたいと思つたから、或は、彼が甚だ愚であつたから、ナポーレオンはその軍隊を滅亡せしめたのだといふのは、恰度彼がそうしたいと思ひ、且つ彼が非常に悧巧で大天才であつたから、モスクワにその軍隊を入れたのだといふのと同樣に正しからぬことである。

二つの場合何れに於ても、一兵卒の個人的活動力に變りのない彼の個人的活動力が、唯單に現象を司どる法則と一致したに過ぎない。

ナポーレオンの能力が、モスクワに入つてから衰へたと歷史家が云ふのは、（結果がナポーレオンの行動を證明しなかつたといふ理由だけで）全く虛僞である。彼は確かに以前の如く、其の後と雖も、かの一八一三年に於けるやうに彼は自分と自分の軍隊とのために最善を爲さうとして、全力と全能力とを用ひた。この時に於けるナポーレオンの活動力は、エヂプトや、イタリイやアウストリアや、プルシヤに於ける時と少しも變らずに驚く可きものであつた。萬世にナポーレオンの偉大を示してゐる、かのエヂプトに於ける彼の凡ゆる大勳功は只單にフランス人に依つてのみ傳へられてゐるから、彼の天才が果して如何ほどまで實際であるか吾々には確に知ることは出來ない。アウストリア及びプルシアに於ける彼の天才も、その他に於ける彼の事蹟の記錄はフランス及びドイツにその根據を引いてゐるから、吾々には正確くそれを判斷することは出來ない。そして戰はずして多くの軍隊が譯も

なく降伏したことや、包圍されずして、多くの要塞が降伏したことは、ドイツ人をして、ドイツに於て戰はれたやうな戰爭の唯一の說明としては、ナポレーオンの天才の仕業に加固附けたに違ひない。けれども、有難いことには、吾々は、吾々の恥を隱くすために、彼の天才を辯護する必要が無い。吾吾には、事實をたゞ有りのまゝに見る權利のために價を拂つた、そして、吾々はこの權利を棄てぬであらう。

モスクワに於ける彼の活動力は、他の土地に於けると同樣に驚嘆すべきものであり、天才に充ちたものであつた。モスクワに入つた時から、モスクワを去る時まで、彼は斷えず命令に繼ぐに命令を以てし、計畫に繼ぐに計畫を以てした。市民のなかつたことも、派遣委員のなかつたことも、モスクワの火災でさへも、彼を威嚇かすに足りなかつた。彼は、彼の軍隊の幸福を忘れなかつた、敵の行動を忘れなかつた、ロシア人民の幸福を忘れなかつた、パリイに於ける政務の處置や、平和條約に關する外交談判を忘れなかつた。

九

軍事上の方面に於ては、モスクワに入るや否や、ナポーレオンは、露軍の行動を監視す可き嚴命を

將官セバスチヤアニイに下し、諸衛道枝隊を派遣し、ミユラーにクツウゾフを發見するやうに指命した。次ぎに彼は、クレムリンの築城に關して、注意深き訓令を發し、次いでロシアの全面に渡る來るべき戰役に對する天才的計畫を立てゝゐた。外交の方面に於ては、盜賊に遭つて、すつかり着物を奪掠され、モスクワから逃げ出すことが出來なかつたヤコウレフ大尉を呼び寄せ、詳細に自分の全政略を說明して、その豪俠を示めした、そして、ラストプチンが、モスクワに於て惡い行爲をしたことを、彼の友人や兄弟に告げるのは、自分の義務であると考へたので、皇帝アレキサンドルに手紙を書き、それを持たして、ヤコウレフをペテルブルグに遣はした。

これと同じやうに、詳細に自分の意見と豪俠をチユトルミンに說明して、談判を開くために、この老人をも、ペテルブルグに派遣した。法律の方面に於ては、火災が起ると直ぐ、罪人を發見して、これを處刑する命令を發した。そして、惡漢ラストプチンを罰するために、命令によつて、その邸宅に火を放けた。

行政の方面に於ては、モスクワに憲法を設けた。市會が開かれ、次ぎの如き布告が發布せられた。

『モスクワ市民よ！

『汝等の不幸は苛酷であつた、されど皇帝にして國王なる陛下は、其不幸を斷たん事を望ませ給ふ。幾多の恐ろしき例は、陛下が犯罪及び紀律の破壞を如何に罰し給ふかを汝等に示された。秩序

紊亂を絶滅し、公安を回復せんため嚴正なる方法が採用された。汝等の間より撰べる父なる會議は、汝等の市會又は市役所を組織するであらう。同會議は汝等及び汝等の必要、汝等の利害に意を注ぐであらう。同會議員は肩の上に着けたる赤色の紐により區別され、而して市長はそが上に更に白色の肩帶を纏ふであらう。併しながら任務を行ふ場合以外はたゞ左の腕に赤紐を捲くだけである。

『市警察は從來の制度を踏襲して設置され、既に秩序を回復しつゝあり。政府は二名の委員長即ち警視と、二十名の委員即ち警部とを任命し、市内の諸部に駐在せしめ、汝等は左腕に捲ける白紐によつて彼等を識る事が出來る。種々の宗派に屬する教會は開かれ、何等の支障なく勤行が殷に行はれて居る。汝等の同朋市民は日々各自の住居に歸著しつゝある。不幸に對して當然與へらる可き援助と保護とを彼等に得せしむる命令が發せられてゐる。以上は政府が秩序を回復し、汝等の位置を救はんために採用した方法であるが、その目的を達するには、汝等が汝等の努力をかゝる方法に一致せしめる事が肝要である、能ふ可くんば、汝等が受けた不幸を忘れ、斯くの如く苛酷には非る運命を、希望を以て眺め、汝等の生命或は汝等の荒らされた財産に對する暴行犯罪人に必らず恥多き死の待ち居ること、從つて汝等の生命、財産の疑ひもなく保護せらるゝ事を信ずべきである、何故なれば、それが最も偉大にして最も正義なる國王の意志であるからである。

何れの國民なるを問はず、凡ゆる軍人と市民よ！　公衆的信用と、國家の繁榮の源泉とを回復せよ、兄弟の如く生活せよ、相互扶助と相互の保護とをなせ、一致して惡人の計畫に反對せよ、文武の官憲に服從せよ、斯くすれば汝等の涙は速かに止まるに至るであらう。』

布　告

『汝等平和なるモスクワ市民よ、擾亂のために市から追はれた職人及び職工よ、根據無き恐怖を抱いて野畠に隱れ居る汝等離散せる農夫よ、聽け！　沈靜は再びこの首都に歸りつゝある、秩序はこれつゝある事を認めてゐる。彼等及び彼等の財産に對する凡ゆる暴行は、速かに罰せられてゐる。皇帝にして國王なる陛下は彼等を保護し給ひ、命令に服從せざる者を除いては、汝等の中の何人をも陛下は敵と見做し給はない。陛下は汝等をその家と家庭とに歸さんことを望

宗教の方面に於ては、ナポーレオンは僧侶を立歸らせ、勤行を再び教會で行はせるやうに命令した。商業を奬勵し軍隊への糧食を供給させんとの考から、次ぎの如き注意書が到る所に貼附された——

兵站の方面に於ては、ナポーレオンは、à la maraude（掠奪によつて）糧食を集むるために、順番にモスクワに軍隊を入れるやうに命令した、かくして、軍は將來の食糧を供給せらるゝことゝなつた。

み給ふ。陛下の仁慈なる御企圖に協力し、危惧を抱かないで吾々に來れ。市民よ！　信賴を以て汝等の家に歸れ、汝等は速かに汝等の要求を滿足せしむる方法を見出すであらう！　職人及び勤勉なる職工等よ！　汝等の職業に、家に、店に歸れ、それ等を守るべき護衞兵は汝等を俟つてゐる、而して、汝等はその勞役に對する當然の支拂を受るであらう。尙又汝等農夫よ、汝等が怖れて隱れつつある森から出て來て、恐れずに、安心して保護を受けんために、汝等の小舍に歸れ。農夫がその貯藏物及び産物を運ぶ事の出來る市場が、市中に設けられた。政府は彼等をして販賣の自由を得しめんがため、左の如き方法を設けた。(一)本日以降、農夫、耕夫、及びモスクワ近郊の住民は、何等の危險なく、種々の種類の物品を、二ケ所の定められたる市場に運び出す事を得——卽ちモホオヴアヤ町及びオホツトヌイ・リヤアドこれなり。(二)商品は賣主と買主との協定の値段にて買取らるべし、然れども若し賣主が要求せる正當の値段を得能はざる時は、自由に商品をその村に持ち歸ることを得、而して何人と雖も、如何なる口實を以てしてもそれを妨害するを得ず。(三)毎日曜日及び水曜日を一週の市日と定む、それがため日曜日及び水曜日には、荷車の入り來るを護衞し得る程度の距離の間、都より凡ゆる官道に沿うて、十分なる軍隊を配置すべし。(四)農夫が車馬を引いて家路に歸る時にも、妨害を受けざるやう、右と同樣の方法を採用す可し。(五)普通の商店を再び開くべき種々の方法を採るべし。

都鄙の住民よ、何づれの國民たるを問はず職人と職工よ！　汝等は皇帝にして國王なる陛下の父の如き御企圖を實行せんため、そして公衆の幸福のために陛下と協力すべく招かれてゐる、汝等の敬意と信賴とを陛下の御足下に齎らせよ。そして吾々と結合することを躊躇する勿れ！』

軍隊と人民の精神を維持せんとの考から、閱兵が、斷えず行はれ、報償が分配された。

皇帝は市街を乘り廻つては住民を慰めた。そして政務に氣を取られてゐるにも關らず、自分の命令で設けられた劇場を親しく訪問した。

また慈善事業——征服者の冠の中で最も美はしい寶石なる——に關しても、ナポーレオンは力の及ぶ限り有らゆる事をした。慈善のために設けられた諸館には、"Maison de ma mère"（母の家）といふ名を附すべきことを命じた、彼は、この名によつて、息子を愛する感情と、國王の宏德との一致を計つたのである。彼は孤兒院を訪れた、そして自分の救つてやつた孤兒に接吻させるために、自分の白い手を與へながら、やさしくチュトルミンと話をした。それからチェールの流暢なる叙述に從へば、彼は彼が鑄造した僞のロシア紙幣を以て、兵卒共の支拂ひをなすやうに命じた——『彼及び彼の軍隊に似合はしい法令によつて、斯かる方法の使用を助けつゝ、彼は火災の損害を受けた人民に救助を與へた。が、糧食を外國人に、殊に敵に、與ふるのは餘りに貴重なので、ナポーレオンは人民に金錢を與へ、人民自ら市外から糧食を得させるに如かずと考へ、子卽ち人民の間に

紙幣（ペーパー・ルーブル）を分配することを命じた。』

軍紀を維持する考へから、軍務の怠慢者を厳重に罰せよ、そして掠奪を禁ぜよといふ命令が斷えず發せられた。

十

が、不思議なことには、かゝる凡ての設備、努力、計畫は、以前のこれと同樣の場合に爲されたそれ等と少しも劣つてはゐないのに、恰も、機械を離れた時計の針が齒車と一致せずに、目的なく、滅茶々々に廻るのと同じやうに少しも事件の根抵に觸れなかつた。

天才の事業たる、ナポーレオンの戰略に就て、チェールは、彼の天才は、これよりもより深き、これよりもより巧妙なる、これよりもより稱贊すべき何物かを今まで工夫した事がなかつたと言つてゐる、そして、ファン氏との論爭に入り、この天才的事業の作成は、十月の四日ではなくて、同月十五日に於てせられたものであることを證明してゐる——尤もこの事業は、實際の現狀に觸れてゐなかつたから、實行せられなかつたし、實行せらるる可きものでもなかつた。クレムリン宮殿を築城するためには、回教會堂（モスケエ）（ナポーレオンは、祝福されたるワシリイ教會をかう呼んだ）を破壞しなければならなかつ

たが、その築城は全く無益なものとなつた。クレムリン宮殿に地雷を敷設したことも、身體を傷めた床を打つ小兒のやうに、皇帝が、モスクワを去る時、爆發するクレムリン宮殿を見たいと言つた願望を果すために唯役立つたに過ぎなかつた。ナポーレオンが、力瘤を入れた露軍の追擊も、前古未聞の結果に終つた。フランス將官たちは六萬の兵より成る露軍を見失つた、そして、チェールの說によれば、彼等が終に六萬の軍を失はれた留針のやうに見出したのは、たゞミユラーの才能とそれから又明かにその天才とのお蔭によるのであつた。

外交の方面に於て、ナポーレオンがチユトルミンやヤコウレフ（後者はたゞ自分が旅行用の大きな上衣と乘物とを持つ事に興味を見出しただけである）とに、その寬大と公正とを示めしたことは、何等の効果を齎らさなかつた。アレキサンドルはこの使者達を引見するを欲せず、彼等の持つて來た書面に返事を與へようともしなかつた。

法令や制度の方面に於ては、推定放火犯人の處刑後、モスクワの他の半ばが燒けてしまつた。

市會の設置は、掠奪を絕やすことが出來なかつた、そしてその議員で、設定せられたる命令の口實の下に、自分等のためにモスクワを掠奪し、若くは、自分等の財產の掠奪を救ひ得た數名の人の他には、何人にも利益を與へなかつた。

宗教の方面に於ては、ナポーレオンがエヂプトの回教會堂を訪ふために、困難が容易に解決され

たが、併し此處ではこの同じ方法は何等の結果を生まなかつた。モスクワに於て拾ひ上げられた二三人の僧侶は、ナポーレオンの希望を行はうと企てたが、そのうちの一人は、禮拜の最中に、フランス兵のために顔を毆られた、そして、もう一人の僧侶に就いては、フランス官吏は、次ぎのやうに報告してゐる。『予が發見して、彌撒を施行するために招いた僧侶は、教會を潔めてそして戸を閉ぢた。その夜彼等は再び來り、入口を破り、錠を毀し、聖書を引裂き、その他さま〴〵の亂暴を働いた。』と。

商業の奬勵に關しては、『職人や農夫』への布告は、全然効果を齎さなかつた。モスクワには職人が一人もゐなかつたのである。そして農夫達は、此の布告をもつて遙々都からやつて來た使者たちを捕へて、殺してしまつた。

劇場をもつて人民や軍隊をもてなさうとする企圖も、同樣に不成功に終つた。クレムリン宮殿及びボズニヤアコフ家に設けられた劇場は、男女優が兵卒等のために所持品を剝取られたものだから直ぐまた閉場してしまつた。

慈善事業さへも、望ましい結果を持來さなかつた。モスクワには眞物と贋造の紙幣（ペーパーマネー）錢が充ち溢れたので、紙幣は價値が無かつた。戰利品を集めてゐるフランス人は、金貨の他に何物にも注意を拂はなかつた。ナポーレオンが仁慈深くも、不幸なる人々に與へた贋造紙幣は、少しの價値も無かつた、そして銀貨でさへも金貨に比較すると、その標準價額が低落した。

が、官憲によつてなされたさま〴〵の努力のうちで、その無効の最も著しい例は、掠奪を禁じ、紀律を維持せんとする、ナポーレオンの空しき努力であつた。

『掠奪は禁止の命令を發したにも關らず、市街に於て尙續けられてゐる。秩序未だ回復せず、正式に商賣なし居る商人一人も無し、然れども酒保の主人等は平然として掠奪の果實を賣つてゐる。

『吾が區の一部は、依然として第三軍團の兵士の掠奪の餌食に供せられてゐる有樣で、彼等は穴藏に避難した哀れな難澁者から、僅かに殘つたその所持品を剝奪するを以て尙足れりとせず、予の見たる數例によれば、野蠻にも劍で難澁者を傷つけさへした、兵卒等が平然として强盜に掠奪に熱中して居るほか、何等新らしきこと無し。（十月九日）

『强盜と掠奪とは猶續けられつゝある。吾が區には强盜の一團があつて、それを捕縛するには强い守備兵を要する。（十月十一日）

『嚴命を以て掠奪を禁じたにも關らず、守備兵中から掠奪隊が斷えずクレムリン宮殿に歸りつゝある事には、皇帝はいたく不快を感ぜられた、舊近衞兵に於ては、昨夜と今日、曾てない激しい不紀律と掠奪が行はれ、皇帝は彼自らを護衞するために任命された、他の者に模範を示す可き撰拔兵が、秩序を失つて遂に軍のために用意してある穴藏貯藏所等に闖入するに至つたのを目擊され、悔恨に沈み給へり。他の者は步哨兵、警衞將校等に服從することを拒み、彼等を罵り、彼等を毆るほ

どに惰落した。

『宮殿なる大元帥は、度々禁止したにも關はらず、兵卒等が方々の庭で、さては皇帝の窓の前でさへ、大小便をするのをいたく不滿とし給へり。』

軍隊は亂暴に走る家畜の群のやうに、饑餓から彼等を救つたかも知れぬ芻草を足の下に踏みつけて、離れ〳〵になり、モスクワ滯在中日一日と、破滅に近づきつつあつた。

しかし軍隊は動かなかつた。

スモオレンスク街道に於ける一運送車の捕獲と、タルチイノの戰役の報知は、意外にも閲兵の最中にナポーレオンに達した、そして、彼は心の中にロシア人を罰せんとする慾望を起し、——と、チェールは言つてゐる——全軍の要求してゐた退却の命令を下したのである。

モスクワから逃走する時に、兵卒どもは集めて置いた掠奪物をみんな持つて行つた、ナポーレオンも亦彼自身の私の trésor 寶を持つて行つた、軍の戰利品を乘せた荷馬車の長い列を見ると、ナポーレオンは驚嘆した、(と、チェールは言つてゐる)けれども軍事上の經驗によつて、彼はモスクワに攻め入る途中一元帥の行李に向つて爲たやうに、不必要な荷物を載せた荷馬車を燒いてしまへとは、命令しなかつた。彼は兵卒が一ぱい乘つてゐるそれ等の荷馬車や馬車を見て、それは非常に良い事だ、か

ういふ運送車は糧食や傷病兵のために有用になるだらうと言つた。

佛軍の狀態は丁度死の近きにある事を感じて、自ら何を爲しつゝあるかを知らない傷ついた獸の狀態であつた。モスクワに入つた時から、滅落に至るまでのナポーレオン及び佛軍の錯雜せる戰略と計畫とを研究するのは、致命傷を負へる獸の死の苦悶と痙攣とを見るに似てゐる、傷ついた獸は屢騷聲を聞くと、獵師の射擊を受けるために走り出し、また進んだり後戻りしたりして、却つてその最後を早めるものである。彼の軍隊の壓迫を受けたナポーレオンもこれと同じことをやつた。タルチイノ役の風評を聞いて野獸のやうに恐怖に打たれた軍隊は、彈丸の方に走り出し、獵師の許に達し、再び逃げ歸つた、そして最後に、どの野獸もするやうに、逃げるには最も惡い、最も危險な道である昔から通り馴れた道を採つたのである。

丁度船の舳の破浪神が野蠻人に取つて船の航路を導く力と見えるやうに、ナポーレオンはかゝる運動の指揮者として我々に說明されてゐる。當時活動してゐたナポーレオンは、馬車の中に坐つて車の中に革紐を牽きながら、自分が車を動かしてゐるのだと思ひ込んでゐる子供のやうなものだつたのである。

十一

十月六日の早朝ピエールは、小舍から出て、自分に飛び附く胴の長い、鰐脚の、紫灰色の犬に戲れながら、戸口に立つてゐた。この犬はこの小舍に住んでゐて、カラターエフの隣に寢るのであつたが、尤も時には自分勝手に市街に走つて行つては、また歸つて來る事などがあつた。恐らく未だ誰に飼はれた事もないらしく、今でも主人も無ければ、名前も持つてゐなかつた。フランス人はこの犬をアヅオルと呼んだ、頓智家の一兵卒はそれをフエムガルカと呼んだ、カラターエフはそれを『灰色の上衣』と呼んだ、また時にはフロツピイとも呼んだ。主人がなくても、名がなくても特殊の種類がなくても、一定の毛色がなくても、そんな事は少しも此の紫灰色の犬を困らせなかつた。その毳毛のある尻尾はしつかり立つて、羽毛のやうに圓かつた、その鰐脚は四本の脚を用ひるのを輕蔑みでもするやうに、よく後脚の一本を風流に上げて、三本の脚で非常に早く巧妙に走るほどに、好く役に立つてゐた。この犬にとつて萬物は滿足の源泉であつた。ある刹那には喜んで吠えてゐるかと思へば、又夢見るやうな、考想に耽つてゐるやうな態度で日向ぼつこをしてゐるし、かと思ふと又木片や藁に戲れてゐた。

ピエールの服裝は、彼の以前の衣裝の唯一の遺物である汚い、ボロ〳〵の襯衣と、暖をとるためにカラターエフの勸告に從つて踝のまはりを絲で縛つた兵卒用の衣袴と、農夫用の上衣と、農夫用の帽子とであつた。肉體的にピエールは近頃非常に變つた。猶ベヅウホフ家の者の特長たる、身體が堅くて、力がありさうな處はあつたが、それでも最早岩疊には見えなかつた。彼の顏の下部には、髭と髯

とが一面に生へてゐた、虱の群つてゐる彼の長い縺れた頭髮は頭の頂邊で纏れて塊まつてゐた。彼の眼は斷乎して、溫和で、且つ以前ピエールの顏に見られなかつた敏捷さがあつた。眼の中にまで現はれてゐた昔の遲緩さは、今や行動と反抗の用意を示す強い、敏捷い容貌に變つてゐた。彼の足は裸かであつた。

ピエールは、その朝、荷馬車と騎馬の人々とが通つてゐた牧場を眺めたり遠く河の向ふを眺めたり、熱心に彼を嚙む眞似をしてゐる犬をながめたり、それから、汚い、厚い、大きな足指を動かしながら、心地よく交る〳〵その位置を變へる自分の裸の足を眺めたりした。そしてその裸の足を見る度毎に、熱心な自足の微笑がその顏に漂うた。その裸の足の樣子は、近頃經驗し且つ學んだ一切の事を彼に思ひ起さした、そしてそれの思ひ出は彼には懷かしいものであつた。

この數日の間、毎朝微かに霜が降りて、天候は靜かで、晴やかであつた——所謂『お祖母さんの夏』の時候であつた。

戸外の日向は暖かであつた、そしてその暖かさは、大氣中に、まだ朝の霜の緊張した凉爽かさがあるので、殊に心地よかつた。

萬物の上に、遠近の一切の物象の上に、秋のこの時季にのみ見られるあの魅力ある、透明るやうに鮮かな明るみがあつた。遠方に村落と敎會と大きな白堊の家とのある『雀ケ丘』が見えた。そして葉の

ない樹木や、砂や、石や、家の屋根や、遠方の白堊の家の角度が、いづれも澄み切つた大氣の中に、不自然な鮮やかさをもつて、極めて微妙な輪廓を見せてゐた。直ぐ近くには佛兵共が占領してゐる、離の傍にまだ暗綠色を呈した紫丁香花の草叢のある、よく見馴れた、半燒けの廢屋が立つてゐた。そして惡い天氣には見るに堪へない程胸惡く見えるこの燒かけた廢屋でさへ、透明な、靜かな明るみの中にあつては、人の心を慰むる一種の優美さをもつてゐた。

喫煙帽を冠り、心地よげに釦を外づしたフランス伍長が、短かい煙管を咬へて、小舍の角を廻つて來た、そして、親しげに眼を瞬いて、ピエールに近づいた。

『何といふ日光だらう、えゝ、キリル君？（フランス兵はみな、ピエールをかう呼んでゐた。）春と言ひ度い位ゐだね。』と、伍長は、戸に倚りかゝつて、ピエールに自分の煙管を差し出した、尤もいつもかうして差し出すのだが、いつもピエールはそれを斷つてゐた。

『こんな天氣に行進するんだとなあ、』伍長は始めた。

ピエールは彼に、フランス軍の退却に就いてどんな事を聞いたかと尋ねると、伍長は殆んど全軍隊が出發しようとしてゐる、そして今日は捕虜に關する訓令が出る筈だと語つた。ピエールのゐる小舍では、ロシア兵の一人のソローコフが瀕死の病に罹つてゐるので、ピエールはこの兵士に何等かの手當を加ふべき筈だと伍長に話つた。伍長はピエールに心を安ぜよと云ふ事や、さういふ場合となれば野戰病

院も常置病院もあるといふことや、當局は實に一切の事故に對して準備をしてゐるといふことなどを語つた。

『そしてさういふ時には、キリル君、君は大尉に一寸一言云へばいゝんだよ、君。おゝ、あの人はどんなことでも決して忘れない人なんだからね、大尉が巡廻して來た時さう言つて見たまへ、君のためにどんなことでもしてくれるよ。』

伍長の語つた大尉は、いつもピエールと長話をするのが例で、種々の好意を盡して呉れてゐるのだつた。

『（なあ、セント・トーマス）と、大尉が、先日俺に言つてたよ、（キリルはフランス語を喋べれる教育のある男だ、あの男は不幸に遭つたロシアの貴族だが、併し一個の男子だ。で、物が解つてゐるよ……彼が何か用があるなら、俺にさう言はせろ、きつと叶へてやるから。人間は學問をすると、教育と云ふものが好きになるよ、そしてなあ、育ちのいゝ人間を好きになるよ。）俺がこんなことを云ふのも君のためだよ、キリル君、先日の事件だつて、君が間に立たなかつたら、事が面倒になつたかも知れないよ。』

（伍長は數日前、捕虜とフランス兵との間に爭ひが起つて、ピエールが自分の仲間をうまく鎭靜めた時のことを言つたのである。）暫く喋つた後で伍長は立ち去つた。

数名の捕虜は、ピエールが伍長と話してゐるのを聽いてゐたので、伍長が何を云つたかと訊ねに直ぐ遣つて來た。ピエールがその仲間に伍長が語つた、モスクワを出發したことを話してゐる時に、痩せた、青白い、襤褸を着たフランス兵が、小舍の入口に遣つて來て、きまり惡るげな、敏捷い態度で、お辭儀のつもりで額に指を當てながら、ピエールに話をしかけて、自分のために襯衣を作らへてゐる兵卒のプラートシユが、小舍の中にゐるかと尋いた。

フランス兵は前週、麻布や柔革を受け取つたので、それをロシア捕虜に與へて、長靴や襯衣を作らせてゐたのだ。

『出來たよ、君、出來たよ！』と、鄭寧に疊んだ襯衣を持つて出て來たカラターエフが言つた。暑いのと、仕事をするのに都合がいゝのとで、カラターエフは股引と土のやうに黑いボロ襯衣だけしか着てゐなかつた。彼は職人のするやうにその髮を皮紐で結んでゐた、そして彼の圓い顏はます〳〵圓く、前よりも愉快げに見えた。

『きちやうめんと云ふ事が仕事の兄弟さ。僕は金曜日と云つたらう、だから此の通り拵へといたよ、』と、プラトンはにこ〳〵して、自分の作つた襯衣を見せながら云つた。

フランス兵は不安氣にあたりを見廻はして、躊躇に打克たう、とでもいふやうに、急いで軍服を脫ぎすて、襯衣を着た。

軍服の下には彼は襯衣を着てゐなかつた、その裸の黃色ろい痩せた身體の上に、直かに長い脂浸みた花模樣のある胴衣を着て居た、フランス兵は自分を見てゐる捕虜どもが自分を笑ひはしないかといふことを恐れるやうであつた、そして大急ぎで頭を襯衣に突込んだ。捕虜たちは誰一人として一語も云はなかつた。『たしかに、うまく合つてゐる。』と、プラトンは襯衣を引張りながら云つた。フランス兵は頭や手を通し終ると、襯衣を見廻はし、目を上げずに、縫ひ方を調べた。

『さあ、君、これは裁縫師が縫つたのではないぜ、ねえ、それに縫道具もないんだからね、いゝ道具が無ければ虱もうまくは殺せないといふ諺があるぢやないか、』と、カラターエフは、まだ自分の仕事を賞めながら言つた。

『非常に良い、有難う、が、布がまだ殘つてゐる筈だねえ……』と、フランス兵が云つた。

『身體へ直かに着れば、もつと具合がいゝだらう、』と、カラターエフは自分の仕事をまだ賞めながら云つた。『さあ、具合がいゝだらう、心持がいゝだらう。』

『有り難う、有り難う、おぢさん、では、殘つてゐる……？』と、フランス兵は、カラターエフに、紙幣を與りながら云つた。

『要らない小布を與れ給へ。』

ピエールはプラトンがフランス兵の云つたことを解らない樣子をしてゐたいと思つてゐるのを知つ

たが、邪魔をせずに見てゐた。カラターエフは紙幣の禮を云つて、自分の仕事を賞めつゞけた。フランス兵は殘つたものを與れと云ひ張つて、ピエールに自分の云ふことを通譯して與れと頼んだ。

『この男は、小切を何にするのかな?』と、カラターエフが云つた。『あれがあれば、非常に良い脚絆が出來るのに。あゝ、いゝや、仕方がないや。』

で、カラターエフは急に悄然て憂鬱いで、その懐から一束の餘布を取り出しながら、フランス人を見ずにそれを與つた。『やれ〳〵!』と、彼は叫んで向ふへ行つた。フランス兵は麻布を見て、躊躇して、何事かと尋ねたげに、ピエールの眼が彼に何事かを語つたとでもいふやうに、ピエールを凝視めた。

『おい、プラトーシュ!』と、彼は急に顔を赤らめて、鋭い聲で叫んだ。『これを持つて行け、』と、さう言つて、餘布を與りながら向き直つて行つてしまつた。

『やあ、あの男を見なさい。』と、カラターエフが頭を振つて言つた。『奴等は基督信者ではないといふ評判だが、やつぱり靈魂をもつてゐるよ。汗の出てゐる手は開いてゐるが、乾いた手は閉ぢてゐる、と昔の奴の言つた事は眞實だね。あの男の背は裸だのに、あの男は私にこれを與れた。』カラターエフは夢みるやうに微笑みながら、麻片の小片を凝視めてじつとしてゐた。『これで、上等の脚絆を作るんだ。君、』から附け加へて、小舍の中へ歸つた。

十二

ピエールが捕虜になつてから、四週間經つた。フランス人は普通の捕虜の小舍から將校の收容所に彼を移さうと申出たが、彼は始めと同じ小舍に止まつた。

火事と掠奪とで荒らされたモスクワで、ピエールは殆んど人間が耐へ得る極度の艱難を嘗めながら憂き月日を過した。だが、その時まで自分では殆んど氣がつかなかつた強い健康と體格とのお蔭で、そして猶また、それよりも以上に、かゝる艱難が何時始まつたか解らないほどに漸次に襲ふて來たといふ事實のお蔭で、彼は安靜であるのみならず 積極的な悦びをさへ感じながら、自分の境遇に處することが出來たのであつた。そして彼が以前唯いたづらに得ようとして跪いてゐたかの平和と滿足とに到達したのは、實にこの時であつた。永い年月の間、彼は嘗つてボロヂイノで兵卒共を見て非常に打たれたかの平和と、自分自身との調和とをいろ〳〵の方面で求めつゝあつたのである。慈善や、共濟組合主義や、社交界に於ける放蕩や、酒や、ナターシャに對するロマンチツクな戀や、さういふものによつて彼はそれを求めたり思想の道を辿つてそれを求めたりした、而もさうしたさま〴〵の探求、さうしたさま〴〵の努力は總て失敗に終つた。そして今や彼は、自分の思想によらずして、たゞ死の恐

怖と、困難と、カラターエフに於いて見たところのものとによつて、この平和や、自分との調和に達し得たのであつた。彼が死刑執行中に過した怖ろしい瞬間は、嘗つては非常に重要なものに思はれた不安な思想と感情とを、彼の想像と記憶から洗ひ去つてしまつた。ロシアとか、戰爭とか、政治とか、ナポーレオンとか、さういふものに對しては何の考想も起らなくなつてしまつた。そんな事はみんな自分と關係した事ではないのだ、自分などは呼び求められてはゐないのだ、だからさういふ總ての事は自分には判斷することの出來ないのだと云ふ事が明かに思はれて來た。『ロシアと夏とは仲惡るだ』と、いふカラターエフの言葉を彼は繰り返して見た。するとその言葉が不思議にも自分を慰めた。ナポーレオンを殺さうとする自分の計畫や、へぶらい神秘哲學の數の計算や、默示錄中の獸に關する計算は、今では譯の分らぬ、馬鹿げて滑稽なものだと云ふ氣になつて來た。妻に對する自分の怒りや、自分の名が妻によつて汚されるといふ恐怖などは、極めて些細な、笑止なことに見えて來た。あの女が自分を捨てゝ何處かへ去つて、あの女の趣味に叶つた生活を送ることを選んだとしてもそれが自分に取つて、何であらう？　彼等の捕虜の名がベヅウホフ伯爵であることを、フランス兵が知らうと知るまいと、そんな事が誰かに取つて——況んや自分に取つて——何の關係があらうぞ。

彼は今や屢々アンドレー公爵との會話を考へた、そして幾分か違つた意味に取りはしたが、その友人の考へに全く同意した。アンドレー公爵は幸福はたゞ消極的なものたるに過ぎないと言ひもし、考へもしたが、それを云ふのには苦痛と反話との陰影を帶びてゐた。彼がそれを言ふのは、それによつて他の思想——吾々の持つて生れた、積極的な幸福に對する凡ゆる努力は、吾々を苦ませんがために、吾々に與へられたものである——から云ふ思想を表白したやうに思はれた。しかし、ピエールは、かゝる感情を含まずに、この思想の眞なることを認めた。苦痛の無いこと、欲求の滿足、その滿足に服從してゐること、職業の選擇の自由、即ち、人間の生活法の自由等が、ピエールにとつては、人間の最も尊い、最も確實な幸福であるやうに思はれた。こゝで今やその生涯に於て始めて、ピエールは饑ゑた時に食ひ、渴いた時に飮み、睡い時に眠り、寒い時に温まり、話したい時、人の聲を聞きたい時に、同じ人間の仲間と話す事の快樂を充分に味はつた。慾求、良い食物、清潔、自由——の滿足は、今彼がそれを奪はれてゐるから、全く幸福であるやうにピエールには思はれた、そして、彼の職業の選擇、即ち、彼の生活法の選擇は、今その選擇が制限されてゐるから彼には容易であるやうに思はれた。生活が餘りに便利であると、肉體の欲求を滿足さす可き凡ての幸福を破壞するものである、そして、職業の選擇の大なる自由、教育と、富と、社會上の地位が彼に與へた自由は、職業の選擇をして非常に困難ならしめ、職業の欲望及び可能性そのものを破壞するものであることを忘れたほどに、彼には容易であるやうに思はれた。

ピエールのさま〴〵の夢想は、今や自分が釋放された時に向けられた。それは兎も角、後年ピエー

ルは、この檻禁の時代の熱誠をもつて、決して呼び起すことの出來なかつた強い悦びに充ちた感覺の熱誠をもつて、殊に充溢れた精神的平和の熱誠をもつて、彼がこの時代に於てのみ經驗した、完全な心の自由の熱誠をもつて、考へたり、語つたりした。

檻禁の第一日に於て、朝早く起き上ると、小舍から黎明の中に出て、まだ薄暗い中にある新聖母修道院の圓頂閣と十字架を見たり、それから、丈の高い草の上の白い霜や、雀ヶ丘の傾斜や、遠方の紫色の中に消えてゐる蜿蜒たる河の、樹木のある堤を見たりして、自分が新らしい空氣に觸れるのを感じ、原を横切つてモスクワから飛び來る鴉の啼聲を聞いた時に、光線の閃きが東から輝き出し、太陽の緣が勇ましく雲の背後から浮び出て、圓頂閣や、十字架や、白い霜や、地平線や、河などが、みな悦ばしい光に輝きつゝあつた時に、ピエールは嘗つて經驗しなかつたやうな悦びと勇氣の新らしい感情を生命に感じた。

そしてその感情は檻禁されて居た間ぢゆう彼を去らなかつた、どころか却つて彼の狀態の困苦が增すに從つてだん〳〵成長した。

その感情——何事でも、道德的なことには直ぐ容易に動く——は、彼がその小舍に入つてから間もなく、仲間から受け始めた好い評判によつて、ピエールの心の中で強められた。彼の外國語の智識や、フランス人が彼に示した敬意や、人が求めたものは何でも與へるといふ彼の人の好い性質や（彼は將

校捕虜に與へらるゝ一週間三留の給料を貰つてゐた、）彼が壁の中へ釘を打ち込むことによつて示した力や、その仲間に對する彼の態度の優しさ、何にもせずに、考想に耽つて、動かずに座つてゐる彼の能力や——それは彼の仲間には不可思議に思はれた——凡べてこれ等のものが、彼を人並優れた、寧ろ不思議な人物のやうに兵卒共に思はせた。彼が以前に生活してゐた社交界に於ては、煩悶の源因でこそなけれ、困難の源因であつたかゝる特長——彼の力、人生の愉快に對する彼の輕蔑、彼の虛心平氣、彼の人の好い性質——が、こゝの、これ等の人々の間にあつては、彼に殆んど英雄の名聲を與へた。そしてピエールは自分に對する人々の考が、おのづから義務を持ち來した事を感じた。

十三

十月六日の夜、佛軍は退却を始めた。炊事場や小舍は破壞され、荷馬車は荷詰めされて、そして、軍隊と輜重隊とは動き始めた。

朝の七時に、シヤコオ型帽を冠り、銃と背囊と、大きな袋を持つたフランス兵の擁護隊は、行進の順序に、小舍の前に立ち並んだ、そして活氣づいたフランス語の會話が、誓の語に交り合つて火の點くやうに、全隊列につゞけられた。

小舍の中では、皆の者は着物を着、帶を締め靴を穿いて、要意を整へ、出ろと云ふ號令を待つて居るばかりであつた。青白い痩せた、眼のまはりに青い圈の出來てゐる病兵ソコーロフは、長靴も穿かずに、外出用の着物も着ずに、唯一人自分の場所に座つてゐた。顏が痩せてゐるので、飛び出てゐるやうに見えるその目は、自分を構つてくれない自分の仲間を不審さうに凝視めながら、定まつた間をおいて、うん〳〵低い呻聲を發した。その病苦よりは——病氣は赤痢であつた——一人殘される恐怖と悲哀との方が餘程甚だしかつた事は明かであつた。

ピエールは、フランス人が長靴の裏皮を作るために持つて來た茶箱の柔皮覆でカラターエフが彼のために作つた上靴を穿いてゐた。帶の代りに、紐を捲きつけて彼は病人に近づき、その傍に蹲んだ。

『さあ、ソコーロフ、フランス兵はすつかり去つてしまふんぢやないよ、ねえ。フランス兵はこゝに病院を持つてゐるんだ。多分君は、僕等よりも具合がよくなるだらう。』と、ピエールが云つた。

『あゝ！　俺は死んでしまふんだ！　あゝ！』と、病兵は前よりも聲高に呻いた。

『よし、僕は今すぐに、もう一度頼んでやらう。』と、ピエールは云つた、そして、立ち上つて、小舍の入口へ行つた。ピエールが入口へ行かうとした時に、前日ピエールに煙管を勸めたかの伍長が、二人の兵卒を連れて、外から入つて來た。伍長と兵卒どもは背嚢を負ひ、シヤコオ型帽を冠り、顎皮紐をかけて、行軍の服裝をしてゐたので、見馴れた顏が變つて見えた。

伍長は、與へられた命令に從つて、戸を鎖めるために、入口に遣つて來た。捕虜を出す前に、伍長は彼等を點呼しなければならなかつた。

『伍長、病人は如何されるのですか？』と、ピエールは云ひかけたが、から云つた刹那に彼は、それが彼が知つてる伍長であるか、又は誰れか知らない人であるかを疑つた——伍長は、その時それほど容姿が違つてゐた。その上、ピエールが話をした時に俄かに太鼓をドロドロ打つ響が兩方から聞えてきた。伍長は、ピエールの語を聞いて顏を顰め、意味のない誓の語を云ひながらピツシヤリ閉めた。そこで小舍の中は薄暗くなつた、太鼓が兩方の側で鋭い點呼の合音を鳴らし、病兵の呻聲を打ち消した。

『さあ、あれだ！……さあ、またあれだ！』と、ピエールは自分に云つた、すると、思はぬ戰慄がその背中を走り下つた。伍長の變つた顏に、彼の聲の響に、太鼓の勢のいゝ耳を聾する轟ろきに、ピエールは人々をしてその意志に反抗つて、同類の人間を殺させる、不思議な、無慈悲な力——曾てその力の効果をかの死刑執行に於て見たことがあつた——を認めた。その力を恐れること、その力から免がれんとすること、その力の道具になつて居る人々に懇願又は勸告を以て訴へることは凡て無益であつた。ピエールは今それを知つた。何人も辛棒強く待つてゐなければならなかつた。ピエールは、二度と病兵の傍へ行かなかつたし、自分の周圍を見まはさうともしなかつた。彼は、顏を顰めて、默

つて、小舍の入口に立つてゐた。

小舍の戸が開かれて、捕虜が羊の群のやうに押合つて入口に群つた時に、ピエールは彼等を押し除けて進みいで、自分のために何時でも何事でもしてやると言つたと、伍長が語つた、かの大尉に近づいた。大尉は行軍の服裝を着けてゐた、そしてその顏にも、ピエールは、伍長の語や太鼓の轟ろきの內に認めたと同じものを見ることが出來た。

『前へ出ろ！　前へ出ろ！』と大尉は銳く顏を顰めながら、自分の傍に群がる捕虜を見て云つた。

ピエールは、自分の努力が無駄であると知つたが、それでも大尉に近づいた。

『うん、何だ？』と、將校は、ピエールが解らないとでもいふやうに、冷やかにピエールを見て、云つた。ピエールは病捕虜の事を話した。

『彼奴は歩ける、あの馬鹿奴が！』と大尉は云つた。

『前進、前進！』大尉はピエールを見ずにつゞけた。

『で、否、あの男は苦しんで居るんです！……』と、ピエールは云ひ始めた。

『——へ行け！』と、大尉は、憎々しく顏を顰めて叫んだ。

『ドラム・ダ・ダ・ダム・ダム・ダム、』と、太鼓は鳴つた、そしてピエールは、かの不思議な力が既に、この人々をすつかり虜にしてしまつてゐること、今はこれ以上云つても無益であることを知つた。

捕虜のうちに居た將校捕虜は兵卒捕虜と別けられて、前進を命ぜられた。

その中にはピエールも交つてゐた、將校捕虜は三十人、兵卒捕虜は三百人であつた。

他の小舍から出て來たこれらの將校捕虜は、皆ピエールには見知らぬ人々で、彼よりもずつと良い服裝をして居た。彼等は不思議な履物を穿いて居るピエールを、冷淡な、疑ひ深い眼で見た。ピエールから遠くない處を、肥つた青白い、癇癖の强さうな容貌の、身體の岩疊な少佐が歩いてゐた。それはカザンの長上衣を着、麻布の帶を捲きつけて、仲間から一般の尊敬を受けてゐるやうに見えた。懷に突込んだ片方の手で、煙草袋を持ち、片方の手で煙管の管を抑へて居た。この少佐は、はあ〳〵喘ぎながら人々が自分を押し除けて進むやうに思はれたから、又急ぐ必要のない時に急ぎ、怪しむことは何もないのに怪しむでゐるやうに思はれたので、人々にぷつ〳〵叱言を云つた。もう一人の、痩せた小さな將校は、彼等が今何處へ連れて行かれるか、今日はどの位歩るくのかと推測しながら皆のものに話しかけた。長靴を穿き、兵站部員の制服を着けた一將校は、モスクワの燒跡をよく見るために、あちらこちら走りながら、高い聲で、何が燒けた、今見えるのは市街のどの部分であるかなどと話してゐた。その訛言でポーランド人の血統であることのわかる三番目の將校は、モスクワの諸部分の見分けが過まつてゐることを彼に證據立てながら、兵站部の將校と議論をしてゐた。

『何故爭つてゐるのか？』と、少佐が腹立たしげに云つた。『ニコラ街だらうがセント、ウラス街だら

うが、そんなことはどうでもいゝぢやないか。見給へ、みんな焼けてしまつたんだ、それで全部なんだ——何故貴様等は押すんか、道路は、こんなに廣いぢやないか？』と、自分の後を通つたので、ちつとも自分を押しはしなかつた一人の男に、腹立たしく云ひかけた。

『おや、おや、おや、如何したんだ？』と、捕虜たちが焼けた地方を見て叫ぶ聲が、あちらでもこちらでも聞えた。『河向町（ザモスクヴォリエツチ）もヅボーウオも、クレムリンも……見給へ、半分も殘つては居ない、さあ僕が君に河向町（ザモスクヴォリエツチ）は焼けてしまつたと云つただらう、それ見給へ。』

『うん、焼けたことを貴様は知つて居るんだな、そんなら何故それを議論するか？』と、少佐が云つた。

ハモウニキイ（焼けなかつたモスクワの僅かな區の一つなる）の寺院の傍を通ると、捕虜たちはみんな急に一方の側へ押し合つて、そして、恐怖と嫌惡との感歎詞が聞えた。

『惡黨奴！　異教徒奴！　さうだ、死人だ、それは……彼等は何かでそれを汚したんだ。』

ピエールも、かゝる感歎詞の發せられた目的物なる教會に近づいた、そして寺院の籬に寄りかゝつて居る或るものを朦朧と認めた。彼よりもよく見た仲間の語によつて、彼はそれが籬で支へられて立せられてゐる煤で顔が汚された人の死體であつたことを知つた。

『進め、馬鹿！　進め、三萬の惡魔ども！』……彼等は警衛兵の罵るのを聞いた、そして執念深いフランス兵は死人を見て躊躇して居る捕虜たちを追ふために、彼等の劍の平身を用ゐた。

十四

ハモウニキイの小路を通つて、捕虜たちは護衛隊と共に進んだ、その後には、護衛隊の兵卒に屬する荷馬車や荷車の縦列が從つた。が、糧食貯藏所に達した時に、彼等は自分等が私有の荷馬車と混ざり合つて動けないで弱つて居る大砲兵縦列の中央に居ることに氣が附いた。

橋のところでは全隊は停つて、先頭が橋を渡るのを待つた。捕虜たちは橋から前後につゞく蜿蜒たる荷馬車の縦列を見ることが出來た。右方の、カルガ街道がネスクチニイ園に添ふて迂回するあたりでは、軍隊と荷馬車との蜿蜒たる線が遠方まで延びてゐた、これは他の隊より前に出かけたボーアルネエ軍團の諸隊であつた。後方、河に添ひカメンニイ橋を渡つて、ネエー軍團の諸隊と輜重隊とが延びて居た。

捕虜たちの屬してゐたダヴウの率ゐる諸隊は、クリミアン淺瀬を渡り、その一部は、既にカルガ街に入つてゐた。が、その縦列は、ボーアルネエ軍團の最後の荷馬車がカルガ街に入るためにまだモスクワから出なかつたのに、ネエー軍團の先鋒が既にボルシヤヤ・オルデインカを出たほどに長かつた。

クリミアン淺瀬を渡ると、捕虜たちは數歩歩るいて、止まつた、そしてまた前進した、車や人の群が諸方でだん〳〵大きくなつた。橋とカルガ街との間の數百歩を歩くに一時間以上も要した後で、ザモスクウオリエツチ街とカルガ街とが出會ふところの辻廣場まで來て、捕虜たちはこの十字路で押し合ひへし合ひしながら、數時間立ちつゞけた。四方八方に、海の咆哮のやうな車輪の轟きや、軍隊の足音の絶えざる響と、怒りや罵聲の間斷なき叫喚が聞えた。ビエールは想像の中で太鼓の轟きと混じてしまつたかゝる音響に耳を傾けながら、燒けた家の壁に押しつけられて立つてゐた。

數名のロシア將校はもつとよく眺めるために、ビエールが立つてゐる側の家の壁の上に攀ぢ登つた。

『群集！……何といふ群集だらう！……彼等は、大砲の上にさへ荷物を乘つけてゐる！　あの毛皮を見ろ！』と、彼等は云ひつゞけた。

『おい、毒虫、彼等は掠奪したな……彼奴が車の後に積んでゐるものを見ろ……おや、あれは聖書だ、やあ！……あれはドイツ人に違ひない。それから、ロシアの農民が一人、やあ！……こら、惡黨奴！……彼奴の積み込んださまを見ろ。動けない位だぞ、見給へ、おい、二輪馬車だ、彼奴等はあれまでも奪つてしまつた！……見ろ、彼奴は箱の上へ上がつた。やあ！……彼奴等は、戰鬪を始めたんだな！　それで宜しい、彼奴の顏を打つてやれ！　こんなでは、吾々は夜まで通れないだらう。見ろ、見ろ！　あれは、慥かにナポーレオンに違ひない。あの馬が見えるかい！　組合せ文字

と王冠の附いてゐる！　あれは、持ち運びの出來る家だ。あの男は嚢を落して氣が附かないでゐる。また、戰鬪だ……赤兒を連れた女がゐるぞ、容色がいゝぞ！　さうだ、きつと、さうだ、あゝいふ方法で、君たちを通すんだ……見給へ、端が無いじやないか。ロシア人の婆さんだ、きつとさうだと僕は斷言する。彼等が、心地よささうに馬車に乘つてゐるのを見給へ！』

ハモウニキイに於けると同樣に、またみんなの好奇心の波が全部の捕虜をして道路の方へ進ませた、そして、ビエールは丈の高いお蔭で、他の人々の頭越しに捕虜たちの好奇心を引いたものを見た。三輛の馬車が、彈藥車の間に集まつてゐた、そしてその中に、顏に臙脂を塗り、ピカ〳〵光る色彩で飾り立てた數名の婦人が、鋭い聲で何事かを叫びながら、ぎつしり詰め込まれて坐つてゐた。

ビエールがかの不思議な力の顯現を認めた時から、萬事が彼にとつては珍らしくも怖ろしくも見えなかつた、戲れにその顏を黑くした屍體や、急ぎ去らんとするこれ等の婦人や、モスクワの燒跡などは、珍らしくも怖ろしくもなかつた。今ビエールが見た一切のものは、何の印象をも與へなかつた——恰度彼の靈魂が、或る困難な苦鬪に對する準備のために、靈魂を弱めるかも知れぬ印象を受ける事を拒むとでもいふやうに。

婦人達の馬車は駈け去つた。再び、荷車、兵隊、荷馬車、兵隊、馬車、兵隊、彈藥車、そして、又兵隊が、そして稀に間をおいて婦人連が、その後から從つた。

ピエールは人々を個々別々には見なかつた、唯彼等の動くのを見たばかりであつた。

凡てこれ等の人馬は、恰度何かしら見えない力に追はれてゞも居るやうに見えた。ピエールがそれを見て居る間に、あらゆる人馬は出來るだけ早く進まうといふ同じ一つの慾望に驅られて、さま〴〵の街から掃き出されて來た。彼等のすべては、同じやうに互に邪魔し合つたり、怒つたり、喧嘩したりした。同じ誓の言葉があちらこちらで發せられ、白い齒が閃いて、有りと凡ゆる顰面は、その朝、太鼓が鳴つてゐた間に伍長の顏を見てピエールが感じたのと、同じ暴斷と冷酷の容貌とを帶びてゐた。

彼等の警衞隊を指揮してゐた將校がその部下を再び集合させて、叫び聲と誓ひの言葉を發し乍ら輜重縱列の中を押し進んだのは、もう殆んど薄暮であつた。そして四方八方から圍まれてゐる捕虜隊はカルガ街道に出た。

捕虜隊は停止せずに急速力で行進して、日沒の頃に至つて漸く停つた。荷馬車は互に擦れ合つては動いてゐた、そして兵卒どもは夜の準備を始めた。誰も彼もが不機嫌で、不滿足であるやうに見えた。誓の話や怒聲や喧嘩騷ぎが、夜遲くまで、諸方から聞えた。警衞隊の後からついて行つた馬車が、警衞隊の荷馬車の一つと衝突して梶棒を擊ちつけた。數名の兵卒が別々の方面からこの荷馬車の傍へと走つて來た、或るものは荷馬車を輓いてゐた馬の頭を打ち、他のものは喧嘩をした、そしてピエールは一人のドイツ人がその頭を劍の平身で打たれて、ひどく傷つけられたのを見た。

凡てこれらの人々は、今、秋の夜の冷たい薄明りの中に廣けた田舍に來て停まつた時、出發の際にみんなを捕へてゐたあの急ぎと興奮とから眼覺めて來た、不愉快な感じを一樣に經驗しつゝあつた。今靜かに立ち止まるに及んで、自分等がどこへ行きつゝあるのかを知らなかつたことや、この行軍はまだなかなかの苦痛と困難とに會はねばならないといふことなどを、初めて氣付いたとでもいふやうであつた。

この野營地に於て、捕虜たちは其護衞隊に、出發の時よりももつと虐待された。彼等は、始めて馬肉を與へられた。

護衞隊に屬するものは皆、將校から最下級の兵卒に至るまで、以前兩者の間に存つた友情とは打つて變つて、捕虜たちの一人〴〵に或る私の遺恨を持つてゐるやうであつた。

この遺恨は、捕虜を點呼して、一人のロシア兵がモスクワ出發の騷ぎに乘じて疝痛に事寄せて逃げ出さうと企てたことが發見された時、一層增した。ピエールは、フランス人がロシア兵を、道路からあまり反れ過ぎたといふので無慈悲にも打つたのを見た。そして彼の友人であつた大尉が、捕虜の逃走に關して、一下士を叱りつけ、軍法會議を持出してそれを脅かして居るのを聞いた。その捕虜は病氣で歩く事が出來なかつたのですといふ下士官の主張に對して、大尉は、自分等は遲れた者は射殺せよと命令されてゐるのだと云つた。ピエールは、かの死刑執行の時に彼を壓服し、彼の檻禁の間見えなくなつてゐた運命の力が、今また彼の存在を支配してゐるのを感じた。彼は怖くなつたが、それと同時

に、その運命の力が、彼を壓服せんと努めたので、彼の靈魂と集められた力の中に、その運命の力から獨立した生の力が成長しつゝあつたのを感じた。ピエールは麥粉と馬肉で作られたスープを食べてから、仲間共と少しばかり話をした。

ピエールも仲間の何人も、彼等がモスクワで見たことや、フランス人から受けた虐待や、彼等に告げられた彼等を射殺すといふ命令などに就いては少しも語らなかつた。彼等の一層悪い現狀に對する反動から、皆のものが特に愉快で且つ快活であるやうであつた。自分たちの現狀に觸れることを避けて、お互の回想や、行進中に見た面白い出來事などを語り合つた。

太陽はずつと前に沈んでゐた。星は空の彼方にキラ〳〵輝いてゐた。滿月の昇らうとしてゐる地平線は、火事の炎のやうに赤く燃えてゐた。そして、大きな、紅いの球が、灰色の闇の中で奇妙に微動してゐるやうに見えた。すつかり明るくなつた。夕暮は過ぎ去つたが、夜はまだ始まらなかつた。ピエールは、新らしい仲間を殘して、篝火の間を通り拔け、普通の捕虜たちが宿營してゐると聞いてゐた道路の向ふ側へ歩るいて行つた。ピエールは彼等と話したかつたのだが道路でフランス兵の歩哨に止められて後に引つ歸させられた。

ピエールは歸つた、が、それは仲間が居た篝火へではなく、誰れも居ない、馬具を解いた荷馬車のところへであつた。足を折り曲げ頭を頂垂れて、荷馬車の車輪に倚りかゝりながら、冷たい土の上に

坐て、そして永い間身動きもせずに考へてゐた。一時間以上經つた。誰れもピエールを邪魔するものはなかつた。突然彼は大聲で、豊かな、機嫌の良い笑を發した。その聲は、この奇怪しな、明かに獨りで笑つてゐる笑聲を聞いて、人々が驚いて諸方を見廻はしたほど高かつた。『は、は、は！』と、ピエールは笑つた。そして聲高に獨言を云つた。『あの兵士が、俺を通さなかつた。彼奴等は俺を捕まへた！俺を檻禁した。彼奴等は俺を捕虜にした。『俺』とは誰れだ？俺——俺の不滅の靈魂は！は、は、は！……』かう眼に涙を浮べながら笑つた。

……は、は、は！……』

一人の男が立ちあがつて、この奇怪な大男が一人つきりで何を笑つてゐるのかを見るためにやつて來た。ピエールは笑を止めて立ちあがり、この見に來た闖入者から歩み去つて、そして周圍を見廻はした。

焚火のパチ〳〵いふ響と、人の話聲とで滿ちてゐた廣大な、果てしも知れない露營も、今や沈默して、赤い篝火は消えかゝつて薄暗くなつた。晴れた空には高く滿月がかゝつてゐた。前には陣營の向に見えなかつた森と野とが、今遠方に見え出した。ピエールは大空を凝視めたり、遠方を凝視めたり、瞬く星を凝視めたりしながら、『で、この一切のものは俺のものだ！』かう考へた。『そして彼奴等はこの一切のものは俺のものだ、この一切のものは俺の內にある、この一切のものを捕まへて、板で構んだ小舍の中へ閉ぢ込めたのだ！』彼は微笑んだ、そして寢るために仲間の傍へ行つた。

十五

十月の始め、ナポーレオンからクツウゾフへまた使者が來て、媾和を申込み、書翰を齎した。この手紙はモスクワから出した體に虚僞をついてゐたが、實際はナポーレオンは舊カルガ街道に於けるクツウゾフの方へさほど前進してはゐなかつたのであつた。クツウゾフはこの書翰に對しても、ローリストンが持つて來た最初の書翰と同じやうな返事をした、つまり媾和は問題にならぬと答へたのである。

その後間もなく、タルチイノの左方に出動してゐたグラホフの率ゆる遊擊隊から、佛軍がフオミンスコエに現はれたこと、その佛軍はブルウシイエの師團に屬してゐるものだが、同師團は佛軍の殘りのものと別れてゐるから、容易に粉碎し得べきことなどを報告して來た。將卒は再び攻擊を强請した。タルチイノの容易な勝利で活氣附いてゐた參謀部の將官等は、グラホフの勸告を實行すべきであるとクツウゾフに迫つた。

クツウゾフは如何なる攻擊も必要だとは考へなかつた。已むを得ずして中間の方法が採用された。と云ふのは、一小枝隊がブルウシイエを攻擊するために、フオミンスコエに送られたのである。

不思議な機會で一番困難な、結果から見ると一番重要なこの任務が、溫順い小柄の ダフツウロフ

將軍に與へられた、何人も、この男が作戰の計畫をしたり、聯隊の先頭に立つて突進したり、砲臺に多くの困難を與へたり、その他これに類することをしたと吾々のために叙述したものはない。何人もこの男を決斷心と洞察力とを缺いてゐると見做しもし、さう語り合つてもゐたのである。然るに、アウステルリツツ戰役から、一八一三年に至るまで、全露佛戰爭を通じて、彼がいつも特に六ケ敷しい地位に立つて指揮してゐた事を、吾々は發見する。

アウステルリツツに於ては、みなの者が逃走し、或は殺されて、他の將官は一人も後陣にゐなかつた時に、彼は聯隊を再び編成し、自分の力の能ふ限りを以つて救つたアウゲスト水流に、最後まで踏み止まつた者であつた。

彼は熱病に犯されてゐたにも拘らず、全ナポーレオン軍に對してその市街を防護するために、二萬の兵を率ゐてスモオレンスクに行進した。スモオレンスクに於ては、彼はマラホフスキイ門で熱病の發作のため眠りに就いたばかりの時、スモオレンスク砲擊の響に眼を醒ました、そしてスモオレンスクはその日終日持ち堪へた。ボロデイノに於ては、バグラチオンが戰死し、露軍の左翼隊の士卒で九分まで斃殺され、全佛軍砲兵隊の砲火がその左翼隊に集中せられた時、クツウゾフは前に誤つて送つた將官を呼び戻し、決斷心と洞察力とを欠いてゐると言はれてゐたダフツウロフその人をたゞ獨りそこに送つた。そこで內氣な、小男のダフツウロフは出かけて行つたが、ボロデイノはロシアの武器の

最大の光榮となつた。そしてボロディノ役に於ける多くの英雄は、散文や詩で讃美せられてゐるが、ダフツウロフに就いては一語も言及されてゐない。またダフツウロフはフオミンスコエにも送られた、そしてそこから、更にフランス人との最後の戰闘が闘はれた、明かに佛軍の最後の破壞が實際に始まつた。マレイ・ヤロスラーウエツに送られた。そして又多くの英雄と天才者は、この戰役の記錄中に記載されてゐるが、ダフツウロフに至つては、曖昧な數語の讃辭以外に何も記載されてゐない。ダフツウロフに關するこの沈默は、彼の功績の最も明かな證據である

機械の作用を知らない人が、機械の動いてゐるのを見る時は、偶然に機械が落ちかゝつて、ブラブラ垂れ下りながら、機械の運轉を妨げてゐる一片の刮屑を、その機械の最も重要な部分だと想像するのは、自然なことである。機械の構造を知らない人は誰でも、この刮屑は機械を妨げたり汚したりするに過ないもので、音も立てずに廻轉してゐる小さな齒車こそ主要な部分の一つなのだと云ふことを考へ得ない。

十月十日にダフツウロフはフオミンスコエへ向つて、その半路だけ進み、アリストーウオ村に軍を駐めて、與へられた命令を精確に行ふためにさま〴〵の準備を整へた。同日全佛軍は一時力みの突進で、ミユラーの陣地に達した後、突然何の理由もなく、戰闘をする目的があるとでもいふやうに、新カルガ街道に向つて、左方に迂回した、そしてそれまではブルウシイエがたゞ獨りでゐたフオミ

ンスコエに向つて、行進を始めた。この時、ダフツウロフの指揮してゐたのは、ダラホフの部下と、フイグネル及びセスラービンの二個小枝隊であつた。

十月十一日の薄暮、セスラギンは、フランス近衞兵の一捕虜を連れて、アリストーウオ村にゐる將官のところへ來た。この捕虜の語る處によれば、その日フオミンスコエに達した軍隊は全軍の前衞であつて、ナポーレオンがその中にゐる、そして全軍は五日前にモスクワを出發したとの事であつた。同じ日の夕方、バロブスクから來た隷僕は、その市街に入りつゝあつた大軍を見たと言つた。これ等の言に徵するに、彼等が一師團しかゐないと思つてゐた所に、今や思ひがけない方向、舊カルガ街道を通つて、モスクワから行進して來た全佛軍がゐるのだと云ふ事が解つた。ダフツウロフは、今や自分の義務が何處にあるかを明かにし得なかつたので、如何なる行動を執るのをも欲しなかつた。彼はフオミンスコエを攻擊する命令を受けたのであつた。が、その時はフオミンスコエにはブルウシイエだけしかゐなかつたのが、今は全佛軍がそこにゐるのである。イエルモロフは自分の判斷によつて、行動しやうとしたが、ダフツウロフは、總司令官殿下の訓令を得なければならぬと主張した。終に、參謀部に報告を送ることに決せられた。

この目的のために、彼等は伐俐のある將校のボルホキツチノフを選んだ、將校は報告を持つて出かけて行つて、口頭で凡ての事情を說明しなければならなかつた。深更に、ボルホキツチノフはその急

書と口頭の訓示とを受け取り、副の馬を連れたコザック兵を伴れて、司令部に向け馬を走らせた。

十六

暗い、溫かい、秋の夜であつた。雨がこの四日間降りつゞけてゐた。ボルホヰツチノフは馬を二度變へて、泥濘い辷る道を一時間半に三十露里駈けた。深更の一時過ぎにレタシエーフコに達した。『司令部』と、記した疎籬のある小舍の前で馬を降り、馬を曳かして、暗い入口に入つて行つた。

『當番の將校に直ぐ！　重要報告！』暗黑の中で飛び起きてゼイ〳〵喘いでゐる人間に向つて、彼は叫んだ。

『閣下はタ方からお加減がひどくお惡いんです、閣下は三晩眠まれなかつたのです、』と、傳令兵の聲が、妨げるやうに囁やいた。『大尉を先へ起さなくちやいけません。』

『將官ダフツウロフからの重要報告！』と、ボルホヰツチノフは開いた戸を探しながら言つて、中へ入つて行つた。

傳令兵は彼よりも前に入つて行つて、誰かを起し始めた。

『閣下、閣下、急使でございます。』

『ええ？　ええ？　誰から？』と、睡むさうな聲が言つた。

『ダフツウロフから、アレキセイ・ペトロヰツチから、ナポーレオンが、フオミンスコエにゐるんです。』と、ボロホヰツチノフは、暗黑の中にゐる聲の主人を見ないで、併しその聲はコノウニツツインではないと思ひながら言つた。

起された人は欠をしたり、伸身をしたりした。『彼を起したくないなあ、』かう、何ものかを手探りしながら言つた。『彼は病氣なんだ！　多分、それは風說に過ぎないんだらう？』

『こゝに報告書があります。』と、ボルホヰツチノフは言つた。『私は、これを當番の將官に渡せといふ命令を受けたのです。』

『少し待ち給へ。火を打つから何をしてゐるんだ、馬鹿！』と、睡むさうな聲が、傳令兵に對つて言つた。聲の主人はコノウニツツインの副官のシユチエルビニンであつた。『發見つた、發見つた、』さう附加へた。

傳令兵は火を打ち、シユチエルビニンは燭臺を探した。

『あゝ、穢い獸！』と彼は忌々しさうに言つた。

火打箱の火花の光で、ボルホヰツチノフはシユチエルビニンの若い顏と、部屋の隅に、もう一人寢てゐるのとを瞥見した。これはコノウニツツインであつた。

始め引火奴が青く燃え、次ぎに赤い炎となつた時に、シユチエルビニンは、脂燭——それを嚙つて

ゐた蚜蟲が、四方八方へ飛び散つた——に火を移して、それから使者を見た。ボルホヰツチノフは全身跳泥だらけになつてゐた、袖で顔を拭いたので顔も泥で汚れてゐた。

『だが、誰がそんな報告をしたのだね？』と、シュチェルビニンは封筒を受取つて言つた。

「報告は、確實です。」と、ボルホヰツチノフは言つた。『捕虜と、コザック兵と、間諜の言つたことが、皆一致するのです。』

『うん、これは、そのまゝにして置くことは出來ない、彼を起さなくちやならん。』と、シュチェルビニンは起上つて、寢帽を冠り軍用外套を身體に被けてゐた眠つてゐる人に近づきながら言つた。『ピヨートル・ペトロヰツチ！』と、彼は言つた。コノウニツツインは、動かなかつた。『司令部の御用でございます。』と、かう言へば必らず彼が起きるだらうと思ひながら微笑んで言つた。そして、實際直ちに寢帽を冠つてゐる頭が持上つた。コノウニツツイの、熱があるやうに頬の脹れた、強い、美しい顏は、その刹那には、まだ現實と離れた夢みるやうな容相を帶びてゐたが、併し咄嗟の間に立上つた、その顏は平素の表情である溫和と氣力とを回復した。

『えツ、それは何だ？誰からだ？』と、彼は直ちに、でも落着いて、燈火のために目を瞬きながら言つた。この將校が彼の言ふことを聽きながら、封筒を破つて讀み下した。彼は毛絲の靴下を穿いてゐたその足を、土床に下して、その長靴を穿き始した時までには、それを讀み終らなかつた。で、

寢帽を脫いで、その髮を梳りながら軍帽を冠つた。

『君は、大急ぎでこゝへ遣つて來たんかね？殿下のところへ行かう。』

コノウニツツインは、この報告が重大なもので、一時も遲れてはならないのであることを直ぐ樣了解した。この報告が好いか惡いかに就ては、彼は意見を持たなかつたし、自分で考へて見ようともしなかつた。そんなことは、彼には興味がなかつた。彼は、戰爭と云ふ問題を、智識や、道理をもつては見ずにそれとは違つた或るものをもつて見てゐた。彼は心の中に、萬事が好都合に行くだらうといふ深い、不變の信念をもつてゐたが、これを信ずるのは宜しくないことだと思ひ、これを人に語るのは尙一層宜しくないことだ、たゞ自分の義務を盡してゐればそれでいゝのだと思つてゐた。で、自分の義務を盡し、それに全精力を傾けた。

ピヨートル・ペトロヰツチ・コノウニツツインは、ダフツウロフと同樣に、バアクレイ、ラーエラスキイ、イエルモロフ、プラトフ、ミロラドヰツチ等の如き、一八一二年の所謂英雄の連中の中に、たゞ形式的に加へられてゐる。彼はダフツウロフと同樣に極めて範圍の狹い力量と才能をもつてゐる男として知られてゐた、そして、ダフツウロフと同樣に作戰計畫を立てたことはなかつたが、いつも最も困難な地位に立つてゐたのであつた。當番將官の任務を受けてから彼は入口の戶を開けたまゝで寢て、どんな使者が來ても直ぐ起すやうにと命令して置いた。戰場では砲火の下に在るのを常とするの

で、クツウゾフはそれがために彼を叱責し、彼を戰線に送るのを怖れたほどであつた。彼はダフツウロフと同樣に、軋みもせずガタ〳〵いふ音も立てずに廻りながら、機械の最も主要な部分を形成してゐる、かの目立たない齒車の一つであつた。

小舍から濕つぽい、暗い夜の中へ出て、コノウニツツインは、半ばは、ひどくなつた頭痛のために、半ばは、この報告が、參謀部に於ける權勢家連の巢をどんなに騷がすであらう、殊に、タルチイノ役以來クツウゾフと軋轢になつてゐるベニグゼンにどんな結果を與へるであらう、彼等はどんなに、臆說し、議論し、命令し、反對の命令を與ふるであらう、などといふやうなことを考へ出して不愉快になつたために顏を顰めた。で、かゝるさま〴〵の豫想は、それが避く可からざるものであることは知つてゐたが、それが彼には不愉快であつた。

彼が報告書を渡しに行つたトオルは果して、直ぐ自分と住居を共にしてゐる將官に向つて、此の形勢に對する意見を述べ始めた、そして、コノウニツツインは、痺れを切らして、それを聽いてゐた後で、彼等が殿下のところへ行かなければならぬのだということを思ひ出した。

十七

クツウゾフは、老人のと常して、夜は眠れなかつた。彼は、晝間は、時々假睡をするが、夜は、着物も換へずに、寢床の上に橫はり、大抵眠らないで、考へてゐる。

その晩も、彼は、その大きな、重い、傷跡の遺つてゐる頭を、その肥つた手で支へ、寢床の上に橫はつてゐた。彼は片方の眼を大きく開いて、闇の中を凝視めながら、考想に耽つてゐた。

皇帝と通信をしてゐる、參謀部の連中の誰よりも勢力のあつたベニグゼンが、彼を避けてゐたので、クツウゾフは、その兵卒を無益な攻擊運動に導くことを强いられなかつた。從つて前よりも氣樂であつた。クツウゾフの心に痛ましき記憶となつて殘つてゐる、タルチイノ役及びその戰爭の前日の教訓は、彼等には亦感銘を與へたに違ひない。時と忍耐、これこそ自分の金科玉條だ!』と、クツウゾフは考へた。林檎は靑いうちに摘いではいけないと彼は思つた。『攻擊をとれば、損害を受けるばかりだといふことが、彼は考へた。林檎は靑いうちに摘いではいけないと彼は思つた。熟すれば、自然にそれは落ちるだらう、けれどもそれを摘げば、林檎を損じ、樹を損じそして齒を浮かせる。經驗を積んだ獵師の樣に、彼は、獸が傷ついてゐること、全ロシア軍がそれに傷つけ得られるだけの傷をつけたこと、だが、死ぬか死なないかはまだ未定の問題であることを知つてゐた。いまローリストンやベルトミイを送つたことや、遊擊隊の齎らした報告などから察してクツウゾフは、傷が瀕死のものであつたことを殆んど確かめた。が、それ以上の證據が必要であつた。彼

は待たねばならなかつた。

『彼等は、突進して、どんなに敵に傷を負はせたかを見たいんだ。まあ、少し待て、今に分るがらう、やれ、操縦、やれ攻撃、そんなことばかり言つてゐる、』と、彼は思つた。『何になるんだ？　どうかして功名をしようといふ事ばかりをしてゐるんだ。まるで戰爭するのが面白いとでもいふやうだ。いくら物の道理を云つて聞かせても解らない子供と同じことだ、自分達がどんなにうまく闘へるかを見せようとばかり思つてゐるんだ。だが、今の問題はそんなことぢやないんだ。まあ、彼奴等はみんな、なんて結構な策略を建てるんだらう！　彼等は二つ三つの不慮の場合を考へると（彼はペテルブルグからの一般策略を思ひ出してゐた）それですべての場合を考へたやうに思つてゐる。しかし不慮の場合にはかぎりがないのだ！』

ボロヂイノで負した傷が致命傷であつたかどうかといふやうな、取り止めのない問題が、全一ケ月の間クツウゾフの頭に蟠まつてゐた。一方では、フランス人はモスクワを占領した。と一方では、クツウゾフは、自分が全ロシア人と一致共力して、その全力を以つて加へた恐ろしき打撃が、致命傷を負はしたに違ひないといふことを心底から、瞭然と感じてゐた。だが、ともかく、證據が必要であつたので、彼は一ケ月の間それを待つてゐた。そして彼は時が經つにしたがつてだんだん我慢が出來なくなつた。彼は寢られぬ毎夜その寢床の上に横たはつて、年齡の若い將官等のするのと同じことをし

た。彼がそのために彼等を叱つたのと同じことをした。彼は、若い人と同じやうに、あらゆる不慮の場合を想像して見た、たゞその若い人と違つてゐるところは、彼がかう云ふ假定の上にその結論を置かなかつたことゝ、かういふ不慮の出來事は、二つや三つではなく、數知れずあるものと見てゐたことであつた。考へれば考へる程、彼は不慮の出來事の多くを見た。彼はナポーレオン軍が全部又はその一部を以てペテルブルグに向つて、彼の側面から彼を擊つて來る時（彼はそれを最も恐れてゐた）のさま〴〵の行動を想像した。又ナポーレオンが自ら武器をとつて彼にかゝつて來はしないか、又モスクワに腰を据えて、彼を迎へて待ちはしないかといふことを想像した。クツウゾフはナポーレオン軍がメヂイン及びユーノフまで、あともどりをしはしないかとさへ考へた。所がクツウゾフが豫知し得なかつた一事が起つた——それは、モスクワから進軍を始めた十一日間に於けるナポーレオン軍の、狂人じみた、痙攣的な遁走——クツウゾフが思ひ及びだもしなかつたその遁走が、佛軍の根本的破碎を可能ならしめた一事である。

プルウシイエ師團に屬するダラホフの報告、ナポーレオン軍の艱難に關する遊擊隊の齎らした報告、モスクワ撤退の準備に關する風評、總てのものは佛軍が打擊を受けて逃亡の準備中であるといふ假定を確かにした、しかし總てこれは單に若い人々にとつて重大に思はれた假定に過ぎなかつたのだ。クツウゾフにとつては何でもないことであつた。その六十年間の經驗を以てして、彼は風評に何程の價

値を置くべきかを知つてゐた。彼は人々が何ものかを欲する時には、その欲するものを確實ならしむるやうに、さま〴〵の證據を手細工へたがるものだといふことを知つてゐた。そして、彼は人々がかういふ場合には、凡ゆる反對の重要な證據を氣が附かずに見逃してしまふものだといふことを知つてゐた。で、クツウゾフは、この假定の正しいことを望めば望むほど、それを信じやうとする自分に鞭を加へた。

この問題は彼の凡ゆる精神力を吸ひ取つた。それ以外のものは、彼にとつては、たゞ世の中の家常茶飯事に過ぎなかつた。その家常茶飯とか世の中の習慣といふのは、參謀部の將校との會話とか、ペテルブ・チノから書き送つた、スタエル夫人への手紙とか、ケランスの小說とか、賞與の分配とか、タルルグとの通信とか、凡てさういふものゝことである。しかし、彼のみが豫知してゐたフランス軍の破滅といふことは、彼の心を吸收する唯一の欲望であつた。

十月十一日の夜、彼は肘に倚れてそのことを考へてゐた。

次ぎの間に、人の氣配がした、そして彼はトオルとコノヴニツチンとボルホキツチノフとの足音を聞いた。

『おい、誰だ？　入れ、入れ！　何か變つたことがあるか？』と、總司令官は彼等に言つた。

從僕が、蠟燭を點してゐる間に、トオルは、報告の大體を語つた。

『誰がその報告を持つて來たのかね？』と、クツウゾフは尋ねた、蠟燭の點ると共に、トオルはクツウゾフの冷嚴な顏を見てハツとした。

『それには、少しも疑ふ餘地がございません、殿下。』

『その男を呼べ、その男をこゝへ呼べ！』

クツウゾフは、片方の足を寢床から出し、身體の下に折り曲げた片方の足の上に、その扱ひ難い、肥滿つた身體を置いて坐つた。彼は自分が知らうと思つてゐることを、使者の顏から讀まうとでもするやうに、使者をよく見ようとして、その見える方の眼を瞬たいた。

『話せ、話せ、君。』と、彼は胸が開かつてゐたので、襯衣を引き合せながら、低い、年老つた聲で、ボルホキツチノフに言つた。『こつちへ來給へ、もつと近くへ來給へ。その君の持つて來た報告といふのは何だね？　えゝ？　ナポーレオンがモスクワから行進たといふのか？　眞實にさうかね？　えゝ？』

ボルホキツチノフは、自分の受けた使命を詳細に繰返へし始した。

『さあ、話せ、早く、俺の氣を焦燥たせるな。』と、クツウゾフは、彼の言葉を遮つた。

ボルホキツチノフは、すつかり喋つてしまつて、さて訓令を待つてゐた。トオルが、話しかけたが、クツウゾウはそれを遮つた。彼は何事かを言はうとしたのだが、その刹那に、顏を顰め始めた、彼は

トオルに向つて手を振りながら聖書が掛つてゐるので、黒く見える小舎の隅の方へ、他の道を通つて行つた。『吾が造主なる主よ？　爾は、吾々の祈禱を聽き届けて下さいました……』と、彼は、手を握り締めながら顫聲で言つた。『ロシアは救はれます、感謝いたします、おゝ主よ、』そして、彼は涙に咽んだ。

十八

この時から戰爭の終局に至るまで、クツウゾフの全活動力は、自分の權力によつて、狡計によつて、さては懇願によつてその軍隊に、滅びようとしてゐる敵に對して無益な攻撃や、作戰や、小戰鬪をすることを止めさせやうとすることに盡された。ドウツロフはマレイ・ヤロスラーウエツに進んだ、しかしクツウゾフは主隊を率ゐて躊躇してゐた、そしてカルガ市の撤兵を命令した、敵は必ず同市を過ぎて退却するだらうとクツウゾフには思へたからである。

クツウゾフは到る處で撤退した、が、敵は、クツウゾフの撤退するのを待たずして、反對の方向に退却した。

ナポーレオン史家は、タルチイノ及びマレイ・ヤロスラーウエフに於ける、彼の巧妙な軍の操縱を叙

べて、ナポーレオンが若し南方の豊富なる諸州に入ることが出來たなら、どんな結果になつたらうと論じてゐる。

しかし、史家が、ナポーレオンが、斯ういふ南方の諸州に進軍するのを阻害する何物もなかつた（露軍が道路をあけてゐたのだから）といふ事實に一言も論及してゐないのを見ると、史家は、當時、ナポーレオン軍それ自らが免る可からざる破滅の芽をもつてゐたので、何物もナポーレオン軍を救ひ得なかつたといふことを忘れてゐるのだ。何が故にモスクワに於て豊富なる糧食を發見しておきながら、それを貯藏し得なかつたのみならず、それを足下に蹂躙したその軍隊が、又スモオレンスクに入つても糧食を貯藏し得ないで、無暗に掠奪を擅まにしたその軍隊が、何が故に住民といへばモスクワと同じロシア人種が住んでをり、火といへば彼奴等がつけさへすれば何物をも燒き盡すべき、同じ性質をもつてゐるカルガ州に於て、自分を救はうとはしなかつたのか。

佛軍はどうしても自分を回復し得なかつたのだ。ボロヂイノ役及びモスクワの掠奪以來佛軍は、恰度その身中に滅亡の化學的要素をもつてゐるとでもいふやうであつた。

軍を形成してゐた兵卒は、何處に行くかを知らずして、軍の指揮者と共に逃げた。ナポーレオン及びその周圍の兵卒どもは、みんなが朦氣に意識してゐた絶望的な地位から、出來るだけ早く逃げたいといふ唯一つの希望に充されてゐた。

マレイ・ヤロスラーウエツの會議に於て、フランスの將官等が沈着な風を裝つて、執る可き行動に就て、さま〴〵の說を述べた時に、ムウトンといふ率直な軍人が、執る可き唯一の行動は、出來るだけ早く逃げることであるといふ、總ての人々の考へてゐたことを言つて除けたので、人々は口を噤んだ。何人も、ナポーレオンさへも、總ての人々が認めたこの眞理に反對しなかつた。

しかし何人も出發せねばならぬと思つてはゐたが、さて自分等が逃走するのだと思ふと、恥辱を感ぜざるを得なかつた、で、この恥辱に打ち勝つだけの、外部から來る何かの衝動が必要であつた。とこ ろがさうして待ち受けてゐるところへ、その衝動が來た。それはフランス人の所謂 "le Houra de l'Empereur"（皇帝の伏兵）であつた。

會議の翌日、早朝、ナポーレオンは、軍隊の檢閲と、そして過去の戰場でもあり、又將來の戰場でもある場所の檢分とを名として、朝早く元帥と護衞兵を從へて、その軍隊の隊列の中央に馬を進めた。戰利品を探してゐたコザツク兵が、偶然にも皇帝と出遭し、殆んど彼を捕虜にしやうとした。この日、ナポーレオンをコザツク兵の手から救つたものは、即ち戰利品であつた。彼等は今ナポーレオンには目も呉れずに、戰利品に對して突進したので、ナポーレオンは、うまく逃げ出したのであつた。

"les enfauts du Don"（ドン河の子供等）が若しナポーレオンを彼の軍の中央で捕虜にし得たならば、出來るだけの速力で最も近い、最も馴れた道を逃げ出すより他に仕方が無かつたに違ひない。年齡四十歲に達し、肥滿せる體軀を有せるナポーレオンは、すでにその無限の策略と勇氣とをもつてゐなかつた、そこで彼はすつかりこの凶兆を信じ込んだ、で、コザツク兵が彼に與へた恐怖に捕はれて、彼は直ちにムウトンの說に同意し、歷史家が叙べてゐるやうに、スモオレンスク街道に沿うて、退却すべき命令を發したのである。

ナポーレオンがムウトンの說に同意して、しかも軍隊がその方向に退却しなかつたといふ事實は、ナポーレオンの命令がその退却を決定したといふことを證據立てはしないで、たゞ、全軍の上に働きそしてそれをモザイスク街道に沿うて動かした力が、同時にナポーレオンにも働きかけたといふことを證據立てゝゐるのである。

十九

人が自ら運動をなしつゝあることを知る時には、常にその運動の目的を發見する。一千露里を步まうとするには、その一千露里の向ふに、何かいゝものがあることを信じなければならぬ。步いて行く

方を得るためには、希望の土地の幻影が必要である。フランス人が、ロシアへ行軍をした時に、その希望の土地はモスクワであつたが、退却した時には、その希望の土地は彼等の故國であつた。が、彼等の故國は餘りに遠かつた、一千露里を歩む人は、その最後の目的を脇へ除けて置いて、今日は睡眠をとることの出來る休息場まで四十露里歩まなければならぬなどと、毎日思うやうに、どうしてもなるものである、この休息場が最後の目的を蔽ふてしまふので、最初の停止までは、その人の凡ゆる希望や慾望は、その停止に集中される、個人に現れるさま〴〵の衝動は、群集に於ては、非常に誇大されるのが常である。

舊スモオレンスク街道に沿ふて逆進しつゝあつたフランス軍にとつては、最後の目的即ち彼等の故國は餘りに遠方であつた。そしてさま〴〵の希望や欲望が群集の力で非常に強められて、集中されてゐた手近の目的は、スモオレンスクであつた。

彼等——それを知つてゐる者も、知らない者も同樣に——が自ら欺き、希望の國でさもあるかのやうに、スモオレンスクに突進したのは、兵卒等がスモオレンスクに糧食が澤山あることや、補充兵がゐることを知つてゐたがためでもなければ、彼等がさう教へられてゐたためでもなく、(事實はこれに反して將官たちやナポーレオン自身は、スモオレンスクには糧食の少いことを知つてゐた)これが動く力を彼等に與へ、彼等の現在の困難を耐へ得しむる唯一のものであつたからである。

フランス軍は官道に出ると、異常な精力と、今までに無き速力とをもつて、彼等の思ひ附いた目的に向つて逃げ出した。フランス軍の群を一つの全體に結び附け、彼等に機みを與へた共通の衝動の外に、彼等を結束さした別の原因があつた、その原因は彼等の數の莫大なことであつた。重力の物理的法則に於けるが如く、彼等の莫大な集團が、個々の分子を自分の方へ引き附けたのであつた。

全體のやうに、何十萬といふ集團をもつて動いたのであつた。

彼等のうちの各個人は、たゞ一つの事——怖ろしい、不幸なその現狀から免れるために、降伏して、捕虜になることばかりを望んでゐた。が、一方ではスモオレンスクへ行かむとする共通の衝動の機みが、各個人を同じ方向へ引張つた。一方では數個軍團が、一分隊に降伏するのは不可能であつたが、それでもフランス軍は、お互が離れ〴〵にならむとするさま〴〵の都合のいゝ機會を利用して、捕虜になるのに適宜などんな小さな口實をも利用せんとしたのだが、いつもかゝる機會は生じなかつた。彼等の數そのものが、かくの如く結束せる集團をもつてした彼等の運動が、彼等をして、かくせしめなかつたのである、そしてこの大集團の全精力が投ぜられてゐるこの運動を止めることは、ロシア軍にとつては困難であつたばかりではなく、不可能であつた。この團體の機械的分裂は或る限度以上には、この團體の中に行はれてゐる分解の進行を速め得なかつた。

雪の塊は即時に溶かすことが出來ない。時の或る限度といふものがあつて、その限度以內では、如

何なる熱を用ひても、その雪を溶かすことは出來ない。却つて、熱が高ければ高いほど、殘つてゐる雪が固くなるものである。

ロシアの諸將官（ゼネラル）中では、クツウゾフを除いては何人も、この事を知らなかつた。佛軍がスモオレンスク街道に沿うて、とう〳〵逃亡を始めた時に、十月十一日の夜クツウゾフの豫知したことが事實となつて現はれ始めた。露軍の諸將官（ゼネラル）及び諸將校は、我れ勝ちにと功名手柄を競ひ、敵の退路を斷ち切り、フランス人を追及し捕虜とし攻撃せんとして、攻勢を執らんことを强請した。

クツウゾフのみは、攻勢を執らんとするこの强請に反抗することに、彼の全力（如何なる總司令官の力もそれよりは小さい）を用ひた。

クツウゾフは、吾々が今日言ひ得るやうには、彼等に語ることが出來なかつた。即ち、戰爭の目的は何であるか、何故道路の妨害をし、吾が兵士を失ひ、モスクワとヴイアズマの間で、戰爭もせずして、その軍の三分の一を失つた憐れな人間どもを、非人道的にも虐（しいた）ぐるかなどと、クツウゾフは彼等に詰問しなかつた。彼はその年齡（とし）の効（かう）で得た智識の貯（たくわへ）の中から、彼等が了解し得るものを引き出して、『黃金の橋』（『彼等をして黃金の橋を渡らしめよ』といふ、諺にて『彼等に自滅の凡ゆる機會を與へよ』といふ意味）の話をして聞かせたが、彼等はクツウゾフを笑つて、無二無三に突進し、傷つける獸に跳びかゝつた。

ヴイアズマの附近で、イエルモロフ、ミロラドキツチ、ブラトフ、その他の諸將は、フランス軍と接近してゐることを知つて、その退路を斷ち切り、佛の二軍團を追撃せんとする欲望を押へることが出來なかつた。彼等は、その企圖をクツウゾフに報告する時に、封筒の中へ急書の代りに白紙を入れて送つた。

で、クツウゾフが軍を制肘せんとして努力したにも關はらず、吾が軍人はフランス軍を追撃し、彼等の退路を妨げんと試みた歩兵聯隊は音樂を奏し、太鼓を打つて進撃し、フランス軍を殺し、自らも數千の兵を失つたといふ事である。

が、彼等の退路を斷ち切れたかといふに——一つも斷ち切れはしなかつたし、その側面に出ることも出來なかつた。そして、佛軍は、危險のために、ます〳〵密接（みつしり）と凝集（かたま）つて、一歩一歩だん〳〵その數を減じつゝ、猶スモオレンスクへとその死の道をつゞけた。

第六編

ボロヂイノの戰に引續いて、モスクワの占領となり、その後何等の戰爭をせずしてフランス人の逃走となつたことは、歴史上に於ける最も教訓のある現象の一つである。

爭闘をなす國家や人民の外面的活動力は、戰爭といふ形となつて現はれるものである、そして、國家や人民の政治力は、戰爭の勝敗に依つて、早速增減するものであるといふことは凡ゆる歴史家の一致するところである。

或る國王若くは皇帝が、他の國王若くは皇帝と爭つて、軍隊を召集し、その敵の軍と戰爭し、勝利を得て、三萬か、五萬か、乃至十萬の人を殺した、その結果として、一國家と、數百萬の人民を征服した、などゝ歴史上の記述が吾人に說いてゐるのは奇怪(おかし)いことである、また、人民全體の力の百分の

一なる軍隊が敗けた爲に、その人民が服從しなければならなかつた、と說いゐるのも、了解の出來ぬことのやうに思はれる。

しかし、一國の軍隊の勝敗が一國の勢力の增減の原因であり、尠くともその一定不變の徵候であるといふ記述の眞なる事は歷史上の凡ゆる事實が(吾々が知つてゐる限りでは)確かめてゐる。一つの軍隊が勝利を得る、すると直ちにその征服者の要求が被征服者の損害に對して增加される。だから軍隊が敗けた時には、人民は忽ちその敗戰の大さに比例して、その權利を失ふ、そして、若しその軍隊が、敗滅した時には、人民はすつかり征服されてしまふ。

これは(歷史に從へば)古代から現今に至るまでさうであつた。ナポーレオンの初期の戰爭はいづれもこの法則の例證となつてゐる。

アウストリア軍が敗けた時には、アウストリアはその權利を剝奪され、そしてフランスの權力と勢力は增した。エナ及びアウエルスタツトに於けるフランス人の勝利は、プルシアの獨立を破壞した。

が、突然、一八一二年に、フランス人はモスクワに至る迄の勝利を得た。モスクワは占領せられた、しかも、その結果は、ロシアではなくて、六十萬の佛軍が、次ぎにナポーレオンのフランスそれ自身が、その存在を失つたのである。歷史上の法則を强ひて事實に適應めやうとして、ボロデイノの戰場が、ロシア人の手に委ねられたと主張したり、若くは、モスクワの占領後、ナポーレオン軍を破壞する戰鬪が行はれたと主張したりすることは——それは不可能である。

ボロデイノに於ける佛軍の勝利以後、大戰鬪は無かつた、重要な小戰鬪さへも無かつた、しかも佛軍は存在を失つたのである。これは、どういう意味であるか？　若しこれが、支那歷史上の出來事でもあつたならば、吾々は、それは歷史上の事實ではない、事が法則に適應まらない時にする歷史家の手段だと言ひ得るのである。若しこれが極めて少數の兵士しか參加してゐない小規模の戰鬪であつたならば、吾々はそれを例外と見做し得るのである。處が、凡てこれはその人々のためには國家の死活問題であつた、吾々の父祖の面前で行はれたのであつて、且つこの戰場は吾々の知つてゐる如何なる戰爭よりも大規模のものであつたのである。

一八一二年の戰爭——ボロデイノからフランス人の最後の逃亡に至るまでの——結果は、勝利はいつも征服の原因ではない、征服の萬古不易の徵候でさえもないといふことを證明した、人民の運命を決する力は、軍隊や戰爭にさえ在るのでもなく、何か他のものの中に在るのであるといふことを證明した。

フランスの軍隊が、モスクワから出發する前の狀態を述べてゐるフランスの歷史家は、騎兵隊と砲兵隊と、輜重隊と、馬や家畜の飼葉とが無かつた事を除いては、「大軍隊」に於ては、萬事が秩序整然としてゐたと確說してゐる。附近の農夫がフランス人に飼葉を與えるは寧ろ燒く方がいゝと云つて、

枯草を燒いてしまつたので、この缺陷に對しては如何なる救治法も無かつた。

決して英雄的感情をもつた人々でないカルプやウラスの農民や、（フランス人の退却後、彼等はモスクワを掠奪するために、その車をもつて大急ぎで出掛けた）彼等と同樣な他の莫大の人民が、如何程高い價を拂はれてもその枯草をモスクワに持つて行くよりは寧ろ燒く方がいゝと、それを燒棄てゝしまつたゝめに、勝利はその常例の結果を齎らさなかつたのである。

總ての劍術の法則に從つて、劍をもつて眞劍勝負をなさんとする二人の人を想像せよ。擊劍が暫時續けられたとせよ。突然劍士の一人が自ら傷ついてゐることを知り、これは嬉戲ではない、死活の問題であるといふことに氣が附き、その劍を投げ棄て、手近にあつた棒を摑んで、それを振り廻はしたとせよ。で、悧巧にも彼の目的を達するために、一ばん宜い、一ばん簡單な方法を用ひたこの劍士が、武士道の傳習によつて鼓舞せられ、その眞劍勝負の眞の原因を隱さうと試みて、自分は劍術の法則に從つた眞劍勝負の勝利者であることを主張したと想像せよ。彼のこの眞劍勝負の敍述には、如何なる混雜と曖昧とが生ずるかと云ふことを想像するに難くない。

眞劍勝負は、劍術の法則に從つて鬪ふ可きものであると主張する劍士は、即ちフランス軍である、劍を投げ棄て、棍棒を握つたその敵は、即ちロシア軍である、そして劍術の法則に從つて、決鬪を敍述せんと企てたのは、かの戰史家達である。

スモオレンスクの兵燹の時から、戰爭の如何なる傳習にも屬せざる戰爭が始また。市街村落の燒棄、戰鬪毎の退却、ボロヂイノで受けた打擊、これに次ぐ退却、モスクワの燒棄、掠奪者の取押へ、糧食車の捕獲——凡てかゝる不規則なる戰爭は、その法則から外れてゐた。

ナポーレオンはそれを知つてゐた、で、彼がモスクワに於て、勝つた劍士の正しい態度をもつて立つてゐるのに、その敵手の劍の代りに太い棍棒が彼に對して振り擧げられるのを見て以來、彼は斷えず戰爭が凡ての戰爭の法則とは反對に行はれてゐることをクツウゾフ及びアレキサンドル皇帝に對つて不平を言つてゐた。（恰も、人を殺すに何か法則があるとでも言ふやうに！）ロシア人が法則を守らないといふフランス人の不平にも拘はらず、又最高級の地位にあるロシア人が、棍棒で鬪ふのを幾分か、恥かしく思ひ、試合の成規の姿勢をとり、巧みに突きを入れたり守つたりするといふ風にしたつたのにも拘はらず、民衆戰の棍棒が、その凡ゆる威嚇的な、堂々たる力をもつて振り擧げられた、そして人の趣味や法則又は功名手柄などにはお構ひ無しに、馬鹿々々しい單純と安全な結合とをもつて、その棍棒は振り擧げられ打ち下ろされて、全侵入軍が逐拂はれるまで、フランス人に働きかけた。

そして、その人民どもが一八一三年にフランス人のしたやうにはせずに、試合の法則に從つて禮をなし、立派に、鄭重に、劍欅をその寬大なる皇帝に捧呈したのは如何にも立派であつた。人民どもが試合の刹那に、相手がかゝる場合に規定の法則に從つて試合するかどうかを尋ねずに、無造作に、手

速く、手近にあつた棍棒を摑り上げて、憤怒と復讐の感情が嘲笑と憐愍になるまで、それをもつて打撃を加へたのは、如何にも立派であつた。

二

所謂戰爭の法則の最も明白な最も都合の宜い違犯の一つは、集團となつてゐる人間に對して、個別に働く人間の獨立行動である。かゝる獨立的活動は國民的な性質の戰爭には、常に見受けられる。この種の戰爭に於ては、群集は攻撃するために群集を形成せず、人々が小集團に別れて、單獨で攻撃し、優勢な敵に攻撃せらるゝ時は直ちに逃げ、攻撃すべき機會が來るとまた直ちに攻撃するのである。スペインの獨立兵、コオカサス山の山住種族の方法、及び一八一二年に於けるロシア人の方法は即ちこれである。

この種の戰爭は遊撃戰と呼ばれてゐたが、それは、この名が、その特種の意味を定義すると假定されてゐたからである。ところがこの種の戰爭は戰爭の如何なる法則にも從はず、間遠ひが無いと認められてゐる有名な戰術の法則の正反對である。戰爭の法則では、攻撃隊は戰鬪の際その敵よりもより強力ならんがために、その軍隊を集中することに定つてゐる。

遊撃隊（常に成功してゐることを歴史が證明してゐる）では、この法則の正反對を行つてゐる。軍隊では、軍隊の力の優劣はその兵數に比例するとしてある。軍學では、兵數が多ければ多いほど、その力が多くなると主張してゐる。"Les gros bataillons ont toujours raison"（大軍隊は常に正當である。）

この說は恰度機械學者が、運動體の量の同不同のみによつて、力の同不同を云爲すると一般である。力（運動量）は速力に量を乘けた積である。

戰爭に於ては、軍隊の力は、量に何かしら他のもの、卽ち、未知量Xを乘けた積である。

軍學では、歴史上軍隊の大數がその勢力と一致しなかつたり、少數が多數を征服したりする多くの例があるものだから、曖昧にこの未知の因子を認めんとして、或る時はそれを軍隊の幾何學的配列にありとし、或る時はそれを優秀な武器にありとし、そして大抵の場合は、それを指揮者の天才にあるとしてゐる。が、かゝる因子は、いづれも歴史的事實と一致する結果を與へない。

この未知量Xを發見せんとするには、人は唯戰爭に於ける、歴史上の英雄の活動力の結果に光榮を歸さうとする誤つた考を排斥すればいゝのである。

Xは軍隊の精神であり、軍隊を形成する兵士の鬪はんとする欲望、危險を冒さんとする欲望の大小であつて、天才ある指揮者の下に鬪つたかどうか、棍棒で鬪つたか、一分間三十發の銃で鬪つたかとい

ふやうな問題とは全く別である。闘はんとする欲望をもつて居る兵士は、彼等自身を闘ふのにより利益のある地位に置くものである。軍隊の精神は、量を乗けて力の積を與ふる因子である。

この未知數、即ち軍隊の精神の意味を定義し説明せんとするのは、科學の問題である。

この問題は、吾々が獨斷的に未知數Xの代りに將官（ゼネラル）の作戰だとか、兵卒の武器だとかいふやうな、依つて以て力が生ずる條件を置き換へることを止め、この未知數全部が戰闘し危險を冒さんとする欲望の多少であると見做（みな）す時にのみ解くことが出來る。それから、吾々が有名な歷史上の事實を方程式に表はす時にのみ、吾々はこの未知數を比較することによつて、その解決に近づくことが出來るのである。十人の兵卒、若しくは大隊、若くは師團が、十五名の兵卒、若しくは大隊若くは師團と闘つて勝つたとせよ、即ち、敵全部を殺すか捕虜にし、自分は四名を失つたとせよ。一方の損害は四で、一方の十五なのである。故に一方の十五と等しい譯である、故に $4x=15y$ となり、從つて又、$\frac{x}{y}=\frac{15}{4}$ となる。この方程式は未知數の値を示しはしないで、その値の比例を示してゐる。そして、かゝる方程式に種々の歷史的單位（戰闘、戰役、戰爭の期間）を置く時に、法則が存在し、法則の發見さるゝ數の一連鎖が得られるのである。

軍隊は攻撃の時密集し、退却の時は小團隊に分つべしといふ戰術上の原理は、軍隊の勢力がその精神に依るといふ眞理を無意識的に確めてゐる。砲火の下に兵を前進せしめるには、（それは密集團の行進によつてのみ達せられる）攻撃される時に自己防禦をなすに必要なよりも、より以上の訓練が必要である。が、軍隊の精神を見逃してゐるこの法則は、やはり不完全である、そして、軍隊の精神に非常に增減のある國家間の戰爭に應用する時に、殊に誤つてゐる。

一八一二年の退却の際に、戰術の法則によれば小團となつて自分を防禦すべき筈のフランス軍が、群集に團結（かた）まつたが、それは兵卒の精神が非常に銷沈したゝめ、唯自分等の數を賴りに思ふ外なかつたからである。戰術の法則によれば、これに反して、集團となつてフランス人を攻撃すべき筈のロシア人は、實にバラ〳〵になつた分隊で攻撃したが、それは各個人が命令を待たずしてフランス人を殺し、困難や危險を冒すに强制の必要がなかつたほどまでに、兵卒の精神が昂つたからである。

三

所謂「遊撃」戰は、敵のスモオレンスク到着と同時に始まつた。この不規則な戰が吾が政府によつて公然と認められゝ以前に、數千の敵兵——徘徊するもの、掠奪するもの、又は徴發隊——は、コザツク兵及び農夫によつて殺された、彼等は犬が道を踏み迷つた狂犬に對してゐるやうに、本能的に兵卒どもを殺したのである。デニス、ダギイドフは、フランス人を打つたこの恐ろしい棍棒の價値をロシア

人的本能で感じ、戰術の作法を問はなかつた最初の人であつた。そして、この戰法を最初に認めた第一人者だといふ名譽は彼のものである。

義勇兵の第一枝隊——ダギイドフの——は八月二十四日に形成され、他の隊も直ちにそれに續いて組織された。戰爭の終り頃には、かゝる枝隊がだん〳〵多くなつた。

義勇兵等は「大軍隊」を微塵に破碎した。彼等は枯木から自然に落つる落葉を掃除したり、又時には枯木そのものを搖つたりしたのであつた。フランス軍がスモオレンスクに逃げ出した十月の頃には、その數と性質とをさま〴〵に異にしたかゝる枝隊が幾百となくあつた。或るものは軍隊の常例に從つて、歩兵、砲兵、參謀官を有し、生活の便利をも持つてゐた。或るものはコザツク兵、騎兵ばかりから成つてゐた。或るものは歩兵及び騎兵から成る小數者の團隊であつた。或るものは農夫、地主、その農奴その他野次馬から成つてゐた。かゝる團隊の一つは、補祭を指揮者としてゐて一ケ月間に數百人を捕虜にした。また、數百のフランス人を殺したヴアシリイサといふ村老の女房などもあつた。

十月の後半はこの遊擊戰の極點に達した時であつた。この戰の初め頃は、義勇隊は自分等の大膽さに自ら驚くほどで、フランス人に包圍されはしないか、捕虜にされはしないかと刻々不安を感じて、追擊されるのは今か今かと鞍も外づさず馬からも降りずに、森の中に隱れてゐたが、その時期は既に過ぎ去つてしまつた。今や遊擊戰は、定まつた形式をとるやうになつた、フランス人に對して、成功すること〳〵、成功しないこと〳〵が、凡ての遊擊隊にとつて明かになつた。今や到底不可能だと思つてゐるのは、フランス軍から遠く離れて、參謀將校共と一緒に、法則に從つて行進してゐた枝隊の指揮官だけであつた。永い間働いて、フランス軍に接近して居る遊擊隊中の小團隊は、大團隊の指揮官が實行しやうとは思ひも及ばなかつた事を企てる事が出來るのを發見した。フランス軍中へと忍入つたコザツク兵や農夫共は、今は何事でも可能だと考へた。

十月二十二日遊擊隊の指揮者であつたデェニソフは、熱心にこの遊擊戰の模範的の作戰に從事してゐた。早朝から彼は部下と共に、國道を緣取つてゐる森の中を行進し、騎馬行李とロシア捕虜の大護衛隊との跡をつけてゐた。この一隊は他のフランス軍隊と離れて强力なる護衛隊の下に——彼がその斥候及び捕虜から聞いたところによると——スモオレンスクに向つて進んでゐたのであつた。デェニソフやダラホフ（彼も亦、この地方に出動してゐた或る大枝隊の指揮官であつた）ばかりが、この護衛隊の現はれたのを知つて居たのではなかつた。或る大枝隊を指揮する將官たちも亦、この護衛隊を知つてゐたのであつた、そしてデェニソフの言つたやうに彼等は口に唾を湧かしてゐた。かゝる將官たちのうちの二人——一人はポーランド人で、もう一人はドイツ人——は、殆んど同時に、デェニソフに書を送つて、この護衛隊を攻擊するために、自分等の枝隊に參加してくれと招いて來た。

「否、君、吾輩は昨日生れたんぢやないんだぜ！」これ等の書面を讀むとデェニソフはかう言つた、

そしてドイツ人に向つては、自分は立派な、名ある將官の配下に加はるのは懇望するところであるが、既にポーランドの將官の指揮下にゐるから、その光榮を棄却しなければならぬ旨を書き送つた。又ポーランド人に向つても同じ手紙を遣つて、自分は既にドイツ人の指揮下にあると告げた。

ヂェニソフはこの厄介をかういふ風に處置して、上官にこの問題を報告はしないで、ダラホフと共に小軍勢をもつて、この輜重隊を攻撃し捕獲せんとした。

十月二十三日に、輜重隊はミクリノオ村からシヤムシエウオ村に進みつゝあつた。ミクリノオ、シヤムシエウオ兩村の左側にあたつて、或る處は道路から一露里若くは一露里以上も離れてゐる大きな森があつた。ヂェニソフは少數の兵を從へて、その森の中央に入つたり、端に出たりしながら、斷えず行進せるフランス人を見失はずに、森の中を乘り廻はしてゐた。午前中に、ミクリノオから程遠からぬ、森が道路と接近してゐる邊で、ヂェニソフ隊に屬するコザツク兵が、泥に陷沒んで動かない、鞍を積んだフランス人の荷馬車二輛を發見して、それを森の中へと運び込んだ。その時から夜に至るまで、彼等はフランス人を攻撃はせずに、その行動を看視してゐた。彼等はフランス人を驚かす事なく、そのまゝシヤムシエウオまで行かせて、そこで、ダラホフ（彼等と方法を相談するために、その晩シヤムシエウオから一露里離れた森の中の約束の場所に來る筈の）と結び附いて、曉方兩面からその頭上に頽雪のやうに落ちかゝり、彼等を壓服して、その全部を捕へやうと思つてゐたのである。

六名のコザツク兵が、ミクリノオから二露里離れた道路が森に沿うてゐる所に、殘されてあつた。彼等はフランス人の新隊列が現はるゝや否や、直ちにそれを報告する事になつて居た。

シヤムシエウオの前面で、ダラホフはそれと同じやうに、どの位ゐ離れて、他のフランス軍隊がゐるかを知るために、道路を看視することになつてゐた。

輜重隊と一諸にゐる兵卒は千五百位ゐに思はれた。ヂェニソフの配下には二百名の兵卒がゐるし、ダラホフの配下には夫れよりも、もつとゐたらう、だが、兵數が優つてゐる事などは、ヂェニソフに取つて何の障碍ともならなかつた。彼が尙知らなければならぬ一事があつた、と云ふのは此の敵軍が如何なる種類の兵かといふことであつた、その目的を達するためには「舌」（即ち、敵の隊に屬する何人か）を一人捕へる必要があつた。午前中の荷馬車の攻撃は、餘り急いだので、荷馬車に隨いてゐる兵士をみんな殺してしまつた、そして僅かに自分の聯隊から迷ひ出で來た一人の小さな少年鼓手を生擒にしたに過ぎなかつたが、その少年ではどんな兵が隊を編成してゐるのかと云ふ確かな話が出來なかつた。

もう一度攻撃するのは、全隊を驚かす危險があると思つたので、ヂェニソフは出來ることなら、前衞から少くともフランス人の給養係を一人捕へたいものと考へて、チホン・シュチュルバトフと云ふ農夫を先づシヤムシエウオへ送つた。

四

溫かい雨の降つてゐる秋の日であつた。空も地平線も一樣に、泥水の色をしてゐた。時には霧が降つてゐるかと思はれ、時には俄にどしや降りの雨が斜めに降りつけた。

ヂエニソフは滴水の落ちる長い氈外套を着、高い毛皮帽を冠つて、痩せがたの、腹帶を固く締めた良種の馬に跨つてゐた。彼は頭を傾け、馬のやうに耳を立てゝ、降りつける雨に顔を顰めながら、心配さうに行手の方を見た。痩せ衰へて濃い、短かい、黒い髭の一面に生へてゐるその顔は、激怒してゐるやうに見えた。

ヂエニソフの傍には、これもやはり長い氈外套に高い帽を冠つて、潤澤して岩疊なドン馬に跨つた、コザツクの百人隊長がゐた——これはヂエニソフの計畫の仲間の者である。

もう一人、これも百人隊長で、ロヴアイスキイといふ矢張り氈外套に、高い帽を冠つて、ひよろ長い、板のやうに平たい體軀をした男がゐた、顏色の青白い、亞麻色の毛の、細いきら〳〵した眼をした男で、その顏にもその態度にも、和やかな自信の表情が浮んでゐた。これ等の馬や乘手に就いて、別にこれといふ程の事をとり立てゝ話すことは六ケ敷いが百人隊長とヂエニソフとを一目見ると、明かにヂエニ

フは濕れて心持が惡るさうであつた、彼は單に馬に跨つてゐるに過ぎなかつた、それに反して百人隊長はいつもの樣に心地快げで落ち付いてゐて、そして單に馬に跨つてゐる人とは見えないで、馬と人とが一つのものになつて、二つの力を合せ持つてゐるやうに見えた。

彼等の少し先きには、灰色の大外套に白い帽子を冠つて、ずぶ濡れに濡れてゐる案內者の農夫が歩いてゐた。少し後には、青いフランスの軍服を着た若い將校が、尾や鬣を垂れて口に血を滲ましてゐる、痩せた、優型の、キルギズ產の小馬に乘つてゐた。彼の傍には一人のフランス軍服に青い帽を冠つた少年を、馬の上の自分の後の方に乘せて歩いてゐた。少年は寒さに赤くなつた手で驃騎兵に捉まつてゐた、そして二人の身體を暖めやうとして、その裸の足を始終動かしながら、また眉を揚げて、不思議さうに身の周圍を見廻はしてゐた。これは午前中に捕へられたフランスの皷手であつた。

狹い、泥深い、ひどい森の道をば驃騎兵が三四人づゝ繫がつてやつて來た、それから、氈外套を着たり、フランスの外套を着たり、頭を引捩ぎつた馬衣を覆つたり、思ひ思ひの風をしたコザツクがやつて來た。その葦毛や栗毛の馬はみんな雨に濡れて黑く見えた。その頸は鬣が濡れてゐるので、妙に痩せてゐるやうに見え、蒸氣が雲のやうに立つてゐた。馬衣や、鞍や、馬勒などが、まるで土や又は路上に落ちてゐる落葉のやうに、濡れて粘り着いたり、眼れたりしてゐた。人々は寄り群つて、既にその

皮膚まで透つてゐる水を暖めるやうに、又その座席や、膝や頸に冷めたい雨を新たに滴さないやうに、凝つと動かずに馬に跨つてゐた。

コザツク兵の長い列の中央には、フランスの馬と、鞍を置いたコザツク兵の馬とに曳かれた二輛の荷馬車が、木株や枝の上をがた〳〵と轢り行き、その車輪からは水を跳ね飛ばしてゐた。

ヂエニソフの馬は路上の水溜を避けるために、その乗手の膝を樹に撃ちつけた。

『やあ、この畜生奴！』と、ヂエニソフは怒つて叫んだ。彼は齒を露いて、鞭で、三度その馬を打つたので、自分にも仲間にも泥を跳ねかした。彼は雨と饑（誰も今朝から何も喰つてゐなかつた）とのために、就中、ダラホフから何の報告も來ないために、敵情を知るために捕へるつもりのフランス捕虜が一人も捕まらないために不機嫌であつた。

『今日のやうな輜重隊に邂逅ふ機會は滅多にあるまい。獨りでこれを攻撃するのは危險だ、といつて明日まで延ばすと、誰か大きな遊撃隊の隊長が吾々の鼻先から戰利品を持つて行つてしまふだらう。』とヂエニソフは待ち受けてゐるダラホフからの使者が今にも見えはしないかと絶えず前方を眺めながら、考へた。

右の方を可成り遠くまで見晴せる空地まで來ると、ヂエニソフは立停まつた。

『誰か來るな、』と、彼は言つた。

百人隊長はヂエニソフが指さした方向を眺めた。

『二人やつて來ます——將校とコザツク兵と。屹度大佐御自身だと私が豫想するのはどうでせう。』と、コザツク兵の仲間では耳馴れぬ言葉を使ふのを好む百人隊長が言つた。二人の姿は丘坂を下りたので見えなくなつたが、數分間經つとまた見えだした。先頭の將校は髪を亂して、びしよ濡れになつて、衣袴を膝の上まで捲り上げてゐた。彼は疲れた馬に鞭打つて駈けさしてゐた。彼の後のコザツク兵は鐙の上に立ち上つて、馬を駈けさしてゐた。盤廣の赤い顏と敏捷い、惡戲好きさうな眼をした、まだほんの少年のこの將校は、ヂエニソフの傍まで駈けつけて、濡手紙を渡した。

『將官から』と、彼は言つた。『お手紙が濡れまして相濟みません……』

ヂエニソフは顏を顰めながら、手紙を受取つて封を切つた。

『みんなは危險だ危險だつて言ふんですが、』と、將校はヂエニソフが讀んでゐる間に、百人隊長の方を向いて言つた。

『コマロフ、』——と、彼はコザツク兵を指して——『と私は準備をしてゐたんです。二人ともピストルを持つてゐたんですね！　彼と話をしても構ひませんか？』

『ラストフ！ペエチヤ！』と、ヂエニソフはその時、渡された手紙に眼を通しながら叫んだ。『やや、何——や、これは何ですか？』と、彼はフランスの少年鼓手を見て言つた。『捕虜ですか？　もう戰鬪があつ

故君は自分の名前をいはないのだ?』と、ヂエニソフは微笑を浮べて振り向きながら、その手を將校の方に差し伸べた。この將校はペエチヤ・ラストフであつた。

ペエチヤは前から知合ひの間柄であるにも拘はらず、ヂエニソフの前では、大人がしなければならぬやうな、又將校がしなければならぬやうな態度をしやうと、道すがら用意してゐたのであつた。が、ヂエニソフが彼に向つて微笑むや否や、忽ち彼の顔は輝き、嬉しさに赤くなつた、そして遠慮してゐやうと思つた前の態度をすつかり忘れてしまつて、自分がフランス人の中を切り抜けて來たことや、この使命を與へられたのが何んなに嬉しいかといふことや、又自分はもうヴイアズマで闘つたといふことや、或る驃騎兵がその戰闘で手柄を顯はしたことなどを、ヂエニソフに語り始めた。

『うん、君に遭つたのは嬉しい、』と、ヂエニソフは彼の言葉を遮つた、しかし又彼の顔は心配さうに見えて來た。

『ミハイル、フエオクリチイチ、』と、彼は百人隊長に言つた、『これはまたドイツ人から來たんだよ。この男(ペエチヤ)はその部下なんだ。』そしてヂエニソフは今持つて來たその手紙には、輜重隊攻撃のために合同したいといふドイツ人の要求が繰り返へされてゐることを話した。『若し吾々が明日輜重隊を捕へないと、ドイツ人は吾々の鼻先から輜重隊を引浚らつていつてしまふよ、』と、彼は語を結んだ。

ヂエニソフが百人隊長に話してゐる間に、ペエチヤはヂエニソフの冷かな調子を見て當惑いた、そ

して之れは自分の衣袴の狀態の故だと考へたので、見られないやうに出來るだけ凛々しい風姿をするために、外套の下で密と衣袴を引下した。

『閣下は私に何か御命令がございませうか?』と、彼は手を帽子の上に當てながら、自分で遣るつもりで用意してゐた副官と將官の喜劇に立ち戻つて、斯う言つた、『それとも閣下と御一緒に、此所に居りませうか?』

『命令……』と、ヂエニソフは、自分の考想に心を奪はれながら言つた。『兎に角、君は明日まで此所にゐてもゐゝのか?』

『おゝ、どうぞ……此所にゐてもいゝのですか?』と、ペエチヤは叫んだ。

『所で、君の將官から何ういふ命令を與へられてゐるのだ……直ぐ歸れつてか?』と、ヂエニソフは尋ねた。

ペエチヤは顏を赤らめた。

『何も被言いませんでした。多分いゝと思ひますが?』と、彼は尋ねるやうに言つた。

『ぢやア、宜しい。』と、ヂエニソフは言つた、そして彼は部下の方へ振り向いて、休息所と定めてあつた森の中の小舍に行くやうに命令し、それからキルギス産の馬に乘つてゐる將校(この將校は副官の任務を勤めてゐた)にはダラホフを探しに行つて、何處にゐるか、晩に來るか何うかを尋いて來い

と命じた。

ヂエニソフ自身は百人隊長及びペエチヤとゝもに、彼等が明日そこで攻撃すべきフランス軍の位置を見るために、シヤムシエウオに近き森の端に馬を進めようとした。

『おい、』と、彼は案内者の農夫に言つた。『我々をシヤムシエウオへ案内してくれ。』

ヂエニソフ、ペエチヤ、百人隊長は、數名のコザック兵と、捕虜を連れてゐる驃騎兵とを伴ふて左に曲り、森の端の方へと峽谷を越えた。

五

雨は止んだが、霧が降つてゐたので、樹枝から雨滴が落ちてゐた。ヂエニソフ、百人隊長、ペエチヤは、頂上の尖つた帽子を冠つた農夫の後から默つて從いて行つた。農夫は大きな靴で樹の根や濡れた葉の上を輕るさうに音を立てずに歩きながら、彼等を森の端に案内した。

道路に出ると、農夫は立停つて、四邊を見廻はし、樹木の疎らな方へ進んで行つた。彼はまだ葉の繁つてゐる大きな櫟の樹の傍に立つて、密と彼等を麾いた。

ヂエニソフとペエチヤはその傍に馬を進めた。農夫が立つてゐた所からはフランス人が見えた。森

を越えた向ふには、麥畑が急勾配になつて、擴がつてゐた。右手には、險阻しい峽谷を越えて、小さな村落や、屋根を破られた莊園家宅が見えた。その村の中にも、家の中や花園中の丘の上にも、井戸や池の傍、さては橋から村へ上つて行く坂道の上にも、總て五百碼を離れてゐない邊に、群つてゐる人々が移つて行く霧を透して見えた。彼等は、丘に荷車を曳き上げてゐる馬に怒鳴り付てゐる人々の聞き馴れぬ聲や、互ひに呼び交はしてゐる聲を、瞭然聽き取ることが出來た。

『こゝへ捕虜を連れて來てくれ。』と、ヂエニソフは低い聲で、フランス人から少しも眼を離さずに言つた。

コザック兵は馬を降り、少年を抱へ下ろして、ヂエニソフの傍へ連れて行つた。ヂエニソフはフランス人を指さして、彼等が何軍隊であるかを少年に尋いた。少年は冷え切つた兩手を衣囊に突込み、眉を擧げながら、怖る々々ヂエニソフを見た、そこで彼は明かに自分の知つてゐることをスツカリ話さうと思つてゐたに拘はらず、間誤ついた答辯をして、反つてヂエニソフの質問を繰り返へすばかりであつた。ヂエニソフは顏を顰めて、他方を向いた、そして百人隊長にこの事に關する自分の意見を話した。

ペエチヤは、急がしく頭を廻して、大切なことは何一つ見逃すまいとして皷手からヂエニソフへ、百人隊長から村や道路にゐるフランス人へと眼を移した。

『ダラホフが來やうが來まいが、吾々は是非あれを取らなくつちや……ねえ?』と、ヂェニソフは眼を嬉しげに光らしながら言つた。

『これは都合の宜い場所ですな。』と、百人隊長は言つた。

『歩兵をあの沼の傍を通つて、下へ遣らう、』と、ヂェニソフは、村の向ふの森を指さした——『そしたら我輩は此所から驃騎兵を率ゐて突き落すんだ、』——と、ヂェニソフは続けた。『あの花園へ匐ひ上るだらう、そこで彼所から君がコザック兵を率ゐて行く。そして一撃の下に……』

『あの窪地を通ることは出來ないでせう、あれは沼ですから、』と、百人隊長が言つた。『馬が沈んでしまふでせう、貴下はもう少し左の方へお廻りにならなけりやいけません。』

二人が低い聲で話してゐると、池に近い下方の窪地で銃聲が聞えて、白煙が上つた、そして數百のフランス人がまるで愉快な合唱のやうな、喊聲を揚げて、丘の中腹まで上つて來た。最初の一瞬にはヂェニソフも百人隊長も逡巡した。彼等は自分たちが、その射撃と喊聲の目的であると思つたほどに、フランス人は近くにゐたのだ。しかし、手の附けやうがなかつた。何か赤いものを着けてゐる一人の男が、沼を下の方へ走り降りてゐた。フランス人は明かにその男を射撃して、叫んでゐるのであつた。

『おや、あれは吾々のチホンだ、』と、百人隊長が言つた。

『彼だ! 彼だ!』

『惡黨、』と、ヂェニソフが言つた。

『逃げうせますよ!』と、百人隊長は眼を瞬たきながら言つた。

チホンと呼ばれた男は、小河の岸まで走り着いて、その中に飛び込んだ、そこで水が身體の周圍に飛び散つたので、暫らくの間姿が見えなかつたが、やがて四つ這ひになつて匐ひ上り、黑く見える程びしよ濡れになつて逃げ出した。

フランス人は後を追つて居たのを止めた。

『うまい、敏捷い奴だ、』と、百人隊長が言つた。

『獸奴』と、ヂェニソフが前と同じ困つたやうな表情をして言つた。『彼奴は一體今まで何をしてゐたんだ?』

『彼は誰です?』と、ペエチヤが尋ねた。

『あれは吾々の斥候だ。私は舌を捕へるために彼を出したのだ。』

『あゝ、成る程、』と、ペエチヤは、ヂェニソフの初め言つた言葉に點頭いて、いかにも何も彼も知つて居るやうな風をしたが、その實一言も分つてゐなかつた。

チホン・シュチェルバトフは、ヂェニソフの部下中の最も役に立つ男の一人であつた、彼はグザアト

の近くのボクロヴスユオヱ村の農夫であつた。ヂエニソフは、遊撃隊長として働らく最初(はじ)にボクロヴスユオヱ村に來た、そして何時もするやうに村老(キレエチエルダア)を呼び寄せて、そのフランス人に關して知つてゐることを尋ねた。

村老(キレエチエルダア)は、いづれの村老(キレエチエルダア)も常に答へるやうに、フランス人をを見たこともないと答へたが、ヂエニソフが自分の目的はフランス人を殺すことにあると村老(キレエチエルダア)に說明して、フランス人がその村に迷ひ込まなかつたと尋(き)くと、村老(キレエチエルダア)は、慥かに『掠奪者』(Miroders)が幾人か來たことがあるが、かういふことに注意してゐるのはチシユカ・シユチエルバトフしかないと答へた。ヂエニソフはチホンを連れて來るやうに命じた、そしてその活動を稱贊して、村老(エルダア)の前で、皇帝と祖國に對する信念に就いて、又祖國の人々が必らず胸に刻銘せねばならぬフランス人に對する憎惡心に就いて、數言を費して。

『私どもはフランス人には何の害もしませんでした、』と、ナホンは明かにヂエニソフの言葉(ことば)を聽いて當惑した樣子で、斯う言つた。『あれはたゞ村の若い者や私の一寸(ちよつと)した惡戲(いたづら)なんでございます、で、『掠奪者』(Miroders)も——私どもは十二三人殺しましたが、その他には別にひどい目には合しませんでした……』

翌日、ヂエニソフはボクロヴスユオヱ村を去らうとした時には すつかりこの農夫のことを忘れて

ゐたのだが、チホンがその部下の中に加はつてゐて、是非その中に入りたいと云つて居るといふことを聞いた。ヂエニソフは、中に入れてやるやうに彼等に命じた。

始めの中はチホンは火を焚(た)いたり、水を運んだり、馬の皮を剝いだりするやうな荒仕事をしてゐたのだが、やがて彼は遊擊戰に對する非常な熱心と力量とを示めした。彼はよく夜間捕獲品を探しに行つたが、フランス人の着物や武器を持つて歸らないことはなかつた、そして命ぜられた時には、捕虜をも連れて戻つて來た。ヂエニソフは、チホンに賤役を止めさして、戰鬪に使ふことゝし、コザツク兵の中に加へた。

チホンは馬に乘るのを好かなかつたので、いつも徒步で行つたが、騎兵より遲れることはなかつた彼の武器は、武器といふより寧ろ戲言(じようだん)に持つてゐた小銃と、槍と、斧とであつた。斧は狼がその齒を使ふやうに——毛の中の蚤(のみ)を捕へたり、固い骨をパリ〳〵咬(か)み碎(くだ)くのと同樣に無造作(むぞうさ)に——巧妙(たくみ)に彼が使つたものであつた。それと同じ正確さを以てチホンはその斧を振つて、丸太を割り、又その端(さき)を用つて細い串を削つたり、匙を刻つたりした。ヂエニソフの部下の中では、チホンは特別の地位を占めてゐた。何か特に不快(いや)なこと、或は六ケ敷いことをする時には——泥濘に陷沒(はま)り込んだ荷馬車を肩で動かしたり、泥の中から尾を引張つて馬を曳き出したり、馬の皮を剝いだり、フランス人の中へ匐ひ込んだり、一日に五十露里(ヴエルスト)歩いたりする時には、みんなは笑つて、チホンに夫れをさせるやうにするの

であつた。

『どんなことをしたつて彼奴は大丈夫なんだ、惡魔奴、彼奴は岩疊な獸なんだ、』と、彼等は彼を云ふのであつた。

或る日、チホンが捕へたフランス人が彼の背の肉の部分を拳銃で射つて傷けた。この傷を癒すのに、チホンがたゞ火酒を——內からと——外からと用ひたゞけであつたのが全隊の愉快な笑草の種となつた。そしてチホン自身も彼等の戯言の仲間入りをするのを辭しなかつた。

『やア、君、どうだい、もう一遍負傷をしたかアないかね！　駝背になつたぢやないか！』と、コザツク兵は笑つた、でチホンは顏を曇らせて、故意と怒つてゐるやうな顰め面をして、ひどく滑稽な誓詞でかのフランス人を罵つた。チホンは、この事件があつてからといふものは、滅多に捕虜を連れて來なかつた。

チホンは隊中で最も大膽な、最も役に立つ男であつた。何人も彼ほど多くの攻撃の機會を見付けた者はなかつた。何人も彼ほど多くのフランス人を殺した者はなかつた。だから彼はコザツク兵や驃騎兵隊中の道化役であつた、そして彼はその地位に甘んじてゐた。

チホンはその前の晩から『舌』を捕へるために、チエニソフにシヤムシエウオへ遣られてゐた。が、彼がフランス人一人を捕まへたので滿足しなかつたのと、終夜眠つて了つたのとで、日中はフランス人のゐる中央の草叢の中に匐ひ込んで居た。それが丁度チエニソフが丘の上から見てゐた時に、フランス人に發見されたのであつた。

六

フランス人が思ひの外近くに居るのを見たので、チエニソフは終に翌日攻撃することに決心したやうであつた、でそのことに就いて百人隊長と暫らく話してから、彼は馬の頭を廻らして、歸途に就いた。

『さあ、君、歸つて身體を乾かさう、』と、彼はペエチヤに言つた。

森住人の小舍近くに來た時に、チエニソフは馬を停めて、前方の森の中を見た。短かい短衣に大きな靴を穿き、カザン帽を冠り、肩には銃を斜に掛けて、帶に斧を佩した男が、身體の横で長い武器をぶら〳〵させながら、長い足で森の中を身輕に歩いて來た。チエニソフを發見けると、その男は大急ぎで何物かを草叢の中へ投げ棄てた、そして、緣のグニヤ〳〵に萎垂れてゐる濡れた帽子を脫ぎ、指揮官に近づいて來た。

それはチホンであつた。眼の細い、痘痕のある、皺の寄つた顏は、滿足と嬉快さとで輝やいた。彼

はその頭を高くあげて、笑を押へてゐるかのやうに、ヂエニソフは言つた。

『おい、貴様は今まで何處にゐたのか?』と、ヂエニソフを正面に見た。

『何處にゐたかつて? 私はフランス人の後をつけてゐました』と、チホンは嗄れた、流暢な低音で、大膽に、口早やに答へた。

『何故、貴様は晝間匐ひ込んだんだ? 馬鹿! おい何故貴様は一人捕へて來なかつたんだ?』

『一人捕へたんです。』と、チホンは言つた。

『では、それは何處にゐる?』

『私は、曉方に初めて一人捕へました』と、チホンは、平たい、曲り反つた、大きな靴を穿いた兩足を、廣く踏ん張つて、續けた、『で、私は其奴を森の中へ連れて行きました。其奴は駄目だと私は思ひました、行つて他の奴を、もつと宜い奴を捕へる方がいゝと私は思つたんです。』

『ふん、惡黨、かういふ奴だ』と、ヂエニソフは百人隊長に言つた。『何故其奴を連れて來なかつたんだ?』

『何故つて、あんな奴が何の役に立つものか?』と、チホンは早口に、腹立たしさうに言つた。『三文の價値も無い奴だ! 貴下はどんな奴が要るのか、私には解らない!』

『えゝ、獸奴奴!……うん?』

『私は他の奴を捕へやうと思つて行つたんです』と、チホンは續けた。『かういふ風に森の中へ忍び込んで、寐轉んでをりました。』彼は唐突に輕々と身體を動かして、どんな風にしたかを見せるために仰向に寐轉んだ。『一人來やがつたから、』と、彼は續けた、『私は其奴をかういふ鹽梅に捕へました。』と、チホンは敏捷く、身輕るに跳び上つた。『さア、大佐のところへ來い、』と、私は申しました、と其奴が大聲を揚げました、すると、その時私はフランス人が四人ゐるのに氣が附きました。丁度劍をもつて私の方へ驅つて來るんです。私はかういふ鹽梅に斧をもつて奴等に向つて行きました。『何をするんだ? こん畜生奴等、』と、私は云ひました。』と、チホンはその腕を振り廻はし、威嚇的な顏面をして、胸を張りながら言つた。

『さうだ、貴様が池を通つて奴等から逃るところを、吾々は丘から見た。』と、百人隊長はその輝く眼を瞬きながら言つた。

ペエチヤは非常に笑ひたかつたが、他の人々が笑を押へてゐるのを知つた。彼は呆氣に取られて、敏捷くチホンの顏から、百人隊長の顏、ヂエニソフの顏と順々に見てゐた。

「惡戲は止せ、馬鹿、』と、ヂニソフは腹立たしげに咳拂ひをして言つた。『何故貴様は初めの奴を連れて來なかつたんだ?』

チホンは片手で背を、片手で頭を掻きながら、忽ち、如何にも愚らしい微笑を浮べ、齒を露出して

彼の名のシュチェルバトフ（齒缺けといふ意味）の由來を示してゐる缺けた齒を見せた、ヂェニソフは微笑した、ペエチヤは思ふさま大聲に笑つた、チホンも亦それに連れて笑つた。

『でも、其奴は全く駄目でございました、』と、チホンは言つた。『其奴は粗惡い着物を着てゐたのですから、どうして連れて來られるもんですか？　それに、野鄙い野郎でございますよ、閣下。それだのに、かう云つてるのです、（俺は將官の悴だ、行くのは嫌だ、）なんて云つてるのです』

『獸奴！』と、ヂェニソフは言つた。『其奴はあんまり知らないつて云ひまして。』

『えゝ、私は其奴に尋きたかつたのに……』

（我々はずゐぶん澤山ゐるが、みんな貧乏な奴ばかりぢや、その他何も吾々に就いちや言ふことは無い。少し大きな聲を出して見ろ、お前たちは彼等をみんな捕虜にすることが出來る、）つて申しました。』と、チホンは快活に決然と、ヂェニソフを見て、その語を結んだ。

『氣を附けろ、そんな愚な行をするなら、百度ひどく鞭打つぞ、』と、ヂェニソフは嚴かに言つた。

『何故そんなに怒らつしやるのです、』と、チホンは言つた。『閣下の御望みのフランス人を連れて來なかつたからでございますか？　日が暮れたらどんな奴でもお好みのを連れて參ります、三人連れて參ります。』

『さア、來い。』と、ヂェニソフは言つた、そして森住人の小舍に行く道々、彼は默つて、腹立たしげに顏を顰めてゐた。

チホンは後から隨いて來た、そしてペエチヤはコザツク兵がチホンを見て、彼が草叢の中へ投げ込んだ一對の長靴のことで、彼を笑つてゐるのを聞いた。

チホンの語を聞いて込み上げて來た笑が止まり、微笑が去つた時、ペエチヤはその刹那にチホンがかの男を殺したことが解つたので、不安を感じた。彼は捕虜の少年を見て急にその心に苦痛を感じた。が、この不安もたゞ一瞬間しか續かなかつた。彼は自分の屬してゐるこの隊で役に立つやうに見せるために反り返へつて、大膽な、勿體ぶつた態度で、翌日の計畫に就いて、百人隊長に質問をしなければならぬと思つた。

ヂェニソフがダラホフの許へ送つた將校が、萬事ダラホフの方ではうまく行つてゐる、そして彼は直ぐ後から來るといふ報告をもつて歸る道で、ヂェニソフに會つた。

ヂェニソフは忽ち前よりも快活になつて、ペエチヤを呼いた。

『さア、お前の話をし給へ、』と、彼は言つた。

七

モスクワを去つて、ペエチヤはその聯隊に加はるために兩親に別れを告げた。そして間も無く大枝隊の指揮官なる將官附きの傳令に任ぜられた。ペエチヤは將校に昇進して以來、殊に攻撃隊に移つてヴイアズマの戰に參加して以來、斷えず自分の成人するのを無上に嬉しく思ひ、そして始終英雄的行動をする機會を失ひはしないかと非常に氣を揉んでゐた。彼は軍隊に於て見聞し、經驗する有らゆるものを非常に喜んだ、が、それと同時に眞の英雄的行動は、彼の居合はせない場所で、彼の居合はせない時に、行はれるのではないかといふ樣なことを常に想像した。で、彼は斷えず大急ぎで動き廻はつてゐた。

十月二十一日に、彼の將官がデエニソフの隊へ誰か遣りたいと言つた時に、ペエチヤは將官が彼の願を退けることが出來なかつたほど、熱心に自分を遣つてくれと懇願した。が、將官は彼を遣る時に、ヴイアズマの戰に於けるペエチヤの向ふ見ずな行爲を憶ひ出した。ペエチヤはその時通信をもつて、道路を馬を走らせないで、フランス人の砲火の下にある戰線を横切つて駈け、そこで拳銃を二發放したのであつた。將官はその惡戲を憶ひ出したので、ペエチヤがデエニソフが企てゝゐるかも知れぬ計畫に加はることを斷然禁じた。デエニソフがペエチヤに止まつてもいゝかどうかを尋いた時に、ペエチヤが顏を赤らめて、當惑いたのはそれが爲であつた。出掛ける時から森の端に達するまで、ペエチヤはその任務を間違ひなく果たし、直ぐ歸らうと心を決めてゐたのである。が、フランス人を見、チホンを見て、その晩確かに攻撃があることを知つた時に、少年には有り勝ちな氣移りがして、彼はその時まで非常に尊敬してゐた將官が、土偶の棒のドイツ人に過ぎないやうに思はれ、デエニソフや、百人隊長や、チホンが、みんな英雄に見え出し、危急存亡の際に彼等を見棄て去るのは、恥辱のやうに思ひ込んでしまつたのであつた。

デエニソフがペエチヤや、百人隊長と共に森住人の小舍に達した時は、もう薄暮頃であつた。薄明の中に、彼等は空地に假小屋を建て、煙がフランス人に見えないやうな附近の窪地に、明るい火を焚いてゐるコザツク兵や、驃騎兵や、鞍を置いた馬を見ることが出來た。小さな小舍の入口には、コザツク兵が袖を捲り上げて羊を料理ツてゐた。小舍の中にはデエニソフの隊に屬する三名の將校が、戸で卓子を拵へてゐた。ペエチヤは濡れた服を脫いで乾かさせ、直ぐ食卓を立ててゐる將校の手傳ひをした。

十分間で食卓が出來上り、白布が掛けられた。食卓の上には火酒、ラム酒罐、白麵包、燒羊肉、食鹽などが置かれた。

ペエチヤは將校たちと一緒に座つて、脂の着いた指で、肥つた香のいゝ羊肉を裂きながら、子供らしく凡ての人々が無性に好きになり、又その人々も自分を好いてゐるといふやうなことを信じ込んだ。『どうでせう、ワシーリイ・ヒヨードロヰツチ、』と、彼はデエニソフに言つた、『あなたと一緒にたゞの

一日こゝにゐても宜うございますか?』そして彼は、チェニソフの答を待たずして、自分で答へた、『え、僕はあなたを探せといふ命令を受けました、で、今探し當てたんです……僕を中央に行かして下さい……眞實のものに……僕は褒美なんか要らないんです……けれども僕の要るのは……』と、ペエチヤは頭を擡げ、腕を振りながら、齒を喰ひ締つてチェニソフを見た。『眞實の、眞實のものに……』と、チェニソフは微笑みながら言つた。

『どうぞ、僕に一分隙下さい、僕にそれを指揮さして下さい、』と、ペエチヤは續けた。『それ位ゐのことはあなたには何でもないでせう。あ、小刀がお入用ですか?』と、彼は羊肉の片を裂かうとしてゐた將校に言つた。そして懐中小刀をその將校に與へた。

將校は小刀を褒めた。

『どうぞ、それを納つておいて下さい。僕はそんなのを五六挺持つてゐるんです……』と、ペエチヤは顔を赧らめて言つた。『やア! すつかり忘れてゐた。僕は素敵に良い乾葡萄を持つてゐたんでした、種子無しといふ品を、御存じでせう。吾々のところへ新らしい酒保の主人が來たんです。其奴は、上等の品ばかり持つてゐるんです。僕は乾葡萄を十斤買ひました。僕は甘いものが好きです。あなた方召し上りますか?』……と、ペエチヤは入口にゐるコザック兵のところへ走つて行つて乾葡萄の五斤入つてゐる藍を持つて來た。『どうぞ召上つて下さい。』

『あなた、珈琲壺は要りませんか?』と、彼は百人隊長に言つた、『僕は吾々の酒保の主人から名うての品を買つたんですよ! 奴は上等の品ばかり持つてゐるんです。それで、正直な奴でしてね。正直が肝腎ですからなア。間違ひなく珈琲壺をあなたに送りませう、それから多分あなたの燧石は摩耗つてしまつたでせう、何うかすると摩耗つてしまふものです。僕は燧石を持つてゐますよ。此所にあるんです……』と、彼は藍を指した。『百個入つてゐます。非常に廉價く買つたんですよ。どうぞお入用だけお取り下さい。まア……』そして、彼はあんまり喋り過ぎたと思つたので狼狽て話を端折つて、顔を赧らめた。

彼は何か他に失錯をしなかつたか何うかと考へ始めた。で、その日のことをずつと一通り憶ひ出してゐると、フランスの少年鼓手の姿が心に浮んだ。

『吾々は樂しんでゐるが、彼はどう感じてゐるだらう? 彼等は彼をどうしたらう? 何か食ふものを與つたか知ら?』と、彼は思ひ惑つた。

しかし彼が燧石のことを言ひ過ぎたと思ふと、もう話をする勇氣はなかつた。

『彼のことを尋ねてもいゝかしら?』と、彼は惑つた。『みんなは自分が少年だから、少年らしいことを感じてゐると言ふだらう。俺が少年だかどうだか。明日みんなに見せてやらう。尋ねたら耻かしいだらうか?』と、ペエチヤは考へた。

『おゝ、よし！　構ふもんか、』そして彼は直ぐ顔を赤らめて、笑はれはしないかと将校たちの顔を見ながら斯う言つた。

『捕虜になつた少年をこゝへ連れて來て、喰べるものを與つていゝでせうか……ね……』

『さうだ、可哀さうな小奴だ、』と、ヂェニソフが言つた。彼はかう言つたことを少しも恥ぢてゐないらしかつた。『此所へ連れて來い、彼奴の名はヴンサン・ボツスといふんだ。此所へ連れて來い。』

『私が呼んで來ませう、』と、ペエチヤが言つた。

『うん、呼んで來給へ。可哀さうな小奴だ。』と、ヂェニソフは繰返へした。ヂェニソフが、かう云つた時、ペエチヤは入口に立つてゐた。彼は將校たちの間を密と通つて、ヂェニソフに近いた。

『接吻をさして下さい、好父爺、』と、彼は言つた。『あゝ實に愉快だ、實に素敵だ！』ヂェニソフに接吻をして、彼は戸外に走り出た。

『ボツス！ヴンサン！』と、入口のところに立つてペエチヤは叫んだ。

『誰を呼んでゐられるのですか？　貴下。』と、暗黒から聲がした。ペエチヤは捕虜になつたフランスの少年を呼んでゐるんだと答へた。

『あゝ、ヴエツセニイですか？』と、コザツク兵は言つた。コザツク兵は既に少年の名のヴンサンをヴエツセニイに變へ、農夫や兵卒はヴイセニヤに變へてしまつてゐたのだ。この二つの名には春——

ヴエスナ——といふ意味があつたので、この少年の身體と一致してゐるやうに彼等は思つたのである。

『彼は、あすこの火の傍で暖まつてゐますよ。おゝ、ヴイセニヤ！ヴイセニヤ！』と云ふ聲が暗黒の中で、笑聲に交つて交る〳〵發せられた。『彼は悧巧な少年ですよ。』と、ペエチヤの傍にゐた驃騎兵が言つた。『吾々は先刻喰物を與りました。彼は怖ろしく腹を減らかしてゐました。』

そして少年皷手が裸の足で、泥濘を跳ねかしながら遣つて來た。

『Ah, c'est vous !（あゝ、君だ！）』と、ペエチヤは言つた。『Voulez—vous manger ? Navez pas peur ! On ne vous fera pas de mal.（何か喰べ度いかね？　怖がらなくとも宜いよ？　君に害は加へないから。）』と、彼はきまり悪るげに、併し丁寧に言つた。『Entrez. Entrez.（這入り給へ、這入り給へ。）』

『Merci, monsieur !』（有難う）と、皷手はほんの小兒らしい、顫へ聲で答へた、そして、その足の泥を靴で磨り落し始めた。ペエチヤは少年皷手に言ひたいと思ふことが、どつさりあつたのだが、言ふことが出來なかつた。彼は落着きなく身體を動かしながら、少年皷手の傍に立つてゐた。そして暗黒の中で、少年皷手の手をとつて、それを握り締めた。『這入り給へ、這入り給へ、』と、彼は柔かな嗄聲で繰り返へした。

『あゝ、彼のために何かしてやることが出來ればなア！』と、ペエチヤは心の中で言つた、そして扉

を開けて、少年皷手を先きへ入れた。

少年皷手が、小舎の中へ這入つた時に、ペエチヤは彼に氣を取られるのは自分の威嚴を低くするやうに思つて、彼と幾らか離れて座つた。が、ペエチヤは衣嚢の中の錢に觸つて、少年皷手にそれを與へようか何うかと迷つてゐた。

八

ヂエニソフは少年皷手に火酒と羊肉とを與へて、そして、彼を他の捕虜と一緒に送らないで、自分の隊に止まらせるために、ロシア服を着せるやうにと命じた。ダラホフが到着すると、ペエチヤの注意は少年皷手から離れた。ペエチヤは、隊でダラホフの豪勇と、そのフランス人に對する殘忍に關する多くの話を聞いてゐた。で、ペエチヤはダラホフが小舎に入つた時から、その眼を彼から離さなかつた。そして反り返つて、自分をダラホフのやうな英雄と伍するに適せしめむがために、前よりも尚一層威張つた態度を採つた。

ダラホフの風姿の飾り氣のないのが、ペエチヤには奇妙に思はれた。

ヂエニソフはコザック兵の上衣を着、その鬢を延ばし、奇蹟行者ニコライの聖像を胸に着けてゐる。彼の話し振りや身振りは、彼の特種の地位を示めしてゐた。これに反してダラホフは、以前モスクワではペルシヤ服を着てゐたが、今は正札附の近衞將校のやうに見えた。彼は無鬚で、綿の入つた近衞兵の制服を着、聖ジョルヂ勳章を紐に下げて、紛ひなき軍帽を眞直に冠つてゐた。彼は部屋の隅で濡れた外套を脫ぎ、誰にも挨拶せずに、眞直にヂエニソフに近づいて、直ぐ遣りかけてゐる仕事に就て質問を始めた。ヂエニソフは大枝隊がフランス護衞隊に對して企てゝゐる計畫や、ペエチヤが持つて來た使命や、兩將官に與へた返事などに就いて語つた。それから、彼はフランス人の現狀に就いて知つてゐる限りを彼に語つた。

『さうか、が、吾々はそれが何軍隊で、どの位ゐの兵數があるかを知らなくちやならんね。』と、ダラホフは言つた。『吾々は行つて全隊を見なくちやアダメだ。兵數が確實に分らなきやア手出しが出來ないからね、吾輩は大事をとつて事をしたいんだ。さア此所にゐる諸君のうち誰か一人、吾輩と一緒にフランス人の陣營に行く者は無いかな。吾輩は別製の軍服を持つてるよ。』

『僕、僕が……御一緒に參りませう!』と、ペエチヤが叫んだ。

『君が行く必要はちツとも無いよ、』と、ヂエニソフはダラホフに對つて言つた。『それから、彼は何んなことがあつても吾輩が行かせない。』

『成る程!』と、ペエチヤが叫んだ、『何故私は行つちやアいけないんです?……』

『え、行くべき理由は無いじやないか。』

『あゝそんなら失禮ですが……でも……僕は行きます、理由はただ夫れだけなんです。僕を連れて行つていたゞけますか?』と、ペエチヤはダラホフの方を向いて叫んだ。

『何故必要がないかね?……』と、ダラホフはフランスの少年鼓手の顏を見詰めながら、うつかりと斯う言つた。

『あの少年は永らく此處にゐるのかね?』と、彼はヂエニソフに尋ねた。

『吾々が今日捕へたんだ、が、彼は何も知らない。吾輩が彼をこゝへ連れて來さしたんだ。』

『はゝあ、では他の奴等はどうするのかね?』

『奴等をどうするかツて? 僕は奴等を送つてしまつて、受領書を受取るんだ!』と、ヂエニソフは俄かに顏を赧らめて、叫んだ。『で敢て言ふが、僕は、たゞ一人でも理由なく殺したことはないのだ。君も一箇の軍人としての名譽を汚すよりは、——僕は露骨に言ふよ——護衞隊を附けて、三十人乃至三百人を市街へ送る方が何でも無いことだらうじやないか。』

『この小さな十六歳の伯爵樣はこんな所でたんとそんな優雅しいことを喋つてゐるがいゝよ、』と、ダラホフは冷やかな嘲笑を帶びて言つた、『だが、君にとつては今はそんなことを止めてしまはなければならぬ大事な時だよ。』

『いや、僕はそそんなことを言つたんじやないんです、僕はきつと貴下とは一緒に參りますと言つただけです、』と、ペエチヤがきまり惡るげに言つた。

『が、吾輩や君にとつては、君、そんな優雅しいことは止めてしまはなければならぬ大事な時だよ、』と、ダラホフはヂエニソフを焦燥させるこの問題に就いて話すのを、特別に面白がつてゐるとでも云ふやうに、續けて言つた。『君は何故この少年をこゝに置くのかね、』と、彼は言つた、『たゞ可哀さうだからといふだけだらう? ええ、君の受領書が何の役にも立たぬものだといふことは、吾々はみんな知つてゐるよ。君が百人送つても三十人しきや市街には着くまい、奴等は途中で餓死するか、殺されてしまふかするんだ。だから奴等を早く片附けてしまふ方がいゝじやないか?』

百人隊長はその輝く眼を瞬きながら、贊成したらしく點頭いた。

『それは僕の關係したことじやない、それを議論する必要ない。僕は、奴等の生命を何うしやうとは思はないのだ奴等は死ぬと、君は言つたね、宜しい、死なせるが宜い。たゞ僕は手を下し度くないのだ。』

ダラホフは笑つた。

『奴等が吾輩を二十度以上も捕へやうとしたのを誰も邪魔する者はなかつたのだ。だが、若し奴等が吾輩を——それから武士的精神をもつてゐる君をも——捕へたとしたら、それは同じさ、一番手近か

な白楊だ、ねえ。』彼は語を切つた。『兎に角、吾々は仕事に取り掛らなくちやならない。僕のコザック兵に包を持つてこゝへ来るやうに言つてくれ給へ。僕は二着のフランス軍服を持つてゐるんだ。さア君は吾輩と一緒に来るんだね？』と、彼はペエチヤに尋いた。

『僕ですか？　えゝ、えゝ、勿論、』と、眼に涙を浮べるほどに顔を赧らめて、ヂエニソフの方を見ながら、ペエチヤは叫んだ。

先程、ダラホフがヂエニソフと捕虜の處置に就いて議論した時は、ペエチヤはまた前のやうに不愉快を感じ、氣が焦燥した、が、また彼には二人が話してゐることが瞭然解らなかつたのであつた。

『若しそれが大人の有名な指揮者の考へることなら、それはさうに違ひない、正しいに違ひない、』と、彼は考へた。『そして、何より肝腎なことは、私が彼に從はなければならぬとか、彼が私に命令する權利をもつてゐるとかいふことをヂエニソフに考へさせてはいけないといふことだ。私は是非共ダラホフとフランスの陣營に行くんだ。彼が行ける所なら、私でも行けるんだ！』

ヂエニソフは彼が行くのを止めやうと思つてさま〴〵に努めたが、ペエチヤはそれに對して、自分は物事を正當とするのが好きで紛れ當りでするのは嫌ひだ、自分は身に降りかゝる危險を何とも思はないと答へた。

『だつて、敵勢が幾人ゐるか確と解らないとすれば、數百人の人の生命に懸はることなんでせう、そして、吾々はたつた二人なんです、それに、僕は何でもかでも遣つて見たいんです、だから、僕は何でも行きます、何うしても行きます。どうぞ止めないでおいて下さい、』と、彼は言つた、『それは何の役にも立たないんです……』

九

ペエチヤとダラホフとはフランス軍服とシヤコオ型帽で服裝を惱らへると、先きにヂエニソフがフランス軍隊を覗つた空地まで馬を進め、そして森から出て、眞暗黒の中を窪地に下りて行つた。坂を乘り下りる時に、ダラホフは伴れてゐたコザック兵を、そこに待たしておいて、橋の方へ道路に沿うて快速力で進んだ。ペエチヤは昂奮して夢中で彼の傍に添ひながら同じく馬を走らせた。

『若し吾々が捕へられても、僕は生擒にはならないつもりです。僕は拳銃をもつてゐます。』と、ペエチヤは囁いた。

『ロシア語を話しちやいけない、』と、ダラホフが早口に囁いた、その刹那、二人は闇の中に、『そこへ行くのは誰れか？』と、いふ誰何と、銃のカチ〳〵いふ響とを聞いた。

ペエチヤの顏にはさつと血が上つた、彼は拳銃を握つた。

「Lanciers de 6me.（六聯隊の槍騎兵、）」とダラホフは馬の歩武を早めもせず、止めもせずに言つた。

歩哨兵の黒い姿が橋の上にたつてゐた。

『"Mot d' ordre !"』（合言葉は？）』

ダラホフは手綱を引いて、並足で進んだ。

『大佐チエラアルは此所にゐるかね？』と、彼は言つた。

『合言葉は？』と、歩哨兵は答へもせず、又彼等の道を遮りもせずに繰り返へした。

『將校が巡回をする時に歩哨が合言葉を尋ねるものぢやない……』と、ダラホフは急に氣色ばむで眞直ぐに歩哨兵の方へ馬を進めながら叫んだ。

『大佐は此所にゐるかと訊いてゐるんだ。』

そして脇へ寄つた歩哨兵の答を待たずにダラホフは並足で坂を上つた。

ダラホフは道路を横切る人間の黒い輪廓を認めたので、その男を止めて、大佐と將校たちは何處にゐるかと尋ねた。その男、肩に袋を擔つてゐる兵卒は、ダラホフの馬に近づいて、手で馬を叩いて、簡單に、そして馴々しく、大佐と將校たちは右方の丘の上の、彼が小さな花園家宅と呼んだ、畑の中にゐると二人に語つた。

その兩側の篝火の周圍に、フランス語の話の聞えた道路を更に進むで、ダラホフは花園家宅の庭の方へ曲つた。彼は門に達すると馬を降りて、その周圍に數名の男が座つて聲高に話してゐる、大きな、炎をあげた焚火の方へ近づいた。その大釜の中には何か煮えてゐた。そして尖つた帽を冠り、青い上衣を着た兵卒が、明るい焚火の傍に蹲づいて、棚杖で火を掻き立てゝゐた。

『彼は、料理には粘強い奴だなア、』と、焚火の向側の火影に座つてゐる將校の一人が、叫んだ。

『奴は兎を逃がしてしまふだらう、』（"Il fera marcher les lapins."——フランスの諺）と他の男が笑ひながら言つた。

二人は立停まつた、そして近づいて來るペエチヤとダラホフの馬の足音を聞きつけて、闇中を見詰めた。

『今晩は、諸君！』と、ダラホフは、聲高に、瞭然と呼びかけた。

火の蔭にゐる將校たちが騒ついた、そして頸の長い、丈の高い將校が、焚火を廻つて、ダラホフに近づいた。

『貴下がクレマンですか？』と、彼は言つた。『何の言た……』と間違つてゐたのに氣が附いたが、なほ疑ひながら一寸顏を顰めて、見ず知らずの人としてダラホフに會釋し、何ういふ用かと彼に尋ねた。

ダラホフは自分と戰友とは、自分たちの聯隊を尋ねてゐるのだと話した。そして、將校たち全體に對

つて第六聯隊に就いて知つてゐることはないかと尋ねた。誰もそれに就いては彼等に話し得なかつた。そして、ペエチヤは將校たちが他人々々しい疑ひの眼をもつて、彼とダラホフとを見詰め始めたのに氣が付いた。

數秒の間、誰も口を利かなかつた。

『肉汁が欲しいと思つて來たんなら、あんまり來やうが遲かつた、』と、焚火の後から嘲笑をして誰かが言つた。

ダラホフは二人は晩飯はもう濟ました、今晩先へ進まうと思つてゐると答へた。

彼は壺を掻き廻はしてゐた兵卒にその馬を渡して、頸の長い將校の傍へ蹲踞んだ。その將校はダラホフから眼を離さずに、また彼は何聯隊に屬するかと尋ねた。

ダラホフはその質問が聞えないで、彼は衣嚢から取り出した、短かいフランス煙管に火を點けて、その將校にこれから先きどの道を行けば、コザツク兵から安全であるかと尋ねた。

『匪徒は到る處にゐるよ、』と、焚火の後にゐる將校が答へた。

ダラホフは、コザツク兵は、自分とこの戰友のやうな落伍者にとつてのみ危險であると答へた、そして、『コザツク兵は大枝隊を攻撃することは出來ないだらうと思ふ、』と、曖昧に附言へた。

誰も答へるものはなかつた。

『さア、今度こそ去くだらう、』と、ペエチヤは話に聽き入りながら、焚火の傍に立つて、かう思ひ續けてゐた。

が、ダラホフは一度罷んだ話を續けて、彼等の大隊には何人ゐるか、何大隊あるか、捕虜は何人ゐるかといふやうな肝腎の目的を尋いた。

ダラホフはロシアの捕虜に就て尋ねた時に、かう附け加へた、『吾々と一緒に捕虜を引摺つて行くのは、愚なことだ、』そして彼は、ペエチヤがフランス人が直ぐ自分たちの假裝を見透かすに違ひないと思つて、覺えず焚火から後方へ歩き出したほどの、妙な、高い笑聲をドツと擧げた。

ダラホフの言葉や笑聲は、何の反應もなかつた、そして二人には見えなかつた一フランス將校は（彼は上衣に纏つて横はつてゐた）起き直つて、その仲間の一人に何事かを囁いた。ダラホフは立ち上つて、二人の馬を支へてゐた兵卒を呼んだ。

『彼等は馬を吾々に渡すだらうか？』と、ペエチヤは、思はずダラホフの傍へ寄つて、氣遣つた。

彼等は二人に馬を渡した。『お寢みなさい、諸君、』と、ダラホフは言つた。

ペエチヤは『お寢みなさい、』と言はうとしたが、聲を出すことが出來なかつた。將校たちは一緒に固まつて囁いてゐた。ダラホフは馬が凝としてゐないので、永い間かゝつて馬に跨つた。そして並

足で、門から馬を乘り出した。ペエチヤはフランス人が、後から追驅けて來はしないか見たいと思つたが、振り返へることをし得ないで、ダラホフに寄り添つて馬を進めた。

道路まで來ても、ダラホフは野の方へ曲らずに、更にその道路に沿ふて先へ進んだ。

とある地點で、彼は立停まつて耳を傾けた。『あれが聞えるか?』と、彼は言つた。ペエチヤはロシア語の話聲に氣が附いた。そして篝火の周圍にゐるロシア捕虜の黑い輪廓を見た。再び橋に達した時二人は、無言で、物憂げに彼方此方歩いてゐるかの歩哨兵の傍を通つた。それから彼等はコザック兵の待つてゐた窪地に出た。

『ぢや、さやうなら。ヂエニソフに言つてくれ給へ、日の出頃に最初の射擊を合圖に。』と、言つてダラホフは行きかけた、がペエチヤは彼の腕を摑んだ。

『おゝ! 』と、彼は叫んだ、『貴下は英雄です! おゝ! 素的だ! 痛快だ! 私は貴下を愛します!』

『宜しい、』と、ダラホフは答へた、が、ペエチヤは彼を行かせなかつた。そして闇の中にダラホフは、ペエチヤが接吻して貰はうとして、彼の方へ寄りかゝつてゐることを見とめた。ダラホフは彼に接吻して笑つた。そして馬首を廻はして、闇の中に消えてしまつた。

十

ペエチヤは森の中の小舍に着くと、入口にヂエニソフのゐるのを見附けた。ヂエニソフは非常な不安と、心配と、ペエチヤを行かしたことを悔いて、彼の歸りを待つてゐた。

『有難い!』と、彼は叫んだ。『まア、有難い!』と、彼はペエチヤが有頂天になつて話す物語を聽きながら、かう繰り返へした。『馬鹿、君は俺を眠らさなかつたよ!』と、彼は附言へた。『まア、有難い、さア寢たまへ、まだ朝までには一睡出來る。』

『はい……しかし、』と、ペエチヤは言つた。『私はまだ眠くはありません。それは、私は自分をよく知つてゐます。私は寢ると全く駄目になつて了ふんです。それから私はいつも戰鬪の前には眠らないんです。』

ペエチヤは暫らくの間小舍の中に座つて、樂しさうにその冒險を一々心に憶ひ出しながら、來らんとする翌日のことをまざ〳〵と心に畫いてゐた、やがてヂエニソフの眠り就いたのを知ると、彼は起ち上つて戶外に出た。

戶外はまだ眞暗であつた。雨は止んでゐたが、樹木からはまだ雨滴が落ちてゐた。小舍の傍には

ザツク兵の假小屋と、一緒に繋ぎ合はした馬とが見えた。小舍の後には二輛の荷馬車と、その直ぐ傍に馬のゐるのとが、黑い影を呈してゐた、そして窪地には消えんとする焚火の赤い炎が見えた。コザツク兵と驃騎兵とは、まだみんな寢んでゐなかつたそこには雨滴の音や、馬の物を嚙む音や、私語いてゐるやうに思はれる低い人聲などが混り合つて聞えてゐた。

ペエチヤは入口から出て、闇の中に周圍を見廻はしながら荷馬車に近づいた。誰かゞ荷馬車の下で鼾をかいてゐた。鞍を置いた馬が燕麥を嚙みながら、荷馬車の周圍に立つてゐた。ペエチヤは闇の中に自分の馬を見出して、それに近づいた、その馬は實は小ロシア種であつたのだが、彼はそれをカラバアシュと呼んでゐた。

『おい、カラバアシュ、明日は手柄をしやうぜ、』と、彼は馬の鼻に顏を近づけ、馬に接吻して言つた。

『何故お寢みにならないのですか、貴下?』と荷馬車の下に座つてゐるコザツク兵が言つた。

『うむ、だが……リハツツェフ——確か君の名はさうだね、え? 君の知つてゐる通り、僕は今しがた歸つて來たばかりなんだ。吾々はフランス人を訪問したんだ。』斯ういつてペエチヤはそのコザツク兵に一仔一什の物語を、彼の冒險ばかりではなく、それを行つた理由に就ても、又どういふ譯で、偶然に事をするよりも思ひ切つて危險を冒す方がいゝと考へたかといふことまでも、話した。

『さアお睡いでせう、少しお寢みなさい、』と、コザツク兵は言つた。

『否、僕はいつもかうなんだ、』と、ペエチヤは答へた。『お前の拳銃の擬發機はどうだ——磨滅てはゐないかい? 僕は擬發機を澤山持つてゐるよ、要らないかい? 藏つてお置き。』

コザツク兵はペエチヤをよく見るために、荷馬車の下から頭を差出した。

『だつて僕は何事でも用心深くするのが好きなんだもの』と、ペエチヤは言つた。『人によると行き當りばつたりに事を任せるだらう、そして用意をしないで、後で悔むんだ。僕はそれが嫌ひだ。』

『御尤もです。』と、コザツク兵は言つた。

『あ、それから、君、僕の軍刀を磨いで呉れないか、鈍になつてゐるんだ……』(が、ペエチヤは嘘言を言ふことが出來なかつた)……『僕は磨いだことが無いんだ。お前、磨いで呉れるかい?』

『磨いであげませう。』

リハツツェフは立ち上つて、行李の中を探した、ペエチヤは立つて、鋼鐵と砥石の勇ましい響を聽いた。彼は、荷馬車の上に攀ぢ上つて、その端に座つた。コザツク兵は下で軍刀を磨いだ。

『みんな眠つてゐるんか?』

『眠つてゐるものもありますし、吾々と同じく起きてゐるものもありますよ。』

『あの少年はどうしたね?』

『ヴェツセニイですか! あれは向ふの枯草の中に臥てゐますよ。彼は驚き疲れてぐツすり寢込んで

ゐます。彼は滿足してゐるんです。』

それから、永い間、ペエチヤは靜かに座つて、砥石の響に耳を傾けた。闇中に足音がして、黒い姿が現はれた。

『何を磨いでゐるんだ?』と、その男が荷馬車に近づいて尋ねた。

『こゝにゐる旦那の軍刀だ。』

『さうか、』と、ペエチヤには驃騎兵のやうに思はれたその男が言つた。『此所へ杯を忘れて置かなかつたかね?』

『車輪の向ふに有らア、』驃騎兵は杯を拾つた。『もう直き夜が明けるだらう、』と、附言へて、欠をしながら、彼は行つてしまつた。

ペエチヤは今、ヂエニソフ遊撃隊と共に、道路から一露里離れた、森の中にゐること、そしてフランス人から捕獲した荷馬車の上に座つてゐること、その荷馬車には馬が繋がれてゐること、荷馬車の下には、彼の軍刀を磨いでゐるコザツク兵リハツツェフが座つてゐること、右方の黒い影は小舍であること、左の下方に見える赤い、明るい炎は消えんとする篝火であること、今しがた杯を取りに來た男は、咽喉の渇いた驃騎兵であること、などを知つてゐたに違ひない——斯う誰しも想像するであらう。が、ペエチヤはそんなことは少しも心になかつた、そんなことを知らうと思はなかつた。

彼は、實に有ゆるものが現實ではない仙境に在つたのだ。

大きな影は確かに小舍なのだが、或ひは地球の深奥に導く洞窟であるかも知れない。赤い點は、火なのだが、或は大きな妖怪の眼であるかも知れない。彼は事實荷馬車の上に座つてゐるやうにも思へるし、また荷馬車に座つてゐるのではなくて、恐ろしく高い塔の上に座つてゐるので、苦しそこから落ちたら、地面に達するには全一日、全一ケ月かゝる——永久に落下して永久に地面に達せられないやうにも思へるのである。荷馬車の下に座つてゐるのはコザツク兵リハツツェフに過ぎないやうにも見えるし、又誰も知らない、世界中で最も親切な、最も勇敢な、最も不思議な、立派な人であるやうにも思へる。驃騎兵は、事實水が欲しくなつて來た、そして窪地に去つたやうにも思はれるが、しかし又今消え去つたのは、空く消滅して、無に歸したやうにも思はれるのである。

ペエチヤは今は何を見ても驚かないであらう。彼は有らゆる事が可能なる、仙境にゐるのだ。

彼は空を凝視めた。空も亦地上と同じく魔法の國であつた。空は晴れ始して、雲は星を蔽ふた覆沙が外づされるとでもいふやうに、樹木の梢の上を走つてゐた。時に、それは、掃き清められるのかといふやうにも見えた、そして雲と雲との間に、晴れた、黒い空がチラツ〳〵と見える。時に、この黒い生地が、暴風雨雲のやうに見える。時々、頭の上でだん〳〵高く上つて行き、やがてまた手の届くほど低く降りて來るやうにも見える。

ペエチヤは兩眼を閉ぢて座睡を始めた、樹の枝からは雨滴が落ちた。低い話聲と誰かの鼾とが聞えた、馬は嘶いて、互に摑み合つた。

『オジーグ、ジーグ、オジーグ、ジーグ……』と、砥石の上の軍刀は響を立てた、そして忽ちペエチヤは調子のいゝ音樂か何か耳馴れぬ崇高しく快い讃美歌の合奏を聽いてゐるやうに思つた。

ペエチヤはナターシヤと同じく、ニコライよりもずつと、音樂の天分をもつてゐたが、彼は音樂の練習をしなかつたし、また音樂に就て考へたこともなかつた。だから今不意に彼の心に起つたこの諧音は、彼にとつては、特種の清新と、魅力とをもつてゐた。

この音樂はだん〳〵明瞭になつて來た。諧音が定まつて、一つの樂器に移つた。所謂走法が奏せられつゝあつた、尤もペエチヤは走法とはどんなものか、少しも知らなかつたのだが。

各の樂器——ヴイオリンの如きもの、笛の如きもの、否、ヴイオリンや笛よりも、もつと音量の豐かな、もつと調子のいゝもの——がその音部を奏した——そして一つの曲調が終るまでに、殆んど同じやうに始まる他の曲調に溶け込んだ、次ぎに三番目の、次ぎに四番目の曲調に溶け込んだ、そして凡てが混じて一つの諧調となり、再び別々に分れまた、或は混じて崇嚴な教會音樂となり、或は混じて花やかな、勇ましい、勝利の歌となつた。

『おゝ、さうだ、無論俺は夢を見てゐるのだ、』と、ペエチヤは前の方に傾きながら、獨言を言つた。

『これは俺の耳だけでだ、だが、多分これは俺の音樂だ。さア、また始めろ、鳴らし始めろ、俺の音樂！　さア！……』

彼は眼を閉ぢた。するとさまざまの方角から、ずつと遠くから來るやうに、音響が震へながら來始めた、鳴らし、別れ、また混合ひ、凡てが結び附いて同じ、快い、崇嚴な讃美歌となつた。『あゝ、なんて快美んだらう！　俺の思うまゝになる、俺の好きなやうになる！』とペエチヤは獨言を言つた。彼はこの合奏團を指揮しやうと試みた。

『さア、輕く、輕く、今度は！』すると音響は彼の言ふ通りになつた。『さア、今度はもつと一ぱいに、もつと快活に！　もつと〳〵愉快に！』すると、知られざる深みから漲ぎる、勇ましい響が起つた。『今度は、肉聲だ、結び附け！』とペエチヤは指揮した。すると遠くから、初めは男の聲が聞え、次ぎに女の聲が聞えた。肉聲は韻律ある勇ましい豐富な音量に漲ぎつて行つた。ペエチヤはその肉聲の驚嘆すべき美に醉ふやうに、怖れと悅びとを感じた。

勇ましい勝利の行進曲は、肉聲の歌や、樹枝の雨滴や、砥石の上で軍刀のジーグ、ジーグ、ジーグいふ音と混り合つた、そしてまた、馬の嘶きと、摑み合ふ音までが、諧調を亂さずに、それに混り合つた、どの位ゐの間それが續いたか、ペエチヤは話すことは出來なかつた、彼はそれを樂み、始終自分の樂みを疑ひ、その樂みを分つ人のゐないのを悔んでゐた。彼はリハツツエフの親しい聲で夢から

醒めた。

『出來ました、閣下、これならフランス人を眞二つに斬れます。』

ペエチヤは全く目を醒ました。

『おや、もう明るい、眞實に明るくなつて來た。』と、彼は叫んだ。今まで見えなかつた馬も、今はその尾まで見ることが出來た、そして葉を振つた枝の間から、水のやうな光が見えた。ペエチヤは身顫ひして跳び上り、衣嚢から一留出して、それをリハツツェフに與へ、軍刀を揮つて見て鞘におさめた。コザツク兵は馬を解き、肚帶を締めた。

『司令官がお出でになりました。』と、リハツツェフが言つた。

ヂエニソフは小舍から出て、ペエチヤを呼び、彼に用意を命じた。

十一

薄明の中に大急ぎで、人々は馬を曳き出し、馬の肚帶を締めて、隊を作つた。ヂエニソフは小舍の傍に立つて、最後の命令を與へた。枝隊中の歩兵は、その幾百かの足を以て泥を跳ね散らしながら、道路に沿うて進んだ。

百人隊長はコザツク兵に、何か命令を與へた、ペエチヤは熱心に乘馬の命令を待ちながら、馬勒を持つて馬を押へてゐた。彼の顏は冷水で洗つたので輝き、その兩眼は光つてゐた。彼は寒さがその背を走り下るのを感じた、一種の速い、神經的な身顫ひを全身に感じた。

『さア、用意は全然出來たか?』と、ヂエニソフは言つた。『乘馬!』

一同は乘馬した。ヂエニソフは肚帶が弛んでゐたので、コザツクを叱つた、馬に乘つてからも、尙咏鳴つた。ペエチヤは足を鐙に掛けた。馬はいつもするやうに、自分の足を咬むやうな樣子をした、が、ペエチヤは、身體の重みを知らないもの〻如く、身輕に鞍に飛び上つて、後方の闇の中から進んで來る驃騎兵を振り顧りながら、ヂエニソフの方へ馬を近づけた。

『ワシーリイ・ヒヨードロキツチ、貴下は私に何か任務を命じて下さるのでせう? どうぞ……神樣のために……』と、彼は言つた。ヂエニソフはペエチヤのゐることを忘れてゐるもの〻やうであつた。彼は身の周圍を見廻はした。

『君にたゞ一つ賴んでおくが、』と、彼は嚴かに言つた、『俺の言ふ通りにしてゐたまへ、勝手に前進してくれ給ふな。』

ヂエニソフは途々ペエチヤには、その上一語も言はなかつた、彼は無言で馬を進めた。彼等が森の端に達した時には朝の光が野に擴がつてゐた。ヂエニソフは、百人隊長に何か囁やいた、そしてコザ

ツク兵はペエチヤとヂエニソフの傍を馬を進め始めた。彼等が悉く過ぎ去つた時に、ヂエニソフは馬に拍車を當てゝ坂を駈け下りた。馬は辷つたり、尻餅を搗いたりして、その乘手と一緒に窪地に辷り落ちた。ペエチヤはやはりヂエニソフの傍にあつて、馬を進めた。彼の全身の顫へはま〳〵す強くなつた。だん〳〵明るくなつては來たが、霧が遠方の物象を蔽うてゐた。ヂニソフは窪地の底に達した時に、振り返つてその後にゐるコザツク兵に點頭いて見せた。

『相圖、』と、彼は言つた。コザツク兵はその腕を揚げた、そして一發の銃聲が鳴り響いた。それと同時に、前方に駈ける馬の蹄の音と、さま〴〵の方向からの叫聲と、射撃の響とが聞えた。

ペエチヤは最初の馬蹄の音と叫聲を聞いた時は、手綱を弛めて、馬を鞭打ち、大聲で彼を呼び掛けたヂエニソフを見向きもせずに、前の方へ駈け出した。ペエチヤは射撃の音を聞いた時に、急に眞晝のやうに四邊が全く明るくなつたやうな氣がした。彼は橋まで駈け附けた。コザツク兵が道路に沿うて前方へ駈けてゐた。橋の上で、彼は遲れたコザツク兵に衝突つたが、そのまゝ駈け續けた。ペエチヤは右から左へ道路を横切つて走る人々——多分フランス人だと彼は思つた——を見た。その一人は泥棒に辷つて馬の足の下になつた。

コザツク兵は小舍の周圍に群つて何かしてゐた。その群集の中から、怖ろしい叫喚が起つた。ペエチヤは群集の方へ駈けて行つた、彼の最先に眼に付いたものは、胸に衝きつけられた槍の柄を摑んで

ゐるフランス人の白い顏と、顫へる下顎とであつた。

『ウラア！……友よ……吾が……』と、ペエチヤは叫んで、早る馬の手綱を弛め、村の街路へと駈け下つた。

彼は前方に射撃の音を聞いた。道路の兩側から駈け出すコザツク兵、驃騎兵、襤褸服のロシア捕虜などは、口々に何か譯の分らぬことを聲を限りに叫んでゐた。綠色の服を着て、赤い顏を顰めた、立派なフランス人が銃劍を持つて、驃騎兵を防いでゐた。ペエチヤが駈け附けた時には、そのフランス人は斃れてゐた。『また遲れたか！』といふ考が、ペエチヤの頭に閃めいた、そして彼は射撃の響の最も激しく聞える場所へ向つて進んだ。射撃の音は彼がダラホフと一緒に前の晩に行つた莊園家宅から聞えるのであつた。フランス人は籬の後に隱れ、繁つた花園の草叢の中から、門の周圍に群がるコザツク兵を射撃してゐるのであつた。ペエチヤが門に近づいた時に、兵卒どもに何か叫んでゐるダラホフの青白い顏を、硝煙の中に瞥見した。『廻つて行け。歩兵を待て！』とペエチヤがその傍に行つた時、彼は叫んでゐた。

『待て！……ウラア！……』とペエチヤは叫んだ、そして彼は矢庭に射撃の響の聞える、硝煙の濛々たる場所に對つて駈け出した。一齊射撃の彈丸はヒュッ〳〵といふ音を立てゝ、雨の如くに注がれた。コザツク兵とダラホフとは、ペエチヤの後から門をくぐつて駈け出した。濛々たる硝煙の中に

ランス人が、その武器を投げ棄てゝ、コザック兵を迎へるために草叢から飛び出たり、或は池の方へ坂を下つて、逃げ出したりするのが見えた。ペエチヤは手綱を執らずに、兩腕を奇妙な風に振つて、鞍の一方へだん〳〵身體を傾けて、庭を廻つて駈けてゐた。馬は朝日を浴びて燦つてゐる焚火の灰の中へ踏み込んだが忽ち立停まつた。ペエチヤは濡つた地面の上にバタと轉げ落ちた。コザック兵はペエチヤの、頭だけはぢつとして、手足が痙攣つてゐるのを見た。彈丸は彼の腦を貫通したのであつた。

ダラホフは降伏を知らせるために、軍刀に手巾を捲いて、家の中から出て來た、フランスの主席將校と語を交はしてから、馬を降り、腕を伸ばして不動のまゝ横はつてゐるペエチヤに近づいた。

『やられたな、』と、彼は顏を顰めながら言つて、折りから馬を進めて來たヂエニソフに會ふために、門の方へ歩んで行つた。

『戰死か?』と、ヂエニソフは遠くから、見馴れた、ペエチヤの死んだらしい身體の恰好を認めて、斯う叫んだ。

『やられた、』と、ダラホフは、その言葉を口に出すことが、自分を滿足させるとでもいふやうに、繰り返へした、そしてコザック兵が急がしげに取圍んでゐる捕虜の方へと急ぎ足に歩いて行つた。『とても助命からないよ!』と、ダラホフは振り返つてヂエニソフに言つた。ヂエニソフは返事をしなかつた。彼はペエチヤに近づき、馬を降りて、顏へる手で既に白く變色してゐる、血塗れの、泥で汚れた顏を起した。

『私は甘いものが好きです。これは上等の乾葡萄ですよ、みんなとつてお置きなさい、』といふ言葉をヂエニソフは憶ひ出した。そして彼は犬の吠聲のやうな聲を出して、そこを離れて、籬に近づき、それに摑保いた。コザック兵はその聲を聞いて、驚いて、四邊を見廻はした。

ヂエニソフとダラホフとに救はれたロシア捕虜の中に、ピエール・ベズウホフがゐた。

十二

ピエールがその中にゐた捕虜の隊は十二月二十二日には、始めモスクワを出た時の軍隊や輜重隊とは一所でなかつた。それは何も殊更にさういふ新らしい命令がフランスの司令官から出されたといふわけではないのだ。

行軍の初め頃、彼等に從つてゐたビスケットを積んだ運送車の半數が、コザック兵のために奪はれたが、後の半數は何も知らずに、その前の方を進んでゐた。それから捕虜の前方を行進してゐた徒歩の騎兵は、もう一人もゐなかつた。彼等は、みんな消えてなくなつてゐた。行軍の初め頃、捕虜が前方に見た砲兵隊は、今はウエストフアリアンの護衞の下に在る、元帥ジュノオの行李より成る大隊列

に變つてゐた。捕虜の後方には騎兵の軍裝をした、輜重隊がゐた。

始めフランス人は三列に並んで行軍したが、ヴィアズマからは、一つに群集かつてしまつた。ピエールがモスクワ郊外の最初の行軍舍營で見た、軍紀缺乏の徵候は、今やその極點に達してゐた。

彼等が行進する道路の兩側には、死馬の屍が撒き散らされた。そして襤褸服を着た兵卒や、いろいろの聯隊からの落伍者などが、列に加はつたり遲れたりするので、列は斷へず變化してゐた。幾度も間違ひの警報が發せられ、その度に護衞の兵卒は銃を揚げ、射擊して、互にその戰友を足下に踏みつけながら逃げ出した。そして再び列を作る時になると、その理由なき困苦に對して、彼等は互に罵り合つた。

一緒に行軍してゐる、この三つの隊——騎兵輜重隊、捕虜護衞隊、ジュノオの輜重隊——は、併し完全な別々の團隊を形成してゐたが、三隊ともに恐ろしい勢でその數を減じてゐた。

始め百二十輛の荷馬車から成つてゐた騎兵輜重隊が六十輛しか殘つてゐなかつた、その餘は奪はれたり、遺棄したりしたのである。ジュノオの輜重隊の數輛の荷物も亦遺棄したり、捕獲されたりした、三輛の荷馬車はダヴウス聯隊の落伍者に攻擊せられ、掠奪せられた。ピエールはドイツ人から聞いた話によつて、このジュノオの輜重隊が捕虜隊よりも、もつと嚴重に護衞されてゐること、彼等の仲間のドイツ人の兵卒は、元帥に屬する銀匙（シルヴァースプーン）が、その兵卒の所有物の中にあつたために、元帥の命令で銃殺されたといふことまで知つた。

捕虜の護衞隊は他の二つの護衞隊よりも、更にその數を減じた。モスクワを出立した三百三十人の中で、もう百人足らずしか殘つてゐなかつた。それに、捕虜は兵卒どもにとつては、騎兵の荷物やジュノオの行李よりも、もつと面倒な重荷であつた。靴やジュノオの匙は、誰かの役には立つだらうと彼等は思つてゐた、しかし何故に、餓え凍えてゐる兵卒が、同じく餓え凍えて、斷えず死んで行くロシア人を護衞したり、その歩哨に立つたりしなければならぬのか、又その途中で落伍する者を銃殺するやうに命ぜられねばならぬのか——それは理由の分らぬことであるのみならず、嫌なことであつた。そこで護衞の兵卒どもは、彼等自身が已にかゝる悲慘な狀態に陷つてゐるので、この上彼等自身の狀態を更に悲慘にするのを怖れて、なるべく捕虜に對して感じた哀憐の情に負けないやうにとするらしく、捕虜を特に慘酷に嚴重に待遇した。

ドロゴブウズでは、護衞の兵卒は捕虜を馬小舍に監禁しておいたまゝで、自分たちの荷物を掠奪するために出て行つた、で、數名の捕虜は、壁の下を堀つて、逃げ出したが、直ぐにフランス人に捕はれて銃殺された。

モスクワを去る時に定められた、捕虜中の將校は普通の捕虜と別々に行進するといふ順序は、ずつと前に止められてしまつた。歩行の出來る者は一緒に群まつて行進した、そして第三回目の行軍には

ピエールは、再びカラターエフと、それからカラターエフをその主人に撰んだ鰐脚の、紫灰色の犬と一緒になつた。

モスクワを出てから三日目に、(カラターエフは熱病のためにモスクワ病院に這入つてゐたことがあるが、)今その熱病をぶり返へした。そしてカラターエフの力が衰へると共に、ピエールは彼から遠ざかつてゐた。ピエールは何故だか知らぬが、カラターエフが病氣になつてからといふものは、その傍に行くのに非常に努力を要したのであつた。そして彼がカラターエフの傍に行つて、その宿泊地で臥てゐる時などに彼がよく洩らした低い悶聲を聽いたり、又病人のだん〳〵強くなつて行く臭氣を嗅いだりすると、ピエールは益々遠ざかつてしまつて、彼のことを考へなかつた。

ピエールは、その牢獄であつた小舍に捕はれてゐる時、その智識ではなく、その全存在によつて、又その生命によつて、人間は幸福のために作られてゐること、幸福は彼自身の內にあり、彼の自然な人間的欲望の內にあること、そして凡ゆる不幸は必要物の缺乏に因るのではなく、贅澤物に因ることなどを知つた。所が、今又最近三週間の行軍中に、更に他の新らしい、慰籍ある眞理を知つた——即ち彼は、この世の中には怖ろしいものは何もない、といふことを知つたのである。彼は、この世の中には、人間が幸福で全く自由である場所がないと同樣に、人間が不幸で束縛される場所も亦無いことを知つた。彼は苦痛にも自由にも制限があること、その制限には直ぐに達せらるゝこと、薔薇の

床に於て一片の花瓣が皺になつたことに惱まされたこの人は、濕つた地面に直接に寢ながら半身が暖まると、半身が冷めたくなるやうな今の境遇にあつても、苦みの程度は同じことだといふこと、昔は緊着した踊靴を穿いてゐたものであるが、全跳足で(彼の穿物はずつと前に壞れてしまつた)足一面に傷だらけになつて歩いてゐる今の有樣でも、苦みは同じことだといふことを知つた。彼はその妻と結婚した——時も、夜斯うした馬小舍に檻禁されてゐる今よりも、自由ではなかつたことを知つた。その時にはさうも感じなかつたのだが、後になつて自分が苦痛と呼んだ凡てのものゝうちでの一番苦しかつたのは、彼の裸の、水腫のした、傷だらけの足の狀態であつた。馬肉は旨くて滋養に富んでゐた、彼等が食鹽の代用にして火藥の硝石の臭も實に快かつた、日中の行軍は暖かであつた、夜になると篝火があつた、身體を貪り啖つた虱は身體を暖めてくれた。

行軍の二日目に、ピエールが篝火で足の水腫を見た時は、歩けまいと思つたが、彼等が起き上つた時には、彼も跛を引きながら歩き出した、そして軈て暖まると、足がその晩はもつと甚くなつたにも拘はらず、痛みを感ぜずに歩くことが出來た。そして彼は足を見ずに他のことを考へた位であつた。

ピエールは、今漸く人間の中にある凡ゆる生の力と、壓力が或る度を超えると、無用の蒸氣を放出する蒸氣機關の安全辨のやうな、注意轉換の救濟力が人間の中に在ることを理解した。

捕虜たちは途中で既に百人以上も死んだけれども、ピエールは彼等の中の落伍者がどんな風に銃殺されたかを見もせず、聞きもしなかつた。彼は日毎に衰弱して、どうしても他の連中と同じ運命の犠牲にならなければならぬやうに思はれる、カラターエフのことを考へなかつた。ピエールは自分のことをさへ今までほどに考へなかつた。自分の運命が困難なものとなり、自分の未來が怖ろしくなり、自分の現在の狀態と自分が無關係になればなるほど、その心に生ずる思想や、記憶や、映像は、悦びと慰藉とに充ちたものとなつた。

十三

二十二日の正午、ピエールはその足許と道路の不平坦に氣を取られながら、泥濘く辷る坂道を歩いてゐた。時に彼は、周圍の見馴れた群集を見、そしてまた足許を見た。その群集も、その足も、共に彼にとつては懐かしいものであつた。

紫がゝつた灰色の、鰐足の犬は、樂しげに道路の縁を走つてゐた、時に後足を擧げては、滿足と輕快とを見せるために三本足で駈けつけて見たり、腐つた屍の上に接つてゐる鴉に吠え付いたりした。この犬はモスクワにゐる時から思へば、ずつと快活で、身輕であつた。到る處に、さま〴〵の程度で

腐つてゐる、さま〴〵の動物——人間から馬に至るまでの——の肉が横はつてゐた、そして行軍する兵卒は狼のそれに近づくのを防いだので、犬は思ふさま貪り食ふことが出來た。

早朝から雨が降つてゐた、一頻り雨が止んで、空が霽れるかと思ふと、やがてまた前よりもひどく降り出すといふ風であつた。道路には雨が浸み込んで、それ以上にはもう雨を吸ひ込む餘地がないので、轍に沿うて小河が流れてゐた。

ピエールは道の兩側を見ながら、その歩並を、指を折つて三つづゝに算へながら、歩いてゐた。彼は心の中で、雨に對つてから言つた、『そら、降れ、降れ、うんと降れ！』

彼は自分でも全く何も考へてゐないやうな氣がしてゐた、しかしその靈魂の深い底の方では、嚴肅な慰藉のある何物かゞ遒つてゐるのであつた。その何物といふのは、前夜カラターエフとの彼の話から生じた、微妙な、精神的な結果であつた。

ピエールはその前の晩、宿泊所で焚火が消えかゝつて寒くなつたので、立ち上つて、もつとよく燃えてゐる隣の焚火の方へ行つた。そこには、プラトンが僧袍のやうに上衣を頭から被つて座つてゐた。彼にその流暢な、快い、病氣で弱つてゐる聲で兵卒どもに、ピエールが一度前に聽いたことのある話をしてゐた。それは夜中を過ぎてゐた。カラターエフの熱が減くのはいつもこの時刻で、彼は特に快活になるのであつた。ピエールは焚火に近づいて、プラトンの衰弱した聲を聽き、明るい焚火の光

で彼の敬虔な風貌を見た。ピエールは心に苦痛を感じた。彼はこの男に對する自分の哀憐の情に驚いたのであつた、で、そこを去らうと思つたが、他に行くべき焚火がなかつたので、プラトンを見ないやうにして、その傍に坐つた。

『やア、熱はどうだね?』と、彼は尋ねた。

『熱ですか? 病氣を咲くのを止めよ、神は汝に死を與へ給はぬであらう、ですよ、』と、カラターエフは言つて直ぐ、始めてゐた話に戻つた。

『それで、兄弟、』と、彼はその痩せた、白い顏に微笑を湛へ、その兩眼に特種の娯しげな光を漂はして、話を續けた、『それで、兄弟……』

ピエールはずツと以前にその話を聽いたことがあつた。カラターエフは、既にそれを六度も、いつも特種の娯しさをもつて話した。で、ピエールはその話をよく知つてゐたのだが、それが新らしい話でゞもあるやうに、今又それに耳を傾けた。するとカラターエフが話す時に明らかに感じてゐた、和かな恍惚が彼にも傳はつた。

それは善事をなし、その家族とともに神を怖れた生活を營んでゐた或る老商人が、或る日一人の富める商人と一緒にマカリイに旅行したといふ話である。

二人の商人は宿屋に泊つて、一緒に寢たところが、翌日、富める商人が所持品を奪はれて、喉を斬

られてゐることを發見した。所が血塗れの小刀が老商人の枕の下から出た。そこで老商人は訊問され、笞刑に宣言され、且つその鼻吻を裂かれて——法律に從へば、さうされるのが當然であつたと、カラターエフは言つた——苦役に送られたのである。

『それで、兄弟、』(ピエールが、カラターエフを見附け出したのは、話がこゝまで進んだ時であつた『その後十年以上經つたんだよ。その老人は牢獄に入れられてゐたんだ。老人は命令けられた通りを守つて、一つも惡い事をしない、たゞ神樣に、死を與へて下さいと祈つてゐるばかりだつた。善いことだね。で、夜になると囚人たちは、恰度今吾々が此所にかうしてゐるやうに、一緒に集まつた、そして老人もその仲間入りをしたんだ。所が或る夜話の末に、各自が罰せられてゐる犯罪や、神樣に對して犯した罪のことを語り出した。人間を一人殺したといふ奴もあれば、二人殺したといふ奴もある、放火をした奴もあれば、脫走者もあつた。で、みんなが老人に尋いた、『どんな罪で』と、みんなは言つた、『お前さんは罰を受けたんだい、老爺さん?』『俺は同胞』と、老人は言つた、『自分の罪と他人の罪とで罰せられてゐるんだ、俺は他人の生命を奪つたことはないし、貧乏な同胞に慈善こそしたことはあるが、他人の物を奪つたこともないんだ。俺は商人じや、同胞で、財産も莫大とあつたのだ。』そして、老人はさま〴〵のことをみんなに話し、一仔一什の事を打ち明けたんだ。『俺は自分だけでは、』と、老人は言つた、『何も悲しいことはない、神樣が俺をお懲めなすつたんだ。たゞ可哀さうなのは、』

と、老人は言つた、『老婆や、子供たちだ、』と、言つて、そして泣いた、ところが、偶然にもその仲間の中に、商人を殺したその男が居合はせたんだ、之れが、『それは何處でだ、老爺さん?』と、その男は言つた。『何時、何日?』と、彼は老人に一仔一什を尋いた。その男の心は痛みだしたのだ。そして、その男はかういふ風に老人の傍に寄つて——その足のところへ倒れた。『そんならお前さんは俺のために苦んでゐなさるんだ、』と、その男は言つた。『全く事實だ、この人は全く無實の罪で苦められてゐるんだ、同胞、』と、その男は言つた。『その罪を犯したのは、この俺なんだ、』と、その男は言つた、『この人が睡つてゐたから、枕の下へ小刀を入れて置いたんだ、私を宥して下さい、老爺さん、基督のために!』と、その男は言つたんだ、』

カラターエフは、語を切つて、嬉しげに微笑み、焚火を凝視めて、薪を整した。

『老人は言つた、『神様はお前さんを宥して下さる、俺等は神様の前ではみんな罪人ぢや、俺は、俺自身の罪のために苦んでゐるのじや、』そして老人は悲歎の涙にくれたといふのだ。どうだい、なア?』と、カラターエフは次に話さうとするところに此の物語の最大の魅力と要點とがあるとでもいふやうに、熱心な微笑をます〳〵輝かせながら言つた。

『どうだい、なア、そこでその殺人者は、役人へ自首したんだ。『私は六人殺しました、』と、その男は言つた、(大罪人だつたんだねえ!)』が、私の氣の毒でならぬのはこの老人です、私の罪惡のために

の老人を泣かして下さいますな。』と、その男は自白したんで。そこでその次第が紙に書かれて、その紙が官憲へ送られたんだ、そこまでは道が遠かつた、で漸く訊問となつて、報告がちやんと役人の手で出來上り、その報告が又皇帝のお手許へ渡つた、そこで皇帝から商人を釋放して、報償をとらせよといふ判決が來たんだ。その判決書が來ると、みんなは大急ぎで老人の傍に行つた、所で無實の罪に苦んでゐたその老人は、何處にゐたと思ふね? 皇帝から判決書が來たんだ、みんなは大急ぎで老人の傍に行つたんだ、』カラターエフの下顎は顫へた。『が、その時神様はもう老人を宥してゐらつしやつたんだ、老人は死んでゐたんだ! それが事の成行だ、なア!』と、カラターエフは話を結んだ、そして無言で微笑んでみながら永い間前方を眞直に見詰めてゐた。

この物語そのものにではないが、その神秘的な意味と、カラターエフが語つてゐる時の彼の顏に輝やいた恍惚たる喜悅と、それから、その喜悅の神秘的な意味とが、今や、漠然とピエールの靈魂を充たし、そして慰めた。

十四

『A vos places!(位置に就け!)』といふ號令が突然聞えた。

捕虜や護衛隊の兵卒どもは、樂しさうにざわめいた、そして何か喜ばしい嚴肅なものを待設けてゐるやうな空氣が充ち渡つた。號令が諸方から聞え、良馬に跨がり、立派な服裝をした騎兵が、左方から進んで來て捕虜の傍を通つた誰の顏も、權威ある人を待つてゐる時に、よく人のするやうな緊張を示してゐた。捕虜は一緒に群つて、道をよけた。護衛隊の兵卒は隊列を作つた。

『皇帝！ 皇帝！ 元帥！ 公爵！……』(L'empereur ! L'empereur ! Le maréchal ! …… !)

そして灰色の馬に曳かれた馬車が轢り過ぎるまでは、輕快な騎兵たちも敢て馬を進めなかつた。ピエールは三角帽を冠つた、穩かな、奇麗な、肥つた、白い顏の人を瞥見した。それは元帥の一人であつた。元帥の眼はピエールの大きな、目に立つ身體に止まつた、彼は顏を顰めて眼を反らしたが、ピエールはその表情の中に彼が憐憫の情と、それを又隱くさうとする氣色が見えるやうに思つた。

輜重隊指揮の任にあつた將官は、痩馬に鞭をあてながら、赤い、恐怖に打たれた顏をして、馬車の後から駈けて來た。數名の將校が集まつて一團となつた、そして兵卒どもがその周圍に集まつた。誰も彼も昂奮した、心配さうな顏をしてゐた。

『Qu-est-ce qu'il a dit? qu-est-ce qu'il dit? (何と言つたのだね？ 何と言つたのだね？)』ピエールは、彼等がかう尋ねてゐるのを聞いた。

元帥が通過する間捕虜は一團に群まつてゐた。ピエールはその朝まで顏を合はさなかつたカラターエフを見附けた。彼はその小さな軍用上衣に纏まり、樺木に倚りかゝつて座つてゐた。その顏にはまだ商人の話をした時と同じ樂しげな感情を浮べてゐたが、猶その上にもう一つの靜かな嚴肅な表情をも認めることが出來た。

カラターエフは涙に潤やいてゐる、人懷い、圓い眼で、ピエールを見た、そしてその眼には確かに何事かを訴へるやうな表情があつた。彼は明らかにピエールに何事かを言はうと思つてゐたのだ。が、ピエールは自分で自分が非常に恐しかつた。彼は、カラターエフの眼眸を見ぬ風をして、大急ぎで歩み去つた。

捕虜が再び歩き出した時に、ピエールは後を振り返つた。カラターエフは道路の緣の樺木の下に座つてゐた。そして二人のフランス兵が背を屈めて彼と話をしてゐた。ピエールは再び顏を反けた。彼は踵を引きながら丘を上つて行つた。

後の方の、カラターエフが座つてゐた場所で、射擊の響がした。ピエールはその射擊の響を瞭然聞いた、が、それを聞いた刹那に、彼はスモオレンスクまでの行程を算へるのを中止してゐることを憶ひ出した。彼は元帥が傍を通過する前にその計算を始めたのであつた。で、再び算へ始めた。二人の兵卒がピエールの傍を通つた、その一人はまだ煙の出てゐる銃を持つてゐた。二人とも蒼白く、その顏の表情には——彼等のうちの一人は瞻病さうにピエールを見た——ピエールがモスクワの死刑執行

の時若い兵卒に見たと同じやうな或るものがあつた。ピエールはその兵卒を見た、するとその男が、一昨日、焚火の前で襯衣を乾かさうとして焼いてしまつたので、他の兵卒がそれを見て笑つたことを思ひ出した。

例の犬が後方のカラターエフの座つてゐた場所で、吠へだした。『馬鹿！何を吠へてゐるんだ？』と、ピエールは思つた。

彼の傍を行進してゐる彼の仲間の捕虜たちも、彼と同じく射撃の音と犬の鳴聲の聞えた場所を振り返らうとはしなかつた。彼等の顔はいづれも厳つい表情をしてゐた。

十五

騎兵輜重隊と、捕虜と、元帥の行李隊とはシヤムシエウオ村に宿營した。みんなは篝火の周圍に集まつた。ピエールは焚火の傍に行つて、焼馬肉を食つた、そして焚火に背を向けて、臥轉んで、直ぐ眠つてしまつた。彼は、ボロヂイノの戰後モザイスクで眠つたのと同じ種類の睡眠に陥ちた。

又も現實生活の事實が、彼の夢と混錯つた、そして又も誰かゞ、彼自身か又は他の誰かゞ、彼の耳に或る思想を、實にモザイスクに於ける彼の夢に現はれたのと同じ思想を、囁いた。

生命は一切である。生命は神である。萬物は變化し又動くけれども、その運動が神である。そして生命のある所、そこに神を意識する悦びがある。生命を愛することは神を愛することである。

最も困難にして且つ最も幸福なることは、人間が苦痛に際して、不當の苦痛に際して、この生命を愛することである。

『カラターエフ！』と、ピエールはふと思つた。するとその刹那に、永い間忘れてゐた、嘗てスキツルで、地理學を教はつた温順な老教師の姿が、生きてゞもゐるやうにあり〳〵と現はれた。

『一寸、待ち給へ、』と、その老教師は言ふのであつた。そして彼はピエールに、一個の球を見せるのであつた。この球は定まつた限界が無く、生きて顫へてゐるのだ。その全表面は互にシツカリ膠着き合つてゐる微量から成つてゐるそしてその微量はいづれも動き變化してゐるので、その數個が一つとなり、また一つが多數に分裂する。各の微量は擴がらんとし、より以上の空間を占めむと努力してゐるやうに見える、が、他の微量はそれを壓迫し、時としてはそれを吸ひ込み、時としてはその中に溶け込むのである。

『これが、生命だ。』と、老教師が言ふのであつた。

『何て簡單で、明瞭なんだらう、』と、ピエールは思つた。『何故俺はそれが前に解らなかつたんだ？神が中央に在すそして各微量は擴がつて、出來るだけ大きく神を反射しやうと努めてゐる。そしてそ

れは擴大したり吸ひ込まれたり壓服したりする、表面では消滅する、そして深い底へ入つて行つて、再び表面には現はれて來ない。カラターエフはさういふ譯だつたんだ、彼は吸ひ込まれて消滅したんだ。

『解つたかね、吾子、』と、老教師は言つた。

『解つたか、馬鹿！』といふ叫び聲がした、それでピエールは眼が醒めた、彼はその頭を擧げて座つた。一人のフランス兵が、焚火の傍に蹲踞んでゐた。その男は今しもロシア兵を押し除けて、樞杖の尖で肉の片を燒いてゐる所であつた。その湿しい、痩せた、毛だらけの、赤い、指の短かい手は巧みに樞杖を廻はしてゐた。その眉の險惡しい意地惡るさうな顏は、明るい餘燼の光で、瞭然見えた。

『此奴も、同じことだ、』と、その男は後に立つてゐる兵卒に對つて口早に謚いた『匪徒！　あつちへ行け！』

それから兵卒は樞杖を廻はしながら、凄い眼でピエールの方を睨んだ。ピエールは顏を反けて闇黑を見た。フランス兵は、焚火の傍に座つて、手で何物かを打つてゐた。ピエールが近寄つてよく見ると、かの灰色の犬が、尾を振りながら、ロシア兵の傍に蹲まつてゐるのだ。

『あ、來たんだな……』と、ピエールは言つた。『が、ブラト……』と彼は言ひかけたが、續けて言ふことは出來なかつた。忽ちこの時、プラトンが樹の下に座つてピエールを見詰めた眼眸や、犬の吠

聲や、傍を走り過ぎる時の兵卒どもの罪に惱める顏や、煙を出してゐる銃や、その宿營地にカラターエフのゐなかつたことなどの記憶が混錯になつて心に浮んだ。そこでピエールは、カラターエフが殺されたのだといふことを明瞭と意識した、が、それと共に不思議にもキエフの彼の家のヴエランダで、美しいボーランド婦人と彼が過ごした或る夏の夜の記憶が心に浮んだ。けれども、その日のさま〴〵の記憶を結び附けて見ようとはせずに、その記憶から何等かの結論を引出さうとして、彼は眼を閉ぢた。すると田舍の夏の夜の光景や、水浴の記憶や、かの流動し顫動する球の記憶が、混錯になつて、果ては、水中に深く沈み行き、水がその頭の上に覆被さるやうに思はれた。

日の出前に、彼は響の高い速射擊と叫喚とによつて目を醒まされた。フランス人が彼の傍を走つてゐた。

『コザックだ！』と、彼等の中の一人が叫んだ、そしてその刹那にピエールは、ロシア人の群によつて圍繞れてゐた。稍や暫らくの間ピエールには何事が起つたのか解らなかつた。彼は周圍に自分の仲間の嬉號泣の聲を聞いた。

『友達よ！　吾が國民よ！　同胞よ！』と、老兵士どもはコザック兵や驃騎兵を抱いて泣き叫んでゐた。老騎兵やコザック兵は捕虜の周圍に群つて、服や、長靴や、麵麭を與へてゐた。ピエールはその眞中に座つて歔欷いてゐた。彼は一語も發することが出來なかつた。彼に近づいた最初の兵卒を抱い

て、泣きながら彼に接吻した。

ダラホフは荒らされた家の門に立つて、自分の傍を武裝を解いたフランス人の一群を通らしてゐた。この出來事で昂奮してゐるフランス人たちは、互ひに聲高に話し合つてゐた。が、彼等もダラホフの前を通る時には、その話を止めた。彼はその乘馬用の鞭で長靴を打ちながら、見た所少しも良いことのありさうにない樣子をして、冷淡な、朦朧した眼で、彼等を注視しながら立つてゐるのであつた。ダラホフの部下のコザツク兵の一人は、一方の側に立つて捕虜を算へ、百人毎に白堊で門に記號を書いてゐた。

『幾人だ？』と、ダラホフは、彼に尋ねた。

『第二百であります、』と、コザツク兵は答へた。

『Filez(進め、進め)』と、フランス人から斯ういふ言葉を學んだダラホフが言つた。通過する捕虜の眼と遭ふと、彼の眼は慘酷な光に輝いた。

高いコザツク兵帽を手に持つて、陰鬱な顏をしたチエニソフは、花園の中に新たに掘つた穴に、ベエチヤ・ラストフの死骸を運んで行くコザツク兵の後に隨いて歩いてゐた。

十六

十二月二十八日から霜が降り始め、フランス人の退却は尙一層悲慘な姿となつた、兵卒どもは凍死したり、篝火で燒死んだりするのに、皇帝や、諸王や、諸公爵などは、その戰利品を携へて、毛皮の外套に纏まりながら、密閉せる馬車に乘つてその旅を續けるといふ有樣であつた。が、要するにフランス軍の退却と崩解の進行は、變化せずに續けられたのである。

モスクワからヴイアズマの間に、七萬三千（戰爭の始めから終ひまで、掠奪より他何もしなかつた近衞兵は計算の中に入れず）のフランス軍は僅かに三萬六千人になつてしまつた。所で、戰死者は五千人に過ぎなかつたのだ。こゝに吾々は、級數の最初の項を得たのだから、殘りの項は夫れによつて數學的精確をもつて決せられる。フランス軍はモスクワとヴイアズマ間、ヴイアズマとスモオレンスク間、スモオレンスクとベレヂナ間、ベレヂナとヴイルナ間に於ては、寒冷の度、追擊や道路の障碍、或はその他の條件を別にすれば、同じ比例で消滅して行つた。ヴイアズマからフランス軍は三列となるのを止めて、一團となつて行進し、最後までそれを續けてゐた。ベルチエーは皇帝に宛てゝ次の如き手紙を書いてゐる、（但し將官たちが、軍隊の狀態を述べる時には、事實から遠ざかつても構はぬものだと思つてゐることは何人も知るところである）——

『私はこの二三日間に觀察した諸隊の狀態を、陛下に報告することを私の義務であると信じます。諸隊は殆んど崩解してゐます。兵卒の四分の一が辛うじてその聯隊旗の下に踏み留まつてゐるばかりで、

他のものは食物を獵り、或は軍紀を逃れるために、諸方にうろついてゐます、兵卒どもはいづれも、回復の希望のあるのは、スモオレンスクだと信じてゐます。この數日間に多くの兵卒は、その彈藥や銃を放棄しました。かういふ狀態ですから、陛下の今後の御計畫は測り知るところではありませぬが、陛下の事業をして有利ならしめんとするには、スモオレンスクに於て、軍隊を再び整頓し、乘馬を有せざる騎兵や、贅物の行李や、砲兵の一部等のやうな、今の場合軍隊の効果と釣合はない凡てのものは放棄するのが肝要であります。尙又糧食と、數日間の休息が必要であります、兵卒は饑餓と疲勞に困憊してをります、この數日間に、多くの兵卒が路傍や又は露營中に死にました。かういふ狀態は日に日に惡い方へ進んでゐるのであります、で、速かにこの危險を救ふ手段が講ぜられない限り、吾々は戰鬪に際して軍隊を制御する事が出來ないやうなことになりませう。

スモオレンスクより

十一月九日

十露里の地點にて。』

さて、その夢みてゐた希望の地なるスモオレンスクへ辿り着くと、フランス人は食物のために爭ひを始めて、互に殺し合ひ、そして自分たちの貯藏を掠奪した。そして掠奪をし盡してしまふと、彼等は更に遁走した。彼等はいづれも、何處へ行くのか、何のために行くのかを知らずして、唯行くのである。就中、かの大天才ナポーレオンは、誰一人彼に命令を與ふるものが無いのだから、誰よりも夫

れを知らなかつた。けれども、彼及び彼の周圍にある人々は、やはり古い習慣を墨守して、命令や、手紙や報告や、その日の命令などを書いた、そして互に陛下、吾が從兄弟、公爵デュックミユウル、ネープル王 (Sire, Mon Cousin, prince d'Eckmühl, Roi de haple, etc.) などゝ呼び交はしてゐた。が、この命令や報告は紙の上に書かれたばかりで、誰もそれを持つて行く者がないから、實施されたことは決してなかつた。そして又彼等は互に『陛下』とか『殿下』とか『從兄弟』とか呼んでゐるもの の、いづれも皆、お互ひに大惡事を働らいた爲めに、今罪業消滅の苦行をしてゐる、憐むべき惡漢どもだと思つてゐたのだ。で、彼等は軍隊のことを氣に掛けてゐるやうな風をしてはゐるが、その實各自自分のことばかりを考へ、何うにかして、出來るだけ早く、安全なところへ逃れやうとしてゐるのであつた。

十七

モスクワからニーメンまでの退却の間の、露佛兩軍の行動は、二人の者が互ひに眼を縛り合つて、時々その一人が鈴を鳴らしてその所在を知らせる、ロシアの目隱戲に似てゐる。始めの中は被捕手は捕手を怖れすにその鈴を鳴らすが危い地位に陷つて來ると、彼は出來るだけ音のしないやうに、捕手

から逃げ出す、さうなると、反つて捕手から遠く逃げやうと思つて、捕手の腕の方へ眞直ぐに歩いて行くものだ。

初めのうちナポーレオン軍はその所在を知らした——これはカルウガ街道に沿うて退却した初め頃のことである——が、その後スモオレンスク街道に沿うて進んだ時には、鈴の舌を押へて走つた。しかも反つて彼等は逃げ終せてゐると思ひながら、ロシア人の方へ眞直に走つてゐた。

フランス人の退却と、ロシア人の追撃が急速であつた爲めに、その結果乘馬が疲勞した爲めに、敵の狀勢を確むる主要の方法——騎兵斥候——は不可能であつた。且又、兩軍の位置が度々急速に變化した爲めに、報告がいつも遲れた、第一日に、敵軍が某地にゐたといふ報告が第二日に到着したとすると、その報告が行動となつて現はるゝ第三日には、敵軍は既に二日間前進して全く別な場別にゐるわけだ。

一方の軍は逃げ、一方の軍は追擊した。スモオレンスクからはフランス人の爲めに選ぶべき多くの異つた道が分れてゐた。で、誰しもフランス人はスモオレンスクに四日も滯留したのだから、何か有利な計畫を案出し、何か新しいことを企てたと思ふに違ひない。しかし四日間の滯在後フランス人の群集は、再び右にも行かず左にも行かずして、何の作戰も計畫も立てずに、クラスノオエ及びオールシヤを通る舊の道——最も惡い道——を通つて、即ち一度敗戰した道を通つて逃げ出したのである。

敵は背後にあるので、前方にはゐないと思つてゐたから、フランス人は無暗に逃げた、そして道に踏み迷つては、二十四時間も行軍するうちに、各自に離れ〳〵になつてしまつたのであつた。先頭は皇帝次ぎは諸王、次ぎは諸侯といふ順に逃げ出した。ロシア軍は、ナポーレオンがドニエープル河を越えて右する——何うしても夫れを通るだらうとしか考へられなかつた道——であらうと想像したので、彼等も亦右に曲つてクラスノエの官道に出た。所がこゝで恰度目隱戲に於けると同じやうに、フランス人は我軍の前兵に衝突したのだ、フランス人は思ひ掛けなく敵を見たので、周章狼狽の餘り、俄かの驚愕で暫らく立縮くんだが、やがてその後方の戰友を見棄てゝ、又逃げ出した。で、三日の間斷れ斷れになつたフランス軍はロシア軍の隊例を貫通つても逃げやうといふ勢で逃げ出した。最初は總督軍次ぎはダヴウ軍、次ぎはネエー軍、といふ順に彼等はいづれも互にその戰友を振り棄て、重い荷物や、砲兵隊や、半數の兵卒を見棄て、夜中、露軍を避けるために、右方に半圓を描いて逃げ出した。

ネエーが最後になつたのは、自分の悲慘な狀態にも抱はらず、否、寧ろ悲慘な狀態であつたが爲めに、彼が自分を傷めた床を打つ小兒のやうな衝動で、スモオレンスクの城壁を爆發させやうとして徘徊いてゐたが爲めであつた、しかしその爆發で誰一人害を受けたものはなかつた。最後に、一萬の軍隊を率ゐてロシア軍を切り抜けやうとしたネエーは、僅かに千人の兵を連れてオールシヤに於けるナポーレオンに合した。彼はその餘の兵士全部を棄て、大砲を遺棄し、夜中密りと森の蔭に隱れ、

そしてドニエープルを渡つて逃げたのであつた。

彼等は追撃軍と尚も同じ様な目隠戯(おにごっこ)をしながら、オールシヤからウイルナ街道に沿うて逃げた。ベレジイナで、再び彼等は周章狼狽に陥つた、そして多くのものは溺死し、多くのものは降伏し、河を越えたものだけが漸く逃走した。

彼等の總司令官は毛皮の外套に纏(くる)まり、橇に乗り、その戰友を棄てゝ、たゞ一人逃げ去つた。逃げることの出來たものは逃げた。そして逃げることの出來なかつたものは——降伏したり、死んだりした。

十八

フランス人が戰爭のこの時期に於て、自分たちの滅亡を醸すために爲し得べき有らゆることを爲したこと、また、カルウガ街道へ曲つた時から總司令官が、その軍隊を棄てゝ逃げた時に至るまで、この人間の集團の如何なる些細の運動にも工夫の跡が少しも示めされてゐないことを考ふる時、集團の行動を一人の人間の意志に歸する歴史家は、その理論をもつて此のフランス人の退却を說明することは不可能であらう、と人々は想像するかも知れぬ。

が、さうではないのだ！　この戰爭に關して山の如き書物が多くの歴史家によつて書かれてゐる、そして、その中のどの書物にも、吾々はナポーレオンの巧妙なる配置と、その深謀遠慮、軍隊をして行はしめた作戰、元帥たちの示せし軍事的天才等に關する記事を發見する。

マレイ・ヤロスラーウェツからの退却——ナポーレオンが糧食の豊富なる地方を通過するに何等の障碍もなく、且つ後(のち)にクツウゾフが彼を追撃した並行せる道路が彼の前に開け放されてあつたにも拘はらず、無益にもかゝる荒廢せる地方を通じてゐる道を退却したこと——は種々の怜悧なる考慮の結果であるとして、吾々に說明されてゐる。スモオレンスクからオールシヤに至るナポーレオンの退却に就いても吾々は同じ理由を與へられてゐる。それからクラスノエに於て、ナポーレオンが英雄的行動を示めしたといふ記事がある。そこで彼は戰闘の準備をなし、指揮をなさんとして、手に樺木の杖を持ちながら陣頭に立つて、

『予は、隨分永く皇帝であつた、今は將官(ゼネラル)となるべき時である！』

と、言つたと傳へられてゐる。

然るに、何ぞや、彼はその舌の根の乾かぬうちに、後方にある分裂せる軍隊を、運命の手に委ねて逃走したのである。

それから元帥(マアシャル)のうちの或るもの、殊にネエーの偉大に關する記事がある——彼が森の影に隱れ、圓

形に道をとつてドニエープル河を渡つたこと、その軍旗を失ひ、砲兵を失ひ、兵卒の十分の九を失つてオールシヤに逃げたことが、彼の偉大なる精神を示めしてゐると說かれてゐる。

そして最後に、大皇帝がその勇敢なる軍隊を棄てて去つたことは、歷史家によれば、何か偉大なことと——天才の一擧動——として說明されてゐるのである。

この最後の逃亡でさへも——それを有り觸れた語で書けば、小兒が恥づべき事として敎へられてゐるやうな、一ばん見苦しい行爲として記さるゝであらう——この行爲でさへも、歷史家の語をもつてすれば、正しくなるのである。

歷史上の議論の伸長自在の糸を伸ばすことが出來なくなる時、一つの行動が人道の正義正道と呼ぶ所のものと明かに相反する時、歷史家は偉大といふ概念に隱家を求める。偉大は正邪の標準を適用する有らゆる可能を除外してゐるやうに見える。偉人にとつては——惡は一つもない。偉人に如何に非道なことがあつても、それは彼を非難する根據とはならない。

『それは、偉大だ！』(C'est grand!)と歷史家は叫ぶ、そしてその語にはもう善惡はないので、たゞ『偉大』か『非偉大』があるばかりである。『偉大』は善に等しく、『非偉大』は惡に等しい。『偉大』たることは、彼等の考想によれば、彼等が英雄と呼ぶ、或る例外的人物の特性である。その溫い毛皮の外套に身體を包み、彼の伴侶であるのみならず、彼の行爲のために(彼の信じて居た所によれば)そこへ

連れて來た兵卒を棄てゝ、家に逃げ歸つたナポーレオンは、たゞ『それが偉大である』(C'est grand)と感ずる、そして彼の靈魂は、滿足するのである。

『Du sublime au ridicule il n'y a qu'un pas. (崇高なることと、嘲笑すべきこととの間は、たゞ一步の差である)』と、彼は言つた。(彼は自分を崇高だと考へてゐるのだ！)そして全世界は五十年間、崇高偉大！　ナポーレオン大帝！を繰返し續けて來た。

『崇高なることゝ嘲笑すべきことゝの間は、たゞ一步の差である。』

で、正邪の法則によつて測れない偉大を承認するのは、その人自身の空虛と限り無き卑小とを承認するに外ならぬといふことを誰も考へない。

基督によつて與へられたる正邪の法則をもつ吾々にとつては、吾々の標準をもつて測られぬ何ものもないのである。卽ち眞率と、善と正義との無い所には偉大は無いのである。

十九

ロシアの讀者が、一八一二年の戰爭の後期の戰記を讀む時に、誰か退屈さと、不滿足と當惑の五月蠅い感じがせぬものがあるだらうか？　誰か、自分自身に對してから尋ねないものがあるだらうか——

——三個のロシア軍全部が遙かに有力な兵をもつて、フランス人を包圍してゐるのに、而もフランス人は秩序を亂し、餓えて、凍死せんとする烏合の衆であるのに、又ロシア人の凡ての目的は、(歴史が吾々にそれを語つてゐる)フランス人の全部を防遏し、斷ち切り、捕虜にすることにあつたのであるのに、何うしてフランス人の全體は、捕虜にもせられず、粉碎もせられなかつたのか、と。

少數をもつてボロヂイノの戰役に戰つた、ロシア軍がフランス人を三方から包圍してゐるのに、それを捕虜にする目的を達することの出來なかつたのは何ういふ譯であつたのか？　吾々は數の上に於ても遙かに優つてゐる軍隊を以てフランス人を圍んでゐるのに、尙吾々がフランス人を擊つ匹敵者になれぬほど、フランス人は吾々よりも非常に優勢であると云ひ得ようか？　何うして、あゝいふことになつたのか？　歴史は(歴史といふ名稱で通つてゐる所のものは)この疑問に答へて、さうなつたのはクツウゾフや、トルマーゾソフヤや、チチヤアゴフその他誰れ彼れの將軍が、或る戰略を實行するのに失敗したからであると云つてゐる。

けれども、何故、この人々が戰略を實行するのに失敗したのか？　所で此の人々が實際、その前に置かれた目的を達しなかつた事に對して、責任を負うてゐるものとすれば、その失策に對して裁判され、罰せられなかつたのは、何ういふ譯であつたのか？　縱し吾々が一步を讓つてクツウゾフや、チチヤアゴフや、其の他の將軍が、ロシア人の不成功に對して責任を負ふたことを承認するにしても、

更に了解に苦むのは、ロシア軍が其のいづれも數の上で優勢でありながら、クラスノオエ及びベレジナの陣地に於て、フランス軍と、その元帥たちが捕虜にせられなかつた——若し捕虜にすることが、實際ロシア人の目的であつたとすれば——ことである。

ロシアの歴史家によつてなさるゝ此の現象の說明——クツウゾフが攻擊を妨げたといふ——は不充分である、何故といふに吾々は、クツウゾフが、ヴィアズマ及びタルチノに於て、攻擊から軍隊を制御することが出來なかつたのを知つてゐるからである。寡勢をもつて、ボロヂイノに於て、その力の絶頂に達してゐる敵に對して勝利を得たロシア軍が、クラスノオエ及びベレジナに於て、フランス人の紀律なき群集に對して、不成功であつたといふのは、何ういふ譯であつたのか。

若しロシア人の目的が、實際、ナポーレオンとその元帥の逃路を斷ち、彼等を捕虜にすることにあつて、而もその目的が、無効になつたばかりでなく、それを達せんとする凡ての計畫が、その度毎に最も恥づべき方法で破れたとするならば、フランス人がこの戰爭の後期を自分等の勝利の連續であると主張しても全く間違ひが無いので、そしてロシア人が夫れを吾々の光榮に歸すべきこととして主張するのは間違つてゐるのである。

ロシアの軍史家は、彼等が論理の要求を認むる以上は、かういう結論に到達せざるを得ないのである。即ちロシア人の勇氣や、愛國心や、その他の種々の行動に對する彼等の抒情史的な頌詞は頌詞と

して、兎に角フランス人のモスクワからの退却がナポーレオンにとつては勝利の連續であり、クツウゾフにとつては敗北の失れであつたことを承認せざるを得ないのである。

けれども愛國的の虚榮心は全く別としても、兎に角フランス人の勝利の連續がその全滅となり、又ロシア人の敗北の連續が、その敵の殲滅と、その國の救濟に導いたことを見ると、この結論には或る本來の蹉跌があるのを感ぜざるを得ない。

この蹉跌の原因は、國王や將軍たちの手紙や、記錄や、報告や、計畫などを便りにして事件を研究する歷史家が、一八一二年の戰爭のこの時期に於ける計畫が、逃路を斷つて、ナポーレオンとその元帥と、その軍とを捕虜にすることにあつたといふやうな全然誤つた假定をしたといふ事實の中に横はるのである。

かゝる計畫はロシア軍の目的では無かつた、又ロシア軍の目的で有り得る筈が無かつた、何故といふに、それは無意味なことであり、又それに到達することは全く問題外のことであつたからである。

かゝる計畫には何の目的も無かつた。第一に、ナポーレオンの軍は全速力を以つて、秩序を亂して、ロシアから逃走しつゝあつたのである。即ちロシア人の各自が一番熱望してゐた事そのものをなしつゝあつたのである。フランス人が既に能ふ限りの速力で逃走してゐるのに、そのフランス人に對て凡ゆる種類の戰略を施す理由が何處にあるのだらう?

第二に、その全精力を逃走に向つて注ぎつゝある人々を、道で止めるのは無意味なことである。第三に、既に外面からの妨害がなくとも、自滅しつゝあつた——道中に何の障碍もないのに、十二月に國境を越え得たのは其の元の人數の百分の一より少なかつたといふほどの割合で——フランス軍を破るために人を失ふといふのは愚なことである。

第四に、皇帝や、諸王や、公爵たちなどを捕虜にすることは馬鹿げたことである、何故といふに、かういふ捕虜を所有することは、非常にロシアの狀態の困難を增したかも知れないので、當時の最も洞察力ある外交家等(ジエー・メイストル及びその他の者どもは)それを認めてゐたのであつた。更にもつと馬鹿げてゐるのは、フランス軍はクラスノエに達するまでに其の半分に減じ、そして一師團の護衞隊が捕虜を護衞するのを廢めねばならぬことゝなり、一方、ロシアの兵卒ども自身は始終充分に糧食が無くて、それに彼等の捕へた捕虜は饑死したといふやうな時に至つて、尙その上にフランス軍を捕虜にしようなどゝいふ欲望を起すことである。

ナポーレオン及びその軍の退路を斷ち、又捕虜にせんとする計畫は、如何に注意深く案出されてあるにしても、それは丁度花壇を踏みつけた家畜の群を追ひ出してから、その家畜の頭を打たうとして駈け出す園丁の行爲のやうなものだ。その男の行爲を辯護して云ひ得る唯一の事柄は、彼が非常に怒つてゐたといふことである。しかし此の假想せられたる計畫の創造者は、この辯護をもつてしても辯解

することは出來ない、何故といふに彼等の花園は踏み附けられた花園ではなかつたから。

で、馬鹿げてゐるといふことを別にしても、ナポーレオン軍の退路を斷つことは不可能であつた。

その不可能であつた第一の證據は、一つの戰場に於て、五露里に渡る幾つもの縱隊の運動は、決してその運動の計畫と一致しないものだといふことを經驗が示してゐるからである、即ち、チチヤアゴフや、クツウゾフや、ウイツトゲンスタインが悉く間に合ふやうに、或る定められた場所に達するであらうといふ見込みは、いざとなると事實不可能に等しいほどに、齟齬するものだからである。クツウゾフの如きは、遠方で案出された戰略は決して期待した結果を生じないものであると云つて、實際にそのことを認めてゐる程である。

第二に、その不可能であつたわけは、ナポーレオン軍をば、その道に沿うて彈き返してゐた惰性の力を麻痺させる爲めには、ロシア人がその指揮の下に持つてゐたよりも、もつと〳〵大きな軍隊の力を要したからであつた。

第三に、その不可能であつたわけは、『斷ち切る』といふ軍用語は、實際には無意味だからである。麵麭の片なら斷ち切ることも出來やうが、軍を斷ち切ることは出來ない。軍を斷切るといふこと——即ちその道を遮斷すること——は不可能である。何故といふに、いつでも兵卒が逃げ出す廻路を作り得べき場所が多い、それから何時でも夜といふものがあつて、その間は何することも出來ないからである。軍略家は、クラスノオエ及びベレジナの例でかういふ事實を信ずることが出來たであらう。手の上に燕が棲まることは有り得ても、それを捕へることが出來ないのと同じやうに、捕へらるゝことを承諾しなければ、人を捕虜にすることは出來ない。降伏する者を、ドイツ人がするやうに、戰術と兵學の法則に從つて、捕虜にすることは出來る。所がフランスの兵卒どもは悧巧にも、捕虜になるのも逃げ續けるのも、どの道寒さと饑の爲めに死に襲はれるのは同じことだから、そんなことをしても決して德になるとは思はなかつたのである。

不可能であつた第四の、即ち主な理由は、抑もこの戰爭は一八一二年に世界始まつて以來の最も怖るべき狀態の下に戰はれたのであつて、ロシアの軍隊は、フランス人の追擊に有らゆる神經を緊張させ、彼等自身を殺さなければ、それ以上のことを爲し得なかつたからであつた。

ロシア軍は、タルチイノからクラスノオエまでの行進中に、五萬人の病兵と落伍者とを失つた、五萬人と云へば、地方の大きな市の人口に相當する數である。軍の半ばは、戰爭をせずして失はれたのである。

戰爭のこの時期には、兵卒どもは長靴も毛皮裏の外套もなく、食糧は定量の半分を以て、火酒さへ飮まず、數ヶ月の間每夜氷點下十五度の雪の中に野營したのであつた。それから日中の時間はたゞの七八時間しかなくて、その他は夜であつた、そこでは軍紀はいつもと同じ權力をもつて行はれた、そ

して兵卒どもは戰場でのやうに、數時間の間を限つて死の危險の中に置かれるのではなくて、何ケ月も、一刻々々、寒さと饑からの死と爭鬪を續けなければならなかつたのである。で、戰爭のこの時期に於て、軍の半ばが一ケ月の間に死んだ時に、歷史家はミロラドキッチが一つの方向へ斜行進をしなければならなかつた苦だとか、トルマーゾフは他の方向へさうしなければならなかつた苦だとか、又チチヤアゴフは此の地點まで進むべき苦であつた(兵卒どもは膝まで達する雪の中を進んでゐるのに)とか、それから誰れそれが突破したとか、フランス軍を斷ち切つたとか、その他種々樣々のことを、吾々に語つてゐる。

ロシアの兵卒どもは、人民に對して價値のある目的を達するために爲し得たこと、若くは、爲すべき苦であつたことを悉く爲たのであつた。そして夫れをする爲めに彼等の半分が死んだのであつた。他のロシア人が、家の中で溫い部屋の中に座つて、不可能なことを爲すべき苦だなど、無理を云つたからとて、彼等は決して非難さるべきものではない。

今日では之れ程までに了解し難くなつてゐる、事實と歷史家の記錄の間の、凡てのこの不思議な齟齬(くひちがひ)は、かういふことから起つてゐるのである、卽ち歷史家は種々(さまざま)の將官(ゼネラル)の高貴な感情や、立派な演說の歷史を書いてゐるのであつて、事件そのものゝ歷史を書いてゐるのではないといふ事實から起つてゐるのだ。

歷史家はミロラドキッチの言葉や、誰れそれ將官に與へられたる名譽や、將官(ゼネラル)たちによつて成された提言に、重大な斷案を結び附けてゐる。しかし病院や墓場に橫はつてゐる五萬人の人間に對する問題は、歷史家に興味をさへも與へなかつた、何故なればその問題は彼等の研究の範圍內に來ないからである。

けれども吾々は將官(ゼネラル)たちの報告や、計畫ばかりの研究から步を轉じて、この事件に直接の役割を取つた、かの十萬人の人間の行動を見なければならぬ。さうすれば前に解決の出來ないやうに見えた有ゆる問題が、直ぐに、間違ひなく、非常に容易く、且つ簡單に、說明することが出來るのである。

ナポーレオンと、その軍とを斷ち切る計畫は、十數名の人々の想像の中を除いては、決して存在しないのだ。それは馬鹿(ばか)げたことであり、且つ實行することの出來ないことであるから、從つて存在し得なかつたのである。

人民はたゞ一つの目的をもつてゐた。それは卽ちその國を侵略者から潔めることであつた。しかしその目的は間もなく先づ自ら成遂げられた、といふのはフランス人が逃走し始めたからである。そして夫れを妨げる必要は勿論なかつたのである。而もそれは人民たちが規則のない戰爭をつゞけて、フランス軍を散々に粉碎することによつて益々進捗させられた。それから第三には、フランス人の直ぐ後を追ふてゐる大ロシア軍が、若しフランス人が退却を休むやうなことがあれば、直ちに攻擊を加へ

ようと待ち構へてゐたことの爲に、益々進捗させられた。

ロシア軍は逃げる獣を追ひ迫まる鞭のやうな働きをした。で、經驗のある追手は鞭を動物の背に打ち下ろすよりもそれを威嚇のために振り上げて持つてゐる方が一層宜いといふことを知つてゐたのだ。

第七編

一

人は生物の死ぬのを見る時には、恐怖に襲はれるものである。彼の彼たる所以のもの——即ち彼の本性が、明かに彼の目前で滅びる——即ちなくなつて了ふのだ。けれどその死んで行く生物が人間である時、而も心から愛して居る人間である時は、その時には、生の滅亡に對する恐怖の外に、更に感ぜらるゝものは靈魂の破碎と精神的の負傷であるそれは、肉體的の負傷と同じく、時には致命的であるし又時には回癒することもあるが、兎に角それが外界と觸接すると刺戟せられて痛んだり又しりごみしたりする。

アンドレー公爵の死後、ナターシヤと公爵令嬢マリヤとは、二人とも同じ様にこのことを感じた。

魂を碎かれたので彼等は、目分達の上を飛び廻つて威嚇する死の雲の下に眼を閉ぢて、人生をまともに見ることを敢てしなかつた。

彼等は、粗野な痛々しい接觸を避けて注意深くその傷口を守つた。有らゆるもの——町を駈けて行く馬車も、貰食の知らせも、どの着物をお召しになると尋ねる女中も、更にいけないことは、——力の無い、僞りの同情も——總てその傷を一つ突いて、辱かしめるやうに思はれた。そして彼等は二人とも未だ全く耳から消え去らない、かの嚴かな恐ろしい祈禱を聞き、又一瞬間彼等の前に開かれたやうに見えた神秘な、無限の遠景を見詰めやうと努めて居た、その必要な沈默を破られるのであつた。

たゞ二人だけで彼等が居る時は、斯ういふ凌辱や苦痛から免れた。彼等は殆んど言葉を交さなかつた。談しても、それは極く些々たる事柄に就いてであつた。そして二人とも同じやうに何事も未來に關することは總て話すのを避けた。

未來の可能性を認めることは、彼等にとつては、彼の記憶に對する侮辱と思はれた。殊に一層氣をつけて彼等が話すことを避けたのは、凡て故人に關することであつた。彼等にはその感じたこと、經驗したことは言葉では表はし得ないと思はれたのであつた。彼等には、彼の生前の細かい話を言葉で表はすのは、彼等の眼前で爲し遂げられた神秘の偉大と神聖とを侮辱するものと思はれたのであつた。

この不斷の言葉のつゝしみや、凡て彼に關する話になり相なことは避けやうとする心掛や、卽ちこ

れ等の柵は、話してはならないことを取り卷いて、彼等の感じて居ることを心の前に明瞭に瘉した。けれども純粹にして完全な悲みは、純粹にして完全な喜びの如く不可能なことである。彼女の甥の後見者及び養母として孤獨な地位から、彼女の運命たる獨立した主婦として、公爵令嬢マリヤは、先づ二週間の間居に悲嘆の世界から實人生に返つて來た。彼女は自分の親戚から數通の手紙を受け取つた、そしてそれには返事をやらなければならなかつた。ニコリューシカの置かれた部屋は濕氣て居たので、彼は咳嗽をし出した。アルパチーチが始末書をもつてヤロスラウルへやつて來た。彼は意見を提出した、そして公爵令嬢マリヤにモスクワの、ヴオズヴイゼンカの邸へ歸ることを勸めた。その家は損じては居ないから、僅かの修繕を要するのみであつた。人生といふものは、ぢつとしてゐない、そして彼女は生活しなければならぬ。公爵令嬢マリヤにとつては、その時まである淋しい冥想の世界を出ることは苦しかつたが、又ナターシヤをひとり殘して置くことは悲しくも又良心に咎められることであつたが、日常生活の色々の用事が彼女の注意を促した。そして彼女は心ならずもそれに從つた。

彼女はアルパチイーチの始末書を調べて、彼女の小さい甥のことでデツサルと相談して、それからモスクワへ移る用意にとりかゝつた時分から、ナターシヤはひとり取り殘された、そして公爵令嬢マリヤが慌しく旅立の用意にかゝつた時分から、彼女からも亦離れてゐた。

公爵令嬢マリヤはナターシヤもモスクワへ行かせて、自分と一緒にゐさせて呉れるやうにと伯爵夫人に頼んだ。すると父と母も二人とも熱心に同意した。といふのは、彼等は娘の體力が日々に衰へて行くのを氣にかけてゐたので、轉居やモスクワの醫者の忠告は彼女を健康にするかも知れぬと思つたからであつた。

『私はどこへも行かうと思ひません、』と、ナターシヤは、その話を聞かされた時に、答へた。『私のお願ひは唯どうか私を一人で打つちやつといて下さいといふこと丈です。』と、彼女は言つた、そして彼女は、悲しいといふよりは寧ろ迷惑と怒りの涙を押さへ兼ねて、室を飛び出した。

ナターシヤは公爵令嬢マリヤに捨てられたのを感じてからは、ひとり悲みに耽つて、暇さへあれば自分の部屋に閉ぢ籠つて、長椅子の上に小さくなつて居た。その細い神經質な指が忙がしく捩ぢれたり、何かを引き裂いたりして居る時には、彼女はぢつと目を据えて、何でも最先きに出會つたものから目を放さなかつた。この孤獨は、彼女を苦しめ且つ疲らせた。けれども夫れは彼女の求めたものであつた。誰か彼女の部屋に這入つて行くと彼女は急いで起ち上つて、その態度や顏色をかへて、闖入者の出て行くのを明らかに堪え難さうに待ちながら、本か針仕事かを取り上げた。

彼女にとつては、絶えず自分が或る神秘を了解し浸透せんとする瀬戸ぎはに立つて居る様な氣がするのであつた。その神秘に關する彼女の精神的幻影には、堪え難いまでに恐ろしい一つの問題がつな

がつて居たのである。

十二月の末の或日、痩せ青蒼めて、黒い毛織物の長衣を着て髪を無造作に輪に束ねたナターシヤは、長椅子の隅に足を上げて腰かけて居た、その指は、神經的に自分の飾帶の端を折り曲げたり伸したりして、同時に眼はぢつと扉の隅の方を見つめて居た。

彼女は心の中で、何處へ彼が行つて終つたか、その遠い岸を眺めて居た。そして昔は決して考へたこともなければ、又ずいぶん遠く、ずいぶん信じられなかつたその岸が、今は彼女に近よつて、凡て空虚な又荒涼とした而して苦しい又惨めな、人生の此岸よりは更に彼女のものであり、更に了解し得られるものとなつた。

彼女は、彼が居ると知つてゐるその世界を見詰めて居た。けれども彼女は、彼がこの世に居た時のやうにしか彼を見ることは出來なかつた。彼女は彼がミテイツシユチイや、トロイツツアやヤロスラウルに居た時のやうにまた彼を見るのであつた。

彼女は、彼の顏を眺め、彼の聲を聞き、彼の言葉や自分が彼に云はせた彼女自身の言葉などを繰り返した、又時には過去に於いてのみ言ふことの出來たやうな二人の間の新らしい言葉を想像しても見た。

今彼女は、天鵞絨の、毛皮の緣取りした着物を着て、痩せた、青白い手で頰杖をついて、低い椅子

の上に寢て居る昔通りの彼を見た。胸が恐ろしく凹んで肩が張つて居た。その唇は堅く結ばれ、その眼は輝き、そして白い顏には現はれたり又なくなつたりする一本の皺があつた。片足は正に眼に見えるほど忙がしく震へてゐた。ナターシヤは彼が恐ろしい苦痛を一生懸命に堪えて居るのだと思つた。『何のやうな痛みなのだらう？　何故痛むのだらう？　どんな氣持なのだらう？　どうして痛めたのだらう？』と、ナターシヤは不思議に思つた。

彼は彼女の心配して居るのに氣がついて、眼を上げて、微笑まずに、話し始めた。

『唯一つ恐ろしいことは、』と、彼は言つた。『苦しんでゐる病人にいつまでも束縛されることだ。それは永久の苦惱だらう。』そして彼は探るやうな眼付で彼女を見た。

ナターシヤは、いつもする通りに、よく自分の言ふことを考へもしないで答へた『いつ迄もこのまま續くことはありますまいよ。そんなことがありつこはありません、あなたはよくなりますよ——すつかりと。』

彼女は、今が初めてでもあるかのやうに彼を見た。そして、その時分に彼女が感じた總てのことを思ひ返してゐた。彼女は、彼がこれ等の言葉と共に與へた長い、悲しさうな嚴しい凝視を思ひ出した。そして其の長い凝視の中に含まれた凡ての批難と絶望とを理解した。

『私にも同感が出來たわ、』と、ナターシヤは今獨言に言ふのであつた、『若しあの人が何時でもあゝして苦しんでゐるのだつたら嘸ぞ恐ろしいことだつたでせうよ。私があの時さう云つたのは、あの人にとつて夫れが何んなにか恐ろしからうと思つたからなの。けれど、あの人はさうはとつてくれなかつた。あの人は、夫れは私にとつて恐ろしいのだと思つたのだわ、で、あの人はまだ生きてゐたかつたのだわ。死を恐れてゐたのだわ。それに私の言ひやうつたら本當に拙くつて氣が利かなかつたんですもの。私はそんなことを思つては居なかつたのよ。私はもつと別のことを考へて居たのだわ。若し私が自分の思つてた通りを言つたとすれば、私は「あの人は死ぬんなら、死んでもいゝから、何時までも私の眼の前で死なせたい。さうすれば私は今よりは幸福であつたでせう。」と、言ふところだつたわ。今は……何にもない。誰もゐない。あの人はそれを知つて居たかしら？　いゝえ、あの人は知らなかつたでせう、で、この後も決して知りはしないでせう。けれど今となつては、もう何うしても、何うしても取り返しがつかないのだわ。』

そして再び彼は同じ言葉をくり返して居た、けれども此度はナターシヤは想像の中で異つた答へをした。彼女は彼を止めて言つた。『あなたの爲めに恐ろしいので、私に恐ろしいのぢやありませんわ。あなたは御存じでせう、私はこの世ではあなたの外には何にも持つては居ないのです、だからあなたと一緒に苦しむのは、私の最も大きな幸福なのです。』すると彼は、彼女の手をとつて、丁度死ぬ四日前の、あの恐ろしい晩にした時のやうに、それを握り締めた。そこで彼女は、自分の想像の中で、彼

に愛と戀の言葉を話しかけた、それは、その時言つたのとは異つてゐたが、實はその時に言ふべき言葉であつたのだ、それを彼女は今言つたのだ……『私はあなたを愛してゐます！……あなたを……私は愛してゐます。愛して。……』と、彼女は言つて、身悶えして自分の手を握り合せて、ひどく烈しく齒を噛みしめた。

すると、悲哀の心持のいゝ氣分が彼女を襲つて來た。そして涙が出て來たが、不意に彼女は、『誰に彼女は夫れを言つてゐるのだらう？　彼は何處にゐるか、又彼は今何うなつてゐるか？』と、自分に問ふた。

すると、再び有らゆる物が、冷たい殘酷な疑惑の中に隱されてしまつた。そして復、いら〳〵と顏をしかめて彼女は、彼のゐたその世界を覗かうとした。そして、今こそ、今こそ、彼女は確に神秘に到達しつゝあるのだと思つた。……けれど、その不可能の物が彼女の眼の前に現はされた、と思はれた、その刹那に、扉のハンドルの高いガタ〳〵いふ音が夫れを聞いた彼女に恐ろしい身慄を與へた。女中のヴニヤーシヤがナターシヤには氣もつかないやうな怖々した眼をして部屋へあたふたと唐突に驅け込んだ。

『お父さまのところへいらつしやいまし。大急ぎで。』と、ヴニヤーシヤは妙な昂奮した顏色をして言つた。『不幸……ピョートル・イリヰツチが……手紙』と、女中は獻欵あげながら、やうやく言つた。

二

その頃ナターシヤが經驗してゐた、全世界から遮斷してゐるといふ感じを、彼女は自分自身の家族に對して一層著しい度に於いて感じた。彼女自身の家族の全部、父と母とソーニヤは彼女に大變近く、毎日始終ゐるのだから、彼等の語る言葉、彼等の洩らす感情が、悉く彼女が近來住んでゐる世界を攪き亂すのであつた。彼女は彼等に對して、無關心といふより以上に、積極的の敵意を感じてゐた。彼女はヴニヤーシヤがピョートル・イリヰツチだの、不幸だのと云ふのを聞いたが、何のことだか解らなかつた。

『何んな不幸なんだらう。何んな不幸が彼の人達にありうるものだらう？　あの人達は、何も歎も昔通りに變化のない安泰な樣子で、行つてゐるぢやあないか。』と、ナターシヤは心の裡で言つた。

彼女が客間へ行つた時に、父は伯爵夫人の部屋から慌しく出て來た。彼の顏は顰んで涙に濡れてゐた。彼は息を詰らす獻欵を十分に泣いてしまはうとして、部屋を驅け出て來た事は明かであつた。ナターシヤを見ると、彼は絶望の樣子で腕を振つた。そして烈しい、心細さうな獻欵を始めた。それが彼の軟かな圓い顏を痙攣らせた。

『ペト……ペエチヤ……おいで、お入り、お母さんが呼んでゐる……』そして、子供のやうに歔欷あげながら、彼は弱々しい脚で椅子へよろけて行き、そして殆んど其の上へ落ち込むやうにして、兩手で額を隱した。

電氣のやうな衝動がナターシヤの身體ぢうを走つたやうに見えた。何か恐ろしい苦痛が彼女の心臟まで刺し貫いたやうに見えた。彼女は鋭い苦惱を感じた。何物かゞ彼女の中で裂かれて、自分は死んで行くやうに思はれた。だが、その痛みと共に、彼女は自分を人生の外に締め出しを喰はしてゐた封印から、俄かに釋放されたやうに感じた。父を見又戸越しに聞えた母の恐ろしい皺枯れた叫び聲を聞いて、彼女は直に自分の身も悲しみも忘れてしまつた。

彼女は父のところへ走り寄つたが、彼は母の部屋の扉の方へ行けといふ手眞似を弱々しくした。公爵令嬢マリヤは白い顏をして下顎をブル〳〵させながら出て來て、ナターシヤに何か言ひながら彼女の手をとつた。ナターシヤは彼女を見もしなければ、その言ふことを聞いてもゐなかつた。速足で扉の方へ行つて、煩悶してゐるやうに少時立ち止まつてゐたが、又母のところへ驅け込んで行つた。

伯爵夫人は妙な不態な姿勢で低椅子に臥てゐた。彼女は壁へ顏を打ちつけてゐた。ソーニヤと數人の女中とが彼女の腕をつかまへてゐた。

『ナターシヤ、ナターシヤ！……』と、伯爵夫人は金切聲で叫んでゐた。『それは本當ぢやあない。

本當ぢやあない……虚報だよ……ナターシヤ』と、彼女は女中共を突き退けて叫んだ。『お前達は皆な彼地へ行つておしまひ。それが本當なものか。殺されたなんて！……は、は、は！……本當なものか！……』

ナターシヤは低椅子の上へ跪座いて、母の方へ體を曲げて押つかぶさり、彼女に抱きついた。そして吃驚するやうな力で母を抱きあげ、その額を自分の方へ向かせて犇と抱きしめた。

『お母さま……可愛いお母さま……私ですよ……一番親愛なお母さま。』と、ナターシヤは一刻も止めずに彼女に囁いた。

彼女は母を放さなかつた。彼女は手和らかに母と爭つた。そして枕と水を持つて來るやうにと女中達にいゝつけ、母の着物の釦を外して胸を開けさせた。『一番親愛な……可愛い……お母様……私の一番大切な、』と、ナターシヤは引切り無しにさゝやいて、彼女の頭、手、顏に接吻し、母の鼻や頰の上を留度なく流れ落ちる涙を感じた。

伯爵夫人は娘の手をしつかり握つて、眼を閉ぢ、そして暫くの間靜かにしてゐた。彼女は不意に不自然な早さをもつて坐りなほし、ボンヤリ四邊を見廻したが、ナターシヤを見て、力一杯彼女の頭を自分の方へ抱きしめ初めた。ナターシヤの顏は、母がそれを彼女の方へ向かせて永い事見つめてゐる中に、知らず知らず痛さうに動いた。『ナターシヤ、お前は私を愛してゐるね、』と、母は低く内所らしく

さゝやいて言つた。『ナターシヤ、お前は私をだましはしなからうね。お前は全く本當のところを私に談しておくれだらうかね。』

ナターシヤは涙のいつぱいたまつた眼で母を見た、すると母の顔にはナターシヤの愛と宥しをひたすらに願ふ色が見えてゐた。

『お母様……可愛い〳〵人、』と彼女は繰り返して言ひ續けながら、その悲みの非常な重荷を少しでも母から自分の方へ取るやうにしてやりたいと、自分の愛の全力をつくしてゐた。

そしてまた現實との無限の爭闘に於て、母は今丁度花が咲かうとしてゐた彼女の大事の男の子が死んでしまつたのに、自分が生きてゐられる筈はないと思つて、現實界を逃げ出して人事不省の世界へ隱れ家を得たのであつた。

ナターシヤは其日と其夜と其次の日と其次の夜とを何う暮したか、思ひ出す事が出來なかつた。彼女は眠らなかつた。そして母の側を去らなかつた。ナターシヤの忍耐強いどこまでも續く愛は、すべての方面から絶へず伯爵夫人を取り圍んで、何の說明も、何の慰めも與へずに、唯人生へ母をまねき戻すのであつた。

三日目の夜伯爵夫人は數分間靜かになつてゐた。そしてナターシヤは頭を椅子の肱掛けに凭せて眼を閉ぢた。寂寞がギイと鳴つた、ナターシヤは眼を開いた。伯爵夫人は寢床の中に起きなほつて小聲で物を言つてゐた。

『よく歸つて來てくれたね。お疲れだらう。お茶をやらうかね。』ナターシヤは彼女のところへ行つた。『お前は大變立派に男らしくお成りだね。』と、伯爵夫人は娘の手を取りながら、言ひつゞけた。

『お母様、何を仰しやるのです……』

『ナターシヤ。彼れは死んでしまつた。彼は最うゐないのだ。』そして自分の娘を抱いて、伯爵夫人は初めて泣き出した。

三

公爵令嬢マリヤは出發を延期した。ソーニヤと伯爵とがナターシヤの代りをしようとしたが、出來なかつた。彼等は母を絶望の狂亂から止める事の出來るのはナターシヤばかりだと悟つた。三週間ナターシヤは決して母の側を離れなかつた。母の部屋の凭椅子の上で寢たり、彼女に飮み喰ひさせたり、仕切りなしに彼女に話をした。伯爵夫人をなだめる事の出來たものは、唯一つナターシヤの優しい愛情のある聲ばかりであつたから話をしたのである。

母の心の傷は何うしてもなほらなかつた。ペエチヤの死が彼女の命の半分をもぎ去つてしまつた。

ベエチヤの死んだ知らせが届いた時には、彼女は五十歳の水々した、強さうな女であつた。一と月たつと彼女は半分死んだ、人生に對しては最早や何の興味も持たない老婦人となつて部屋から出て來たのであつた。しかし伯爵夫人を半殺しにした傷、其新らしい傷が、ナターシヤを人生へ立ち返らせたのであつた。

心の裂ける事から來る精神的の傷は、肉體上の傷に似てゐる。そして夫れは外面的にはなほつて、切り口が合はさつてしまつてからでも、不思議な事には、深い肉體上の怪我と同じやうに、それは内から押し上げて來る生の力によつてのみ内部的にはいやされるのである。

そのやうにナターシヤの傷はなほつた。彼女は自分の人生は最う終つたと信じてゐた、しかし俄に母親に對する彼女の愛が、彼女の人生の精髄——愛——がまだ彼女の中に生きてゐた事を彼女に示した。愛が眼を覺された。そして人生はそれと共に眼覺めた。

アンドレー公爵の最後の數日は、ナターシヤと公爵令嬢マリヤとの間の密接な結び目であつた。此新たな悲しみが更らに二人を親密にさせた。公爵令嬢マリヤは出發を延期した。そして最後の三週間の間、全で病氣の子供でも世話をするやうにナターシヤを見てゐた。母の部屋で其數週間を過ごしたことが、すつかりナターシヤの健康をこはしてしまつた。

或日公爵令嬢マリヤは、ナターシヤが熱病のやうな寒氣でふるへてゐるのを見つけた。そして彼女

を自分の部屋へ連れて行つて晝日中に寢床の中へ包み込んだ。ナターシヤは寢たが、公爵令嬢マリヤが窓扉を下して部屋を出て行かうとすると彼女を呼び止めた。

『私眠むくはないのよ。マリイさん。此處にゐて下さいな。』

『あなた疲れておいでゞせう。眠るやうになさいよ。』

『いゝえ、いゝえ。何故あなたは私を此處へ連れて來たの。お母樣が私を探してゐますわ。』

『お母樣はよほどおよろしいんですよ。今日は平常のやうなお話を澤山なすつておいでしたよ。』と、公爵令嬢マリヤが言つた。

ナターシヤは寢床の上に横になつた。そして薄暗い部屋の中で公爵令嬢マリヤの顏を見分けやうとした。

『此人は彼の人に似てゐるかしら、』と、ナターシヤは思ひまどつた。『さう。似てゐるところもあり、似てゐないところもあるわ。けれど此人は獨創的で、異つた、全く新らしい、人に知られてゐない人なのだわ、そして此人は私が好きだ。此人の心の中には何があるかしら。善い事が何も彼もあるのだわ。けれど、それは何のやうだらう。何う私を見てゐるのだらう。さうよ。この女はいゝ人だわ。』

『マーシヤ』とナターシヤは言つて、公爵令嬢の手をおづ〳〵と自分の方へ引き寄せた『マーシヤ、私が可怖がつたと思ふんぢやないのよ。ね、マーシヤ、可愛い人！　私何んなにあなたを愛してるでせう、

全くの、全くのお友だちになりませうよ。』で、彼女に抱きついて、その手だの顔だのを接吻した。

公爵令嬢マリヤはこの感情の表示に接して羞しくもあり、非常に嬉しくもあつた。

その日から公爵令嬢マリヤとナターシヤとの間に、女同士の間にのみ在り得るやうな優しい、熱烈な友情の一つが湧きあがつた。彼等は絶えず互に接吻し、優しい言葉を掛け合ひ、大抵の時一緒にゐた。若し一人が行つてしまふと他の一人は不安になつて、急いで一緒になりに行つた。彼等は互に離れて自分一人でゐるよりも、一緒の方がお互ひに一層調和を感じるのであつた。彼等の間には、友情よりも最つと強い感情が湧きあがつた。それは、人生はお互ひが一緒にゐることにのみ成り立ち得るものだといふ感情であつた。

時として彼等は數時間續けざまに默つてゐた。時には寢床にはいつてゐながら話をしだして、朝まで續けるのであつた。彼等は大抵お互ひの極く昔のことを談した。公爵令嬢マリヤは自分の子供の時分のこと、母のこと、父のこと自分のいくつもの夢のことを話した。すると、過去に於いては敬神謙讓の生活やキリスト教の、自己犧牲の理想主義の生活を少しも理解せずに平氣で暮して來たナターシヤも、今は公爵令嬢マリヤの過去を愛するやうになり、又前には何の觀念を持つてゐなかつた人生の、その一面が解るやうになつた。ナターシヤはその謙讓や獻身を自分自身の生活に於いて模倣する考へはなかつた。それはナターシヤが人生の他の樣々な樂みを探求しつけてゐたからだ。しかし彼女は今

まで自分の眼界外に在つた美德を他人の中に見出して、それを理解し且愛したのであつた。公爵令嬢マリヤも亦、ナターシヤの幼兒の時分や、極若い娘の時分の物語を聞いてゐる中に、自分がこれまで少しも知らなかつた人生の一面、及び人生と人生の享樂とに對する信仰を、やゝ親ふことが出來たのであつた。

彼等は、それでもまだ『彼』の話をしないでゐた。若し、さうすれば、彼等の心にある崇高な感情を冒瀆することになるかも知れぬやうに思つたからであつた。けれど、この沈默は彼等をして次第に彼を忘れさせるやうにした。彼等はさうとは信じなかつたが。

ナターシヤは痩せて蒼くなつた。そして外形上如何にも弱々しく皆なが始終、彼女の體の話をしてゐた位であつた。しかしナターシヤはさうあることを悅んでゐた。けれども時として彼女は、唯死の怖ればかりでなく、病氣や不健康や、美貌を失ふといふ怖れに不意に襲はれた。又時として我知らず、自分の裸の腕を調べ、その痩せてゐるのを不思議に思ひ、又は自分の顫んだ顔を鏡に寫してその憐れな顏色を悲しんだ。それは何うしても然あるべきことのやうに、ナターシヤには思はれたが、それでもまだ彼女はそれを怖れ、それを悲しく思つた。

一日彼女は速く二階へ駈け上り、苦しさうに息を切らしてゐた。直ぐ彼女は何かにかこつけてまた下へ行き、そしてまた自分の力を試し、自分を試驗してみる爲めに二階へ駈けあがつた。

又他の日には彼女は、ヴニヤーシヤを呼んだ。すると聲が震えてゐた。彼女は女中の來る音を聞きながら、もう一度呼んだ——彼女が常も歌を唄ふ時に出す胸聲で呼んで、その音に耳を傾けた。

ナターシヤはさうとは知らなかつた。併し彼女の魂が、その下に埋められてゐると自分では想像してゐた土の層は、破れないやうに見えても、柔かな、弱々しい、草の若葉が既に其所から突き出して、根を張り、ナターシヤを壓し潰いだ悲痛を生きた枝葉で隱し、直にそれが見えなくなり、忘れられてしまふやうな運命になつてゐた。傷は内部から癒つて行きつゝあつた。

一月の末に近く、公爵令嬢マリヤはモスクワへ向けて出發した。そして伯爵はナターシヤに是非自分と一緒に行つて診てもらへと言ひ張つた。

四

ヴイアズマの戰でフランス軍を兩斷するとか、その退路を斷つとか、その他何の彼のとやりたがる軍隊を、クツウゾフには制しきれなかつたが、その戰の後、飛ぶが如くに逃げて行くフランス軍と、その後から飛ぶが如くに追つて行くロシア軍の進軍は、クラスノエまで一つの戰もなくて續いた。その逃走は非常に急速で、ロシア軍が隨分急速に追つて行つたに拘らず、フランス軍に追ひつくことが

出來ない位のものであつた。騎兵の馬も砲兵の馬も疲れ切つてしまつた。そしてフランス軍の行動に關する報知は毎もすいぶん不確實なものであつた。

ロシア兵は一日四十露里行程の此不斷の行進には、ひどく疲れて、最うそれより速度を速めることは出來ないほどであつた。

ロシア軍の疲勞の度合の觀念を作るためには、下の事實が何れほどのことであるかをはつきり摑む必要がある。卽ち死傷者として五千以上を失はず、捕虜として百人を失はないものが、十萬でタルチノを出たロシア軍はクラスノエに達した時には唯つた十萬しか無かつたといふ事實である。

ロシア軍の追尾の急激であつた事は、フランス軍の逃走がその軍に與へたと同樣な破壞的効果を、ロシア軍自身に與へたのだ。兩者の相違は唯だロシア軍の上に懸つてゐた全滅の慮を免がれて自分の意のまゝに動き、又フランス軍の病者や落伍者は敵の手へ捨てられたけれども、ロシア軍の落伍者は自分の人民の間に平氣でゐられたことだけであつた。ナポーレオンの軍隊の潰えた主なる原因は、その行動の急激なるに在つた。そして其事の疑ふべからざる證據は、ロシア軍がそれに照應して減縮して行つたことで見られる。

丁度タルチノや、ヴイアズマに於ける如く、クツウゾフの有らゆる精力が、フランス軍の致命的な逃走を少しでも妨げないやうに——クツウゾフの自身の權力の及ぶ限り——する方へ向けられた

（ベテルブルグにゐた將軍等も、又軍隊にゐた將軍等も、勿論フランス軍を遮りたがつてゐたのだが）。クツウゾフはフランス軍の逃走を促進し、自分の軍の速度を緩くすることに全力を盡した。

兵の疲勞や、彼等の行動の急激から生じた多大の損失を加へて、クツウゾフは速度を緩めて急がないやうにす可きも一つの理由を見た。ロシア軍の目的はフランス軍の追尾にあつた。フランス軍の道は不確であつた。それだから我兵がフランス軍に極めて近く追蹤すればするほど、大きい距離を横ぎらなければならなかつた。フランス軍の曲りくねつた道に對して、眞直に近道をとることは、可なり離れて追ひ行くことに依つてのみ爲し得られることであつた。將軍等の建言したさま〴〵な巧妙な運動は加速度の强行軍に基礎を置いたものであつた。けれども、今取る可き唯一の合理的の目的は、兵の上に加へられた過度の勞力を減じる事にあつた。そして之れはクツウゾフの努力の全體がモスクワからウイルナまで全戰役の間向けられた目的であつた。——それは、偶然ではなく、時々思ひ出してするのではなく、彼が決して一度もそれを見失はなかつたほど恒常的なものであつた。

理性に依らず、科學に依らず、全く彼のロシア人たる心と魂とを以て、クツウゾフは、有らゆるロシアの兵士が感じたやうに、フランス軍は全敗し、彼等の敵は逃走し、そして彼等はそれを見送らねばならぬといふことを、感じ且知つてゐた。けれども、それと同時に彼は、彼の兵卒等と共に、一個の人として、そんな速度でする、そんな天氣の中の前代未聞の此進軍の總ての苦痛を感じたのであつ

た。

けれども、將軍等は、殊にロシア人でない將軍等は、拔群の働きをしたいとか、人民を眩ゆがらせるやうな功を建てたいとか、何故か知らぬが公爵や王を捕虜にしたいとかいふやうな功名心に燃えて、——さういふ將軍等は、一切の戰が忌はしいものになり、無意味なものになつた其時こそ、戰爭して何人かを打負かす可き時だと考へた。さういふ連中が戰が無くつても一ケ月內にその數を半減し、又非常に好都合な境遇の下にあるとしても、今までで來たよりもつと長距離を橫斷して國境まで行かねばならなかつたやうな、靴もない半裸體の半ば飢ゑた兵卒を以て、何う恁ういふ運動をしやうと云つて、續續やつて來るのに對してクツウゾフは肩を搖るのみであつた。

拔群の功を立てたいとか、運動をしたいとか、フランス軍を攻擊したいとか、その退路を切斷したいとかいふやうな、將軍側の願望はロシア軍がフランス軍に接觸すると、每も非常に著しく現はれるのであつた。

クラスノエでも然であつた。其所でもフランス軍の三隊の中の一つがゐると豫想してゐて、不意に一萬六千の兵を率ゐたナポーレオン其人にぶつかつた。この悲慘な戰鬪を避けてクラスノエで三日間兵を安全にして置かうといふ、クツウゾフの種々の努力も其甲斐なくロシアの疲れ切つた兵を使つて、混亂したフランスの諸隊を裏殺することが行はれた。

トオルが兵の配置を、第一隊は此地點へ進み、云々と書いた。そして例に依り、實際爲された事は毫もその配置通りのものではなかつた。ウルテムブルグのユウゼエヌ公は、傍を駈けて行くフランスの烏合の群を丘陵から砲撃しつゞけて、援軍を請ふたが來なかつた。夜、フランス人はロシア軍のゐる地點を迂廻して行くために解散した。森に隱れそれから進める者はこと〴〵く遮二無に前方へ進んだ。

自分の枝隊の兵站準備の何物をも知らうとは思はず、必要の時に常にその居所の不明な、そして何時でもフランス軍と陣頭の商議をやり度くつて堪らなかつた、彼自身の所謂「恐怖なく缺點なき武士」たるミロラドヰツチは勸降の使を敵陣へ送つて時を空費し、そして自分が與へられてゐた命令を實行しなかつた。

『あの隊はお前たちへ進物にしやう。若殿原。』と、彼は自分の兵に言つて、フランス軍を自分の騎兵に指し示した。すると、騎兵は拍車と劍とで自分等の疲れ切つてゐる馬を速足に追ひ立て、非常な努力を以て、彼等が貰つた隊卽ち凍えて、かじかんで餓えて死にかゝつてゐるフランス人の烏合の群集に達した。するとその團隊は武器を捨てゝ降服した。そしてその降服は彼等の方では何週間も前から切望してゐたことであつた。

クラスノエでは、捕虜二萬六千、砲百門、及び何かの棒が一本捕獲せられた。そしてその棒は直ぐ

「元帥の節杖」と勿體を附けられた。そして將軍等はナポーレオンか又は誰か元帥か勇者を捕虜にし得なかつたのを甚く殘念がつてゐたが、それでも誰が一番拔群の働きをしたかといふ事を互に爭論してその戰ひを喜んでゐた。

彼等自身の熱情の爲めに引ずられた之等の人々は、必然のいとも悲しい法則の盲目な機械に過ぎなかつた。けれども彼等は、自分等自身を勇者だと信じ、又自分等のした事柄は、最も高尙にして最も立派な仕事だと想像してゐた。彼等はクツウゾフを非難した。そして彼は戰役の極く初めから彼等のナポーレオンを全敗させやうとするのを妨げたとか、彼は自分の肉感の滿足以外の何物をも考へず、そして自分に居心地の好かつた爲めにボロニヤニイ、ザヴオデイから進出しなかつたとか、彼はクラスノエで進擊を止めたとか、彼はナポーレオンが直ぐ近くにゐると聞くとすつかり顚動してしまつたとか、彼はナポーレオンと何か秘密の默解があつたかも知れぬと思つてもいゝ位だとか、彼はナポーレオンに買收されてゐた（註、ウイルソンの手紙）とか何とか彼とか公言した。

そして彼等の私情の爲めに惑はされた當時の人々が、そんな事を言つたばかりではなかつた。後世及び歷史はナポーレオンを偉大な人として受け容れてゐると共に、外國の著述家はクツウゾフを狹猾な放蕩な弱い隱劍な老人だと呼んでゐるのだ。そしてロシア人は彼を得體の知れぬ人間、ロシア人の名を持つてゐたばかりが能であつた傀儡のやうなものだと見做してゐた。

五

千八百十二年及び千八百十三年には、クツウゾフは様々な失策をしたといつて公然と非難された。皇帝は彼に對して不滿であつた。近頃最高の筋からの奬勵で皷舞された歷史書（註、ボグダノヰツチの『千八百十二年史』）クツウゾフの人物及びクツウゾフの諸戰の不滿足なる結果の批評）の中では、クツウゾフは權謀術數を弄し、ナポーレオンの名を聞いたばかりで周章狼狽する男で、そしてクラスノエ及びベレジイナに於ける彼の失策の爲めにフランス軍に對する全勝の榮譽をロシア軍から奪つた男だといはれてゐる。かういふのがロシアの智識階級から「偉人」と認められなかつた人々の運命なのだ。凭ういふのが神の意志を洞察して、自分自身の意志をばそれに服從させる、常に孤獨で不世出な人々の運命なのだ。俗衆の憎惡と蔑視は、さういふ人々の高い法則を解したことに對する罰である。言ふのも不思議で又恐ろしいことだが、歷史の最も無意義な道具で、流罪中ですら人間の威嚴の一特徵をすら表はさなかつたナポーレオンは、ロシアの歷史家等の喝采と熱中の對象である。彼等の眼には彼は偉人なのだ。

千八百十二年に於ける彼の統率の初めから終局に至るまで、即ちボロデイノからウイルナまでの間

にその一言一行の決して自己に不忠實なことのなかつたクツウゾフは、自己犧牲、及び諸事件の未來に於ける關係的價値の現在に於ける認識の、歷史に於ける例外の例を示すものである。クツウゾフは歷史家等には得體の知れぬ憐れな人間と考へられてゐる。そして千八百十二年に於ける彼のことを語る時は、常に彼等は彼のことでやゝ羞ぢてゐるらしい。

けれども、同じ不變の目的に此人以上に何時も變らずその精力を向け得た歷史以上の人物を考へることは困難だ、これ以上に高貴で、そしてこれ以上に全國民の意志と調和した目的を想像することはむづかしい。尙ほ又クツウゾフが千八百十二年に、その全力を傾けて目的を成就したやうに、如何なる歷史上の人物の目的も、しかく十分に達せられたるものゝ實例を歷史の中に見出すことは更に一層むづかしい。

クツウゾフは決して『四十世紀が金字塔から見下ろしてゐる』とか、彼が祖國のためにした自己犧牲のことゝか、自分がするつもりであつたことゝか、したことゝかに就いては何も言はなかつた。彼はいつも自分のことは話さず、決してお芝居的のことはせず、何時も極く平凡な普通人のやうな、極く平凡普通のことを言つた。彼は自分の娘達に手紙をやり、又マダム、ド、スタエルに手紙をやり、小說を讀み、美人と一座するのを好み、將軍や士官や兵卒等に冗談を言ひ、そして自分に對つて何事かを證明しやうとする人々に對して反對論を持ち出さなかつた。ラストプチン伯爵がヤウズスキイ橋で

彼のところへ驅けつけ、モスクワの陷落は彼の責任だといつて、『あなたは戰はずしてモスクワを棄てはしないと約束なすつたではありませんか』と、彼を面責した時に、クツウゾフは、モスクワは既に實際上は棄てられてゐたのに『でも私は戰はずしてモスクワを棄てゝはゐない』と、答へた。アラクチエーフが、イエルモロフを砲兵の司令官に任ずるやうにといふ皇帝の使に來た時には、クツウゾフは、その直ぐ前まで全く反對の意見を持つてゐたのに『左樣、私も恰度さう思つてゐたところだ』と、答へた。幾多の事件の廣大な成り行きを、其當時に於いて覺つた唯一人者なる彼は、その頓馬な群集の中で何うすればよかつたか、ラストプチン伯爵が古都の炎厄を彼の責任にしようが、又は伯爵自身の責任にしようが、それがクツウゾフにとつては何であつたらう？　まして何の人間が砲兵の司令官に任ぜられるなどゝいふやうな問題に至つては、尙ほ一層何でもない問題であつたのだ。

人生の經驗に依つて、思想や、その表白たる言語は決して人間の原動力ではないといふ確信に達したこの老人は、たび〳〵全く無意味な言葉——心にまづ浮ぶまゝの言葉を——語るのであつた。

けれども彼は自分の言葉には不注意であつたとは言ひながら、その閱歷の全體に亙つて終始戰爭のために努力してその成就を期した唯一の目的と予盾した言葉は、決して唯の一度でも言ひはしなかつた。明白に厭やさうに、併し他人には解るまいとの苦い確信を以て、彼はそれ〳〵非常に違つた狀況の下に一再ならず自分の本心を語つたのであつた。第一に彼はボロヂイノの戰後、周圍の總ての人々

と說を異にし、一人でその戰を勝利だと言ひ張つた。そして此意見を彼は口頭でも報告の中でも又死ぬ日までも言ひ續けた。彼は一人でモスクワの陷落はロシアの滅亡ではないと言つた。媾和に關する交涉に對してローリストンへの彼の返答は、媾和は到底出來ない。それが國民の意志であるといふのであつた。彼一人がフランス軍の退却してゐるうちに凭う言つた。卽ち我軍の運動は不必要である事、何事も吾人の希望以上に自然に善くなりつゝある事、吾人は是非敵に「黃金の橋」を與へなければならぬ事、（註、敵の退却を容易にしてやらうといふ意味）、タルヂイノやヴイアズマやクラスノエの戰は總て不必要なる事、國境に達するには兵を持つてゐなければならぬ事、及び彼は十人のフランス兵に對してロシア兵一人を失ふのも厭だといふ事などを言つた。世の所謂る隱險な廷臣たる此彼が、皇帝を慰めるためにアラクチエーフに虛言を吐いたといふ彼が、國境外へ戰爭を持つて行くのは有害無益である事を、唯一人皇帝の怒りを冒してウイルナにゐる時告げたのであつた。

併し、言葉だけでは彼がその當時既に事件の意義を攫んだ證據にはならぬであらう。彼の行爲は——すこしの偏曲もなく悉く——三重の目的へ向けられたのであつた。第一、フランス軍に對して一擊を加へる爲めに彼の全軍を集中する事、第二フランス軍を擊破し、そして第三に、人民や兵卒の困苦を出來るだけ輕くして、フランス軍をロシアから追ひ出す事であつた。

常に「時と忍耐」を以てその格言とし、急激の行動には飽くまで反對する躊躇家なる彼クツウゾフは

ボロヂイノの戰を戰ひ、且常に無い嚴肅さでそれに對する一切の準備をした。アウステルリツツの戰の前には、彼はそれを敗戰だと豫言した。しかしボロヂイノでは、この戰は敗戰だといふ將軍達の確進を排して、且彼の軍は勝利の後に退却しなければならなかつたといふ歷史に先例なき事實なるにも拘らず、彼一人が總ての人々に反對して其勝利なる事を公言し、そして其の死ぬる日まで此意見を主張した。此戰役の後期全體の間、彼のみが最う戰ふ要は少しもない事や、ロシアの國境を越えて戰を始めるのは間違ひであることを主張した。

當時の一切の事件が、其結果と共に吾人の目前にある今日となつては、たか〴〵十二人かそこいらの腦裡に存在したにすぎない目的を、群集の目的に歸することを罷めれば、事件の意義は容易に攫めるのである。

だが何うしてその老人のみが、一人總ての人々の意見に反對して、事件の眞に重要なるところを國民的標準から測定して、自國最善の利益のために一度も不忠實でなかつたやうな事になつたのだらう。

當時の事件の意義に對する此の異常の直覺の源は、彼の心裡の愛國心の純潔と熱烈との中に在つたのだ。

人民があんな變つたやり方で、此宮中の覺目出度からぬ而かも老人なる彼を、皇帝の意に反して國民的戰爭の統帥として拾ひ出した譯は、彼の中に此感情を認めたからであつた。又彼を此高い位置に

擧げたのは專ら此感情であつた。そして彼は人間を殺傷せんとせずして、却つて彼等を救ひ又惠まんが爲めに、總司令官として彼の全力を傾注したのであつた。

この素朴にして謙讓な、そして其の爲に眞に偉大なる人物は、歷史が造り出したヨーロツパ的英雄、卽ち人間の想像的統帥の僞の鑄型には容れられなかつた。

侍僕の眼には、偉人といふものは一人もない、侍僕はまた侍僕だけの偉大の觀念を持つてゐるからだ。

六

十一月の五日は所謂クラスノエの戰なるものゝ第一日であつた。各々の適當な持場へ到着しなかつた將軍達の間に、失策やら爭論やらが澤山あつた。副官等に依つて彼等に傳へられた予盾した命令も澤山あつた。だが夕方近くになると、敵は何の方面でも逃げだした事、そして戰は無からうといふ事又有る譯もないといふ事などが明かになつた。日暮れにクツウゾフはクラスノエを出發して、その晝間そこへ本營が移されたドブロオエへと同つた。

晴れた、霜の多い日であつた。肥つた、小さい白馬に乘つたクツウゾフは、背後で彼等の不平を呼

いてゐる將軍等の非常に多數な一行を從へてドブロオエの方へ馬を進めてゐた。その日は七千のフランス人の捕虜を得た。そしてズツと路々彼等は燎火の周圍に集まつて暖まつてゐる幾組もの捕虜に出會つた。ドブロオエへ間近くなつた所で、彼等は道傍にフランスの、馬のない長い砲列の傍に立つてゐる、さま〴〵の艦褸にくるまり、繃帶した、身すぼらしい捕虜の非常に多數の群集から來るガヤ〳〵聞える話聲を聞いた。總司令官が近寄ると、話聲のガヤ〳〵は止んだ。そして總ての眼が、赤い帶の附いた白の帽子を冠り、綿の入つた外套を着て、圓い肩の上へ隆肉をこしらへて、悠々と道を行くクツウゾフへ集つた。將軍の一人が何處で捕虜や大砲が獲得されたかといふことをクツウゾフに說明しはじめた。

クツウゾフは屈托した思考に沈んでゐたらしかつた。そして將軍の言葉を聞いてゐなかつた。彼はつまらな相に眼を見張つた。そして特に慘めな樣子に見える捕虜等の姿をしげ〳〵と眺めた。フランス兵の大多數は、頰や鼻の凍傷のために醜くなり、彼等の殆んど全體は眼が赤く腫れ上つて汁が流れてゐた。

フランス人の一群が路の傍に立つてゐた。彼等が近寄つて來る將軍等の方へ向けてソワ〳〵した眼付や、ゐた——が手で生肉の片を裂いてゐた。腫物のある顏の兵卒がクツウゾフをジロリと見てから、顏をそむけて前にやつてゐたことを又やり出

した狂氣のやうな顏付には、獸的な恐ろしい何物かゞあつた。

クツウゾフはその二人の兵卒を長い間じつと見てゐた。そして前より尙一層顏をしかめ、眼瞼を半ば閉ぢて、意味ありげに頭を振つた。更に行く中に、彼はロシアの兵卒がフランスの捕虜に何か親しげな事を言つて、その肩を叩いて笑つてゐるのを見付けた。クツウゾフは前と同じ表情をして頭を振つた。總司令官の注意を牽かうとしてゐた將軍に訊いた。

『何ですかな?』と、彼はプレオブラーゼンスキイの聯隊陣頭に立てゝあつたフランスの軍旗の方へ

『あゝ、軍旗』と、クツウゾフは考へ耽つてゐた問題から、眼に見えるほどの骨折を以て自分を振ひ覺ましながら、言つた。彼はぼんやり邊を見まはした。何千とも知れぬ眼が四方八方から彼を見詰めて、彼の言葉を待つてゐた。

彼はプレオブラーゼンスキイ聯隊の前でピタリと止つて、深い嘆息を吐いて眼を閉ぢた。幕僚の一人が、軍旗を持つ兵卒を招いて、總司令官の周圍にそれを立てさせた。クツウゾフは數秒間默つてゐた。それから自分の位置に對する義務に從つて、如何にも不承〳〵に、彼は頭を擧げて語り始めた。士官達の群が幾つも彼の周圍に集つた。彼は注意して士官の群を窺ひ見た。中には彼の見知つてゐるものもあつた。

『諸君難有う。』と、彼は兵卒等に呼びかけて、それからまた士官等の方を向いて言つた。彼の周圍

にあつた深い靜寂の中では、彼の綾く話す言葉がはつきりと聞こえた。『諸君が皆な一生懸命忠實に働いてくれるので難有い。戰は全勝だ。ロシアは皆なの功を永久に忘れまい。君等の榮譽は永遠に續くだらう。』彼は言葉を切つて、四邊を見廻した。

『もつと低く、その頭をもつと低くおろせ。』と、彼はフランスの鷲の旗を持つてゐて、偶然にプレオブラーゼンスキイ聯隊の軍旗の前へそれを低くおろしてゐた兵卒に言つた。

『もつと低く。もつと低く。さうだ。萬歳。若者たち。』と、彼は顎を速く動かして、兵卒等の方へ振り向いて言つた。

『萬ざあい、ばん……ざあい。』と、何千とも知れぬ聲が喚いた。

兵卒等が叫んでゐる間に、クツウゾフは鞍の上で、前へ屈んで頭をさげた。すると、彼の眼はおだやかな、而も皮肉らしい光でギラ〳〵した。

『ところで、兄弟たち……』と、喚聲が止んだ時に言つた。

そして俄に彼の顏と表情が變つた。今語つてゐるのは司令官ではなくして、それは戰友等に今最も重要な何事かを言はうとしてゐる樣子の明かな、素朴な老人であつた。

『ところで、兄弟たち。お前たちに取つては隨分辛いことであつたらう。が、何うも致し方はない。もう少しの辛抱だ。餘り永いことではないだらう。我々は客人達を見送つてしまつて、そこで休めるのだ。陛下はお前達の勤勞をお忘れにならぬだらう。お前たちは樂なのだ。けれども、彼等は——あの通りの始末だ。』と彼は捕虜等を指しつゝ言つた。『極めて甚い、乞食よりもつとひどい有樣だ。彼等が强かつた時分には、我々はお互ひに身命を惜しまなかつたが、今では彼等をかばつてやることさへも出來るのだ。彼等も亦人だ。えゝ、若殿原。』

彼は四邊を見まはした。そして自分をぢつと見つめてゐる、たぢろがずして恭々しく惑つてゐる多くの眼の中に、自分の言葉に對する同情を讀んだ。彼の顏は、老年の優しい微笑でだん〳〵晴やかになつて來て、口や眼の隅へ皺が幾つも寄つた。彼は言葉を切つて疑ふやうに頭をさげた。

『だが、一體誰か彼等に此所へ來いと言つた者でもあるのか？　これは、彼等に取つては自業自得だ。ち、畜……』と、彼は頭をあげながら、不意に言つた。そして列を崩して動きつゝ人々が發する、樂しい笑聲や萬歳の叫びに送られて、鞭をぶら〳〵搖りながら驅足で乘り去つた。こんなことは此戰役の中で之れが初めてであつた。

クツウゾフの言つた言葉は、兵卒等には殆んど全く解らなかつた。初めはあんなに嚴肅でありながら、あんなに卑近に率直に終つた元帥の言葉を、唯一人として繰り返した者はなかつた。しかし、彼の言葉の底にあつた意味は彼等にもよく解つた。そして自分等の勝利に對する同じ莊重な感じが、敵に對する憐れみや、自分等の方が正義だといふ感じ——これも亦明かに同じ卑俗語で表白された——

と共に、何れの兵卒の胸にも在つた。そして夫れが悦びの叫び聲となつて漏らされ、永い間止まなかつた。將軍の一人が此の後で、總司令官は馬車を望むか何うかと尋ねるとクツウゾフは返事をする時俄に獻爵をした。彼は明かに深く感動してゐた。

七

クラスノエの戰の最後の日の、十一月八日、兵卒等がその晩の舍營所に達した時は、もう薄暗くなりかけてゐた。終日靜かで霜がちで、時折り輕い雪がちら〳〵降る日であつた。夕方近くなると、空が少し晴れ始めた。雪の間から黒い紫が〳〵つた、星の多い空を見ることが出來た。そして霜が一層繁く下りてゐた。

三千でタルチイノを出たが、今は九百にまで減つてしまつた銃兵の聯隊が、街道筋にある村の舍營所へ眞先に着いた。給養係等はその聯隊に會つて、何の家もフランス軍の死傷者と騎兵と司令部附將校等とで充滿だと報告した。その聯隊長の爲めに取つて置かれた家が唯一軒殘つてゐるだけであつた。

聯隊長は彼の小家へ行つた。聯隊はその村を通り抜けて、路傍にある一等先きの小家々々の前で銃を組み合はせた。

多くの脚を持つ巨大な怪物のやうに、聯隊は食物や宿泊の支度をしだした。兵卒の一隊は膝まである雪の中を踏み分けて、樺の林へ這入つて行つた。そして斧や短劍の音や枝の折れる音や面白さうな聲の響が、直ぐに其所から聞こえた。尙ほ他の一隊は一緒に並んでゐた聯隊の輜重馬車の周圍で、忙がしく働いてゐた。馬に飼料をやつてゐるものもあれば、料理鍋やビスケツトを取り出してゐるものもあつた。第三の組は村の諸方へ分れて、司令部附將校の小家を支度したり、小家の中にあるフランス人等の死骸を運び出したり、燎火の薪料や、急拵へに建てた假小舍の材料として、板だの乾いた木だの、屋根に葺いてある藁などを引摺つて行つたりした。

村外れの小家の後で、十五人の兵卒が面白さうに叫びながら、納屋の高い組木の壁を引倒さうと骨折つてゐた。その屋根はそこから旣に除つてしまつてゐたのだ。

『さあ、ぐいつと引くんだ。皆な一緒に。』と、口々に叫んだ。そして暗闇の中で、雪の斑についた大きい壁板が崩れはじめた。組壁の下の方の杭が益々軋むことが多くなつた。そして到頭組壁が、それにつかまつてゐる兵士等と共に傾き倒れた。

『二人づゝでやれ！　槓杆棒を此方へよこせ！　それだ。貴樣何うしやうつてんだい？』

『さあ、みんな一緒に……だが、待つた。若いの……聲を揃へて！』……

皆な默つた。すると天鵞絨のやうに心持のいゝ低い聲が歌を唄ひだした。第三の句の末尾、最後の

節が消えてしまふと、二十の聲々が合唱で喚き出した。『おう——おう——おう——おう！
動き出すぞ！　引張れ！　引張れ！　引摺れ！　若い人達！……』だが彼等の協力にも拘はらず、
壁は少しも動かなかつた。そして、その後の靜な間は、人々の喘ぐ息の音がきこえてゐた。
『おゝい君達、六中隊の連中。君達惡魔ども、手を貸したまへ……いつか又手傳ひ返すからよ。』
通りすがりの六中隊から二十二人のものが彼等と一緒になつた。そして長さ三十五呎幅七呎の組壁
は村の道を引摺つて行かれ、喘いでゐる兵卒の肩を切つた。
『もつとだ、しつかり……引張れ、其方の連中……何で止つてゐるんだ。えゝ、そつちは？』……
口ぎたない惡體の陽氣な叫び聲の絶え間は少しもなかつた。
『何してるんだ？』と權柄な聲が叫んで、一人の軍曹がこの一隊へ駈けつけて來た。『閣下達がおいでな
んだぞ。將軍が此所の小家においでだぞ。貴樣等、惡魔共め、貴樣等、犬どもめ、やい、覺えてお
れ。』と、軍曹が叫んだ。そして手當り次第に兵卒の背部を打ちのめした。『貴樣等、靜に出來んのか？』
兵卒等は靜になつた。なぐられた兵卒は組壁へ打つかつて掻き傷が出來、血の流れる顏をこすりな
がら、ぶつ〳〵言ひだした。
『えゝ、惡魔め、ひどい事をしやがらあ、やい、俺の顏ぢう血だらけにしやがつた。』と、彼は軍曹が行
つてしまふと呟語いた。

『で、お前は夫れが嬉しくはなかつたのか、えゝ。』と、笑ひ聲が言つた。そして兵卒等は餘り大きい
聲をしないやうにして歩いた。村の外へ出ると、彼等は復前のやうに大聲で談し始めた。そして其の
話の間へ無意味な惡體を交へた。
兵卒等が通つた路傍の小家の中には、主なる指揮官の將校が集つて、茶を飲みながら、その日の働
きや、次の日にやらうといふ運動についての熱心な談が持上つてゐた。その軍略は、左へ側面運動を
して、總督の退路を斷つて生擒らうといふのであつた。
兵卒等が垣根をそこへ引摺つて行つた時分には、火がどん〳〵燃えてゐて、周圍ぢうで晩飯の支度
をしてゐた。薪はパチ〳〵撥ね、雪は溶け、そして兵卒等の黒い影が雪の中の踏み固めたところを彼
地此地チラ〳〵動いてゐた。
斧や短劍がそこらぢうで用ひられてゐた。何事も號令に依らずして爲された。夜通し使ふ薪として
木が積み上げられてゐた。士官達のために假小家が建てられてゐた。鍋は沸え立つた。そして武器や
裝具が整頓されてゐた。
組壁が杭で支へられて、北風避けとて半圓に立てられた。そして其の前で燎火が焚かれた。彼等
は點呼の太鼓を打つて、人數をかぞへ、晩飯を食ひ、それから、火の周圍に落ちついた——或る者は
脚絆をつくろひ、或者は烟管をくゆらし、又他の者は裸體になつて、着物から虱を蒸し出さうとして

ゐた。

八

ロシア兵がその頃置かれてゐた狀態は、一寸想像もつかない位極めて愍然なもの——即ち、厚い靴も無ければ、毛皮外套も無く、野天の雪の中の十八度の寒氣の中に置かれ、十分の兵糧を給せられない事も往々ある——であつたので、彼等は定めし最も悲しい憂欝な有樣であつたらうと誰しも思ふのが自然であらう。

それは全く反對であつた。物質上最も好都合の狀態の下にある時でも、軍隊がこれ以上に快活で樂し相な光景を呈したことは一度もなかつた。之は意氣鎖沈や虛弱の徴候ある分子は、悉く毎日軍隊から振り落された爲めであつた。肉體的又は精神的に弱い者は、皆もう餘程前に落伍してしまつた。殘つてゐる者どもは軍の中の精選で——靈肉共に屈强な連中であつた。

組壁の垣を取り廻した第八中隊の燎火は、何れよりも多くの群集を引きつけた。二人の軍曹が其傍に坐つゐた。そして火は何れよりも明るく燃えてゐた。彼等は圍垣の下に坐る權利を得る爲めには、丸太を持つて來ることにしてゐた。

『やい、マキエフ、やい……ゐなくなつたのか。それとも狼に食はれちやつたのか？木を持つて來ういい。』と、赧ら顏で赤い毛の兵卒が眼を見張り、烟いので瞬きしたが、それでも火の傍を退かずに叫んだ。

『烏駈けつけてけ、木を持つて來い。』と、彼はもう一人の兵卒を呼びかけて叫んだ。赤い毛の男は見習士官でもなければ伍長でもなかつたのだが、力の强い男であつたから自分より弱い奴等に命令してゐたのだ。

烏と呼ばれた尖り鼻の瘠せた小さい兵卒は、素直に起つて命令に從はうとした。けれど、其途端に、丈のスラツとした姿のいゝ若い兵卒が木を一束抱へて、火の明るみの中へ這入つて來た。

『此所へ呉れ。うん、こりやあ宜いぞ。』

彼等は木を折つて火へ投げ込んで、口で火を吹き、外套の裾で煽いだ。すると、火がシウ〳〵パチパチ燃えはじめた。兵隊共は火の傍へよつて烟管に火をつけた。木を持つて來た綺麗な若い兵卒は、兩肱を張つて立ちながら、凍えた足で巧みな撓やかな足踏を始めた。

『あゝ、母親さん、
露は寒いが、
それはいゝ、

そして銃兵は！

……』

と、彼は歌の一音毎に吃逆のやうなことをして、唄ひはじめた。

『見ろやい、彼奴の靴底が飛んでしまうぜ。』と、赤つ毛の男は、踊つてる男の靴底がぶら〳〵してゐるのを見付けて叫んだ。

『踊りが、べらぼうに巧えぞ。』

踊つてゐた男は立止つて、ふら〳〵してゐる鞣皮を引き扭つて、火の中へ投げ込んだ。

『お前の云ふ通りだ。兄弟。』と、彼は言つた。そして、坐つて背嚢からフランスの青い布を出して、それを脚へ巻きはじめた。

『これが痛むのは蒸氣の故だぜ。』と、彼は言ひ足して、兩足を火の方へ伸した。

『ぢき新らしいのが渡るだらうよ、奴等を片附けてしまひせいすりやあ、皆な二足分の材料が渡るといふ事だぞ。』

『おい、あの牝の倅のペエトロフめ、逃げやがつたぜ。何うも然らしい。』と、一人の軍曹が言つた。

『しばらく見えんやうだな。』と、他の軍曹が言つた。

『あゝ、なさけ無い兵卒だなあ……』

『第三中隊ぢやあ、昨日點呼に九人ゐない奴があつたと云ふぜ。』

『うん、だが、とにかく、誰しも足が凍えるのだから、歩けつこはないぢやないか。』

『いや、ばかな、下らん事を云ふなよ。』と軍曹が言つた。

『おい、君もさうする氣か。』と年取つた兵卒が、足が凍えると言つてゐた男にたしなめるやうに言つた。

『ねえ、何うだらう？』と、『烏』と、呼ばれた尖り鼻の兵卒が、不意に甲走つた震え聲で言つて、片肱突いて火の陰の方へ振り向いた。『丈夫な肥つた者だつて、瘠るんだ。瘠せてる者は死んでしまはあ。これ、俺を見ろ、俺はもう駄目だ。』と、不意に決心したやうに軍曹に向つて言つた。『病院へはいれるやうに、言葉を添へてくれ玉へ。俺はリウマチで體ぢう痛むんだ。後へ殘つたところで同じこつた……』

『うん、もう宜い、もう宜い。』と、軍曹は平氣で言つた。

その兵卒は默つた。そして談話はつゞいた。

『今日はずいぶん多勢フランス人を捕虜にしたが、まあ、靴の一足でも欲しいと思ふやうなのを穿いてた奴はありやしない、いやさ、言ふがものはなしさ。』と、兵卒の一人が新しい話題を出すつもりで言ひ出した。

『コザツク兵があいつ等の物を皆な取つちやつたんだ。俺達は聯隊長の爲めに小家を片附けて、奴等を運び出したのさ、ずいぶん愍然さうだつたぜ。若者達。』と、さつき踊つた兵士が言つた。『俺等は奴等をほうり出したのさ。本當に、まだ一人生きてゝ、奴等の國言葉で何だかブツ〳〵いつてたのがあつたぜ。』

『あいつ等は清潔な人民だなあ、若者たち。』と、最初の兵卒が言つた。『白い——いや、樺の木のやうに白いんだ。そして勇敢だな、本當にさ。それにまた紳士だよ。』

『いや、そりやあ、あたり前だあな。兵は何の階級からも取るのだからな。』

『だが、あいつ等には俺達の言ふ事は一つなつて解らねえんだ。』と、踊を踊つた兵卒が不思議相に微笑んで言つた。

『俺が奴に「何ぢう王國の者だい、」と、訊いても、あいつは自分の言葉でブツ〳〵言つてるきりよ。へんな人民だな。』

『皆な。不思議な話をしようか、』と、フランス人の白いのに驚いたと言つた男が、又言葉をついだ。『モザイスク附近の話ぢやあ、大戰があつて、一月も死骸をそのまゝにして置いてから片附けたといふんだがね。何うだ。奴等は紙のやうに白く清潔に倒れてゐて、臭氣なんか少しも無かつたといふ事だ。』

『ふん、そりやあ、寒さのせいだらう。なあ。』と、一人が訊いた。

『手前なか〳〵悧巧だなあ。寒さ、とはねゝいや、そりやあ暑い時分だつたのだ。寒さの爲めになら、俺達の方の兵だつて腐りやしねえやな。だが、百姓共の話にやあ、俺達の方の奴の傍へ行くと、すつかり腐つて蛆だらけになつてたんだぜ。奴等は鼻の上からハンケチを結んで、顏をそむけて、引摺つたといふんだ。彼等は何うにも仕樣がなかつたんだ。だがフランス人の方は、紙の樣に白かつた。臭氣なんざ些とも無かつた。』

みんな默つてゐた。

『食物のために違ひないな。』と、軍曹が言つた。『彼等は旦那衆のやうに食ひ込んでゐるからな。』

誰も答へなかつた。

『戰爭のあつたモザイスクの、其の百姓の言ふのにや、其の界隈十箇村から狩り集められて、二十日といふもの働いたが、それでも屍骸をすつかりは片附けられなかつたといふのさ、その男のいふのにや、すてきに澤山の狼が……』

『そいつは戰爭らしかつたな。』と、一人の老兵が言つた。『言ふだけの値打のあるのは夫ればかりだぞ。それから以來は……何でもない事に唯人を苦しめるだけのものだ。』

『いや、おい、小父さん、俺達は一日奴等を攻撃したよ。が、何うするものか、奴等は俺達に攻めさせねえんだ。奴等は直樣武器を捨てゝ跪づいた。『謝まつた!』と、凭うだ。で、こりや唯一例だ。プラ

トフがナポーレオンを捕まへた、と、いふ噂があつた。プラトフはナポーレオンを捕まへた、と、何うだい。彼奴はプラトフの手の中で鳥になつて、遠く〳〵飛んでしまつた。だから、彼奴を殺さうにも法が無いのさ。』

『途方もねい嘘吐だ。キセロフ、顔で分るぞ。』

『嘘吐だと。飛んでもねえ。實際本當だ。』

『う、まあ聞け、俺が若し彼奴をつかまへたものなら、地の中へ埋めちまはあ。さう、丈夫な白楊で よ。彼奴はずいぶん大勢の人間を殺しやがつた。』

『何つち道、俺達は彼奴を片附けてしまふさ。二度と來ることはあるめえ。』と、老兵は欠伸をしながら言つた。

談話はなくなつた。兵卒等は心持よく寢ようとして、その支度を始めた。

『やあ、何ちう澤山の星だんべえ、何うもその光ることつたら。女共が麻布曝をしとるとでも云ひさうだな。』と、一人の兵卒が銀河を喚賞して言つた。

『豐年の徴だよ。若者たち。』

『もう少々木が欲しいな。』

『背中が暖くなると、腹が寒くならあ。おかしなもんだ。』

『おゝ、神さま。』

『何だつて、さう人を押してくるんだ——火はお前一人のものか。えゝ 見ろ……あいつめ寢そべつてけつかる。』

四邊を領する沈默の中に、眠つてしまつた數人から鼾聲がきこえた。其他の者共は火の傍に體を向きかへて暖まりながら、時々言葉を交はしてゐた。百歩ほど彼方の火のあるところから、面白相な笑ひ聲が一つになつて聞こえて來た。

『五中隊の奴等は大笑ひをやつてやがら。』と、一人の兵卒が言つた。

一人の兵卒は起ち上つて第五中隊へ行つた。

『面白い事があるよ。』と、彼は戻りつゝ言つた。『フランス人が二人來た。一人はすつかり凍えてるが後の一人は威勢のいゝ面白い奴さ。そいつが今歌を唄つてるんだ。』

『やあ、行つてみやう。行つて見やう……。』數人が第五中隊へ行つた。

九

第五中隊は樺の森の直ぐ傍に野營してゐた。大變大きい燎火が雪の眞中に赤々と燃え、霜につゝま

れた樹々の枝を照してゐた。

眞夜中に、兵卒等は倭林の中で人の足音と、枝の折れる音とを聞いた。

『熊だ。若者たち。』と、一人の兵卒が言つた。

皆な頭をあげて聞いた。すると、異様の裝ひをした二人の人影が互に絡り合ひつゝ、矮林の中から火の明るい光の中へ歩いて來た。これは森に隱れてゐた二人のフランス人であつた。兵卒等には少しも通じない言葉を何やら皺枯れ聲で話しながら火へ近よつた。士官の帽を冠つてゐる一人の方は少し丈高であつた。そして弱りきつてゐるらしかつた。彼は火の傍へ座らうとしたが、地べたへペタリとへたばつてしまつた。他の一人の、小さい肥つた、頭巾で頬冠りした男は、前の男よりは强かつた。彼は連を引起して、その口を指して何事か言つた。兵卒等はこれらのフランス人を取り卷いて、病人の下へは上衣を敷き、二人に粥と火酒を持つて來た。疲れきつてゐたフランスの士官はラムバルであつた。頭巾で繃帶してゐた男は、その從僕のモオレルであつた。

火酒を飮み粥を一皿喰べた時、モオレルは不意に病的な陽氣の狀態になつた。そして彼の言葉を解し得ない兵卒等と引切無しに喋つてゐた。ラムバルは喰物を斷つた。そして火の傍に片肘に凭れて、默つて、赤いぼんやりした眼でロシアの兵卒を眺めてゐた。時々彼は長い呻り聲を出し、それからまた默つた。モオレルは彼の肩を指しゝて、これが士官である事と、彼を暖める必要があることゝを理

解させた。火のあるところに來てゐたロシアの士官が、聯隊長はフランスの士官を彼の暖かい小家の中へ入れるか何うか訊きにやつた。使ひの人々が歸て來て、聯隊長は彼等にその士官を連れて來いと命じたと言つた時に、人々はラムバルに聯隊長のところへ行くやうに言つた。彼は起ち上つて步かうとしたが、よろけた。そして傍にゐた兵卒が捉まへなかつたなら倒れるところであつた。

『何だ？　行き度くねえのか。う？』と、一人の兵卒がおどけた瞬をしてラムバルに言つた。

『やい、馬鹿！　馬鹿に構ふ暇は無いんだ。百姓、本當の百姓だ。』と、ふざけた兵卒を叱る聲が周圍ぢうから聞こえた。他の人々はラムバルを取り卷いた。中の二人が腕をかついで彼を支へて小家へ連れて行つた。ラムバルは兵卒等の頸の周圍へ手を卷いた。そして彼等に抱きあげられると悲しさうに泣き出した。

『おゝ、お前さんたち、善い人々。おゝ、私の親切な、友達。此人達は人間だ。おゝ、私の勇敢な親友達。』そして彼は子供のやうに頭を兵卒の肩に凭せた。

その間、モオレルは兵卒等に取卷かれて一等いゝ場所に坐つてゐた。

小造りの、づんぐりした、膨れ上つて汁の流れる眼をしたフランス人のモオレルは、女の短上衣を着、女の頭巾を自分の略帽の上へ結びつけてゐた。彼は明かに醉ぱらつてゐた。そして自分の次に坐つてゐる兵士を片腕で抱き込んで、嗄れた、震え聲でフランスの歌を唄つてゐた。兵卒等は彼を見る

と、皆腹を抱へてしまつた。

『さあ、さあ、俺に教へてくれ。何ういふんだ。俺は直覺えちまうぞ。何うだつけな。』と、モオレルに抱きしめられてゐた兵卒が言つた。彼は歌ひ手の一人で道化が好きであつた。

『Vive Henri quatre!
Vive ce roi vaillant-……』

（萬歳、ヘンリー四世）

（萬歳、此勇敢な王

……）

とモオレルは瞬しながら唄つた。

『ce Diable a quatre……』

（この四世の惡魔）

『vi——va——ri——ka! Viff——se——ru——va——ru! Si——dya——blya——ka! ……』

と、その兵卒は手を振り正しく調子を辿つて繰り返した。

『よいしよ。ほ——ほ——ほ』と粗野な大喜びの笑ひ聲がそこいらぢうから起つた。モオレルも顔ぢうを皺だらけにして笑つた。

『おい、やれや、も一つ、も一つ』

『qui cut le triple talent vert galant.』

（その人——註、アンリ四世——は飲むことゝ、戰ふことゝ、色男の、三能を持てりけり）

『やあこいつも亦面白い。さあ、ザレタエフ！……』

『Kyu——yu——yu……』

『Kyu』と、ザレタエフは大骨折でやつと發音した。『le——trip——ta——la——de——boo——de——ba——ce——detra——va——ga——la』

と、彼は工夫をこらして、唇を張り開けて歌つた。

「巧いぞ。こりやあ立派なフランス人だ。全くよ！　おゝい……ほ——ほ——ほ。おい、もつと何か喰はないか？』

『粥をやれよ。此奴の空腹を滿足させるには、しばらく手間がかゝるだらう。』

彼等は最つと粥を彼に與へた。するとモオレルは笑ひながら三四皿目を攻撃にかゝつた。彼を見守つてゐる總ての若い兵卒等の顔には面白さうな微笑があつた。老兵等はそんな下らぬ事を興がるところを見せるのは、自分等の威嚴にかゝると思つて、火の向ふ側に寢てゐた。けれど時々一人づゝ肱をついて身を起して、微笑んでモオレルをちらと見るのであつた。

『奴等も人間だ。』と、一人が言つて、外套で自分の體をくるんだ。『苦逢さへ根があるんだ』

『おゝ、主よ。何と澤山の星だらう。霜の多い徴だ……。』そして皆な默つてしまつた。

星は、今は誰も自分等を見ないのを知つてゐるかのやうに、黒い空の中にキラ〳〵光つてゐた。明るくなつたり、また朧ろげになつたり、または震へて、互に何か嬉しい神秘を忙しく合圖し合つてゐるやうに見えた。

十

フランス軍は規則正しく增加する割合で溶けて行つた。そしてベレジイナ河を渡つた事は——これに就いては隨分多く書かれたが——軍勢の破滅の中の一幕にすぎなかつた。そして何うしても此の戰役の運命を決する插話ではなかつた。フランス側でベレジイナに就てあんなに澤山書き立てた理由は、その時まで規則正しい一種の連續を以て、彼等の上に到來した樣々の不幸が、ベレジイナの破れた橋で、不意に唯一刹那の中に——總ての人の記憶に刷りつけられて殘るやうな一つの悲壯な結末に——集中したことであつた。ロシア側でベレジイナのことがそんなに澤山書かれた理由は、戰の舞臺を遠く離れたペテルブルグに於いて、ベレジイナ河の岸邊の戰略的係蹄の中に、ナポーレオンを捕へる爲めの

計略が（人もあらうに又もやプフウルに依つて）立てられた爲めであつた。何人も皆その計略は決めた通り少しも相違なく實行せられ得るものだと確信してゐた。そして、それだから彼等はベレジイナは何うあつてもフランス軍の最後の滅亡の舞臺であると主張した。實際に於いては、ベレジイナの結果は、統計の證明するところでは、砲や捕虜の損失といふ點では、フランス人に取つてクラスノエの戰よりも滅亡的ではなかつた。

ベレジイナの災厄の唯一の意義は、敵の退路を斷たうとする總ての計略は盡く、如何に間違つてゐたかといふ事、及び道理のある唯一の行動はクツウゾフ又びロシア軍の兵卒等によつて支持されたものの——すなはち唯敵の後を追いかけて行くことであつたといふことを、明かに且つ正確に證明したといふ事實にあつた。フランスの兵卒の群集は、彼等の目的の到達の爲めに其の全力を傾けて、絶えず加速度を以て逃げた。それは手負の獸のやうに逃げたのであつた。そして途中で止まる事が出來なかつた。これは渡河の設計よりは、もつと橋の上で起つた事柄によつて證明された。橋が皆こはされてしまつた時に、武器を持たない兵卒や、モスクワからの從僕や、フランスの輜重隊と一緒にゐた子供を連れた女達までも、ことゞ〳〵く惰力に支配されて、降參する代りに解の方　突進し、或は氷つた水の中へ飛び込むのであつた。

彼等の動機はもつともなものであつた。逃走者の位置も追擊者の位置も慘めであつた。味方の人々

と一緒にゐれば、何れも不幸の時には友達の助けをのぞみ、友達の中に自分の定つた位置をのぞむ事が出來るのだ。ロシア人に降服すれば、その境遇は同じである上に、各自の根本的必要を滿足させる點に於いては一層低い位置に置かれた。フランス人は捕虜として——それはロシア人が何んなに助けやうと思つても、見てやることが出來なかつた——の半分が寒さや飢の爲めに死につゝあることに對しては、正確な證據を持つ必要はなかつた。彼等はさうより他に何うしようもない事を感じた。最も情け深いロシア將校や フランス人に對して當然暖かみを持つべき位置にある人々、即ちロシア軍に加つてゐるフランス人でさへも捕虜に對しては何事も出來なかつた。彼等はロシア人自身も置かれたのと同じ慘めな困苦の爲めに死んだのであつた。パンや着物は飢えてゐる必要な兵卒から取つて、それをフランス人——憎んでゐるのでもなければ、有害なのでもなく——また何の道からも咎むべきではないが併し唯餘分のフランス人——にそれをやる事は出來なかつた。或る人々は此事さへもしたのだ。併しそれは例外に過ぎなかつた。

彼の後ろには確實な滅亡が横はつてゐた。彼等の前には望みがあつた。彼等の舟は燒かれてしまつた。一緒になつて逃げるより他には安全の望みは一つもなかつた。それでフランス人の全力は此合同的逃走の上に傾注された。

フランス人の此逃走が激しければ激しい程、後に殘された者の困苦が悲慘であればあるほど(殊にベ

テルブルグの計略の爲めに、多大の望が置かれたベルジイナの後は)益々烈しい攻撃がロシアの將軍達に依つてお互ひの上に加へられ、そして尙ほ更らクツウゾフには烈しく加へられた。

ベテルブルグの軍略の失敗は彼の爲めだと假定して、彼に對する嘲弄がだん〳〵明らさまになつて來た。此の侮蔑や嘲弄は勿論非常に丁寧な形式——クツウゾフは何で自分が批難されてゐるのかを問ふことさへも出來なかつたやうな形式——で言ひ現はされた。彼等は、彼には眞面目で話をしなかつた。彼等は悲しい儀式をする樣子で、自分等の報告を出し、そして彼の裁決を求めた。同時に彼等は彼のゐないところでは瞬きをして、一步毎に彼を欺かうとした。すべて夫れ等の人々は、彼を理解することが出來ないからといふだけで、此老人に話をするのは無用だといふ事を一個の確認された事實として通してゐた。彼等は、彼には決して自分等の計略の深い意義を理解することは出來ない、また彼が(彼等が唯無意味な文句に過ぎないと想像してゐた)彼の文句をもつて、金の橋だの跣足の乞食の群と共に國境を越へて行くことは不可能だ、などゝ、答へるのを、當り前のことだとしてしまつた。そして彼の言つたことはこと〴〵く——たとへば、彼等は糧食を待たねばならぬ事、或は兵隊が靴を持つてゐなかつた事——全く單純であつた。然るに彼等が建言したことは、何れも非常に複雜で奇警なものであつた。彼等から見れば、彼は鈍間で老耄れてゐた。そして同時に彼等自身は、統卒の權利を持たない天才ある將校であることは明かであつた。總司令部の不

平や意地の悪い噂話は、ペテルブルグの人氣ある勇者、名聲赫々たるウイツトゲンスタインが軍隊に加はつた後に、その極點に達した。クツウゾフはそれを見た。そして唯嘆息して肩をゆすつたのみであつた。たつた一度、ベレジイナの後で、彼は腹を立てゝ、皇帝と私信をしてゐたベニグゼンに次のやうな書面を書いた。

『甚だしく健康を損ぜられたる由なれば、此書面御落手と同時に閣下はカルウガへ退隱なされ、皇帝陛下の次の命令をお待ち下され度候』

けれどベニグゼンの此の免職に依て、大公コンスタンチン、バアウロキツチが舞臺へ現れて來た。大公は此の戰役の初めに總統權を委ねられてゐたのだがクツウゾフの爲めに軍隊から除かれたのであつた。さて大公が軍隊に加はると、彼は皇帝が我軍の貧弱な成功と、彼等の進行の晩いのを不滿足でゐらせられるとクツウゾフに報じた。皇帝自身も數日のうちに軍隊へ來ようとしてゐるのであつた。

戰爭に於ける如く宮中の作法に經驗ある此の老人——其年の八月に皇帝の御思召に反して總司令官に選ばれ、軍隊から皇太子たる大公を除き、そして皇帝の御思召に反して自分の職權によつてモスクワの放棄を宣言した老人——は直ちに自分の日が終つてしまつた事、自分の役はもう濟んだ事、自分の權力だと想像されてゐたものは、もう無くなつてしまつた事を覺つた。そして宮廷の態度ばかりから彼は、これを見たのではなかつた。一方に、彼は戰爭——彼はその戰爭に於いて自分の役を勤めたのだ——が終つた事を見た。そして彼の仕事が終つた事を感じた。他の一方に、彼は恰度此の時彼の老軀が肉體的に疲れた事と、肉體上の安息との必要を感じ初めてゐた。

十一月の二十九日に、クツウゾフはウイルナ——彼が懷かしいウイルナと言ひ慣れた——に達した。彼の軍人としての閱歷中に、彼は二度までウイルナの知事になつたのであつた。

損害を免れた其の富有な町で、古い朋友や、並に長い間奪はれてゐた人生の快樂を見出した。そして、直に總て軍事上及び政治上の配慮には背中を向けて、自分の周圍に荒れてゐた煩惱の許すかぎり、慣れた日常生活へ沒頭してしまつた。歷史の世界に於いて、爲された事及び尙ほ爲さる可き事共は、今は一切彼の關するところではないやうであつた。

チチヤアゴフは敵を攻擊することや、その退路を斷つ事を、最も熱心に主張する將軍の一人であつた。彼は最初、ギリシヤで一騷ぎやつてはと云ひ、その後ワルソウで一騷ぎやつたら何うだと云ひ、その後ワルソウで一騷ぎやつてはと云つた事もあつた。けれど、自分が行くべく命ぜられた場所へは決して行く氣がしなかつた。皇帝に對して大膽に物を言ふので名高かつたこのチチヤアゴフは、クツウゾフを自分に對して恩を受けてゐる者と思つてゐた。その譯は千八百十一年に、彼はクツウゾフを差し越してトルコと平和を結ぶために派遣せられたが、行つて見ると既に平和が結ばれてゐたので、彼は皇帝の前で、平和を結んだのはクツウゾフの功である事を率直に承認したからであつた。

此チチヤアゴフが、ウイルナでクツウゾフが滯在することになつてゐた城に彼を迎へた最初の人であつた。短劍の附いた海軍の制服を着て、略帽を小脇にはさみ、彼は軍事上の報告と町の鍵とを總司令官に渡した。クツウゾフが宮中の覺えが目出度くなくなつたのに氣がついてゐたチチヤアゴフの總ての働作の中には、老耄した老人に對する青年の輕蔑して尊敬してゐる態度が極めて著しく現はれてゐた。

クツウゾフは、不圖チチヤアゴフとの話の中に、ボリソヴオで敵に奪られた、陶器を詰め込んであつた彼の馬車が、無事に取り返されたから程なく彼の手に戻るだらうと言つた。

『私は食器を少しも持たないだらうといふお積りですか？　いや、全くその反對で、私はあなたが大宴會をなさるなら何でも御用を勤められるのです。』と、チチヤアゴフは厄鬼となつて言ひ返へした。彼の言つた言葉は、總て彼に手落のないことを證明するためであつた。だから彼はクツウゾフも同じ願ひを持つてゐるのだと想像してゐたのだ。肩をゆすり、微妙な洞察するやうな微笑をしてクツウゾフは答へた。

『私は唯君に言つただけの意味で言つたのぢや。その他には何も無い。』

皇帝の望みに反してクツウゾフは、軍隊の大部分をウイルナに止めて置いた。彼は周圍の人々から、自分が大變弱くなつた、そしてウイルナ滯在中に肉體的に亡びつゝあるのだと言はれてゐた。彼は軍

務には少しも興味を持たず、盡く將軍に委せ切りにして、自分は社會上の逸樂に耽溺して時日を費やし、皇帝の來るのを待つてゐた。

皇帝は彼の隨行員トルストイ伯爵や、ワルコンスキイ公爵や、アラクチエーフその他を隨へて、十二月七日にペテルブルグを發し、十一日にウイルナに着いた。そして旅行用橇で直ぐさま城へ乘りつけた。寒さが嚴しかつたに係らず、觀兵式の制服を盛裝した百人ほどの將軍や士官やセミヨノフスキイ聯隊の儀仗兵が城の前面に立つてゐた。

皇帝に先立つて、傳令使が湯氣の立つ馬で城へ疾驅して來た『御着輦だ。』と、叫んだ。

コノウニツツインが、內部の門番の小部屋に待つてゐたクツウゾフに知らせる爲めに玄關へ驅け込んだ。

それから一分經つと、大禮服を着て、胸へいつぱい勳章を下げ、肥つた體の周圍へ飾帶をきつちりと締めた老人の重さうな姿が、ヨチ〳〵した足取りで階段へ歩いて來た。彼は平つたい方を前にして制帽をかぶり、手袋を手に持つて階段の端をやうやうのことで降り、皇帝に捧げる爲めに用意して置いた報告を手に取つた。

ばた〳〵したり急いだり、さゝやいたりしながら、三頭の馬が烈しく突進して來た。そして凡ての眼が近づいて來る橇の方へ向けられた。その橇の中には皇帝とワルコンスキイの姿を最早や見分ける

事が出來た。

五十年來の習慣から、すべて此事は此老人には肉體的に激させる効果を持つた。彼は非常にあたふたして帽子を眞直になほし、體をしやんとさせて、皇帝が橇から歩み出て彼の方へ眼を向けた其刹那に眞直に立つて、報告を皇帝に渡した。そして、そろ〳〵と出す氣嫌を取るやうな聲でものを言ひ始めた。

皇帝は一瞥してクツウゾフの頭から足まで見てしまつた。そして一寸顏をしかめた。しかし直ぐ自分の感情をおさへて彼の側へ行つた。そして兩手を擴げて老將軍を抱擁した。またしても、古い習慣的の聯想で、彼の心の中に何やら深い感情を動かし此の抱擁はクツウゾフに對して毎も通りの効果を持つた。彼は泣き出したのであつた。

皇帝は、士官達やセミヨノフスキイ聯隊の儀仗兵に挨拶した。そして此の老人と今一度握手して、彼と一緒に城中へ行つた。

總司令官と二人きりになつた時に皇帝は、敵の追擊の緩漫な事や、クラスノエ及びベレジイナ河に於ける失策に對する自分の不滿と、將來に於ける國外の戰爭に關する意見とを發表した。クツウゾフは何等の意見も述べず辯解もしなかつた。七年前にアウステルリツツの戰場で皇帝の命令を聞いた時と同じく、理屈なしの服從の表情が今もその顏にしつかりついて離れずにゐた。

クツウゾフが部屋を出て、頭をさげて、重いひよろ〳〵した足つきで客間を通り抜ける時に、彼を呼び止める聲がした。

『殿下、』と、誰かゞ言つた。

クツウゾフは頭を擧げた。そしてトルストイ伯爵が銀の皿に小さい何物かを載せて彼に向つて立つてゐるのを見た。クツウゾフは此の人が彼に何の用があるのだか、しばらくは覺ることが出來なかつた。

俄に彼は氣がついたやうであつた。微かな微笑が彼の丸々した顏にかゞやいた。そして低い恭々しい叩頭をして、彼は皿の上の物を取り下げた。

それは勳一等の聖ジョルジ章であつた。

十一

翌日總司令官は正餐會と舞踏會とを催した。皇帝はそれへ臨席せられた。

クツウゾフは勳一等の聖ジョルジ章を授けられた。皇帝は、彼に對し尊重の最高の徵を示した。けれども誰も皆皇帝が總司令官に對して不滿であることに氣がついてゐた。禮儀は何處までも守られた。皇

帝はさうすることに第一の例を示した。しかし誰も皆老人に失策があり、そして彼の無能を示したことを知つてゐた。カザリン時代の古い習慣に從つて、クツウゾフが、皇帝の舞踏室へ這入られるのを見て、その足下へ分捕品の軍旗を下すやうに命令した時に、皇帝は迷惑相に顏をしかめた。そして何やら口の中で言つた。それを或人は『年寄つた道化役者め、』と聞いたといふのだ。

クツウゾフが來たらんとする戰役の重要なることを覺らうともせねば、覺り得もしない事が明白な爲めに、皇帝の怒りはウイルナに於いて增したのであつた。

翌朝皇帝が彼の周圍に集つた士官等に、

『君等はロシアを救つたのみでなく、ヨーロッパを救つたのだ、』と、言つた時に、誰も皆戰爭はまだ終つてゐないことを知つた。

クツウゾフ一人はさう云ふ風に見ようとしなかつた。そして自分の意見として、此の上新らしい戰爭はロシヤの位置を進めはせず、又その光榮を增すこともない、それは唯ロシアの位置を弱め、彼の意見では、今立つてゐると思ふ光榮の最高の頂天からロシアを投げ落すにすぎないのであると、遠慮なく言つた。彼は新軍募集の到底不可能なる事を皇帝に示さうとして努力した。それから、人民が陷つてゐる困苦の有樣や、戰爭の失敗するかも知れぬといふ事や、尙ほ其他の事を話した。

問題に對する彼の態度は斯樣であつたから、勢ひ總司令官は來らんとする戰爭の進行に對する障碍、

邪魔物と見なされざるを得なかつた。

老人との軋轢を避けるのに、最も顯著な方法は——アウステルリツツに於けるクツウゾフ、又は此戰爭の初期に於けるバアクレイに對する場合のやうに——事件に對する公の說明に依つて當人に厭な心持を起させるやうな事をしないで、寧ろ總司令官の手から總ての實權を引込めて、それを皇帝の手へ移すことであつた。

此の目的を以て、司令部が次第に改造せられた。そしてクツウゾフの幕下の一切の實權は奪はれて、皇帝の手へ移された。トオルやコノウニツツインや、イエルモロフが新らしい任命を受けた。皆ながら總司令官の大變弱くなつた事、健康の衰へて行く事を、公然と話すやうになつた。

彼は後繼者に讓るために、何うでも健康が衰へて行かねばならなかつたのだ。そして彼の健康は實際衰へてゐたのであつた。

クツウゾフが民兵を募るためにトルコからペテルブルグの大藏省へ來て、その後恰度彼を要してゐた軍の統率に任じたのと正に同樣に、自然に單純に且つ漸々に、彼の役目を勤め終つた後へ新たな統率者が彼に代るために來た。

千八百十二年の戰爭は、何れのロシア人の心にも懷かしい其の國民的意義に加ふるに、新たなヨーロッパ的性質を取るやうになつた。

西から東への人間の運動が、東から西への運動に依つて續かれた、そして此の新らしい戰爭はクツウゾフのとは異つた目的と資質を備へ、又異つた運動で動かされてゐる新たな代表者を要したのであつた。

東から西への移動や、諸國民の位置を定める爲めには、恰度ロシアの救濟と光榮の爲めにクツウゾフを要したやうにアレキサンドルを要したのであつた。

クツウゾフはヨーロツパとか、權力均齊とか、ナポーレオンとかいふものゝ意義を認めなかつた。彼はそんな事を少しも解し得なかつた。

敵が殲滅され、ロシアが救はれて、その光榮の絶頂へあげられてしまへば、ロシア國民の代表者、ロシア人中のロシア人はもう何もすることは無かつた。國民的戰爭の代表者にとつては、もう死ぬより他のことはなかつたのである。そして彼は死んだ。

十二

一般の場合と同樣に、ピエールは俘虜として苦しんだ肉體上の苦痛や不自由の全力を、それが全く終つた後になつて初めて感じたのであつた。救ひ出されて後、彼はオーレルへ行つた。そして其所へ

着いてから二日後に、キエフへ發足の準備をしてゐた時に、彼は病氣になつてオーレルで三ヶ月臥た。醫師の所謂膽汁熱にかゝつたのであつた。彼等が血を取つたり藥を與へたりしたが、彼は癒つた。

救はれた時から病氣になつた時までに、ピエールの身に起つた有らゆる事は、彼の心に殆んど何等の印象をのこさなかつた。彼はたゞ時々雨が降り、時々日が照つた暗い灰色の天氣や、內臟や足や脇腹の疼痛のことを覺えてゐた。彼は人々の不幸や困苦の全般的印象を記憶し、士官や將軍等に好意心から、彼の俘虜になつてゐた間の事をうるさく訊かれたことや、馬や馬車を得るのに骨を折つたことなどを覺えてゐた。そして彼は、その時分自分の思想や感情の鈍かつたことを何よりもよく覺えてゐた。

救はれた日に、彼はペエチヤ・ラストフの屍骸を見た。その同じ日に、彼はアンドレー公爵がボロヂノの戰後一月以上生きてゐて、ほんの少し前にヤロスラウルのラストフ家で死んだことを知つた。

その同じ日に、ピエールに此の報告をしたデエニソフが、ピエールはもう夙にその事に氣づいてゐるだらうと思つて、エレンの死んだ事を話のついでに言つた。總て之れ等の事がピエールには唯不思議に思はれた。彼は之れらの事實の總ての意義を受け入れることの出來ないのを感じた。彼はその時には唯、人間が互に殺し合つてゐる之れ等の場所から急いで離れて、何處かに靜かな隱れ家を求め、休息して能力を恢復し、そして自分の知つた總ての新らしい不思議な事柄を考へたかつた。

けれども彼はオーレルに着くと早速病氣になつた。病氣の後正氣づいて見ると、モスクワから來たテレンティとワスカといふ彼の下僕が二人、それと彼の從姉妹のうちの一番年長なのが來て附添つてゐた。彼女はエレツツに在るピエールの領地にゐたのだが、彼が助けられた事と病氣の事とを聞いて、看病のために來たのであつた。

恢復期の間に、ピエールは此の數ケ月間習慣となつてゐた樣々な印象から、唯漸々舊へ返ることが出來た。彼は明日誰も自分を追ひ立てはしない事、誰も彼から暖かい寢床を奪ひはしない事自分はいつでも屹度晝飯や茶や晩食を得られるといふやうな考へに、唯々徐々と慣らされて行くのであつた。けれど、その後もずいぶん長い間、夢の裡では常に捕虜としてのさま〴〵な境遇に取りまかれるのであつた。

そして、たゞ漸々に、彼は目分の遁れて以來聞いた報知——アンドレー公爵の死、自分の妻の死、及びフランスの覆滅等に關する報知の意義を攫んだのであつた。

自由——彼がモスクワの外の最初の宿泊地で初めて意識した、人間個有の、十分にして取り去り難い自由——の悦ばしい感じが、恢復期の間ピエールの魂を滿たした。彼は此の內部的な自由が、一切の外部的事情からは全く獨立してゐながら、それが今は謂はゞ外部的の自由の奢侈、餘分な物で飾られてゐるのに驚かされた。彼は見知らぬ町の中に知人も無しに一人でゐた。誰一人彼に對して何等の要求をするものもなく、唯一人彼を何處へ使に出すでもなかつた。彼は自分に入用な總ての物を持つ

た。往昔彼にとつて常住の苛責であつた妻に關する考へは最う無かつた。彼女は最早や亡かつたのだから。

『あゝ、如何にも俺は幸福だ。實にいゝなあ。』と、彼は美味さうな臭のする粥を乘せ、小ぎれいな布を掛けた卓子が自分のところへ動かされて來る時とか、夜自分の柔かな淸潔な寢床へはいる時とか、又自分の妻もフランス軍も最うゐないといふ考に不圖襲はれた時とかには、さう獨言つた。『あゝ、實にいゝ、實に結構だなあ。』そして前からの習慣で彼は、『うん。ところで何うなんだ？　俺はこれから何うしやうな？』と、自問した。そして直ぐ自ら恁う答へた。『俺は生きるんだ。あゝ、實に結構だなあ。』

往日に彼を苦しめた物、彼がいつも解からうと求めてゐた、即ち人生の目的とは何かといふ問題は、今はもう彼の爲めには存在しなかつた。此の人生の中に目的を求めるといふ事は、今はもう彼には終つてしまつたのだ。そして、それが終つたのは偶然のことでも、又一時的のことでもなかつた。彼はそんな目的はなかつた事、又有らう筈はなかつた事を感じた。そして、さういふ目的の無いことが、即ち自分は自由であるといふ完全な喜びの感を彼に與へた。そして此の事がその頃の彼を幸福にしてゐたのである。

彼は今では、人生の中の目的を索めることが出來なかつた。何故なれば、彼は信仰——何等の主義

や言葉や、又は觀念に對する信仰ではなくして、生きた、常に觸れることの出來る神に對する信仰——を持つてゐたからだ。往時には彼は、自分で自分の前に置いた幾つかの目的の中に神を求めたのであつた。人生に於ける目的のその追求は、唯神を求めることに過ぎなかつた。そして捕虜になつてゐた間に、俄に彼はその年老いた乳母がすつと以前彼に談した事、卽ち神は此所にあり、又何處にも在す事を、言葉に依らず議論に依らず、唯自分の直接の感情に依つて知るやうになつた。捕虜になつてゐる中に、彼はカラターエフの神の方が、共濟組合員の認めてゐる『宇宙の建設者』よりも一層壯大で、一層無限で一層測りがたくある事を知るやうになつた。彼は、遠方にそれに求めて眼を見張りつゝあつた時に、自分の求むるものを其の足元に見出した人のやうに感じた。彼は唯自分の直ぐ前を見さへすれば宜かつたので、眼を見張るには及ばなかつたのに、之れまでの全生涯の間彼は總て自分の周圍の人々の頭の上を越して、すつと遠方を見てゐたのだ。

往時に、彼は何物の中にも、大なるもの、測りがたきもの、又は無限なものを見ることが出來なかつた。彼は唯それは何處かしらになければならぬと感じて、それを求めてゐた。近間の解し得られる有らゆる物の中に、彼は有限の、小さい、平凡な、無意味な物を見るのみであつた。彼は智力の望遠鏡に身を武裝うて、遙かに遠方を見た。すると其所では遠くの靄の中に隱れて、その小さい日常の生界が、唯はつきり見えないので、大きい無限なものに見えた。ヨーロツパの人生、政治、共濟組合、哲

學、博愛などが、彼の眼にはそのやうに見えた。けれど、その時分ですら、彼自ら弱くなつたと見なしてゐた瞬間には、彼の思想は之れらの距つた物にさへも洞徹した。すると其時には彼は、それらの物の中に矢張り同樣の小さい、同樣の平凡及び同樣の無意味を見た。

今彼は有らゆる物の中に偉大なもの、永久なもの、及び無限なものを見ることを知つた。そして夫れだから自然、それを見、その觀照に耽るために、從來人々の頭を越して眺めて來た望遠鏡を投げ捨てた。そして自分の周圍の常に變化し、常に壯大な測り知ることの出來ない無限の生活を大喜びで眺めた。そして夫れをつく〴〵見れば見る程、彼は益々おだやかで、そして益々幸福であつた。往時に彼の智識上の建物をことごとく〴〵粉碎した恐ろしい疑問、『何の爲めに』と言ふ疑問は、今では彼にとつては存在しなかつた。『何の爲めに』といふ疑問に對しては、今では彼の其の魂の中に單純な答へを用意してゐた。——何となれば一つの神、彼なくしては人間の頭の髮の毛一筋も落ちる事のない、其の神があるからだ——といふ單純な答へを常に持つてゐた。

十三

ピエールは、外部の習慣に於ては殆ど變化してゐなかつた。見たところでは彼は、正に前と同樣で

あつた。彼はいつもの様にぼんやりして、彼自身の何事かを、彼の眼の前にあるものとは離れてゐる或物を、考へ込んでゐた。違つたところは、往時に彼が眼の前のもの、或は自分に話しかけられたものについて意識しなかつた時分には、彼は自分より遠くにある或るものを識別しやうと努力して苦し相に額に皺を寄せたが成功しなかつた。彼は今でも自分に言はれた事或は自分の前にある事については矢張り意識しなかつた。けれども今では、彼は微な明かに皮肉な微笑をもつて、前にあるものを見つめ、また自分に言はれた事に耳を傾けた。けれども彼は全く違つた或ものを見てゐるか、または聞いてゐるかしたことは明かであつた。往時には氣の好い人であつたが不幸の様に見えた。それだから人々は知らず知らず彼から少し離れてゐた。今では人生に於る喜びの微笑みが、口の周圍に絶えず動いてゐた。そして其の眼は他人に對する同情と、『皆なは俺のやうに幸福であるか』との問とを以て輝いてゐた。そして人々は彼の前へ出ても安氣に感じるのであつた。

往時には彼は澤山話をした。そして談してゐる時に熱中してしまつて、人の話は碌に聞かなかつた。今は談話の中に釣り込まれるやうな事は殆どなくなり、そして人の話を何のやうに聞くべきかを覺えた。それだから人々は自分等の心の奥底の秘密を何時でも彼に話さうとするのであつた。

公爵令嬢は決してピエールを好まなかつた。また老伯爵の死後は、自分は彼の厄介者になつてゐるのだと感じ始めた。それ以來彼に對して特殊の敵意を持つてゐたが、ピエールの恩知らずに拘らず、

彼女は彼を看病する事を自分の義務だと感じてゐるといふことを彼に證明しようと思つてオーレルへ來た。けれども暫くすると、彼女は彼が好きになつて來た事に氣がついて驚きもし困りもした。ピエールは從妹の氣に入らうとは決してしなかつた。彼は唯好奇心をもつて彼女を見てゐた。往時には彼女は彼の眼の中に嘲弄と冷淡があるやうに感じた。そして彼女が他の人々の前でもしたやうに、ピエールの前でも自分自身の中へ縮み込んで、そして唯自分の攻撃的方面のみを彼に示した。今彼女は其反對に彼が自分の生活の最も秘密な奥底へ這入りつゝあるかのやうに感じた。初めの中は疑ひながら、其後からは感謝しながら、彼女は自分の性格の潜んでゐる善い方面を彼に見せるのであつた。

何れ程手管のある人でも之れより巧に公爵令嬢の信頼心の中へ忍び込んで、その若盛りの回想を起させ、そして夫れに同情を示す事は出來なかつたであらう。けれども凡てピエールの手管なるものは、自尊心の強い公爵令嬢から、若い氣難かしい此の女一流の愛情を引き出して彼自身を樂しまさうとした事であつた。

『さう。あの人は悪い影響のもとに置かれずに、私の様な人々の影響のもとにありさへすれば、ごく心持の好い人なのだ。』と、公爵令嬢は思つた。

ピエールの中に起つた變化には、彼の下僕等もまた——テレンティとワスカ——それぞれ氣がついた。彼等は彼が大變人が好くなつたと思つた。主人の着物をぬがせ、お寢みの挨拶をした後で、しば

しばテレンティはピエールの靴と着物を手に持つた儘、主人が自分に話かければ好いと思つてグズ〳〵してゐるのであつた。すると大低の時ピエールはテレンティが話をしたがつてゐるのを見て彼を引き止めた。

『ねえ、おい、では……何うしてお前達は食ひ物を手に入れたのだい?』と、彼は訊くのであつた。するとテレンティはモスクワの陥落や、故伯爵の話を初めて、着物を持つた儘ピエールに談したり、訊いたりしながら長い間立つてゐるのであつた。そして彼は遂に、自分は主人と非常に親密であるといふ愉快な感じと主人に對する愛情とを以て引き退るのであつた。

ピエールを毎日見に來た彼の掛り醫者は、自分の時の各分時は患者にとつては尊いのであるといふ態度を取る事が醫者としての自分の義務だとは思つたが、何時間も續けて彼の側に腰を掛け、一般の患者殊に婦人の特性に關する其の得意な物語りや觀察などを繰り返すのであつた。

『さう。あゝいふ男と話すのは實に愉快だ。地方などで滅多にあることではない。』と、彼は言ふのであつた。

オーレルには會々數人のフランスの捕虜が居た。そして醫者は、その中の一人、若いイタリーの士官をピエールに會はせに連れて來た。

此の士官は度々來る客になつた。そして公爵令嬢はイタリー人がピエールに向つて言ひ現はした優

しい感情を、いつも〳〵笑つた。

イタリー人はピエールに會つて、彼と話をし、そして自分の過去や自分の家庭生活や、自分の戀のことなどを悉く談し、それからフランス人、殊に、ナポーレオンに對する義憤をまけ出さなければ、決して、幸福ではないらしかつた。

『若し總てのロシア人が少しでも貴方のやうであつたら、』と、彼はピエールに何時も言つた。『貴方がたのやうな人民に向つて戰爭するのは濱神の行爲です。フランス人の手で夫れほど苦しめられた貴方が、彼等に對して怨みの念さへ持つてゐなさらない。』

そしてピエールは、唯彼の魂の中の最もいゝものを引出して、それを賞めることに依つて、イタリー人の熱烈な信服を得た。

ピエールのオーレルに於ける逗留の終り頃、彼は千八百〇七年に彼を其會所へ紹介したことのある古い知人で、共濟組合員たる伯爵ウイラールスキイの訪問を受けた。ウイラールスキイはオーレル縣に大きい領地を持つてゐたロシアの或後嗣娘と結婚した。そして彼は其の町の兵站部の臨時の地に就てゐるのであつた。

ウイラールスキイはベズウホフと一度も極く親しく交際たことはなかつたが、彼がオーレルにゐるのを聞いて、人々が沙漠で逢つた時通常互に表はす様な友情と親密との表現を以て彼を訪ねた。ウイ

ラールスキイはオーレルでは氣がはづまなかつた。そして自分と同様な利益を持つと想はれた自家圏内の人と會ふことを悦んでゐた。

けれどもウイラールスキイはピエールが全く時代後れになり、そして彼がピエールにも云つた如く、冷淡と自我主義とに沈み込んでゐたことに、忽ち氣がついたので、意外に思つた。

『君は沈滯してゐる。』と、ウイラールスキイは彼に言つた。

けれど、それにも拘らず、ウイラールスキイは今は往時に比べるとピエールに對して心置き無く感じるのであつた。そして毎日彼を訪ねて來た。ピエールはウイラールスキイをつく〴〵見、彼の話を聞いいてゐる中に、自分自身もつい近頃まで同じやうな人間であつた事を思ふと、不思議で信じられないやうな氣がした。

ウイラールスキイは家族持の結婚した男で、妻の財産の管理や、官吏の務めを行ふことや、自分の家族の世話などに、悉くその時を取られてゐた。彼は總て之れらの用務をば自分の生活の障碍と見做し、そしてそれらを悉く蔑視してゐた。何故なれば、それらの用務は皆彼自身の安寧や、家族のそれを得る方へ向けられるからであつた。軍事、行政、共濟組合などの問題が彼の注意を占有してゐた。そこで此の意見を批評せず、又それを變へやうともしてみずに、ピエールは此の現象——隨分妙なものではあつたが、彼に取つては又隨分見慣れた現象であつた——をば、今では自分の習慣になつてゐる

る溫和な、嬉しさうな皮肉な微笑で見守つてゐた。

ウイラールスキイや、從妹や、醫者や、今會ふ總ての人々とピエールとの關係には、皆なの好意を得べき新らしい態度があつた。これは、人々は各自の流義に從つて考へ、感じ、又物事を見るの自由を持つことを彼が承認したことであつた。各人の意見に關する此の正當な個人主義は、往時はピエールを苦しめいらだゝせたものであつたが、今では夫れが人々に對する同情的興味の基礎となつてゐるのであつた。人々の意見が、彼等各自の生活若しくは相互の生活と、不合立であつたり、時として全く正反對であつたりすることが、ピエールには甚く面白かつた。その爲めに彼は溫和な、嘲けりの微笑を禁じ得なかつた。

實際上の事件に於いて、ピエールは不意に今、前には缺いてゐた重力の中心を持つた事を感じた。過去に於いては、あらゆる金錢問題、殊に非常な金持に有り勝ちな、金をくれとか貸せとかいふ問題は、彼を手も足も出ないやうな煩悶と當惑とに導くのであつた。『遣つたものか、遣らないものか？』と、彼は自問するのであつた。『俺は金を持つてゐる。彼は無くつて困つてゐる、だが最つと無くつて困つてゐる者が他にあるのだ誰が餘計困つてゐるだらう。いや兩方とも詐僞かも知れない。』そして總て夫れらの想像に對して、彼は前には何等滿足な解決を見出さなかつた。そして何でも與へ可きものを持つてゐる限りは皆なに與へた。以前は、自分の財産に關する有らゆる問題に就いて、一人が斯の如く行

ふ可しと言ひ、又他の人が他の或る事を忠告する時になると、いつも同じやうに思ひ惑ふのであつた。

今では彼は、自分でも驚く位總て此様な問題に就いて最早や何等の疑惑も躊躇も持たなかつた。今では自分の中に裁判官がゐて、自分でも氣の附かぬ様な法律に依つて、しなくてはならぬ事と、してはならぬ事とを決定するのであつた。

彼が金錢問題に無頓着なことは全く前の通りであつた。けれども、今は自分のすべき事と、してはならぬ事とを躊躇なく知つた。彼の内なる其の新らしい力の最初の適用は、一俘虜の件に關してゞあつた。それはフランスの大佐であつたが、彼はピエールを訪問して、自分の手柄談を遠慮なく話し、そして遂に自分の妻子に送るのだから四千フランを是非貸してくれといふ要求がましい頼みを言ひ出した。ピエールは些の面倒も努力も無く、さうする事を拒絶した。そして後になつて彼は、以前だつたら何うしようもないほど面倒な事を、そんなに容易に單純にやつてしまつたのを我ながら驚いたのであつた。フランスの大佐を拒絶したと同時に、彼は自分がオーレルを去る時には、確に困つてゐるらしいイタリーの將校に扶助を受けさせる様な謀略を必ず施さうと決心した。實際上の事柄に關してピエールの考慮がずつと確かになつたといふ新な證據は、彼の妻の負債に關する問題や、モスクワの家と郊外の別莊との再建に關する問題の解決であつた。

彼の用人長がオーレルにゐる彼のところへ來た。そしてピエールは、其者と共に自分の財政狀態の

大體を調べだした。モスクワの大火のピエールに與へた損害は、用人長の計算に依ると、ざつと二百萬ばかりであつた。

用人長は之れらの損害に對して彼を慰める爲めに、自分の作つた計算を呈出した。それに依ると、ピエールが若し伯爵夫人の遺した負債——それは何うあつても拂はなければならぬといふのではなかつた——を拂ふことを拒みさへすれば、又若し彼がそこで住むには八萬かゝつて、而かも收入絶無なるモスクワの家々や、モスクワ附近の別莊を恢復しさへしなかつたならば、ピエールの收入は減るどころではなく、積極的に增すといふのであつた。

『さうだ、さうだ、その通りだ。』と、ピエールは晴々した笑顏で言つた。

『さうだ、さうだ、あんな物は一つも要らん。俺は町の破壞のおかげで餘つぽど金持になつたんだ。』けれど、正月にはサヴェリッチがモスクワから來て町の狀態を彼に話し、又家や郊外の別莊を建てなほすことをば、最う決つた事のやうにして、それに關する建築師の見積りの話をした。それと同時にピエールはワシーリイ公爵やベテルブルグの他の知人たちからの手紙を受け取つた。其の中には彼の妻の負債の事が書いてあつた。で、ピエールは、用人の策は大變好ましいものではあつたが正當なものではないから、自分は妻の事件を處分するためペテルブルグへ是非行かなければならず、又モスクワのは建てなほしをせねばならぬと決心した。何故さうすべきものであつたかは、彼には言ひ得なかつ

た。併し彼はさうすべきだと確信した。彼の年收はこの決定のために四分の一だけ減つた。けれども夫れは然あるべきであつた。彼はさう感じた。

ウイラールスキイはモスクワへ行からとしてゐた。で、ピエールは二人で一緒に旅行することに同意した。

オーレルに於ける彼の恢復期全體の間、ピエールは嬉しい自由と生命との感じを樂しんでゐた。けれども此の旅行で廣い道へ出て、幾百かの新しい顏を見ると此の感じは一層深くされた。その旅行の間、ピエールは休みの日の小學生徒のやうな心持でゐた。彼が見たすべての人々——馭者も驛亭長も路傍や村の農夫等も——皆彼にとつては新らしい意義を持つてゐた。ウイラールスキイのゐること及びヨーロツパと比べるとロシアの貧乏なこと、無知なこと及び後れてゐること等を嘆くその言葉が、唯ロシアに對するピエールの樂みを高めるのみであつた。ウイラールスキイが死を見るところにピエールは生活力の異常な大きい力——即ち非常に廣大な雪を蔽ふ其の同種で獨異で無比な人民の生活を支へる——力を見た、彼はウイラールスキイの意見に反對しなかつた。そして何の役にも立たない議論を避ける最も容易な手段として、彼に同意と見せて、話を聞きながら、面白さうに微笑んでゐた。

十四

何故蟻は、その或者どもは廢物の斷片や卵や屍骸などを引き去り、他の者どもは復そこへ馳け戻りなどして、散らされた蟻垤へと急ぐのであるか、又何の目的で彼等は一緒に集つて互に追ひ付いたり戰つたりするのか、それを說明するのは困難であるのと丁度同樣に、何故フランス人の去つた後でロシア人が、モスクワとして知られてゐた場所へ、群り歸ることになつたのかを說明することはむづかしからうと思ふ。けれど破れた蟻垤へ急ぎ戻つた蟻を見てゐる時には他の物は悉く破壞されてしまつたが、彼等の社會の全力を成す不壞無形の何物かゞ殘つてゐることを、忙がしい昆蟲の根氣や精力や群集やに依つて何人も知ることが出來る。そのやうに又十月のモスクワは官憲なく敎會なく聖物無く富なく家なくして、而かも八月のと同じモスクワであつた。無形ではあるが大きい、不壞な或物の他は、有らゆるものが一切紛壞されてゐた。

敵軍が開放した後のモスクワへ各方面から推し寄せて來た人民の動機は、極めて雜多な個々のもので、そして最初の中は大抵野蠻な獸的な衝動であつた。唯一つの衝動が皆なに共通であつた——それはモスクワと呼ばれてゐた場所へ、そこで働くために精力をしぼらうとして引き寄せられたことであつた。

一週間のうちには三萬五千人になるといふやうに一週間のうちに、モスクワは一萬五千人になり、二續いた。その數は次第に增進して、遂に千八百十三年の秋までには千八百十二年に於ける此の町の人

口を超越した数字に達したのであつた。

モスクワへ這入つた最初のロシア人はウインツエンゲローデの部隊のコザック兵と、最も近い村々の農夫と、モスクワから逃げ出して郊外に隠れてゐた住民等であつた。破壊された町へ入つて、それが掠奪された後なのを見ると、ロシア人も亦それを掠奪しだした。彼等はフランス人が初めた仕事を續けたのだ。農夫の荷馬車の列が幾つも〳〵、破されたモスクワの家々街々に遺棄してあつた總ての物を村々へ運び去らうとしてモスクワへねり込んだ。コザック等は出來る限りを自分等の幕屋へ運び去つた。家を持つ人々は、彼等が出來るかぎりを他所の家々から集めた。そして夫れは自分等の所有物だといふ口實をつけて、自分等の家々へ持つて行つた。

けれども、最初の掠奪隊が他の幾つもの夫れらに依つて次がれた。そして毎日掠奪者の數が增すのであつたから、掠奪の仕事がだん〳〵むづかしくなつて、だん〳〵定つた形式をとるやうになつた。

フランス軍がモスクワへ入つた時には、そこに住民はゐなかつたけれど、根本の常例の都市生活の總ての形はまだ存在し、それと共にさま〴〵な商業、工業、奢侈、及び政治上の統治や宗教が殘つてゐた。それらの形は生命が無いものであつたが、それでも存在してゐるにはゐた。市場も、商店も、倉庫も穀物取引所も、又勸工場もあつて——彼等の大部分は商品が塡まつてゐた。工場や商會もあつた、贅澤品の一ぱい入つた宮殿や金持の家々もあつた。病院も牢獄も宮廷も寺院も伽藍もあつた。フ

ランス軍が永くゐればゐるほど、都市生活のこれらの形は益々滅びて行くのであつた。そして最後には總てが唯一つ掠奪といふ區別しがたい、生命の無い光景の中へ沒してしまつた。

フランス軍の掠奪が永くつゞけばつゞくほど、モスクワの富と掠奪者の勢力との破壞が一層完全になつた。ロシア人が初めて帝都へ歸つた時にやり出した掠奪が、永くつゞけば續くほど、又それに加はる者が多ければ多いほど、モスクワの富と市の常例の生活とがます〳〵速く再建されて行くのであつた。

掠奪のために來た人々と全く別に、有らゆる種類の人民が此所へ引きつけられた。或者は好奇心のために、或者は官務のために、又或者は自己の利害のために——家を持つ者、僧侶、高い、低い、役人、商人、職人、農夫等が——血が心臟へ流れ込むやうに各方面からモスクワへ流れ歸るのであつた。

一週間のうちに、物品を運び去らうとして空馬車を持つて來た農夫等は、官憲のために抑留されて、町の外へ死骸を運び出すべく强ひられた。仲間の閉口してることを聞いた他の農夫等は、小麥や燕麥や乾草などを荷馬車で町へ持ち込んで、以前よりは低いところまで互に値段を下げてしまつた。大工の幾組もが高い賃錢が得られると思つて、毎日モスクワへ到着した。そして諸方面で、新らしい家が建てられり、又は半燒の家が修繕されたりした。商人は屋臺店で商賣をした。食物店や居酒屋が、火に焦げた家で開かれた。僧侶等は火を免れた多くの寺院で禮拜を守つてゐた。掠奪された寺の物品は、

奉納として戻された。政府の屬官は小さい部屋の中に、各自の粗雑紗の被ひをかけた卓子を置き、書類函を並べた。高級官吏や警察は、フランス人が遺棄した品物の分配を整理した。他の家々から掠奪された多くの物品を置いた空いた家の持主等は、總ての物品が多角宮へ運ばれることの不正をつぶやいた。他の人々はフランス軍は種々の家から一ケ所へ總ての物を集めたのである、それ故それらの物品が發見された家の持主へ夫れを戻すのは不公平だと主張した。警察は罵られたり、買收されたりした。焼けた官有の建物に對する見積りが、その實價の十倍ほどに計上された。そして扶助のための訴へがなされた。ラストプチン伯爵はまた彼の揭示を書いた。

十五

一月の末つ方にピエールはモスクワへ着いた。そして自分の邸の附屬家の焼け殘つてゐたのへ落ち着いた。彼はラストプチン伯爵其他の知人を訪問し、そして三日の中にペテルブルグへ出發する積りでゐた。誰も皆勝利を勝ち誇つてゐた。滅びて而して復活した町は生命を以て沸き立つてゐた。誰も皆ピエールに會ふのを悦んだ。誰も皆熱心に彼に會ひたがり、又彼が見て來た總ての事を訊きたがつてゐた。ピエールは、その會ふ何人に對しても特に暖い情を持つてゐた。けれど、兎も角も自分の自

由を抑制することを避けて、無意識的にも人々に對して少々用心してゐた。彼に向つて訊かれた問—重要なのも下らないのも——例へば何處に住むつもりかとか、家を建てるかとか、ペテルブルグへ行かうとしてゐるのかとか、誰某の所へ小荷物をことづかつて呉れまいかとかいふやうな問に對しては、彼は『さう、多分』とか『大抵、さうでせう』などゝ答へるのであつた。

彼はラストフ家がコストロオマにゐるといふことを聞いた。そしてナターシヤに就ての思ひが時ま心に出て來た。そして、それが心に出て來た時には、それは永い往時の心持の好い記憶としてであつた。彼は日常生活の煩累から解放されたと感じたばかりでなく、好んで自分の上に持つて來たと自分にも思はれる其の感じから解放されたと思つた。

モスクワに着いてから三日目に、彼はドルベツコイ家の人々から公爵令嬢マリヤがモスクワにゐることを聞いた。アンドレー公爵の死、苦痛、及び最後の日のことが屢々ピエールの心を占領した。そして今も新らしい明かさを以て彼の心に起つて來た。彼は正餐の時に公爵令嬢マリヤがモスクワにゐた事、そして火を免がれたヴオズヴイゼンカに於ける自分の家に住んでゐる事を聞いた。で、その夕刻に彼女を訪問しに行つた。

公爵令嬢マリヤの家へ行く途中も、ピエールの心はアンドレー公爵の事や、アンドレーに對する彼の友誼や、二人が會つた折々の事や、殊にボロデイノに於ける二人の最後のことなどで滿たされた。

『あの男はあの時のやうなやけな氣分で死んだのだらうか？』人生の意味が死ぬ前に彼には啓示されなかつたらうか？』と、ピエールは思ひ惑つた。彼はカラターエフの事や、彼の死の事を思つた。そして、そんなに違つてゐた二人だけれども、ピエールが二人に對して感じた愛に於いて、又二人が生活し且死んだ事に於いては互に非常に似寄つてゐた此の二人を比較した。

極めて眞面目な心持になつてピエールは、老公爵の家へ馬車を驅つた。家は全く舊のまゝであつた。その中でやられた狼藉の痕は見られたが、家の性質は變つてゐなかつた。老公爵はゐなくとも家の嚴重な慣例は毫も變らない事を客に感じさせ度いと思つてゐるかの如き嚴格の顏をして、年取た家僕がピエールに會つた。そして公爵令嬢はもう自分の部屋へ退いた事、及び日曜日には應接する事を告げた。

『私の名を取り次いでくれ。多分彼女は會ふだらうから。』と、ピエールは言つた。

『畏まりました。閣下。』と、家僕は答へた。『どうぞ、書室へお這入り下さいまし。』

それから數分の後家僕はデツツサルを伴つて戻つて來た。デツツサルは、公爵令嬢が喜んでピエールに會ふといふ使命を齎し、そして若し略儀を許して下さるならば、何卒二階の彼女の居間へ來てくれと賴んだ。

唯一本の蠟燭で照らされた、天井の低い部屋に、公爵令嬢は黑い着物を着た誰だかと一緒にゐた。ピエールは公爵令嬢が常に誰かしら附添の婦人を持つてゐたことを憶ひ起した。しかし夫れらの附

添が誰であつたか又どんなやうな女であつたか、彼は覺えてゐなかつた。『これは附添の一人だな』と、彼は黑衣の婦人を一瞥しつゝ思つた。

公爵令嬢は速く彼を迎へやうとして起つて、手をさし出した。

『さう。』と、公爵令嬢はピエールが彼女の手を接吻した後、彼の變つた顏をつく〴〵見ながら言つた。『變つた有樣でお目にかゝりますことね。兄はあなたの事を死ぬ時分に屢く申しましたよ。』と、彼女は少し羞しさうにピエールから附添の方へ眼をやりながら、言つた。彼はその樣子に驚いた。

『あなたの御安全なのを聞いて、ほんとに嬉しうございました。この永い間に好い事と云つては、あなたの事たつた一つでございましたわ。』

また、公爵令嬢は尙ほ一層不安さうに附添を一寸と見て、何か言ふところであつた。けれども、ピエールは彼女を遮つた。

『すみませんでしたね。私はお兄いさんのことは少しも知らなかつたのです。』と、彼は言つた。『私はあの方は戰死なすつたとばかり信じてゐました。私の聞いたことは皆他の者からの噂ばかりで、古い話ばかりでした。私が知つてゐるのは、あの方がラストフ家の人々と一緒になつたといふことだけです……實に不思議な運命ですなあ。』

ピエールは早口に熱心に話した。彼は一度附添の顏を瞥見した。そして凝と見詰める親しげな尋ね

るやう眼が自分の上に注がれてゐるのを見た。そして屢ある通り、話してゐる中に、彼は黒い、着物の附添婦人は善良な親切な暖かい人で、彼が公爵令嬢マリヤに打解けて話す邪魔には決してならぬものと、漠然と感じたのであつた。

けれど、彼がラストフ家に關する最後の言葉を言つた時に、公爵令嬢マリヤの顔に於ける當惑の色が尚ほ一層明かになつた。また彼女の眼がピエールの顔から黒い着物の婦人の顔へと移つた。そして彼女は言つた。

『この方がお解りになりませんか?』

ピエールは最う一度、黒い眼と妙な口を持つた附添の女の蒼い痩せた顔を一寸と見た。彼に極く近い、長く忘れてゐた快い以上の何物かが、そのぢつと見てゐる眼からピエールを見詰めた。

『だが、いや、そんなことはない。』と、彼は思つた。『こんなに老けて見えるその嚴つい痩せた顔が?彼女であるべき筈がない。たゞ夫れを思ひ出させる顔だ。』

けれど、その瞬間公爵令嬢マリヤが『ナターシャ』と、言つた。

そして、ぢつと見てゐる眼を持つた其の顔が——苦しさうに、努力して、錆びた扉が開くやうに——微笑んだ。そして、その開いた扉を通して、彼が永く忘れてゐて、殊に今では思ひもかけなかつた幸福の、俄に蔽ひ被さつて來る突進がピエールの方へ漂つて來た。それは彼に息を吹きかけ、彼を

壓倒し、そして全然彼を呑んでしまつた。彼女が微笑んだ時には、少しも疑ふ餘地はなかつた。それはナターシャであつた。そして彼は彼女を戀してゐた。

その最初の瞬間に、ピエールは自分では氣がつかなかつたが、彼女と公爵令嬢マリヤと、そして殊に自分自身の前に、秘密を洩した。彼は悦びに滿ちて、しかも苦しさうに困つたやうに顏を赧らめた。彼は感情を隱さうとした。けれども、夫れをかくさうとすればするほど、明かに——彼が明白な言葉で言つたよりも明かに——彼は、彼自身に對し、又彼女に對し、又公爵令嬢マリヤに對して、自分がナターシャに戀してゐたことを曝露した。

『いや〳〵、これは何でもない。不意の驚きなんだ。』と、ピエールは思つた。けれども彼は、公爵令嬢マリヤと談話をつゞけやうとすると、直ぐまたナターシャをちらと見た。すると尚ほ一層濃い赤みが彼の顏ぢうへ擴がつた。そして歡喜と恐怖の尚ほ一層烈しい波がその心にみなぎつた。彼の言葉はつまづいた。そして文句の半で八タと止まつた。

ピエールは此所でナターシャと會はうとは全く思ひがけなかつたから、彼女には氣がつかなかつた。けれども亦彼が彼女を見別けなかつたのは、前に彼女を見た時以來、ナターシャの變りやうが餘り大きかつたからでもあつた。彼女は痩せて蒼くなつた。けれどもナターシャを認めがたいものにしたのは其のことではなかつた。彼が最初ナターシャを見た時には、以前いつでも生の喜悦の抑へつけた微

笑を以て輝いてゐた眼の中に、微笑の痕が少しも無かつたのだから、何人にせよピエールが這入つた時のやうな刹那では、彼女をそれと認めることは出來なかつたであらう。それは悲しい事を問いたげな、ぢつと見据へた溫情の眼であつた。

ピエールの羞みは、ナターシャの方のそれに照應すべき羞みでは返へされなかつた。唯彼女の顏全體を微かに晴やかにさせた心持よい眼付でのみ返へされたのであつた。

十六

『この方は私と一緒に滯在するためにおいでなすつたのですよ。』と、公爵令嬢マリヤが言つた。『伯爵も伯爵夫人も數日中には此地へおいでゞございます。伯爵夫人はおあぶない御容態ですよ。ですがナターシャはお醫者に診て貰ひにいらしつたのです。で、兩親が私と一緒におよこしなすつたのですよ。』

『さうですとも。それ〳〵自分達の悲みを持たない家族が世にありませうか?』と、ピエールはナターシャの方へ向きながら言つた。『それは私達が助けられた其日に起つた事なのを御存じでせうね。何とも立派な子供さんでした。』

ナターシャは彼を見た。そして彼の言葉に答へて、彼女の眼はたゞ益す廣く開いて、ますゝ〳〵輝いたばかりであつた。

『慰めるために、何を言ひ何を考へられるでせうか?』と、ピエールは言つた。『何もありません。あんなに命に滿ちてゐた、あんな立派な子供さんが何うして死なゝければならなかつたのでせう?』

『さうです、近頃では信仰が無くつて生きて行くことは辛いでせう……』と、公爵令嬢マリヤが言つた。

『さうです、さうです、そりやあ本當ですよ。』と、ピエールが急がしく言葉を挿んだ。

『何うしてさうですの?』と、ナターシャがピエールの眼をぢつと見ながら、言つた。

『何うしてさうつて?』と、公爵令嬢マリヤが言つた。『いえ、待つといふ考へばかりが……』

ナターシャは公爵令嬢マリヤの言葉は耳にも止めず更に訊くやうにピエールを見た。

『それで、』と、ピエールは言葉をつゞけて、『我々の生活を導き給ふ神が存在することを信じる者のみが、あの方のやうな、それから……あなたのやうな喪失を堪えることが出來るのですから……』と、ピエールは言つた。

ナターシャは何事か言ひたげに口を開いた。けれども不意に止めた。

ピエールはナターシャから急いで傍を向いて、自分の友人の最後の日のことを訊く爲めにまた公爵

令嬢マリヤに話しかけやうとした。ピエールのモジ〳〵した様子は今は殆んど見えなくなつた。しかしそれと同時に、彼は自分の以前の自由も亦消滅したことを感じた。彼は今自分のあらゆる言葉、あらゆる行爲を批評する裁判官があり、その人の判決は世界の總ての人々の判決よりも、彼に取つては重大なものであることを感じたのであつた。彼は今談しながら、自分の言つてゐる言葉がナターシャに與へつゝある印象のことを考へてゐた。彼は故意に彼女の氣に入ることを言つたのではなかつた。けれど、何を言ふ時でも、彼女の見地から彼自身を見てゐるのであつた。

さういふ場合によく有りがちな氣のりのせぬ調子で、公爵令嬢マリヤは自分が見た時の兄の狀態をピエールに話し始めた。けれども、ピエールの問や、その熱心な苛々した瞥見や、感情でふるへる彼の顏などがだん〳〵彼女を誘ひ込んで、彼女が自分のために、自分の想像の中へ呼び返すのを逡巡してゐた一伍一什を話すやうになつた。

『さうです、〳〵……』と、ピエールは公爵令嬢マリヤの上へ押つ被さるやうに體を前へ曲げて、熱心に彼女の言葉を呑み込みながら、言つた。『さうです〳〵、さういふ風に平和を見出しなすつたのですか？　あの人はいつも一つの事ばかりに向つて、全心を注いで努力なさるのでした。だから死を恐れる苦がないんです。あの人の缺點——若しさういふものが少しでもあるとすれば——は、あの人自身から來てゐるのではないのでした。では和らいでおしまひでしたか？』と、ピエールは言つた。

『あなたが復あの人にお會ひなすつたとは、何といふ幸福なことでせう。』と、彼は不意にナターシャの方へ振り向いて、涙の一ぱい溜つた眼で彼女を見て、言つた。

ナターシャの顏はふるへた。彼女は顏をしかめた。そして一寸俯向いた。一寸の間、言はうか、言ふまいかと躊躇つた。

『さうです。それは大變幸福でした。』と、彼女は低い、深い聲で言つた。『私にとつては、それは確に大變幸福なことでした。』と、彼女は言葉を切つて、『で、あの人は、あの人は、……あの人は、……私が這入つて行くと直ぐ、それを待ちこがれてゐたと私に言ひました……。』ナターシャの聲が斷れた。彼女は顏を擡らめ、膝へ手を押しつけ、そして不意に明かに自制しやうと努力しつゝ、頭を擧げて早口に言ひはじめた。

『私達はモスクワを發つ頃は、それについて何にも存じませんでした。私はあの人のことを訊くことが出來なかつたのです。さうしますと、ソーニヤが不意にあの人が私達と一緒にゐることを私に話したのですよ。私は何も考へることが出來ませんでした。私はあの人が何んな容態でしたか、さつぱり解らなかつたのでした。私はたゞあの人に會ひ——あの人の傍にゐたかつたのです。』と、彼女は慄へながら息を切つて言つた。そして彼等に自分を遮らせずに、これまで誰にも話さなかつたことを皆な

話した。それから旅行とヤロスラウルの逗留中の三週間内に出會つた總ての事を話した。

ピエールは口をあいて、涙を一ぱいためた眼で彼女を見詰めて、聞いてゐた。彼は聞いてゐる中に、アンドレー公爵の事も、その死の事も、又ナターシヤの言つてゐる事をも考へてゐるのではなかつた。彼は彼女の聲を聞き、そして今彼女が彼に話す間の苦しみに對して、彼女を憐んでゐただけであつた。

公爵令嬢は涙を抑へようとして顔をしかめてナターシヤの傍に座つた。そして初めて自分の兄弟の最後の時分のことやナターシヤの戀の物語を聞いた。

その苦しくも亦樂しい時分のことを話すことは、ナターシヤにとつては明かに必要であつたのだ。彼女は最も下らない、細々しい事を、自分の心の秘密な感情と混ぜ合せて、話しつゞけた。そして何時まで經つても話を終ひにすることは出來なさゝうに見えた。幾度となく彼女は同じ事を二度言つた。

ニコリューシカがお休みなさいを言ひに這入つても宜いかと訊く、デツツサルの聲が扉口で聞こえた。『で、これで皆ななのよ。皆な……』と、ナターシヤが言つた。ニコリューシカが這入つて來た時に、ナターシヤは急に起ち上つて、殆んど驅けるやうにして扉口へ行き、その扉が暖簾に隱れてゐたものだから、扉へ頭を打ちつけ、半ば痛みと半ば悲みの呻き聲を立てゝ、部屋の外へ飛び出してしまつた。

ピエールは彼女が出て行つた扉を見詰めた。そして何故か自分が俄に廣い世界に一人ぼつちになつたやうに感じたのを、不思議に思つた。

公爵令嬢マリヤは、その時丁度這入つて來た自分の甥の方へピエールの注意を呼んで、彼を慮心から呼びさました。

父親そつくりのニコリューシカの顔が、感情の緊張してゐた此の刹那に於けるピエールには非常な效果を持つた。彼はその兒に接吻してから、起つてハンカチーフを取り出して窓のところへ行つた位であつた。彼は暇乞をしようと思つたが、公爵令嬢マリヤは彼を歸さなかつた。

『いゝえ、ナターシヤも私も、二時過ぎまで寢床へ這入らないことが始終ありますよ。何卒、もう少しゐらしつて下さい。晩食をしませうよ。階下へおいで下さい。私どもゝ直き參りますから。』

ピエールが下へ行く前に、公爵令嬢は彼に言つた。『あの女が兄のことをあんなに話したのは之れが初めてゞございますのよ。』

十七

ピエールは大きい、燈の明るい食堂へ案内された。しばらくすると足音が聞えた。そして公爵令嬢

とナターシヤがその部屋へ這入つて來た。ナターシヤは、嚴格なニツコリともしない表情が今またその顏へ歸つてはゐたが、落着いてゐた。公爵令嬢マリヤもナターシヤも、またピエールも、皆同樣に、眞面目なしんみりした話の終つた後に常に續いて來る手持不沙汰の感じを經驗した。同じ問題について談しつゞけることは出來ないことだし、下らん事柄を話すのは冒瀆のやうな氣がするし、と云つて談しはし度いのであるから、この沈默は氣取つてゐるやうにも思はれて、默つてゐるのは不愉快であつた。默つて、彼等は卓子へ來た。家僕等は椅子を後へ引いて、また前へ突いた。ピエールは自分のナプキンを擴げた。そして沈默を破らうと決心してナターシヤと公爵令嬢マリヤを一寸見た。二人とも明かにその同じ刹那に同じ決心をしたらしかつた。二人の眼の中には、人生に對する滿足が輝き、又人生には悲哀と並んで喜悅もあるといふ承認が表はれてゐた。

『火酒(ウヲツカ)をあがりますか、伯爵。』と、公爵令嬢マリヤが言つた。そして、その言葉が直ぐ過去の陰影を追ひ拂つてしまつた。

『あなたのことを話してくださいよ』と、公爵令嬢マリヤが言つた。『大變な不思議な話が、あなたの事として噂されて居りますのよ。』

『えゝ、』と、ピエールは今では習慣になつてしまつた皮肉な溫和な微笑を以て、答へた。

『私自身も、私が夢にも思はなかつた異常なことをしたやうに人から話されるのですよ。マリヤ、ア

プラモウナは私を呼んで、私の身に起つたことや、起るべき筈であつた事を私に話しつゞけたのでした。ステパノアン、ステパノキツチも亦私が何う自分の物語(はなし)をしたらいゝか、それを教へてくれました。結局、私は面白い人間である事はずいぶん容易(たやす)い位置だといふ事に氣がついたのです。(私は今では面白い人間なんですからね)、人々は私を招待して、それから夫れに就いて何も彼も話してくれますよ。』

ナターシヤは微笑んだ。そして何やら言はうとした。

『私どもは、あなたがモスクワで二百萬の御損をなすつたと聞きましたよ。ほんとですか?』

『いや、私は前よりも三倍金持になりました。』と、ピエールは言つた。自分の財産に對する逼迫や、妻の負債や、建てなほしの必要などの有るにも係らず、ピエールは矢張自分は之れまでより三倍の金持になつたと言つた。

『私が疑ひもなく、得たものは、』と、彼は言つて『自由です……』と、本氣になつてやり出した。けれども更に考へてみると、それが餘り自我的な問題だといふ氣がしたので、その言葉を繼けなかつた。

『で、あなたは家をお建てなすつておいでゞすか?』

『えゝ、サヴエリイツチの命令がさうなんですから。』

『ねえ、あなた、モスクワにおゐでの時分に、伯爵夫人のお亡(な)くなりになつたことを、おきゝなすつて?』と、公爵令嬢マリヤが言つた。そして彼女は『自由』といふ彼の言葉の後へ此の問ひを持つて行

けば、その積りではないらしい彼の言葉へ或意味を附けることになるのだと氣がついて、急に赤面した。

『いゝえ。』と、ピエールは、公爵令嬢マリヤが彼の自由と云つた言葉の上に置いた解釋の少し變挺であることは一向氣がつかぬらしく答へた。『私はそれをオーレルで聞きました。私がそれに何れほど感動したかといふことは、あなた方には御想像は出來ますまい。私共は模範的の夫婦ではなかつたのですが。』と、彼はナターシヤを一寸見て、彼女の顏の中に、彼が自分の妻のことを何う談すだらうかと待つてゐる好奇心を看破しつゝ、口早に言つた。

『けれども彼女の死には私は大變動かされました。二人が喧嘩する時には、双方とも惡いのです。また、此の世にもうゐない人に對しては、いつも恐ろしく自分の過失に氣がつくものです。それに、しかも、あんな死に方……友達からは隔り、慰藉もなくて。私は彼女を甚く氣の毒に思ひました。』と、彼は言葉を結んだ。そしてナターシヤの顏に嬉しげな贊成の色を認めて滿足した。

『では、あなたはまた好い候補者でおいでゝすのね。』と、公爵令嬢マリヤが言つた。

ピエールは、急に眞赤になつた。そして長い間彼はナターシヤを見ないやうにしてゐた。彼が思ひ切つて彼女をチラと見た時に、彼女の顏は冷かに嚴つく侮蔑してゐるやうにさへ彼には見えた。

『けれど、あなたは噂通り、ほんとうにナポレオンに會つて話をなすつたのですか?』と、公爵令

マリヤが言つた。

ピエールは笑つた。『一度も會ひません。決して。誰でも皆毎も捕虜になること、ナポーレオンを訪問することゝは同じだと想像してゐますよ。私は決して彼を見もしなければ、彼のことをまるで聞きもしなかつたのです。私はずつと低い仲間に這入つてゐたのです。』

晩餐は終つた。そしてピエールは、最初は自分が捕虜になつてゐた時の話をするのをいやがつてゐたが、だん〳〵その話をするやうに引込まれてしまつた。

『ですが、ナポーレオンを殺すつもりで、後へお殘りになつたといふのは本當なんでせう?』と、ナターシヤは微かにニツコリして彼に訊いた。『スハアレフ塔でお目にかゝつた時、私はさう推量いたしましたの。あの時の事を覺えていらしつて?』

ピエールは夫れはさうであつたと自白した。そしてその問から、公爵令嬢マリヤの問に依つて、又尙ほさらナターシヤの問に依つて引出されて、ピエールは自分の冒險を詳しく話すやうになつた。

最初彼は、優しい皮肉な調子で話をした。その調子は、今では常に他人に對し、又自分自身に對して持つてゐたのである。けれども自分の見た恐ろしい事や、苦難の事を話す時になると、彼は知らず〳〵引きつけられて、過去の强烈な印象の中で再び生きる人のやうな、抑へつけた感情を以て話し始めた。

公爵令嬢マリヤは、優しい笑顔をしてピエールからナターシヤをと見廻した。彼が彼等に話した總ての事に於いて、彼女は唯ピエール其人と彼の善良とを見た。ナターシヤは頬杖をつき、顔を話と共に絶えず變へながら、ピエールから決して眼をはなさずに、見守つてゐた。そして彼が自分に話した總ての事の中を、想像で以て通過しつゝあるのであつた。たゞ其の眼ばかりでなく、彼女の發する感嘆の聲も、ピエールに對して發する其の短かい問も、彼が言はんと欲するところをよく理解してゐるのだといふことを彼に示した。確にナターシヤはピエールが既に言つた事のみならず、言はうと思つても言葉に表はし得なかつた事柄をも理解してゐるらしかつた。小供と女——それを助けやうとして彼は捕虜となつたのだ——の挿話を、ピエールは凭ういふ風に話した。『そりやあ實に恐ろしい光景でした。子供等は捨てられました、中には火の眞中に捨てられてるのもありました……。子供等が私の眼の前で引ずり出されたのです……それから、女共は着物や裝飾を剝ぎ取られ、耳輪を扭ぢとられ……』

ピエールは顔を赤くして躊躇つた。『其所へ巡邏隊がやつて來ました。そしてまた掠奪してゐなかつたもの、即ち男共は皆捕虜にされました。私もさういふ者共に一緒に捕虜にされました。』

『たしかに、あなたは何も彼もお話しなすつたのではないわ、たしかにあなたは何かなすつたでせう。』と、ナターシヤは言つた。そして一寸言葉を切つてから、『何か善い事を。』

ピエールは話をつゞけた。けれど處刑のところへ來ると、その恐ろしい話を拔かしてしまはうと思つた。が、ナターシヤは少しも拔かさぬやうにと言ひ張つた。

ピエールはカラターエフの話をしようとした。彼は卓子から起つて、部屋を彼地此地歩いた。ナターシヤは夫れを目送してゐた。

『いゝえ。』と、彼は言つて、話をキチリと切つた。『あの無學な人——あの率直な人間——から私が學んだ事柄は、誰にも到底想像し得られることではありません。』

『いゝえ、〳〵。話して下さいよ。』と、ナターシヤが言つた。『その人は今何處にゐるのです?』

『その男は、私の殆んど眼前で殺されたのです。』

そしてピエールは、自分等の退却の終りの方のこと、カラターエフの病氣（その聲は絶えずふるへた）それから彼の死のことを、詳しく話しはじめた。

ピエールは、前には決してさうは思はなかつたやうな風に、自分の冒險の話をした。彼は曾て出會つた總ての事のうちに今正に新意義を見た。彼は今ナターシヤに總てそれを話してゐる中に、聞く方の女から男に對して與へられる極めて稀な幸福を經驗した。聞いてゐる時に　彼等の智力を富まし、時折り夫れを繰り返すためとか、又は聞いた事をば彼等自身の觀念に適應させて、其の小さい心の製造場で工夫し上げた氣の利いた註解を急いで持ち出す爲めとかに、聞いた事をを覺えて置かうとする

やうな所謂氣の利いた女から受ける幸福ではなかつた。此稀な幸福というのは、男が彼女に示すものゝ中の最善なるものを悉く拾ひ上げて同化するといふ能力を持つ眞の婦人達に依つてのみ與へられるものである。ナターシヤは自分ではさうとは氣づいてゐなかつたが、我を忘れるまでに注意を向けてゐた。彼女はピエールの一語も、聲の震へさへも聞き落さず、その一瞥も、顏の筋肉の一顫も一つの身振りも見落さなかつた。彼女は語られる前に言葉を捉へ、それを直に自分の聞いた心へ持つて行き、そして、ピエールの靈の勞苦全體の秘密な意義を洞察した。

公爵令嬢マリヤも彼の話を理解して、彼に同情した。けれど彼女は、今自分の注意の總てを吸ひ込んでゐる、或他の事を見てゐた。彼女はナターシヤとピエールとの間に戀愛と幸福の成立ち得べきことを見てゐた。そして、今初めて氣がついた此の觀念が悦びを以て彼女の心を滿たした。

夜の三時であつた。家僕等は陰鬱な、いかつい顏をして、新しい蠟燭を持つて這入つて來たが、誰も彼等に氣がつかなかつた。

ピエールは、自分の物語を終つた。輝いた熱心な眼をして、ナターシヤは恐らく彼が言はずにしまつた最つと多くの何物かを理解しやうと希つてゐるかのやうに、尙ほピエールをしげ〳〵と見守つた。羞づかしさと幸福にドギマギして、ピエールは時々ナターシヤをちよい〳〵と見た。そして今話題を變へるには何んな事を言つたものかと考へてゐた。公爵令嬢マリヤは默つてゐた。それは夜の三時で、

そして寢る時分だとは、誰一人として氣がつかなかつた。

『困苦は不幸だと人々は言ひます。』ピエールが言つた。『けれど、若し不意に、今私は捕虜になつた前のやうにしてゐる方がいゝか、それとも今一度それをすつかり經驗するがいゝかと訊かれたら、私は何卒もう一度捕虜になつて馬肉を喰うやうにしてくれと言ひますね。我々は、我々日常の道から引きはなされると直ぐ最う萬事休すと想像します。けれど夫れはほんの新らしくして善良な或事の初まりですよ。命がある限りは幸福があるのです。我々の前には澤山の、澤山の物があります。私はその事をあなたに言ひます。』と、ナターシヤの方を向いて、彼は言つた。

『さうです、さうです。』と、ナターシヤは全く異ふ何事かに返事をして言つた。『そして私も最う一度それを經驗することが出來さへすればそれほど宜いことはないと思つてゐますの』

ピエールは、つく〴〵ナターシヤを見た。

『さうです。それだけです。』と、ナターシヤは叫んだ。

『違ひます。違ひます。』と、ピエールは叫んだ。『生きてゐて、生き度いと思ふのは私が惡いのではない。あなたとても同じことです。』

不意にナターシヤは頭を兩手の中へ落として、泣き出した。

『何うしてナターシヤ?』と、公爵令嬢マリヤが言つた。

『何でもありませんの。何でもありませんの。』と、ナターシヤはビエールの方へ向いて涙の中から微笑んだ。

『左様なら。寝る時分ですから。』

ビエールは起き上つて、別を告げた。

ナターシヤは常のやうに、公爵令嬢マリヤと共に彼女の寝間へ行つた。二人はビエールが話した事柄に就いて、話し合つた。公爵令嬢マリヤは、ビエールに就いては自分の意見を出さなかつた。ナターシヤも彼の事は話さなかつた。

『ではお寝みなさい、マリイ。』と、ナターシヤは言つた。『二人であの人のことを話すのを私が恐がつてゐたのを御存じ?』(彼女はアンドレー公爵を指したのだ)『私達の感情を話して、それで、あの人を忘れてしまつてはと氣配つてでもゐるやうにさねえ。』

公爵令嬢マリヤは深く嘆息した。そして、その嘆息でナターシヤの言葉の道理であることを承知したのであつた。けれど彼女は、言葉の上ではナターシヤに同意しなかつた。

『忘れるなんてことが、有り得られるでせうか?』と、彼女は言つた。

『私は、今日それを皆な話してしまつて嬉しかつたわ。そりや辛い苦しいことだけれども、それでも、私嬉しかつたわ……ずいぶん嬉しかつたわ。』と、ナターシヤは言つた。『ピエールが、ほんとにあの

人を愛してたのは確ですわね。だから、私あの人に話したのよ……私があの人に話すことなんて何うだつてよかつたでせう?』と、ナターシヤは顔を赧らめつゝ、不意に尋ねた。

『ピエール? あら、いゝえ、ほんとに善い人ですわねえ。』と、公爵令嬢マリヤは言つた。

『あなた知つてゝ、マリイ?』と、ナターシヤは公爵令嬢マリヤが長い間見なかつた意地悪さうな微笑を以て、不意に言つた。『あの人は本當に清潔に滑つこく水々しくなつたわねえ。湯から今出たばかしとでも云ひ相に、あなた解つてゝ道徳上の湯からなのよ。さうぢやなくつて?』

『えゝ、』と、公爵令嬢マリヤは言つた。『あの人は大變善くなりましたね。』

『それに、あの人は短いジヤケツと、刈り込んだ髪、恰度まるで湯から出たばかりのやうよ。……お父さまがよく時々……』

『何うして、あの人が』(アンドレー公爵のこと)『あの人より他の人のことは誰れのことをも、何とも思はなかつた譯が、私にはよく解りますわ。』と、公爵令嬢マリヤは言つた。

『えゝ、さうです。そして、あの人はあの人と大變ちがつてゐますわね。まるで違つてゐれば、一層いゝ友達になれるつていふぢやありませんか。それは本當にちがひないわ。あの人は何もかも、あの人のやうぢや無いわねえ。さうぢやなくつて?』

『えゝ、さうよ。そしてあの人は本當に面白い人ですわ。』

『では、おやすみなさい』と、ナターシャが答へた。そして前と同じ意地悪さうな微笑が、彼女の顔に忘れられたかの様に長い間さまよつてゐた。

十八

ピエールは、その夜長い間眠られなかつた。彼は自分の部屋をあちこちと歩き、或時は後からつゝいて来る面倒な考へに沈潜して、顔をしかめ、その次には肩をゆすつて身を振ひ起し、なほその次には嬉しさうに微笑んだ。

彼はアンドレー公爵のことや、ナターシャのことや、彼等の戀愛のことを思つた。そして或る時は、彼女の過去を嫉ましく思ひ、その次には自分を責め、それから又その感情に對して自分を宥した。それは朝の六時であつた。それでもまだ彼は部屋の中を歩いてゐた。

『さあ、もう遁れやうが無いとすれば、何うしたものだらう？　何うすればいゝか？　なすべきことがあるに違ひ無いんだ。それでは、』と、彼は獨言を言つてゐた。そして、急いで着物を脱いで、幸福に激して、けれど疑念や躊躇に苦しめられずに寢床へ這入つた。

『此の様な幸福は、何れほど不思議で、又何れほど有り得べからざるものであるにしても、我々は夫

婦となるべき有らゆる道をつくさなければならない。』と、彼は自分に向つて言つた。

數日前にピエールは、次の金曜日をペテルブルグへ行く日に定めて置いた。翌日眼を覺ますと、それは木曜日であつた。そしてサヴエリッチが旅行のための荷物の支度に就いて指圖を訊きに來た。

『ペテルブルグへか？　ペテルブルグが何うした？　誰がペテルブルグへ行く？』と、彼は獨語のやうではあつたが、我れ知らず訊いた。『さうだ。いつだつたか此の事の起る餘程前に俺は何かの譯でペテルブルグへ行かうと思つてゐたなあ。』と、彼は憶ひ出した。『何故だつたかな？　だが俺は行くだらう多分。此男は何といふ親切な、何といふ忠實な男だらう。實に何でもよく覺えてゐるなあ。』と、彼はサヴエリッチの顔を見ながら、思つた。『それに、何といふ心持のいゝ、微笑だらう。』と、彼は思つた。

『うん、でまだお前は、お前の自由が欲しくはないのかい。サヴエリッチ？』と、ピエールは訊いた。

『何で自由が欲しうございませう。閣下。故伯爵——あの方様の御冥福を祈ります——にはいろ〳〵御恩を蒙つて居りまするし、又、あなた様からも矢張同樣に御恩に相成りまするから。』

『なるほど。でも、お前の子供たちは？』

『子供等も結構でございます。閣下。かういふ御主人樣方の下ならば、誰でも安心してくらせまする。』

『うん。でも、私の後嗣どもは?』と、ピエールは言つた。『不意に私は結婚するかも知れない。……さうなるかも知れん。なあ。』と、彼は我知らず微笑んで言ひ足した。

『失禮でございまするが、それはまた結構でございます。閣下。』

『如何にも容易いものと此の男は考へてゐるなあ。』と、ピエールは思つた。『この男はこれが何れほど恐ろしいか、何れほど危險だかは知つてはゐない。遲過ぎるか、それとも早過ぎるか……恐ろしい事だ。』

『御用は何でございまするか? 明日お發足でございますか?』と、サヴエリツチが訊いた。

『いや、少し延さう。後で話す。いろ〳〵御苦勞だつたな。』と、ピエールは言つた。そしてサヴエリツチの微笑を見守りながら、けれど彼がペテルブルグといふやうな其樣なものはない事や、何より先にあの事を決定せねばならぬ事を知らないのは、實に不思議だと思つた。

『いや、此の男實際は知つてゐるんだ。』と、ピエールは思つた。『たゞそんな態をしてゐるんだ。談したものだらうか? それを此男は何う思ふだらう。いや、又の時にしよう。』

朝飯の時に、ピエールは自分が前の晩公爵令嬢マリヤの家へ行つて、其所で——まあ誰に會つたと思ふ——ナターシヤ、ラストフに逢つたのだ、と從妹に話した。

公爵令嬢はその事實に對して、それはピエールがアンナ、セミヨノウナとやらいふ女に會つたといふ位より以上に、別段異常な事とも何とも思はなかつたやうに見えた。

『あの女を知つてゐませう?』と、ピエールが訊いた。

『その公爵令嬢には會ひましたよ。』と、彼女は答へた。『それに彼女と若いラストフとの結婚が出來かけてゐるといふ事を聞きました。それはラストフ家に取つては大變いゝでせうね。噂ではあの家はすつかり破產したといふのですから。』

『いや、私の言つたのはナターシヤ、ラストフのことなんですがね。』

『その話は、その時分皆な聞きました。ほんとに悲しい。』

『この女には解らないのだ。でなければさういふ態をしてゐるのだ。』と、ピエールは思つた。

『この女にも談さない方がいゝ。』

此の公爵令嬢も亦ピエールの旅行の爲めに食料を拵へてゐた。

『誰も皆實に親切だな。』と、ピエールは思つた。『たしかに皆なにとつて何の利害も有り得ないのに、今かう皆で心配してくれるなんて。そして皆俺の爲なのだ。それが實に驚くべきことなんだ。』

その日警部がピエールに逢ひに來て、今日持主に物品を返すのだから受取る爲めに確な代理人を多角宮へ寄越すやうにと言つた。

『此の男も、』と、ピエールは其の警部の顏を見乍ら思つた。『何と云ふ善良な、人品の好い警部だらう。

そして又何と云ふ人の好い男だらう。今こんな些細な事に手數を掛けるなんて。それでも彼は正直ではなくて賄賂を取ると云ふ事だ。何と云ふ馬鹿な事だ。要するに何うして彼が賄賂を取つてはならないと云ふ事があらう。彼はさう云ふ風に育てられたのだ。彼等は皆なそれをやるんだ。だが恁んな心持の好い氣嫌の好い顏をして、そして私を見る時には微笑むのだ。』

ピエールは、公爵令嬢マリヤの家に晝食を食ひに往つた。彼は黑く焦げた半燒けの家々の間の街街を馬車で驅け拔ける時に、それらの廢墟の美を賞でた。暖爐の煙突や、それから家々の倒れかゝつた壁が、町の燒けた部分の至る處で、互に隱し合つて、長い列になつて續いてゐた。そして夫れらはライン河の繪畫的の古蹟や、ローマの大劇場などを思ひ起させた。雪橇の馭者や、馬上の人々や、家家の木組の上で働いてゐる大工や、行商人や店番などが、皆嬉しさうな晴々した顏をしてピエールを見た。『あゝ、彼が來た。何うなるか見てゐませうぜ。』と、云ふやうに彼には思はれた公爵令嬢マリヤの家へ着くと、ピエールは前の日其處へ來て、實際ナターシヤに逢つて話をしたのは眞實であつたか何うだらうと云ふ疑に、不意に取り圍まれた。恐らく皆な自分だけの空想かも知れない。這入つて行つても私は誰にも逢はないかも知れない。

けれど彼は部屋へ這入ると直ぐに、自分の全實在に於て、又自分が直ぐに自由を失つた事からして、彼は彼女の居る事に氣が附いた。彼女は柔かな襞になつて垂れてゐる其の同じ黑い着物を着てゐた。そ

して髮も同じやうに結つてゐたが、彼女は全く變つてゐた。ピエールが昨日來た時に彼女が此の樣に見えたのであつたら、彼は彼女を見違へる筈はなかつたのだ。

彼女は、彼が殆ど子供として知り、又其後アンドレー公爵と婚約した時に知つたと同じであつた。輝いた、物問ひたげの光が彼女の眼の中でキラキラした。其の顏には親し相でゐて、それでて妙にいたづらさうな表情があつた。

ピエールは食事をした。そして彼等と共に其の晩を終夜送らうと思つた。けれども公爵令嬢マリヤは夜の祈禱會へ行かうとしてゐた。で、ピエールは彼等と一緒に行つた。

翌日ピエールは早くから來て、彼等と食事をして終夜止つてゐた。公爵令嬢マリヤもナターシヤも自分等の訪問客に逢ふのが明かに嬉しさうで、そしてピエールの生活の利害の全體が今其の家に集注してゐたのであつたが、彼等は皆な言ふべき事を言ひ盡して了つた。で、談話は斷えずくだらない小さな問題を、それからそれへと渡つて、時折りは話が全く切れたりした。ピエールは其の晩大變おそくまでゐた。そして公爵令嬢マリヤとナターシヤとは、互にチヨイ〳〵顏を見合せたが、それは彼は直ぐに歸りはしないだらうか何うだらうと審つてゐるのであることは明かであつた。ピエールはそれを知つた。けれど彼は歸つては行けなかつた。彼はその事をバツが惡く窮屈に感じ初めたが、それでも立つて歸る事が出來なかつたので、矢張り座つてゐた。

公爵令嬢マリヤは果てしのないのを見越して、先づ立ち上つた。そして頭痛がするからと言つてお休みなさいを云ひ初めた。

『それでは明日ペテルブルグへ往らしやいますのね?』と、彼女が言つた。

『いゝえ、参りません。』と、ピールは驚きもし腹も立つと云つた調子で急いで言つた。『いゝえ、……さうです、ペテルブルグへ。明日、行くかも知れません。が私は今お暇は告げますまい。行く前には何か私に御用があるか伺ひに参りませう。』と、彼は大變顔を赧くして公爵令嬢マリヤの前に立つて暇乞はせずに言ひ足した。

ナターシヤは彼と握手をして退出した。公爵令嬢マリヤは其の反對に、往つて了はずに、肘掛椅子に深く腰を下して、輝いた深い眼でいかつく疑とビエールを見入つた。彼女が今の先慥かに表はした倦怠の色は、今は最早や全く通り過ぎて了つた。彼女は長い談話に對して準備するやうに深い長い溜息を吐いた。

ナターシヤが行つて了ふと直ぐに、ピエールの照れてゐる處やギコチなさうな處が直ぐに消え失せた。そして昂奮した熱心と變つた。

彼は急に、椅子をマリヤの直ぐ側に動かして行つた。『さうです、私は貴女に聞いて戴きたいのです。』と、彼は言葉に對するかのやうに彼女の眼に答へて言つた。『私に助力して下さいませんか。何うしたら好いでせう。私は望を掛けても好いでせうか、公爵令嬢、私の親愛な友達、まア聞いて下さい。私は其の事は何も彼も知つてゐるのです。私に彼女を得るだけの價値はない事も知てゐます。私は今その事を話しても駄目だと云ふ事を知つてゐます。けれども私は、彼女の兄妹になりたいのです。いや、さうではない、私はしない、私には出來ない……』彼は言葉を切つて顔と眼の上を撫で廻した。『それは恁う云ふ風なのです。』と、彼は明らかにバラバラにならぬやうに話さうと努めながら言ひ續けた。『私はいつから彼の女を戀してゐるのか分りません。けれども私は彼女一人を、彼女ばかりを生涯戀してゐました。そして私は彼女の居ない私の生活を想像する事は出來ない程彼女を戀してゐるのです。私は今彼女の手を取り度いと申込む迄に自分をすることが出來ないのです。けれども事に依ると私の妻になるかも知れないのに、此の機會を……機會を逃して了ふかと思ふと……何とも言へない程恐しい。何うでせう樂觀したものでせうか。ねえ何うしたものでせう?』と、彼は短い間を置いた後で、答へをしない彼女の手に觸りながら言つた。

『私はあなたの今仰言つた事に就いて考へてゐるのです。』と、公爵令嬢マリヤは答へた。『私は恁う思ひます。あなたの仰言つた通り今戀の事を彼の女に話すのは……』

公爵令嬢は言葉を切つた。彼女は今戀の話をナターシヤにするなどは駄目な話だと云ふ積りなのであつた。けれど彼女は云ふのを止めた。と云ふのは此三日以來のナターシヤの不意に變つた事から考

へると、ピエールがナターシヤに戀の告白をしても彼女は怒りはすまいと云ふ事と、又實際ピエールのさうする事がナターシヤの望んでゐる唯一の事であるのを見てとつたからである。

『今あの女に話すのは……駄目ですわ。』と、それでも彼女は言つた。

『けれど私は何うしたものでせう?』

『その事は私にお任せなさい。』と、公爵令嬢マリヤは言つた。『私存じてゐますよ……』

ピエールは、彼女の眼を見入つた。

『それで、それで……』と、彼は言つた。

『私あの女がきつとあなたを戀するやうになりますよ。』と公爵令嬢マリヤは言ひ直した。

彼女が其言葉を言ひ切るか切らないうちに、ピエールは躍り上り、動顚した顔をしてマリヤの手を掴んだ。

『何うしてさう御思ひですか?あなたは私が樂觀しても宜いとお思ひですね?さう思ふのですか?……』

『えゝ、さう思ひますわ。』と、微笑みながら公爵令嬢マリヤは言つた。『あの女』の御兩親へ手紙をお出しなさい。それから後は私にお任せなさいよ。折りを見て私からあの女に申しませう。私はお話が纏

るやうにしたいと思ます。それに何うもさうなるやうな感じが胸の中でしますの。』

『いゝや、そんな事はないでせう。どんなに私は幸福だらう。だが、そんな事はある筈はない。……どんなに私は幸福だらう。いやいや、そんな筈はない。』と、ピエールは公爵令嬢マリヤの手を接吻しながら言ひ續けた。

『あなたはペテルブルグへいらしやい。その方が好うございませう。すれば私が手紙を上げますから。』と、彼女は言つた。

『ペテルブルグへ?私が行かなくちやならんのですか?左樣、宜しい、行きます。ですが明日お眼に掛りに來ても宜いでせうね?』

翌日ピエールは暇乞に來た。ナターシヤは前の日程の勢はなかつた。けれどもその日も時折、彼女の眼の中を見るとピエールは、自分が消えて行きさうにも思ひ、又自分も彼女も無くなつて唯幸福の外には何にも無いやうに感ずるのであつた。

『さうなるだらうか?いやいや、そんな筈はない。』と、彼は喜びを以て自分の魂を滿たす彼女の瞥見や身振に對して、其都度自分に向つて言つて居た。

暇乞をしながら、彼女の痩せた弱々しい手を執つた時に、ピエールは其の手を自分の手の中に、我知らず稍や暫く握つてゐた。

『自分から之れ程遠く離れてゐるあの手、あの顔、あれらの眼、女の魅力の實全體が、一朝にして永久に私自身の物になり、自分が自分自身に對するやうに近く、親しくなる事があるものだらうか？いやいや。それは到底不可能なことだ？……』

『左樣なら、伯爵。』と、彼女は大きい聲で彼に言つた。『又あなたにお眼に掛るのを本當にお待ちしてゐますわ。』と、彼女は囁いと言ひ足した。

そして其の樣な單純な言葉や、それに伴ふ眼附や顏附が、全二月の間、ピエールにとつて盡くる事なき想出と、解釋と、幸福な夢との主題を形造つた。

『又あなたにお眼に掛るのを本當にお待ちしてゐますわ。』さうだ、さうだ、彼女はどんな風にそれを言つたかなア。そうだ。『又あなたにお眼に掛るのを本當にお待ちしてゐますわ。』あゝ、俺は實に幸福だ！何うして俺は恁んなに幸福なんだらうなア！と、ピエールは獨言を言つた。

十九

今ピエールの心の中には、彼がエレンと婚約してゐた頃同じ境遇に於て其の心の中を過ぎたやうな物は何にもなかつた。

彼はあの時のやうに、自分の言つた言葉を厭やな羞恥の感じを以て繰り返しはしなかつた。彼は『あゝ、何だつて俺はあの事を言はなかつたのだ。そして何だつて、全く何だつて、あの時、私はあなたを愛してゐると言つたのだ。』と、自分自身に向つて言ひはしなかつた。今は、その反對に、彼女の言葉の總てを、その時の顏附や、微笑の細かい處までそつくりその儘に自分の想像の中で繰り返し、そして夫れに何物をも付け加へず又何物をも奪はないで、唯もう一度是非それが聽きたい許りであつた。

疑念——自分がしようと考へてゐる事が正しいか間違つてゐるかと云ふ——は、今は決して何等の跡をも止めなかつた。唯一つの恐ろしい疑が彼の心を襲つてゐた。それは盡く夢ではなかつたか？公爵令嬢マリヤは間違つてゐるのではなかつたか？自分は餘り自惚れて、自分を信じ過ぎてゐるのではないか？私はそれを信じてゐる、だが不意に——で、慥かにさう云ふ事が起るに違ひないのだ——公爵令嬢マリヤが彼女に話す。すると彼女は微笑んで答へる、『あら、可笑しいのね。あの方は慥かに思違ひをしてゐらしやるのです。あの人は男なの、唯の男なのだけれど、私は、と云ふことを御存じないんですかねえ？……私は全く違つた、もつと高い者だわ。』

唯此の疑ばかりが度々ピエールを責めたてた。彼は今では何等の計畫をも立てなかつた。彼の前にある幸福は、要するに唯其の事を惹き起すだけであつて、それ以上には何物も在り得ないのだ、と思ふ程彼れには疑はしく思はれた。その他の物は凡て失くなつてゐた。

ピエールは、自分にも不可能だと信じてゐた程の、嬉しい思ひも掛けぬ狂熱に捕はれた。自分に對して許りでなく、全世界に對する人生の全意義が、自分の戀と彼女の自分に對する戀の可能性の上に集注してゐる様に思はれた。時としては總ての人々は、唯自分の將來の幸福にばかり心を惹き附けられてゐるやうに見えた。時としては彼等は、皆自分自身と同じ様に嬉しがつてゐるのだが、唯他の利害に懸り切つてゐる様な顔をして、その嬉しさを押し隱さうとしてゐるのに過ぎないやうに思はれた。總ゆる言葉と總ゆる身振の内に彼は、自分の幸福に對する暗示を見た。彼は度々意味在りげな嬉し相な眼付や微笑で人々を愕かした。それは人々と或る秘密の默契を表するもののやうであつた。けれども彼は人々は自分の幸福に就て知り得ない事を認めると、心の底から彼等を憐んだ。そして人々が今利害を感じてゐる一切の事は馬鹿々々しくつて注意に値しない、くだらない事であると云ふ事を何うかして彼等に分らせる様にしてやりたいと云ふ衝動を感じた。

ピエールは官途に就いたら宜からうと云ふ勸めを受けたり、又は事件の或る聯續が總ての人間の幸福を左右し得ると云ふやうな假定に基いて、全般的な　政府的の問題或は戰爭に關する此評が自分の前でなされる時には、彼は憐むやうな穩かな微笑を以て聽いて居た。そして其の不思議な批評を以て話相手の人々を愕かした。けれども人生の眞意義即ち彼の惑情を把握してゐるやうに、ピエールには思はれた様な人々も、又はさう云ふ事には全く何の考もないらしい不幸な慘目な奴等も共に——皆此

の時分には彼自身の燃えてゐる感情の輝く光の中にピエールには見えた。それだから誰に逢つても、彼は其の人の中に些の努力なくして、善い、そして愛する値ある有らゆる物を見たのであつた。

死んだ妻の書類や所有物を調べて居る時も、彼は、妻は自分が今感じてゐるやうな幸福を全く知らなかつたのだと云ふ憐憫の外には彼女の記憶に對しては何も感じなかつた。その頃新らしい位置を獲て勳章を授けられて、殊に傲慢になつてゐるワシーリイ公爵も、非常に憐むべき悲しい親切な老人のやうに彼には思はれた。

後になつて度々ピエールは、幸福な氣違ひ染みたその時分の事を想ひ出した。彼がその時分に、人や境遇に就て形造つた總ての判斷は、永久に彼には眞實なる物となつた。後後までも彼はその時分の人物や事件に關する意見を捨てる處ではなく、反て、內部の疑惑や矛盾のある場合には、彼はその氣違ひ染みた時代の間に持つてゐた意見へ飛び歸つた。すると其の意見が恒に眞實なるものとなるのであつた。

『多分、』と、彼は思つた。『私はあの時分妙に馬鹿げて見えたかも知れない。けれども其の時分、自分がさう見えた程には氣違ひ染みては居なかつたのだ。反て自分は、あの時よりも賢く一層明かな洞察力を持つてゐたのだ。そして人生に於て理解するに足る有らゆる物を理解してゐた。それと云ふの……自分が幸福であつたからだ。』

ビエールの氣違ひ染みた處は、人々を愛する爲めに、昔のやうに其れらの人の個人的根據——それを彼は人々の美質と呼んでゐた。——の出るのを待てゐない處に現れた。そして愛が心に溢れてゐたので彼は譯もなく人々を愛した。だから決して彼等を愛するに足るものとした爭い難い理由を發見する事を誤らなかつた。

二十

ナターシヤが陽氣な嘲弄するやうな笑顏をして、ピエールは短い短上衣を着て髮を刈つて、まるで湯から今出たばかりのやうだと、公爵令嬢マリヤに言はれたその最初の晩から——その刹那からナターシヤ自身にも認められずに隱れてゐて然かも抵抗し難い或物が、彼女の魂の中で目覺めた。

有らゆる物——顏も足取も眼も聲も——有らゆる物が一度にナターシヤの中で變形して了つた。彼女は自分でも驚いた事には、生の力と喜びの望とが表面へ泛び出てきて滿足を要求した。あの初めての晩からナターシヤは夫れまでに自分の身の上に起つた總ての事を皆忘れて了つた樣に見えた。その時から彼女は、絶えて一度も自分の位置に就て呟やかなかつた。彼女は過去に就ては一言も言はなかつた。そして最早や未來に對する樂觀的の計畫を造ることを怖れてゐなかつた。彼女はピエールの事

は殆んど口にしなかつた。けれども公爵令嬢マリヤが彼の事を言ひ出すと、長い間臨げになつてゐた光が、彼女の眼の中でキラキラして、そして彼女の唇は妙な微笑みでゆがむのであつた。

ナターシヤに起つた變化は最初マリヤを愕かした。けれども彼女が、其の意味の何であるかを理解すると、その變化は彼女を苦ませた。『あの女はこんなに早く忘れて了ふ事が出來る程僅かしか私の兄樣を愛することが出來たのかしら?』と、公爵令嬢マリヤは獨りで其の事を想廻した時に、さう思つた。併し彼女はナターシヤと一緒に居る時にはナターシヤに對して腹も立たず、又批難も爲なかつた。ナターシヤを再び領有した目覺めた生の力は、明かに抵抗し難く又自分でも豫想しなかつたものであつた。それ故ナターシヤの面前では、公爵令嬢マリヤも自身の心の奥にすらナターシヤを責める權利は持たないと感じた程であつた。

ナターシヤは非常な完全と率直とを以て、彼女の新らしい感情に自分を委せ、今は悲しくはなくて喜ばしく幸福であると云ふ事を隱さうともしなかつた。

公爵令嬢マリヤが其晩ピエールと會見した後で自分の部屋に歸つて來ると、ナターシヤが扉口で彼女を迎へた。

『あの人は言つて?さう?あの人は言つて?』と、彼女は繰り返した。そして嬉しさうな、同時に其の嬉しさに對して宥しを乞ふやうな表情が其の顏にあつた。『私扉口で聽いてゐたかつたわ。でも吃度

あなたが話して下さると思つてゐました。』

公爵令嬢マリヤは、ナターシヤが自分を見た表情を眞に理解して、夫れを憐むだけの心持にはなれたし、又ナターシヤの心の動搖を大變氣の毒とは思つてゐたが、それでも彼女の言葉は最初の刹那にマリヤの心を苦しませた。マリヤは自分の兄の事と、彼の戀愛の事とを思つた。

『でも誰だつて何うしようがあるものか?あの人だつてあゝしないではゐられないのだから。』と、公爵令嬢マリヤは思つた。そして悲しい、稍やいかつい顏で、彼女はピエールが自分に言つた事を悉くナターシヤに繰り返した。ナターシヤは、彼がペテルブルグへ行くのだと聞いて呆れ返つたやうに吃驚して了つた。『ペテルブルグへ?』と、彼女はその意味が呑込めないかのやうに繰り返した。

だが公爵令嬢マリヤの顏の悲しさうな表情を見ると、彼女はマリヤの悲みの原因を判斷した。そして不意に泣き出した。

『マリイ、』と、ナターシヤは言つた。『私は何うしたら宜いのでせう。私は怖しい物になるのは厭やです。あなたの有仰る事なら何んな事でも爲ますわ。有仰つて下さいな。……』

『あなたあの方を戀してゐらしやるの?』

『えゝ。』と、ナターシヤは囁いた。

『そんなら、何にも泣くことはないわ。私はあなたの爲めに大變嬉しいと思ふわ。』と、公爵令嬢マリヤ

は其の涙に動かされて、ナターシヤの喜びに對して殘りなき宥しを與へた。

『それは直きではないでせう……いつかね。私があの人の妻になり、あなたがニコライと結婚なさる時が來たら、まア何んなに嬉しいことでせう。』

『ナターシヤ、その事は言はないで下さいと私あなたにお願ひしましたわね。あなたの事を話しませうよ。』

二人とも默つて了つた。

『ただねえ、何うしてペテルブルグなんかへ行くのでせう?』と、ナターシヤは不意に叫んで、急いで自分で答へた。

『いえいえ、さうなけりやならないわ……さうでせう、マリイ?さうなけりやならないわ……』

拾遺

第一編

一

七年過ぎた。嵐に弄ばれたヨーロツパの歴史の太洋は、その岸の中で靜まりつゝあつた。最早や平穩になつたやうに思はれた。が、人間を動かす神祕的な力（彼等の行動を統御する法則は我々に知られてゐないから、神祕的な）が矢張り動いてゐた。

歴史の太洋の表面は動かないやうに見えたが、人間の運動は、時の流と同じく遽る事は出來なかつた。人間の群の樣々な組が合したり、離れたりしてゐた。諸帝國の形成や瓦解や、及び人民の移動を齎すやうな諸原因が準備されつゝあつた。

歴史の太洋は、今では最早や前のやうに此の岸から彼の岸へと激しく弄ばれはしなかつた。それは

其の深い處で湧き返りつゝあつたのだ。歴史的の人物が、唐突に一方の側から他の側へ飛んで行くのではなかつた。今彼等は同じ點でぐるぐる廻つてゐるやうに見えた。往年には軍の先頭に立つて戰役進軍戰鬪を指揮して、人間の團體の運動を反射してゐた歴史的人物等が、今では其の運動を政治上及び外交上の結合や、法律や、條約で反射してゐるのであつた。

歴史上の諸人物の方の此の傾向を、歴史家らは反動と呼んでゐる。

是等の歴史的人物等に依つて演ぜられた役割を細叙するに當つて、歴史家らは彼等を自分等の所謂反動の原因であると假定して酷しく批評する。その時代の總ての名高い人々は、アレキサンドルやナポーレオンからしてマダム・ド・スタイル、フォテイ、シエリング、フイヒテ、シヤトーブリアンその他に至る迄悉く歴史家の手から最も嚴しい批評を受ける。そして彼等が進歩の爲めに働いたか、反動の爲めに働いたかに從つて、放免されるか宣告されるかするのである。

ロシアに於ても亦、歴史家の云ふ處に從へば、一の反動が其時代には起りつゝあつた。そして其の反動に對して專ら責を負ふべき人は、アレキサンドル一世であつたと云ふのである。——その同じアレキサンドルが、彼等歴史家自身の言ふ處に依れば、彼の治世の初期に於ける自由の爲めの運動、及びロシアを救つて呉れた事に對しては專ら責任がある人になつてゐるのである。

近代のロシア文學に於ては、小學生の論文作家から博識なる歴史家に至る迄、彼の治世の此の後期

の無道理なる行爲に對してアレキサンドルに石を投げやうと思はない者は一人もない。

『彼は斯う斯ういふ風にすべきであつたのだ。あの場合には、彼は善くやつたが、他の場合にはやり方が惡かつた。彼は治世の初期と、千八百十二年の間は非常に立派に行動したけれ共ポーランドに憲法を與へた事、神聖同盟を造つた事、アラクチェーフに權利を持たせた事、ガリーツインや神秘主義を奬勵した事、それから其後シシコフやフオテイを奬勵した事などでは惡い事をした。彼が實際勤務に於て軍隊に干渉したのは間違であつた。彼がセミヨノフスキー聯隊を解散したのは間違であつた。』など。

歴史家等が自ら、人間の利益になる事は何であるか、と云ふ事に關する智識を持つてゐると云ふ臆斷のもとに、アレキサンドルの中に發見する總ての過を盡く聚れば十頁位はふさいで了へるだらう。から云ふ批評は抑も何を意味するか？歴史家等がその爲めにアレキサンドルを賞揚する其の行爲、即ち彼の治世の初期に於ける自由主義と、ナポーレオンとの爭鬪とか、千八百十二年に示した確固たる態度とか、又千八百十三年の戰役とか云ふものが出て來る諸々の根元——アレキサンドルの人格を其通りに造り上げた處の生れ、育ち、及び生活などの境遇——が變て其の儘、其の爲めに歴史家等が彼を批難する行爲、即ち神聖同盟とか波蘭の憲法とか、千八百二十年以後の反動とか云ふものが出て來る根元なのではないのか。

是等の批評の中に持出された批難の實質は何であるか？それは人間の力の最高の絶頂點、いはゞ歴史の總ての光線がその眩ゆい光を其の人の上に聚注するやうな焦點に立つてゐる歴史的人物を相手取つて持出された批難である。權力とは離れ難き陰謀、譎詐、阿諛及自欺の、強い支配に從ふ人、自分の生活の如何なる刹那に於てもヨーロッパに於て起りつゝある有ゆる事件に就て責任を感ずる人、及び假作の性格ではなくして、他の有らゆる人の如く其の人自身の特質と情慾と眞善美に對する衝動を持つた、生きた被造物なる人間に對して持出された批難である。そして此の人に對して持出された批難は、彼が德行の人ではなかつたと云ふ事ではなくして、（歴史家等は此の範圍では彼に對して何等の咎むべきものを持たなかつた）五十年前に生きてゐた彼が、人間の利益とは何ぞやと云ふ意見に關して、青年の時分から勉學、即ち本を讀んだり講義を聞いたり、手帖の中へ夫れらの本や講義の筆記をする事に掛り切りになつてゐた大學教授の今日抱く所の意見と、同じでないから不可ないと云ふのである。

けれども五十年前のアレキサンドル一世が、國民の利益とは何ぞや、と云ふ意見に於て間違つてゐたと我々が假定したところで、矢張り我々は今アレキサンドルを批難してゐる歴史家等が或る時期の經過の後には、人間の利益とは何ぞやと云ふ意見に於て又間違つた事になるだらうと假定せざるを得ない。から假定する事は一層自然であつて、且つ避け難いものである。何となれば、歴史の發展を

見守つてゐると、我々は年毎に、又新しい著者が出る毎に、人間の利益とは何ぞやと云ふ意見は少し宛變つて行つて、利益だと思はれてゐた物が、十年後には有害だと認められ、さうして互ひ違ひになつて行くのを見るからである。それだけには止らない。我々は何が利益で、何が有害であるか、と云ふ事に就ての同時代の人々の意見が、互ひに全く相反してゐるのを歴史に於て見るのである。或る人人はポーランドへ憲法を與へた事や、神聖同盟などをアレキサンドルの大功業だと見做してゐるのに、又他の人々は同じ行爲をば彼の名の傷だと見てゐる。

我々は、人間の利害は奈邊に横はつてゐるかと云ふ事は出來ないのであるから、アレキサンドルやナポーレオンの閲歴に就ても、それが有利であるか、有害であるか、と云ふ事は云へないのである。若し誰かその孰れかの閲歴を好まない者がありとすれば、その人は唯、人間の利益とは何ぞや、と云ふ彼自身の狹い觀念と、それとが相容れない爲めに夫れを好まないのに過ぎないのだ。私が千八百十二年にモスクワに於ける私の父の家の保存された事、若しくはロシア軍の榮譽、若しくはペテルブルグ、又は或る他の大學の繁榮、若しくはポーランドの獨立、若しくはロシアの優越、若しくはヨーロッパの權力平衡、若しくはヨーロッパ文明の特種なる一部——進歩をば、人間の利益だと見做した處で、それでも私は、如何なる歴史的人物の活動も、斯様な目的からは離れて、もつと一般的な、そして私の把握を超越した他の目的を持つてゐたことを認容せざるを得ないのである。

けれども我々は、所謂科學なるものは總ての矛盾を妥協させる力を持ち、そして、依つて以つて歴史的人物及事件を吟味する善惡の不變の標準を持つてゐるものと想像して見よう。

我々は、アレキサンドルが全く違つた風に行動する事が出來たのだと想像して見よう。

我々は更に彼を批難し、且つ人間の運動の終局目的の智識を知つてゐると公言する人々の定めた通りに從つて、彼アレキサンドルが、彼の近代の批評家等が彼の爲めに撰んだ國民主義の、自由の、平等の、及び進歩の(其他には何もないやうに見える)其の順序書通りに從ふ事が出來たのだと假定して見よう。その順序書は出來得べきものであり、そして實際その當時に於て造られて、アレキサンドルが夫れに從つて行動し得たのだと想像して見よう。さうなると其の當時の政府の傾向に反對してゐた總ての人々の活動——歴史家等の說に據れば、善であり有利であつた活動は、何うなつたことであらう?その活動は全く無かつたに相違ない。何等の生活も無かつたに相違ない。何一つ無かつたに相違ない。

人間生活が理論に依つて導かれ得る事を承認すれば、生活の總ての可能は消滅する。

二

若し人が歴史家のするやうに、英雄達が或る目的の到達、ロシア若くはフランスの强大、或は權力の平衡、或は革命思想の傳播、或は全般的進歩の波及、或は其他何でも諸君の好きな目的への到達へ人間を導くのだと云ふ事を承認するならば、「機會(はづみ)」と「天才」との觀念を離れては、歴史上の現象を說明する事は出來なくなる。

若しも此の世紀の初めのヨーロツパ戰爭の目的がロシアの强大を來す事であつたとすれば、その目的は、それ以前の戰爭の何者も無く又外國の領土への侵入も無くして、達せられたのであらう。

若し其の目的がフランスの强大を來すことにあつたとすれば、其の目的は革命や帝國とは離れて達せられたであらう。若し其の目的が思想の傳播であつたとすれば、本の印刷の方が兵隊より一層有効に其の目的を達したに違ひない。若し其の目的が文明の進歩にあつたものとすれば、人間を殺したり、彼等の財産を破壞したりする事よりも、他にもつと有効に文明を波及させる手段が幾らもある事は、何人も容易に想像する事が出來る。

何故それが此の樣になつて來て、他の樣にならなかつたか?それは唯さうなつたからである。『機會が位置を造り、天才がそれに乘じたのだ。』と、歴史家は言つてゐる。

だが「機會」とは何だ?「天才」とは何だ?

「機會」とか「天才」とか云ふ言葉は、實際に存在する何物をも意味しない。だから定義する事は出來

ない。是等の言葉は、單に現象の理解に於ける或る階段を示すに過ぎない。私は或る現象が如何にして起つて來たかを知らない。私は知る事が出來ない事を信ずる。それ故に私は知らうとはしないで、「機會」に就て語る。私は人間の力の平均の効力とは比較にならない効力を生ずる一の力を認める。私は何うして是が出て來たかを理解しない。そして私は「天才」に就て語る。

羊の群にとつては、羊飼の爲めに毎晩特別の小屋に追込まれ、其所で養はれて他の羊の倍も太る羊は、「天才」だと思はれるに違ひない。そして毎晩その羊が普通の羊小屋に來ずに燕麥の充分にある特別の小屋に行き、そして其の同じ羊が太つて、羊肉を得る爲めに殺されると云ふ境遇が、他の羊共の心には、特種な機會の全連鎖と天才とが不思議に結合したものと見えるに違ひない。

けれども羊共は、自分等に對して爲される總ての事は、彼等の羊らしい目的を達する考で爲されるのだと云ふ事を假定するのを止めさへすれば宜い。彼等は、自分等に對して起る諸々の事件は自分等の認識以上の目的を持つかも知れないと云ふ事を承認さへすれば宜い。さうすれば彼等は直に太つた羊に對して起つた事件の內に統一と連絡とを見るであらう。縱し彼等が何の目的の爲めに彼が太らせられたかを知るやうにならなかつたとしても、尠くとも彼等は、彼に對して起つた總ての事は偶然に起つたのではない事を知るであらう。そして彼等は、「機會」の觀念にも又「天才」の觀念にも訴へるには及ばなくなるであらう。

直接の了解し得べき目的に關する智識上の自仕を悉く捨てゝ、そして吾々の認識以上のところに終局目的のある事を認める事に依つてのみ、我々は歷史的人物の生涯に於ける矛盾なき全體を見る事が出來る。その時こそ彼等に依つて起される、人間の普通力とは比較にならぬ効果の原因が、我々に啓示される。そして我々は「機會」とか「天才」とか云ふ言葉の必要を持たなくなる。

我々は唯、ヨーロッパ諸國民の動亂の目的は、我々の智識を超越してゐると云ふ事や、又我々は最初フランスで行はれ、それからイタリー、次にはアフリカで、プルシヤで、アウスタリアで、スペインで、又ロシアで行はれた主に虐殺から成立してゐる事實のみを知つてゐると云ふ事や、又西から東へ、東から西へと推移した運動が、夫れらの事件の精髓及目的を成してゐると云ふ事を承認しさへすれば宜いのだ。さうすれば我々は、ナポーレオンやアレキサンドルの性格の裡に異常なる或る者——「天才」——を見るには及ばぬであらう。又我々は、それらの人々を他の總ての人々から兎も角も違つた者として考へる事は實際出來なくなるであらう。そして夫れらの人々を、その様な人々にした夫れらの小さい諸事件は「機會」として說明せねばならぬどころか、それらは總て避け難い事であつた事が明になるであらう。

を知らうとする要求を捨てれば、我々は我々が或る植物の產する花や種よりも一層その植物に適切な花や種を發明する事が出來ないのと全く同樣に、その人々が演出すべき運命を持つた役割と極微の

點に至る迄全く合一した夫れ〳〵の過去を持つ同じ人間が何處にも二人あらうとは想像する事が出來ないのを明に認めるであらう。

三

現世紀の初期のヨーロッパの事件の根抵的な、本質的に有意義な特色は、西から東へ、又東から西へと向つたヨーロッパ諸國民の團體の軍事的行進——それを彼等は爲し遂げたのだが——を爲し遂げ得んが爲めには次の如き事が必要であつた。(一)彼等は東方の軍事的團隊の抵抗に堪へ得るだけの大きさの軍事的團體を結ぶべき事。(二)彼等は總て、彼等の定つた傳套と習慣とを棄つべき事。(三)彼等はその運動に伴ふ總ての譎詐、奪掠及虐殺の犯罪を、彼の名及び彼等の名に於て正しいものとする事の出來る一人の人を頭に戴くべき事。

で、フランス革命から出發して見ると、不充分な大きさの其古い團體は壞れる。古い習慣や傳套が破壞される。一歩一歩一の團體が、新しい大きさ、新しい習慣、新しい傳套を造り上げる。そして來るべき運動の頭に立つて、成さるべき筈の事柄の全責任を引受けべき人が用意される。

何等の確心もなく、何等の習慣もなく、何等の傳套もなく、何等の名もなく、又フランス人でさへない男が、機會の極めて不思議な氣紛れに依つて、フランスの湧立つてゐる多くの黨派の上に身を上げる。そして夫れらの黨派の何れにも屬さずして優越なる位置に進む。

彼の同僚等の無能や、彼の反對者等の弱くして下らない事や、その男の譎詐の卒直や、華々しさや、自信の強い狷介な事などが彼を軍隊の頭に擧げる。

イタリー軍の兵士の華々しい個人的良質や、彼の敵の戰を欲せぬ事や、彼の兒供らしい傲慢や自惚が彼に軍事上の榮譽を得させる。無數の所謂「機會」が至る處に彼と伴ふ。彼がフランス執政內閣の氣に入らぬ事になつたのが、反て彼の利益となる。彼の爲めに天から定められてゐた路を避けやうとする彼の努力は成功しない。彼はロシア軍に受け入られないので、トルコに於ける其の計畫は水泡に歸した。

イタリー戰爭の間彼は幾度も破滅の淵に立つた。そして思ひも寄らぬ事で助けられた。ロシアの軍隊——彼の榮譽を破壞し得たその軍隊——は樣々な外交上の考慮の爲めに、彼がそこに居る間はヨーロッパには這入れなかつた。

彼がイタリーから歸ると、パリーの政府は、政府にある總ての人々が何うしても抹殺され、無力にされざるを得ないやうな崩解の過程にあつた。するとその危險な位置から、彼の遁路が、目的もない根據もないアフリカ遠征と云ふ形で出て來る。又同じ所謂「機會」になる諸々の事情が彼に伴ふ、蠕攻

不落のモルタが一彈を發する事なくして降伏する。最も下手に考へた方法が美事に成功に終る。その後になつては一艘の小舟すら逃さなかつた敵の艦隊が、此の時は彼の全軍を逸して了ふ。アフリカでは亂暴が、引續き殆んど何の武裝もしてゐない住民に對して行はれる。そして、さう云ふ暴虐を行つた人々や、殊に彼等の將校が、それは氣高く榮譽ある事であつて、シーザアやマケドンのアレキサンダアのやうな行爲であつて、立派な事だと自ら思ふ樣にする。

自分が爲る事は何一つ間違つた事とは思はず、有らゆる罪惡に對して榮譽を感ずる事や、その上に思ひも及ばぬ超自然的の價値を賦與する事等で成立する「榮譽」と「偉大」の理想——此の男及び彼に附隨する人々を導くべき運命のある其の理想が、アフリカでは大規模で造り上げられた。彼は何事をしても成功する。疫病が彼には觸れない。彼が捕虜を虐殺しても、彼の惡事としては記憶されない。彼が不幸に陷つてゐる戰友を捨てゝ、アフリカから子供らしく向ふ見ずにした理由のない陋劣な出發も、彼には非常な利益になる。そして又も敵の艦隊が二度まで手の隙間から彼を逃して了ふ。罪惡の成功に依つて全く醉ひ切つて了つて、自分の務める役割を直にも務めやうとして、全く何の方策もなく彼がパリーに着いた刹那に、一年前なら其の沒落の中へ或は彼を捲き込んだかも知れなかつた共和政府の瓦解が、今や全く絶頂に達してゐた。そして何の黨派にも屬しなかつた彼の出現が今は唯彼の出世の助けになるばかりであつた。

彼は何等の方策をも持つてゐない。彼は有らゆる者を恐れてゐる。けれども總ての黨派が彼に縋り附いて、其の援助を懇願した。

獨り彼のみが——彼がイタリーやエジプトで獲た榮譽と偉大の理想を以て、自己崇拜の狂熱を以て、罪惡に於ける傲慢と虚僞に於ける率直を以て——獨り彼のみが爲し遂げらるべき事柄を正しいものとする事が出來る。

彼は、彼を待つてゐる場所にとつては必要である。それだから、殆ど自分の意志とは離れて、自分は不決定で、方策もなく、失策を犯すにも拘らず、權力を摑まうとする一味徒黨の中へ引込まれ、そして其の陰謀は成功を以て飾られる。彼は治者等の集會へ引き出される。彼は自分の身が危險であるのを信じて、驚いて逃げ出さうとする。僞つて氣絶する。彼の破滅となるやうな極めて無意味な事を言ふ。けれども且ては自負心と辨別力の强かつたフランスの治者等は、今は自分等の役目が終つた事を感じて、彼よりも一層狼狽してゐる位である、で、自分等の權力を保存し彼を叩き潰す爲めに言はなければならない筈の言葉を言ひ得ない。

「機會（はずみ）」、「機會」の何百萬が彼に權力を與へる。そして總ての人が一致同盟したかのやうに、相結んで、其の權力を確固にする。「機會」になるべき總ての事情が、彼の前に萎縮するやうなフランスの治者等の性格を造る。「機會」が彼の權威を承認するボオル一世の性格を造る。「機會」が、彼を倒さうとす

る陰謀をして彼の權力をグラツカせずに、反てそれを強めるやうにする。「機會」が、ダンヂアン公を彼の手に投げ込む、そして偶然に公を殺すやうに彼に迫る。そこで彼は力を持つてゐるからして正義は自分の方にあるのだと云ふ事を、總ての中で最も強い議論を以て群集に確心させる。「機會」が彼の全力を盡したイギリス征伐——それは確に彼を滅亡に導くであらうと思はれる……を彼に實行させずに、會まアウスタリア軍を率ゐたマツクを襲ひ、戰はずして之を降すと云ふ如き事を起させる。「機會」と「天才」とがアウステルリツに於て勝利を彼に與へる。又「機會」のお蔭で、總ての人々、フランス人ばかりでなく成就せらるべき事件に全く加はらなかつたイギリス以外のヨーロツパの總ての國々が、彼の罪惡に對する古い怖や憎みを忘れて、今では夫れらの罪惡に依つて彼が獲た權力を承認し、そして彼の偉大と榮譽の理想を受け入れる。その理想は、誰にでも良い合理的な何者かであるやうに見える。

彼等の前に置かれた大なる運動に對して訓練し準備するかのやうに、西の軍勢は幾度も——千八百五年、千八百六年、千八百七年及千八百九年に——突進を東へ試み、益々強くなり、益々人數が增へた。千八百十一年には、フランスで編成せられた人々の團體が中央ヨーロツパの人民から出て來た巨大な團體と結合する。大群集の數が增せば增す程その運動の頭に立つ人の、その運動を正しとする力は、段々多くの力を集める。その大運動に先立つ豫備時代の十年の間に、此の男はヨーロツパの王冠を戴

ける總ての人々と關係を就ける。彼の爲めに裸にされた世界の帝王等は、榮譽と偉大に關する無意味のナポーレオン的な理想に對して、何等の合理的な理想を對抗し得ない。彼等は自分等の下らないものであることを互ひに爭つて彼に示さうとする。プルシヤの王は此の偉人の寵愛を得る爲めに自分の妻を使に遣る。アウストリアの皇帝はカイゼルの娘をその寢床へとつて呉れるのを恩惠だと考へる。人民の信仰の守護者たる法王は、此の偉人の出世を助ける爲めに宗教を使ふ。ナポレオンは、自分が務める役割の爲めに自ら支度すると云ふよりは、其の周圍の總ての者が彼を導いて、爲されつゝある事及爲さるべき事柄の責任を彼が負ふやうにする。苟くも彼のやつた行爲や罪惡や卑劣な虛僞にして、直ぐ彼の周圍の人々の唇から偉大なる行爲として云ひ表されないものは一つも無い。ドイツ人がナポーレオンの名譽の爲めに考へる事の出來た最も適當の祝賀會は、エナ及びアウエルスタツトの祝勝會であつた。彼が偉大である許りでなく、彼の祖先、彼の兄弟、彼の繼子、彼の義兄弟も亦偉大であるやうになされた。彼の準備が出來ると、彼の軍勢も亦支度が出來る。

侵入軍は東へと流れて、それの最後の終局點——モスクワに着く。その古都が掠られる。ロシア軍はアウステルリツからワグラムに到る先きの戰爭で、敵對した兩軍が受けた損害よりも一層多くの損害を受ける。けれども俄に、之れ迄彼の運命で定つてゐた終局地へと彼を、不斷に連續せる成功を以

て首尾一貫して導いて來たその「機會」と「天才」との代りに、それとは反對の種類の、ボロヂイノで引いた風からモスクワに火を點けた火花に至る迄の「機會」となるべき事情が無數に起る。そして「天才」の代りに歷史中に類例のない馬鹿げた事と陋劣な事とが示された。

侵入軍は遁げ出し、引返して又遁げる。そして總ての「機會」が今は一樣に彼の爲めとならずして、彼に背く。

それから今度は、東から西への反對の運動が、それに先立つた西から東への運動と非常に似寄つた風で續く。東方への大運動に先立つて千八百五年、千八百七年及千八百九年にあつたのと同じやうな試驗的の運動があつた。そこには前と同じく總ての者が無數の一團體に結合した。同じやうに中央ヨーロツパの諸々の人民が此の運動に加つた。そして同じやうに中頃で躊躇し、そして終局地が近附くに隨つて同じやうに速力が加つた。

最も先方の終局地たるパリーに着いた。ナポーレオンの政府と軍隊とは崩れた。ナポーレオン其人も最早や何でも無いものである。總て彼の行爲は明に陋劣である。けれども亦說明し難き「機會」が起つて來る。聯合軍はナポーレオンを嫌ふ、それは彼に彼等の總ての困却の原因を認めるからだ。權力とを剝奪され、詐僞と奸惡に就て罪せられて、彼は、彼等聯合等の爲めに彼が十年前にあつた通り、又一年後にあつた通り——法律の範圍外の盜賊と見らるべきであつたのだ。けれども「機會」の或る不思

議の氣紛れで誰もそれを認めない。彼の仕事はまだ終つたのではない。十年前又は一年後には、法律外の惡人と見做された此の男が、聯合軍の爲めにフランスから二日旅程の島へ送られ、そして何か聯合軍の爲めになる事でもした報酬を受けるかのやうに、その島は彼の領地として與へられ、近衞兵と何百萬かの金も與へられた。

四

諸國民の間の動搖は靜まり初める。大暴風雨の波は靜まり初め、そして渦卷が、靜かになつた海面の其所此所で出來初め、そこには外交家等が、その平靜は自分等のした仕事だと想像しながら、忙しく働いてゐる。

けれど忽ち靜かな海が又激動する。外交家等は彼等、即ち彼等の不和が新しい動搖の原因だと想像する。彼等は自分等の君主等の間に戰が起るだらうと豫期する。事態は解決し難く見へる。が彼等が起りつゝあると感じてゐる嵐は彼等の豫期してゐた方面からは來ない。それは又同じ出發點——パリーから起つて來る。西方への運動の最後の逆流が續く——その逆流は一見解き難く見える外交上の難問題を解決し、そして其の時代の軍事上の不安に終結を就けるものであつた。

フランスを荒廢させた男が、何の講策もなく一人の兵卒も持たずに唯一人でフランスへ歸る。どんな警察官でも一人で彼を捕縛する事が出來る。けれど機會の不思議な氣紛れで誰も彼を捕へない。反て皆が一日前までは呪てゐ、そして又一月と經たぬ內に呪ふ筈であつた此の男を熱心に迎へる。その男は劇を終結させる最後の幕にはなくてならぬのである。

その幕が演ぜられる。その最後の役が演ぜられる。役者は衣裳を脫ぎ、白粉や紅紛を洗ひ去る樣に命ぜられる。彼は最早や必要がないのであらう。

そして數年の間此の男は自分の島に獨りで居て、自分自身の爲めに憐れな喜劇を演じ、陰謀を廻らし、嘘をつき、辨明が少しも要らぬ時になつて、自分の行爲を辨明する。そして人間が力だと思てゐたものは、神の見えざる手が夫れを導く段になると、如何なる物であるかを全世界に示す。

劇が終つた時に、舞臺監督は其人形を裸にして見せる。

『お前達が信じてゐた者を見ろ。是れだぞ。お前達を感動させた者は之れではなくて、實は俺である事がお前達に分つたか。』

けれど運動の力の爲めに盲目にされて、人間は長い間夫れを認める事が出來なかつた。

それよりも以上の連絡と避け難いことゝが、東から西への逆運動の頭に立てゐた人物たるアレキサンドル一世の一生に於て見られるのである。

他の何人にも勝つて、東より西への運動の頭に立つべき人にとつては何が必要であつたか？

正義の觀念、ヨーロツパの事態に對する利害の觀念、それは些々たる利害に依つて曖昧にされない、立ち離れた利害觀念、彼の同輩——當時の帝王國等——に勝つた道德的優越を必要とした。又ナポレオンに對する個人的の恨を有つ事を必要とした。そして凡てそれがアレキサンドルの中には見られるのである。それらのものは悉く彼の前生涯の無數の所謂「機會」となる諸々の事情に依つて、前以て造り上げられてゐたのだ。彼の受けた教育や、治世の初めの自由主義や周圍の顧問等や、アウステルリツツやチルシツトやエルフルトに依つて造り上げられてゐた。

國を護る爲めの戰爭の間は此人は無活動で居る。彼は必要ではない。けれど一般のヨーロツパ戰爭が避け難いものとなるや否や、與へられたる瞬間に於て、彼は自分の居るべき場所に立つ。そしてヨーロツパの諸國民を合同させて、それを終局の目的地へ導く。

その終局へ達する。千八百十五年の最後の戰爭の後、アレキサンドルは人間の權力の達し得べき最高の絕頂に己を見出す。彼はそれを如何やうに用ゆるか？

ナポーレオンが、彼の流謫の地に於て、若し彼が權力を有つてゐたら人間の上に注ぐのであつたと云ふ祝福の、子供らしい虛僞の計畫を組立てゝゐる間に、ヨーロツパを平和にした人であり、又青年時代から民福に向ての外の何物にも努力しなかつた人であり、更に又自分の國の自由の爲めの改革の

最初の擁護者であつたアレキサンドルの方は、自分こそ人間の用ゆべき最大の權力を有つてゐる様に見え、且つそれ故に人民に對して利益になる事を爲し得る様に見える時になつて、自分の仕事は終つた事を感じた。そして神の手が上に置かれた事を感じた。そこで其の權力に似たものゝ虚無なる事を認めて、それに背を向け、それを蔑視すべき人々、彼が蔑視してゐた人々の手に委ねて、たゞ之だけを言ふ事が出來た。

『私達にではなく、私達にではなく、たゞ爾の御名にまで！私は卿等の凡てと同じく人間である。私には人間のやうに生活させて呉れ。そして私の魂や神の事を考へさせて呉れ。』

丁度太陽も、亦エーテルの各原子も、それ自身に於て完全な一世界であると同時に、余りに廣大であるが爲めに人間には量り知られぬ全體の一部分に過ぎないのと同じ様に、どの個性も皆夫れ自身の裡に目的を持ち、然も夫れらを人間には測る事の出來ない全般的の目的の爲めになる様に持つてゐる。

花にとまる蜜蜂が子供を螫した。すると子供は蜜蜂を怖れ、そして蜜蜂の目的は人を螫すのにあると云ふ。詩人は花の蕚から蜜を吸ふ蜜蜂を嘆美する。そして蜜蜂の目的は花の仙酒を吸ふにあると云ふ。養蜂者は蜜蜂が花粉を聚めて蜂の巢へ持つて來るのを見て、蜜蜂の目的は蜜を聚める事にあると云ふ。もつと正密に群の生活を研究した他の養蜂者は蜜蜂は、兒を育て女王を育てる爲めに蜜を聚めるのであつて、蜜蜂の目的は種族の永續にあるのだと云ふ。植物學者は花粉を持つて飛んで行く蜜蜂が雌蕊に受胎するのを見て、此の中に蜜蜂の目的を見る。最う一人は植物の雜成を見て、蜜蜂は又其目的にも貢獻するのだと思ふ。そして蜜蜂の目的は、夫れだと云ふかも知れない。が蜜蜂の終局の目的は、それにも是れにも盡てゐない。又人間の智力が發見し得る第三の目的にも盡きてゐない。人智がさう云ふ目的を發見しようと段々高く登れば登る程、終局目的は人智の到達し得られない處にあることが益〻明になる。

人間が達し得られる總ては、蜜蜂の生活と、生活の他の諸々の表現との類似の觀察に止る。そして歷史的人物及國民等の終局目的の場合も、それと同じ事が眞理である。

五

千八百十三年に起つたナターシヤのペズウホフとの結婚は、舊いラストフ家に於ける最後の幸福な事件であつた。伯爵イリヤ・アンドレーキッチは其の年に死んだ。そして其の様な場合には何時も在り勝ちの通り、父親の死と共に家は潰れて了つた。

前の年の事件、モスクワの燒けた事と町からの遁走、アンドレー公爵の死とナターシヤの絶望、ペ

エチヤの死と伯爵夫人の悲嘆などが交々老伯爵の頭上に落ちて來た。彼は總て是等の事件の意義を理解してゐないやうに見え、又それを理解する事は自分には出來ないやうに感じてゐるらしかつた。そして、たとへて言へば、彼は自分の最後を遂げさせるやうな新な打撃を豫期し、且つそれを求めてゐるかのやうに、嵐に向て其の年寄つた頭を下げてみた。彼は交々恐れたり、顫勤したり、それから又不自然に燥いでみたり、活氣を帶びたりするのであつた。

ナターシヤの結婚は一寸の間、その外形上の側に於て彼の心を占領した。彼はその祝の爲めの晝餐會や夜食會の取極をしたり、又明に陽氣にしてゐるやうに骨折つてゐた。が、其の快活さは以前のやうに傳染的のものではなく、反て、彼を知り又彼を好いてゐた人々からの同情を喚起すやうなものであつた。

ピエール夫婦が發つた後で、彼はげつそり弱つて、氣が昏するのを卽ち初めた。二三日經つと彼は病氣になつて、どつと床に就いて了つた。醫者が保證したにも拘らず、彼は病氣になつた最初の日から決して再び起つ事は出來ない事を知つた。まるまる二週間の間伯爵夫人は彼の枕元の低い椅子に座つた切りで、一度も自分の衣服を脫がなかつた。彼女が彼に藥を飮ませる度毎に、彼は默つて泣きながら彼女の手に接吻した。最後の日には、獻祝しながら、その財產を使ひ果して了つた事に對して、妻の許しと又その時不在であつた息子の許しを乞ふた。その事は彼の良心を苦めた主なる罪障であつ

たのだ。贖罪式や、最後の塗膏式を受けてから彼は靜に死んだ。そして次の日、知人が群集をなして故人に對する尊敬の、最後の義務を果す爲めに來て、ラストフ家の借家に一杯になつた。彼の家で屢御馳走になつたり、舞踏したり、そして幾度も彼の錢を使ふのを笑つた事のある總てそれらの知人等は、今は後悔と自分を責める心との皆同じ內部の感情を以て、彼等自身を辯明したさうに斯う言つた。『さうだ。彼は何であつたにしろ、兎に角立派な人であつた。近頃此の樣な人にとんと遭はない……』……それに誰だつて此の人位の弱點を持たないものか……』

伯爵が俄かに死んだのは、丁度彼の財產が最早や一年經てば何うなるものか分らない位、とても滅茶滅茶になつてゐた時だ。

父親の死んだ報知がニコライの許に屆いた時に、彼はパリイなるロシア軍と共に居た。彼は直ちに解職を願出た。そして其の許を俟たずに、暇を貰つてモスクワへ行つた。伯爵が死んでから一月經たぬ內に、財產の狀態が全く明かにされた。そして誰も思ひ掛けなかつた極めて多くの、種々の小さい負債の總額が皆を驚かした。負債は財產の現在高の二倍よりも多かつた。

友人や親類の者は、遺產の相續を拒むやうにニコライに忠告した。けれどもニコライはその樣な拒絕を、父親の立派な記憶の上の汚れだと見做した。それ故彼はそんな遺り口を取らずに、負債を拂ふ義務と共に遺產を引受けた。

老伯爵の、呑氣な人の好い、漠然として然も力強い勢力の爲めに、彼の生きてゐる間食止められて、隨分永く默つてゐた債權者等は、皆直ぐにニコライを攻め立てた。世間に屢々ある通り、債權者等の間には誰が一番先に拂つて貰へるかと云ふ競爭の樣なものがあつた。そしてミチエンカその他のやうな、負債に對する支拂としてではなく唯贈物として貰つた約束手形を持てゐた人々が、反て債權者となつて一番酷しく催促するのであつた。彼等はニコライに安靜を與へず、少しの息をもつかせなかつた。そして(彼等は實際老伯爵の爲めに金を失ふたとしても)その損害に對する當の責任者であつた老伯爵に對しては憐み示した人々が、今は彼等との關係だけでは明白に何の罪もない、のみならず自ら進んで彼等に拂はふとしてゐる此の若い相續者を迫害することに於ては、少しも假酌しなかつた。

ニコライが訴へた手段は一も成功しなかつた。財産はその半分の價格で競賣に附して賣られた。そして負債の半分はまだ拂はれずに殘てゐた。ニコライは、自分の義弟のベズウホフの提供した三萬留を借りた。そして彼が眞の義務だと認めた負債をそれだけ拂つた。そして債權者が威嚇したやうに、殘りの負債の爲めに牢屋へ投げ込まれるのを避ける爲めに、彼は最う一度官途に就いた。

軍隊に居れば、次の陞進期には彼は佐官になれるのであつたが、その軍隊に復歸する事は問題にして居なかつた。と云ふのは彼の母が、今では彼女の人生に於ける唯一つの縋り所として其の息子に縋り附いて居たからである。そして前から彼を知てゐる知人の仲間の中に、モスクワには居たくなかつた

には拘らず、又役人の勤は好かなかつたに拘らず、彼はモスクワで官途に就き、そして好きな軍服を脫ぎ捨てゝ、母親やソーニヤと一緒にシウツエヴオイ・ヴラゾークの小さい家に住む事にした。

ナターシヤとピエールとは、其頃ペテルブルグで暮して居た。そしてニコライの位置に就いては兪り明瞭とした事を知らなかつた。義弟から金を借りてからは、ニコライは自分の貧乏に惱んでゐる有樣を彼に對して極力匿さうとした。彼は千二百留の俸給だけで自分と母親とソーニヤとの生計を立て、その上母親には自分達の貧乏に氣が附かせない樣に暮して行かねばならなかつた、彼の位置は一層困難になつた。伯爵夫人は子供の時分から習慣になつてゐた贅澤な周圍なしに生活が出來ようとは考へられなかつた。そして自分の子供が何れ程までに困つてゐるかと云ふ事には一向氣がつかずに、持つてゐない馬車で友達を迎へにやれとか、高價な甘い物を自分の爲めに買へとか、或は葡萄酒を息子の爲めに買へとか、或はナターシヤかソーニヤか、又はニコライ自身が驚くやうな贈物を買ふ金を寄れなどゝ言ひ張るのであつた。

ソーニヤは家事萬端を引受け、叔母の世話をし、そして大きい聲で本を讀んでやつたり、その氣紛れや、自分に對する心の底の憎みなどを堪えて、ニコライを助けて自分達のひどく貧乏になつた有樣を老伯爵夫人に隱して居た。ニコライはソーニヤが彼の母の爲めにして呉れた一切の事に對して、自分では恩返しの出來ぬ感謝の負債を彼女に負うてゐると獨りで感じた。彼は、彼女の忍耐と忠實なのに感

服した。けれども彼は、ソーニヤからは離れてゐるやうにしてゐた。

心の底で、彼は彼女に對して餘りに完全で、何處にも批の打處のないのを恨のやうに感じて居るらしかつた。彼女は人々に尊ばれる様な總ての善良な資質を具へてゐた。が、彼をして自分を戀させる様な物は殆んど持てゐなかつた。で彼は、彼女を尊べば尊ぶ程彼女を戀しない事を感じた。彼は、彼女が彼の自由を彼に與へると云ふ手紙を寄越した時の言葉通りに彼女の考を取つてゐた。そして今彼は、彼等の間にあつた事柄は、永い、永い以前に忘れられて了ひ、最早やどんな境遇の下にも決して復活する事はあり得ないものであるかのやうに、ソーニヤに對して振舞つてゐた。

ニコライの境遇は、段々悪くなつて行くのであつた。俸給の中から貯めて行かうと云ふ彼の望は、空な夢である事が分つて來た。幾らかづゝ貯蓄する所か、母親の入用を滿足させる爲めに幾らかづゝ小さい借金が出來て行く位であつた。今の境遇から遁れる方法はなさゝうに見えた。彼の女の親類達が勸めた金持の跡取娘と結婚すると云ふ考は、彼には非道く厭な事であつた。其の困難を脫する唯一の解決——彼の母親の死——は決して彼の頭には這入つて來なかつた。彼は何ものをも欲しなかつた。又何物をも望まなかつた。そして心の底で、自分の境遇を愚痴も云はずに堪えてゐる事に嚴しい、憂鬱な滿足を覺えてゐた。彼は自分に同情して助力しようと云つて來る古い知人達を避けるやうにした。又有らゆる種類の饗應や娯樂を避けた。そして家に居る時ですら、ただ母親とペーシェンスの勝負をするとか、默つて室内を歩くとか、煙草をパイプで續け樣に吸ふとかする他には、何もしなかつた。彼は陰鬱な氣分を骨折つて續けるやうに見えたが、それのみが其の位置に堪えさせるのであつた。

六

冬の初めに公爵令嬢マリヤはモスクワに着いた。町の噂から、彼女はラストフ家の境遇や、所謂『息子が母親の爲めに自分を犧牲に供してゐる』樣子を聽いた。『あの人は屹度さう云ふ人だと私も思てゐた。』と公爵令嬢マリヤはその事の中にニコライに對する彼女の戀の喜ばしい確定を見出して獨言した。その家族全體との——殆んど其の内の一人としてまで——自分の親しい關係を想出して、彼女は彼等を訪問するのが自分の義務だと思つた。けれどヴオロネーヂに於けるニコライと自分との位置を考へて、彼女はさうする事を怖れてゐた。けれどもモスクワに着いてから數週間すると、彼女はラストフ家の人々に逢ひに行つた。

ニコライが彼女を迎へた最初の人であつた。と云ふのは彼の部屋を通らずには伯爵夫人の部屋に行く事が出來なかつたからだ。彼が彼女を初めて見た時、公爵令嬢マリヤが彼の顏に見られるだらうと望んでゐた喜びの表情の代りに、彼は冷たい、ツントした、傲然とした、彼女が之れ迄見た事もない

顔附をして彼女に會つた。ニコライは彼女の健康を尋ね、母親の處に彼女を案内して、五分許りそこに居てから、部屋を出て行つた。

公爵令嬢マリヤが伯爵夫人に別れて來ると、ニコライは又彼女を迎へて、如何にも儀式張つたツンとした樣子で彼女を廣間へ送り出した。彼は、伯爵夫人の健康に關する彼女の言葉には返事もしなかつた。『それが、あなたにとつて何だ？私の事なんど關はずにをいて貰ひたい。』と、彼の表情が云ふやうに見えた。

『そして何故あの女は此處へ入り込んで來たのだらう？何の用があるんだらう？俺はあんな婦人や、あんな禮儀なんぞは一切我慢が出來ないのだ。』と、彼は公爵令嬢の馬車が家から駈け去つて了つてから、如何にも癪で堪らぬらしい樣子で、ソーニヤの前で大きい聲で言つた。

『え、何だつてそんな事を仰言るのよ。ニコラス。』とソーニヤはその嬉しさを隱し切れないで言つた。『あの方はほんとに親切な方よ。母ア樣はあの方が大變お好なのよ。』

ニコライは何とも答へなかつた。そして公爵令嬢マリヤの事は、その上何も云ふのを好まなかつた。が彼女が尋ねて來てからと云ふものは、伯爵老夫人は毎日幾度か彼女の事を云つた。

彼女は、マリヤの事を賞め立てた。急に是非彼女を訪問しろと云つて止まなかつた。もつと彼女に逢ひたいと云つた。けれども彼女はマリヤの事を話して居る時にはいつも氣嫌が惡かつた。

ニコライは、母が公爵令嬢マリヤの事を話す時には何も云はない樣にして居た、けれど彼の默つてゐる事が彼女を焦れさせた。

『あの子はほんとに好い、ちやんとした娘だ。』と、彼女は言ひ言ひした。『是非訪ねて往つてお上げなさいよ。何にしてもお前は誰かと附合はなければ不可ません。私達だけでは怠屈でせう。』

『でも私は、お母樣、些ともそんな事はないのです。』

『まア可笑しいぢやないかね。お前は前には人を訪ねるのが好だつたのに、此頃はそれが厭におなりなのかい、何だか變ね。今怠屈してゐると思ふと、すぐ又誰にも逢ひたくなくなるんですね。』

『いや、私は決して怠屈だと言つた事はありません。』

『まア、お前は、あの人を訪ねる氣さへないと云ふのですね。あれは本當に好い娘ですよ。そしてお前は之れ迄いつでもあの子が好きだつたぢやないか。それだのに今は不意に如何かした譯で厭になつたんですね。何も彼も私には內密なのね。』

『そんな事はありませんよ。お母樣。』

『何も私が何か厭な事でもお前に頼むのではあるまいし、唯馬車で訪問のお返しだけして來て下さいと頼むだけの事ぢやありませんか。ね、それが禮儀と云ふものなのですよ、まアそんなものだと思ひますね……何卒さうして下さいよ。お前は現在の母親の私に何か內密でお居での樣だから、私何も

最うそれより餘計なおせつかいをしやしまいと思つた。

『ですが、あなたが行けと仰言るなら私は行きます。』

『私には何うでも宜い事なんですよ。けれどもお前の爲めにさうして貰ひたいんですよ。』

ニコライは嘆息した。そして口髯を噛み、加留多を配つて、母親の注意を外の問題に轉じさせようとした。

翌日も、それから三日目にも、同じ話が度々繰り返へされた。

ラストフ家を訪問して、ニコライから思掛けなく冷やかに迎へられてから、公爵令嬢マリヤは、自分が訪問する最初の人でありたくないと思つたのは間違ではなかつた事を知つた。

『全く私の豫期してゐた通りであつた。』と、彼女は自分の自尊心を助けに喚び出して獨言した。「私はあの人の事なんぞ何とも思てやしない。たゞ老夫人にお逢ひし度いと思つただけなんだわ。あの方はいつも私に親切にして下さつたし、私はあの方には色々のことでお世話になつてゐるのだから。」

けれど彼女は、さう云ふ回想では自分を落ち着かせる事は出來なかつた。訪問をした事を思ふと後悔に近いやうな感じが彼女をいら〳〵させた。彼女は最早やラストフ家を訪問せずに、その事は皆忘れて了はふと堅く決心したのだけれど、いつも自分は不安定な位置に居るやうな氣がした。で、さう自分の心を惱すものは何だらうか、と自ら問うて見た。と、それは自分とラストフとの關係である事

を認めない譯にはゆかなかつた。彼の冷やかな馬鹿丁寧な調子は、彼女に對する彼の感情から出て來たものではなかつた。(それに就ては彼女は確信して居た)そして、その調子は何物かを下に隱して居た。そして何物かは何であつたか、彼女はそれを明瞭に見たいと思つた。そして其の時までは落ち着いた氣にはなれないやうに思つた。

冬の中頃に、彼女は甥のお稽古を監督しながら稽古部屋に座つてゐた。すると下婢がラストフが下に來て居ると取次いだ。自分の秘密を表はさず、些も間誤附く樣子を見せまいと確く決心して、彼女はブリアンヌ嬢を呼出し、それと一緒に客間へ這入つた。

ニコライの顏を一目見ると、彼女には唯彼が禮儀上の義務を果たしに來たのだと云ふ事が分つた。で、彼女は、彼が彼女に對してとる調子に合せて行かうと決心した。

彼等は伯爵夫人の健康に關する事や、相方共知て居る知人達の事や、戰の最近の報知の事などを話合つた。そして禮儀の上から夫れだけは居なければならぬ十分と云ふものが過ぎて了ふと、ニコライは立つて暇乞をしようとした。

ブリアンヌ嬢の助けを得て、公爵令嬢マリヤは話をなかなか甘く續けた。けれど極く最後の刹那、丁度ニコライが立ち上つた時には、彼女は自分に何の興味もない談話にひどく疲れ果てゝ何故人生に於ては自分には恁んなに僅かの喜びしか與へられないのだらうと深く考へ込んで居たものだから、凝

と動かずに座つて、凉しい眼で前を眞直に睜めてゐて、ニコライが立ち上るのに氣が附かなかつた。

ニコライは彼女を見た。そして彼女のうつかりして居る樣子に氣が附いた樣には見えないやうにしようと思つて、ブリアンヌ嬢に二言三言云つて、それから又公爵令嬢の方を見た。彼女は靜かに同じ姿勢で座つて居た。其の軟かな顏の上には苦痛の色があつた。彼は不意に、彼女に對して氣の毒に感じた。そして彼女の顏に認めた悲哀の原因は自分であるかも知れぬと朧氣ながら氣が附いた。彼は彼女を助けやうと思ひ、何か彼女の氣持を好くする事を云はふと思つた。けれど何う言つたものか分らなかつた。

『左樣なら、』と、彼は言つた。彼女はハツト氣が附いて、顏を赧くして深い溜息をついた。

『あら、どうも失禮致しました。』と、彼女は眠りから覺めたやうに言つた。『最うお歸りなんですか。伯爵。では、左樣なら！あゝ伯爵夫人に上げるクッションは？』

『一寸お待ち下さい。私が取つて參りますから、』と、ブリアンヌ嬢が言つて部屋を出て行つた。

彼等は、二人とも默つて時々顏を見合せて居た。

『さやう。お嬢樣、』と、ニコライは到頭悲しさうな笑顏をして言つた。『あれからさう永くは經つてゐませんね。けれども、あなたにボグチヤロウオで初めてお眼に掛つてから以來隨分いろいろの事が起りました。吾々は皆困てゐました、けれども、あの時分を歸つて來させる事が出來ると云ふなら、私は今持て居る物を隨分捨てても惜しくないと思ひますよ。……でも最うそれを歸つて來させることは何うしても出來ませんね。』

公爵令嬢マリヤは、彼がさう言つて居る間、輝いた眼で凝と彼を見て居た。彼女は、自分に對する彼の感情を明にするだらうと思はれるやうな彼の言葉の、隱れた意味を判斷しやうと努めてゐるらしかつた。

『えゝ、さうですわね。』と、彼女は言つた。『ですけれど、あなたは少しも過去を後悔なさる必要はないぢやありませんか、伯爵。今のあなたの御生活が私の考へます通りのものなら、あなたは何時も滿足して居らつしやるでせう。それは今あなたが爲すつて居らつしやる自己犧牲……』

『あなたのお賞め言葉を受ける事は出來ないのです。』と、ニコライは慌しく遮つた。『その反對に、私はいつも自分を責めてゐるのです。いや、面白くもない、心の浮かない問題です。』

そして又ツンとした冷たい表情が、彼の顏に歸つて來た。けれど公爵令嬢マリヤは、彼女が知り且つ愛した男を再び彼の中に認めた。そして彼女が今話して居るのは唯其の男に對してであつた。

『あなたは、私が斯う云ふのを許して下さるでせうと私は思て居ました。』と、彼女は言つた。『私はあなたとは大變親しいお友達でした……それから、あなたの御家族ともね。ですから私はあなたは私の同情をおせつかいだとはお思ひなさるまいと思て居りましたの。でも私思ひ違ひをして居ました。』と、

彼女は言つた。其の聲は俄かに顫へた。『何故だか分りませんけれど、』と、彼女は氣を取直して言葉を續けた。『あなたは今の様ではありませんでした。で……』

『何故だかと云ふ理由は實に澤山あります。』(彼は何故と云ふ言葉に特に力を入れた。)『有り難う、お嬢さん。』と、彼は低い聲で言ひ足した。『時には辛い事で……』

『ではさう云ふ譯からなのか、』と、心の中の聲が公爵令嬢マリヤの魂に言つてゐた。『さうだ、私が此の人を愛して居たのは、あの陽氣な親切な率直な眼付ばかりではなかつた。あの奇麗な外形ばかりではなかつた。私は此の人の氣高い、確りした、自己を犧牲にする心を見透してゐたのだ。』と、彼女は心の中で言つた。

『さうだ、此の人は今は貧乏だ。そして私は金持だ……さうだ、譯はそれだけなのだ、……さうだ、若しさうでなかつたら……』

そして彼の昔の優しさを悉く思出し、又今彼の親切な悲しさうな顏を見て、彼女は忽ち彼の冷やかである理由を理解した。

『何故でせう、伯爵、何故でせう?』と、彼女は殆んど俄かに叫ぶ様にして、不知不識ニコライの方に近く動いて行つた。『何故ですか、話して下さい。是非話して下さい。』ニコライは默つてゐた。『私には、あなた何故だか分りませんもの、伯爵。』と、彼女は言葉を續けた。『でも私は悲しうムいます。私、

……私はそれをあなたに申しませう。あなたのお言葉では、何か譯があつて、昔の様にお心安くして下さる譯に行かないと有仰るのですね。ですが私には、それが實に苦しうムいますわ。』彼女の眼と聲には涙があつた。『私は此の世ではほんとに僅かの幸福しか持つて居りません。ですから何んなものでも失ふのは私には辛いのです……御免なさいまし、左様なら、』彼女は不意に泣き出した。そして部屋から出て行かうとした。

『お嬢さん。些と、御生です。』と、彼は彼女を止めようとして叫んだ。『お嬢さん!』

彼女は見返つた。二三秒間彼等は默つて互に眼を見合せてゐた。すると遠い、在り得なかつたものが、俄かに極く手近の在り得べく、避け得られないものとなつた。

七

千八百十三年の秋に、ニコライは公爵令嬢マリヤと結婚した。そして妻と母とソーニヤとを連れてルイシーヤ・ゴオルイに住む事になつた。

四年以内に、彼は妻の領地を賣らずに自分の負債の殘りを拂つて了つた。それから從兄が死んで少しばかりの遺産が手に入つたので、彼は又ビエールから借りた借金を拂つた。

それから又三年の間に、千八百二十年迄に、ニコライは自分の財政を大變甘く繰り廻した爲めに、ルイシーヤ・ゴオルイに續いた小さい領地を買入れ、又オトラドノエなる彼の祖先傳來の領地を買戻す話を初めた位であつた。それは彼の常に抱いてゐた夢であつた。

最初は止むを得ず土地の世話を仕出したのだけれども、彼は直きに農業が自分の好きな、殆んど何よりも面白く思ふものになつた程の熱心を、それに對して感じる樣になつた。ニコライは普通の農業家であつた。そして改良を好まなかつた。特に其の時分流行り出してゐたイギリス流の改良を好まなかつた。そして農業に關する理論的の著書を笑ひ、製造所を建てるとか、價の高い農産物を造るとか、價の高い輸入の種子を蒔くとかする氣にはなれなかつた。彼は實際仕事の或る一部に骨を折らずに、いつも領地全體の利害を眼の前に置いてゐた。領地の中で彼が心に最も重んじてゐたものは窒素でもなければ、地中或は空中の酸素でもなく、特種な鋤でもなく又肥料でもなくして、窒素や酸素や鋤や肥料などを悉く有效ならしめる重なる動力——卽ち勞働者、農夫であつたのだ。ニコライが土地の管理を始めて、その樣々な業務に立入り初めた時に、農夫と云ふものが彼の主なる注意を惹き附けた。彼は農夫を單に道具としてばかりでなく、彼自身に於て目的を持つ者として、又彼の批評家として見た。初め彼は注意深く農夫を研究して、何を彼が要求してゐるか、何を彼は善又は惡と考へてゐるかを理解しようと試みた。そして彼は整理をしたり、命令を出すやうな風をしただけで、實際は農夫等から

して、彼等の遣り口や彼等の言葉や彼等の善惡觀を學びつゝあつた。そして彼は農夫の趣味や衝動を理解し、其の言葉を話し、その言葉の裏に隱れてゐる意味を捉む事を覺え、自分と彼と全く合同したやうな心持がした時になつて、初めて大膽に農夫を指揮——卽ち自分に對して豫期されてゐた任務を農夫に對して爲す事を遣り出した。そしてニコライの遣り方は非常に眼覺しい結果を生み出した。

財產の管理を引受けると、ニコライは直ちに、過ちなき洞察の天才に依つて、執事とか村長とか代表者とか云ふ者を撰んで任命した。それは、若し農夫等に撰擇權があつたなら彼等自身が選ぶであらうと思はれるやうな人々であつた。そして彼等に一度與へた權利は、決して撤回しなかつた。肥料の科學的成分を調べたり、又『借の部、貸の部』(ニコライは簿記の事を嘲弄的に斯う言つてゐた)を調べたりするに先き立つて、彼は農夫等の持つてゐる家畜の數を發見し、その數を增す事に彼の全力を盡した。彼は農夫等の家族等を大規模に一緒に置き、そして別々の家に分れる事を許さなかつた。怠け者や、放蕩者や、虛弱な者に對しては、彼は同じやうに嚴しかつた、そして彼等を社會から追出すことに努めた。種蒔や乾草及穀物を運び入れる時には、彼は自分の畑をも、農夫の畑をも絕對的に同じ注意を以て見張つた。そして夫れ程早く、又それ程よく蒔かれたり刈られたりする畑を持つてゐる地主は殆んど無かつたし、ニコライほど好い收穫を持つ者もなかつた。

彼は家內の農僕を何うとかする事を好まなかつた。彼は彼等を寄生木(やどりぎ)と呼んでゐた。そして皆が、

彼は彼等を惡くし附上がらせて了ふと云つてゐた。彼は家内の農僕に關する何かの命令を、殊に何れかを罪しなければならぬ時の命令を出す時などにはいつも不決斷の有樣で家の中の有らゆる人の意見を聽いた。けれども家の農僕を農夫の代りに兵隊にやる事が出來る時は、いつでも農僕の方を兵隊にやつて少しも後悔しなかつた。農夫との交涉では、總て彼は決して寸毫の躊躇もしなかつた。自分の與へる有らゆる命令が農夫の大多數に贊成される事を知つてゐた。

彼は、その重荷を增す事に依つて人を罰したり、又は自分だけの望に驅られただけで、その仕事を輕くして人を賞めたりする事はなかつた。彼は何を爲すべく、何を爲すべからざるか、と云ふ事に關する自分の標準は何であるか、夫れは言ひ得なかつた。けれども彼の魂の中には、確固として定つた標準があつた。

或る失敗とか、不始末とかの話をする時には、彼はよく『我々ロシアの農民』に就てこぼすのであつた。そして自分は農夫に對しては我慢が出來ないと想像した。

けれども全身を擧げて、彼は眞に『我々ロシアの農民』と、彼等の遣り方とを愛して居た。そして夫れに依つて土地を管理するに最も好き結果を生じ得る唯一の方法を認め且つそれを採用した。

伯爵夫人マリヤは、農業に對する自分の夫の此の熱情を嫉んだ。そして自分も其の熱情を分ける事の出來ないのを殘念に思た。けれども彼女は、自分とは懸離れて全く交涉のない其の世界に於て、夫が遭

遇した喜びと失望とを理解する事が出來なかつた。彼女は、夫が夜明けに起きて、午前中を畑や穀打場で送つた後で、彼女と一緒に茶を飮む爲めに、うまで事に熱心で嬉しさうであるかが分らなかつた。彼女は、夫が可なり暮しの好い、つましい百姓のマトウエ・エルミシンが、家中皆徹夜して穀物の束を運んで、外の人は誰もまだ運び初めない內に、すつかり收穫を終つて了つた事を彼女に話した時に、何故夫がさうまで嬉しがつてゐるのか分らなかつた。彼女は、暖かな好い雨が早魃で苦められてゐた彼の若い燕麥の上に降り初めた時に、何故夫が窓から露臺へ出て行つて、口髭の下で微笑んでひどく嬉しさうに目配せするのか分らなかつた。又物凄い雲が、刈入若くは收穫時に吹き去つて了ふと、何故彼は赤くなつて、日に燒けて、汗みづくになつて、髮には苦蓬の匂をさせて納屋から家へ這入つて、さも嬉しさうに手を擦り合せながら、『さア、斯う云ふ日が最う一日で、俺の分も農夫の分も皆納屋に入つて了ふぞ。』と、言ふのが彼女には分らなかつた。

尙更ら彼女には、夫が非常に親切で、且つ彼女の頭をいつもよく察して呉れるにも拘らず、仕事を休ませて呉れと農夫や其の女房達が彼女に賴んで來た請願を夫に取次いだ時には、彼が殆んど絕望の有樣になるのは、何ういふ譯だか分らなかつた。そして又人の好いニコライが、何故頑强に彼女を拒絕して、腹立たしさうに自分の仕事には干涉して呉れるなと云ふのか分らなかつた。彼女は、彼が自

分だけに非常に親しい、彼女の理解しない獨得の法則に依つて支配される、懸け離れた世界を持つてゐると思た。

時としては彼を理解しようと努めて、彼女は彼が彼の農奴の利益の爲めに努力してゐる善行に就て彼に話しても見た。が此時も彼は怒つて『些もそんな事はない。そんな事は決して私の頭にさへ這入つて來なかつた。そして彼等の利益の爲めに私は自分の小指一本上げはしない。隣人の爲めに善を爲すと云ふやうな事は——そんな事は皆ロマンティツクな馬鹿な話で、婆さんの言ひ草だ。私は自分の子供を乞食にはしたくない。私は、私達の財産を自分の生きてゐる間に築き上げたい。それだけのものだ。そして、さうするには訓練をしなければならない。嚴格でなければならない……そうだからさ。』と、答へるのであつた。彼はその多血質の拳を握り締めて叫ぶのであつた。『それから又正義の爲めだ。——勿論。』と、彼は言ひ足すのであつた。『何故と云へば、若し百姓が裸で、その上飢えてゐる者だつたら、そして痩馬一疋しか持たなかつたら、彼は彼自身の爲めにも私の爲めにも善い事をする筈がない。』

そして疑もなくニコライは、自分は他人の爲め或は道德の爲めに何事をかしてゐるのだと云ふ考を、自ら持つ事を許さなかつたから、それで彼のする事は何事も實を結んだのであつた。彼の財産は速に增殖した。近隣の百姓共は、自分達を買つて呉れと彼に頼んで來た。そして彼の死んだ後も長い間百姓共は、彼の尊敬すべき遺風を保存した。『好い主人だつた……百姓共の幸福を第一番にして、御自分

のは二の次ぎになさる。そして確に減額と云ふことはなさらなかつた。ほんとに好い御主人様——とは、あゝ云ふお方のことだ！』

八

農奴たちの取締に就いて、時々ニコライを苦めたことは、彼の性急な氣質と驃騎兵時代に得た、直ぐに拳固を用ひるといふ、彼の古い習慣とであつた。初めの中は、彼はこの事に就て別に惡いことであるとは思はなかつたが、結婚してから二年目にさういふ矯正の仕方に關する彼の考へに急激な變化を來した。

或る夏の日彼は、ドロンの死後ボグチヤロウオを管理して居た村長を呼びにやつた。この男は色々の事で、詐欺だとか怠慢だとか云ふいろ〳〵の行爲があるといふので非難されてゐた。ニコライは、入口の階段まで彼を迎へに行つた。所が村長が初めて挨拶の言葉を返したかと思ふと、廣間で、呶鳴聲や毆る音が聞えた。食事に室内へ歸つて來て、ニコライが妻の所へ行くと、妻は刺繍框の上に押蔽さる樣に頭を屈めて座つてゐた。で、彼はいつもの樣に、朝の中に自分の身の廻りに起つた色々の出來事をすつかり、殊に、ボグチヤロウオの村長のことを、彼女に話し始めた。伯爵夫人マリヤは赤く

なり青くなりして口を噤んだまゝ、何とも返答をしないで、同じ姿勢で座つてゐた。

『あんな無禮な奴だ！』と、彼は、たゞ思ひだすだけでも嚇として、斯う言つた。『飲んで居たのなら、さうと私に云へばいゝのだ、さうも思へなかつたが……おや、何うした、マリイ？』と、彼は不意に尋づねた。伯爵夫人マリヤは頭を上げて何事か言はうとした、けれども急に又俯向いて了つて、唇を緊つと結んだ。

『どうしたんだ！どうかしたのか、お前？……』彼の素直な妻は、泣いてゐる時が、いつでも一番好く見えるのであつた。彼女は決して苦しみや怒りの爲めに泣いたことはない、けれども何時も悲しみや思ひやりの爲めに泣いた。で泣くと其の涙に光つた眼が何とも云へぬ魅力を添へるのであつた。ニコライが妻の手を取るや否や、彼女は堪らなくなつてわつと泣き出した。

『ニコライ、解りましたわ……あの人が悪いのです、でも、あなたは、何故あなたは、あゝなすつたの！　ニコライ！』から言つて彼女は兩手で顏を隱した。

ニコライは何も言はなかつた。彼は眞赤になつて、彼女の傍を離れて、默つて室内を彼方此方と歩き出した。彼は彼女が何を泣いてゐるのかを知つてゐたけれども、子供の頃からしなれて來たこと、當り前の事だと見做してゐることが、今更ら間違ひであると云つて、心の中で急に彼女に同意することは出來なかつた。『これは他愛のない馬鹿げたことだ、婆さんの繰り言だ、それとも彼女の云ふことが正しいか知ら？』と、彼は自分と自分に言つた。この問題を決し兼ねて彼は再び、彼女の苦しんでゐる愛らしい顏をチラリと見た、と忽ち、彼女の言ふのが正しくて、自分も之れ迄永い間自分が間違つてゐるのに氣が付いて居たのを感じた。

『マリイ、』と、彼はやさしく言つて、彼女の傍に近づいた。『二度とあんなことはしない、私はお前に誓ふよ、屹度。』彼は宥しを乞ふ子供のやうに震へ聲で繰り返した。

涙が妻の眼からひどく流れ出た。妻は夫の手を取つて、それに接吻した。

『ニコライ、何時あなたはこの浮彫玉を壞したんです？』と彼女は、話題を變へようとして、ラオコオンの浮彫玉のついてゐる、指輪をはめた彼の指をじつと見詰めて言つた。

『今日だよ、これも同じ時の事なんだ。あゝ、マリイ、その事はもう言つてくれるな！』彼は再び赤くなつた。『私は誓つて、二度とあんなことは仕出かさないよ、で、いつ迄もこれを見て思ひ出すやうにしようよ。』と、彼は、壞れた指輪を指しながら、言つた。

その時以來、村長たちや支配人たちと會つて、血がかつと顏に上るのを覺え、拳が握り固められかけると何時でもニコライはその指の上で指輪を廻はして、自分を怒らした人の前に眼を伏せるのであつた。けれども、一年に一二度は彼は自分を忘れて了つた、そして妻の所へ行つて、懺悔し、又も之れこそ本當に最後だと約束するのであつた。

ない。』

『マリイ、お前は屹度私に愛憎が盡きるだらう。』と、彼は彼女に言つた、『私はさう思はれても仕方が

『あなた、逃げ出さなくちやいけませんよ、どうしても堪え切れないとお思ひになつたら、大急ぎで逃げ出さなくちやいけませんよ。』と、妻は、夫を慰めようとして、悲しさうに言つた。

地方の貴族の間ではニコライは尊敬はせられて居たが、好かれては居なかつた。貴族の地方政治は、彼に何の興味をも起させなかつた。で、それが爲めに彼は或る人々からは高慢と見られ、他の人々からは、馬鹿と見られてゐた。夏の間、即ち春の種播きから收獲までの間中は、土地の監督に費やされた。秋になると、彼は他の事と同じ事務的眞面目さで獵に身を入れて、獵夫たちや、犬や、馬を連れて、一ケ月も二ケ月も遊獵に出かけるのであつた。冬は、他の領地へ出かけて、讀書に日を過すのであつた。主に歷史の書類で、さう云ふ書物の爲めに彼は毎年定つて、一定の嵩の金を費つた。彼は自分の爲に、本當の圖書館を造らうとして居るのだと、いつも言つてゐた。そして、自分の買つた許りの本は悉く讀み盡すのを主義としてゐた。彼はその書齋でしかつめらしい樣子をして書物の前に座るのであつた。所が初めの中は義務としてやりだした事が、遂には習慣的な仕事となり、自分が眞面目な勉強にとりかゝつてゐるのだといふ感じから、特種の滿足を得た。彼は他の領地に出かけて仕事にかゝつて居る時の外は、家族の者と一緒に冬を家で暮して、全く母や子供などの小さな心配や利害に

心を注ぐのであつた。妻とは益々親しみ深くなつて行つて、日毎に彼女の中に新らしい精神的な財寶を見出した。

ニコライの結婚の時から、ソーニヤは彼の家で暮らしてゐた。ニコライは結婚前に、自分とソーニヤとの間にあつたことをスツカリ妻に話し、自分を責め、ソーニヤの行爲を賞めた。彼はソーニヤに向つて自分の從妹に深切に優しくしてくれる樣にと賴んだ。彼の妻は、夫がソーニヤに對してした惡いことを充分に感じてゐた。彼女は自分も亦ソーニヤに對して濟まないことをしたと感じた。彼女は自分の富と地位とが夫をして自分を選ばしめたのだと考へた。ソーニヤには何の過ちをも見出すことが出來なかつたので、彼女はソーニヤを愛さうと思つた。所が、彼女はどうしてもソーニヤを好くことが出來なかつた、そして度々心の中にソーニヤに對する惡感情を見出したが、彼女は夫れにうち克つことが出來なかつた。

或る日彼女はソーニヤのことや、それからソーニヤに對する自分の不可いことについて友達のナターシヤと話し合つた。

『あなた知つてらつしやるでせう?』と、ナターシヤは言つた。『あなたはよく聖書をお讀みになつたんだもの。ソーニヤにきつちり當て箝る句があるわ。』

『何う云ふんでせう?』と、伯爵夫人マリヤは驚いて尋ねた。

「持てる者には與へられん、されど持たざる者は、その持てるものすら奪はれん、」あなた覺えてらしつて？　ソーニヤはその持たざる者なのよ、何故さうなのか私には分らないの。多分あの方は自我主義を持つてゐないからでせう。私には分らないの、だけど、あの女からは、持つてかれてしまふのよ、私時々あの女を非常に氣の毒に思ふの、むかしはニコライがあの女と結婚すればいゝと思ひ込んで居たんです。それで居て、私、そんなことは決してないと云ふ豫感のやうなものを始終持つてゐたんですもの。あの人はあだ花なのよ、ね、そら、よく草苺の花の中にある、あれなのよ。時々私、あの女を氣の毒に思ひますわ、でも、時々私、あの女は、私たちならば感じるだらうと思ふやうには感じないのじやないかと思ふんですの。』

そこで伯爵夫人マリヤは、聖書の中のその言葉はさういふ意味に取るべきものではないと云ふことをナターシヤと論じたが、彼女はソーニヤを見ると、ナターシヤの與へた説明に同意した。實際ソーニヤは自分の位置を情け無いとは感じてゐないで、あだ花たる自分の運命をすつかり諦めてゐる樣に見えた。彼女は家族全體を好く程には人々を好いてゐないやうに見えた。猫のやうに、彼女は一人一人の人とではなく、家と親しくなつたのである。

彼女は老伯爵夫人に仕へた、子供たちを可愛がつたり、甘やかしたりした、それから小さい用事——彼女は殊にそれをするのが上手であつた——をいつでもしてやつたが、彼女のする事は何でも無意識的に當然のことと見做されてたいして滿足はされなかつた。

ルイシーヤ・ゴオルイの家が再建されたが、老公爵の時と同じ規模ではなかつた。

景氣の惡い時に始められた此の普請は、質素といふよりは寧ろそれ以上であつた。以前の石の土臺の上に建てられた廣大な邸宅は木造で、たゞ內部だけが漆灰で塗られてゐた。大きな、しめくゝりの無い家は、板の床は塗られず、家つきの農奴の大工の手で家の樺の木で造つた、質素な、粗末な寢椅子や椅子や卓子が、具へられてゐた。家は非常に廣くて、家つきの下僕たちの住居や客座數などもあつた。

ラストフ家やバルコンスキイ家の親戚が、家族や、十六頭の馬や、數十人の召使を連れて、時々このルイシーヤ・ゴオルイへやつて來て、數ケ月も滯在して行つた。それに年に四度——主人と主婦との命名日と誕生日に——百人からの客が一日か二日泊まるのであつた。その他は年中、家の定つた生活は、さまざまの用事や、家で出來たもので濟ます、茶や、朝飯や、晝飯や、夕食といふ變化のない行事をつづけるのであつた。

九

二千八百二十年十二月五日、聖ニコライの日の前夜であつた。その年ナターシヤは夫や子供たちと一緒に秋の初めからルイシーヤ・ゴオルイに滯在してゐた。ピエールはペテルブルグに居た、彼は、自分の私用で三週間そこにゐると云つて出掛けたのであつた。もう行つてから六週間にもなるので、今にも歸つて來るだらうといふので待ち受けられてゐた。

この十二月の五日には、ニコライの古い友だちで、休職の將官ワシーリイ・ヒヨードロキツチ・ヂエニソフがラストフ家に滯在してゐた。

その翌日には、客が彼の命名日を祝ひにやつて來たので、ニコライはそのだぶ〳〵の韃靼の上衣を脫いで、フロツクコートを着、先の尖つた細い靴を穿いて、自分の建てた新らしい教會へ出かけ、そこで祝賀を受け、客たちに簡單な食物を出し、それから地方の選擧や、その年の收獲のことなどを話し合はなければならぬといふ事を考へた。しかし其の前日は、彼はいつものやうに送つても差支へないのだと思つた。晝飯前に彼は、自分の妻の甥の所有なる、リヤザンの領地からの監視人の計算書に眼を通し、用事の手紙を二通認め、それから穀物小屋や、家畜飼養場や厩などを見廻つた。翌日は祝日のために百姓たちがみんな醉拂ふだらうと思ふので、それに對する處置を講じて置いて、彼は晝食に這入つて來た。その日は終日、妻と差し向ひで一寸の話をする機會もなかつたのであつた。彼は二十人前の食器の備へられてある長い食卓についた。そこに家中の者ニコライの母親、母親の話相手と

して一所に住んでゐる年老つたマダム・ビエロフ、ニコライの妻と三人の子供、その保姆と家庭教師、ニコライの妻と甥とその家庭教師とソーニヤと、ヂエニソフ、ナターシヤ、ナターシヤの三人の子供、その保姆、老公爵の建築家で、今は靜かにこのルイシーヤ・ゴオルイで老年を送つてゐる、ミハイル・イワーニツチなどが集まつた。

伯爵夫人マリヤは、卓子の反對の側の隅に座つて居た。彼女の夫がその席に着くや否や、ナプキンを取つて自分の席に置いてあつた水杯（グムビユラー）や酒杯を手早く突きやつた樣子で、彼女は夫が時々殊に、スウプの前に、仕事から直ぐに晝食にやつて來る時によくあるやうに、不機嫌なのを知つた。伯爵夫人マリヤは、充分よく夫のかういふ氣分を了解（のみこ）んでゐた。で、彼女は自分が氣持のよい時には、夫がそのスウプを飮んで了ふのを靜かに待つてゐた。それから漸く夫に話しかけて、彼をして其の不機嫌であることの理由（いはれ）のないのを認めさせ始るのであつた。所が、この日は彼女は此のやり方をすつかり忘れて了つた。夫が彼女に對して理由もないのに怒つてゐるのを情けなく思つて、ひどく悲しかつた。彼女は夫に何處へ行つてゐたのかと尋ねた。彼は答へた。彼女は又領地の方は凡て具合よく行つて居るか何うかと尋ねた。彼は彼女のわざとらしい調子に不愉快さうに顏を顰めて、早口に答た。

『やつぱり私の思つた通りだわ、』と、伯爵夫人マリヤは思つた、『でも、この人は何を私に怒つてゐるのだらう。』其の返答の調子で、彼女は、夫が自分に對して心持を惡くして居て、會話を短かく切り

上げ度がつて居ることを覺つた。彼女は、自分の言葉がわざとらしかつたことを感じた、しかし自分を制することが出來なかつたので、更に二言三言何か尋ねた。

晝食の間の談話は、ヂエニソフのお蔭で、直ぐ一般的になり、勢附んで來た。で、彼女は夫に向つて、それ以上何も言はなかつた。一同が卓子から立ち上つて、いつもの習慣で、老伯爵夫人に禮を言ひに來た時に、伯爵夫人マリヤは夫に接吻して、その手をさし出しながら、何うして自分に對して怒つたのかを尋ねた。

『お前はいつでもそんな妙なことを思つてゐる、私は怒らうなんて考へたことはないよ、』と、彼は言つた。

しかし、このいつでもといふ言葉は彼女に斯う答へるのと同じことであつた、——さうだ、私は怒つて居る、だが、私は云ひたくないんだ、と。

ニコライは、その妻とは非常に仲が好かつたので、ソーニヤや伯爵夫人は、嫉妬から寧ろ二人の不和を見るのを喜んでゐたのであるが、それでも何うしても二人の惡いところを見付けることが出來なかつた。だが、その二人の間にさへも時々反目することがあつた。時々、殊に最も幸福な時の直ぐ後で、彼等は突然隔意と反抗の感情をもつことがあつた。その感情は殊にマリヤが姙娠してゐる間には最もよく起つた。彼等は今丁度さういふ反目の時期にゐるのである。

『では、messieurs et mesdams（皆さん）、』と、ニコライは聲高く、快活らしく見せかけて——これは彼の妻にはわざ〳〵自分を煩悶さすためであつたやうに思へた、——言つた、『私は今朝の六時から立ち詰めでした。明日はたいへんなんですから、これから行つて休みます。』而して伯爵夫人マリヤには、その上何とも言はないで、喫煙室へ這入つて行つて、長椅子の上に横になつた。

『これが毎(いつ)ものなさり方だ、』と、彼の妻は思つた。『みんなには話しかけて私には口も利かない。私分つてゐるわ、私分つてゐるわ、こんな身體でゐる時に殊に私が嫌で耐らないんだわ。』彼女は自分の高い腰を見下ろして、それから鏡で自分の青蒼めた窶れた顏を見た、顏の中では眼がいつもより大きく見えた。

そして何も彼も彼女にはうるさかつた。ヂエニソフの大聲や笑聲、それからナターシヤのお喋り、殊にソーニヤがちらりと自分の方を偸み視る急がしい横目。

伯爵夫人マリヤは、自分が腹の立つ時には、それを第一にソーニヤの故(せい)にするのであつた。

暫らくの間、客と一緒に座つてゐたが、彼等の話してゐることが一つも耳にはいらないので、彼女は密と其所を拔け出て子供部屋へ行つた。

子供たちは、椅子に腰かけて馬車でモスクワに行くといふ遊びをしてゐた。で、彼女にも仲間入りをすゝめた。彼女は座つて、子供たちと一緒に遊んだが、夫のことゝ、夫のわけもない不機嫌のこと

が始終彼女を苦しめた。彼女は起ち上つて、やつと爪先で歩く様にしてかの小さな喫煙室へ行つた。

「多分あの人は眠つては居まい。遠慮なく言はう』と、彼女は獨言を言つた。彼女の一番上の子の、アンドリユーシヤは母親の眞似をして足を爪立てゝ従いて行つた。母親はそれに氣が付かなかつた。

『マリイ、あの方はお眠つてゐらつしやるでせうよ、大へん疲れていらつしやいましたから。』と、次の間で伯爵夫人マリヤに出會つたソーニヤが言つた、(伯爵夫人にはソーニヤが到る處に居る様な氣がした)『アンドリユーシヤに起させない方がようございますよ。』

伯爵夫人はあたりを見廻すと、直ぐ後にアンドリユーシヤが居たので、ソーニヤの云ふことが道理だと感じた。全くその爲めにむつとして顏を赤らめた、そして、やつとのことで激い言葉を返すのを止めた。彼女は何にも云はなかつた。そしてソーニヤを後に隨いて來させたが、たゞ靜かにしてゐる様にと手眞似で知らせて、扉口に近づいた。ソーニヤは他の扉口から出て行つた。ニコライの寢てゐる部屋から、妻は夫の安らかな呼吸を聞きとることが出來た。その呼吸の一つ々々の調子までが妻には聞き馴れたものであつた。それを聞いて居ると夫の滑つこい、美しい額や、髭や、さては顏全體——夜靜かなる時、夫が眠つて居る間に實に屢彼女が眺めた——を眼に浮べることが出來た。突然ニコライが驚いたやうに身動きをして咳拂ひをした。と丁度同時にアンドリユーシヤが扉口から叫んだ、『父さま、母さまがこゝに居ますよ!』母親は吃驚し

て眞青になつて、子供に手眞似をした。子供が靜まると些との間恐ろしい沈默がつゞいた。彼女は、ニコライが眼を覺まされるのが何んなに嫌ひであるか知つてゐた。突然、また夫が身動きをして咳拂ひをするのが聞えた、そして不愉快らしい調子でかう言つた。

『一寸の間も安ましてくれないんだね。マリイ?何うして子供を連れて來たんだ?』

『私たゞ見やうと思つて來たので御座います……存じませんでした……お氣の毒でしたわねえ……』

ニコライは咳をして、その上何も言はなかつた。妻は去つて、子供を小兒部屋へ連れて歸つた。五分間ほどたつと小さな、黒い眼の、三歳になるナタアシヤといふ、父の氣に入りの子が、兄から父さまは睡てゐて、母さまは其の次の間に居たといふことを聞いて、母親に氣附かれぬやうに、父親の所へ走つて行つた。

黒い眼の小さな娘は、大膽に扉をガタ〳〵開けて、それから其の肥つた、小さな足で、バタ〳〵と長椅子の所へ駈け寄つた。背を向けて寢てゐた父の頭の下になつてゐる手に接吻した。ニコライは、顏にやさしい笑を浮べて、寢返へりを打つた。父の頭の位置をよく見ておいて、彼女は足の爪先で立つて、

『ナタアシヤ、ナタアシヤ!』と、妻が扉口から狼狽てゝ囁くのを彼は聞いた。『父ちやまはお睡いんですよ。』

『うそよ、母ちやま、お父ちやまは睡かあないのよ。』と、小さなナタアシヤは確然と言つてのけた。

『笑つて居らつちてよ。』

ニコライは足を下ろして起き直つて、その小さな娘を抱き上げた。

『お這入りよ、マーシヤ。』と、彼は妻に言つた。妻は這入つて行つて、彼の傍に座つた。

『私は彼兒が後から従いて來たのを知らなかつたんですの、』と、彼女はおづ〳〵と言つた。

『私丁度見に來たところ……』

片手に其の小さな娘を抱きながら、ニコライは妻を見た。そして彼女の濟まなさうな様子を見て、彼は片手を彼女に掛けてその髪の毛に接吻した。

『母さまを接吻してもいゝかい?』と彼はナタアシヤに尋ねた。小さな娘は羞かしさうに微笑んだ。『もう一ぺん。』と、ナタアシヤは、命令するやうな手附で、ニコライが彼女の母親に接吻した所を指した。

『どうして私が怒つてゐるなどゝお前が思ふのか私には解らないよ、』と、ニコライは、その妻の心の中にあるのを知つてゐた問ひに答て言つた。

『あなたがそんな風にして居らつしやる時には、私が何んなにみじめで、何んなにたよりないか、あなたには想像がつかない程です。私はいつも思ひますの……』

『マリイ、お黙り、馬鹿な!お前にとつて恥かしいことだよ、』と、彼は快活に言つた。

『私には、あなたが私の様な者にはお介意ひなさらないのは能く解つてゐます、私はこんなに不器量ですもの……いつでも、それに今はこんなに……』

『これ、何といふ馬鹿なことを云ふんだ! 美しいから愛するのではない、愛するから美しくなるんだよ。美しいから愛されるのはマルヴィナのやうな女だけだ。私は自分の妻を愛して居ると思ふかね! いやいや、私はお前を愛して居ない、私はたゞ……何と云つたらいゝかな。だがお前が何處かへ行くとか、又こんな風に我々の間に誤解が起つて來るとかいふ時には私は、途方に暮れて何にも手に付かなくなるんだ。たとへばだ、私は自分の指を愛するだらうか? 私は愛してゐない。しかし若しそれを切り棄てやうとしたら……』

『いゝえ私にはそんな風な心持はしません、でも、あなたの有仰ることは解りました。ではあなたは、もう私を怒つては居らつしやらないのね?』

『大いに怒つてゐるよ!』と、彼は微笑みながら言つて立ち上り、髪を撫でつけて、室内をあちらこちらと歩き始めた。

『ねえ、マリイ、私はかういふことを考へてゐたんだがねえ?』と、彼は、二人の間に仲なほりが出來ると直ぐ言ひ始めて、妻の前で獨言を云ふやうに聲高に言つた。

彼は、彼女が聞かうと思つてゐるか何うかを尋ねなかつた。そんな事は彼には何うでもいゝのであ

つた。或る考へが彼の心に浮んだ、で、それは彼女にもさうでなければならぬと思つたのである。そこで彼は、春まで自分等と一緒に滞在するやうにビエールに勧めるつもりだといふことを彼女に話した。

伯爵夫人マリヤは、それを聞いて居て、時々何か自分の考へを述べた、それから、今度は彼女が独言を云ふやうに聲高に話しだした、彼女の考へたのは子供たちのことであつた。

『この娘でも、もう女ですものねえ。』と彼女は、小さなナタアシヤをさして、フランス語で話しかけた。『あなたは女といふ者は非論理的なものだと言つて、私たちを悪くおつしやるけれど、この子に私たちの論理が現はれてゐるじやアありませんか、父さまはお睡いんだと言ひますと、この子は、いゝえ、笑つて居らつしてよつて言つたでせう。そして此の子の言ふ通でしたわ。』と、伯爵夫人マリヤは嬉しさうに微笑みながら言つた。

『さうだ、さうだ、』と、ニコライは、その丈夫な腕に小さい娘を抱き上げながら、それを高く宙に上げて、自分の肩に坐らせ、その小さな足を持つて、そのまゝ室内を彼方此方と歩き出した。父と娘の顔には同じ様な無邪氣な幸福の色が浮んで居た。

『でもねえ、あなたは少し不公平ですわ。この子ばかり無暗にお可愛がりになるんですもの。』と、伯爵夫人マリヤはフランス語で囁いた。

『さうだねえ、だが、私には何うも仕様がないんだよ……そんな風に見えないやうにやるよ。』

この時、廣間と玄關の方から扉のバタン〳〵いふ音や、人の足音が聞えて來た、誰かゞ着いた様子であつた。

『誰か來てよ。』

『きつと、ピエールですよ。行つて見て來ませう。』と、伯爵夫人マリヤは言つて、部屋から出て行つた。

彼女が出て行つてゐる間にニコライは小さい娘を肩に載せたまゝ室内を駈け廻つた。呼吸を切らしながら、彼は手早く笑つてゐる子供を下ろして、胸に抱き締めた。飛んだり跳ねたりしたことが、彼をして舞踏を思ひ出さした、そして子供らしい圓い、愉快さうな小さな顔を眺めて、彼はふと自分が老人になつて、この子を舞踏會に連れて行く時には、この子は、何んなになつてゐるだらうと思つた、そして自分の父がよくダニエル・クウパアやマヅルカをその娘と一緒に踊つたことを思ひ出した。

『あの人ですよ、あの人ですよ、ニコライ!』と、伯爵夫人マリヤは、數分たつと歸つて來て、言つた。『これで、ナターシヤが元の通りナターシヤになりましたよ。ナターシヤの嬉しがりやうつたら、あなたに見せたかつてよ、あの人は這入つて來ると直ぐ、あんまり滞在し過ぎたつて、その叱られた事と云つたら、さア、行きませう、早く、早く、いらつしやいよ! お前はとう〳〵離れなくちやな

らないのよ、』と、彼女は、微笑みながら、父親の傍へすり寄つて行く小さな娘を見て言つた。ニコライは、娘の手を引きながら、出て行つた。

伯爵夫人マリヤは後に殘つた。

『少しも、少しも信じられなかつた、』と、彼女は自分と自分に呼いた、『人間といふものが、こんなに幸福であり得やうとは。』彼女の顏は微笑で明るくなつた。けれども、それと同時に嘆息を吐いた、そして、柔らかな哀愁がその考へ深かさうな眼附に現はれた。それは謂はゞ、彼女が今感じてゐる幸福とは全く別に此の世では達することの出來ぬ、もう一つの幸福といふものがあつて、而もその瞬間に彼女はそれを思ひ出さずにはゐられなかつたのである。

十

ナターシヤは、千八百十三年の春早々に結婚して、千八百二十年にはもう三人の女の子と一人の男の子を擧げて居た。この男の子は何うにかして得たいと思つてゐたものであつた。で、今彼女はその子を自分の乳で育てゝ居るのであつた。彼女は丈夫で、肉附がよくなつてゐたので、その丈夫な若い母親のうちに、昔の細りした、よく動くナターシヤを認めることは六ケ敷い位であつた。その目鼻だちは昔よりずつとはつきりして來て、而も靜かな和かさと落着の表情を帶びてゐた。その顏はもう、嘗てはその主要な魅力となつて居た所の、あのいつも燃えてゐた熱心の火を持つてゐなかつた。今は、大低、眼に見えるのは、顏や身體ばかりで、精神は少しも見られなくなつてゐた。ナターシヤに見られるのは、たゞ强健な、美しい、而して子を澤山生む母親といふ樣子に過ぎなかつた。たゞ極く稀に今も尙彼女の心の中に昔の火が燃えた。それは、今のやうに、夫が留守であつてから歸つて來た時とか、病氣の子供が癒つた時とか、或は伯爵夫人マリヤにアンドレー公爵の話をする時とか、(夫が彼女のアンドレー公爵に對する昔の戀に對して嫉妬を起すかも知れぬと思つたので、彼女は、夫にはアンドレー公爵のことは話さなかつた)或は極く稀には、何うかして結婚以來全く止めてゐた歌を唄ふ氣になつた時とかにのみ起るのであつた。で、斯ういふ稀に昔の火が再び燃え上る時には彼女はその美しい、充分に發達した姿で、昔よりは尙ほ一層美しく見えるのであつた。

結婚以來ナターシヤは夫と共にモスクワや、ペテルブルグや、モスクワ附近の自分たちの領地や、それから彼女の母のところ即ち、ニコライの家で暮らした。若いベズウホフ伯爵夫人は、滅多に交際社會では見られなかつた。それにさういふ所で彼女に會つた人々も大して彼女を好かなかつた。彼女は、人懷つこくもなければ愛嬌深くもなかつた、と云つて、ナターシヤは孤獨が好きであるといふのではなかつた(彼女には孤獨が好きであるか、さうではないのか、よく分らなかつた、たゞ寧ろ、自分

は孤獨を好かないのだと想像するだけであつた）けれども彼女は子供を持ち、それを自分で育てて居るし、又夫の生活の一分一分に利害を感じてゐるのだから、交際社會から身を退かなければ、自分に對する、さういふ一切の要求に應ずることが出來なかつたのである。結婚前のナターシヤを知つて居る者は、誰も彼も、彼女に起つた此の變化を見て、何か異常なことのやうに驚いた、たゞ老伯爵夫人だけは、その母親の洞察によつて、凡てナターシヤの烈しい感情の爆發の根元をなしてゐる所のものは、彼女がよく、オトラドノエで、戯言といふよりは寧ろ熱心に公言したやうに、單に自分の子供や夫が欲しかつたが爲めであることを見たのであつた。母親は、ナターシヤを理解しないで人々が驚き怪んでゐるのに驚かされた、そして自分は、平素から彼女が模範的な妻と母親になるだらうといふことをその頃から知つてゐたと、繰り返すのであつた。

『たゞ彼女は、夫や子供に對する獻身を極端までもつて行くものですからね、』と、伯爵夫人は言ひ言ひした、『それだけなんです、それがほんとに馬鹿らしく見える位ゐまでにですね。』

ナターシヤは多くの用心深い人々、殊にフランス人によつて說かれる金科玉條——娘は結婚してからも決して身仕舞を怠つてはならない、若い娘時分よりも尙ほ一層その容姿に氣を附けなければならない、又藝事を棄てゝしまつてはならない、それから、その夫を、その男が夫にならない前に魅したやうに魅する樣にと心がけねばならぬ——といふ金科玉條には從はなかつた。その反對に、一切の藝

事を捨てゝ了つた、藝事の中で最も優れてゐたのは歌を唄ふことであつた。ナターシヤは、それが一ばん人を引附けることの出來る自分の藝であつたが爲めに夫れを棄てゝ了つたのである。彼女は擧動とか、言葉を奇麗に使ふとか云ふことなどには少しも心を向けなかつた。又一番よく自分に似合つた態度や服裝をして夫に見せようといふ樣なことも考へなかつた。それから又夫に無理强ひをして困らせない樣に勉めるなどゝ云ふことなども考へなかつた。彼女は凡てさういふ規則とは反對のことをした。彼女は、前には本能が用ひるやうに教へてくれた、さま〴〵の人を引き附ける技巧が、今は夫に對してはたゞ可笑しく見えるに過ぎないであらうと思つた。夫には、彼女は初めから心の一隅をも隱して置かずに全く、即ち全心を以て、自分を夫に與へてゐるのである。彼女は、自分と自分の夫とを繋いで居る絆は、夫を自分に引き附けたやうなさま〴〵の浪曼的な感情の上に因つて居るのではなくて、はつきりはしないが、しかし自分の靈魂と自分の肉體とを結び付けて居る絆の樣に强い何か他のものゝ上に因つて居るのだといふことを感じた。髮の毛を縮らせたりクリノライン（譯者註一種の婦人用下袴）を着けたり自分の夫を引附ける爲めに歌を唄ふことは、自分を喜ばせようとして自分の身體を飾り立てるのと同じく變なことのやうに彼女には思はれた。他人の氣に入るやうにと自分を飾ることは、或ひは彼女にも心持の好いことであつたかも知れないが、——彼女はそれを知らなかつたが——彼女はそんなことをして居る暇を持たなかつた。何故彼女が、歌や着物や言葉を氣を付けて撰ぶ

ことに意を用ひなかつたかといふ重な理由は、たゞ單に彼女はさういふ事を考へて居る暇を持たなかつたといふことに過ぎない。

男が、或る一つの問題に——夫れが何んなに些細に見えやうとも——沒頭する能力を持つて居るといふことはよく知られてゐる事實である。それから又どんな問題にしても、それに注意が集中さるゝ時に、不定の大きさに擴がつて行かないといふやうな、そんな些細な問題は何處にも無いこともよく知られてゐる事實である。

ナターシヤが全く沒頭して了つた問題といふのは、自分の家族、即ち、夫であつた、ナターシヤは、彼女自身へ、彼の家庭へ、彼女の子供たち——彼女はそれを姙み、產み、養ひ、育てなければならなかつた——へ全く屬するやうに其の夫を摑まへてゐたのであつた。

で、彼女が、自分が沒頭した問題に、心のみならず、全靈、全存在を集中すればする程、その問題は彼女の目の下でだん〳〵大きくなつて、自分の力で夫れと闘ふにはます〳〵弱く不充分なやうに思はれるので、彼女はその問題にあらん限りの力を集中したが、それでも自分に必要と思はれる事を全部するだけの時間がなかつた程であつた。

その頃は、今日のやうに、婦人の權利や、夫婦の關係や結婚の自由及び權利に關する論議が問題と呼ばれるまでになつてはゐなかつたが、兎に角あるにはあつた。けれでも、さういふ問題はナターシヤには何の興味も與へなかつた。實際彼女はさういふ問題に對しては全く何の理解もなかつたのである。

さう云ふ問題は、その頃も今日と同じやうに、結婚者が互ひに受ける滿足のみを、即ち、家族の中に在る結婚の意義全體ではなく、結婚の最初の始まりのみを、結婚に於て認めるといふ人々だけに對して存在してゐたのである。

かういふ議論や、今日の諸問題は、丁度如何にして晝飯から出來るだけの滿足を得ようかといふ問題と同じことでその頃も今日と同じやうに晝飯の目的は滋養であつて、婚姻の目的は家族であるところの人々にとつては存在しなかつた。

晝飯の目的が身體の滋養であるとすれば、一時に二度分の晝飯を食ふ人は、快樂のより多き量を得られるかも知れぬが、その人は晝飯の目的を達しない、何故といふに、二度分の晝飯は胃で消化することが出來ないから。

結婚の目的が家族であるとすれば、數人の妻乃至數人の夫を持たうとする人は、それでゐて多くの滿足を得ることが出來るかも知らないが、それでは何うしても家族を持つわけに行かないだらう。

食事の目的が滋養であり、結婚の目的が家族であるとすれば、全問題は胃が消化し得る以上を食はないことゝ、家族と云ふものに必要なだけ、則ち一夫一婦より以上の夫や妻を持たないことによつての

み解決されるのである。ナターシヤは夫を要した。それが與へられた。そして、彼女の夫は、彼女に一つの家族を與へた。で、彼女は他のもつと良い夫の必要を感じなかつた。そして實際彼女の全精力が、その夫とその子供たちとのために盡すやうに向けられたのだから、彼女は、その事態が違つてゐたら起つたであらうと思はれる様な事柄を、想像しなかつた。又强ひて想像しやうとすることに何の興味をも見出さなかつた。

ナターシヤは、世間の交際には一向構はなかつたが、その代り自分の家の人々伯爵夫人マリヤ、自分の兄、自分の母親、それからソーニヤなどの交りには非常に重きを置いた。彼女は自分が髪を下げたまゝで、寢衣のまゝで、子供部屋から飛んで行けるやうな人々、嬉しさうな顏をして、綠ではなくて黃色く汚された赤坊のナプキンを出して見せて、相手がそれは赤坊がもうほんとに快くなつた證據であるといふ喜ばしてくれる保證を受けることの出來るやうな人々との交りを大切にしてゐた。

ナターシヤの服裝や解れた髮や、あたり構はずに吐き散らす言葉や、嫉妬——彼女はソーニヤに對しても、媒姆に對しても奇麗醜いに係はらず、あらゆる女に嫉妬を持つてゐた——がその友達仲間の始終笑草であつた位るまでに、ナターシヤは、自分を投げ遣りにしてゐた。

ピエールは女房の前掛の紐に縛られて居るといふ一般の說であつたが、實際その通りであつた。結婚早々からナターシヤは自分の要求を遠慮なく持ち出した。ピエールはひどくその妻の意見——之れ

は彼にとつては全く新奇な考へであつたので——即ち、彼の生活の一分が彼女と二人の家庭に屬してゐるといふ意見には、非常に驚かされた。ピエールは此の妻の要求に驚かされたが、彼は又それを得意に思つて夫れに從つた。

ピエールは、他の女には氣をかける所か、微笑んで話をすることさへ敢てせず、相當の理由が無ければ、單に遊びのためだけでは倶樂部へ飯を食ひに行くことさへ出來ず、詰らぬ氣紛れのために金を費ふことも出來ず、又用事——その中へ彼の妻は、彼の科學上の研究をも含ませてゐた——の外は少しでも永く家を開けることをし得なかつたほどに、孃天下の下にあつた。ナターシヤは、この科學上の研究のことは少しも解らなかつたのだが、それに非常に重きを置いてゐた。

凡てさういふことの代りにピエールは、自分の家の中では全家庭及び自分自身を思ふまゝにする全權をもつてゐた。彼等の家の中ではナターシヤは、自分を夫の奴隷にした、そして主人が書齋で書き物とか讀書に忙しい時には一家の者は足を爪立てゝ歩かねばならなかつた。ピエールは自分のして欲しいと思ふことは極く一寸した心持を示せば、直ぐに實行されるのであつた。彼がたゞその望みを云ひさへすれば、ナターシヤは直ぐ飛び上つて彼の欲することをしに行くのであつた。

家庭全體が、主人の指圖であると想像されたもの、則ちピエールの望み——ナターシヤはそれを推察しようとした——によつて支配されてゐた。暮し仕方や、住居の場所や、知人や親戚や、ナターシ

ヤの仕事や、子供の育て方さういふ凡てのものは、ピエールの口に出して言ふ希望に從つたばかりではなく、ナターシヤが自分との話の時に夫が說明した考へから引き出さうと努めた推論にさへも從ふのであつた。そして彼女は、ピエールの願望の要點を極めて確に推察した、で、一度それを推察すると彼女は、その推察したところのものを固執した。ピエールが自分で考へを變へる樣なことがある時でも彼女は彼の武器で彼に反對するのであつた。

ピエールには決して忘れることが出來ないが、最初の子供が生れた後の心配の時分には、その纖弱い赤坊のために取り換へ引き換へ三人の乳母を試みた、そしてナターシヤも心配のために病氣になつてしまつた。その時、ピエールは子供が、生みの母親以外の女の乳で育てられることは、子供にとつて不自然であり有害であるといふルソウの說をナターシヤに說明し、自分もその說には非常に贊成であると、ナターシヤに話した。次ぎの子供が生れると、ナターシヤは、母や、醫者や、夫自身すらも、聞いたことの無い、有害な事であると見做して反對したのに拘らず、自分の考へ通りにやると主張した、そして其の日から自分の子供は凡て自分で育てたのであつた。氣のいら〳〵してゐる時には夫婦はよく喧嘩をすることがあつたが、その喧嘩後久しく經つてから、ピエールは、妻がそれがために爭つた其の同じ自分の考へが妻の行爲や、言語に現はれてゐるのを知つて、喜び且つ驚いた。それに彼は、たゞに自分の考へを發見したばかりでなく、その中の餘計なものや、又自分がその考へを言ひ表はした時に議論の熱で呼び起されたものが、みんな純化されて居るのを發見した。

結婚生活をしてから七年後には、ピエールは自分は惡人ではないと確固とした喜ばしい、自覺をもつた。そして之れは彼がその妻の中に反射してゐる自分自身を見たから、さう感じたのであつた。自分自身の中には、彼は善いことゝ惡いことが一緒に混り合つて、それが互ひに姿を暗まし合つて居るのを感じた。しかし妻の中には、彼はたゞ眞に善いことだけが反射されてゐるのを感じた。全く善くなかつたものは何でも、みんな棄てられてしまつてゐた。そして此の結果は、論理的な考へといふ方法によつて達せられたのではなくて、ピエール自身を神秘的に、直接に反射するといふ方法によつて達せられたのであつた。

十一

二ケ月前に、ピエールは既にラストフ家で暮すことになつてゐたが、その頃ヒヨードル公爵といふ人からペテルブルグの或る協會——ピエールはその重立つた創立者の一人であつた——のペテルブルグの會員の間に騷がしかつたさま〴〵の重要な問題を解決するためにペテルブルグへ來てくれといふ手紙を受け取つた。

ナターシヤはいつも夫宛の手紙を讀むので、その通りにこの手紙を讀むだ。そしていつも夫の留守を非常に悲しく感じるのであるが、この時は、ペテルブルグへ行くやうに彼女の方から勸めた。夫の智識上の、抽象的な仕事に關する事は何事でも、彼女は、自分はさういふ事は少しも解らないながらも、極めて重視して、始終さういふ事に就いて自分が夫の邪魔になるのを非常に恐れて居た。ピエールが其の手紙を讀み終つて、臆病さうに尋ねる眼附に對して、彼女は彼に行つてくれるやうにと答へた、そして彼女の注文は、彼が歸つて來る日をはつきり定めてくれといふことだけであつた。で、四週間の暇が彼に與へられた。

ピエールが歸ると定まつてゐる日、即ち、二週間前からナターシヤは絶えず胸騷ぎと、氣のいら〳〵する狀態に陷つてゐた。

退職の將官で、時態の現狀にひどく不平であつたヂェニソフが、その二週間の間にラストフ家にやつて來た、彼はナターシヤを見て、嘗ては自分の戀したことのある人の全く變り果てた惡い姿になつてゐるのに、心の暗くなるやうな驚きを感じた。彼は、昔の魅女から見且つ聞いたものは、たゞ退屈した、鎖沈した眼容、出鱈目の返答、子供部屋のことを絶えず喋る話だけであつた。

二週間の間ぢう、ナターシヤは、氣が鬱ぎ込んで、いら〳〵してゐた、殊に母親や、兄や、ソーニヤや、伯爵夫人がピエールのために辯解をするとか、又彼の歸りが遲くなるのに對して都合のいゝ理

由を發明したりして彼女を慰めやうとする時には、それが一層甚しかつた。

『ほんとに馬鹿々々しい、馬鹿だわね、』と、ナターシヤは言ひ言ひした、『何の爲めにもなつたことがないあの人のいろんな計畫は、それにいろんな馬鹿々々しい會なんていふものは、』と、彼女はこれ迄その重要なことを確かに信じて居たその事柄に對して斯う言ひ放つのであつた。そして子供部屋へ出かけて行つて、彼女のたゞの一人の男の子の赤ン坊のペエテイヤの守をするのであつた。

何人も、この三月にしかならぬ小さい者が、母の腕に抱かれて、母がその子の唇の動作やその鼻のうごめきを感じる時に與へるやうな感じの强い、心を和げる慰めを彼女に與へる事は出來なかつた。この小さい者は彼女に斯う言つた、『あなたは怒つて居ます、あなたは嫉妬して居ます、あなたはあの人をひどい目に遭はしたいでせう、あなたは恐がつて居ます、しかしこゝに私が居ます——私はあの人ですよ。さア、私があの人ですよ……』で、それに返す言葉はなかつた。それは眞理以上であつた。

ナターシヤはよくその二週目の間、乳を飮ませ過ぎて、その子が病氣になつたほど度々、その子に慰めてもらつた。彼女は子供の病氣には吃驚させられたが、それは彼女には必要であつたのである。その子を看病をして居ると、其方が夫に對する自分の不安を耐へることが出來た。

ピエールの馬車が騷がしく入口に着いた時に、ナターシヤはその子に乳を飮ませてゐた、どんなに自分の主人が喜ぶかを知つてゐる婢姆は、音を立てずに併し急いで晴々した顏をして扉口へ來た。

『お歸りになつて?』と、ナターシヤは丁度眠りかけて居た赤坊を自分が動いて眼を覺ませまいとして、口早やな呟語で言つた。

『お歸りになりました、奥樣、』と娘姆が小聲で言つた。

血がさつとナターシヤの顏に上つて、その足は我知らず震へた、が、飛び上つて驅け出すことは思ひも及ばなかつた。赤坊は又その小さな眼を開いて、丁度『あなたはこゝに居るのね、』と言つてゐるやうに、一寸見て、又唇を懶げにぴちやつといはした。

用心深くその胸を引つ込めて、ナターシヤは子供を輕く搖りながら、娘姆に渡した、そして急ぎ足で扉口の方へと出て行つた。しかし彼女は、こんなにいそ〳〵と嬉しさうに子供の傍を離れるのは良心が咎めるとでもいふやうに、扉口の所で立ち止つて、後を振り返つて見た。娘姆は兩肘を高く上げて、子供を寢床の欄干越しに移さうとしてゐた。

『えゝ、行つてらつしやいませ、行つてらつしやいませ、奥樣、御心配なさらずに、驅けてらつしやいませ、』と娘姆はよく娘姆と女主人との間に見かける親しさで微笑みながら囁やいた。

輕い足取りでナターシヤは玄關へと驅けて行つた。口にパイプを咬へて書齋から廣間へと出て來たヂエニソフは、初めて昔のナターシヤを再び見た樣に思つた。生々した喜びの輝きが彼女の面變りした顏に光の流れを注いでゐた。

『歸つて來たのですよ!』と、彼女はヂエニソフの傍を驅けて行きながら、言つた、と、ヂエニソフは、別にピエールのことを思つてゐたのではなかつたが、ピエールが歸つて來たことを聞いて身慄ひをするほどに感じた。玄關へ驅けつけると、ナターシヤは毛皮の外套を着た丈の高い人間が、襟卷を解きかゝつて居るのを見た。

『あの人だ! あの人だ! 本當だ。あの人が歸つて來たのだ、』と、彼女は自分と自分に言つた、そして、彼の所へ飛んで行つて、彼を抱き、自分の頭を彼の胸に壓しつけて、それから、身體を退いて、ピエールの霜のついた赤い、嬉しさうな顏を眺めた。『さうだ、歸つて來たのだ、嬉しさうに、滿足して……』

この時不意に、彼女は過ぐる二週日の間自分が過して來た氣掛りの苦痛を思ひ出した。彼女の顏に輝やいて居た喜びは消えた。ナターシヤは顏を顰めた。そして非難と怒りの言葉とが一度にピエールに浴せかけられた。

『えゝ、あなたは結構です、あなたは幸福だつたでせうよ、あなたは樂しい目をなすつたでせうよ……だけど、私はどうでせう! あなたは少しは子供たちのことを考へて下すつてもいゝでせう。私は乳を飲まして育てゝ居るんですよ、私の乳が惡くなりました……ペエテイヤはその爲にすんでのことに死ぬところでした、それだのにあなたはお樂しみだつたでせう。えゝ、あなたは散々面白い目を

して……』

ピエールは、これより早くは何うしても歸れなかつたのだから、自分が惡くはないのだといふことを知つてゐた。彼は、彼女の方での此の憤怒は不當なのだから二分間も經てば全く靜まるだらうといふのを知つてゐた。取りわけ、彼は自分が全く幸福で快活であつたことを知つてゐた。彼は微笑み度かつたのであらう、が、さう思ふことさへもし得なかつた。で彼は憐れな吃驚したやうな顏をして、その嵐の前に屈服した。

『私は、どうしても歸れなかつたんだ、實際。だが、ペエテイヤは何うだね?』

『彼(あれ)はもうすつかりよくなりました、いらつしやい。あなたは氣が咎めやしませんか? あなたがみらつしやらない時には私がどんな風か、私がどんなに慘めだか、あなたに見せたいわ……』

『お前は身體はいゝかい?』

『いらつしやい、いらつしやい、』と彼女は、ピエールの手を離さずに言つた。で、彼等は自分たちの室に這入つた。ニコライ夫婦がピエールの樣子を見に來た。彼は子供部屋で、その大きな右の手で眼を覺ましてゐる男の兒を抱いて、搖つて居た。赤坊の大きな顏や、開いた齒のない口に嬉しさうな微笑が溢れて居た。嵐はずつと前に吹き止んで了つて、悅びの明るい、晴れやかな輝きが、夫と息子をやさしく眺めてゐる時ナターシヤの顏一杯に流れて居た。

『で、ヒョードル公爵とお話が何もかも都合よくゆきましたの?』と、ナターシヤは言つて居た。

『あゝ、うまくいつたよ。』

『御覽なさい、頭を持ち上げてゐますよ、』ナターシヤは赤坊のことを言つた『あゝ、この子はほんとに私を吃驚させたわ、で、あなたは公爵夫人にお會ひなすつたの?ほんとでせうか、あの方が戀して居らつしやるのはあの……』

『あゝ變じやないか……』

この時、ニコライがその妻と一所に這入つて來た。ピエールは子供を抱いたまゝで身體を屈めて彼等に接吻した、そして彼等の問ひに答へた、所で彼等が論じ合はなければならぬ興味のある事柄が多かつたにも拘らず、小さな帽子の中にグラ〳〵する頭を入れてゐる赤坊が、ピエールの全注意を引いて居たのは明かであつた。

『ほんとに可愛いこと!』と、伯爵夫人マリヤは言つて、赤坊を見て、それをあやした。『たゞ一つ私に解らないことがあるのはね、ニコライ、』と、彼女は、夫の方を振り向きながら、言つた、『何うしてあなたはこんな可愛い小さな者たちをお可愛がりにならないかといふことなんですよ。』

『いや、どうも私にはそんな氣が起らない、そんな氣が起せないんだ、』と、ニコライは、赤ン坊を冷やかに眺めながら言つた。『たゞ一片(きれ)の肉だもの。來給へ、ピエール。』

『感心ですわ、この方はほんとに愛情の深いお父さんですもの、』と、伯爵夫人マリヤは、自分の夫のために申譯をして言つた。『だつて一年かそこいら經つたばかりですのにねえ……』

『あら、ピエールは全くいゝお守ですよ、』と、ナターシヤは言つた、『自分の手は赤ン坊の背中を載せる様に出來て居るんだつて言つて居るんですよ。』

『えゝ、さうですよ、だが、守ばかりぢやありませんよ、』と、ピエールは笑ひながら叫んだ、そして急いで赤ン坊を抱き上げて、それを嬤姆の手に返した。

十二

眞の家庭には何處にも見らるゝ如く、このルイシーヤ・ゴオルイの家には、幾つもの全く別々の世界が一緒に生活してゐた。そしてそれ等の世界の各々が、自分たちの個性を保持すると共に、又互ひに讓り合ひ、さうして一つの調和した全體に混り合つて居るのであつた。その中に起つた有らゆる出來事は、凡てのさういふ集團にとつて、同じ様に重要なことであり、喜ばしいことであり、又苦しいことであつた。併し又その各々の集團は、全く他の者とは關係のない色々の事件に對して、それを喜ぶとか、悲しむとかにつけて、各々自分一箇の根據を持つて居た。

さういふ風にピエールの歸宅は喜ばしい且つ重要な事柄であつて、一家の中の有らゆる集團にさういふやうに、反照された。

召使たち——彼等はその主人の最も過たない判斷者である、何故といふに、彼等が主人を判斷するのは、主人の會話とか感情の言ひ現はし方からではなくして、その行ひや生活の仕方から判斷するからである——は、ピエールの歸つて來たことを喜んだ。彼等はピエールが家に居れば、自分等の主人なる伯爵が、領地内の百姓を見廻りに毎日は行かないだらうし、機嫌がよく、元氣がよからうといふことを知つてゐたからである。それから又祭日には、自分等全體が値のある贈物を貰へるといふことを知つてゐたからである。

子供たちや、その嬤姆たちもベズウホフの歸宅を喜んだ。といふのはピエールほど彼等を家の中の一般の交際的生活へ引き入れてくれる者は誰もなかつたからだ。翼琴でエコセイズ（彼の知つてゐる唯一の曲）の彈けるのは彼であつた——彼の言つたやうに、それに伴れて、どんな舞踏でも出來るのであつた——それから又彼はきつと彼等全體に土産を持つて來る人であつた。

縮れた亞麻色の髮をした、美し眼の、瘠せぎすの、纖弱な、今はもう十五になる悧好な少年のニコレンカ・バルコンスキイも喜んだ、それは彼の所謂ピエールをぢさんは、彼の熱烈な愛と崇拜の目的であつたからであつた。誰もニコレンカの胸へピエールに對する愛情を注ぎ込んだものはなかつた、

それ所か彼は、極稀にしかピエールに會はなかつた。伯爵夫人マリヤは彼を育てたのだが、自分が夫を愛したやうにニコレンカにも、自分の夫を愛する様にさせやうと努めた、でニコレンカはその叔父を愛する様になりはしたが、彼が叔父を愛するといふ心持の中には侮蔑の殆んど見ないやうな蔭があつた。彼はピエールを崇拜した。彼はニコライ叔父のやうに驃騎兵とか、聖ゲオルギイの騎士にはなりたくなかつた、彼はピエールのやうに學者で、怜悧で深切な人になり度いと思つた。ピエールの前にゐると彼の顔にはいつも幸福さうな輝きがあつた、そしてピエールに話しかけられると、彼は眞赤になつて、息もつかなかつた。彼はピエールの言葉は一言も聞き漏らさなかつた、そして後になつて、一人の時とか又はデツサルと一緒の時とかに其の一句一句を思ひ出して、その正確な意味を考へて見た。ピエールの過去の生活、その千八百十二年以前の彼の不幸（それに就いてはニコレンカは、自分が聞いた極く僅かな言葉から、漠然とした、浪漫的な繪を作つてゐたのである）モスクワに於ける彼の冒險、フランス人の捕虜になつたこと、プラトン・カラターエフ（その人のことは彼はピエールから聞いて居た）、ナターシヤに對する彼の戀（そのナターシヤをニコレンカは全く特別な感情で愛してゐた）、それから、中にも、自分の父——そのことはニコレンカは覺えて居なかつた——とピエールが親しかつたこと、凡てからいふ事柄が、ニコレンカの眼の中で、ピエールを英雄にし、聖者にしたのであつた。彼の父やナターシヤに就て人々が漏らすのを聞いた話の節々から、ピエールが父親のことを

話す時の感情深い様子から、又ナターシヤが父親のことを話す時の微妙な優しさから、丁度戀といふものに對する概念を作り始めてゐたばかりの父はナターシヤに戀してゐて、その死に臨んで彼女を友達に讓つたのだといふ事を考へ合はせた。その父については、少年は何の記憶も持つてゐなかつたが、彼にとつては父は、人が明かな觀念を持つことの出來ないやうな神聖なものであつた。それに就ては、皷動する心臟や悲みと喜びの涙なしに父のことを考へることは出來なかつた。

さういふわけで、この少年も亦ピエールの歸つて來たのを喜んだ。

家にゐた客人たちもピエールに會ふのを喜んだ、何故なれば彼が何ういふ集會でも活氣づかせ、それの異つた分子をうまく混り合はせてしまふ男であつたからである。

家の中の大人の連中は、日々の生活を一層滑かに容易に送らせてくれる友達を見るのを喜んだ。

老婦人たちもピエールが持つて來た土産物を喜んだし、ナターシヤが平素のナターシヤに返つたことを尙ほ一層喜んだ。ピエールは、さういふ種々の種類の人々が自分に對して抱いてゐる様々な考へを感じた。そして早速それ等の人々みんなの期待を滿足させようとした。

彼は虛心（うつかり）な、よく物忘れをする男であつたが、その妻の造つてくれた覺書の助けで、何も彼も買ひ求めて來た、姑や義兄からの賴まれた用事は一つも忘れず、ピエールフ夫人にやる衣服や、甥たちにやる玩具なども忘れなかつた。

その結婚生活の初めの頃には、彼が買つて来ようと思つたものは何一つ忘れはしないだらうといふ妻の期待が彼には不思議に思はれた、そして初めて家を明けた後で、自分がすつかり忘れてしまつて歸つて来た時の、妻のしかつめらしい不機嫌な顔は忘れられない程であつた。所が、そのうちに彼は之れに馴れて来た。ナターシヤが自分の爲めには何にも用事を頼まずに、ピエールが何か買つて来よ うかと云ひ出した時に、他の人々だけの爲めに何か買つて来てくれと頼むのを知つたので、彼は、今では、家中の者に土産物を買ふことに、我ながら驚いたことには、子供らしい愉快を感じるのであつた。そして何一つ忘れなかつた。若しナターシヤの非難を招くとすれば、それは餘り多く買ひ過ぎたとか、或は餘り高く買ひ過ぎたとかいふ事にあるのであつた。世間の眼から見ての彼女の他の缺點——それはピエールの眼には美しい性質だと思へるのだが——即ち、身躾のだらしのないことゝ、投げ遣りとに據てゝ加へて、ナターシヤには吝嗇の欠點があつた。

ピエールが家庭生活を始めるやうになつて、大きな家で費用が嵩むやうになつて以來、彼は、驚いたことには、自分の家の費用は、これ迄自分が過去に於て使つて来たものゝ半分にしか當つてゐないことゝ、そして、殊に先妻の負債の爲めに不如意になつて居た生活狀態が、段々よくなつて来かゝりつゝあることゝに氣がついた。彼の生活に脈絡がついて来たので、その生活費が非常に安く上つたのである。彼の以前の生活の仕方に於て最も金の要つた贅澤、即ち、いつでもそれを全然變へて了ふことが出來るといふ可能をピエールは今は持つてゐなかつたし、又變へたいといふ希望を持つてもゐなかつた。彼は、今はもう自分の生活の様式は死ぬまで全く定まつて了つたのを感じた、又それを變へるなどは彼の力には及ばぬことであると感じたのである、だから、その生活の仕方は安上りであつた。

嬉しさうに、顔に笑を浮べてピエールは買物の包を解いて居た。

『御覽！』と彼は言つて、商賣人のやうに品物の一つを開いた。ナターシヤは一番上の娘の子を膝の上に載せて、夫の眞向ひに座つてゐた、そして、彼女はその輝く眼を夫から夫の見せて居る品物の方へ移した。

『それはピエーロフの奥さんに？素敵だわ。』から言つて彼女は、その品物のよいのを見るために、それに觸つて見た。

『一ヤアド一留（ルーブル）もしたでせう？』

ピエールは値段を言つた。

『いゝ値だこと、』と、ナターシヤは言つた。『まあ、どんなに子供たちが喜ぶでせう、お母さんもね。ですが、私にこんな物を買つて来て下さるには及びませんのに、』と、彼女は、丁度その時分に流行（はや）りだした型の金と眞珠の櫛を賞でながら微笑を押へ兼ねて、言ひ添へた。

『アデエルが買つて行けつて頻りに勸めるもんだからね、』と、ピエールは言つた。

『何時さしませうね？』ナターシヤはそれを髪にさした。『これは小さいマーシヤを連れて出る時にさしませう、みんなが又來るかも知れませんよ、さア、行きませう。』

で、土産物をまとめて、彼等は先づ子供部屋に行き、それから老伯爵夫人の所へと行つた。

老伯爵夫人は、いつものやうに、ピエールとナターシヤが包を抱へて客間に這入つて行つた時には、ピエーロフ夫人とベーシエンスをやつてゐた。

老伯爵夫人はもう六十歳を越してゐた。髪はすつかり灰色になつてゐた、そして顔全體を縁飾で取り圍むやうな帽子を被つてゐた。顔には皺がより、上唇は落ち込んで、眼はどんよりして居た。

その息子の死に引續いて間も無く夫が死んでから、彼女は自分が圖らずも此の世で忘れられた、人生では何の目的もなく又何の興味もない人間であると感じた。彼女はたゞ食ひ、飲み、眠り、眼を覺ましては寢てゐた、が生きては居なかつた。人生は彼女には何の印象をも與へなかつた。彼女は人生からは安息以外には何物をも求めなかつた、そしてその安息を、彼女はたゞ死の中にのみ見出し得るのであつた。しかし死が自分にやつて來るまでは彼女は生——卽ち自分のさま〴〵の生活力を用ひること——を續けなければならなかつた。

極く年の行かぬ子供とか、極く年老つた人々のうちに見られるものが、彼女のうちには、その最高度に於て、見られるのであつた。外形的の目的といふものは一つゝ彼女の生活には見られなかつた、

見られ得るものと言つては彼女の様々の能力と性癖とを働かせる必要だけであつた。彼女は食ひ、眠り、考へ、話し、泣き、働き、怒り、などしなければならなかつたのだが、それは唯單に彼女が胃や、腦や、筋肉や、神經や、乃至脾臟を持つて居たからといふに過ぎなかつた。その生活力が充分強い場合には、自分達が努力して居る目的が、それ以外の他の目的——自分たちのさま〴〵な能力を行ふといふ目的——をわれ〳〵の眼界から隱してしまふものであるが、伯爵夫人が今言つたやうな總ての事をするのは夫れとは違つて、何等の外的な動機によつて、促されたのではなかつた。彼女はたゞその肺と舌とを働かせる必要があるから物を言ふのに過ぎなかつた、彼女は涙から來る肉體的の安堵を要したが故に子供のやうに泣いた、凡てはそんな風であつたのである。生活力の充分に強い人々にとつては、動機であつたものが、彼女にとつて明かに口實に過ぎなかつたのである。

斯うして午前には、殊に前の晩濃厚なものを食べた時には、彼女は怒を發する機會を求めた、そして先づ最初に來る口實——ピエーロフ夫人の耳の遠い事——に突掛るのであつた。

室の一端から老伯爵夫人は低い聲で、ピエーロフ夫人に何か話しかける。

『今日は温い様ですね、あなた。』と、伯爵夫人は小聲で言ふ。そして、ピエーロフ夫人が『さうですよ、あの人たちが來ました。』と、答へると、老伯爵夫人はぶり〳〵して斯う呟くのであつた。『まあ、この女は何て聾で、間抜けなんだらう！』

次の口實は喫煙草であつた、伯爵夫人はそれが乾き過ぎて居るとか、濕り過ぎて居るとか、或は粉にしやうが悪いとかと思ふのであつた。斯うした苛々した氣分の破裂の後には、咀汁的な色がその顏に現はれて來るのであつた、で、下婢たちはいつビエーロフ夫人が又襲になるか、いつ喫煙草が濕つてゐるか、それからいつ老伯爵夫人の顏色が又黄色くなるかを間違ひない徴候で知つてゐた。その脾臟を使はなければならなかつたと丁度同じやうに彼女は時々それ以外の能力を使ふ必要があつた、ものを考へるといふことの口實は、ペーシエンスであつた、泣きたいと思ふ時分には、その涙の目的は死んだ老伯爵であつた。昂奮を要する時分には、その題目はニコライのことゝ、それから彼の健康を心配することであつた。何か意地の悪いことを言ひ度いと思つた時には、彼女の口實は、伯爵夫人マリヤであつた。彼女が、自分の言語の機官を働かせやうと思ふ時には——そればいつも、彼女が暗くした部屋で食後の休息をした後の七時頃のことであるが——その時の口實は、話をする中に見出されるのであつた。そして、その話はいつも同じもので、いつも同じ聽手に對つて話されるのであつた。

老伯爵夫人のさういふ狀態は、家中の者に理解されて居た、しかも誰も決してその事を口に出しては言はなかつた。誰も彼も彼女の要求を滿足させる爲めに出來るだけの力を盡したのである。たゞ極く稀に、ニコライや、ピエールや、ナターシャや、それから伯爵夫人マリヤの間に、老伯爵夫人の狀態に對する自分たちの了解を漏らすやうな悲しい半微笑が取り交はされた。

しかし、さういふ瞥見は、その以外に何か或る他の事を言つてゐた。さういふ瞥見は、老伯爵夫人はすでに人生に於ける仕事を成し終つたといふこと、今彼女に就て見られるものは彼女の凡てゞはないといふこと、誰も皆これと同じ樣になつてしまふのだといふこと、彼等は喜んで彼女のために讓歩して居た此の憐れな人に對しては十分忍從するものだといふことを語つてゐた。Momentso mori（生きてゐる遺物）——と、人々のさういふ瞥見が言つてゐた。

たゞ全くの心のなき鈍な人々や、小兒等のみが此の事を解せずして、老伯爵夫人に寄りつかなかつた。

十三

ピエールと、彼の妻とが客間に這入つて來た時には、老伯爵夫人はペーシエンスの勝負といふ精神上の運動をやらなければならない何時も狀態であつた、だから老伯爵夫人は、習慣で言葉を出すには出したが、それは何時もピエールや自分の息子が歸つて來ると繰り返す、『丁度いゝところだつた、いゝところだつた、お前、私たちはずゐぶんお前の歸りを待ちましたよ。まあ有難いことに、

歸つて來ておくれだつたね。』と、いふ言葉であつた、そして土産物が渡されると、又もう一つのおきまり文句を言ふのだつた、『貰いのはお土産ではありませんよ、お前、……私のやうな老人のことをいつも忘れないで居ておくれなのが有難い……』その時、ピエールが這入つて來たのが嬉しくなかつたのは明かであつた、といふのは夫れがために老伯爵夫人は、骨牌を配ることを中止しなければならなかつたからである。彼女はペーシエンスの勝負を止めた、そして、そこで始めて土産物に注意を向けた。老伯爵夫人への土産物は精巧なる細工を施した骨牌箱と、蓋の附いた、女の牧羊者の繪を畫いた美しい青色のセエヴルの茶碗と、それから、ピエールがペテルブルグの小肖像畫家に畫かせた、老伯爵の肖像付きの金の嗅煙草箱とであつた。老伯爵夫人は永い間これを欲しがつてゐたが、丁度その時は彼女は泣きたい心持には少しもならなかつたので、よそ〳〵しげに其の肖像畫を見たゞけで、寧ろ骨牌箱の方に氣を取られて居た。『有難う、お前、お前さんは私の慰めですよ、』と、彼女はいつもの通り言ふのであつた。『何よりも、お前さんが歸つて來ておくれだつたことですよ。それが何よりですよ、お前さんほんとにあの娘を叱らなければ不可ませんよ。どうしてつて、彼女はお前さんが居ないとまるで憑きものでもしてゐる様です。何にも眼に這入らなけりや、何にも考へられなくなるんです、』と、彼女は、いつもの通り言つた。『御覽よ、アンナ・チモフイエウナ、』と、彼女は言ひ添へた、『倅の買つて來てくれた骨牌箱はなんて良いんでせう。』

ピエーロフ夫人はその土産物を賞めた、そして自分の貰つた反物に心を奪はれてゐた。

ピエールも、ナターシヤもニコライも、伯爵夫人マリヤも、それからヂエニソフも話したいことが澤山あつたのだが、それは老伯爵夫人の前では話すことが出來なかつた。老伯爵夫人に秘して置かなければならぬことがあつたと云ふわけではないが、若し彼等がその前で思ひのまゝ話し合つたならば、彼女が無暗に出す問ひに一々答へて、これ迄にもう幾度となく繰り返した色々の事——誰れそれはもう死んだとか、誰れそれは結婚したとかいふやうな、老伯爵夫人のいつも忘れてしまふやうな、事柄を又繰り返へさねばならなかつたからである。しかし彼等は例に依つて客間で茶に坐つた、そしてピエールは、老伯爵夫人にさへも興味がないやうな、彼女の無用な問ひに答へ、ワシーリイ公爵は老けて來たとか又、マリヤ・アレキセエウナ伯爵夫人が宜しく云つてくれと言つたとか、いふやうなことを話して居た。

こんな會話は誰にとつても何の興味もなかつたが、といつて避けるわけにも行かないで茶の時中つゞけられた。家族の中の大人の連中はソーニヤが世話をしてゐたサモワルのある圓い茶卓の周圍に集つて居た。子供たちは、彼等の家庭教師や媒婦たちと一所にすでに茶を濟ましてゐたので、その聲が次ぎの間で聞えて居た。茶では、みんなが何時もの各自の場所に坐つてゐた。ニコライは少し離れた小さい卓子に寄つて暖爐の傍に坐つて居るので、そこへ彼の茶は渡された。顏のすつかり灰色になつ

た年老つた兎犬の牝犬のミルカ、即ち最初のミルカの娘が、全くの灰色の顔をして、ニコライの傍の椅子の上に坐つて居た。その縮れた髪の毛にも、口髭にも、頬骨にも、幾筋かの白髪の交つたヂェニソフは、將官の上衣の釦も掛けずに、伯爵夫人マリヤの傍に坐つてゐた。ピエールは、その妻と老伯爵夫人との間に坐つて居た。彼は老夫人をも喜ばせもすれば、彼女に解りもすると思ふやうな話をしてゐた。彼は外面的な社會上の事件や、又嘗ては此の老伯爵夫人の同時代の人々の一團を形造つて居て、そして嘗ては實に人の實際に生きた集團を成してゐたのだが、今はその大部分は方々に散り々々になつてしまひ、老伯爵夫人と同様に、彼等が人生に於て播いておいたものゝ離れ々々になつた穂を刈りながら、各自の餘生を送つてゐるといふやうな人々の話などをした。しかし彼等、即ちさういふ同時代の人々こそ、老伯爵夫人には考へる値のある唯一の實在の世界を成して居るやうに思はれたのであつた。ピエールの熱心な様子で、ナターシャは彼の旅行は非常に面白いものであつて、彼はそれを皆に話したいと思つてゐるのだが、老伯爵夫人の前では思ふまゝに話すことをなし得ないでゐるのだと思つた。ヂェニソフは、家族の一人ではないので、ピエールの用心してゐることが解らなかつた、その上、當時の事態を不滿に思つてゐたので、ペテルブルグに起りつゝあつた凡ての事柄に非常に興味を持つてゐた。彼は、セミヨノウスキイ聯隊の近頃の醜聞や、アラクチェーフのことや、聖書協會のことなどに就いてピエールの話を聞かうと頻りに努めてゐた。ピエールは時々さういふ事に就

いて話し始めようとするのであつたが、ニコライや、ナターシャがイワン公爵やマリヤ・アントノウナ伯爵夫人の健康の話へ彼を引き戻すのであつた。

『おいゴスネルとマダム・タタリノフの馬鹿々々しいことは何うなんだ、』と、ヂェニソフは言つた『それ所か以前よりも悪いんだ。聖書協會が今では政府全體なんだ。』

『續いてゐるかつて?』と、ピエールは言つた『それは何の事なんですね、non cher ami (お前さん)?』と、老伯爵夫人は尋ねた、丁度茶を飲んだ後なので、物を食べた後の不機嫌になる口實を探して居たのであつた。『政府のことを何う云つておいでゞしたの?私には解りませんね。』

『いや、ね、お母さん、』と、ニコライが言葉をはさんだ、彼は凡ての事を母親の言語に飜譯する術を知つてゐた。『アレキサンドル・ニコライエヰッチ・ガリーツインが會をこしらへたんです、で、あの人が大へんな勢力を持つてゐると云ふんですよ。』

『アラクチェーフとガリーツインが、』と、ピエールは氣が附かずにつゞけた、『今では實際上政府そのものなんだ。で、實にひどい政府なんだよ!彼等は何事にでも謀叛があるやうに見るんだ、彼等は有らゆるものを恐れて居るんだ。』

『何ですつて、アレキサンドル・ニコライエキツチ公爵に悪いことがあるといふのですか！あの方は、實際立派な方ですよ。私は以前によくマリヤ・アントノウナの家であの方にお目にかゝつたことがありますよ、』と、伯爵夫人は惱ましげな調子で言つた。所が誰も何とも言はなかつたので、尙ほ一層惱ましさうに、彼女はつゞけた、『近頃は誰も彼も人を惡くいふやうになつたのですね、聖書協會、それに何か惡いことでもあるのですか？』で、老伯爵夫人は席を立つた。(誰も彼も皆立つた)、そして、むづかしい顏をして隣りの喫煙室の自分の卓子の方へズーツと出て行つた。

それに續いた悲しげな沈默の最中に、次の室から子供たちの聲や笑聲が聞えて來た。確かに、子供たちの間には何か面白い遊び事が始まつてゐるらしかつた。

『濟んだ、濟んだ！』と、小さなナターシヤの嬉しさうな金切り聲が特に大勢の中で一番高く聞えた。ピエールは伯爵夫人マリヤやニコライとチラと目と目を見合はした、(ナターシヤを彼はずつと見つゞけてゐたのであつた)、そして幸福さうに微笑んだ。

『愉快な音樂だ！』と、彼は言つた。

『アンナ・マカロウナが靴下をこしらへ上げたんですよ、』と、伯爵夫人マリヤは言つた。

『うん見に行かう、』と、ピエールは言つて、飛び起つた。『ねえ、』と、彼は言つて扉口の所で立ち止つた、『私が特別にあゝいふ音樂が好きた譯が分るでせう——あれが最初に有らゆるものが無事だといふ

ことを私に知らせてくれるんです、私が今日歸つて來る時に家へ近づくに從つて私の不安はだん〳〵ひどくなつて來たんです。玄關の間へ這入つて來ると、私はあのアンドリユーシヤの笑ひ聲を聞いたのです、で、私はすべてが無事だといふことを知つたんです……』

『覺えがある、その感じは、僕にも覺えがあるよ、』と、ニコライが合槌を打つた。『僕は一緒に行けないんだ——靴下は僕を驚かすために違ひないんだよ。』

ピエールは子供たちの所へ這入つて行つた、すると叫び聲や笑聲が一層高くなつた。『さあ、アンナ・マカロウナ、』と、ピエールが叫んだ、『こゝへ、部屋のまん中へ、一、二——の號令で——私が三といつたら、こゝに立つんだ、お前は私の腕へ來るんです。さあ、一、二 ……』しんと靜まり返つた。『三！』で子供たちのわツといふ叫び聲が部屋の中に起つた。『二つ、二つ！』と、子供たちは叫んだ。

子供たちが叫んだのは、アンナ・マカロウナが、たゞ自分だけが知つてゐる秘術で、自分の針で一度に一足編んでしまふといふ靴下を指したのであつた。彼女はいつも子供たちの前で靴下が一足出來上ると、片方からもう一方のを引張り出す嚴肅な儀式をやるのであつた。

十四

それから間もなく子供たちがお休みを言ひに入つて来た。子供たちはみんなに接吻した、家庭教師や女中たちがお休みなさいを言つて出て行つた。デツサルだけが自分の教へ子と共に後に殘つた。この家庭教師は、その教へ子に下へ降りようと小聲で言つた。

『Non, M. Desalle (ノン、ムッシュ、デツサル)(いゝえ、デツサルさん)私は叔母さまにお願ひしてもう少しこゝに居ます、』と、ニコレンカ・バルコンスキイが、同じ様に、小聲で答へた。

『Ma tante (マ、タント)(叔母さま、)私をこゝに居させて下さいませんか?』と、ニコレンカは叔母の傍へ行つて斯う言つた。彼の顔は懇願と、昂奮と、熱心とに充ち滿ちて居た。伯爵夫人マリヤは彼を見て、それからピエールの方を向いた。

『あなたが此所に居らつしやると、この兒は何うしても此所を離れないんですよ……』と、彼女は言つた。

『私が今直ぐに連れて行きますから、M. Desalle Bon Soir (ムッシュウ、デツサル、ボン、ソワル)(お休みなさい)』と、ピエールは言つて、このスキツツル人の家庭教師に手を差し出した。それから彼は微笑みながらニコレンカの方へ振り向いた。『未だ君には沁々會はなかつたね。マリイ、段々よく似て來るぢやありませんか。』と、彼は伯爵夫人マリヤの方へ振り向いて言ひ添へた。

『お父さんに似て來るんですか?』と、少年は顔を眞赤にして、喜びに充ちた、輝く眼でピエールを

見上げて言つた。

ピエールはその方にうなづいて見せて、子供たちによつて途切れてゐた會話をつゞけた。伯爵夫人マリヤは粗布の刺繍を持つてゐた、ナターシヤは夫をぢつと見詰めて坐つてゐた。ニコライとデエニソフとは立ち上つて、パイプを持つて來さして、煙草を吹かし、サモワルの所に退屈さうに執拗く坐つてゐるソーニヤから茶のコップを受取つて、ピエールに色々のことを訊いてゐた。縮れ毛の、繊弱な少年は、眼を輝かして、誰にも顧みられずに隅の方に坐つて居た。ピエールの一擧一動を見るために、その縮毛の頭と、折れ襟の上へ出てゐる細そりした頸を動かしながら、彼は、時々身震ひして、明らかに或る新たな激しい感情に胸を躍らしてゐると云ふ風で、何か獨りで呟やいてゐた。

話題は、政府の高官たちの其の當時の醜聞に移つて行つた。さういふ問題は、人民の大多數が、いつでも國内の政治の中で、最も興味を持つものである。官職に於いて失意の境遇にあるので、常々政府には不滿を抱いて居たデエニソフは當時ペテルブルグに行なはれて居た、彼の考へでは愚劣なことである所の凡ての事を悦に入つて聽いてゐた。そして激しい皮肉な言葉でピエールの言語を批評してゐた。

『昔は何んかになるには、ドイツ人でなくちやならなかつた、が、今ぢやタタリノフ家の女や、クリユウドネル夫人と踊らなくつちやならん、エツカルトシヤウゼンとか、さう云ふ手合のもの……を

讀まなくつちやならんのだ。なア！　もう一度昔のボナパルトを浮ばしてやり度いもんだね！　彼奴なら、奴等の頭からさういふ愚劣なことを叩きだしてくれるよ。そのシュワルツといふ奴にセミヨノウスキイ聯隊を渡すなどゝは、實にもつての外ぢやないか？』と、彼は叫んだ。

ニコライは何事にも缺點を見出さうとするヂエニソフのやうな氣質ではなかつたけれども、政府を批評するのは威勢のいゝ適切なことだと思つた、そこで、彼は、Aは何々省の大臣になつたとか、Bは何々の知事になつたとか、又皇帝が斯う言つたとか、大臣があゝ言つたとかいふことが、一ばん重要な事件であると信じてゐた。で、彼は自分はその問題に興味を持つて、それに就いてビエールに訊かなければならぬ義務があるのだと思つた。さういふ風でこのニコライやヂエニソフの出したいろ〳〵の質問の爲めに、會話は政府の最も高い役人たちに關する噂話のいつもの道に沿うて續けられて居た。

所が、平素から夫の有らゆる考へ、有らゆる表情を知つて居たナターシャは、ピエールがその間、始終その話題を變へ、自分の考へ、即ち、ペテルブルグへ行つて其の新らしい友達のヒョードル公爵と話し合つて來た事柄に就いて自分の胸を打ち開けたいと思つてゐるのを見てとつた。彼女は又夫が自身でその方へ話を運んで行けないのを見て、斯う云ふ問ひを出して彼を助けようとした。——ヒョードル公爵の方のことは何うなりまして？

『何ういふことかね、それは？』と、ニコライは尋ねた。

『同じことをいつも繰り返すのだよ、』と、ピエールは、周圍を見廻しながら、言つた。『もう事態は堪へ切れない程に惡くなつてゐると誰も思つてゐるし、全力を奮つて現狀に反對するのが、凡ての正直な人の義務だと誰も思つてゐるんだ。』

『といつて、正直な人には何が出來るんだらう？』と、ニコライは、少しばかり顏を顰めながら、言つた。『何うしたらいゝんだ？』

『いや、それは……』

『書齋へ行かう、』と、ニコライは言つた。

余程前から子供の所から呼びに來るだらうと思つて居たナターシャは、自分を呼んでゐる媒姆の聲を聞いたので子供部屋へ行つた。伯爵夫人マリヤも彼女と一緒に行つた。男たちは書齋へ行つた。所がニコレンカ・バルコンスキイもソツと、誰にも見附けられずに書齋へ入り込んで、窓の傍の暗い所の書物机の傍に坐つた。

『それで、君は何うしようといふんだね？』と、ヂエニソフが言つた。

『いつ迄もこんな空想的な計畫さ、』と、ニコライは言つた。

『所でね、』と、ピエールは口を開いて、坐らずに、部屋の中を歩き、時々立ち止つて舌を縺らしながら速い手眞似をして、話した、『かういふのが、ペテルブルグに於ける事態なんだ、即ち、皇帝が何事

も打ちやつてしまはれたんだ。皇帝は全く神秘主義に包まれて居られるんだ。』（神秘主義をば、ピエールは今は誰の場合にでも容赦しないのだ。）『皇帝の求められるものは平和だ。そして皇帝は有らゆるものを壓し潰ぶし破壊してゐる、信仰もなければ良心もないあゝいふ人間、即ちマグニツキイとかアラクチエーフとか、その他の tutti quanti（有象無象）……によつて平和を得てゐられるんだ。君が若し自分で財産の管理をしなくなつて、たゞ平和と安靜を求めるだけであつたとすれば、君の支配人が殘酷であればあるほど、一層容易に君の目的が遂げられるといふことを君も認めるだらう、』と、ピエールは、ニコライの方を振り向いて言つた。

『だが、さういふことは一體どういふ事なんだね？』と、ニコライは尋ねた。

『いや、何も彼も破滅にならうとしてゐるんだ。法廷では賄賂が行はれてゐる、軍隊では强壓と練兵の外何もないんだ、追放だ——人間は塗炭の苦みに遭つてゐるんだ、社會の進歩は止められてゐる、若い、敬重すべきものは何でも彼でも奴等が叩き潰してゐるんだ、かういふ狀態では、とてもやつて行けるものでないといふ事は誰にも解つてゐる、緊張が餘りに强過ぎる、糸は切れるに定つて居るのだ、』と、ピエールは言つた（政府といふものが存在してゐる限り、政府の働らきを見抜いた人々が、いつも云ふ通りに）、『僕はペテルブルグで或る事を話して來たんだ——』

『誰に話したんだね！』と、ヂエニソフが尋ねた。

『誰だか知つてる筈ぢやないか、』と、ピエールはその眉の下から意味ありげな眼付きをして言つた、『ヨードル公爵とその他の連中だ。教育や慈善事業に熱心なのは勿論非常にいゝことなんだ、あの連中の目的やその他の事は皆甚だ結構なことだが、現今の狀態では、やらなければならない事は、それより以外の事にあるんだ。』

その時ニコライはふと甥が居るのに氣が付いた。彼は嫌な顏をして、その傍へ行つた。

『何故お前はこゝに居るんだ？』

『そのまゝにして置き給へ、』と、ピエールは言つた、そしてニコライの手を取つて、彼は話をつゞけた。『それだけではまだ充分ぢやないんだ、さう私は彼等に言つたのだ、それより外の事が今は必要なんだつてね。斯うして今にも糸が切れるのを待つてゐずに、みんなが避けることの出來ない革命を待つてゐずに、出來るだけ多くの人々が出來るだけしつかりと手をつないで、大瓦解に抵抗しなければならないんだ。あらゆる壯年と精力が、他へ引張られ行き、空費されてゐるんだ。或る者は女の爲めに、或る者は名譽の爲めに、又或る者は見掛けの立派なものや金錢の爲めに誘惑され——彼等はみんな間違つた方へ行きつゝあるのだ。獨立した、君や僕のやうな獨立した正直な者は、——さういふ人間はもう一人も殘つてはゐないんだ。もつと會の範圍を擴張して、mot d'ordre（會の主旨）を單に忠義といふことだけにしないで、獨立や活動も主旨にしろと、僕は言ふんだ。』

ニコライは甥の傍を離れ、ぶり〳〵しながら椅子を引出して、それに腰を下ろした。彼はピエールの言ふことを聞いて居るうちに、不滿さうに咳拂ひをした、そして段々ひどく顏を顰めた。

『だが、一體どう云ふ目的をもつての活動なんだ?』と、彼は叫んだ。『そして何う云ふ態度を君は政府に對して取るのだ?』

『それは君、擁護者の態度さ! 政府が許しさへすれば、會は秘密結社にさへなる事はなからうと思ふね。政府に反對するどころか、我々は眞の意味の保守主義なんだ。それは充分な意味に於ての、Dzhentelmenof(紳士)の會なんだ。ブガチョフが僕や君の子供たちを慘殺するのを防ぎ、アラクチエーフが僕を軍役殖民地に運ぶのを防ぐために、たゞ一般の幸福と安寧を得るといふ目的で、互ひに手をつないで居るに過ぎないんだ。』

『さうだ、だが、それが秘密結社なんだ、だから反抗的な有害な結社で、社會に害毒を流すことになるばかりなんだ。』

『何うして? ヨーロッパを救つたツウゲンド・ブンドは(人々はロシアがヨーロッパを救つたなどゝは信ずることを敢てし得なかつたが)社會に害毒を流したらうか? ツウゲンド・ブンドと云ふのは、德行の結社だ、それは愛と相互扶助なんだ、それはクリストが十字架の上で說いたことなんだ……』

ナターシャは、會話の最中に這入つて來て、喜ばしさうにその夫を見た。彼女は夫の話してゐることが嬉しかつたのではなかつた。それはみんな單純な事柄であるし、それに又彼女がずつと前から知つて居たことであるやうに思はれたから、その話は彼女にとつては、大した興味が無かつた。ナターシャが、さういふ氣のしたのは夫れが出て來る源——即ち、ピエールの全靈——を彼女が知つてゐたからである。けれど、ナターシャは、ピエールを見守つてゐたのは、人々から忘られて了つてゐた、折襟の、更にもつと夢中で嬉しさうにピエールの熱心な熱中した姿を見て喜んでゐた。

細そりした頸の男の兒であつた。ピエールの話す一語一語が其の心を燃え立たした、そして彼の指は神經的に動いて、無意識に叔父のテーブルの上にある封蠟の棒やペンを取り上げて、片々に碎いた。

『それは君の想像してゐるものとは全く異ふ、僕の云ふのは、ツウゲンド・ブンドのやうな結社なんだ。』

『おい、君、そいつは腸詰食者にはもつてこいだね——そのツウゲンド・ブンドとか云ふのは——だが僕にはそいつは分らないよ、僕はそれを發言することさへ出來ない、』と、ヂェニソフは高い、しつかりした聲で口を挾んだ。『有らゆるものが朽ち、腐つてゐると云ふのは、僕も同感だ、だが何うも君のツウゲンド・ブンドなるものは僕には分らない人が不平であるとして、今ブンド(騷擾若しくは反亂)するといふのなら、Je Suis votre homme.(僕は君に贊成する。)』

ピエールは微笑み、ナターシャは笑つた。けれども、ニコライは前よりは更に顏を顰めて、どんな

革命も起り得ないといふことや、ピエールの話したやうな危險は、ピエールの想像裡の外では存在し得ないと云ふことをピエールと論じ始めた。ピエールは自分の說を主張した、そして、彼の智識上の能力はニコライよりも鋭く、より豐富であつた。で、ニコライは直きに答辯するのにまごついて了つた。彼は自分の心の中では、理窟ではなく、理窟よりはもつと强い何ものかの力で、自分の說の疑ふべからざる眞理であることを信じて居たので、答辯の出來なくなつた事が尙更一層腹立たしかつた。

『うん、それはかうなんだ』と、彼は言ひながら、起ち上つて神經的にパイプを隅の方に置き、それから、それを投げ棄てた。『僕はそれを論證することは出來ない。しかし君はあらゆるものが腐つてゐるから革命が起るだらうと云ふんだ、僕はさうは思はない、それから、君は君主に對する服從の誓ひは條件的なものであるといふんだ、しかし、それに就てはね、いゝかね、君は僕の親友だ、さうだらう、しかし君が秘密結社を造つて、政府に對して何か敵對行動を取るとすれば——それが如何なる事であらうとも、僕は政府に服從するのは僕の義務だといふことを知つてゐるんだ、で、若しアラクチエーフが僕に一中隊の騎兵を率ゐて君に向つて行つて、君を斬り倒すやうに命じたなら、僕は一秒も躊躇せずに出掛けるよ、で、それを承知しておいて、君は君の好きなやうに考へ給へ。』

氣まづい沈默がこの言葉につづいた。ナターシャは眞先きに、夫を蔽つて兄を攻擊し出した。彼女の辯護は力が弱くて、拙づかつた。しかし彼女の目的は達しられた。話がまた始められた。そして夫

れは最早ニコライの最後の言葉のやうな不愉快な敵意をもつた調子の話ではなくなつた。

一同が夕食に立つた時、ニコレンカ・バルコンスキイは青い顏に、輝やいた明るい眼をしてピエールの傍へ行つた。

『ピエールおぢさん……あなた……いゝえ……若し僕の父さんが生きてゐらしたら……あなたの方についたでせうか?』と、彼は尋ねた。

ピエールは、その話の間、この男の子の心の中に獨立して起つてゐたに違ひないと思はれる思想や、感情の獨創的な、複雜な、激しい勞苦を不意に見た。で、自分の云つたことをみんな思ひ出して、彼はこの少年が夫れを聞いたのを嫌やに思つた。けれども、彼はこの男の子に斯う答へない譯には行かなかつた。

『きつと、さうだらうよ。』彼はいや〳〵ながらに言つて、そして書齋を出た。

少年は下を見た、そこで初めて、自分が書物机の上でやつてゐた亂暴に氣が付いたらしかつた。彼は眞赤になつてそしてニコライの所へ行つた。

『をぢさん、御免なさい、僕がしたんですが——知らずにしたんです、』と、彼は言つて、封蠟やペン先の破片を指さした。

ニコライは怒つて、跳び上つた、『よし、よし、』と、彼は言つて、机の下にその封蠟やペン先の缺片を

投げ落した。で、やつとの事で怒りを押へたといふ様子で彼は少年に背を向けた。

『お前はこゝにゐちやアいけなかつたんだ、』と、彼は云つた。

十五

夕食の時にはもう政治や結社の話は出なかつた。が、話はニコライに最も心持のいゝ話題——千八百十二年の思ひ出——に轉じた。ヂェニソフがその話を持ち出した。そして、ピエールは殊に眞心から面白がつてゐた。で、一同は非常に親しい間柄になつて別れた。ニコライは、自分の書齋で着物を着かへて、そこで自分を待つてゐた執事に指圖をしてから寢室へ行つた。と、彼の妻は未だ机の前に坐つて、何か書いて居た。

『何を書いてるんだ、マリイ?』と、ニコライはたづねた。伯爵夫人マリヤは赤くなつた。彼女は自分の書いて居たことが多分夫に了解せられず、又賛成されもしないだらうと思つた。

彼女は自分の書いて居たものを夫から隱してしまひたいと思つた。けれど又一方には、彼女は夫が自分がさういふものを書いてゐるのを見付けたので、その事を夫に話さなければならなくなつたのを喜んだ。

「私の日記ですよ、ニコライ、」と、彼女は言つて、自分の確かりした、達者な筆蹟で充ちた青い手帳を夫に渡した。

『日記!』と、ニコライは、少し嘲弄したやうな調子で言つて、その手帳を取り上げた。彼はフランス語でかう書いてあるのを見た。

『十二月四日。——アンドリューシヤ(彼等の長男)が、今朝起きて何うしても着物を着更へようとしなかつたのでマドモアゼル・ルイズが私を呼びに來た。彼は惡戲で意地張つてゐた。私が彼を嚇し付けようとすると彼は益々氣むづかしくなるばかりであつた、そこで私は彼を制御けようと思つた、で、彼をうつちやつて置いて、子守に手傳つて他の子供たちを起させた、そしてアンドリューシヤには、私は彼を愛さないのだと言つた。彼は、それで吃驚したやうに、永い間靜かにして居た。それから彼は夜の襯衣のまゝで私の所へ飛んで來て、歔欷いて永い間私が宥められなかつた程であつた。彼につて最も苦しかつたことは、明かに私を悲しましたといふことだつたのだ。それから私が晩に彼に、彼の報告を渡してやると、彼は又も悲しさうに泣いて私に接吻した。やさしさを以てすれば何うにでもすることの出來る兒だ。』

『報告といふのは何だ?』と、ニコライは尋ねた。

『晩に、私は年長の子供たちの各自の行狀に點を付けてやる事にしたんです。』

ニコライは、自分を見守つてゐる涼しい眼をちらと見た、そして、頁をまくつて、日記を讀んで行つた。子供たちの生活の中で、子供たちの品性を示し、又子供たちを育てる方法に就いて、概括的結論を導くやうなもので、母親にとつて興味のあるやうに思はれるものは、何でも彼でも記されてゐた。それは大抵極く些細なことから成り立つてゐた、しかし、さういふものは母親にもさうは見えなかつたし、又今初めて子供たちの生活の記錄を讀む父にとつてもさうは見えなかつた。十二月の五日のにはかう書いてあつた。

『ミテイヤが卓子の所で惡戲をした。父さんはミテイヤにプヂィングをやつてはいけないとおつしやつた。ミテイヤはプヂィングが喰べられなかつたが、彼は他の者が食べてゐるのを情なさうに、如何にも物欲しさうに見てゐた。子供たちに甘いものをやらないで膽らしめるのは、たゞ食べたいと思ふ心を增させるだけだ、と私は信ずる。ニコライに話さなければならない。』

ニコライは帳面を下に置いて、その妻を見た。涼しい眼が、彼が賛成するか何うかと、疑はしさうに彼を見て居た。しかもニライが賛成して、その妻に對して熱心に感服してゐることは、疑ひがなかつた。

斯うまで學者風にやるには及ばないかも知れない、こんなことをする必要は全然ないかも知れない、とニコライは思つた。しかし此の子供たちの精神上の幸福をのみ目指してゐる倦まざる、不斷の精神

的努力が、ニコライを強く引きつけた。若しニコライが自分の感情を解剖することが出來たならば、彼はその妻を優しく愛することや、さういふ妻を持つてゐることを彼が誇つてゐることの主な要素は、いつでも、彼女の精神的なことや、又妻は常にそのうちに生息して居るが、彼は殆んど入ることも出來ない高い道德の世界に對する畏怖の感情であることを發見したであらう。

彼は妻がそんなに怜悧で、そんなに善良であることを誇り、精神上の世界では、妻の傍にあつては、自分の下らないものであることを認め、そして、更に彼女が、その心靈をもつて、自分に屬してゐるばかりではなく、彼の自己その物の一部分であることを尙一層喜んだ。

『全く、全く賛成だ、』と、彼は意味の深さうな樣子で言つた。『所で、』と、短かい間を置いて、彼は附け足した、『所で、僕は今日は惡いことをしたよ。お前は書齋に居なかつたね。ピエールと僕と議論したのだ、その時私はひどく腹を立てゝしまつた。辛抱が出來なかつたのだ。あの男は何うしても子供だ。ナターシヤがあの男を引き廻はすことが出來なかつたら、あの男は何うなつたざらう。お前はあの男が何をしにペテルブルグへ行つたか想像がつくかい？……彼奴等がやらうとしたのは……。』

『えゝ、知つてゐますよ、』と、伯爵夫人マリヤは言つた。『ナターシヤから聞いたんです。』

『ぢや、そんなら、お前も知つて居るね、』と、ニコライは、あの爭論を思ひ出したゞけで嚇としながら、話をつゞけた。『彼は一度び誓つた忠義や義務があつても、今の場合政府に反對するのが有らゆる

正しい人の務めだと僕に說き付けようとするんだ。……お前がその場に居なかつたのが殘念だね。で、彼奴等はみんな、ヂエニソフは勿論、ナターシヤまでも、僕に反對するんだ、……ナターシヤが滑稽なんだ。あの女は自分の小さい指一本で、夫を何うにでも引廻すことが出來るんだらう。所が議論になると——彼女(あいつ)は自分の考だといふ事が出來るやうなものを一つも持つてゐない——彼女(あいつ)は夫の言葉を繰り返へすばかりなんだ、』と、ニコライは、よく人が自分に最も近い、最も親愛なものを批難しなければならないやうになる、その抵抗し難い衝動に支配されながら、言ひ足した。ニコライは、自分がナターシヤに就いて言つて居ることは、一々、自分と自分の妻の關係の場合に當てはめることの出來るものだと云ふことに氣がつかなかつた。

『えゝ、私はそれに氣が附いてゐますわ、』と、伯爵夫人マリヤは言つた。

『僕が、義務や誓つた忠義が、何ものよりも大切なのだと、あの男に言ふと、あの男は何が何だか分らないことを言ひ出したんだよ。お前がその場に居なかつたのは全く殘念だ。お前なら何と言つたらうね?』

『私の考へでは、あなたが全く正しいと思ひます。私はナターシヤにもさう申しました。ピエールは有らゆる者は苦しんでゐるし、虐待されてゐるし、腐敗して居るのだから、我々の隣人を救ふのが我々の義務だと云つてゐるんです、勿論、それはあの人の云ふ通りです、』と、伯爵夫人マリヤは言つた。

『ですがあの人は、我々には神御自身が我々のために定めて下すつたものと近い義務があることと、それから私たちは自分たちのためにはどんな危險を冒しても勝手だが、子供たちのためにはそんな事をしてはいけないと云ふことを忘れてゐるんです。』

『全くだ、全くだ、僕も丁度そのことをあの男に話したんだ、』と、ニコライは自分も丁度それと同じことを言つたやうな氣がして、斯う叫んだ。『で、彼奴等は、ニコレンカの前で、隣人に對する愛とか、基督教とか凡てさう云ふことに就て言ひたい事をすつかり言つてしまつたんだ、ニコレンカといへば、其所へその前からこツそり這入つて來て居て、机の上のものをすつかり壞して了つたんだ。』

『まあ、ねえ、ニコライ、私、ニコレンカには始終氣をもむことがあるんですよ。』と、伯爵夫人マリヤは言つた。『あの子はあゝ云ふ變つた子でせう。それで私は自分の子供にかゝつてゐて、あの子を疎かにしてゐるやうで、氣にかゝつてゐるのです。私たちはみんな各自自分(めいめい)の子供をもつてゐるし、各自自分の親兄弟があるんですが、あの子にはそんなものは何も無いんです、あの子はいつも自分獨りで考へ込んでゐるんですよ。』

『うん、あの子のことでは少しだつてお前に惡いことがあるとは思はんよ。最も優しい母親がその子に盡すだけのことをお前はあの子にして來たし、今もして居るよ。そして僕は勿論その事を喜んでゐる。あれは實に立派な兒だ、實に立派だ、今晩もまるで夢でも見て居るかと思ふ程ピエールの云ふことを

一生懸命に聞いてゐた。所が何うだ、我々が夕食に座を立たうとするとね、僕が一寸見ると、あの兒は僕の机の上のものをスツカリ滅茶々々に壞して了つてゐたんだ、が、あの子は直ぐそのことを僕に言つたよ。僕はあの兒が僞を吐いたのを一度も聞いたことがない。全く立派な子だよ。』と、ニコライは繰り返した。彼は心の中でニコレンカを好かないのだが、その兒が非常に立派な子だといふことを承認しなければならぬ心持になつてゐるのをいつも感じてゐるのであつた。

『でも、私は母親と同じぢやありませんわ、』と、伯爵夫人マリヤは言つた。『私は何うしてもさう思ふんですよ、で、どうもそれが私の氣にかゝるのです。あの兒は全く珍らしい子供ですよ、ですが私はひどくあの子のことが氣にかゝるんです。人と交際させるのが、あの子にはいゝと思ひます。』

『うん、さうだ、それはもう間も無くやるよ、この夏は彼をペテルブルグへ連れて行つてやる、』と、ニコライは言つた。『さうだ、ピエールは、昔から夢想家だつたし、今でもいつもさうなんだ、』と、彼は確かに自分の感情を惱ましてゐた書齋での議論にかへつて、言葉をつゞけた。『ね、僕に何の關係があるんだ——アラクチエーフの失態とか何とかいふことが——僕たちの結婚した時には、非常な借金があつて、その爲めにうつかりすると監獄にでも入れられさうだつたし、それにそんなことを知りもせず、分りもしなかつた母親もあつたのに、アラクチエーフのことなどが僕に何の關係があるんだ。で、その上、お前や、子供たちや、僕も仕事もあるんだ。僕が朝から晩まで人々の監督をしたり、事務所に這

入つたりするのは自分の快樂の爲めではないんだ。決してさうではない、僕は母さんを慰め、お前に金を返し、そして僕が家を繼いだ時のやうな、乞食のやうな目に子供たちをあはせないやうにする爲めに、働かなければならないことを知つてゐるる。』

伯爵夫人マリヤは、人はパンばかりで生きるものではない、ニコライは餘りその仕事といふものに重きを置き過ぎて居る、といふことを彼に言ひたいと思つた。しかし彼女は、それを彼に言つてはいけないし、言つても無駄だといふことを知つてゐた。彼女はたゞ夫の手をとつてそれに接吻した。彼は、妻のこの仕草を、自分の言葉を認め且つ同意する徴として受け取つた、で、暫らく默つて考へて居た後彼は獨言のやうに話をつゞけた。

『ねえ、マリヤ、』と、彼は言つた、『イリヤ・ミツロフアニツチ(これは彼の執事であつた)が、今日タムボフの領地からやつて來て、あすこの森は八萬ルーブルになつたと言ふんだ。』そこでニコライは、熱心な面持で、もう直きにオトラドノエを買ひ戻すことが出來さうだと云ふことを話し始めた。『もう十年すれば、僕は子供等を……立派な位置に置いてやる。』

伯爵夫人マリヤは、夫の言葉を聞いてゐた、そして彼が自分に向つて言つたことをすつかり了解した。彼女は夫がこんなことを獨言のやうに話してゐる時には、彼は時々自分が何ういふことを云つたかを彼女に尋ねて、彼女が何か他のことを考へて居るのに氣が付くと、氣を惡くすることがあるのを

知つてゐた。しかし彼女は『夫の話してゐることには少しも興味を感じなかつたので、それを聞いてゐるのに非常な努力をしなければならなかつた。伯爵夫人マリヤは夫を見た、その時彼女は別にこれと云ふ他の事は考へては居なかつたが、その感情は夫の話より他の場所へ行つてゐた。伯爵夫人マリヤは、自分の了解してゐた凡てのことをば何うしても了解することの出來なかつた此の男に對して服從的な、やさしい愛を感じた。そして、彼女は、この理由だけで、情熱的な優しい愛情の籠つた風をして屢一層夫を愛した樣であつた。彼女の心をすつかり吸ひ付けて、夫の計畫の一伍一什を聽くことから彼女を妨げたさういふ感情とは全く離れて、夫の言つて居ることゝは少しも共通のところがなかつたやうな、さま〴〵の考へが彼女の腦裏には浮びつけられてゐた。彼女は自分の甥のことを考へてゐた。(彼女の夫がピエールの話に對して甥が昂奮したと云つたことが、彼女に非常な印象を與へたのである)すると甥のやさしい、敏感な性質の樣々な特徵が彼女の心に浮んで來た、そして彼女は、その甥のことを考へて居る中に、ふと又自分の子供たちのことを考へた。彼女はその甥と子供とを比較はしなかつた、が甥に對する自分の感情と、自分の子供たちに對する自分の感情と比較した、そしてニコレンカに對する自分の感情のうちに何かしら缺けたものがあることを感じて、悲しく思つた。

この違ひは、甥の年齡に關係して居るのではあるまいかといふ考へが、時々伯爵夫人マリヤの心の中に起つた。が、彼女は甥に對して濟まないやうな氣がした、で、その心の中にその償ひをし、不可

能なこと、この世で不可能なこと即ち、自分の夫を愛し、自分の子供たちを愛し、ニコレンカを愛し、又キリストが人間を愛したやうに有らゆる自分の同胞を愛しようと誓つたのである。伯爵夫人マリヤの心は、常に無限、永遠、完全、に對つて努力しつゝあつた。だから、彼女はいつも平和でゐることが出來なかつた。肉體によつて壓し附けられてゐる靈魂の、隱れた崇高な苦痛のために、嚴肅な表情が、彼女の顏に表はれた。

ニコライは、彼女を見詰めた。

『おゝ！あれが、このやうな樣子をした時に、私が恐れるやうに、若し彼女が實際死んでしまつたら、我々は何うなるだらう？』と、彼は思つた。

十六

ナターシヤも亦夫と差し向ひになると直ぐに、夫婦のみが話すことの出來るやうに話しを始めた、即ち、非常な明快さと迅速さとをもつて、論理の凡ての法則に反した全く特種な方法で、前提や、演繹や、結論の助を借らずに、お互ひの考を了解し合ひ、且つ交換し合つた。ナターシヤは何時もこん

な風に夫と話し合ふのであつて、ピエールの方でその考へを論理的に整へる時には、彼女にとつては二人の間の調子が少し狂つたといふ確かな徴候だと思はれる位であつた。ピエールが論じ始めて、道理に従つて靜かに物を言ふ時とか、ナターシャがピエールの實例に導かれて、ピエールと同じ様なことをするやうになる時は、屹度喧嘩になるに違ひないといふことを彼女は知つてゐた。

二人つきり差し向ひになつて、ナターシャが大きく開いた、幸福さうな眼をして、そつと彼の傍に忍び寄り、不意に彼の頭を抱いて、それを自分の胸に押しつけ、『さあ、あなたはもうスツカリ私のものよ！　私のものよ！もう何うしても逭しませんよ！』と、言つた瞬間から、論理の何の法則にも背いてゐる談話が始まつた。それは、主に、彼が一度に幾つも逢つた問題について話をしたからであつた。さういふ風に色々の事を一度に議論することが、その事柄が明かに了解されるのを妨げるどころではなく、却つて二人が互ひに充分理解し合つて居るといふ最も確かな徴であつた。

夢の中では、その夢の導いて行く感情の外は、あらゆる物が不確かで、無意味で、矛盾してゐるものであるが、それと同じに、あらゆる理論の有らゆる法則から離れた此の夫婦の間のやうに、かういふ考の交通では、はつきりして連續的であるものは、言はれてゐる所のものではなくて、さういふ言葉を促す感情なのである。

ナターシャは、ピエールに自分の兄の家の日々の生活の有様を話した。自分は、ピエールの居ない

時には苦しくつて、半ば死んだ様になつてゐるといふことを彼に話した。それからマリイが今迄よりはずつと好きになつたことや、又マリイが有らゆる點に於て自分よりは優れてゐることを彼に話した。此事を話してゐる時には、ナターシャはマリイの優れてゐるのを認めることに於て全く誠實であつた。此事を話してゐる時には、ナターシャはマリイが有らゆる點に於て自分よりは優れてゐることを彼に話した。しかし、それと同時に、彼女はピエールが、マリイよりも又他の何んな女よりも自分を愛してくれるのだと豫期してゐた。今は、殊に、彼がペテルブルグへ行つて澤山の女を見て來た後のことであるから、改めて自分に向つてさういふ事を言つて貰ひたかつた。ナターシャの言葉に應じてピエールは、ペテルブルグに於ける貴婦人たちとの夜會や宴會が何れ程嫌やであつたかを話した。

『私は婦人たちと話をするのがすつかり下手になつて了つたよ、』と、彼は言つた。『實に退窟だつた。殊に、私は非常に忙しかつたものだからね。』

ナターシャは彼をぢつと見つめた、そして、言葉をつゞけた。『マリイはねえ、此頃は實際えらくなつたのよ！』と、彼女は言つた。『あの女は子供たちを見透す力をもつてゐるんです、子供たちの心の底を直ぐ見抜いてしまふんですよ。昨日もね、斯うなの、ミティエンカが惡戯をしましてね……』

『だが、あの子は父親にそつくりぢやないか？』と、ピエールが言葉を挟んだ。

ナターシャは、何故彼がミティエンカがニコライに似て居るといふ様なことを言ふかを知つてゐた。

ピエールは、自分の義兄と争論をしたといふことが厭やであつた、で、それに就いてナターシヤが何う思ふかゞ聞き度かつたのである。

『何んなものでも、それが一般に受け入れられなければ、決してそれに賛成しないといふのが、ニコライの弱點なんですわ、所が、あなたの尊んでゐらつしやるのは Onvrir une carriere（ウヴリイル ユヌ カリエル）（向上の道を開拓する）といふことなんでせう、』と、彼はピエールが一度言つたことのある言葉をくり返して言つた。

『いや、實際は斯うだ、』と、ピエールは言つた。『ニコライにとつては、考慮や思想は娯樂なんだ、殆んど慰みに過ぎないんだ。あの男はこゝで書庫を作らうとしてゐるが、自分が買つたものをすつかり讀み通すまでは決して新らしいものは買はないことに定めて居るんだ——シスモンデイとかルウソソウとかモンテスキュウとかね、』と、ピエールは微笑しながら言ひ足した。『お前も知つてゐる通り、私は、』と、彼はニコライに對する批評を柔げようとし始めてゐた、が、ナターシヤはそれを遮つて、それで彼にそんなことをする必要のないことを了解させた。

『では、あなたは、あの人にとつてはいろ〳〵の思想は眞面目なものではないと有仰るんですね……』

『さうだ、所が私にとつては夫れより他のものは、眞面目なものではないのだ。私がペテルブルグに

居た間は、夢の中で誰も彼も見て居たやうな氣がしたのだ、私が一つの思想に心を奪はれてゐる間は、他のものはみんな眞面目なものではないのだ。』

『あゝ、ほんとに殘念だつたわ、子供たちにあなたが會つたのを見なかつたのは、』と、ナターシヤは云つた。『どの子が一ばん喜びました？勿論、リザでせうね？』

『あゝ、』と、ニコライは言つた。そして彼は、自分の興味を引いた話をつゞけて行つた。『ニコライは我々は考へてはいけないと云ふんだ。しかし私は考へずには何うしてもゐられない。私がペテルブルグで、自分がるなければ凡てのことが滅茶滅茶になつてしまふのだと感じた事實（お前にはそれを話せるが）に就ては、何も言はぬにしても、誰も彼も自分の氣隨氣儘にしたかつたんだ。だが、私はみんなの考を纏めることに成功した、所で、私の思想といふのは全く單純で明瞭なんだ。私は、我々は唯それに對して反抗しなければならぬとは云はない。我々は間違ひをやるかも知れないんだからね。けれども、私は斯うなんだ——善良な主義のために心を傾けてゐる者は、手をつなぎ合はすべし、そして、我々の旗印しをして、精力と正直であらしめよと言ふんだ、セルゲイ公は立派な男だ、そして聰明なんだ。』

ナターシヤは、ピエールの思想が偉大な思想であることを少しも疑はなかつたが、たゞ或る一つの事に苦しめられた。それは彼が自分の夫だといふことであつた。『斯ういふ値のある、又斯ういふ社

會にとつて大切な人が、同時に自分の夫だといふこ　とが有り得ることだらうか？　何うして斯ういふことになり得たのだらう！』彼女は、この疑ひを彼に向つて言ひたかつた。『夫が他の凡ての方たちよりも遙かに聰明であるか何うかと言ふことを、ちやんと決めることの出來る人は誰だらうか！』と、彼女は考へ込んだ。そしてピエールがひどく尊敬してゐた人々をずツと頭に浮べて見た。彼自身の話から推測すると、プラトン・カラターエフほどピエールが尊敬して居る人はなかつた。

『私が何を考へてゐるか、あなた分つて！』と、ナターシヤは言つた。『プラトンカラターエフのことなのよ。あの人なら何う言ふでせうね？今あなたに賛成するでせうか？』

ピエールはこの問ひに少しも驚かなかつた。彼は、その妻の聯想を了解した。

『プラトン・カラターエフかね？』と、彼は言つた。そして明かに、カラターエフの此の問題に對する判斷が何うであらうかといふことを、心の中に描かうと眞面目に骨を折つて考へ込んだ。『彼には解らないだらう、だが、それでも、多分、彼は賛成しただらう。』

『私あなたが、ほんとに好きよ！』と、ナターシヤは突然言つた。『ほんとに、ほんとに！』

『いや、カラターエフは賛成しなかつただらう、』と、ピエールは、考へ込みながら、言つた。『彼が賛成しただらうと思はれるのは、我々の家庭生活だ。彼は、何事にも似合ふことや、幸福や、平和を見るのがひどく好きだつた。で、私は彼に、私たち凡てを誇つて見せてやることが出來るんだ。お前に

別れてゐた時のことを話したね、だが、私がお前と別れた後で、何れほど特種な感じがしたか、それを話してもお前には信じられないんだらうよ……』

『それから、その他には……』と、ナターシヤは言ひ始めた。

『いや、さうではないのだ。私は何んなことがあつてもお前を愛しなくなるといふことはない。誰だつて之れ以上愛することは出來なからう、それは特別のものなんだ……』彼は言ひ終らなかつた、それは、二人が目を見交はして其の後のことを言つてしまつたからであつた。

『まあ何で馬鹿々々しいんでせう、』と、彼女は突然言つた、密月（ハニイムーン）のことなんか、それから一ばん幸福なのは始めの中だなんて。全くその反對ですわ、今の方がよつぽどいゝんですわ。たゞあなたが私の傍を離れてさへ下さらなければ。あなた覺えてゐらしつて、私たちはよく喧嘩をしたわねえ？　いつも私が惡かつたんですわ。いつも私から起つたのです。でも、何で喧嘩したか——私は覺えてさへゐ ませんよ。』

『いつも同じ事だよ、』と、ピエールは微笑みながら言つた。『嫉（やき）……』

『言はないで頂戴、私、堪らないんですもの、』と、ナターシヤは叫んだ、そして冷たい、執念深い光がその眼の中に輝やいた。『あなたは、あの女に逢つたんですか？』と、一寸間を置いて彼女は言ひ足した。

『いゝや、それにもう會つても、あの女が分るまいよ。』

二人は默つてゐた。

『あのね！あなたが、書齋で話をしてゐらしつた時に、私があなたを見てゐるのを知つてらつしやつて？』と、ナターシヤは、明かに突然二人の中に起つた雲を追拂つて了はうと努めるらしい風で、言つた、『で、ねえ、あなたと、あの男の兒とは、水の二滴のやうに似てるんですわ。』ナターシヤは自分の赤ン坊の息子のことを男の兒と呼んでゐた。『あゝ、もうあの兒の所へ行つてやらなきやならん時分だわ……でも、私行つちまふのが厭だわ。』

二人は數秒の間默つて居た。それから急に、同時に、向き合つて話を始めた。ピエールは滿足と熱心とをもつて、ナターシヤは和かな、幸福さうな笑顏をもつて、話し始めた。兩方で話を遮つたので、互ひに口を噤んで、相手が話し出すのを待つた。

『いや、何うしたんだ？　お話しよ、お話しよ。』

『いゝえ、あなたお話しなさい、何でもないんです、つまらない事だつたんです、』と、ナターシヤは言つた。

ピエールは、自分の言はうとしてゐたことを言つたそれは、ペテルブルグへ行つた時の自分の成功に就ての滿足な回想の續きであつた。その瞬間には、彼は、自分がロシアの全社會及び全世界の進歩

に對して或る新らしい傾向を與へるべき人間であるやうな氣がした。

『私はたゞ、非常に大きい結果をもつやうな凡ての思想は、いつも單純なものだといふことを言はうとしたんだ、私の一切の思想は實際、若し惡人たちが團結して一つの刀を造つたならば、正直な人々もそれと同じやうにしなければならないことなんだ、實に單純なんだ、ね。』

『さうですわねえ』

『所で、お前の話は何ういふんだね？』

『なあに、何でもないのよ、ほんのつまらないことですの、』と、ナターシヤは言つて、今までよりは『いゝえ、でもお話しよ。』

『いゝえ、何でもないの、些としたつまらないことなの。』

更に晴々した笑顏になつた。『私はたゞペエテイアのことで話さうと思つてゐましたの。今日子守が彼を私の手から取らうとして私のところへ來ました。彼がね、笑つて顏を顰めて私にしがみついたんですの——隱れてる積りだつたらしいんですの。ほんとに可愛いんですよ……おや、あの兒が泣いてゐます。ぢや、行つて參ります？かう言つて、彼女は部屋から駈け出して行つた。

丁度その時、下のニコレンカ、バルコンスキイの寢部屋ではラムプが常の如くに點つて居た（この兒は暗がりを恐わがつて、何うしても、その癖がなほらなかつたのだ。）デツサルは四つの枕で頭を高

くして眠つて居た、そして其のローマ風の鼻が調子の整つた鼾聲を立てゝ居た。ニコレンカは今しも冷汗をかいて目を覺ました所で、寢床の上に坐りなほり、大きな眼を開いて自分の眞正面を見つめて居た。彼は恐ろしい夢で眼を覺ました。夢の中では、叔父さんのピエールと彼とが、丁度自分の持つて居るプルタアクの挿畫の中に出て來るやうな甲を被り、大軍の陣頭に立つて進んでゐた。この軍隊は、デツサルが le fl de la viege（聖母の糸）と、呼んで居た、秋の頃空にかゝつてゐる蜘蛛の糸のやうに空を充す、斜に曳く、白い糸で出來て居た。その向ふに、それも矢張り此の糸の様なものではあるがたゞもう少し透明な榮光があつた。彼等——彼とピエール——は、輕々と幸福に、段々とその目的地に近く飛んで行つた。と、忽ち彼等を動かして居た糸が弱くなつて、もつれて來たやうな氣がした。で、何うにも仕様がなくなつた。と、叔父さんのニコライが嚴肅な、威嚇つけるやうな樣子をして彼等の前に立つた。

『これはお前がしたのか?』と、彼は言つて、壞れたペンや封蠟の棒を指さした。『俺はお前を可愛がつてゐた、だがアラクチエーフが俺に命じた、私は一番初めに前進する奴を殺して了ふぞ。』

ニコレンカはピエールの方を振り返つたが、ピエールはもう居なかつた。ピエールの代りに、其所にはニコレンカの父親——アンドレー公爵——が居た。彼の父は姿も形もなかつたが、兎に角そこに居たのだ。で、あの方を見ると、ニコレンカは愛情のために弱くなつたことを感じた。彼は自分が力なく、痲痺して、弛んでしまつたことを感じた。彼の父は彼を愛撫した、そして彼を憐んだ、しかし彼の叔父のニコライが彼等の方へだん〳〵近づいて來た。非常な恐怖がニコレンカを襲つた、で彼は眼を覺ました。

『父さんだ?』と、彼は思つた。（家にはアンドレー公爵の非常によく似た肖像が二つもあつた。が、ニコレンカは人間の形をした父親を想像したことは一度もなかつた。）『父さんが私と一緒に居て、私を愛撫して下すつたのだ。父さんは私を賞めて下すつたんだ、ピエールは叔父さんを賞めて下すつたんだ。父さんのおつしやることなら、私は何んな事でもするんだ。ムキウス・スカエヴオラは自分の手を焼いた。だが、同じやうな事が、私の一生のうちに起らないとは、何うして云へやう?私はみんなが私に勉強させやうとして居るのを知つてゐる。で、私は勉強する積りだ。そして他日か勉強を終へてしまふのだらう、そしたら、私は働かう。たゞ一つ私は神樣にお祈りする、私にもプルタアクの中の人間に起つたのと同じ樣なことがあるやうにお祈りする、私も同じ樣にやるんだ。私はもつとやつて見せる。誰でもが、私を知り、私を愛し、私を賞める樣になるだらう。』その時急にニコレンカは自分の胸が歡欵で高まるのを覺えた、で、彼は泣き出した。

『Etes-vous indisposé?（どこか惡いのですか?）』と、云ふデツサリの聲を彼は聞いた。

『いゝえ、』と、ニコレンカは答へて、枕の上に仰向きになつた。『ほんとに、善い親切な人だ、私はあ

の人を愛する！』と、彼はデツサルのことを思つた。『だがピエール叔父さん！おゝ、ほんとに偉い人だ！それから、私の父さんは！父さん！父さん！さうだ、私は父さんのお喜びになることを何かきつとやる……』

第二編

一

歴史の主題は、國民及び人類の生活である。人類の生活は勿論、たゞ一國民の生活でさへそれを捉へ、言葉でもつて刺し留める——即ち、それを直截に叙することは、不可能であるやうに見える。凡ての古の歴史家たちは、外見上捕捉しがたく見ゆるもの——即ち國民の生活を——叙したり、捉へたりすることの爲めに同じ方法を用ひた。彼等は國民を支配する個人の經歴を叙した。そしてこれ等個人の活動が、それ等の歴史家にとつては全國民の活動の表現であつたのである。

何ういふ風に、これ等の個人が、國民をして自分等の意志に從つて働かしめたか、又何によつて、これ等の個人の意志が制御せられたかといふ問題に對しては、古の人々は、それは、神の意志に依つて

であると答へた——それは、第一の場合には、國民をして一人の選ばれたる者の意志に從はしめ、第二の場合には、その選ばれたる王の意志を神によつて定められたる目的に導くといふことであつた。

古代の人々にとつては、凡て斯様な問題は、神が直接人事に與るのだといふ信仰によつて、解決されたのであつた。

近代の歴史は、理論上かういふ二つの態度を共に斥けて居る。人間が神に服從させられ、國民が或る定められた目的地に導かれるといふ古の人の確信を斥けた以上は、近代の歴史の研究する所は、力の表現には非ずして、それを形成させるところの諸原因である可き筈である、と誰しも思ふであらう。所が、近代の歴史は夫れをしなかつた。理論に於ては、古の人の意見を斥けながら、近代の歴史は、實行の上ではそれに從つて居る。神的の權威を賦與せられ、直接神の意志に依つて導かれる人々の代りに、近代の歴史は、異常な、超人的な力を賦與された英雄とか、君主から新聞記者に至るまでの、非常に種々雜多な特質のあるたゞの人とかいふやうな民衆を導いてゐる人々を立てゝゐる。古い目的、即ち、古の歴史家たちには、ゴール人とか、ギリシヤ人とか、ローマ人とかいふやうな人民の、さまざまの運動の目的であるやうに思はれた神の意志の代りに、近代の歴史はそれ自身のさま〴〵の目的——フランス人とか、ドイツ人とか、イギリス人とかの幸福、若くはそれの統合の最高潮、即ちいつも大抵この大地球の北西の隅に住んで居る諸人民を意味するところの凡ての人間の文明——を提出してゐる。

近代の歴史は古人の信仰を斥けたが、その代りとして何等の新らしい確信を提出しない。かういふ狀態の理法は、歴史家たちをして、一度斥けられた帝王神權說とか、古代人の運命とかいふものを見棄てゝゐながら、異つた道によつて再び同じ點即ち（一）人民は或る個人に依つて導かれるといふこと（二）全人間、及びそれを組み立てゝゐる人民が或る定まつた目的に動きつゝあるといふこと、の承認へ立ち戻らざるを得ざらしめた。

もつと近代の歴史家、ギボンからバックルに至るまでの有らゆる著作に於て、彼等の外觀上の相違や、又彼等の意見の外觀上の新奇にも拘らず、これ等の二つの古來からの避け難き態度が其の議論の根抵に横たはつて居るのである。

第一に、これ等の歴史家は、彼等の說では、人間を導くと稱する個々の人の行動を叙述する。（或る者はたゞ國王とか將軍とか、大臣とかいふものだけを、さういふ人々であると見做し、他の者は、國王、雄辯家、科學者、革命家、詩人をその中に入れてゐる。）第二には、全人間が導かれて行く目的が、さういふ歴史家には知れてゐる。或る者には、此の目的がローマやスペインや、又フランスなどの如く偉大になることであるし、他の者には、それは、自由とか平等とかいふやうなヨーロッパと呼ばるゝ世界の一角に於ける或る種の文明であるのである。

一千七百八十九年には、パリイに動亂があつた。それは、大きくなり且つ擴がつて、遂には西から東への運動となつて現はれた。幾度かこの運動は東に向つてくり返され、そして東から西への逆運動と衝突した。一千八百十二年にはその運動が、それの最前方の極限、即ちモスクワに達した。そこで、著しい均齊をもつて逆運動が直ぐさま續いて東から西へ向ひ、それと共に、最初の運動と同じやうに中央ヨーロツパの人民を引張つて行つた。此の逆運動が、最初の運動の出發點、パリイに達する——そこで鎭まつた。

この二十年の年月の間、非常な數の田畑が耕されなかつた。家は燒かれ、商業はその方向を變へ、何百萬といふ人々は貧乏になつたり、その住居を變へたりした。それから、何百萬といふキリスト教徒は、愛の教へを口にしながら、互ひに殺し合つた。

凡てかういふ事は、何を意味するのであるか？凡てかういふ事は何から起つたのか？何ういふ事が、これ等の人民に家を燒かせ、その同胞を殺させるやうにしたのか？何が之れ等の事件の原因であるか？如何なる力が、人々をしてかういふ風に行動せざるを得ざらしめたのか？かういふことは、人間が過去の時代の動搖の記念物や、傳說に打つかる時に誠心誠意を以て自ら問ふところの、自然に發する正當なる、疑問である。

かういふ疑問に答へる爲めに人間の常識が、國民及び人類自識を目的とする史學へ向ふのである。

若し歷史が、古代人の意見を持ち傳へてゐたとすれば、それは斯う言つたであらう、神が、その人民を賞する、若くは罰する爲めに、ナポーレオンに力を與へ、そして神の聖なる目的を遂行させるためにナポーレオンの意思を導いたのであると。そして其の答は完全で、明瞭であつたであらう。人はナポーレオンの神聖なる意義を信ずるかも知れないし、信じないかも知れない。それを信ずる人にとつては、凡てその時代の歷史を了解し得られるのであつて、その中には何一つ矛盾するものはなかつたであらう。

しかし、近代の歷史はかういふ風に答へる事が出來ない。科學は、神が直接人間の事に干與するといふ古代人の見界を承認しない、だから、それは他の答を與へなければならぬ。

近代の歷史は、この疑問に答へて、斯う言ふ。『諸君はこの運動の意味が何であるか、何からそれが起つたか、又如何なる力が之れ等の事件を起したかを知り度いと思ふのか、では聞き給へ。

『ルイ十四世は非常に高慢な、我儘な男であつた。彼は斯く斯くの后を持つてゐた、又斯く斯くの大臣を持つてゐた、そしてフランスに拙い政治を施した。ルイの後繼者たちも、亦、弱い人間で、彼等も、亦、フランスに拙い政治を施した。それから、彼等は斯く斯くの寵臣を持ち、斯く斯くの居を持つてゐた、その上に當時、數人の人があつて數種の本を書いてゐた。十八世紀の末に、人間は平等で且つ自由であると云ふことを說いた二十四人ほどの人がパリイにゐた。これが全フランスの人々をし

て互ひに斬つたり斬り合つたりする様に導いた。これ等の人々は、王や、その他の多くの人々を殺した。その時フランスに一人の天才——ナポレオン——がゐた。

彼は到る所で有らゆる者を征服した、即ち彼は偉大な天才であつたから、多くの人を殺したのである、或る理由があつて彼はアフリカ人を殺しに行つた、でフランスへ歸つて來ると、彼は有らゆる人を自分に服從させた程よくアフリカ人を殺し、そして夫れほど敏捷で怜悧であつた。で、人々はみんな彼に從つた。皇帝にされてから彼は、イタリイに、アウストリアに、プルシアに、多くの人々を殺しに行つたので、そこでも亦、彼は澤山の人を殺した、ロシアには當時皇帝のアレキサンドルが居て、ヨーロツパの秩序を回復しようと決心してゐた。そこで、彼は、ナポレオンと戰爭した。所が一千八百〇七年に彼は急にナポレオンと仲が好くなつた。しかし一千八百十一年には再び爭つて再び彼等は多くの人々を殺し始めた。で、ナポレオンは六十萬の兵をロシアに進めて、モスクワを占領したが、やがて彼は不意にモスクワを逃げ出した。そこで皇帝アレキサンドルは、スタインやその他の者の助言に從つてヨーロツパの平和の破壞者に對抗する爲めに、ヨーロツパを同盟させた。ナポレオンの同盟國はみんな忽ちにして彼の敵となつて、その聯合軍はナポレオンが新らたに募つた軍隊に對して進んだ。同盟國がナポレオンを征服した。彼等はパリイに侵入した。彼等はナポレオンをして位を退かざるを得ざらしめ、エルバ島に彼を流したが、五年前と、それから一年後には、彼は誰

からも法律の範圍外の强盜と見做されたに拘らず、その時は、皇帝としての權威は奪はれず、出來るだけの敬意が拂はれてゐたのだ。そして其の時までは、フランス人や同盟國の笑ひものであつたルイ十八世が、國を治め始めた。ナポレオンはその舊近衞兵の前で涙を流して、帝位を奪はれ、流刑の途に上つた。そこで敏捷な政治家や外交家等（その中で殊に際立つてゐるのはタレイランで、彼は他の何人よりも前に或る特別な椅子を占めることに成功し、それによつてフランスの國境を擴げた。）がウインナに集まつて談話をした。この談話に依つて、諸國民が幸福になつたり不幸になつたりした。所が、忽ち外交家や國王たちが悉く喧嘩しないばかりになつた。彼等は再び互に殺し合ふために軍隊に命令する間際にまでなつた、が、その時ナポレオンが一大隊の兵を率ゐてフランスに這入つた。と、これ迄は彼を憎んで居たフランス人が、直ぐ彼に服從して了つた。しかし同盟國の君主たちは之れを憤つて、再びフランスと戰ふために行つた。で、天才、ナポレオンは征服せられた。そして不意に彼が强盜であると認められて、セント・ヘレナの島へ連れて行かれた。そして其の巖の上で、この流人は、心の友から離れ、その愛するフランスから離れて、ぶら〳〵して死んで了つた。そして彼はその一切の偉業を後世に遺した。そこで、ヨーロツパでは、反動がそれに續いて起つた、そして君主たちが、その臣民を壓制し始めた。」

これが嘲弄——即ち歷史的記述、諷刺畫であると思ふのは、全く間違ひであらう。それ所ではなく、

それは、記念物や、別々の國の歴史の編纂者から、一般歴史及び其の時代の文明の歴史の新らしい種類に至るまでの、有らゆる歴史によつて與へられた、何の答にもならぬ、矛盾した、滅茶苦茶な答を和らげた書なのである。

これ等の答に奇妙で滑稽なところがあるのは、近代の歴史が、誰も聞きもしない問ひに答へる聾者と同じであるといふ事實によるのである。

若し歴史の目的が人類及び國民の運動の叙述にあるとするならば、こゝに當然答へられなければならない、でなければ一切の他の事が解らなくなる、最初の疑問は、如何なる力が國民を動かすものであるか?といふことである。この問に答へて、近代の歴史は、ナポーレオンが偉大な天才であつたことや、ルイ十四世が非常に高慢であつたことや、或る著述家等が或る書物を著したことなどを甚だ念入りに述べる。

凡てこれは全くその通りである、そして全人類がそれを承諾しようとしてゐる。しかし、それは全人類が訊かうとする事柄ではない。若し我々が、ナポーレオンやルイや、或は著述家等を用ひて人民を導き、それ自身の上に基礎を据えてゐる、何時も同じな、神的な力を認めるとすれば、さういふ事は非常に面白いかも知れない。しかし我々はさう言ふ力を認めないのだから、ナポーレオンやルイや、著述家たちのことを話す前に、之れ等の人々と一般國民の運動との間に存在する關係を示す必要がある。若し別の力が、神的な力の代りに置かれるとすれば、さらば其の力が何ういふものから成り立つて居るかを說明する必要がある、何故といふに、歴史の一切の興味が横はつてゐるのは明かに、その力の中であるからだ。

歴史は、この力は、決まり切つたことであつて、それはもう何人にも知られて居るといふことを假定してゐるやうである。が、この新らしい力を知られたものとして認めようとしてゐる有らゆる願望にも拘らず、數多の歴史書類を通讀した人々は誰でも、歴史家自身によつてさま〴〵に理解せられて居るこの新らしい力が、誰にもよく知られて居るか何うかといふことを疑はざるを得ないのである。

二

國民を動かす力は何であるか?

傳記歴史家や、又は種々の國民のことを書く歴史家等は、この力を、英雄や君主等の中にある力であると解してゐる。彼等の記述に依れば、様々な事件は、ナポーレオンとか、アレキサンドルとか、言葉を換へると、さういふ歴史的傳記の主題となる人々の意志に、全然歸するのだといふのである。いろ〳〵の事件を起させる力に關する種々の問題に對する此の種の歴史家等の答は申分の無いものであ

る。が、それは一つの事件に對しては、たゞ一人の歴史家があるのみである、といふ間だけのことである。しかし異つた見界や、異つた國の歴史家等が同じ事件を叙述し始めると、彼等に依つて與へられたる答は、直ぐその價値を失つてしまふ、何故といふに、この國民を動かす力なるものが、それぞれ異なるのみならず、尚又全く反對な風に解釋せられてゐるからだ。一人の歴史家は、事件がナポーレオンの力に依つて起つたのだと斷定する、他の歴史家は、アレキサンドルの力に依つて起つたのだと言ふ、第三の歴史家は、その事件を或る第三の人の力に歸するのである。それのみならず、この種類の歴史家等は、同じ一人の人の勢力の基礎になつてゐる力を説明する場合に於てさへ、互ひに反對した説を述べてゐる。彼等の中の、ボナパルト黨であるチエールは、ナポーレオンの權力はその徳と、その天才とに依るのだと云つてゐるし、共和黨であるランフレイは、それは人民に對する彼の詐僞と僞瞞に依るのだと斷言してゐる、で、この種の歴史家は、互ひに互ひの位置を壞し合ひながら、同時に事件を起させる力の觀念を破壞する、そして歴史の根本問題に對する答を一つも與へない。

一度に凡ての國民を取扱はなければならない萬國史の著者等は、事件を起させる力に就いての、各國の歴史家の見解の間違つてゐることを認めてゐる様である。彼等はこの力を英雄や君主に屬してゐるものとは認めてゐない。しかし、それをさま〴〵な方向に働く數多の力の結果であると見做してゐる。戰爭とか、人民の征服とかを叙する場合には、萬國史の著者は、その事件の原因を、一人の人の權力の

中にではなく、その事件と關聯してゐる數多の人々に對する相互の動作のうちに求める。

この見界に從つて、數多の力の産物として考へられた歴史的人物の權力は、何人にも想像せらるゝ如く、單獨で事件を起させる、それだけで十分な力、とは認めることが出來ない。

然るに萬國史の著者等は、多くの場合に於て、その權力の觀念をば、又も、事件を起させ、そして其の事件に對して原因の關係に立つてゐる、それだけで充分な力として、用ひて居る。彼等の説明に從へば、歴史的人物は、或る時は、その人の時代の産物であり、その人の權力は、さま〴〵な力の産物であるだけであり、又或る時は、その人の權力は、事件を起させる力であるといふのである。例へば、ゲルヴイヌスやシユロツセルや、その他の人々は、ある場所では、ナポーレオンはフランス革命、一千七百八十九年のさま〴〵の理想、その他の産物であると説明し、又他の場所では、一千八百十二年の戰役や、その他彼等の氣に入らない出來事は、單にナポーレオンの惡い方へ向けられた意志の仕事であつて、それから一千七百八十九年のさま〴〵の理想そのものは、ナポーレオンの專斷政策のために、その發展を止められたのであると明瞭に言つてゐる。卽ち、フランス革命の理想や、時代の一般の傾向を壓さへ付けたといふのである。

この變な矛盾は、偶然ではないのである。それは到る處で我々が遭遇するもので、實に、萬國史のあらゆる著作が皆斯様な矛盾の連續で成り立つてゐるのである。この矛盾は、さういふ歴史家等が、

解剖の道を數歩進んで、中途で止まつてしまつたと云ふ事實から起つてゐる。

この集成的乃至結果的な力を成してゐる合成的な諸力を見出さうとするには、合成的な諸部分の總計が、結果的な諸部分に等しいと云ふことが必要である。この條件は歴史家に守られてゐない、その爲めに、結果的な力を説明するには、彼等はさういふ不充分な補助的な力に加へて結果的動作にも影響を及ぼす、或る説明せられない力を、もう一つ承認しなければならなくなるのである。

一千八百十三年の戰役や、プウルボン家の復興を叙する歴史家は、これ等の事件がアレキサンドルの意志から生じたのであると無雜作に言つて居る。が、哲學的歴史家のゲルヴイヌスは、これ等の事件に對する專門的歴史家の意見に反對して、千八百十三年の戰役や、プウルボン家の復興は、たゞ獨りアレキサンドルのみならず、スタインや、メツテルニッヒや、マダム・ド・スタエルや、タレイランや、フィヒテや、シャトウブリアンや、その他の人々の著作によつて起つたものであるといふことを證明しようとしてゐる。この歴史家は、明らかにアレキサンドルの權力を、タレイランや、シャトウブリアンや、そういふ人々といふやうな合成的諸力の總計、即ち、シャトウブリアンや、タレイランや、マダム・ド・スタエルや、その他の人々が相互に及ぼし合ふ影響の結果的な効果、即ち、數百萬のフランス人が、プウルボン家に服從したといふ現象には、明かに等しくない。斯く斯くの言葉がシャトウブリアンや、マダム・ド・スタエルや、その他の人々に依つて

言はれたといふことは、たゞ彼等相互の關係に影響した譯ではない。だから、如何にして此の數百萬人の服從といふことが、シャトウブリアンなどの相互の關係から引續いて起つて來たかといふこと、即ち、如何にして與へられたる量Aに等しい合成的な力から、Aの千倍に等しい結果が引續いて起つて來たかといふことを説明するには、歴史家は自分が棄てた權力のその力を、結果的な力の中に受け入れて、その力の存在を認めなければならなくなる、即ち、彼は、それ等のさま〴〵の成分の結果の上に働いてゐる説明することの出來ない力を承認しなければならなくなるのである。で、哲學的歴史家がするのは全く之れである。だから、その結果彼等は、歴史的傳記の著者等と撞着するのみならず、彼等自身にも相互に撞着するのである。

雨の原因に關して明瞭な知識を持たない田舍の人々は、自分等が雨にしたいとか、好い天氣にしたいとか思ふ場合次第に、風が雨を吹き散らしたとか、風が雨を降らすために吹き上げてゐるとか、言ふ。それと同じやうに哲學的歴史家等は時に依ると、自分等がさうあり度いと願ふ時とか、自分等の理論に都合のいゝ時には、權力が事件の結果だと云ひ、それから又時に依ると、自分等が何か他のことを證明したいと思ふ時には、權力が事件を起させるのだと云ふのである。

歴史家の第三の種類、即ち所謂文明史の著者等は、時々、著述家等や婦人たちを、事件を起させる力であると認める萬國史の著者等の定めた道を追ふのであるが、併し、彼等はその力を全く異つた風

に理解してゐる。彼等はその力を所謂文明、即ち智的活動の中に認めて居る。文明史の著者等は彼等の先行者——即ち萬國史の著者等とは全く一致してゐる、何故なれば、若し歴史上の事件が、或る人人が互に或る事を言つたといふ事で説明されるものとすれば、或る人々が或る書物を著したといふことで夫れを説明することの出來ない譯は決してないからである。有らゆる生きた現象に伴ふ無數の徴候の中から、これ等の歴史家は智的活動といふ徴候を選んで、それが原因だと主張するが、事件の原因は、智的活動の中にあるといふことを證明せんとする彼等のあらゆる努力にも拘らず、智的活動と國民の運動との間に共通した或るものがあると云ふことに人が同意し得るのは、たゞ大袈裟に言つた場合だけである。で、智力的活動が人間の行動を導くといふことを認めるのは、全く不可能なることである、何故ならば、フランスの革命の慘忍なる殺戮が、人間の平等といふ原理から生じ、最も悪い戰爭や虐殺が、愛の福音から起つて居ると云ふ様な現象は、この假定説を確定するものではないからである。

しかし凡ての歴史に充滿して居る此の巧みに織り成された諸議論が間違つてゐないことを認め、又國民が思想と呼ばれる或る不定の力によつて支配されることを認めても、やはり歴史の根本問題は答へられずに殘つてゐるのである。何故なれば、哲學的歴史家に依つて提出された、君主等の權力や助言者や、その他の人々の勢力の上に、今はもう一つの新らしい力、即ち——思想が加はつたのであつて、人民とその新らしい力との關係が證明を要することになつたからである。ナポーレオンが權力を持つて居たから、それが爲めに事件が起つたのだといふことは誰でも了解し得ることである。他の諸力と一緒になつて、ナポーレオンが一つの事件の原因となつたといふことも、幾らか努力すれば、誰にでも理解の出來ることである。けれども、何ういふ風にして le Contrat Social（ルコントラソオシアル）（民約篇）といふ一つの本がフランス人をして互ひに斬り合ひをさせたかといふことは、この新らしい力とその事件との原因的關係を説明せずしては理解し得られないことである。

同時代に生活してゐる凡ての人間の間には、或る關係が存在して居ることは疑ひがない、で、誰でもが、人間の諸運動と商業、工業、園藝その他何でもその間に或る關係を見出し得るのと恰度同じに、人間の智的活動と人間の歴史的運動との間に或る種の關係を見出すことは、出來得べきことである。しかし、何故に智的活動が文明史家たちに依つて一つの智的運動全體の原因や表現として認められてゐるかといふことは、了解することが出來ない。歴史家たちは、たゞ次の様な考に依つて、さういふ結論に導かれたに過ぎないのである。

（一）歴史は、學者たちに依つて書かれるものである、そこで自分等の職業に從事してゐることが人間全體の運動の基礎であると信ずることが、彼等に取つて當然なことであり、又心持が好いといふことである、それと同じやうな信念を持つことは、商人にも、農民にも、軍人にもそれ〴〵當然なこと

であり、又心持の好いことであるのだ、たゞ商人や軍人は歴史を書かないと云ふだけで、さういふ信念はさういふ人々の方では、表現されたといふに過ぎないのだ。それから

(二)精神的活動、學問、文明、開化、思想などゝいふものは、凡て漠然とした不定な概念であつて、その蔽ひの下に彼等は、稍不定な意味をもつてゐるので、如何なる理論の下へも容易に持つて行くことの出來るやうな語句を、自由に用ひ得るのである。

この種の歴史が内的に威嚴のあるものであるか何うかといふことは、(それは、誰れかに對つては、若くは何事かに對つては、必要なのであるかも知れないから)云はないにしても、凡ての一般歴史が段々に近づかうとしてゐる文明史に就て注意すべき點は、彼等は様々の宗教的な、哲學的な、又政治的な諸々の原理をば、種々の事件の原因として眞面目な詳細な分析をしたりなどするが、例へば、一千八百十二年の戰役の如き、現實的な歴史的事件を叙述しなければならぬやうになると、彼等は無意識の中にそれを權力の行使の結果として叙述し、その戰役はナポーレオンの意志がしたことであるといふ事實である。

これを云ふので、文明史家等は無意識の中に彼等自身撞着し、又同時に彼等が造り出した所の新らしい力は歴史的事件の表現ではなくて、歴史を説明する唯一の方法は、彼等が明らかに排斥して居る所のその權力に依らざるを得ないと云ふことを證明してゐる。

三

蒸汽機關が動いてゐる。何うしてそれが動いて居るのかといふ問ひが起る。農夫が、それは惡魔が動かしてゐるのだと答へる、今一人の男は、車輪が廻るから、蒸汽機關が動くのだと云ふ。第三の者は、その運動の原因は風の爲めにその蒸汽機關から漂ふ煙の中に見られると主張する。

農夫の主張は說破し難い、彼を說破するには、誰かゞ彼に惡魔などゝいふ者はこの世に決してないことを說明しなければならぬ。それでなければ誰か他の農夫が、蒸汽機關を動すのは、惡魔ではなくて、ドイツ人だといふことを說明しなければならない。さうすれば、彼等は、自分等の反對した見界からして、共に間違つてゐることを知る。所で又原因が車の運動にあるといつた人は、自分で自分を論破するのだ、何故なれば、一度解析の道に進み入つた以上は、更に更にその歩を進めて行かなければならない、彼は車の動く理由を說明しなければならなくなるからである。で、彼は蒸汽機關の最後の原因が汽鑵の中の壓縮されたる蒸汽の中にあることを發見するまでは、原因の探究を止めないでなければならぬのだ。蒸汽機關の運動を、それから吹き起る煙に依るのだと說明する人は、單に車の說明では不完全だと見てとつて、彼の眼についた第一のそれに伴ふ特徴を見て、それを原因として提

出したに過ぎないのである。

汽關の運動を說明し得る唯一の概念は、眼に見える運動に等しい力があるといふ概念である。而もこの國民族の運動を說明し得る唯一の概念は、國民の運動に等しい力があるといふ概念である。而もこの概念の下には、歷史家たちに依つて非常に様々な種類の、みな眼に見えてゐる運動とは等しくない諸力が、概括されてゐる。或る者はその概念の中に丁度農夫が蒸汽機關の中に惡魔を見るやうに、直接英雄に附屬する力を認めてゐる。又或る者は、車輪の運動といふやうな、數ある他の力から生ずる一つの力を認め、第三の者は、煙といふやうな、智的勢力を認めてゐる。

歷史が個人のことを叙して——それがシイザアでも、アレキサンドルでも、或はルウテルでもヴオルテエルでも——それが、一つの例外もなく、一事件にたづさはつて居る凡ての人民の歷史でない限りは、一の目的に向つて人間の活動を進めさせる力があるといふ概念なくして、人間の運動を叙述することは到底出來ないのである。で、この種の概念の中で、歷史家たちによく知られて居る唯一の概念は、權力である。

この概念は、現今唱へられてゐるやうな歷史の材料が、それによつて取扱はる把手である、で、バツクルの如き、歷史的材料を扱ふ他の方法をも發見せずして、この把手を打ち壞す歷史家は、歷史的材料を扱ふ最後の機會を自ら棄てるに過ぎないのだ。歷史上の現象を說明するには、權力の行使といふ概念の必要なることは、萬國史及び文明史の著者たちに依つて最も明かに證明されてゐる、彼等は權力に就いての概念を公に斥けておきながら、又止むを得ず一步毎にそれに立ち戻つてゐるのである。

史學は、人間の諸問題に對する關係に於ては、從來は、運用されて居る錢のやうなもの——即ち紙幣と貨幣の様なもの——であつた。歷史的傳記及び各國民の歷史は、紙幣の様なものである。彼等はその價値に關して疑ひが起らない限りは、誰に對して何ういふ害をもしないどころか有用なものとしてさへ、渡され受取られてゐることが出來るのである。若し我々が如何にして諸英雄の意志が種々の事件を起させるかといふ様なことを忘れてしまひさへすれば、チエールの歷史は趣味もあれば、且つ有益でもあり、その上に尙、或る詩をさへ缺いてゐない。けれども紙幣を作ることが容易であつて、餘り多く流通された爲めとか、或ひは又それを金貨に換へたいと思つた爲めとかで、紙幣の眞價に就て疑ひが起るのと同様に、この種の歷史の眞價に就ての疑ひが、餘り斯ういふ風な歷史が出過ぎた爲めとか、或ひは誰かゞその單純な心から如何なる權力に依つてナポーレオンは之れを成し就げたのかと尋ねる——即ち流通紙幣を眞正の概念といふ純金に換へようと思ふために起るのである。

一般史や文明史の著者は、恰かも紙幣の不便を認めて、紙の代りに、黃金ほどの密度のない金屬の、チン〳〵いふ貨幣を造らうと決心した人々と同様である。で、さういふ貨幣は、金屬の音はするに違ひな

いが、たゞ夫れだけであるのだ。紙幣は無智の者を欺き得るかも知れないが、貴金屬でない貨幣は何人をも欺くことは出來ない、恰度黄金がたゞに交換するためばかりではなく、使用するために有價値である時にのみ、黄金であると同じやうに、萬國通史の著者等も、彼等が權力とは何であるか？　といふ歴史の根本問題に答へ得る時に始めて自らの眞價を證し得るわけである。これ等の歴史家は、この疑問に對して色々の矛盾した答へを與へてゐる。ところが、文明史の著者等は、全く違つたことを答へて、その疑問を逃げてしまふ、で金を眞似た贋造貨幣は、たゞ黄金としてそれを受けることに同意する人々とか、又は黄金の眞の性質を知らない人々とかの社會にのみ用ひられるだけである。それと同じく人間の根本的疑問に答へない歴史家は、大學に於ける通貨として、或は讀者の——所謂眞面目な讀書を好むといふやうな群衆に對してのみ、彼等自身の或る目的のために役立つのである。

四

神によつて人民の意志が一人の選ばれたる者に服從せしめられるし、選ばれたる者の意志は、又神に服從せしめられるのだといふ古代人の見界を捨てゝ以來歴史は、矛盾に出遭ふことなしには一歩も進むことが出來なくなつた。歴史は、人事に神が直接干與すると云ふ往時の信仰に歸るか、或ひは權力

と呼ばれて居る所の、歴史的事件を起させる其の力に就いて確定した説明を見出すか、何れか一つの道を選ばなければならないのである。

往時の方法に歸るといふことは問題にならない、古い信仰は壞はされてしまつたのだ、だから、是非一つの解釋がこの權力の意味に就いて發見されなければならない。

ナポーレオンは軍隊を募つて、戰場に進軍することを命令した。この觀念は我々には全く知れ切つたものである。我々は全くこの觀念に馴れ切つてゐるので、何故に六十萬の人々がナポーレオンの言葉の下に戰ひに行つたかといふ問題は、我々には最早や無意味に見える程である。彼は權力を持つて居た、で、彼の與へた命令が實行されたのである。

この答へは、若し我々が權力が神から彼に與へられたものだと信じさへすれば全く申分のないものである。が、我々が夫れを承認する以上、一人の人が他の者を支配するといふ此の權力は何であるか、と云ふことを定義する必要がある。

この權力は、弱者の上に及ぼす强者の肉體的優越即ち、肉體的の力——ヘルキュルスのやうな——を用ひること若くは、それを用ひるといふ威嚇に基いた優越から來る直接の力ではあり得ない、と云つて又、よく或る歴史家等が彼等の心が單純なので、重なる歴史上の人物は英雄——即ち天才と呼ばるゝ靈と心の特種な力を賦與されて居る人々——であると主張して想像するやうに、精神的の優越に

基づいて居るものでも有り得ない、この權力は、精神的の力の優越に基づいて居るものでもあり得ない、何故ならば、ナポーレオンのやうな、その人の精神上の性質に就いては非常に異つたさまざまの說があるところの、歷史的英雄に就ても何も云はぬとしても、歷史は數百萬の人々を支配してゐた、ルイ十六世とかメッテルニッヒといふやうな人々も精神的の力に於ては何等の著しい特徵をもつてゐたのではなく、反つて、その反對に、彼等は大抵彼等が支配して居た數百萬の人々の誰よりも、精神上に於て弱かつたといふことを我々に證明して居る。

若し權力の根源が、それを所持して居る人の體的特質にも又は精神的特質にも基づいてゐないものとすれば、この權力の根源は、その人の外——即ちその權力を所持して居る人が、民衆に對して立つてゐる夫れ等の關係の中——に於て發見されなければならない。

權力なるものが、法學、即ち、權力といふ歷史上の表徵の錢を純金に交換しようとする歷史の正金銀行によつて、解釋せられてゐるところは、全くこの通りである。

權力とは民集の結合意志が、彼等の選んだ支配者へ、公然か若くは默諾に依つて、移されたものをいふのである。

如何にして國家と權力が組み立てらるべきものであるか、と云ふ議論から成り立つて居る法學の領域內に於ては、若しさういふ組み立てが出來得べきものとすれば、上に述べた權力の定義は、極めて

明瞭なものである。が、歷史に夫れを適用するとなると、この權力の定義は說明を要する。

法學は國家や權力を、古人が火を見做したやうに、絕對に獨立した存在だと見做して居る。けれども、歷史にとつては、この國家や權力が單なる現象であること、恰かも今日の物理學にとつて火が原素ではなくして、現象であるのと同じである。

歷史と法學との見界に於ける此の根本的相違からして、かういふ事が生じて來る——法學は、科學的著述家の說に於ては、權力なるものが如何に組織さるべきものとなつてゐるか、又時といふ條件を離れて不變に存在してゐる權力とは何であるかと云ふことを詳細に論じ得るが、時に依つて明かな變形をなす權力の意義に就いての歷史的疑問に對しては、何の答へをも與へ得ないのである。

權力が、その支配者に移された民衆の結合意志であるとすれば、プガーチョーフは果して民衆の意志の代表者であるか？　若し彼がさうでないとすれば、それならば、ナポーレオン一世がさう云ふ代表者なのであるか？　ナポーレオン三世は、プロオニュで捕へられた時には、罪人であつたが、その後では彼に捕へられた人々の方が罪人であつたと云ふのは何故であるか？。

宮中の革命——それには、時としては二三人の人々のみが關係するに過ぎない——でも、民衆の意志は一人の新らしい人に移されるのであるか？國際的關係の場合に於ても、民衆の意志は彼等を征服した人に移されるのであるか？一千八百〇八年に於てライン同盟の意志は、ナポーレオンに移されたの

であるか？　一千八百〇九年に、我軍がフランスと同盟してアウスタリアと戰を開いた時、ロシアの民衆意志は、果してナポーレオンに移されたのであるか？　かういふ疑問は次の三樣の方法で答へられる。

（一）民衆の意志は、彼等の選んだ一人の支配者、若くは數人の支配者へいつも無條件で委任されるといふこと、從つて新らしい權力の勃興、一度委任された權力に反對する有らゆる爭鬪は、眞の權力に對する侵害であるといふこと、を主張することによつて。

又は（二）民衆の意志は、或る定つた條件の下に、支配者に委ねられるといふことを主張することによつて、それから、權力に對する有らゆる制限も、鬪爭も、又權力の廢止でさへも、それに依つて彼等から權力が支配者に委ねられた諸條件を、支配者が無視するが爲めに起るものだといふことを示すことによつて。

又は（三）民衆の意志は、條件的に支配者等へ委任されるのであるが、その諸條件は不確かで不定であつて、幾つかの主權の勃興や、その爭鬪や敗滅は、民衆の意志が、人の一團から他の一團へと移される不確かな諸條件を支配者等が完全に守るか否かの爲めにのみ起るのである、と主張することによつて。

かういふ三つの方法に依つて歷史家等は、支配者等に對する民衆の關係を說明して居る。

或る種の歷史家等——既に前に述べたやうな明かに傳記の著者であり、追憶錄の著者である人々——は、彼等の心の單純なために、權力の意義に就いての問題を了解し得ないで、民衆の結合意志は無條件的に歷史上の統率者へ委ねられるのだと信じてゐる樣に思はれる。それ故にたゞさう云ふ主權のいづれかを叙述する場合には、これ等の歷史家等はその主權は絶對で且つ神聖なるものであつて、この神聖なる主權に反對する他の力は、主權ではなくして、主權の侵害、不法なる侵害であると見做してゐる。

彼等の理論は、原始的な平和な歷史時代にはよく適合するが、種々樣々なる主權が同時に起つて、互ひに覇を爭ふやうな、國民の生活に於ける複雜な動亂の時代に夫れを適用することになると、王統の歷史家の方では國民議會や執政政治や、ボナパルトは偏へに眞の主權者の侵害であると論じ、一方共和黨やボナパルト黨は、或る者は共和國が、又或る者は帝國が、眞の主權で、その餘の一切の者は皆主權の侵害であると主張するやうな不便が生ずるのである。かう云ふ歷史家が與へてゐる解釋は、互ひに矛盾して居て、非常に幼い子供以外には誰をも滿足せしめ得ないことは明らかである。

歷史に對する此の見界の缺點を認めて、他の種類の歷史家等は、主權は支配者に對する民衆の結合意志の條件的委任に基づくもので、歷史上の主導者等は、人民の意志が默認によつて彼等に命じた順序書を實行すると云ふ條件に於てのみ、權力を有するのであると主張する。しかし何ういふものから

此の順序書が成り立つて居るかを、これ等の歴史家は我々に語らない。彼等がそれを語るにしても、彼等は始終互ひに撞着し合つてゐる。

國民の運動の目的は何ういふものから成り立つて居るかと各自の見解に從つて、各歴史家は此の順序書を、たとへばフランスとか、若くは或る他の國の自由民の偉大とか、富とか、自由とか、又は開化などゝいふものだと解してゐる。併し、かういふ順序書の性質に就いての歴史家相互の矛盾は論外として、尙且つ一つの一般的な順序書が、凡ての國民の爲めに存在するものだといふことを考へて見ても、歴史上の事實は殆んど常に此の原理と矛盾するのである。

權力が支配者等に委任されて居るさま〴〵の條件が、人民の富とか、自由とか、文化とかのうちに見出さるゝものとすれば、何うしてルイ十四世や、ジョン四世のやうな王がその治世の間を平和に終つたのに、それに反してルイ十六世や、チヤーレス一世のやうな王がその人民の爲めに殺されてしまつたのか？　この疑問に對しては、これ等の歴史家は斯う答へる、順序書に反したルイ十四世の行動の結果が、ルイ十六世に反動したのであると。では、何故ルイ十四世やルイ十五世に反動しなかつたのか？　何故ルイ十六世だけに反動したのか？　それから、さういふ反動には何れ程の制限があるのか？　これ等の疑問に對しては、何の答へもないし、又それは有り得るものでもないのだ。又この見界は、國民の結合した意志が、何世紀間もその支配者なり又その後繼者なりに委任せられて居たもの

が、突然五十年の年月の間に、それが國民議會に、執政政府に、ナポーレオンに、アレキサンドルに、ルイ十八世に移され、それからまたナポーレオンに、チヤーレス十世に、ルイ・フイリツプに、共和政府に、それからナポーレオン三世にと移されて行つた理由を說明してゐない。一人の人から他の人へと國民の意志の急激なる移附を、殊に國際關係とか、戰爭とか、又は同盟とかの爲めに複雜にせられて居る場合に於て、說明するのには、これ等歴史家は、さういふ諸々の現象の一部は、國民の意志の常當な移附ではなくて、外交家や君主や、黨派の主領などの、悧巧なものとか失敗する者とか、その手腕とか、その弱點とかによつて、左右せらるゝ隅然の事件であることを何うしても認めざるを得なくなる、であるから、歴史上の現象の大部分——內亂や、革命や、戰爭——は之れ等の歴史家に依つては、國民の自由意志の委任によつて生ずるものではなくして、一人又は數人の人々の惡い方へ向けられた意志、即ち、また、換言すれば主權の侵害によつて生ずるものであると見做されてゐる。それで、この種類の歴史家に依つても亦、歴史上の諸事件は彼等の原理に對しては例外であると解されて居るのである。

これ等の歴史家は、數種の植物が、種子から二つの子葉、即ち種葉に分れて成長するのを見て、一切の成長する植物は何でも二つの子葉に分れて成長するので、椰子樹や菌蕈（きのこ）や、それから、それが成長して有らゆる方向へその枝を擴げ、そして、その二つの種葉には全く似もつかないものになつた時

には、概でさへも、彼等の所謂成長の眞法則といふものからは例外であると主張する植物學者のやうなものである。第三の種類の歴史家は、民衆の意志が條件的に歴史上の主導者に委任せられるといふことを認める、けれども之れ等の條件は我々には知られてゐないのであると云ふ。彼等は、歴史上の主導者は單に已に委托されたる民衆の意志を實行してゐるといふだけで權力を持つて居るのだと主張する。

しかし、その場合に於て、若し國民を動かす力が、その歴史上の主導者に存せずして人民そのものにあるとすれば、さういふ歴史上の主導者といふもの〻意義は何處にあるか？

歴史上の主導者とは、それ等の歴史家が我々に告ぐる所に依れば、民衆の意志の自然の表現である、そして歴史上の主導者の活動は民衆の活動の典型として働いて居るのだといふのである。

けれどもその場合には、斯う云ふ疑問が起る、その歴史上の主導者の一切の活動は、民衆の意志の表現として働くのであるか、或ひはその或る一面のみがさういふ風に働くのであるか？ 若し歴史上の主導者の全生活の活動が、或る人々が實際に信じてゐるが如く、民衆の意志の表現して働くものであるとすれば、宮中の一切の醜聞を伴つたナポーレオンやカザリンの傳記は、彼等の人民の生活の表現として働いて居るものであるといふ事になる、しかし之れは明かに不合理である。若し又或る歴史上の主導者の活動の一面が、一部の所謂哲學的歴史家が信じてゐるが如く國民の生活の表現として働いて居るも

のとすれば、その歴史上の主導者の活動の如何なる方面が國民の生活を表はして居るのかを定める爲めに、我々は先づ國民の生活が如何なるものから成り立つて居るかを知らなければならない。

この困難に遭遇すると、この種類の歴史家は事件の出來るだけ大きな數をその下に含ませ得るやうな、最も曖昧な、朦朧とした、一般的な抽象物を考へ出す。そして此の抽象物の中に人間の運動の目的が發見されるのだと言明する。殆んど凡ての歴史家に採用されてゐる最も普通な抽象物は、自由、平等、教化、進歩、文明、開化などである。人間の運動の目的として數種の斯様な抽象物を提出しておいて、歴史家は、後世に最も多くの事跡を殘した人々——王とか、大臣とか、將軍とか、著述家とか、改革家とか、法王とか、新聞記者とかいふ人々——を、自分たちの意見から見て、さういふ人人がその抽象物を發展さしたり、妨止したりした効果の上から、研究してゐる。けれども、人間の目的が、事實自由や、平等や、開化や、又は文明にあることは何處でも證明されてゐないし、又支配者や人類の主導者と民衆とが關係をもつてゐるといふのは、その民衆の結合した意志が、常に我々の注意を引き附ける人物にのみ附與されてゐると云ふ獨斷的假定に基づいて居るのであるから——事實、一つの場所から他の場所へ動き、家を焼き、耕地を捨て、そして互ひに殺戮し合ふ數百萬の人々の活動は、家を焼かず、又土を耕しもせず、その同胞を殺しもしない、何十人かの人々の活動の記述の中には表現されるわけはないといふことになるのである。

歴史は到る所にこれを證明して居る。前世紀の末頃に起つた西方の國民の騒亂や、彼等の東方への侵入は、ルイ十四世や、ルイ十五世や、ルイ十六世や、或ひはその皇后たちや、大臣たちの活動に依つて、或ひはナポーレオンや、ルウソウや、デイデロオや、ボウマルシエーや、その他の人々の生活に依つて說明せられるか？

ロシア人民の東方への、カザンやシベリヤへの運動は、ジョオン四世の病的な生活の詳說や、クウルプスキイとの彼の通信の中に表白されて居るか？

十字軍時代に於ける人民の運動は、ゴツドフレイとか、ルイとか、又彼等の婦人たちの様な人々の生活や活動によつて說明することが出來るか？

西方から東方への諸國民の運動——かの目的もなく、指導者もなく、たゞ隱者ベータアに從つて居た放浪者の群衆のやうな——が起つたといふことは、今日でも尙我々の了解に苦しむところである。更に了解に苦しむのは、歴史上の主導者によつてさういふ遠征の合理的な且つ神聖なる目的——エルサレムの救濟といふこと——が明かに定められた時、その運動が止んでしまつたといふことである。

法王や、王や、騎士たちが、かの聖地を解放せよと人民を勵ました。けれども人民は動かなかつた、といふのは以前に彼等を促して動かしたところの譯の分らない原因が、その時には最早や存在してゐなかつたからであつた。ゴツトフレイのやうな人々や、ミンネシンガア（戀愛詩人）等の歴史は、明らかに國民の生活の表徴と見ることは出來ない。で、ゴツトフレイやミンネシンガア等の歴史は、たゞさういふ騎士や詩人等の歴史として存して居るだけであつて、諸國民の歴史や、彼等の衝動の歴史は少しも分らないものとして殘つて居るのである。

著述家や改革者等の生活の歴史は、尙一層國民の生活の說明にならぬものである。

文明史は我々に、人民の生活を促進せしめた動機として著述家や革命家の生活や、思想の諸狀態を擧げて居る。我々はルウテルが性急で斯く斯くのことを言つたと云ふことを教へられる。我々はルウソウが疑深い男で、或る本を書いたといふことを教へらるゝけれども、宗教改革の後で國民をして殺し合ひをさせたものは何であるか、又人々が、かのフランス革命の間に、斷頭臺で互ひに殺し合つたのは何故であるかを教へられない。

若し我々が、多くの近代の歴史家たちがする如く、これ等の各種の歴史を綜合するならば、我々は君主や著述家たちの歴史を得るであらう、けれども國民の生活の歴史は得られない。

五

國民の生活は、數人の人の生活の中に含まれてゐるものではない、何故なれば、それ等の數人の人

と國民との間の結合的關係が發見されてゐないからである。この結合的關係は、歴史上の主導者に對して、國民の結合した意志が委任されてゐると云ふことに基づいてゐるのだといふ議論は、單なる假設であつて、歴史の實證に依つて支持されて居るのではない。

歴史上の人物に民衆の結合した意志が委任されてゐるといふ理論は、法律學の領域に於ては、多くの事を說明し得るかも知れぬから、それは恐らくさういふ目的には主要なことであらうが、歴史にそれを應用しようとすると、革命や、戰爭や、內亂が起るや否や、歴史が眞實に始まるや否や、——この理論は何物とも說明し得ない。

この理論は論破し得ないものゝ樣に思はれる、が、それは、國民の意志を委任するといふ行爲は、嘗つて存在したことがないものであるから、その存在を立證することが出來ないからに過ぎない。

如何なる事件が起つても、又如何なる人がさういふ事件を主導しても、理論は、いつでも、結合した意志がその人に與へられてゐるのであるから、その人がさういふ事件を起させることを主導したのであると、言ひ得るのである。

歴史上の問題に對して此の理論の與へる答へは、丁度羊の群の運動を見て居て、野のさま〴〵な部分に於ける牧草のさま〴〵な性質や、牧羊者の行動には少しも注意を拂はずに、たゞ會々その先頭に居た動物を見て羊群がこの方向をとるとか、あの方向をとるとかいふことばかり氣を付けて居る人の答と同じである。

『羊群はその先頭にゐる羊がそれを導くので此の方向へ動くのだ、で、凡て他の羊の結合した意志が羊群の主導者に委任されてゐるのだ。』斯ういふのが、主權への意志の無條件の委任といふことを想像する、第一の種類の歴史家等が與へる答へなのである。

『若し羊群を導く羊どもが他のものと代るとすれば、それは、凡ての羊の結合した意志が、最初の主導者が凡ての羊群に依つて選ばれた方向に從はなかつたと云ふ事實の爲めに、一の主導者から他の主導者へと移されたといふ事實から起るのである。』斯ういふのが、民衆の結合した意志が、何だか分らないものと見做されてゐる諸條件に於て、その支配者等に附與されて居るのだと假定して居る歴史家の答へである。(斯ういふ觀察の方法を以てすると、自分の好きな方面から見て居る觀察者は、民衆の方向が變つた場合には、先頭にゐる者ではなくて、横の方や、又何うかすると殿に居るものを主導者と認めることがあり勝である。)

『若し先頭にある動物が始終變り、羊群の取る方向も始終變るとすれば、それは我々に知られてゐる方向を取る爲めに羊どもが、彼等の意志を我々の注意を引附けてゐる羊どもへ委任したといふ事實から起つて來るのであつて、その羊群の運動を研究するには、我々は羊群の全列に於て動いてゐる眼に附く凡ての羊を觀察しなければならない。』斯ういふ風に、君主から記者に至るまでの一切の歴史上の

人物を、それ等の人々の時代の表現と見るところの第三の種類の歴史家は言ふのである。

歴史上の人物に對して民衆の意志が移されるといふ理論は、唯單に意譯——即ち單に問題を他の言葉で言ひ換へたに過ぎない。

歴史的事件の原因は何であるか？　權力である。權力とは何であるか？　權力とは一人の人に附與された民衆の結合した意志である。

如何なる條件に於て民衆の意志が或る一人の人に附與されるのか？　その人が民衆の意志を表現するといふ條件に於てである。即ち、權力は我々には其の意味の理解し得られない言葉である。

若しも人間の知識の領域がたゞ抽象的推論にのみ限られて居るものならば、科學に依つて與へられた權力の說明を批評にまかした後では、人類は權力といふものがたゞの言葉に過ぎないものであつて、實際には、何等の存在をも有してゐないものであるといふ結論に達するであらう。しかし諸現象を知るといふことに對しては、人間は抽象的推論以外に別の器能——經驗——を持つて居る。それに依つて彼は、推論の結果を確めるのだ。そこで經驗は、權力は單なる言葉ではなくして、實際に存在する現象であることを告げる。

權力といふ觀念なしには、些とした人間の結合した活動をも記述することが出來ないといふ事實は言はないにしても、權力の實在は、たゞに歴史に依つてのみならず、同時代の出來事を觀ることに依つても明らかにせられる。

一つの事件が起る毎に、一人乃至數人の人が現はれ、その意志に依つてその事件を起すのだと認められる。ナポーレオン三世が命令を與へると、フランス軍がメキシコへ行く、プルシヤ王とビスマルクとが或る命令を與へると、軍隊がボヘミヤへ行く。ナポーレオン一世が命令を與へると、軍隊がロシアへ進入する。アレキサンドル一世が命令を出すと、フランス人がブウルボン家に服從する。經驗は、どういふ事件が起つても、それがさうあらねばならぬやうに命令した一人乃至數人の人の意志といつも結びつけられてゐることを吾々に示すのである。

歴史家は、人事に神が關與することを認める古い習慣から、ともすると其の事件の原因をば權力を附與された人の意志の行使の中に求めたがるのであるが、併し、さういふ結論は人間の理智に依つても又經驗に依つても共に確められない。

一方に於て理智は、一人の人の意志の表現——彼の言葉——は、實際に於ては、一つの事件、例へば革命とか戰爭とかのやうなものの中に表現された一般的活動の一部分に過ぎないのであるから、或る不可解な超自然的の力——奇蹟——といふ樣な假定なしには、これ等の言葉が數百萬人の人間の運

動の直接の原因であるといふことは認められ得ないといふことを我々に示す。

他方に於て、よし誰かゞ言葉が一つの事件の原因となり得ることを認めたとしても、歴史的人物の意志の表現は大抵の場合に於て何の効果をも生じないといふこと——即ちその命令が屢々用ひられなかつたり、又、實際に於て、何うかすると其の命令したこと丶全く反對のことがなされる事があるのだ、といふことを歴史が吾々に示すのである。

人事に神が干與するといふ事を認めない以上、我々は權力を事件の原因として受け入れるわけには行かない。

經驗の見地よりすれば、權力は或る一人の意志の表現と、他の人々に依つてなされる其の意志の遂行との間に存在する依屬物に過ぎないのである。

その依屬の諸條件を說明するには、我々は、先づ何よりも意志の表現といふ觀念を神に歸せしめずに人間に歸せしめなければならぬ。

若し、古代の歴史が我々に告げるやうに、神が命令を與へて、その意志の表現は、時を超越したものとすれば、神は事件とは何の關係を持つものではないから、その意志の表現は、時を超越したものである、又何ものに依つても呼び出されるものではないのである。併し我々が、時の中で働き又互ひに交涉し合つて居る、人間の意志の表現である命令のことを語る場合には、我々は、若し命令と事件との結合的關係

を理解しようとするならば、次のやうなことを確定しなければならない。

(一)その下に凡ての物が起る條件、事件及び其の事件を支配する人の、時の中に於ける力の連續、それから(二)命令を與へる人と其の命令を行ふ者との免れ難き關係の條件。

六

たゞ神の意志の表現だけが、時間を超越して、數年又は數世紀間に起つた事件の全體を說明することが出來る、そして、たゞ神だけが何者の影響をも受けずに、その意志だけで人類の行くべき方向を定めることが出來る。が、人間は時間に束縛せられ、又自ら事件の中に身を投じて居るのである。

忘却せられて居た第一の條件、即ち時間の條件を立てなほして見ると、我々は如何なる命令と雖も先の命令を離れては行ふことが出來ない、そして其の爲めに次の命令の遂行をも可能にすることが出來るのだといふことに氣がつくのである。

如何なる命令でも決して勝手氣儘に現はれるものでもなければ、又その中に事件全體を網羅してゐるものでもない。寧ろ各々の命令は他の命令から流れ出るもので、決して事件の全體に關聯してゐるものではない、たゞ一事件の一瞬間に關聯してゐるだけなのだ。

例へば、ナポーレオンが軍隊に戰に行くことを命じたと云へば、我々は一瞬間に言ひ現はされた一つの命令の互ひに相關聯してゐる次の命令の全體を結び附けて了ふ。ナポーレオンはロシアへの出兵を命ずることは出來なかつたし又そんなことを命じなかつた。が、彼はウインナと、ベルリンと、それからペテルブルグとへ或る詔書を書かせた。翌日、陸軍や、海軍や、それから經理局などへ或る命令書と指揮書とを書かせた。翌日、陸軍や、それから經理局などへ或る命令と指揮とを書かせた。——無數の命令は、全體の命令に纏つて、逐にフランス軍をロシアへ進めるやうな、事件の全體となつたのである。

ナポーレオンは、その在位中斷えずイギリス遠征の命令を發して居たにもかゝはらず、その計畫の一つにもそれ程の努力と時間とを費さなかつた、のみならず其の在位中たゞの一度も自分の計畫を實行しようと試みたことさへなかつた。しかも彼はロシア遠征を實行した、彼が屢々口外した信念に依れば、彼はロシアと同盟することを有利な策だと思つて居たのだ、さう云ふ事になつたのは事件の全體に彼の第一の命令は適應しなかつたが、第二の命令は適應したからである。

或る命令が確實に實行される爲には、その命令者が實行され得る命令を發する必要がある。如何なる命令ならば實行され、如何なる命令ならば實行されないかを知ることは、たゞに數百萬人の人が參加したナポーレオンのロシア出兵の場合のみならず、最も簡單な事件の場合でさへ不可能なことである。

る。何故かと言へば、その何れを實行するにしても、何百萬とも知れぬ障害が始終邪魔しようとして起り勝ちだからである。だから實行された命令は、何れでも皆無數の實行されない命令の中からたゞ一つ選ばれたものに定まつてゐる。不可能な命令は皆、事件と關聯してゐない。從つて實行されるやうなことはない。たゞ可能な命令だけは、事件の全體に一致した命令の全體と關聯してゐる。從つて實行されるのである。

命令は事件に先んずるもので、從つて事件の原因であるといふ我々の過つた思想は、或る事件が行はれ、幾多の事件と關聯した無數の命令の中の或るものが實行された時、我々が實行されなかつた命令、つまり實行される筈のない命令を忘れて了ふことから起るのである。のみならず此の意味に於て、我々の謬想の主なる原因は、歷史に於て、數多の樣々なる、些細な事件の全體、例へば、フランス軍をロシアに侵入させたことが、此の事件全體から生じた結果に依つて單一なる事件に總括され、その總括に應じて其の命令の全體も亦意志の單一なる表現に總括される事から起るのである。

我等は言ふ、ナポーレオンはロシアに出兵する意志をもつてゐた。で、それを實行したのだと。所が實際に於て、我々はナポーレオンの有らゆる行動の中にそれらしい意味の表現を少しも見出さない。寧ろ我々は種々樣々な、そして判然しない傾向を有つた連綿たる命令乃至彼の意志の表現を見るのである。

ナポーレオンの命令の中には實行されないものも無數にあるが、たゞ一千八百十二年の戰爭に對する命令だけは實行された。それは此の命令の何處かゞ實行されなかつた命令と異なつてゐたからではなく、たゞ單にその命令の全體がフランス軍をロシアに侵入させた事件の全體と一致して居たからである。切拔摸畫（きりぬきがたのゑ）で種々な形が畫かれるのは色の塗り處と塗り具合とによるものではなくして、たゞ切拔型に切り拔いてある形の通りに一面に色を塗るからで、前者も丁度之と同じ理窟である。で、時間の上から命令と事件との全體を調べて見ると、我々は如何なる場合にも命令が事件の原因になり得べきものではなく、たゞ兩者の間には或る一定の關係があるだけだといふことを發見するのである。

此の關係が何物であるかを了解するには、今迄無視して居た別の場合即ち神からではなく、人間から出る種々な命令に伴ふ或る事情、命令者自身もその事件の中に沒入して居るといふ事を考へて見る必要がある。

命令する者と命令される者との此の關係こそ實に權力と呼ばるべきもので、それは次の如くに分解せらるべきものである。——

人々は共同事業の爲めに常に或る團結を形造るものである。そして其の團結の中に於て、共同的行動の爲めに示されてある目的に差別があるにもかゝはらず、その行動にたづさはつて居る人々の間の關係は常に同一である。

斯う云ふ團結を形造ると同時に、人々はお互の間に次のやうな關係を結んで居る、即ち彼等は自分等が團結してやつて居る共同事業に於て、大多數の人々に、より多く直接の役割を取らせ、少數の人に、より少く直接の役割を取らせると云ふ關係である。

共同の事業を成し遂げる爲めに組織されてゐるのは軍隊である。

有らゆる軍隊は下級軍人、つまり大多數を占めてゐる兵卒と、それより少し高級な軍人、つまり兵卒より少し少ない伍長若くは下士官と、更に高級な軍人つまり伍長や下士官よりもつと少數の者とから出來上つてゐるが、なほこんな風に、上になる程段々數が少なくなつて、遂に全體の總指揮權をもつてゐる最高の一人に歸着するのである。軍隊組織は最も正確に圓錐形で言ひ現はされる、圓錐形の底邊は、直徑の最も大きな所で、これがつまり兵卒で成り立つて居るのだ、それから高くて小さい所は高級軍人で、なほ、段々上になつて遂に圓錐形の頂上に達する、そして其の頂點が總司令官に當るのである。

最も數の多い兵卒は、圓錐形の最底面即ち底邊を造つて居る、そして其の兵卒は直接に突いたり斬つたり燒いたり掠奪したりする。そして、さういふ行動をするやうにと、常に上官から命令を受けてゐる。が、彼自身は決して命令するやうなことはない。下士官（これはその數がずつと少ない）は兵卒

よりも行動することが少ない、が、度々命令を發する。將校となると、更に行動することが少なくなり、更に命令を發することが多くなる。將官になると目的を示して軍隊に行動を命ずるだけで、武器を取るやうなことは決してない。總司令官は軍隊行動に直接參加するやうなことは決してない、たゞ大軍の行動に就いて大體の指揮をするだけである。これと同じ樣な人々相互の關係は、井同事業——農業とか、商業とか、その他各方面の活動の爲めに出來てゐる、人々の有らゆる團結の中に現はれてゐる。

それ故、圓錐の契合點や、軍隊の階級若くは官等や、或る何等かの事務若くは共同事業の狀態などを下級のものから高級のものに至るまで、一々緻密に穿鑿して見なくても、そこに一つの法則があることを知る。人々は常に共同の事業を完成する爲めに此の法則に依つてお互に例の關係を保つてゐるのである。即ち人々は事業の完成に携はることが直接であるだけそれだけ命令することが少なく、それだけ其の人數が多いが、その事業に直接あづかる事の少ない者ほど命令することが多く、その人數は少ないといふ風に、低い階級から殆んどその事業に直接携はることなく、たゞ他の人々より更に多く命令を與へることに全力を注いでゐる最後の一人に上つて行く關係である。

これが命令する人と命令される人との關係で、これが此の權力と呼ばれて居る概念の眞髓を成して居るものである。

七

何か事件が起ると、人々はその事件に就いて、それ〴〵の意見や希望を述べる、そして其の事件は多くの人々と共同的行動から生ずるものであるから、その述べられた意見や、希望の中のどれか一つは少なくとも、略ぼ實行されるに決つてゐる。述べられた意見の一つが實行されると、その意見は事件に先んじた命令として、その事件に關連させられる。

人々が丸太を引張つてゐるとする。各自は何うして又何處へそれを引いて行くべきかに就いて其の意見を述べる。人々は丸太を引つ張つて行く、そして彼等の中の一人が言つた通りになりつゝあることを知る。つまり彼が命令したので、之れが命令と權力との原始的狀態である。より多く腕力を働かした者は、自分のしたことを殆んど考へることが出來ない、又その共同事業が如何なる結果を來す

我々は凡ての事件が起る場合の時間的條件を考へて見て、命令は、それが自分に一致した事件の全體に及んだ時に限つて實行されるものであることを發見した。命令する人と實行する人との關係の必然的條件を考へて見て、我々はその性質として命令する人は事業そのものに殆んど關係しないで、その勢力を專ら命令することに集中するものであることを發見した。

かを考へることも出來なければ、命令することも殆んど出來ない。より多く命令する者は、その口舌を働かす代りに、腕の方は大して働かさないらしい。

一つの目的の爲めに働いてゐる人々の大集團になると、更に一層人々の等級が劃然としてゐて、その共同事業に直接たづさはることの、より少ない者ほど、より多くその勢力を命令に向けてゐる。人が單獨で働く場合には、その人は常に、自分の過去の行動を指導したやうに思はれる或る思索の脈を有つてゐるもので、それが彼の現在の行動を保證し、ひいては彼の未來の行爲に關する豫想を指導するのである。

人々の集團もこれと同じ樣な行動をとるもので、行動にあづからない人々に、その共同事業に關する思索や、保證や、豫想などをまかして置くのである。

その理由は、我々に分つて居る居らぬは兎に角、フランス人は突然互ひに斬り合ひ殺し合ひを始めた。斯く人々の意志が表現されると同時にその事件には、それがフランスの幸福の爲め、自由の爲め、平等の爲めに缺くべからざるものであると云ふ保證が伴つてゐる。人々は互ひの殺戮を止めた、此の事件には權力の一致、全ヨーロッパの保全などの必要であると云ふ保證が伴つてゐる。人々は西から東へと進み、その同胞を殺した、而して此の事件にはフランスの名譽、イギリスの屈服、などゝ云ふ言葉が伴つてゐる。歷史は、我々に斯ういふ事件に對する保證が全く非常識で、且つ互ひに矛盾撞着

して居ることを示してゐる。例へば、人間の權利を主張する結果人間を殺すといふが如き、又イギリスを壓迫する爲めにロシアで數萬の人間を殺すと云ふが如きである。しかも斯ういふ辯明が當時にあつては動かすべからざる價値を持つてゐるのである。

これ等の辯明は、斯う云ふ事件を引き起した人々の道德的責任を許してゐる。此の辯明の一時的目的は帚の仕事をすることである。汽車の來る前に豫め線路を掃除しておくことである。つまり人間の道德的責任の路を掃除しておくことである。斯ういふ辯明を離れては、色々な事件を調べる場合に起つて來る、最も單純な問題、即ち如何にして數百萬人の人々が結束して罪を犯し、殺人や、戰爭や、さう云ふ類のことを犯すに至つたか？　といふことさへ說明することは出來ない。

ヨーロッパに於ける國家的社會的生活が複雜した形式の下にある今日、君主か、大臣か、議會か、乃至は新聞などに依つて宣言せられ、指揮せられ、若しくは命令せられない、何等かの事件を想像することが出來るのであらうか？又國家的一致とか、愛國主義とか、全ヨーロッパの均衡とか、文化とかいふことに辯明を見出すことの出來ない何等かの共同事業があるであらうか？それ故に、行はれた有らゆる事件は、表現された何等かの希望と必然的に契合してゐる。そして辯明により、一人或ひは數人の意志の結果と見られるのである。

船が如何なる方向に進む場合にも、必らず其の前に船が切つて行く浪の奔流が見られるもので、船

に乘つて居る人々には此の浪だけが動いてゐるやうに思はれるのである。

ところが、一瞬一瞬その奔流の動きをぢつと眺め、又それを船の運動と比較して居ると、我々は一瞬毎に此の奔流は船の運動に依つて起されてゐるもので、我々が自分の動いてゐることに氣が附かなかつたことが、我々を一種の謬想に陷れてゐたことを知るのである。

丁度斯う云ふ風に歷史上の人物の行動を眼を放さずに見（つまり、行はれつゝある有らゆる事件の必然的事情——を考へ）、又歷史上の人物と民衆との必然的關係をも見落さなければ、我々は船の場合と同じことを見るのである。

何事が起つても、常にそれが豫見され、命令されたことの樣に思へるので、如何なる方向に船が進まうと、その前に奔激する浪は、船の運動を導くものでもなければ又助けるものでもないのだが、それが遠くに居る我々には自ら動いて船の航海を導いて居るやうに思はれるのである。

事件に關係してゐる歷史上の人物の意志の表現を命令と見て、歷史家たちは事件が命令から生ずるものであると定めて了つた。所が事件そのものや、それから歷史上の人物と民衆との關係などを見て、我々は歷史上の人物や又その命令は事件から生ずることを發見した。この論法の疑ふべからざる證據になつてゐるのは、どれ程多くの命令が與へられても、その命令に他の原因が加へられなければ事件

は行はれないと云ふことである。けれども一つの事件が起るや否や——それが如何なる事件であつても——樣々な人が言ひ表はす意志の中から、その意味なり時宜なりに依り、命令として事件に關するものが見出される。

この結論に達して、我々は二つの歷史的根本問題、即ち

一、權力とは何であるか？　に直接に且つ明確に答へることが出來る。

二、如何なる力が人々の原動力であるか？　に對する關係である、それに依つて其の人は行動には直接携はらない代りに、それだけ其の共同行爲に就いて意見や、理論や、又は批判を出すのである。

一、權力とは或る人の、他の人々に對する

二、人々の行動は、普通歷史家が想像するやうに、權力から生ずるものでもなければ、智的活動から生ずるものでもなく、尙更ら兩者の結合からでゝもなく、實にその事件に携はつて居る凡ての人々の活動から生ずるのである、その人々は自分等の中で、その事件に最も直接に力を盡して居る者が最も小さい責任を負ひ、直接に力を盡さない者ほど大きい責任を負ふと云ふ關係を結んでゐるのである。

事件の原因は、精神上から見ると、權力であると考へられ、肉體上から見ると、その權力に服從して居るものであると考へられて居る。けれども由來精神的活動は、肉體的のそれと離して考へられ

ないものであるから、事件の原因はその何れにも見出されない、寧ろその二つのものゝ合致した所に見出されるのである。

之を言ひ換へれば、原因の概念は、我々が觀察して居る現象には當てはまらないものである。斯うして解剖して行くと、我々は遂に永久の圈內卽ち極限に到達するのである、人間の知力は如何なる方面に思索を向けても、其の問題を玩弄しない限り必ず此の極限に到達する。電氣は熱を起し、熱は電氣を生ずる。原子は互ひに牽引し、互ひに反撥する。

熱や、電氣などの相互關係に就き、又原子に就いて論ずる場合、我々は熱や電氣や原子などが何故さういふ作用をするかは言ひ得ないけれども、それ以外には考へ得られないから、さうだ、さうでなければならないし、又、それが法則なのだとも言へる、それと同じ事を歷史上の現象にも適用される。何故に戰爭とか革命とかゞ起つたかと云ふことは我々は知らない、我々のたゞ知つて居るのは、人々が樣々な事業を完成する爲めに團結し、その團體の事業に携はつてゐると云ふことだけである。で、我々は、之れはそれ以外に考へられないし、又それが法則なのだと言ふのである。

八

若し歷史が唯外部的な現象に關係して居るだけならば、この單純にして明瞭な法則の建設で充分であらう。從つて我々の論議も終結になる筈である。所が歷史の法則は、人間と關係して居る。物質分子は牽引力や反撥力などを感じないとか、その法則は眞實でないなどゝ、我々に告げることが出來ない。けれども歷史の主題なる人間は、露骨に斯う言ふ、私は自由だ、されば私は法則に服從するわけには行かない。

意志の自由に就いての問題は、公然の問題ではなかつたにしろ、我々が歷史を辿る場合、一步毎にその存在を感ずる。

眞面目な考へを以つた歷史家は皆、知らず識らず此の問題に到達する。歷史上の有らゆる矛盾や曖昧や、さては其の歷史が辿つて來た誤つた道などは、この問題を解決しない爲めに生じたのである。

若しも各人の意志が自由であるなれば、卽ち、若しも各人がその欲するまゝに行動することが出來るならば、歷史の全體は關連なき偶然の連續である。

若しも數百萬人の中の唯一人でも一千年間、自由に、卽ち、その欲するまゝに行動する可能を持つて居るとすればこの人の行動がたとへ法則に反對するものであつても、全人類を支配する色々な法則の可能を破壞するに違ひないといふことは明らかである。

若しも人間の行動を支配する法則が唯一つでもあれば、人々の意志がその法則に從はねばならぬものである限り、自由意志なるものは存在し得ないわけである。

この矛盾の中に意志の自由に關する問題が含まれて居るので、此の問題は古代から人類の最上の知識を占め、且つ古代から非常なる重大問題と思はれて居たものである。

その問題と云ふのは、我々が人間を觀察の對象として如何なる見地——神學、歷史、倫理學、乃至哲學——から見ても、我々は普遍的必然法を見出し、萬物と同じやうに人間も其の法則に服從してゐることを知るに反し、一度人を主觀的に見ると、卽ち我々の意識的方面を見ると、我々は自分が自由なものであることを感ずると云ふことにある。

この意識は全く理智から離れ、且つ獨立した自覺の根元である。理智によつて人は己れを觀察するが、己を知るには意識によらなければならない。

理智を以て觀察し、理智を以て批判すると云ふことは、自己意識を離れては考へられない。

理解し、觀察し、推論する爲めに、人は先づ自分の生きてゐることを意識しなければならない。人が自分の生きてゐることを識ると云ふことは、自分が慾求をもつた者であると云ふことを識ることに他ならない。つまり、人は自己の意志を意識するのである。人はその生命の實體なる自分の意志を自由なるものと意識する。又それ以外に意識することは出來ないのである。

若しも人が自身を觀察し、その意志が常に同一の法則に支配されて居るのに氣がつくならば（何うしても食物を取らなければならないことや、又腦髓の作用などを見、その外何事を見るにつけても）、彼はこの永久變らぬ意志の方向を意志の制限としか解することは出來ないであらう。自由でないものが制限される筈はない。人間にはその意志は制限されたものとしか思はれない、なぜなら、人間には、その意志は自由なるものとしか意識されないからである。

君は言ふ、私は自由ではないが、しかし自分の手を上げたり下ろしたりすると、誰でも此の非論理的な答へが、君の自由であると云ふことの、拒むべからざる證據であることを知るのである。

この答へは理智に從はない意識の表現である。

若しも自由の意識が、理智を離れて獨立した自覺根元でないならば、その自由の意識は理論や經驗に支配されるものは存在しないばかりか、考へられもしない。

人は誰でも度々の經驗や、度々の判斷によつて、觀察の對象としての自分が、或る法則に從つてゐることと、自分がその法則に服從するだけで、一度知つた引力や凝縮性の法則に何うしても反抗することの出來ないことを、知るのみならず、矢張り同じ經驗や判斷の結果、人は自分の中に意識して居るやうな完全な自由の不可能なことや、彼の有らゆる行動が、彼の體質や、性格や、又は彼に影響す

る動機から生じたものであることなどを知る。けれども人は斯うした經驗と判斷との推理には從はない。

人は經驗や判斷によつて、石が下に落つることを知り、此の理を信じて疑はない、そして凡ての場合に自分が知り得たこの法則の實現を期待して居る。

所が、人は、自分の意志が、法則に從つてゐることを疑ひなく知つてゐるのに夫れを信じない、又、信ずることが出來ない。

人は經驗と判斷とによつて、同じ場合に、同じ性質をもつて、前と同じことを繰り返してゐることを幾度示されても、其の後矢張り同じ場合に、同じ性質をもつて、常に同じやうに終りを告げる行爲に進み、而かも經驗前の通り、その欲するまゝの行爲をなし得ることを固く信じて居ると思つてゐる。誰でも、即ち、野蠻人にせよ文明人にせよ、どれ程確實に理智と判斷とによつて、同じ事情の下に二つの行爲を想像することの出來ないことを立證されても、尙且つその無意味な思想（自由の實體となつて居る思想）から離れては人生を考へることが出來ないと思つて居る。彼は、どれ程此の思想が不可能であつても、それはさうあるべきものだと思つて居るのだ。なぜなら、自由に對する此の思想なしには、人はたゞに人生を理解し得ないのみならず、唯の一刻も生存し得ないからである。

人が此の思想なしに生存し得ないと云ふのは、人生の有らゆる慾求や、生活に對する有らゆる衝動

などが、自由を擴大しようとする努力に過ぎないからである。富と貧とか、名譽と不名譽とか、權力と服從とか、力と懦弱とか、健康と病氣とか、教養と無學とか、勞働と怠惰とか、飽滿と饑餓とか、德と不德とかは、凡て自由の多少の程度に過ぎないのである。

自由を持たない人間を想像することは、生命を失つた人間を想像することに他ならない。

たとへ自由の思想が、恰かも同時に二樣の行動をすることの可能や、原因のない結果などのやうに、理智にとつて無意味な矛盾と見えても、それは意識が理智に服從しないことを證するに過ぎないのである。

この自若とした、確固たる自由の意識は、經驗や判斷に服從せず、凡ての思想家に依つて認められ、凡ての人々に依つて例外なく感じられてゐるもので、此の意識なしに人間のことは考へ得られないのであるが、併し此の意識は又自ら他の方面の問題を成してゐるものである。

人は、全智全能にして大慈悲心を有つた神の創造物である。それならば、人が自由を意識した場合に考へる罪と云ふものは何であるか？　これは神學上の問題である。

人々の行動は、統計學によつて示された一般的不變の法則に從ふものである。それならば人が自由を意識した場合に考へる社會に對する責任と云ふのは何であるか？これは法理學の問題である。

人間の行爲は、その天職の性質や又人間を動かす動機などから起るものである。それならば良心と

か、自由の意識から起る行爲の善惡を意識することなどは、何であるか？　これは倫理學の問題である。

人類の一般生活に結び付けられて居る一個人は、その生活を支配する法則に服從してゐるやうに思はれる。けれども其の一個人は、その關係から離れて、自由なものとも考へられる。それならば何うして民族や又人類の過去の生活が、人間の自由乃至不自由な行動の結果と見られるのであるか？　これは歷史の問題である。

自負心の強い現代にあつては、無智の力強い武器——印刷物の傳播——によつて智識は充分に通俗化されてゐる。意志の自由に就いての問題は、平面の上に引き下され、そこでは最早や問題の本質を變へてゐる。我々の時代にあつては無數の所謂進歩した人々、即ち、無識の徒は自然科學の研究の結果を受けた、所がその自然科學なるものは、全問題の解決に對して、たゞ其の問題の或る一部面を觀察してゐるものに過ぎないのである。

そこには精神もなければ自由もない、何故ならば、人間の生命は筋肉の運動で說明され、筋肉の運動は神經の働きに依つて支配されて居るからである。そこには精神もなければ自由もない、何故ならば、太古に於て我々は猿猴類から生じたのだ、と彼等は述べ、書き、且つ印刷し、彼等が現今、生理學や比較動物學などで證明しようと努力してゐる必然法は、數千年前に凡ての宗教や凡ての思想家などによつて承認され、一度も否定されなかつたと固く信じてゐるからである。彼等は、自然科學の役目がこの問題の一面を證明する機械となることを知らない。何故なら、觀察と云ふ立場から見た事實、即ち、理智や意志は、たゞ腦髓の秘密作用に過ぎないと云ふことと、人は一般法則に從つて、太古の下等動物から發達して來たものだと云ふ事實とは、人は必然の法則に從ふものであるといふ、理智の立場から見た眞理、即ち數千年間に凡ての宗教と哲學的理論とに依つて認められた眞理を、たゞ新しい方面から說明するに止まり、自由の意識に根ざしてゐる他の半面の問題の解決を髮一筋程も進めないからである。

若しも人々が或る未知の時代に於て、猿猴類から生じたものであるならば、此のことは、人々が或る已知の時代に於て一塊の土から生じたといふことのやうに了解せられる、(第一の場合には時がXであり、第二の場合には造化の方法がXである。)所が、人間の自由の意識は、人間が從屬して居る必然の法則と何ういふ樣に結び合はされてゐるかと云ふ問題が、比較生理學及動物學で解決されないといふのは、蛙や、兎や、又は猿などに我々はたゞ筋肉と神經との作用の外に意識を發見するからである。

この問題を解決しようと思つて居る科學者や、その崇拜者等は、丁度會堂の壁の一面を塗らせられてゐる漆灰屋のやうなものである。その仕事の監督者の居ない機に乘じ、熱心に窓や、聖像や、棧架や、

まだ出來上らない壁までも漆灰して了つて、その漆灰屋流の見地から何も彼も平らかに滑らかになつたと喜こんでゐる漆灰屋のやうなものである。

九

この自由と必然との問題を解決することによつて、歴史は此の問題を取りあつかつてゐる智識の他の部門よりは前に立つてゐる、といふのは歴史に於ては、この問題は人間の意志の實體そのものには觸れないで、たゞ過去の事情、若しくは或る事情の下に此の意志の發現したことを示して居るからである。

歴史は、この問題を解決する場合、純理科學に對する實驗科學の態度をもつて、他の科學に對して居る。

歴史の主題は、人間の意志そのものではなくして、意志に就いての我々の思想である。

であるから、神學や、倫理學や、哲學などがもつてゐる二つの矛盾、則ち自由と必然との結合といふ不可解な神秘を歴史は有つてゐない。歴史は、この二つの矛盾が既に結合されてゐる人間の生活を考察するものである。

如何なる事件でも、その一部分は自由なものと思はれ、他の一部分は必然的のものと思はれるにもかゝはらず、實際生活に於ては、如何なる歴史的事件でも、又如何なる人間の行動でも、些かの矛盾をも感じさせず、極めて明確に了解されてゐる。

自由と必然とは、何う云ふ風に結合されて居るかとか、又この二つの概念の本質は何であるかなどいふ問題を解決する爲めに、歴史哲學は、他の科學が辿る路とは全く反對の路を進むことが出來るし、又進まなければならない。歴史は、自由と必然と云ふ概念を定義し、その成り立つた定義で人生の樣々な現象を律する代りに、常に自由と必然との概念そのものを引き出さなければならない。

大勢の人々、若くは一個人の行動を何う云ふ風に考察して見ても、我々は其の行動を半ばは人の自由の結果として半ばは必然法の結果として了解するより外しかたがない。

我々が民族の移住や、野蠻人の侵入や、或ひはナポーレオン三世の政略や、さては或る人が一時間前に種々な方面の散歩の中から一つを選んだ其の行爲などに就いて論じる時、我々は、それ等の事件の中に些細の矛盾をも認めない。それ等の人々の行爲を支配した自由と必然との作用は、我々にとつて明らかに定義されて居るからである。

自由の多小に關する思想は、我々が現象を見る見地に相違があるところから違つて來るものであ

る。

しかし人間の各々の行動は、常に一樣に我々にとつて自由と必然との或る結合であるやうに思はれる。我々が推究する各々の行動に於て、我々は自由の或る範圍と必然の或る範圍とを見る。而して何んな行動にでも、そこに自由を見出すことが多いだけ、必然を見出すことが少なく、必然を見出すことが多いだけ、自由を見出すことが少ない。

自由と必然との關係は、その行爲を觀察する見地によつて、小さくなつたり、又大きくなつたりする、けれども其の關係は常に反比例をなしてゐる。

他人を掴まへたり、沈めたりしながら溺れてゐる人や、赤兒を養ふことで疲れ果て、自からも餓ゑて食物を盜んだ母や、或ひは軍律に教へ込まれ、一令の下に抵抗力なき人を殺す人などは——彼等を取り圍んでゐた幾多の事情を知つてゐる人にとつては、罪の輕い者、即ち自由が少なくて、必然法により多く服從してゐる者と思へるのであるが、又かの人が溺れかゝつて居たことや、かの母が餓ゑてゐたことや、かの兵隊が軍律の下に在つたことなどを知らなかつた者にとつては、より多く自由な者と思へるのである。それと同じことで、二十年前に殺人罪を犯し、その後は何の惡事もせず、靜かに社會で暮して居る人は、その行爲を二十年後に見た者には、罪の輕い者と思はれ、その行爲は、より多く必然法に服從したものと思はれるが、犯罪が行はれた直ぐ後に其の行爲を見た者には、より多く

自由なものと思はれるのである。丁度それと同じことで、發狂者や、醉漢や、又はひどく興奮した人などの行爲は、何れも、さういふことをする人の心理狀態を知つてゐる人には、自由が少なくして必然が多い行爲と思へる、が、それを知らない人には、自由が多くして必然が少ない行爲と思へるのである。凡て斯樣な場合にあつては、その行爲の觀察される見地次第で、自由の思想が增したり、減じたり、それと同樣に必然の思想が減じたり、增したりするものである。であるから必然の現はれが多いだけ、自由の現はれが少ないわけである。そして vice versa（ヴィス ヴェルサ）（その反對も亦然りである）

宗教も、人類の常識も、法律學も、又歷史そのものも、この必然と自由との關係を了解して居る。自由と必然とに就いての我々の思想を增減させる場合は、悉く次の三つの根抵をもつてゐるに過ぎない。

一、行爲する人と外界との關係。

二、行爲する人と時間との關係。

三、行爲する人と行爲を導き出す原因との關係。

第一の根抵は、我々の眼に映ずる人の外界に對する大なる關係、或は小なる關係、若くは各々の人が自分と同時に存在してゐる有らゆるものに對して占めて居る或る一定の位置に關する、より多く明らかなる概念、或はより少なく明らかな概念である。この根抵は、溺死しかゝつてゐる人は、大地に

立つて居る人よりも自由が少なく、必然に從ふことが多いことを明らかにするもので、又これは人口稠密な地方に他の人々との密接な關係の中に住んで居る人の行爲と、家族や、事業などに縛られて居る人の行爲とを、孤獨な人や、隱遁して居る人などの行爲に比べて自由が少なく、必然に從ふことが多いと思はせるものである。

若し我々が、その周圍の一切のものとの關係を離れて居る人を調べて見ると、その人のする事が凡て自由に思はれる。しかし若し我々が、その人と、その周圍のものとの關係を見るならば、若し我々が其の人と或何物かとの、其の人と言葉を交す人とか、その人の讀んで居る本とか、その人のして居る仕事とか、その人を取りまいてゐる空氣とか、さては其の人の周圍のものを照らして居る光などとの關係を調べるならば、我々は夫れ等の事情がそれぞれ彼に影響し、少なくとも彼の行動の或る一面を支配して居ることを知るのである。そして我々がそれ等の影響を知れば知る程その人は自由であると云ふ我々の思想は小さくなり、その人の從屬して居る必然といふ思想は大きくなるのである。

(二)第二の根抵は、我々の眼に映ずる人と外界との大なる時間的關係、或は小なる時間的關係、若くは、人の行爲が時間的に占めてゐる位置に就いての、より多く明らかなる概念、或はより少なく明らかなる概念である、これはかの人類播殖の起原となつた、原始人の墮落を現代の人の婚姻よりも明らかに自由の少ないものと思はせるところの根抵である。これは數世紀前に住んで居た人々の生活や

行爲、即ち時間的に私と關連のある生活や行爲を、まだ結果を知らない現代の生活ほどに自由なものと思はせない根抵である。

この關係に於て、大或は小なる自由と必然とに關する思想の程度は、行爲から行爲の批評までに經過した時間の大小に依るのである。

若しも私が一分間前に、今私を取りまいてゐる事情と殆んど同じやうな事情の下にした行爲を調べて見るならば、私の行爲は全く自由なものゝやうに思へるのである。けれども若し私が一ケ月前にした行爲を調べて見るとすれば、その時と今との事情が違ふので、若しその行爲が行はれなかつたならば、その行爲から起つた多くの善きことなり樂しいことなり、さては避け難いことなりが起らなかつたであらうと思ふことを禁ずるわけには行かない。若し私が更に十年若くはもつと以前にした行爲に向つて記憶を辿るならば、私の行爲の結果は更に一層明らかに私の前に浮び、もはや私にとつて其の行爲が行はれなかつたとすれば、何んな事が起つたであらうなどと考へることさへ難かしくなるのである。遠く以前に記憶を辿るか、或は遠く以後に判斷を進めるかすれば、それに從つて行爲の自由に關する私の思想は、益々疑はしくなつて來るのである。

人類の一般的事業に自由意志が關與してゐると云ふことに就いての信念にも、矢張り斯うした比例があるものであるが、我々は此の比例を歷史に於て發見するのである。現代の出來事は、我々にとつ

て疑ひもなく或る一部の人々の仕業だと思はれる。所が、遠く距つた事件の中に、我々はその事件の必然の結果を見、その結果を無視しては、他の何事をも考へることが出來ない。そして我等が回顧して其の事件を調べれば調べる程、その事件は我々にとつて我儘でなく思へて來るのである。

アウストリアとプルシアの戰爭は我々には狡猾なビスマルク等の行爲の疑ひなき結果であると思はれる。ナポーレオンの數多の戰爭は、最早疑はしい點もあるが、併し、まだ我々には勇士等の意志の産物であると思はれる。所が、十字軍は一定の地位を占めた事件である。十字軍の歷史家たちは此の事件を單に數人の意志の産物である樣に思つて居るが、此の事件がなければヨーロツパの近代は說明されないのである。民族の移住も矢張りさうである。現今何人もヨーロツパの革新がアツテイラの意志から生じたのだと思ふ者は一人もない。で、我々が觀察の主題を、遠く歷史に遡つて考へれば考へるほど、事件を起した人の自由は疑はしくなり、必然法は益々明瞭になるのである。

(三)第三の根抵は、我々が、理智の必然的要求となつてゐる多くの原因の無限の連鎖、即ち了解された各々の現象や、從つて人の各々の行動などに、過去の現象や行動の結果、若くは未來の現象や行動の原因として、一定の位置を與へてゐる原因の無限の鎖を辿り得た大小の程度である。

この根抵による我々の行爲や他の人々の行爲は、一方に於て我々が、觀察から推斷した法則、即ち人が服從してゐる生理的、心理的、及び歷史的法則を知ることが多いだけ、又行爲の生理的、心理的、

及び歷史的原因を究めることが確かであるだけ、又他方に於て、觀察される行爲がより單純であり、我々によつて其の行爲を研究されて居る人の性格や精神がより複雜であるだけ、より多くの自由なものと、より少なく必然に服從してゐるものと思はれるのである。

惡行の場合であらうが、善行の場合であらうが、又善惡無差別な行爲の場合であらうが、兎に角、我々が或る行爲の原因を全然理解しない場合には、我々は、その行爲の中に意志の最も大なる作用を認め、惡行の場合——我々は、その行爲に對して先づ第一に嚴罰を要求する。善行の場合——我々は先づその行爲を賞讃する。善惡無差別な場合に、我々は最も大なる箇性と創意と、自由とを認める。けれども、無數の原因の中から唯一つでも原因が我々に分つた場合、我々は既に必然の或る作用を認め、より少なく犯罪に對する報酬を求め、善行中にもより少なく美德を認め、一見獨創的だと思はれるやう行爲の中にも、より少なく自由を認めるのである。犯罪者が惡漢の中で育てられたといふ事は、既にその罪を減ずるものである。父や、母などの犧牲、即ち報酬を望み得る犧牲は、原因のない犧牲より了解し易い、從つて我々には餘り同情に値ひする犧牲と思はれない。又餘り自由な犧牲とも思はれない。宗派や、黨派の創立者や、或ひは發明家などは、彼等の行爲が何うして又何に依つて準備されたかと云ふことを知つた時には、餘り我々を驚かさない。若し我々が數多い經驗を得るならば、若し我々の觀察が人々の行爲の中に原因結果の關係を不斷に索ねるならば、人々の行爲は、我々が原因と

結果とを、より正しく結び付けるだけ、我々にとつてより多く必然にして、より少なく自由な行爲と思はれるのである。若し研究された行爲が單純で、我々もさう云ふ行爲を無數に觀察したことがあつた場合には、我々は益々深くその行爲の必然性を思ふであらう。

破廉恥なる父の生んだ破廉恥なる子の行爲や、下層階級に陷つた女の惡行や、一旦止めて居た酒飲みが又元の酒飲みに戻ることなどは、その原因を知つて居れば居る程、我々にとつて自由の少ない行爲と思はれる。若し又我々によつて其の行爲を研究されて居る人が、小兒とか、發狂者とか、或ひは白痴とか云ふやうに、智的發達の最下級にあつた場合、我々はその行爲の原因や、又その性格、知識の單純なことなどを知つてゐるので、必然の大きな作用と自由の小さい作用とを見、行爲を引き起すべき原因を知ると同時に、行爲を豫言することが出來る位るである。

凡ての法律條令に於ける罪の釋放や罪狀の輕減は、たゞ此の三種の考察法に依るのである。即ち犯罪は、その行爲を裁判されてゐる者の周圍にある事情を知ることの多少により、犯罪の遂行とその裁判との間の時間の多少により、及びその行爲の原因を理解することの多少に依つて、大きく見えたり、或は小さく見えたりするのである。

十

であるから、自由と必然とに關する我々の考へは、外界との關係の大小と、時間上の距離の大小と、それから原因との關係の大小とによつて、つまり、我々が人間の生活現象を觀察する場合に於ける其の立場の如何に依つて次第に小さくなつたり、又次第に大きくなつたりするのである。

であるから、我々が或る人の狀態を調べるに當つて、若しその外界との關係が充分知れて居り、その判斷する時と行爲の時との間が非常に距たつて居り、そして其の行爲の原因が充分に判明してゐるならば、我々は其處に最も大なる必然と最も小なる自由とを認める。若し又我々が外部の事情から餘り交渉を受けない人を調べるならば、若し其の人の行爲が現在に最も近く行はれ、そして其の人の行爲の原因が我々に分らないとすれば、我々は其處に最も小なる必然と最も大なる自由とを認めるのである。

しかし何方の場合にしても、如何程我々がその見地を變へた所が、即ち如何程我々がその人と外界との關係を明瞭にしても、又如何程その關係が我々に不可解に思はれても、如何程その期間を長めても、又短かめても、如何程原因が我々に了解されてゐても、又不可解であつても、我々は決して完全なる自由を認めることも出來なければ、又完全なる必然を認めることも出來ない。

一、我々は如何程外界の影響から隔絶してゐる人を想像しても、その人が空間に於て自由であると考へることは何うしても出來ない。人間の有らゆる行爲は必らず其の周圍のものか、又はその自身の

身體（からだ）かに束縛されて居るものである。私が自分の腕を上げて又それを下ろす場合、私の行動は私にとつて自由なものと思へる。けれども、私は何んな方向にでも手を擧げることが出來たのかと自問すると、私は自分を取り圍んでゐる人々の身體に在るやうに自分の身體の構造の中にも在る障碍の少ない方向に手を擧げたのだと云ふことを知る。私が可能な凡ての方向の中から一つを選ぶとすれば、其の方向には障碍が少ないからである。私の行動が自由なものになるには、一つの障碍にも會はないといふことにならねばならぬ。或る人が全く自由であると考へる爲めには、我々は其の人を空間の外において考へなければならぬ。が、それは明らかに不可能のことである。

二、我々は如何程判斷の時と行爲の時とを接近させても、時間上の自由といふものを考へることは出來ない。何故ならば、たとへ一秒前に行はれた行爲を調べても、私は尙ほその行爲の自由ではないことを認めねばならぬからである。由來行爲なるものは、それが行はれた瞬間よつて械（かせ）づけられるものである。私は腕を上げることが出來るだらうか？　私は腕を上げる。しかし私は自問する、私は最早や過ぎ去つた一瞬時に自分の腕を上げないことが出來たであらうか？　と。私は之を確める爲めに、次の瞬間に腕を上げない。けれども、私が腕を擧げなかつた今は、私が自由に就いて自問した最初の瞬間ではない。時は過ぎ去つた、私には時間を止める權力はない。私がその時上げた腕も、私が腕を上げた時に私をとり圍んでゐた空氣も、最早や今私を取り圍んでゐる空氣でもなければ、又動かさずにゐる今の腕でもない。最初の運動が行はれたその瞬間を恢復することは出來ない。そして其の瞬間に私はたゞ一の運動をなし得たゞけで、たとへ如何なる運動をしても、その運動は唯一つにきまつて居るのだ。次の瞬間に私が自分の腕を上げなかつたといふ事は、私が前の瞬間にそれを上げないことが出來たといふ證據にはならない。且つ私の運動が一瞬時に唯一度行はれるものである以上、それと同一な運動が他にあらう筈がない。その運動を自由なものと考へる爲めには、人はそれを過去と未來との境界なる現在に於て、即ち時間以外に考へなければならぬ。が、さういふことは不可能である。

三、原因を理解することが如何程困難の度合を增しても、我々は完全なる自由といふ考へ、即ち原因がないと云ふ考へに到達するものではない。自身の行爲に於て、又は他人の行爲に於て、その意志の表現の原因が如何程我々に分らない場合があつても、理智は先づ第一に原因の豫想と探求とを要求する。原因なしには如何なる現象も考へ得られないからである。私は如何なる原因にも支配されない行爲を實行しようと云ふ意志そのものが已に私の行爲の原因である。

しかし更に全く外部の有らゆる影響を受けない人を想像し、何等の原因からも出ない、彼の現在の瞬間的行爲を觀察して、たとへ無限に小さい必然の遺物を零に等しいものと思つても、我々は人に完

全なる自由があると考へることは出來ない。何故なれば外界の影響を受けず、時間の外にあつて、原因に支配されない存在は、最早や人間ではないからである。

それと同じことで、我々は少しも自由を有たず、唯必然法にのみ服從してゐる人間の行動を考へることは何うしても出來ない。

一、人の周圍にある空間的事情に就いて、我々は如何程大きな智識をもつてゐても、その知識は、その事情の數が無限に多く、又その空間が無限に廣い限り、決して完全なものになり得ない。同時に人に影響する一切の事情も限られてゐないから完全なる必然もない譯で、そこには未だ自由の或る範圍があるわけである。

二　我々が觀察する或る現象から判斷をするまでの期間を、我々は如何程長くしても、此の期間は有限であり、時間は、無限である、從つて此の見解から言つても、決して完全なる必然はあり得ない。

三、如何程或る行爲の原因の鎖を摑んだところで、その鎖は無限であるから、我々は鎖全體を究めるわけには行かない、從つて完全な必然を得ることも出來ない。

けれども更に、若し、僅かの自由を零に等しいものとして、或る場合に於て——例へば、死にかゝつて居る人とか、胎兒とか、白痴とかに於て——全く自由のないことを認めるならば、我々はその爲めに、我々が調べつゝある人間に關する概念そのものをも破壞しなければならない。なぜならば、自由のない所には、人間もないからである。で、人間の行動が必然法にのみ支配されて、少しも自由をもたないと思ふことは、恰かも人間の行動が全く自由であると考へることと同じく不可能である。

それ故に人間の行動が必然法にのみ支配されてゐるものであると考へる爲めには、我々は人間を空間的事情と無限に長い期間と、それから無限に連なつてゐる原因とが悉く判明してゐることを許さなければならぬ。

又人間が全く自由なもので、必然法の支配を受けるものでないと考へる爲めには、我々は人間を空間の外に、時間の外に、それから有らゆる原因の影響の外に、置いて考へなければならぬ。

第一の場合に於て、若し必然が自由なしにあり得るならば、我々は必然を、同じ必然を以て（法則として）定義することになる。即ち內容のない形式を作ることになる。

第二の場合に於て、若し自由が必然なしにあり得るならば、我々は空間や、時間や、原因などを超越した絕對の自由を認めなければならない、そして其の絕對の自由は、絕對であり無限であるといふ事に依つて、虛無、若くは形式なき內容となるのである。

こゝに於て我々は、人間の有らゆる世界觀が形造つてゐる二つの根柢——不可解なる生活の眞髓と、その眞髓を形造る法則とに到達したのである。

理智は云ふ。一、眼に見ゆる樣々な形をもつた空間——即ち物質——は無限である、そして夫れ以

外には考へられない。二、時間は一瞬の休みもなき無限の運動である、そして夫れ以外には考へられない。三、原因と結果の關係には始めがない、從つて終りのあるはずがない。

意識は云ふ。一、自我は一である、そして一切の存在は唯自我のみがある。それ故に自我は空間を包含してゐる。二、自我は現在といふ不變の瞬時に依つて變轉する時間を計る、そして自我はその現在の中に自分のみの生命を意識して居る。それ故に、自我は時間を超越してゐる。それから、三、自我は原因を超越してゐる、といふのは自我は自分を、自分の生活の有らゆる現象の原因と感じて居るからだ。

理智は必然法を述べ、意識は自由の眞髓を傳へて居る。

何者にも拘束されない自由は、人間の意識の中にある生活の眞髓である。內容のない必然は、三つの形式を具へた、人間の理智である。自由は內容である、必然は形式である。

自由は講究せられるものである。必然は講究するものである。

たゞ、形式と內容といふ相互關係にある二つの認識の根元を分解する場合にのみ、互ひに相排斥する不可解な自由と必然といふ概念が形成されるのである。

たゞ自由と必然とを合致させる場合のみ、人間の生活に就いての明らかな思想が得られるのである。

る。

形式と內容と云ふ關係の下に互ひに合致しながらも、尙ほ且つお互に制限し合つて居る此の二つの概念から離れては生活に就いて思想することは出來ない。

我々が人の生活に就いて知つて居る凡ては、單に自由と必然との或る關係、即ち、意識と理智の法則との或る關係に過ぎない。

我々が外部自然界に就いて知つて居る凡ては、たゞ自然力と必然との或る關係、言ひ換ふれば、生活の眞髓と理智の法則との或る關係に過ぎない。

自然の生活力は我々の外に存して居て、我々によつて意識されない、そして我々はこれ等の力を重力とか、惰力とか、電氣力とか、生命力などゝ名づけてゐるけれども、人間の生活力は我々によつて意識されてゐる。そして我々はそれを自由と呼ぶのである。

しかし其の正體は不可解であるが凡ての人に感じられる重力は、その重力が屬してゐる必然法（凡ての物體は重いといふ最初の知識からニユウトンの法則に至るまで）が我々に知られてゐる位の程度に了解されてゐるやうに、其の正體は不可解であるが、凡ての人に意識されてゐる自由の力も、その自由の力が屬してゐる必然法（凡ての人は死ぬと云ふことから、最も複雜な經濟的及歷史的法則に至るまで）が我々に知られてゐる位の程度に我々に了解されてゐる。

凡ての知識は、單に理智の法則の下に生活の眞髓を持つて來るに過ぎないのである。

人間の自由が凡ての他の力と異なる所以は、此の力が人間によつて意識されてゐるからである。けれども理智の立場から見ると、此の人間の自由も有らゆる他の力と異なつてはゐないのである。重力や、電氣力や、或ひは化學的親和力などがお互に異なつてゐる所以は、之等の力が理智によつて様々に定義されてゐる爲めに過ぎないのである。丁度之れと同じやうに、人間の自由の力が他の自然力と區別されてゐるのは、理智の立場から見ると此の理智が、此の自由の力に與へてゐる定義に依るのである。自由は必然から離れると、即ち、自由を定義する理智の法則から離れると、重力や、熱力や、成長力などと少しも異ならない、何故ならば目由は、理智から見ると、瞬間的で、且つ漠然とした生活の知覺であるから。

そして天體を動かす力の漠然たる本體と、重力や、電氣力や、化學的親和力や、或ひは、生活力などの漠然たる本體とが天文學や、物理學や、化學や、植物學や、動物學などの内容になつてゐるやうに、自由の力の本體は歴史の内容になつてゐるのである。しかし凡ての科學の主題が、生活の此の漠然たる本體の表現であり、その本體そのものが形而上學の主題となり得るに過ぎないやうに、空間や、時間や、因果などの中に於ける自由の力の表現は、歴史の主題であり、自由そのものは形而上學の主題である。

實驗科學に於て、我々は、我々に知られて居るものを必然法と呼び、我々に知られて居ないものを

生活力と呼ぶ。生活力とは、生活の實體に就いて我々が知つてゐる範圍の或る一部分を言ひ現はしたものに過ぎない。

之れと同じく歴史に於て我々は、我々に知られて居るものを必然法と呼び、我々に知られて居ないものを自由と呼ぶのである。自由とは、歴史上から見ると、人間生活の法則に就いて我々が知つて居る範圍の或る一部分を言ひ現はしたものに過ぎないのである。

十一

歴史は外界と、時間と、因果との中に、人間の自由の表現を研究するものである、即ち、理智の法則に依つて此の自由を定義するものである。從つて歴史は、それ等の法則に依つて此の自由が定義せられる範圍内での唯一の學問である。

歴史に於て、人間の自由を歴史上の事件に影響し得る力として、即ち法則に從はない力として認めることは、丁度天文學に於て、天體の運動に自由の力を認めることゝ同じである。

斯う云ふ認め方は、法則の存在、即ち或る智識の存在の可能を破壞することである。

若しこゝにたゞ一つでも自由に動いて居る物體があるとすれば、ケプレルやニウトンの法則は無効

になり、天體の運動といふ思想は悉く破壊されるわけである。若しこゝに一つでも人間の自由行爲があるとすれば、如何なる歴史的法則も、又歴史上の事件に關する如何なる思想も存在しないわけである。

歴史上には人間の意志の運動の線がある、そして其の一端は不知の中に消えて居る。けれども他の一端には、即ち空間と、時間と、因果との中には、現在の人間の自由の意識が動いて居る。

この運動の光景が我々の眼前に於て動けば動く程、この運動の法則が明らかになる。そして之れ等の法則を捉へたり、定義したりすることが歴史の問題である。

現在、科學がその主題を見てゐる見地から、現在科學が辿つてゐる路を辿つて、現象の原因を人間の自由意志の中に求めるとすれば、法則の組成は科學にとつて不可能である。何故ならば如何程我々が人間の自由を限定しても、我々がその自由を法則に從屬しない力として認める以上は、その法則の存在は不可能になるからである。

たゞ此の自由を無限迄に限定した場合にのみ、即ち、その自由を最少量として見る場合にのみ、我我は原因に全く觸れ難いことを確信する、そして其の時、歴史は原因の探求を止めて、法則の探求を其の問題とするやうになるのである。

これ等の法則の探求は、最早やずつと以前から開始されてゐる、そして歴史が採用しなければならぬ新らしい思想の方法は、舊式の歴史が絶えず現象の原因を分解しつゝ遂に自殺を遂げて了ふと同時に形造られるのである。

人間の有らゆる學問は、此の路を辿つたのだ。科學の中で最も精密な數學は最小限に到達すると分解作用を捨てゝ、不知の最少限を總合すると云ふ新らしい作用を始めるのである。原因の概念を捨て、數學は法則即ち凡ての不知の最少限に共通してゐる性質を求めるのだ。

他の科學も亦、他の形式でゞはあるが、矢張り同じ思索の徑路に進んだ。ニュウトンが重力の法則を發表した時、彼は太陽や地球が引力を持つて居ることを語らなかつた。彼は凡ての物體は——最大のものから最少のものに至るまで——互ひに相引く性質を持つて居ると言つた。つまり、彼は物體の運動の原因に就いての問題を閑却しておいて、無限に大きなものから無限に小さなものに至るまでの、凡ての物體に共通した性質を言ひ現はしたのである。自然科學も亦同じことをしてゐる。即ち原因に就いての問題を捨てゝおいて、法則を求めて居るのだ。歴史も亦同じ行路に立つて居る。そこで若し歴史の主題が民族や人類の運動を研究することで、人々の生活から話を書くことでないとすれば、歴史も亦原因の概念を閑却しておいて、平等にして近密に結ばり合つてゐる凡ての自由の最小限に共通した法則を求めなければならないのである。

十二

コペルニカスの法則が發見せられ、證明せられて以來、動くのは太陽ではなく地球であると云ふ一事は、一切の古人の天地創造說を打破した。無論、この法則を否定して、天體の運動と云ふ古い考へを保守することも出來たであらう。が、この法則を否定せずにプトレミイの世界を研究しつゞけることは出來なかつたらしい。しかしコペルニカスの法則の發見後でさへも、プトレミイの世界は長く研究の主材となりつゞけて來たのである。

初めての人が、誕生や罪惡の數は數學的法則に從つて居るものであり、又或る地理的事情や、政治經濟的事情は政治の樣々な形式を作るものでもあり、又土地と人口との或る關係は、人民の移住の因となるものであるといふことを言ひ又證明して以來、歷史が立脚してゐた基礎は、全く顚覆されて了つたのである。

それ等の新らしい法則を否定して、以前の古い歷史觀を保つことも出來たであらう。が、この法則を否定せずに歷史上の事件を、人間の自由意志の產物として、研究しつゞけることは出來なかつたらしく思はれる。何故ならば、たとへ政治の或る形式が建てられたり、又地理上や、人種上や、又は經

濟上の或る事情の結果として或る民族の移動が起つたりしたとしても、我々がその種の政治形式を建設し、又その運動を起したものと思つて居る人々の意志を原因として觀察することは、出來ないからである。

而も尙ほ舊式の歷史は全く自分の學說と反對な、統計學や、地理學や、政治的經濟學や、比較地質學や言語學などの法則と相並んで、研究されてゐる。

新らしい見解と舊い見解との鬪爭は物理哲學に於て長く且つ頑固に行はれた。神學は舊見解を保護する位置に立つて、新らしい見解は天啓を破壞するものだと云つて批難したけれども、眞理が勝利を得ると、神學はそれに應じて新らしい地磐の上に堅固に築き上げられた。

歷史に對する新らしい見解と舊い見解との鬪爭は、長く頑固に今日行はれてゐる。そして依然として神學は舊見解を保護する位置に立ち、新見解は天啓を破壞するものだと言つて批難して居る。いづれの場合にしろ、この爭鬪は兩方から執着心を呼び起して眞理を滅してゐるのである。一方からは、數世紀の間に造り上げられた凡ての建築を毀つ恐れや憂ひが爭鬪となつて現はれ、他方からは破壞慾が爭鬪を挑むのである。

物理哲學の新らしい眞理に反對した人々は、若しその眞理を認めるとすれば、神や、天地の創造や、又かの比丘尼の子、ジョシュアの奇蹟などに對する其の信仰が破壞されることを感ずるのである。コ

ペルニカスやニユウトンの法則の保護者たち、例へばヴオルキールなどは、天文學の法則が宗教を破壊するものと思つた。で、彼は重力の法則を宗教と爭ふ武器に用ひたのである。

であるから今日では、たゞ必然法だけが認められて、靈魂や、善や、惡などの觀念と、この觀念の上に建てられた國家の規定や教會の規定は破壞されつゝあるやうに思はれる。

であるから、今日では、當年のヴオルテールのやうに、必然法の勝手な保護者たちは、その必然法を宗教と爭ふ武器として用ひてゐるやうに思はれる。然るに、天文學に於けるコペルニカスの法則のやうに、歴史に於ける必然法はかの國家の規定や教會の規定などが立脚して居る地盤を、破壞しないのみか、反つて固めてゐるのである。

丁度一時天文學の問題にあつたと同じく、今日歴史の問題に於ても、各見解の相違は、目に見える現象の標準となつてゐる絶對の單位を認めるか認めないかにある。天文學にあつては、これの單位は、地球の不動であつたが、歴史に於ては人格の獨立——即ち自由であるのだ。

丁度天文學上、地球の運動を認めることの困難が、地球の不動といふ直接の感じと、遊星の動いて居るといふ直接の感じとを退ぞけることに存する如く、歴史上、人格が空間と時間と因果との法則に從つて居るのを認めることの困難は、自分の人格が獨立してゐると云ふ直接の感じを退ぞけることに存するのである。所が、丁度天文學に於て新らしい見解が『無論、我々は地球の運動を感じない。しかし、若し我々が地球の不動を認めるとすれば、我々は矛盾に到達する。それに反して我々が感じない地球の運動を認めさへすれば、我々は法則に到達する。』と言つたやうに、歴史に於ても、その新見解は『無論、我々は我々が支配されて居ることを感じない。けれども、若し我々が我々の自由を認めると、我々は矛盾に到達する、それに反して、外界や、時間や、原因に支配されて居ることを認めると、我々は法則に到達する。』と言つてゐる。

第一の場合に於て、我々は空間に實在しない不動といふ意識を捨てゝ、我々が知感しない運動を認めなければならぬことになる。現在の場合に於て矢張り我々は、實在しない自由を捨てゝ我々が知覺しない支配力を認めなければならぬことになるのである。

——（終）——

後語

『戰爭と平和』に就いて。

五年間不斷に心血を注いで書き上げたこの作品を、最も好都合な生活狀態の下に愈々上梓するに當り、私はその緒言に此の作品に對する自分の見解を叙して、讀者諸君が懷き得る疑念を豫防して置きたいと思つた。私は讀者諸君がこの書物の中に私が言ひたくないと思つた點、或は言ひ得なかつた點を探索せずに、私が言ひたいと思つたが、(作品の都合上)言つて反つて不利益であると認めた點に注意せられんことを望んでゐたからである。併し時も私の能力もこの計畫を充分に成し遂げることを許さなかつたで、止を得ず私はこの作品に興味を有つてゐる讀者諸君の爲めに、或る專門雜誌の好意により、不充分で且つ簡單ではあるが、自分の作品に對する作者としての見解を述べることにしたのである。

一

一

(一)、『戰爭と平和』は何であるか　之は小說ではない。無論詩でもなければ、又歷史的記錄でもない。『戰爭と平和』は、作者が言ひたいと思ひ、又言ひ得たところを斯ういふ形式で書き現はしたものに過ぎない。散文的藝術品の條件的形式に對する斯樣な作者の輕蔑は若し之れが企てられたこともなく、前例を有つてもゐないならば自負心のやうに見えるかも知れないが、ロシア文學史は、プーシキン時代からヨーロッパ風の形式を離脫した實例を數多く示してゐるのみならず、その反對の實例は一つも示してゐないのである。ゴーゴリの『死者の靈』からドストエーフスキイの『死人の家』に至るまで、ロシア文學の新時代には、物語、詩、小說などの形式に仕組んだもので、幾分技巧を超越した散文的藝術品は一つも見當らない。

(二)、第一編が出版された當時、或る讀者諸君は、私の作品中に時代の特質が充分に判然してゐないと言つたが、私はこの非難に對して次のやうな辯明をすることが出來る。私は讀者諸君が私の小說中に見當らないと言ふ時代の特質が何んなものであるかを知つてゐる——それは、農奴制度の恐怖、妻の監禁、息子の慘殺及びサルツイチーハなどであるが、私は我々の思想の中に生々としてゐる當時の特質を確實なものと思はない。從つてそれを書くことも望まなかつた。私は文書や日記や傳說などを研究しても、さほど多くの怖ろしい暴行は發見しない、寧ろ近頃及び現在に於て夫れよりも多くの怖ろしい暴行を發見するのである。當時の人々も矢張り愛したり、妬んだり、眞理と善行とを求めたり、情熱に動かされたりしてゐた。又當時、複雜な智的道德的生活もあつた、何うかすると、當時の上流社會には今日より一層優美な生活さへあつた。たゞ我々の腦裏に當時の暴行と暴力とが特に浸み込んでゐるのは、傳說や記錄や物語や小說などによつて、强迫と暴力との現はれた場合がより多く今日に傳へられてゐる爲めで、之れを以て當時の特質が暴力であつたと斷定することは、山を距てゝ樹立の梢ばかりを見てゐる人が、其處には樹立の外に何もないと斷定するのと同じく、正鵠を失したものと言はなければならない。而か

も當時(如何なる時代にもあることだが)上流社會と他の階級との非常な懸隔や、哲學の流行や、特殊な教育や、フランス語を使用する習慣などから流れ出た特質もあつた。私はこの特質を出來るだけ書き現はさうとしたのである。

(三)、露文の作品中にフランス語を使用したことである。私の作品中では、何故ロシア人ばかりか、フランス人までが或時は露語を使ひ、或時はフランス語を使つたのであるか？露文で書かれた書物中の人物が、フランス語を使つたり、フランス語を書いたりすることを非難すると云ふのは、繪畫を見る者が其畫面に實際にはある筈のない黒點(影)を認めて、それを非難するのと同じことである。畫家の罪は、或る者には實際にある筈がない黒點のやうに思はれる影をその畫面に描いた爲めではなく、寧ろその陰影が不自然で且つ醜い場合に認められるだけである。今世紀の初期を採り、或る社會のロシア人や、ナポーレオンや、當時の生活に直接關係ある他のフランス人等を描く場合、私は當時のフランス思潮を充分に表現し得る形式に捉はれざるを得なかつた。それ故、私は自分が描いた陰影が不自然で且つ醜いであらうと思ひながらも、ナポーレオンが或時は露語を使ひ、或時はフランス語を使ふことが滑稽に思はれるのは、讀者諸君が肖像畫を見る人のやうに、光線と陰影とのある顏全體を見ずに、鼻下の黒點のみを見る爲めであることを知つて貰ひたいのである。

(四)、小說中の人物、卽ちバルコンスキイとか、ドルベツコイとか、ビリビンとか、グラアギンなど云ふ名前は、ロシアの有名を名前を想はせる。が、私は非歷史的人物を歷史的人物と一緒に使つたり、捏造した名前、似通つた名前、同じ名前なるプロンスキイ公爵やストレリスキイや其他の公爵や伯爵などを、ラストプチン伯爵と對話させたりすることの如何にも耳觸りのすることを感じた。バルコンスキイ若くはドルベツコイは、ロシアの貴族社會に何となく聞き覺えのある、そして自然に聞えるウオルコンスキイでもなければトルベツコイでもない。私はベズウホフとかラス

トフとか云ふやうな餘り耳觸りのない名前を凡ての人物の爲めに考へ出すことが出來なかつたので、ロシア人の耳に一番聞き慣れた名前を適宜に選擇して、その中の或る文字を變へるより外にこの難關を通過し得なかつたのである。で、捏造した名前が實際の名前に似てゐると云ふことから、私が種々な實際上の人物を描いたのだと思ふ人があれば、私は深く遺憾に思ふ。何故かと云へば、實際に存在してゐる人物若しくは實際に存在してゐた人物を描寫することを本領としてゐる文學的事業は、私の文學的事業と何等の共通點をも有つてゐないからである。

こゝに例外となるのは、ヱム、デー、アフロシイモフとヂエニソフとの兩人物で、私は何の思慮もなく知らず識らずのうちに此兩人物に、當時の社會の特別な性格を有つた愛らしい實際人物に似通つた名前を附けたのである。これは私の失錯で、この兩人物の現はるゝ一場面に限られてゐるで、讀者諸君もこの人物と實際の人物とは少しも似てゐないと云ふことに多分同意せらるゝだらうと思ふ。その他の人物は皆な私の想像から生れたもので、傳說とか實際とかに一定の原型を有つてゐるものではない。

（五）私の書いた歷史的事件と歷史家の說とが一致しないことである。これは偶然の事ではなくして免れ難い事である。歷史的の時期を記す場合に、歷史家と藝術家とは全く異なつた二個の對象を持つてゐる。歷史家が若し歷史的人物をその生活全般に涉つて完全に而かも複雜に書き現はさうとするならば、その歷史家は失敗を免がれない。それと同じく藝術家も常にその人物の歷史的價値を見てばかりゐると、その作物は不成功に終るものである。クツウゾフは何時も敵を指しながら望遠鏡を懸けて白馬に乘つてはゐなかつたらう。ラストプチンは何時も火把をもつてウオロノウの家を燒いてはゐなかつたらう。（又實際彼は一度もそんなことをしたことさへなかつた。）又皇后マリヤ、ヒヨードロウナも何時も黃鼬皮の袍を着け、法

律全書の上に片手をつきながら立つてはゐなかつたらう。が、彼等は斯う云ふ風に人民の想像に浮ぶのである。

歴史家が取扱ふものは英雄で、それは一つの目的を現はす爲めに、言はゞ補助の意味で用ゐらるゝのである。が、藝術家が取扱ふものは、その人物を生活の凡ゆる方面に當て嵌める意味から。人間でなければならない。英雄を取扱ふことは出來ないし、又取扱ふべきものでもない。

歴史家は或る歴史的人物に一つの理想を持たせ、その理想によつて人物の全行動を律しようとする爲めに、時として眞理を曲げなければならぬこともある。それに反して、藝術家はこの理想の究極に自分の問題と一致しない點を見出し、そして只人間なるものを理解し、表現しようと努める事だけで、著名なる活動家を理解し、表現しようとするのではない。

事件そのものの記事には、もつと判然した根本的な相違がある。

歴史家の仕事は、事件の結果に迄及ぶが、藝術家の仕事は、事件の事實そのものに止る。戰爭を書くにしても、歴史家は斯う云ふ風に書く。某隊の左翼は某村に向つて進擊し、敵軍を擊破したが、遂に退却の餘儀なきに至つた。その時突擊し始めた騎兵隊は……云々。歴史家は是以外に書くことが出來ない、だが、藝術家から見ると斯んな文句は何等の意義をも有たないもので、寧ろ事件その者に觸れてゐない。藝術家は自分の實驗か、或は記錄、談話かによつて、行はれた事件に對する自己の想像を造り出す。それ故(戰爭の例を採れば)某々隊の行動に關する藝術家の斷案は、多くの場合歴史家の斷案と相反してゐる。斯う云ふ結果の相違は、藝術家と歴史家とがその材料を採つた源泉によつて說明が出來る。歴史家の主なる源泉は、(尙ほ戰爭の例を採れば)各指揮官及び總司令官の報告である。藝術家は斯んな源泉からは何物をも得ない。斯んな源泉は藝術家に何事をも語らないし、又何事をも說明しないのみならず藝術家は斯樣な報告に必ず附隨する嘘僞を見出して、寧ろ嫌惡の感を抱く。殊に

敵同志は戰爭毎に殆んど全く相反する事を書くもので、斯様な嘘僞に滿ちた記事を書くと云ふことは、數露里の間に展開して、恐怖と凌辱と死との爲めに非常な昂奮狀態に陷つてゐる何千人もの行動を限りある言葉で綴らなければならぬ必要から生ずる止を得ない缺點である。

戰爭の記事は、大抵、某隊は某地點を攻擊し、後退却を命ぜられた云々……と、丁度練兵場で數千人をたゞ一人の意志に從はせる軍律が、生きるか死ぬかと云ふ一大事が演ぜられてゐる處でも同一な作用をするものかのやうに書かれてゐるが、戰場に出たことのある者は皆な、斯う云ふ記事が何のくらゐ不眞實であるかを知つてゐる。シェーングラアベンの戰を書き終つて第一編を上梓した後、私はニコライ、ニコラエヰツチ、ムラウヰヨフから此戰爭記事に關する意見を聞いた。その意見は幸に私の確信を證明するものであつた。總司令官なるニコライ、ニコラエヰツチ、ムラウヰヨフは嘗て眞實の戰爭記事を讀んだことはない。自分の確信によれば、實戰の

場合、總司令官の指揮は實行されるものでないと明言した程である。（要するに豫想の上に報告が作られ、報告の上に戰爭記事が書かれるのである。戰爭が終つたならば直ぐに、或はその翌日でも又その次の日でも、何んでも報告書が出來上らないうちに、全軍を乘り廻つて、凡ゆる兵卒に或は上級の指揮官か又は下級の指揮官かに戰況を聞くと、その人達は必ず實地見た事、試みたことを悉く話して呉れる。その時諸君は偉大にして複雜な、そして際限もなく種々雜多な重苦しい不明瞭な印象を受けるだけで、誰からも全體の戰況を聞くことが出來ないであらう。殊に肝心な總司令官からは殆んど何事も聞くことが出來ないであらう。けれども二三日經つて報告書が作り始められると、饒舌家は自分の實見しなかつたことを何う斯うと喋り始める。そして終に一般の報告書なるものが出來上つて、それが軍全體の意見となる。各自は自分の疑念や疑問を嘘僞に滿ちた、而かも明白で、多くの場合阿諂的な上申書に易々と變へて了ふのである。一二ヶ月も經つて、實戰に參加した者に戰況を

聞くと——諸君は最うその中に以前のやうな生々しい生活材料を感じないであらう。卽ちその人は報告によつて語つてゐるのである。ボロヂイノの戰役に參加した多くの生存者の中で相當の知識ある人々は此戰役に就いて、さう云ふ風に物語つた。皆な同じことを物語つた。皆なミハイロフスキイ、ダニレフスキイの不確實な記錄や、グリンカなどによつて同じことを物語つた。談話者達はお互に數露里も隔つてゐたに係らず同樣な出來事を物語つた。

セワストーポリ陷落後、砲兵司令官クルウキヂヤノフスキイは、凡ての鋒頭堡の砲兵將校から來た報告書を私に送つて、この二十通以上もある報告書を纏めて一つの報告書を作るやうに求めた。が、私は遺憾ながらその樣な報告書を書き得なかつた。これは記錄なるものが、無邪氣な軍事上の止を得ない嘘僞から成立つてゐると云ふ事の好範例であつた。當時その報告書を作つた私の友人達は、その文句を讀む時、自分等が知りもしない事を只上官の命令によつて書いたことを思ひ出して

笑つたらうと私は思つてゐる。戰爭に經驗のある凡ての者は、ロシア人が如何に實戰に巧で、實戰に必要な傲然たる嘘僞を以て戰爭を記すことの如何に不得手であるかを知つてゐる。我が軍隊で報告書や上申書を作る職務が大抵外國人に委ねられてゐると云ふ事も皆は知つてゐる。

私が斯んなことを言つたのは、戰爭史家の材料となる戰爭記錄に嘘僞が屹度入るものであると云ふ事を示す爲めで、從つて歷史的事件に對する歷史家と藝術家との理解が多く不一致であることを示す爲めである。けれどもこの歷史的事件の叙述に嘘僞が免れ難いばかりか、私が問題にしてゐる時代の歷史家に私は往々空嘘にして一種獨特の言辭を認める。（多分事件を總合して、それを簡潔に言ひ現はし、悲痛な調子で事件を綴らうとする習慣の結果であらう）そしてその言辭の中にある幾多の嘘僞と錯誤とは、啻に事件の上ばかりではなく事件の價値の解釋に迄及んでゐる。この時代に於ける二つの重なる歷史的作物、卽ちテチエールとミハ

イロウスキイ、ダニロフスキイとの作物を研究してゐる時など、私は斯んな書物が
何うして印刷されたり、讀まれたりするのだらうと不思議に思つたことが度々あ
る。で、最早同一な事件に就いて互に全然反對な材料を引照して眞面目にして壯重
な句調で書いてゐることを言ふ必要はないが、併しそれにしても私はこの歷史家
等の二つの書物が當時の唯一の記念物であり、數百萬の讀者を有つてゐると云ふ
ことを考へた場合、この書物の中に笑つていゝか泣いていゝか分らないやうな記
事に出會する、この一例を有名な歷史家チエールの書物中から引いて見よう、ナポ
レオンが贋造紙幣を持つて來たことを物語つた、彼は斯う言つてゐる、"Releva-

nt l'emploi de ces moyens par un acte de bienfaisance digne de lui et de l'armée fran-
aise, il fit distribuer des secours auxincendies. Mais les vivres étant trop précieux pour
être donnés longtemps á des etrangers, la plupart ennemis, Na poléon aima mieux leur
fournir de l'argent, et il leur fit distribuer des roubles papier ;(これらの方法の使用を

ナポーレオンとフランス軍とに應はしい慈善事業と思ひながら、彼は燒け出され
た住民に扶助を與へるやうに命じた。が、併し糧食は餘り高價であるし、その糧食を
外國人、殊に遺恨ある者に供給することの不可能なことを思つたから、ナポーレオ
ンは彼等を金錢で悅ばさうと考へて、彼等に一留の紙幣を與へた)

この箇所は部分としては、不德義ではない單なる無智で我々を駭かすが、この書
全體から見ると、空嘘で華やかで何等直接の意味を有たない全體の句調に一致し
てゐるので別段不思議なことではない。

それ故、藝術家と歷史家との問題は、全然別種なもので、私の書物中に現はれてゐ
る事件と人物とが歷史家のそれと一致しないと云ふことは、必ずしも讀者諸君を
駭かすものとは思はない。

併し、藝術家は、歷史的人物や事件などに關する國民の思想が妄想を基礎とせず
に、歷史家によつて蒐められた歷史的記錄の上に立つてゐることを忘れてはなら

ないで、その人物や事件などを誤つて解釋したり、誤つて考へたりするならば藝術家も歴史家のやうに歴史的材料に支配されなければならなくなる。

私の小説の到る處に現はれる歴史的人物の言行動作は、私が捏造したものではなく、私が著作する時に殆んど一圖書室をなす程に蒐めた諸種の材料から出たものである。その書物の表題を今玆に列記する必要を認めないが、併し私は何時でも、その書物で自分の書いたものを證明することが出來る。

(六)最後に、私にとつて最も重要な第六の思索は、歴史的事件に於ける所謂偉人なるものは、私の考へるところに依ると、大した價値あるものでないと云ふ事である。多くの大事件を網羅し、種々雜多な傳說を生々と殘してゐる最近の悲劇的時代を研究して、私は行はれつゝある諸種の歴史的事件の原因を我々の理智で究め盡すことは出來ないと云ふ事を明らかに知つた。千八百十二年の事件の原因が、ナポレオンの征服慾と皇帝アレキサンドルのパウロキツチの強固な愛國心とである

と云ふことは、(凡ての人には甚だ單純に思はれるが)丁度、ローマ帝國の滅亡の原因が、或る一人の野蠻人がその國民を西方に導いたことや、或るローマ皇帝が惡政を布いたことなどであると云ひ、又は切り崩されてゐる巨山が崩壞したのは、一人の勞働者が最後の一鍬を打ち込んだ爲めであると云ふのと同じく無意味なものである。

數百萬の人間が互に相殺戮し、數十萬の人間が倒れるといふやうな事件は、只一個の人間の意志に原因するものではない。卽ち、一人の人間が一度で山を切り崩すことは出來ないやうに、一人の人間が五十萬の人間を死に就かしむることは出來ない。それならば、その原因は何であらう？或る歴史家等はフランス人の征服熱とロシア人の愛國心とが原因であると言つてゐる、他の歴史家等はナポレオンの軍隊が四方に傳播した民主的思想と、ロシアがヨーロツパと連絡しなければならぬと思ふたことであると唱へてゐる。けれども何うして數百萬の人間が互に殺戮

し始めたか？そして誰がこれを彼等に命令したのであらうか？斯んなことをして悪い結果はあらうとも、善い結果があらうとは誰も思はなかつたらしいが、それならば何故彼等は斯んなことをしたのであらうか？この無意味な事件の原因に就いて種々な回想的推理をすることも出來るし、又なしつゝあるが、これ等の無數の說明も、その說明が悉く落ち合ふ一つの目的も、唯是等の原因は無數にあつて、而かもその中の一つも原因と言ひ得ないと云ふことを證明するに過ぎない。

數百萬の人間が互ひに殺戮することが肉體的にも道德的にも惡であるといふ事が創世以來分つてゐるのに、何うして斯んな事が生じたのであらう？

これは是非なくてはならぬことで、人間が斯んなことをするのは、動物の原質的法則を實行するのである。蜜蜂も秋になると互に殺し合ひながら此の法則を實行する、動物の雄もこの法則によつて互に亡びて行く、これ以外の答をこの恐るべき難問に與へることは出來ない。

この眞理は、啻に明白なものであるばかりか、少くとも人間として或る行動をした場合に、その凡ゆる瞬間に自由であると確信せしむる感じと意識とさへ持たなければ、殆んど說明を要しない程各人に固有したものである。

我々は、一般の見地から歷史なるものを觀察すると、「永久の法則」があつて、この法則に依つて事件が行はるゝことを確信するが、個人の見地から見ると、その反對であることを信ずることが出來る。

他人を殺戮する人間も、ネーマンを渡れと命ずるナポーレオンも、任務に就くことを求めたり、手を擧げたり、又は下したりする諸君も、私も、我々の凡ゆる行爲が叡智なる原因と、我々の自由とに基いてゐると云ふことと、種々な行爲が我々の自由から生ずるものであると云ふことを確信してゐる。この確信はある程度まで我々各人に固有なもので、我々の尊敬を受けてゐる。そして（他人の行爲の不自由なることを示す）歷史の結論と犯罪の統計とがあるに拘らず、我々は自分の凡ゆる行爲の

上に自由の意識を押し擴げて行くのである。

矛盾は解決の出來ないものと思はれてゐる。或る行爲を行つた場合、私は自分の自由に依つてそれを行つてゐるのだと信じてゐるが、人間は人類一般生活に(人類の歷史的價値に)與かつてゐる者であると云ふ意味から觀る場合、私はこの行爲が豫定されてゐたもの、免かれ難いものであつたことを信ずる。誤謬は果して何方にあるだらう?

ある行はれた事實で、自由らしい無數の推論を回想的に批判して行く人間の能力を心理上から觀察すると(この事に就いては他日詳細に述べたいと思つてゐるが)我々は或る種の行爲が行はるゝ場合、人間の自由意識が誤つてゐると言ふ假定を證明しなければならないけれども同じく心理上から觀察して、我々は或る種の行爲には、自由の意識が回想的でなく一瞬間に確信的に作用すると言ふことをも證明することが出來る。たとへ唯物論者が何と言はふとも、その動作が唯自分だけ

に關係してゐる場合ならば、私はその動作を行ふことも、又抑制することも確かに出來る。私はたゞ自分の意志だけで手を擧げたり、下したりしたことを疑はない。私は今書くことを廢めることが出來る。諸君は今讀むことを廢めることが出來る。私は今確かに私一個の意志で、凡ゆる障礙を退ぞけて自分の思想をアメリカに轉ずることも、或は好きな數學上の問題に移すことも出來る。私は自分の自由を試みながら、自分の手を空中に擧げて力一ぱいに下すことが出來る。私はこれをした。が私の傍に子供が立つてゐて、その子供の上に私は手を擧げて力まかせに下したいと思ふ。が、私はそれをすることが「出來ない。」この子供に犬が飛びかゝるとする。私は犬に手を擧げない「譯にゆかない。」「譯に行かない。」私が隊列に立つてゐるとする。私は聯隊の行進に從はない「譯にゆかない。」「出來ない。」この子供に犬が飛びかゝるとする。私は犬に手を擧げない「譯にゆかない。」「譯に行かない。」私が隊列に立つてゐるとする。私は聯隊の行進をしたり、自分の周圍の者が皆逃げる時には自分も逃げたりしないではゐられない。私が被告人の辯護士として法廷に立つた時、私は自分の言ふべきことを言つた

り、考へたりするのを廢める譯にゆかない。私は眞正面から眼に向つて來る打擊に瞬しないではゐられない。

それで行爲には二種ある。一つは自分の意志から來るもの、一つは自分の意志に無關係なものである。で、矛盾を生むやうな錯誤は、(自我、卽ち極度に抽象された存在に觸れてゐる凡ゆる行爲に必ず伴ふ)自由の意識を、他人と合同して行ひ、我他との人との自由意志の合流から生じた我の行爲に不正に當て嵌める處から起つて來るものである。自由と不自由との範圍を定めることは、最も困難なことで、この範圍を定めることは、心理學上唯一の根本問題である。が、併し我々の最大自由と最大不自由との現はるゝ場合を觀ると、我々の行動が抽象的であるだけ、從つて他人の行動と交涉が少ないだけ、その行爲は自由で、それに反し、我々の行爲が他人と交涉してるだけ、その行爲は不自由であることを認めるのである。

他人との最も强固不斷の交涉は所謂他人に對する權力で、その權力は本來の意

義から言ふと他人に絕對に服從することである。

このことが間違つてゐようが、ゐまいが、私は自分の勞作を續けてゐる間、之れを全然確信して、千八百五年、千八百七年並に特にこの豫定の法則が最も鮮やかに現はれてゐる千八百十二年の歷史的事件を記したのである。私はこの事件を支配したやうに自負してゐるに拘はらず、他の事件の關與者程に人間的行爲をその事件に齎らさなかつた人々の行動に價値を認むることが出來ない。私はたゞ、歷史を支配してゐる豫定の法則と、最も不自由に行動してゐる人間が幾多の回想的推論を作つて、自分の自由を證明しようとする心理法との挿圖と言ふ意味でこの人々の行動を採用したに過ぎないのである。

18159

全譯（戰爭と平和）下卷
定價金參圓五拾錢

昭和二年五月二十五日印刷
昭和二年六月一日發行

譯者　島村抱月
譯者　鈴木悅
發行者　東京市神田區表神保町一番地　近田澄
印刷者　東京市深川區西六間堀町十一番地　芳賀林太郎

發行所　東京市神田區表神保町一番地　合資會社三星社
電話神田一〇三六番
振替東京四七〇一三番

大正十二年四月十日著作權讓受

シエンキユ井ツチ原作　松本雲舟譯

改譯縮刷 何處へ行く

有名なるシエンキユ井ツチ氏・クオヴアヂス＝何處へ行くは＝現代日本人に取りても、餘程意義の深い歴史小説である、即ち靈肉一如文武兼備のペトロニウスに配するに現世主義自己本位の暴君ネロを以てし、種々の葛藤を曲折せしめた原作者の手腕は、我松本雪舟先生の麗筆に依て更に一段美化したるを見る、秋宵の半夜試みに此書を繙いて、思ひを羅馬帝政時代に馳せよ。

本書體裁	▲ポケット形洋裝 ▲九ポイント活字 ▲總クロース天金 ▲紙數八百餘頁
定價	金壹圓五拾錢
送料	内地　金八錢 海外　金十五錢（四種書留）